

岡山県埋蔵文化財発掘調査報告 164

百間川米田遺跡 4

旭川放水路(百間川)改修
工事に伴う発掘調査 XIV

2002

国土交通省岡山河川工事事務所
岡山県教育委員会

岡山県埋蔵文化財発掘調査報告 164

百間川米田遺跡 4

旭川放水路(百間川)改修
工事に伴う発掘調査 XIV

2002

国土交通省岡山河川工事事務所
岡山県教育委員会



1 調査地遠景（北から）



2 橋梁 2 I期（南西から）周囲の石は下層の埋立遺構 1 に伴うもの

巻頭図版 2



1 橋梁2 II期（北東から）



2 橋梁2 IV期（南南東から）



1 橋梁2 IV期基礎施設 埋め土部（南南東から）



2 橋梁2 橋脚

卷頭図版 4



1 道路（北から）



2 道路（南西から）



1 堤防（東から）



2 堤防復旧部（北東から）

巻頭図版 6



1 堤防復旧施設 3 断面 (南西から)



2 埋立遺構 1 〈手前〉・埋立遺構 2 〈奥〉 (南西から)



1 埋立遺構 1 (北東から)



2 埋立遺構 1 断面B-B' (北西から)

卷頭図版 8



1 丹塗り土師器の墨書「市」



2 埴仏



3 「阿弥陀仏」墨書木製品



4 「東大寺」瓦の刻印



5 中世の土器



6 古銭

序

百間川(旭川放水路)は、承応3年(1654)の大洪水を契機に、岡山城下を洪水から守るため、当時岡山藩の政治顧問であった熊沢藩山が越流堤と放水路を組み合わせた「川除けの法」を考案し、その考えを継いで後の郡代津田永忠が設計・施工を行い、貞享3年(1686)に完成したといわれ、その後、幾多の洪水から岡山のまちを守ってきました。

しかし、一方で百間川沿川では通水能力が小さく、また、堤防が弱いことなどから、幾度となく氾濫に見舞われてきました。

このため、国土交通省(旧建設省)では地元の方々をはじめとする関係者のご理解とご協力を賜り、昭和49年(1974)から百間川の本格的な改修に着手し、百間川を横切る水路、道路の整理から築堤、低水路掘削、排水機場建設など百間川の景観が一新しました。

今後は、支川砂川での残工事を続けるとともに放水路の本来の目的である旭川の洪水をより多くより安全に流すため、流下能力が不足している河口水門の増築と分流能力の低い「一の荒手」「二の荒手」を含めた分流部の改築を行うこととしています。

改修事業により新たに生み出された河川敷は、スポーツ・レクリエーション・自然観察の場として憩いの場を創出し、県民に広く利用されています。

百間川の遺跡調査は、改修工事に先立ち、工事に影響する部分について記録保存をするため、昭和52年から岡山県教育委員会に発掘調査を委託し、実施しているところです。

百間川の遺跡群は、通称大曲と呼ばれている岡山市米田の百間川中流部(江戸期以前の海岸線)より、岡山市原尾島にある百間川橋梁の上流までの広い範囲に点在しています。

発掘された出土品は、縄文時代から中世までの幅広い時代にわたっており、この地が古代から営々と連なる人々の活動の場であり、人間活動に適した豊かな風土であったことを物語っています。

本書は、百間川遺跡群の報告書としては14冊目、百間川米田遺跡としては4冊目に当たり、本書が埋蔵文化財に対する理解の増進と、学術、文化等のため、広く活用されることを期待します。

最後に、発掘調査並びに本書の編集に当たられた岡山県教育委員会を始めとする関係各位に対し、深甚なる謝意を表します。

平成14年3月

国土交通省 岡山河川工事事務所
所長 古川 博一

序

岡山県のほぼ中央部を南北に貫流し児島湾に注ぐ旭川は、その下流域に広大な沖積平野を形成し、肥沃な穀倉地帯を生みました。この岡山平野の各所と平野を望む周囲の各丘陵には、この地域の歴史を物語る縄文時代から中世に至る数多くの遺跡が知られています。また、江戸時代の初め頃には岡山城下を洪水から守るために、人工的に旭川の東岸から放水路（百間川）を分岐させ、操山丘陵の北裾から東端を南下させて児島湾に注ぐように築造されたことも、広く知られているところです。

この旭川放水路（百間川）の本格的な改修工事は、建設省（当時）によって昭和49年度から着手されていますが、岡山県教育委員会は河川敷内に所在する遺跡の取り扱いについて建設省岡山河川工事事務所（当時）と事前に保存協議を重ね、やむを得ず破壊される部分については記録による保存処置をとってまいりました。

発掘調査は、昭和51年度の確認調査に引き続いて翌年度から本調査に着手し、本年度で丸25年を経ました。この間の調査成果は、縄文時代から中世に至るまで、県下は言うに及ばず全国的にも非常に注目されています。これらの成果は順次報告書にまとめ、昭和55年から刊行・公開しておりますが、本書は百間川遺跡群の報告書としては14冊目、百間川米田遺跡では4冊目に当たります。

本書に収録した調査区では古代から中世の遺構・遺物が多く、なかでも奈良時代の道路、平安時代の堤防や埋立遺構、中世を通じて利用された橋梁などの遺構、奈良時代の「市」の墨書土器や石帯、平安時代の人形や室町時代の柿（こけら）経などの木器が特に注目されます。

本報告書が、文化財の保護・保存に活用されるとともに、地域の歴史研究の一助となれば幸いです。最後になりましたが、発掘調査の実施及び報告書の作成にあたりましては、旭川放水路（百間川）改修工事に伴う埋蔵文化財保護対策委員会の先生方から数々の御教授と御指導を賜り、また国土交通省岡山河川工事事務所をはじめ関係各位から多大な御協力をいただきました。記して厚くお礼申し上げます。

平成14年3月

岡山県古代吉備文化財センター

所長 正岡 睦夫

例 言

- 1 本報告書は、旭川放水路（百間川）改修工事に伴い、建設省中国地方建設局（現国土交通省中国地方整備局）の委託を受け、岡山県教育委員会が平成2（1990）年度、及び平成6（1994）年度から平成10（1998）年度に発掘調査を実施した、百間川米田遺跡の発掘調査報告書である。
- 2 本報告書は百間川米田遺跡の報告書としては4冊目に当たり、報告書名の「百間川米田遺跡」は岡山市米田に所在する米田遺跡のうち、百間川の河川敷にかかる遺跡範囲をさす。
- 3 発掘調査は岡山県古代吉備文化財センターが担当し、本報告書に掲載した発掘調査の地区・担当者・期間等は、本文の第1表に示す通りである。また、当センター市町村職員（調査員）研修制度に基づき、瀬戸町教育委員会岡本芳明の調査参加（平成10（1998）年8月～10月）を得た。
- 4 発掘調査及び報告書の作成にあたっては、旭川放水路（百間川）改修工事に伴う埋蔵文化財保護対策委員会を設け、次の方々に委員を委嘱した。対策委員各位からは、終始有益な御指導と御助言を賜った。記して深く感謝の意を表す次第である。

池葉須藤樹（元岡山市立犬島中学校校長）

出宮徳尚（岡山市教育委員会文化財課長）

鎌木義昌（岡山理科大学教授）

水内昌康（元岡山県文化財保護審議会委員）

<1993.2逝去により退任>

山本悦世（岡山大学埋蔵文化財研究センター

近藤義郎（岡山大学名誉教授）

助教授）<1993.4から>

角田 茂（元岡山市立岡輝中学校教諭）

<2001.12逝去>

- 5 本報告書の作成は、平成11（1999）年度に岡山県古代吉備文化財センター山磨康平・松尾佳子、平成12（2000）年度に同柳瀬昭彦・物部茂樹が担当した。
- 6 本文の執筆は、調査と整理を担当した山磨・物部、調査を担当した井上 弘・宇垣匡雅・中野雅美・根木智宏、整理を担当した柳瀬・松尾が分担して行い、文責は各項目あるいは遺構ごとの文末に示した。
- 7 本報告書の編集は当麻調査区と岩間上調査区を山磨、岩間下調査区と全体編集を物部、全体の調整を柳瀬が担った。
- 8 本報告書に関係する遺物のうち、一部について鑑定・同定あるいは分析を次の諸氏ならびに機関に依頼し、有益な御教授を得るとともに、そのいくつかについて報文をいただいた。記して厚くお礼申し上げる。

当麻調査区・岩間上調査区関係

橋脚の樹種同定

能城修一（森林総合研究所木材利用部）

動物遺存体分析

富岡直人（岡山理科大学理学部）

墨書の积読

加原耕作（岡山県立博物館）

陶磁器鑑定

乗岡 実（岡山市教育委員会文化財課）

土器の胎土分析

白石 純（岡山理科大学自然科学研究所）

鉄滓の分析

大澤正己・鈴木瑞穂（九州テクノリサーチ）

木製品・種実遺体の同定

パリノ・サーヴェイ株式会社

岩間下調査区関係

動物遺存体分析	富岡直人 (岡山理科大学理学部)
石材同定	妹尾 護 (倉敷芸術科学大学教養学部)
墨書の釈読	加原耕作 (川崎医療福祉大学医療福祉学部)
大形植物遺体同定	環境考古研究会
プラントオパール分析	環境考古研究会

- 9 出土遺物ならびに図面・写真類は、岡山県古代吉備文化財センターに保管している。

凡 例

- 1 本報告書の遺構全体図および各遺構図の北方位は基本的に磁北であり、遺跡付近の磁北は西偏 $6^{\circ} 30'$ を測る。
- 2 本報告書に使用した高度は、すべて海拔高度である。
- 3 土層断面図等に使用した土色は、『新版標準土色帖』(農林水産省農林水産技術会議事務局監修・財団法人日本色彩研究所色標監修)によるものもあるが、各調査者の記述に従った。
- 4 本報告書の遺構ならびに遺物実測図の縮尺率は次のとおり統一しているが、例外については縮尺率を図示または明記している。

遺構：遺構配置 1/500 (当麻調査区)、1/600 (岩間上調査区)、1/800 (岩間下調査区)

 竪穴住居 1/60、建物 1/30・1/60、井戸・土壇・溝断面 1/30 (当麻・岩間上調査区)

 土壇・溝断面・堤防・護岸・樋門等 1/60 (岩間下調査区)、貝塚 1/80

遺物：土器 1/4、石器・石製品 1/2 (大形品 1/3、小形品 1/1)、木器・木製品 1/4 (小形品 1/2)

 金属器 1/3 (通常品)・2/3 (銭等小形品)、土製品 1/3 (通常品)・1/2 (玉類等)

 ガラス製品 1/1 (玉類)、骨角製品 1/2

- 5 本書の遺構配置図に示す遺構名は、遺構密度の高い部分では次に示すような略称を用いた。
竪穴住居：住 建物：建 井戸：井 土壇：土 柱穴：柱
- 6 遺構番号は、当麻調査区については過去に報告された遺構との重複を避けるため、新たに301から順次付し、岩間上調査区と岩間下調査区は両区にわたって1から通し番号を付した。
- 7 遺物番号のうち土器以外のものについては、その材質を示すため番号の頭に次に示す略号を付した。なお、遺物番号は各種類ごとに通し番号とした。

 石器・石製品：S 木器・木製品：W 金属器・金属製品：M 土製品：C

 ガラス製品：G 骨角製品：B

- 8 土器実測図のうち中軸線の左右に白抜きのあるものは、小破片のために口径の推定が困難なものである。
- 9 本報告書第2図に掲載した地図は、国土地理院発行1/25000地形図の和気・西大寺・岡山北部・岡山南部を複製・縮小し、加筆したものである。
- 10 本報告書の時代・時期区分は一般的な政治史区分に準拠し、それを補うために世紀などを併用している。また、弥生時代から古墳時代前半期の時期区分は、「百間川原尾島1」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』39で採用した土器編年に基づき、百・後・Ⅱなどの略称も使用している。

目次

巻頭カラー図版

序

例言

凡例

目次

第1章 地理的・歴史的環境	1
第1節 地理的環境	1
第2節 歴史的環境	2
1 旧石器時代	2
2 縄文時代	3
3 弥生時代	3
4 古墳時代	4
5 古代以降	4
第2章 調査及び報告書作成の経緯	7
第1節 発掘調査の契機と経過	7
第2節 調査および報告書作成の体制	9
第3節 報告書作成の経過	13
第3章 発掘調査の概要	15
第1節 当麻調査区	15
1 調査区の概要	15
2 縄文時代の遺構と遺物	21
(1) 土壌	21
(2) 遺構に伴わない遺物	21
3 弥生時代～古墳時代の遺構と遺物	22
(1) 竪穴住居	22
(2) 建物	24
(3) 井戸	28
(4) 土壌	46
(5) 溝	52
(6) 柱穴及びその他の出土遺物	61
4 古代以降の遺構と遺物	65
(1) 建物	65
(2) 井戸	66
(3) 土壌	73

(4) 溝	83
(5) 柱穴及びその他の出土遺物	102
5 小結	105
第2節 岩間上調査区	107
1 調査区の概要	107
2 確認調査・広野樋門の調査成果	108
(1) 概要	108
(2) 確認調査	108
(3) 広野樋門調査区	109
(4) 出土遺物	110
3 中世以降の遺構と遺物	113
(1) 井戸	113
(2) 土壌	114
(3) 溝	115
(4) 貝塚	127
(5) 河道	146
(6) 橋梁	185
4 小結	187
第3節 岩間下調査区	189
1 調査区の概要	189
2 古墳時代以前の遺構と遺物	191
(1) 溝	191
3 奈良時代の遺構と遺物	191
(1) 河道	191
(2) 道路	194
4 平安時代の遺構と遺物	200
(1) 河道	200
(2) 堤防	206
(3) 埋立遺構	224
(4) 護岸	234
5 古代末～中世の遺構と遺物	237
(1) 土壌	237
(2) 溝	242
(3) 貝塚	245
(4) 河道	247
(5) 橋梁	252
6 近世以降の遺構と遺物	274
(1) 土壌	274

目 次

第1図 遺跡位置……………	1	第45図 土壌304、同 出土遺物……………	47
第2図 周辺遺跡分布 (1/50,000)……………	2	第46図 土壌305、同 出土遺物……………	47
第3図 調査区位置 (1/7,500)……………	8	第47図 土壌306、同 出土遺物……………	48
当麻調査区			
第4図 グリッド設定、当麻調査区 位置 (1/4,000)……………	15	第48図 土壌307……………	49
第5図 T1・T2 微高地下がり 断面 (1/100)……………	16	第49図 土壌308、同 出土遺物……………	49
第6図 当麻調査区遺構全体〈過去調査分含む〉 (1/1,500)……………	17	第50図 土壌309、同 出土遺物……………	49
第7図 当麻調査区遺構全体 (1/800)……………	18	第51図 土壌310・311……………	50
第8図 縄文～古墳時代の遺構〈1〉(1/500)……	19	第52図 土壌312……………	50
第9図 縄文～古墳時代の遺構〈2〉(1/500)……	20	第53図 土壌312 出土遺物……………	51
第10図 土壌301……………	21	第54図 土壌313……………	51
第11図 遺構に伴わない遺物……………	21	第55図 溝301 土器分布……………	52
第12図 竪穴住居301……………	22	第56図 溝301 断面……………	52
第13図 竪穴住居301 出土遺物……………	23	第57図 溝301 出土遺物……………	53
第14図 竪穴住居302、同 出土遺物……………	23	第58図 溝302 断面……………	53
第15図 建物301、同 出土遺物……………	24	第59図 溝302 出土遺物……………	54
第16図 建物302、同 出土遺物……………	25	第60図 溝303・304 断面……………	54
第17図 建物303……………	25	第61図 溝305 断面、同 出土遺物……………	55
第18図 建物303 出土遺物……………	26	第62図 溝306 断面、同 出土遺物……………	55
第19図 建物304、同 出土遺物……………	26	第63図 溝307 断面……………	55
第20図 建物305……………	27	第64図 溝307 出土遺物〈1〉……………	56
第21図 建物306……………	27	第65図 溝307 出土遺物〈2〉……………	57
第22図 建物307、同 出土遺物……………	28	第66図 溝307 出土遺物〈3〉……………	58
第23図 井戸301、同 出土遺物……………	29	第67図 溝308 断面……………	58
第24図 井戸302、同 出土遺物……………	29	第68図 溝309 断面、同 出土遺物……………	58
第25図 井戸303、同 出土遺物〈1〉……………	30	第69図 溝310・311 断面……………	58
第26図 井戸303 出土遺物〈2〉……………	31	第70図 溝312 断面、同 出土遺物……………	59
第27図 井戸303 出土遺物〈3〉……………	32	第71図 柱穴301～310 出土遺物……………	59
第28図 井戸304、同 出土遺物〈1〉……………	33	第72図 遺構に伴わない遺物〈1〉……………	60
第29図 井戸304 出土遺物〈2〉……………	34	第73図 遺構に伴わない遺物〈2〉……………	61
第30図 井戸304 出土遺物〈3〉……………	35	第74図 遺構に伴わない遺物〈3〉……………	62
第31図 井戸305、同 出土遺物〈1〉……………	36	第75図 古代以降の遺構〈1〉(1/500)……………	62
第32図 井戸305 出土遺物〈2〉……………	37	第76図 古代以降の遺構〈2〉(1/500)……………	63
第33図 井戸305 出土遺物〈3〉……………	38	第77図 建物308……………	64
第34図 井戸306、同 出土遺物……………	39	第78図 建物309、同 出土遺物……………	65
第35図 井戸307……………	39	第79図 井戸312、同 出土遺物……………	66
第36図 井戸307 出土遺物……………	40	第80図 井戸313……………	67
第37図 井戸308、同 出土遺物……………	41	第81図 井戸313 出土遺物……………	67
第38図 井戸309、同 出土遺物……………	42	第82図 井戸314、同 出土遺物〈1〉……………	68
第39図 井戸310……………	42	第83図 井戸314 出土遺物〈2〉……………	69
第40図 井戸310 出土遺物……………	43	第84図 井戸315〈1〉、同 出土遺物〈1〉……………	70
第41図 井戸311、同 出土遺物〈1〉……………	44	第85図 井戸315〈2〉……………	71
第42図 井戸311 出土遺物〈2〉……………	45	第86図 井戸315 出土遺物〈2〉……………	72
第43図 土壌302……………	46	第87図 井戸315 出土遺物〈3〉……………	73
第44図 土壌303、同 出土遺物……………	46	第88図 土壌314、同 出土遺物……………	74
		第89図 土壌315……………	75
		第90図 土壌316……………	76
		第91図 土壌317、同 出土遺物……………	76
		第92図 土壌318……………	77

第93区	土壙319、同 出土遺物	77
第94区	土壙320、同 出土遺物	78
第95区	土壙321、同 出土遺物	78
第96区	土壙322	78
第97区	土壙323	79
第98区	土壙324・325、土壙324 出土遺物	79
第99区	土壙326・327	80
第100区	土壙328、同 出土遺物	81
第101区	土壙329、同 出土遺物〈1〉	82
第102区	土壙329 出土遺物〈2〉	82
第103区	土壙330、同 出土遺物〈1〉	82
第104区	土壙330 出土遺物〈2〉	83
第105区	溝313・314 断面、同 出土遺物	84
第106区	溝315・316 断面	84
第107区	溝315 出土遺物	84
第108区	溝316 出土遺物	85
第109区	溝317~319 断面	85
第110区	溝320・321 断面	86
第111区	溝320 出土遺物	87
第112区	溝321 出土遺物〈1〉	88
第113区	溝321 出土遺物〈2〉	89
第114区	溝321 出土遺物〈3〉	90
第115区	溝321 出土遺物〈4〉	91
第116区	溝320・321 出土遺物〈1〉	92
第117区	溝320・321 出土遺物〈2〉	93
第118区	溝320・321 出土遺物〈3〉	94
第119区	溝320・321 出土遺物〈4〉	95
第120区	溝320・321 出土遺物〈5〉	96
第121区	溝322 断面	96
第122区	溝322 出土遺物	97
第123区	溝323 断面	97
第124区	溝323 出土遺物〈1〉	98
第125区	溝323 出土遺物〈2〉	99
第126区	溝323 出土遺物〈3〉	100
第127区	柱穴311~324 出土遺物	101
第128区	遺構に伴わない遺物〈1〉	101
第129区	遺構に伴わない遺物〈2〉	102
第130区	遺構に伴わない遺物〈3〉	103
第131区	遺構に伴わない遺物〈4〉	104
岩間上調査区		
第132区	グリッド設定、岩間上調査区・ 確認調査位置 (1/4,000)	107
第133区	確認トレンチ断面	108
第134区	広野樋門 平面 (1/500) , 同 東壁断面 (1/100)	109
第135区	広野樋門・トレンチ出土遺物	110
第136区	岩間上調査区 遺構全体〈1〉 (1/600)	111
第137区	岩間上調査区 遺構全体〈2〉 (1/600)	112
第138区	井戸1、同 出土遺物	113
第139区	井戸2	114

第140区	井戸3	114
第141区	土壙1	114
第142区	土壙2、同 出土遺物	115
第143区	土壙3	115
第144区	溝1~3 断面、溝3 出土遺物	116
第145区	溝4 断面、同 出土遺物	116
第146区	溝5 断面、同 出土遺物	116
第147区	溝6 断面、同 出土遺物	117
第148区	溝7 断面、同 出土遺物	117
第149区	溝8・9・10 断面	118
第150区	溝11・12 断面	118
第151区	溝13 断面、同 出土遺物	119
第152区	溝14~16 断面、 溝14・15 出土遺物〈1〉	120
第153区	溝14・15 出土遺物〈2〉	121
第154区	溝16 断面、同 出土遺物〈1〉	121
第155区	溝16 出土遺物〈2〉	122
第156区	溝17・18 断面、同 出土遺物	123
第157区	溝19~21 断面	123
第158区	溝22 断面	124
第159区	溝23~27 断面	124
第160区	溝28 断面、同 出土遺物〈1〉	125
第161区	溝28 出土遺物〈2〉	126
第162区	貝塚1 平面 (1/80)	127
第163区	貝塚1 平面〈貝除去後〉 (1/80)	129
第164区	貝塚1 断面 (1/60)	130
第165区	貝塚1 出土遺物〈1〉	131
第166区	貝塚1 出土遺物〈2〉	132
第167区	貝塚1 出土遺物〈3〉	133
第168区	貝塚1 出土遺物〈4〉	134
第169区	貝塚1 出土遺物〈5〉	135
第170区	貝塚1 出土遺物〈6〉	136
第171区	貝塚2 平面 (1/150)、 同 断面 (1/60)	137
第172区	貝塚2 出土遺物〈1〉	138
第173区	貝塚2 出土遺物〈2〉	139
第174区	貝塚2 出土遺物〈3〉	140
第175区	貝塚3 平面 (1/150)	140
第176区	貝塚3 断面 (1/60)	141
第177区	貝塚3 出土遺物〈1〉	142
第178区	貝塚3 出土遺物〈2〉	143
第179区	貝塚3 出土遺物〈3〉	144
第180区	貝塚3 出土遺物〈4〉	145
第181区	貝塚3 出土遺物〈5〉	146
第182区	河道1 位置 (1/1,500)	146
第183区	河道1 断面〈1〉 (1/80)	147
第184区	河道1 (1区) 出土遺物〈1〉	148
第185区	河道1 (1区) 出土遺物〈2〉	149
第186区	河道1 (1区) 出土遺物〈3〉	150
第187区	河道1 (1区) 出土遺物〈4〉	151

第188図	河道 1 (1区)	出土遺物 <5>	151
第189図	河道 1 (1区)	出土遺物 <6>	152
第190図	河道 1 (1区)	出土遺物 <7>	153
第191図	河道 1 (1区)	出土遺物 <8>	154
第192図	河道 1 (1区)	出土遺物 <9>	155
第193図	河道 1	断面 <2> (1/80)	156
第194図	河道 1 (2区)	出土遺物 <1>	157
第195図	河道 1 (2区)	出土遺物 <2>	158
第196図	河道 1 (2区)	出土遺物 <3>	159
第197図	河道 1 (2区)	出土遺物 <4>	160
第198図	河道 1 (2区)	出土遺物 <5>	161
第199図	河道 1 (2区)	出土遺物 <6>	162
第200図	河道 1 (2区)	出土遺物 <7>	163
第201図	河道 1 (2区)	出土遺物 <8>	164
第202図	河道 1 (2区)	出土遺物 <9>	165
第203図	河道 1 (2区)	出土遺物 <10>	166
第204図	河道 1	断面 <3> (1/80)	168
第205図	河道 1 (3区)	出土遺物 <1>	169
第206図	河道 1 (3区)	出土遺物 <2>	170
第207図	河道 1 (3区)	出土遺物 <3>	171
第208図	河道 1 (3区)	出土遺物 <4>	172
第209図	河道 1 (3区)	出土遺物 <5>	173
第210図	河道 1 (3区)	出土遺物 <6>	174
第211図	河道 1 (3区)	出土遺物 <7>	175
第212図	河道 1 (3区)	出土遺物 <8>	176
第213図	河道 1 (3区)	出土遺物 <9>	177
第214図	河道 1 (3区)	出土遺物 <10>	178
第215図	河道 1 (3区)	出土遺物 <11>	179
第216図	河道 1 (3区)	出土遺物 <12>	180
第217図	河道 1 (3区)	出土遺物 <13>	181
第218図	河道 1 (3区)	出土遺物 <14>	181
第219図	河道 1 (3区)	出土遺物 <15>	182
第220図	河道 1 (3区)	出土遺物 <16>	183
第221図	河道 1 (3区)	出土遺物 <17>	184
第222図	河道 1 (4区)	出土遺物	185
第223図	橋梁 1	平面 (1/150)、断面 (1/60)、 同 橋脚 (1/20)	186
岩間下調査区			
第224図	岩間下調査区	位置 (1/4,000)	189
第225図	断面位置 (1/2,000)、柱状断面 (1/60)、 通し断面 (縦1/60、横1/300)		190
第226図	古墳時代以前の遺構配置 (1/800)		191
第227図	溝28 断面、同 出土遺物		191
第228図	奈良時代の遺構配置 (1/800)		192
第229図	河道 2 断面、同 出土遺物 <1>		192
第230図	河道 2 出土遺物 <2>		193
第231図	道路 全体配置 (1/200)		194
第232図	道路 (上空から)		195
第233図	道路 (南から)		195
第234図	道路 北東部 (1/60)		196
第235図	道路 中央部 (1/60)		197
第236図	道路 南西部 (1/60)		198
第237図	道路 割り木帯側面 (縦1/200、横1/400)		199
第238図	道路 築造模式図 (約1/100)		199
第239図	道路 使用木材 (1/20)		199
第240図	平安時代の遺構配置 (1/800)		200
第241図	河道 3-1~3・5 断面 (縦1/150、横1/300)		200
第242図	河道 3-1・2 出土遺物		201
第243図	河道 4 断面、同 出土遺物 <1>		201
第244図	河道 4 出土遺物 <2>		202
第245図	河道 5 出土遺物 <1>		203
第246図	河道 5 出土遺物 <2>		204
第247図	河道 5 出土遺物 <3>		205
第248図	河道 5 出土遺物 <4>		206
第249図	堤防遺構 全体配置 (1/250)		207
第250図	堤防 (北東から)		208
第251図	堤防イメージ図 (河道側から)		208
第252図	堤防中央部 <1> (1/60)		209
第253図	堤防中央部 構造概念模式図 (約1/80)、 同 出土杭 (1/20)		210
第254図	堤防中央部 築造過程 <第3~13面> (1/60) II a-b 間部分拡大 (1/20)		211
第255図	堤防中央部 <2> (1/60)		212
第256図	堤防中央部 出土遺物		213
第257図	堤防盛土直上 出土遺物		213
第258図	堤防先端部 (1/60)		215
第259図	堤防先端部 出土遺物		215
第260図	堤防復旧施設 配置 (1/200)、 断面 (縦1/100、横1/200)		216
第261図	堤防復旧施設 1 (1/60)		217
第262図	堤防復旧施設 1 概念図 (1/200)		218
第263図	堤防復旧施設 2 (東から)		218
第264図	堤防復旧施設 3 (1/60)		219
第265図	堤防復旧施設 4 (1/60)		220
第266図	堤防復旧施設 4 築造工程と洪水時の概念模式図		221
第267図	堤防復旧施設 5		221
第268図	堤防復旧部 洪水 1 出土遺物		222
第269図	堤防復旧部 洪水 1・2 出土遺物		223
第270図	埋立遺構・護岸全体配置 (1/200) 西半 東半		224
第271図	埋立遺構 1・2 護岸地形 (1/600)		225
第272図	平安時代の遺構配置 (上空から)		226
第273図	平安時代の遺構イメージ図 (北西から)		226
第274図	埋立遺構 1 (北西上空から)		227
第275図	埋立遺構 1 断面 A・B (縦1/50、横1/100)		228

第276図	埋立遺構1 断面C (縦1/50、横1/100)……………	229			(1/500)……………	256
第277図	埋立遺構1 出土遺物……………	229	第320図	橋梁2 I期埋め土直下・II期礫敷き 出土遺物……………		257
第278図	埋立遺構1 木材による埋め立て(1/400)	230	第321図	橋梁2 IV期基礎施設出土遺物<1>、 同直上砂礫層出土遺物……………		258
第279図	埋立遺構1 断面D・E (1/60)……………	230	第322図	橋梁2 IV期基礎施設 (北北東上空から)……………		259
第280図	埋立遺構1 中央南端部 (1/60)……………	230	第323図	橋梁2 IV期基礎施設断面 (西北西から)……………		259
第281図	埋立遺構1 築造工程概念模式図……………	232	第324図	橋梁2 IV基礎施設方形石組みと下部検出の 板組み (1/60)……………		260
第282図	埋立遺構1 基部溝状構造 (1/400)……………	232	第325図	橋梁2 IV期基礎施設埋め土部<1>……………		261
第283図	埋立遺構2 (1/60)……………	233	第326図	橋梁2 IV期基礎施設埋め土部<2> 板組み「檜垣」……………		262
第284図	埋立遺構2 出土遺物……………	234	第327図	橋梁2 方形石組み・埋め土部の 断面模式図 (1/100)……………		262
第285図	埋立遺構2 (西から)……………	235	第328図	橋梁2 IV期基礎施設下の土壌配置 (1/160)……………		263
第286図	護岸2 (北西から)……………	235	第329図	橋梁2 土壌11 断面 (1/40)、 同 出土遺物 (1/5)……………		263
第287図	護岸 (1/60)、同 出土遺物……………	236	第330図	橋梁2 土壌12~18 断面 (1/40)、 土壌20出土遺物 (2/3)……………		264
第288図	古代~中世の遺構配置 (1/800)……………	237	第331図	橋梁2 IV期基礎施設に伴う遺物の 土壌 出土位置 (1/150)……………		265
第289図	土壌4、同 出土遺物……………	238	第332図	橋梁2 IV期基礎施設出土遺物<2>……………		266
第290図	土壌5・6……………	238	第333図	橋梁2 IV期基礎施設出土遺物<3>……………		267
第291図	土壌7、同 出土遺物<1>……………	239	第334図	橋梁2 IV期基礎施設出土遺物<4>……………		268
第292図	土壌7 出土遺物<2>……………	240	第335図	橋梁2 IV期基礎施設出土遺物<5>……………		269
第293図	土壌8、同 出土遺物……………	241	第336図	橋梁2 II期基礎施設下の土壌配置 (1/160)……………		270
第294図	土壌9・10・溝32 (部分)……………	242	第337図	橋梁2 土壌21~23 断面 (1/40)……………		270
第295図	土壌9・10 出土遺物……………	242	第338図	橋梁2 土壌23 出土遺物……………		271
第296図	溝30 断面、同 出土遺物……………	243	第339図	橋梁2 橋脚 (1/40)……………		272
第297図	溝31 断面、同 出土遺物……………	243	第340図	橋梁2 橋脚復元 (左1/150、右1/200)……………		273
第298図	溝32 出土遺物……………	244	第341図	近世以降の遺構配置 (1/800)……………		274
第299図	溝33 断面……………	244	第342図	土壌24、同 出土遺物<1>……………		275
第300図	溝34 (部分)、同 出土遺物……………	245	第343図	土壌24 出土遺物<2>……………		276
第301図	貝塚4・5 (1/80)……………	245	第344図	土壌25 (1/40)、同 出土ごご状編み物 拡大模式図 (1/4)……………		276
第302図	貝塚5 出土遺物……………	246	第345図	土壌25 出土遺物……………		277
第303図	貝塚6~8 (1/80)……………	246	第346図	石列群 (1/160)……………		278
第304図	貝塚6 出土遺物……………	247	第347図	橋梁3 橋脚 (1/20)……………		278
第305図	河道6 断面 (1/160)……………	247	第348図	橋梁3 (1/120)……………		279
第306図	河道6 出土遺物<1>……………	248	第349図	樋門1~3 (1/60)<1>……………		280
第307図	河道6 出土遺物<2>……………	249	第350図	樋門1~3 (1/60)<2>……………		281
第308図	河道6 出土遺物<3>……………	249	第351図	樋門1~3 出土遺物……………		282
第309図	河道6 出土遺物<4>……………	250	第352図	樋門1~3 使用部材 (1/30)、 墨書拡大 (1/15)……………		283
第310図	河道6 出土遺物<5>……………	251	第353図	遺構に伴わない遺物<1>……………		285
第311図	河道6 出土筥 (1/80)、同 部分拡大模式図、 周辺 出土遺物……………	251				
第312図	河道6 出土ウシ遺存体 (1/30) 周辺 出土遺物 (1/6)……………	252				
第313図	橋梁2 (上空から)……………	253				
第314図	橋梁2 イメージ図 (南東から)……………	253				
第315図	橋梁2 平面<検出時> (1/100) 同 断面 ・土層解釈(縦1/50、横1/100)……………	挿頁1				
第316図	橋梁2 上層基礎施設 (IV期)・下層基礎施設 (II期)(1/100)、同 断面(1/40)……………	挿頁2				
第317図	橋梁2 橋脚・杭列 平面 (1/100)、同 側面 見通し (縦1/50、横1/100)……………	挿頁3				
第318図	橋梁2 断面 (1/60)……………	255				
第319図	橋梁2 基礎・埋め土の変遷模式図					

第354図	遺構に伴わない遺物〈2〉	286	第371図	遺構に伴わない遺物〈19〉	301
第355図	遺構に伴わない遺物〈3〉	287	第372図	遺構に伴わない遺物〈20〉	302
第356図	遺構に伴わない遺物〈4〉	288	第373図	遺構に伴わない遺物〈21〉	303
第357図	遺構に伴わない遺物〈5〉	289	第374図	遺構に伴わない遺物〈22〉	304
第358図	遺構に伴わない遺物〈6〉	289	第375図	遺構に伴わない遺物〈23〉	305
第359図	遺構に伴わない遺物〈7〉	290	第376図	遺構に伴わない遺物〈24〉	306
第360図	遺構に伴わない遺物〈8〉	291	第377図	遺構に伴わない遺物〈25〉	307
第361図	遺構に伴わない遺物〈9〉	292	第378図	遺構に伴わない遺物〈26〉	308
第362図	遺構に伴わない遺物〈10〉	293	第379図	遺構に伴わない遺物〈27〉	309
第363図	遺構に伴わない遺物〈11〉	294	第380図	遺構に伴わない遺物〈28〉	310
第364図	遺構に伴わない遺物〈12〉	295	第381図	遺構に伴わない遺物〈29〉	311
第365図	遺構に伴わない遺物〈13〉	296	第382図	遺構に伴わない遺物〈30〉	312
第366図	遺構に伴わない遺物〈14〉	297	第383図	遺構に伴わない遺物〈31〉	313
第367図	遺構に伴わない遺物〈15〉	298	第384図	旧河道復元図(1/20000)	316
第368図	遺構に伴わない遺物〈16〉	299	第385図	貝類出比率(上)	
第369図	遺構に伴わない遺物〈17〉	299		ハイガイ殻長分布(中・下)	320
第370図	遺構に伴わない遺物〈18〉	300			

表 目 次

第1表	百間川米田遺跡調査一覧表	8	第3表	橋梁2 IV期基礎施設出土銭一覧表	269
第2表	旭川放水路(百間川)改修に伴う発掘調査報告書一覧表	14	第4表	貝類の出土量	320

巻頭図版目次

巻頭図版 1	1 調査地遠景		巻頭図版 6	1 堤防復旧施設3断面(南西から)	
	2 橋梁2 I期(南西から)			2 埋立遺構1〈手前〉・埋立遺構2〈奥〉(南西から)	
巻頭図版 2	1 橋梁2 II期(北東から)		巻頭図版 7	1 埋立遺構1 (北東から)	
	2 橋梁2 IV期(南南東から)			2 埋立遺構1 断面B-B' (北西から)	
巻頭図版 3	1 橋梁2 IV期基礎施設 埋め土部(南南東から)		巻頭図版 8	1 丹塗り土師器の墨書「市」	
	2 橋梁2 橋脚			2 埴伝	
巻頭図版 4	1 道路(北から)			3 「阿弥陀仏」墨書木製品	
	2 道路(南西から)			4 「東大寺」瓦の刻印	
巻頭図版 5	1 堤防(東から)			5 中世の土器	
	2 堤防復旧部(北東から)			6 古銭	

図版目次

当麻調査区				
図版 1	1 当麻調査区 北半(空中撮影)		2 竪穴住居301・井戸311(南東から)	
	2 当麻調査区 南半(空中撮影)		3 竪穴住居302・井戸309(南から)	
図版 2	1 当麻調査区 全景(北から)		図版 4	1 建物302・305付近全景(北から)
	2 竪穴住居302付近全景(西から)			2 建物302・305・井戸304(西から)
	3 建物303・306・307・309付近全景(南から)			3 建物304・溝311(北西から)
図版 3	1 建物301・竪穴住居301付近全景(南から)		図版 5	1 建物307(西から)
				2 井戸308(南西から)

- 3 井戸311遺物出土状況 (西から)
- 図版6 1 井戸311完掘 (西から)
- 2 井戸311断面 (北から)
- 3 井戸311木器出土状況 (南から)
- 図版7 1 井戸304 (西から)
- 2 井戸305 (西から)
- 3 井戸306 (西から)
- 図版8 1 土壙301 (西から)
- 2 土壙312 (南から)
- 3 井戸310 (南から)
- 図版9 1 土壙306 (南から)
- 2 土壙306 (北から)
- 3 土壙304 (西から)
- 図版10 1 井戸303 (東から)
- 2 土壙303 (東から)
- 3 土壙314 (北から)
- 図版11 1 溝301 (東から)
- 2 溝301遺物出土状況 (東から)
- 3 溝302周辺 (西から)
- 図版12 1 溝304・321周辺 (西から)
- 2 溝304・321遺物出土状況 (西から)
- 3 溝309・310 (西から)
- 図版13 1 建物308 (南から)
- 2 建物308 (東から)
- 3 溝316・322周辺 (北から)
- 図版14 1 井戸312 (南から)
- 2 井戸313・314・315 (西から)
- 3 井戸313 (北から)
- 図版15 1 井戸314 (南から)
- 2 井戸314出土状況 (東から)
- 3 井戸314 (南から)
- 図版16 1 井戸315 (南から)
- 2 井戸315石組み除去後 (北から)
- 3 井戸315井戸枠 (南から)
- 図版17 1 土壙330 (北から)
- 2 土壙329断面 (北から)
- 3 土壙317 (南から)
- 図版18 1 溝311・建物304周辺 (西から)
- 2 土壙328 (南東から)
- 3 土壙321 (西から)
- 図版19 1 溝320・321北半 (南東から)
- 2 溝320・321断面 (北西から)
- 3 溝320・321南端 (南から)
- 図版20 1 北半全景 (北から)
- 2 溝322付近全景 (西から)
- 3 溝323 (南西から)
- 図版21 出土遺物1
- 図版22 出土遺物2
- 岩間上調査区
- 図版23 1 岩間上調査区 遠景 (南西から)

- 2 1・2区遠景 (南から)
- 3 2区河道調査状況 (西から)
- 図版24 1 溝9・10 (南から)
- 2 溝5・6 (南東から)
- 3 溝1・2・3 (南東から)
- 図版25 1 橋梁1南端 (北から)
- 2 橋梁1 (南から)
- 3 橋梁1北端 (西から)
- 図版26 1 1区河道1 (西から)
- 2 1区河道1 (西から)
- 3 1区河道1 (東から)
- 図版27 1 貝塚1全景 (北から)
- 2 貝塚1全景 (南から)
- 3 貝塚1遺物出土状況 (南西から)
- 図版28 1 貝塚1検出状況 (北西から)
- 2 貝塚1断面 (南東から)
- 3 貝塚1断面 (南から)
- 図版29 1 貝塚1調査状況 (南から)
- 2 貝塚1下層石組み (南西から)
- 3 貝塚1下層石敷 (北から)
- 図版30 1 溝16 (西から)
- 2 溝16 (南西から)
- 3 溝16断面 (南から)
- 図版31 1 2区河道1 (南東から)
- 2 2区河道1 (南西から)
- 3 井戸1 (南から)
- 図版32 1 3区全景 (東から)
- 2 溝16 (南東から)
- 3 溝17・18 (東から)
- 図版33 1 井戸3 (東から)
- 2 井戸2 (北西から)
- 3 3区河道調査状況 (西から)
- 図版34 1 3区河道1 (東から)
- 2 3区河道1 (東から)
- 3 3区河道1 (東から)
- 図版35 1 貝塚2 (東から)
- 2 貝塚2 (南から)
- 3 貝塚2 (西から)
- 図版36 1 貝塚3 (西から)
- 2 貝塚3 (西から)
- 3 貝塚3 (南から)
- 図版37 1 4区全景 (西から)
- 2 4区河道1 (北から)
- 3 4区河道1遺物出土状況 (南から)
- 図版38 1 溝19～22付近全景 (南東から)
- 2 溝24・25付近全景 (南東から)
- 3 土壙2 (南から)
- 図版39 出土遺物1
- 図版40 出土遺物2
- 図版41 出土遺物3

- 図版42 出土遺物 4
岩間下調査区
- 図版43 1 道路 (北西から)
2 道路 (西から)
- 図版44 1 道路 断面C-C' 南東部 (南西から)
2 道路 断面C-C' 北西部 (西から)
3 道路 断面D-D' (北東から)
4 道路 埋め土中の敷葉 (南西から)
5 道路 埋め土断面 (北東から)
6 道路 埋め土除去後の状況 (南西から)
7 道路 埋め土中の敷葉
8 道路 割り木帯 (岸側から)
- 図版45 1 道路 (南西から)
2 堤防中央部 (南東から)
- 図版46 1 堤防中央部 (河道側から)
2 堤防中央部 盛土断面A-A' (南西から)
3 堤防中央部 盛土内の枝葉 (東から)
4 堤防中央部 盛土内の編み物
5 堤防中央部 人形検出状況 (南東から)
- 図版47 1 堤防中央部 人形検出状況
2 堤防中央部 盛土下の倒れ杭 (南西から)
3 堤防中央部 しがらみ (北西から)
4 堤防中央部 縦杭 (東から)
5 堤防中央部 盛土最下部 (北東から)
- 図版48 1 堤防先端部 検出状況 (北東から)
2 堤防先端部 盛土内部の状況 (北東から)
- 図版49 1 河道4と堤防復旧施設 (南西から)
2 堤防復旧部 洪水砂 (洪水2) 除去後 (西から)
- 図版50 1 復旧施設1 (南西から)
2 復旧施設1 しがらみ断面 (西から)
3 復旧施設1 しがらみ (東から)
4 復旧施設1 しがらみ (東から)
5 復旧施設1 埋め込まれた多量の枝 (南から)
- 図版51 1 復旧施設3 断面J-J' (西から)
2 復旧施設3 しがらみ (上から)
3 復旧施設3 しがらみ断面 (南西から)
4 復旧施設3 盛り土内の編み物
5 復旧施設3 盛り土内の鍋敷き状編み物
- 図版52 1 復旧施設4 検出状況 (南東から)
2 復旧施設4 草本類除去後の状況 (南から)
3 復旧施設4 しがらみ (南から)
4 復旧施設4 しがらみ除去後の状況 (南から)
5 復旧施設4 基底部の木組み (南から)
6 復旧施設4 基底部の木組み (東から)
7 復旧施設4 枝を木の皮ひもで束ねている?
8 堤防復旧部洪水砂堆積状況 (南東から)
- 図版53 1 埋立遺構1 (北西から)
2 埋立遺構1 柵列 (南東から)
3 埋立遺構1 最終埋め土断面と下部の粗朶
4 埋立遺構1 最終埋め土断面B-B'
5 埋立遺構1 最終埋め土中の板組み (南から)
- 図版54 1 埋立遺構1 木材群 (北から)
2 埋立遺構1 木材群断面D-D' (東から)
- 図版55 1 埋立遺構1 断面C-C' (北東から)
2 埋立遺構1 断面B-B' (南西から)
- 図版56 1 埋立遺構2 検出状況 (北西から)
2 埋立遺構2 上層礫除去後の状況 (北西から)
- 図版57 1 埋立遺構2 縦杭と横木 (北西から)
2 埋立遺構2 縦杭と横木 (南西から)
3 埋立遺構2 断面H-H' (北西から)
4 埋立遺構2 先の潰れた杭
5 護岸2 (北東から)
- 図版58 1 護岸2 (南西から)
2 護岸2 盛り土下部の草本 (北東から)
3 護岸2 断面B-B' 土手裏 (南から)
4 護岸2 断面A-A' (北から)
5 護岸2 断面B-B' (北西から)
- 図版59 1 橋梁2 空中写真 (北西から)
2 橋梁2 検出状況 (南東から)
- 図版60 1 橋梁2 (東から)
2 橋梁2 (南西から)
- 図版61 1 橋梁2 IV期基礎施設 中央~東岸の埋め土部 (南東から)
2 橋梁2 縦杭・横木・板組み (南西から)
3 橋梁2 粗朶検出状況 (西から)
4 橋梁2 粗朶
5 橋梁2 上流側埋め土の粗朶 (南東から)
- 図版62 1 橋梁2 板組み (南から)
2 橋梁2 上流側の木組み (西から)
3 橋梁2 板材下端部の小孔
4 橋梁2 粗朶と埋め土の断面 (南東から)
5 橋梁2 中央埋め土部の埋め土除去後の状況 (南南西から)
- 図版63 1 橋梁2 IV期方形石組み (西から)
2 橋梁2 IV期基礎施設 礫および埋め土部 (南東から)
- 図版64 1 橋梁2 断面A-A' IV期基礎施設とII基礎施設 (南東から)
2 橋梁2 II期基礎施設 (北北東から)
- 図版65 1 橋梁2 II期 東部の石積み (南東から)
2 橋梁2 断面F-F' (南南西から)
3 橋梁2 IV期方形石組み下の木組み (南西から)
4 橋梁2 土壌11 (西北西から)
5 橋梁2 土壌18断面土手裏 (西北西から)

- | | | | | | |
|------|---|--------|-------------------------------------|------|--------------------|
| 図版66 | 1 | 橋梁 2 | Ⅱ期西岸の埋め土の状況(北から) | 4 | 筥部分 |
| | 2 | 橋梁 2 | 橋脚の切断痕跡 | 5 | 牛骨検出状況 |
| | 3 | 橋梁 2 | 橋脚に打ち込まれた杭 | 図版74 | 1 縄文土器・弥生土器・土師器 |
| | 4 | 橋梁 2 | 角材を使用した橋脚 | 2 | 洪水1・2堆積砂出土土器 |
| | 5 | 橋梁 2 | 埋め土と河道堆積を除去した状況
(Ⅰ期の姿にちかい)(西から) | 図版75 | 1 河道3・4出土土器 |
| 図版67 | 1 | 橋梁 2 | 埋め土と河道堆積を除去した状況
(Ⅰ期の姿にちかい)(北西から) | 2 | 河道5出土土器(1) |
| | 2 | 橋梁 2 | 橋脚 | 図版76 | 1 河道5出土土器(2) |
| | 3 | 橋梁 2 | 橋脚先端部の筏穴 | 2 | 埋立遺構1出土土器 |
| | 4 | 橋梁 2 | 橋脚先端部の筏穴 | 3 | 土壇7出土遺物 |
| 図版68 | 1 | 橋梁 3 | (東から) | 4 | 溝34出土土器 |
| | 2 | 橋梁 3 | 断面A-A'(南東から) | 図版77 | 1 橋梁2埋め土直下出土土器 |
| 図版69 | 1 | 樋門検出状況 | (北西から) | 2 | 橋梁2下層捨て石出土土器 |
| | 2 | 樋門 2・3 | (北西から) | 3 | 須恵器(1) |
| 図版70 | 1 | 樋門 3 | (南から) | 図版78 | 1 須恵器(2) |
| | 2 | 樋門 3 | 石材を除去した状況(東から) | 図版79 | 1 須恵器(3) |
| | 3 | 樋門 3 | 基礎の木材(南東から) | 2 | 緑釉陶器 |
| | 4 | 樋門 2 | 西側角柱(北西から) | 3 | 土師器(1) |
| | 5 | 樋門 2 | 墨書「○東下」 | 図版80 | 1 土師器(2) |
| | 6 | 樋門 2 | 墨書「宗板」 | 図版81 | 1 土師器(3) |
| | 7 | 樋門 2 | 墨書「右」 | 2 | 黒色土器 |
| 図版71 | 1 | 河道 2 | 東岸(北西から) | 図版82 | 1 土師器(4)早島式土器碗 |
| | 2 | 溝28 | (南東から) | 2 | 瓦器 |
| | 3 | 土壇 4 | (南から) | 図版83 | 墨書・線刻・穿孔土器 |
| | 4 | 土壇 8 | (南東から) | 図版84 | 1 備前焼・東播系・常滑・十瓶山ほか |
| | 5 | 土壇 8 | 南側板組み(北から) | 2 | 東大寺瓦(1) |
| 図版72 | 1 | 土壇 7 | (南から) | 図版85 | 東大寺瓦(2) |
| | 2 | 貝塚 6・8 | (南西から) | 図版86 | 瓦 |
| | 3 | 土壇24 | (北西から) | 図版87 | 土製品 |
| | 4 | 土壇25 | (東から) | 図版88 | 木製品(1) |
| | 5 | 石列群 | (東から) | 図版89 | 木製品(2) |
| 図版73 | 1 | 河道 6 | 断面A-A'(北東から) | 図版90 | 木製品(3) |
| | 2 | 短刀M161 | 検出状況 | 図版91 | 木製品(4)墨書 |
| | 3 | 筥 | 検出状況 | 図版92 | 木製品(5)・骨製品・金属製品(1) |
| | | | | 図版93 | 金属製品(2) |
| | | | | 図版94 | 石器・石製品・ガラス製品 |

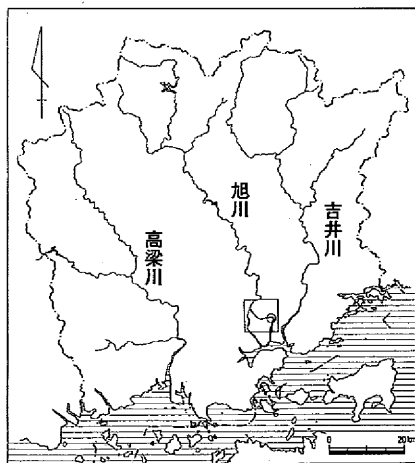
第1章 地理的・歴史的環境

第1節 地理的環境

岡山県には、東から吉井川・旭川・高梁川の三大河川が存在している。そのひとつである旭川は、中国山地を源とし、吉備高原の山間部に細長い谷底地形を形成しながら南流して、瀬戸内海へと達する。その際、岡山県の中・北部で丘陵を削りながら南下するため、多くの土砂が運ばれることとなり、河口付近に沖積平野を形成した。それが、広義の岡山平野である。旭川が平野部において現在のような流れとなったのは、文禄3（1594）年に宇喜多秀家が岡山城築城の際、堀に見たてて旭川の一部を付け替えてからである。しかし、このような不自然な付け替えを行ったために、岡山城下は度々洪水の被害を受けることとなった。この様な洪水を回避するために考案されたのが、百間川である。百間川は、時の城主である池田光政の命を受けた津田永忠が、熊沢蕃山の治水論「川除の法」を取り入れて工事の指導・指揮にあたり、寛文9（1669）年から貞享4（1687）年にかけて造られた人工河川である。すなわち、岡山市竹田付近の東岸堤防筋に「荒手」と称する洪水の越流堤を設け、そこからあふれ出た水を操山丘陵の北麓に沿って東流させ、さらに丘陵の東端を回って南流させて海へと注がせる、つまりバイパスの機能をもたせたのである。その長さは、約7～8 km（現在は約13km）にわたる。

この百間川が位置する旭東平野（旭川東岸の平野）は、西には旭川が流れ、北に竜の口山丘陵、南に操山丘陵、さらに東を芥子山および山王山丘陵により囲まれた地域であり、南北3 km・東西5.5 kmの広がりをもつ比較的まとまりある状況を呈している。また、旭川から流れ込む大量の土砂堆積により、肥沃な可耕地が形成されており、現在岡山県下でも有数の穀倉地帯として知られている。しかし、操山丘陵の南側に広がる平野は、その大部分が近世以降の干拓により形成され、弥生・古墳時代には浅い海がせまっていたと考えられる。

旭東平野を流れる百間川が、現在の様な流れとなったのは、前述のように17世紀後半以降である。



第1図 遺跡位置（1/200万）

それ以前、この地を流れる河道は人工的な制約を受けることなく、大きくはふたつの流れとして存在していたようである。ひとつは祇園から賞田・雄町を南東方向へと流れ、乙多見・長利へ。もうひとつは中原から新屋敷へと南下し、藤原で南東方向へと流路を変えて、兼基・長利へと流れていた。これらふたつの旧河道は、長い年月の間蛇行を繰り返すことにより土砂堆積を伸長し、周辺の沖積化を促してきたと考えられる。そして、現在このふたつの流路は、この地域を流れる中小の用水路としてその名残をとどめている。また、旭東平野の北東部にあたる湯迫・四御神一帯は、旭川の堆積作用が及ばなかった地域と捉えられており、広い範囲にわたって後背湿地であった⁽¹⁾と考えられている。（松尾）

第2節 歴史的環境

1 旧石器時代

旭東平野における最古の遺物は、操山旗振台北遺跡から出土したナイフ形石器⁽²⁾がある。これは後期旧石器時代で、旭東平野周辺では他にこの時期の遺構・遺物は確認されていない。



- | | | | |
|--------------|--------------|--------------|-----------|
| 1 百間川米田遺跡 | 9 井寺廃寺 | 17 沢田大塚古墳 | 25 網浜廃寺 |
| 2 百間川原尾島遺跡 | 10 山王山古墳 | 18 兼基鳥坂銅鐸出土地 | 26 一本松古墳 |
| 3 百間川沢田遺跡 | 11 乙多見遺跡 | 19 金蔵山古墳 | 27 神宮寺山古墳 |
| 4 百間川兼基・今谷遺跡 | 12 雄町遺跡 | 20 旗振台古墳 | 28 天瀬遺跡 |
| 5 備前車塚古墳 | 13 赤田遺跡 | 21 操山103号古墳 | 29 成光廃寺 |
| 6 唐人塚古墳 | 14 幡多廃寺 | 22 湊茶白山古墳 | 30 ハガ遺跡 |
| 7 賞田廃寺 | 15 中井・南三反田遺跡 | 23 網浜茶白山古墳 | |
| 8 四御神山の上古墳 | 16 備前国府推定地 | 24 操山109号古墳 | |

第2図 周辺遺跡分布 (1/50000)

2 縄文時代

1970年代前半まで、この時期の遺物は2か所のみで確認されていたに過ぎない。ひとつは、百間川遺跡群を調査する端緒となった事柄で、国道2号線百間川橋脚部の工事に伴って出土した晩期土器を近藤義郎氏が確認したこと。もうひとつは、山陽新幹線建設工事に伴い調査された雄町遺跡出土の晩期土器⁽³⁾である。

その後1977年から、百間川改修工事に伴う発掘調査が継続的に行われるようになり、この時期の遺構・遺物が広く知られるようになった。現在までもっとも古い時期を示しているのは、百間川沢田遺跡から出土した中期土器片2点である⁽⁴⁾。しかし、この中期の土器片は摩滅が著しく、上流域あるいは丘陵部からの流入の可能性が考えられている。

後期の遺構・遺物では、百間川沢田遺跡の高縄手B調査区東側微高地下部で、後期の遺物を包含する堆積が確認される⁽⁴⁾。その後、百間川原尾島遺跡から後期後葉と認識される焼土面と土器溜りが確認⁽⁵⁾され、同様に百間川沢田遺跡で、多数の炉・土壇・ドングリ貯蔵穴が検出された⁽⁶⁾。これらのことから、この段階から沖積地への人の移動があったと考えられ、少なくとも一定期間の定住が始まっていた蓋然性は強い。

晩期の遺物は、雄町遺跡をはじめ百間川遺跡群すべてから出土している。なかでも、百間川沢田遺跡からは多量の土器に伴って、サヌカイト製の打製石鍬や石包丁形打製石器の出土がみられ、遺物面から農耕の可能性が示唆されている⁽⁶⁾。また、百間川沢田遺跡で検出された貝塚からは、鹿角製の鳥形短剣や指輪形角製品が出土しており⁽⁷⁾、当時の人々の豊かな精神文化を伺い知ることができる。このように、遺物面からは多くの情報を得ることができるのに反し、遺構との関連においてはいまひとつ不明であり、特に集落の具体的なあり方については、明確ではない。

3 弥生時代

前期の遺跡は、雄町遺跡・百間川原尾島遺跡・百間川沢田遺跡・百間川米田遺跡など、縄文時代晩期から続くものが多い。しかし、いずれの遺跡も前期前葉の時期が欠けている。その後の、百間川沢田遺跡で検出された前期中葉の環濠集落⁽⁶⁾は、比較的短時間の集落のあり方を示す一例として、全国的にも著名である。幅4m、深さ2mの環濠は、およそ90×100mの規模でめぐっており、内側からは竪穴住居4軒、円形周溝墓2基が検出されている。環濠の外側には土壇墓もみられ、なかには木棺の痕跡を残すものも認められた。そのほか、環濠とは旧河道を挟んだ隣の微高地には、窪地に長方形区画の水田が2面確認されている⁽⁶⁾。百間川原尾島遺跡でも、同時期の水田が1面検出されていて⁽⁸⁾、その後の調査でも面的に広く検出されているなど、前期水田の情報が増えつつある。

中期の遺跡では、前述の遺跡の他に赤田遺跡⁽⁹⁾・乙多見遺跡⁽¹⁰⁾などがある。赤田遺跡においては、高杯で蓋をした甕棺墓が検出されている。百間川遺跡群では、当該期の中心的な存在となりうる百間川兼基・今谷遺跡をあげることができる。他の遺跡に比べて、遺構遺物共に豊富であり、特に大地調査区で検出された28棟にも及ぶ建物群や、その周辺から出土したガラス溶滓などはこの遺跡の特異性を示している⁽¹¹⁾。これらの事象と関連するのかわ不明であるが、百間川兼基・今谷遺跡の南に位置する操山丘陵の谷部（向山口・鳥坂山）からは、3口の銅鐸が出土している⁽¹²⁾。

後期になると集落の数が飛躍的に多くなり、集落が立地する微高地間にあたる低位部には、連綿と

水田が営まれるようになる。この時期の水田は、後期末に周辺一帯を覆った洪水砂によって良好な形でパックされており、当時の景観を復元するのに大変有効である。水田は、百間川の河川敷だけでも百間川原尾島遺跡の西端から東へ、微高地を挟みながら約3km下流の百間川今谷遺跡にまで続いている。さらに最近の調査で、百間川西岸の原尾島交差点付近まで水田の広がりが確認されている⁽¹³⁾。また、この水田と有機的な関係にある用排水路の存在も確認されており、当時の灌漑・土木技術の高さや、水田を維持・管理するためのより上位の共同体組織の存在などが想定される。この時期、百間川遺跡群のなかでは、百間川原尾島遺跡が母村的な集落であると考えられ、竪穴住居址でも周溝をめぐらせたり、直径が10mを越えるものなども最近の調査で明らかになっている⁽¹⁴⁾。

4 古墳時代

集落の立地する場所は、弥生時代の集落が分布する範囲と基本的には一致する。百・古・Ⅲの時期から住居に竈が取り付けられる例があり、この時期から竈の導入が始まったと考えられる。また、百間川原尾島遺跡からは、布堀溝を伴う建物が検出されており⁽⁵⁾⁽¹⁵⁾、他の掘立柱建物とは異なる上部構造を有していると思われることから、興味深い事例と考えられる。

百間川遺跡群における当該期の水田は、近年まで明確な遺構が検出されていない。しかし、最近調査された原尾島遺跡・沢田遺跡において、洪水砂上部の堆積層の一部が、古墳時代初頭には水田に利用されていることが判明した。また、原尾島遺跡では古墳時代後期の水田が2面検出されており⁽¹³⁾、古墳時代の水田について新たな知見が加わりつつある。

旭東平野周縁の丘陵には、古墳が多く築かれている。なかでも操山丘陵には操山109号墳（74～76m・前方後円墳）、網浜茶臼山古墳（92m・前方後円墳）、湊茶臼山古墳（150m・前方後円墳）、金蔵山古墳（165m・前方後円墳）、旗振台古墳（27m・方墳）などがあり、これらの古墳は金蔵山古墳までの系統性が認められ、その後方墳へと変容する首長墓の変遷をとらえることができる。また、竜の口丘陵には三角縁神獣鏡等13面が出土した備前車塚古墳（48.3m・前方後方墳）が、山王山丘陵には穴甘山王山古墳（68.5m・前方後円墳）など初期の古墳が築かれている。

後期古墳は、北方に竜の口古墳群、南には操山古墳群が位置する。これらの群集墳は、前段階同様丘陵上に築かれ、横穴式石室を主体部としている。しかし、このように丘陵上に築かれる古墳が多く存在する一方、中井・南三反田遺跡（備前国府推定地）⁽¹⁶⁾では、11基もの古墳が平野部に築造される例が明らかとなっており、今後は平野に築かれている埋没古墳にも留意する必要がある。

5 古代以降

旭東平野では、賞田廃寺・成光廃寺・居都廃寺（井寺廃寺）・幡多廃寺・網浜廃寺の5か寺が古代寺院として知られている。この5か寺はいずれも、古代の行政区画である上道郡に属し、1郡内での古代寺院の集中率が高いことで知られている。このうち、賞田廃寺⁽¹⁷⁾と幡多廃寺⁽⁶⁾は発掘調査が行われており、出土瓦の検討・寺域の復元等が論じられている。特に、瓦当文様の比較・検討により、網浜廃寺を除く4か寺の有機的な関係が明らかとなっており、それは上道郡を本貫とする上道氏の動向と重なる部分が多い。同時に、賞田廃寺と幡多廃寺が、建物の基壇に壇上積基壇を採用していることは、当時の上道氏の興隆ぶりを示しているといえるであろう。

国府市場字国長には、1959年に県指定史跡となった備前国庁跡がある。国府所在地は、『和名類聚

抄』では御野郡内に在ると記されているが、旧御野郡内にはそれに相当する遺跡が発見されていない。従来より、国府所在地については諸説があるが、おおむね国府市場周辺に比定されているようである。今まで、確定的な遺構・遺物は確認されていないが、近隣に所在する雄町遺跡では、奈良～平安時代の掘立柱建物や溝が検出され、硯・緑釉陶器・灰釉陶器が出土している⁽³⁾⁽¹⁸⁾。また、南古市場遺跡で奈良～平安時代の掘立柱建物が検出されたり⁽¹⁹⁾、ハガ(高島小)遺跡では、平安時代前期の掘立柱建物と平安時代後期の瓦が確認され⁽²⁰⁾、最近の調査では東西南北に方位を合わせた方形区画遺構や奈良三彩・羊形硯が出土⁽²¹⁾するなど、国府推定地をより明確に補強する材料が増えつつある。

さて、百間川遺跡群に目を転じてみると、百間川米田遺跡では奈良時代の掘立柱建物14棟が検出されており、遺物では「上三宅」と墨書された須恵器杯や、円面硯・銅製帯金具(丸柄)・緑釉陶器・丹塗りの土師器が出土している。これらの遺構・遺物から、郡の倉院あるいは国府の外港に付属する倉庫群を比定する説⁽²²⁾が提起されている。また同遺跡からは、底部外面に「官」の逆字が刻印されている須恵器杯が出土している⁽²²⁾。関連性は不明であるが、同様の須恵器が岡山市の前池内5号墳⁽²³⁾・高梁市の佐内古墳⁽²⁴⁾・山手村の道金山窯跡群⁽²⁵⁾からも出土しており、何らかの官衙関連施設と関係があるのか興味深い。一方、百間川原尾島遺跡では、奈良時代末期～平安時代初頭にかけての幅12～13mの大溝が検出されている。この溝からは、墨書土器や人形・斎串などの木製模造品が出土している⁽⁵⁾。これらの出土品は、平城京の大祓に関連した律令的祭祀跡から出土する遺物と類似したものであるため、同遺跡が国府に隣接する場所に位置することからも、この溝が国庁指導で行われた儀式跡と考えられ、備前国府の祓所とする説もある。

中世の集落としては、百間川原尾島遺跡⁽⁵⁾や百間川米田遺跡⁽²⁶⁾でみられる。前者では、鎌倉～室町時代にかけての建物群が検出されていて、当時の集落の在りようが徐々に解明されつつある。すなわち、その集落は条里制地割によって規制されており、室町時代に入ると屋敷地を取り囲む溝あるいは堀の出現がみられる。また、同時期に比定される土壙墓群の中には、青磁・白磁の碗や皿、湖州鏡などの舶載品が副葬されているものがあり、集落内での階層差が存在していた。そして、この集落は16世紀におこった洪水によって廃絶したことなどが主な点である。後者では、鎌倉～室町時代の大溝が検出されており、その規模や地理的条件などから運河の可能性が指摘されている。そして、この大溝の北側には長期にわたって営まれた集落が検出されており、建物の規模や種類、集落構成などから海に近い農村集落と考えられている。

百間川遺跡群においては、その時代時代に応じた形で、その時の最先端技術を駆使した土木工事が行われており、その一端は発掘調査によって明らかとなっている。その中でも、まず最初に挙げられるのが、百間川米田遺跡で検出された古代末から中世にかけての橋脚遺構であろう。その詳細は当報告書で明らかのように、この地域で同時期に3本もの橋が架けられていた事実は、その河道から出土する遺物量の豊富さとあいまって、この地域がいかに当時の交通の要所であったか、さらに流通の重要な拠点であったかということの証といえるだろう。

以上、この章については、これまでに刊行された百間川遺跡群の報告書に掲載されている地理的・歴史的環境の章を大いに参考とさせていただいた。(松尾)

註

(1) 石田寛『岡山県の地理』(株)福武書店 1978

第1章 地理的・歴史的環境

- (2) 鎌木義昌「岡山市域の無土器時代遺跡と遺物」『岡山市史・古代編』岡山市 1962
- (3) 『雄町遺跡』岡山県埋蔵文化財発掘調査報告1 岡山県教育委員会 1972
- (4) 『百間川沢田遺跡2』岡山県埋蔵文化財発掘調査報告59 岡山県教育委員会・建設省河川工事事務所 1985 *以下、『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』のうち百間川遺跡群の報告書については、発行機関名を省略する。
- (5) 『百間川原尾島遺跡5』岡山県埋蔵文化財発掘調査報告106 1996
- (6) 『百間川沢田遺跡3』岡山県埋蔵文化財発掘調査報告84 1993
- (7) 『百間川沢田遺跡4』岡山県埋蔵文化財発掘調査報告119 1997
- (8) 『百間川原尾島遺跡3』岡山県埋蔵文化財発掘調査報告88 1994
- (9) 『幡多廃寺発掘調査報告』岡山市遺跡調査団 1975
- (10) 正岡睦夫「岡山市乙多見における溝改修工事に伴う出土土器」『岡山県埋蔵文化財報告3』岡山県教育委員会 1973
- (11) 『百間川兼基遺跡1 百間川今谷遺跡1』岡山県埋蔵文化財発掘調査報告51 1982
- (12) 鎌木義昌「岡山県兼基遺跡」『日本農耕文化の生成』東京堂出版 1961
- (13) 『原尾島遺跡・沢田遺跡』岡山県埋蔵文化財発掘調査報告153 建設省岡山国道工事事務所・岡山県教育委員会 2000
- (14) 柴田秀樹「溝でかこった大型住居―百間川原尾島遺跡―」『所報吉備27号』1999
- (15) 『百間川原尾島遺跡4』岡山県埋蔵文化財発掘調査報告97 1995
- (16) 『中井・南三反田遺跡』岡山県埋蔵文化財発掘調査報告92 岡山県教育委員会 1994
- (17) 『賞田廃寺発掘調査報告』岡山市教育委員会 1971
- (18) 正岡睦夫「雄町遺跡出土の硯と歴史時代の須恵器について」『岡山県埋蔵文化財報告7』岡山県教育委員会 1977
- (19) 「南古市場（高島公）遺跡現地説明会資料」岡山市教育委員会 1992
- (20) 草原孝典「ハガ（高島小）遺跡」『岡山市埋蔵文化財調査の概要1998』岡山市教育委員会 2000
- (21) 「ハガ（高島小プール）遺跡発掘調査現地説明会資料」岡山市教育委員会 2001
- (22) 『百間川当麻遺跡2』岡山県埋蔵文化財発掘調査報告52 1982
- (23) 「前池内遺跡」『山陽自動車道に伴う発掘調査8』岡山県埋蔵文化財発掘調査報告89 日本道路公団広島建設局岡山工事事務所 岡山県教育委員会 1994
- (24) 田仲満雄「高梁市佐内古墳出土の遺物について」『古代吉備8』古代吉備研究会 1980
鎌木義昌「第三章 夜明前の高梁」『高梁市史』高梁市 1979
- (25) 亀田修一・伊藤晃・和泉弘幸・石田義人「「官」逆字押印須恵器について―備中道金山窯跡採集資料を中心に―」『鎌木義昌先生古希記念論集 考古学と関連科学』鎌木義昌先生古希記念論文集刊行会 1988
- (26) 『百間川米田遺跡3』岡山県埋蔵文化財発掘調査報告74 1989

第2章 調査および報告書作成の経緯

第1節 発掘調査の契機と経過

百間川が旭川の放水路として江戸時代の初め頃に造られた人工河川であることは、第1章でも触れた。その百間川の大規模な改修工事の計画構想は、昭和の初め頃からあったらしいが、建設省（現国土交通省、以下同）が本格的に改修計画を打ち出したのは昭和43（1968）年のことである。当時、百間川の河床下に遺跡（散布地）が存在することは、昭和25（1950）年頃から周知され、昭和40（1965）年度に岡山県教育委員会が発行した『岡山県遺跡地図』にはA・B両地点の範囲が記載されている。遺跡名は百間川A遺跡・同B遺跡となっており、前者は一般国道2号の百間川橋を含み上流の祇園用水路付近まで、後者は百間川橋の下流で河道が東方向へわずかに屈曲する付近が示されている。

改修工事計画を知った岡山県教育庁文化課は、建設省岡山河川工事事務所に対し、事前に文化財の保護に遺漏のないよう要望するとともに、以後計画の進捗状況に合わせて遺跡の取り扱いについて協議を重ねた。その結果、基本的には埋蔵文化財包蔵地の範囲が確定したならば、当該地は発掘調査が終了したのちに改修工事を施工することで合意した。また、岡山県教育委員会は、建設省に対して文化財保護法第57条の3に先だつ事前協議の文書の提出を求める一方、この協議の基礎資料となる百間川遺跡（関連遺跡を含む）の範囲確認調査計画概要を提出した。その後昭和51（1976）年4月になって、建設省中国地方建設局岡山河川工事事務所長から事前協議の文書が岡山県教育委員会に提出され、これに基づいて協議を重ねた。そして、同年9月1日付けで建設省中国地方建設局長から確認調査の依頼文書が提出され、同年11月1日から岡山県教育委員会が確認調査を実施するに至った。

確認調査（第1次調査）は、低水路部分の遺跡の確認および古地形の復原と新田サイフォン部分の一部について、翌年3月31日まで実施された。その結果、岡山市原尾島（第1微高地）、同沢田（第2微高地）、同兼基・今谷（第3微高地）の3か所に大規模な微高地が広がりその部分が遺跡であることが判明した。翌年度からは、確認調査の成果を基に建設省の工事計画に先だつかたちで本調査を進め、現在も継続中である。この間、各微高地間にも弥生時代後期の水田が存在することや、新たに岡山市米田一帯も遺跡であることが判明し、発掘調査の範囲は当初より増加した。

岡山市米田の百間川米田遺跡は、昭和53（1978）年度に右岸用水路（幅6m、延長約240m）調査区、昭和54～55（1979～1980）年度には低水路調査区の丘陵部（約2,300㎡）とその東裾部（約2,800㎡）、昭和56（1981）年度には右岸用水の設計変更部分（約800㎡）、昭和58～60（1983～1985）年度には低水路部分（総面積12,978㎡）の調査を実施した。そして、これらの報告書は、右岸用水・丘陵調査区分が14頁第2表Ⅱ、丘陵東裾・右岸用水変更調査区分が同Ⅳ、低水路部分が同Ⅶとして刊行している。

本報告書掲載の対象になったのは、平成2（1990）年度調査の岩間調査区（全体の確認調査と広野樋門）、平成6（1994）年度調査の当麻調査区、平成7・8（1995・1996）年度調査の岩間上調査区、平成8～10（1996～1998）年度調査の岩間下調査区である。そのうち、岩間下調査区は平成9年（1997）年度当初計画では4～6月までの3か月間の調査を予定していたが、遺構が下流に拡がり、かつ平安

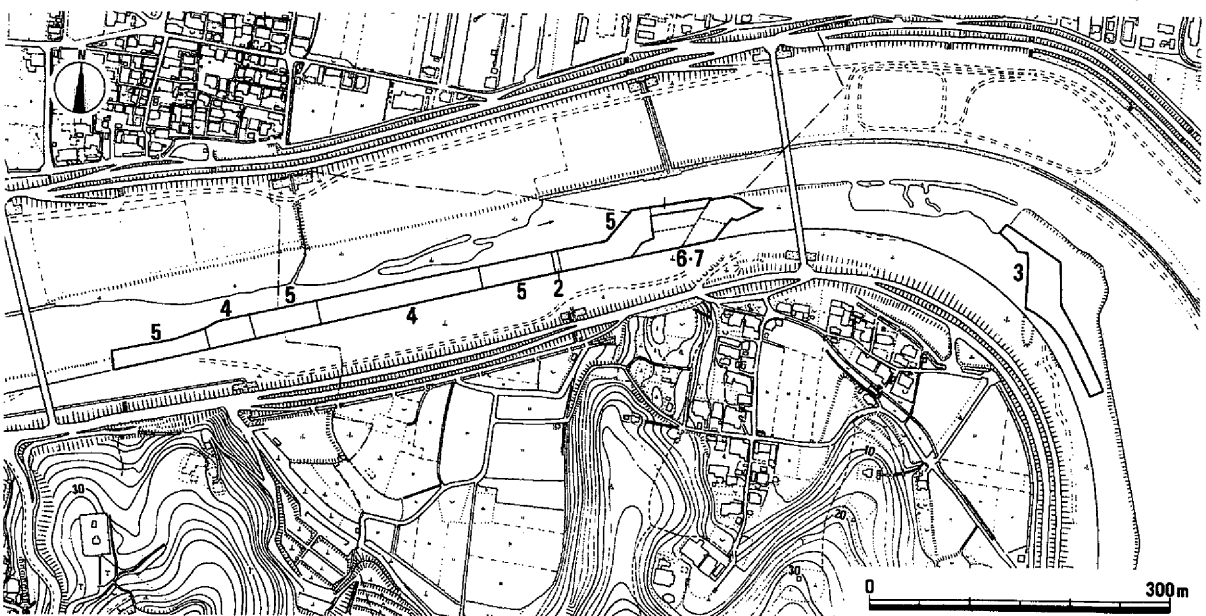
第1表 百間川米田遺跡調査一覧

年度	番号	調査区	調査担当者	調査期間	面積(m ²)	遺物箱数
H2	1	岩間調査区(確認)	平井勝・藤田耕平・村田秀石	9.27~10.24	105	2
	2	広野樋門調査区		11.13~11.26	140	1
H6	3	当麻調査区	山磨康平・小畑良治・根木智宏	7.01~3.31	3,440	111
H7	4	岩間調査区(2・4区)	山磨康平・中務和彦	5.19~3.31	4,980	177
H8	5	岩間調査区 (1・3・5~7区)	井上弘・根木智宏・谷口広幸 日下隆春	4.01~3.31	7,857	207
H9	6	岩間調査区(8~11区)	中野雅美・物部茂樹・加藤和歳	4.01~3.31	3,119	639
H10	7	岩間調査区(8・10・11)	宇垣匡雅・大森充宏・物部茂樹	4.01~11.24	1,530	167
計					21,171	1,304

末～鎌倉初期の堤防や鎌倉末～室町期の橋脚等の複雑な構造をもつ遺構であったため、岡山河川工事事務所と協議を重ね、結果的に平成10(1998)年9月までの期間延長となった。その間、岡山大学環境理工学部の馬場俊介教授から、それらの遺構は土木技術史上の重要な発見であり、例え一部でも博物館に移設・保存ができないかとの提案をいただいた。この保存方法について検討を進めるなかで、県都市計画課の百間川河川敷を利用した緑地公園整備事業の歴史公園計画構想とも関連して協議を行い、最終的に遺構そのものの移築はできないが、実測図を参考にしたマスタープランで移設・復元を平成11年度に実施することとなった。

これらの保存にむけての取り組みのなかで、当埋蔵文化財保護対策委員の先生方をはじめ、馬場先生ならびに関係機関・関係各位から、御指導と御協力を賜った。記して深謝の意を表す次第である。

また、調査区・調査担当者・調査期間・調査面積・遺物数等は第1表に記す。第1表の番号は第3図の調査区番号に対応する。なお、本報告書の整理・作成期間が2か年にわたったため、年度ごとの整理の区切りと報告書の全体編集の都合上、報告書の中では第1表の1・2・4と5の1・3・5区を岩間上調査区、同5の6・7区と6・7を岩間下調査区として扱っている。(柳瀬)



第3図 調査区位置(1/7,500)

第2節 調査および報告書作成の体制

発掘調査は、岡山県教育委員会が建設省中国地方建設局（現国土交通省中国地方整備局）から委託を受け、昭和52（1977）年度から実施しており、現在も継続している。

本報告書に掲載した百間川米田遺跡は、平成2（1990）年度・平成6～10（1994～1998）年度に調査を実施した第3図の範囲を対象とし、発掘調査は各年度ごとに、調査員3名・3名・2名・4名・3名・3名の各1班の体制で対応している。遺物の整理・報告書の作成は平成11（1999）年度と平成12（2000）年度に実施し、調査員2名ずつが当たった。

岡山県教育委員会は、発掘調査と報告書の作成事業の遂行にあたり、遺跡の保護・保存ならびに調査・報告書作成の専門的な指導および助言を得るため、岡山県遺跡保護調査団の推薦を受けた方々に、「旭川放水路（百間川）河川改修工事に伴う埋蔵文化財保護対策委員会」の委員を委嘱している。

次に体制を記す。

（柳瀬）

旭川放水路（百間川）河川改修工事に伴う埋蔵文化財保護対策委員会 委員

池葉須藤樹	（元岡山市立犬島中学校校長）
鎌木義昌	（岡山理科大学教授）〈1993年2月逝去により退任〉
近藤義郎	（岡山大学名誉教授）
角田 茂	（元岡山市立岡輝中学校教諭）〈2001年12月逝去〉
出宮徳尚	（岡山市教育委員会文化財課長）
水内昌康	（元岡山県文化財保護審議会委員）
山本悦世	（岡山大学埋蔵文化財研究センター助教授）〈1993年4月から〉

発掘調査

平成2（1990）年度

岡山県教育委員会

教育長 竹内 康夫

岡山県教育庁

教育次長 杉井 道夫

文化課

課長 鬼澤 佳弘

課長代理 光吉 勝彦

課長補佐（埋蔵文化財係長） 伊藤 晃

主査 藤川 洋二

岡山県古代吉備文化財センター

所長 長瀬 日出明

次長 河本 清

〈総務課〉

総務課長 竹原 成信

課長補佐（総務係長） 藤本 信康

主任 平松 郁男

主任 坂本 英幸

〈調査第一課〉

調査第一課長事務取扱 河本 清

課長補佐（第一係長） 柳瀬 昭彦

文化財保護主査 平井 勝

文化財保護主査 藤田 耕平

第2章 調査および報告書作成の経緯

平成6(1994)年度

岡山県教育委員会

教育長 森崎 岩之助

岡山県教育庁

教育次長 岸本 憲二

文化課

課長 大場 淳
 課長代理 松井 新一
 課長補佐(埋蔵文化財係長) 高畑 知功
 主任 若林 一憲

岡山県古代吉備文化財センター

所長 河本 清
 次長 葛原 克人

<総務課>

総務課長 丸尾 洋幸
 課長補佐(総務係長) 杉田 卓美
 主査 石井 善晴
 主任 三宅 秀吉

<調査第三課>

調査第三課長 柳瀬 昭彦
 課長補佐(第一係長) 山磨 康平
 文化財保護主任 小畑 良治
 主事 根木 智宏

平成7(1995)年度

岡山県教育委員会

教育長 森崎 岩之助

岡山県教育庁

教育次長 黒瀬 定生

文化課

課長 大場 淳
 課長代理 樋本 俊二
 参事 葛原 克人
 課長補佐(埋蔵文化財係長) 高畑 知功
 主任 若林 一憲

岡山県古代吉備文化財センター

所長 河本 清
 次長 高塚 恵明
 次長(文化課本務) 葛原 克人

<総務課>

総務課長 丸尾 洋幸
 課長補佐(総務係長) 井戸 丈二
 総務主幹 守安 邦彦
 主査 石井 善晴
 主任 木山 伸一

<調査第三課>

調査第三課長 柳瀬 昭彦
 課長補佐(第二係長) 岡本 寛久
 文化財保護主幹 山磨 康平
 文化財保護主査 中務 和彦

平成8(1996)年度

岡山県教育委員会

教育長 森崎 岩之助

岡山県教育庁

教育次長 黒瀬 定生

文化課

課長 大場 淳
 課長代理 松井 英治
 課長代理 臼井 洋輔
 参事 葛原 克人

課長補佐（埋蔵文化財係長） 平井 勝
主 査 若林 一憲

岡山県古代吉備文化財センター

所 長 河本 清
次 長 高塚 恵明
次 長（文化課本務） 葛原 克人
文化財保護参事 正岡 睦夫

<総務課>

総務課長 丸尾 洋幸
課長補佐（総務係長） 井戸 丈二
総務主幹 守安 邦彦
主 査 木山 伸一

<調査第三課>

調査第三課長 柳瀬 昭彦
課長補佐（第二係長） 井上 弘
文化財保護主事 根木 智宏
主 事 谷口 広幸
主 事 日下 隆春

平成9(1997)年度

岡山県教育委員会

教育長 黒瀬 定生

岡山県教育庁

教育次長 平岩 武

文化課

課 長 高田 朋香
課長代理 白井 洋輔
課長代理 西山 猛
参 事 葛原 克人
課長補佐（埋蔵文化財係長） 平井 勝
文化財保護主任 大橋 雅也
主 事 三宅 美博

岡山県古代吉備文化財センター

所 長 藪本 克之
次 長 正岡 睦夫

<総務課>

総務課長 小倉 昇
課長補佐（総務係長） 井戸 丈二
主 査 木山 伸一

<調査第二課>

調査第二課長 伊藤 晃
課長補佐（第一係長） 中野 雅美
文化財保護主事 物部 茂樹
主 事 加藤 和歳

平成10(1998)年度

岡山県教育委員会

教育長 黒瀬 定生

岡山県教育庁

教育次長 平岩 武

文化課

課 長 高田 朋香
課長代理 西山 猛
参 事 正岡 睦夫
課長補佐（埋蔵文化財係長） 松本 和男
文化財保護主任 大橋 雅也
主 事 三宅 美博

岡山県古代吉備文化財センター

所 長 葛原 克人
次 長 大村 俊臣

<総務課>

総務課長 小倉 昇
課長補佐（総務係長） 安西 正則

第2章 調査および報告書作成の経緯

主 査 山本 恭 輔

<調査第三課>

調査第三課長 柳 瀬 昭 彦
 課長補佐(第三係長) 岡 本 寛 久
 文化財保護主査 宇 垣 匡 雅
 文化財保護主任 大 森 充 宏
 文化財保護主事 物 部 茂 樹

報 告 書 作 成

平成11(1999)年度

岡山県教育委員会

教 育 長 黒 瀬 定 生

岡山県教育庁

教 育 次 長 宮 野 正 司

文化課

課 長 松 井 英 治
 課長代理 佐々部 和 生
 参 事 正 岡 睦 夫
 課長補佐(埋蔵文化財係長) 松 本 和 男
 文化財保護主任 大 橋 雅 也
 主 任 奥 山 修 司

岡山県古代吉備文化財センター

所 長 葛 原 克 人
 次 長 大 村 俊 臣

<総務課>

総務課長 小 倉 昇
 課長補佐(総務係長) 安 西 正 則
 主 査 山 本 恭 輔

<調査第三課>

調査第三課長 柳 瀬 昭 彦
 課長補佐(第一係長) 山 磨 康 平
 主 事 松 尾 佳 子

平成12(2000)年度

岡山県教育委員会

教 育 長 黒 瀬 定 生

岡山県教育庁

教 育 次 長 宮 野 正 司

文化課

課 長 松 井 英 治
 課長代理 佐々部 和 生
 課長代理(埋蔵文化財係長) 松 本 和 男
 文化財保護主査 福 本 明
 主 任 奥 山 修 司

岡山県古代吉備文化財センター

所 長 正 岡 睦 夫
 次 長 能 登 原 巧

<総務課>

総務課長 小 倉 昇
 課長補佐(総務係長) 安 西 正 則
 主 査 山 本 恭 輔

<調査第三課>

調査第三課長 柳 瀬 昭 彦
 課長補佐(第一係長) 浅 倉 秀 昭
 文化財保護主事 物 部 茂 樹

第3節 報告書作成の経過

報告書の作成期間は調査員2名で平成11(1999)年度と平成12(2000)年度の2年間で当てられ、これは対象となる当麻調査区と岩間調査区の、それぞれの遺構総数と出土遺物総数および整理の難易度等から割り出された。当初の作成計画では年度ごとに1冊ずつ刊行する案もあった。しかし、調査区のまとまりを重視して当麻調査区を初年度、岩間調査区を次年度に当てた場合には、第1表の遺物箱数でわかるように後者に比重がかかり過ぎるため、岩間調査区の遺構のまとまりや遺物数等を加味して1区~11区のうち5区と6区の境にある広野樋門調査区から上流を「岩間上調査区」、下流(6~11区)を「岩間下調査区」として二分し、初年度に当麻調査区+岩間上調査区の報告書作成、次年度に岩間下調査区の報告書作成と調整および全体編集を行った。

初年度の整理対象となった当麻調査区は、操山丘陵裾部の低段丘~微高地上に営まれた弥生時代後期から古墳時代と中世をそれぞれの中心時期とする集落であり、遺構密度の粗密の差はあれ百間川遺跡群の他の微高地上の集落構成と大差はなく、遺物量も比較的少ない。しかしながら、当麻調査区から約1km離れた岩間上調査区は、遺構的には中世を中心とする河道とその肩部の井戸・土壙、河道に架かる橋梁や河道の埋まる過程で形成された貝塚などであり、前者の遺跡と性格を異にする。また、後者は出土遺物の量も多く、大半は河道の堆積層に伴う中世土器・木器・貝類であり、それ以外には上流の集落遺跡から流下した弥生土器・須恵器・石器等もいくらか混入している状況であった。そのため、とくに遺物整理の方針として、当麻調査区は他の同様集落の報告書と同じレベルでの掲載遺物の選考を行い、岩間上調査区は河道内の堆積遺物についてはかなり精選し、特に遺構に伴わない時期の混入遺物に関しては特徴のある遺物のみを扱うこととした。

次年度の整理にかかる岩間下調査区は、岩間上調査区で検出された河道が一旦調査区外に出た後、再びこの調査区で現れる場所に当たり、おもに奈良時代から中世にかけての河道と道路遺構や堤防、埋立遺構や護岸、貝塚や橋梁、近世以降の橋梁や樋門などが検出されていて、出土遺物の総量も古代~中世土器を中心にして800箱を越える。これは岩間上調査区の遺物の総量の約2倍であり、そのうちの大半が各時期の河道が埋まる過程での出土遺物であり、河道の推定時期以前(おもに弥生時代~古墳時代)の混入遺物の量も比較的多い。そのため、基本的に河道遺物の整理・復元に当たってはまず遺構に伴う時期の遺物を特定し、それらも精選して取り上げたいうえで、それ以外の混入土器は遺構に伴わない遺物として扱い、特徴のあるあるいは特殊な土器等についてのみ実測の対象とした。

また、岩間下調査区の道路・堤防・護岸などの遺構は、何百本という杭が打ち込まれ、さらに木枝や筵などを幾重にも重ねて構築されているなどかなり複雑な構造であり、橋梁や埋立遺構もそれらの基礎に握り拳~人頭大の角礫が大量に使用されていたため、全体として複雑な図面が多く、図面整理・調整・遺構トレースなどに予想以上の期間を要した。

本報告書は、2か年の整理期間のなかで年次ごとにそれぞれの調査区をまとめたうえで合冊にすることになり、とくに次年度には初年度の報告書担当と調査担当を交えての全体打ち合わせ会議や全体編集会議を数回実施し、極力全体の統一・調整などを計った。

なお本報告書は、旭川放水路(百間川)改修工事に伴う発掘調査の報告書としては14冊目であり、参考までに次頁にI~XIVまでの報告書名を掲載しておく。(柳瀬)

第2表 旭川放水路（百間川）改修に伴う発掘調査報告書一覧表

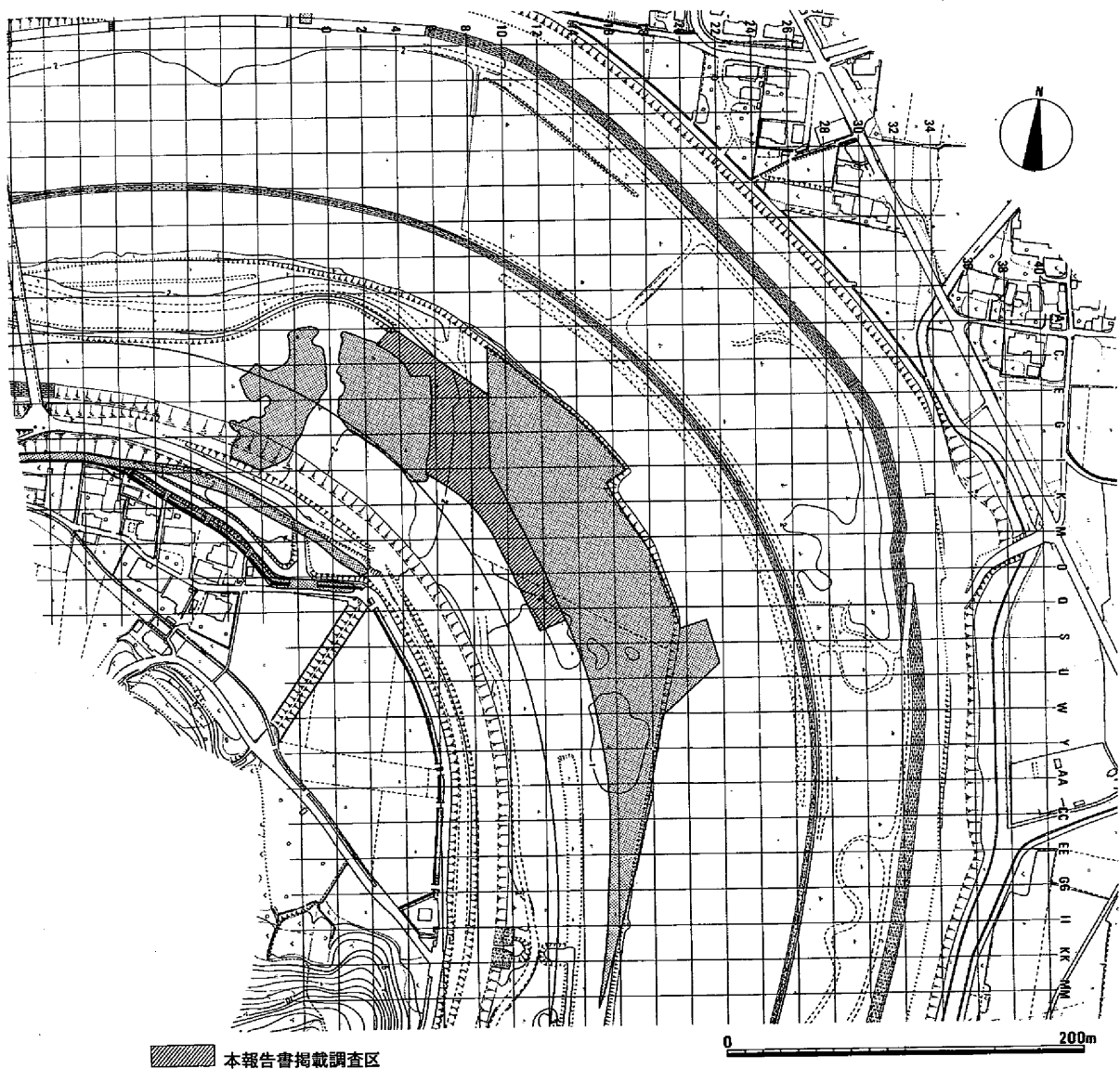
番号	編 著 者 名	書 名	シリーズ名・番号	発行年月
I	江見正己・伊藤 晃・浅倉秀昭・柳瀬昭彦 中野雅美・内藤善史他	百間川原尾島遺跡 1	岡山県埋蔵文化財 発掘調査報告39	1980 11
II	井上 弘・下澤公明・松本和男・岡田 博 浅倉秀昭・福田正継・江見正己・中野雅美 内藤善史・平井泰男・島崎 東他	百間川沢田遺跡 1 百間川長谷遺跡 百間川岩間遺跡 百間川当麻遺跡 1	岡山県埋蔵文化財 発掘調査報告46	1981 11
III	高畑知功・正岡睦夫・井上 弘・下澤公明 渡辺 光・山磨康平・浅倉秀昭・岡本寛久 江見正己・中野雅美・内藤善史・平井泰男 島崎 東・光永真一・平井典子他	百間川兼基遺跡 1 百間川今谷遺跡 1	岡山県埋蔵文化財 発掘調査報告51	1982 11
IV	井上 弘・松本和男・岡田 博・二宮治夫 平井泰男・光永真一	百間川当麻遺跡 2	岡山県埋蔵文化財 発掘調査報告52	1982 11
V	正岡睦夫・高畑知功・平井泰男・島崎 東 光永真一・井上 弘・下澤公明・渡辺 光 岡田 博・二宮治夫・岡本寛久・中野雅美	百間川原尾島遺跡 2	岡山県埋蔵文化財 発掘調査報告56	1984 11
VI	二宮治夫・正岡睦夫・井上 弘・下澤公明 柳瀬昭彦・山磨康平・岡田 博・高畑知功 浅倉秀昭・岡本寛久・江見正己・中野雅美 平井泰男・島崎 東・光永真一他	百間川沢田遺跡 2 百間川長谷遺跡 2	岡山県埋蔵文化財 発掘調査報告59	1985 11
VII	岡本寛久・平井 勝・柳瀬昭彦・井上 弘 宇垣匡雅・平井泰男・江見正己	百間川米田遺跡 3 (旧当麻遺跡)	岡山県埋蔵文化財 発掘調査報告74	1989 4
VIII	平井 勝・井上 弘・柳瀬昭彦・浅倉秀昭 古谷野寿郎・岡本寛久・江見正己 宇垣匡雅・阿部泰久・高田恭一郎	百間川沢田遺跡 3	岡山県埋蔵文化財 発掘調査報告84	1993 3
IX	宇垣匡雅・平井 勝・江見正己・柳瀬昭彦	百間川原尾島遺跡 3	岡山県埋蔵文化財 発掘調査報告88	1994 3
X	平井 勝・岡本寛久・高田恭一郎	百間川原尾島遺跡 4	岡山県埋蔵文化財 発掘調査報告97	1995 3
XI	柳瀬昭彦・高田恭一郎・岡本寛久 平井泰男・井上 弘	百間川原尾島遺跡 5	岡山県埋蔵文化財 発掘調査報告106	1996 3
XII	平井 勝・柳瀬昭彦・岡本寛久・宇垣匡雅 浅倉秀昭・江見正己	百間川兼基遺跡 2 百間川今谷遺跡 2	岡山県埋蔵文化財 発掘調査報告114	1996 3
XIII	柳瀬昭彦・弘田和司・平井 勝・高田恭一郎 山磨康平・根木智宏・澤山孝之	百間川兼基遺跡 3 百間川今谷遺跡 3 百間川沢田遺跡 4	岡山県埋蔵文化財 発掘調査報告119	1997 3
XIV	物部茂樹・山磨康平・井上 弘・宇垣匡雅 中野雅美・根木智宏・柳瀬昭彦・松尾佳子	百間川米田遺跡 4	岡山県埋蔵文化財 発掘調査報告164	2002 3

第3章 発掘調査の概要

第1節 当麻調査区

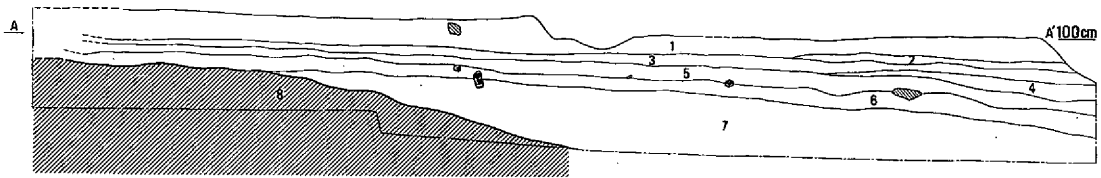
1 調査区の概要

当調査区は、百間川が操山丘陵東端で南に大きくカーブする、通称「大曲り」の北東部に突出した小丘陵の東側に位置する。主要な検出遺構は、小丘陵の東側裾部からさらに東側に弧状に広がる微高地（自然堤防）上の広範囲に位置する。

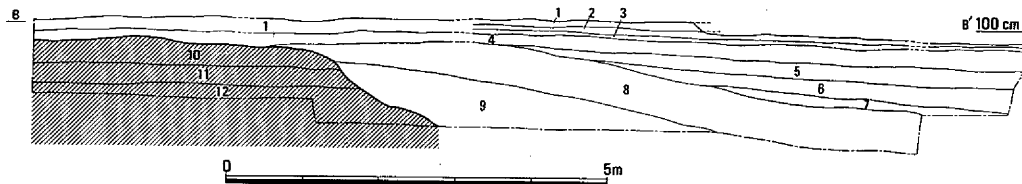


第4図 グリッド設定、当麻調査区位置 (1/4,000)

第3章 発掘調査の概要



- | | |
|------------------------|--|
| 1. 黄橙色 (10YR 8/6) 粘質土 | 5. 淡黄色 (7.5Y 8/3) 粗砂 |
| 2. 淡橙色 (5YR 8/3) 粘質土 | 6. 明緑灰色 (10GY 7/1) 微砂 |
| 3. 灰白色 (10YR 7/1) 粘質土 | 7. 暗青灰色 (5PB 4/1) 微砂 |
| 4. 褐灰色 (7.5YR 4/1) 粘質土 | 8. 青灰色 (5BG 6/1) 弱粘質土
(砂と粘土の互層)・微高地 |



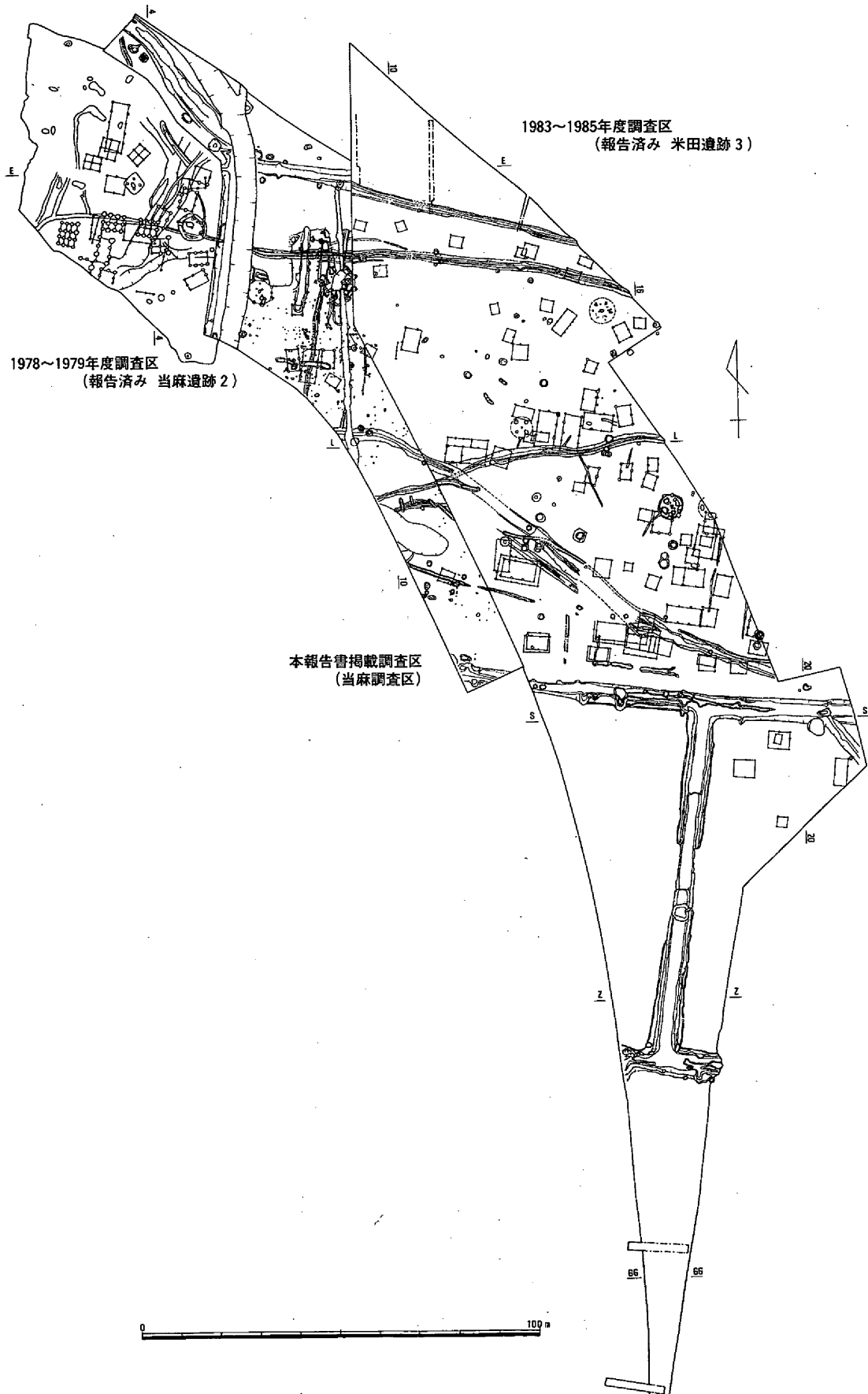
- | | |
|---------------------------------|-----------------------------------|
| 1. におい橙色 (5YR 7/3) 粘質土 | 7. 暗オリーブ灰色 (5GY 7/1) 弱粘質土 (砂質) |
| 2. 灰白色 (5YR 8/1) 粘質土 | 8. 紫灰色 (5RP 5/1) 砂質土 |
| 3. 赤黒色 (10YR 2/1) 粘質土 (下半は橙色化) | 9. 暗緑灰色 (10G 4/1) 砂質土 (白色砂との互層) |
| 4. 明緑灰色 (10GY 7/1) 粘質土 (やや砂質) | 10. オリーブ灰色 (2.5GY 6/1) 粘質土 |
| 5. オリーブ灰色 (2.5GY 6/1) 弱粘質土 (砂質) | 11. 灰色 (7.5Y 5/1) 粘質土 (淡白色ブロック含む) |
| 6. 緑灰色 (7.5GY 6/1) 弱粘質土 | 12. 紫灰色 (5RP 6/1) 砂質土 (粘質性強い) |

第5図 T1・T2微高地下がり断面 (1/100)

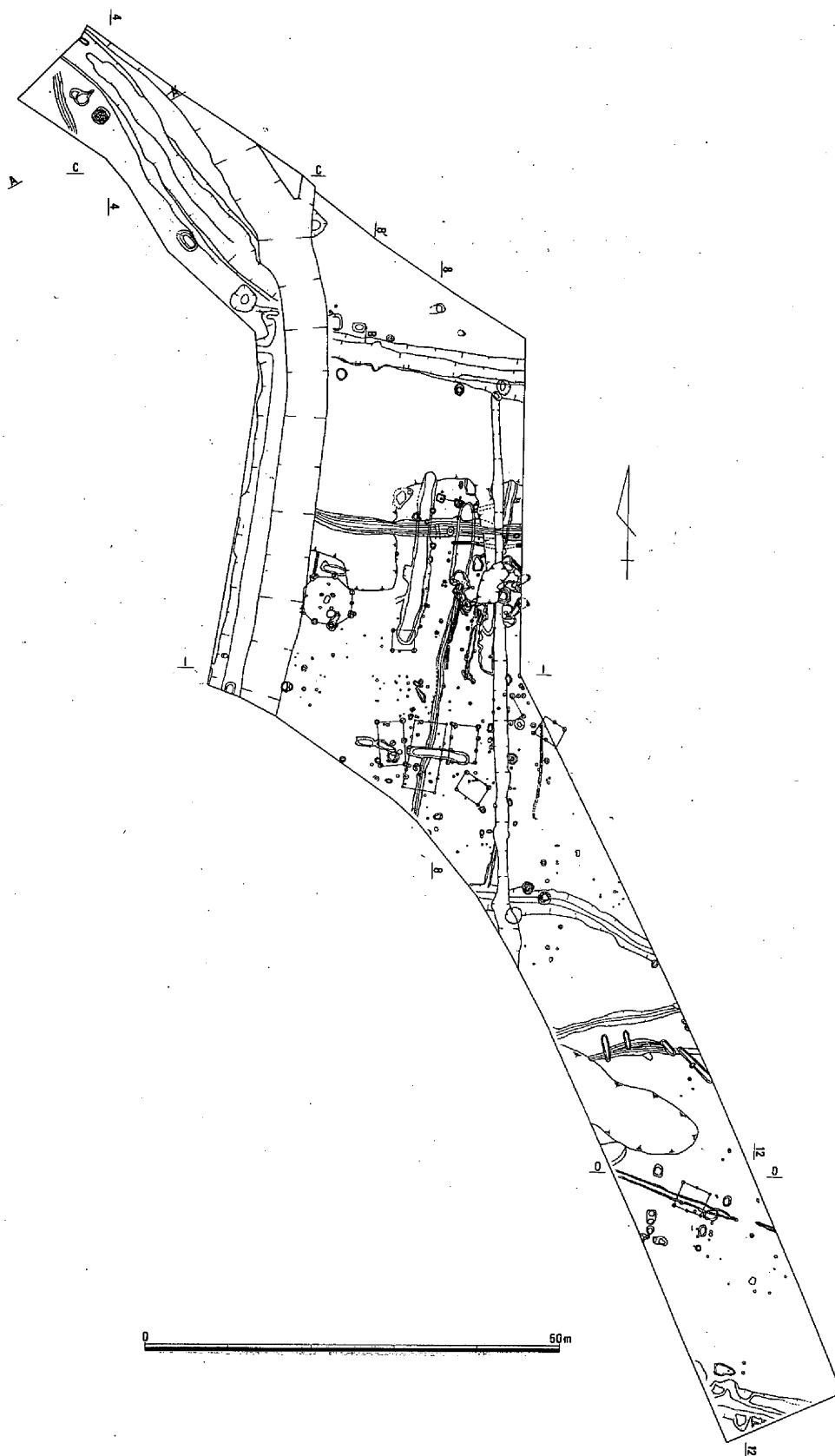
本調査区の西側は1978・79年度に調査を行った既報告「当麻遺跡2」に当たる。東側は1983～85年度調査の既報告「米田遺跡3」の調査区で、今回の調査区は両調査区に丁度挟まれた場所である。百間川の改修前は、西側の調査区との境に丘陵裾部を巡る近世以降の幹線水路が南北に通じ、東側には近・現代の水田が広がっていた。遺構の残存状況は水田の造成や改修工事の削平により悪く、竪穴住居も柱穴のみで掘り方も検出できない状況であった。検出遺構は縄文時代から近世と広範囲であるが、弥生時代中期から古墳時代初頭と中世の2時期が中心である。

調査区北端部のグリッドEライン付近が微高地の北側の下がり当たり、1983・85年度調査においても北側に傾斜し堆積する土層の観察が行われている。今回の調査も微高地範囲の確認のため5本(2本図示)のトレンチを設定し把握につとめた。微高地上部の堆積は、丘陵部に近いT-1では上部が削平を受けているため東半のT-2とでは若干異なるが、いずれも北側に微高地の下がりを確認している。T-2では微高地堆積の12層付近から下部が砂質土となる。井戸底部はこの層の始まる海拔20cm付近より下層に掘り込まれている。

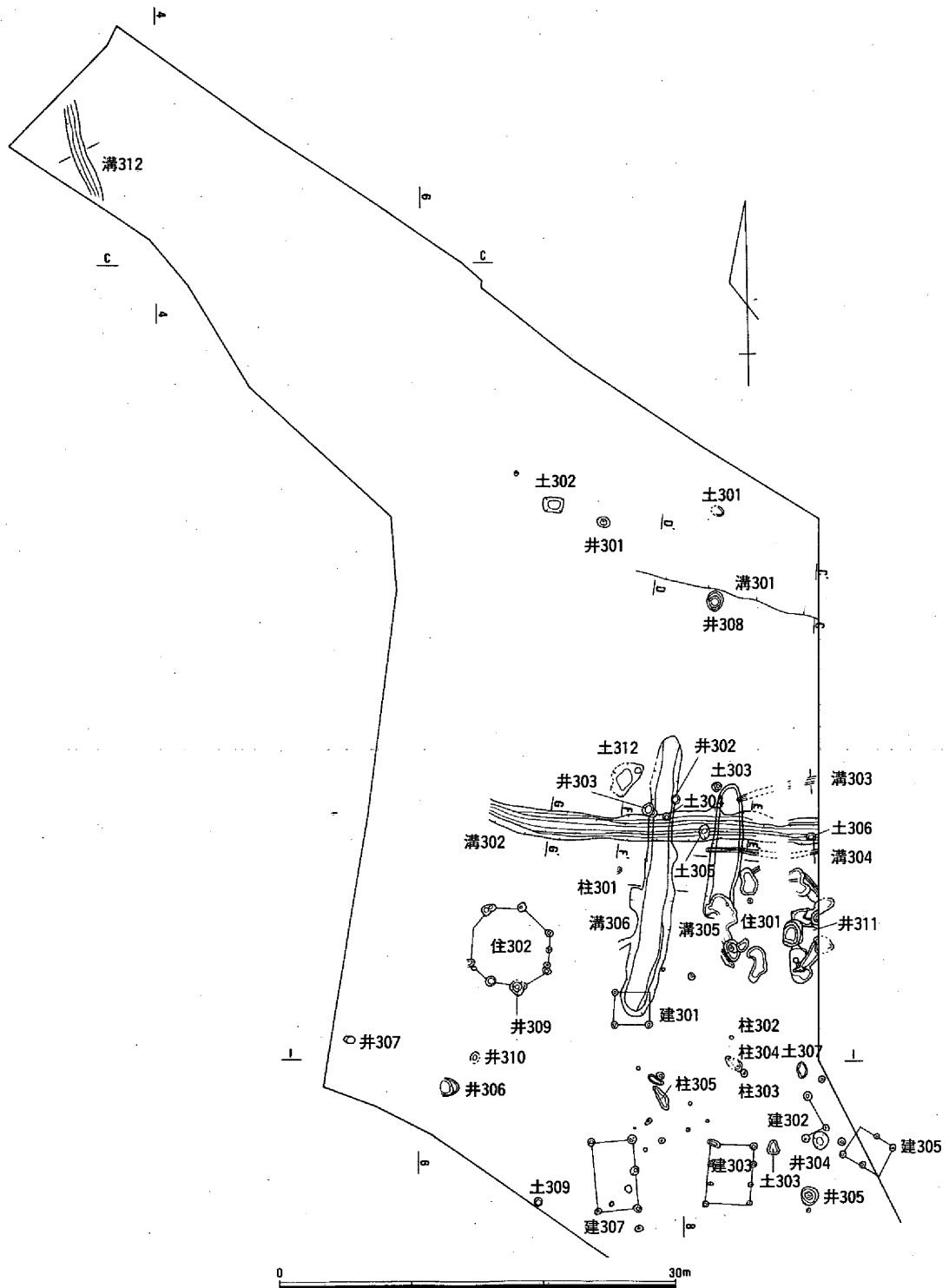
微高地の北斜面は緩やかな傾斜をなし、砂層、砂質土や砂と粘土の互層の斜面堆積を形成し、植物遺体や流木等を含んでいる。東端のトレンチで検出した縄文時代の貯蔵穴と考えられる土壌301は、微高地斜面堆積のT-2第8層上面に相当する海拔70cm付近の検出である。また西端のトレンチとT-1の第5・6層の斜面堆積土中から縄文晩期の土器片を検出している。(山磨)



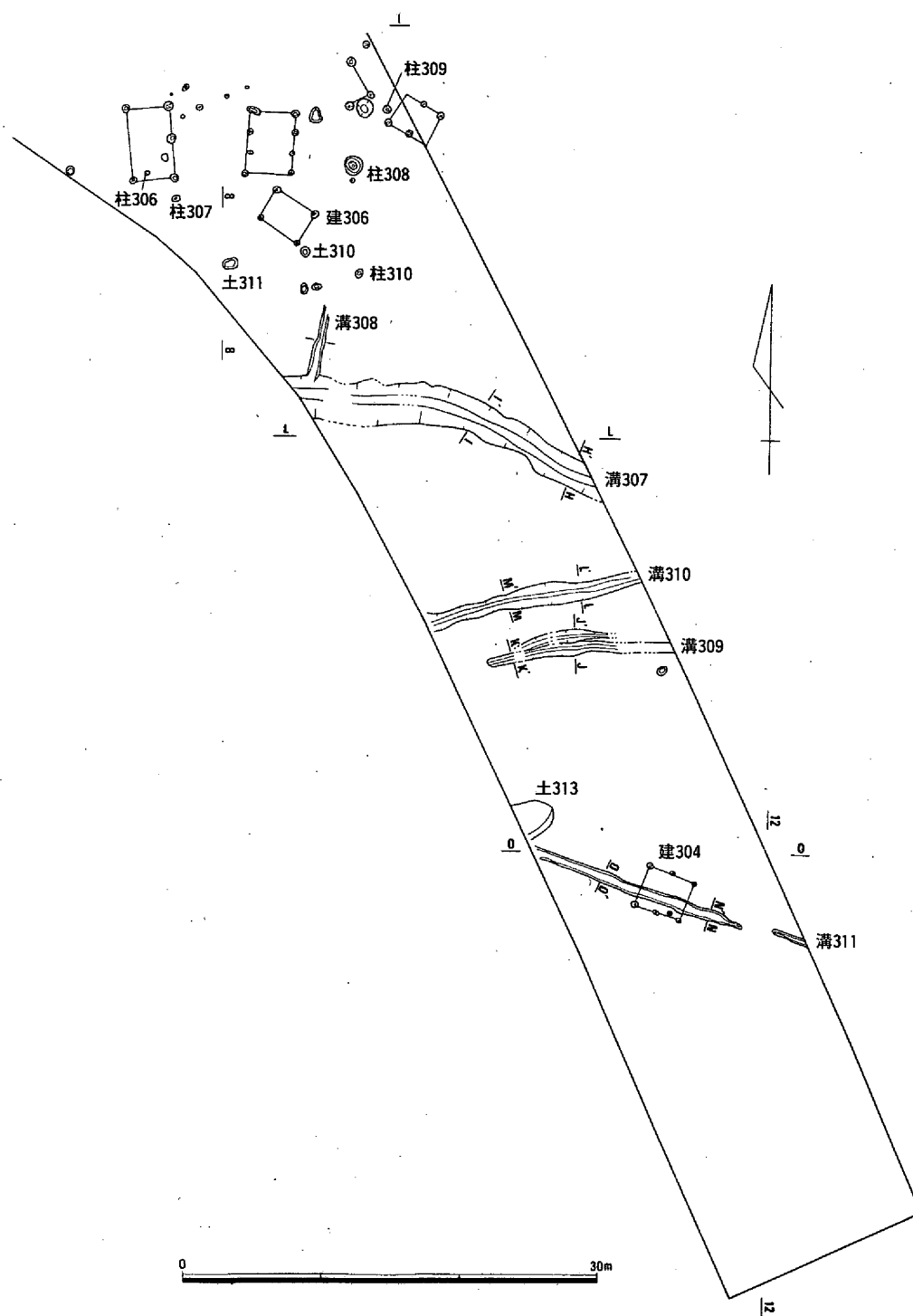
第6図 当麻調査区遺構全体〈過去調査分含む〉(1/1,500)



第7図 当麻調査区遺構全体 (1/800)



第8図 縄文～古墳時代の遺構〈1〉(1/500)



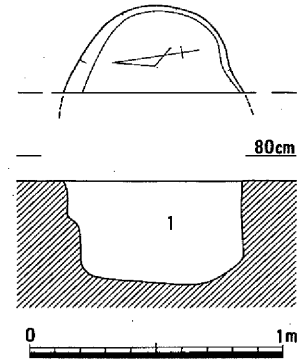
第9図 縄文～古墳時代の遺構〈2〉(1/500)

2 縄文時代の遺構と遺物

(1) 土壇

土壇301 (第10図、図版8)

調査区北端の80区に位置する。微高地北端の下がりを確認するために設定したトレンチの断面観察により土壇の半分程度を検出した。平面形はほぼ円形をなすと推定され、規模は直径約70cm、深さ40cmである。断面は垂直に近い掘り方をなし、底面は若干中央が窪んでいる。埋土はオリーブ灰色弱粘質土の1層のみである。土壇は微高地からわずかに斜面にかかった位置に形成されている。検出面は、トレンチ4の土層断面では第10層の微高地基盤層、もしくは第9層の斜面堆積層上面に相当する。検出面は、海拔70cm程で土壇底面は海拔30cm弱である。



1. オリーブ灰色 (2.5GY5/1) 弱粘質土

第10図 土壇301

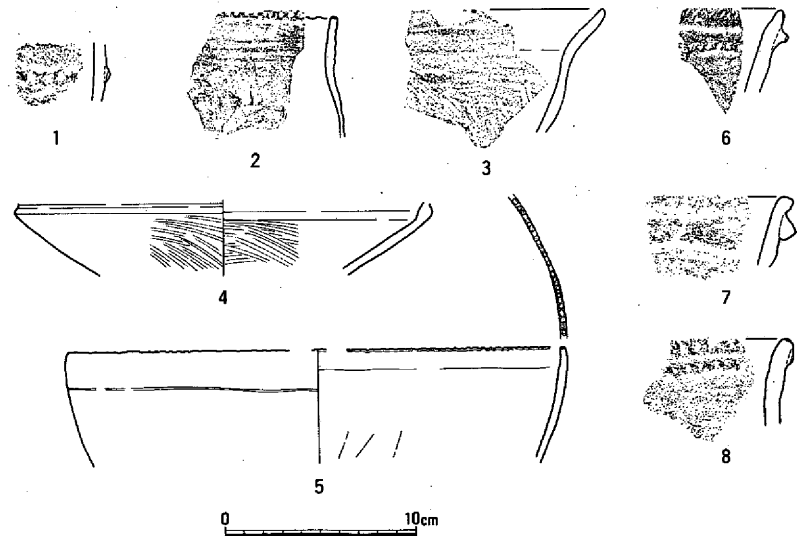
遺物は底部より20個程のドングリが出土しているのみで土器は確認できなかった。検出状況や埋土等から縄文時代の貯蔵穴と考えられる。なお、当土壇検出後周辺をかなり精査したが、同様な土壇は検出できなかった。

(山磨)

(2) 遺構に伴わない遺物 (第11図)

土壇301内からは植物遺体のみで縄文土器片の出土は認められなかったが、微高地上面の包含層や他の遺構に混じった状態と北端に設定したトレンチの斜面堆積中から縄文晩期の土器片が少量出土している。器種は大半が深鉢で1点のみ浅鉢である。

1・6・7・8は突帯文を施す深鉢で微高地の上面から出土している。突帯文上面にはいずれもキザミメを施している。1は体部突帯文片である。



第11図 遺構に伴わない遺物

深鉢2・3はトレンチからの出土で、2はやや垂直気味に立ち上がる。口縁端部上面にはキザミメと外面に二枚貝の条痕を施している。3は口縁部がく字形に外反し立ち上がる。口縁部外面は二枚貝条痕を施している。4の浅鉢は体部内外面を丁寧に磨いている。5はボール状の深鉢で、口縁端部上面にキザミメを施している。時期は突帯文を含んでいない斜面堆積出土土器が晩期中葉、微高地上面出土土器が後半の時期を示す。

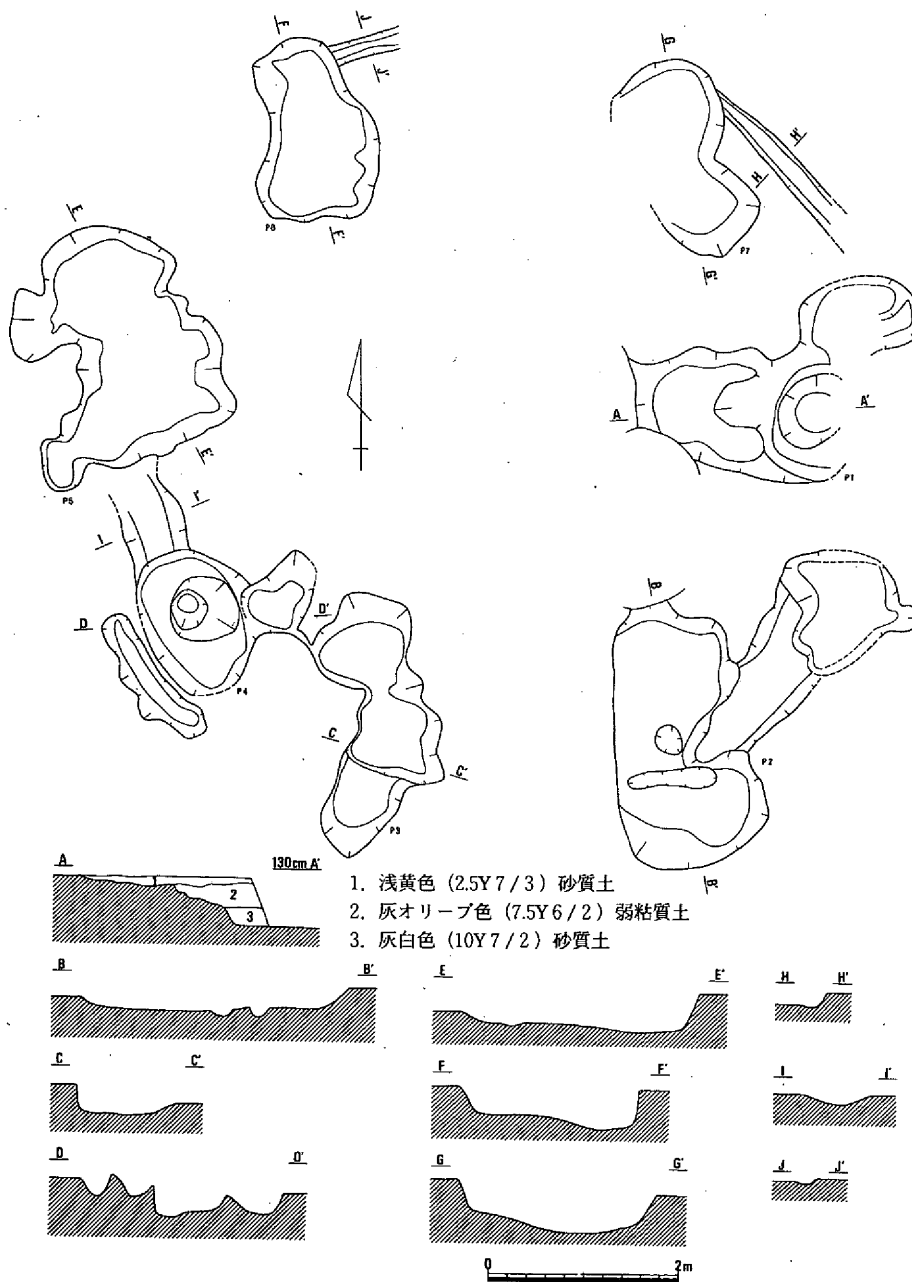
(山磨)

3 弥生時代～古墳時代の遺構と遺物

(1) 竪穴住居

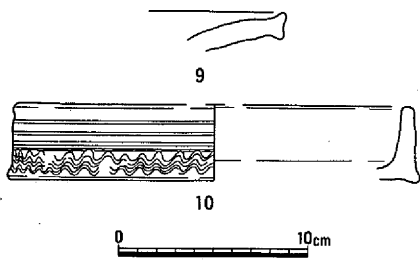
竪穴住居301 (第12・13図、図版3)

調査区のほぼ中央の東端8G・H区に検出した。竪穴住居の壁帯溝の一部と粘土採掘と考えられる土壌群の重複した遺構である。土壌群の一部は東側調査区(米田遺跡3)で検出した部分と接続する。土壌群の中央は攪乱や現水路、中世の溝、古墳時代初頭の井戸311等が重複しているために全体像は明瞭でない。

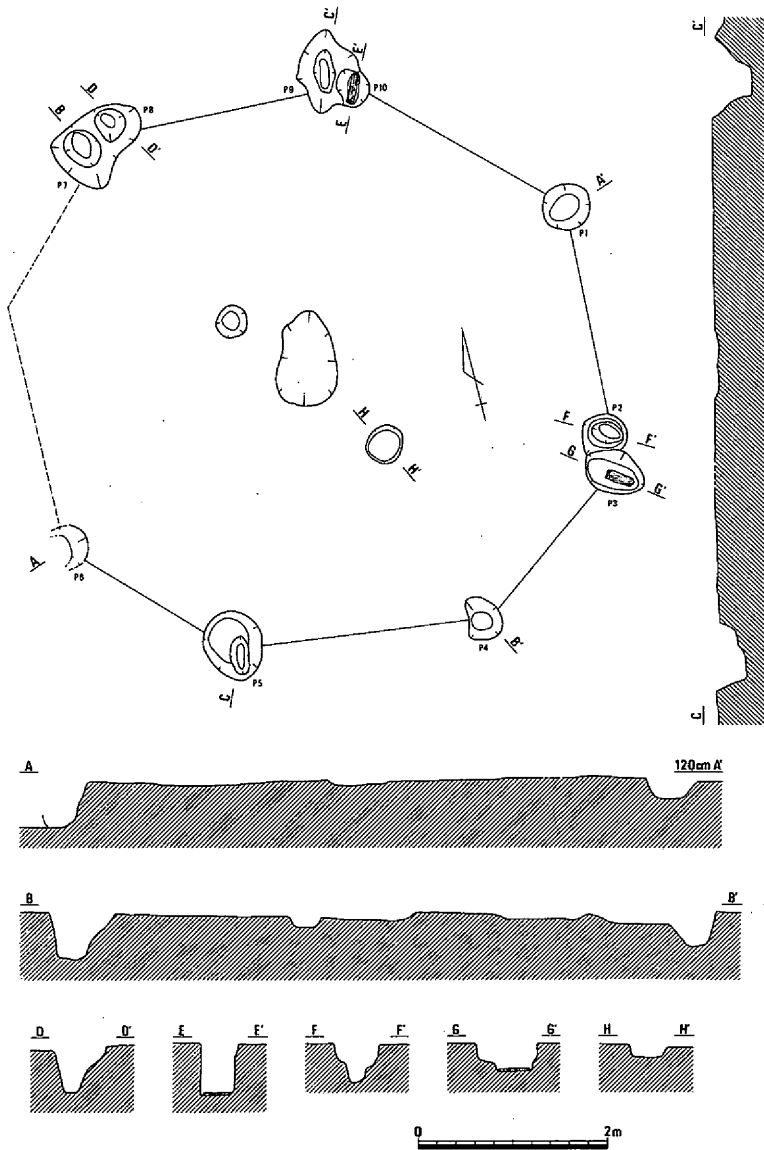


第12図 竪穴住居301

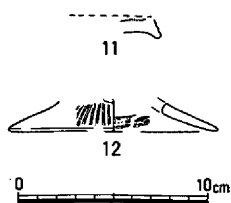
粘土採掘と考えられる土塊群は長径150~200cm 程度の掘り方が連続しており、基数は定かでないが10数基存在する。単独で検出した土塊P6では長径200cm、短径130cmの不整形な形状をなし、南西部の土塊P4では長径150cm、短径120cmの楕円形の形状を呈している。深さは30~50cm程度が多く、中には70cm以上の深い掘り方も認められる。底面は一定でなく凹凸がかなりある。埋土は黄色、灰黄色、灰白色等の混り土である。検出面より20cm程下層の海拔90cm付近が明黄褐色粘土層で形成されており、土塊の掘り方底部もいずれもこの土層を掘削しており、採掘の対象となった粘土と想定される。竪穴住居の壁帯溝と想定される小溝は、幅20cm、深さ10cmほどで、土塊群と用水路に削平されて北側2カ所に全長280cmほど検出したのみである。



第13図 竪穴住居301 出土遺物



第14図 竪穴住居302、同 出土遺物



。埋土は黄色、灰黄色、灰白色等の混り土である。検出面より20cm程下層の海拔90cm付近が明黄褐色粘土層で形成されており、土塊の掘り方底部もいずれもこの土層を掘削しており、採掘の対象となった粘土と想定される。竪穴住居の壁帯溝と想定される小溝は、幅20cm、深さ10cmほどで、土塊群と用水路に削平されて北側2カ所に全長280cmほど検出したのみである。

当初、これらの遺構の調査では、不整形な土塊群が連続していたため、単純に粘土採掘塊が集中しているものと想定して図化作業を行っていた。その後、図面の接合作業等の段階で、直径10m程の範囲に等間隔に集中して、しかも竪穴住居の壁帯溝らしい小溝が共伴することが判明した。同様の検出例が東側調査区(米田遺跡3)のH103にも認められたため、これらの土塊群を竪穴住居の柱穴の可能性も想定し、断面観察等詳細に検討したが柱痕等は認められず柱穴とは断定できなかった。H103と同様に住居の掘り方に規制されるか、もしくは住居の廃絶後を再利用して粘土採掘のために掘

削された土壌群の可能性が強い。

遺物は土壌群の埋土中から土器の細片が出土している。細片で少量のため時期の確定は困難であるが、器形特徴や遺構の重複、類似の竪穴住居等から弥生時代後期と考えられる。

竪穴住居302 (第14図、図版3)

調査区のほぼ中央の6H区に検出した竪穴住居で、西端は現水路により削平されている。残存状況は悪く掘り方や壁帯溝は無く床面も削平されており、柱穴の配列状況から住居跡と認識できる状況である。主柱穴の配列は、西端の現水路により削平された箇所を含めて合計8本と考えられる。主柱穴の規模は、若干楕円形をなし最大径90cm、平均50~70cmほどで、P2・3・7・8・9・10は重複し不整形な掘り方となっており建替えが行われている。また、南側の主柱穴P4は、古墳時代初頭の井戸309に一部削平されている。埋土は主に黄褐色の粘質土で柱痕跡は確認できなかった。主柱穴P3・10ではいずれも掘り方底部に残存長さ30cm強、幅10cm程、厚さ2cm前後の板材を礎盤として使用している。その他の柱穴の掘り方も底部が平らで、形状も長円形のものが多く礎盤が使用されていた可能性が強い。柱穴の深さは浅いもので21cm、最大60cm、40cm程度のを多く検出している。主柱穴間は220~250cmほどでほぼ等しい配列である。竪穴住居の中央には、長径100cm、短径60cm、最大深さ3cmの浅い窪みを検出している。さらにこの浅い掘り込みの両側に210cmの間隔で直径40cm、深さ10cm程の柱穴を検出した。これらは中央ピットの残存部と副柱穴と想定される。竪穴住居302の平面形は、柱穴の配列等から直径9mほどのやや楕円形に近い形状と推定される。

遺物は柱穴内より少量の弥生土器片、礎盤の板材片が若干出土している。出土土器はいずれも細片で時期の確定がしがたいが、器形の特徴や遺構の切り合いから弥生時代後期と考えられる。(山磨)

(2) 建物

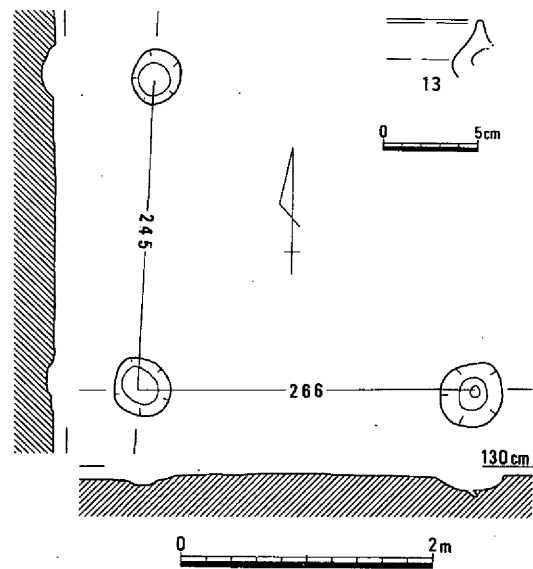
建物301 (第15図、図版3)

調査区ほぼ中央の7H区に検出した掘立柱建物である。東西1間、南北1間の構造と考えられるが、北東隅の柱穴位置が溝336と重複し削平されている。平面規模は東西266cm、南北245cm、床面積6.5㎡で、若干長い東西方向が棟方向と推定される。柱穴の規模は直径45~50cm、深さ10~15cmで同形同大である。柱穴の埋土は、いずれも明茶褐色の粘質微砂土で柱痕跡は確認できなかった。建物の棟方向は、E-3度-Sでほぼ東西方向を向いている。

遺物は少量の土器片が2本の柱穴内より出土している。図化可能であった13は甕または壺の口縁部である。時期は出土土器の器形や胎土等の特徴から弥生時代後期と考えられる。

建物302 (第16図、図版4)

調査区中央付近の8・9I区に検出した桁行1間、梁間1間の北西方向を棟にする掘立柱建物である。建物の西側を南北に現代の水路が走り、北西隅の柱穴が削平されている。このためL字状に3本の柱穴



第15図 建物301、同 出土遺物

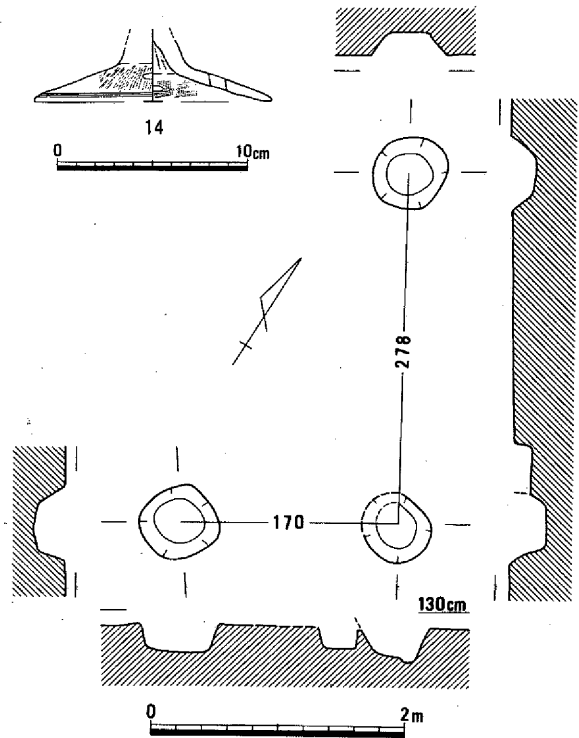
を検出したのみである。また、建物南東辺に接し古墳時代初頭の井戸304が位置する。建物規模は桁行278cm、梁間170cm、床面積4.7㎡である。柱穴はいずれもほぼ円形で直径50～60cmのやや大形の掘り方をなし、深さ20～25cmを測る。掘り方断面は、逆台形を呈し南東隅の柱穴は柱痕部が若干窪んでいる。建物棟方向はN-30度-Wである。遺物は各柱穴より土器の小片が出土している。器種は凶化可能であった高杯の脚部(14)以外に、甕の口縁部片等が見られる。

時期は出土土器の器形特徴や埋土等から弥生時代後期と考えられる。

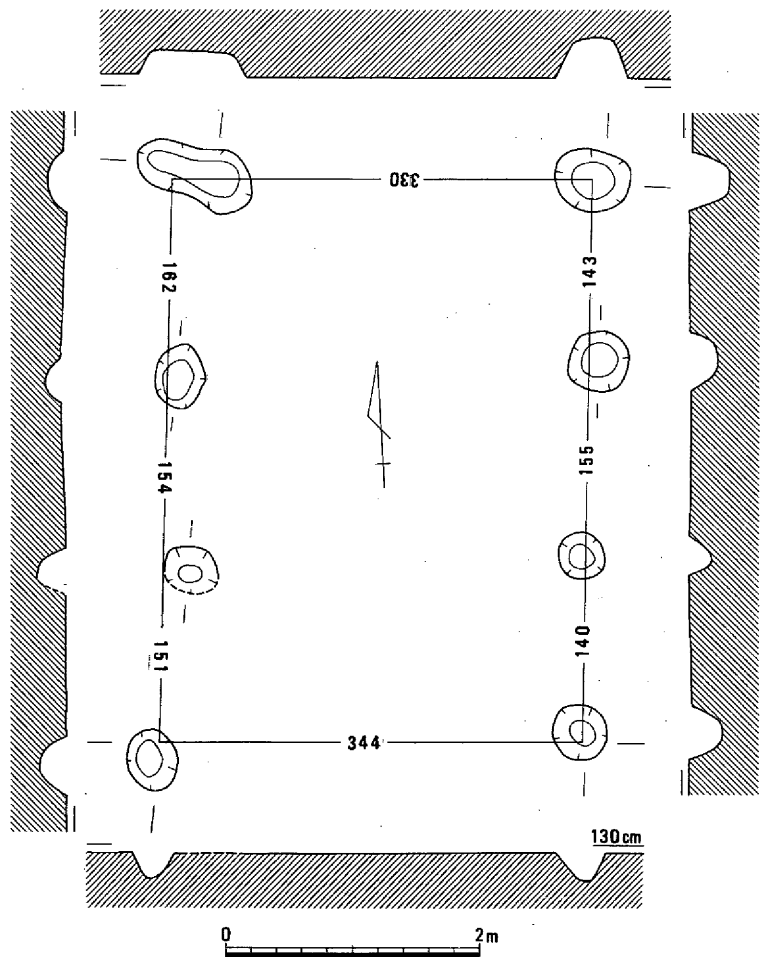
建物303 (第17・18図、図版2)

調査区中央付近の8Iと8J区の境に検出した桁行3間、梁間1間の南北棟の掘立柱建物である。建物の南端に中世の溝322が横切っている。建物規模は桁行467cm、梁間344cm、床面積16.1㎡である。桁行の柱間は東西柱列とも約140～160cmの間に収まる。柱穴はほぼ円形で直径40～60cmである。深さは15～30cmで、底部レベルで10cm程の差が見られる。柱穴は西側柱列の北端が重複し、南端で近接して同程度の柱穴が位置することから建物の建替えの可能性がある。柱痕跡は確認していない。建物の棟方向は、N-8度-Eでほぼ南北方向である。

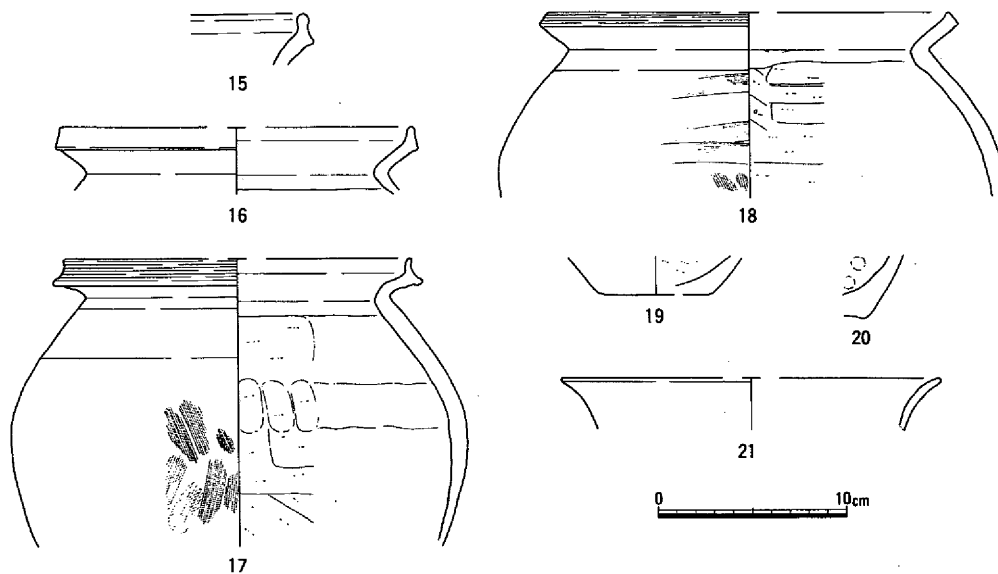
遺物は柱穴内より甕・高杯の破片が出土している。甕(17)は口縁端部が上方に肥厚し、端部外面に数条の沈線を施している。体部内面の上部は圧痕、下端はヘラ削りを施している。底部片(19・20)はいずれも平底



第16図 建物302、同 出土遺物



第17図 建物303



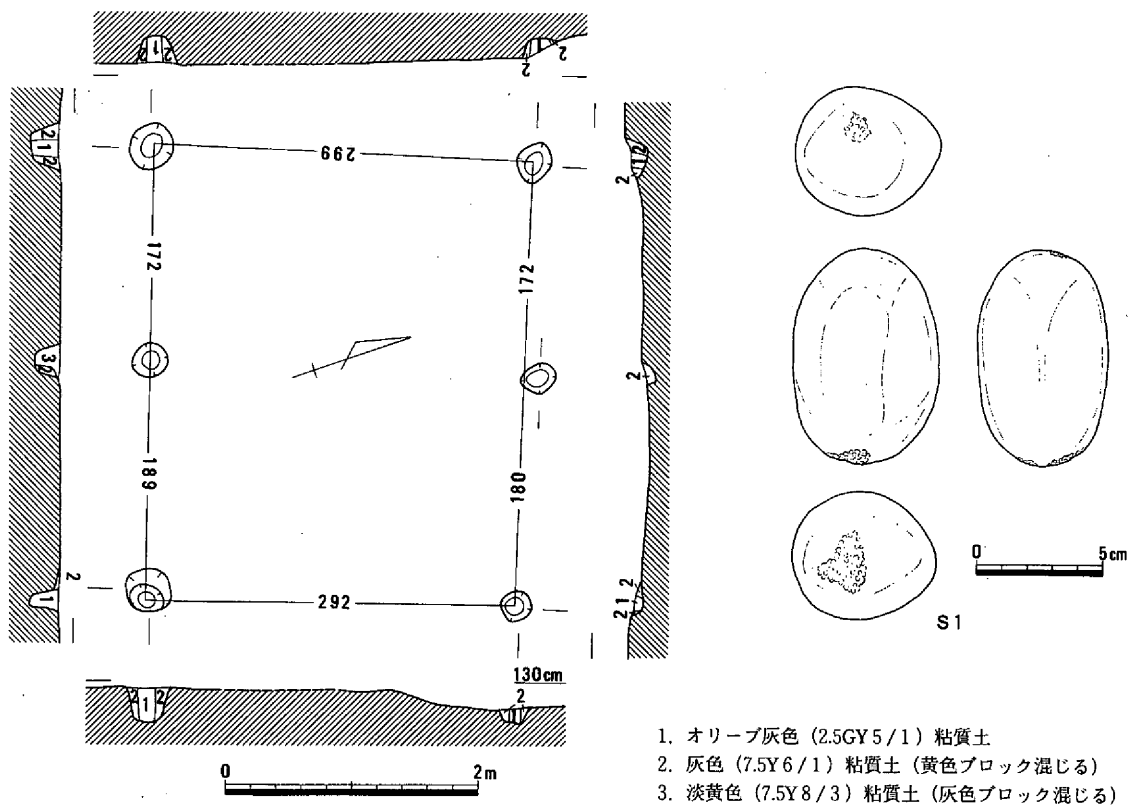
第18図 建物303 出土遺物

である。

建物の時期は、出土土器の器形特徴から弥生時代後期の百・後・IVと考えられる。

建物304 (第19図、図版4)

調査区南端付近の11Q区に検出した桁行2間、梁間1間の北西に棟方向の掘立柱建物である。建物の中央を溝311が横切っている。建物規模は桁行361cm、梁間299cm、床面積10.8㎡である。桁行の柱間の



第19図 建物304、同 出土遺物

1. オリーブ灰色 (2.5GY 5/1) 粘質土
2. 灰色 (7.5Y 6/1) 粘質土 (黄色ブロック混じる)
3. 淡黄色 (7.5Y 8/3) 粘質土 (灰色ブロック混じる)

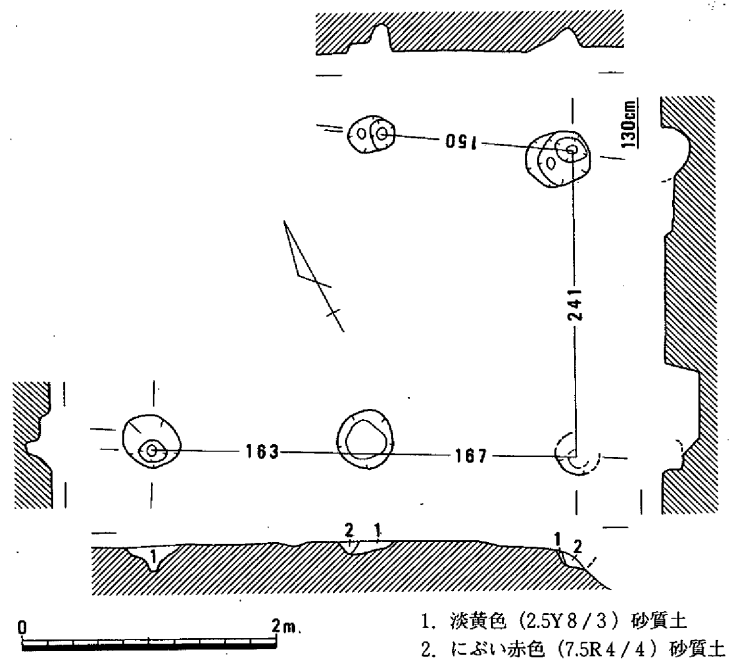
は170~190cmの間に収まる。柱穴はほぼ円形で直径25~40cmである。深さは、北側がやや削平され残存深さ10cm程度の柱穴である。柱穴の底部レベルは10cmの差に収まる。柱穴の断面観察では四隅柱穴のいずれにも直径10cm程のオリブ灰色粘質土をなす柱痕跡が確認された。埋土は主に灰色粘質土である。建物の棟方向はN-70度-Wを測り、建物305・306と棟方向が近い。

遺物は柱穴内より土器の細片と石器が出土している。図化可能であった敲石(S1)は完形品で両端部に使用痕跡が残っている。建物の時期は、柱穴の埋土や出土土器の器形特徴等から弥生時代から古墳時代初頭と考えられる。

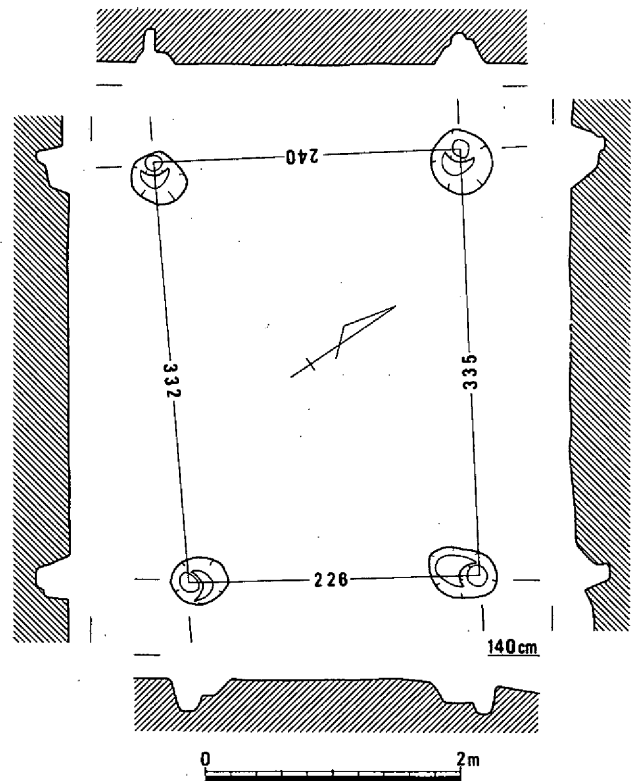
建物305 (第20図、図版4)

調査区中央付近の9I区に検出した桁行2間、梁間1間の北西方向を棟にする掘立柱建物である。建物の東側半分は東側調査区(米田遺跡3)に位置しているために、北西と南東隅の柱穴は調査区境の側溝の掘り下げにより削平され、南東隅の柱穴がわずかに残存していたのみである。建物規模は桁行330cm、梁間242cm、床面積8.0㎡である。残存柱穴はほぼ円形を呈し直径35~45cmである。桁行は、150~167cmで柱穴の大きさ程度の間隔差である。埋土は淡黄色とにぶい赤色の砂質土である。柱穴の深さは、南西側桁行の中央がやや浅く深さ10cm程で、他は同程度である。建物の棟方向はN-62度-Wを測る。この棟方向の角度と類似する建物は桁行2間、梁間1間の同規模の建物306が該当する。

出土遺物はいずれの柱穴からも皆無で時期の確定に乏しいが、埋土や建物の規模等から弥生時代から古墳時代初頭の時期と考えられる。



第20図 建物305



第21図 建物306

建物306 (第21図、図版2)

調査区の中央付近の8J区に検出した桁行1間、梁間1間の建物305と同様の北西方向を棟にする掘立柱建物である。建物規模は桁行335cm、梁間240cm、床面積8.0㎡である。柱穴は直径45~55cm、深さ25cmとほぼ同形同大で柱痕部がやや深く2段の掘り方をなしている。建物の棟方向はN-60度-Wを測り、前述の建物305の棟方向と同じである。

出土遺物はいずれの柱穴からも皆無で時期の確定に乏しいが、埋土や建物の規模等から弥生時代から古墳時代初頭と考えられる。

建物307 (第22図、図版2)

調査区中央付近の7H・J区に検出した桁行1間、梁間2間の掘立柱建物である。建物の中央を東西方向に近世の溝322が通り西側桁行の中央柱穴が削平されている。規模は桁行全長529cm、

梁間310cm、床面積16.4㎡である。柱穴は一部重複しているが円形から若干楕円形を呈し長径60~65cmである。深さは10~25cmと差がある。北東隅の柱穴は、柱痕部が深くめり込んでおり最大深さ35cmを測る。柱穴の埋土はいずれも黄橙色ブロック混じりの褐色粘質土で、柱痕跡は確認できていない。建物の棟方向は、N-7度-Wで他の同時期の検出建物といずれも異なる。

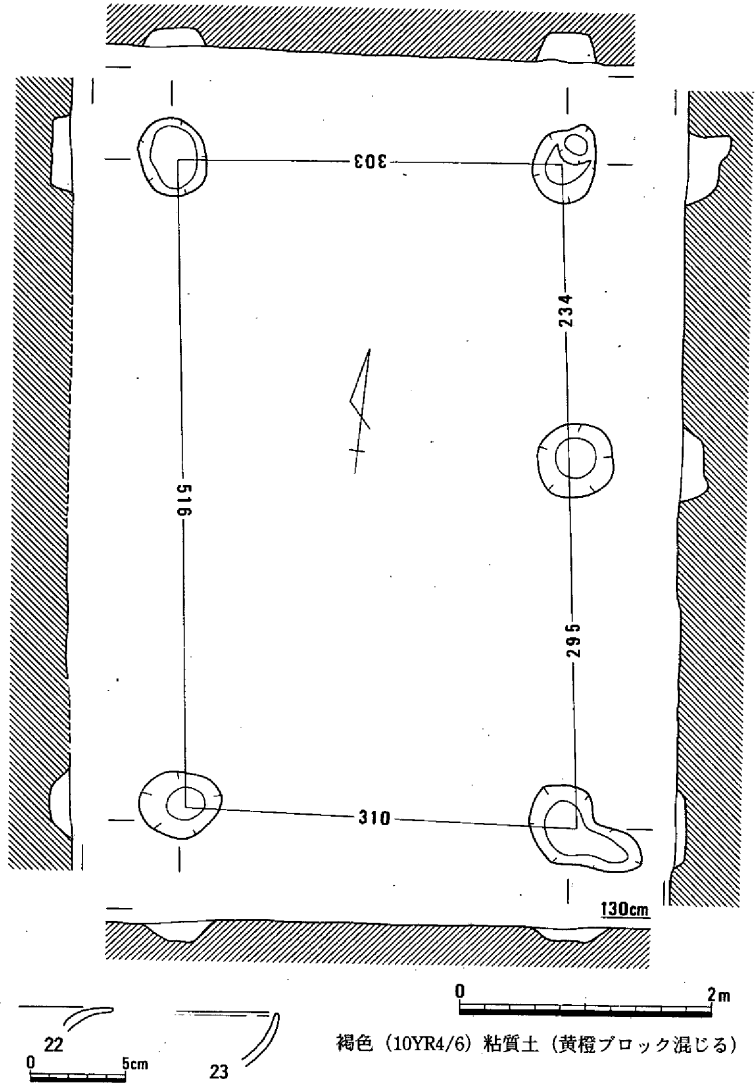
遺物は3本の柱穴から細片が少量出土している。時期は出土土器の器形特徴や埋土等から弥生時代後期頃と考えられる。

(山磨)

(3) 井戸

井戸301 (第23図)

7D区南端部で検出した井戸である。近世以降の溝が南端部をかすめて東西に流走している。掘り方の平面形は、やや東西に長い楕円形の形態を呈し、深さは検出面より約110cmを測る。底面の海拔高は-30cmである。断面形は、上端部では逆「ハ」字型で緩やかに立ち上がっているが、途中から垂直に落ち込んでいる。底面はほぼ平坦である。埋土は、全体を通じて灰黄色のやや粘質性を帯びた砂



第22図 建物307、同 出土遺物

質土であるが、下層にゆくに従って土層のグライ化が顕著である。

遺物は、下層を中心に出土しており、その中でも弥生土器の甕片24~26を3点図示している。26の底部からは、黒斑が認められた。その他に上層の1層からは、ガラス製の管玉片が出土している。最大長8mm、最大幅5.0mm、最大厚1.5mmを測る。通し穴の口径は2.0mm、重さは0.37gで、明緑色の色調を呈す。

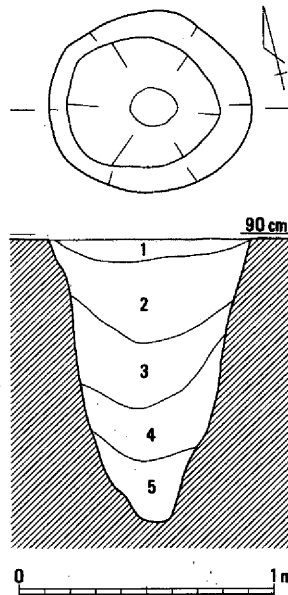
遺構の時期は、出土している弥生土器の口縁部がわずかに上部に拡張していることから百・中・Ⅱの古相の状況を示している。

(根木)

井戸302 (第24図)

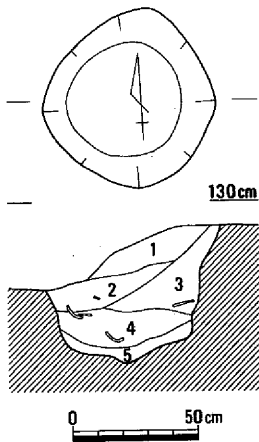
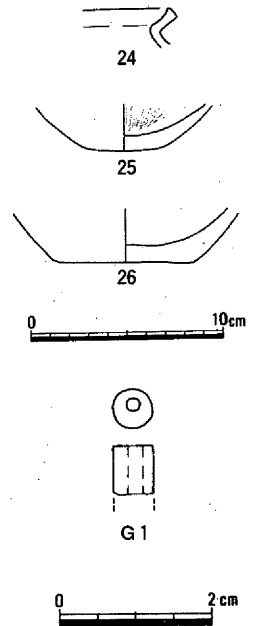
調査区中央付近の7G区に検出した。溝306と重複しているため西半の上面が削平されている。平面形は円形を呈し、規模は直径65~70cm、最大深さ53cmを測る。断面は逆台形状を呈し、若干丸みのある底面である。埋土は5層に分層でき、第4層の黄灰色弱粘質土からまともな遺物が出土している。

出土土器には壺・甕・高杯・鉢等がある。甕は口縁端部を内傾気味に上部に肥厚させ、外面に数条の凹線を施している。高杯は口縁端部が大きく外反している。鉢は口縁端部を上方に引き出している。

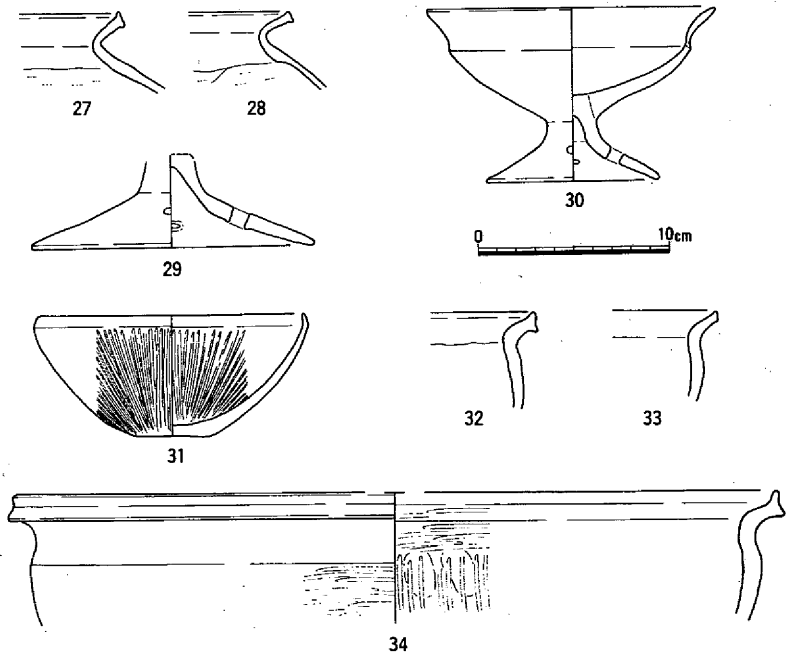


- 1. 灰黄色 (2.5Y7/2) 砂質土
- 2. 暗灰黄色 (2.5Y5/2) 砂質土
- 3. 黄灰色 (2.5Y6/1) 砂質土
- 4. 灰オリーブ色 (5Y5/2) 砂質土
- 5. 灰色 (5Y5/1) 砂質土

第23図 井戸301、同 出土遺物



- 1. 浅黄褐色 (10YR8/4) 砂質土
- 2. 明褐色 (7.5YR7/2) 砂質土
- 3. 灰黄褐色 (10YR5/2) 砂質土
- 4. 黄灰色 (2.5Y5/1) 弱粘質土
- 5. 灰黄色 (2.5Y6/2) 砂質土



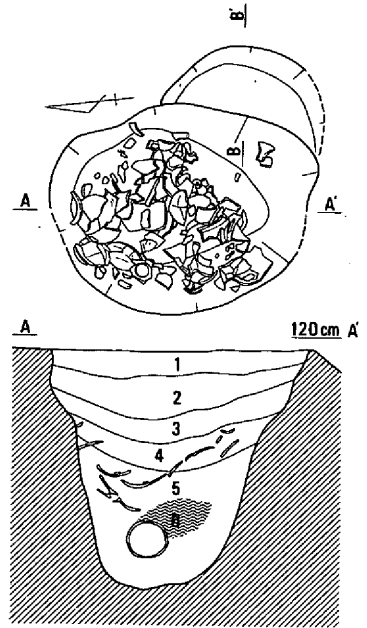
第24図 井戸302、同 出土遺物

第3章 発掘調査の概要

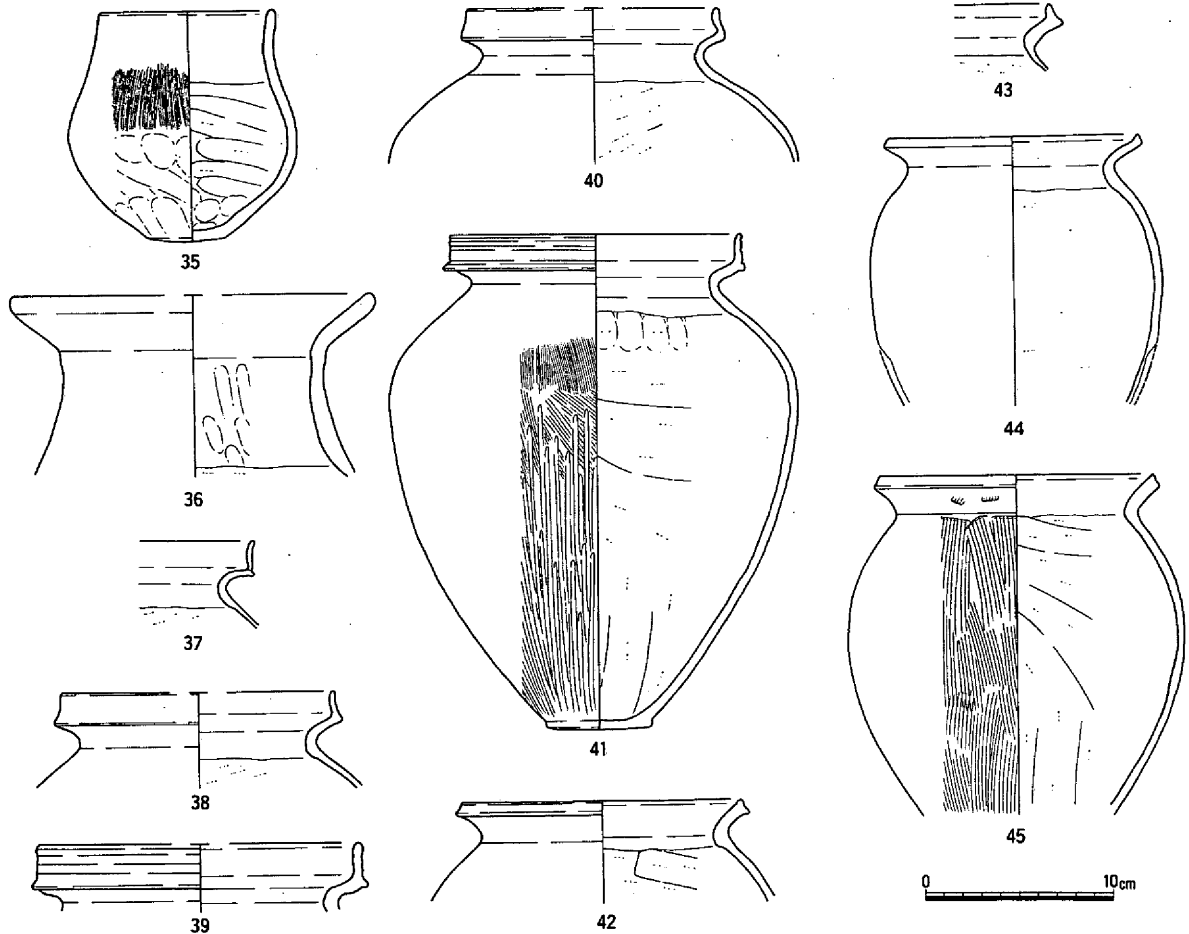
なお、当遺構は井戸の項目で取り上げたが、底面が湧水層の砂層面まで達してなく井戸以外の可能性が強い。時期は出土土器の器形特徴や遺構の切り合い等から弥生時代後期の百・後・Ⅲと考えられる。(山磨)

井戸303 (第25・26・27図、図版10)

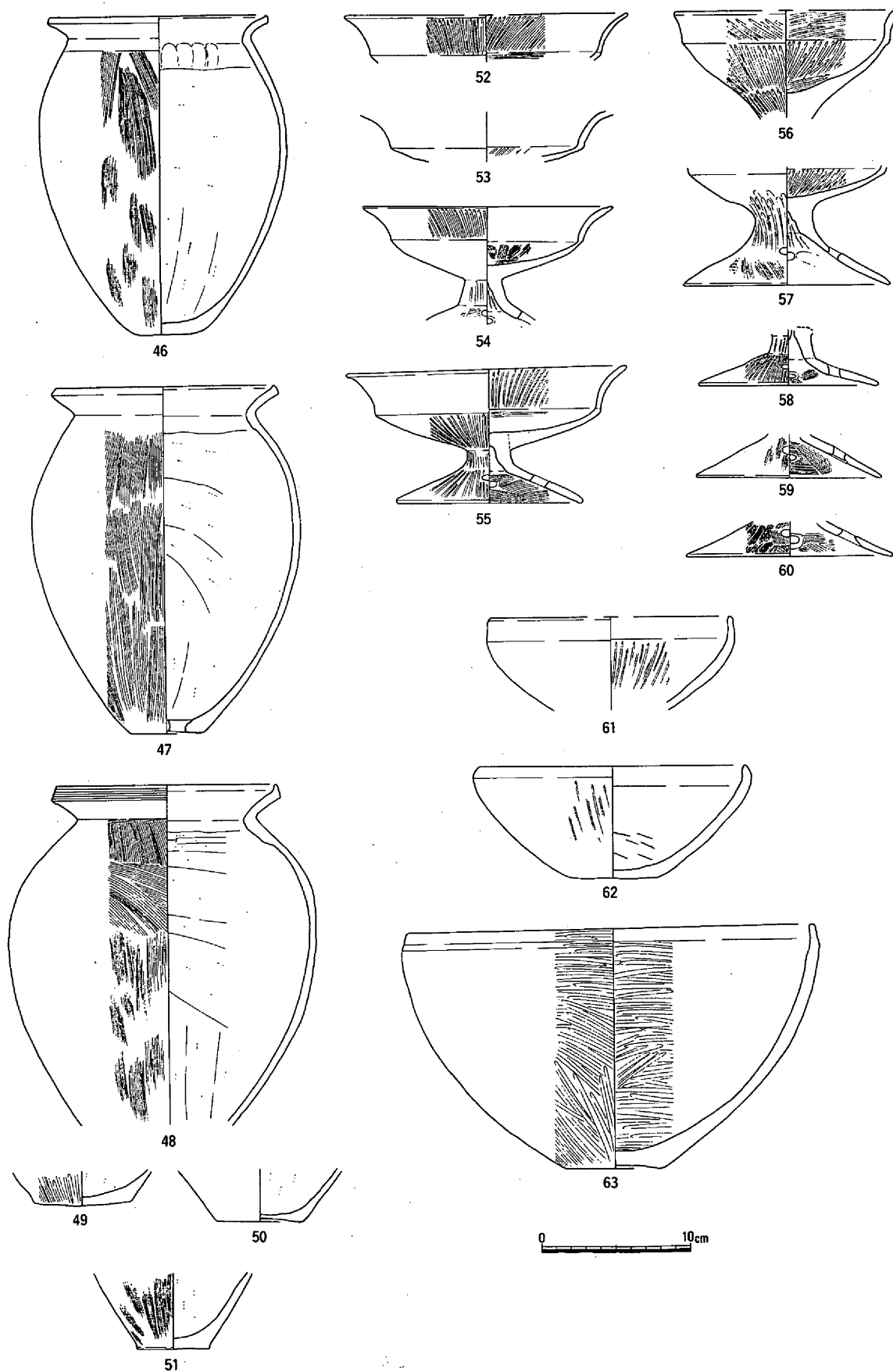
7G区の北端部から検出された井戸である。南北に流走する溝302に埋没後、肩口を切られている。当初、2基の土壇が切り合っているものとして調査を行っていた。しかし、出土した土器片をはずしながら掘り下げを行ったところ、その下層面にも土器片が多数出土しており、断面形も深くなっていたので、井戸として調査を続行した。平面形は、南東側に不整形に広がった掘り方をもつ楕円形の形状を呈す。深さは、検出面からおよそ95cmを測る。底面の海拔高は約20cmである。



- | | |
|-----------------------|-----------------------|
| 1. 浅黄色 (5Y7/3) 砂質土 | 4. 黒褐色 (10YR3/2) 粘質土 |
| 2. 灰黄褐色 (10YR6/2) 砂質土 | 5. オリーブ黒色 (5Y2/2) 粘質土 |
| 3. 褐灰色 (10YR5/1) 砂質土 | 6. 貝層 (二枚貝) |



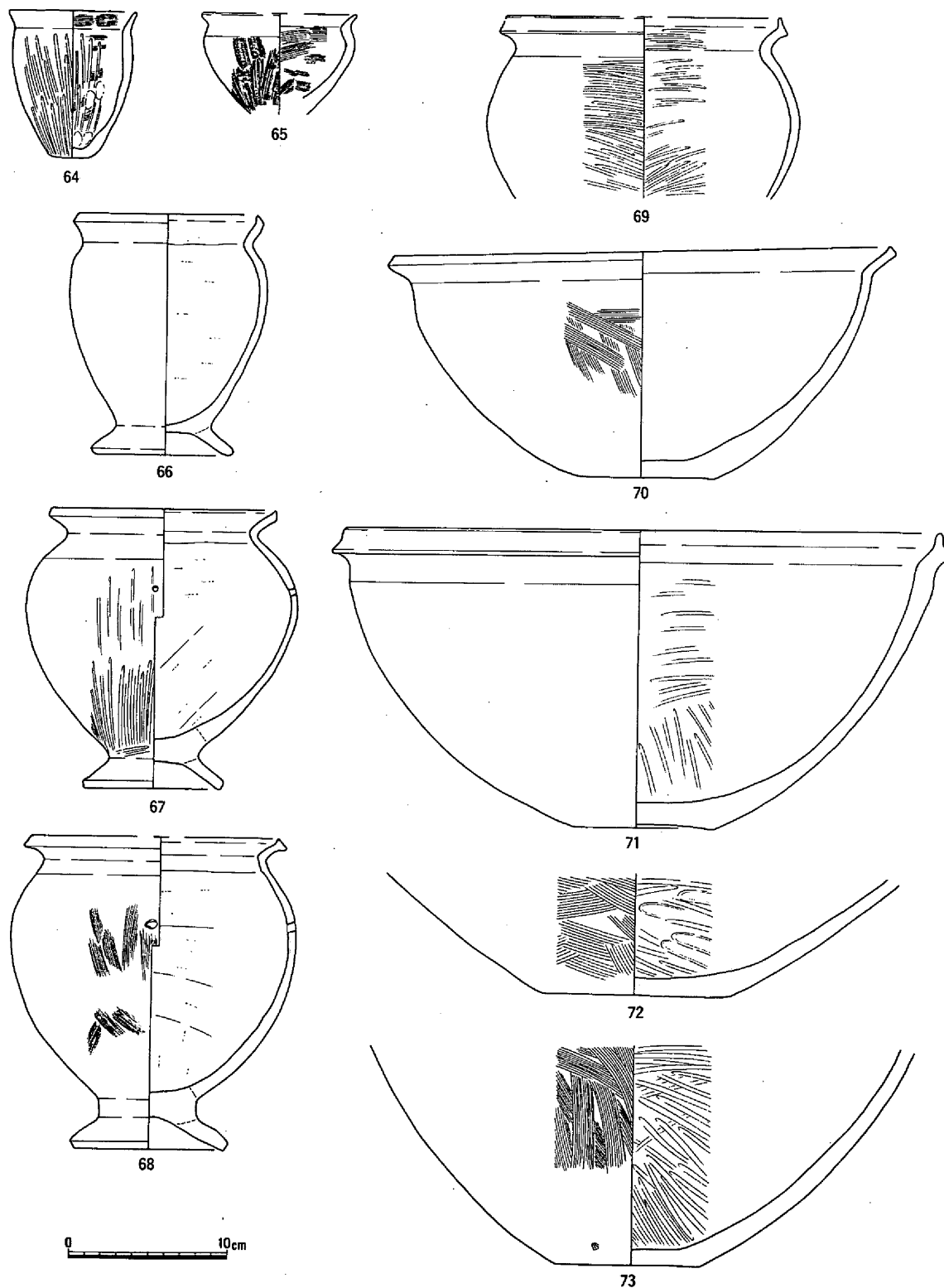
第25図 井戸303、同 出土遺物〈1〉



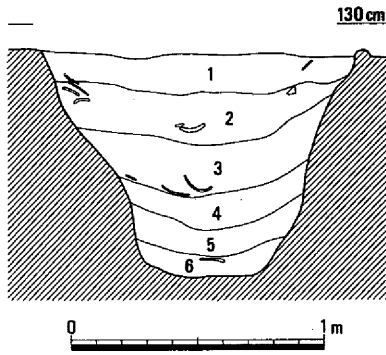
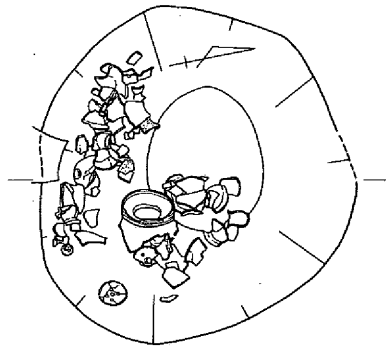
第26図 井戸303 出土遺物〈2〉

第3章 発掘調査の概要

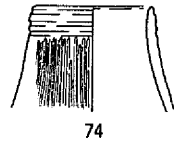
断面形は上層で緩やかに「S」字状を呈しており、下層に下がるにしたがって垂直に掘り下げられている。底面はほぼ平坦で、その形状は南北に広がった長楕円形を呈す。埋土は3層までの上層では、総じて黄灰褐色の砂質土の中から若干の木質を含む弥生時代後期末の土器片が多数出土している。4



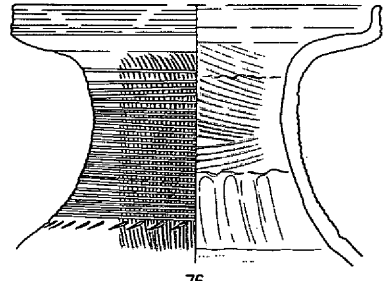
第27図 井戸303 出土遺物〈3〉



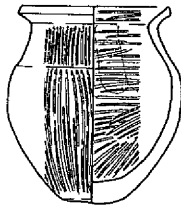
- 1. 灰黄色 (2.5Y7/2) 砂質土
- 2. 暗灰黄色 (2.5Y5/2) 砂質土
- 3. 黒褐色 (2.5Y3/1) 粘質土 (炭・土器含む)
- 4. 灰オリーブ色 (7.5Y4/2) 砂質土
- 5. オリーブ灰色 (10Y4/2) 砂質土
- 6. オリーブ黒色 (10Y3/1) 弱粘質土



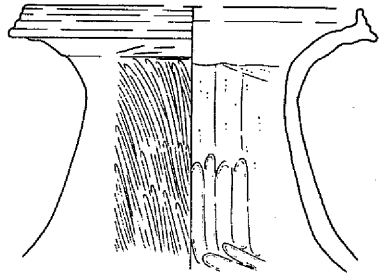
74



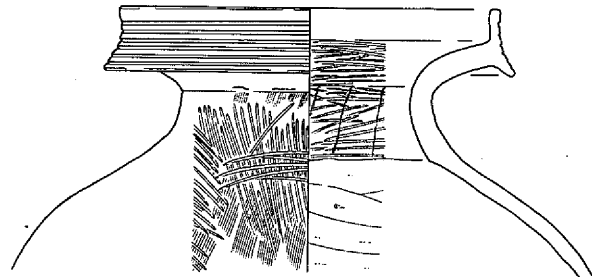
76



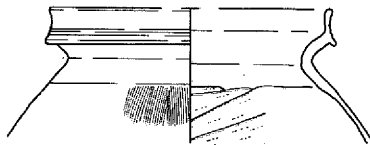
75



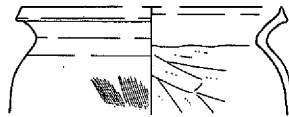
77



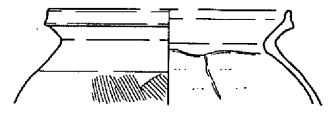
78



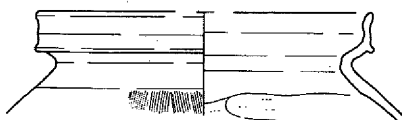
79



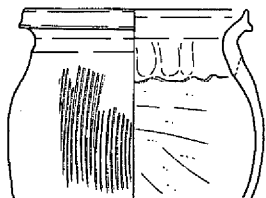
82



85



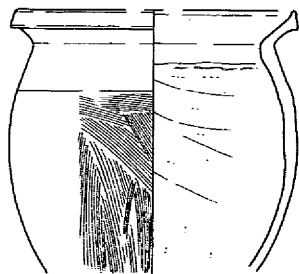
80



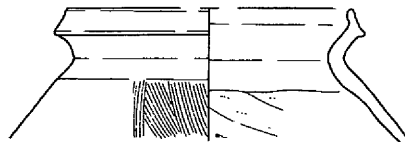
83



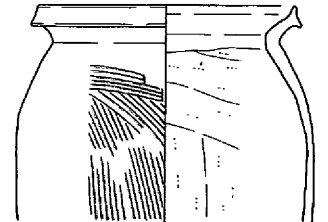
86



81



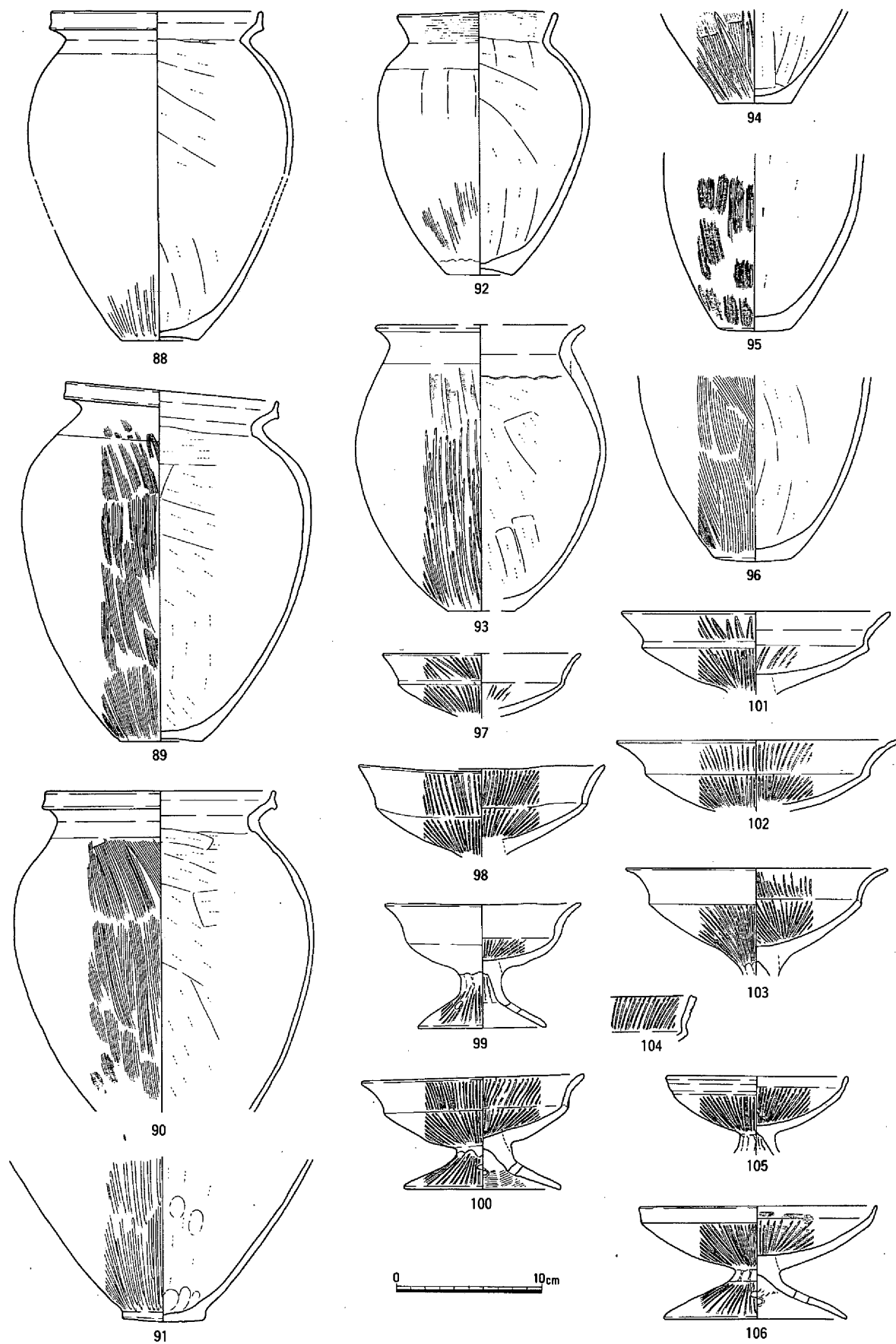
84



87



第28図 井戸304、同 出土遺物〈1〉



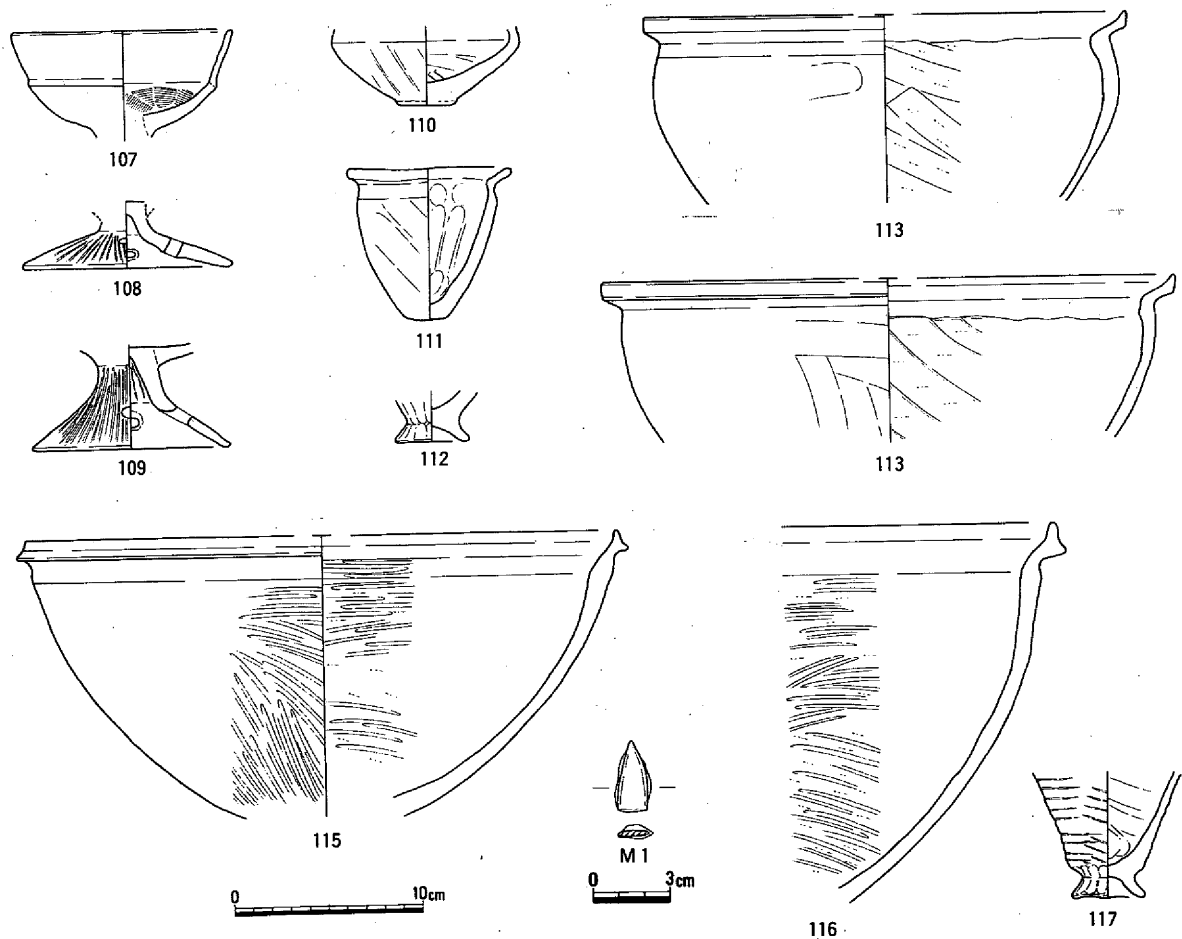
第29図 井戸304 出土遺物〈2〉

層以下の下層では、黒褐色の粘質土の中から土器片と共に、また最下層の6層の中央部分には二枚貝の貝殻を含む貝層がおよそ15cm 堆積しており、断面にかかっていた完形の甕の内部にも貝殻が入っている状況が確認された。遺物は、前述の上層から壺や甕、高杯など多くの土器片が出土している。器種を概観してみると、甕が圧倒的に多く、続いて高杯、鉢などで構成されている。41の甕は口縁部に凹線文を有し、最大径のあたりに煤が付着していた。また47の甕は底部に穿穴があり、41同様に最大径のあたりに煤が付着していた。

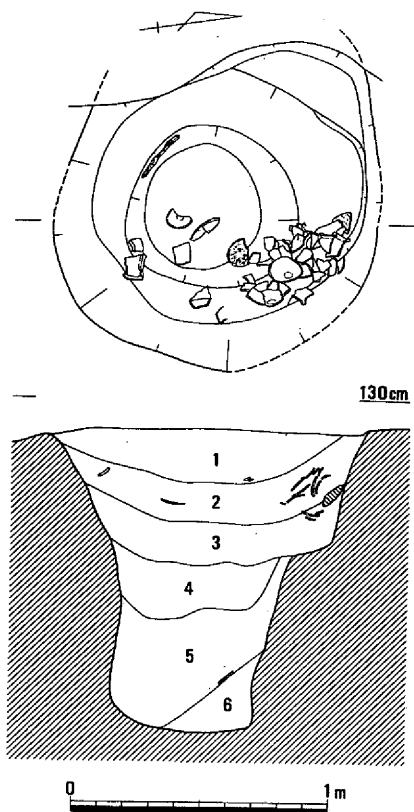
遺構の時期は、出土した土器から百・後・Ⅳと考えられるが、48の甕や52から60の高杯などに古墳時代初頭の様相が看取される。

井戸304 (第28・29・30図、図版7)

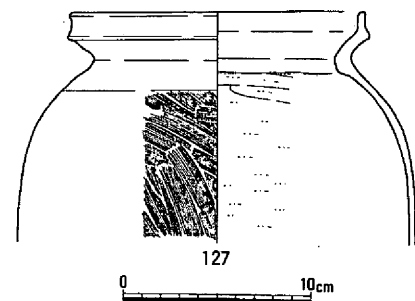
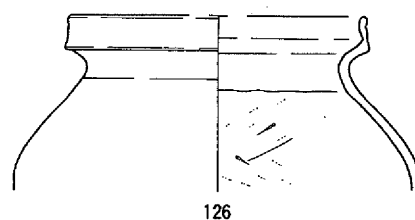
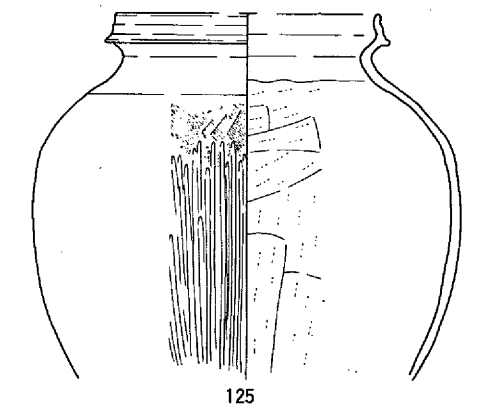
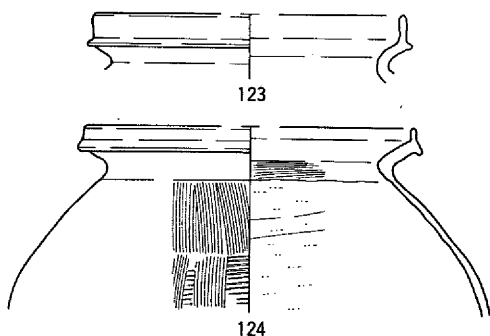
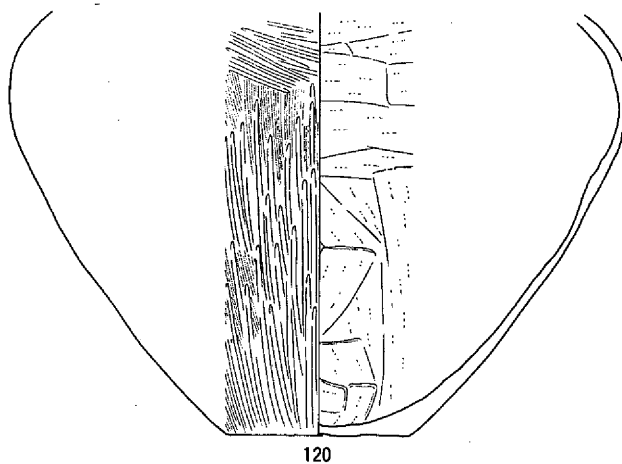
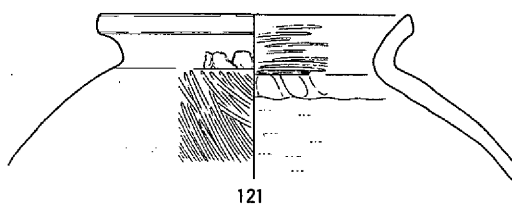
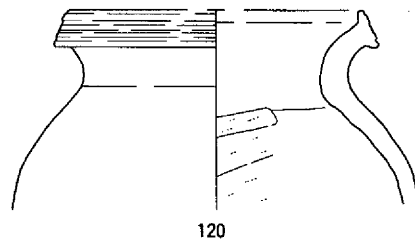
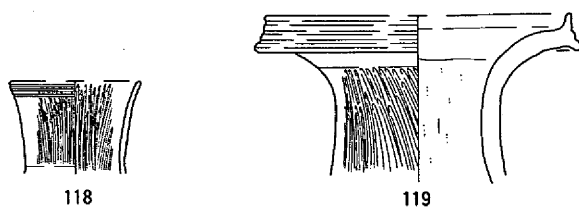
8Ⅰ区と9Ⅰ区の調査区境から検出された井戸である。南北にのびる現代の暗渠に遺構上面を切られている。掘り方の平面形は、ほぼ円形で、断面形は、やや南側に開いた「U」字状である。断面形態は、緩やかに開く逆「ハ」字状で、底面はほぼ平坦である。深さは検出面からおよそ90cm で、底面の海拔高は30cm である。埋土は1・2層の上層と、3層の中層、4～6層の下層に分けられる。上層は総じて灰黄色の砂質土で、埋土中の遺物が最も少なかった。中層は黒褐色の砂質土で、遺物の出土が顕著であり、土器片とともに多くの炭が認められた。下層はオリーブ色の砂質土で、底面に近づくほど土質は粘性を増す。



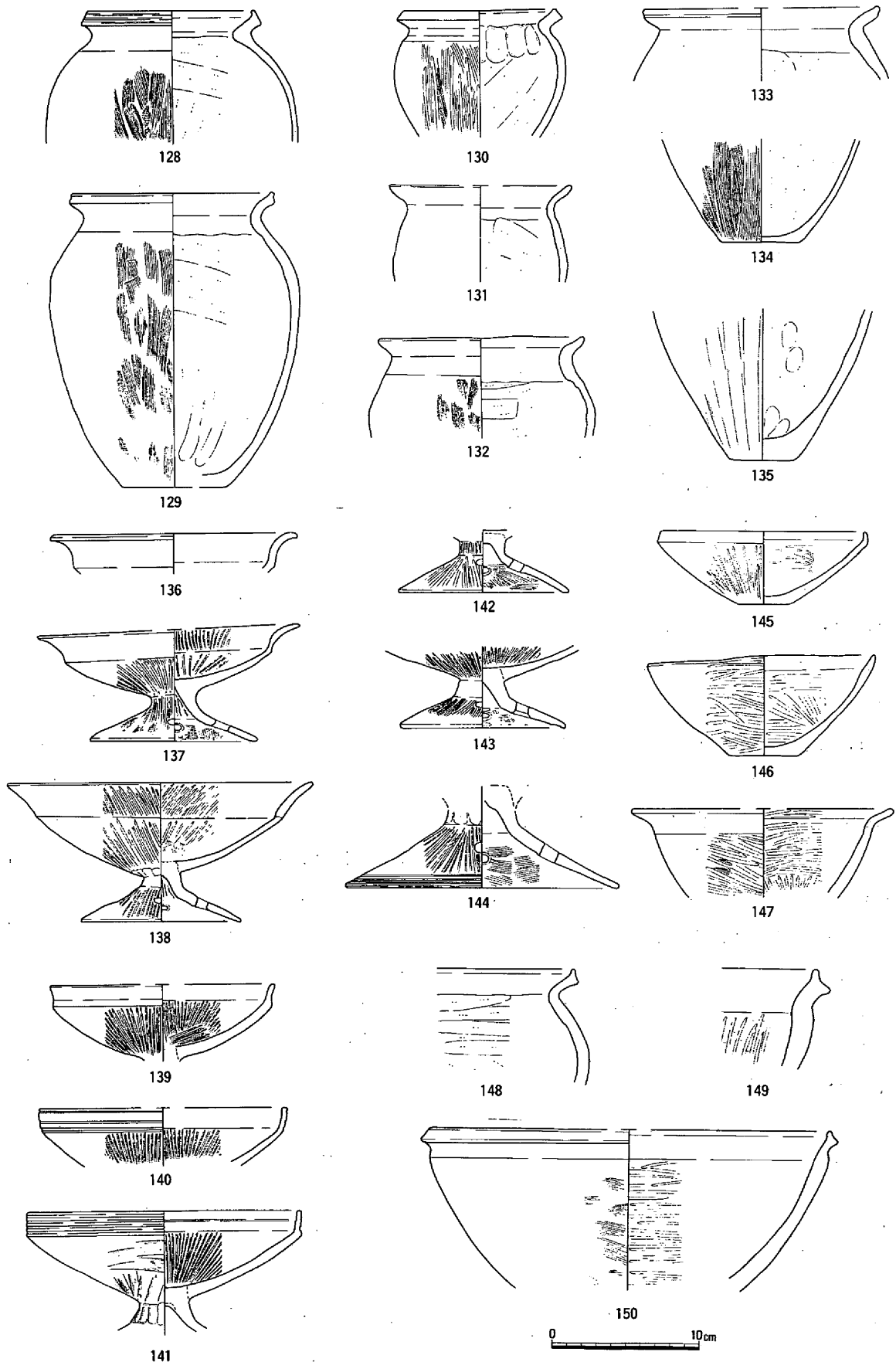
第30図 井戸304 出土遺物〈3〉



1. 灰黄色 (2.5Y7/2) 砂質土
2. 暗灰黄色 (2.5Y5/2) 砂質土
3. 灰オリーブ色 (5Y5/2) 砂質土
(淡黄白色のブロック含む)
4. オリーブ黒色 (5Y2/2) 砂質土
5. 暗オリーブ灰色 (2.5GY3/1) 弱粘質土
6. オリーブ灰色 (2.5GY5/1) 粘質土

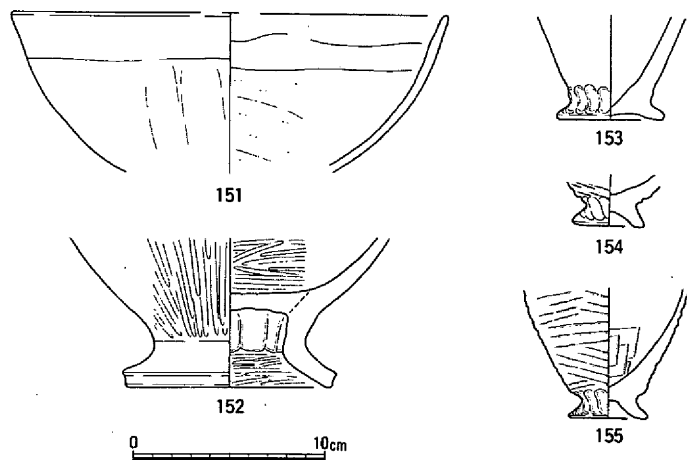


第31図 井戸305、同 出土遺物<1>



第32図 井戸305 出土遺物〈2〉

遺物は、検出時から多くの土器片が認められたので、徐々に掘り下げたところ、中層から南側の壁面に貼り付くように弥生時代後期後半の土器片が整理箱で1箱程度出土した。各器種が出土しているが、主に甕と高杯がもっとも多い。76の長頸壺は、頸部に縦方向のハケメの後に沈線が、また沈線の下に刺突文が巡っている。78の広口壺は、頸部から肩部にかけてハケメの後に不定方向のヘラケズリが認められる。その他の遺物に、出土層位は不明ではあるが、鉄鏃(M



第33図 井戸305 出土遺物〈3〉

1)が1点出土している。法量は最大長28.0mm、最大幅12.0mm、最大厚2.0mm、重さ1.76gを測る。また製塩土器の脚部112・117が2点出土している。

遺構の時期は、出土している土器が中層では弥生時代後期末のもので、上層は古墳時代初頭の様相を呈するものが混在することから百・後・ⅢからⅣにかけて埋没したものと考えられる。

井戸305 (第31・32・33図、図版7)

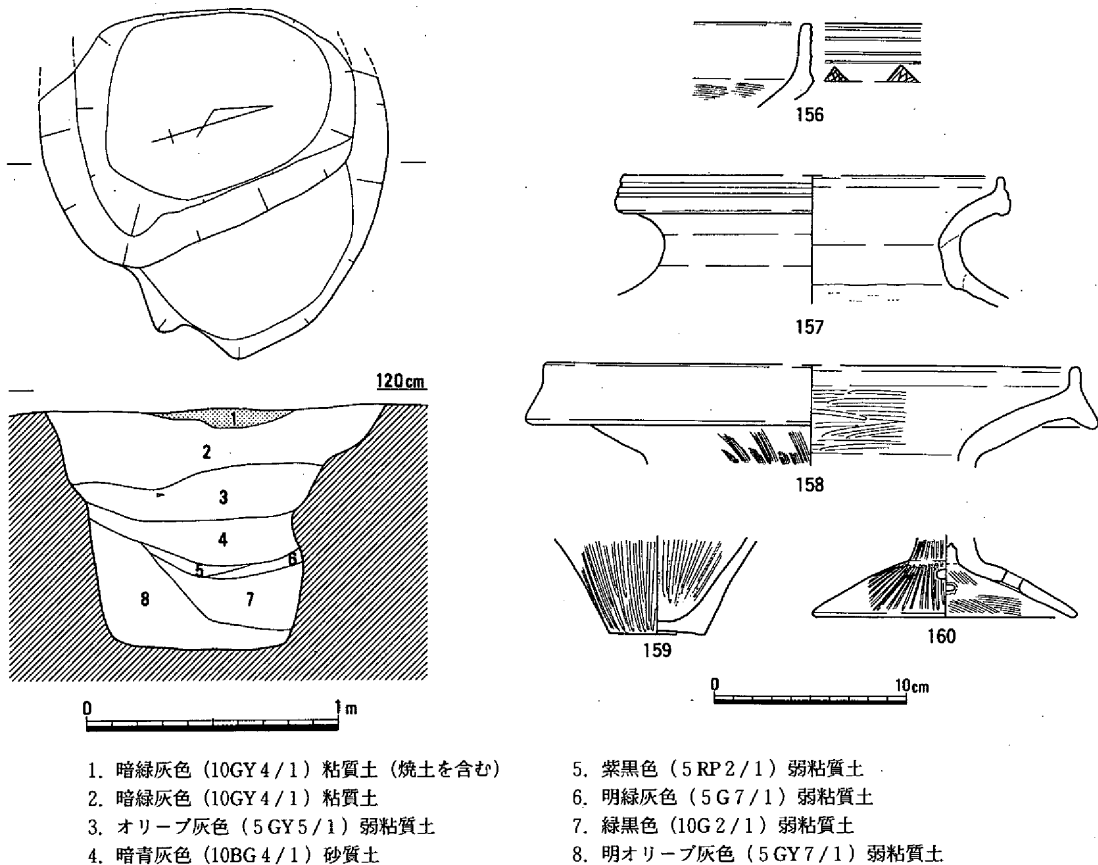
8J区北端で、前述の井戸304の南約4mに位置する井戸である。肩口が現代の用水路跡によって切られている。掘り方の平面形は、東西方向にやや長い楕円形状を呈するものと推定される。深さは、検出面から約125cmを測り、底面の海拔高は0m付近である。また断面形は、上部が逆「ハ」字状に広がり、下部がほぼ垂直に下がっている。埋土は、1・2層では灰黄色の砂質土で、3層以下はオリーブ灰色もしくは黒色の砂質土で、底面に近づくにつれて粘性を増す。

遺物は、上部の3層までに出土したものが大半である。各器種が出土しているが、中でも甕と高杯の数が比率の大半を占める。118は小型壺の口縁部である。内外面に縦方向のヘラミガキが施され、口縁端部には3条の沈線が巡る。123から129の甕は、口縁部を上部に拡張しているが端部に凹線は認められず、肩部は「く」字状に大きく外反する。152は台付鉢の底部である。低く安定した上げ底を丁寧にユビナデなどで調整が施されている。その他に製塩土器153~155が3点出土している。

遺構の時期は、出土している土器から百・後・Ⅲと考えられる。

井戸306 (第34図、図版7)

6I区の北東部に位置する井戸である。西側の肩口が近現代の用水路跡によって切られている。掘り方の平面形は、遺構検出面では東側に浅い段状の窪みが認められて東西方向にやや広い不整円状ではあるが、下部の本体部分はやや南北に広がった楕円形状を呈している。深さは、検出面からおおよそ100cmを測り、底面の海拔高は約15cmである。断面形は、上部が逆「ハ」字状に広がり、下部がほぼ垂直に下がっている。埋土は、遺構の検出時に中央部分から焼土塊が出土したことから炉等の可能性が考えられた。しかし、断面観察によって暗緑灰色土層の上面窪みに堆積している状況が看取され、炉の痕跡は認められなかった。また下層の堆積土ほどグライ化が顕著であり、その土質は粘性を増してくる。



第34図 井戸306、同 出土遺物

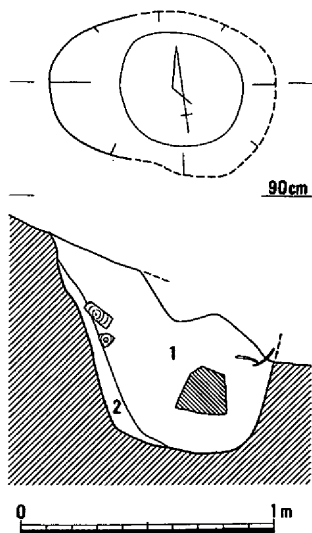
遺物は、さほど多くは出土していない。156は壺の口縁部である。垂直に上部への拡張は著しいが、下方へのそれはほとんど認められない。外面には凹線が4条とヘラガキによる鋸歯文が巡っている。

158の長頸壺の口縁部は、外面には凹線は確認できない。160の高杯は、内外面共にヘラミガキが施されており、脚柱部の最短化が著しい。

遺構の時期は、出土している土器の器形特徴から百・後・ⅢからⅣと考えられる。

井戸307 (第35・36図)

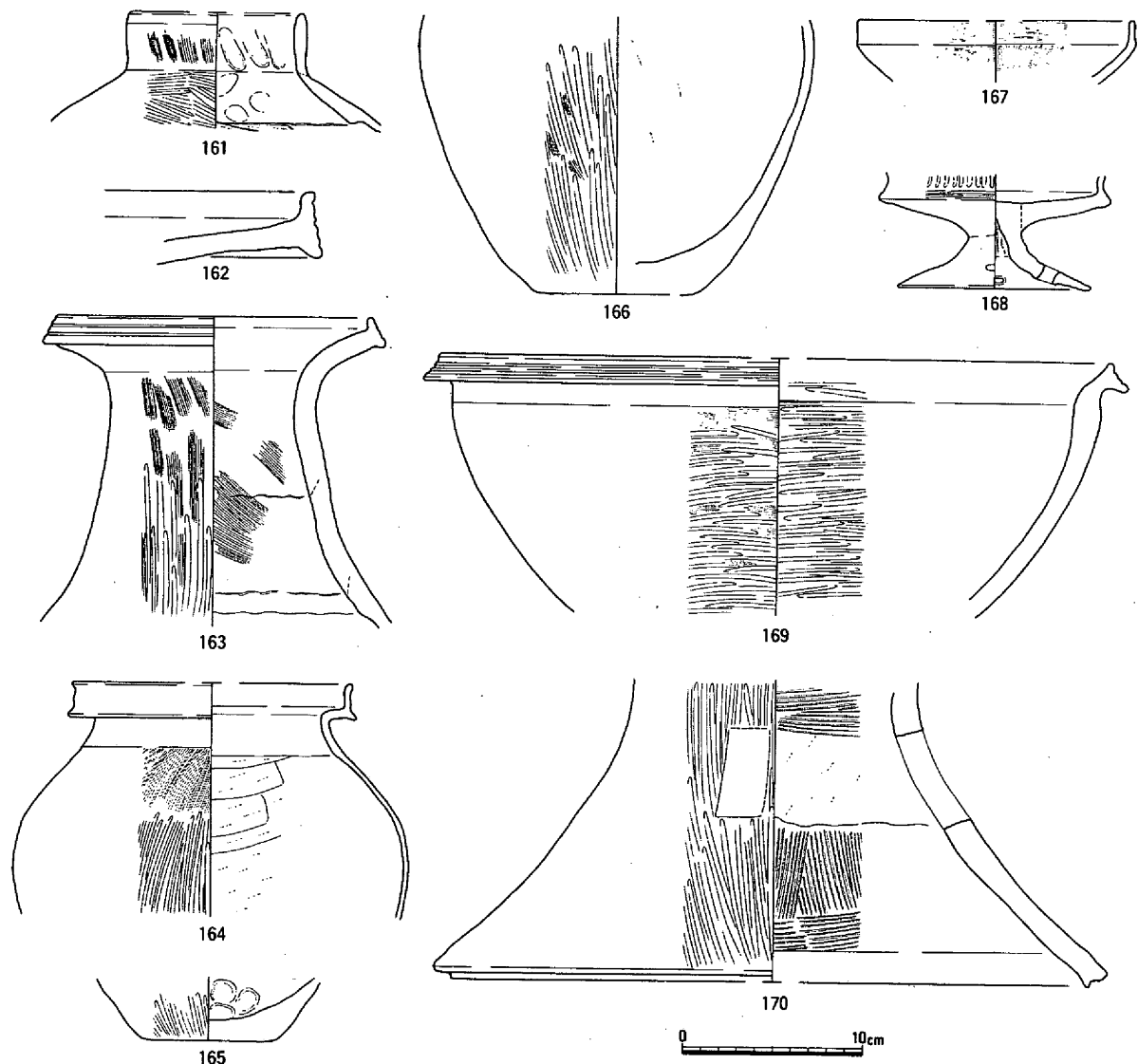
5H区の南端部分に位置する井戸である。検出時に遺構の東側上面は、河道によって削られていた。掘り方の平面形は、東西に広がった楕円形状を呈していた。深さは、最上面の検出面からおよそ90cmを測り、底面の海拔高は約-10cmである。断面形は、逆「ハ」字状に上部に向かって広がる。埋土は、全体的に粘土質でグライ化が著しく、1層の灰色土層には角礫や木質と共に黄灰色や灰白色のブロック状の粘土塊が混入した状況が看取された。



1. 灰色 (N4/1) 粘質土 (黄灰色・灰白色の土混じる)
2. 暗青灰色 (10BG3/1) 粘質土 (粘質強い)

第35図 井戸307

遺物の出土量としては、さほど多くはない。161は小型の直口壺である。口縁部はほぼ直立し、上部への引き上げは大きくない。体部内面には指頭圧痕が顕著に認められる。164の甕は、口縁部が



第36図 井戸307 出土遺物

鋭く「く」字状に開き、端部外面の凹線は認められない。169は大型の鉢である。体部の器壁は全体的に厚く、内外面共に横方向のヘラミガキが施されている。口縁部は下方に拡張が見られ、端部には凹線が3条巡っている。170は器台の脚部である。外面には縦方向のヘラケズリが、内面にはハケメが施されている。また筒部と裾部の境に方形の透かし孔が認められる。

遺構の時期は、出土した土器から百・後・Ⅲと考えられる。

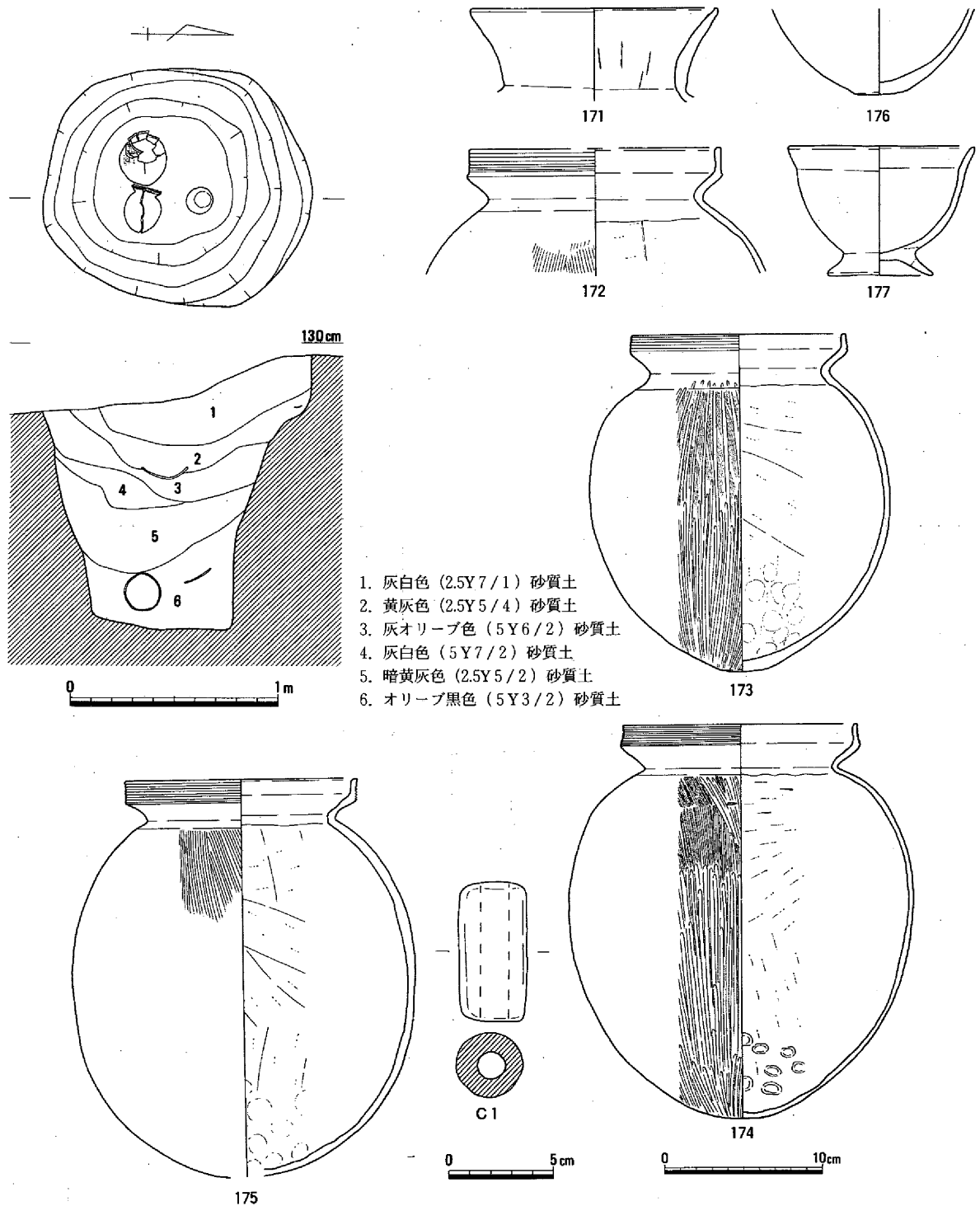
井戸308 (第37図、図版5)

8E区で検出された井戸である。前述の井戸301の南東約10mに位置する。掘り方の平面形は、ほぼ円形に近い。深さは検出面からおおよそ130cmを測り、底面の海拔高は約-10cmである。断面形は、ほぼ平坦な底面から逆「ハ」字状に上部に向かって緩やかに広がる。埋土は、比較的粘性を有さないが、下層になるにつれてグライ化が顕著になっている。

遺物は、1点の完形品を含め、少量の土器片などが出土している。173は底面に張り付いた状態で出土した完形の甕である。外面は、肩部から胴部にかけてはハケメの後に荒い縦方向のヘラミガキが肩

部を越えてなされており、胴部から底部にかけても縦方向のヘラミガキが施されている。内面はヘラケズリで、底部付近には指頭圧痕が明瞭に看取される。口縁部外面には櫛描きの沈線が6条認められる。その他の遺物として土錘D1が上部から1点出土している。最大長67.0mm、最大幅33.0mm、最大厚31.0mm、孔径13.0mm、重量78.75gを測る。

遺構の時期は、173の土器の体部が全体的に丸みを持っているものの、底部は球形ではなく面を有していることから百・古・Iと考えられる。



第37図 井戸308、同 出土遺物

井戸309 (第38図)

6H区で検出された井戸である。住居302の南側柱穴に肩部を一部切られている。掘り方の平面形は、東西に広い楕円形状を呈し、底面は不整円状で平坦な面である。深さは、検出面からおよそ110cmを測り、底面の海拔高は0m付近である。断面形は、上部を除いてほぼ垂直に下がる。埋土は、比較的粘性を有さないが、下層になるにつれてグライ化が顕著になっている。

遺物は少量出土しているが、その中で2点のみ図示した。178は甕の口縁部である。端部には櫛描きの沈線が8条認められる。179は浅鉢である。口縁部が緩やかに内反している。外面は縦方向のヘラケズリの後に底部と肩部付近を横方向のヘラケズリが施されている。

遺構の時期は、出土した土器片の器種や器形特徴等から百・古・Iと考えられる。

井戸310 (第39・40図、図版8)

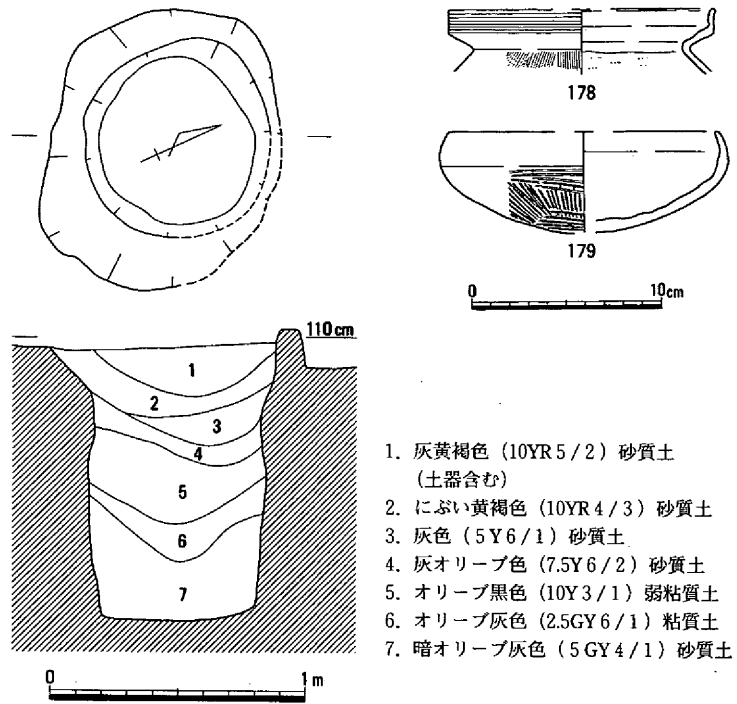
6I区で検出された井戸で、前述した井戸306の北東約3mの地点に位置する。検出時から土器片が多数出土していたので、土壌と認識して掘り下げを行った。しかし、遺物の出土は上面だけに留まり、遺構の底面が比較的深くなったこともあり、井戸として調査を行った。掘り方の平面形は、やや東西に広がった楕円形状を呈す。深さは、検出面からおよそ75cmを測り、底面の海拔高は約35cmである。断面は、ほぼ平坦な底面から逆「ハ」字状に上部に向かって緩やかに広がる。埋土は、全体的に粘性が強く、上下2層に分かれる。上層の黒褐色土層からは遺物の大半が出土しており、下層を含め全体的に土層のグライ化が著しい。

遺物は、上層からほぼ一括して土器片が出土しており、その内容は一部弥生土器が混在しているものの、総じて土師器の甕が多く出土している。

遺構の時期は、弥生時代後期最終末の土器と古墳時代初頭の土器が混在していることから、上流の沢田遺跡等にみられる洪水砂によって埋没した頃の百・後・IVから百・古・Iと考えられる。

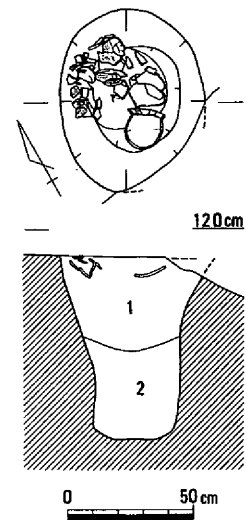
井戸311 (第41・42図、図版5.6)

8H区と8I区の境で検出された井戸である。当該遺構の残存状況は



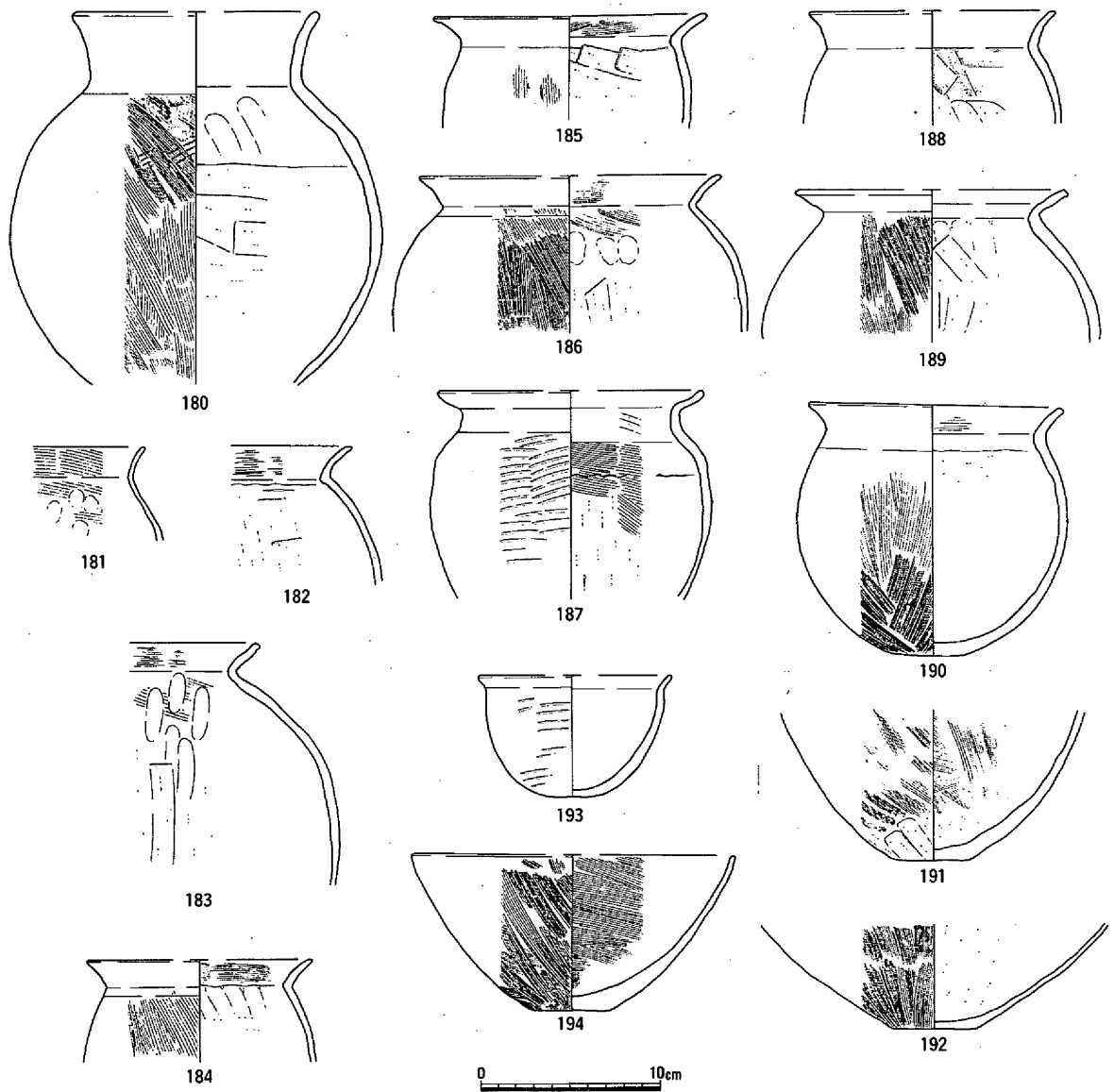
1. 灰黄褐色 (10YR 5/2) 砂質土 (土器含む)
2. にぶい黄褐色 (10YR 4/3) 砂質土
3. 灰色 (5Y 6/1) 砂質土
4. 灰オリーブ色 (7.5Y 6/2) 砂質土
5. オリーブ黒色 (10Y 3/1) 弱粘質土
6. オリーブ灰色 (2.5GY 6/1) 粘質土
7. 暗オリーブ灰色 (5GY 4/1) 砂質土

第38図 井戸309、同 出土遺物



1. 黒褐色 (10YR 3/2) 粘質土
2. 暗緑灰色 (10GY 3/1) 粘質土

第39図 井戸310



第40図 井戸310 出土遺物

きわめて悪く、西側を現代用水と攪乱によって、また北側と南側の肩口を古墳時代の粘土採掘穴によって切られていた。掘り方の平面形は、南北に角張った長方形を呈している。深さは、検出面からおよそ110cmを測り、底面の海拔高は0m付近である。断面形は、平坦な底面から僅かに段を形成しながら、逆「ハ」字状に上部に向かって緩やかに広がる。埋土は全体的に緑灰色土で、グライ化が顕著である。

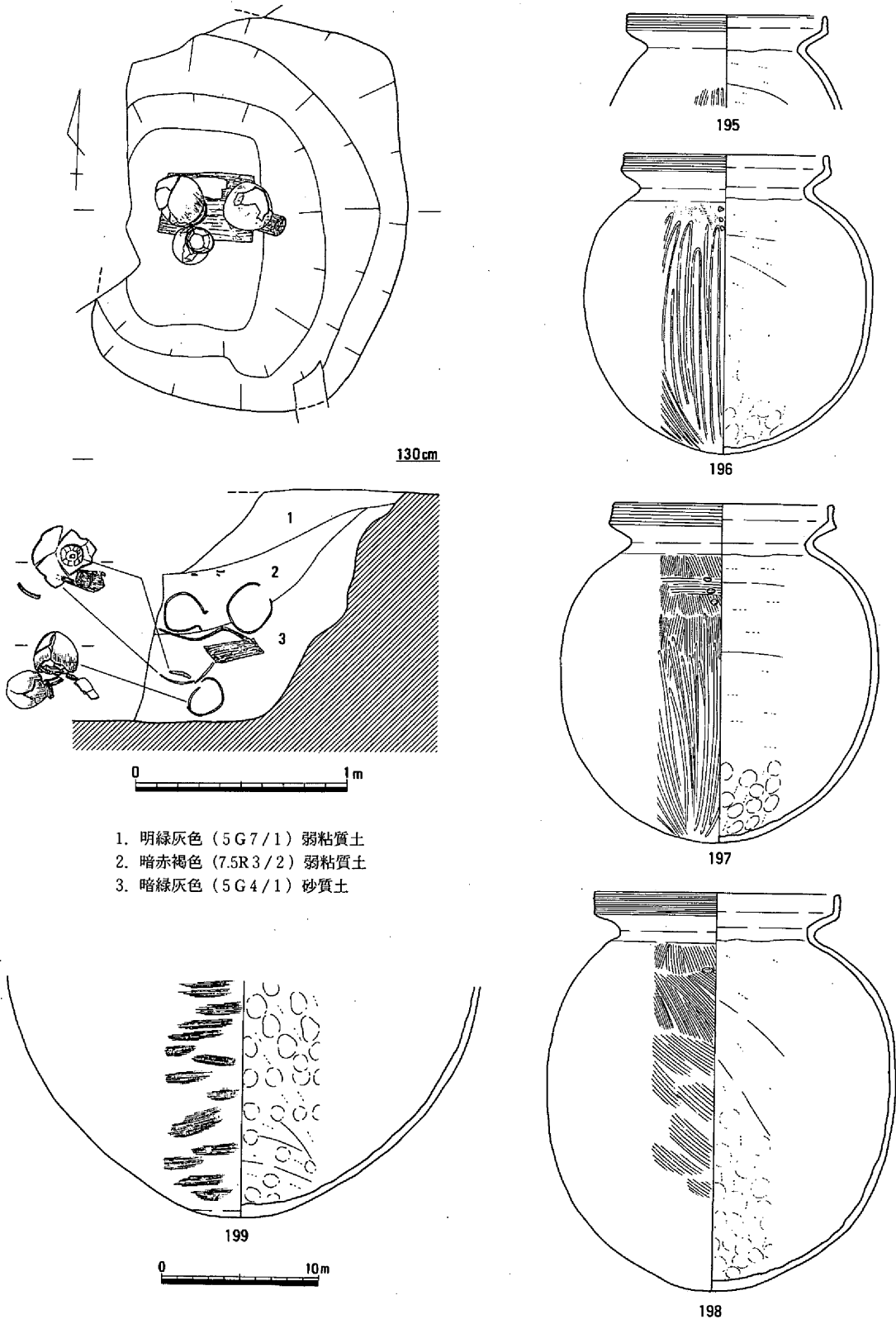
遺物は、土器と木器が1層以外からその大半が出土している。掘り下げに伴って2層の底面からは甕の完形品196・197・198が3点、中央に落ち込むように出土していた。さらに196・197・198の下面に接するようにクスノキ製の盤状大型製品W4とコナラ製の加工木材W5が認められた。用途については不明である。木製品の中で特筆されるものとして、3層中段の甕の底部199の内部から、最大長117mm、最大幅116mm、最大厚18mmを測る大型の紡錘車W3が1点出土している。形状としては、ほぼ円形状を呈している。材質はヒノキで、両面とも丁寧に調整が施されており、中央には一辺23mmの正

第3章 発掘調査の概要

方形の孔が空けられていた。上面の端部は、回転効率を良くするために工具によって厚みが調整されていた。また付近からは木錘W1も出土しており、古墳時代初頭における紡績技術の一端が垣間見られる。

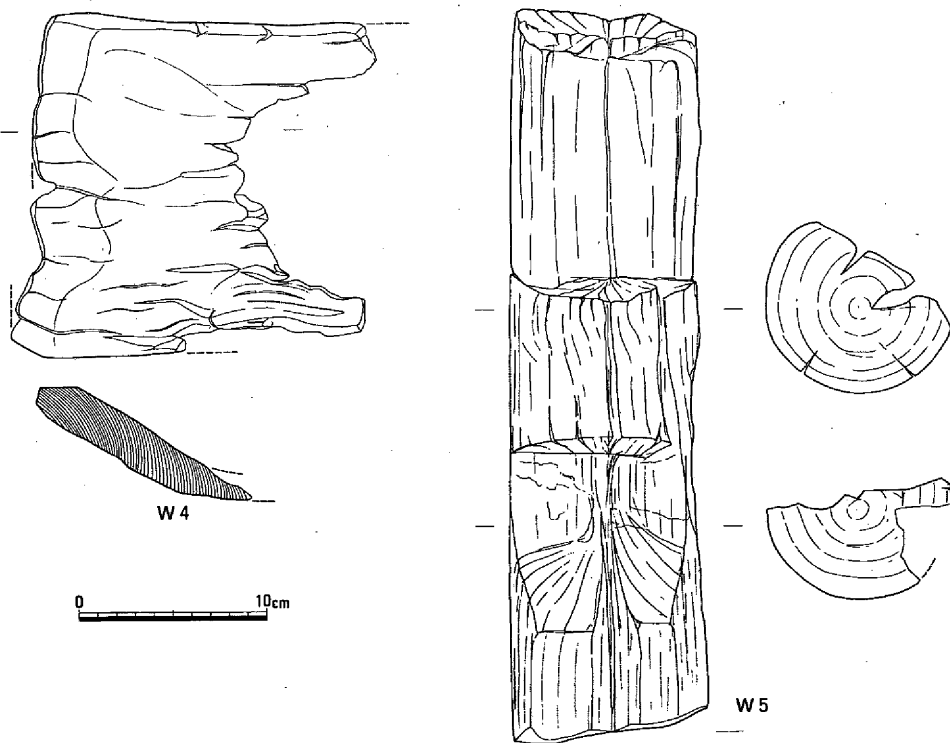
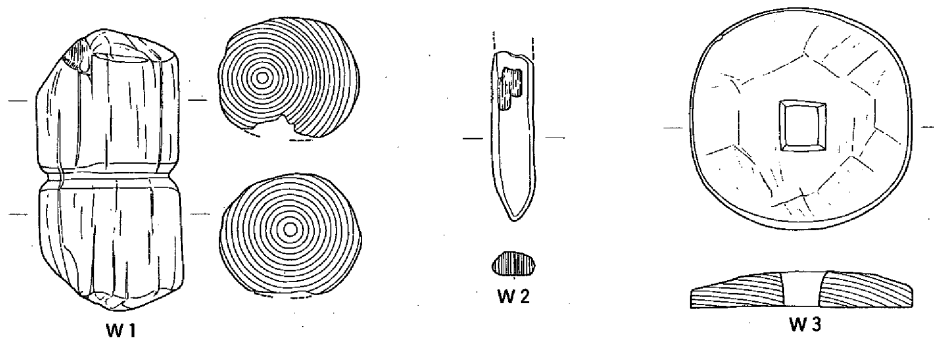
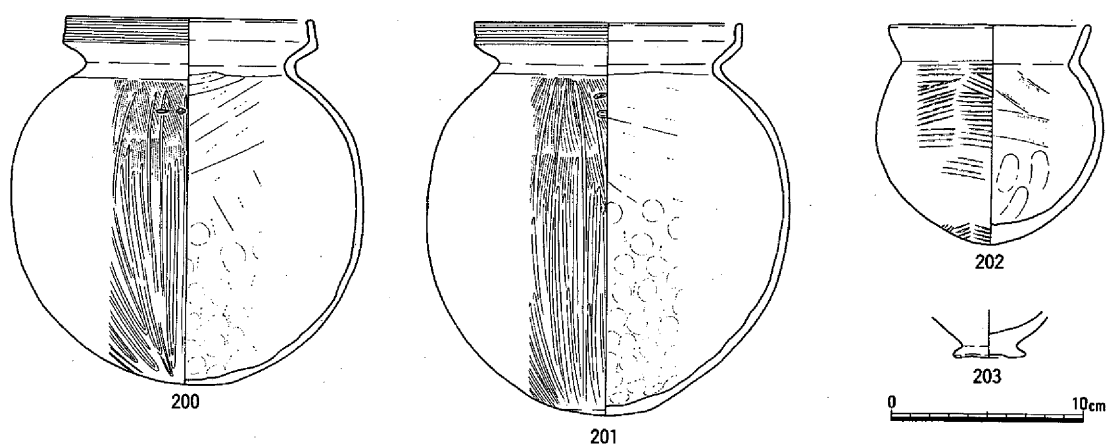
遺構の時期は、出土している土器から百・古・Iと考えられる。

(根木)



- 1. 明緑灰色 (5G7/1) 弱粘質土
- 2. 暗赤褐色 (7.5R3/2) 弱粘質土
- 3. 暗緑灰色 (5G4/1) 砂質土

第41図 井戸311、同 出土遺物〈1〉



第42図 井戸311 出土遺物〈2〉

(4) 土壇

土壇302 (第43図)

調査区北端の6・7D区境に土壇318と130cmの間隔を置き検出した。平面形は長方形を呈し、規模は長辺150cm、短辺110cm、最大深さ44cmを測る。底面は海拔55cmを測り、ほぼ平坦である。掘り方は逆台形をなす。

出土遺物は土師器の細片以外に須恵器、瓦片、近世陶磁器等を含んでいる。時期は出土遺物や埋土等から見て古墳時代以降の可能性が強い。

なお当土壇は、土壇318と並列する位置関係や両土壇の南側に、東西に掘削された近世以降に使用された用水路に規制されて設けられた可能性が強い。

土壇303 (第44図、図版10)

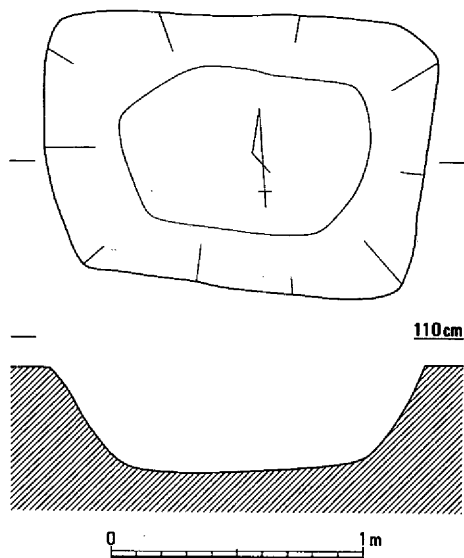
遺構密集区北端の8F区に、建物308の柱穴と重複し下部に検出した。平面形は不整形な台形状を呈すが、下方に向かうにしたがい隅丸の方形に近い形状である。規模は長辺73cm、短辺68cm、残存深さ45cmである。底面の海拔高は80cm程である。断面はU字形を呈し、底面はやや丸みを持つ。埋土は3層に分層でき、第2層の黒褐色砂質土中から大形の土器片が出土している。

出土土器は壺・高杯の器種がある。土壇の時期は遺構の切り合いや出土土器の特徴から弥生時代後期の百・後・Ⅲと考えられる。

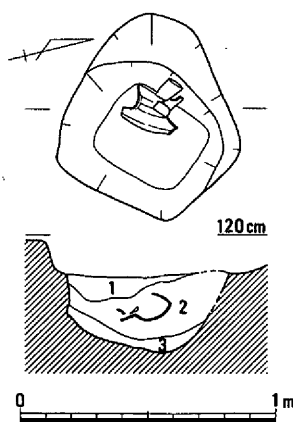
出土土器は壺・高杯の器種がある。土壇の時期は遺構の切り合いや出土土器の特徴から弥生時代後期の百・後・Ⅲと考えられる。

土壇304 (第45図、図版9)

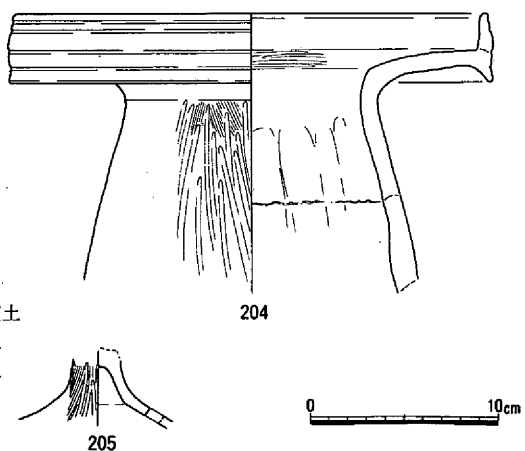
調査区中央の7G区に検出した。井戸302と1mの間隔を置き、溝306の下部で溝302を切り込んでいる。平面形は円形を呈し、規模は直径55~60cm、深さ20cmを測る。断面は逆台形を呈し、平らな底面



第43図 土壇302



1. 暗灰黄色 (2.5Y 5/2) 砂質土
2. 黒褐色 (2.5Y 3/2) 砂質土
3. 黄褐色 (2.5Y 5/4) 砂質土



第44図 土壇303、同 出土遺物

である。底面の海拔高は80cm程である。埋土は4層に分層でき、第3層の浅黄橙色砂質土の下部から最下層である第4層のにぶい黄橙色砂質土にかけて土器が出土している。

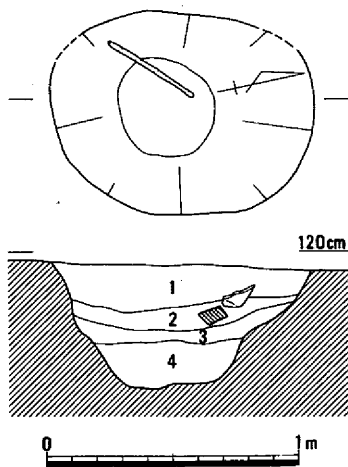
出土遺物は甕・高杯・鉢等の器種がある。土壌の時期は出土土器の器形特徴や切り合いから、弥生時代後期末の百・後・Ⅳと考えられる。

土壌305 (第46図)

調査区中央付近の8G区に検出した。弥生時代中期の溝302と重複

し、上面に位置する。平面形は楕円形を呈し、長径105cm、短径80cm、底面直径40cm、深さ50cmを測る。断面は楕鉢状を呈し、ほぼ平坦な底面である。底面の海拔高は70cm程である。底面のやや西寄りには、長さ40cm、幅3cm、深さ5~6cmの細い溝状の窪みが認められた。埋土は4層に分離可能で第1層の明黄褐色粘質微砂と2層の灰黄褐色粘質微砂から土器片が出土している。

出土土器には壺・甕・高杯・碗等の器種がある。甕210・213は、口縁端部を内傾気味に肥厚させて外面にヨコナデのみを施す。鉢は小形の台付きである。これらの出土土器の特徴や遺構の切り合いから、土壌の時期は弥生時代後期の百・後・Ⅲと考えられる。

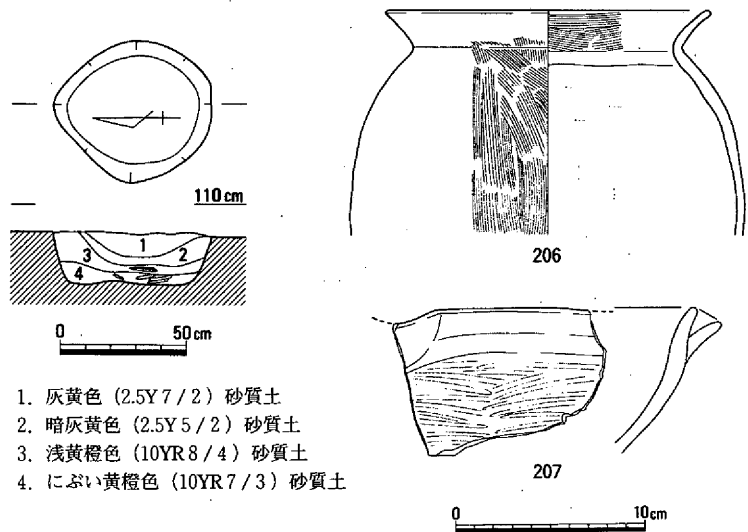


1. 明黄褐色 (10YR 6/6) 粘質微砂
2. 灰黄褐色 (10YR 5/2) 粘質微砂
3. 黄褐色 (2.5YR 5/6) 粘質微砂
4. 黒褐色 (10YR 3/2) 粘質微砂

第46図 土壌305、同 出土遺物

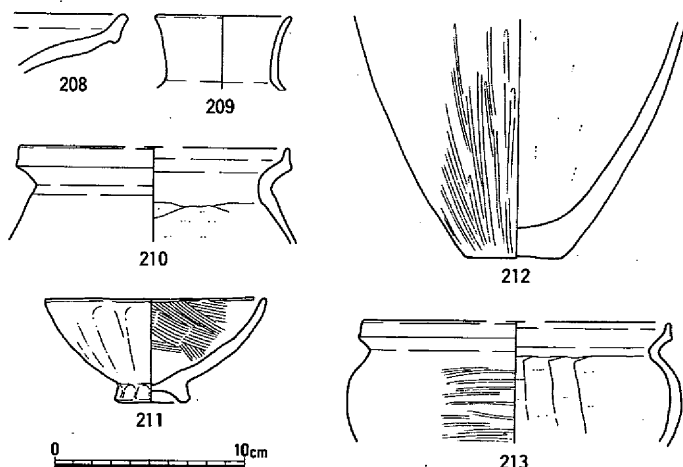
土壌306 (第47図、図版9)

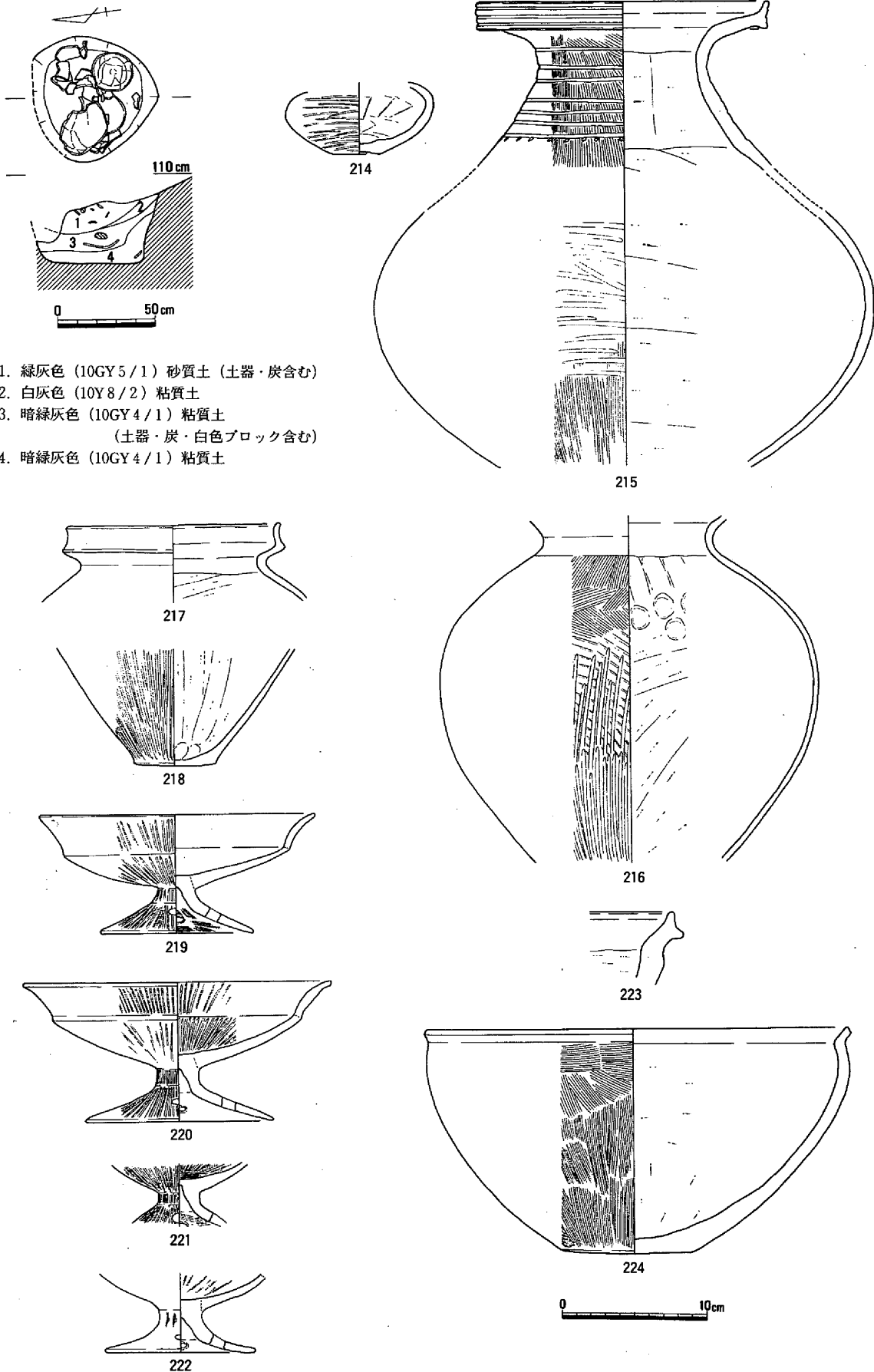
調査区中央付近の8G区の東端に検出した。溝302の底面で検出したものの遺構の切り合いから土壌の方が新しい。平面形はやや不整形な円形であるが底面ではほぼ円形である。規模は直径65cm、深さ



1. 灰黄色 (2.5Y 7/2) 砂質土
2. 暗灰黄色 (2.5Y 5/2) 砂質土
3. 浅黄橙色 (10YR 8/4) 砂質土
4. にぶい黄橙色 (10YR 7/3) 砂質土

第45図 土壌304、同 出土遺物





第47図 土壙306、同 出土遺物

35cmを測る。溝302の上面からの検出では約55cmである。断面は逆台形の形状をなし、ほぼ平らな底面をなす。埋土は4層に分層でき、いずれも粘質土の堆積である。第1層の炭を含む緑灰色粘質土からまとも土器が出土している。第3層の暗緑灰色粘質土には白色のブロックを含み、第1層と同様に炭、土器片も含んでいる。

出土土器には、壺・甕・高杯・鉢などの器種がある。壺215は、頸部が八字に開く長頸壺で口縁端部を上方に拡張し、数条の沈線を施す。高杯は短脚で、口縁部を大きく外反する。甕217は、口縁端部を真上に拡張させ、ヨコナデの調整のみである。出土土器の特徴から土壌の時期は弥生時代後期の百・後・Ⅲを示す。

土壌307 (第48図)

調査区中央の8Ⅰ区に検出した。土壌の西半分を現代の用水路により削平されている。平面形は削平前には、円形もしくは楕円形の形状であったと推定される。現存規模は長径120cm、短径60cm、深さ20cmを測り、平らな底面である。底面の海拔高は100cm程である。埋土は2層に分層でき、いずれも砂質土である。

出土遺物は、土器の細片が多く図化不可能である。土壌の時期は、埋土や出土土器の器形特徴等から弥生時代～古墳時代初頭と考えられる。

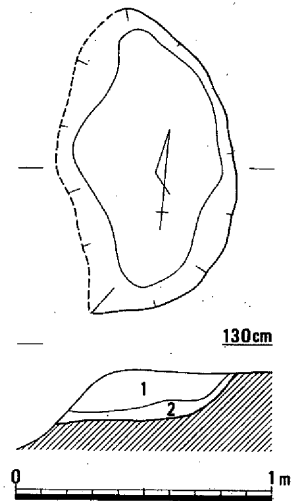
土壌308 (第49図)

調査区中央の8Ⅱ区の建物303の東側に検出した。土壌は柱穴と重複し、さらに南北方向の現用水路に一部削平されている。平面形は隅丸の長方形を呈し、規模は長辺100cm、短辺70cm、深さ10cm程である。断面は逆台形を呈し、ほぼ平らな底面をなす。埋土は褐色粘質微砂土の1層のみで若干炭を含んでいる。柱穴との切り合いは不明瞭である。

遺物は甕や高杯の細片が出土している。土壌の時期は、出土土器や埋土等から弥生時代後期から古墳時代初頭頃と考えられる。

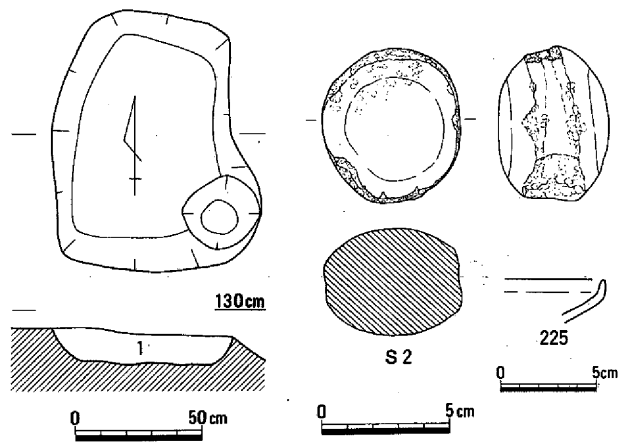
土壌309 (第50図)

調査区中央の6Ⅱ区で、西側の調査区境の側溝中に検出した。平面形はほぼ円形を呈し、規模は直径60cm、深さ45cmを測る。断面はU字形を呈し垂直に近い掘り込みで、底面には



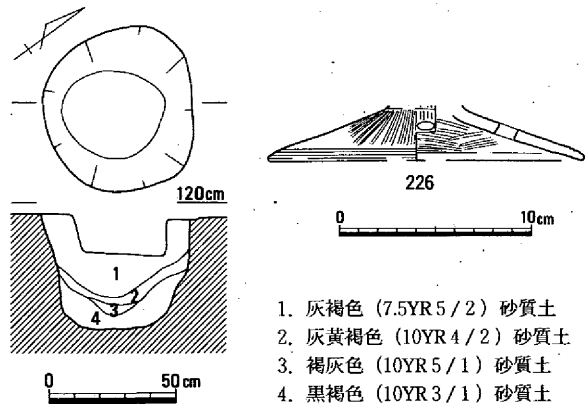
- 1. 灰黄褐色 (10YR 5/2) 砂質土
- 2. 灰黄色 (2.5Y 6/2) 砂質土

第48図 土壌307



- 1. 褐色 (10YR 4/4) 粘質微砂

第49図 土壌308、同 出土遺物



- 1. 灰褐色 (7.5YR 5/2) 砂質土
- 2. 灰黄褐色 (10YR 4/2) 砂質土
- 3. 褐灰色 (10YR 5/1) 砂質土
- 4. 黒褐色 (10YR 3/1) 砂質土

第50図 土壌309、同 出土遺物

第3章 発掘調査の概要

凹凸は無い。埋土は4層に分層でき、いずれも砂質土の堆積である。

出土遺物は細片が多く図化可能なものは1点である。土壌の時期は埋土や出土土器等から弥生時代後期と考えられる。

土壌310 (第51図)

調査区中央やや南よりの8J区に建物306に接するように検出した。掘り方の中央を東西に現水田の暗渠により一部削平されている。平面形は長方形に近い不整形な形状である。規模は長辺80cm、短辺65cm、最大深さ25cmである。

断面はU字形を呈し、底面は北西部が一段浅く、南東に向かって深くなる。埋土は黄橙色のブロックを含む褐色粘質微砂土の1層のみである。

出土遺物は細片で図化不可能であるが平底の底部片がある。土壌の時期は埋土や出土遺物の特徴から弥生時代後期から古墳時代初頭と考えられる。

土壌311 (第51図)

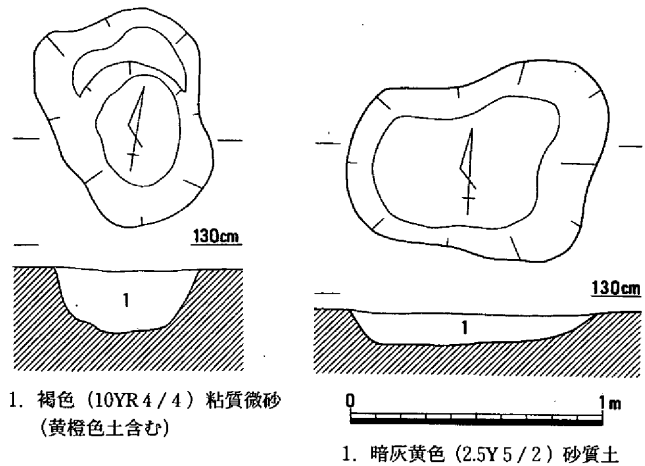
調査区中央やや南よりの8J区に検出した。平面形は不整形な形状を呈し、規模は長径95cm、短径80cm、深さ10cm程を測る。断面は浅い皿状を呈し、底面はほぼ平らである。埋土は暗灰黄色砂質土の1層のみである。

出土遺物は土器の細片がある。土壌の時期は埋土や出土土器の器形特徴等から弥生時代から古墳時代初頭と考えられる。

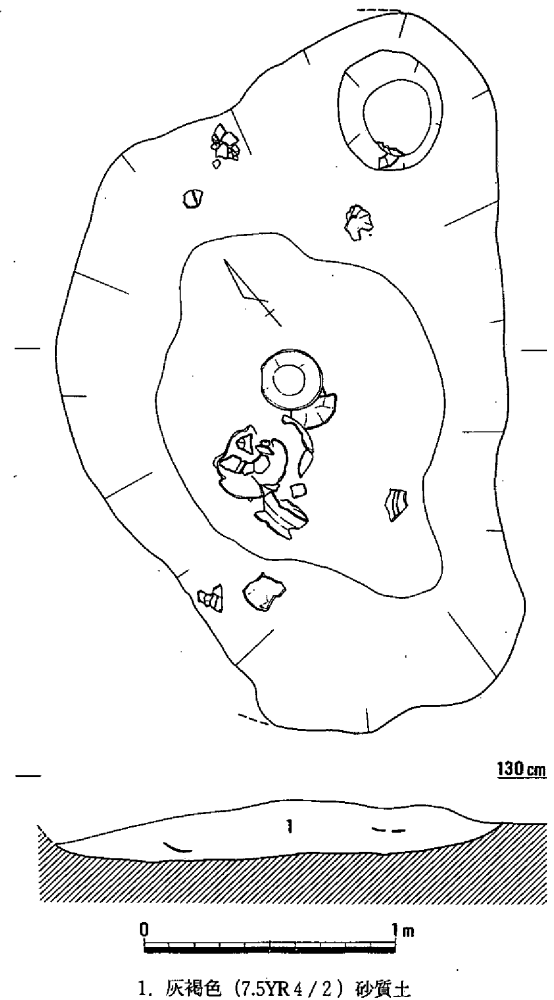
土壌312 (第52・53図、図版8)

調査区中央付近の7F区に検出した。北から西側が削平されて全体は不明瞭である。残存部は不整形長楕円形をなす。規模は長さ290cm、現存幅180cm、深さ20cmである。検出当初は竪穴住居を想定したが断面が皿状をなし、底面にも若干凹凸があり竪穴住居とは認められなかった。埋土は灰褐色砂質土の一層のみである。土器が土壌の中央付近でかなりまとまって出土している。

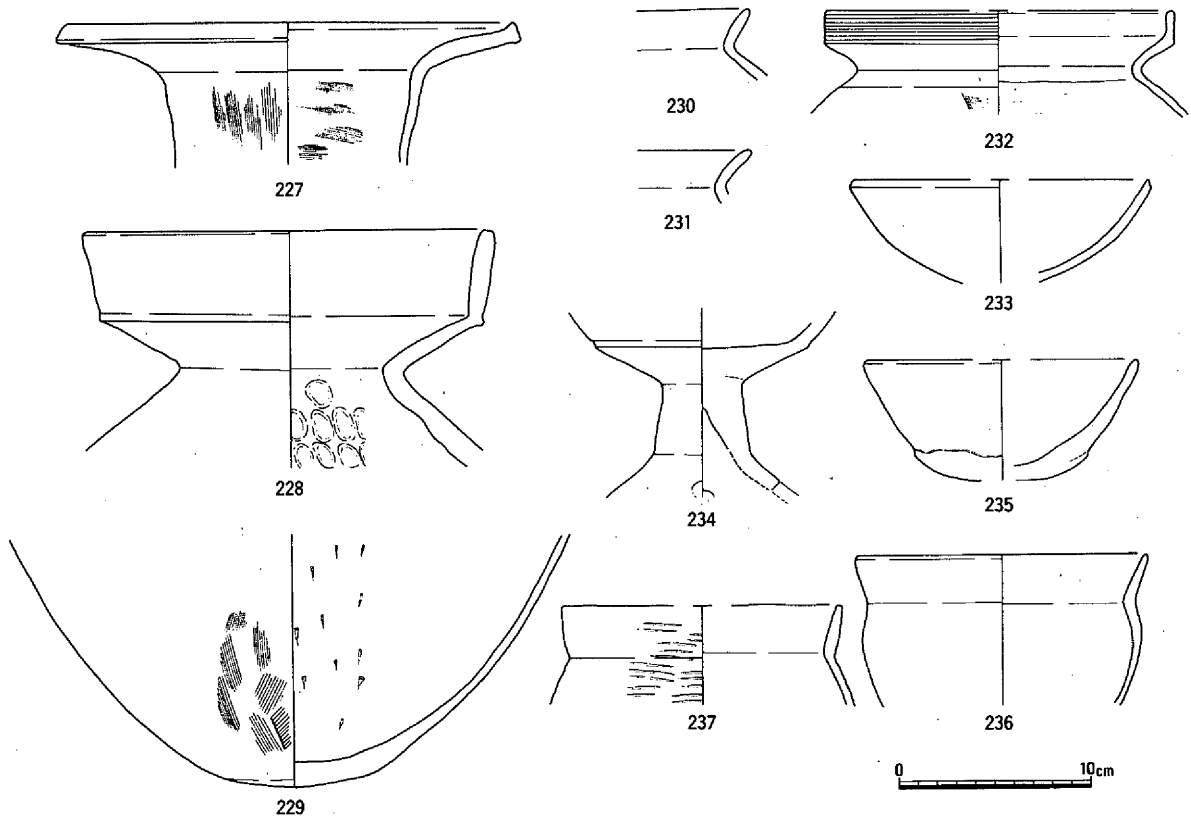
出土土器には、壺・甕・高杯・製塩土器等の器種がある。壺は、口縁端を上方に垂直に拡張したも



第51図 土壌310・311



第52図 土壌312



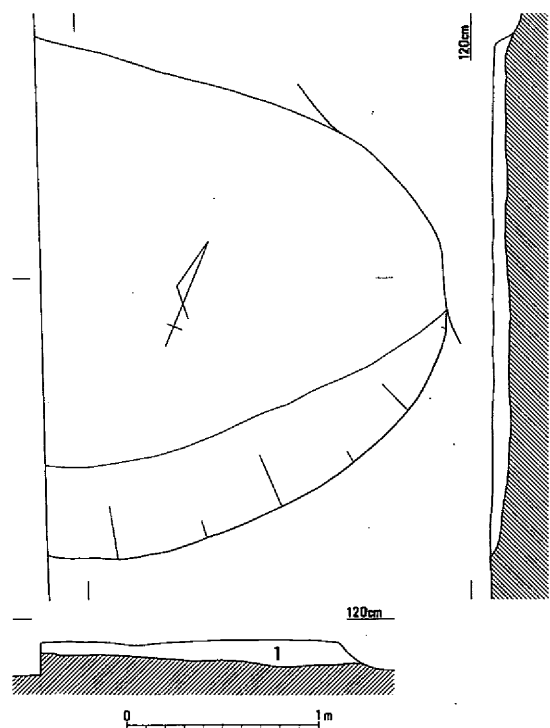
第53図 土壙312 出土遺物

の228、く字に外反し端部が若干肥厚したものの227がある。二重口縁の甕232は、口縁端部がほぼ垂直に立ち上がり、端部外面に櫛描沈線文を施す。これらの出土土器の器形特徴や埋土等から土壙の時期は古墳時代初頭の百・古・Iと考えられる。

土壙313 (第54図)

調査区南端の10N区で西側の未調査区との境に検出した。検出部分の平面形態は楕円形に近い形状をなす。検出規模は東西210cm、南北270cm、最大深さ15cmである。断面は浅い皿状を呈し、ほぼ平らな底面をなす。底面海拔高は95cm程である。埋土は褐灰色砂質土の1層のみである。

遺物は埋土中から土器の細片が出土している。土壙の時期は明瞭でないが、埋土や出土土器の器形特徴から弥生時代から古墳時代初頭の間と想定される。(山磨)



1. 褐灰色 (7.5Y4/1) 砂質土

第54図 土壙313

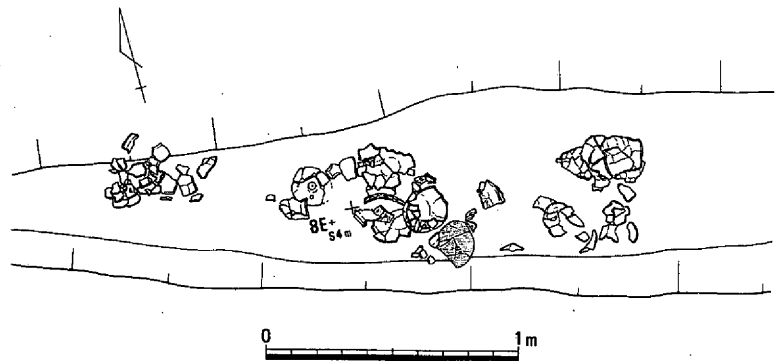
(5) 溝

溝301 (第55・56・57図、図版11)

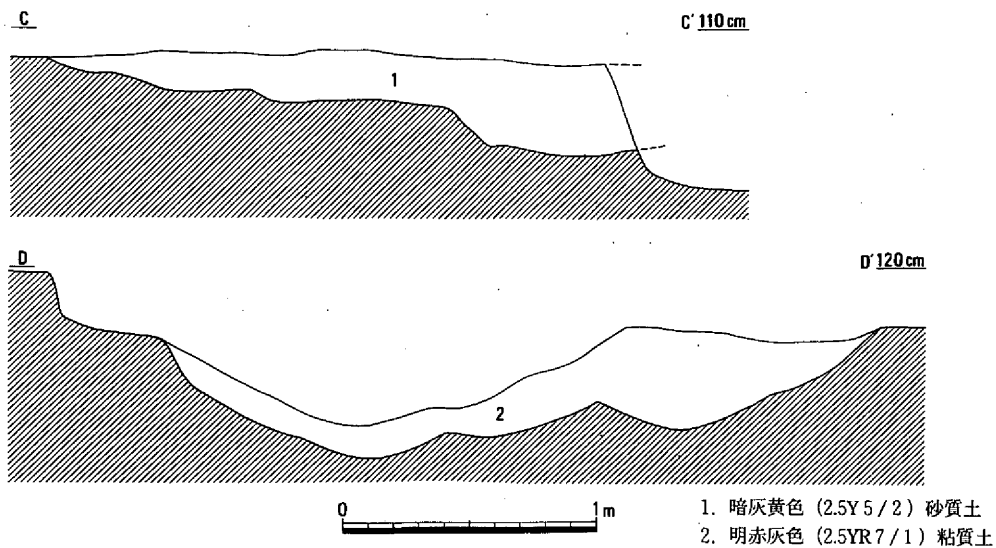
調査区の北端、7・8E区に検出した東西方向の溝で、現代用水路と並行し重複しているため、北側の大半が削平されている。調査区内の検出全長14m、現存幅2.3m、深さ35cmである。東側調査区(米田遺跡3)の溝101に繋がり、総延長74m程となる。西側は現代用水路や中近世の溝が横切り切断されて不明瞭である。ただ西側調査区(当麻遺跡2)の弥生時代から古墳時代の重複した溝群のうちの溝5の北端がやや東にカーブしており、この溝と接続する可能性がある。溝の形状は残存良好な東端の溝断面では、緩やかな掘り方から中央部がさらに一段深く掘り窪められて2段掘りの形状をなしている。断面観察部分の埋土は、暗灰黄色砂質土の1層のみで分層できなかったが、埋土上層には東側の調査区(米田遺跡3)においても認められた土器溜まりが形成されていた。

出土土器は溝の肩口上面に集中して、いずれも掘り方1段目の底部より若干浮いた状況であった。溝の埋没過程の最終段階の遺物と考えられる。土器は弥生時代後期後半から古墳時代初頭の時期のものが出土している。特に、二重口縁に櫛描き沈線文を施す甕(242~245)が比較的多く出土している。溝の最終埋没時期は百・古・I期と考えられる。

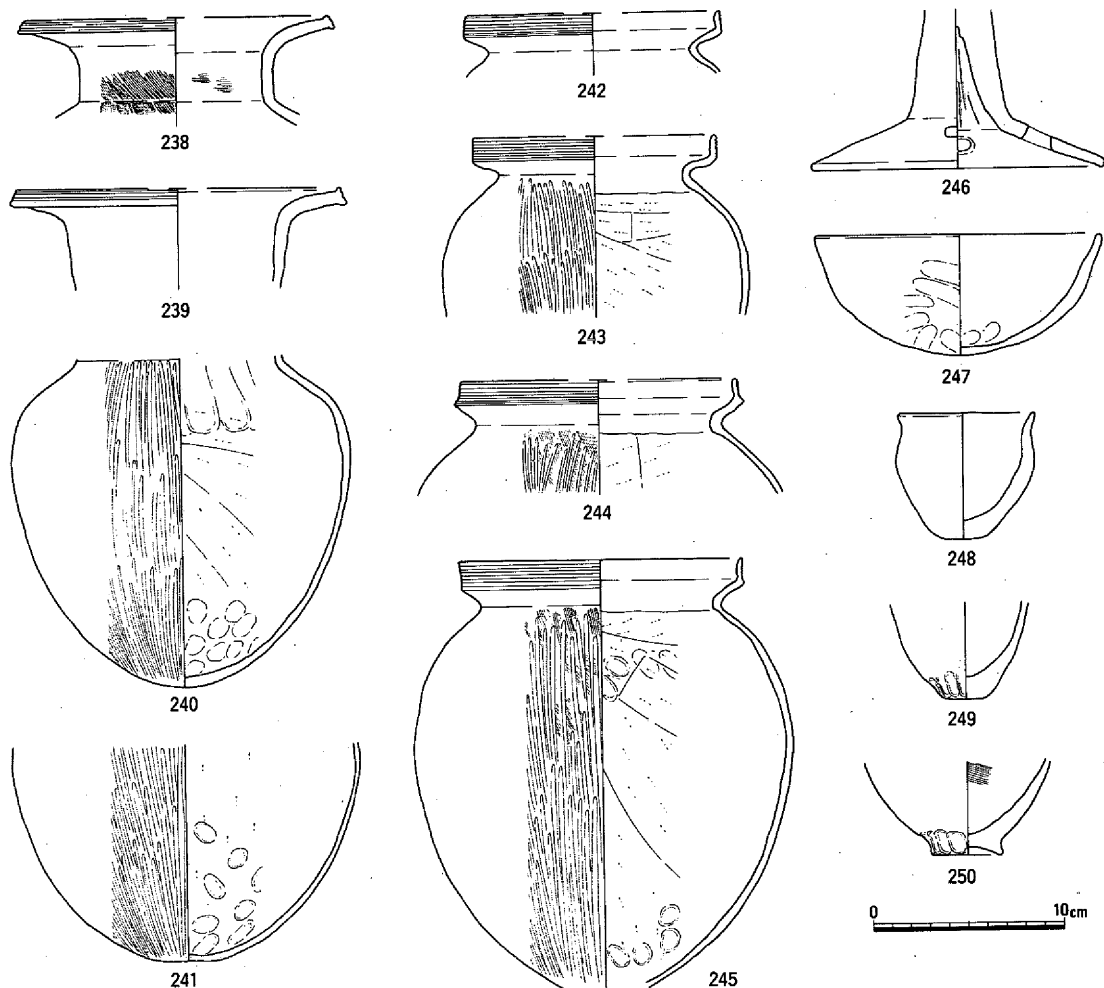
溝302 (第58図、図版11)
 調査区中央付近の6~8G区にほぼ東西方向に検出した溝で、西端は溝320・321及び現水路で切断されている。また、途中で土壇304・306、および井戸303・310及び中世以降の溝306・316が切り込んでいる。規模は検出長25m、幅2~



第55図 溝301 土器分布

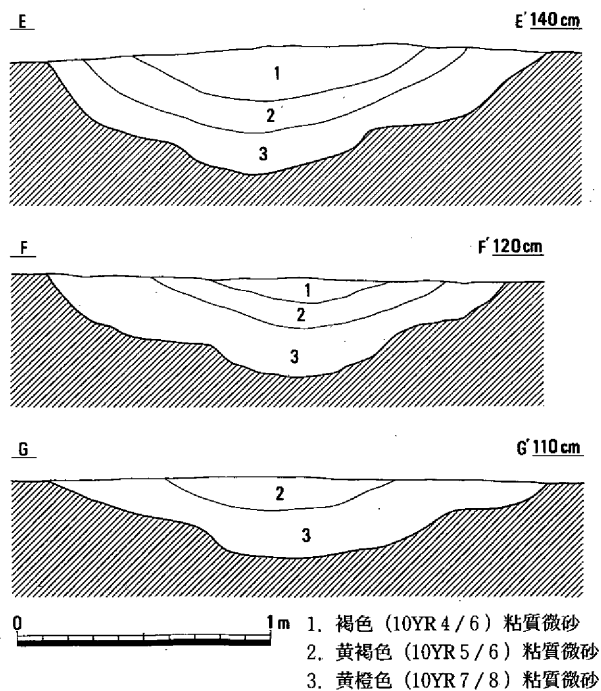


第56図 溝301 断面



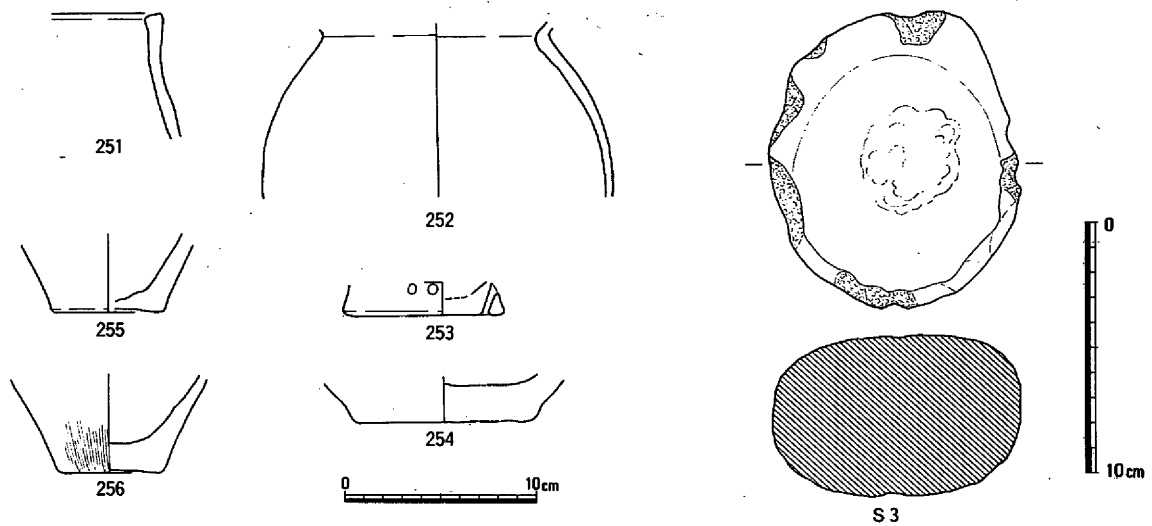
第57図 溝301 出土遺物

2.2m、深さ40~50cmである。溝断面の観察では2段の掘り方を呈す。1段目の掘り方はやや緩やかな傾斜をなして、幅20cmほどのテラスをなし、2段目は幅70~90cm、深さ15~20cmほどの椀状の形状をなす。溝底面はほぼ平坦である。埋土は残存良好な場所で3層に分離可能で、いずれも粘質微砂土の堆積である。底部レベルは東端で海拔70cm、中間で海拔73cm、西端で海拔66cmを測り、総体的に東から西への流走が考えられる。なお当溝は西側調査区（当麻遺跡2）で検出した溝6・7に接続すると考えられる。また、東側調査区（米田遺跡3）の溝102に繋がり、これらを合わせると総延長120mに達する。



1. 褐色 (10YR 4/6) 粘質微砂
2. 黄褐色 (10YR 5/6) 粘質微砂
3. 黄橙色 (10YR 7/8) 粘質微砂

第58図 溝302 断面



第59図 溝302 出土遺物

出土遺物は弥生土器のみである。ただ、遺構の切り合いが激しく、弥生時代前期の可能性のある沈線文、中期の櫛描波状文の土器片や後期的な土器片も含んでいる。溝の時期は弥生時代後期の土器片も含むものの大半の土器の器形、胎土、色調等の特徴や、埋土、切り合い等から弥生時代中期の段階の溝と判断した。

溝303 (第60図)

調査区中央付近の8 G区に検出した東西方向の小規模な溝である。途中を現用水路や中世の溝313等に切断されて中世の溝305付近で終わっている。規模は検出長2 m、推定全長6 m、幅30~45 cm、深さ10~12 cmである。断面は浅い皿状を呈す。溝底部レベルは西端で海拔108 cmを測り、若干東に向かって低下している。なお、当溝は東側の調査区に検出の溝103に接続し、総延長20 mほどとなる。

出土遺物が無く時期の確定がしがたいが、埋土や遺構の切り合い、方向等から弥生時代の可能性が強い。

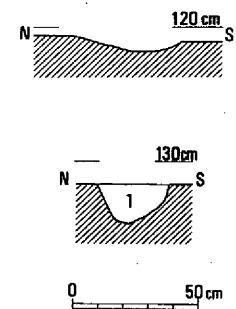
溝304 (第60図)

調査区中央付近の8 F区に検出した小規模な溝で、途中を水路等により削平されている。溝302と50~70 cmの間隔を置きほぼ並行している。形状は若干蛇行しながらほぼ東西方向に流走し、井戸310付近で終わっている。規模は全長8.5 m、幅30 cm、深さ15 cmである。断面は碗状を呈し、平坦な底面をなす。埋土はにぶい黄褐色の粘質微砂土の1層のみである。溝底面のレベルは東端で海拔113 cm、西端で100 cmを測り、西に向かって低下している。東側調査区(米田遺跡3)に繋がる溝で総延長16.5 mの西半部に当たる。

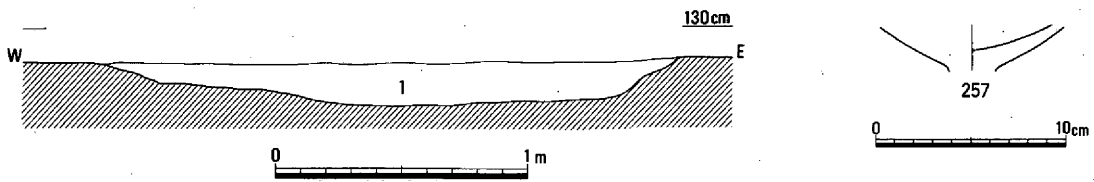
遺物は土器の細片が少量出土しているのみで時期の確定がしがたいが、埋土や流走方向、土器の器形特徴等から弥生時代~古墳時代初頭の間と考えられる。

溝305 (第61図)

調査区中央付近の8 G区にほぼ南北方向に検出した溝状の遺構である。第60図 溝303・304 断面



1. にぶい黄褐色(10YR5/3)粘質微砂



1. にぶい黄褐色 (10YR 5/3) 粘質微砂

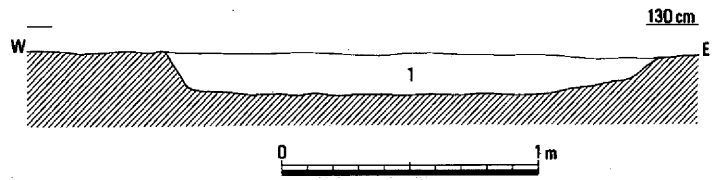
第61図 溝305 断面、同 出土遺物

弥生時代から古墳時代の溝302・303・304、
 竪穴住居301の上面に位置する。南端は
 溝315・316に接続する可能性がある。
 規模は全長10.5m、幅210~230cm、最大
 深さ20cmである。北端は建物308付近で
 途切れているが、1mほど北側の長さ2
 mの浅い窪み状の土壌に続く可能性が
 ある。断面は浅い皿状を呈し、底面は
 平坦である。埋土はにぶい黄褐色粘質
 微砂土にブロック状の混じり土の1
 層のみの堆積である。溝底部レベルは
 海拔95~100cm 前後で高低差は不明瞭
 である。

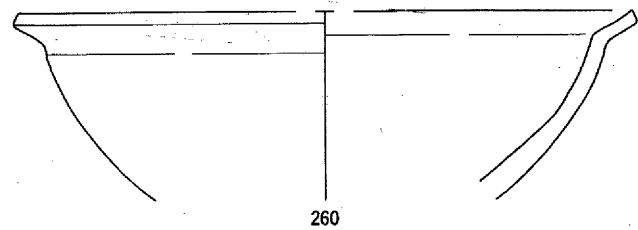
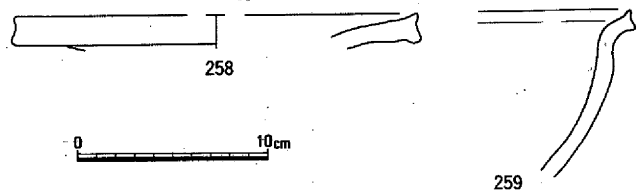
出土遺物は少量の土器片がある。溝
 の時期は出土遺物に土師器片を含むが、
 埋土、切り合い、方向等から古墳時代
 以降の可能性が強い。

溝306 (第62図)

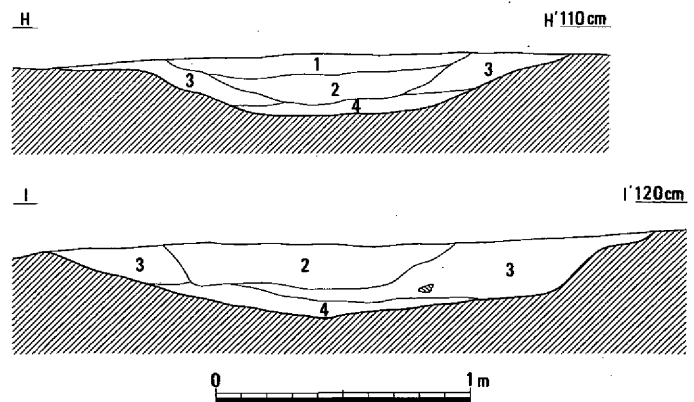
調査区中央付近の7F~H区にかけ
 てほぼ南北方向に検出した。溝305と
 3mの間隔を置きほぼ並行している。
 北端は削平により建物308付近で消失
 している。南端は建物301と重複する位
 置で丸く終わっている。溝302や井戸
 302・303、土壌302・304と重複してい
 る。検出全長21.5m、幅170~250cm、最
 大深さ25cmである。断面は浅い皿状を
 呈し、ほぼ平らな底面である。埋土は、
 溝305と同様のにぶい黄褐色粘質微砂
 土にブロック状の混じり土の1層のみ



1. にぶい黄褐色 (10YR 5/3) 粘質微砂

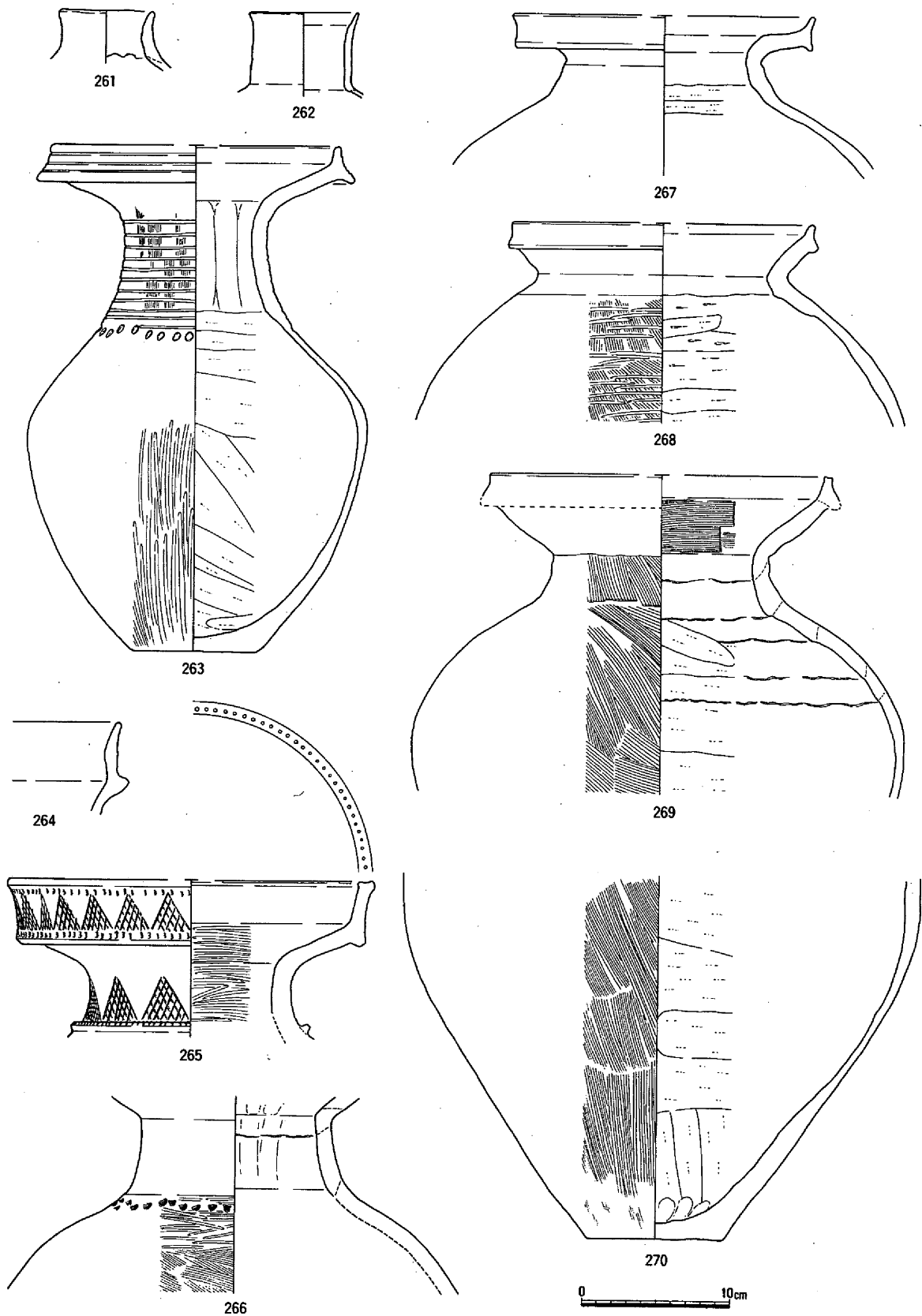


第62図 溝306 断面、同 出土遺物

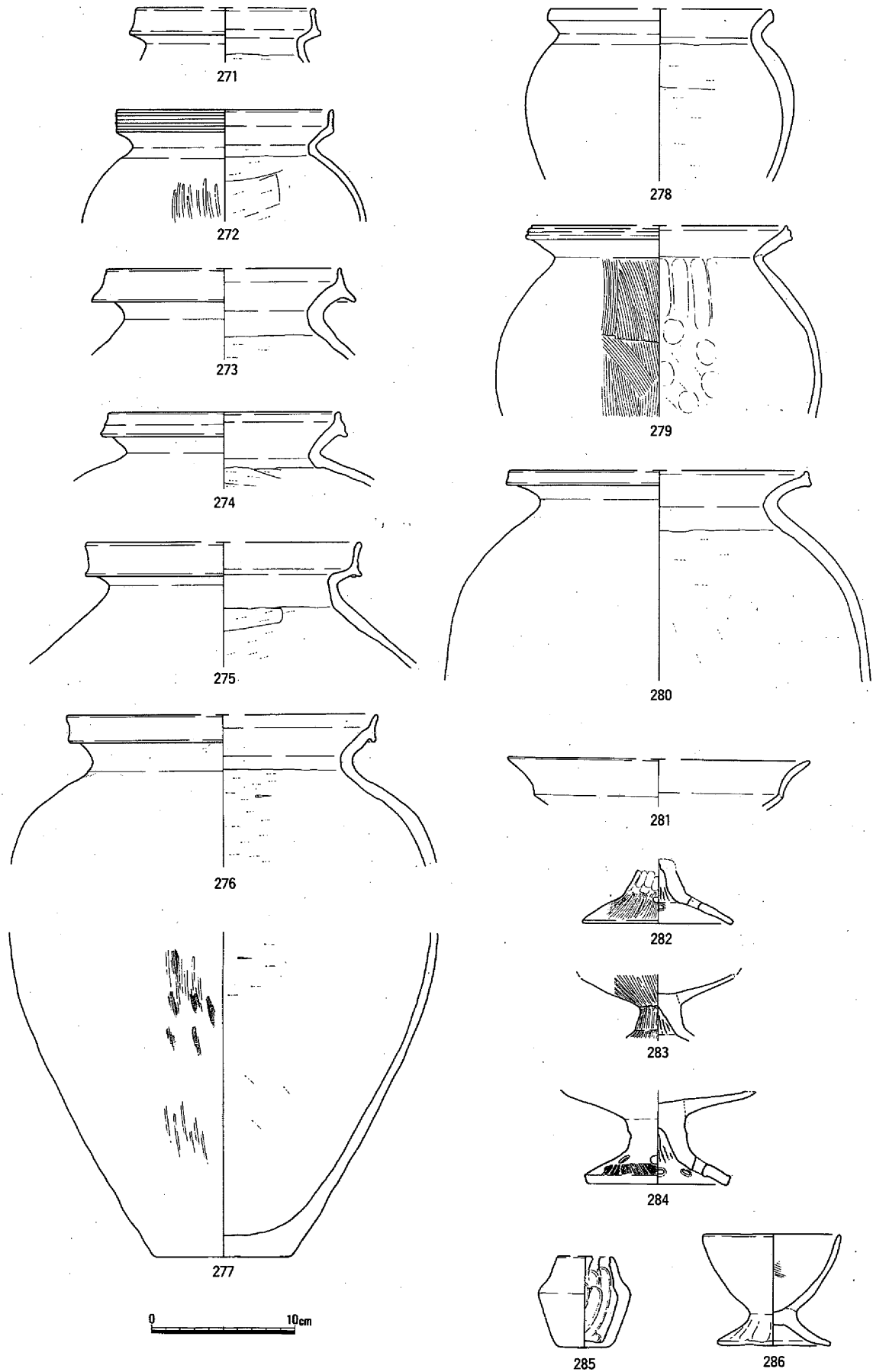


- 1. にぶい黄色 (2.5Y 6/4) 粘質土
- 2. 暗灰黄色 (2.5Y 5/2) 粘質土 (炭・土器含む)
- 3. 浅黄色 (2.5Y 7/4) 粘質土
- 4. 黄灰色 (2.5Y 6/1) 粘質土

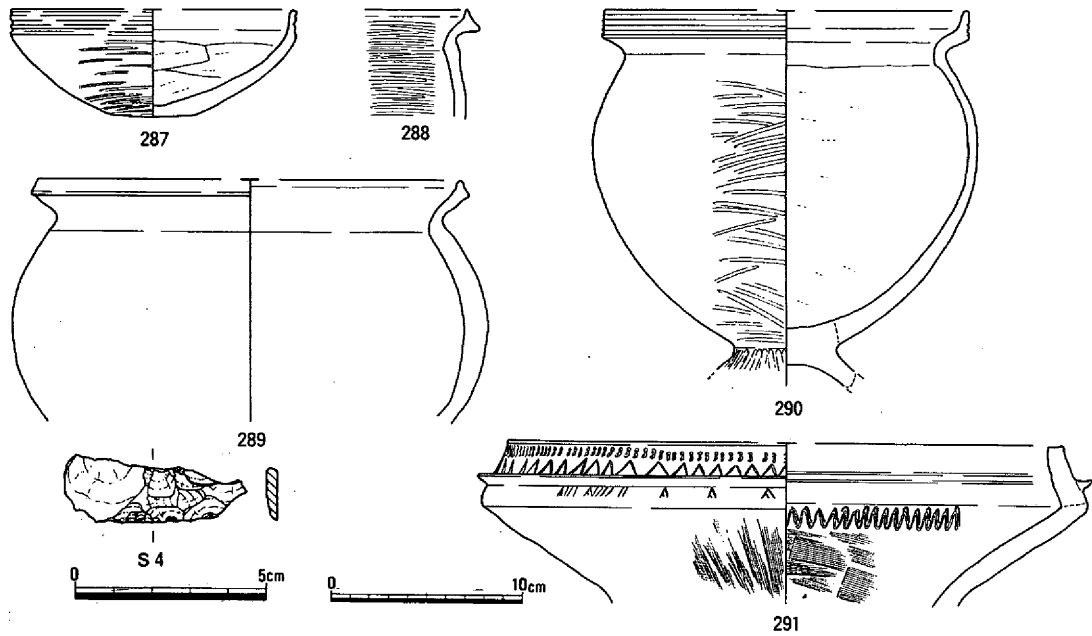
第63図 溝307 断面



第64図 溝307 出土遺物〈1〉



第65図 溝307 出土遺物〈2〉



第66図 溝307 出土遺物〈3〉

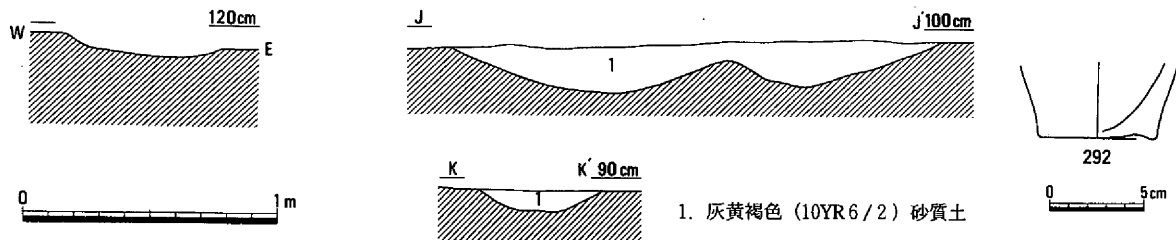
の堆積である。溝底部レベルは海拔92~101cm 前後で高低差は不明瞭である。

出土遺物は細片が多いが、備前焼、土鍋、須恵器、弥生土器の器種がある。溝の時期は本項目に掲載したが、遺構の切り合い、出土土器、方向から溝305と同様の中世前半の鎌倉時代と考えられる。

溝307 (第63~66図)

調査区南半の8・9 K~10 L区にかけて弓状に検出した。途中を現用水路と中世の井戸群により削平されている。規模は検出長24m、幅2~3.5m、深さ25~40cmである。西側は調査区外に延び、東側は前調査区(米田遺跡3)の溝111に繋がり南東に流走し、総延長で128mほどの溝となる。断面は皿状を呈し底面は平らである。2カ所の土層断面の観察では第2層下部で上下2層に大きく分層できることから、改修に伴う溝がほぼ中央の上面に存在していたものと考えられる。堆積土は粘質土を基調として、第2層の暗灰黄色土に土器や炭を含んでいる。また井戸313・314に挟まれた付近の溝の最終面に土器溜まりが形成されていた。溝底部レベルは井戸313及び中間付近で海拔72cm、東端で79cmを測り、緩やかに西に向かって低下している。

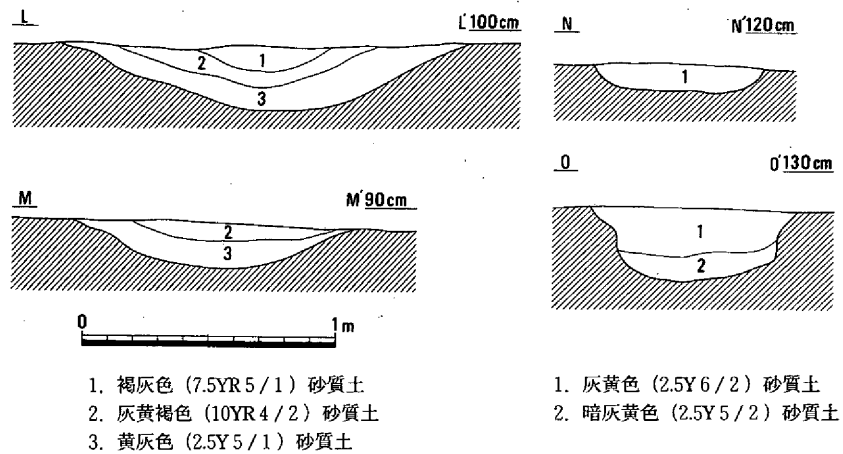
出土遺物は、土器溜まりを形成した遺物が多量で整理箱9箱分にのぼり、それ以外では少ない。そ



第67図 溝308 断面

第68図 溝309 断面、同 出土遺物

の他に、石器片や製塩土器片が出土している。土器は弥生時代後期の長頸壺や口縁部に鋸歯文を施した壺、短脚の高杯等と古墳時代初頭の口縁部に櫛描文を施した甕が認められる。当該溝の最終時期は甕に施した櫛描沈線文の特徴等から古墳時代初頭の百・古・Iと考えられる。



- 1. 褐灰色 (7.5YR 5/1) 砂質土
 - 2. 灰黄褐色 (10YR 4/2) 砂質土
 - 3. 黄灰色 (2.5Y 5/1) 砂質土
- 1. 灰黄色 (2.5Y 6/2) 砂質土
 - 2. 暗灰黄色 (2.5Y 5/2) 砂質土

第69図 溝310・311 断面

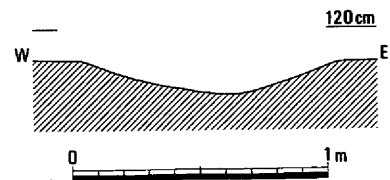
溝308 (第67図)

調査区のやや南よりの8K区に検出した。規模は検出長5.5m、最大幅75cm、深さ20cmである。北端は現用水路に削平されている。南側は切り合いは不明瞭であるが、溝307と接している。断面は浅い皿状をなし、底面はやや凹凸がある。溝底部レベルは96~104cmの間で、溝の流走方向は不明瞭である。

出土遺物が皆無で時期の確定がしがたいが、中世段階の可能性もある。

溝309 (第68図、図版12)

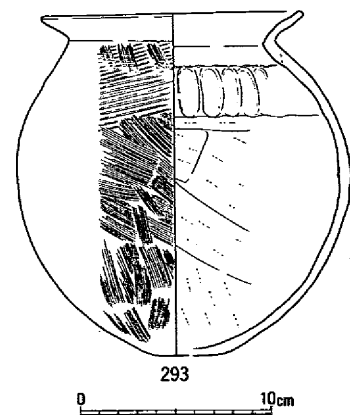
調査区南半の10・11M区に溝307と2~3mの間隔を置き、南側にほぼ平行に検出した。溝の中間付近は2本の溝が重複している。西端は攪乱により削平されている。東端は浅くなりながら東側調査区(米田遺跡3)境まで続いている。ただ、東側調査区では直接繋がる溝は未検出で、やや離れるが溝110・112等の溝群に繋がっていくものと見られる。規模は全長13.5m、最大幅1m、最大深さ15cmである。断面は浅い皿状を呈し、平らな底面である。埋土は砂質土の1層のみである。溝底部レベルは東端で海拔76cm、中間部及び西端で79cmを測り、明瞭でないが若干西に向かって低下している様である。



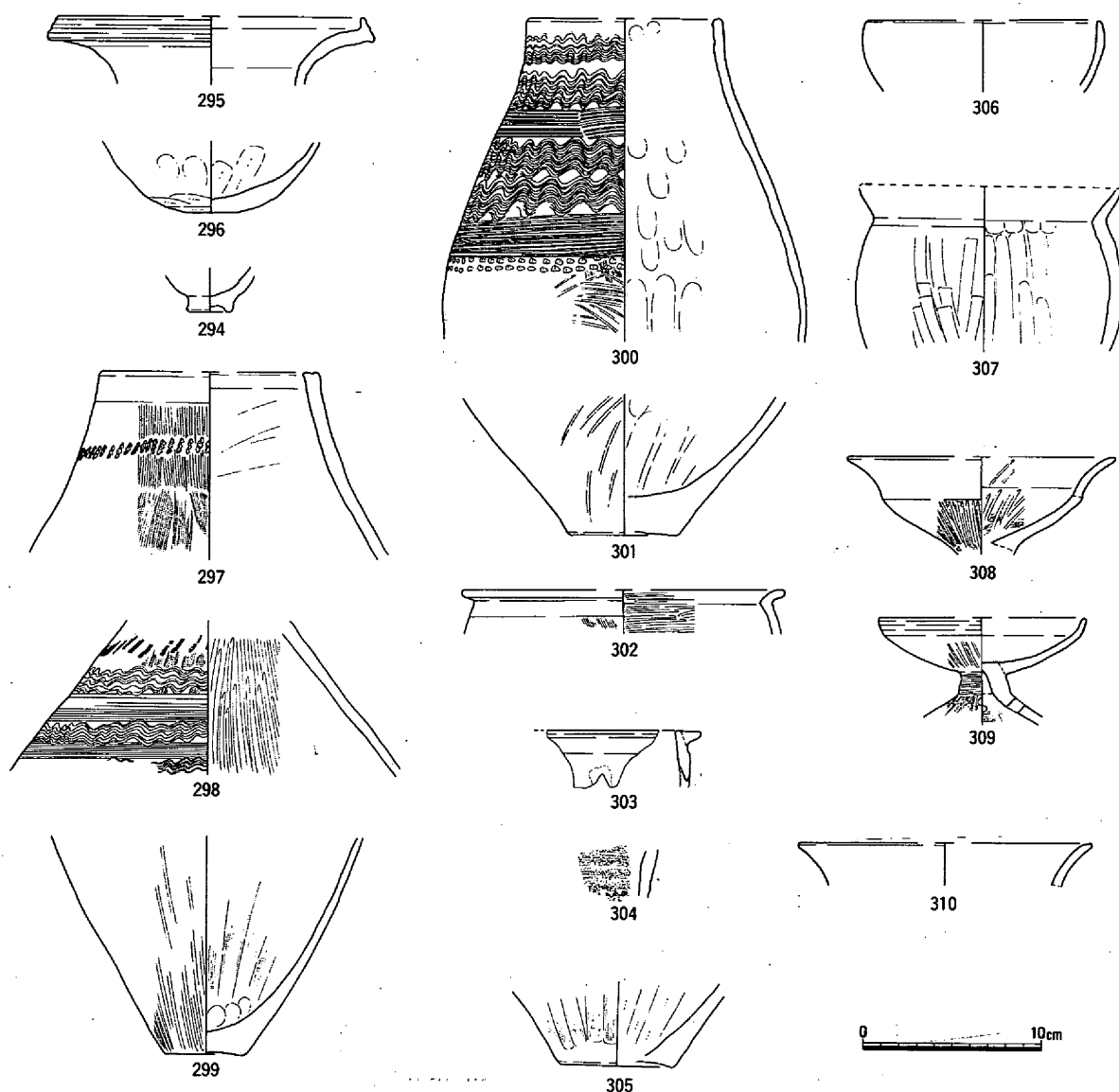
遺物は土器の細片が少量出土したのみで時期の確定に乏しいが、出土遺物、埋土や流走方向から弥生時代から古墳時代の初頭までに収まるものと見られる。

溝310 (第69図、図版12)

調査区南半の9・10M区に溝309と3mほどの間隔を置き、東西方向にほぼ平行に検出した。規模は検出長16m、幅90~160cm、最大深さ25cmである。西側は調査区外に延び、東側は前調査区(米田遺跡3)の溝105に繋がり総検出長は75m程になる。断面は皿状をなし、底面はほぼ平らである。埋土はレンズ状の堆積で東寄りで2層、中間部で3層に分層可能である。溝底部レベルは西端で海拔62cm、中間部で71cm、



第70図 溝312 断面、同 出土遺物



第71図 柱穴301～310 出土遺物

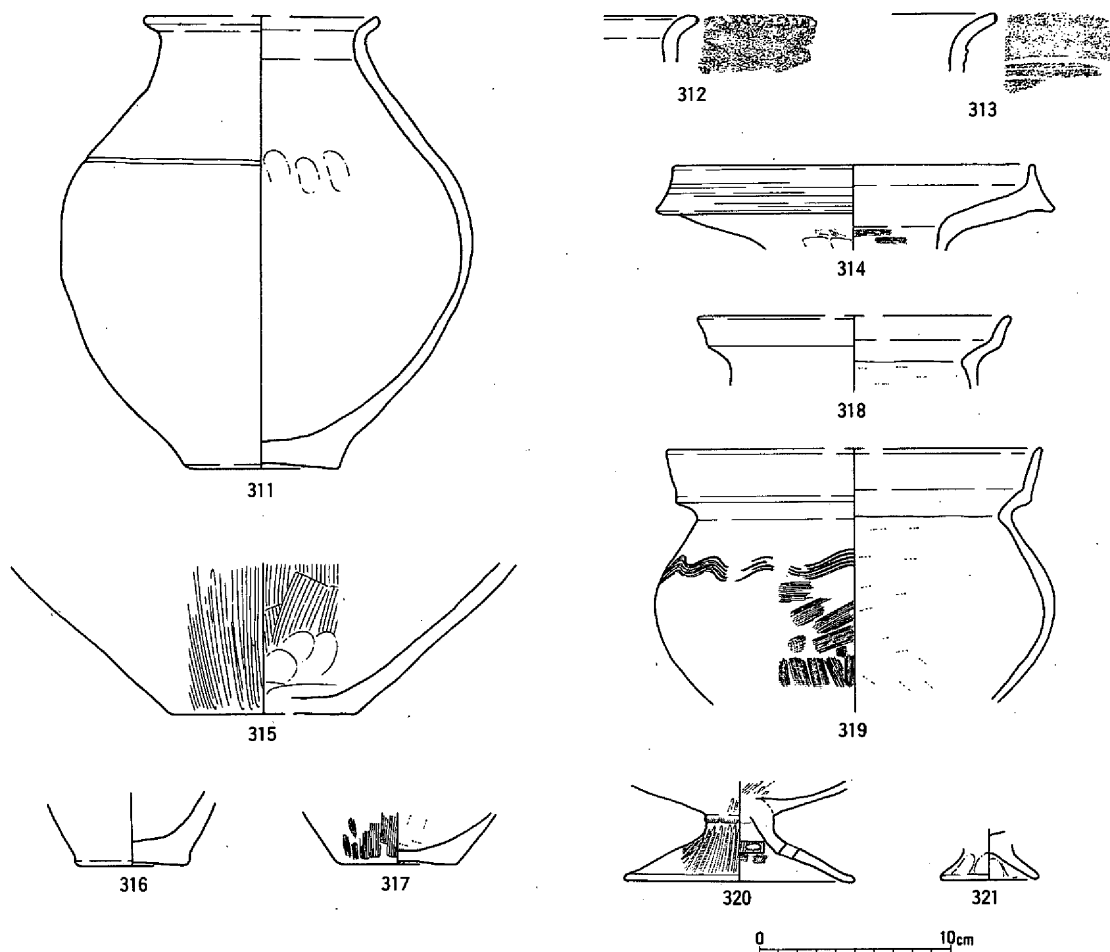
東端で74cmを測り、緩やかに西に向かって低下している。

遺物は少量の土器の細片が出土しているのみである。時期は埋土や出土遺物の器形特徴等から古墳時代初頭までに収まるものであろう。

溝311 (第69図、図版4)

調査区南端の10～130区にかけて検出した。溝の東半分付近がかなり削平を受けており、途中で途切れている。西側はさらに調査区外に延びており、東側調査区(米田遺跡3)では溝113に繋がる。検出長19m、幅70～80cm、最大深さ30cmである。断面はやや浅い逆台形状もしくはU字形に近い形状をなし、ほぼ平らな底面である。埋土は残りの良い西側では2層に分層可能で、いずれも砂質土が堆積している。溝底部レベルは海拔85～91cmで、溝の流走方向は総体的に若干西に向かって低下している様である。

出土遺物は皆無で時期の確定がしがたいが、埋土や流走方向から弥生時代から古墳時代の範疇と考えられる。



第72図 遺構に伴わない遺物〈1〉

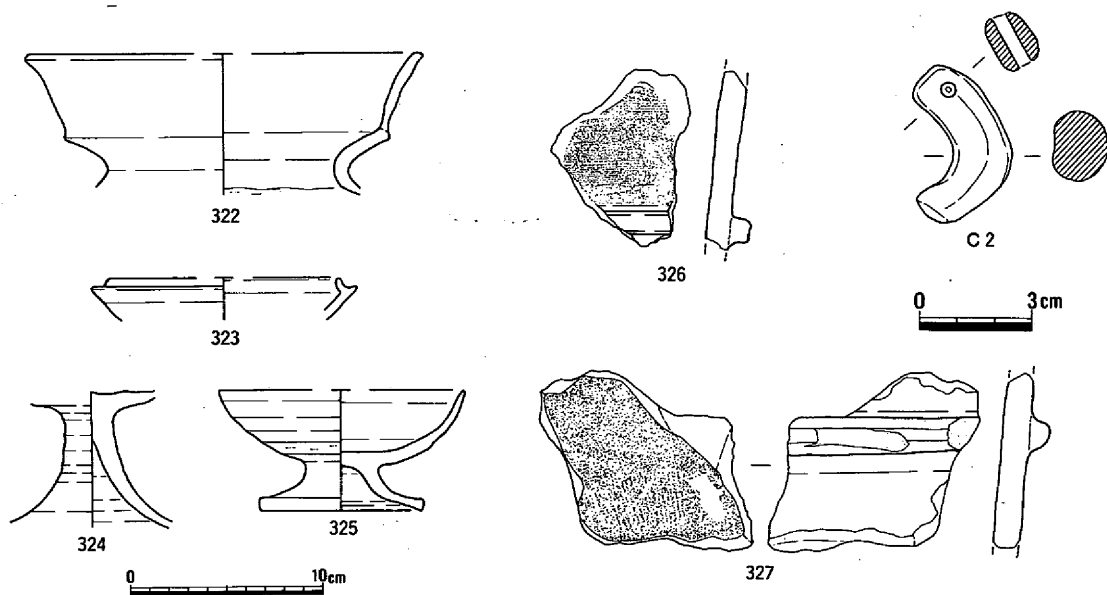
溝312 (第70図)

調査区北西端の3A・B区にかけて南北方向に検出した。規模は検出長8m、幅80~100cm、深さ10~15cmで若干蛇行している。断面は皿状を呈し、平坦な底面である。溝底部レベルは海拔95cm前後で高低差は明瞭でない。溝の中間付近で土器が若干集中した状況で出土している。この溝は、南西側調査区(当麻遺跡2)の弥生時代の集合した溝群の溝7に繋がる可能性がある。出土遺物は溝の中央付近の底面より、体部上端にタタキを施す甕293がある。百・古・工の時期と考えられる。(山磨)

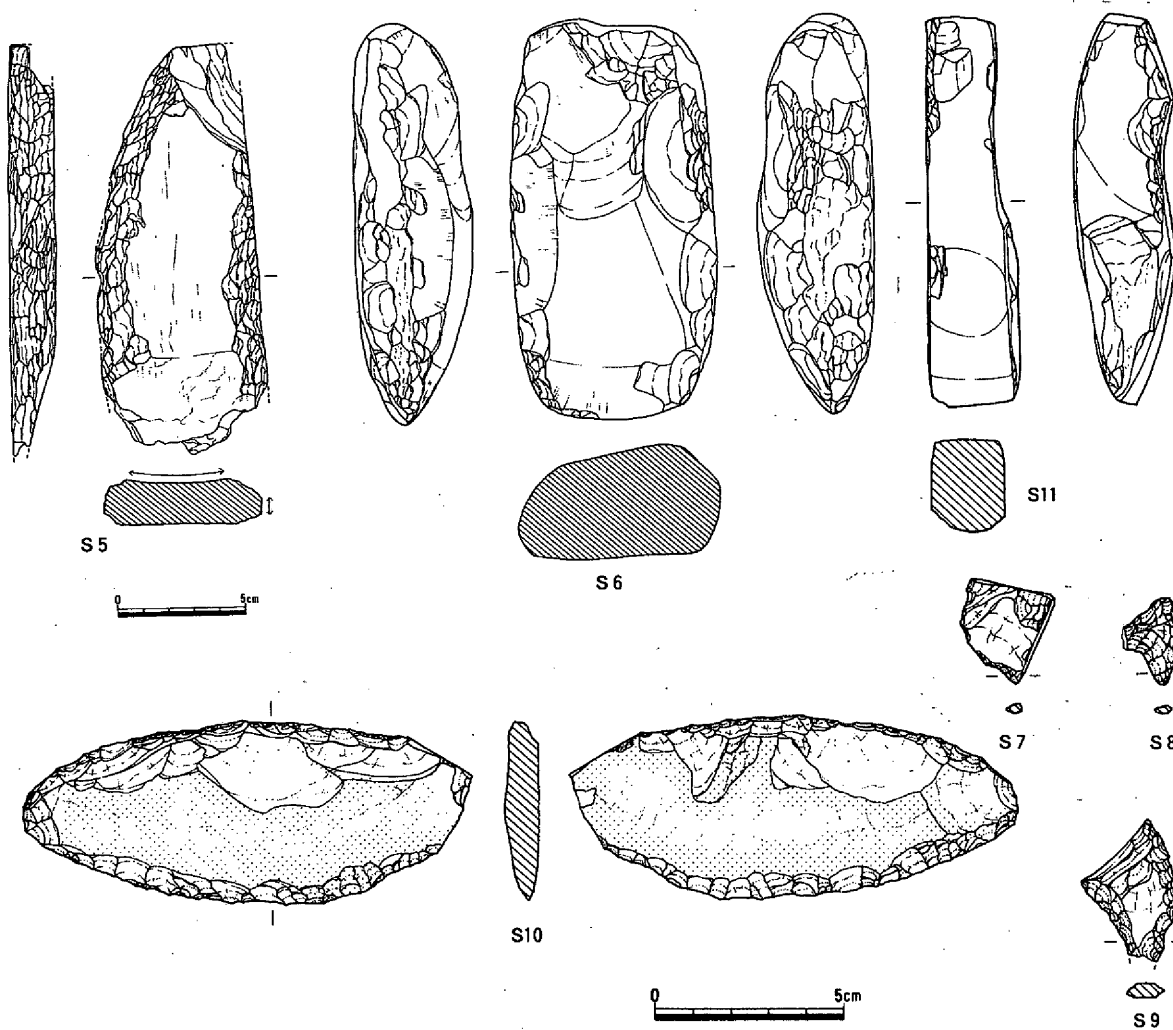
(6) 柱穴及びその他の出土遺物 (第71~74図)

柱穴内からの遺物は、弥生時代中期から後期後半の土器が出土している。器種は壺・甕・高杯等である。特に柱穴303・304からは、弥生時代中期中葉の櫛描波状文を外面に施したやや大き目の破片が認められた。

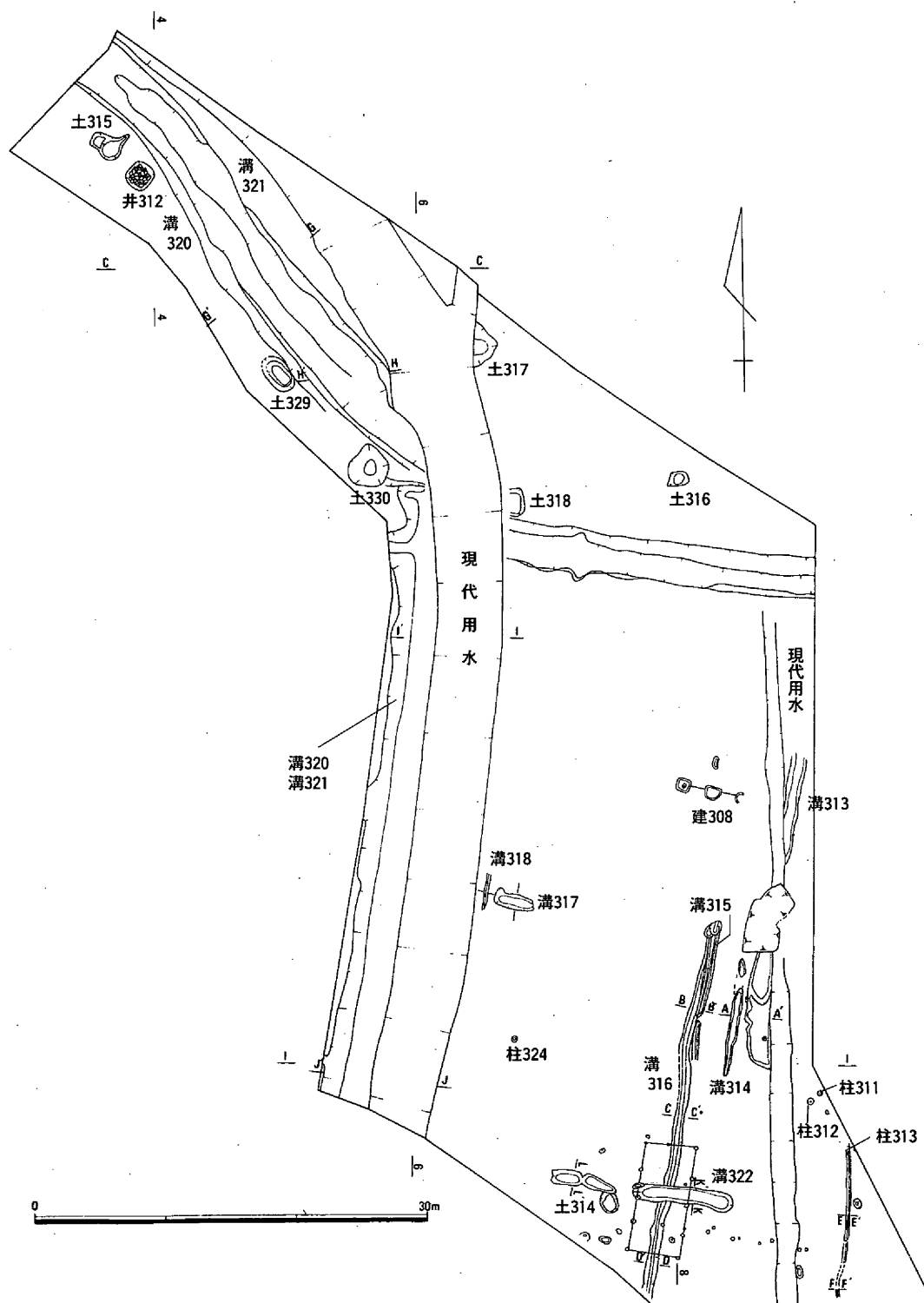
遺構に伴わない遺物では、弥生土器、土師器、須恵器等が出土している。北側の微高地下がりの斜面堆積から弥生時代前期の土器片が若干出土している。古墳時代後半では、少量だが須恵器の杯・高杯が認められる。その他に、埴輪片、土製勾玉が出土している。埴輪片は、西側調査区(当麻遺跡2)の丘陵上からもかなり出土しており、丘陵部にかけて存在していた古墳から流入したものと考えられる。石器では近・現代の用水路等に混入し石斧・石包丁等が出土している。(山磨)



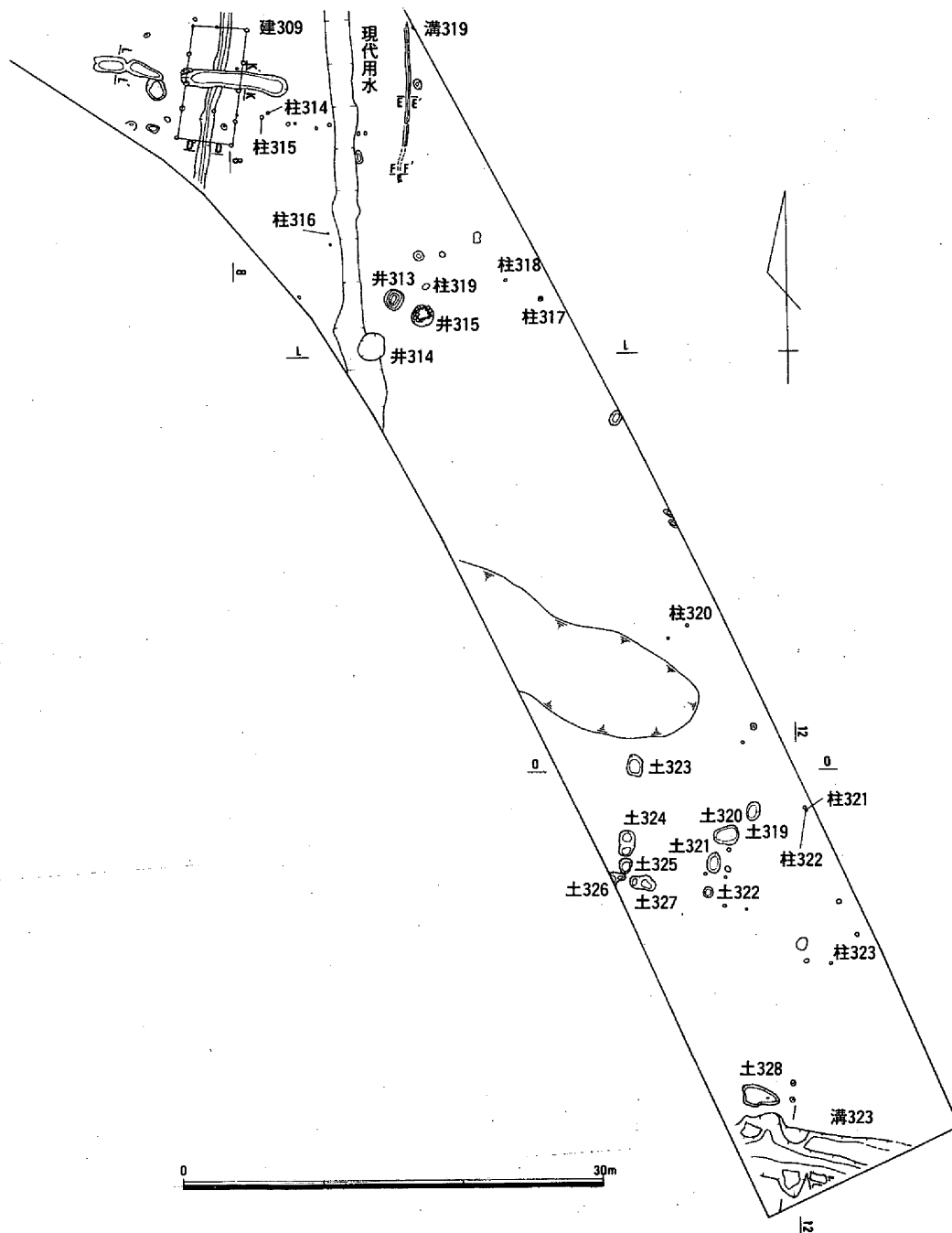
第73図 遺構に伴わない遺物〈2〉



第74図 遺構に伴わない遺物〈3〉



第75図 古代以降の遺構〈1〉(1/500)



第76図 古代以降の遺構〈2〉(1/500)

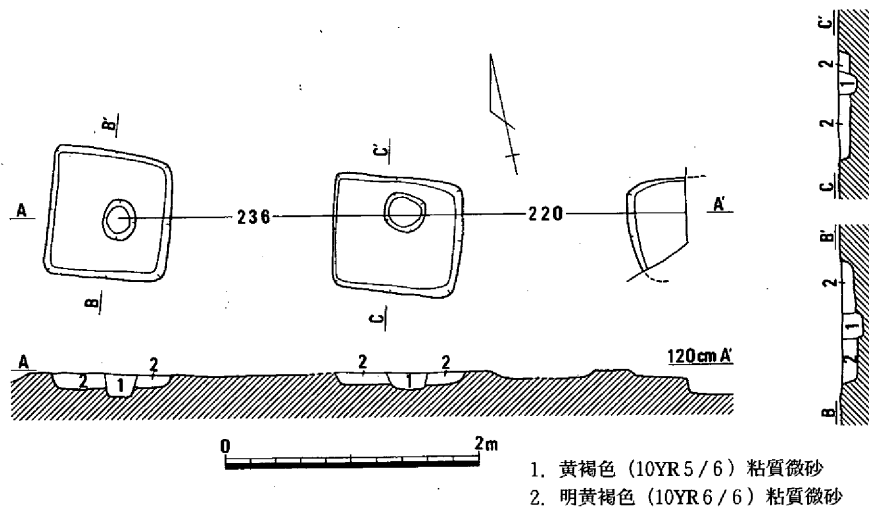
4 古代以降の遺構と遺物

(1) 建物

建物308 (第77図、図版13)

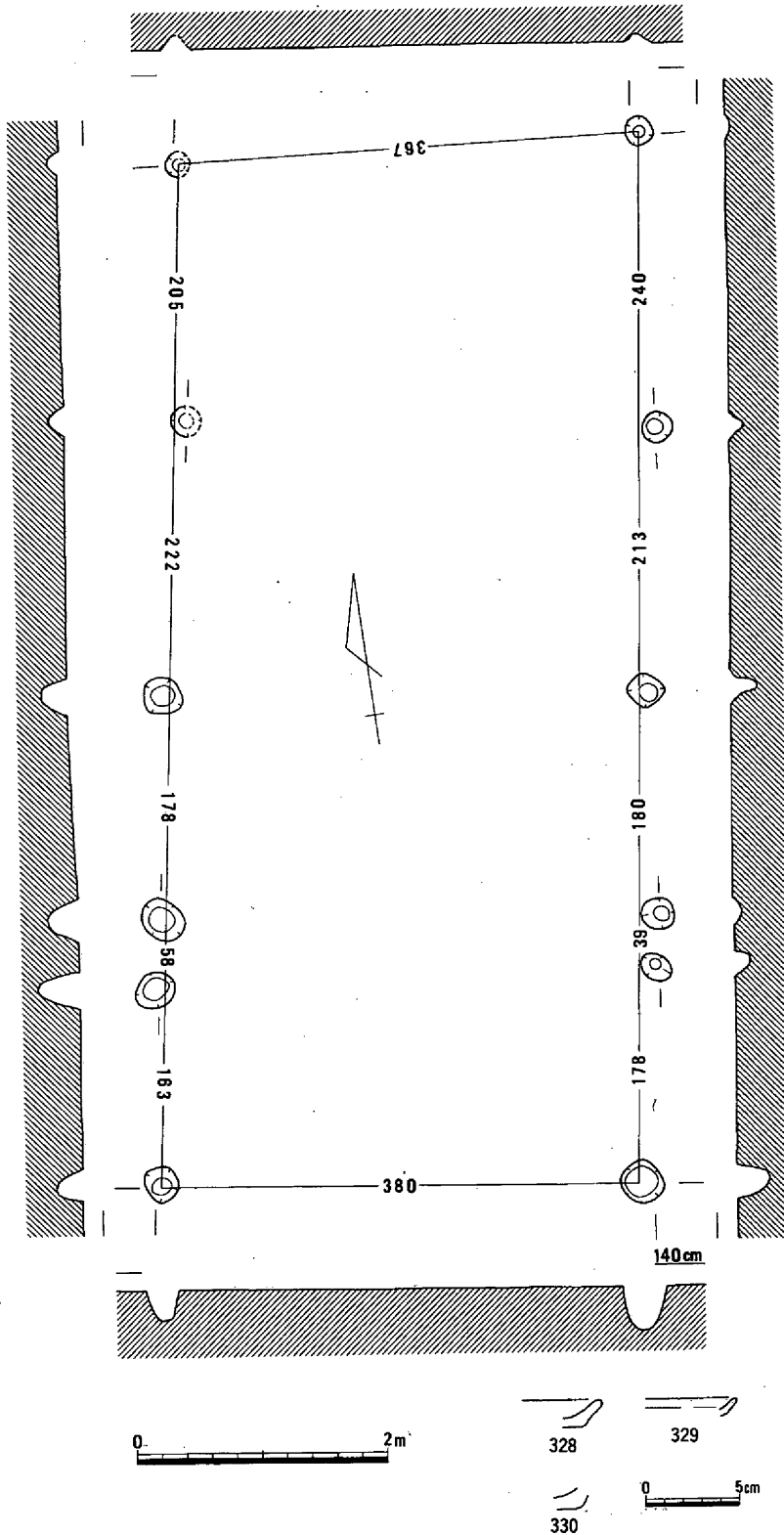
調査区中央付近の8F区に検出した方形もしくは隅丸方形の掘り方を持つ掘立柱建物の一部である。検出した柱穴は東西方向の3本の柱列のみである。柱穴の残存掘り方が深さ10cm程と浅く、北側及び西側では掘り方の底部より深く後世の水田造成等で削平されている。東側にも中世以降の遺構が重複しているため全体の規模、棟方向等不明である。ただ柱穴列より南側では検出面が同一レベルにもかかわらず未検出である。このため3本の柱列が南北棟の南側梁間か東西棟の南側の桁行の可能性が高い。柱穴掘り方は西側の2本がいずれも一辺90~100cmの方形である。また柱痕跡が西端の柱穴では掘り方のほぼ中央に、中央の柱穴ではやや北寄りに直径20~25cmの規模で認められた。柱痕跡部はいずれも掘り方底部より若干窪んでおり明瞭に残存している。柱穴の埋土はいずれも明黄褐色粘質微砂土で柱痕跡部は黄褐色土である。西側2本の柱穴の柱間は236cmである。柱列の東西方向はE-12度-Sを測る。

遺物は中央の柱穴が弥生時代の土壙303と重複して、土壙のちょうど上面に位置しているために主に弥生土器片が混じり出土している。時期は建物の規模、構造や柱穴の掘り方等から奈良時代を中心とする古代の建物群の一部と考えられる。なお、奈良時代と想定される掘立柱建物308は、今回の調査区では唯一当該期の建物遺構である。



建物309 (第78図、図版2)

調査区の中央付近の7I・J区に検出した桁行1間、梁間4間の南北方向を棟とする掘立柱建物である。本来は梁間2間の可能性があるが、建物中央を南北に溝316が流走しており柱穴が存在したか否かは不明瞭である。規模は桁行850cm、梁間380cm、床面積32.3㎡である。柱穴はいずれもほぼ円形で直径20~30cm、深さ10~35cm前後である。柱痕跡は認められなかった。桁行柱間は163~240cmと若干ば



第78図 建物309、同 出土遺物

らつきがあるが両桁行間はほぼ対応している。棟方向はN-8度-Eを測る。

遺物は各柱穴から土器の細片が出土している。器種は、図化を行った土師質小皿328~330以外に土師質椀、土鍋、瓦質土器等がある。時期は出土土器の器形特徴等から中世の掘立柱建物と考えられる。(山磨)

(2) 井戸

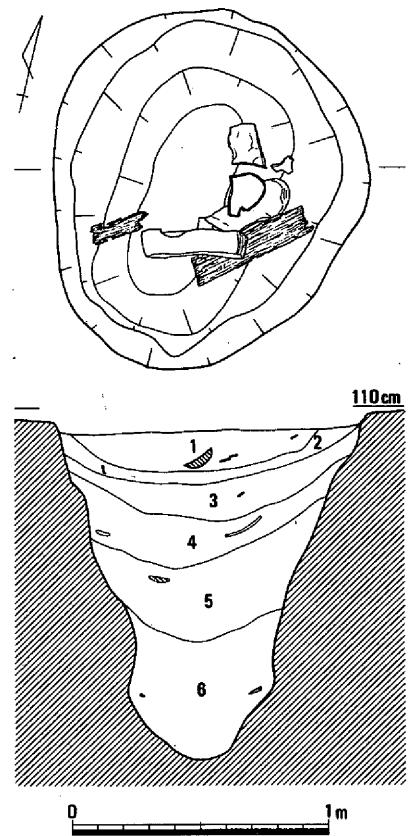
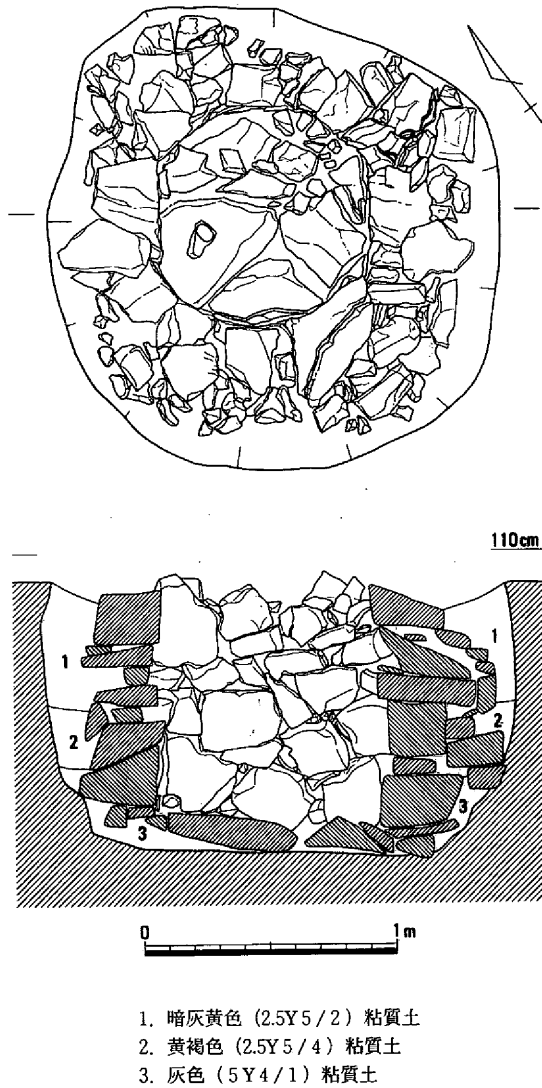
井戸312 (第79図、図版14)

調査区の北端、3B区で検出された井戸である。平面形は、やや角が崩れた正方形の掘り方に、角礫を中心とした石を八角形に組み合わせている。深さは、検出面からおよそ110cm 測り、底面の海拔高は-10cm である。断面形は、上面からほぼ垂直に掘り下げた後に、底面付近から角度を内傾させ、底面は水平となっている。埋土は、この井戸が廃絶したときに流れ込んだ土が暗灰黄色の粘質土で、下層ほど灰色が濃密となっていた。裏込めの埋土は、立ち割り断面の観察によって、構築される際に三度に分けて埋め込まれていることが認められた。

遺物は、少量の土器片と金属器1点、木製品が1点出土している。331は、土師質土器の鍋脚部である。332は、亀山焼の甕である。

2点とも上位面から出土している。

た。M2は、銅製の煙管である。最大長129.0mm、最大幅18.0mm、最大厚1.0mm、重量66.29gを測る。W6は、曲物の底板である。材はヒノキで、最大長82mm、最大幅95mm、最大厚7mmを測る。両面とも丁寧に調整が施されている。

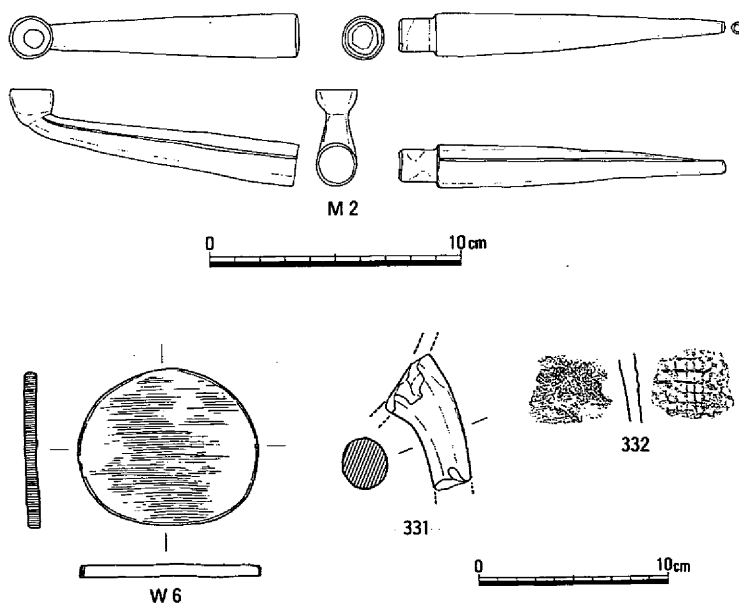


第80図 井戸313

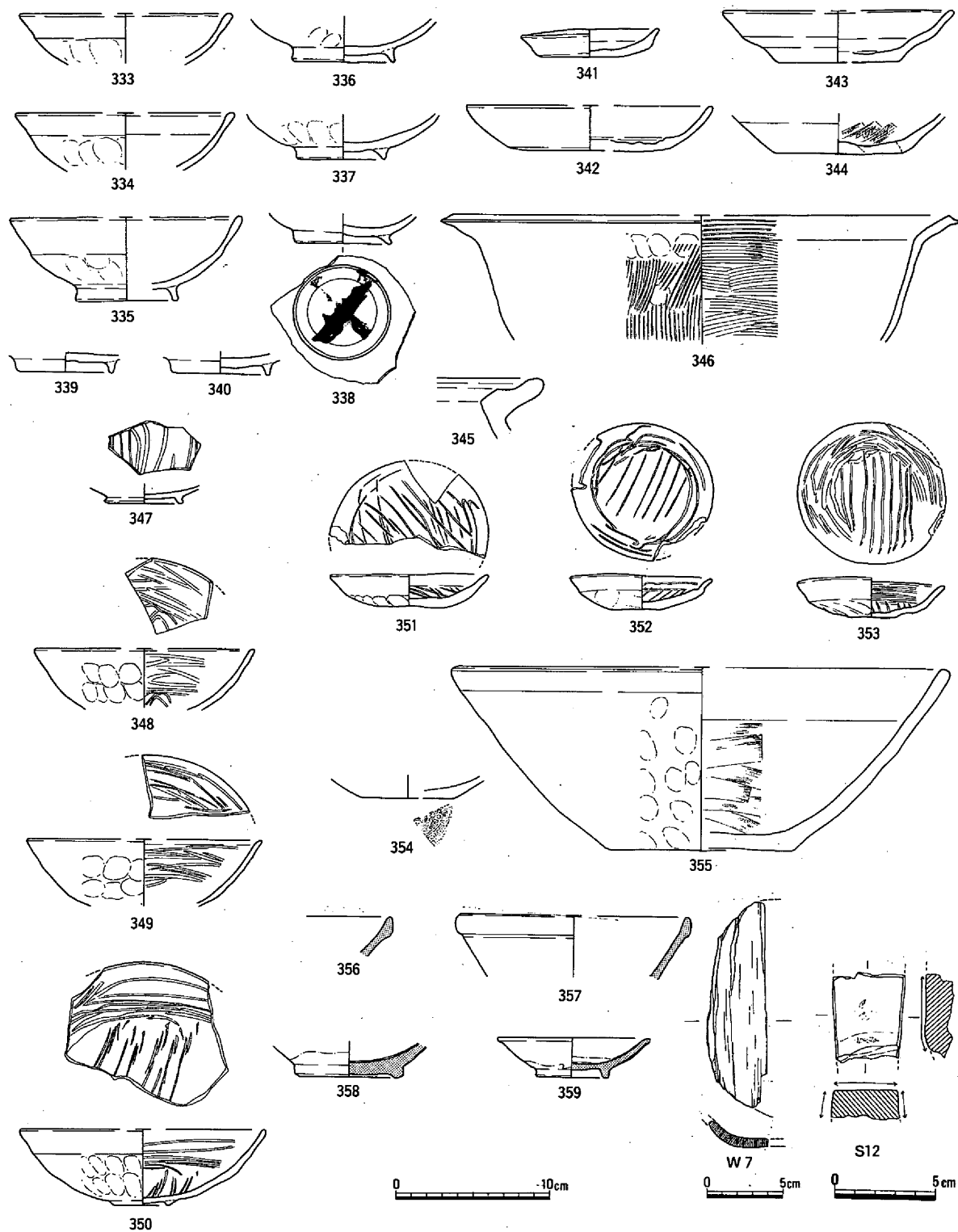
遺構の時期は、出土している遺物から近世には廃絶したものと考えられる。

井戸313 (第81図、図版14)

9 K 区の西側から検出された素掘りの井戸である。当該井戸が東流する溝24の肩口を切っている。掘り方の平面形は、南北にやや長い不整形の長楕円形状を呈す。深さは、検出面からおよそ140cmを測り、底面の海拔高は-30cmである。断面形は、上面から逆「ハ」字状に広がって、底面は平面形と

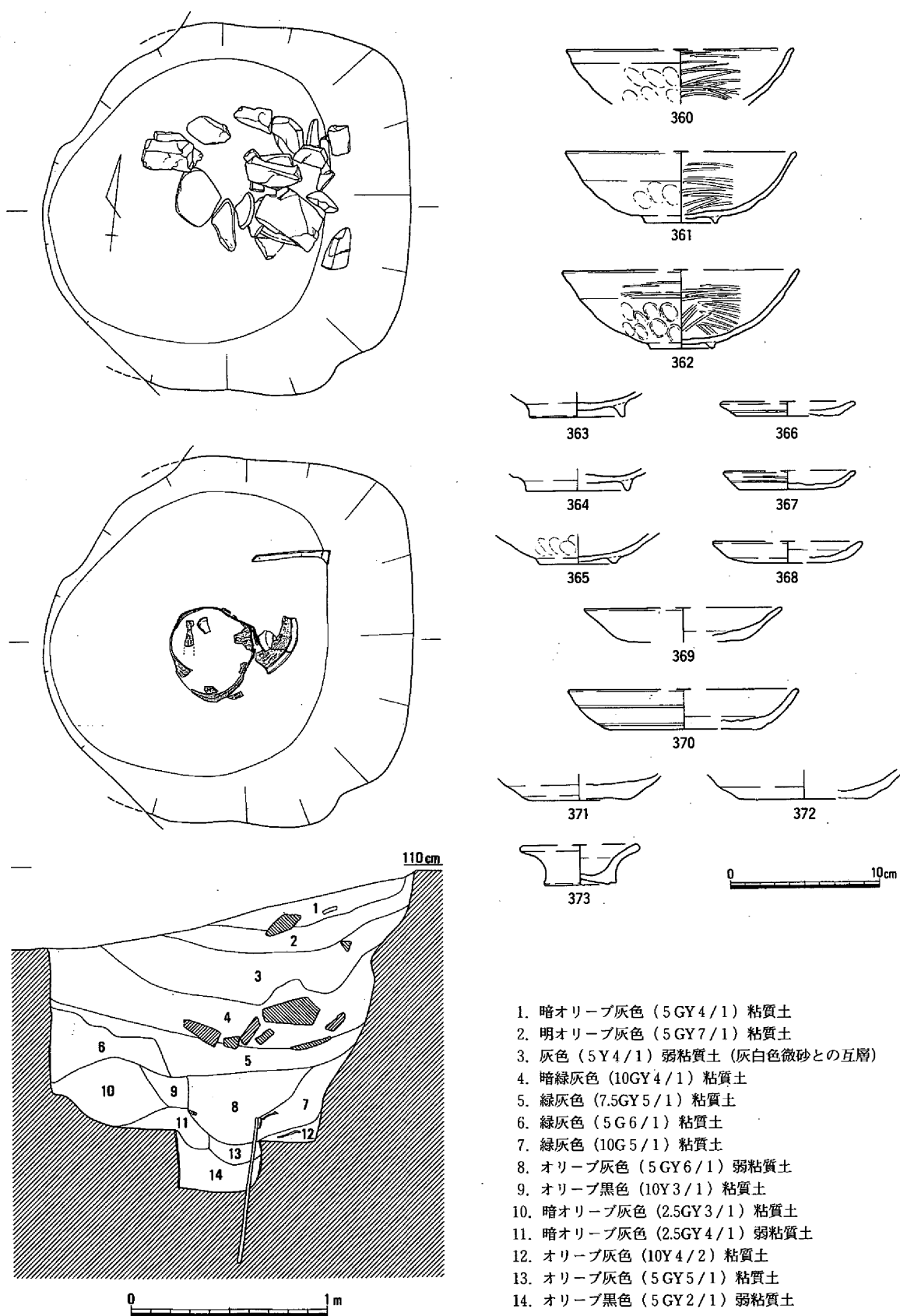


第79図 井戸312、同 出土遺物



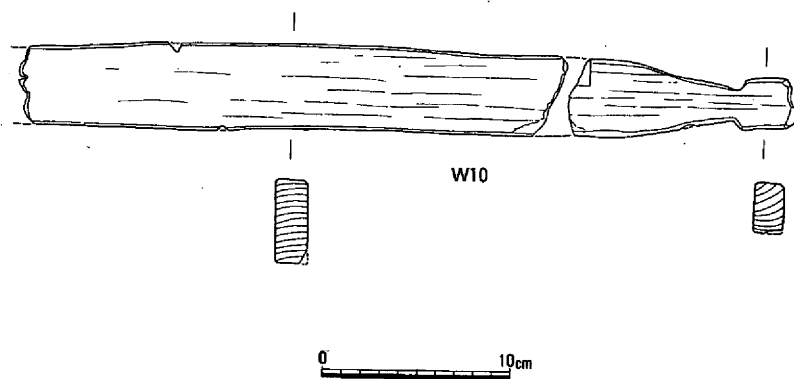
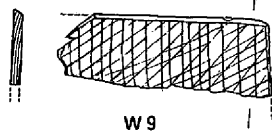
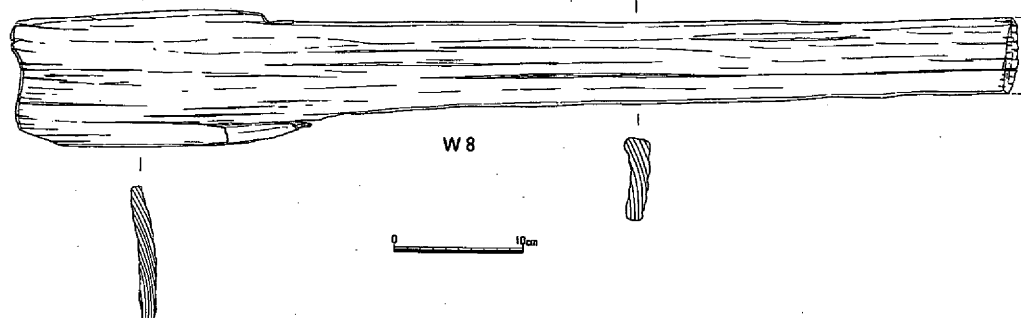
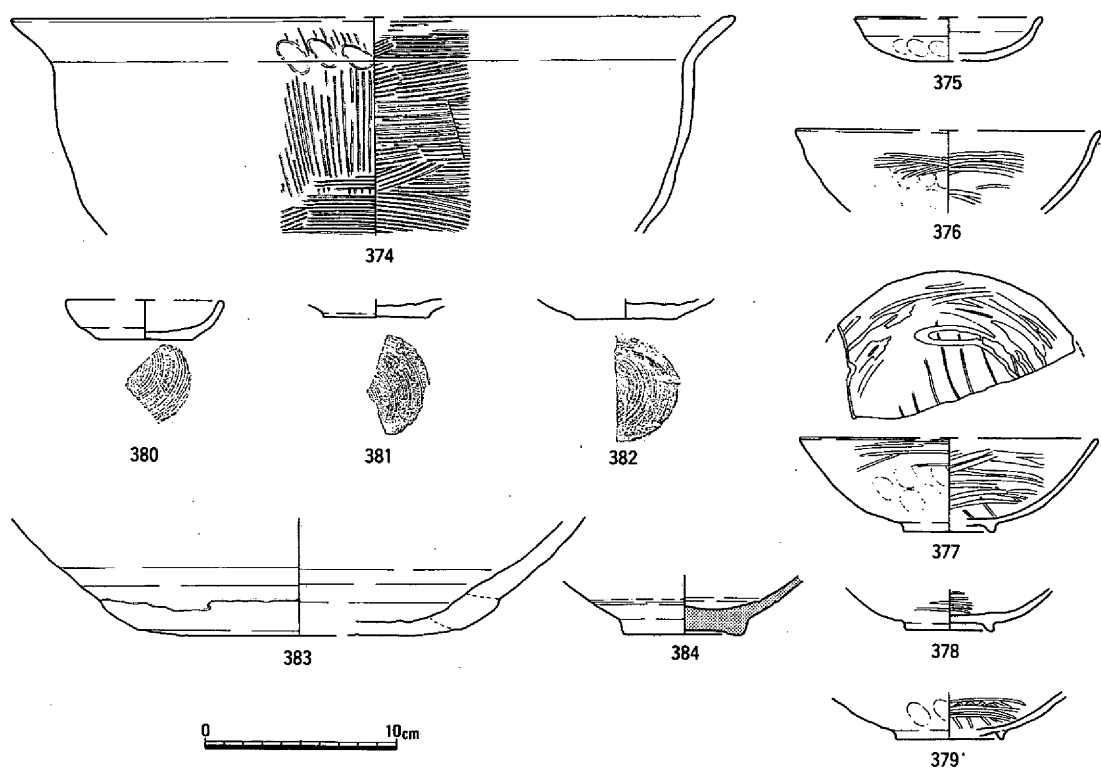
第81図 井戸313 出土遺物

同じく南北にやや長い不整形の長楕円形状を呈す。埋土は1～4層の上層と、5・6層の下層に大別できる。総じて、上層は灰黄色の砂質土で、出土した遺物の量は多くはなかった。下層は灰色の砂質土で、図示した遺物のほかに多くの遺物が出土している。また5層の底面からは土師器の碗をはじめ、角礫や木材片がまとめて出土している。



1. 暗オリーブ灰色 (5GY4/1) 粘質土
2. 明オリーブ灰色 (5GY7/1) 粘質土
3. 灰色 (5Y4/1) 弱粘質土 (灰白色微砂との互層)
4. 暗緑灰色 (10GY4/1) 粘質土
5. 緑灰色 (7.5GY5/1) 粘質土
6. 緑灰色 (5G6/1) 粘質土
7. 緑灰色 (10G5/1) 粘質土
8. オリーブ灰色 (5GY6/1) 弱粘質土
9. オリーブ黒色 (10Y3/1) 粘質土
10. 暗オリーブ灰色 (2.5GY3/1) 粘質土
11. 暗オリーブ灰色 (2.5GY4/1) 弱粘質土
12. オリーブ灰色 (10Y4/2) 粘質土
13. オリーブ灰色 (5GY5/1) 粘質土
14. オリーブ黒色 (5GY2/1) 弱粘質土

第82図 井戸314、同 出土遺物〈1〉

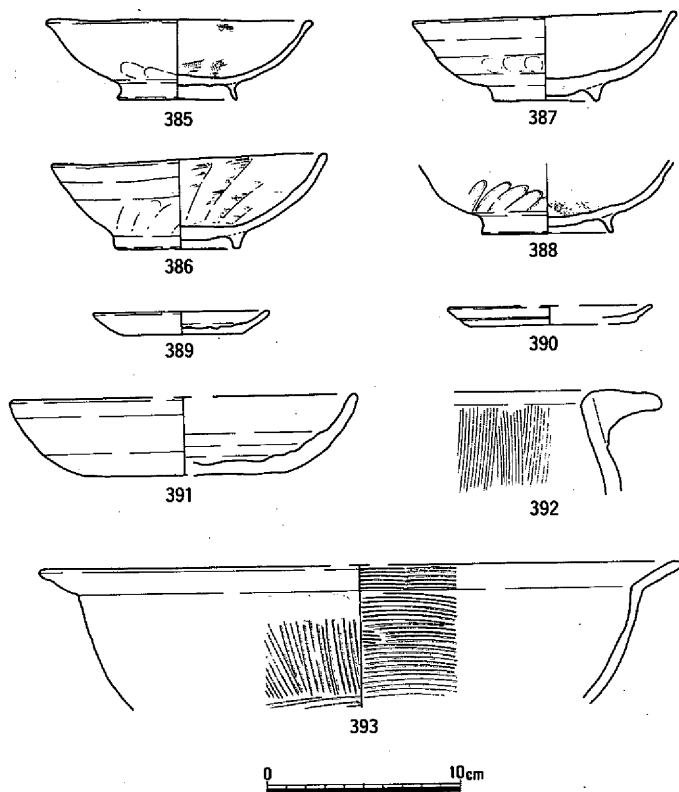
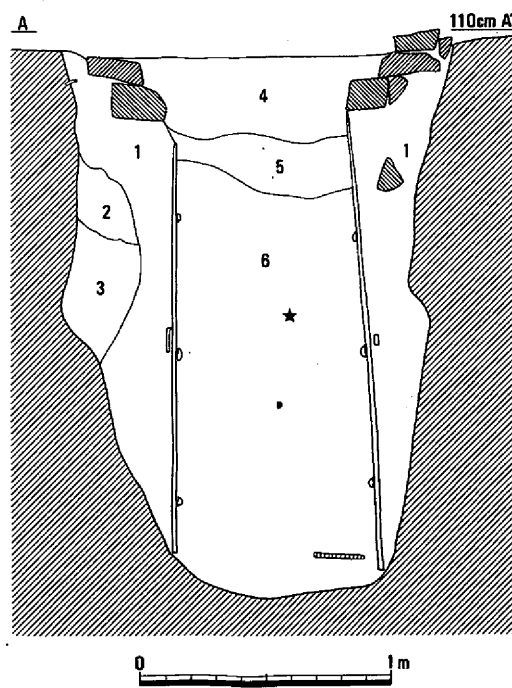
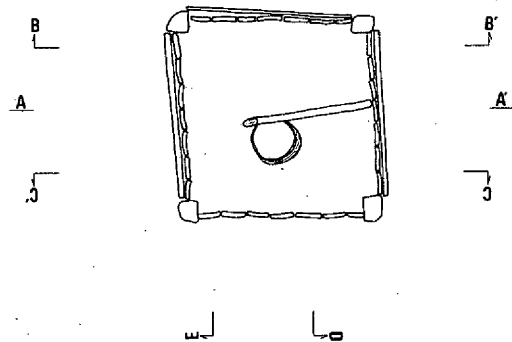
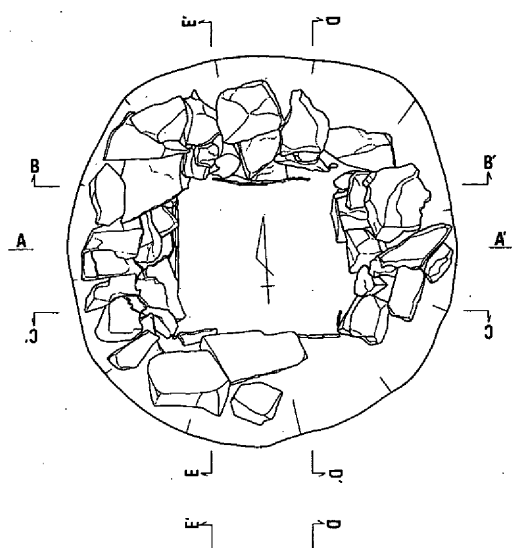


第83図 井戸314 出土遺物〈2〉

遺物は、333から340が、土師器の碗である。その中でも上層から出土した底部338には、高台の裏面に「X?」の墨書が認められた。347から353は瓦器の碗と皿である。碗は、いずれも体部下半には指頭圧痕が明瞭に看取される。356から359は、白磁の碗である。口縁端部が玉縁状に垂れ下がり、灰白色の色調を呈す。その他、曲物の底板W7や、砥石S12が出土している。砥石は流紋岩製で、最大長42.0mm、最大幅36.0mm、最大厚14.0mm、重量36.54gを測る。遺構の時期は、出土した土器から鎌倉時代には廃絶していたものと考えられる。

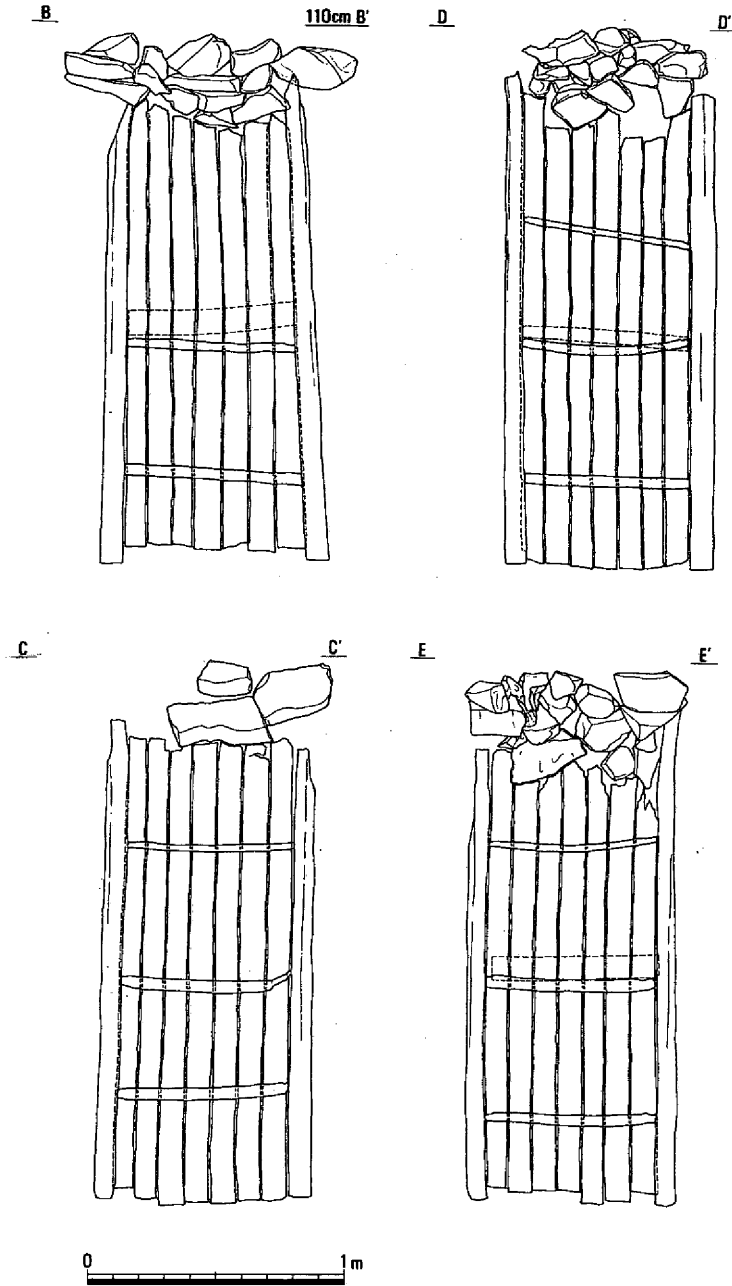
井戸314 (第82・83図、図版15)

8L区と9L区の境で検出された素掘りで井筒を伴う井戸である。前述の井戸313の南西約4mの地点に位置し、西側の肩口が溝24を切っている。



1. 褐灰色 (10YR 4/1) 粘質土
2. オリーブ灰色 (2.5GY 6/1) 砂質土
3. 暗オリーブ灰色 (2.5GY 4/1) 砂質土
4. 灰白色 (10YR 7/1) 砂質土
5. 褐灰色 (10YR 5/1) 砂質土
6. 黄灰色 (2.5Y 4/1) 粘質土

第84図 井戸315 <1>、同 出土遺物 <1>



第85図 井戸315〈2〉

井戸315 (第84~87図、図版16)

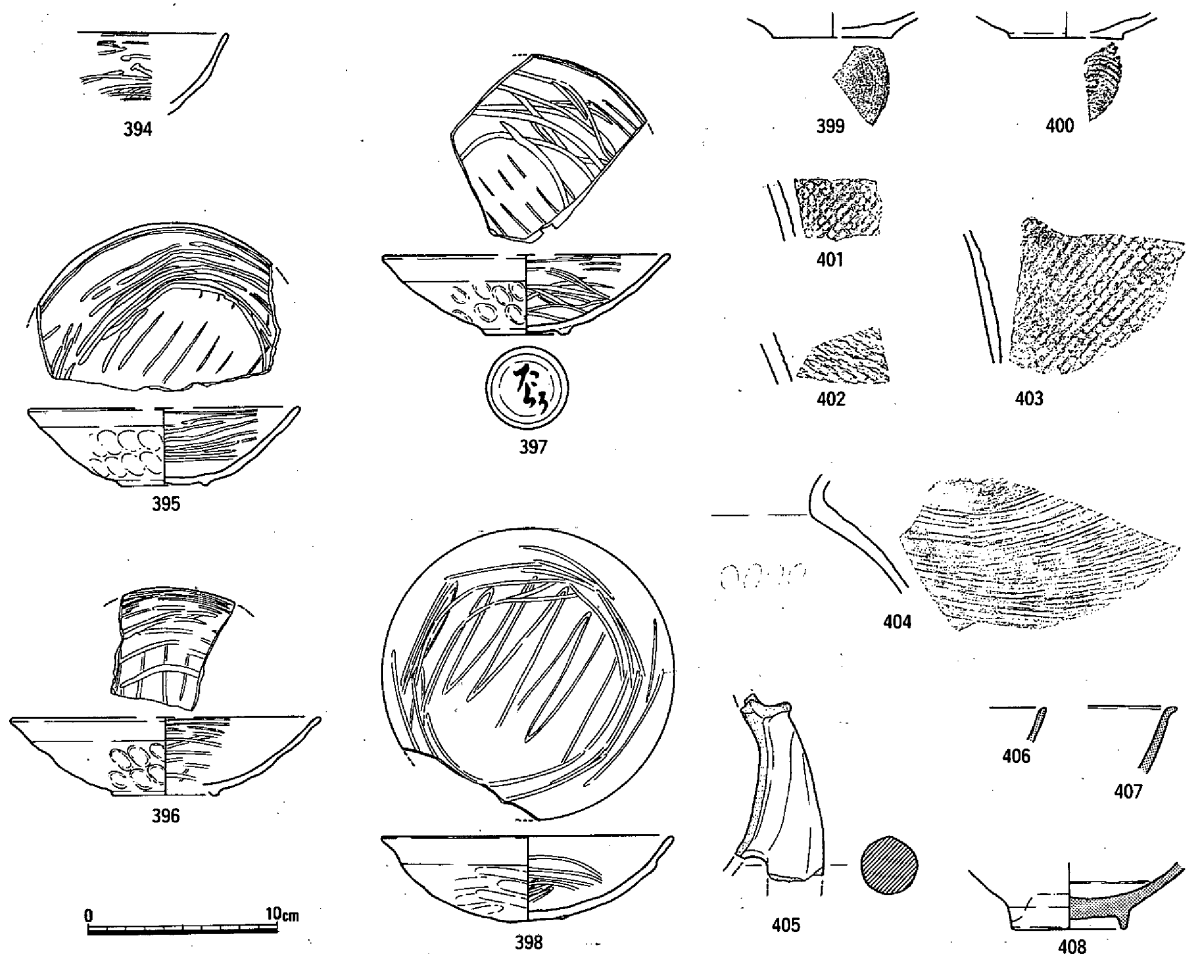
9 L区で検出された石組みの井戸である。前述の井戸313の南東約2 mに位置する。掘り方の平面形は、径およそ150cmの円形状を呈していた。深さは、検出面からおよそ215cmを測り、底面の海拔高は-115cmである。掘り方の断面形から構築法を推定すると、ほぼ垂直に掘り下げて湧水点に達すると、角材を7本一組にした井桁を中心部分に据え付けた後に、褐灰色の粘質土によって裏込めが埋め込まれる。その埋め込まれた上面に方形に組まれた石組が据え付けられている。調査時点では石組みは下の二段分のみ認められた。埋土から、井桁内部に堆積した土がほぼ同じことであることで、洪水のような一度に埋没したものと考えられる。

出土した遺物の量は、多くはない。井桁内部から出土した土師器の椀386は、この井戸から出土した土器の中で唯一の完形品である。397の瓦器椀は、体部外面に放射状の指頭圧痕が明瞭に看取され、退

掘り方の平面形は、隅丸の正方形状を呈する。深さは検出面より井筒の上面までがおよそ140cmを測り、最下層までが165cmである。底面の海拔高は-55cmである。断面形は、検出面よりほぼ垂直に掘り下げられており、底面の中央部分に井筒が設置されていた。井筒W9は二段重ねで、薄く切られた木片に縦方向の刻み目を施し、円形に組めるように加工されていた。また調査時点でも井筒の底から常時湧水が認められた。埋土は、全体的に灰色か、黒色に大別される。中段4層には廃棄した際に投入されたとみられる角礫が認められた。

遺物は多くはないが、土師器の椀360~365を中心に瓦器、須恵器等が出土している。椀は口径14cm強を測り、内面に粗いヘラミガキ調整の残るものが多く、高台が比較的退化している。さらにその他の遺物として、転用材と思われる加工板材W8が井筒の中に奥深く差し込まれていた。

遺構の時期は、出土した土師器の椀などから14世紀の初頭と考えられる。



第86図 井戸315 出土遺物〈2〉

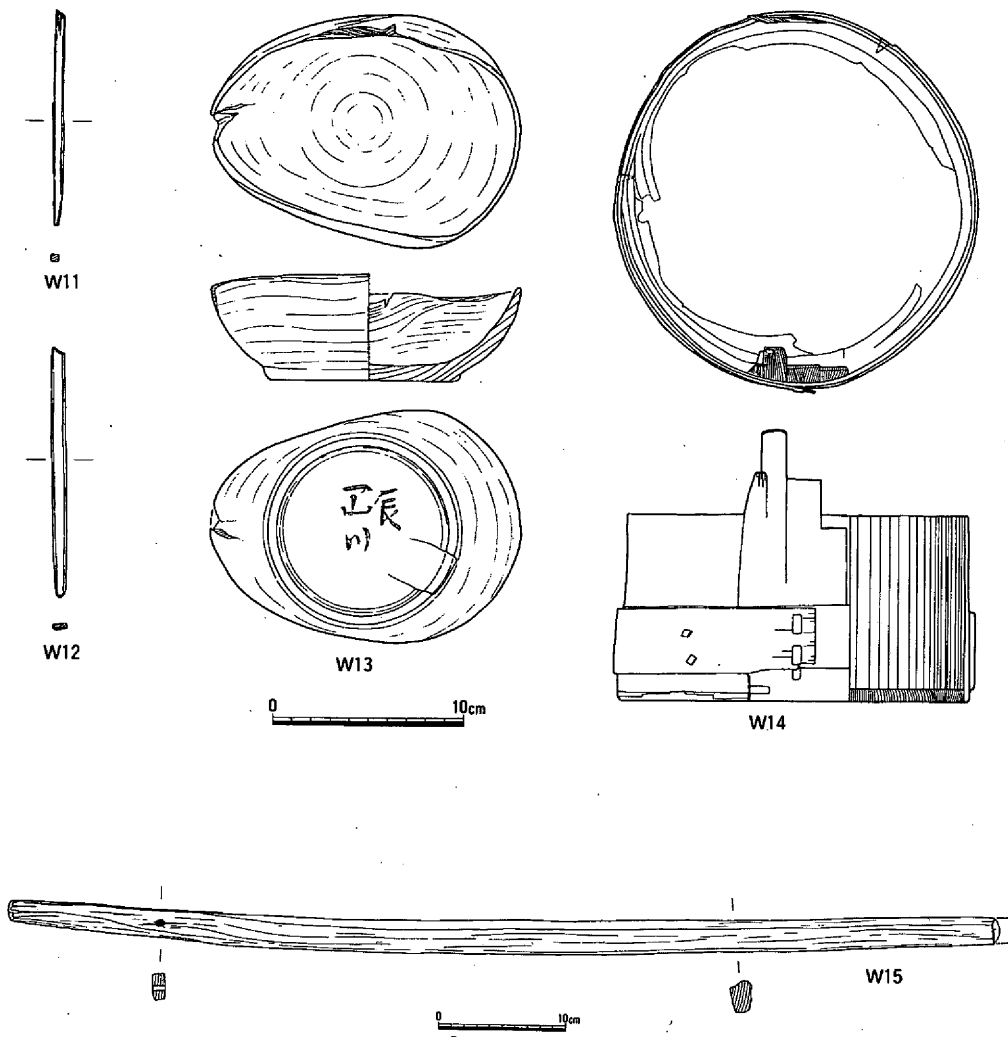
化した高台の内側に「た々(た)ら?」の墨書が明瞭に残存している。その他に、木器として箸W11・12や漆碗W13、曲物W14、刀形木器W15が出土している。漆碗は、最大長122mm、最大幅163mm、最大厚9mmを測り、トチノキをくり抜いて作られている。保存処理に伴ってひずみが顕著となっているが、口径16.2cm、底の径9.8cm、器高5.7cmを測る。また高台の内側に「銀川?」の墨書が認められる。刀形木器は、6層の中程に落ち込むようにして出土していた。全体的に湾曲しており、切先とみられる部分が欠落していた。柄頭から12cmのところ目釘穴が貫通している。刀身部分の最大幅は27mmで、最大厚17mmを測る。

遺構の時期は、出土した土器から13世紀の中頃には洪水等で廃絶したものと考えられる。(根木)

(3) 土壇

土壇314 (第88図、図版10)

調査区中央の遺構密集区の7I・J区境に検出した。土壇の北端を溝322が東西に走り一部削平されている。南東端では柱穴と重複している。平面形は不整楕円形をなし、規模は現存長径170cm、短径120cm、深さ25cmである。断面は浅い皿状を呈し、底面は若干凹凸がある。埋土は2層に大別可能で、下層の灰黄褐色砂質土の底面から須恵器の甕片が出土している。



第87図 井戸315 出土遺物〈3〉

遺物は須恵器の甕片と杯蓋の曲折する端部片、鉄滓1点が出土している。土壌の時期は遺構の切り合いや埋土、出土土器等から奈良時代と考えられる。

土壌315 (第89図)

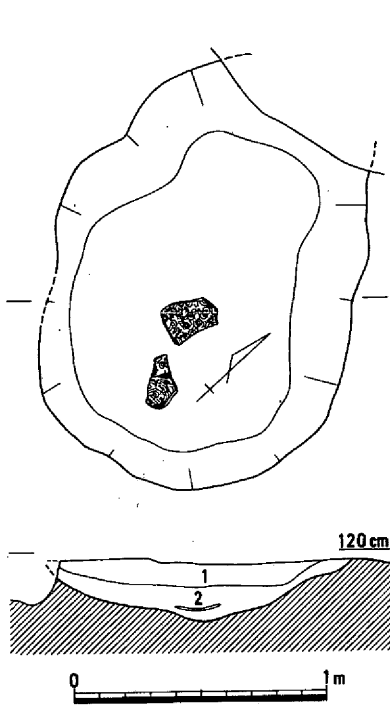
調査区北西端の3B区に井戸312と1mほどの間隔を置き北西側に検出した。平面形は楕円形の形状に溝状の掘り込みが付随する。土壌本体の規模は長径250cm、短径170cmを測る。底面は2段になっており東側で一段深く40cmを測る。溝状部は長さ80cm程で底部レベルは土壌底部東側と等しい。東側の段付近で直径20cm程度の角礫1個を検出している。

出土土器は皆無で時期の確定がしがたいが、埋土等から中世以前の土壌の可能性が高い。

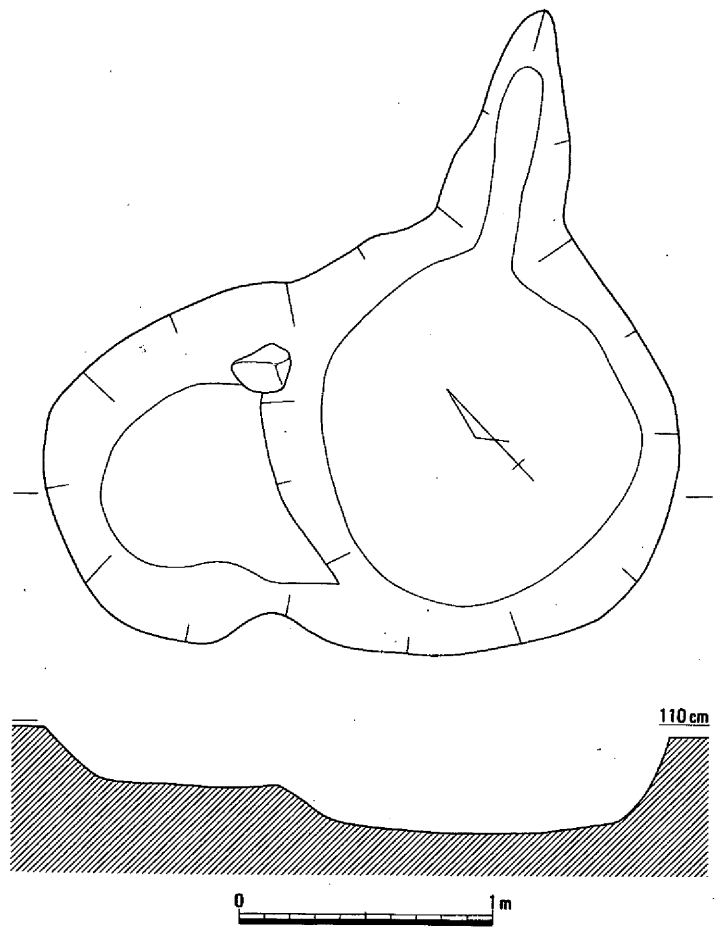
土壌316 (第90図)

調査区北端の7D区に検出した。平面形は西端を暗渠により切られているが楕円形をなす。規模は長径約170cm、短径105cm、最大深さ25cmを測る。底面は若干凹凸があり東側が少し深くなる。埋土はオリブ黒色弱粘質土のみの1層である。

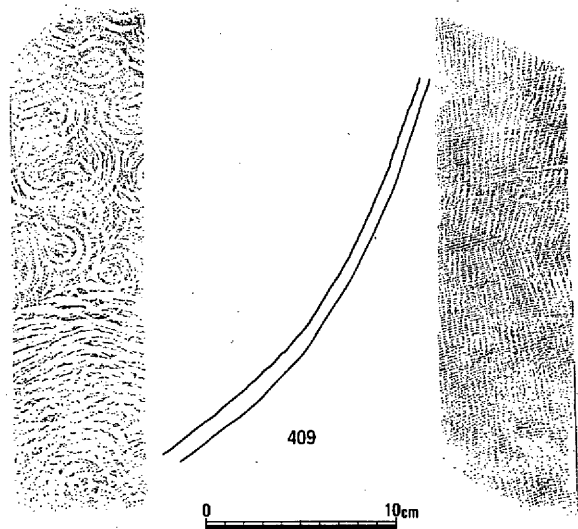
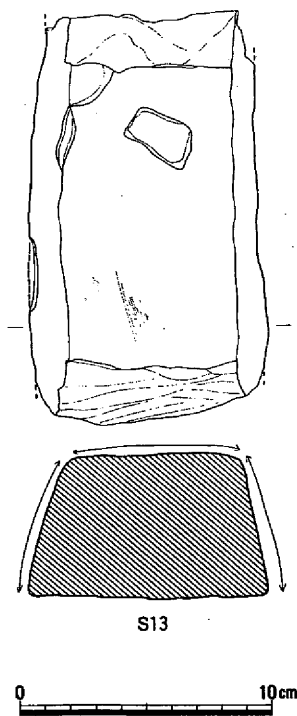
出土遺物は近世陶磁器、近世瓦の細片がある。時期は出土遺物の特徴や埋土から見て近世以降と考



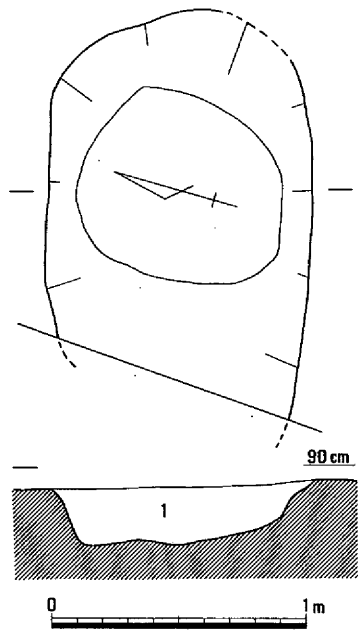
1. にぶい黄橙色 (10YR6/3) 砂質土
2. 灰黄褐色 (10YR5/2) 砂質土



第89図 土壌315



第88図 土壌314、同 出土遺物



1. オリーブ黒色 (5Y3/1) 弱粘質土

第90図 土壙316

層可能で、いずれも砂粒を含む粘質土が堆積している。

遺物は比較的多く、埋土中から備前焼播鉢・甕、須恵器、土師質碗(早島式)・皿、瓦器、瓦、青磁、土師質鍋、瓦質鍋、竈、磁器等の細片が出土している。時期は埋土や出土遺物等から中世後半期以降と考えられる。

土壙318 (第92図)

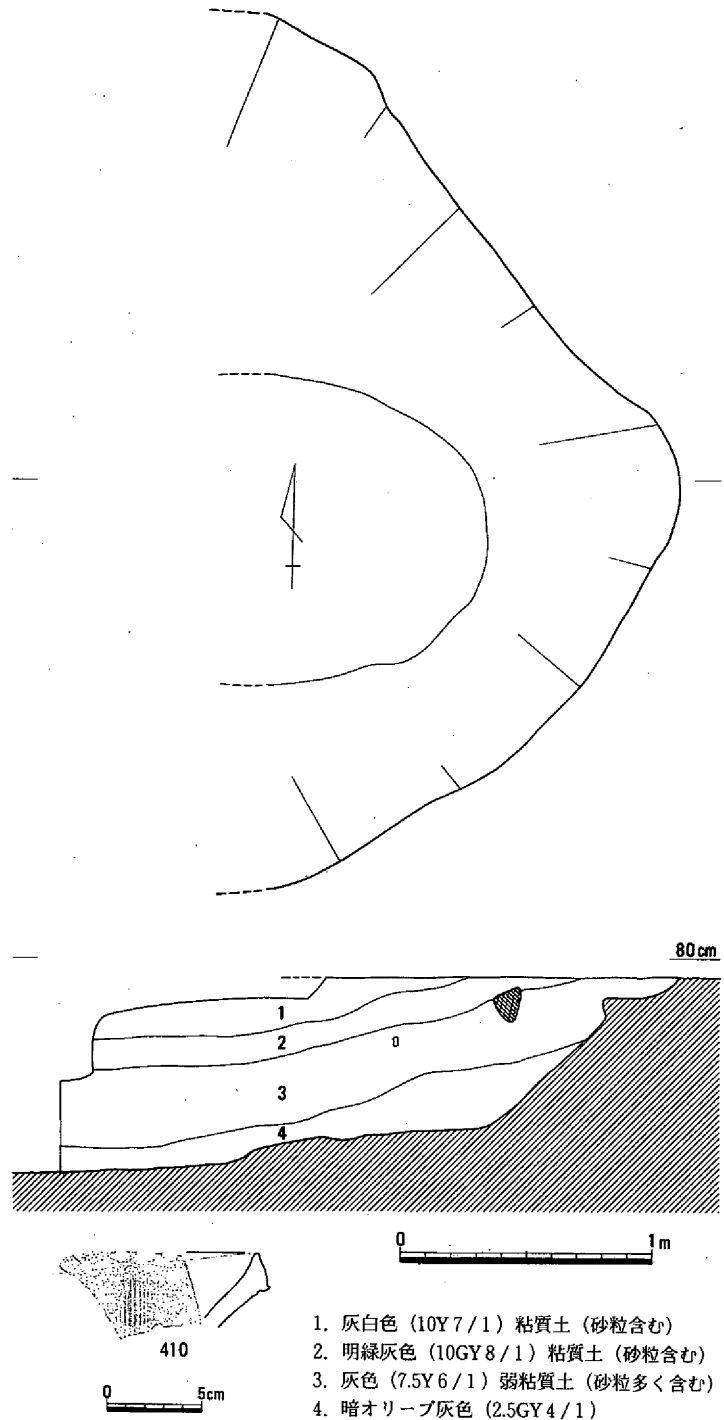
調査区北端の6D区に検出した。土壙の西側を現用水路により切られているが方形の掘り方をなす。規模は南北200cm、東西現存120cm、最大深さ20cmを測る。断面は皿状に近い形状をなす。

出土遺物は備前焼、須恵器、近世陶磁器の細片がある。時期は出土遺物や埋土から見て近世以降と考えられる。

えられる。

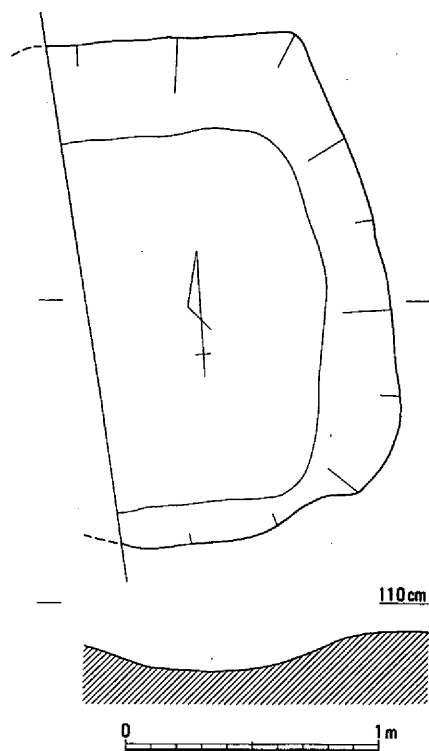
土壙317 (第91図、図版17)

調査区北端の6C区に検出した。土壙の西半分は現用水路により削平されている。検出部は半円形に近い形状をなし、規模は南北径345cm、東西径165cm、深さ75cmである。断面は播鉢状もしくは逆台形状をなし、底面は平らである。埋土は4層に分

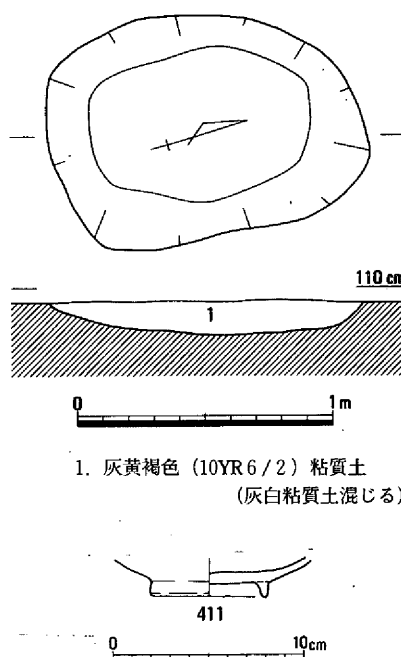


- 1. 灰白色 (10Y7/1) 粘質土 (砂粒含む)
- 2. 明緑灰色 (10GY8/1) 粘質土 (砂粒含む)
- 3. 灰色 (7.5Y6/1) 弱粘質土 (砂粒多く含む)
- 4. 暗オリーブ灰色 (2.5GY4/1)

第91図 土壙317、同 出土遺物



第92図 土壙318



第93図 土壙319、同 出土遺物

土壙319 (第93図)

調査区南端の110区に南北に4基連なる土壙群の北端の土壙である。平面形は楕円形を呈し、規模は長径129cm、短径90cm、深さ15cm弱である。断面は皿状をなし、ほぼ平らな底面である。埋土は褐色、黄色、灰色の混じった粘質土の1層のみである。

遺物は埋土中から土師質碗・皿、土鍋、須恵器等の土器片が出土している。土壙の時期は埋土や出土した土師質碗の形態等から中世前半の鎌倉時代と考えられる。

土壙320 (第94図)

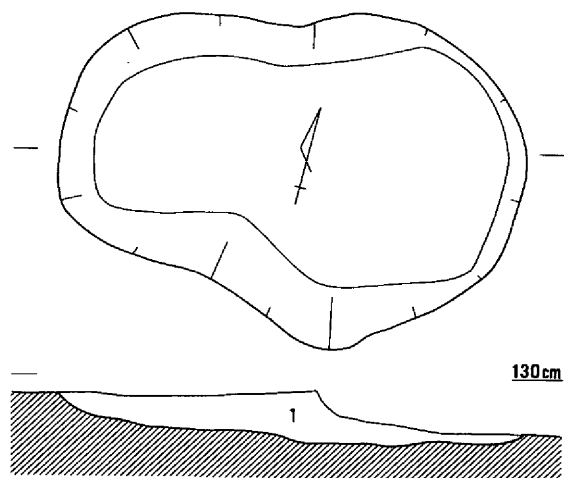
調査区南端の110区に南北に4基連なる土壙群のうちの1基である。溝311と重複している。平面形は、楕円形に近い形状をなすが、北半分が15cm程削平されている。規模は長径180cm、短径130cm、最大深さ20cmである。断面は皿状をなし、底面に若干の凹凸がある。埋土は一連の土壙群と同様の褐色、黄色、灰色が混じった粘質土の1層のみである。

遺物は埋土中から土師質と瓦器の碗が出土している。土壙の時期は埋土や出土遺物等から中世前半鎌倉時代の12世紀末～13世紀と考えられる。

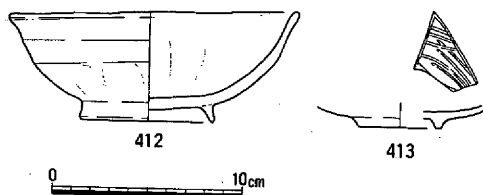
土壙321 (第95図、図版18)

調査区南端の土壙群の1基で110区に土壙322・323の間に検出した。平面形はやや不整長方形を呈し、規模は長辺130cm、短辺90cm、深さ30cmである。断面は逆台形に近い形状をなし、底面はほぼ平らである。埋土は土壙322～324と同様の褐色、黄色、灰色の混じった粘質土の1層のみである。

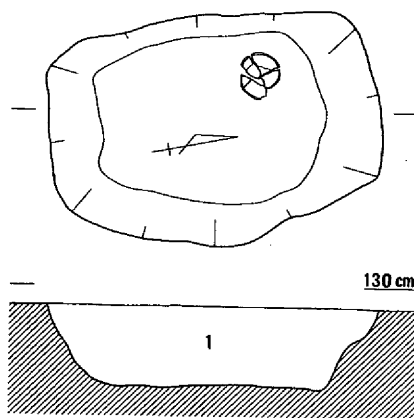
遺物は土壙内のやや北よりの埋土中(図示)からほぼ完存する土師質碗が出土している。この他に、土師質皿、土鍋、白磁、須恵器等が出土している。土壙の時期は埋土や出土遺物等から中世前半鎌倉時代の12世紀末～13世紀と考えられる。



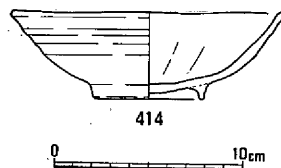
1. 灰黄褐色 (10YR6/2) 粘質土
(灰白粘質土混じる)



第94図 土壙320、同 出土遺物



1. 灰黄褐色 (10YR6/2) 粘質土
(灰白粘質土混じる)



第95図 土壙321、同 出土遺物

土壙322 (第96図)

調査区南端の土壙群の1基で、110区に土壙321と1mの間隔を置き南側に検出した。平面形は隅丸方形を呈し、規模は長辺70cm、短辺60cm、深さ10cmである。断面は浅い皿状を呈し、底面はほぼ平らである。埋土は土壙323~326と同様の褐色、黄色、灰色の粘質混じり土の1層のみである。

出土遺物は土師器椀、土鍋、須恵器杯の口縁部小片がある。時期は埋土や出土土器の器形特徴等から中世の土壙群の1基と考えられる。

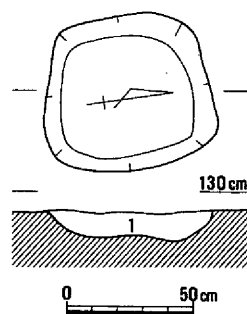
土壙323 (第97図)

調査区南端の100・N区境に検出した土壙群の1基である。土壙324~326と同様に浅い掘り方を持つ2段掘りである。平面形は北端の一部が削平されているため、やや歪んでいるが長方形に近い形状である。現存規模は長辺130cm、短辺100cm、最大深さ35cmである。断面は浅い1段目から逆台形の深い掘り方に続く。底面はほぼ平坦である。埋土は一連の土壙324~326と同様の褐色、黄色、灰色の粘質混り土である。

出土遺物は皆無で時期の確定かしがたいが、埋土や形状等から土壙324等と一連の中世の土壙群と想定される。

土壙324 (第98図)

調査区南端の100区に検出した土壙群の1基である。平面形は長方形を呈し、南半が浅く2段の掘



1. 灰黄褐色 (10YR6/2) 粘質土
(灰白粘質土混じる)

第96図 土壙322

り方となっていて35cmの高低差がある。規模は長辺170cm、短辺110cm、最大深さ45cmである。埋土は明瞭な分層は認められず褐色、黄色、灰色の粘質土の混じり土で、南側の浅い掘り方の埋土は若干黄色土が多い状況である。

出土遺物は、土師器の細片と土錘が1点ある。土壌の時期は、埋土や出土遺物の器形特徴から判断して中世頃と考えられる。

土壌325 (第98図)

調査区南端の100区で土壌324の南側に25cmの間隔を置き検出した。平面形は不整円形を呈し、長径100cm、短径85cm、深さ50cmである。断面は逆台形をなし、底面で若干凹凸がある。埋土は土壌324と同様の褐色、黄色、灰色の粘質土の混じった土層で、下層の10cm程度が黄色土が主体のために2層に大別している。

出土遺物は、少量の土器片のみで図化不可能である。土壌の時期は、埋土や出土土器の器形特徴等から判断して中世頃と考えられる。

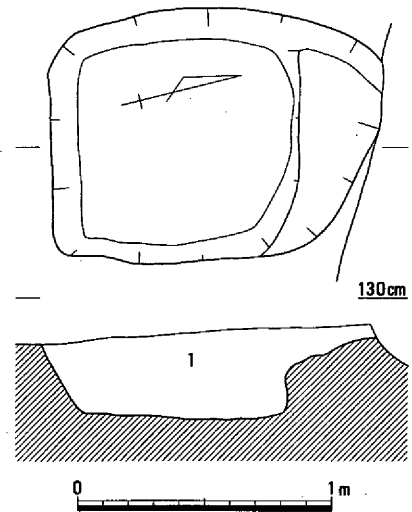
土壌326 (第99図)

調査区南端の100区に土壌325に接するように検出した。土壌324と同様に浅い掘り方を持つ2段掘りの形状をなすが、調査区境のため全貌は不明瞭である。検出規模は東西長120cm、南北長110cm、最大深さ45cmである。断面は浅い皿状の掘り方に逆台形状の深い掘り方が続く。埋土は土壌324・325と同様の褐色、黄色、灰色の混じった粘質土である。

出土遺物は皆無で時期の確定かしがたいが、埋土や形状等から土壌25・26と同様の中世頃の土壌群と想定される。

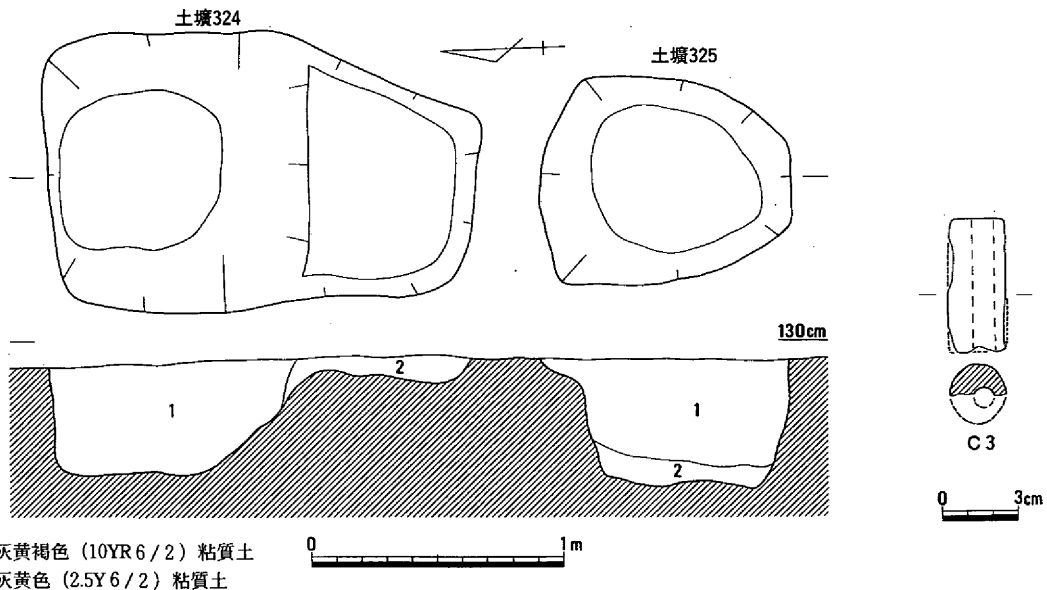
土壌327 (第99図)

調査区南端の100区に土壌325・326と40cmの間隔を置き検出した。土壌325・326と同様に浅い掘り



1. 灰黄褐色 (10YR 6/2) 粘質土

第97図 土壌323



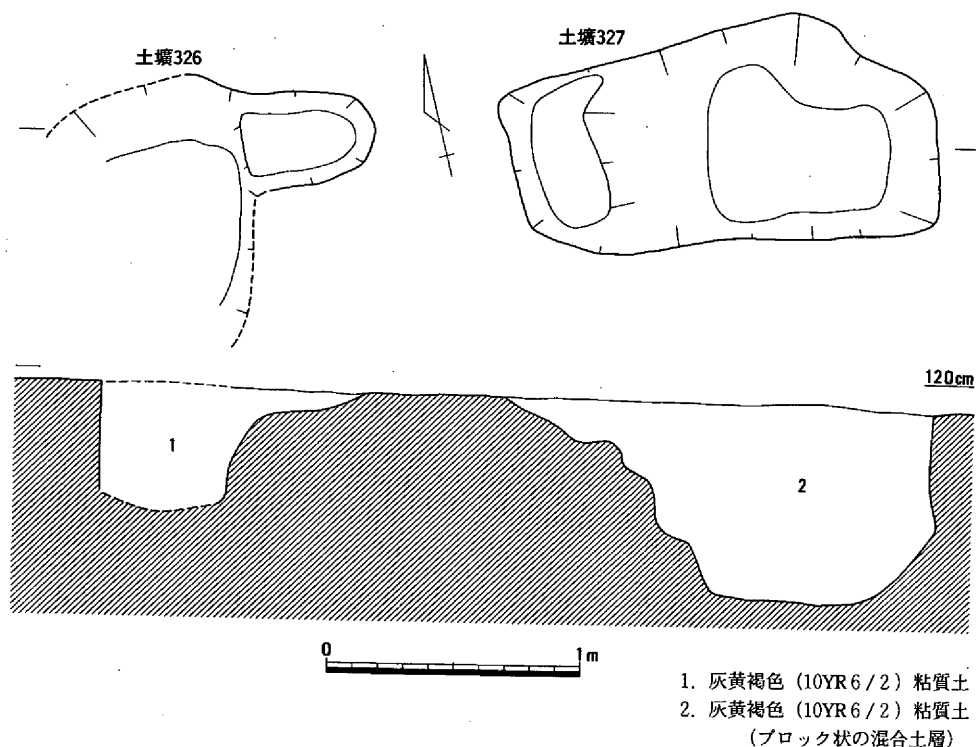
1. 灰黄褐色 (10YR 6/2) 粘質土
2. 灰黄色 (2.5Y 6/2) 粘質土

第98図 土壌324・325、土壌324 出土遺物

第3章 発掘調査の概要

方を持つ2段掘りである。平面形はやや不整形な長方形を呈し、規模は長辺165cm、短辺90cm、最大深さ80cmである。断面は土壙326と同様に浅い掘り方の1段目から、逆台形の深い掘り方に続く。埋土は土壙324と同様の褐色、黄色、灰色の粘質土の混じり土である。

出土遺物は皆無で時期の確定かしがたいが、埋土や形状等から土壙324・325等と一連の中世頃の土壙群と想定される。



第99図 土壙326・327

土壙328 (第100図、図版18)

調査区南端の11Q区に溝323と平行するように検出した。平面形は不整形な形状をなし、長径250cm、短径140cm、深さ20cmである。断面は浅い皿状をなし、底面は細かい凹凸がある。土壙内東半の底面から完形の土師質小皿1点が出土している。

出土土器は掲載以外では細片である。時期は埋土や出土遺物の器形特徴から中世前半の鎌倉時代と考えられる。

土壙329 (第101・102図)

調査区北端の4C区に溝321と接して検出した。平面形は楕円形を呈し、規模は長径290cm、短径195cm、深さ70cmである。断面は深椀状を呈し、底面は若干凹凸がある。埋土は2層に分層でき、第1層の赤褐色砂質土は大小の礫、焼土、土器片等を含むブロック状の混じり土である。第2層の底面に近い場所から長径20cm程の礫が出土している。

遺物は瓦が比較的多く、その他に陶磁器、古銭、多量の焼土塊が出土している。時期は埋土や出土遺物等から近世以降と考えられる。

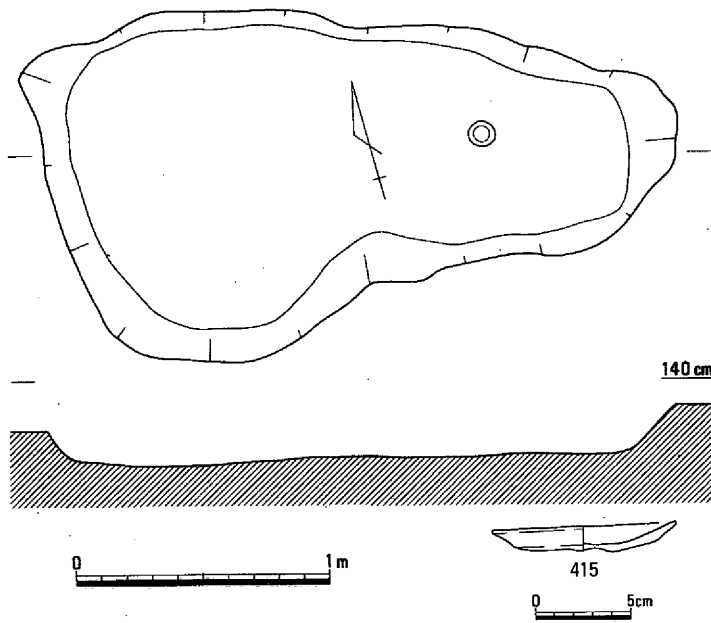
土壙330 (第103・104図、図版17)

調査区北端の5D区に位置し、溝320・321と重複している。平面形は不整形円形を呈し、規模

は長径330cm、短径290cm、深さ95cmである。断面はやや楕円状を呈し、ほぼ平らな底面をなす。埋土は5層に分層可能で、第3層の浅い黄色砂層中から墨書痕跡のある塔婆片が出土している。

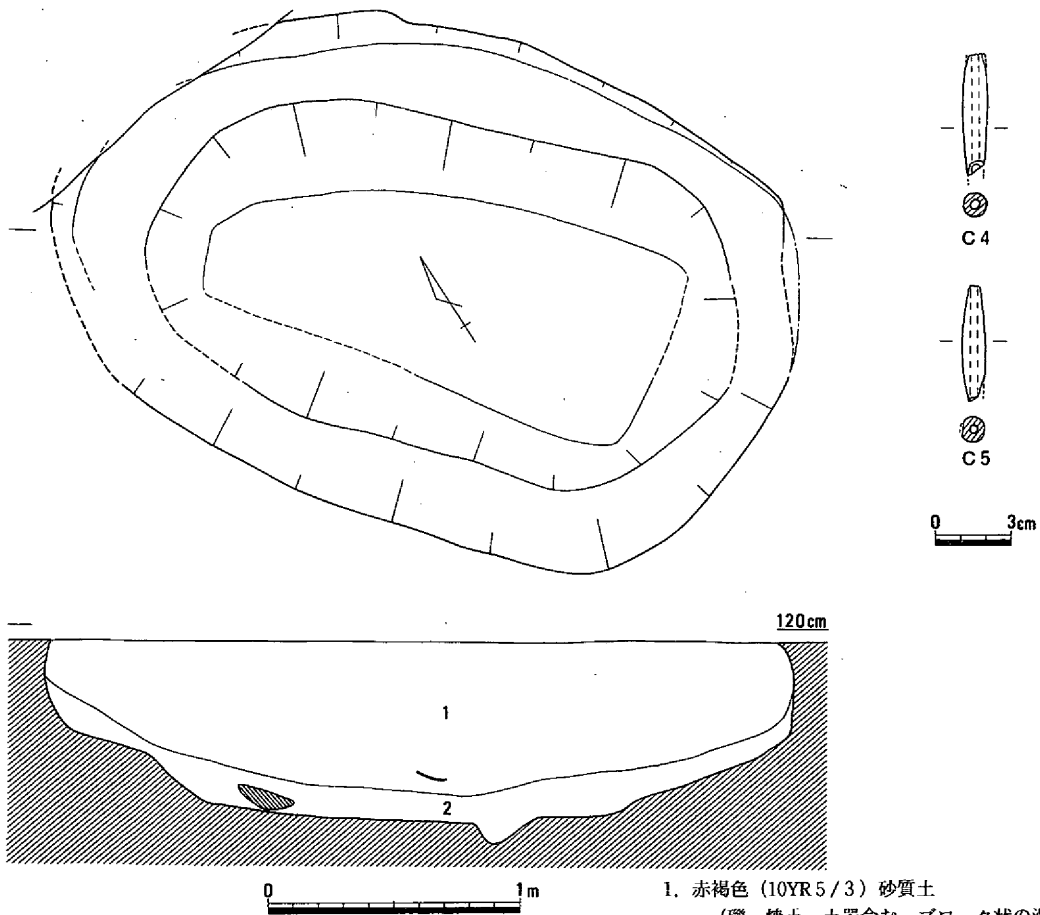
一 遺物は比較的多く、塔婆以外に備前焼、須恵器、古式土師器、東播系須恵質鉢、瓦、土師器椀、竈と近世陶磁器類の細片が出土している。

土壌の時期は、中世の遺物が多いが遺構の切り合いや掲載した備前焼楕円鉢の特徴から判断して近世、江戸時代以降と思われる。



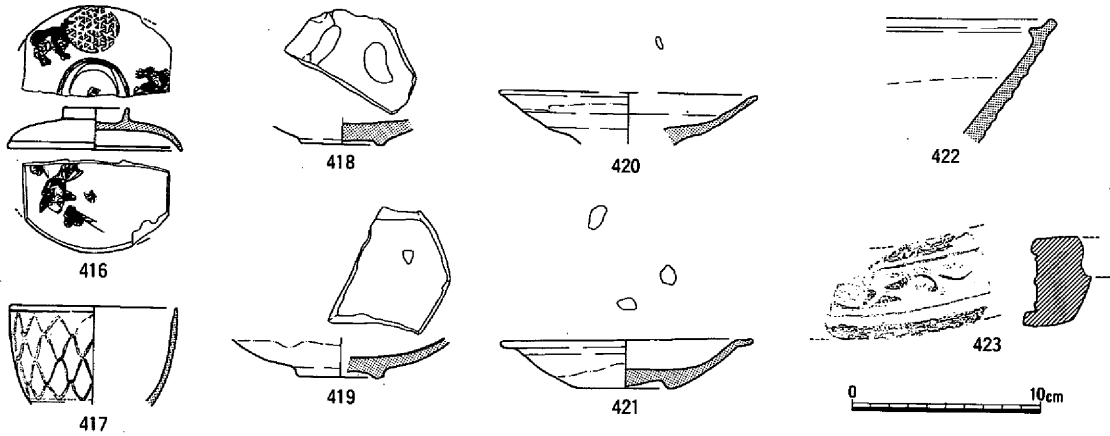
第100図 土壙328、同 出土遺物

(山磨)

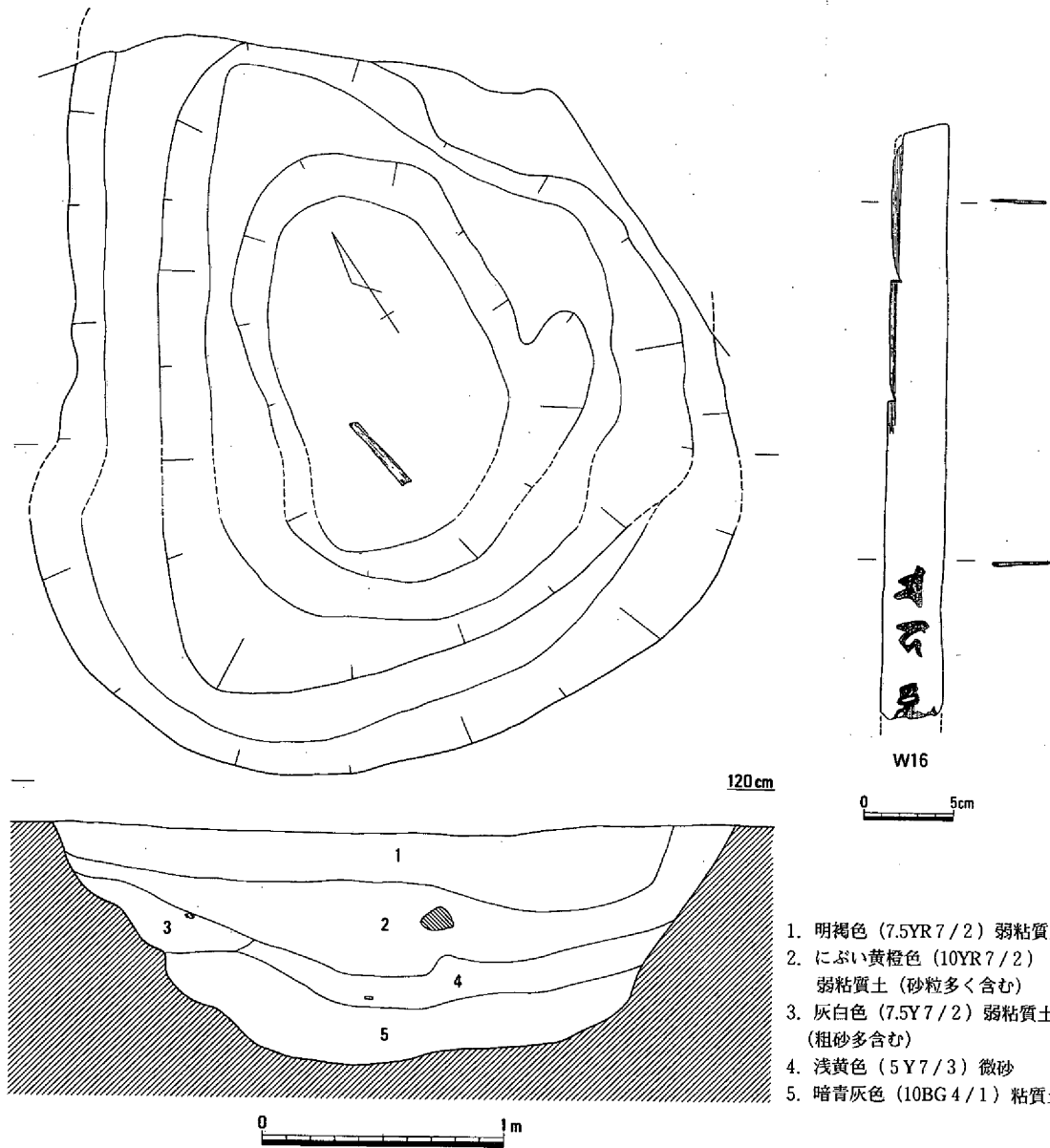


第101図 土壙329、同 出土遺物 < 1 >

1. 赤褐色 (10YR 5/3) 砂質土
(礫・焼土・土器含む、ブロック状の混合土層)
2. 赤灰色 (2.5YR 4/1) 粘質土 (礫を含む)

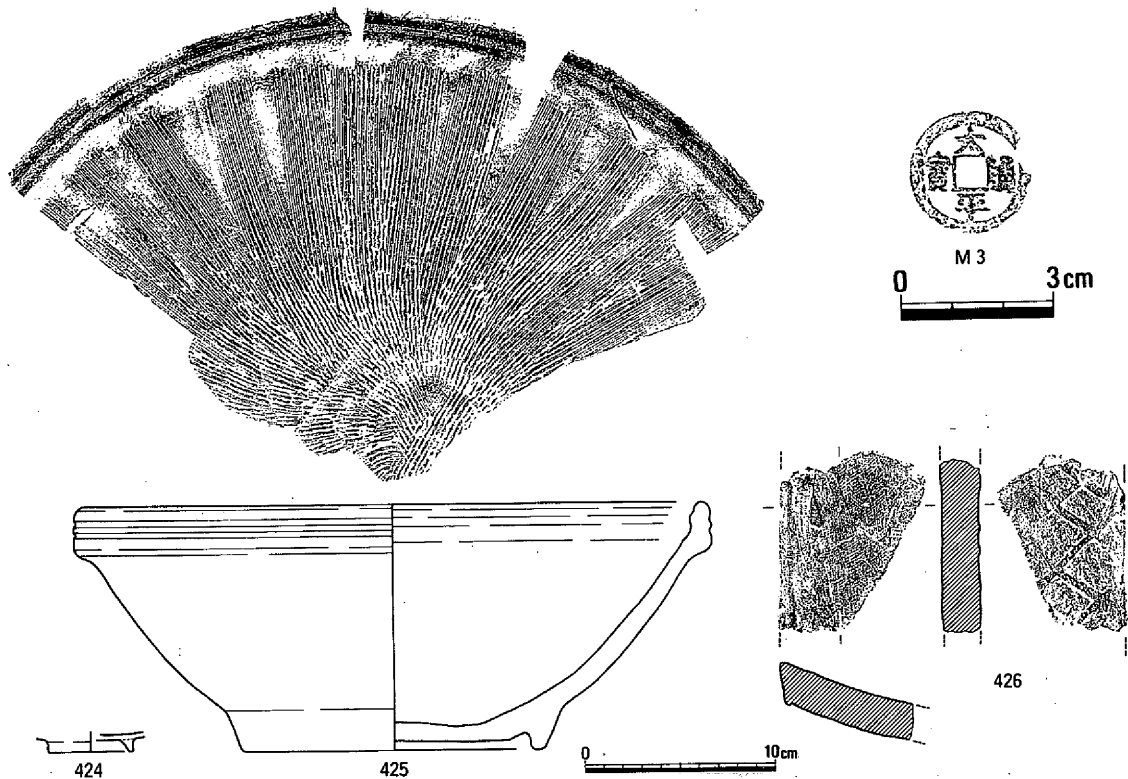


第102図 土壌329 出土遺物〈2〉



1. 明褐色 (7.5YR 7/2) 弱粘質土
2. にぶい黄橙色 (10YR 7/2) 弱粘質土 (砂粒多く含む)
3. 灰白色 (7.5Y 7/2) 弱粘質土 (粗砂多含む)
4. 浅黄色 (5Y 7/3) 微砂
5. 暗青灰色 (10BG 4/1) 粘質土

第103図 土壌330、同 出土遺物〈1〉



第104図 土壌330 出土遺物〈2〉

(4) 溝

溝313 (第105図)

調査区中央付近の8 F・G・H区にかけて検出した南北方向の溝で、南半と北半では溝幅が異なるが一連の溝と把握している。中央を現水路と攪乱により削平されている。規模は北半部が全長8m、幅1~1.2m、深さ20cm、南半部が全長8.5m、幅1.6~1.8m、深さ10cmと30cmである。北半部の断面は浅い椀状を呈し、平らな底面である。南半部の断面は浅い皿状を呈し、中央付近で北側が一段深くなり段が付く。底面は若干凹凸がある。埋土はいずれも1層のみで、灰黄褐色粘質微砂土である。底部レベルは北半部が海拔1.0mほどでほとんど高低差が無い。南半部は海拔1.15mで中央付近で北側がさらに20cmほど深くなる。

遺物は少量の土器片が出土している、器種は備前焼、土鍋、白磁、青磁、土師質碗等が認められる。当溝の時期は出土遺物の特徴や埋土、溝の方向等から中世前半の鎌倉時代と考えられる。

溝314 (第105図)

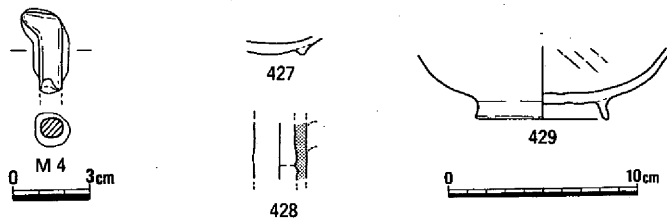
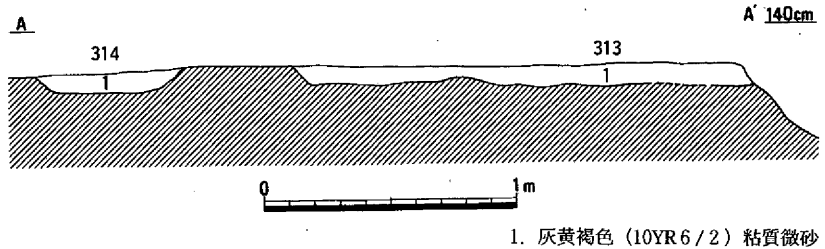
調査区中央付近の8 G区のほぼ中央に検出した。南北方向の溝状の遺構で南半部がやや細くなる。平面規模は一部途切れているがほぼ直線で両端は丸く終わっている。全長9m、北半幅60cm、南半幅35cm、深さ10cmを測る。断面は皿状を呈し、平らな底面をなす。埋土は1層のみで、灰黄褐色の粘質微砂土である。溝底部レベルは、北端で海拔1.2m、南端で約10cmほど低下している。

出土遺物は少量の土器片のみである。当溝の時期は図示した土師質碗の特徴や埋土、流走方向等から中世前半の鎌倉時代と考えられる。

溝315 (第106・107図)

調査区中央付近の8H区に検出した南北方向の溝で中央付近で途切れている。溝316と重複し上面に位置する。北端は溝305に繋がる可能性がある。南側はIライン付近で不明瞭になる。検出全長10m、幅40~70cm、深さ10cm程である。断面は浅い皿状を呈し、底面はほぼ平坦である。埋土は暗灰黄色粘質微砂土の1層のみの堆積である。溝底部レベルは北端で海拔110cm、中間付近で114cm、南端で120cmを測り、徐々に北に向かって低下している。

遺物は少量の土器片が出土している。器種には備前焼、瓦器、土鍋、土師質椀、弥生土器、須恵器等が認められる。当溝の時期は出土遺物の特徴や埋土、溝の方向等から中世、鎌倉時代の13世紀前後と考えられる。



第105図 溝313・314 断面、同 出土遺物

溝316 (第106・108図)

調査区中央付近の8H・J区~7I・J区にかけて南北に縦断する様に検出した。溝315・322と重複し、その下層に位置する。南端は調査区外に延びて、北端は溝305に接続する。検出全長29m、幅80~90cm、最大深さ25cmである。溝の方位はN10度Eである。断面は逆台形もしくは椀状を呈し、底面は平らである。埋土はにぶい黄褐色の粘質微砂土の1層のみである。溝底部レベルは海拔100~110cmの間を上下しており溝の流走方向は不明瞭である。

出土遺物は土師質椀・杯・皿、土鍋や瓦器、青磁、白磁等がある。溝の時期は出土遺物や埋土、切り合い等から中世前半の鎌倉時代、13世紀前後と考えられる。

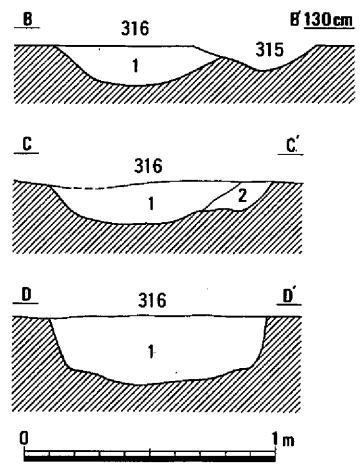
溝317 (第109図)

調査区中央付近の6G区で竪穴住居1の北側に検出した。溝の東端は削平されているが、掘り方の形状から端部に近いと考えられる。西端は溝318と60cmの間隔を置き、北側に少し膨らんで丸く終わっている。若干蛇行しているがほぼ東西方向を示す。規模は検出長3m、幅90~100cm、最大深さ10cmである。断面は浅い皿状を呈し、平らな底面をなす。溝底部レベルは中央で海拔105cmを測る。

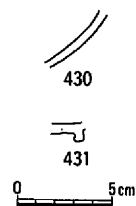
遺物は弥生土器らしい細片や、須恵器の口縁部の細片が少量出土しているが、埋土や形態等から中世の時期と考えられる。

溝318 (第109図)

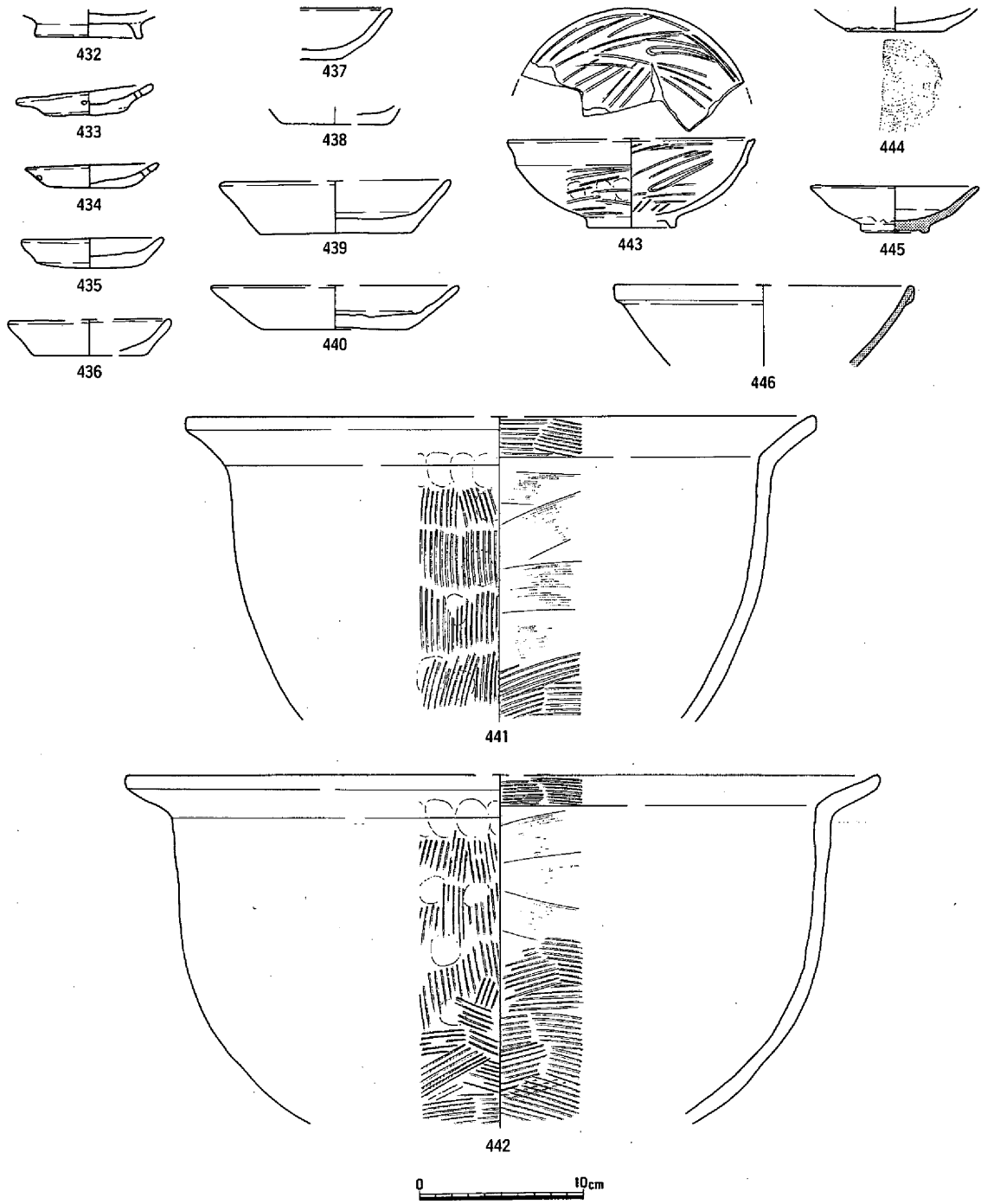
調査区中央付近の6G区に検出した南北方向の小規模な溝である。



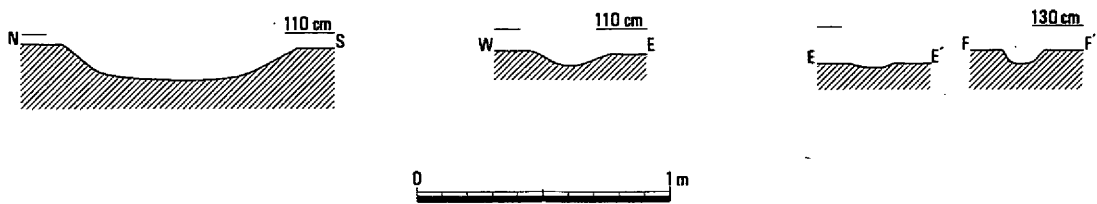
第106図 溝315・316 断面



第107図 溝315 出土遺物

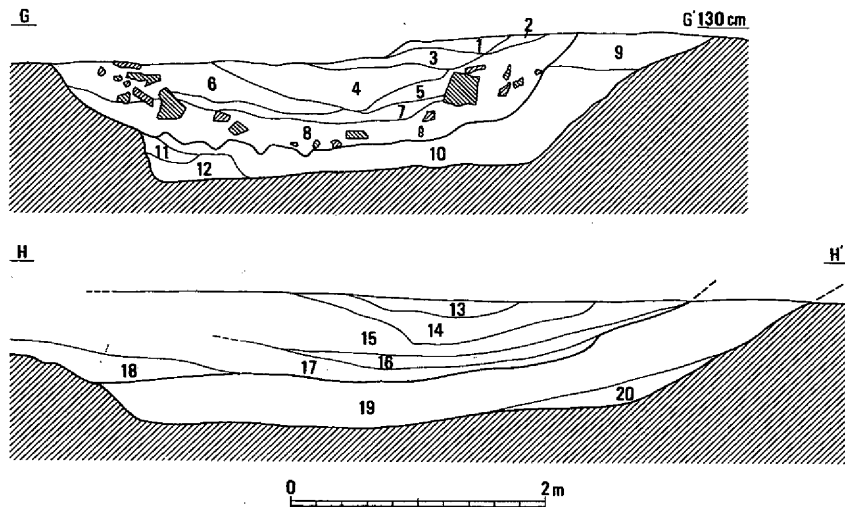


第108図 溝316 出土遺物

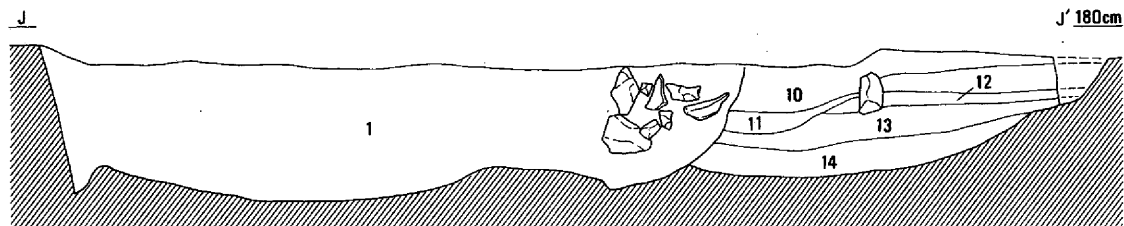
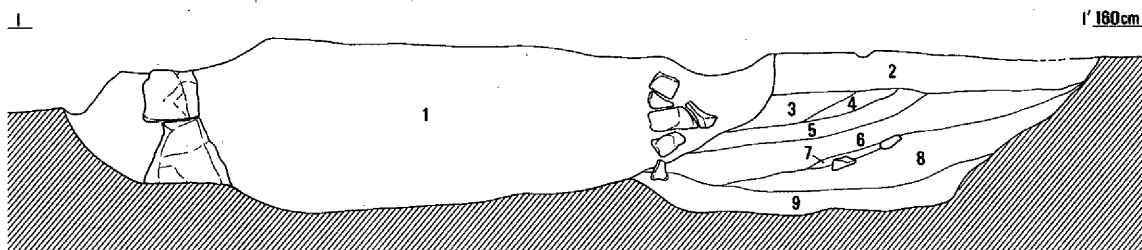


第109図 溝317~319 断面

第3章 発掘調査の概要



- | | |
|------------------------------|---------------------------------------|
| 1. 灰黄色 (2.5Y7/2) 砂質土 | 11. 緑灰色 (5G5/1) 砂質土 |
| 2. 灰白色 (7.5Y7/1) 砂質土 | 12. 暗青灰色 (5BG4/1) 砂質土 |
| 3. 灰色 (5Y6/1) 砂質土 | 13. 赤灰色 (5R6/1) 砂質土 (礫を多く含む) |
| 4. オリーブ黄色 (5Y6/3) 砂質土 | 14. 緑灰色 (5G6/1) 粘質土 |
| 5. 黄灰色 (2.5Y6/1) 砂質土 (貝殻を含む) | 15. 灰オリーブ色 (7.5GY5/2) 弱粘質土 (下層ではグライ化) |
| 6. 黄灰色 (2.5Y5/1) 砂質土 | 16. 灰色 (10Y6/1) 砂質土 (やや粘質化) |
| 7. 灰オリーブ色 (7.5Y6/2) 砂質土 | 17. 緑灰色 (5G5/1) 粘質土 (炭を含む) |
| 8. 緑灰色 (10GY5/1) 砂質土 | 18. 礫層 |
| 9. 灰褐色 (7.5YR5/2) 粘質土 | 19. 青灰色 (10BG6/1) 粘質土 (グライ化) |
| 10. 暗緑灰色 (7.5GY4/1) 砂質土 | 20. 明青灰色 (10BG7/1) 粘質土 (やや砂質) |



- | | |
|----------------------------------|---------------------------|
| 1. 灰オリーブ色 (5Y6/2) 礫混り粘質土 | 8. 褐灰色 (10YR4/1) 粘質土 |
| 2. 灰褐色 (7.5YR5/2) 粘質土 | 9. オリーブ黒色 (7.5Y3/1) 粘質土 |
| 3. 灰褐色 (5Y6/2) 粘質土 | 10. 灰褐色 (7.5YR5/2) 歴混り粘質土 |
| 4. 褐灰色 (5Y5/1) 粘質土 | 11. にぶい褐色 (7.5YR5/4) 粘質土 |
| 5. 灰赤色 (2.5Y5/2) 粘質土 | 12. 灰色 (7.5Y5/1) 粘土 |
| 6. 灰色 (10Y5/1) 粘質土 | 13. 褐灰色 (10YR5/1) 礫混り粘質土 |
| 7. 褐灰色 (10YR5/1) 粘質土 (1cm大の小石含む) | 14. 灰色 (N4/) 粘質土 |

第110図 溝320・321 断面

規模は検出長2.7m、幅20~30cm、最大深さ6cmほどである。北端は途中で削平され、南端は竪穴住居1の柱穴P-5と接する付近で終わっている。溝底部レベルは南端で海拔107cmを測り、北に向かって若干低下している。遺物は弥生土器らしい細片が出土している。時期は埋土や形態、方向等から弥生時代以降と考えておきたい。

溝319 (第109図)

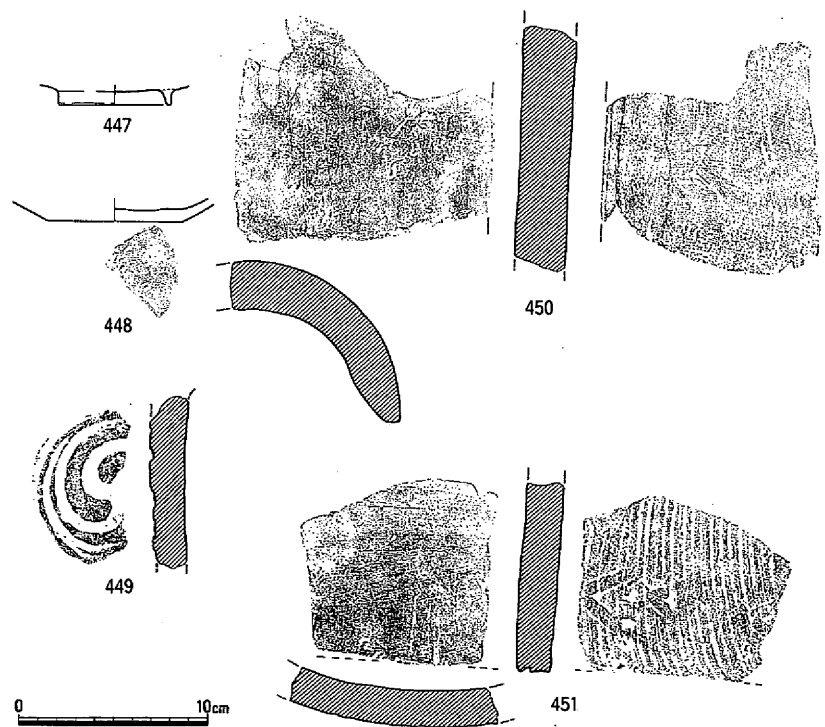
調査区中央付近の9I・J区に南北方向に検出した小規模な溝である。残存状況が悪く途中で消失した場所があるが、全長12m、幅20cm前後、最大深さ7cm程で若干蛇行している。溝は両端部とも調査区内で終了している。ただ北端については、東側調査区(米田遺跡3)の9mほど北側の同一延長線上に同規模の溝状遺構が存在してをり、これに繋がる可能性がある。断面は浅い皿状を呈し、ほぼ平らな底面である。溝底部レベルは海拔115cm前後で、高低差は明瞭でない。

遺物は土師器の細片が少量出土している。時期の確定に乏しいが古墳時代初頭前後の可能性も考えられる。(山磨)

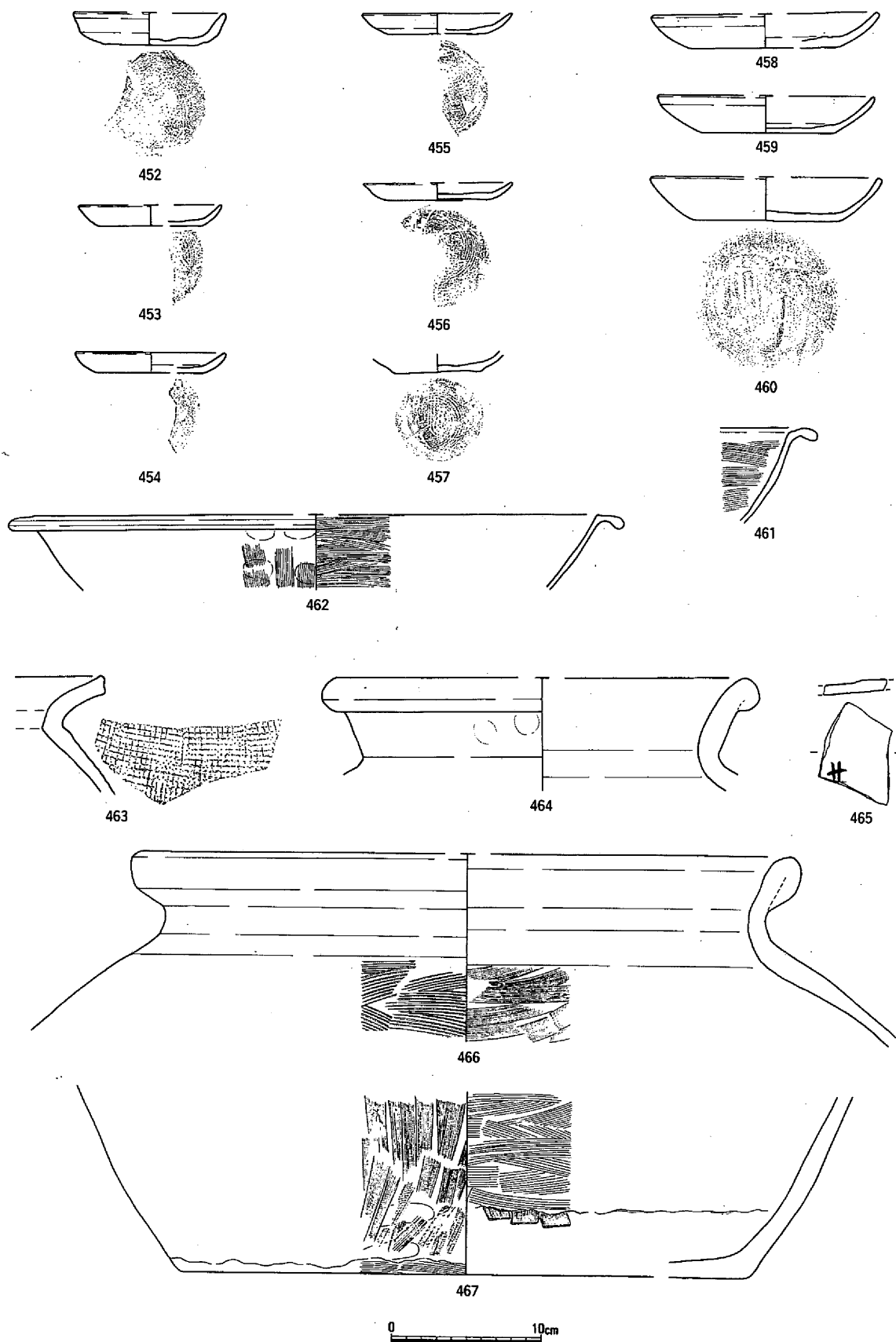
溝320・321 (第110~120図、図版19)

調査区北西端の3A・B区から5C~H区にかけて、く字状に検出した当調査区最大の遺構である。北西端部では新旧2本の溝に分離可能であったため、上層を溝320、下層を溝321とした。北西の調査区外は、既に低水路改修工事により掘削され不明であるが、当溝は恐らく当麻丘陵の北端裾部を巡り、岩間調査区の旧河道付近に達するものと見られる。大溝320・321が南北方向を向く調査区南半では、現用水路と東側半分程が重複しながら並行している。南側はさらに調査区外に延び、調査区南端の溝323から東側調査区(米田遺跡3)の運河状の大溝に繋がると想定される。今回の検出規模は総延長88m、幅4~4.5m、深さ80~130cmである。

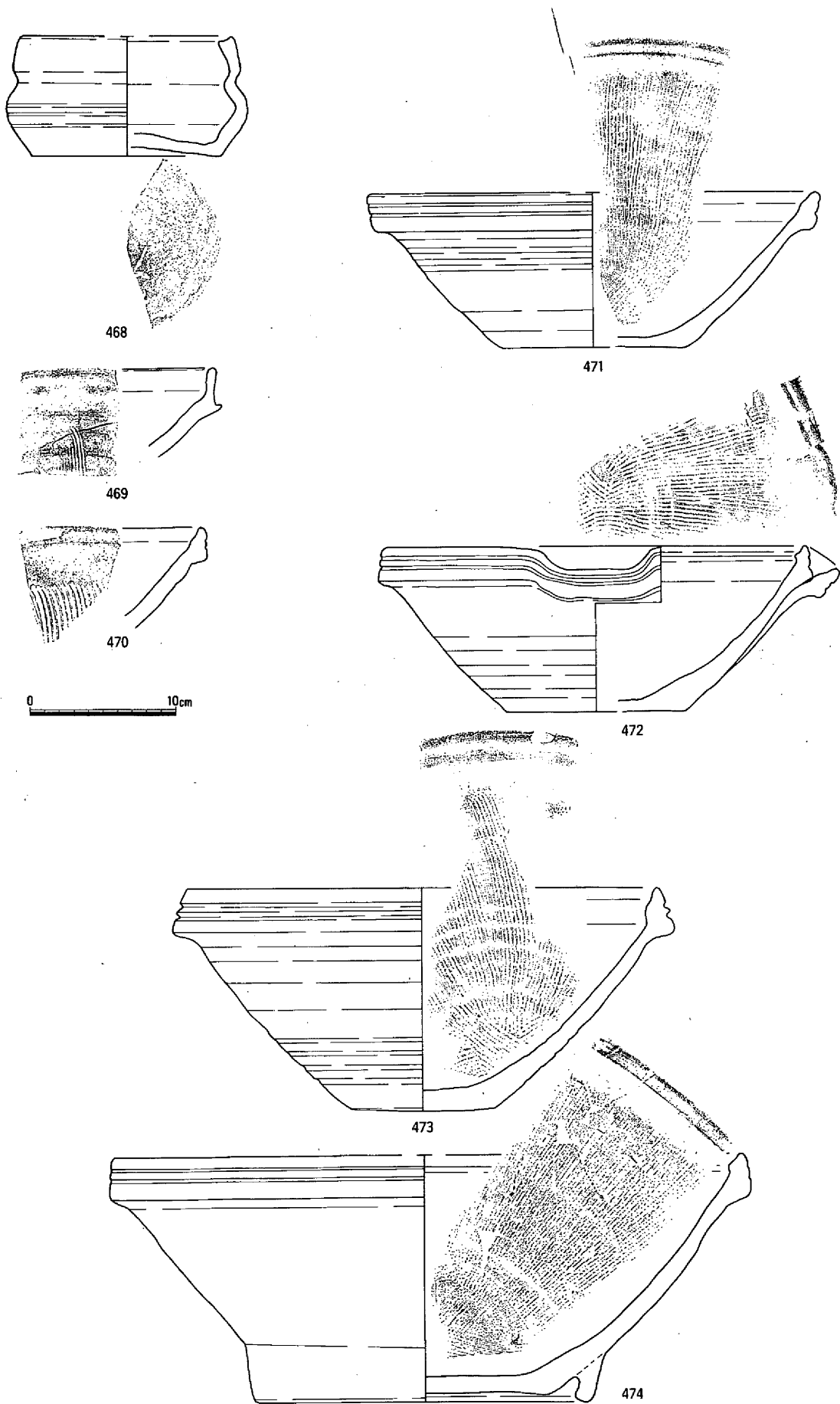
北西端部に当たる3A・B区付近の北西から南東に流走する区間でも、現用水路と1~3mの間隔を置きほぼ並行している。平面形は若干S字状に蛇行しており、この間の全長は41mを測る。大溝中間付近の土層断面の観察では、新旧2本の溝が上下に重複している。上層の大溝320は、幅4.1m、深さ90cmである。下層の大溝321は溝320と比較して1mほど南側によって20cmほど深く掘削されている。溝321の幅は北側上面を溝320により削平されているが現存幅4.5mを測る。断面の形状は下層の大溝321は逆台形状を呈し、ほぼ平らな底面をなす。上層の大溝320は掘り方が下層よ



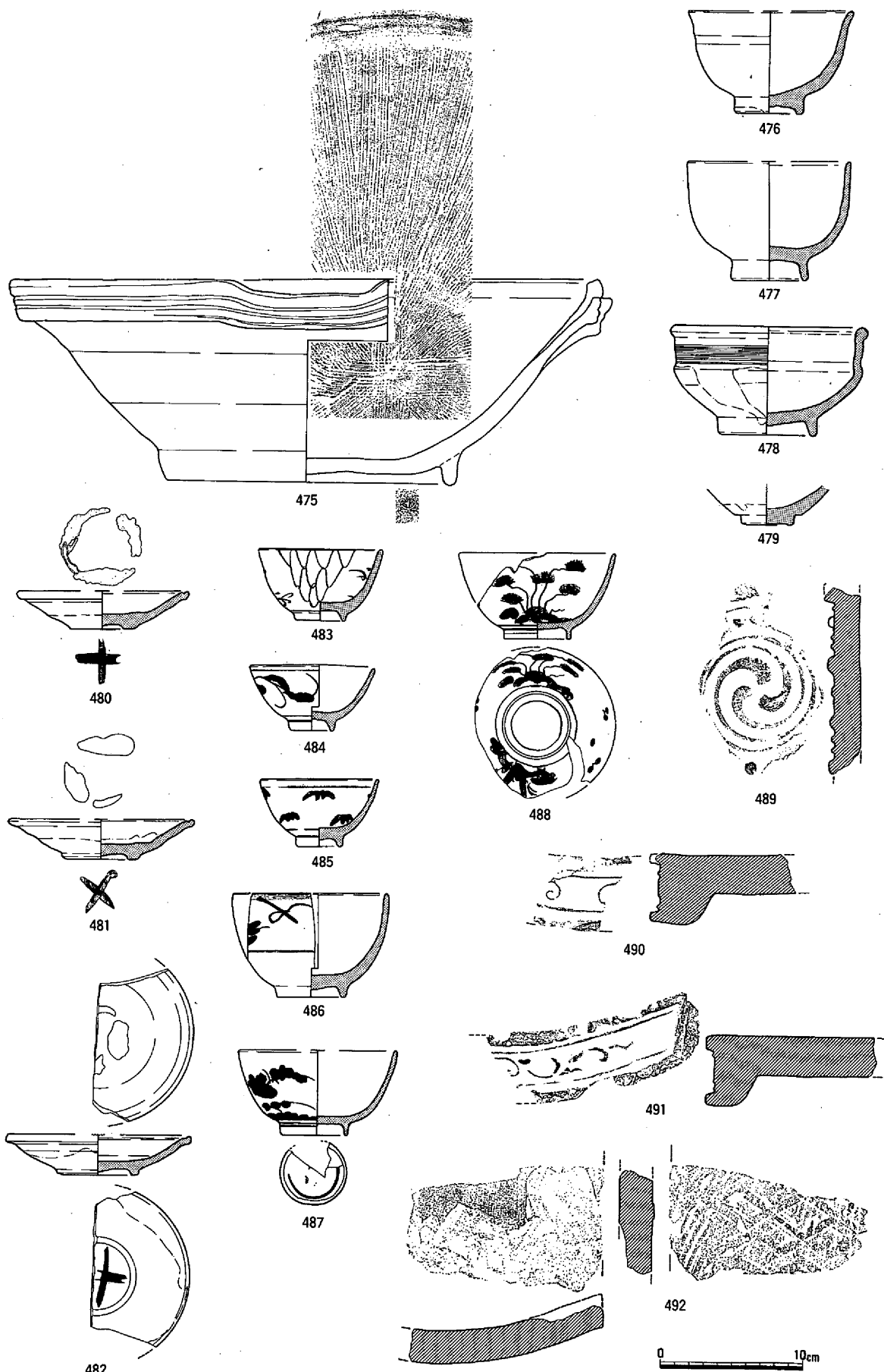
第111図 溝320 出土遺物



第112図 溝321 出土遺物〈1〉



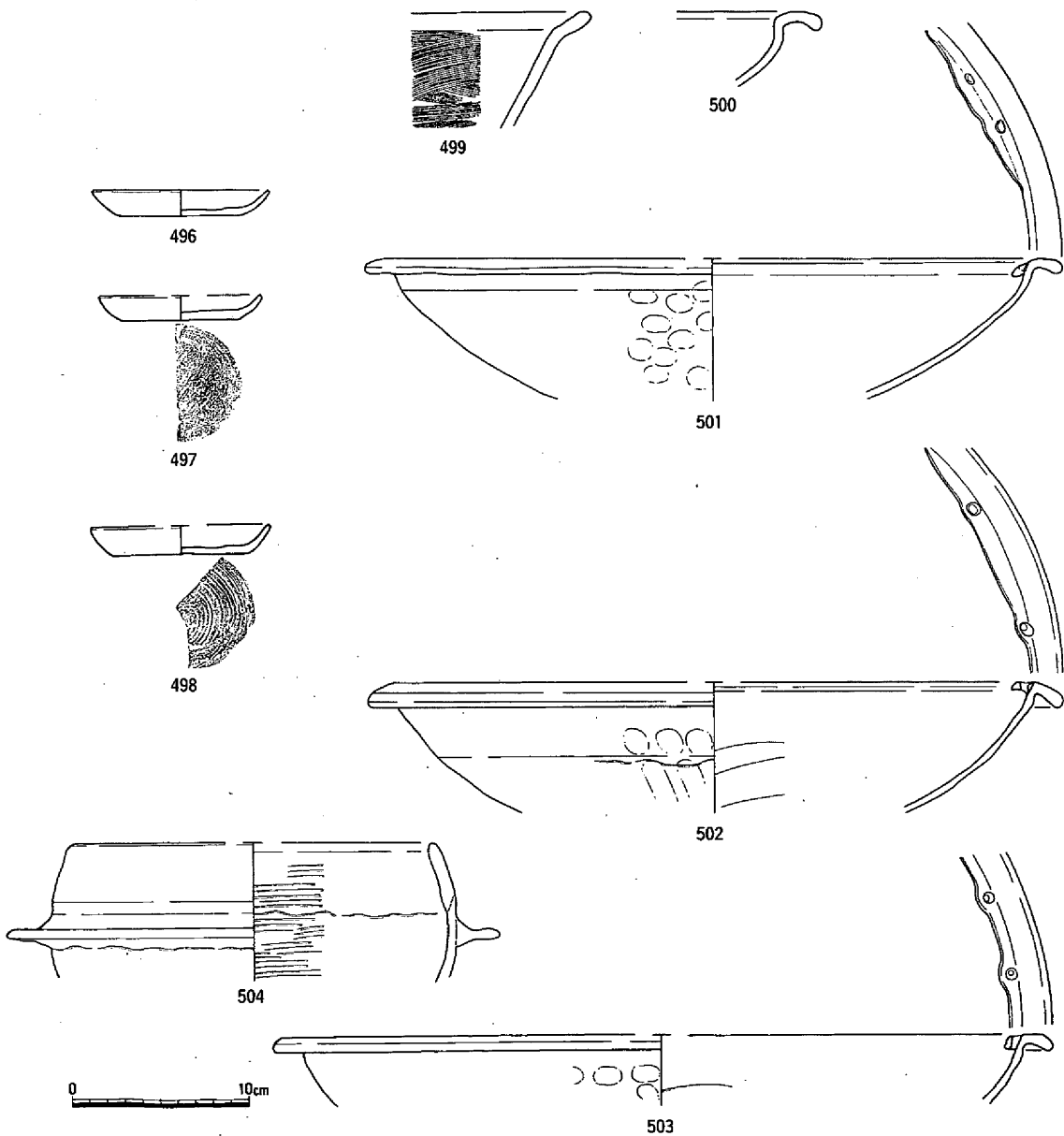
第113図 溝321 出土遺物〈2〉



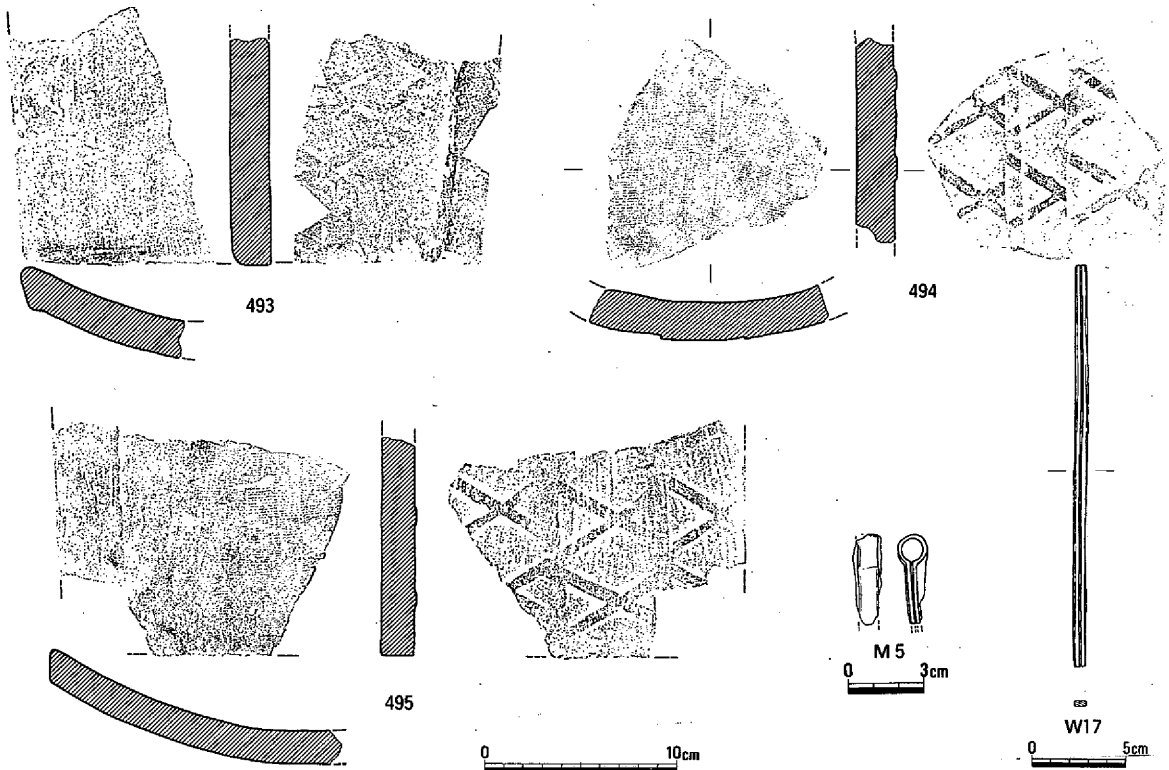
第114図 溝321 出土遺物〈3〉

りやや緩やかでU字に近い形状をなす。2本の断面観察では埋土は上層で6～8層、下層で2～3層に分層できる。また、上層の大溝320の最下層には最大で直径25cmを測る多量の角礫の廃棄が認められた。なお、大溝のコーナー付近で検出した土壌330は、下層溝321の肩部埋没後に掘削されており、新旧の関係が把握できる。

一方、5C～H区のほぼ南北方向に流走する区間は、調査時に新旧が把握できなかったために溝320、321と両番号を併用している。この区間は現用水路と平行しているため東側の肩口付近が削平されている。検出全長47m、深さ1～1.3m、幅3.7m以上である。掘り方はやや緩やかな傾斜をなし、底面はほぼ平らである。埋土は5～7層に分層可能で、粘質土主体の堆積である。北端コーナー付近の東側に幅3m、深さ1.2mほどの枝溝を検出した。この溝は西側調査区（当麻遺跡2）の建物18の東に検出の溝状遺構に接続するもので、全長10m程であることが確認できた。溝底部レベルは5C～H区付近で

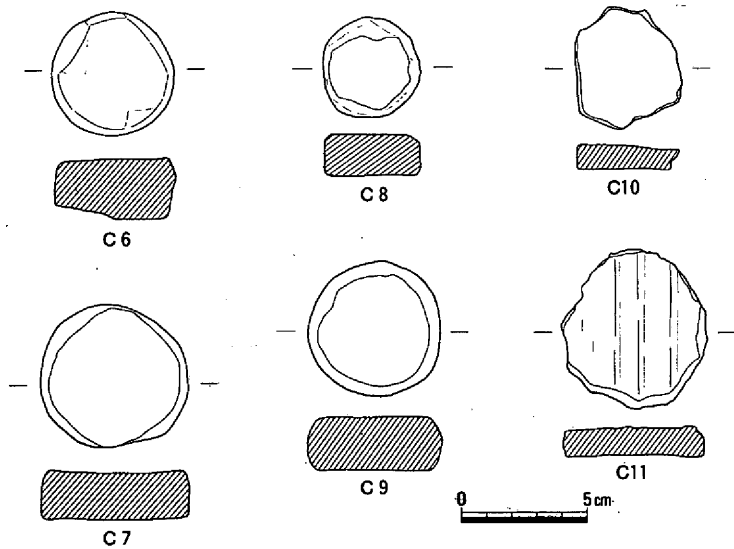


第115図 溝321 出土遺物〈4〉



海拔0～20cm程度を測り、3A区付近で下層が海拔10cm程を測る。流走方向は不明瞭であるが総体的に南に向かって低下している様である。

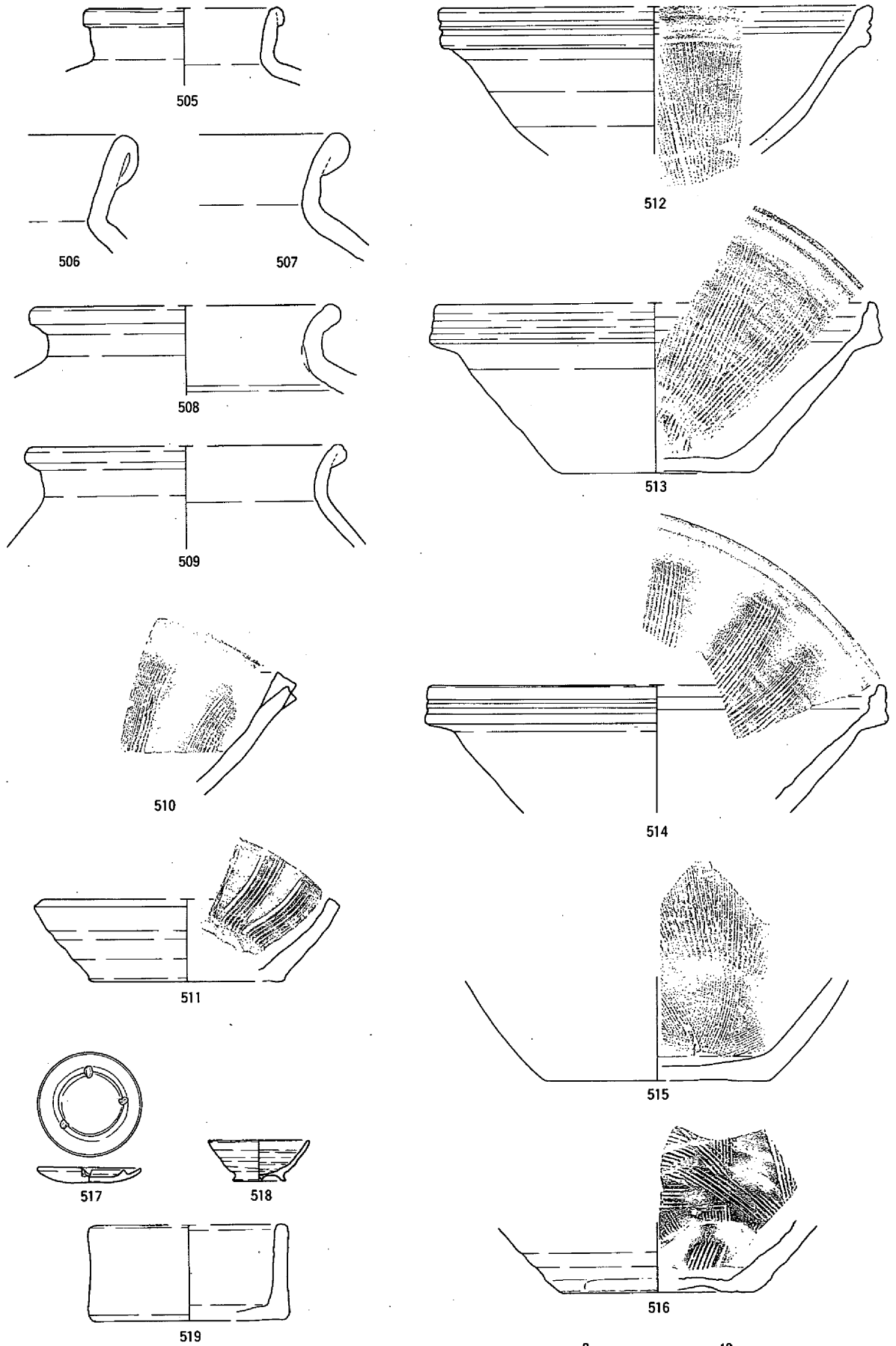
447～451は溝320出土遺物である。449は右巻きの二巴文軒丸瓦。451は平瓦で、凹面は布目を残し、凸面は大型の格子タタキの後、刷毛状工具で調整している。時期は13世紀頃であろうか。



第116図 溝320・321 出土遺物<1>

452～495は溝321出土遺物である。452～457は土師器小皿で、底部に糸切り調整を行う。458～460は土師器皿。461・462は土師器鍋。463は亀山焼の甕。465は須恵質土器で、底部と思われる部位に墨書がみられる。「卍」か又は「卍」と考えられる。466・467は須恵質土器。468～475は備前焼である。468は水差しと考えられ、底部にヘラ描きあり。469～475は播鉢。475の底部には窯印がみられる。476～478は肥前系の陶器碗、479は美濃・天目茶碗である。480～482は肥前唐津の陶器皿で、底部に墨書「X」がある。内面に、480・481は砂目、482は胎土目を有する。483～488は肥前系の磁器碗。486は初期伊万里である。489～495は瓦。489は左巻きの三巴文軒丸瓦で、巴文の周囲に珠文を配し、その外側に圈線を一条巡らす。490・491は唐草文軒平瓦で、顎は段顎の形

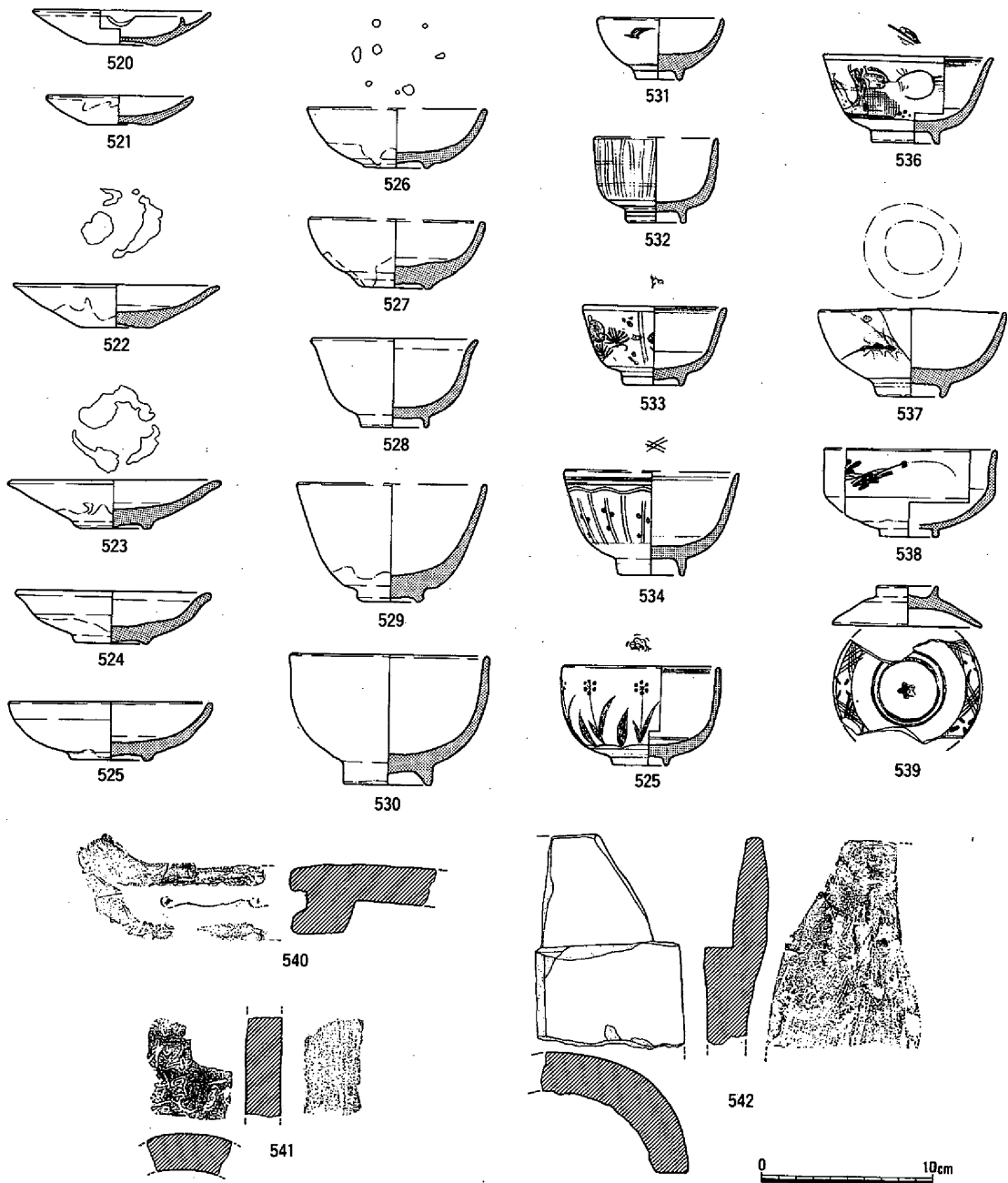
483～488は肥前系の磁器碗。486は初期伊万里である。489～495は瓦。489は左巻きの三巴文軒丸瓦で、巴文の周囲に珠文を配し、その外側に圈線を一条巡らす。490・491は唐草文軒平瓦で、顎は段顎の形



第117図 溝320・321 出土遺物〈2〉

第3章 発掘調査の概要

態をとり、平瓦部とは曲線をもって接合する。492～495の平瓦は、いずれも凸面を大型の格子タタキで調整している。以上のように、溝321からは、14世紀～18世紀までの時期幅を有する遺物が出土している。溝320と溝321は、調査区の設定上、南西部において2条同時に遺物を採り上げており、細分することが不可能であった。よってここでは、南西部出土の遺物を【溝320・321出土遺物】と称して報告する。496～498は土師器皿で、498は底部に糸切りを行う。499～503は土師器鍋、504は羽釜である。501～503には内耳がつく。505～519は備前焼で、壺・甕・播鉢・杯・灯明皿・水差しなど時間幅のある多くの器種が見受けられる。520は灰釉陶器の灯明皿、521は関西系の陶器皿である。522～525は肥前唐津の陶器皿で、522と523の内面には砂目がみられる。526～530は陶器碗。526・527・529は肥前唐

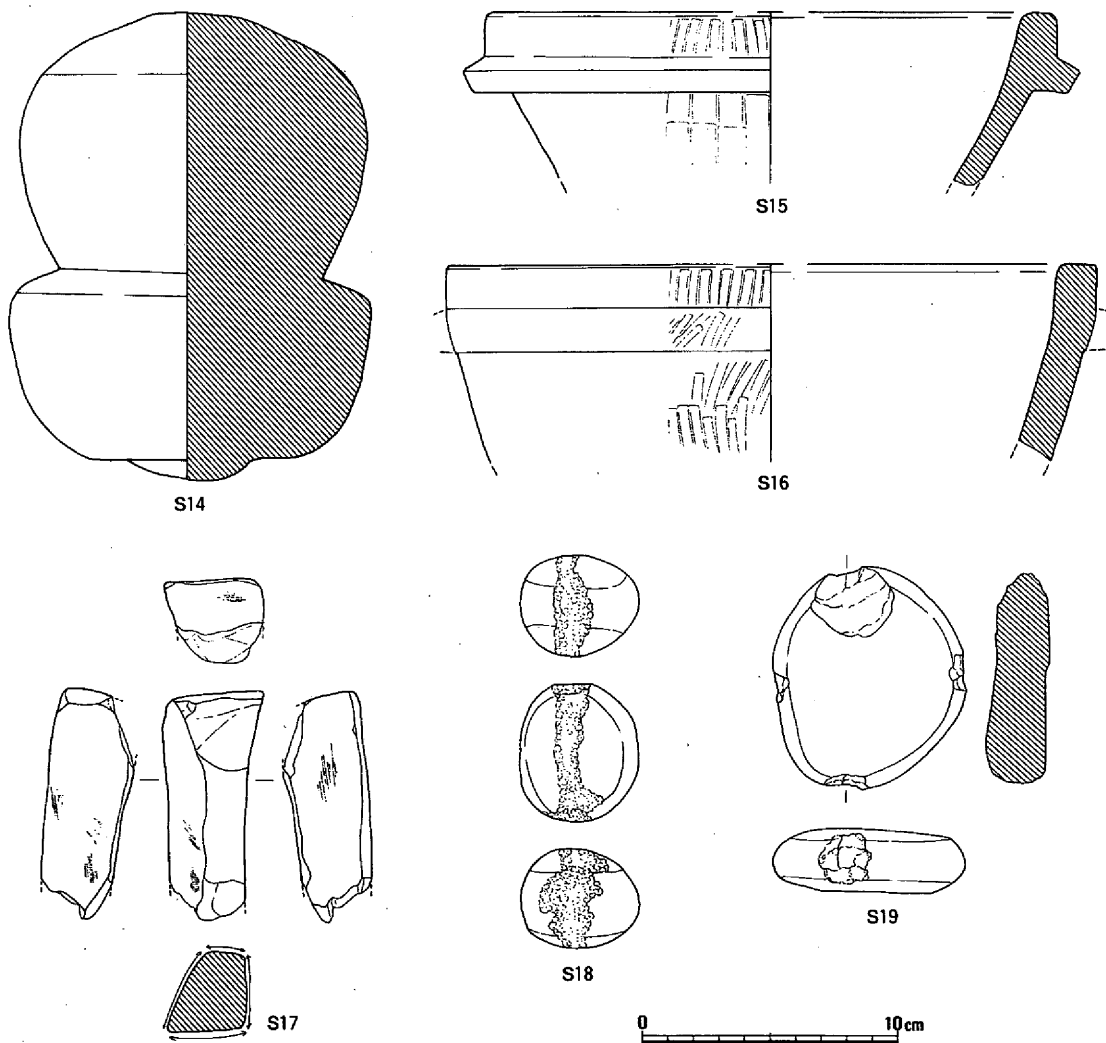


第118図 溝320・321 出土遺物〈3〉

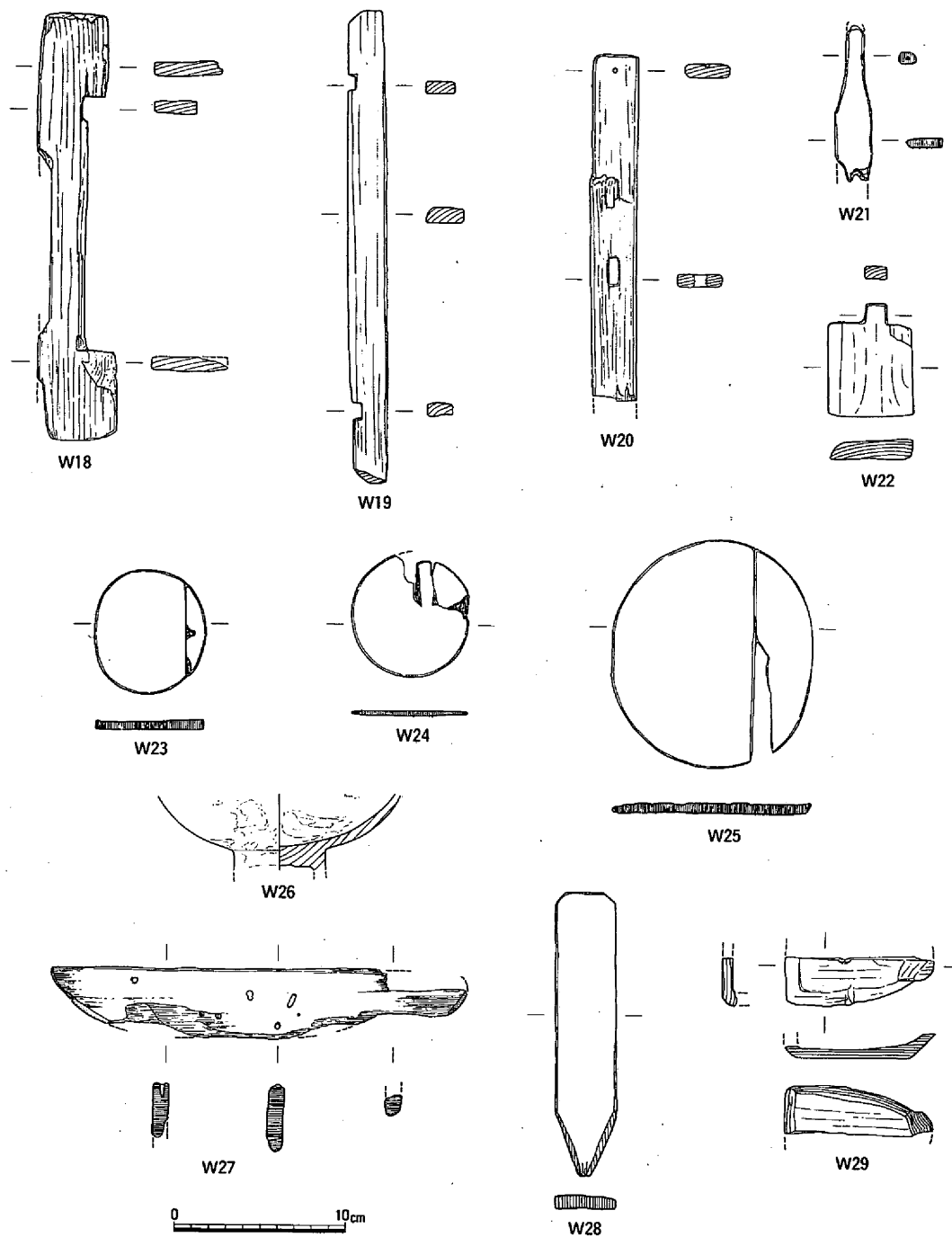
津、530は内山系である。531～539は磁器の酒杯・碗・小鉢・蓋で、肥前系、京・信楽系などがある。540～542は近世瓦。541は丸瓦で、凸面にヘラ状工具で文字が刻まれている。経文の可能性が高いが、判然としない。

土器以外の遺物としては、金属製品・木製品・土製品・石製品が出土している。M5は、溝320出土の鉄製品である。用途は不明。W17は溝320から、W18～W29は溝320・321から出土した木製品である。W17は断面形が長方形を呈し、一方の面のみを溝状に加工している。W18～W22は用途不明の加工板材。W23～W25は曲物の底板で、3点ともヒノキが材として用いられている。W26は漆塗りの椀。W27は刀形で、多数の穿孔がみられる。W29は上部が欠損しており、ほぼ中央で割れているが、舟形であると考えられる。C6・C7は溝320出土、C8～C11は溝321出土の土製円板である。土器を打ち欠いて作られたものと、元から土製円板として作られたものの2通りがある。S14～S19は石製品。S14は五輪塔の一部で、宝珠形の空の部分。S15・S16は滑石製の石鍋。S17は流紋岩製の砥石。S18・S19は石錘である。S18は長辺の周囲を溝状に打ち欠いて縄かけとし、S19は4方向を打ち欠いて縄かけとして使用している。

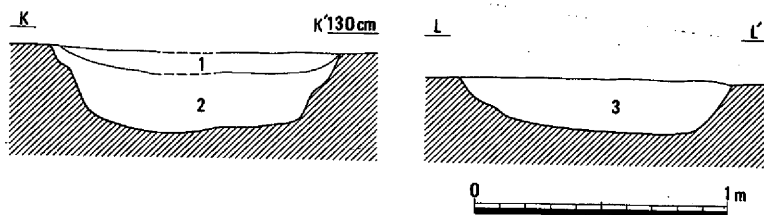
(山磨、松尾)



第119図 溝320・321 出土遺物〈4〉



第120図 溝320・321 出土遺物〈5〉



1. 灰黄褐色 (10YR 6/2) 砂質土
2. 暗灰黄色 (2.5Y 5/2) 砂質土
3. 褐灰色 (10YR 6/1) 砂質土

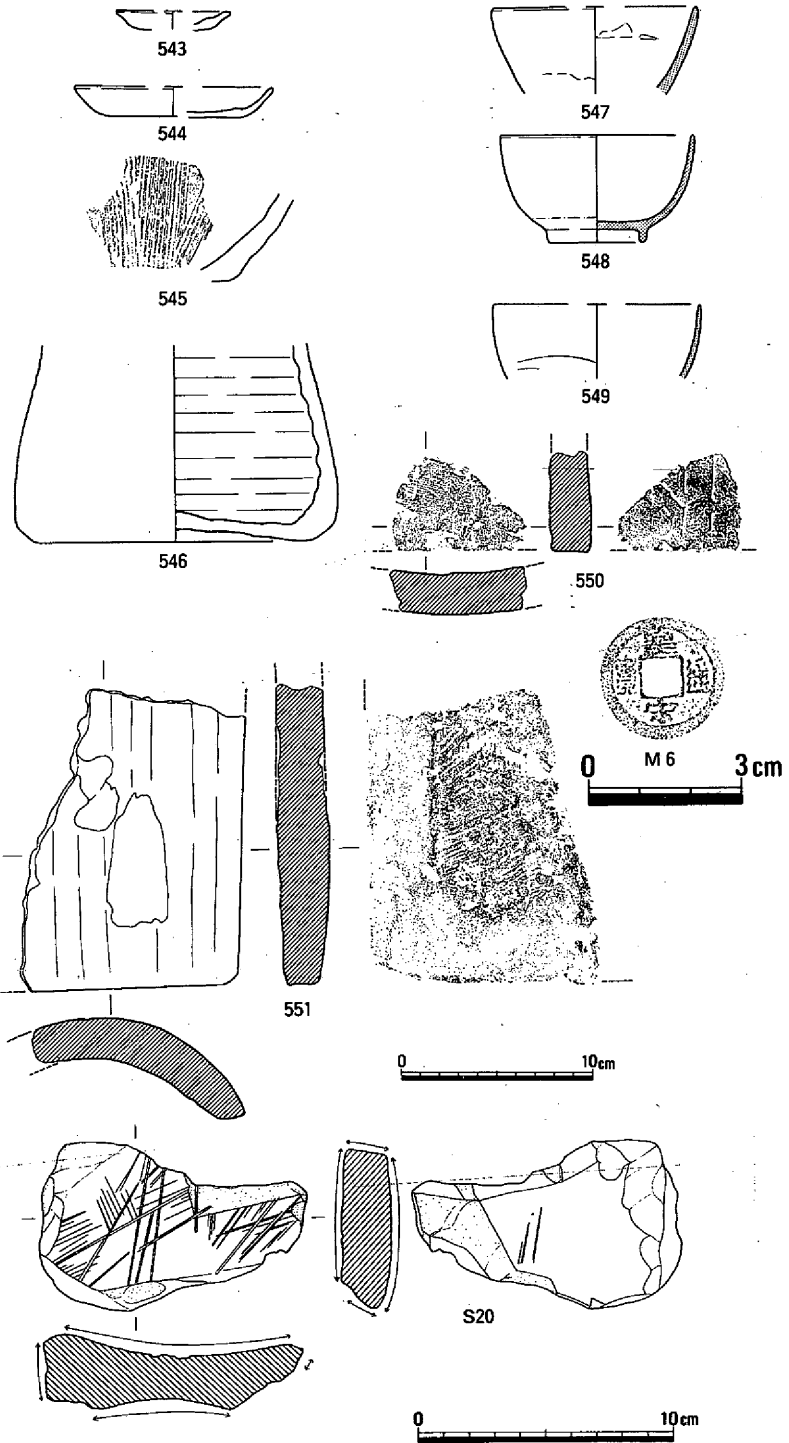
第121図 溝322 断面

溝322 (第121・122図)

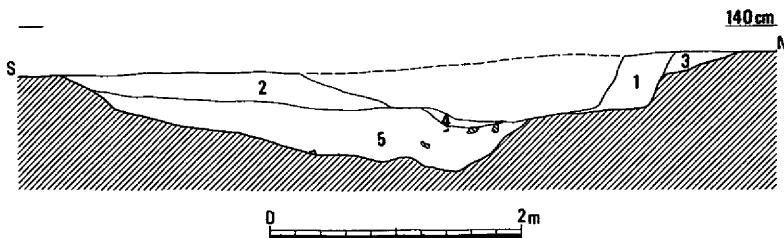
調査区中央付近の7・8I区の南端に東西方向に検出した溝状遺構である。遺構の中央付近が1.4m程大きく途切れて、西側も2つの掘り方が中央で接しており、3カ所の溝状遺構が連続した状況である。中世の溝316や古代の土壙314の上面に位置する。規模は東側で全長7.5m、幅110~150cm、最大深さ37cm、西側で全長が2.2mと2.5m、最大幅110cm、最大深さ20~25cmである。断面はいずれも逆台形の形状を呈し、底面はほぼ平らである。埋土は東側で2層に分層でき、西側では1層のみで砂質土が堆積している。溝底部レベルはいずれも海拔90cm前後である。

出土遺物は器種が豊富で中世から近世の瓦、陶磁器、土師器、砥石片や弥生土器もある。掲載遺物のうちで備前焼の播鉢（内面全面がカキメ）と水差し、肥前系の椀、染め付けが近世のものである。土師質の小皿や布目の平瓦・丸瓦は中世である。その他、白磁や瓦器、土師質椀等概して中世の遺物が多い。溝の時期は遺構の切り合いや埋土、出土陶磁器の特徴等から近世、17世紀後半以降と考えられる。

(山磨)

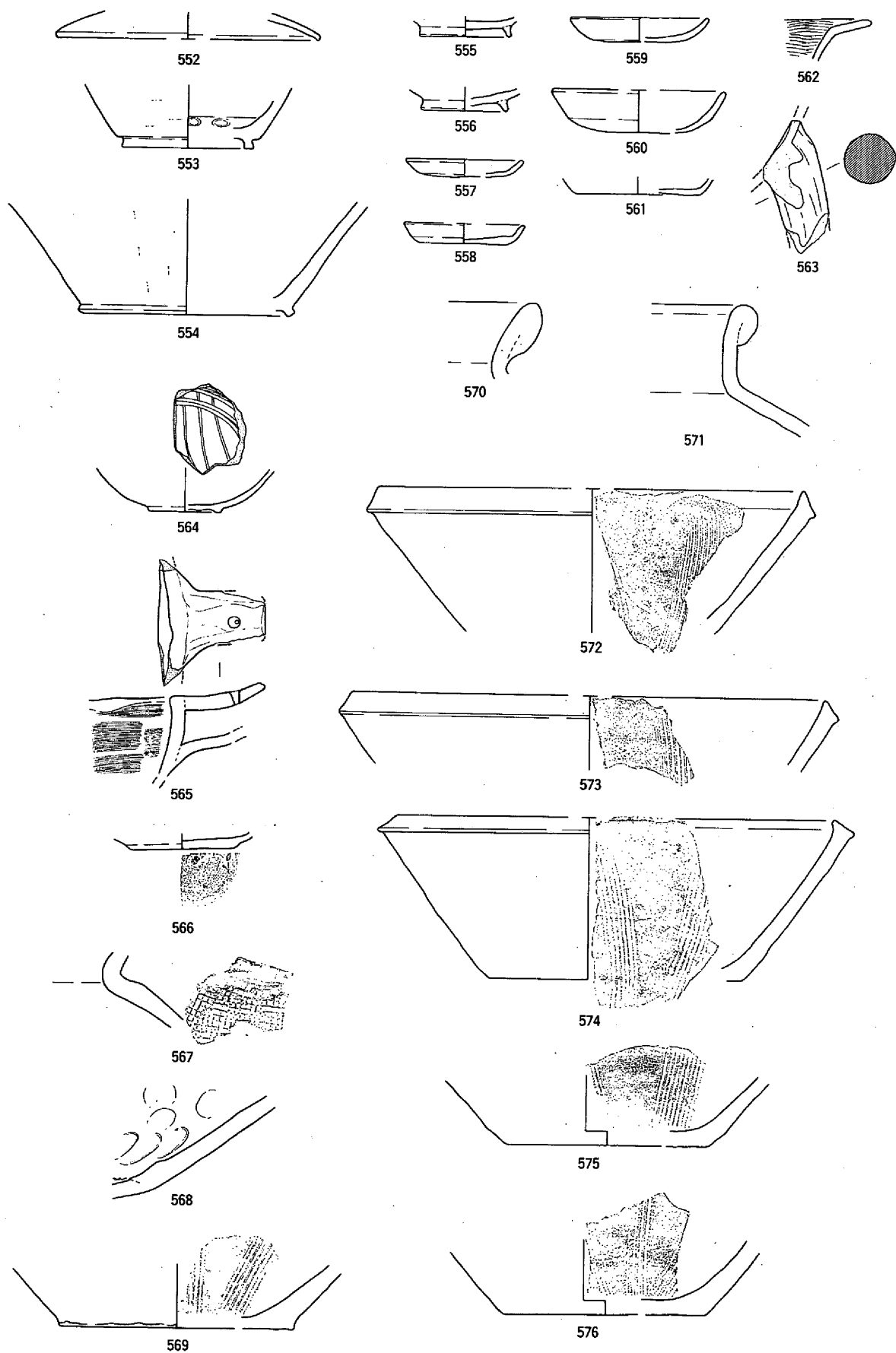


第122図 溝322 出土遺物



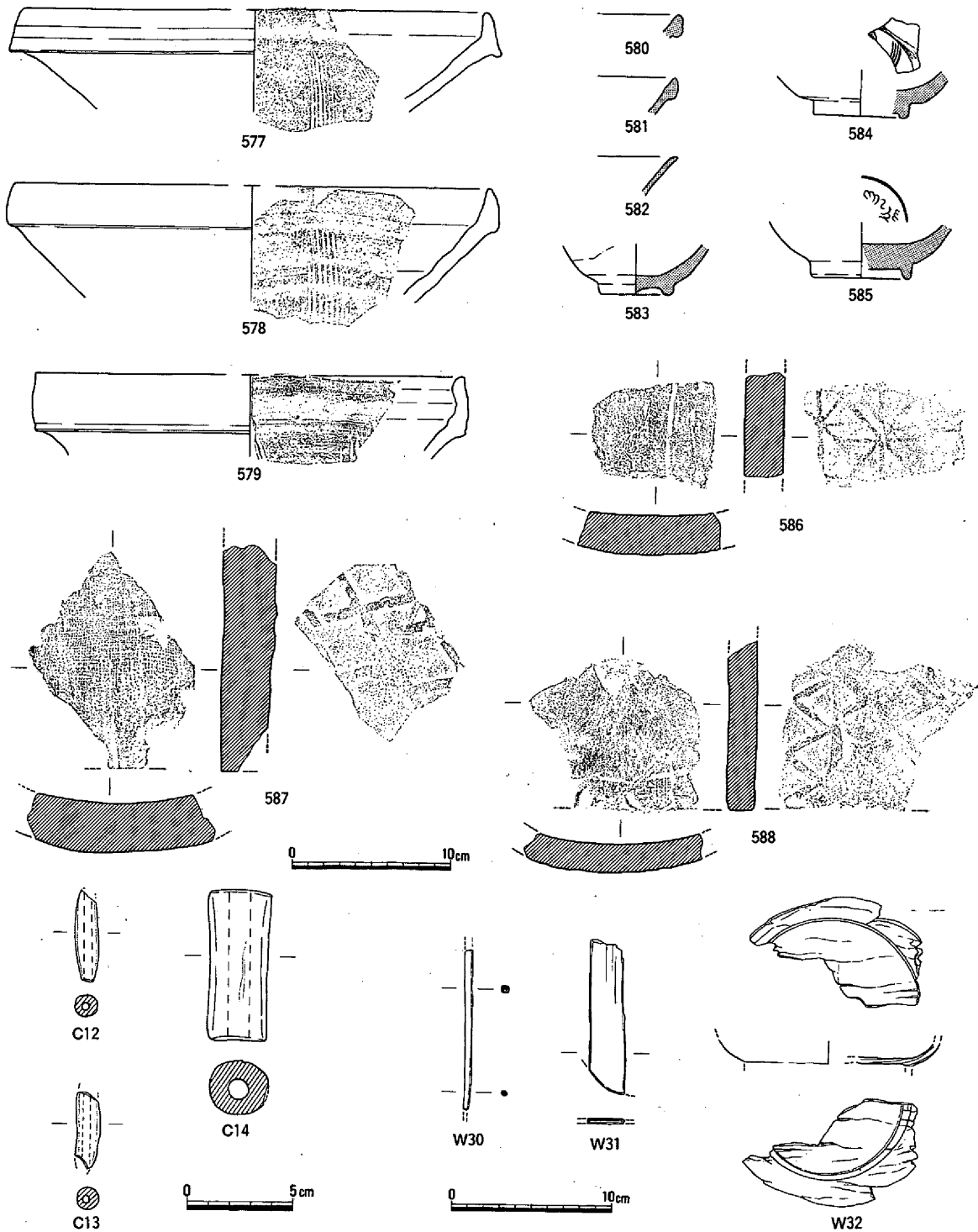
1. 黄色 (5Y7/6)・灰色 (5Y6/1) 混じり粘質微砂
2. 灰色 (5Y6/1) 粘質微砂
3. 浅黄色 (5Y7/4) 粘質微砂
4. 灰色 (5Y5/1) 粘質土
5. 灰色 (5Y5/1) 粘質微砂

第123図 溝323 断面



第124図 溝323 出土遺物 < 1 >

0 10cm



第125図 溝323 出土遺物〈2〉

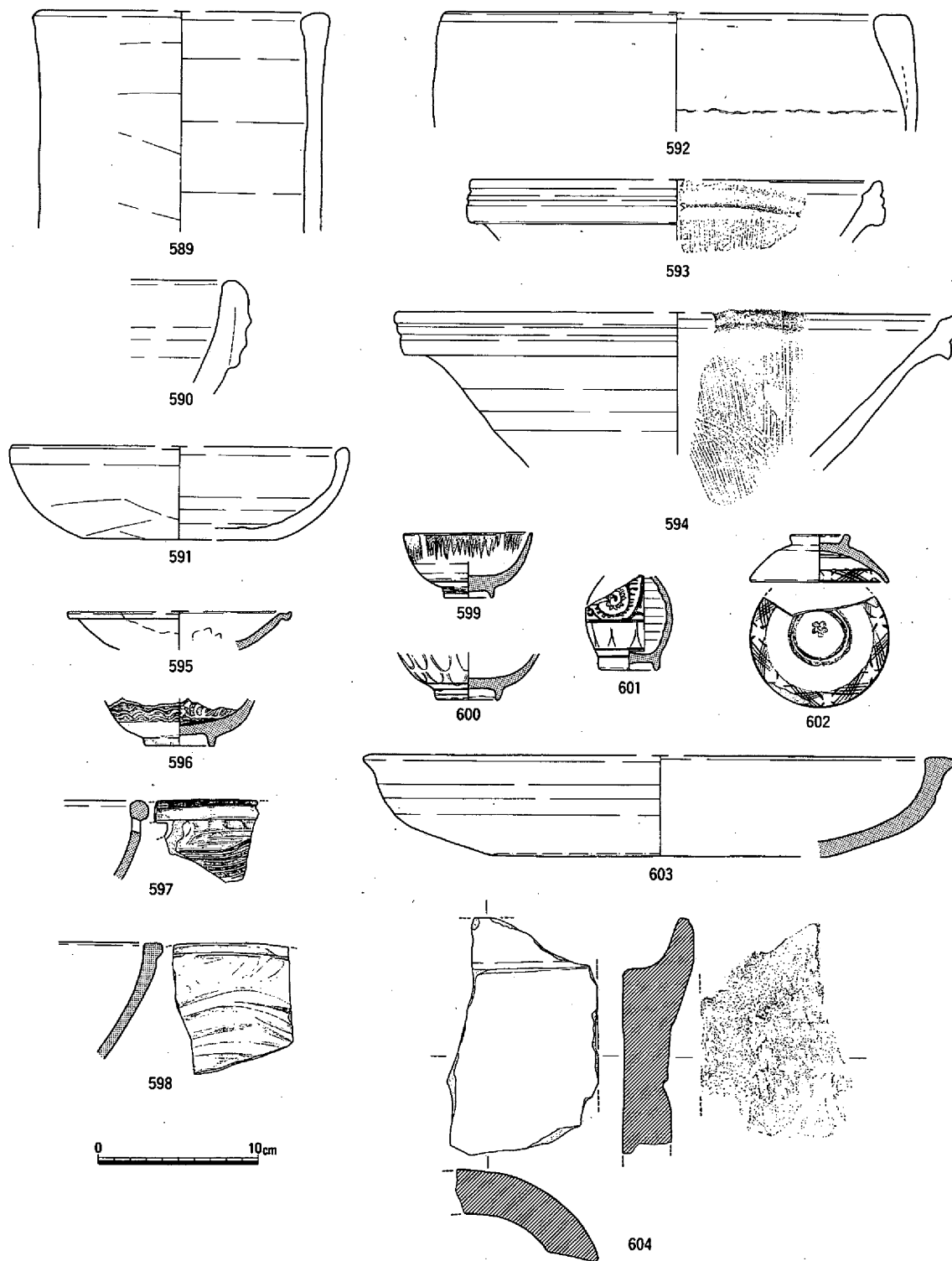
溝323 (第123~126図、図版20)

調査区南端11・12Q区に検出した東西方向の大溝である。東側調査区(米田遺跡3)の溝122の運河状の大溝に繋がる。西側では、調査区外に延びて調査区北西付近に検出のL字形大溝320・321に繋がるものと考えられる。溝上面の北寄りには現用水路が重複している。平面形は溝の突出部が北側に1カ所と南側に2カ所に挟り込むようであり、やや複雑な形状を呈す。溝底面はほぼ平坦で、中央がさらに一段深くなっている。規模は検出長12m、幅4m、最大深さ90cmである。断面観察位置が丁度窪ん

第3章 発掘調査の概要

だ場所で溝の断面形状が不明瞭であるが、東側の調査区（米田遺跡3）においても同様の溝の扶れた部分が認められる。埋土はこの付近では大きく2層に分層可能である。いずれも灰色系の粘質微砂土が堆積している。溝底部レベルは海拔45cmほどで、検出長が短いため高低差は不明瞭である。

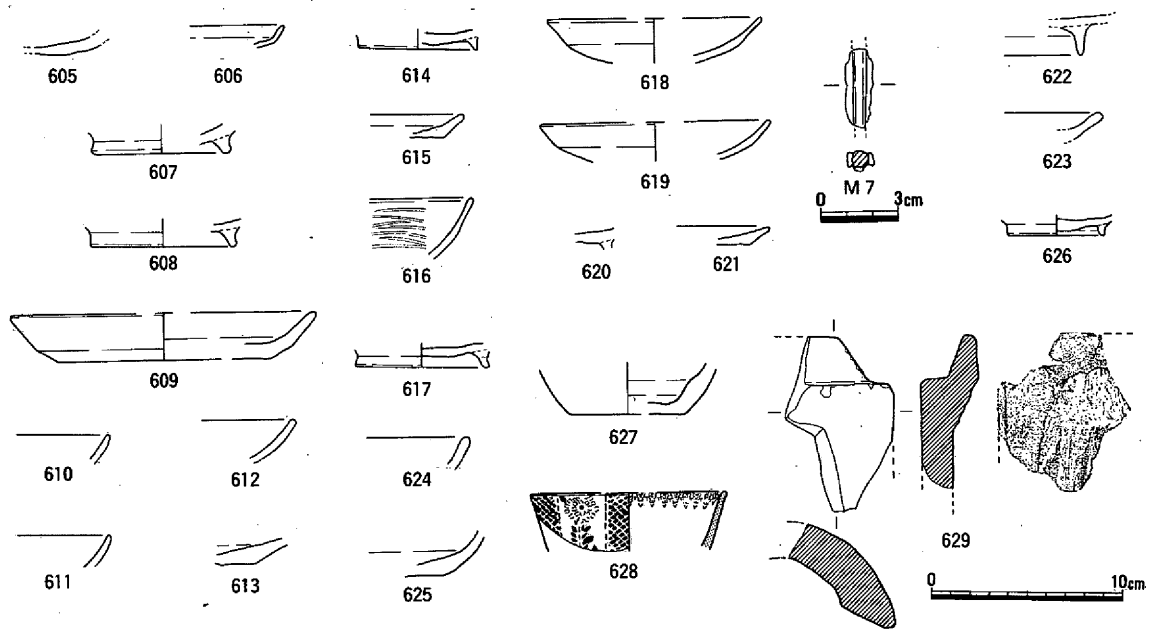
溝323からは、時期幅を有する土器が出土しているため、おおまかに古いものから順に掲載する。552～554は須恵器。555～563は土師器。555・556は椀、557～561は皿、562・563は鍋で、563は脚部のみ



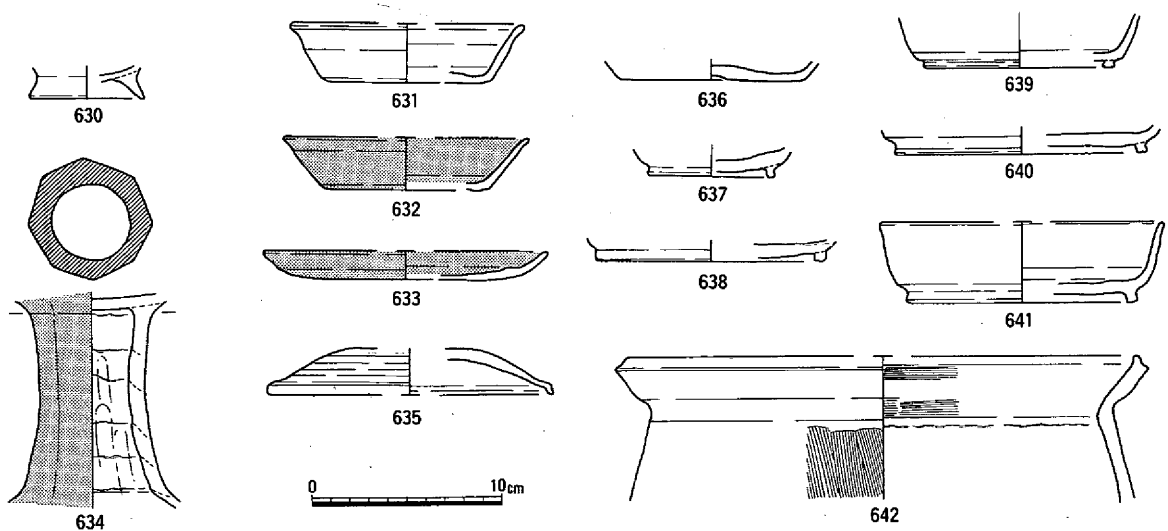
第126図 溝323 出土遺物〈3〉

残存。564は瓦器椀。565は瓦質土器鍋の把手。566は土師器皿で、底部糸切り。567・568は須恵質土器。569～579は備前焼。580～583は白磁碗。584・585は龍泉窯系の青磁碗。586～588は平瓦で、凹面には布目があり、凸面を大型の格子タタキで調整している。589・592は土師質の火鉢。590・591・593・594は備前焼。595～598は陶器。595は肥前唐津の皿。596は肥前系刷毛目唐津の碗。597・598は肥前系刷毛目唐津の鉢である。599～602は磁器。全て肥前系で、602の蓋内面にはコンニャク印判が見られる。603は美濃焼の陶器大皿。604は丸瓦。若干時期の古い土器も掲載しているが、大多数の土器が有する特徴から、溝323は13世紀～18世紀までの時期幅を有する溝であると考えられる。

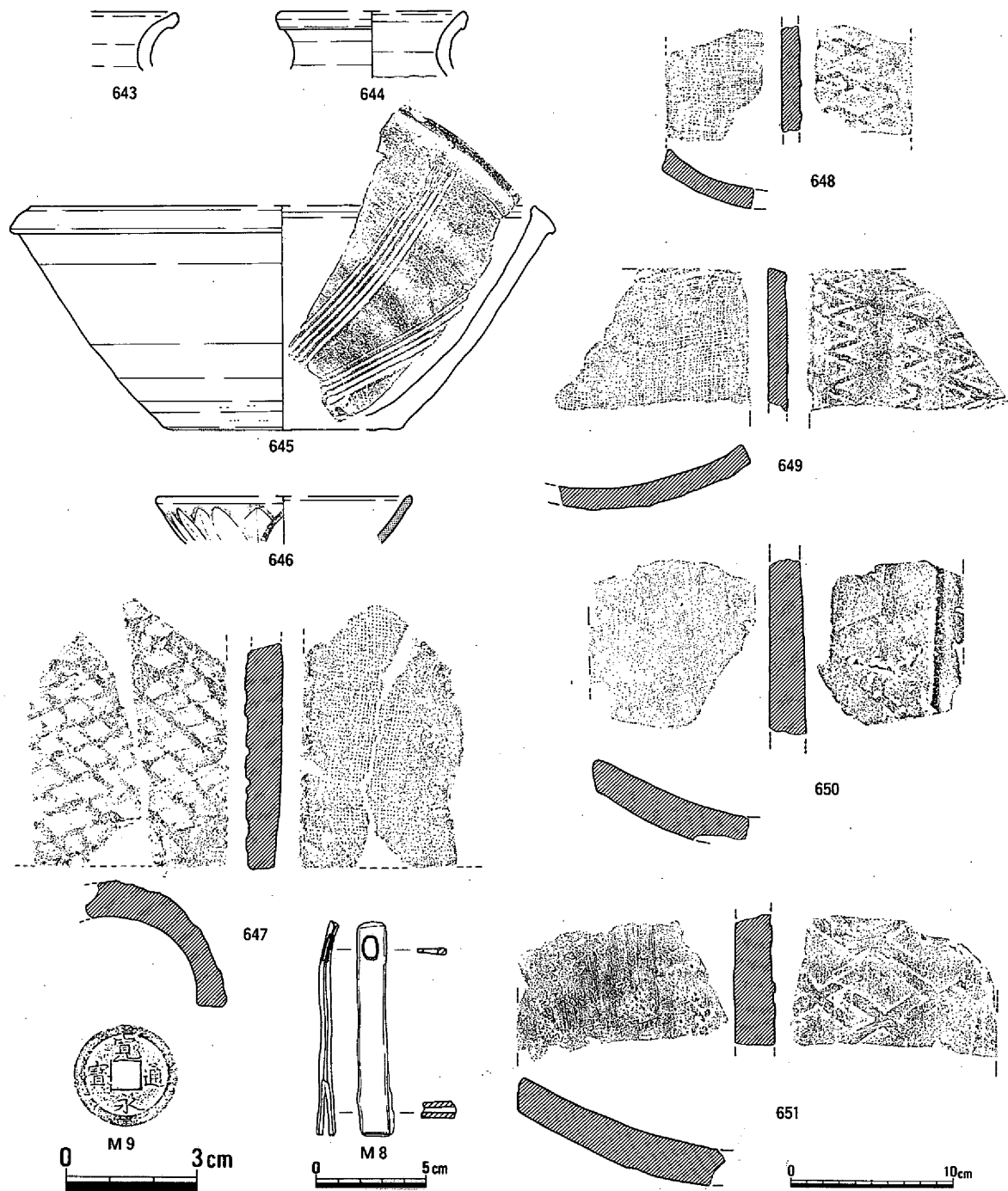
土器以外の遺物としては、土製品・木製品がある。C12～C14は土錘。W30は棒状木製品、W31は曲物の底板、W32は漆塗りの碗である。 (山磨、松尾)



第127図 柱穴311～324 出土遺物



第128図 遺構に伴わない遺物〈1〉

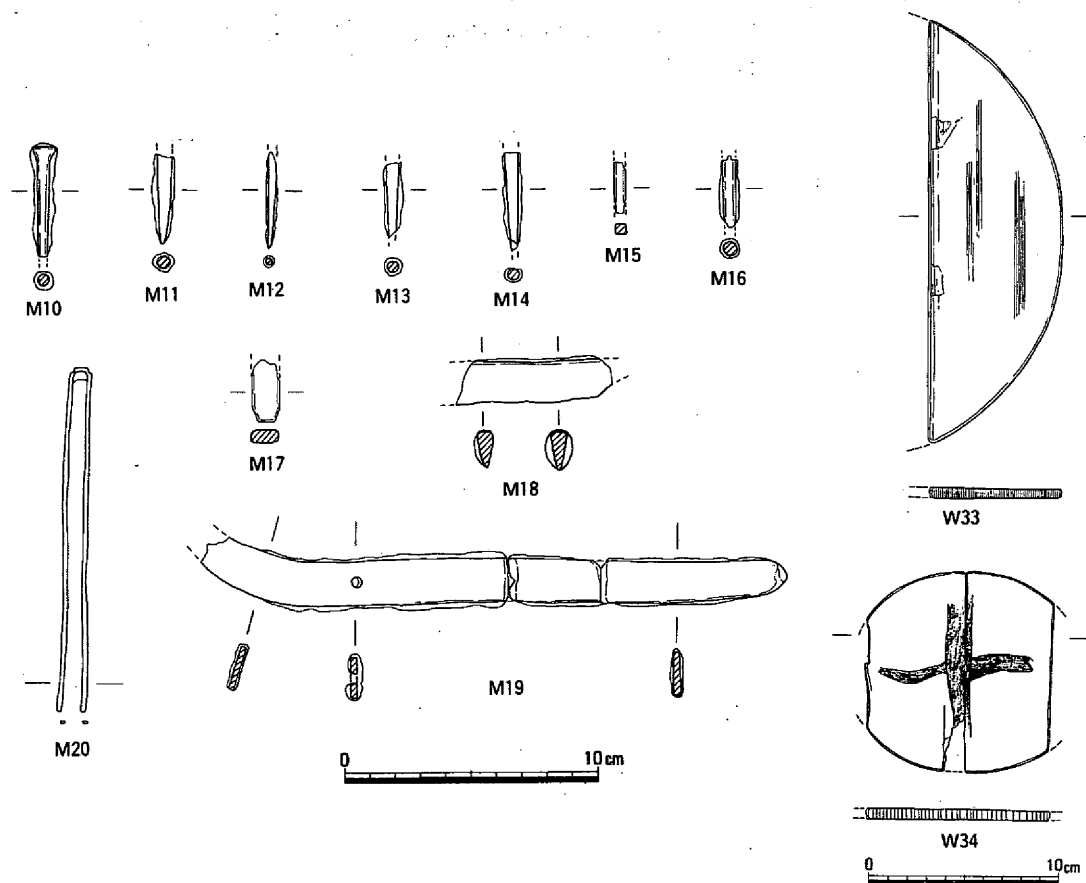
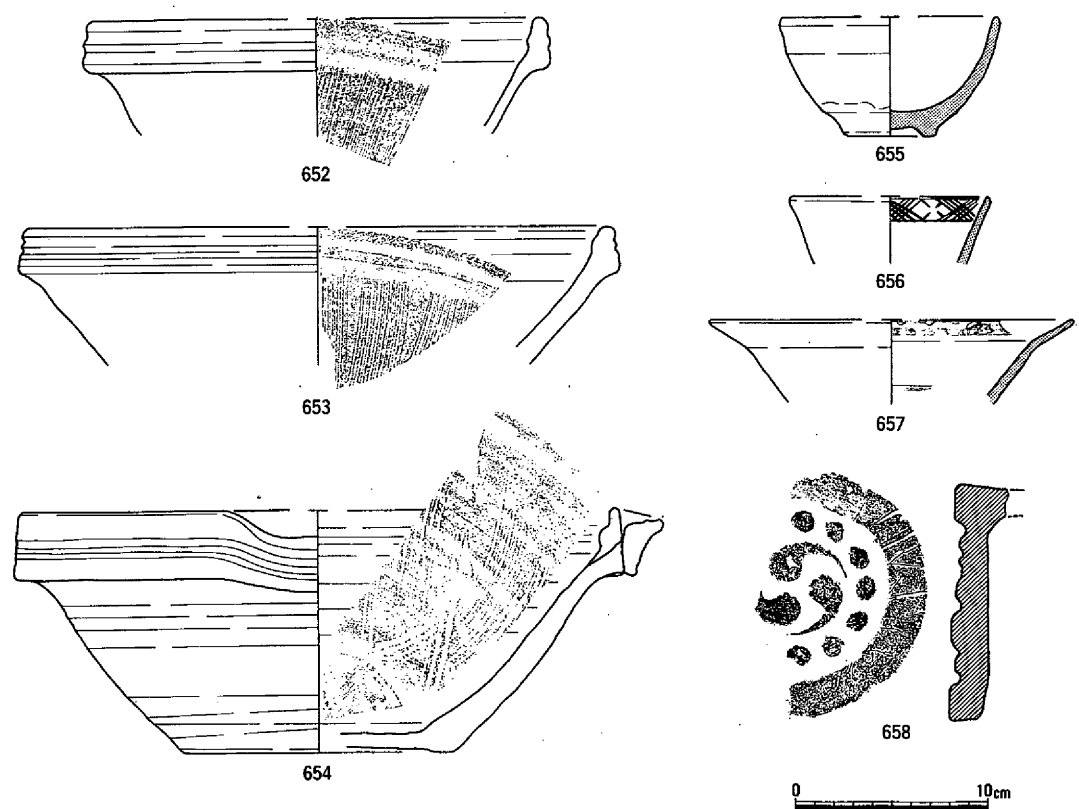


第129図 遺構に伴わない遺物〈2〉

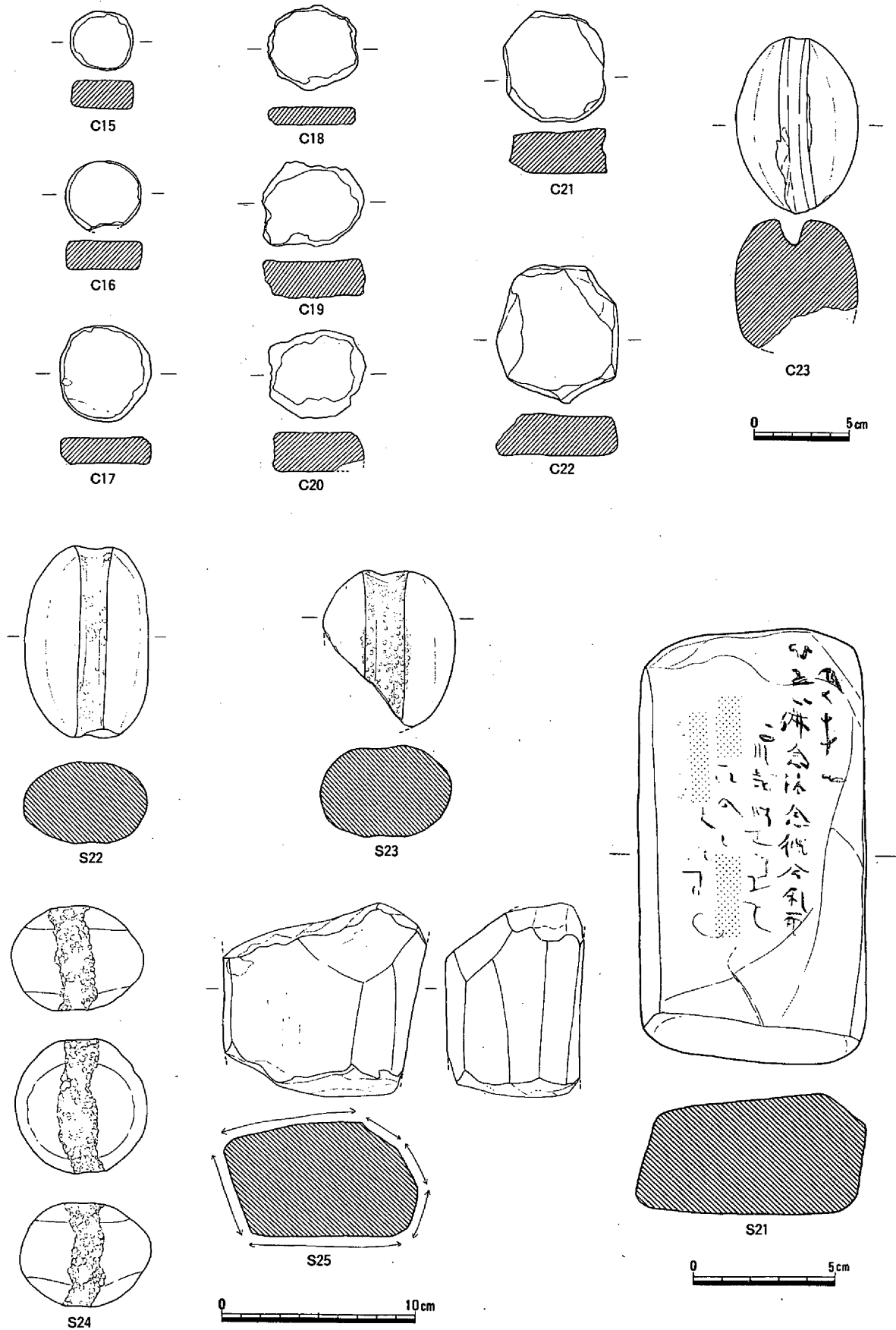
(5) 柱穴及びその他の出土遺物 (第127~131図)

柱穴内からは主に中世の土器が出土している。特に土師質の椀・皿・杯等の出土が多い。

包含層、近世以降の暗渠等からは、古代から中・近世の土器、鉄器、木器等が出土している。古代の遺物の内 (第128図)、633は内外面共に丹塗りの土師器で、634は面取りの土師器高杯脚部である。中世では備前焼、土師質椀・皿・杯、格子タタキに布目の瓦647~651等が出土している。 (山磨)



第130図 遺構に伴わない遺物〈3〉



第131図 遺構に伴わない遺物〈4〉

5 小結

百間川米田遺跡当麻調査区は、1978・79年度調査区^(註1)と1983～85年度調査区^(註2)に挟まれた低水路改修部分にあたり、百間川遺跡群の中では最も下流に位置する。遺跡の範囲は当麻の丘陵部から東側に弧状に広がっており、今回調査を行った地区は、遺跡範囲のほぼ中央付近から北側の微高地斜面付近までである。今後調査予定の未調査区を残すもの、図上では1978年度以降の調査区が繋がった状況である。

検出遺構は縄文時代から近世、近代にかけての遺構を検出している。このうち特に遺構の密度が高い時代は、弥生時代から古墳時代初頭の時期と中世から近世の2時期が顕著である。

当遺跡で最も古い時期の遺構は、微高地の北側斜面で検出した縄文時代のドングリの貯蔵用と考えられる土壙301である。ドングリ以外に出土遺物が無く時期の確定はしがたいが、百間川上流部の百間川沢田遺跡等で検出の同様の土壙等との比較から、縄文時代晩期に近い時期と想定される。遺構に伴わない土器は、少量であるが縄文時代晩期中葉から後半期のものが微高地の北側斜面部や微高地上から出土している。前回の調査区においても縄文土器の細片の出土を見ているものの、報告書に掲載可能な土器片は今回が初見である。ドングリ出土土壙以外に明瞭な遺構は無いが、当調査区の微高地が縄文時代晩期にまで溯り利用されていたことが明らかになった。

次に弥生時代から古墳時代初頭の時期は当調査区で遺構密度の高い時期の一つである。既報告『百間川当麻遺跡2』で報告されている当調査区西側の当麻丘陵裾部の調査では、弥生時代前期の遺構がかなり検出されている。前回検出の溝等の延長部が今回の調査区に延びる可能性があったが、調査区境の中世後半期の溝320・321を境に東側では削平が著しく、今回の調査区では遺構の検出はできなかった。ただ、調査区北側の微高地斜面の堆積層から土器片が散見されている。弥生時代中期では、溝302が東側調査区(米田遺跡3)の溝102の続きで、中期の中葉まで溯ると考えられる。この他、柱穴等から土器片が出土している。

弥生時代後期から古墳時代初頭の時期が最も遺構密度が高い。検出遺構は、竪穴住居、掘立柱建物、井戸、土壙、溝等で弥生時代の大半の遺構はこの時期である。ただ遺構の残存状況は、井戸が比較的良好なもの、竪穴住居、溝等はかなりの削平を受けている。検出した2基の竪穴住居の床面はいづれも削平されていた。井戸はいずれも素掘りの掘り方のものを8基検出している。井戸内最下層の完形の土器や埋土中の一括土器など豊富な資料が出土している。特に古墳時代初頭の井戸311では一部削平を受けていたものの土器以外に木錘、紡錘車等の木製品が出土している。検出した竪穴住居2基のうち住居301は、調査当初には粘土採掘の土壙群の集中した遺構と認識していた。その後、図面接合や写真撮影時の状況等から、直径約10mの範囲に等間隔に集中している土壙群であることが判明した。また、壁体溝の一部の検出等から竪穴住居内に設けられた土壙群であることも判明した。既報告米田遺跡3の竪穴住居103も同様な状況を呈しており、壁体溝内の柱穴掘り方位置に土壙群が掘り込まれている。いずれも竪穴住居の廃棄後の早い時期に土壙群が掘り込まれたと想定される。今後類例を含めて構造等検討する必要がある。その他に掘立柱建物を調査区の中央付近で5棟、南端で1棟の合計6棟検出している。

古墳時代後半期の時期の遺構は、今回の調査区では確認していない。わずかに包含層からの須恵器が出土しているにすぎない。

古代の遺構は、方形の掘り方を持つ建物308の柱穴3本を検出したにすぎない。なお、今回の調査区

第3章 発掘調査の概要

は奈良時代の倉庫群が検出された調査区の東側に位置する。このため同時期の建物群の検出が大いに期待されたが、溝320・321を境に検出面が60cm以上低かったために、かなりの建物群がすでに削平された可能性が強い。この他に須恵器を伴う土壙314がこの時期である。遺物は包含層中より須恵器、丹塗り土師器杯、面取りの土師器高杯等が出土している。

中世の遺構は、調査区全体で検出しており遺構密度の高い時期の一つで、出土遺物も豊富である。検出遺構は井戸、建物、土壙、溝等で、ほぼ調査区全体に広がっている。このうち中世前半期（平安時代末～鎌倉時代）では、3基の井戸が調査区のほぼ中央に集中して検出した。いずれも中世前半期の相前後する時期で、豊富な出土遺物が認められる。特に井戸315は、井桁に石組みを設け、井側に縦板を方形に組み込んだ方形隅柱横棧縦板型と呼ばれる井戸で残存状況も良好である。底面には井筒を設けている。出土土器には土師質土器、瓦器、須恵質土器、白磁等がある。土器以外には木製品も豊富で、曲げ物・椀・箸等が出土している。建物は調査区中央付近で1棟検出している。中世後半期（室町時代）では溝320・321・323が挙げられる。調査区南端の溝323は前回調査の大溝112の西側の続きで、さらに西に延びている。北端で検出の溝320・321は当麻の丘陵部の北側を巡り、東側ではほぼ南に直進し、さらに調査区外に延びている。いずれの溝も中心は15・16世紀の遺物が中心で、最終堆積は江戸時代である。検出状況から調査区外の南西部で、溝320・321と東側調査区の大溝112の一部である溝323が交差もしくは接続すると推定される。運河と考えられている大溝112は溝320・321と繋がりさらに上流部に掘削されて続いている可能性が強くなった。この他、中世後半期では調査区北端部で石組みの井戸312を検出している。

(山磨)

註

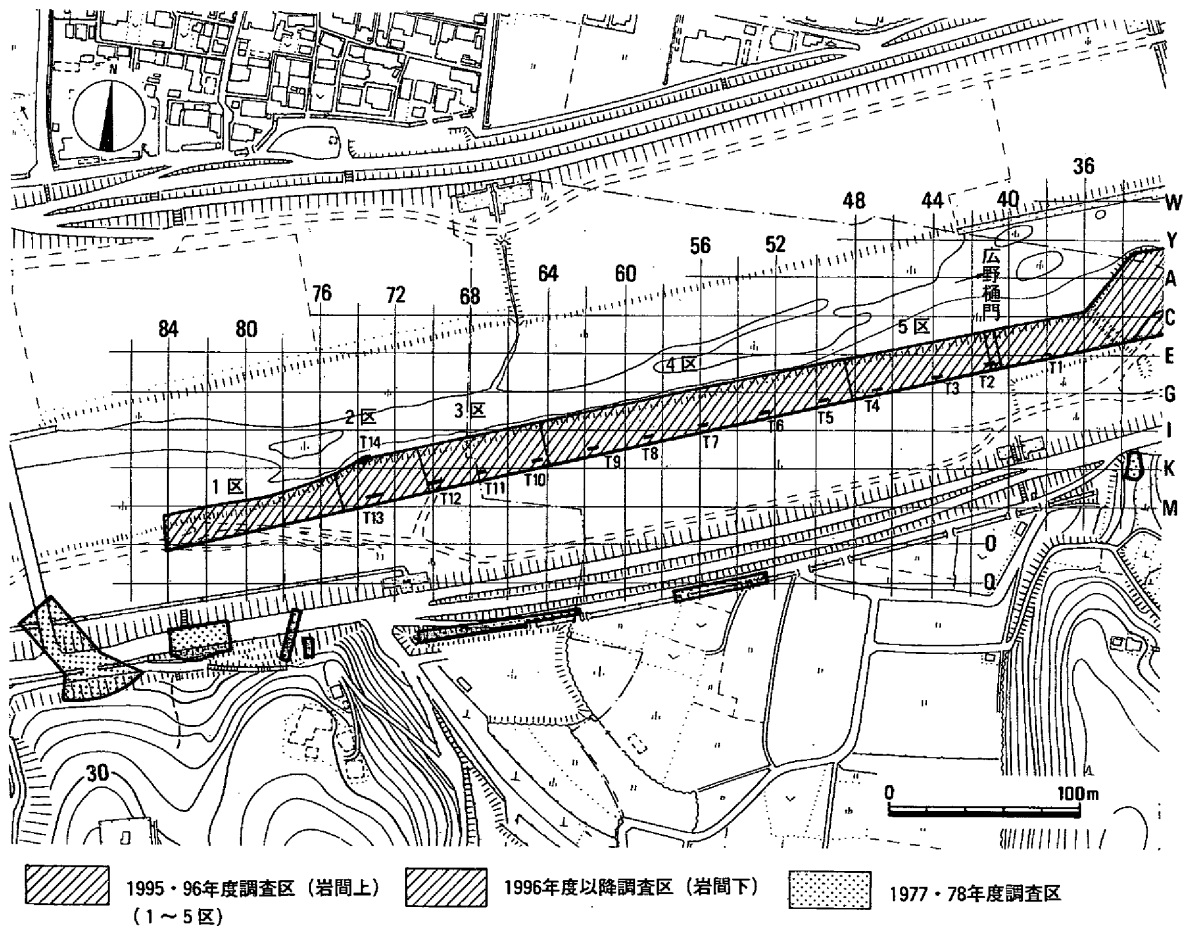
- (1) 井上 弘他「百間川当麻遺跡2」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』52 1982年
- (2) 岡本寛久他「百間川米田遺跡3」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』74 1989年

第2節 岩間上調査区

1 調査区の概要

当調査区は百間川改修計画の低水路掘削内の右岸側に当たる。1990年度の確認調査までは発掘調査の対象となつてなく、調査区の北側は既に改修工事が行われていた。岩間上調査区は総延長660m強にのぼる岩間調査区全体の西側2/3に相当し、広野樋門調査区を境としている。グリッドラインでは、41から84ラインである。地形的には63ラインを境として東側に微高地が広がり、西側は検出遺構最大の古代末から中世の河道1が大半を占めている。調査区西端付近では、操山丘陵の一部が北に延び、その裾部を河道1が巡っている。

検出遺構は古代末から中世の河道1を中心として、近世から近代に属するものまでである。調査区東側の微高地上では、遺構は希薄であったが中世以前に溯る可能性のある小規模な溝群を検出している。西側の調査区は、大半が河道1でほぼ東西方向に総延長210mにわたり検出している。当河道は、旭川の古代末から中世段階に於ける操山山塊の東側から児島湾に注ぐ東分流の1本と想定されるものである。河道1内からは、各種土器、木器、鉄滓等の膨大な量の遺物が出土している。また河道1内には埋没過程で貝塚、井戸、杭列、橋梁等の遺構を検出している。河道1埋没後には河道位置を踏襲する様に近世以降の溝群が掘削されている。(山磨)



第132図 グリッド設定、岩間上調査区・確認調査位置 (1/4,000)

2 確認調査・広野樋門調査区の成果

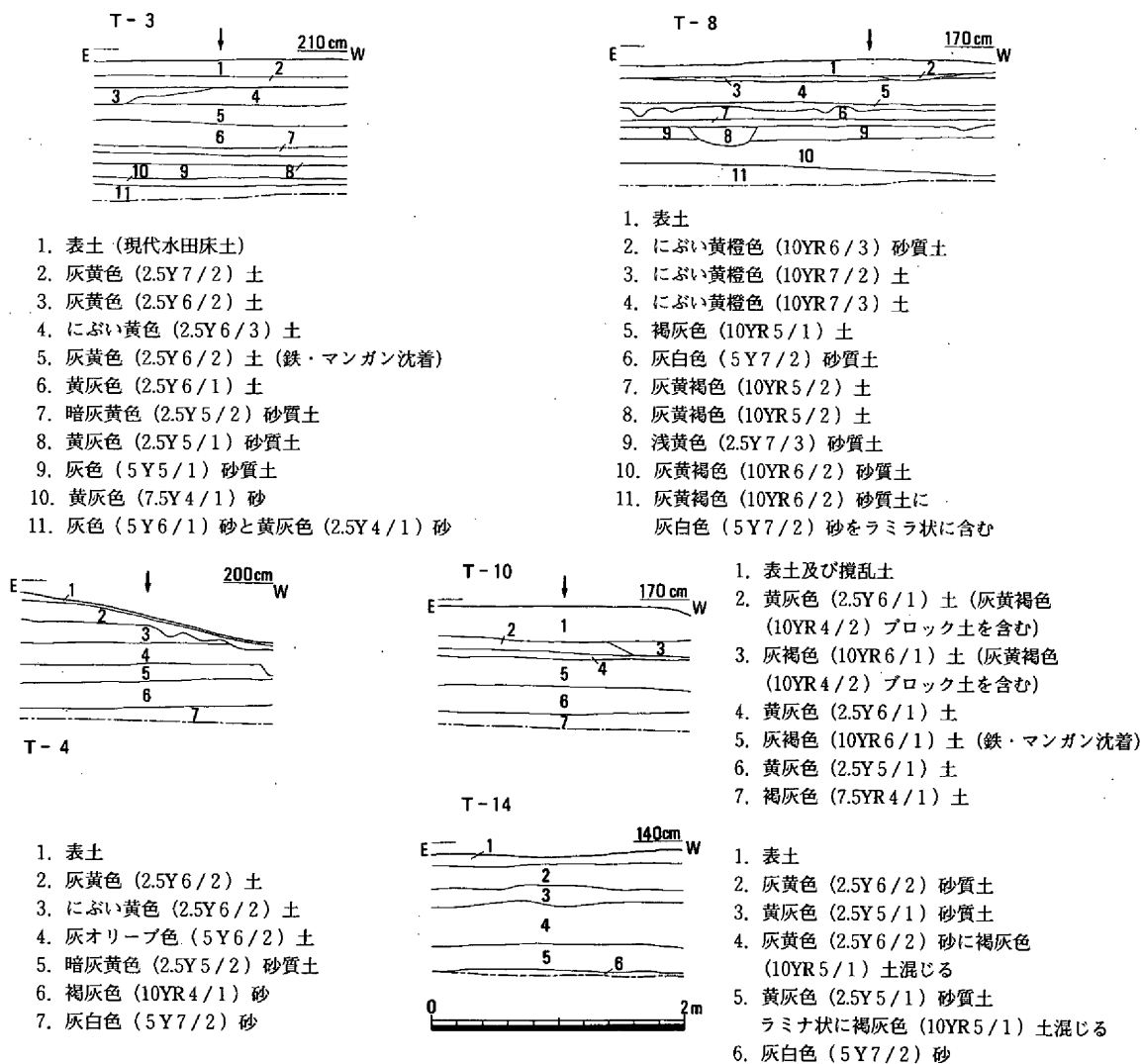
(1) 概要

百間川米田遺跡岩間調査区では、1990年9・10月に右岸低水路部分の遺構の有無、範囲等を把握するための確認調査を実施し、引き続き11月には広野樋門の排水路部分の全面調査を実施した。調査合計面積は619㎡である。

当調査区の丁度南側に位置する右岸用水路の部分では百間川長谷遺跡の調査が行われている。さらに上流部には百間川今谷遺跡、下流部には百間川米田遺跡（当麻調査区）が位置している。これらの遺跡に挟まれた右岸側の低水路改修部分に当たる。

(2) 確認調査（第133図）

確認調査は、下流部のG38ラインより上流部G74ラインまでの総延長400m間に幅1.0m、長さ5.0mのトレンチ13本と同区間の右岸側の既に掘削されている低水路法面の清掃による断面観察を行った。トレンチの掘削及び法面の観察は平均して表土より1.0～1.5m付近まで、海拔0～50cm前後までの土層観



第133図 確認トレンチ断面

察を行っている。ただ、グリッド47ラインより西側では、既に改修工事により海拔1.4m付近までの表土から中世の包含層までの土層が削平されていたために堆積状況が若干不明瞭である。

基本層序は44ライン付近までのトレンチ及び法面の観察では、改修前の水田面が海拔1.8~2.0m前後で、部分的には百間川改修工事の盛り土が認められる。削平を受けている47ラインより西側の現水田面は改修前の岡山市都市計画図等では、海拔2.1~2.2mを示しており東側とほぼ同様な地形を呈していたと考えられる。第2層には黄褐色ないし灰黄色の水田層が鉄分、マンガンの分離集積層を含みながら堆積している。第3層は灰黄色ないし灰色の砂質土で場所により分層可能である。この第3層は中世段階の包含層の可能性が高い。堆積層下部が海拔1.2m程である。海拔80cm付近からは砂やピート層混じりの互層の堆積となる。確認調査に於ける検出遺構の状況は、全般的に遺構の希薄な地区で、中世以降の貝の堆積した溝を含む数条の溝状遺構を検出したのみで柱穴等は確認されなかった。

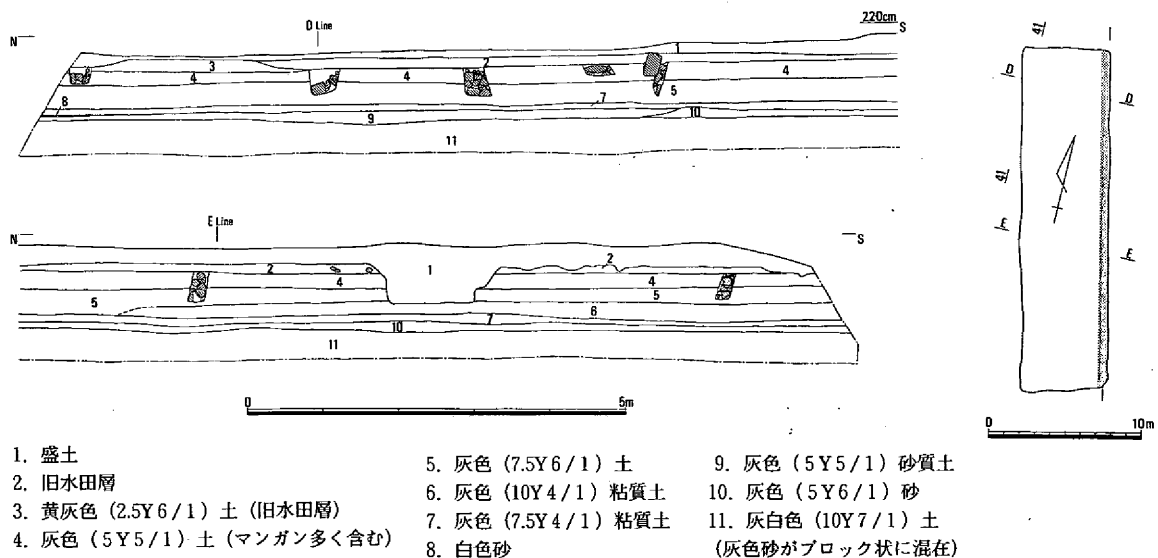
なお、西端のトレンチ10~13は、全面調査で検出された河道1内に丁度設定されており、河道堆積層に当たると考えられる第5~7層の上面付近まで掘り下げているものの、この時点では大規模な河道との認識が明瞭でなかった。

その他、トレンチ8で断面に観察される溝状の落ち込みは、全面調査における4区の溝24である。断面の観察状況では、第7層下部で検出されている。中世の遺構検出面が第7層上面付近までと考えられることから、溝24は遺物等の出土が明瞭でないが中世以前に溯る遺構の可能性はある。溝24検出の海拔1.0m前後が最終の遺構検出面である。

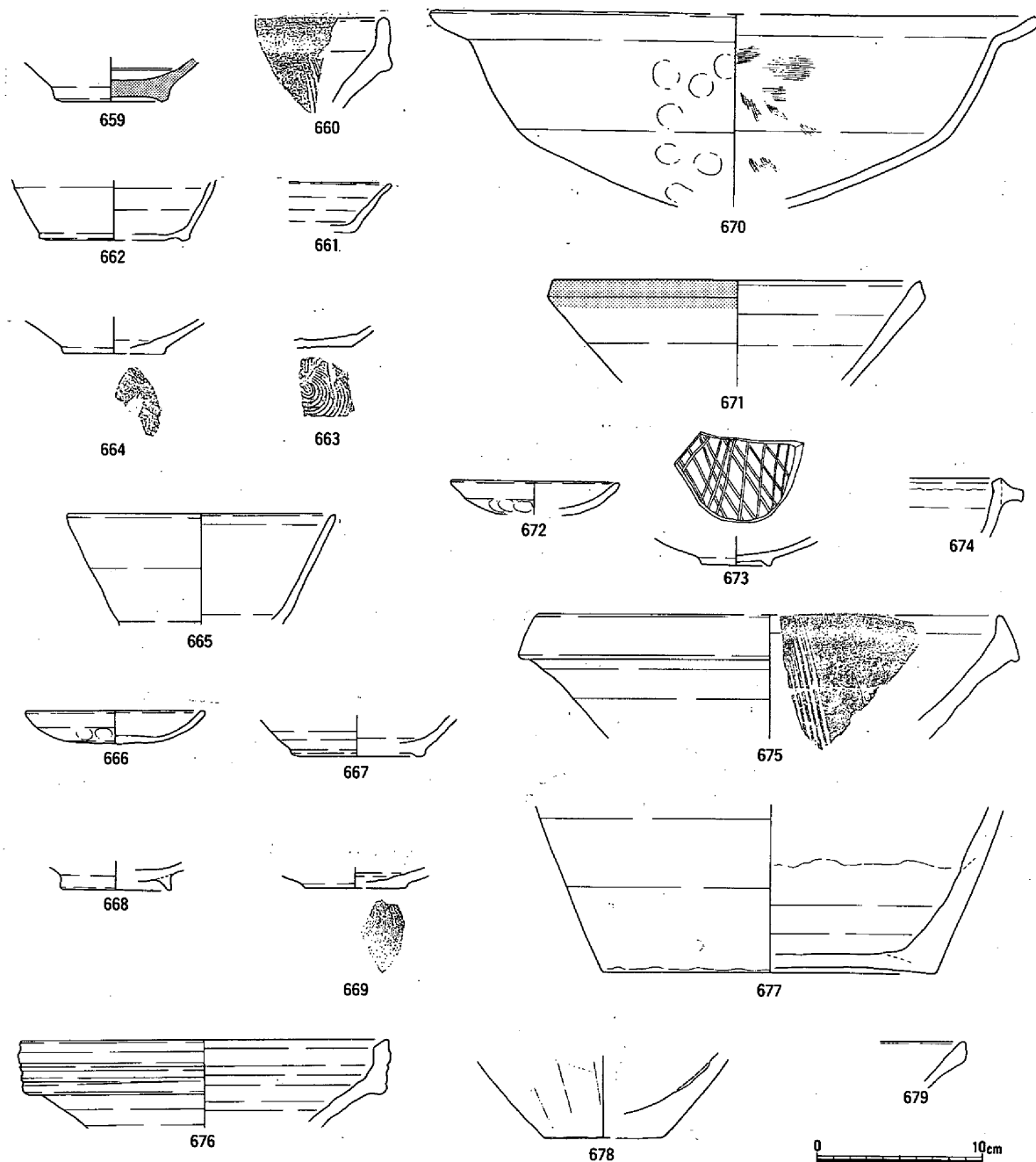
(3) 広野樋門調査区 (第134図)

米田遺跡岩間調査区のやや東よりG41ライン付近の右岸低水路調査区に位置する。広野樋門から続く排水路の調査区で、岩間調査区の確認調査に引き続き全面調査を先行して行った。調査区では5区と6区の間に位置する。調査面積は128㎡である。

基本層序は確認調査と同様に現表土が海拔1.8m前後で、改修前の水田層に当たる。第3~5層は近世から中世までの包含層と考えられる。最終的には、第9・10層除去後の海拔1.0m付近の第11層の上



第134図 広野樋門 平面 (1/500)、同 東壁断面 (1/100)



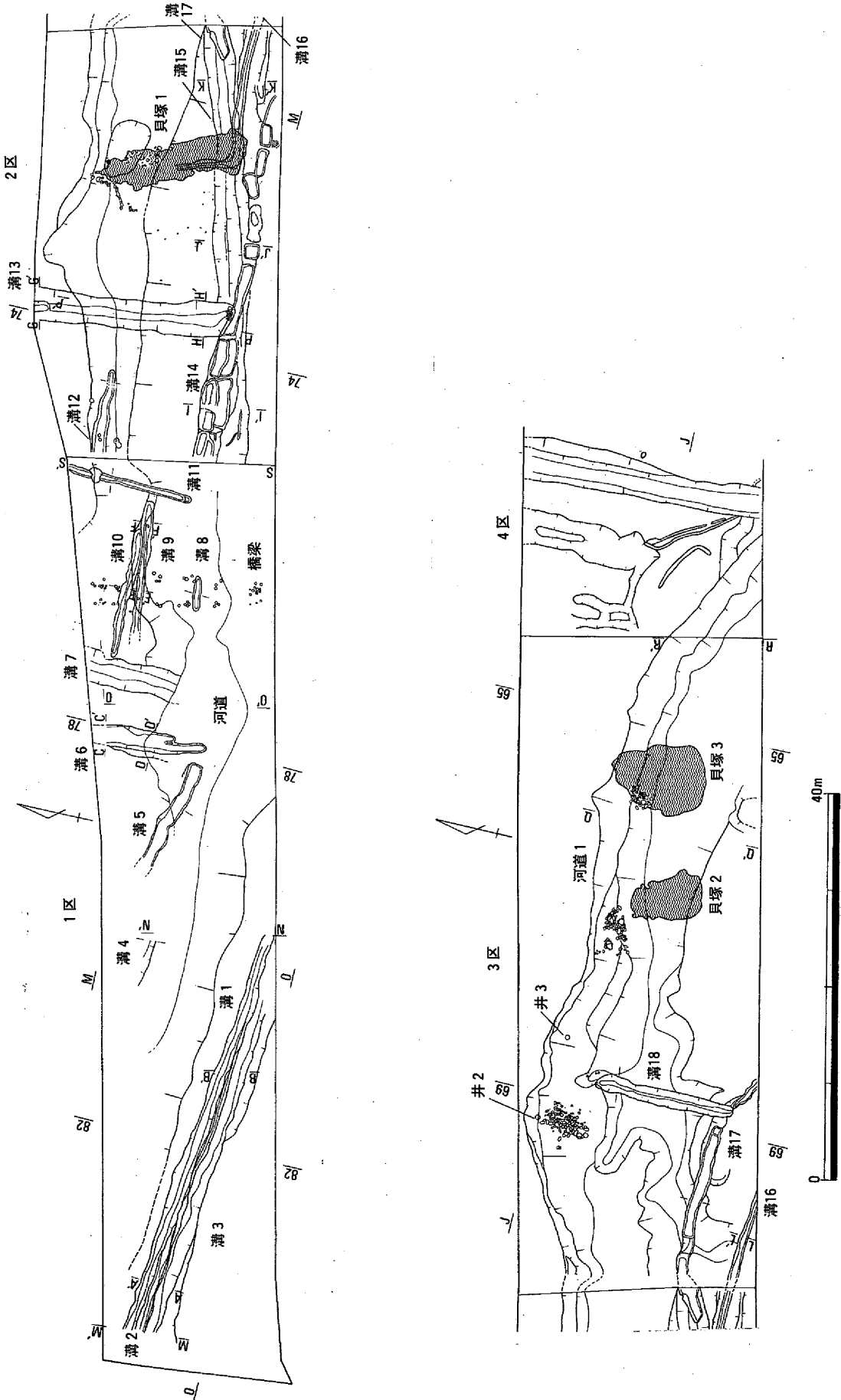
第135図 広野樋門・トレンチ出土遺物

面まで掘り下げを行ったものの遺構は確認されなかった。

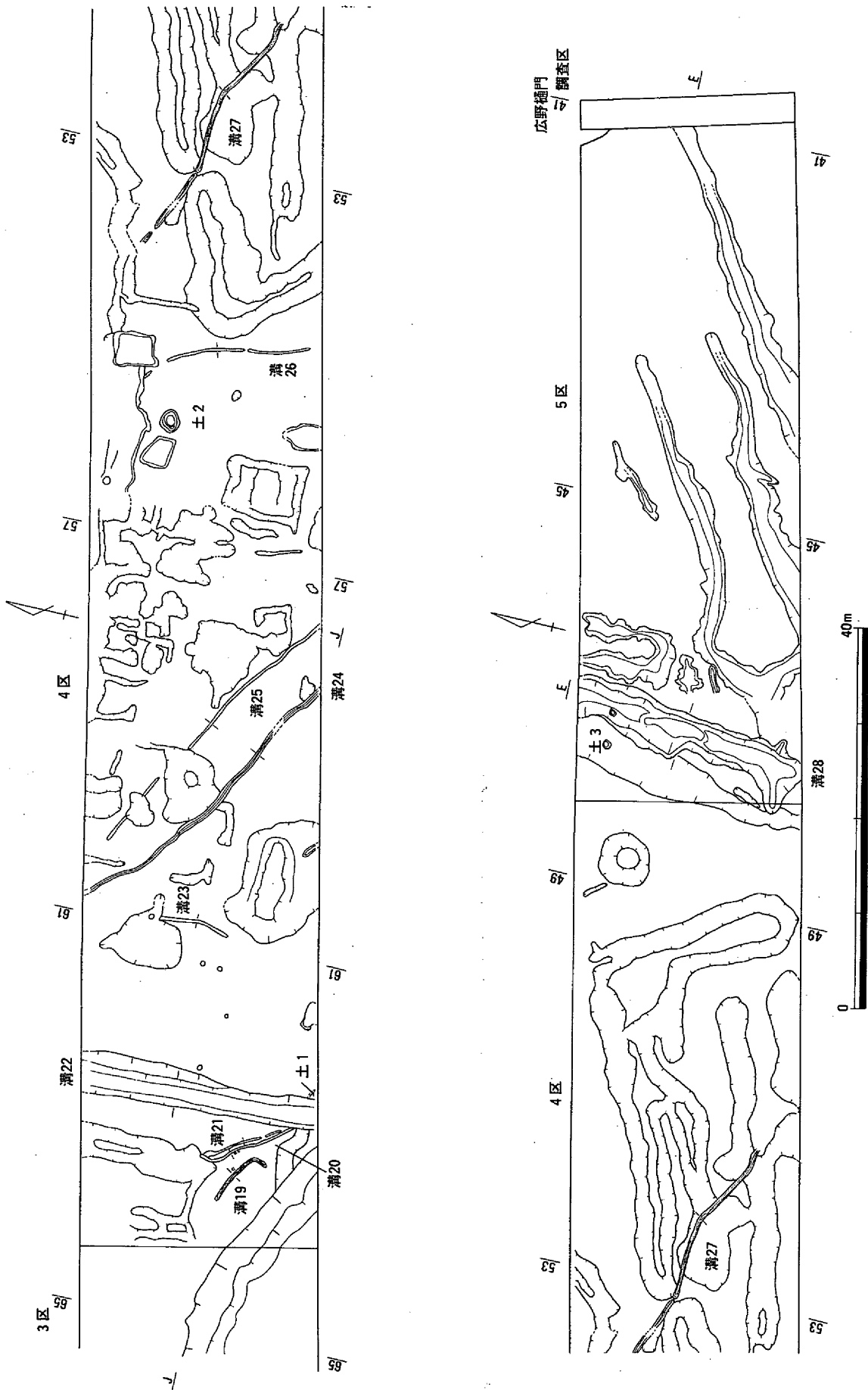
(4) 出土遺物 (第135図)

確認調査及び広野樋門の調査区でコンテナ1箱ほどの遺物が出土している、いずれも包含層内からの出土が大半である。時期的には弥生時代の土器から中世、近世までのものを含んでいる。659～665はトレンチ内、666～677は低水路右岸、678・679は広野樋門調査区からの出土である。

678は弥生土器の底部、661・662・665・667は古代の須恵器、663・664・669は底部糸切りの須恵系土器、659は白磁碗、660・675・676は備前焼播鉢、677は同壺、671・678は東播系の鉢、666は土師器皿、668は碗、670は鍋、673は瓦器皿、674は瓦質羽釜等が出土している。 (山磨)



第136図 岩間上調査区 遺構全体 <1> (1/600)



第137図 岩間上調査区 遺構全体 <2> (1/600)

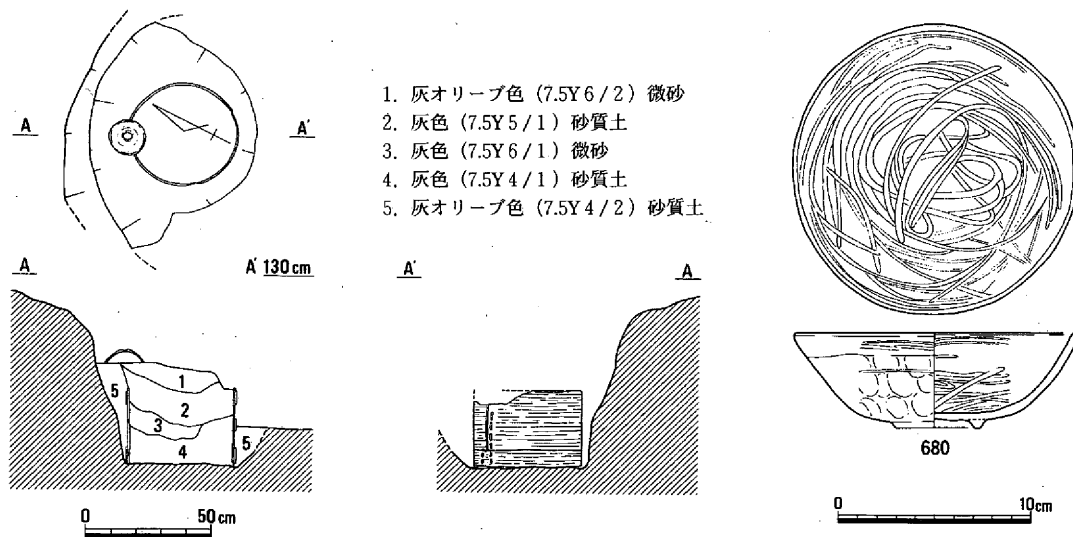
3 古代末～中世以降の遺構と遺物

(1) 井戸

井戸1 (第138図、図版31)

2区、73K区の古代末～中世の河道1の北側肩口に近い河道底面に井筒のみを検出した。検出時には、河道の埋土を底面に近いレベルまで掘り下げていたために、井戸の掘り方や掘削面等に不明瞭な点が多い。ただ井戸の掘削は、河道がかなり埋没して流路が大幅に変更したか、もしくは縮小した後で行われたと考えられる。検出時の掘り方は直径70～90cm、深さ60cmまで確認している。井戸埋土は砂と砂質土である。井戸の底面はほぼ平らで、中央に直径43cm、高さ30cmの曲物の井筒を設置している。曲物は厚さ2～3mm、幅5cmほどの檜板を折り曲げて輪を作り、樹皮で綴じ合わせている。上下端部には檜板を二重に巻いて補強している。井戸底面は海拔55cmを測る。

遺物は、掘り方内の井筒上面付近から瓦器碗の完形品が1点出土している。瓦器碗680は、口径14.6cm、高さ5.0cmを測り小振りな高台を付している。外面は押圧を施し、内面は丁寧なナデ後にヘラミガキを施している。旧当麻遺跡井戸3出土の碗に法量、調整が近似している。井戸の年代は、検出状況等から出土碗の年代より下る13世紀代の範疇と考えられる。(山磨)



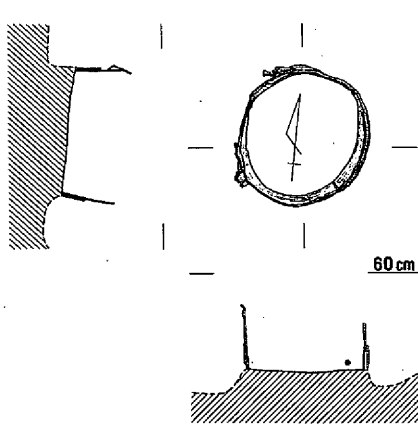
第138図 井戸1、同 出土遺物

井戸2 (第139図、図版33)

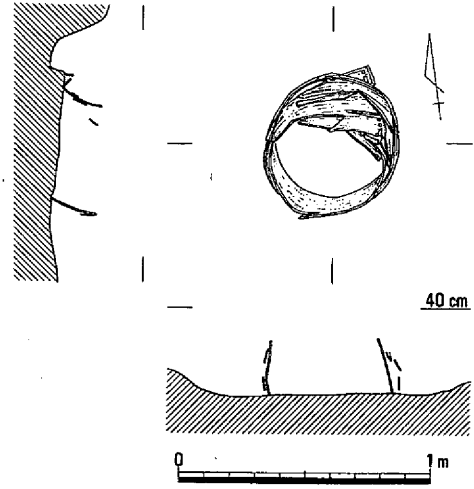
大きな河道の北岸、微高地に接する位置に検出した。井戸は、長径が140cm程の穴を掘り、掘方の底面はほぼ水平である。その中央に曲げ物を利用して井筒として埋めるものである。曲げ物は、2段階が残存していた。曲げ物の接合部分には、曲げ物がずれないように薄い板が数カ所に差し込まれていた。井筒の直径は48cmを測り、検出した高さは、27cmを測る。伴出遺物がないために、明確な時期は不明であるが、周辺の遺構などから推定すれば、14世紀を前後する頃と想定される。

井戸3 (第140図、図版33)

井戸2の東約9mに検出した。井戸2と同じく河道の肩口、微高地に接する位置に所在するもので



第139図 井戸2



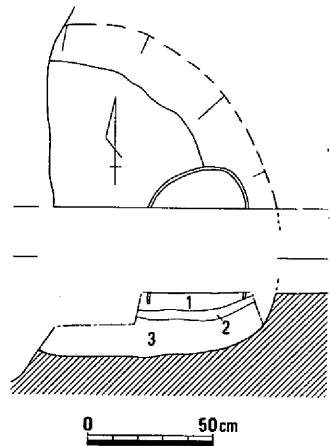
第140図 井戸3

ある。この井戸も、長径140~150cmの穴を掘りそのほぼ中央に井筒を置くものである。掘方の底面は水平であり、井戸2と同じく砂層を底としている。この井戸も、井筒として曲げ物を使用するものである。曲げ物は、北から南に少し倒れてはいるが、底面では正円形を保っていた。底面での曲げ物の直径は48cmを測る。検出した高さは20cmである。伴出遺物がないので、明確な時期は不明であるが、井戸2と同時期と考えられる。(井上)

(2) 土壌

土壌1 (第141図)

4区西端、63J区南端の調査区境に位置する曲物を伴う土壌である。土壌は西半分を近世以降の溝22により削平され、さらに半分程度は調査区外である。したがって遺構は推定直径2.0m、深さ25cmの掘り方の一部と掘り方の東端に直径35cm、深さ5cmほどの曲物の半分程度を検出したのみである。出土遺物は皆無で時期の確定がしがたいが、遺構の切り合いや埋土等から近世以降と考えられる。



1. 灰黄色 (2.5Y7/2) 粘質土
2. 浅黄色 (2.5Y7/4) 砂
3. 明黄褐色 (2.5Y7/6) 粘質微砂

第141図 土壌1

土壌2 (第142図)

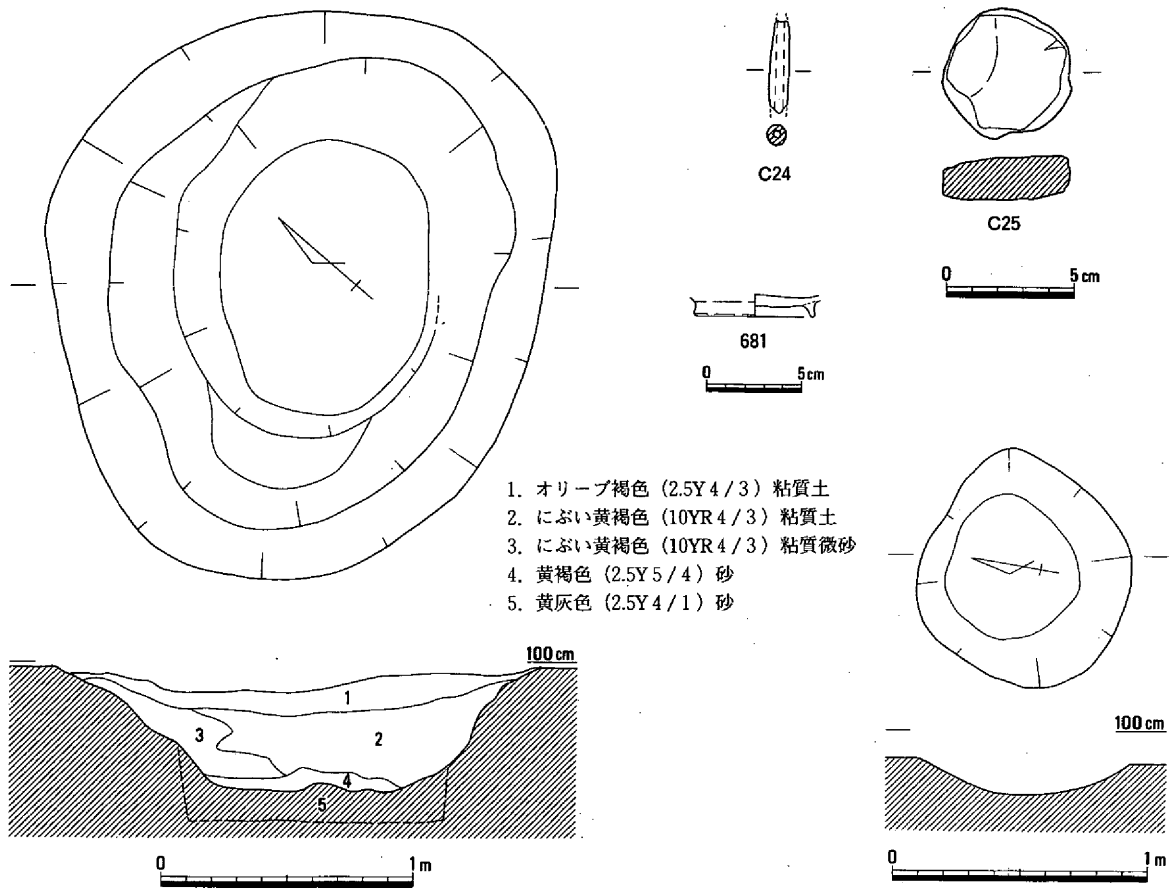
4区中央の56G区のやや北よりに位置する。平面形はほぼ円形を呈し長径2.2m、短径2.0m、深さ45cmを測る。底面は、ほぼ平らでU字形の断面を呈す。埋土は4層に分層可能で第1層にはオリーブ褐色、第2層にはにぶい黄褐色のいずれも粘質土、第3層にはにぶい黄褐色粘質微砂、最下層には黄褐色砂が堆積している。

遺物は土師質土器の細片、土錘、土製円盤が出土している。土壌の時期は埋土や検出面、出土遺物等から中世以降と考えられる。

土壌3 (第143図)

5区の西端部、48E区に位置する。溝28と1.5m程の間隔を置いて西側に検出した。平面形はやや不整形な円形で、長径95cm、短径85cm、深さ15cmを測る。断面は浅い皿状を呈す。

出土遺物は皆無で時期の確定はしがたいが、埋土や検出状況等から中世以降と考えられる。(山磨)



第142図 土壌2、同 出土遺物

第143図 土壌3

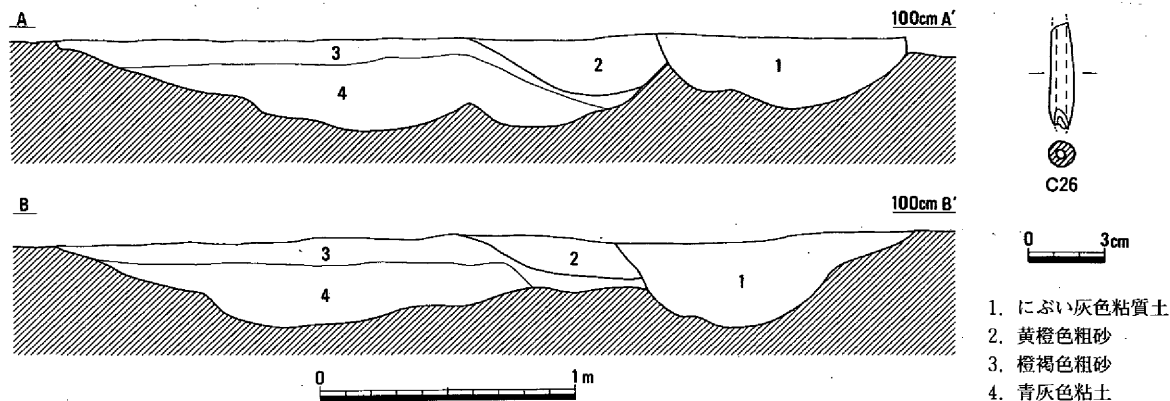
(3) 溝

溝1・2・3 (第144図、図版24)

東から西に流れる大きな河道1の南岸に平行するような位置に検出した。しかし、溝は河道1が完全に埋没した後のもので、埋積した河道1に掘り込まれたものである。溝3はその南岸を河道1とほぼ同じくするものである。北岸は、溝2と重なるためその幅は不明であるが、溝の断面観察からすれば2m程度と推定される。溝の断面形は碗形を呈するもので、部分的には河道の岸と共通する場所もある。検出面からの深さは38cmを測り、全長35mを検出した。溝2は溝3とほとんど平行して約150cm北側を流れるもので、溝3の北岸に重なるものである。この溝も溝1と重なっているため正確な幅は不明であるが、90cm前後と推定される。遺存状態の良好な部分での深さは55cmを測り、検出した全長は34mである。この溝の西端は、溝1と重なるため検出した全長は短い。溝1も溝3と平行して流れるもので、ほぼ溝2の北岸付近に位置する。溝の幅は120cm、深さ34cmを測り、検出した全長は45mである。これら溝の時期は、中世末ないし近世初頭と考えられる。

溝4 (第145図)

東西方向に延びる溝のごく一部を検出したものである。溝のほとんどは後世に削平されているため



第144図 溝1～3 断面、溝3 出土遺物

に、検出した最大長は約5mである。最も良好に遺存する部分でその形状を見ると、断面形はU字に近い形状を呈しており、溝の底面はほぼ平坦である。検出面からの深さは、最も深い部分で26cmを測る。溝の時期は、伴出する遺物に軒平瓦が見られ、その文様、形状から近世瓦と考えられることから、近世以降と考えられる。

溝5 (第146図、図版24)

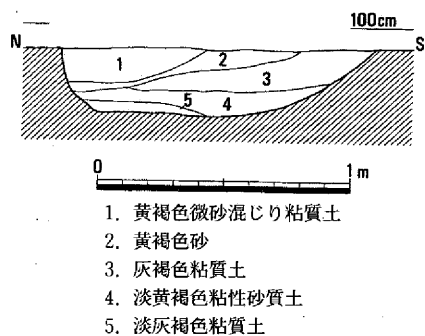
溝4の東約4mの位置に検出した。同じく東西方向を向くものである。溝のほとんどは削平されているため、検出できたのはその一部である。検出した最大長は約11mを測る。遺存状態の良好な部分での幅は、140cm、検出面からの深さは、11cmを測る。断面形は、浅い皿状を呈している。出土遺物としては、磁器、備前焼、土師質碗などがある。溝の時期は近世以降と考えられる。

溝6 (第147図、図版24)

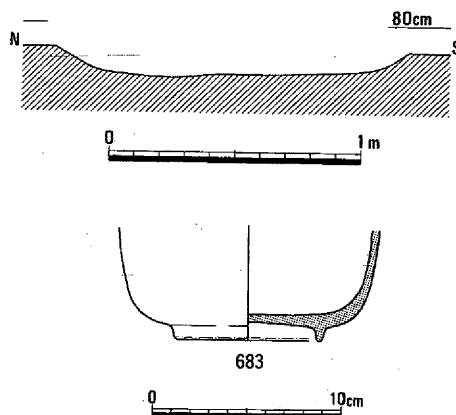
溝5の東端部に接するような位置に検出した。ほぼ南北方向を向くもので、検出した全長は約11mを測る。二本の溝が重複するもので、土層断面図の21層がその一部であり、古い溝は新しい溝によりその殆どを削平されている。新しい溝の幅は、208～218cmを測る。また、検出面からの深さは、最も深い部分で68cmを測る。溝の底部は、南に浅く北に深い状況を呈していた。出土遺物として、土師質碗、小皿、備前焼播り鉢等がある。溝の時期は中世に属するが、中葉以降に使用されたものと考えられる。

溝7 (第148図)

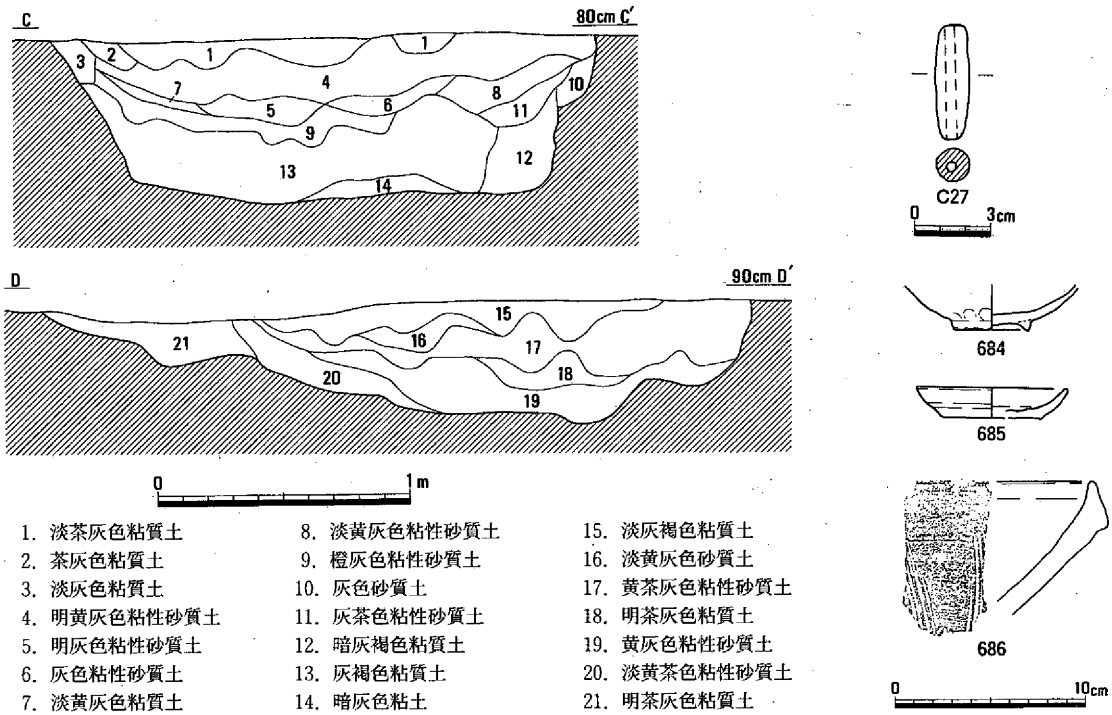
溝6の東約4mの位置に検出した。溝6とほぼ並行するもので、南北方向を向くものである。検出した全長は、約9mを測り、溝6と同じく南から北に流れるものである。溝の幅は、検出面で3mを



第145図 溝4 断面、同 出土遺物



第146図 溝5 断面、同 出土遺物

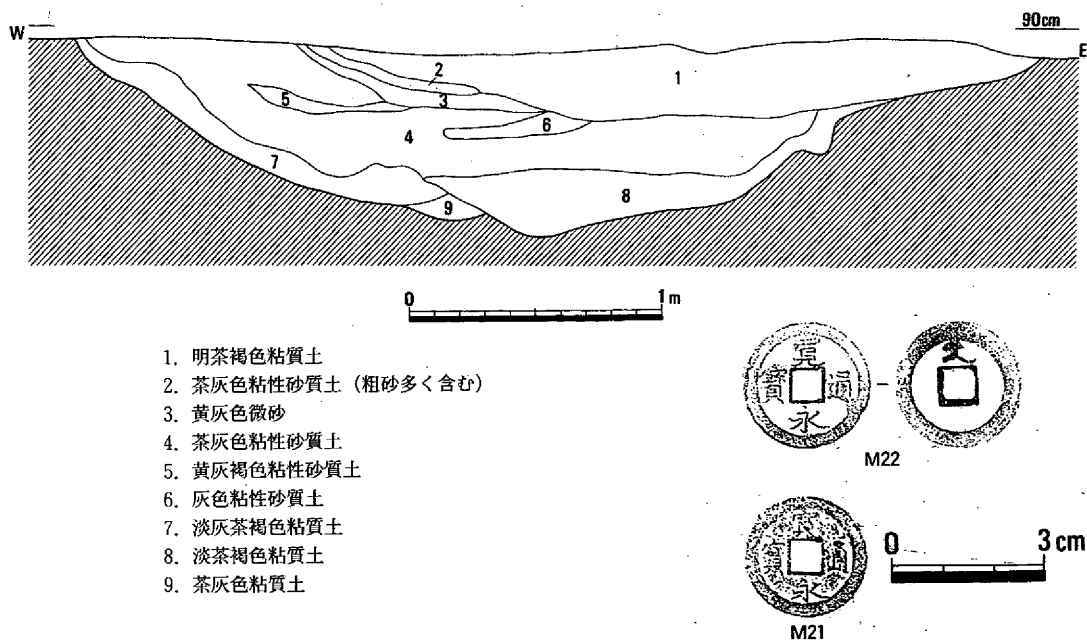


第147図 溝6断面、同 出土遺物

測る。溝の断面形を見ると、全体的に弧を描くもので、底面もほとんど平坦面が見られない。検出面からの深さは、最も遺存状態の良い場所で、70cmを測る。出土遺物としては、掲載する銅銭「寛永通寶」二枚がある。溝の時期は近世に属するものと考えられる。

溝8 (第149図)

溝7の東約7mの位置に検出した。この溝は、ほぼ東西方向を向くものである。溝は、良く削平されているものと推測され、残存するのはその一部である。検出した全長は350cmと短い。検出面での



第148図 溝7断面、同 出土遺物

第3章 発掘調査の概要

溝の幅は、61cm、深さ、10cmを測る。溝の断面形は浅い皿状を呈するが、底面は、緩やかな凹凸がある。溝からの出土遺物がないため、明確な時期については不明であるが、中世末～近世初頭と推測される。

溝9 (第149図、図版24)

溝8の北約5mの位置に検出した。溝8に並行するもので、ほぼ東西方向を向く。検出した全長は約13mを測る。検出面での溝の幅は、80～96cmを測る。溝の断面形は、U字形を呈するもので、検出面からの深さは、28cmを測る。溝の東端は明瞭に検出できたが、西端は不明である。溝は、西から東に流れるものである。溝の時期は、中世末から近世初頭と推測される。

溝10 (第149図、図版24)

溝9の北側に一部接して検出した。溝9と同じく東西方向を向くもので、より東西方向に近い。検出した全長は約15mを測る。溝9との重複部分の検出状況からすれば、溝10の方が新しい。溝の西端は、溝7と接しているが、検出状況からすれば、溝7が新しい。検出面での溝の幅は、96cm、深さ36cmを測る。溝の断面形は、逆台形を呈するものである。溝の時期は、中世末から近世初頭と推測される。

溝11 (第150図)

溝9の東約1mの位置に検出した。南北方向を向く溝で、検出した全長は約13mを測る。検出面での溝の幅は、50cm、深さ12cmを測る。

溝の底面は、一方向に向けて深くなるのではなく、検出した中央部から両端に向けて深く掘られている。そのため、流路方向は不明である。溝の時期は、埋土や検出面等から中世末から近世初頭と推測される。(井上)

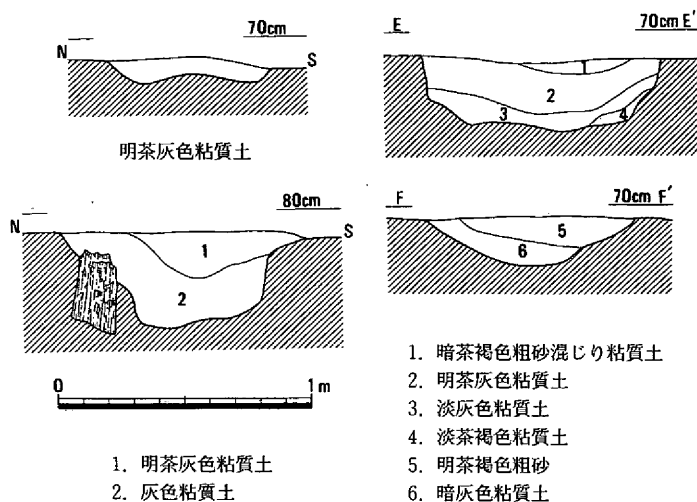
溝12 (第150図)

2区西端の75・76L区に東西方向に位置する溝状遺構である。残存状況が悪く東は調査区内で終了して、西側の1区では未検出である。検出長8.5m、最大幅1.4m、深さ5cm以下で浅い。平面形は若干蛇行し底面に凹凸がある。溝底部レベルは海拔90cm前後である。

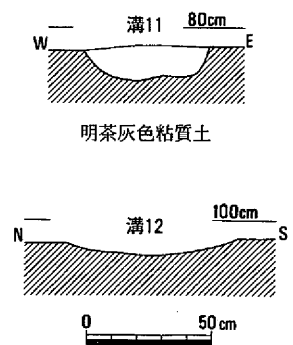
遺物は備前焼の小片が出土している。時期は埋土や検出面等から近世以降と考えられる。

溝13 (第151図)

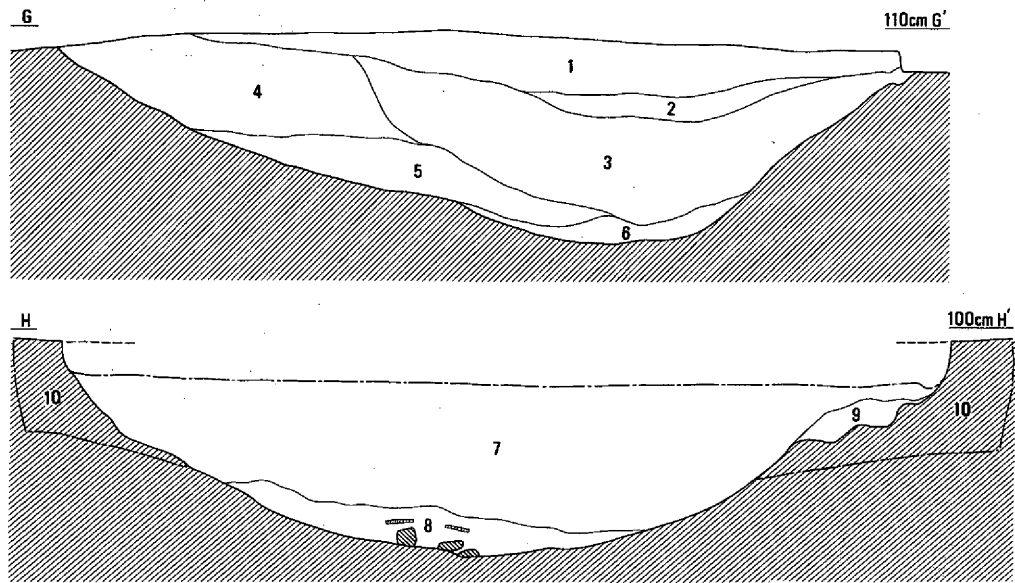
2区の中央74K・L区に南北方向に位置する。南側は現用水路に接続するあたりで終了している。北側はさらに調査区外に延びている。検出長21.0m、幅2.5～3.5m、最大深さ90cmでほぼ直進している。溝南端には人頭大から直径40cmほどの石材をやや乱雑に数段積み重ねて、さらに両側肩部にも八字形



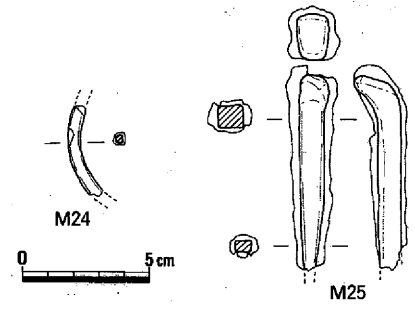
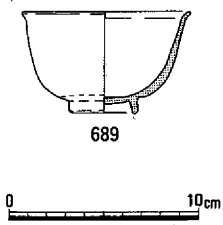
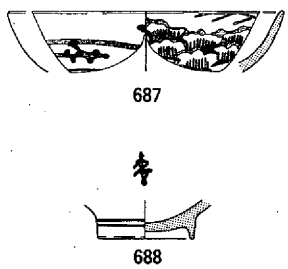
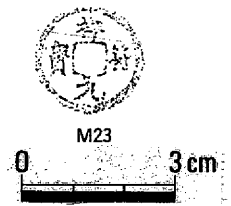
第149図 溝8・9・10 断面



第150図 溝11・12 断面

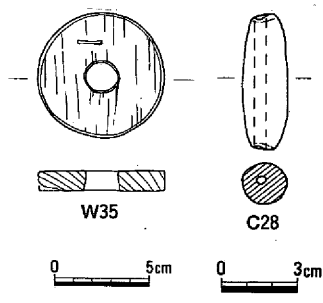


- | | |
|-----------------------|-----------------------------|
| 1. 浅黄色 (2.5Y 7/4) 粗砂 | 6. 暗青灰色 (5BG 4/1) 粗砂 (グライ化) |
| 2. 黄橙色 (10YR 7/8) 砂礫 | 7. 黄褐色 (10YR 5/6) 砂質土 |
| 3. 明橙褐色 (2.5Y 6/6) 粗砂 | 8. オリーブ灰色 (10Y 4/2) 砂質土 |
| 4. 明橙褐色 (2.5Y 7/6) 粗砂 | 9. 褐色 (10YR 4/4) 砂質土 |
| 5. 浅黄色 (2.5Y 7/4) 粗砂 | 10. 灰黄褐色 (10YR 4/2) 粘質土 |



第151図 溝13 断面、同 出土遺物

に配列している。南端部の幹線水路からの取水位置に設けられた石組と考えられる。溝断面は椀状をなし、埋土は2層に分層可能で粘質微砂土が堆積している。溝底部レベルは北端で海拔30cm、中間部がやや高く海拔46cm、南端部で海拔0mに近い。流走方向は調査区内では不明瞭である。



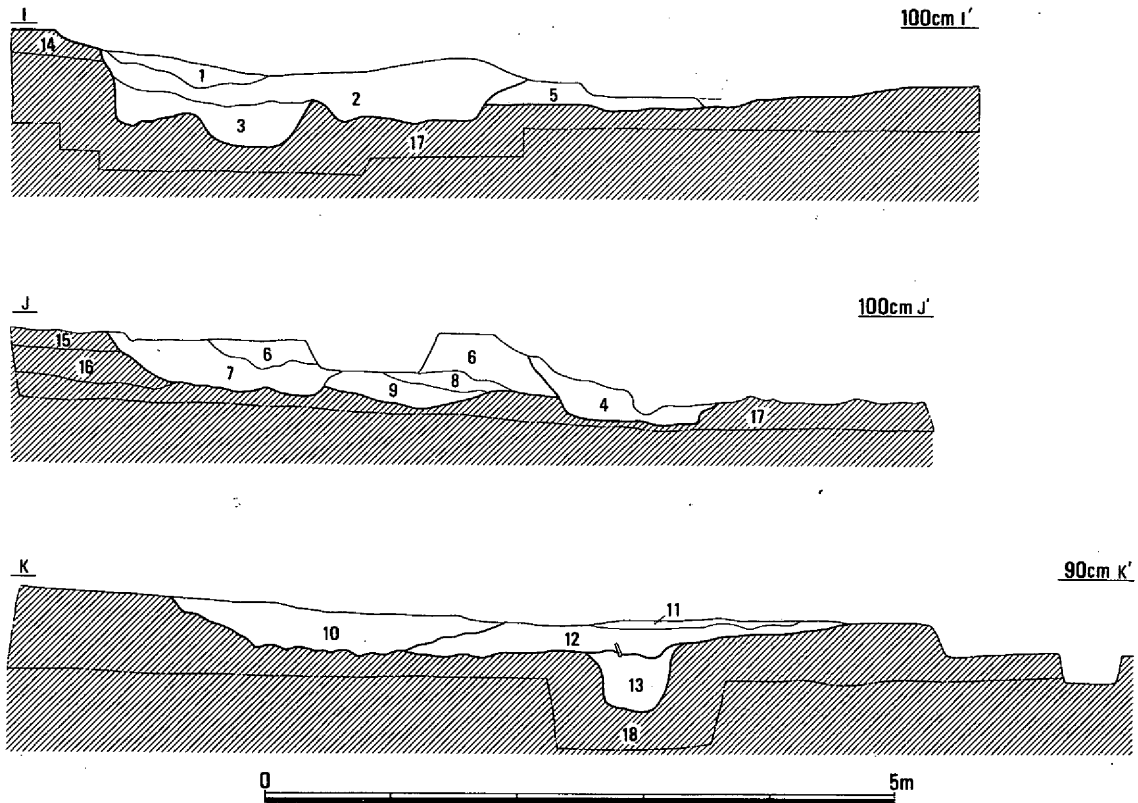
遺物は埋土中から近世陶磁器、瓦等が出土している。時期は埋土や遺構の切り合い、出土遺物等から近世以降と考えられる。

溝14・15 (第152・153図)

2区の南端75L・M区から3区の69K・L区にかけて中世河道1の上面に東西方向に検出した複数の溝である。76L・M区より上流では未検出である。溝群は2本の流走方向に大別でき、このうち溝15は長方形の掘り方が連続して掘削された形状を呈している。平面形は緩く蛇行し、規模は検出長38.0m、

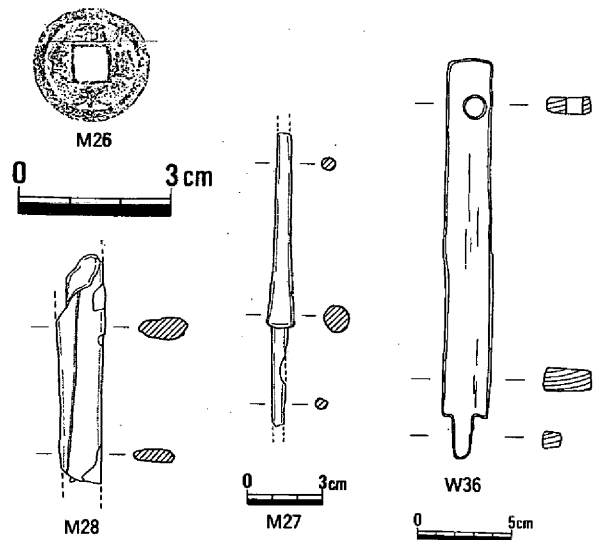
第3章 発掘調査の概要

幅1.0~1.7m、最大深さ70cmである。長方形の掘り方も西端では、2列掘削されていることから溝15の改修が行われていたと考えられる。埋土は粘質微砂及び粘質土である。溝の底部レベルは海拔20cm~-30cmほどで高低差は不明瞭である。

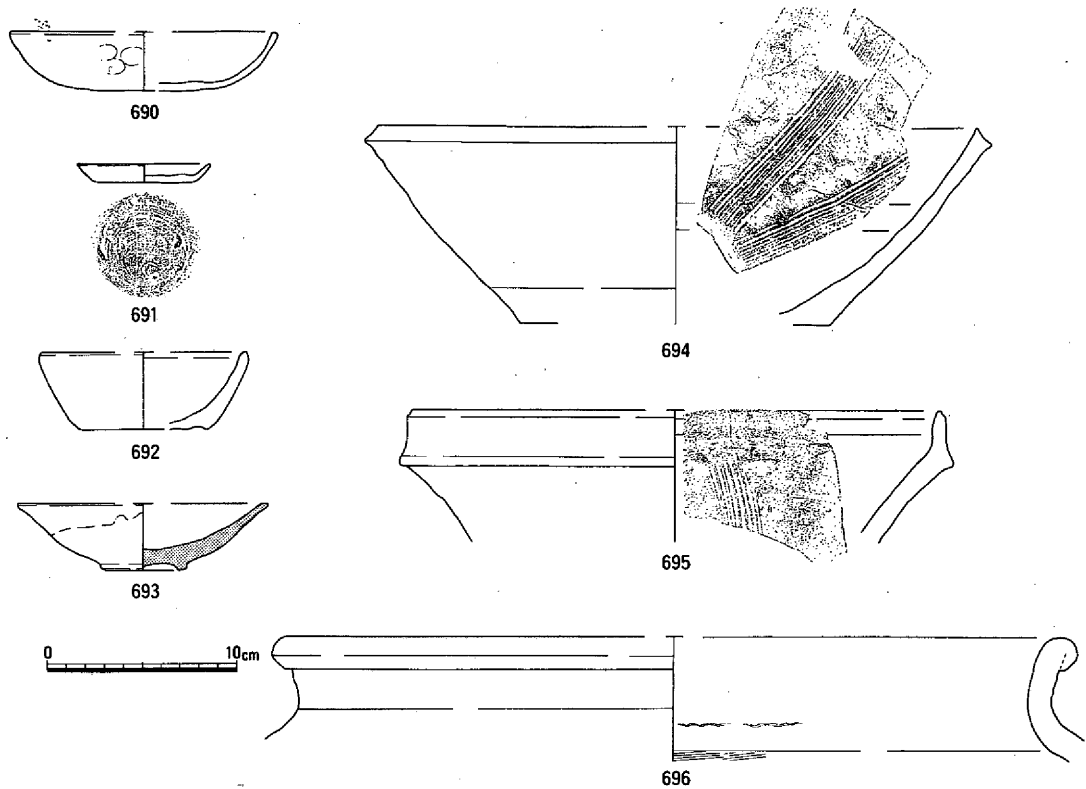


- | | | |
|---------------------------|----------------------------|-----------------------------|
| 1. 灰白色 (5Y7/1) 砂質土 | 7. 黒褐色 (2.5Y3/2) 粘質土 | 13. 暗褐色 (10YR3/3) 粘質微砂 |
| 2. 灰白色 (5Y7/2) 粘質微砂 | 8. 黄褐色 (2.5Y5/6) 砂質土 | 14. 中世包土 |
| 3. 灰色 (5Y5/1) 粘質土 (グライ化) | 9. 褐色 (10YR4/6) 砂質土 | 15. にぶい黄褐色 (10YR5/3) 粘質微砂 |
| 4. 暗灰黄色 (2.5Y4/2) 粘質微砂 | 10. 暗オリーブ褐色 (2.5Y3/3) 粘質微砂 | 16. 黒褐色 (2.5Y3/2) 粘質土 |
| 5. 灰色 (5Y6/1) 砂と粘質微砂の互層 | 11. オリーブ褐色 (2.5Y4/3) 粘質微砂 | 17. 黒褐色 (2.5Y3/2) 粘質土 (礫含む) |
| 6. 暗オリーブ褐色 (2.5Y3/3) 粘質微砂 | 12. 褐色 (10YR4/4) 砂質土 | 18. 暗褐色 (10YR3/3) 粘質微砂 |

溝14は溝15と74L区付近で交差し、貝塚1の上面を通過し、途中途切れるが湾曲しながら69L区付近で南側の調査区外に延びる。西半部では複数の溝が重複している。検出長70.0m、幅1.0~3.0m、深さ40~50cmである。埋土は粘質微砂土を基調としている。溝底部レベルは海拔20~30cm前後である。ただ東半部では溝15と同様に底面がさらに一段深く掘削された部分が存在し高低差がある。遺物は備前焼、近世陶磁器等が出土している。時期は埋土や遺構の切り合い、出土遺物の器形特徴等から近世以降と考えられる。



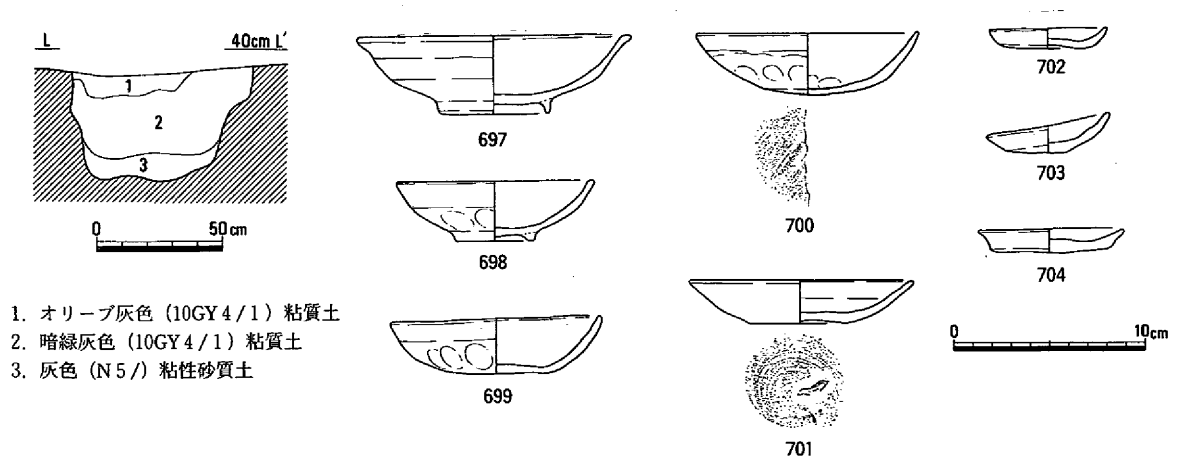
第152図 溝14~16 断面、溝14・15 出土遺物<1>



第153図 溝14・15 出土遺物〈2〉

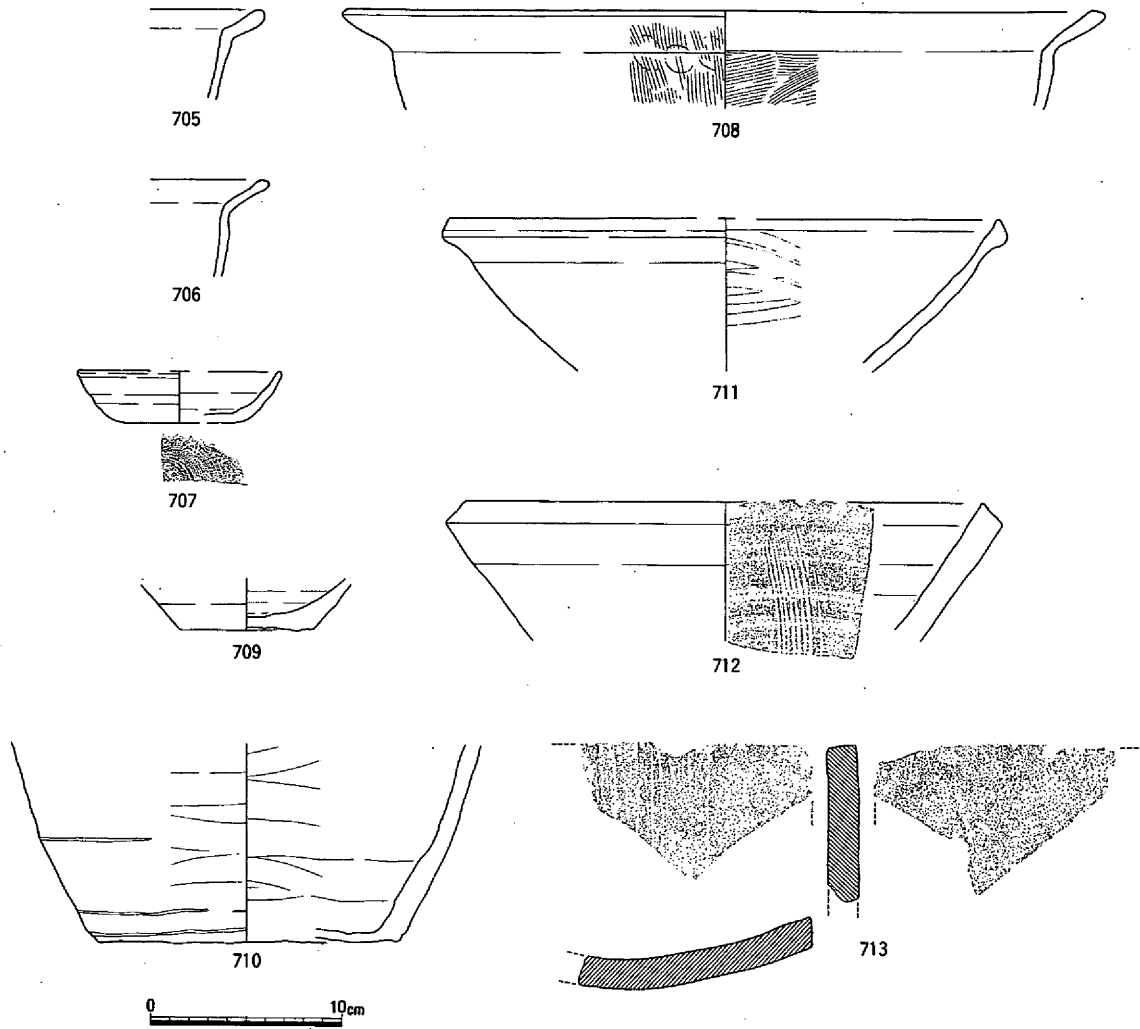
溝16 (第154・155図、図版30)

2・3区の73K区から70~73L区に位置する。溝は貝塚1内より南東に進み、さらに貝塚内南端から東に向きを変えて、70L区で南側の調査区外に延びる中規模な溝である。貝塚内に位置する部分の溝は貝が埋土中に認められることから、貝塚の形成前もしくは途中で掘削された溝と考えられる。溝の北端は明瞭でないが、恐らく河道1の堆積過程で北端の石組施設付近の排水のために掘削された溝と考えられる。規模は検出長31.0m、幅70~130cm、最大深さ70cm、平均50cmである。溝断面はU字形を呈し、底面は平らである。溝埋土は貝塚内では貝主体の粘質微砂土で、南側の東西方向では粘質土



1. オリーブ灰色 (10GY 4/1) 粘質土
2. 暗緑灰色 (10GY 4/1) 粘質土
3. 灰色 (N5/) 粘性砂質土

第154図 溝16 断面、同 出土遺物〈1〉

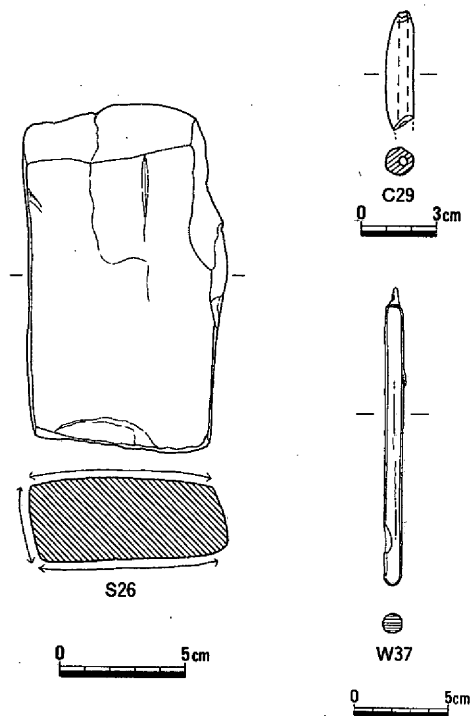


もしくは粘質微砂土の堆積である。溝底部レベルは北端の貝塚内が海拔0m、屈曲付近で最も深く-30cm、中間で-20cm、東端で-10cmを測る。

遺物は備前焼、土師質杯・皿等が出土している。時期は埋土や遺構の切り合いや出土遺物の器形特徴等から貝塚1と一部重複する13世紀後半から14世紀代と考えられる。(山磨)

溝17 (第156図、図版32)

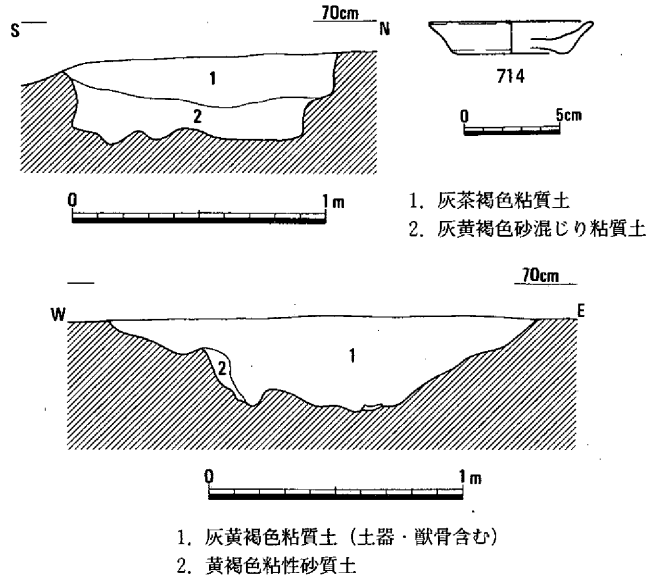
溝16の北約5mの位置に検出した。溝16と一部平行するように東西方向を向くものの、緩やかに南に曲がる。検出した全長は約25mを測る。検出面での溝の幅は、1.1m、深さ32cmを測る。溝の底は、一部に土橋状に浅く掘り残されている部分が見られる。出土遺物は、土師質小皿・碗、備前焼などが見られる。時期は、中世後半から近世の初頭と推定される。



第155図 溝16 出土遺物〈2〉

溝18 (第156図、図版32)

溝17と一部交差する状態で検出した。溝17の土橋状の部分であるため、その前後関係は不明である。検出した全長は約15mを測る。南北方向を向くもので、溝の底面は、南に向けて緩やかに下っている。検出面での溝の幅は、1.7m、深さ38cmを測る。出土遺物は、備前焼甕、土師質碗、小皿、瓦器碗、土鍋などが見られる。時期は、中世の後半以降に属すると推定される (井上)

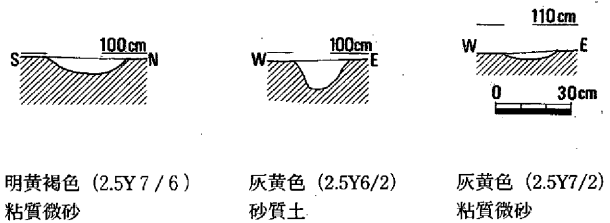


第156図 溝17・18 断面、同 出土遺物

溝19 (第157図、図版38)

4区の西端64I・J区境に検出した逆L字形の平面形をなす小規模な溝である。検出長7.5m、幅30~40cm、深さ5cm前後で、両端は調査区内で終了している。溝断面は浅い皿状をなし、底面はほぼ平らである。埋土は明黄褐色粘質微砂土の一層のみである。溝底部レベルは中央付近で海拔95cm前後で高低差は明瞭でない。

出土遺物は皆無で時期の確定がしがたいが、中世以前の可能性が強い。



第157図 溝19~21 断面

溝20 (第157図、図版38)

4区の西端64I・J区~63J区にかけて溝21とほぼ平行に検出した小規模な溝である。南端は近世溝に削平されて、北端は浅い窪み状の落ち込みで終了している。検出長

10.5m、幅20cm、深さ10cmほどで若干蛇行している。溝断面は碗状をなし、底面はほぼ平らである。溝底部レベルは海拔93~96cmで流走方向は明瞭でない。

出土遺物は皆無で時期の確定はしがたいが、中世以前の可能性が強い。

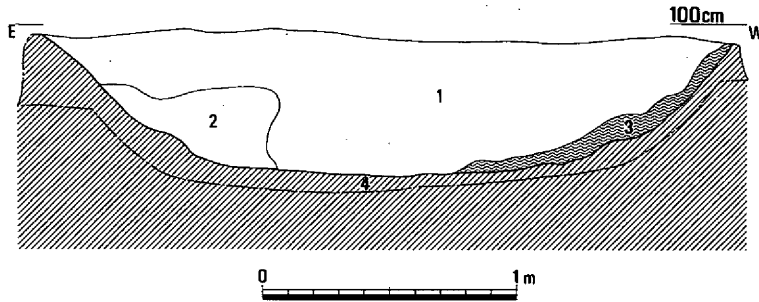
溝21 (第157図、図版38)

4区の西端64I・J区~63J区にかけて溝20とほぼ平行に検出した。溝北端はやや膨らんで浅い窪み状の落ち込みで終了している。南半は途中で途切れて近世溝の手前で終了している。規模は検出長8.0m、幅10~20cm、深さ5cm以下である。溝断面は浅い皿状で、底面はほぼ平らである。溝底部レベルは、海拔95cm前後で流走方向は明瞭でない。

出土遺物は皆無で時期の確定がしがたいが、中世以前の可能性が強い。

溝22 (第158図、図版38)

4区の西端63H~J区にほぼ南北方向に検出した溝である。規模は検出全長24.0m、幅2.7~3.4m、深さ70cmを測り、南北両方向ともに調査区外に延びる。溝断面は逆台形に近い形状をなし、底面はほぼ平



- 1. 褐色 (10YR 4/4) 粘質微砂
- 2. 褐色 (10YR 4/4) 粘質微砂
- 3. 褐色 (10YR 4/6) 砂 (貝層)
- 4. オリーブ褐色 (2.5Y 4/4) 粘質微砂

第158図 溝22 断面

垣である。埋土は2層に分層可能で下層に貝層の堆積が認められた。溝底部レベルは、中央付近で海拔60cm 前後を測り高低差は明瞭でない。

出土遺物は下層に厚さ10cm 程度の貝層の堆積が認められ、中世の土師質椀、土鍋、瓦器等の土器を包含していた。ただ、下層の埋土中には近世の陶磁器や、近世以降の遺物も含んでおり、貝層及び貝層中の遺物は混入であろう。溝の最終埋没は近世以降と考えられる。

溝23 (第159図)

4区西半の61H・I区に検出した小規模な溝である。北端は浅い窪み状の落ち込みで終了し、南端は途中で終わっている。規模は検出長7.0m、幅25~30cm、深さ5cm 以下で若干蛇行している。溝断面は浅い皿状をなし、底面はほぼ平らである。埋土は灰黄色粘質微砂土の一層のみである。溝底部レベルは95~100cm で流走方向は明瞭でない。

出土遺物は皆無で時期の確定がしがたいが、埋土や検出状況等から中世以前の可能性が強い。

溝24 (第159図、図版38)

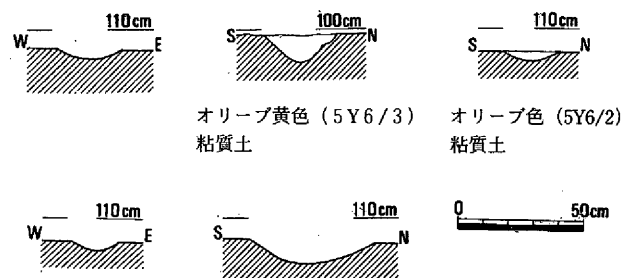
4区やや西よりの60・61H~59・60I区で、調査区を斜めに横断する溝である。両端部とも調査区外に延びる。規模は検出長33.0m、幅30~50cm、深さ10~15cm を測り、緩やかに蛇行している。溝断面は浅い椀状を呈し、ほぼ平らな底面である。溝埋土は浅黄色とオリーブ黄色の粘質土である。溝底部レベルは北端で海拔83cm、中間で92cm、南端で81cm を測り、中間部が高く南北に低下している。

出土遺物は皆無で時期の確定がしがたいが、埋土や検出面等から中世以前の可能性が強い。当溝24は1990年度に行った岩間調査区の確認調査トレンチ8 (133図) の断面に検出した溝に該当する。

溝25 (第159図、図版38)

4区やや西より59~61H区から58・59I区に溝24と同様に調査区を斜めに横断する溝である。途中浅い窪み状の落ち込みで途切れるが南端では調査区外に延びる。北端は調査区境近くで終了する。検出長32.0m、幅15~30cm、深さ5cm 以下を測る。平面形状はほぼ直線的で、調査区を斜めに横断している。溝断面は浅い皿状をなし、ほぼ平らな底面である。埋土はオリーブ灰色粘質土の一層である。溝底部レベルは北端で海拔82cm、中間付近で97cm、南端で101cm を測り、北に向かって20cm ほど低下している。

出土遺物は皆無で時期の確定がしがたいが、埋土や方向等から溝24と同様に中世以前の可能性が強い。



オリーブ黄色 (5Y 6/3) 粘質土

オリーブ色 (5Y 6/2) 粘質土

第159図 溝23~27 断面

溝26 (第159図)

4区ほぼ中央の56G～57H区に調査区を南北に横断する溝である。北端は浅い窪み状の落ち込みで終わり、南端も調査区内で終了している。途中2カ所で途切れるが、検出長17.0m、幅20cm、深さ5cm以下である。断面は浅い皿状をなし、底面はほぼ平らである。溝底部レベルは海拔1.0m前後で高低差はほとんどない。

出土遺物は皆無で時期の確定がしがたいが、埋土や検出状況等から中世以前の可能性が強い。

溝27 (第159図)

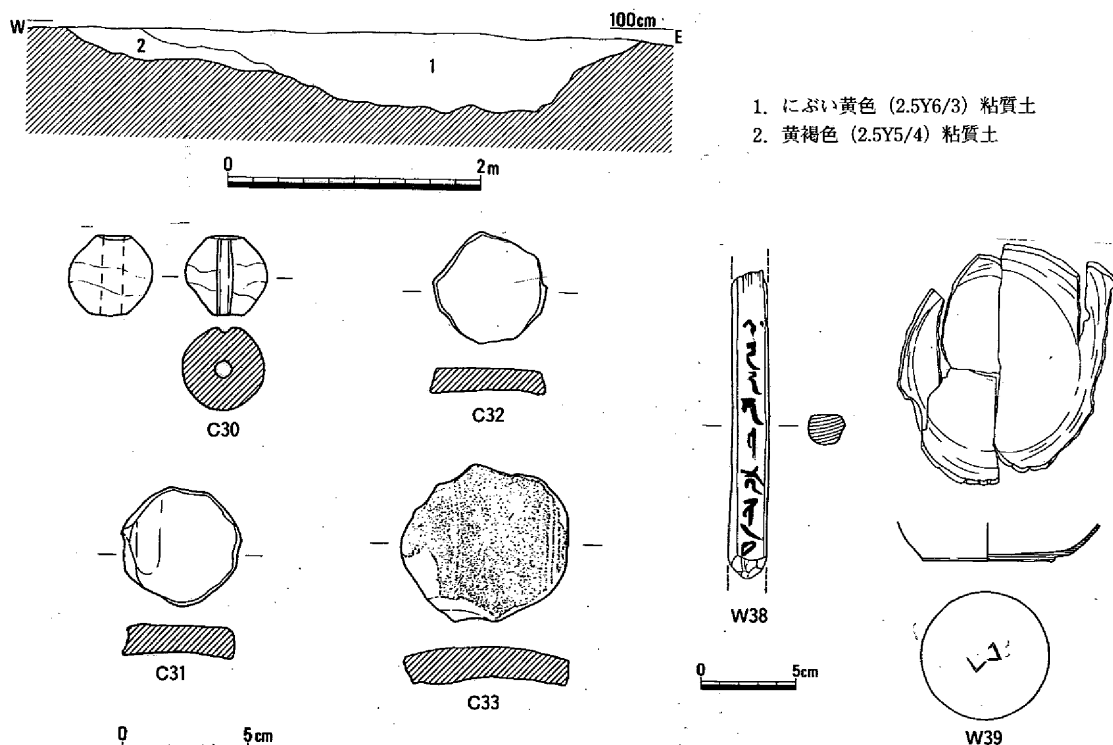
4区東半の62～64G区に調査区を斜めに横断する溝である。溝の南北両端は、調査区内の浅い窪み状の落ち込み付近でともに終了している。規模は検出長27.0m、幅25～50cm、最大深さ10cmを測り、緩く蛇行している。断面は浅い皿状を呈し、底面はほぼ平らである。溝底部レベルは海拔90～95cmとほとんど差がなく流走方向は不明瞭である。

出土遺物は皆無で時期の確定がしがたいが、埋土や検出状況等から中世以前の可能性が強い。

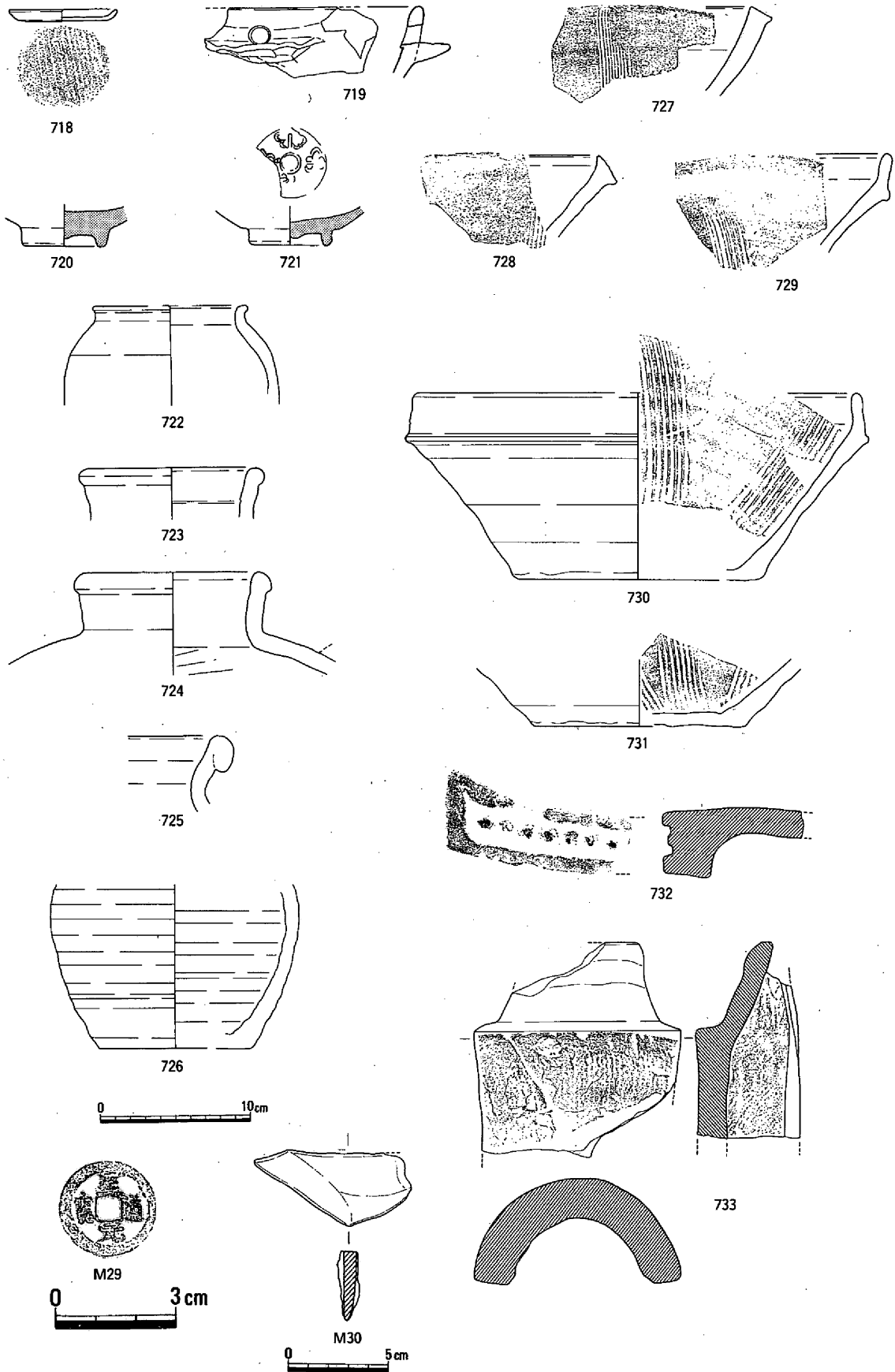
溝28 (第160・161図)

5区西端の48E～G区にかけてほぼ南北方向に位置する。溝の南端は二股に分かれたような状態で調査区境で細くなりほぼ終了している。溝の中央付近から北側は溝幅が1.0mほど広くなり、北端は調査区外に延びている。規模は検出長25.0m、幅4.0～5.0m、深さ60cmである。断面は肩口から緩やかな傾斜で下がり、下半ではU字形もしくは逆台形を呈す。底面は流水で抉れたように凹凸がある。埋土は中央付近の断面観察では2層に分層可能で、第1層も明瞭な分層はできないが上下層で若干異なる。溝底部レベルは北端が海拔40cm、中間付近が30cm、南端が45cmと中間付近がやや高い状況をなしており、調査区間では溝の流走方向は不明瞭である。

遺物はコンテナ5箱にのぼる多量の遺物が出土している。大半が備前焼の各器種と瓦が占めている。その他では土鍋、土師質の椀・杯・皿や東播系の鉢等である。時期は埋土や出土遺物の器形特徴等から室町時代(15世紀代)を中心とするものと考えられる。(山磨)



第160図 溝28 断面、同 出土遺物 <1>



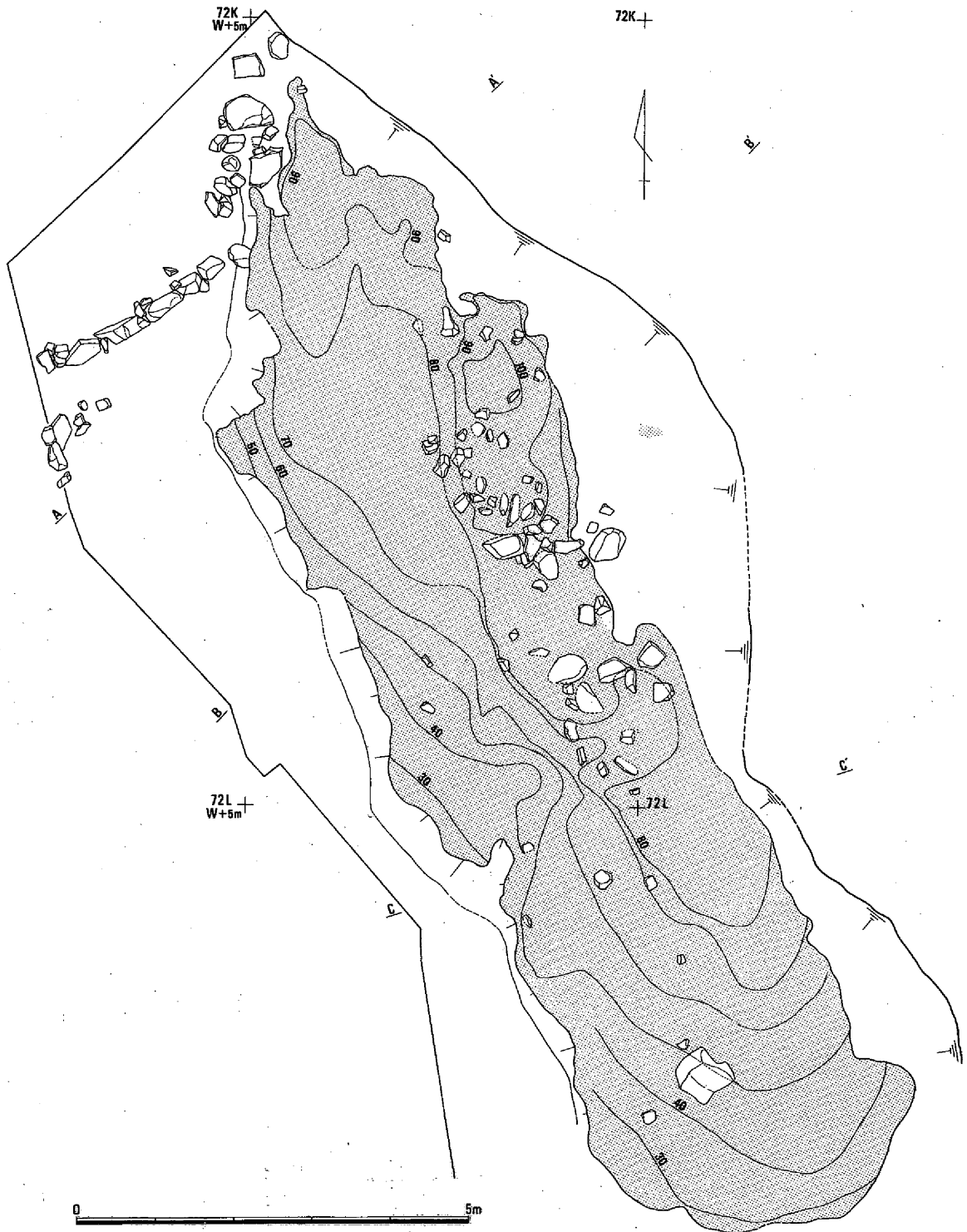
第161図 溝28 出土遺物〈2〉

(4) 貝塚

貝塚1 (第162~170図、図版27~29)

位置と範囲

2区、72・73K・L区、古代末~中世の河道1の埋没過程で形成された貝塚である。岩間上調査区に



第162図 貝塚1 平面 (1/80) (網目 貝の範囲)

検出の貝塚3基のうち最上流部に位置する。貝塚は河道の左岸側の肩口より2.0mほど内側から、河道中央に向かって細長く形成されている。貝廃棄の方向と堆積は、詳細には後述するように流路の変更と河道の土砂の堆積状況から貝塚の中央付近までは東側から西側の低位部に向かって、先端部では南側に向かって行われている。貝層上面には、人頭大から一辺10cmほどの石材が散在し、これらに混じるように土師質椀の完形品が点在して出土している。貝塚の最終堆積の範囲は南北16.0m、東西最大幅4.3m、最大厚さ70cmである。

貝塚形成前の状況

貝塚1は、河道の埋没がかなり進んだ段階に形成されている。貝塚の東側肩口は貝塚の形成前には、少なくとも河道の肩口と同程度の海拔1.0m付近まですでに埋没していたと考えられる。後述する貝塚堆積前の石組み護岸施設が機能していた時点では、北側の護岸と東側の肩部の間がL状に窪み、河道が北から南に向かって蛇行しながら流れていたものと考えられる。その後の流路の変更により護岸等の施設が機能しなくなった後に、椀状に窪んだ地形に北側の河道肩口に近い付近より西側の窪地に向かって、徐々に貝等が廃棄されて、最終的に南北16.0m、東西4.0mを越す規模の貝塚の形成となったものと考えられる。貝層除去後の北端の石組み護岸施設付近には、他にも石材がかなり散在しており数段の石組みが設置されていた可能性が高い。

また前述のL字状に大きくカーブする溝16については、埋土中に貝の堆積が認められることから、貝塚の形成時もしくは形成途中で掘削されたものである。溝16の掘削は恐らく河道1の流路の変更により護岸付近の排水が悪くなり、護岸等の施設が機能しなくなる前後に新たに排水用の水路として設けられたと考えられる。

なお、溝16は同一場所の下層で検出した井戸1との関連を持つ排水路の可能性も考えられる。

堆積と断面

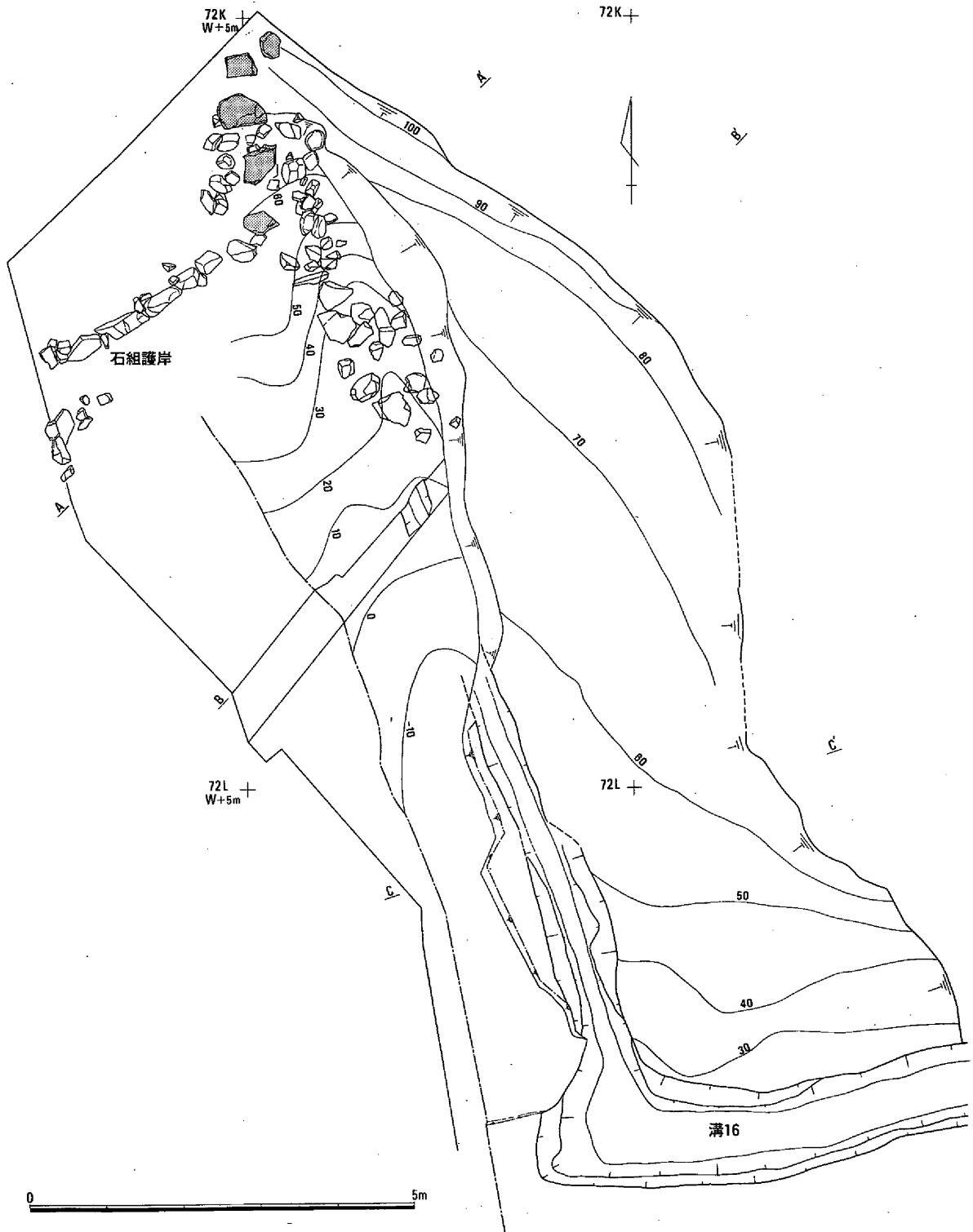
貝塚の土層観察用の畦は、当初貝塚1の存在を確認した南北方向のトレンチと貝の廃棄の方向に沿って北東から南西方向に設定した3本の合計4本で行った。貝塚の形成前の状況は、断面図Aラインの10～13層、同Bラインの26層、同Cラインの32層までの各層が河道内にすでに堆積している。Aライン10層上面、Bライン26層上面は、貝層の堆積前にはすでに河道の肩口と同程度まで埋没している状況である。堆積前の微地形は西側並びに南側に向かって傾斜をなしており、特に西側ではかなりの急傾斜をなし、最大90cm程の高低差が認められる。この斜面部に向かって継続し廃棄されている。

貝の堆積は中央付近での堆積が最も厚く、Bラインでは23層で厚さ70cmを測る。Aラインでは貝層の最大厚さ40cm強を測る。Aラインではレンズ状の堆積を呈し、西に向かって徐々に薄くなる。第4層の貝層下部の5～7層は、礫を含む砂層で石組み護岸等が崩壊し埋没したものと考えられる。下層堆積の状況等から石組み等の護岸施設が機能しなくなった以降の貝層の堆積である。A、Bラインの堆積層のいずれも貝層は、間層を挟まない単一貝層である。また、貝層上面には数層の粘質土もしくは粘質微砂層の堆積が認められる。これらの堆積層は河道の最終の堆積層と想定される土層で、貝層の形成が河道の埋没過程の終末に近い途中で形成された状況を示している。

石組み護岸施設

貝塚1の北端にて貝堆積層の除去後に石列と石段状の配石を検出した。石段の一部は、貝塚上面の検出時に北端の貝層の及ばない付近ですでに検出していた。石列は河道の埋没途中で河道の肩口より5.0mほど内よりに、北東から南西方向に全長3.5m検出した。石列は一辺最大60cm、平均50cm程の大

きさの石材を用いてほぼ一直線に一段配列している。石列上面の海拔高は60~70cm 前後を測る。この石列の東端に取り付くように、北側の河道肩口付近より緩くS字状に一辺35~60cm 程度の5個の石材を等間隔に配石し石段を設けている。高さは河道の肩口付近で海拔1.2m、北側3個の配石で、海拔1.0m 前後で高低差がほとんどなく、4番目で海拔90cm、南端の配石が海拔65cm を測る。河道肩口からは55



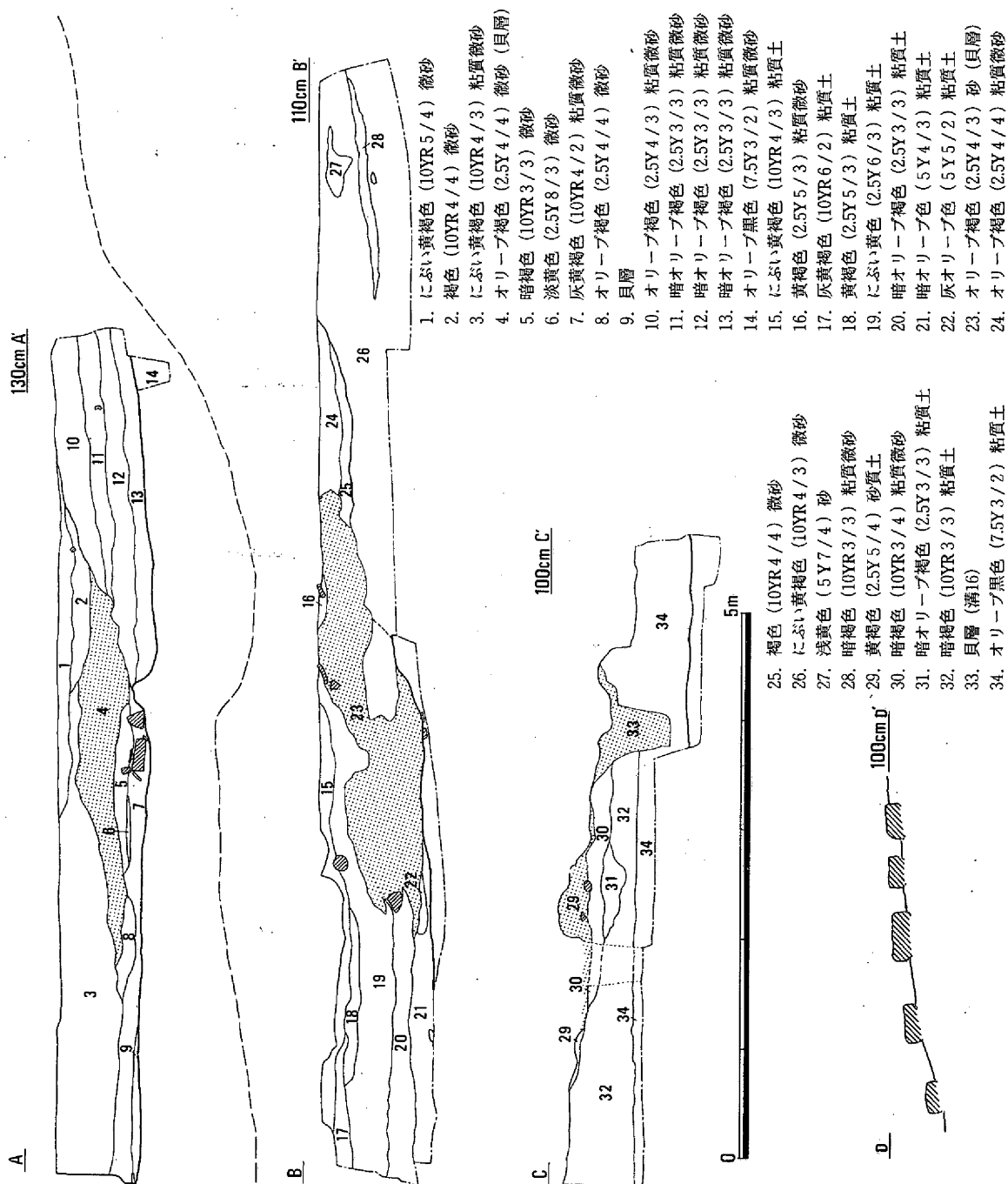
第163図 貝塚1 平面〈貝除去後〉(1/80) (網目 石段)

cm程低下している。石組護岸と石段は、河道北側に存在が想定される中世集落と有機的な関連を持つ川岸の施設と考えられる。

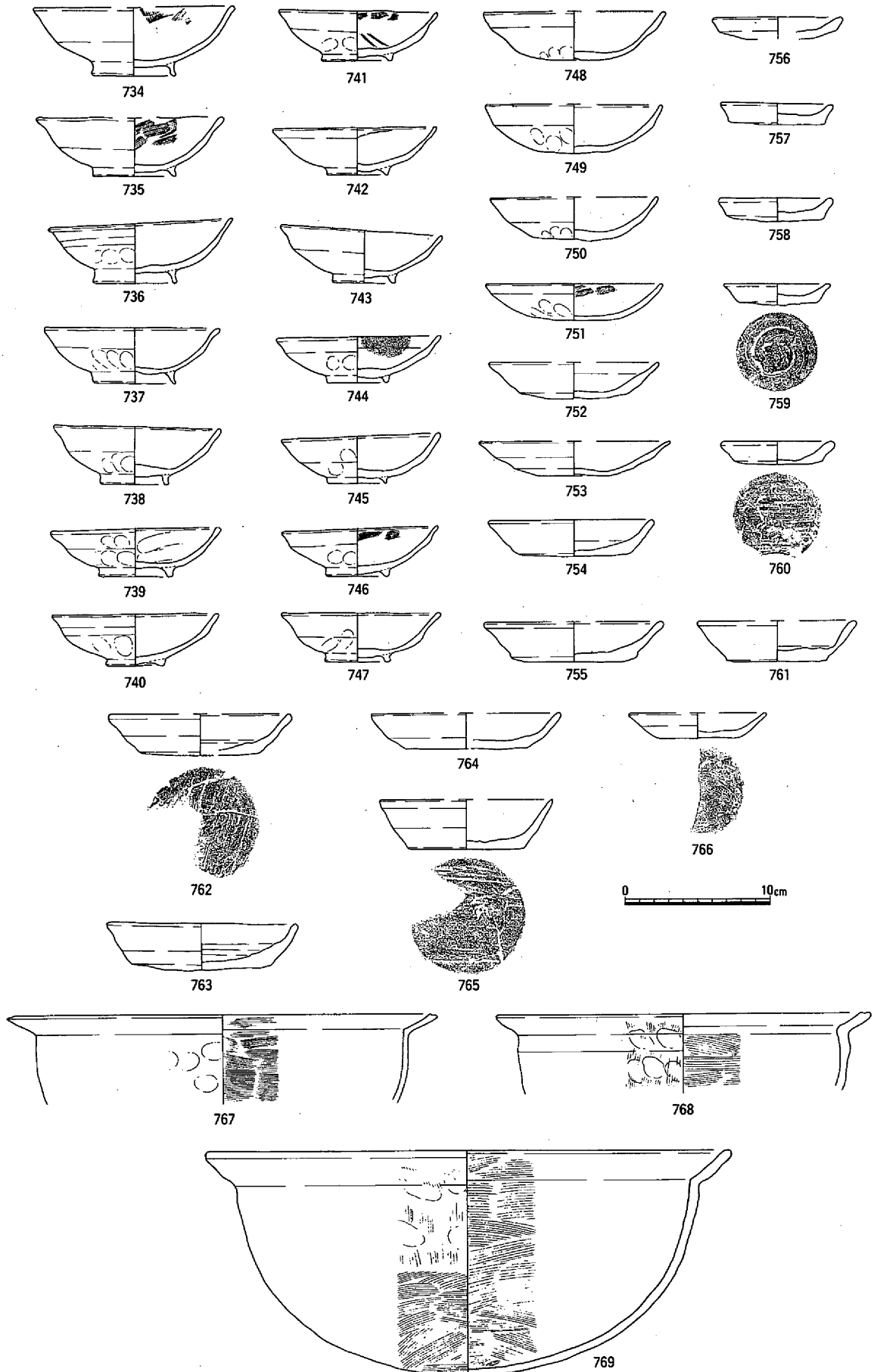
出土遺物

貝塚1から貝を除く遺物の出土量はコンテナ20箱分で、大半が土器類である。ただ、貝塚が河道の埋没途中で形成されているため、貝塚1の掲載遺物は貝層中及び貝層直上の遺物を中心に取り上げている。出土土器の内訳は土師質の椀・杯・小皿・鍋、青磁、白磁、備前焼、須恵系土器、東播系土器等の各種土器類、他に瓦、木器、石器、獣骨等が出土している。

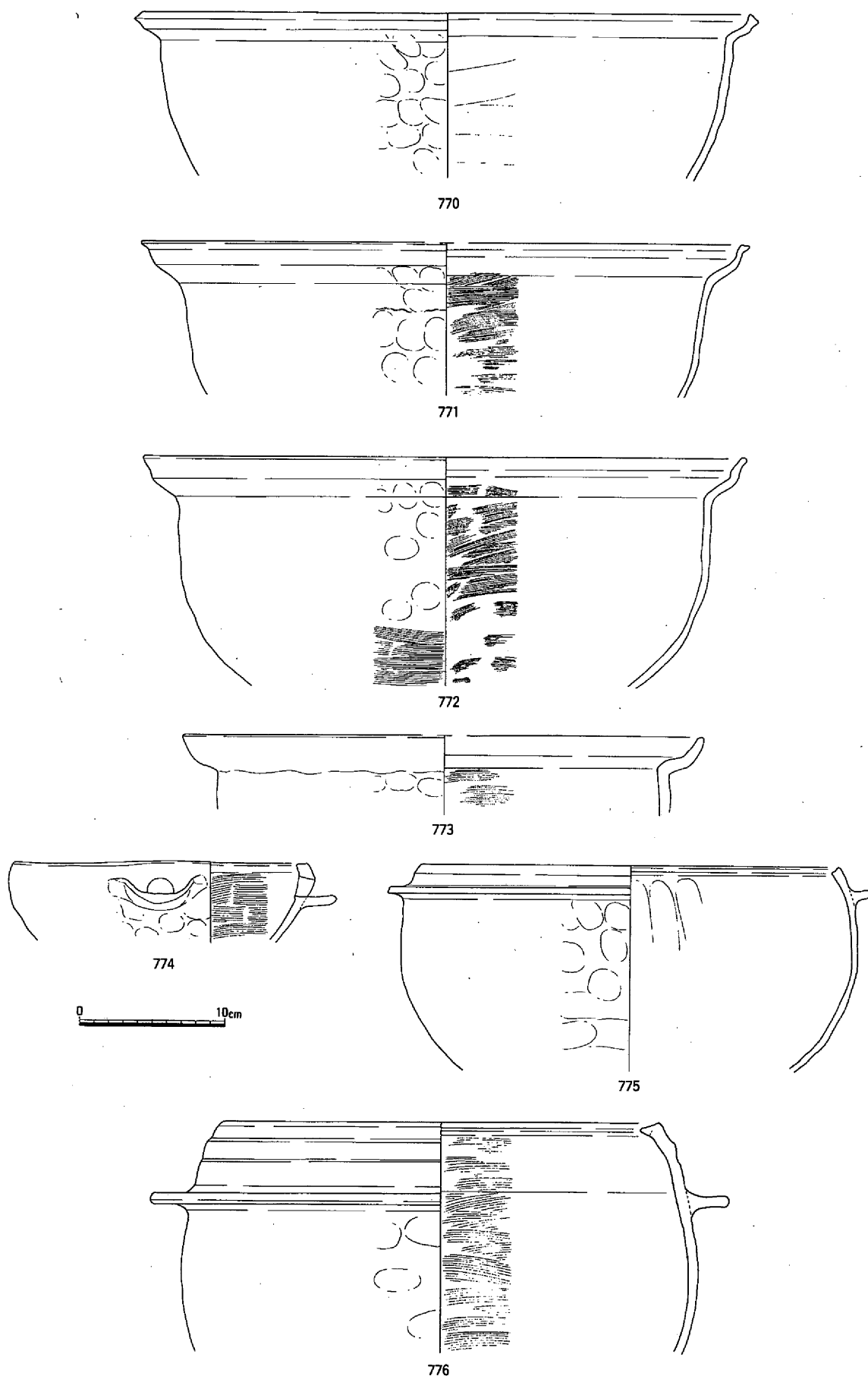
出土土器で最も多いのが土師質の椀である。掲載土器は、全法量が計測可能なものの一部である。法量は口径10.7~13.2cm、高さ3.0~4.2cm、底径3.7~5.6cm とやや小振り、杯部が浅くやや扁平な器



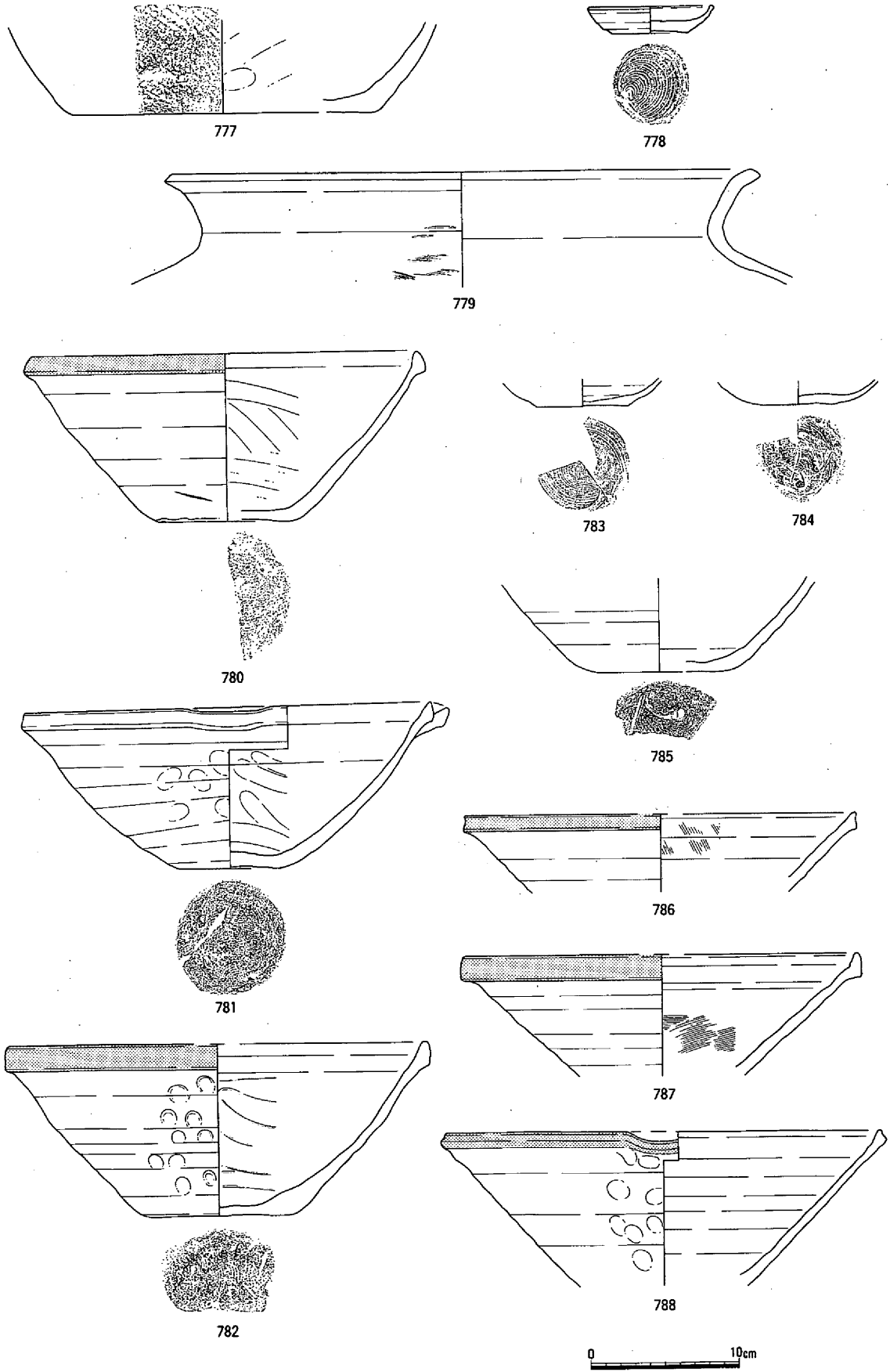
第164図 貝塚1断面 (1/60)



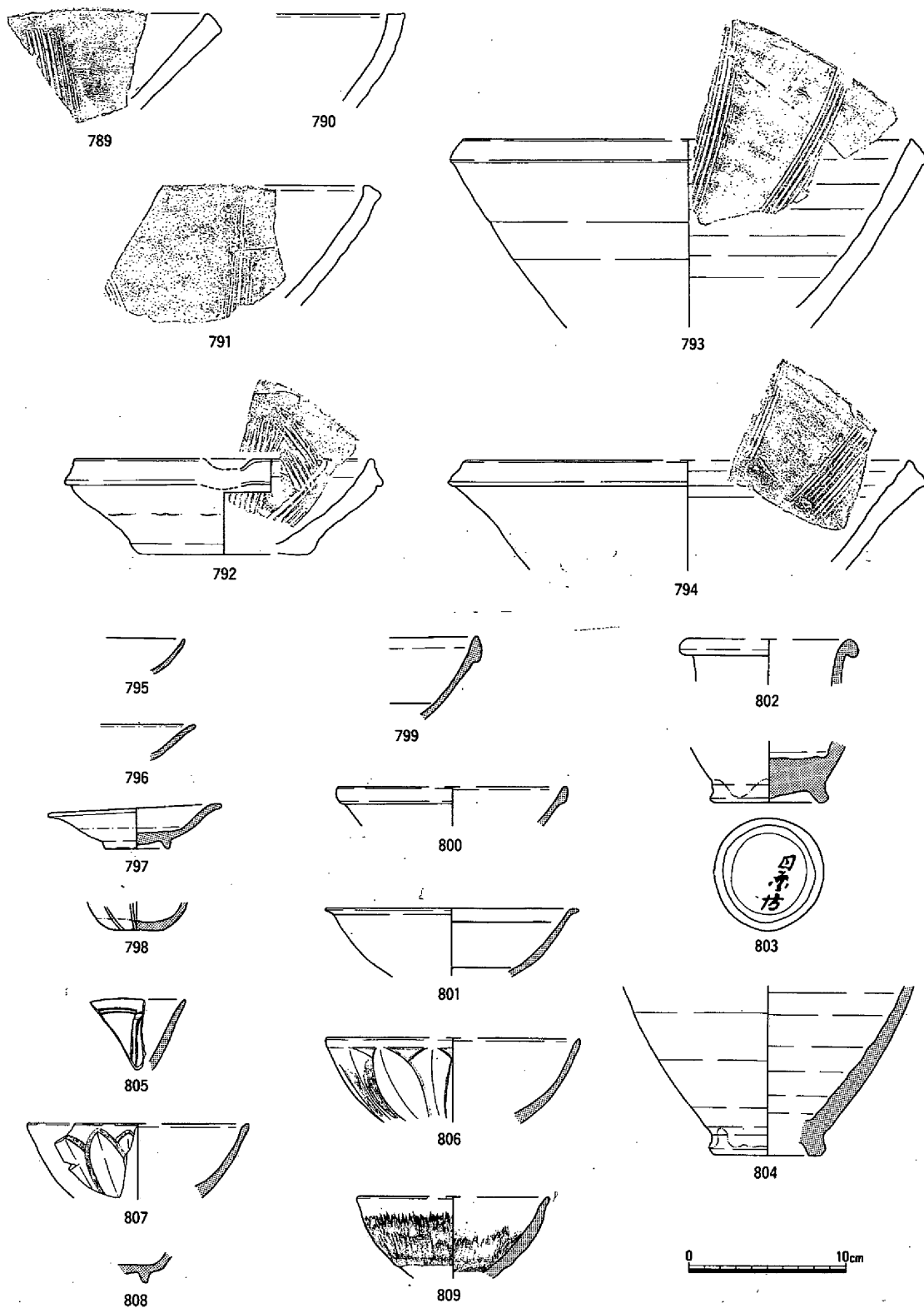
第165図 貝塚1 出土遺物<1>



第166図 貝塚1 出土遺物〈2〉



第167図 貝塚1 出土遺物〈3〉



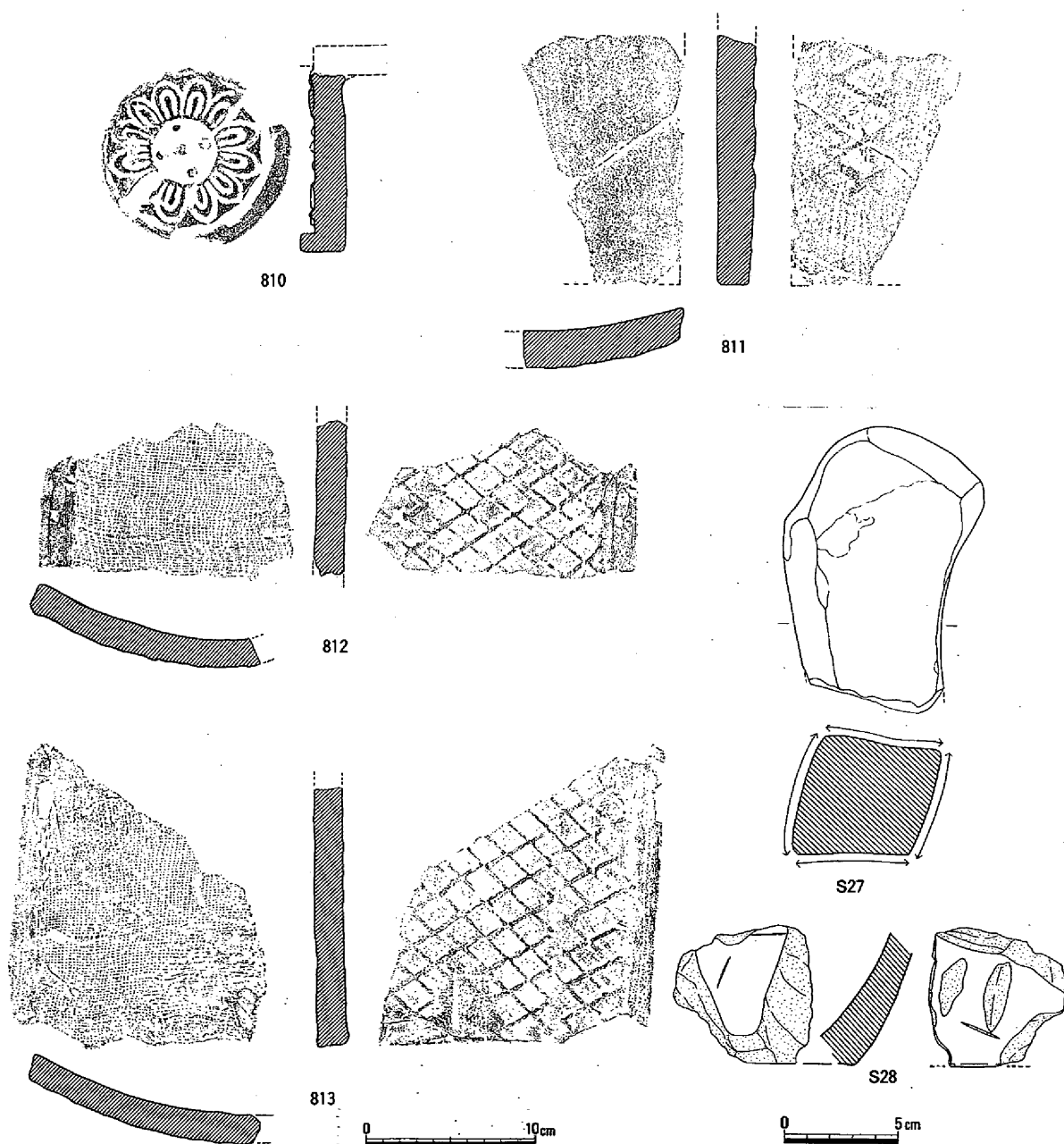
第168図 貝塚1 出土遺物〈4〉

種が多い。調整は簡略化されたものが大半で、外面は口縁部横ナデ、体部が指頭圧痕であるものが多い。外面圧痕は、口縁部まで施したもの739もある。出土数は少ないが高台部を持たない748～751は、胎土、色調や外面体部に施す圧痕調整も高台付と同じである。土師器杯類では、口径11.0～12.1cm、高さ2.5～3.0cm 程度のやや小形のものが多い。765は、口径に対しやや深い形態である。小皿類は、口径

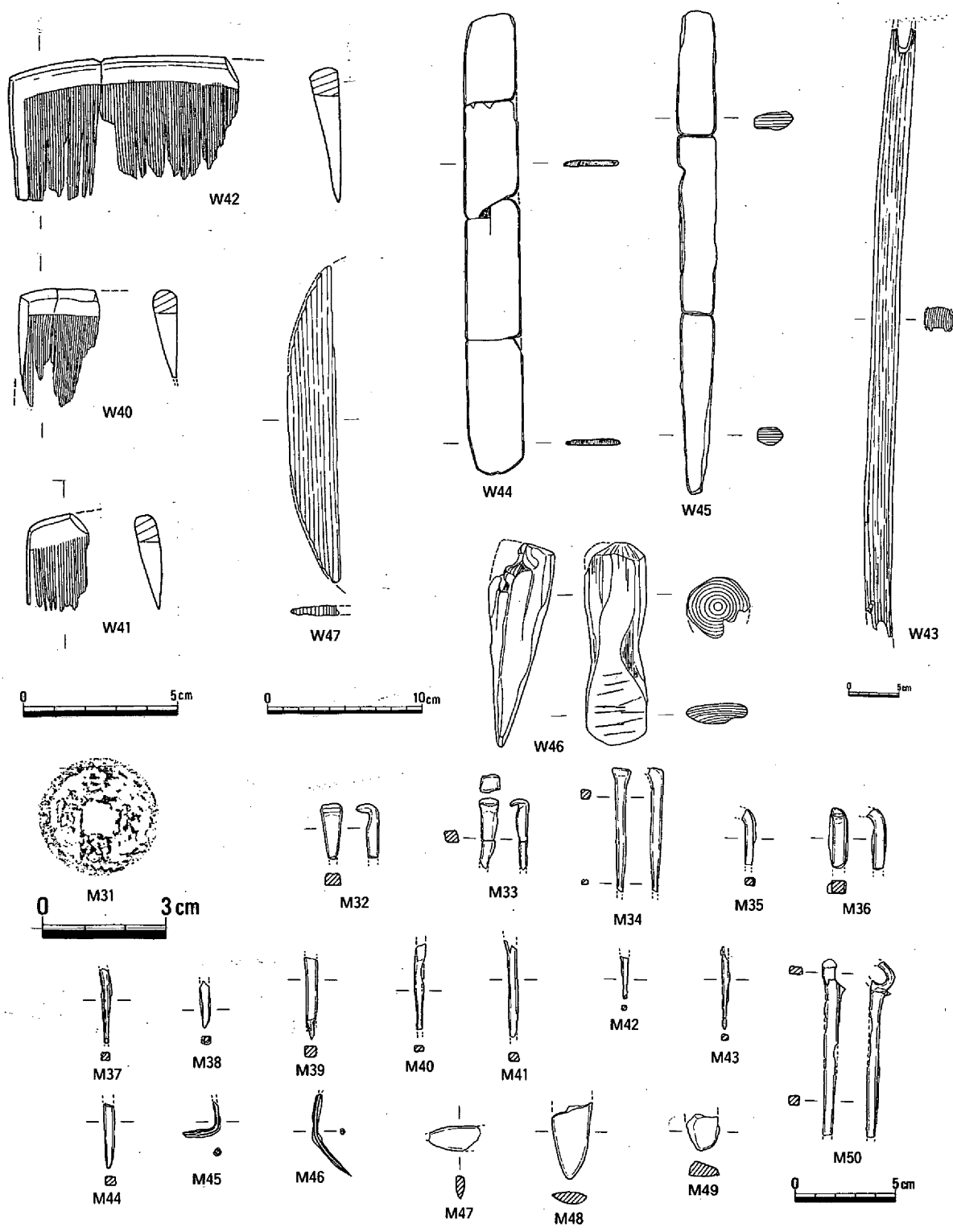
7.0~8.4cm、高さ1.5~1.9cmである。底部調整は、大半が回転ヘラ切り後に板目圧痕であるが、766は、糸切り調整である。

大形の炊事用具としては竈、土鍋、羽釜の類がある。土鍋は、口縁部がく字に外反する器種と外反後に上方に立ち上がる器種がある。体部外面に煤が付着し黒色を呈しものが多い。774は、外面取手付で穿孔がある。

須恵系の遺物には、備前焼、亀山焼、東播系須恵器が出土している。備前焼には、播鉢が比較的多く、789~791・793は、貝層から、792・794は貝層の上面からの出土である。779は灰色を呈す須恵質の甕、783・784は、須恵質の椀、778は小皿で、いずれも備前焼と考えられる。777は、底部外面に格子目のタタキを施し、やや瓦質の焼成で亀山焼である。東播系の須恵器では、鉢780~788が顕著である。



第169図 貝塚1 出土遺物<5>



第170図 貝塚1 出土遺物〈6〉

外面底部に糸切りの痕跡が残り、片口が残存するものもある。

輸入陶磁器では、いずれも中国製で大半が青磁、白磁である。他に黒釉陶器（天目）が1点出土している。白磁は壺・碗・皿・小形壺の器種等である。碗類は、口縁端部が玉縁のものと外反する器種がある。壺802~804は、四耳壺の一部と見られ、底部片には「日乗房？」の墨書がある。798は、小形

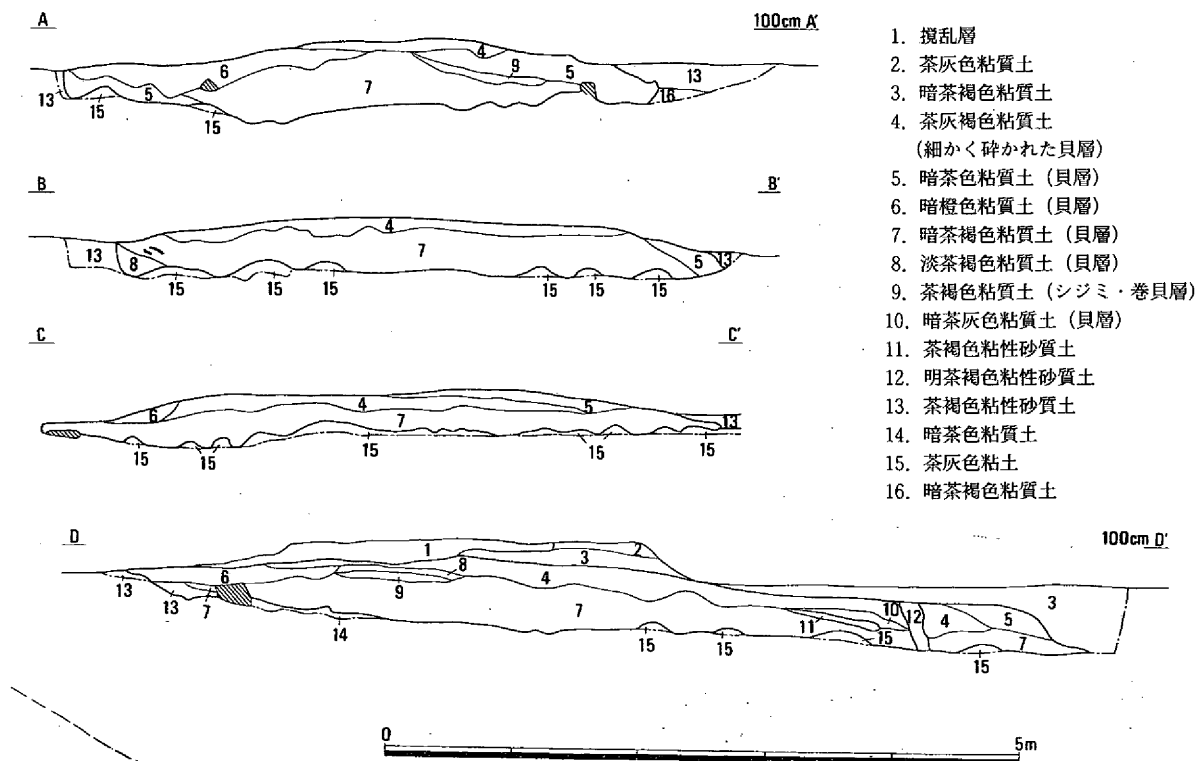
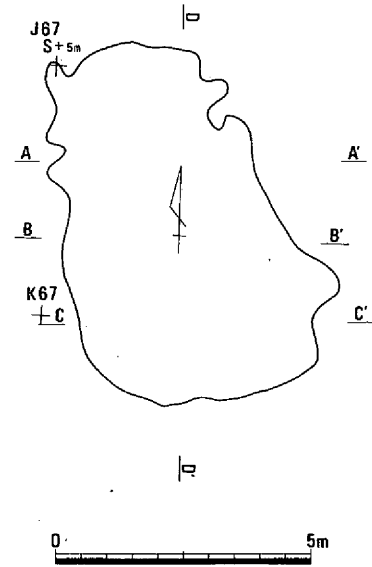
壺の底部と見られる。青磁は碗・皿の器種があるいずれも龍泉窯系の青磁である。805は、体部内面に劃花文を施している。806・807は、いずれも体部外面に鑄連弁文が施している。

その他、土器以外では瓦が出土している。810は、やや古相の軒丸瓦で瓦当面が良好に遺存している。平瓦では上面に布目、下面に格子タタキを施している。木器では、櫛W40・41・42、卒塔婆W44・45、曲物容器の板底W47、編み具W46、両端に抉り加工の棒状製品W43が出土している。石製品では砥石S27と石鍋の底部細片S29が出土している。鉄器では、貝塚の貝の選別中に検出した釘・刀子等の細片が多い。古銭M31は宋銭の元祐通宝であろう。

貝塚の形成された時期は、土師質碗の口径の縮小や内外面の調整の簡略化、備前焼播鉢の器形特徴等から13世紀後半から14世紀代に形成されたと考えられる。(山磨)

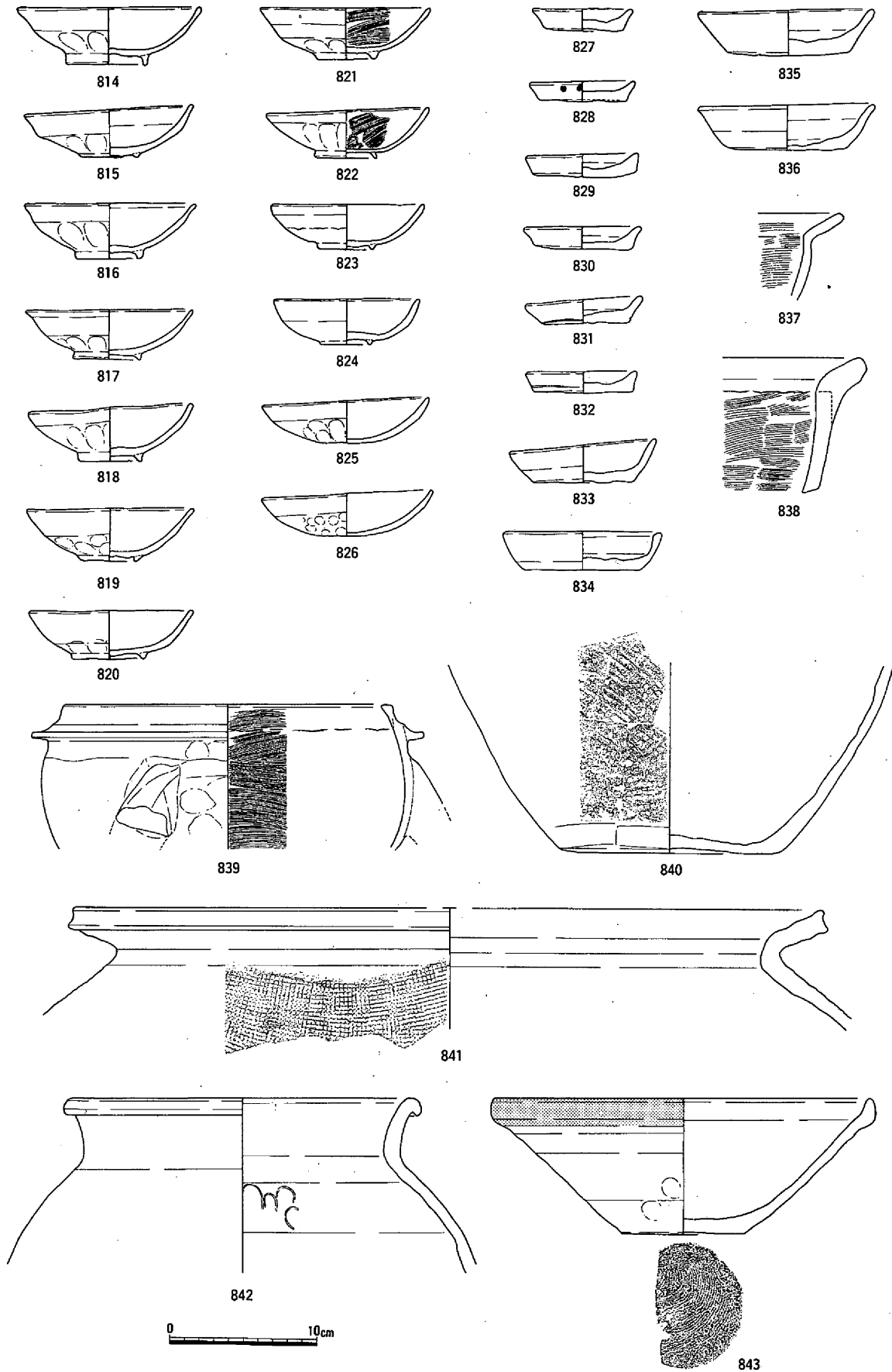
貝塚2 (第171~174図、図版35)

溝18の東約17mの位置に検出した。河道の左岸側の岸辺に位置する。岸から川底に向けて貝殻が堆積するが、貝塚の端部は川底までには到っていない。貝殻の堆積する範囲を平面的に見れば、隅丸長方形と言った形状を呈している。貝塚の最大長は780cmを測る。幅は、最小で340cm、最大で510cmを測る。貝殻の最も厚く堆積する部分で、55cmを測る。貝塚の堆積する方向は、河道の流れる方向が東から西であるため、それに直行する方向の北から南に向けて延びている。貝塚の主体を成す貝はハイガイであり、ハイガイのみの貝塚とも思

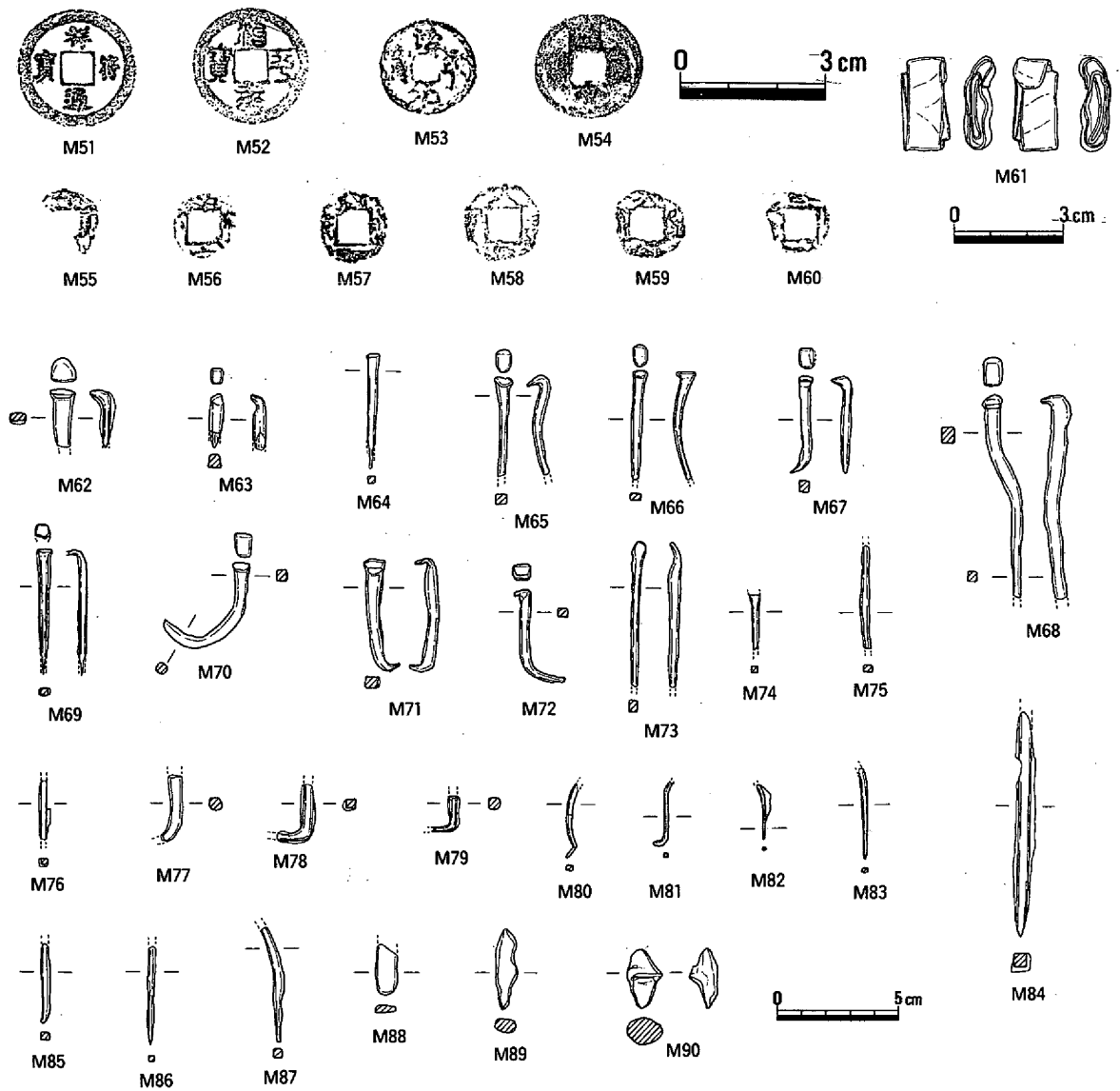


1. 攪乱層
2. 茶灰色粘質土
3. 暗茶褐色粘質土
4. 茶灰褐色粘質土
(細かく砕かれた貝層)
5. 暗茶色粘質土 (貝層)
6. 暗橙色粘質土 (貝層)
7. 暗茶褐色粘質土 (貝層)
8. 淡茶褐色粘質土 (貝層)
9. 茶褐色粘質土 (シジミ・巻貝層)
10. 暗茶灰色粘質土 (貝層)
11. 茶褐色粘性砂質土
12. 明茶褐色粘性砂質土
13. 茶褐色粘性砂質土
14. 暗茶色粘質土
15. 茶灰色粘土
16. 暗茶褐色粘質土

第171図 貝塚2 平面 (1/150)、同 断面 (1/60)



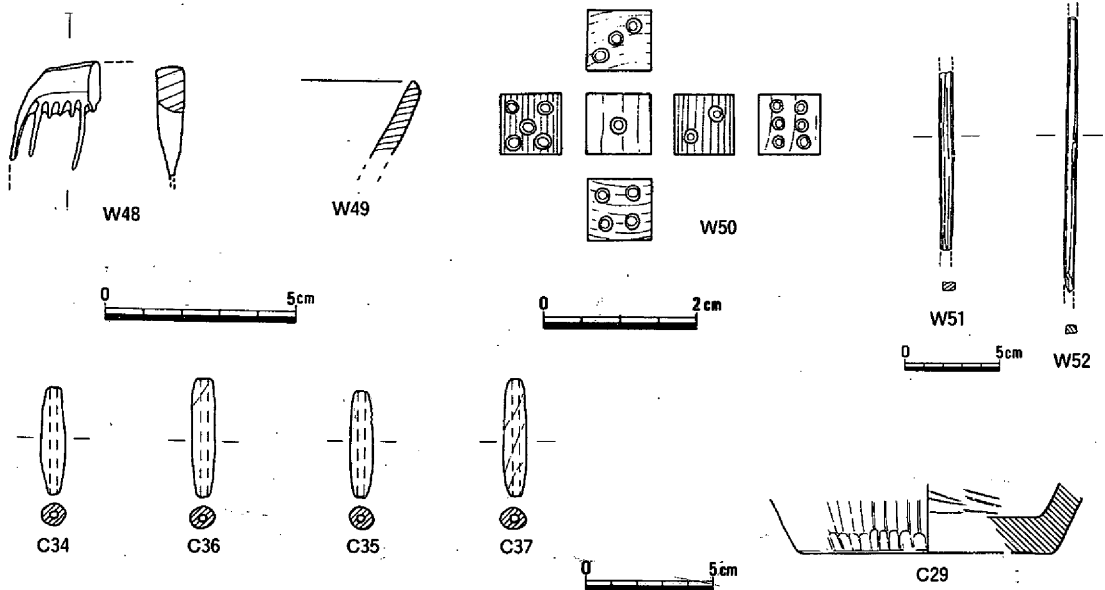
第172図 貝塚2 出土遺物<1>



第173図 貝塚2 出土遺物〈2〉

えるほどに全体に占める割合は大きい。次に多い貝は、シジミである。それも全体量の数%あるなしの量である。その他には、カキ、ヘナタリ等の巻き貝の類がみられる。貝塚の形成過程を見ると、断面図7層の貝層が造られる。それも、分層できないことからすれば短時間に形成されたと考えられる。この南北に長く形成された貝層の東肩部、西肩部に数度に分けて貝殻が廃棄される。最終段階は、第4層の貝層がほぼ全体を覆うように形成される。この第4層の貝層であるが、この層もハイガイであるが、完全な形をした物は皆無と言った状態である。そのほとんどは、数mm大に破碎された物である。他の貝層にも破碎されたハイガイの貝殻は見られるものの、この層は、ほとんど破碎されたハイガイの貝殻で形成されていた。貝塚の底面は、海拔0~10cmである。

遺物としては、土師質椀、須恵質甕、土鍋、銅銭、鉄釘、木製品などが出土している。814から826は、土師質椀である。ただし、825・826は、高台のつかない種類である。814は、これらの中にあって高台が比較的しっかりとした種類の物である。外面の上半はヨコナデ、下半は指などによる押さえが

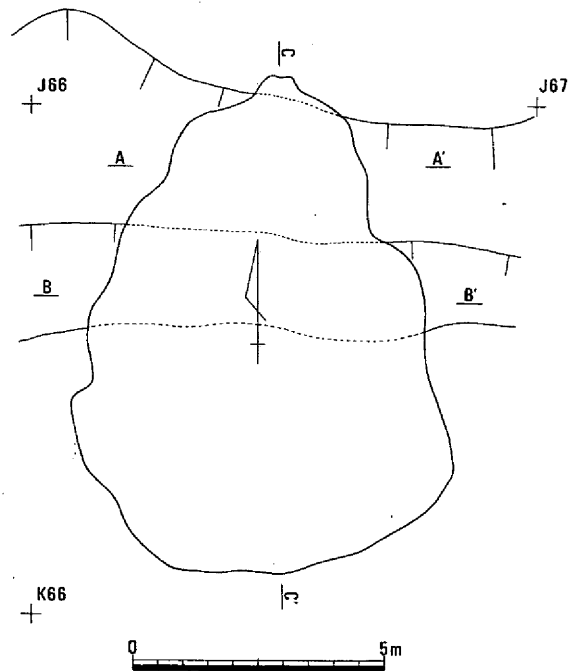


第174図 貝塚2 出土遺物〈3〉

見られる。816・818は、これに近い形状を呈している。815は、製作技法はほとんど同じであるが、口径、器高共に小さくなり、高台もほとんど痕跡的に貼り付けられている。817・819～822は、815に比べて高台が少し明確な輪郭を見せるものである。827～836は、皿である。832は、瓦質で、その他は土師質である。839は、瓦質土器で、三足羽釜である。840は、須恵質の甕で、外面に格子目のタタキが施される。841は、瓦質の甕で、同じく格子目のタタキが施される。842も、須恵質の甕である。この3点は亀山焼と考えられる。843は、鉢で、口縁端部外面に少しの膨らみを持ち、全体に灰色であるが、その部分のみが黒く発色している。東播系の土器と考えられる。M61は、細長い板状の銅板を巻いたものである。M62～87は、鉄釘である。W48は、櫛、W49は、梳、W50は、賽子、W51・52は、箸である。S29は、石鍋である。貝塚2の時期は、土師質櫛から14世紀初頭から前半の頃に形成されたと考えられる。

貝塚3 (第175～181図、図版36)

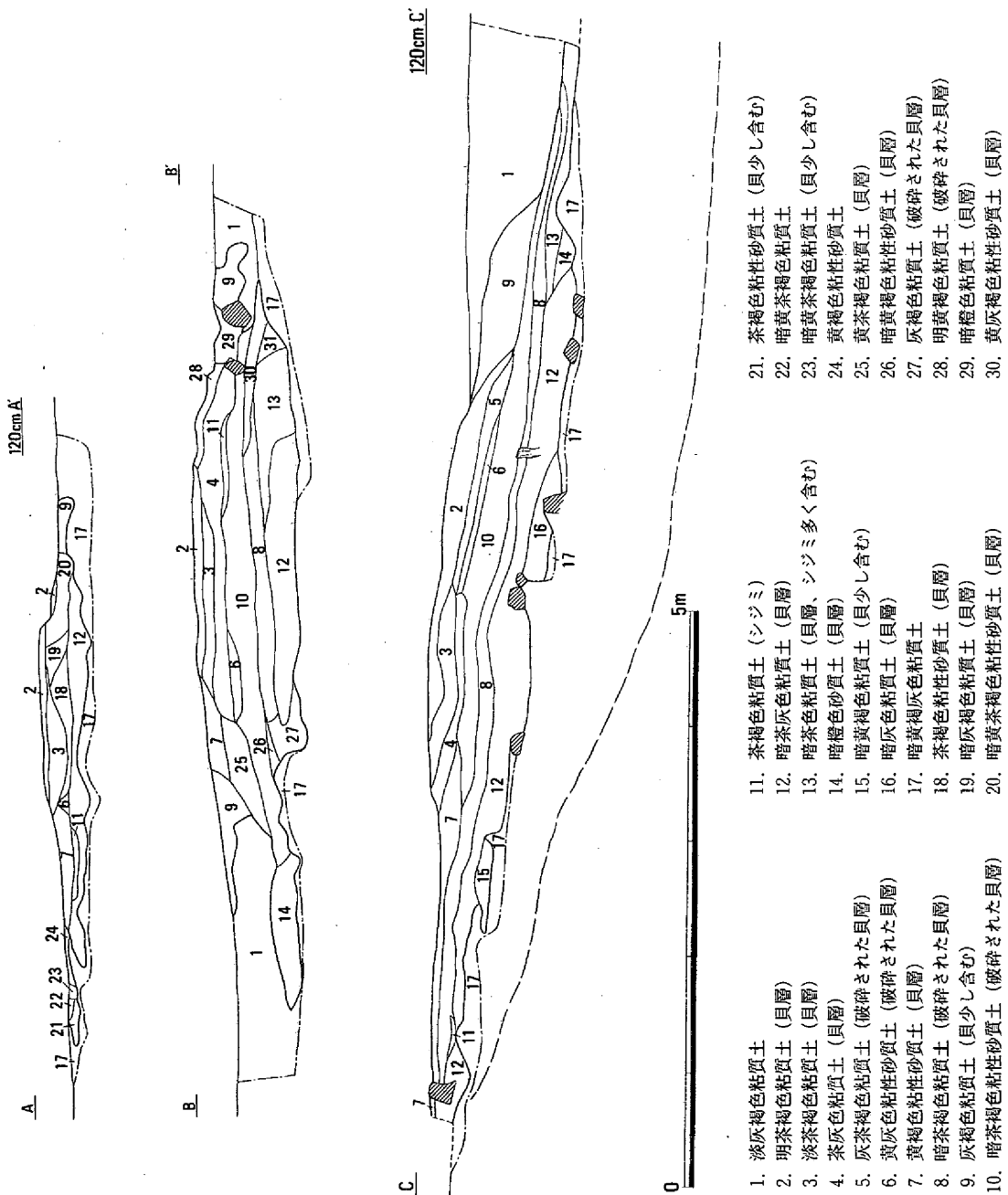
貝塚2の東約6mの位置に検出した。この貝塚も貝塚1と同様に、河道左岸の岸辺に形成されている。貝の堆積は、岸から川底に向けて貝殻が堆積する。貝塚の平面形を見ると岸辺から川底に向けて大きく膨らむ状況を呈している。貝塚の最大長は、990cmを測る。幅は、北端の肩部で310cm、南端の最も広がる部分で740cmを測る。貝層の最も厚い部分で55cmを測る。貝塚を形成する貝の構成は、その主体がハイガイであること、出土する貝の種類、比率共に貝塚2とほとんど同じである。



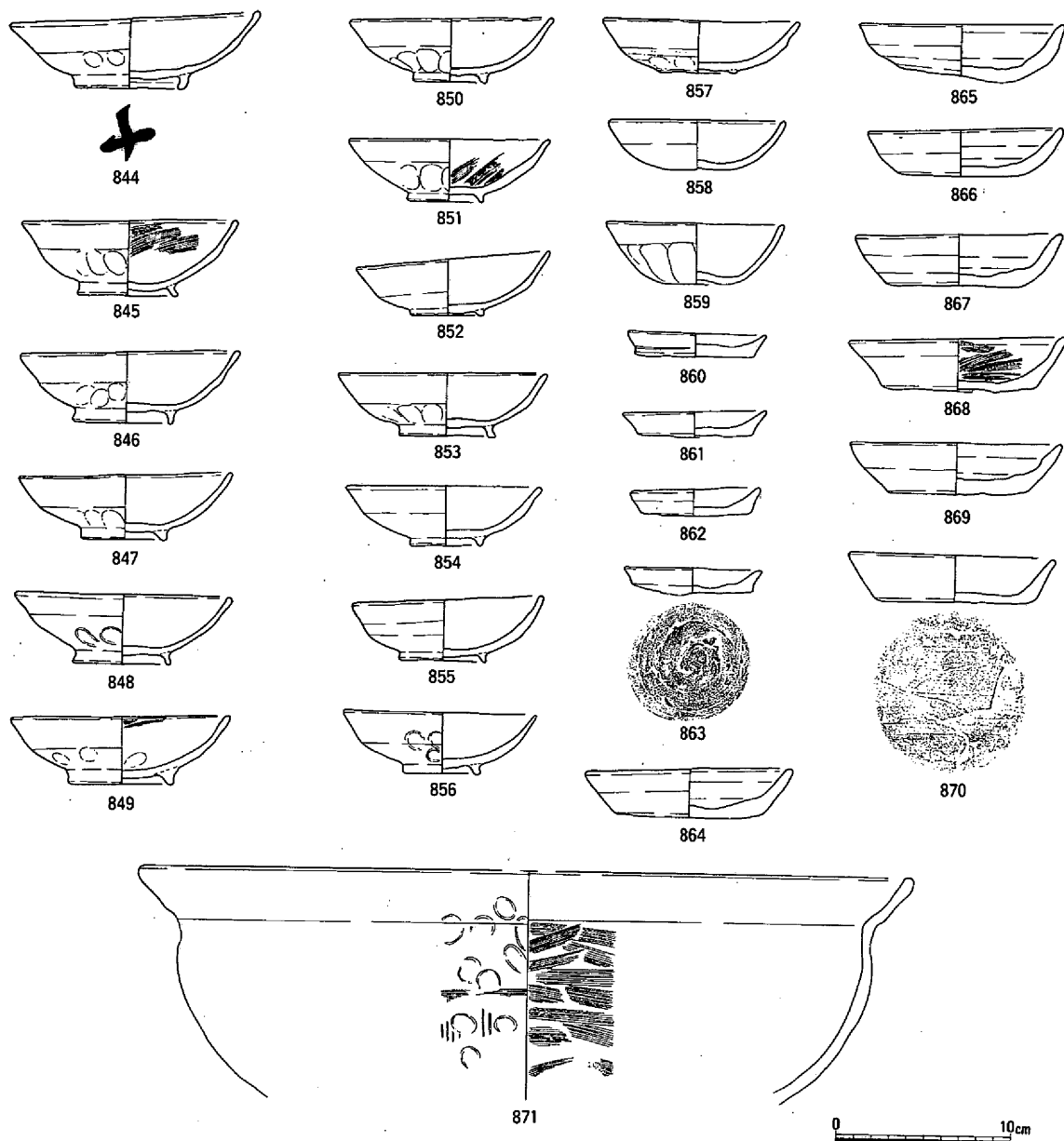
第175図 貝塚3 平面 (1/150)

しかし、形成過程を見ると違いが見られる。貝塚2はその層位が比較的単純なのに対し、貝塚3では、少し複雑な様相を呈している。この貝塚では、第12層のハイガイの貝殻が堆積すると。その上層に破碎されたハイガイの貝殻がほぼ一面を覆うように形成され、その後、破碎されない貝殻と、破碎された貝殻とがほぼ互層状態に堆積している状況が観察される。貝塚の底面の海拔は、0～10cmである。

遺物としては、土師質椀、須恵質甕、瓦質羽釜、磁器、鉄器、木器などが出土している。844～859は、土師質椀である。858・859は、高台の付かない椀である。844は、口径も14cm とやや大きく、高台もしっかりするものである。846・848・849は、口径12～12.2cmを測り、高台は、断面が台形を呈するものである。852は、口径10.2cmを測り、高台は、断面が三角形を呈しその高さも低い。858・859は、口径10cmを測り、高台はない。また、底面はその中央部が上げ底に造られている。860～870は、皿で

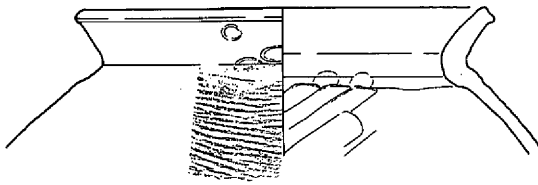


第176図 貝塚3 断面 (1/60)

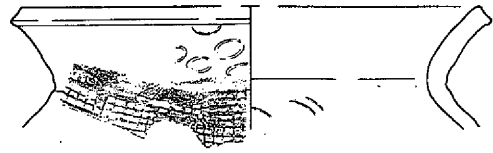


第177図 貝塚3 出土遺物〈1〉

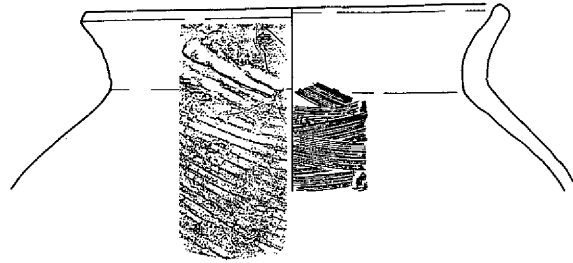
ある。863の底面には篋起こしの痕跡が見られる。871は、土鍋である。外面にはハケ目と指頭圧痕が見られる。872～876は甕である。873は、格子目のタタキ、874は、平行タタキの施されるものであり、亀山焼きの可能性がある。875は、格子目のタタキ、876は、平行タタキの施されるもので、亀山焼きと考えられる。877は、須恵質壺の胴部下半である。878は須恵質鉢で、東播系の物である。879は、瓦質の鉢である。880は、瓦質の羽釜で、口縁部は直立する。内面は、全体にハケメによる調整が見られる。881は、瓦質の三足羽釜である。口縁部は、少し内傾する。882は、土師質の三足羽釜である。口縁部の立ち上がりは低い。C38～43は、土錘である。883～886は、青磁の小皿である。885・886の底部内面にはカキメによる文様が施されている。887～890は、青磁の碗である。887～889は、外面に鎗蓮弁文見られる。また、889の内面底部には、花文が施される。890も青磁碗である。887～889の体部は、高台付近から直線的であるのに対して、890は、底部に少しの膨らみを持っている。口縁端部は、



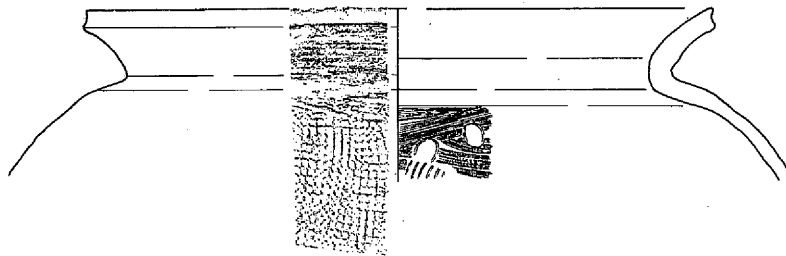
872



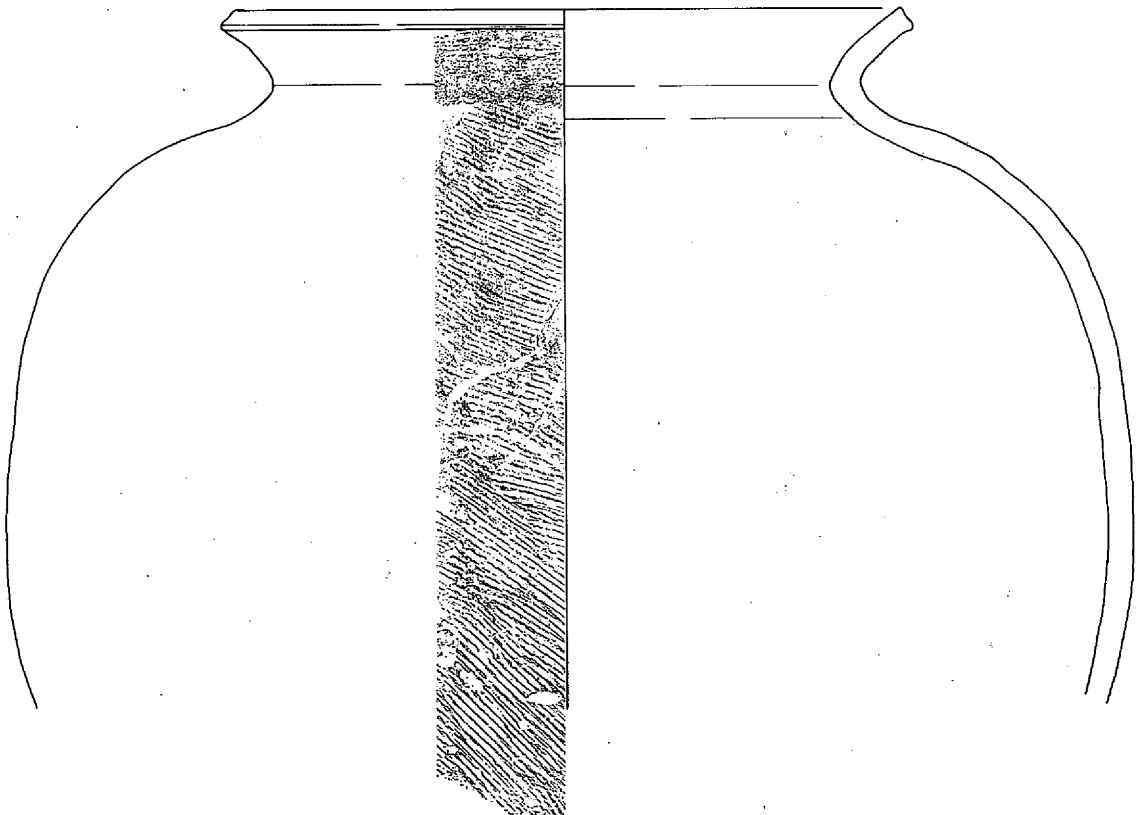
873



874



875



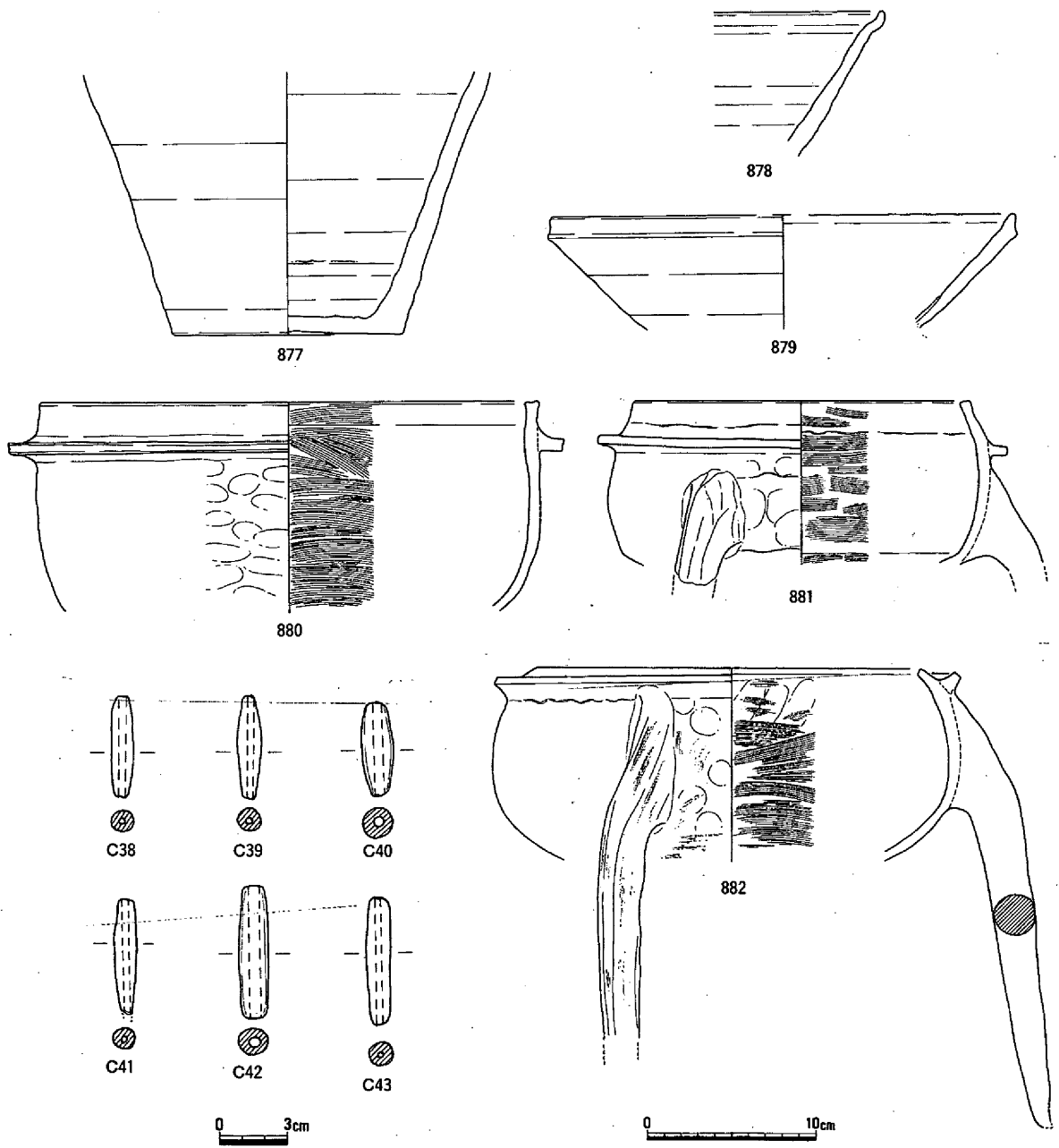
876



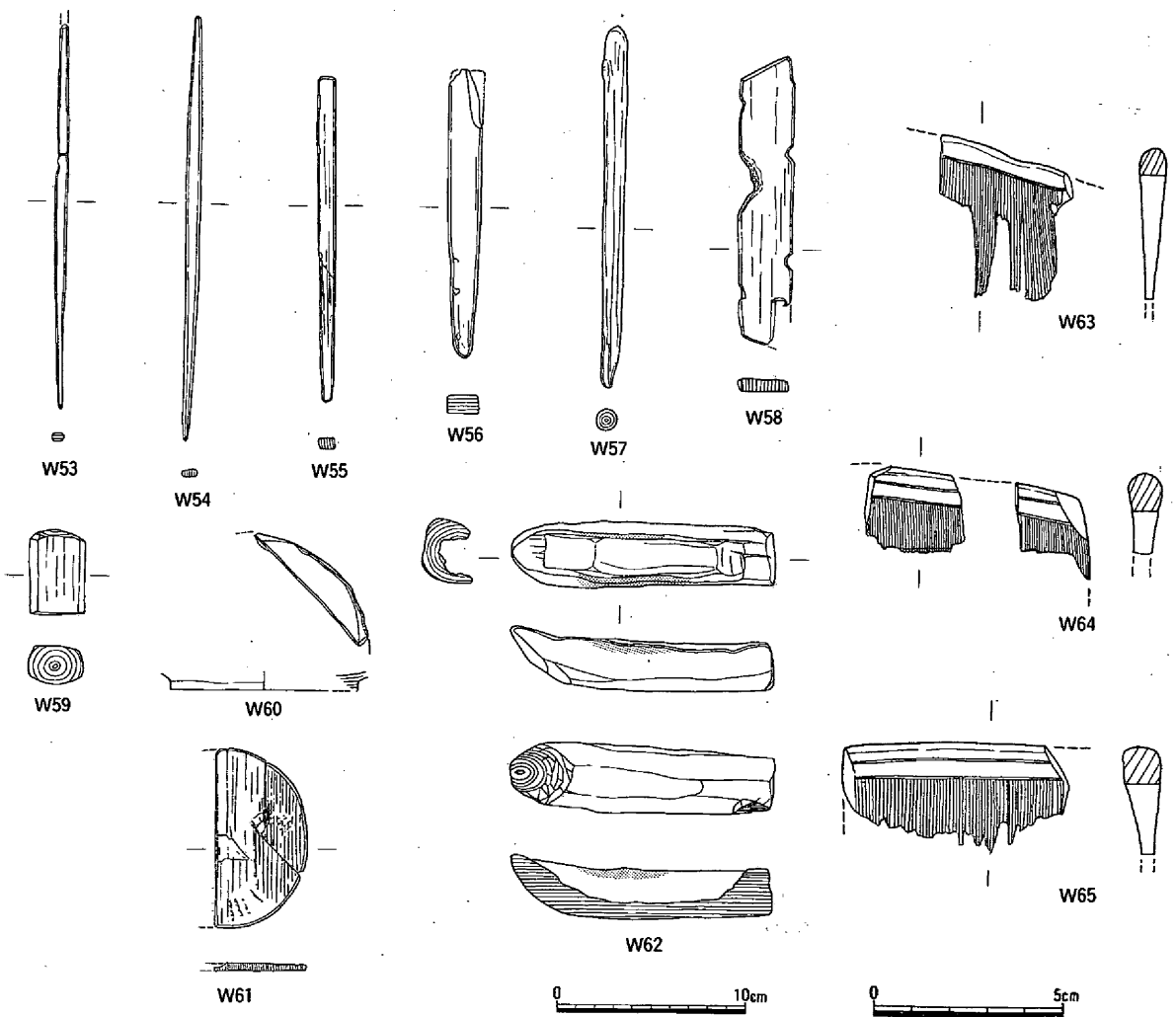
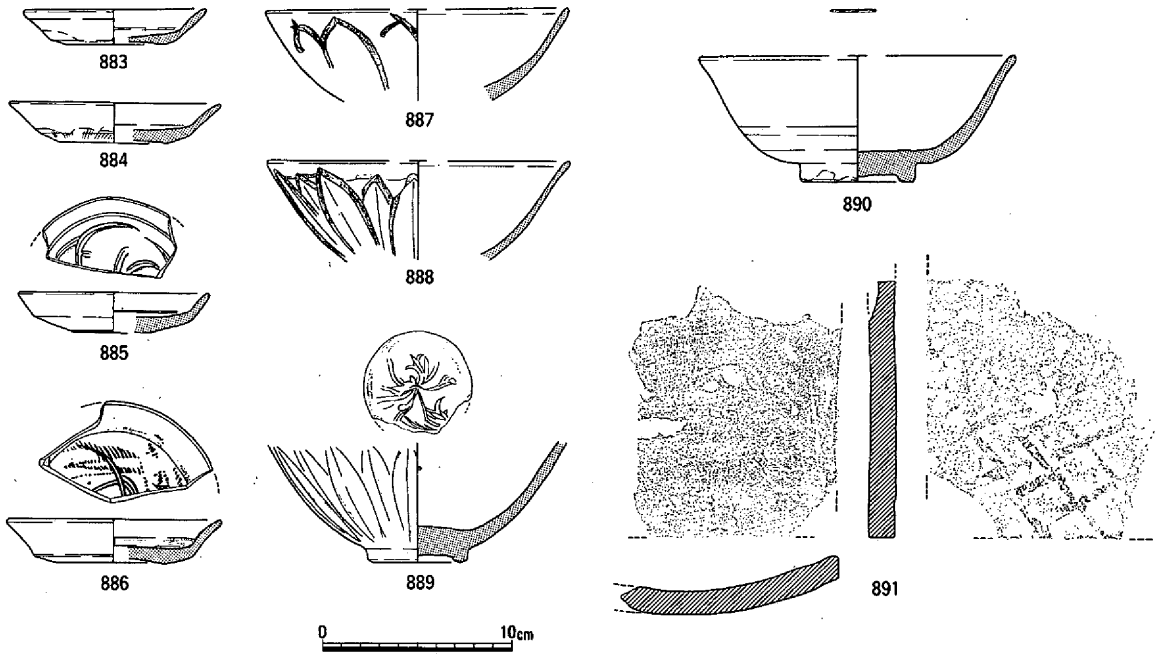
第178図 貝塚3 出土遺物〈2〉

第3章 発掘調査の概要

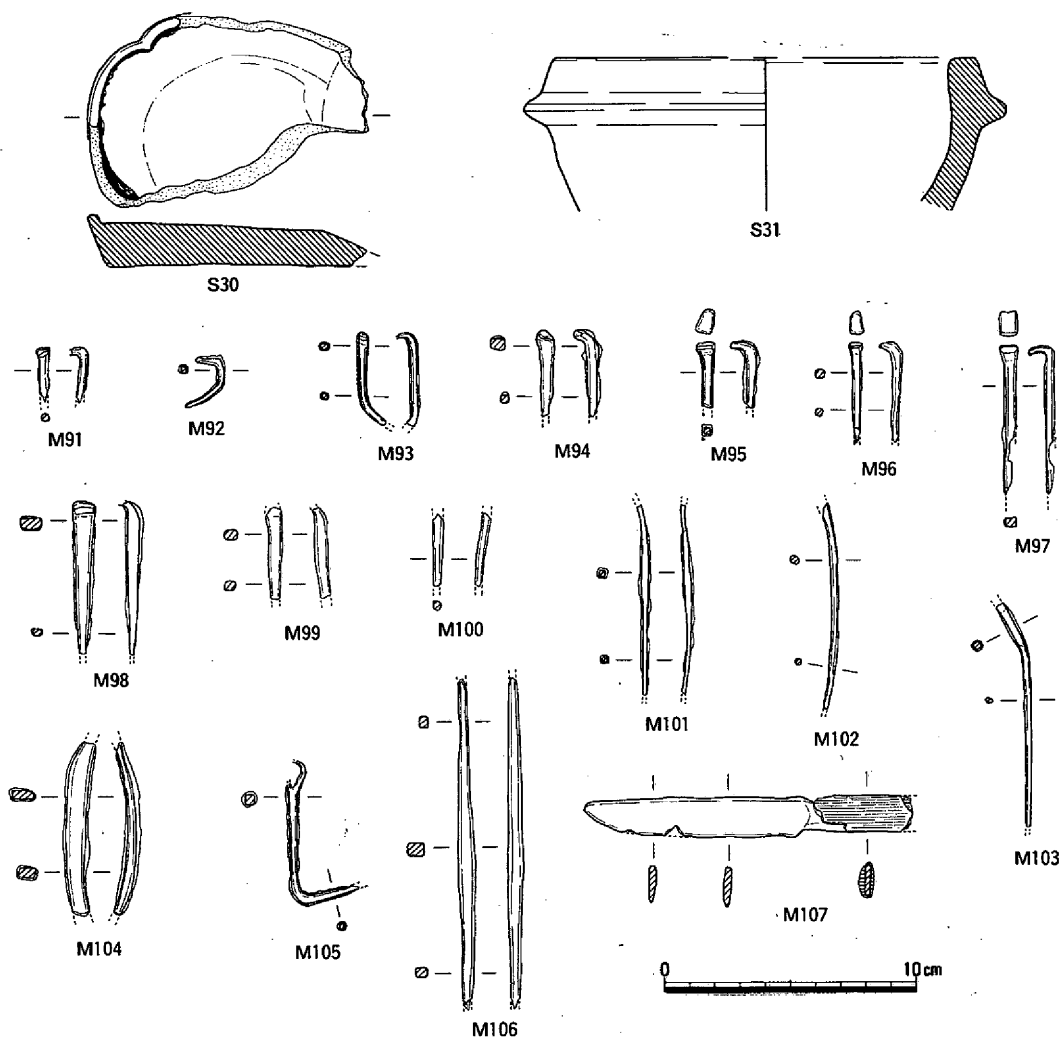
何れも丸く収められている。891は、平瓦である。厚さ約14mm を測り、裏面に格子のタタキが施される。W53・54は、箆である。W55・56・58は、加工木である。W59は、毬状に加工された物である。W60は、漆器である。W61は、曲げ物の底板である。W62は、舟を模した舟形である。W63～65は、櫛である。S30は、硯である。陸の中央部分の使用によると考えられる窪みが見られる。材質は、粘板岩である。S31は、石鍋で、材質は滑石である。M91～100は、鉄製の角釘である。M101～103は、方形の棒状の鉄製品である。M104は、細長い板状の物で、少し湾曲している。機種不明の鉄製品である。M105は、鏡の可能性のある製品である。M106も両端が欠損している。中程がやや太く、両端に細くなる。M107は、刀子で柄の部分に木質が残存している。貝塚3は、貝塚2より新しいと考えられ、14世紀前半から後半に掛けての時期に形成されたと考えられる。 (井上)



第179図 貝塚3 出土遺物〈3〉



第180図 貝塚3 出土遺物〈4〉

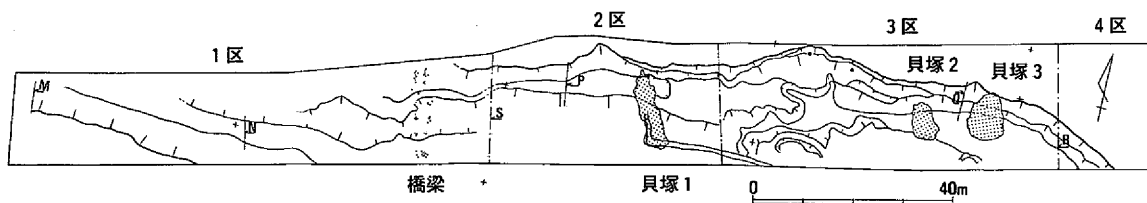


第181図 貝塚3 出土遺物〈5〉

(5) 河道

河道1 (第182図、図版26~34)

概要 岩間上調査区のうち西側の大半を占める遺構である。検出総延長210m強、幅約30m、深さ2.0~2.5m前後の旧河道で中世後半期には完全に埋没している。当初計画では、1995年度内に米田遺跡岩間調査区の全ての調査を終了の予定で、調査範囲の西端部であった地区を旧1区(2区)と地区設定



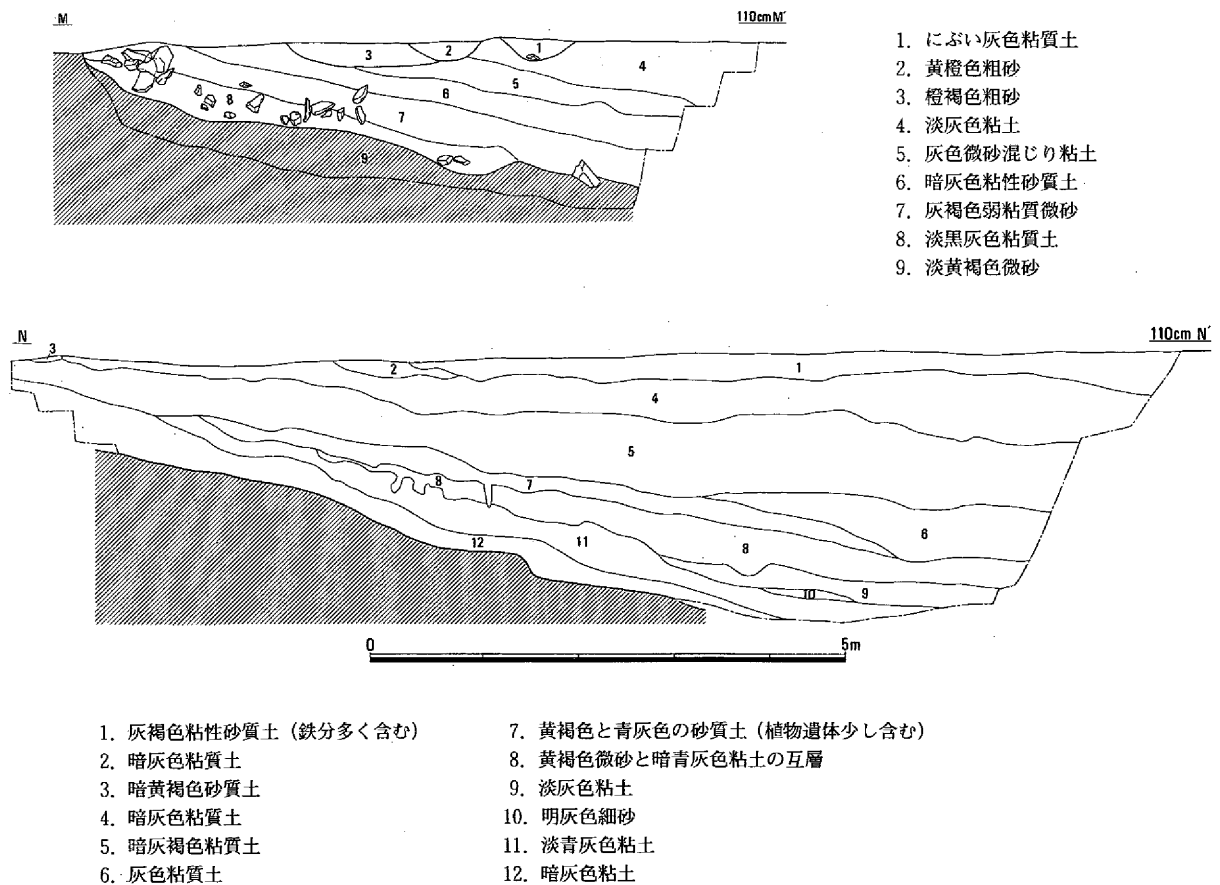
第182図 河道1 位置 (1/1,500)

し調査に着手した。しかし、確認調査では未検出であった河道が西半地区の大半を占めて、さらに上流部にも延びていることが判明した。このため同年度の調査工程を若干手直しし、河道の東側の3区及び新たに判明した上流部1区（旧4区）については次年度の調査と変更した。したがって、発掘調査中の調査区の設定は変則的でやや細切れの調査となったことは否めない。河道1は調査区名では、2区・4区の一部（1995年度）・3区・1区（1996年度）の順に調査を行った。河道内では、橋梁1箇所、井戸3基、杭列、貝塚3箇所、石組み護岸、溝18本を河道底と埋没途中や埋没後の上面で検出している。

なお、河道1出土の膨大な量の遺物の整理（コンテナ300箱）については、各調査区ごとに上層と下層遺物とに大別して掲載している。記述についても同一河道であるが便宜的に上流部（1区）より調査区ごとに説明を加えている。 （山磨）

1区（第183～192図、図版31）

この調査区の最上流部に当たる。調査範囲のほとんどは、河道によって占められている。西端部では南からの丘陵が張り出しており、西から東に流れるこの河道もその影響を受けて、丘陵の先端部に突き当たると流を変えて少し北に振り、北北東に流れて行く。この丘陵の端部が、河道の右岸の一部を形成している。その部分においては、岩盤が露呈している所も見受けられた。また、調査範囲の東端においては、東側に接する調査範囲において検出されている微高地に続く部分が、左岸の一部として検出されている。しかし、調査範囲内においては、左岸と右岸が対面する部分がないため、この河

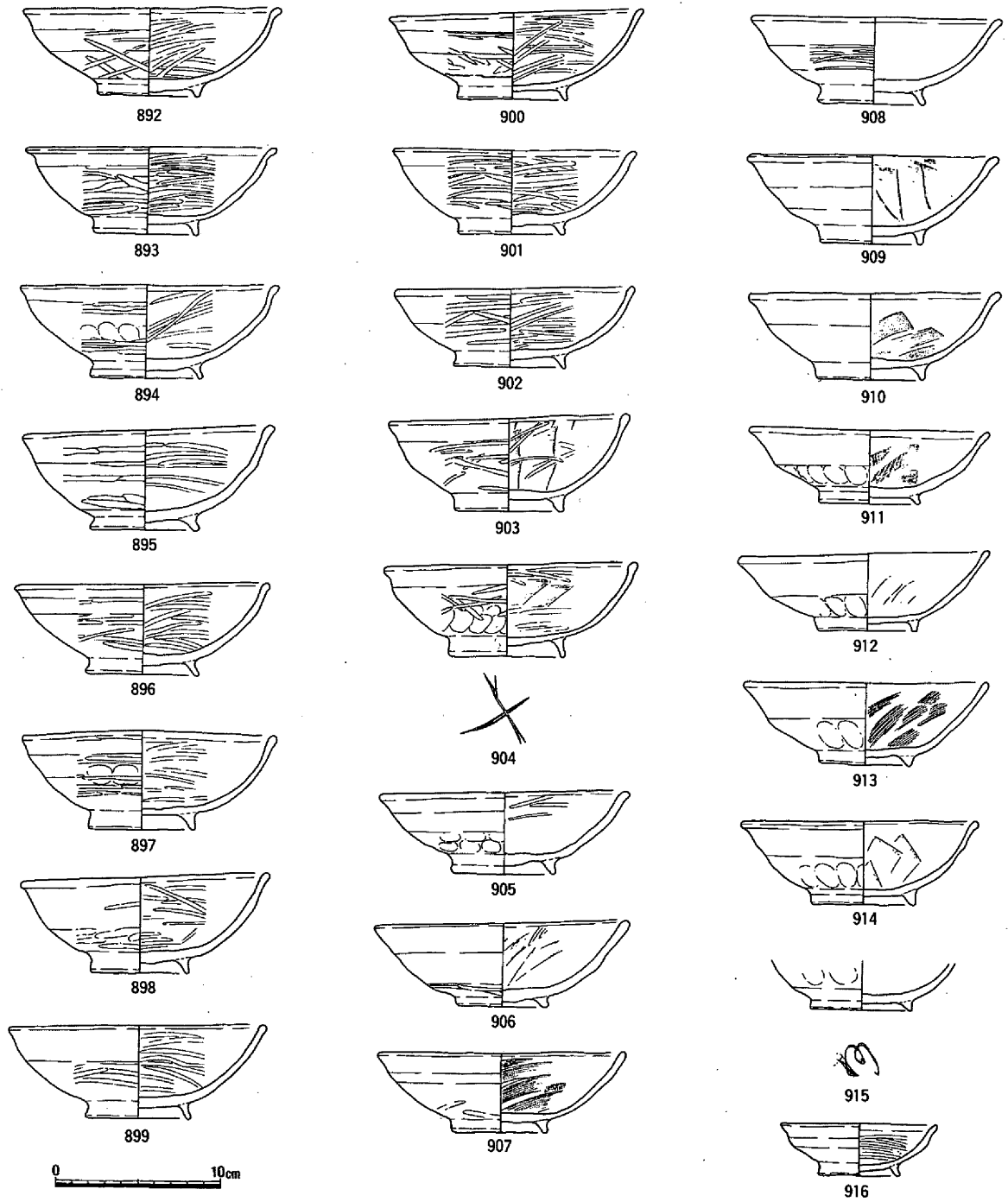


第183図 河道1 断面〈1〉（1/80）

第3章 発掘調査の概要

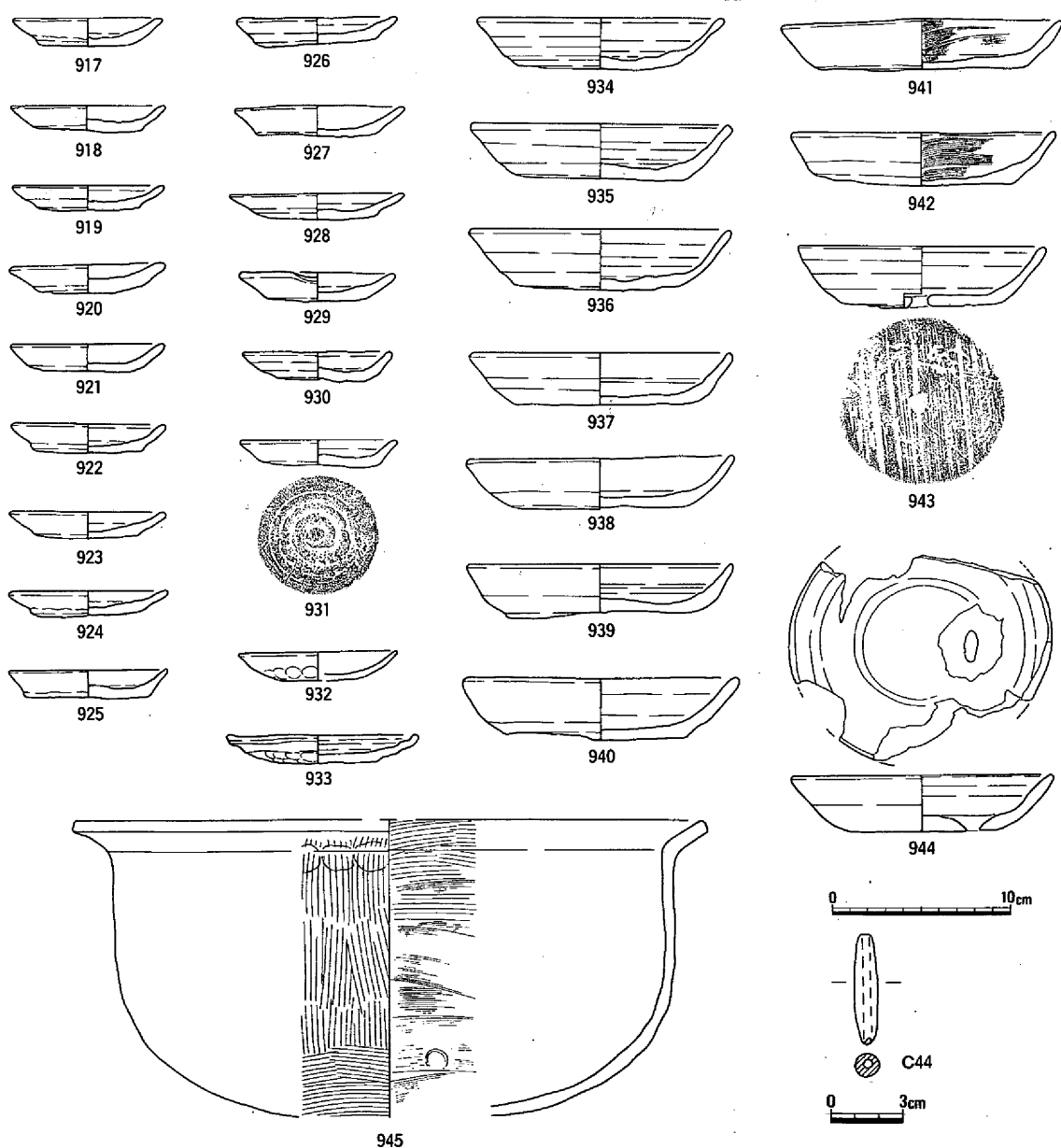
道の正確な幅については、計測することは出来なかった。河道は、ほとんどが粘土、もしくは粘質土で埋まるものであるが、一部に砂と粘土が互層に堆積する層も見られた。この区における河道の底面の標高は、おおよそ-2 mである。

出土した遺物は大変多く、種類も色々である。土師質時、瓦器、陶器、磁器、鉄製品、木製品などがある。892~916は、河道の底部とそれに近い位置から出土した土師質碗である。916のみが極端に小さい。892は、内面に入念なヘラミガキ、外面にもヘラミガキ調整の施されるものである。893・895、

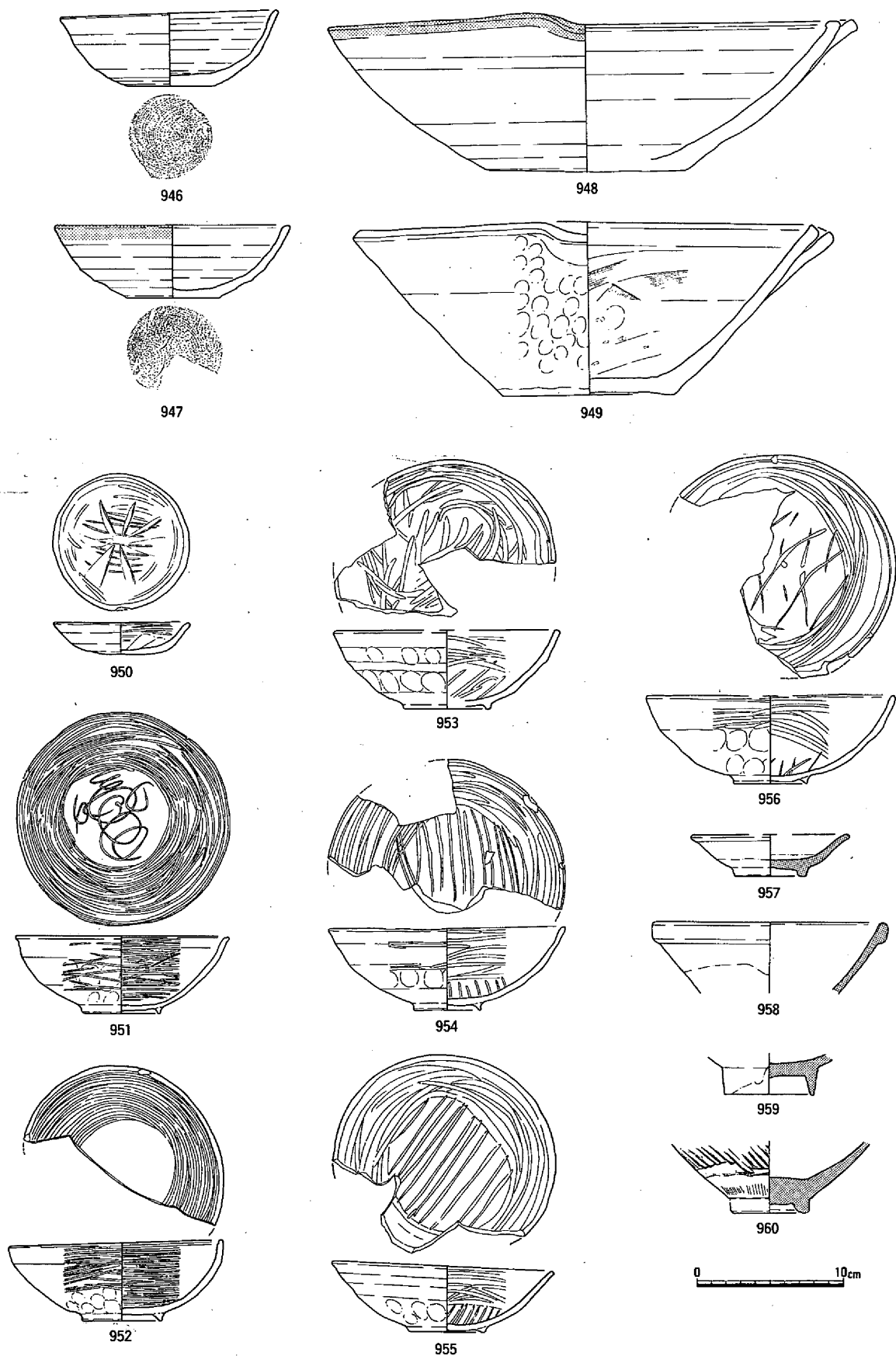


第184図 河道1(1区) 出土遺物<1>

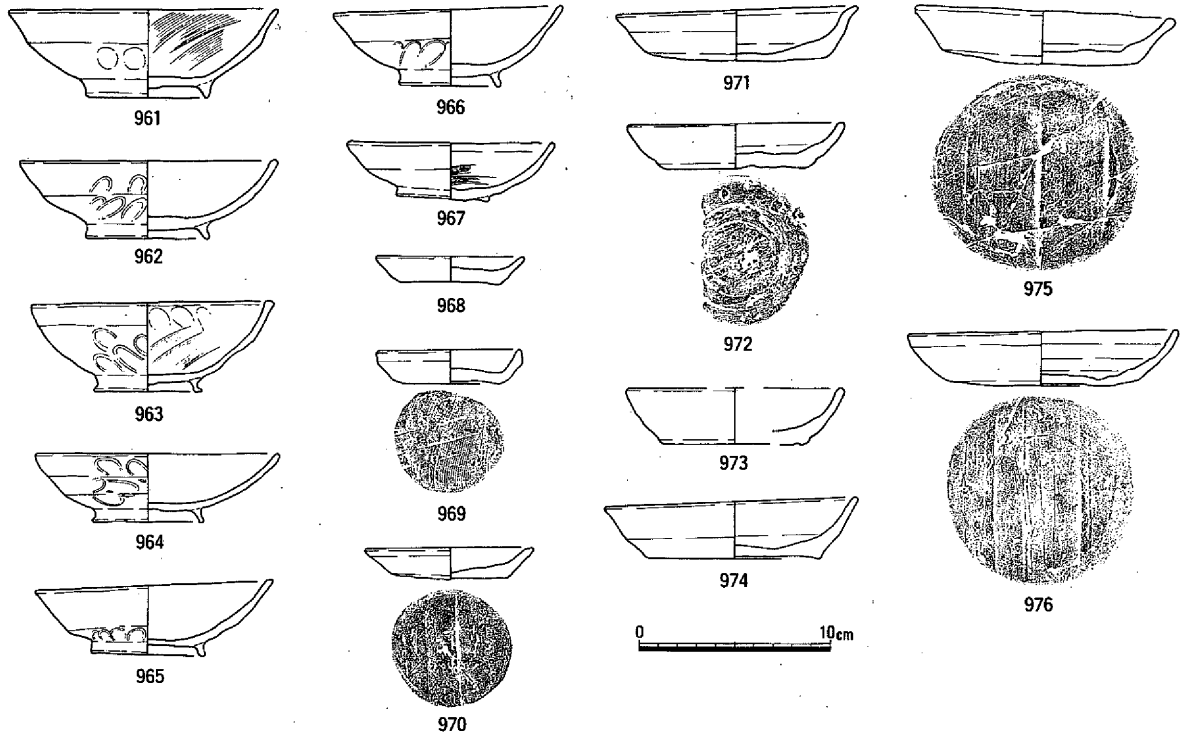
896・900・901・902も同様である。894・897は、外面にヘラミガキ調整も見られるが、一部に指押さえの痕跡を残すものである。903は、内外面のヘラミガキが少し雑なものである。内面には、板状工具によるナデの痕跡が僅かながら見られる。904・905も同様であるが、外面に指押さえの痕跡が見られる。また、904には、底部外面にはヘラ描きの記号が見られる。907~915は、内面の調整にナデ、もしくは板状工具によるものである。外面も、上半がナデ、下半が指押さえによる調整が見られる。915の底部裏面には墨書が見られる。916は、内面に入念なヘラミガキが施される。917~944は、土師質皿である。943は、底部中央に穿孔が施される。945は、土鍋である。内外面ハケメ調整が施される。C44は、土錘である。946・947は、須恵質碗で、底面に糸切りが見られるもので、備前焼である。948・949は、須恵質鉢である。体部は、直線的で、口縁部においても同じ器壁の厚さで、片口が見られる。950は、瓦器の小皿である。951~956は、瓦器碗である。951は、体部の内外面は丁寧な横方向のヘラ



第185図 河道1(1区) 出土遺物<2>



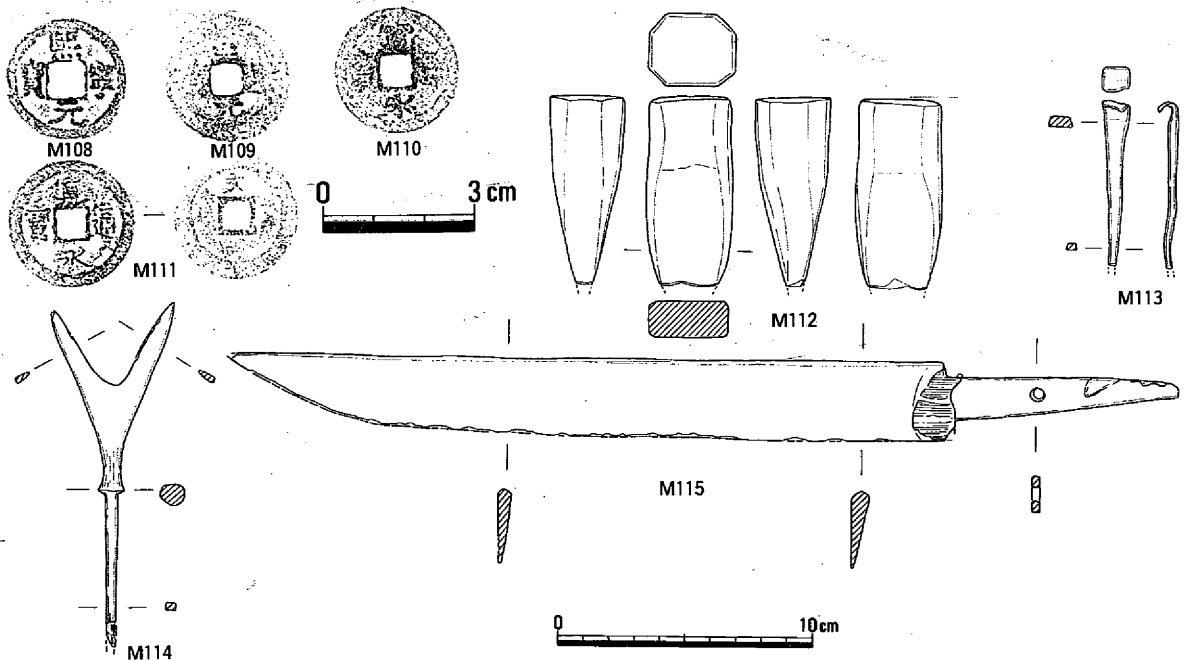
第186図 河道1(1区)出土遺物<3>



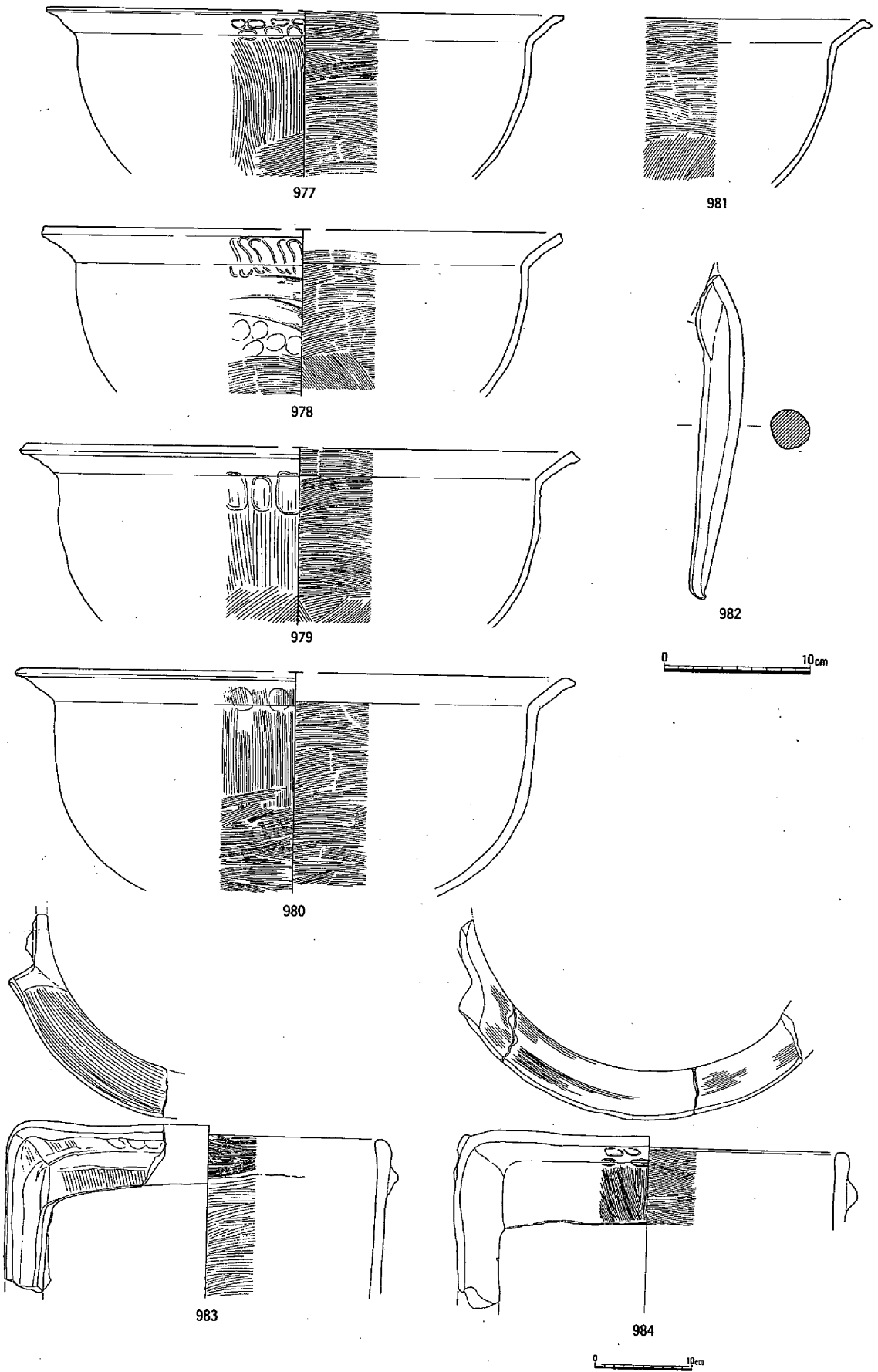
第187図 河道1(1区) 出土遺物<4>

ミガキ、内面底部にも一部ヘラミガキが施される。952は、内面底部以外に丁寧なヘラミガキ、外面は上半はヘラミガキ、下半は指押さえによる調整が施される。953からは、ヘラミガキは内面のみとなりそれも少し雑となる。957は、白磁の小皿である。958は、白磁碗で、口縁部が玉縁に造られる。959・960は、白磁碗の高台部分である。

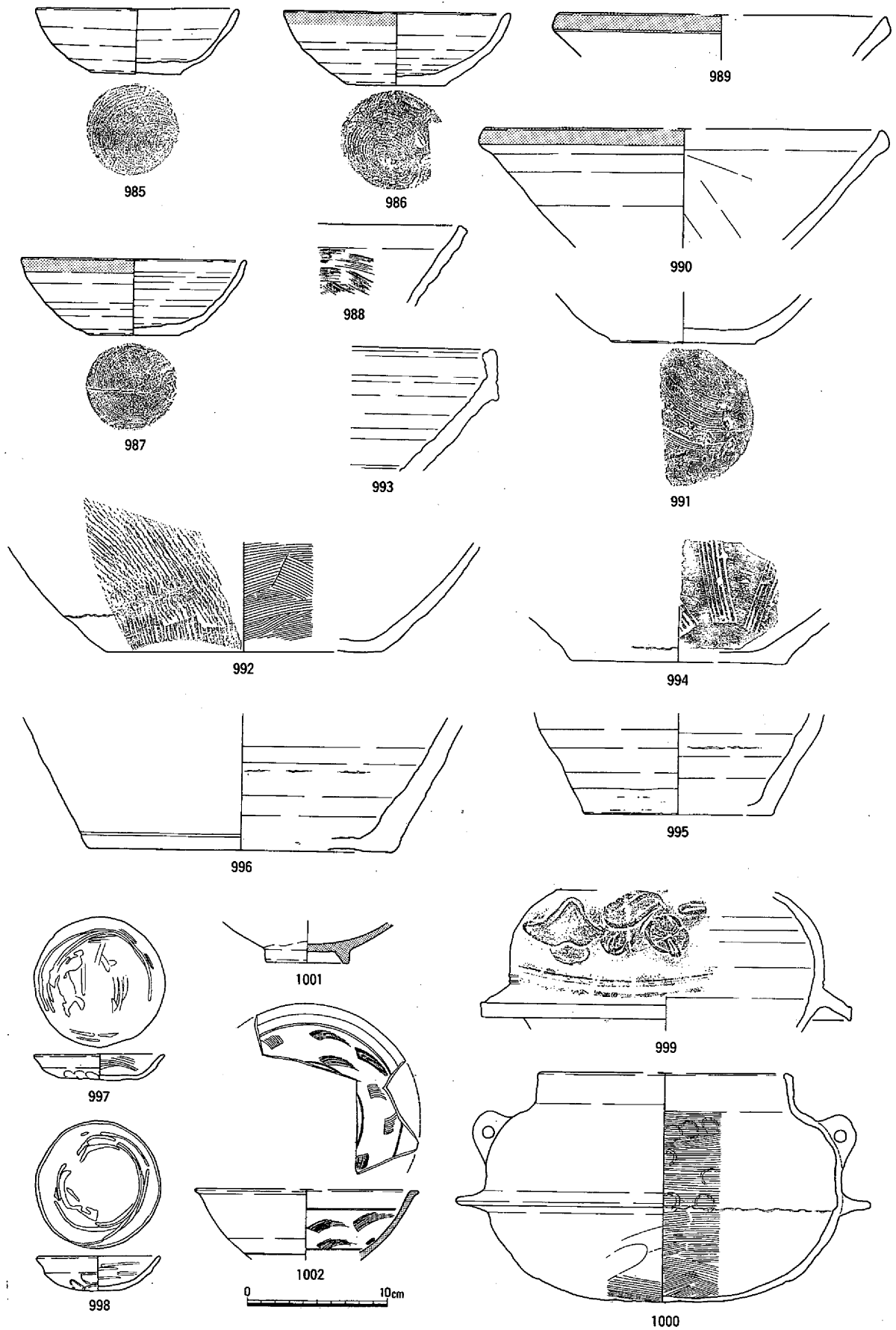
961~976は、河道の上層から出土した土師質碗と、土師質皿の類である。961・963は、内面の調整



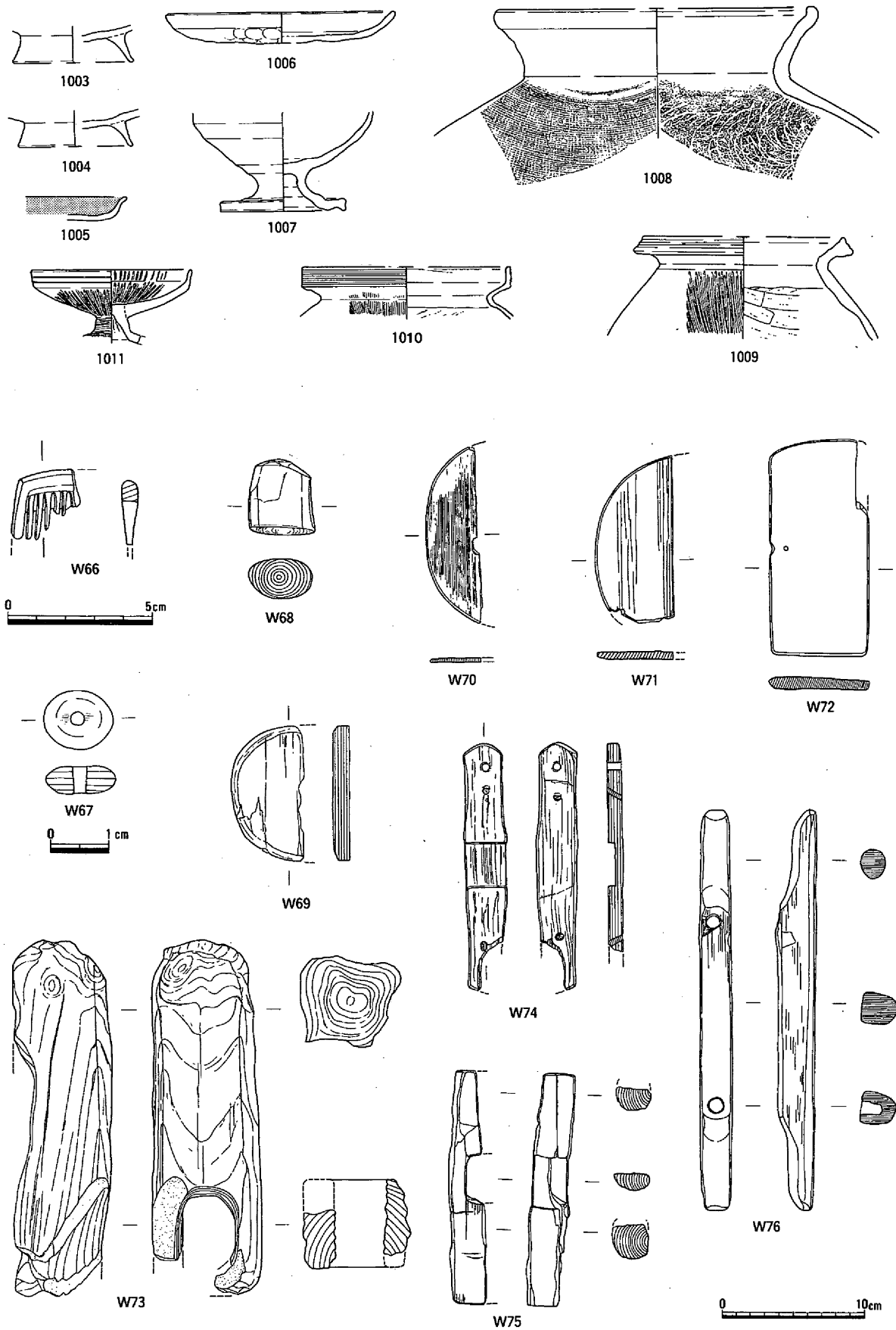
第188図 河道1(1区) 出土遺物<5>



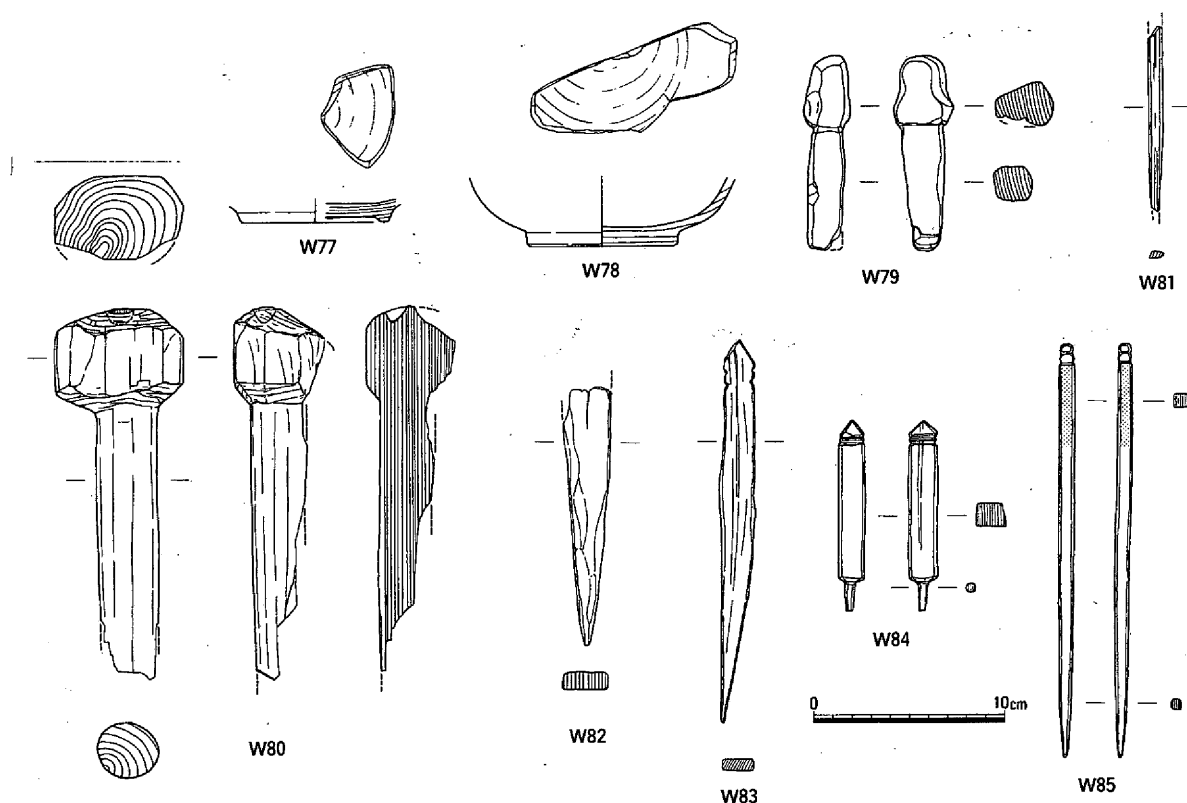
第189図 河道1(1区) 出土遺物<6>



第190図 河道1(1区) 出土遺物<7>



第191図 河道1(1区)出土遺物<8>



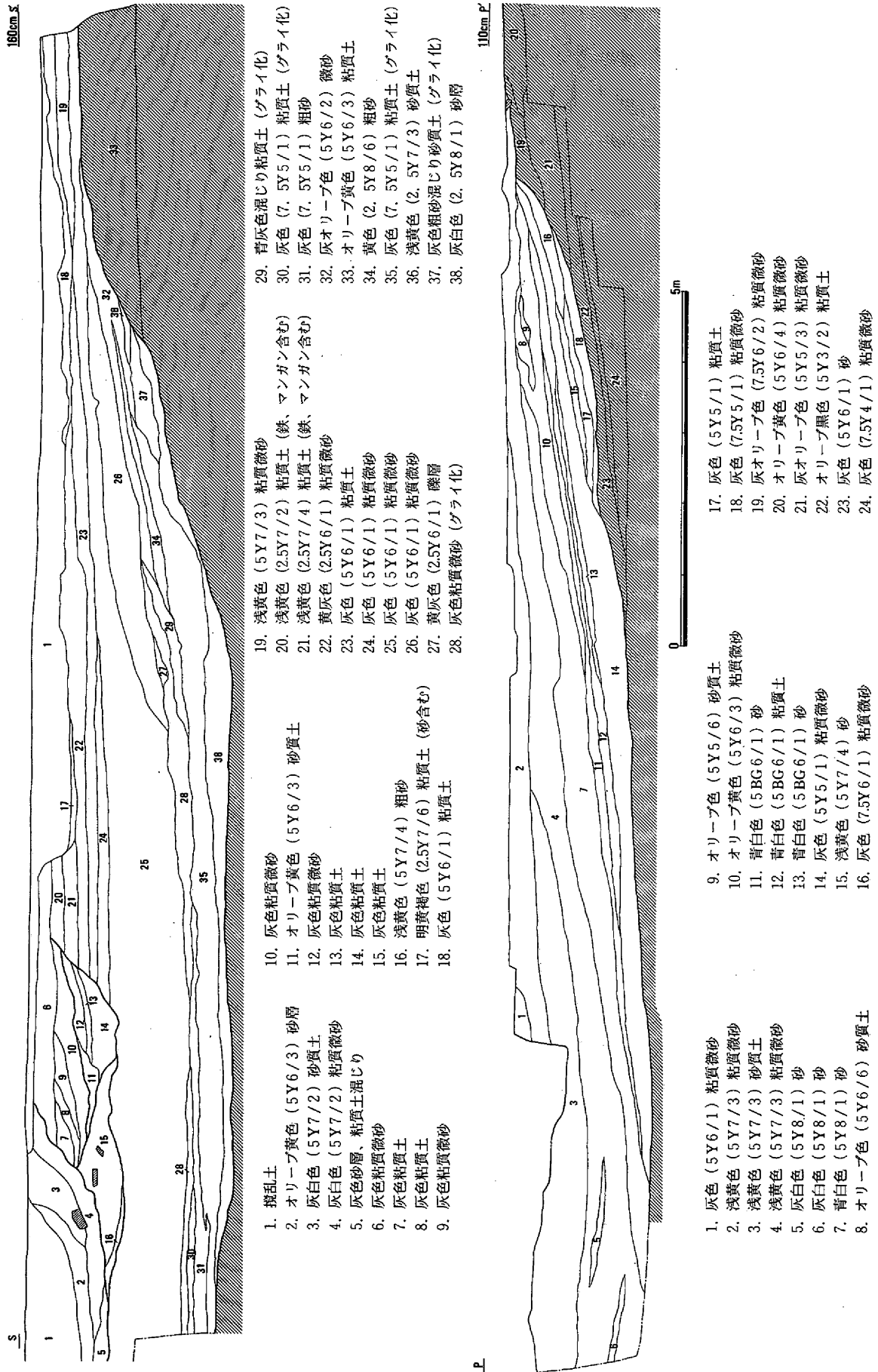
第192図 河道1(1区) 出土遺物〈9〉

に板状の工具を使用するものである。外面は、上半はナデ、下半は指押さえによる調整が成される。962・964～966は、内面はナデ、外面はヨコナデと指押さえによる調整が成されている。967は、高台が痕跡的に貼り付けられるものである。上層から出土した土師質碗は、下層に比べて全体的に小形化する傾向が見られ、967は更に小さくなる。M108～111は、古銭である。「熙寧元寶」、「至道元寶」、「寛永通寶」である。「寛永通寶」は、河道の上層、もしくは、上面からの出土である。M112は鉄斧、M113は鉄釘である。M114は鉄鏃、M115は刀であり、河道の下層からの出土である。977～981は、土鍋である。何れも口縁部は斜め上方に開きながら立ち上がるものである。内面は、全体にハケメ調整が成される。983・984は竈である。985～987は、須恵質碗で、備前焼である。989～991は、須恵質鉢で、東播系のものである。1000は、瓦質の羽釜で上面からの出土である。木製品は、櫛、玉、曲げ物底板、漆器、卒塔婆などが出土している。河道の時期としては、11世紀の中頃には流れており、近世初頭には完全に埋没していたと推定される。(井上)

2区(第193～203図、図版37)

1995年度の7月に最初に調査に着手した地区である。2区は河道1の中間部に位置し、この調査区の掘り下げにより大規模な河道の存在が確認された。調査区北端に検出した左岸肩部は中央付近が若干北に膨らむものの、ほぼ直線的に東西方向に向いている。南側肩部はこの調査区では未検出である。総検出長45m、最大幅23m、最大深さ2.0mである。

調査区中央付近の土層断面の観察では、粘質土と砂層が互層をなす堆積土層を24層確認している。河道法面は、肩部よりやや急傾斜をなし、4.6m内側の検出面より深さ1.3m付近で、河道底面がさらに一段と深くなっている。底面は平滑で南に向かって緩やかな傾斜をなしている。河道底の海拔は一

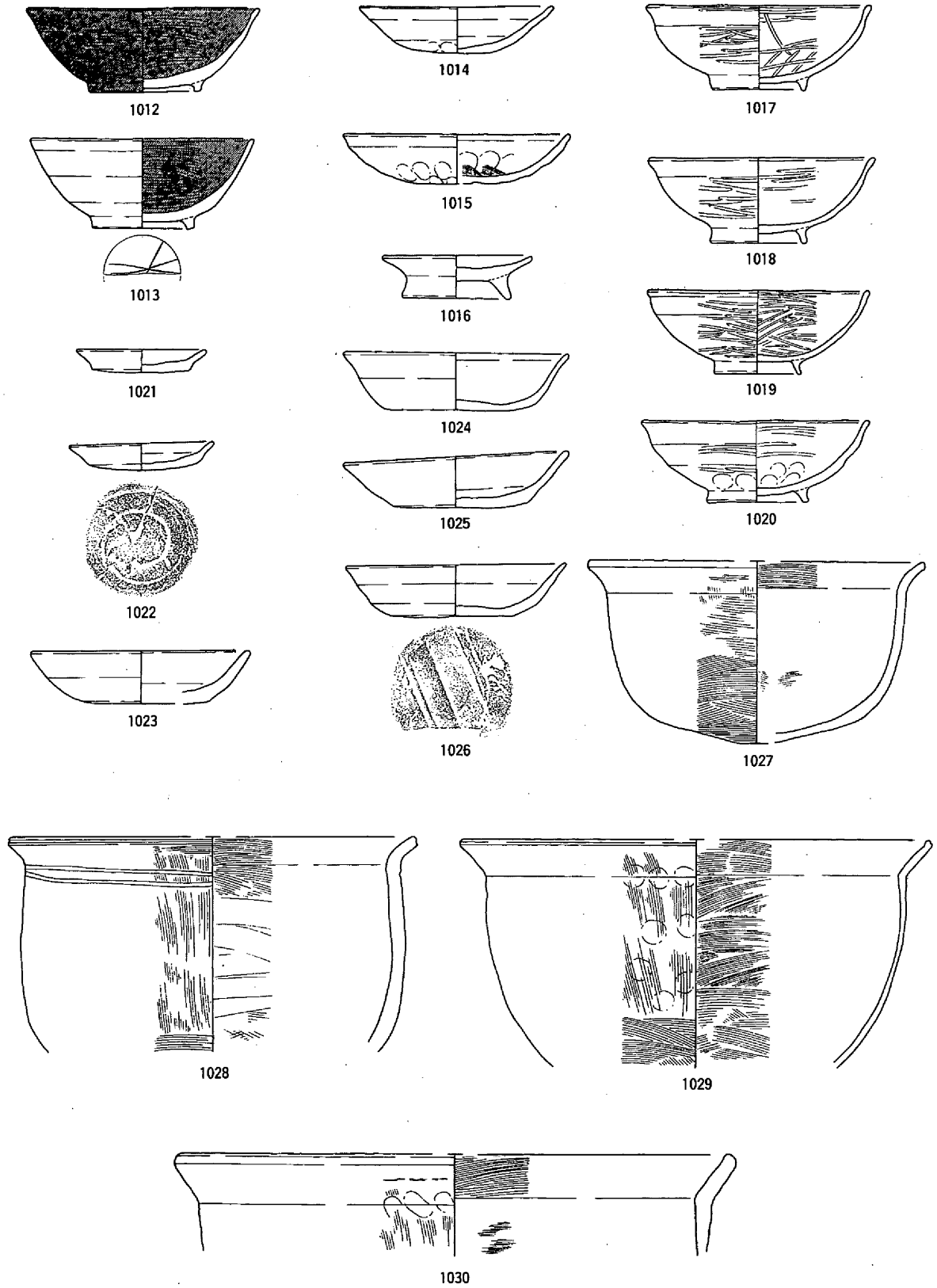


- 1. 撓乱土
- 2. オリーブ黄色 (5Y6/3) 砂層
- 3. 灰白色 (5Y7/2) 砂質土
- 4. 灰白色 (5Y7/2) 粘質微砂
- 5. 灰色砂層、粘質土混じり
- 6. 灰色粘質微砂
- 7. 灰色粘質土
- 8. 灰色粘質土
- 9. 灰色粘質微砂
- 10. 灰色粘質微砂
- 11. オリーブ黄色 (5Y6/3) 砂質土
- 12. 灰色粘質微砂
- 13. 灰色粘質土
- 14. 灰色粘質土
- 15. 灰色粘質土
- 16. 浅黄色 (5Y7/4) 粗砂
- 17. 明黄褐色 (2.5Y7/6) 粘質土 (砂含む)
- 18. 灰色 (5Y6/1) 粘質土
- 19. 浅黄色 (5Y7/3) 粘質微砂
- 20. 浅黄色 (2.5Y7/2) 粘質土 (鉄、マンガン含む)
- 21. 浅黄色 (2.5Y7/4) 粘質土 (鉄、マンガン含む)
- 22. 黄灰色 (2.5Y6/1) 粘質微砂
- 23. 灰色 (5Y6/1) 粘質土
- 24. 灰色 (5Y6/1) 粘質微砂
- 25. 灰色 (5Y6/1) 粘質微砂
- 26. 灰色 (5Y6/1) 粘質微砂
- 27. 黄灰色 (2.5Y6/1) 礫層
- 28. 灰色粘質微砂 (グライ化)
- 29. 青灰色混じり粘質土 (グライ化)
- 30. 灰色 (7.5Y5/1) 粘質土 (グライ化)
- 31. 灰色 (7.5Y5/1) 粗砂
- 32. 灰オリーブ色 (5Y6/2) 微砂
- 33. オリーブ黄色 (5Y6/3) 粘質土
- 34. 黄色 (2.5Y8/6) 粗砂
- 35. 灰色 (7.5Y5/1) 粘質土 (グライ化)
- 36. 浅黄色 (2.5Y7/3) 砂質土
- 37. 灰色粗砂混じり砂質土 (グライ化)
- 38. 灰白色 (2.5Y8/1) 砂層

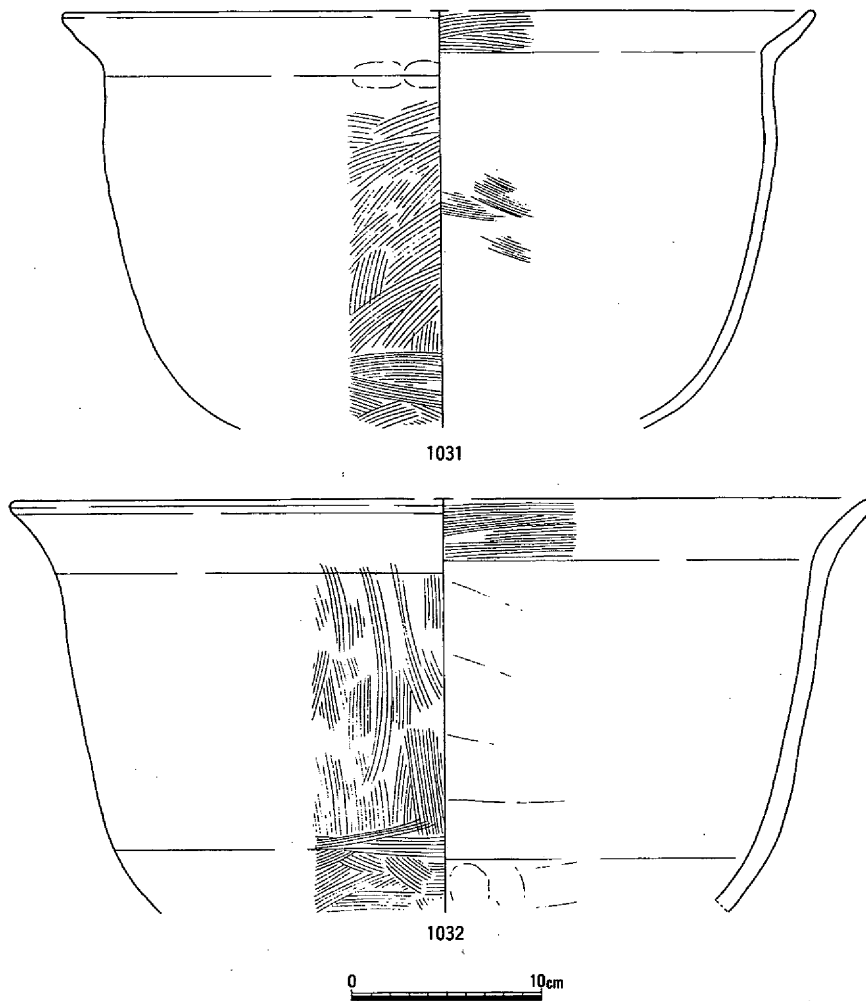
- 9. オリーブ色 (5Y5/6) 砂質土
- 10. オリーブ黄色 (5Y6/3) 粘質微砂
- 11. 青白色 (5BG6/1) 砂
- 12. 青白色 (5BG6/1) 粘質土
- 13. 青白色 (5BG6/1) 砂
- 14. 灰色 (5Y5/1) 粘質微砂
- 15. 浅黄色 (5Y7/4) 砂
- 16. 灰色 (7.5Y6/1) 粘質微砂
- 17. 灰色 (5Y5/1) 粘質土
- 18. 灰色 (7.5Y5/1) 粘質微砂
- 19. 灰オリーブ色 (7.5Y6/2) 粘質微砂
- 20. オリーブ黄色 (5Y6/4) 粘質微砂
- 21. 灰オリーブ色 (5Y5/3) 粘質微砂
- 22. オリーブ黒色 (5Y3/2) 粘質土
- 23. 灰色 (5Y6/1) 砂
- 24. 灰色 (7.5Y4/1) 粘質微砂

- 1. 灰色 (5Y6/1) 粘質微砂
- 2. 浅黄色 (5Y7/3) 粘質微砂
- 3. 浅黄色 (5Y7/3) 砂質土
- 4. 浅黄色 (5Y7/3) 粘質微砂
- 5. 灰白色 (5Y8/1) 砂
- 6. 灰白色 (5Y8/1) 砂
- 7. 青白色 (5Y8/1) 砂
- 8. オリーブ色 (5Y6/6) 砂質土

第193図 河道1断面<2> (1/80)



第194図 河道1(2区) 出土遺物<1>



第195図 河道1(2区) 出土遺物<2>

1.2mを測る。堆積断面の南端付近に2カ所認められる帯状の第5層(灰白色砂層)はいずれも南側が若干上向きの堆積状況をなしており、ほぼこの付近が河道の中央付近と考えられる。

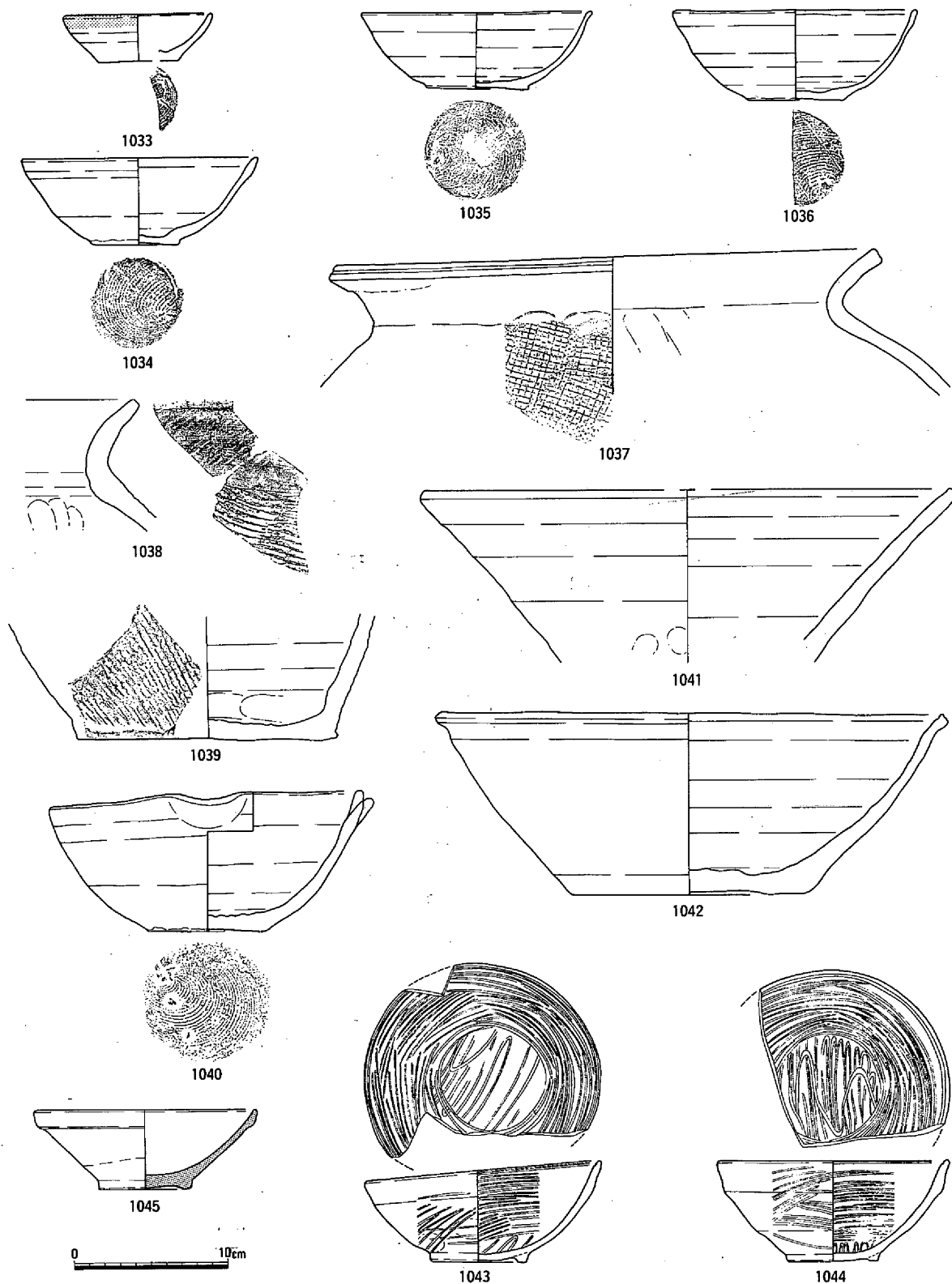
調査区中央やや東よりに南北に検出した貝塚1は、前述の如く貝塚東側がほぼ河道の肩口と同程度に埋没した段階以降に形成された貝塚である。貝塚1と河道1の土層断面の観察では、貝塚堆積層下部は河道断面の第7層の青白色砂層上面に該当する土層と考えられる。貝塚1周辺では貝塚形成前の護岸状の石列と貝殻の堆積した溝16と肩部で井戸1を検出している。

この他、河道1中央付近の底面で規則性は認められないが河道の流走方向を仕切るように直径5cm前後の杭を15本ほど検出している。

出土遺物

2区河道内からは、土師質椀(早島式土器)・杯・小皿・鍋・竈、瓦器椀・皿、青磁、青白磁、白磁、施釉陶器、備前焼、亀山焼、東播系須恵器、瓦等の多量の土器、陶磁器等の他に木器、鉄器、獣骨、魚骨、種子、鉄滓等の多種多様な遺物が出土している。

当調査区では、上面の調査終了後に遺物の少なかった上層の粘質土層(第3層付近まで)を重機により掘削を行っている。このため上層付近の堆積等の十分な把握ができていない。また、河道内の埋

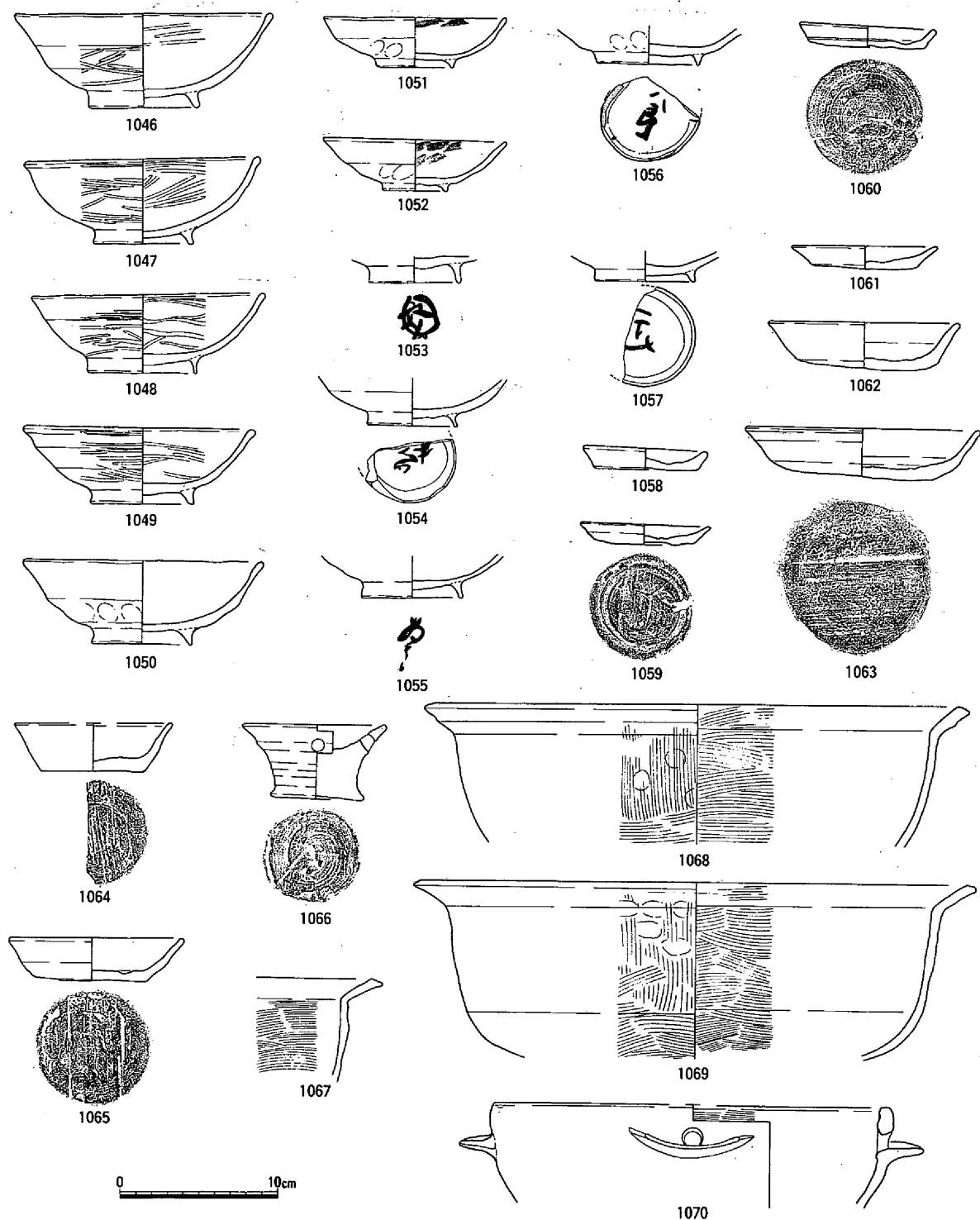


第196図 河道1(2区) 出土遺物<3>

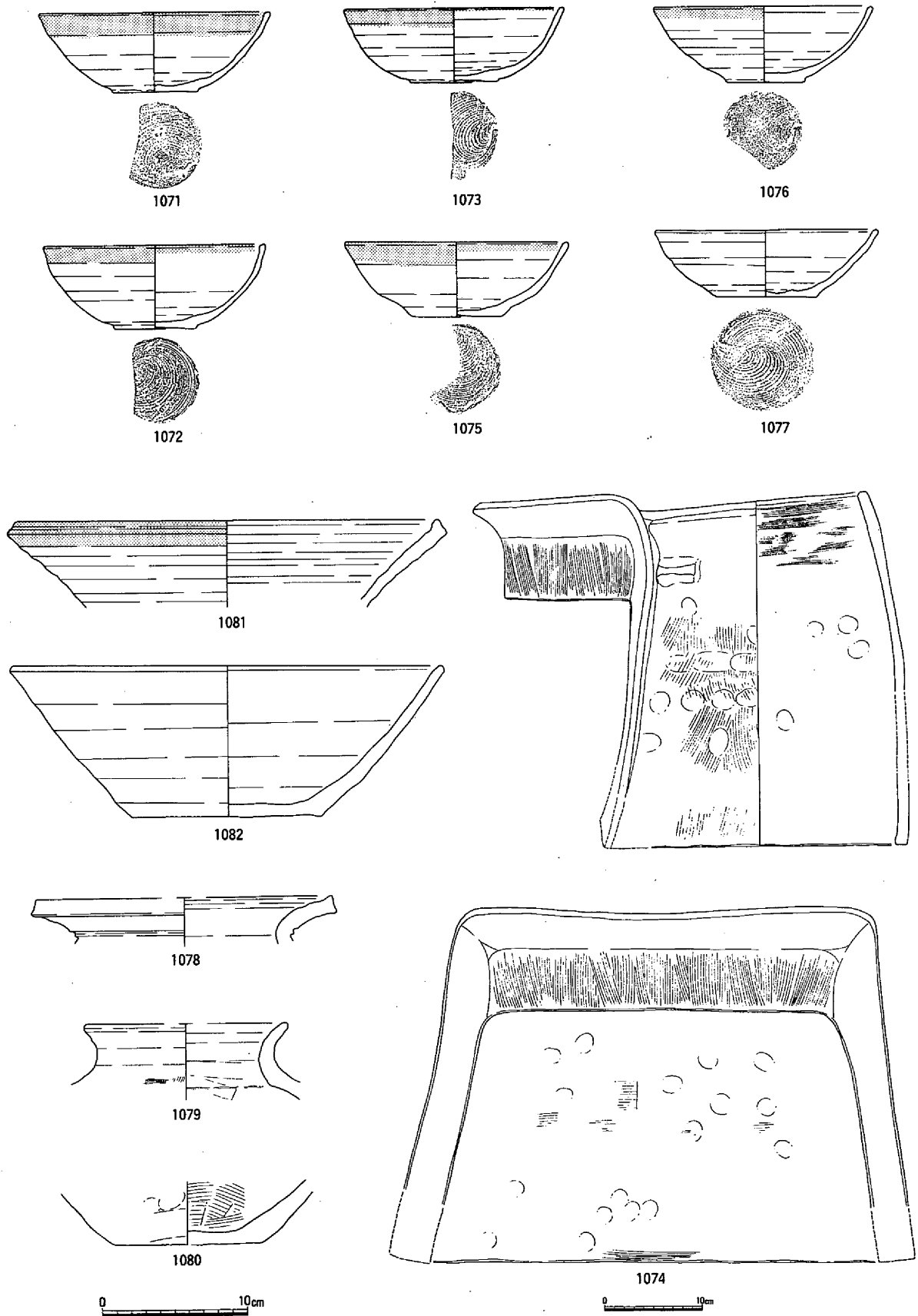
没の過程が一樣でなく場所により異なるため層位的な詳細な把握が充分とはいえない面がある。したがって出土遺物については、貝塚1堆積層の出土遺物と河道1内を大きく2分し、最下層とそれ以外の土層とに分類し説明を加えている。

最下層出土遺物

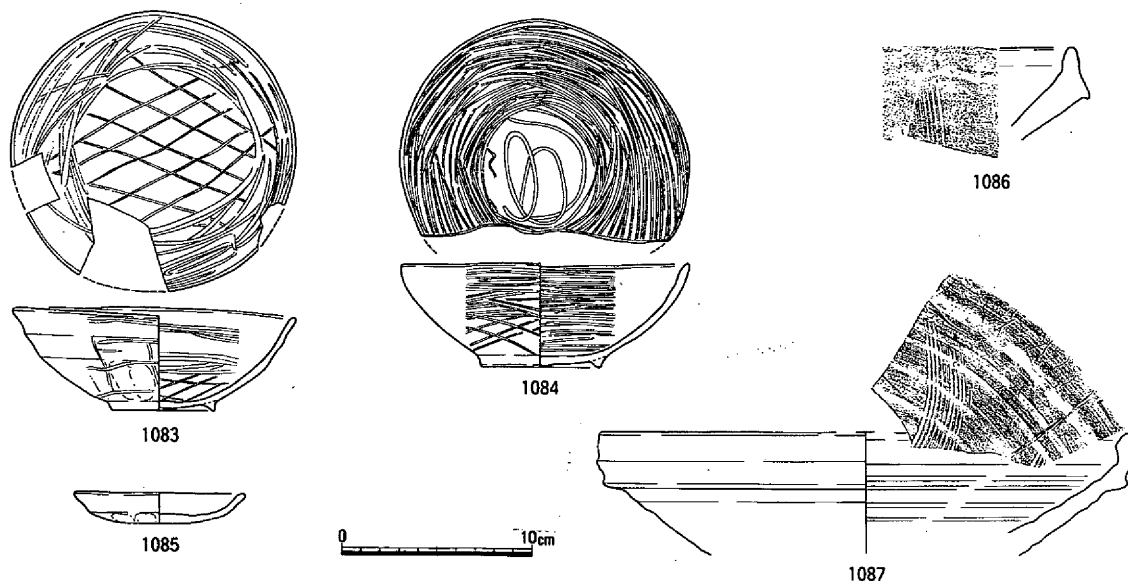
河道断面2の第14層の最下層を中心に河道底出土の遺物を取り上げている。土器類の中で多く占める早島式土器と呼称されている土師質碗1017~1020では、口径14.5~14.8cm、深さ5.5~5.8cmを測る。口径に比較して器高が若干高く形状が深碗状をなし、内外面ともナデ調整の上に横方向のきめの細かいヘラミガキの調整を施している。土師器の杯類1023~1026では、口径15cm強のものが多く、深さ



第197図 河道1(2区) 出土遺物<4>



第198図 河道1(2区) 出土遺物<5>



第199図 河道1(2区) 出土遺物<6>

3.5cm と大形のものが多い。底部はヘラキリ後に板目押圧である。小皿は口縁部をつまみ出し外反している。1014・1015の皿状の器種は、いずれもやや丸底気味の器形で指頭圧痕が顕著でやや薄手である。鍋類は、基本的にはく字形に外反する口縁部に内外面ともにハケメ調整を施している。体部外面に煤が付着したものが多い。1028は長胴化の傾向がある。黒色土器1012・1013は、いずれも古相で河道以前の可能性が強い。

この他、最下層中には弥生土器、古式土師器等もかなり混入している。これらの土器は、いずれも表面がかなり摩滅しており上流部から流入したものと考えられる。

須恵器系の遺物については、椀、皿、甕、壺、鉢等の器種がある。皿1033、椀1035・1036は備前焼、椀1034は東播系須恵器と見られる。いずれも底部は糸切りである。1037は亀山焼、片口鉢1138は底部糸切りである。

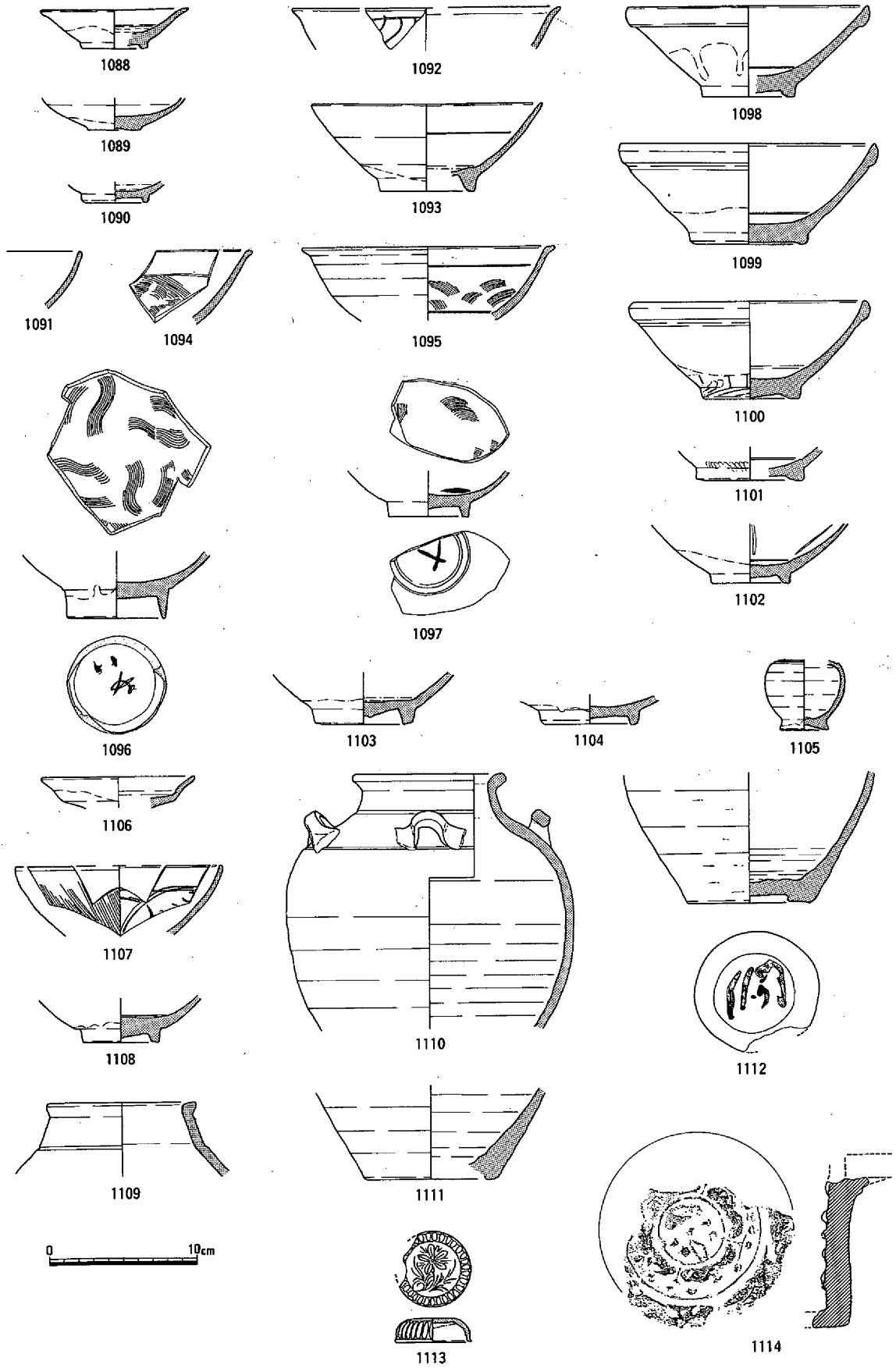
瓦器椀1043・1044はやや深めの椀状をなし、内外面ともに丁寧なヘラミガキを施し、口縁部内面に1本の沈線を施す。楠葉型の瓦器と見られる。輸入陶磁器では、口縁部に玉縁をなすやや小振りの白磁椀が出土している。

出土遺物の年代は土師器椀の編年にもとづけば12世紀代の前半、河道の機能開始時期は11世紀代にさかのぼる可能性も考えられる。

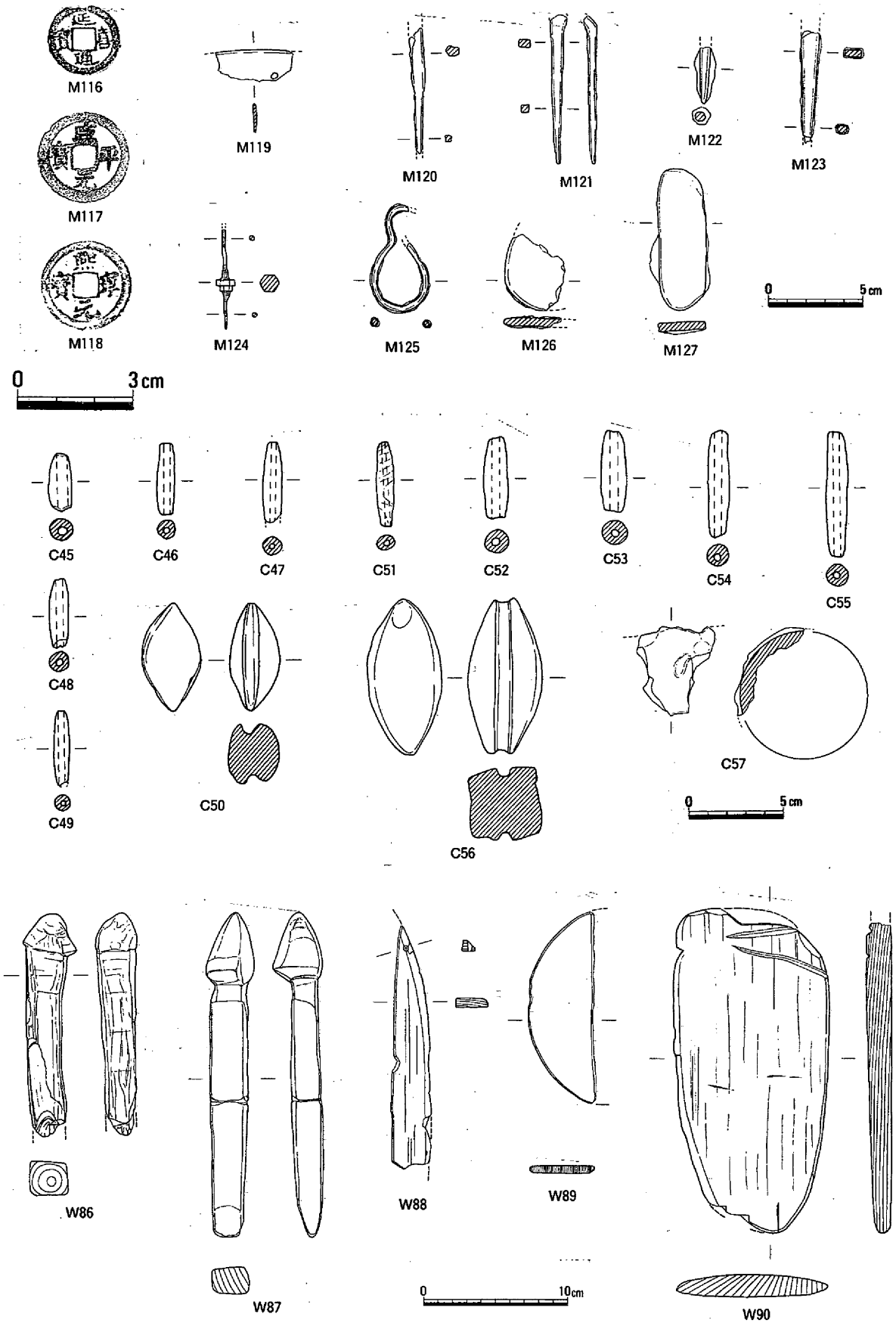
下層出土遺物

1区断面の第11層の砂層付近までの中間層の遺物が中心となる。1区では上層部の3層付近までの堆積土は重機で排土しているため、上層部の遺物は明確に確認していないが中央の貝塚1の堆積時以降の遺物も取り上げている。

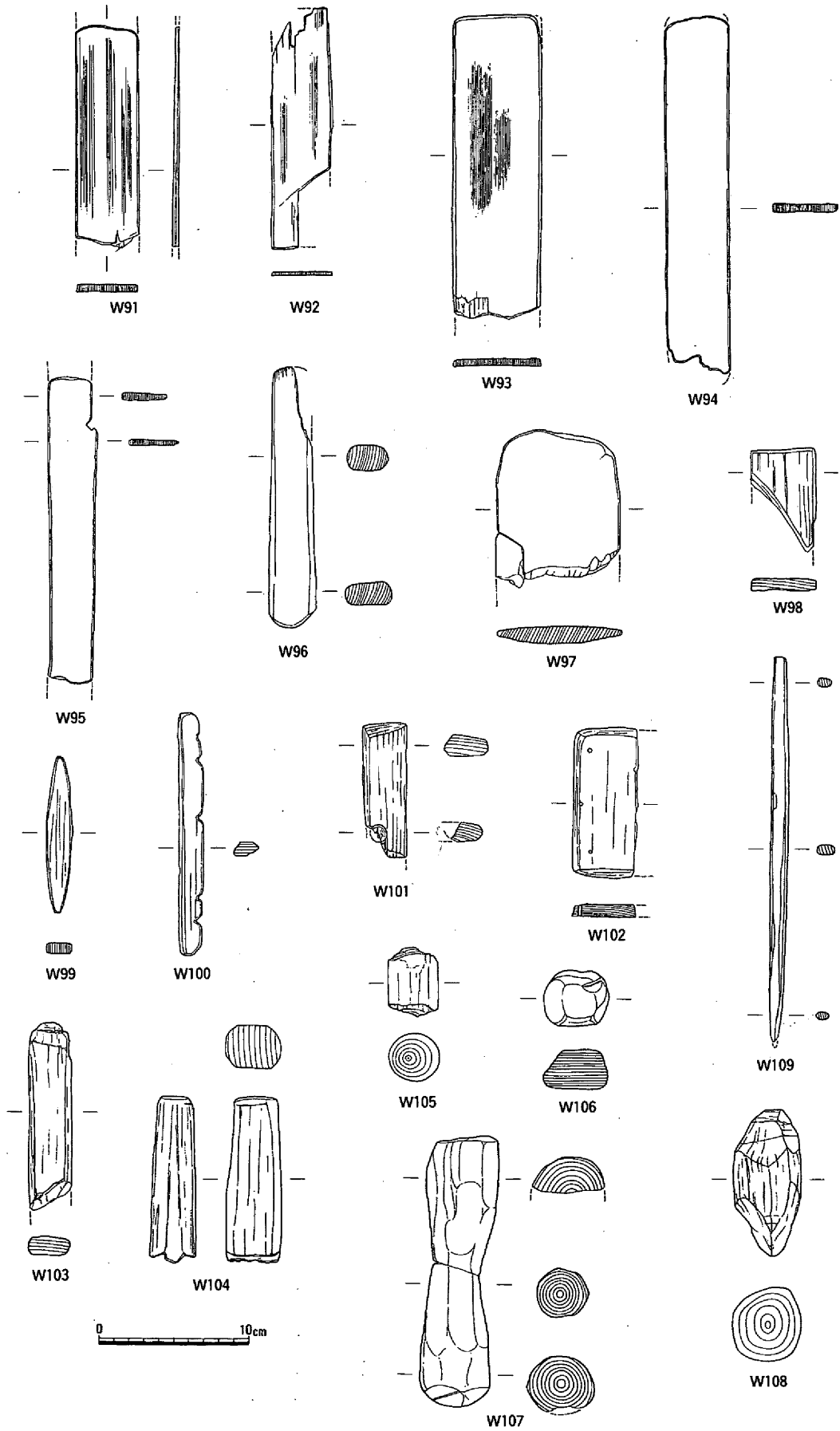
土師質椀1047~1049は、最下層と比較し口径14.5cmほどで、若干口径が小さい傾向にある。磨き調整の見られない個体1050も出土している。1051・1052は貝塚の西側堆積層で、貝塚の形成以降の埋土で河道埋土では上層部に該当する遺物である。小形化しており、口径11.4~11.6cmを測る。杯1063は中層で口径15.0cmである。1062・1064・1065は貝塚西の上層堆積で、小形化と体部の立ち上がりが強くなる。皿1058が貝塚西の上層堆積で、口縁部の内湾するものである。底部の調整は基本的には回転



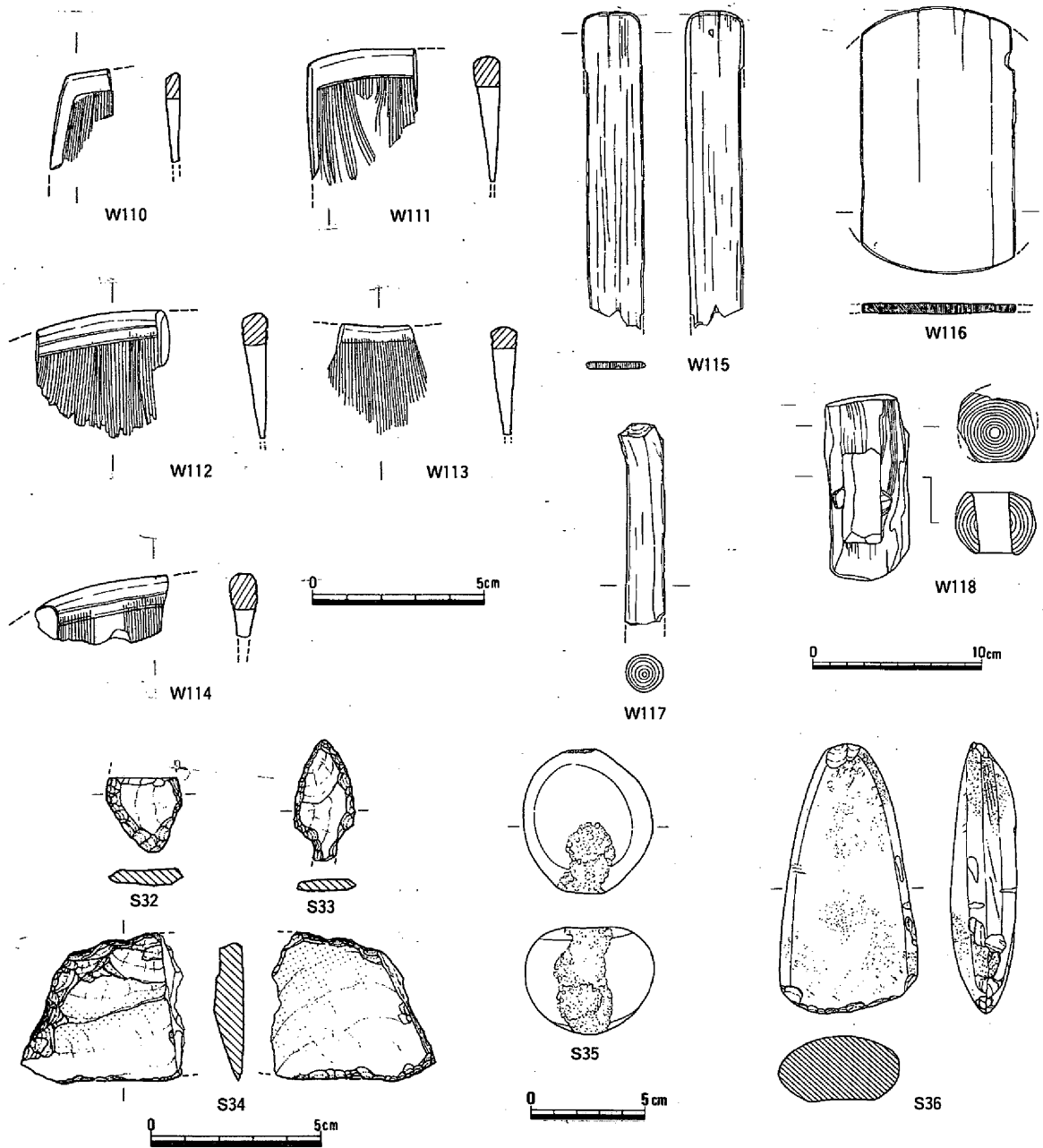
第200図 河道1(2区) 出土遺物<7>



第201図 河道1(2区)出土遺物<8>



第202図 河道1(2区) 出土遺物<9>



第203図 河道1(2区) 出土遺物<10>

ヘラキリ後に板目押圧である。竈1074は、中層付近出土で唯一全体が復元可能である。取手付鍋1070は河道上面出土でやや後出であろう。

須恵系遺物では、椀、壺、鉢の器種がある。底部糸切りの備前焼の椀1071~1077は、最下層の土器と比較して口径、器高ではほとんど変化がないが、1073では底部の削り出しがほとんどなくなり、口径に対し器高が若干低くなる。1078・1079は須恵質の壺、1081・1082は須恵質の鉢で前者は東播系と見られる。

1083~1085は瓦器で、1084は内外面とも細かいミガキを施し、口縁端部内面に沈線を施しており畿内産の楠葉型である。

1088~1113は輸入陶磁器である。出土層位は中層から下層が大半で貝塚形成以降では1083・1101・

1106程度である。いずれも中国製の白磁、青磁、青白磁である。

白磁は大半が無文であるが、1094～1097は内面に櫛目文、1092は外面に櫛目文を施している。皿1088～1090、椀1091～1104、壺1105が出土している。椀は口縁端部が直立もしくは若干内湾気味のものと大きく外反するもの及び玉縁をなすものとに大別される。削り出し高台は扁平なものと直線的に高いもの、中間的なもの等がある。なお、1096・1097は底部に墨書の文字「いぬ」と「X」印がある。

青磁は椀と皿が出土している。1107は内面に片彫りの花文、外面に櫛描目文を施す同安窯系の椀である。1109～1112は釉薬壺でこのうち1110は四耳壺である。1109の壺口縁部は灰オリーブ色の色調の褐釉である。1113は合子の蓋で頂部に花文を施している。輸入陶磁器は12世紀代から13世紀代に生産されたもので白磁が青磁に比較し出土量が秀でている。

その他、軒丸瓦1114が中層から出土している。1086・1087の備前焼播鉢は後出のもので河道埋没以降であろう。

河道1下層の下限の年代は、土師質椀の編年に基づけば12世紀末頃が考えられる。河道上層は貝塚1の形成以降の堆積層に相当し、14世紀代を中心とする時期が考えられる。河道1は、14世紀後半代、遅くとも15世紀代には河道の大半が埋没して機能が失われていたと考えられる。

木製品も各種多様に出土している。W86・87は陽物形、W88・89・116は曲物の底板、W90・97は鋤先か、W91～95・115は札、卒塔婆か、W107は編み具、W105・106は毬打の毬か、W109は箸状のもの、W110～114は横櫛、W118は木槌、その他に加工材等が出土している。

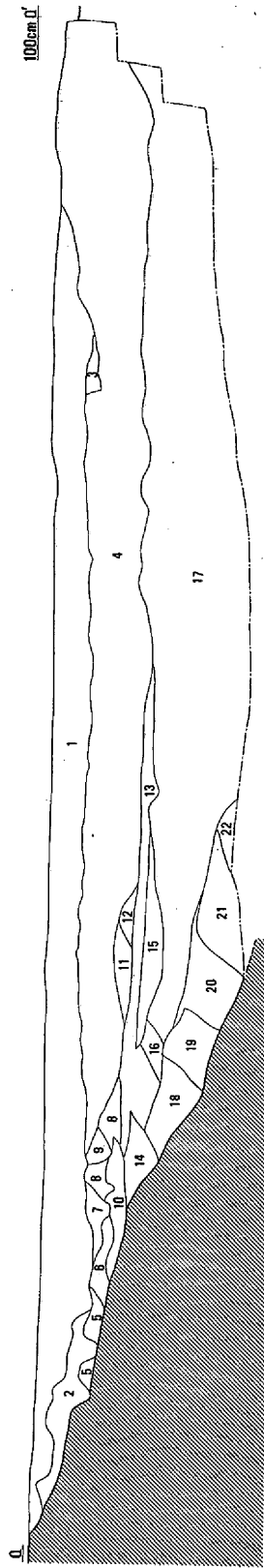
鉄器には釘と見られるM120・121・122・123、板状のものM126・127が出土している。M119は板状の銅製品。銅銭M116は延喜通宝（初鑄907年）で河道東端の肩口最下層から出土している。この他に土錘C45～57、石器S32～36が出土している。

さらに、獣骨、魚骨等、鉄滓、フイゴの羽口、各種の種子等も出土している。これらの遺物についての鑑定や同定については付載に報告文いただいている。 (山磨)

3区（第204～222図、図版34）

北北東方向に流れていた河道が、この部分で流れる方向を変えて南南西方向に流れて行く。検出した河道の岸は、左岸のみである。河道の北側には、微高地が存在するものの、調査範囲内にはその他の遺構は検出されなかった。河道も左岸の岸から、底部に向けての傾斜部の調査がほとんどである。そのため、河道の最深部の調査は、一部分に止まっている。その最深部と考えられる部分の標高は、おおよそ2mである。

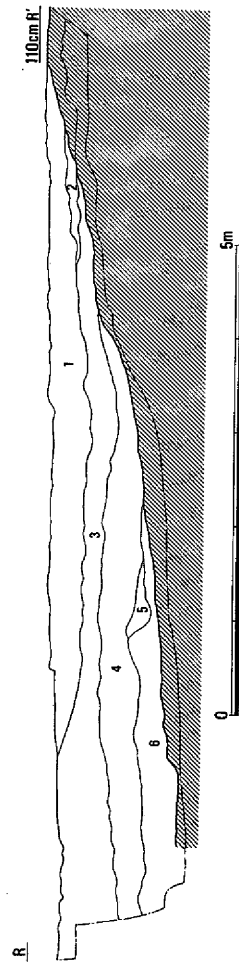
この調査範囲においても出土した遺物は、多く種類も様々である。椀、皿、鍋、竈、壺、甕、鉢、瓦、古銭、鉄製品、木製品等がある。1115～1133は、河道の下層、もしくは底面から出土した土師質椀である。1115は、底部裏面に墨書が見られる。1116は、内外面に僅かにヘラミガキが認められ、底部裏面に「十」の墨書が見られる。1117・1118は、「奉」と読める墨書が見られる。1119は、平仮名の「と」と読める墨書が見られる。1120も墨書が認められるが、解読できない。1121～1123は、内外面にやや雑ではあるがヘラミガキ調整が見られる。1124～1130は、内面に板状工具による調整の認められるものである。外面は、上半はヨコナデ、下半は指押さえの見られるものである。1134～1156は、河道の下層から出土した皿である。皿の底面には、回転ヘラ切りの見られるものと、板目の痕跡の見られるものがある。1160・1161は、竈である。竈は、正面から見ると、長方形であり、焚き口もその様に造られる。外面には輪積みの痕跡が、内面にはハケメが見られる。C58～69は、細長い土錘であ



1. 暗茶褐色粘質土
2. 淡黄褐色粘性砂質土
3. 明黄褐色微砂
4. 暗灰褐色粘質土
5. 淡青灰色粘土
6. 暗灰色粘質土
7. 暗茶灰褐色粘質土

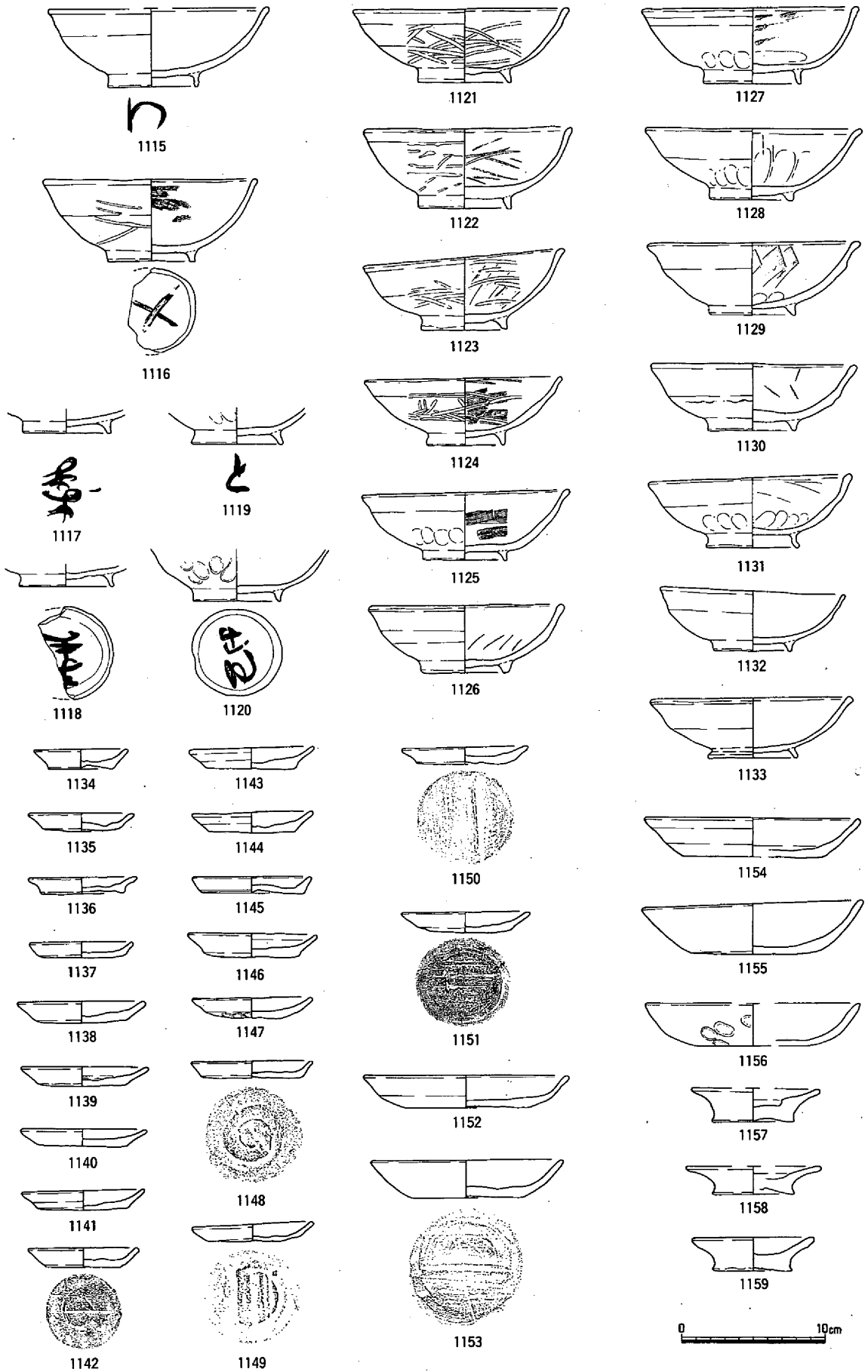
8. 淡黄色粘質土
9. 灰茶色粘質土
10. 青灰色粘土
11. 明茶褐色砂質土
12. 茶褐色砂質土
13. 灰色粘質土
14. 明黒灰色粘性砂質土

15. 暗灰色粘質土 (小石・流木・砂多く含む)
16. 青灰色粘質土
17. 灰色粘土
18. 暗灰色粘性砂質土
19. オリブ灰色砂質土
20. 青灰色粘性砂質土
21. 明オリブ灰色粘質土
22. 淡緑灰色粘土

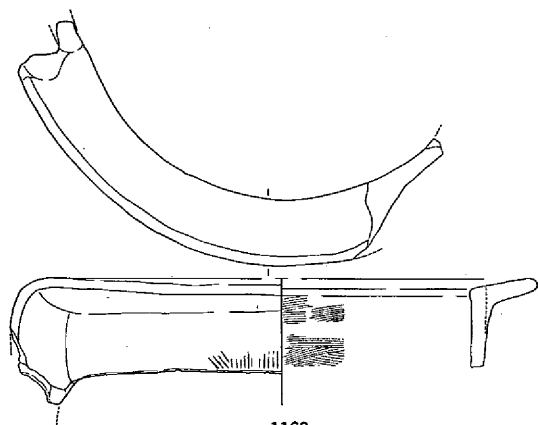


1. 暗褐色 (10YR 3/4) 粘質微砂
2. オリブ色 (2.5Y 4/3) 粘質微砂
3. 暗褐色 (10YR 3/3) 粘質土
4. 暗オリブ灰色 (2.5GY 3/1) 粘質微砂 (グライ化)
5. 暗オリブ灰色 (2.5GY 4/1) 微砂
6. 暗オリブ灰色 (2.5GY 3/1) 粘質微砂
7. 暗褐色 (10YR 3/3) 粘質微砂
8. オリブ褐色 (2.5Y 4/6) 砂
9. 暗オリブ灰色 (2.5GY 4/1) 砂

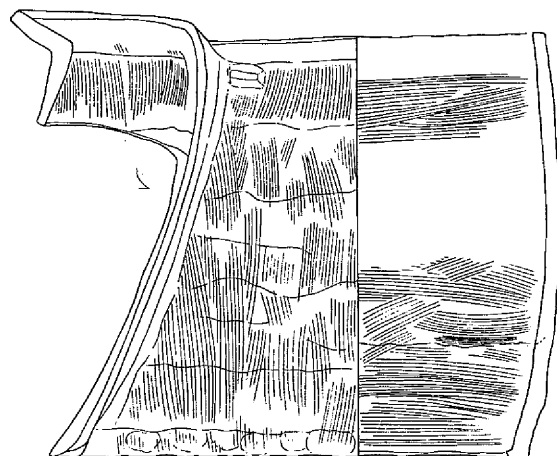
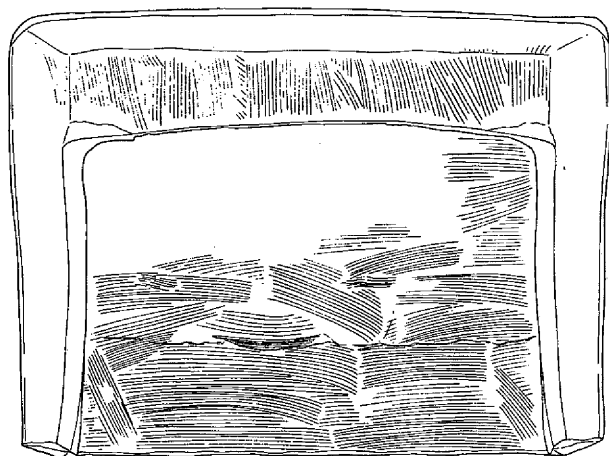
第204図 河道1断面<3> (1/80)



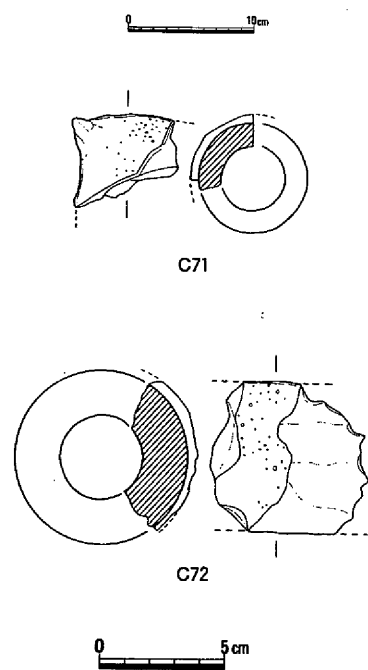
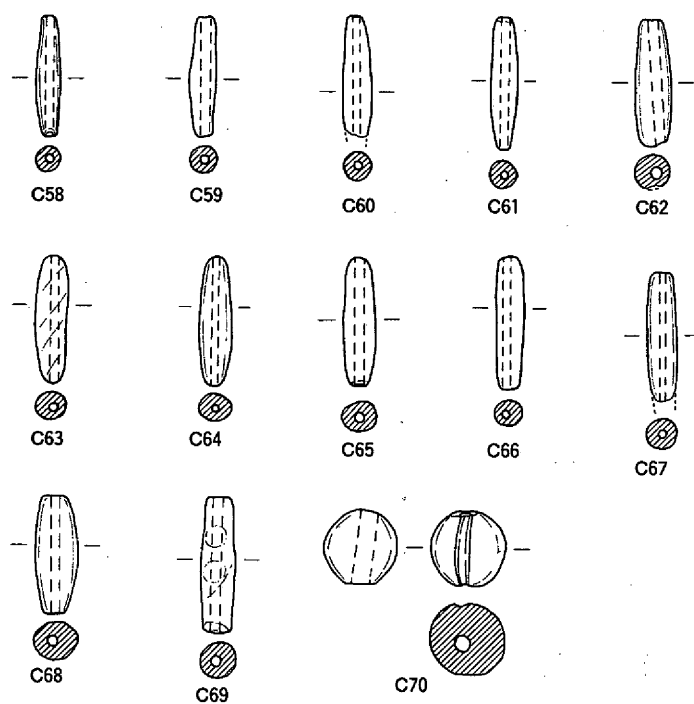
第205図 河道1(3区) 出土遺物<1>



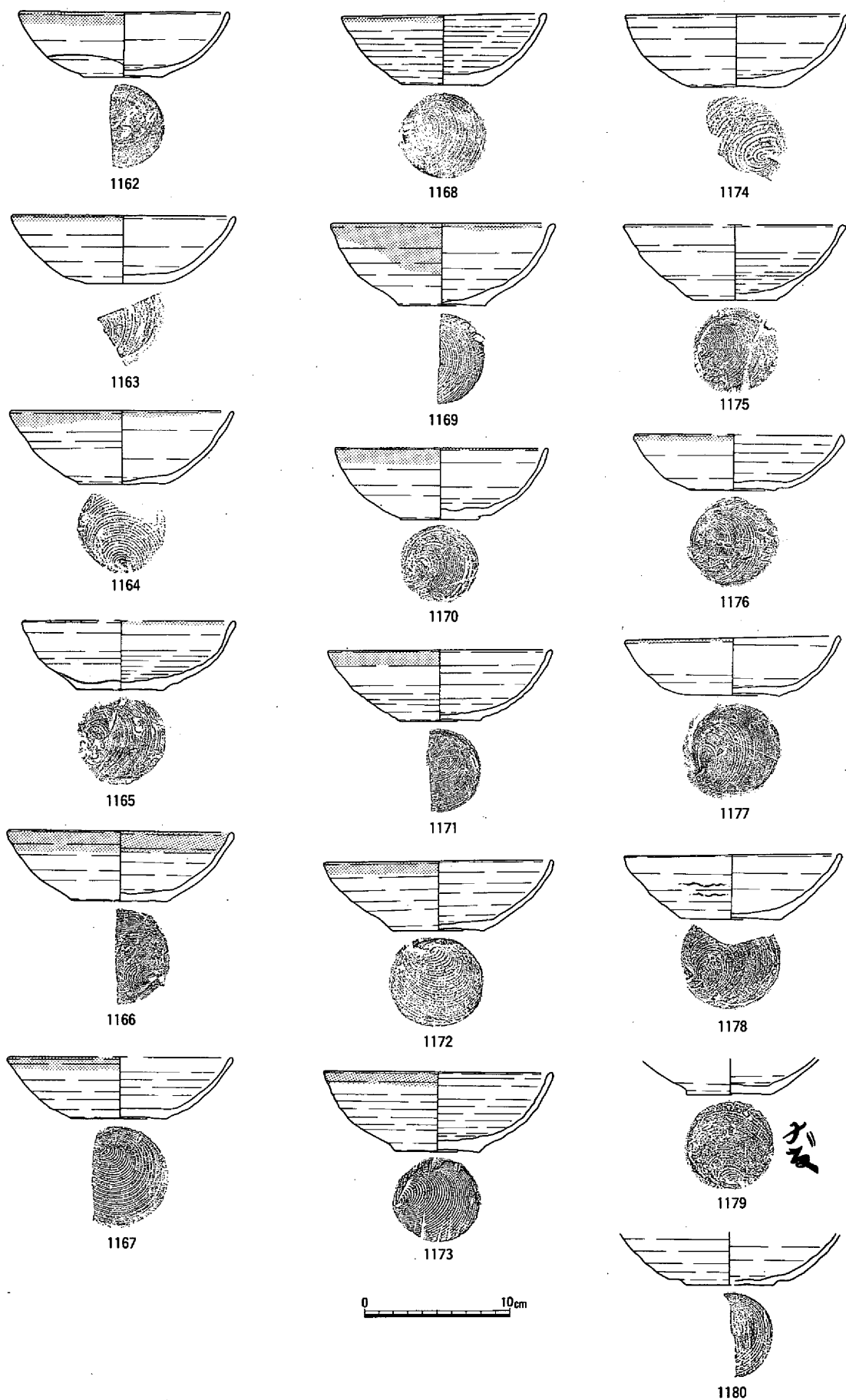
1160



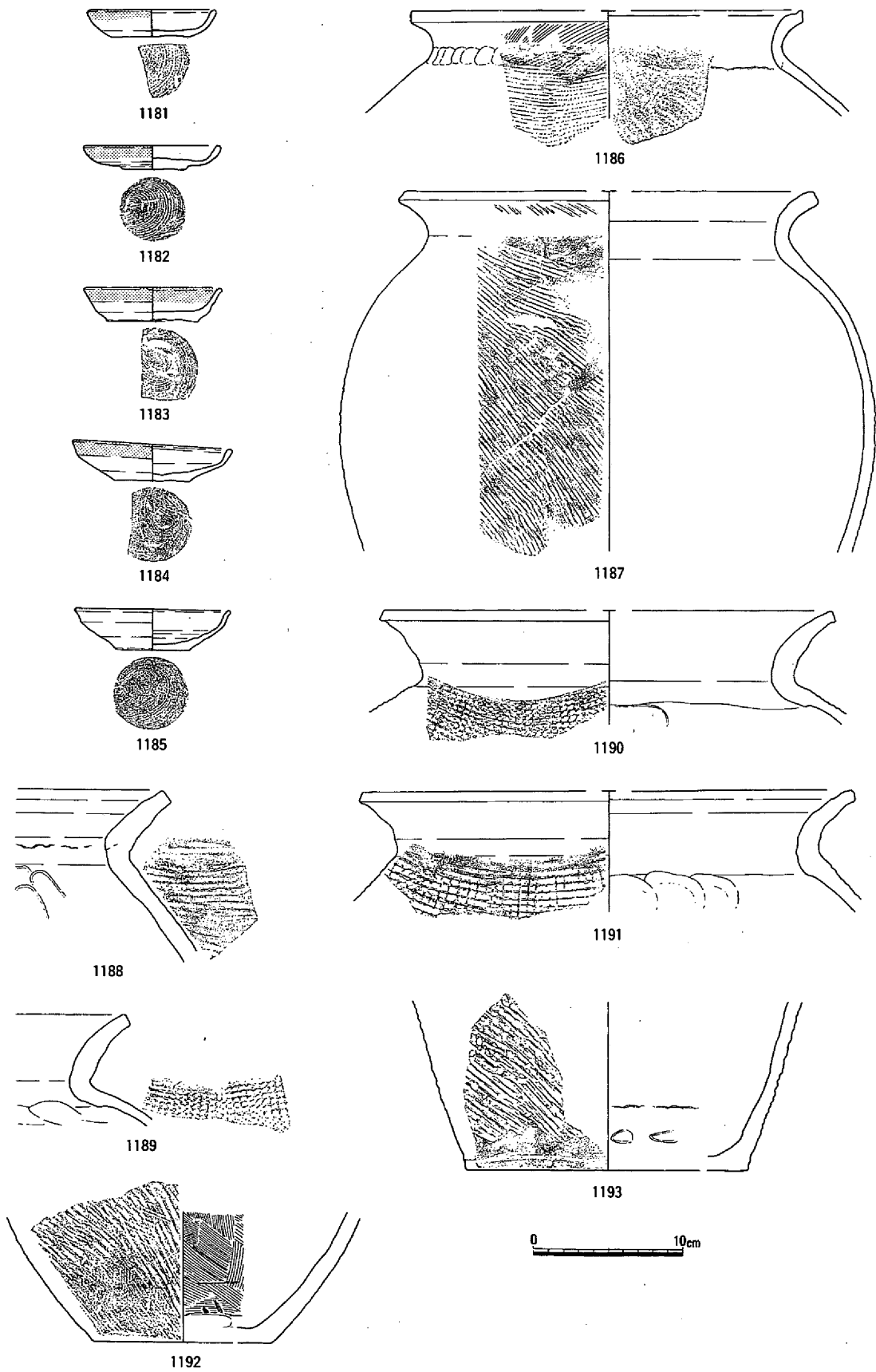
1161



第206図 河道1(3区) 出土遺物<2>

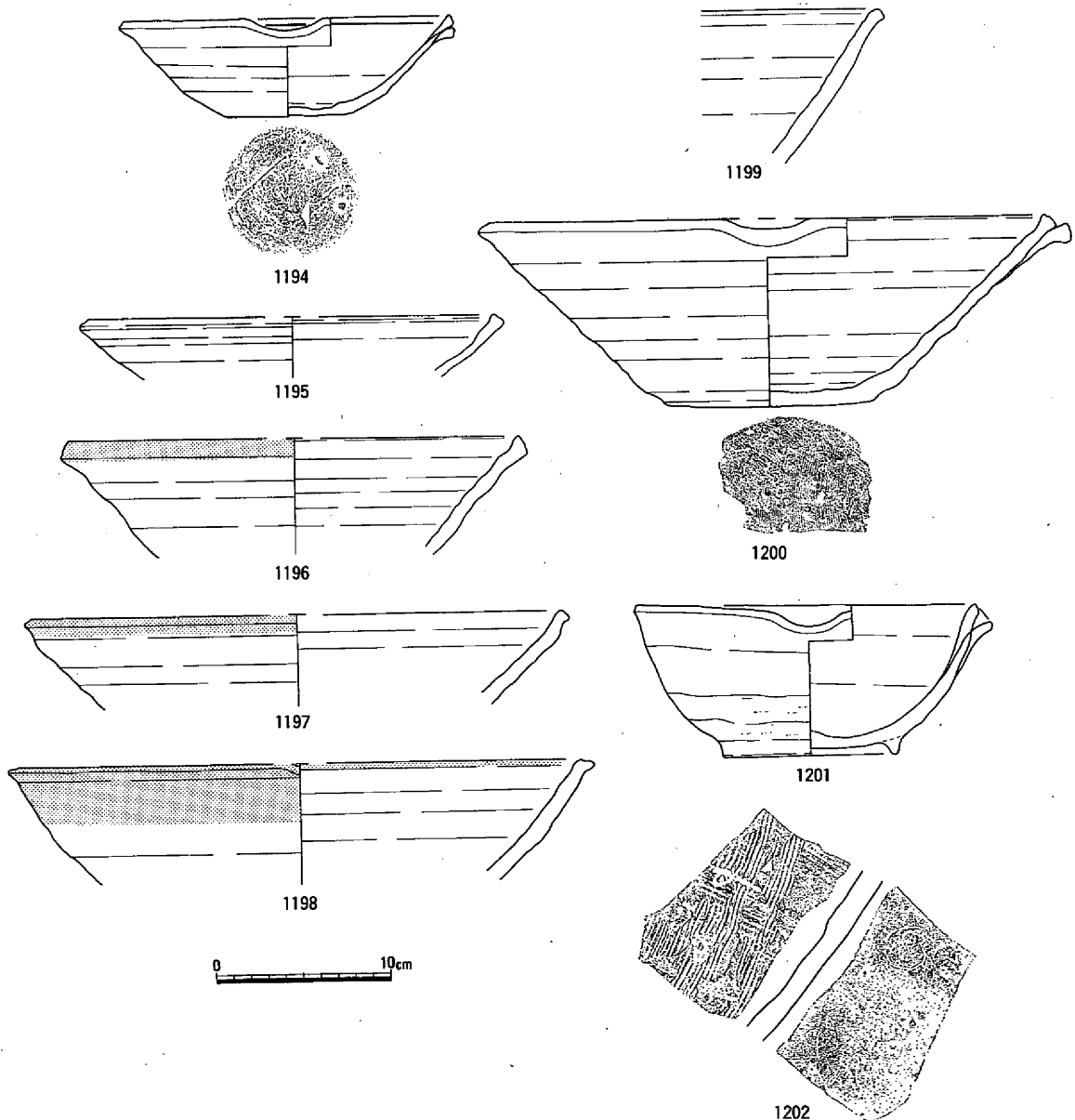


第207図 河道1(3区) 出土遺物<3>

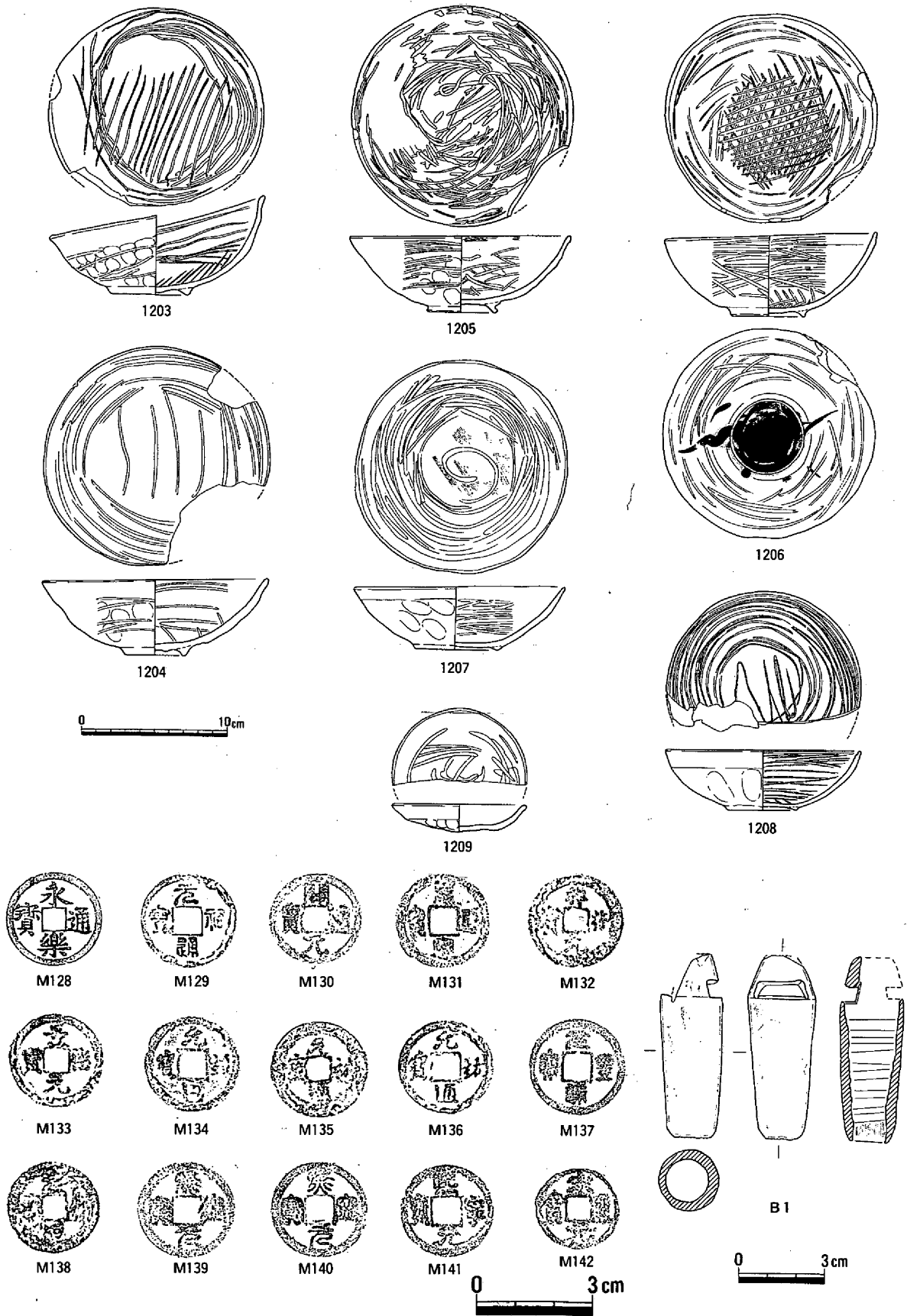


第208図 河道1(3区) 出土遺物<4>

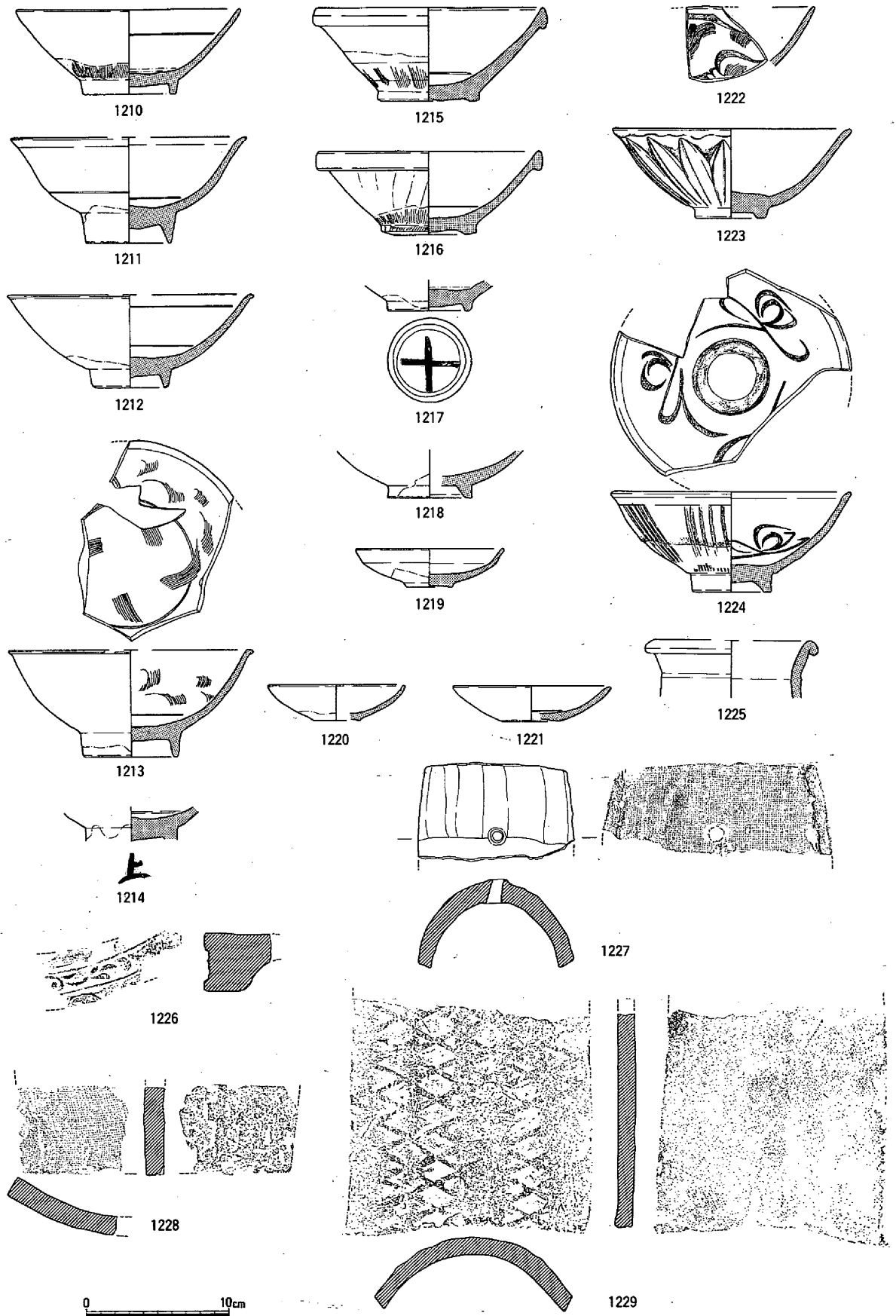
る。C70も土錘であるが、形状は球形を呈しており、外面には一本の溝がある。C71・72は、羽口である。1162～1180は、須恵質碗で、備前焼である。河道の下層および底部からの出土品である。底部裏面は、平坦で、糸切りが見られる。体部は、緩やかに湾曲しながら立ち上がり、端部は丸く収められる。1179には「かな」と読める墨書が見られる。1181～1185は、須恵質皿である。何れも底部は糸切りである。1186・1187・1189は、胴部外面に平行、もしくは格子のタタキの施される甕であり、亀山焼と考えられるものである。1188・1190～1193は、須恵質の甕である。胴部外面には、格子もしくは平行タタキが施される。1194は、須恵質鉢で、片口に造られる。1195～1197・1199・1200、は、須恵質鉢で東播系と考えられる。1201は、須恵質鉢で、片口と高台が付く。1203～1208は、瓦器碗である。1203・1204・1205は、内面ヘラミガキ、外面ヘラミガキと指押さえによる調整が見られる。1206は、内外面共に丁寧なヘラミガキ調整が成される。底部外面には、墨が付着する。1207は、内面ヘラ



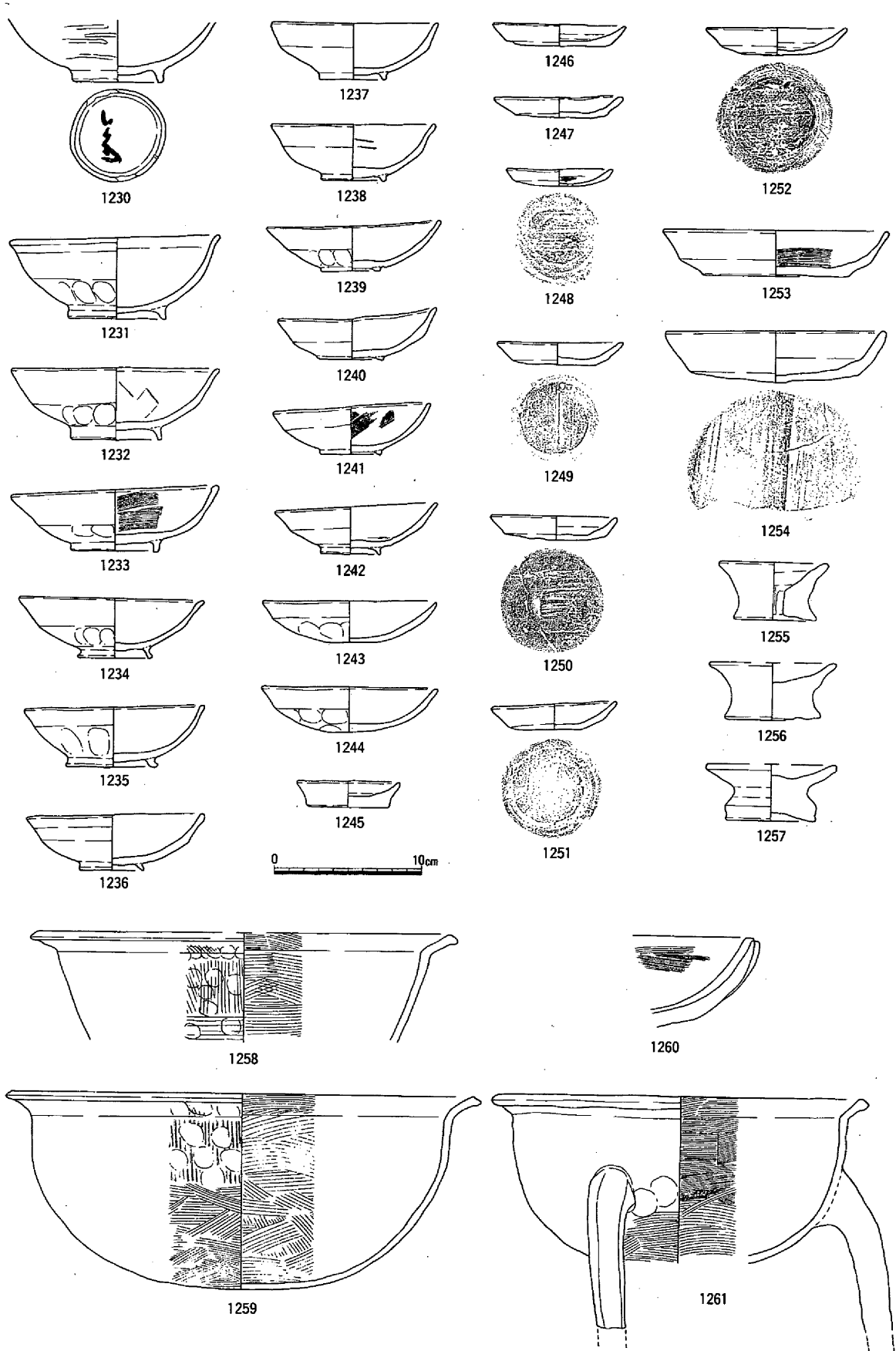
第209図 河道1(3区) 出土遺物<5>



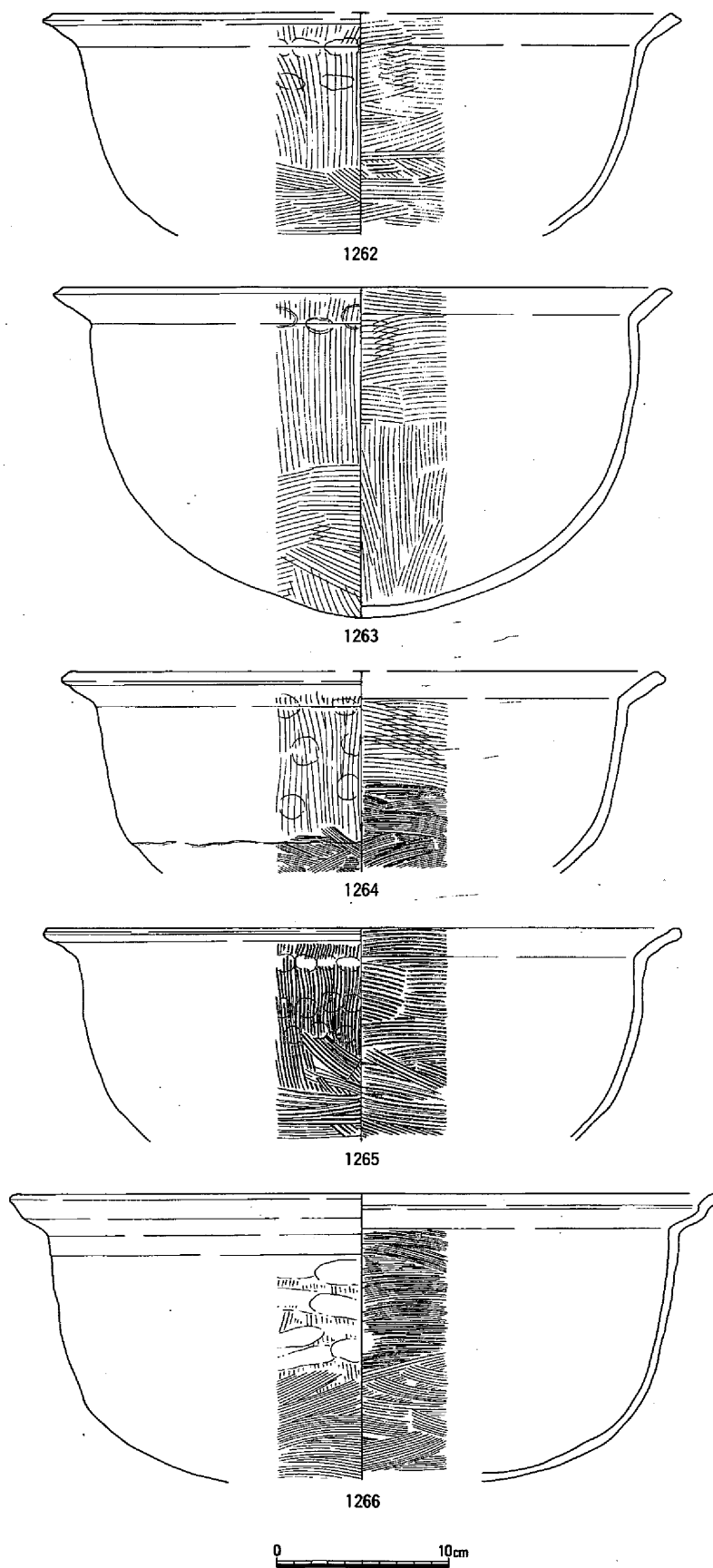
第210図 河道1(3区) 出土遺物<6>



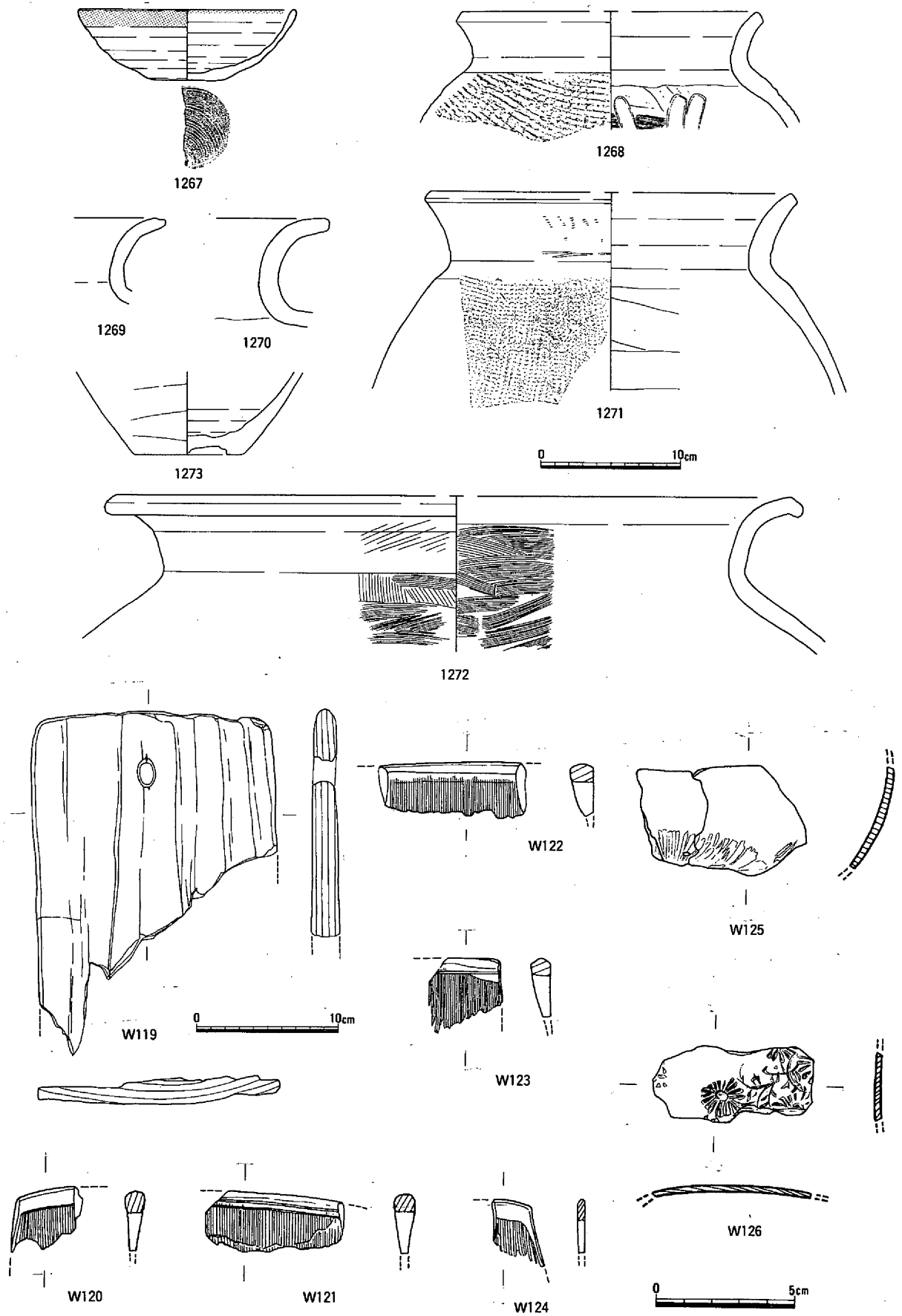
第211図 河道1(3区) 出土遺物<7>



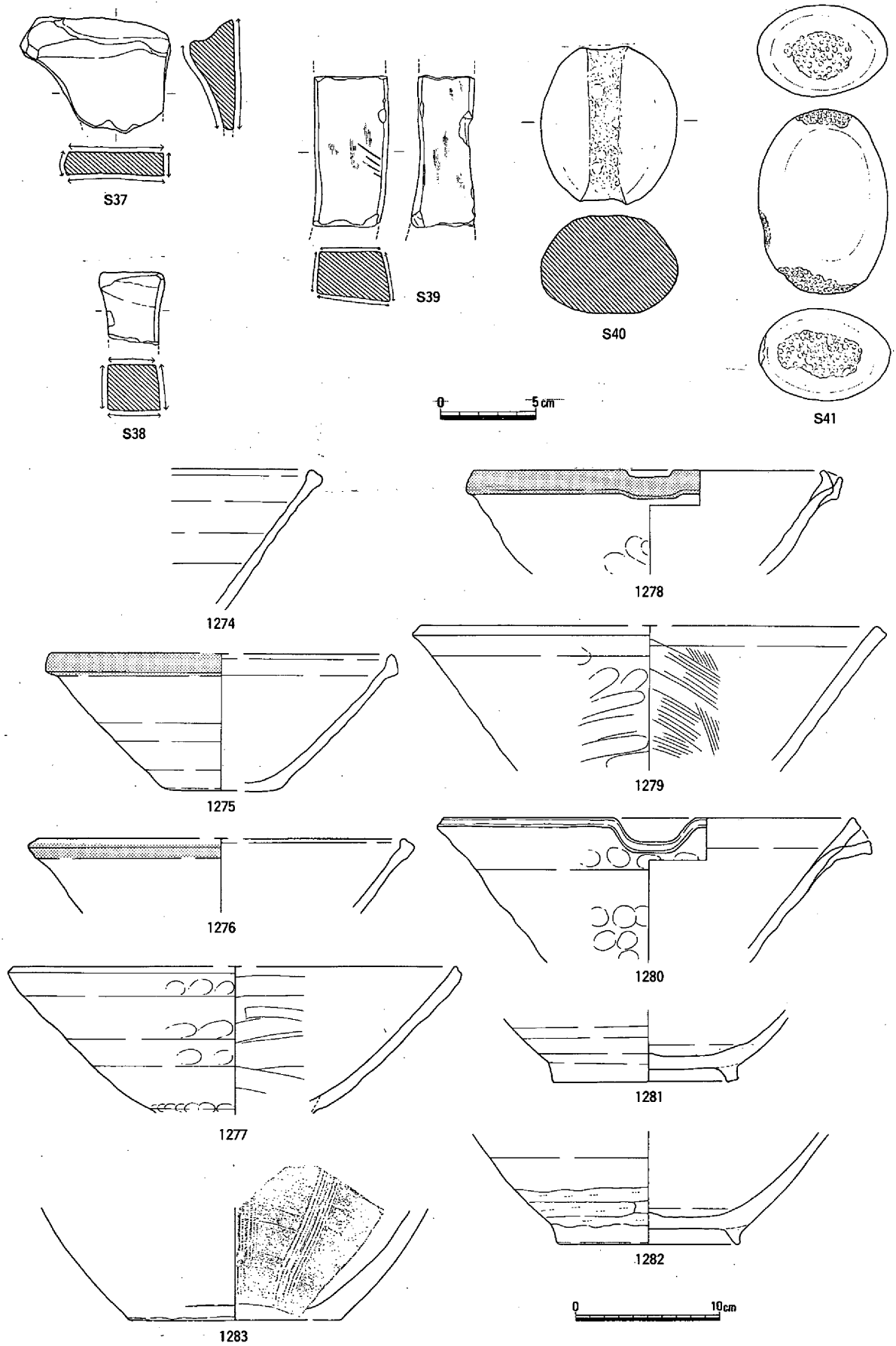
第212図 河道1(3区) 出土遺物<8>



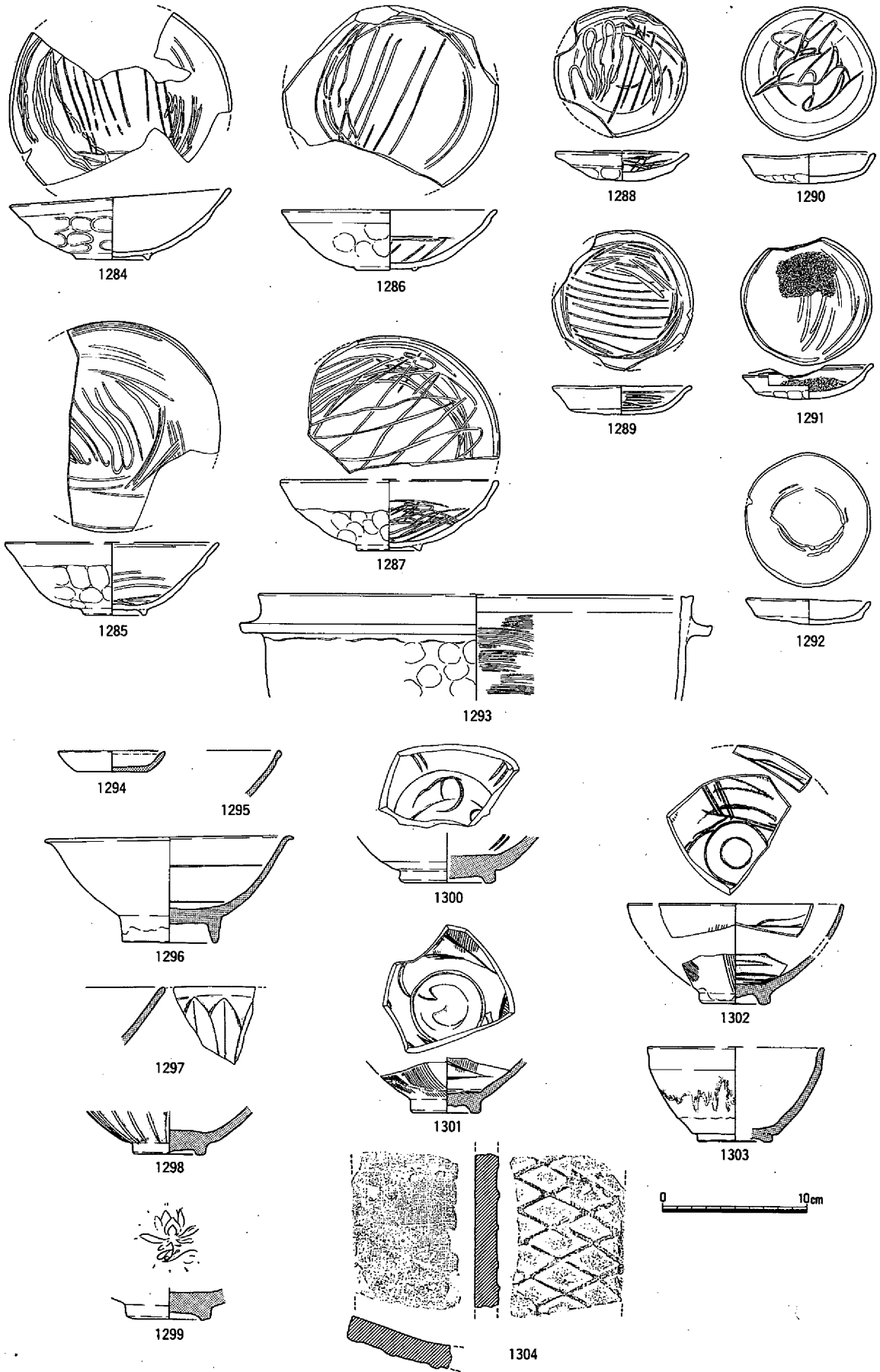
第213図 河道1(3区) 出土遺物〈9〉



第214図 河道1(3区) 出土遺物<10>

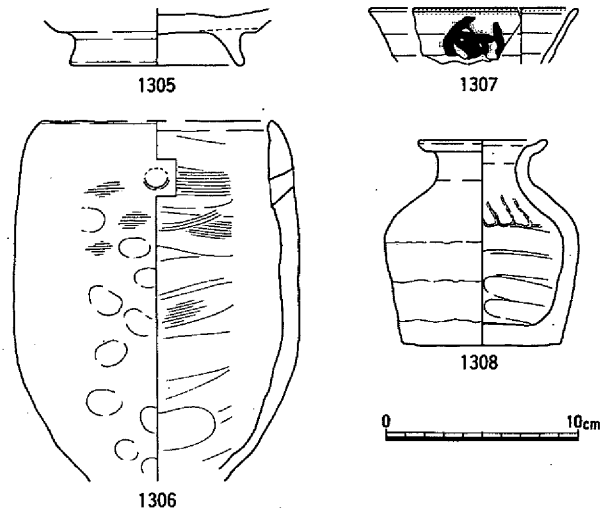


第215図 河道1(3区) 出土遺物<11>

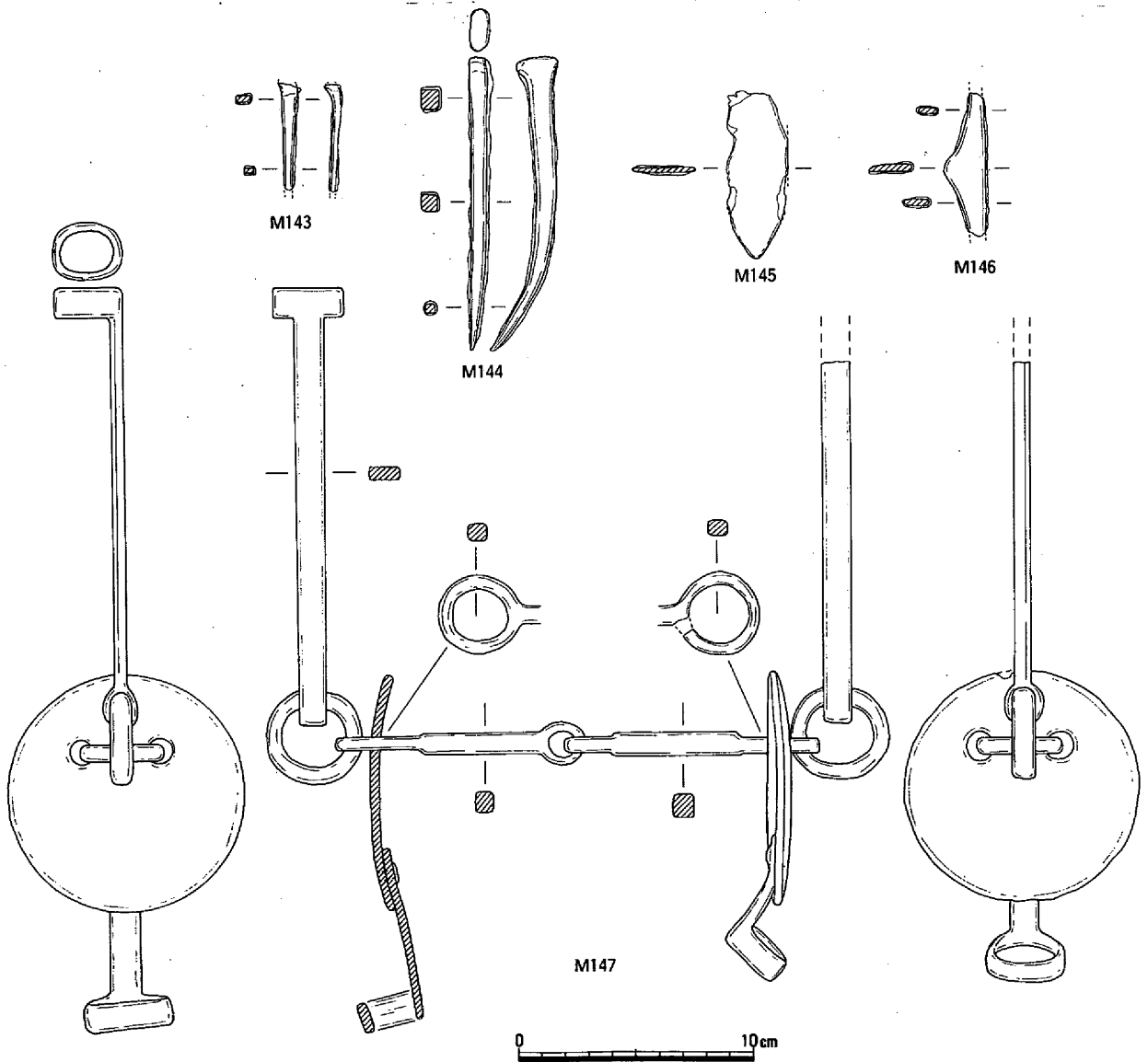


第216図 河道1(3区)出土遺物<12>

ミガキ、外面指押さえ調整が施される。1209は、瓦器小皿である。M128～M142は、河道の上面、もしくは上層から出土した銅銭である。「永楽通寶」「天福通寶」「開元通寶」「皇宋通寶」「祥符元寶」「景祐元寶」「元符通寶」「元祐通寶」「元豐通寶」「熙寧元寶」「宋通元寶」等である。B 1は、弓弭と考えられるもので、材質は鹿骨と推定される。1210～1221は、白磁である。1210は、口縁端部が丸く収められるものである。1211は、口縁端部が細く外に引き出されるもので、上面に少し平面を持ち、高台は高く削り出される。1215・



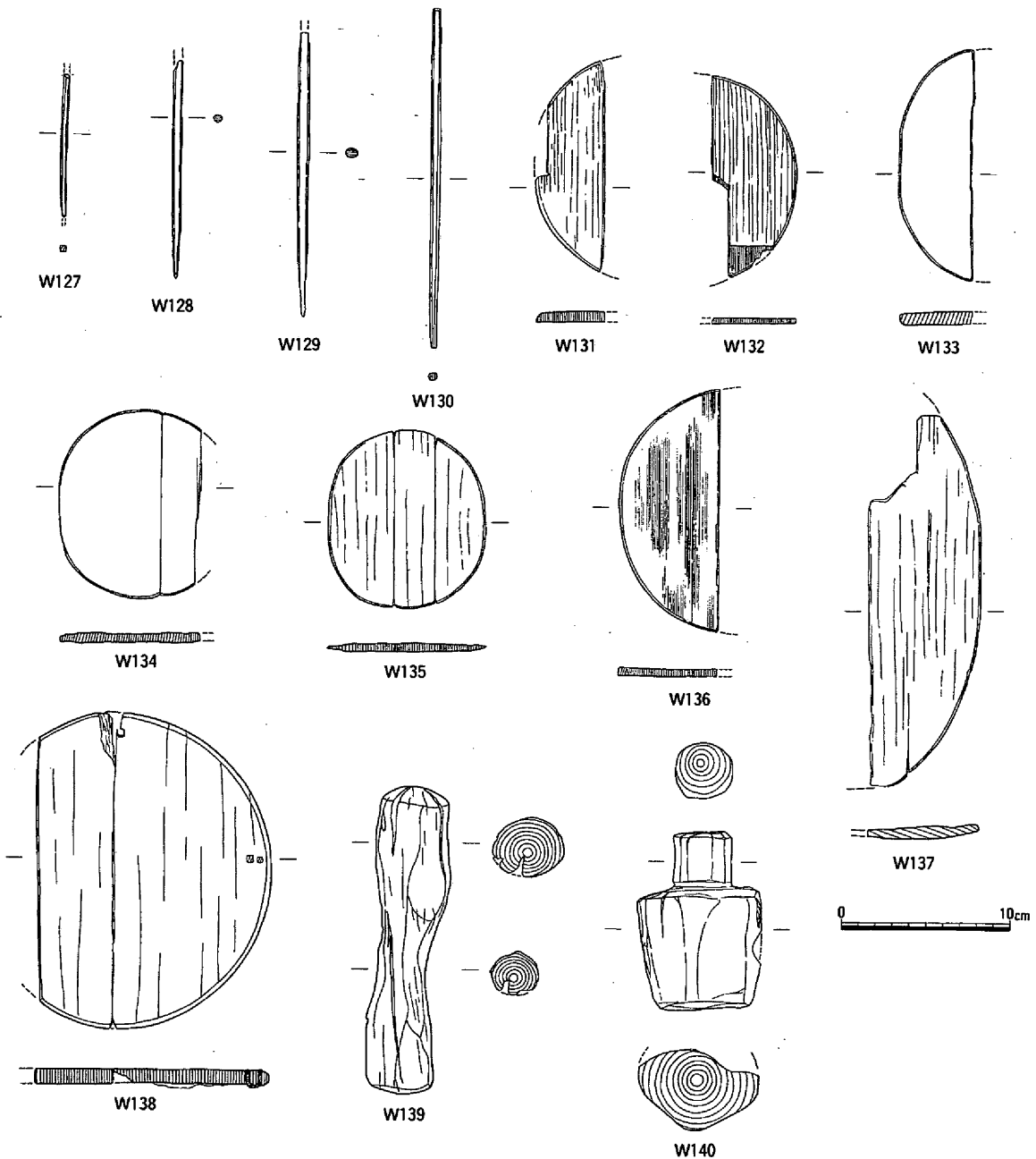
第217図 河道1(3区) 出土遺物<13>



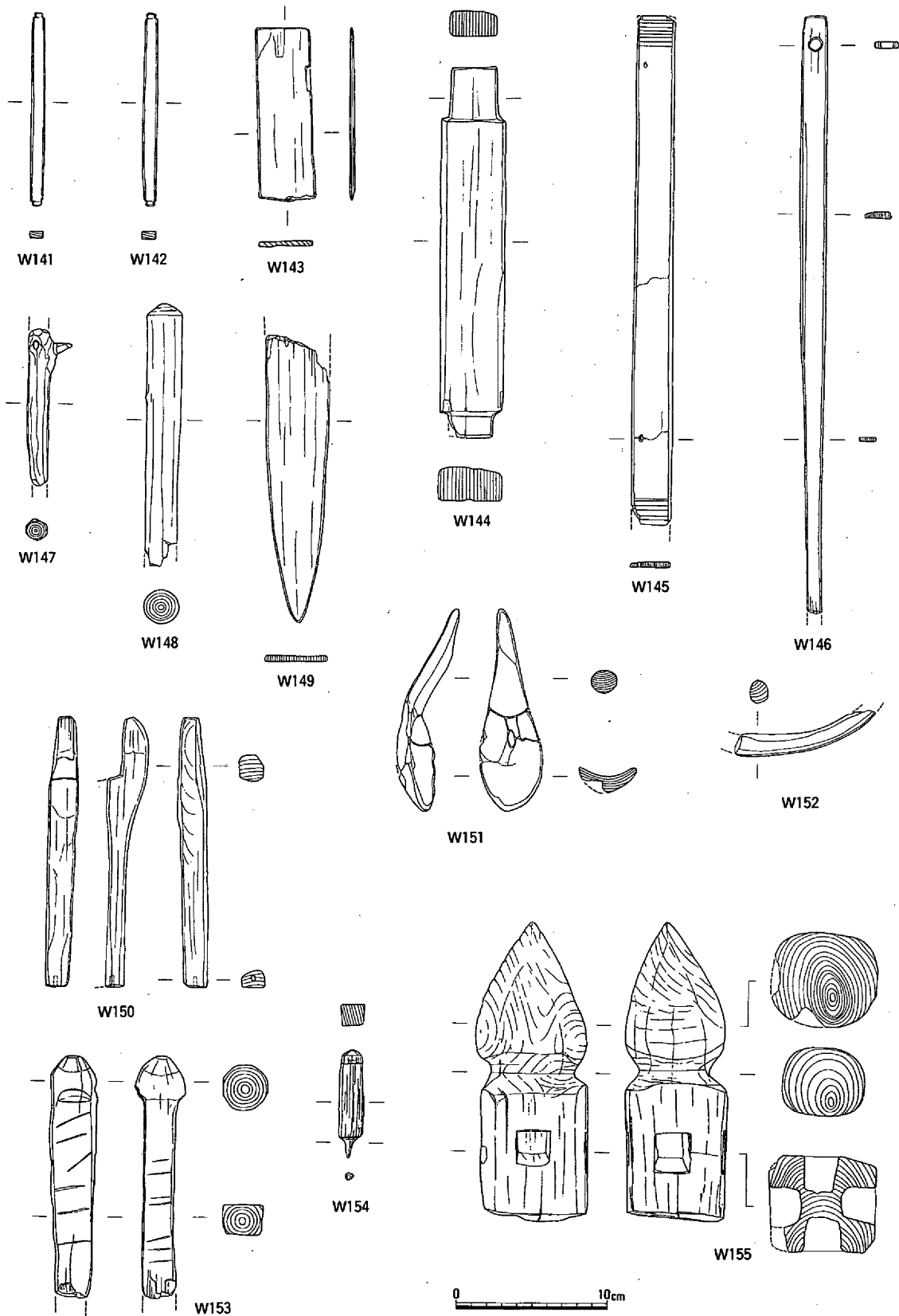
第218図 河道1(3区) 出土遺物<14>

第3章 発掘調査の概要

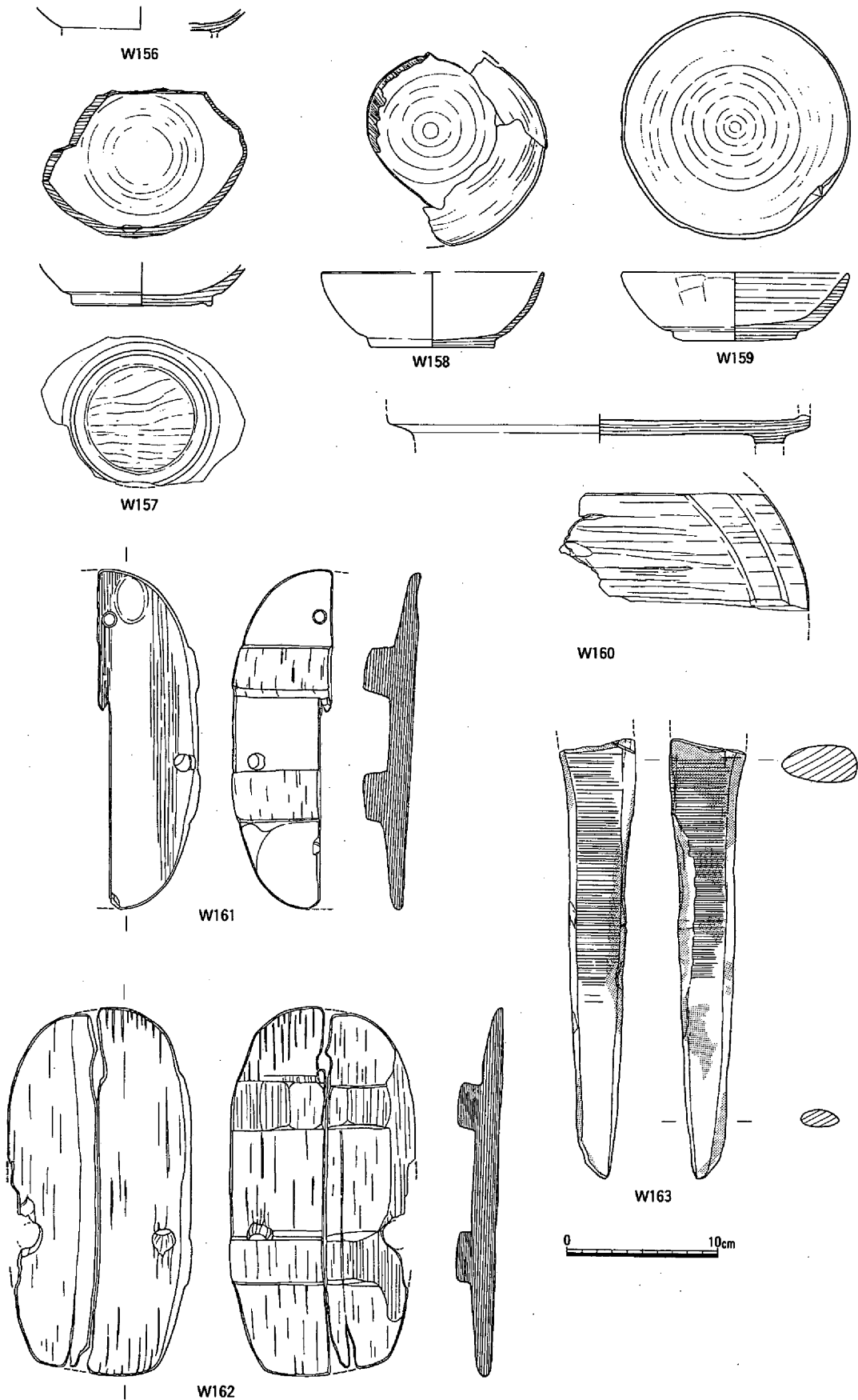
1216は、口縁部が玉縁に造られるのである。1222～1224は、青磁である。1223は、外面に鎬蓮弁の見られるもの、1224は、クシガキの文様が見られるものである。1226は、軒平瓦である。1227は、丸瓦で釘穴が見られる。1229は、丸瓦で、外面に格子のタタキが見られる。1230～1244は、河道の上層から出土した土師質碗である。1240～1242は、器形が小形化し高台は痕跡的に付けられるものである。1243・1244は、形成は前記と同じであるが、高台が付かない。1261～1266は、土鍋である。内面外面共にハケメ調整が成される。1261は、三本の足が付く。1267は、須恵質碗で、備前焼と考えられるものである。1268は、亀山焼きの壺である。1274～1276・1278は、須恵質鉢で東播系のものである。1284～1287は、瓦器碗である。内面は、ヘラミガキ、外面に指押さえが見られる。1303は、天目茶碗である。木製品は、櫛、漆器、箸、匙、宝珠形、下駄などがある。鉄製品として、轡が一式出土している。時期としては、中世の初頭に始まり、終末には機能していないと考えられる。(井上)



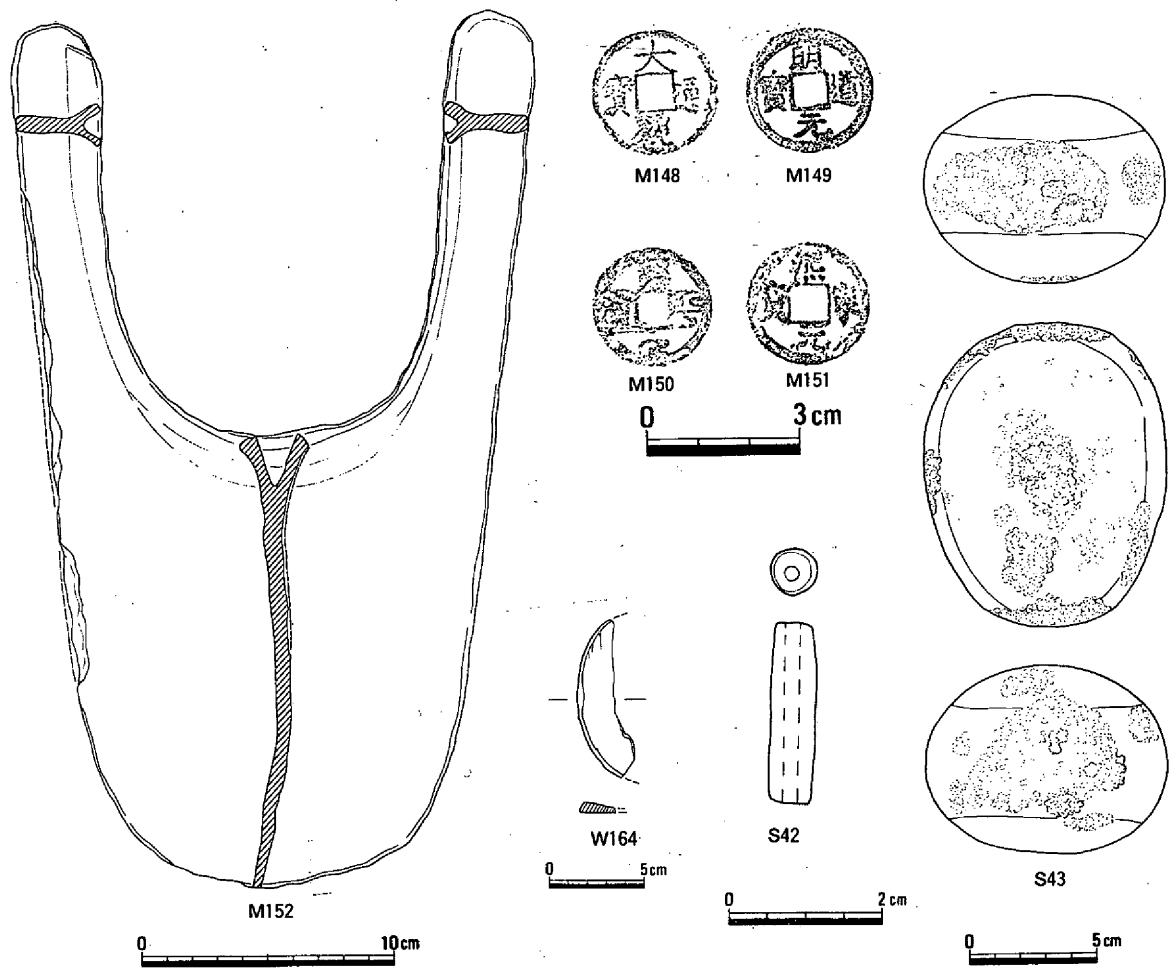
第219図 河道1(3区)出土遺物<15>



第220図 河道1(3区) 出土遺物<16>



第221図 河道1(3区) 出土遺物<17>



第222図 河道1(4区) 出土遺物

(6) 橋梁

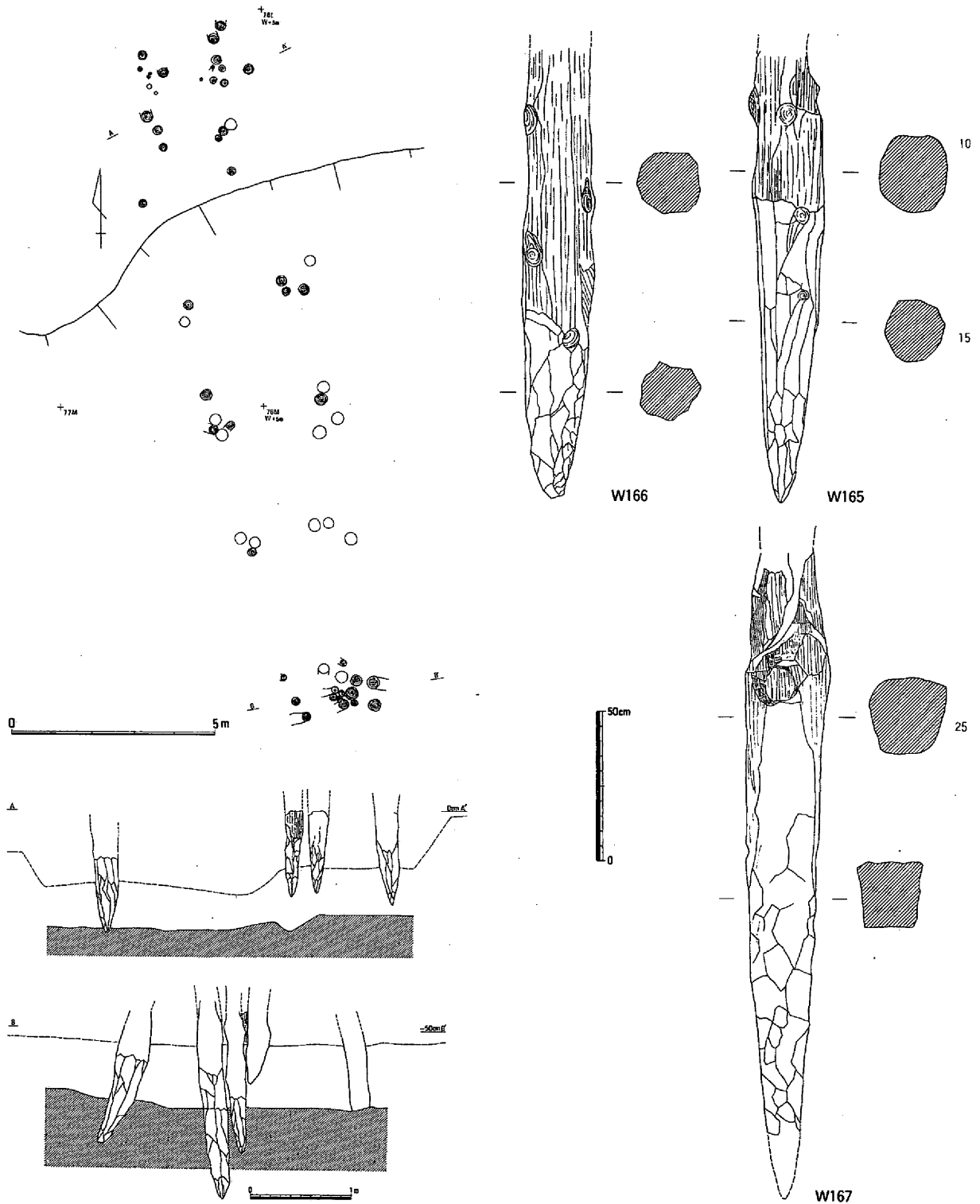
橋梁1 (第223図、図版25)

1区に検出した。河道に直行するため、南北方向に橋脚の杭列を検出した。河道のこの部分は、調査区の北端は、岸に近いが、南端は河道の最も深い部分に相当する場所である。杭は、河道の上層を掘り下げ中から検出していた。3本ないし4本を一つの単位とし点々と列を成す状況である。単位ごとの間隔は、3m前後の間隔を置くものである。掘り下げる過程に於いて、橋脚1本1本についての堀方は、当然のこととして見られなかった。また、石敷き等橋脚を保護、補強するものも見られなかった。橋脚の柱は、その下端部を先細りに削り太い杭に仕上げている。このことは、橋脚は、河道の中に打ち込み、川底の土層に支持されることにより橋脚としての強度を維持したものと考えられる。橋脚の位置には、数本の柱が見られるが、それを単位として脚としたものか、1本を脚としたものかについては、調査においては確認できなかった。

断面図であるが、断面図の実線が河道の底部であり、斜線の入った部分はその基盤である。この図に見られるように、橋脚の杭は河道の最も古い河底に届いていないものがある。届いていても深くても1m程度打ち抜くものである。これでは、橋脚を維持することは不可能であることを考えれば、河道

第3章 発掘調査の概要

の初期の段階に造られた可能性はないと考える。また、溝10の断面図に見られる木質は、この橋脚であり溝が新しく、中世末には橋として機能していなかった。橋脚が造られた時期として最も可能性が高いのは、貝塚が形成された頃と考えられる。そのころの川底の標高は0 m前後である。断面図Bラインからすれば、杭も2 m前後打ち込まれることになり、橋脚としての強度も一応保てるのではと推測される。そのことから、橋脚は、14世紀を中心とする時期に機能していたと考えられる。(井上)



第223図 橋梁1 平面 (1/150)、断面 (1/60)、同 出土橋脚 (1/20)

4 小結

米田遺跡岩間調査区の調査の経緯と上調査区の調査概要を前節にて述べた。本項ではこれらの要約と今後の問題点、課題と若干の考察を含めて小結としておきたい。

契機 百間川米田付近は、1976年度に実施された第1次確認調査においては遺跡は未確認であった。その後、1978～1981年度に実施された右岸用水路区や当麻丘陵部での調査で遺構が検出され、旧当麻遺跡の範囲が徐々に拡大していった。さらに、1983～1985年度に調査を実施した低水路にも微高地の確認がなされて遺跡範囲の大幅な拡大を受けて遺跡名称の変更を行ってきた。(百間川米田遺跡3)

上流部の今回調査を行った岩間調査区付近は、低水路工事により既に幅60m程度が掘削され、右岸側20m程の低水路未掘削区が神下橋から下流米田橋付近かけて残存している状況であった。この間の未掘削区部分においても遺跡の有無の再確認の必要が課題となってきた。このような状況のなかで、1990年度の広野樋門排水路の調査並びに低水路の確認調査となった次第である。

遺跡名称(呼称) 1989年度刊行の百間川米田遺跡3において遺跡名称の変更に伴い、同じく大字米田に所在する旧岩間遺跡も米田遺跡岩間調査区と呼称変更することが凡例に記載されている。

ところが、1990年度の確認調査時には岩間遺跡と呼称して調査が実施されており、やや齟齬をきたしていた。このため、今回の報告書において改めて遺跡名称を米田遺跡とし、調査区を岩間調査区と呼称することを再確認しておきたい。

ただ今回の岩間調査区は上・下・広野樋門の各調査区を合わせると総延長660mに達する。また小字名も大字米田の池ノ本、岩間、大字今谷の五の坪さらに大字神下の荒神田一部等にまたがり、調査区を厳密に大字、小字名で区分すると遺構が細分され不具合を生じる状況であった。

したがって、当該調査区は既調査遺跡名である岩間遺跡の呼称を生かして調査区名として使用して、なおかつ広野樋門調査区で上区と下区に大きく2分した調査区の設定を行っている。

検出遺構 岩間上調査区は、総延長450m、幅24m、約10000㎡強の調査の内約1/2が古代末～中世の河道1が占めている。建物等の遺構は未検出であるが河道内から貝塚が複数検出されたことや多量の出土土器、鉄滓などから河道縁辺部にはある程度まとまった村落が想定される。

検出遺構の大半を占める河道1は、最大幅約30m、最大深さ2.5mを測りかなり大きな河道である。この河道1は、一端南側の調査区外に出て東進し、岩間の丘陵部裾から北側に屈曲北上し岩間下調査区の橋脚遺構の存在する河道へ繋がるものと考えられる。河道は出土遺物等から中世後半期には完全に埋没しているようである。ただ埋没過程での堆積は一様ではないようで、埋土上層では、流量の減少と河道の縮小によりかなりの蛇行を生じていたようである。特に、2区内の貝塚1付近では、河道1の埋没がかなり進んだ時点で河道流路が南北方向に向いたようである。この流れを防ぐためにL字状に石組み護岸が設けられたものと考えられる。さらに埋没が進行し護岸の機能が失われた時点で貝塚1の形成が開始された状況である。

河道内には護岸施設以外に橋梁、杭列、井戸等が設けられている。1区検出の橋梁遺構は南北両岸がわづかに調査区外で未検出であるが、幅30m近い河幅一杯にかけられていたと推察され、橋梁の架設遺構としてはかなりの規模を有している想定される。橋梁の位置は交通の要でもあり道路の復元や集落の立地、構造等多方面の検討が可能となろう。

河道内に3カ所に形成されていた貝塚は、いずれも河道左岸(北側)からの廃棄が行われており、

第3章 発掘調査の概要

北側のあまり遠くない場所にある程度の集落が形成されていたことは確実であろう。いずれの貝塚も河道1が半ば以降埋没した段階で形成されたもので、ハイガイ、ヤマトシジミを主体とする貝で形成されている。特に貝塚1は全長16.0m、最大厚さ70cmもの貝層の堆積が認められ、かなり長期にわたる大量の貝が投棄された様子が窺われた。

この他、河道1埋没後の上面には河道位置を踏襲する様に、中世以降の東西方向に数条の溝を検出している。最終的にはこの河道1上面が近世以降近現代までの用水路として受け継がれている。

調査区東半部は、明瞭な遺構が希薄な地区で、河道が機能していた同時期の断定できる遺構は確認されなかった。溝状の不定形な落ち込みが調査区全体に認められるが、いずれも自然の流路や微地形の凹凸、水田の耕作痕跡等と考えられる落ち込みであった。4・5区付近は水田域等集落周辺部であった可能性が強い。

出土遺物 岩間上調査区のみで貝殻を除いてコンテナ300箱以上にのぼる膨大な量である。このうち大半が古代末～中世の河道1内からの出土である。古代末から中世前半期のありとあらゆる出土遺物が河道1内に凝縮したようである。このうち、時期の変化が把握しやすい土師質碗を未掲載の土器を含めて法量の比較を行って見ると、河道1内の下層では口径13.0～16.1cm、器高4.1～6.3cm、このうち内外面ヘラミガキ調整の器種では、口径13.8～16.0cm、器高4.8～6.1cmである。12世紀初頭前後から下限が当麻井戸3、助三畑井戸4と同じ範疇に入る12世紀末の時期が考えられる。

上層では口径10.5～12.7cm、器高2.9～4.4cmと調整の省略と法量の縮小傾向が顕著で、無高台の碗も出現している。山本編年Ⅲ-3・Ⅳの範疇で13世紀後半代が中心で14世紀代が考えられる。貝塚もほぼこの範疇であるが、口径が13cm台に入る器種が含まれるのと出土量のピークが若干異なる。

次に輸入陶磁器については、上調査区の河道内から総数1144点（復元後、小片まで）出土している。その内訳は下層（665点）では白磁が90%、（碗が大半で、皿・壺がある、碗はⅡ・Ⅲ・Ⅳ・Ⅴ-1～3・Ⅴ-4・Ⅵ・Ⅶ・Ⅷ類がある。）青磁6%（主に同安窯系の碗、皿に龍泉窯系の碗が少し）、その他4%である。上層（貝塚含む）（479点）では白磁61%（Ⅸ類追加）、青磁33%（同安窯系、龍泉窯系Ⅰ・Ⅲ類有り）、その他5%の比率である。ただ貝塚3基のみ（204点）では、白磁40%、青磁51%、その他9%と青磁の比率が高くなる。

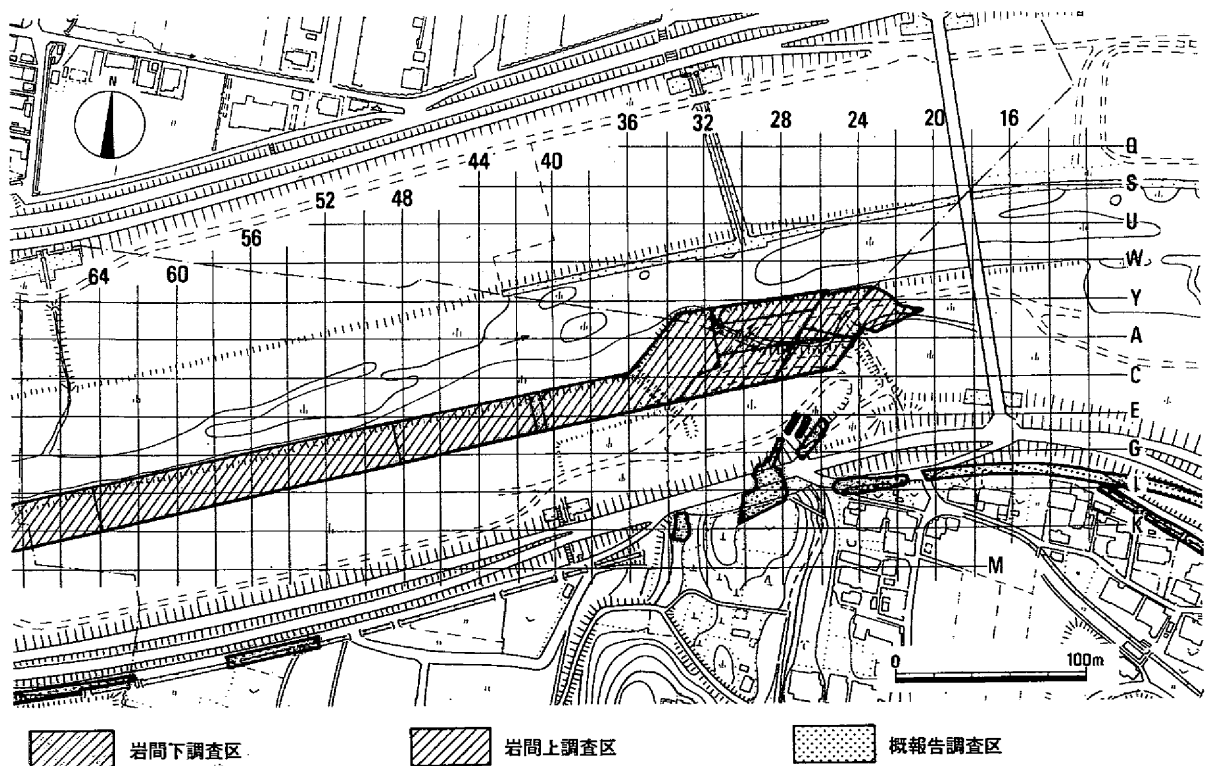
最後に河道内の出土土器類の器種構成を出土遺物の破片数量（3・4区上層と下層）で比較してみると、土師器碗が29～42%、杯、皿が25～41%、鍋等が12～25%、須恵器碗、皿が1～2%、鉢、甕等が3～5%、瓦器5～14%、輸入陶磁器1～2%である。このうち碗のみの比較では、土師器碗70%、瓦器碗24%、須恵器碗4%、輸入陶磁器碗2%である。ただ硬質の須恵器を、輸入陶磁器と単純に比較できないが、加味しても比率順位の変動はないと考えられる。（山磨）

第3節 岩間下調査区

1 調査の概要

岩間下調査区は40～20ライン、X～Fライン間に位置し、岩間上調査区の東続きである。調査区東端部には南の操山山塊から北方へ舌状に延びる低丘陵先端が位置する。この丘陵先端部は百間川改修工事によりすでに削平されているが、本来は標高約17mで、丘陵西側は岩盤が露出する崖状を呈していた。その丘陵西側で、南西から北東方向へ流れる旧河道を検出した。層序的には造成土の下に現代の水田耕作土があり、その直下が河道堆積土になる。この河道は岩間上調査区で検出された河道1が一旦南に下がった後、丘陵によって方向を転ぜられ、再び北上してきたものである。主な遺構は、河道部分に集中し、奈良時代の道路、平安時代の堤防・埋立遺構、中世の橋梁など長さ40mを越える巨大な遺構が重なって検出された。この重なり部の通し断面を第225図に示した。第13層は奈良時代の道路に伴う埋め土・盛土、第9層が埋立遺構1の埋め土、第5層が橋梁2に伴う埋め土であり、それらの間に第4・6～8・10～12層の河道自然堆積層が間層として確認される。便宜上、第12層を河道2、第10・11層を埋立遺構施工直前の河道として河道3、第8層を埋立遺構施工直後の河道として河道5、第7層から橋梁2が機能停止するまでの堆積層を河道6、第4層上半部を中心とした橋梁2機能停止以後の堆積層を河道7とする。岩間上調査区では、奈良時代と考えられる河道2に相当する下がりはないが、おそらく河道1と重なった状態と推察される。

岩間下調査区の調査は上記のような大規模構造物の相次ぐ発見で調査期間の延長を余儀なくされた。橋梁2の様相が明らかになるにつれ、その重要性から土木学会や県の都市計画課による移築・切り取

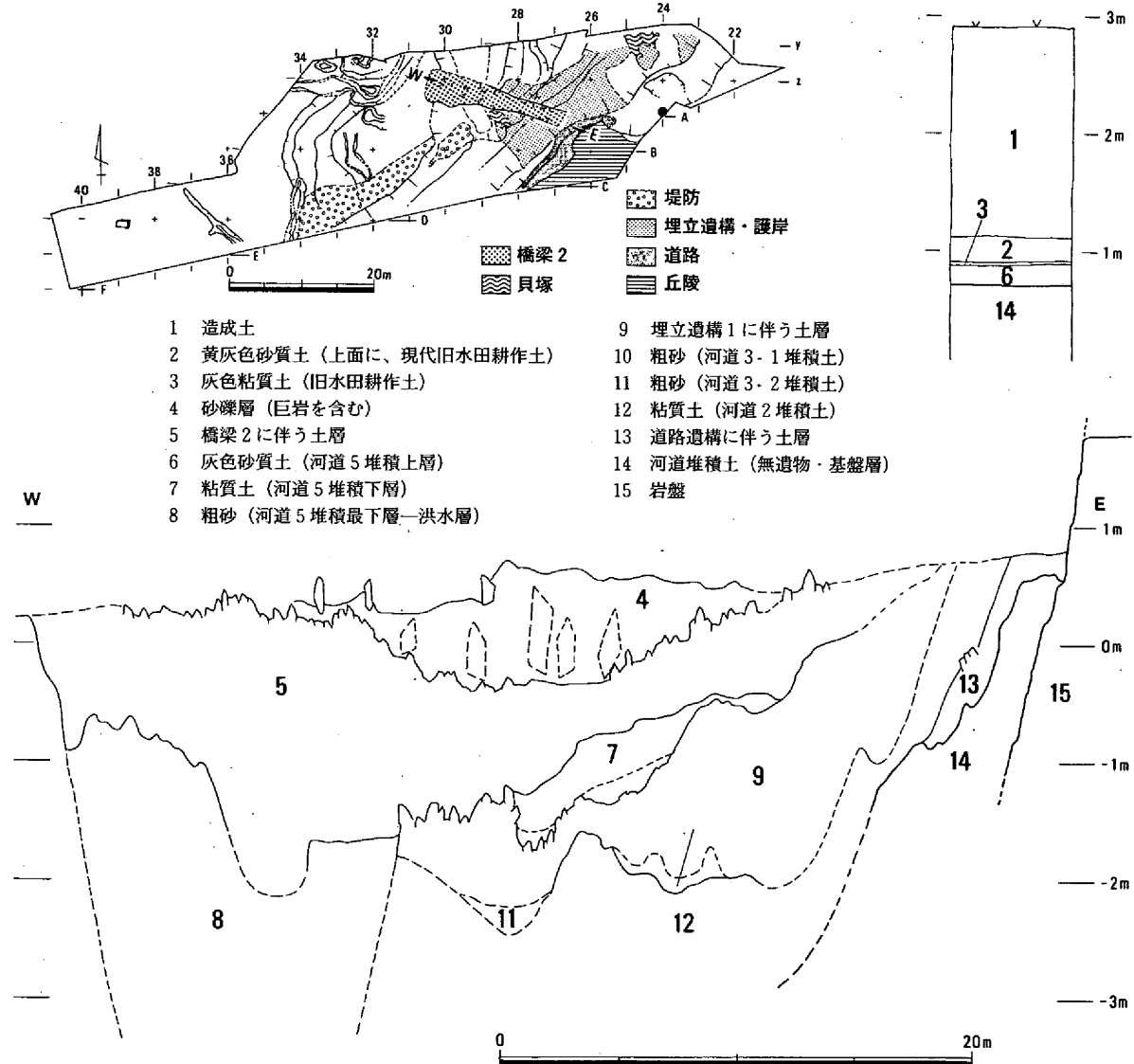


第224図 岩間下調査区 位置 (1/4,000)

第3章 発掘調査の概要

り保存の話が起こり、橋梁2の調査を約1年間中断した。そのため、下層の遺構調査を部分的に先行する結果となった。また、農繁期の降雨、満潮による増水で調査区が度々水没した。調査も終盤の平成10年10月、台風10号は県下に甚大な被害をもたらした。旭川ダムの放流量は毎秒2500tを越え、旭川放水路である百間川にも濁流が流入し、調査区をのみ込んだ。このため、埋立遺構の調査の一部を断念せざるを得ない状況に陥ったが、出来る限りの調査を行い、同年11月調査を終了した。翌平成11年度に岡山地方振興局都市計画課により橋梁2は百間川河川敷内の緑地に移築復元された。

遺構説明の用語について若干触れたい。埋め土・盛土中にイネ科植物などの草本類や小枝の層が多数確認されたが、これは大阪府狭山池の堤防でいわれる「敷葉工法」と同種のものとして理解され、「敷葉」の用語を使用している。その中で特に小枝が分厚く敷かれているものは「粗梁」と記載する。また、「むしろ」という用語はイネ科植物を簡単に編んだものという意味で使用し、厳密な意味での筵を指すものではない。「柵」は「しがらみ」のことである。それから、橋梁2基礎施設に使用された石材について、並べてあったり、石垣に積んであるものを「石組み」または「石積み」、平面的に単に広がっているものを「石敷き」「捨て石」と表記する。また遺物では、古代末～中世に属す白色を呈する土師質の椀に「早島式土器椀」の名称を一部で使用している。(物部)



第225図 断面位置 (1/2,000)、柱状断面 (1/60)、通し断面 (縦1/60、横1/300)

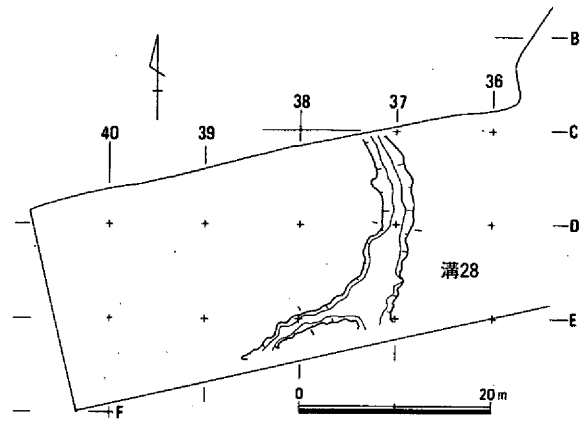
2 古墳時代以前の遺構と遺物

(1) 溝

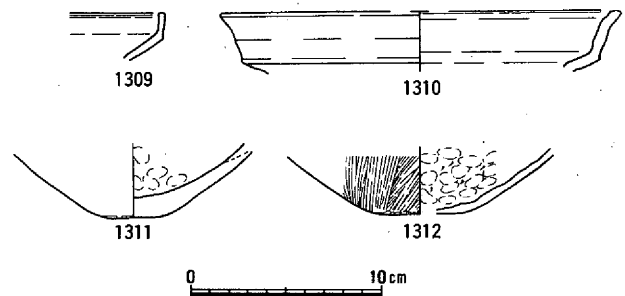
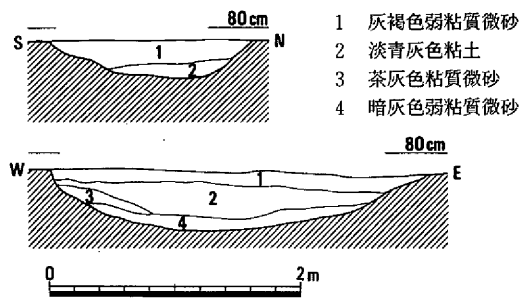
溝28 (第226・227図、図版71-2)

溝28は調査区の西端部に位置し、南北方向に流走する溝である。溝は北側から中央部分にかけて徐々に広がりを見せ、南側では二分化している。規模としては北側で幅約3mを測り、南端部分では約1.6mと狭くなっている。検出面からの深さは、北側50cm、南側30cmであることから、南から北への流れが推定できる。

遺物は、弥生土器と土師器の甕が出土している。時期は、出土している土器から古墳時代初頭と考えられる。(根木)



第226図 古墳時代以前の遺構配置 (1/800)



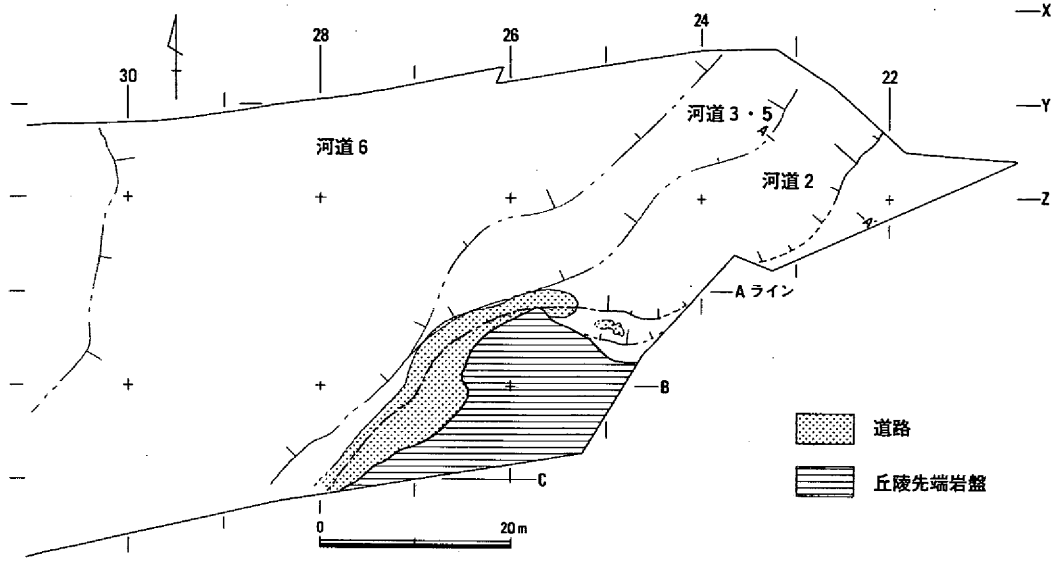
第227図 溝28 断面、同 出土遺物

3 奈良時代の遺構と遺物

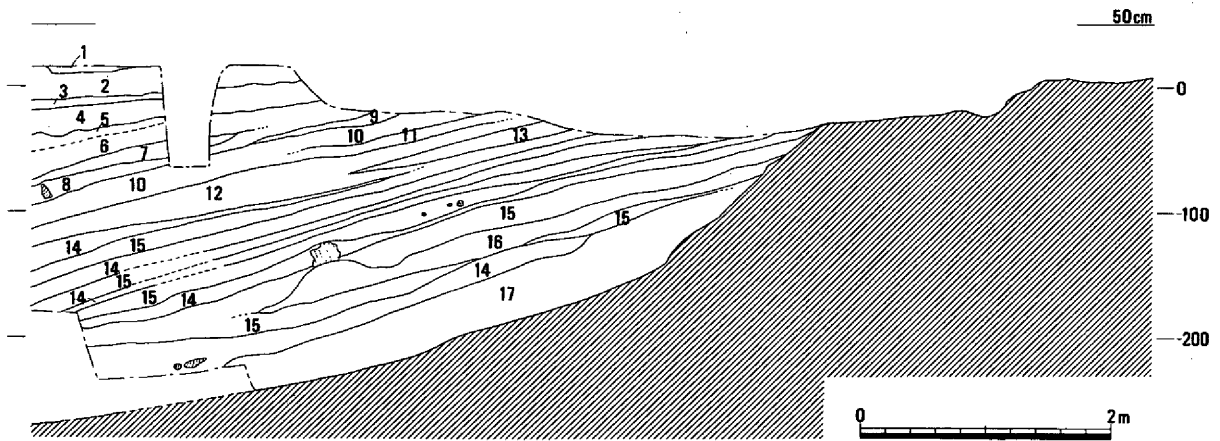
(1) 河道

河道2 (第228～230図、図版71-1)

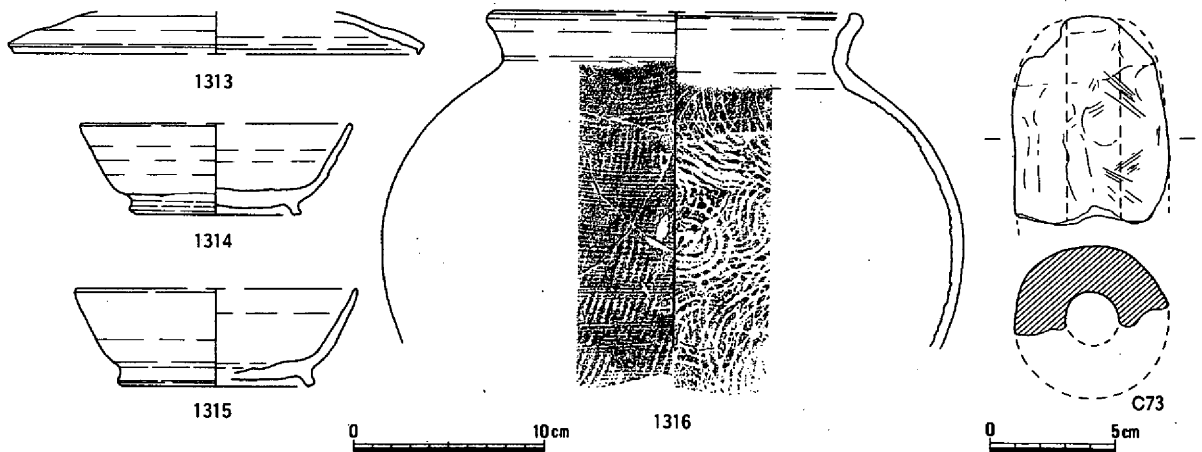
この河道は、調査区の東端に右岸側の一部が検出された。河道の西側は河道3・5によって切られているが、調査区北側ではその東側に幅約10mが残存していた。南側では、丘陵の裾部が肩部となっている。河道の左岸側は、後世の河道によって削平されているため規模については不明であるが、河道5・6よりは西側にはいかないため河道幅は約30mを越えないものと推定される。河道は、後世の河道と同様におおむね南西方向から北東方向に流走すると思われる。河道の堆積は、第229図の断面図の状況を示しており、この堆積状況からみて河道の肩部は大幅に削平されていると考えられる。河道の深さは、調査では約250cm 前後まで確認でき、底部海拔高は約-250cm を測る。出土遺物は、第229・230図の遺物が検出された。検出された遺物は、1313～1316などの須恵器、土師器、C74の転用硯、C73の土錘、さらには大量のW168～W181の木器が出土した。転用硯は、須恵器の甕腹を利用し



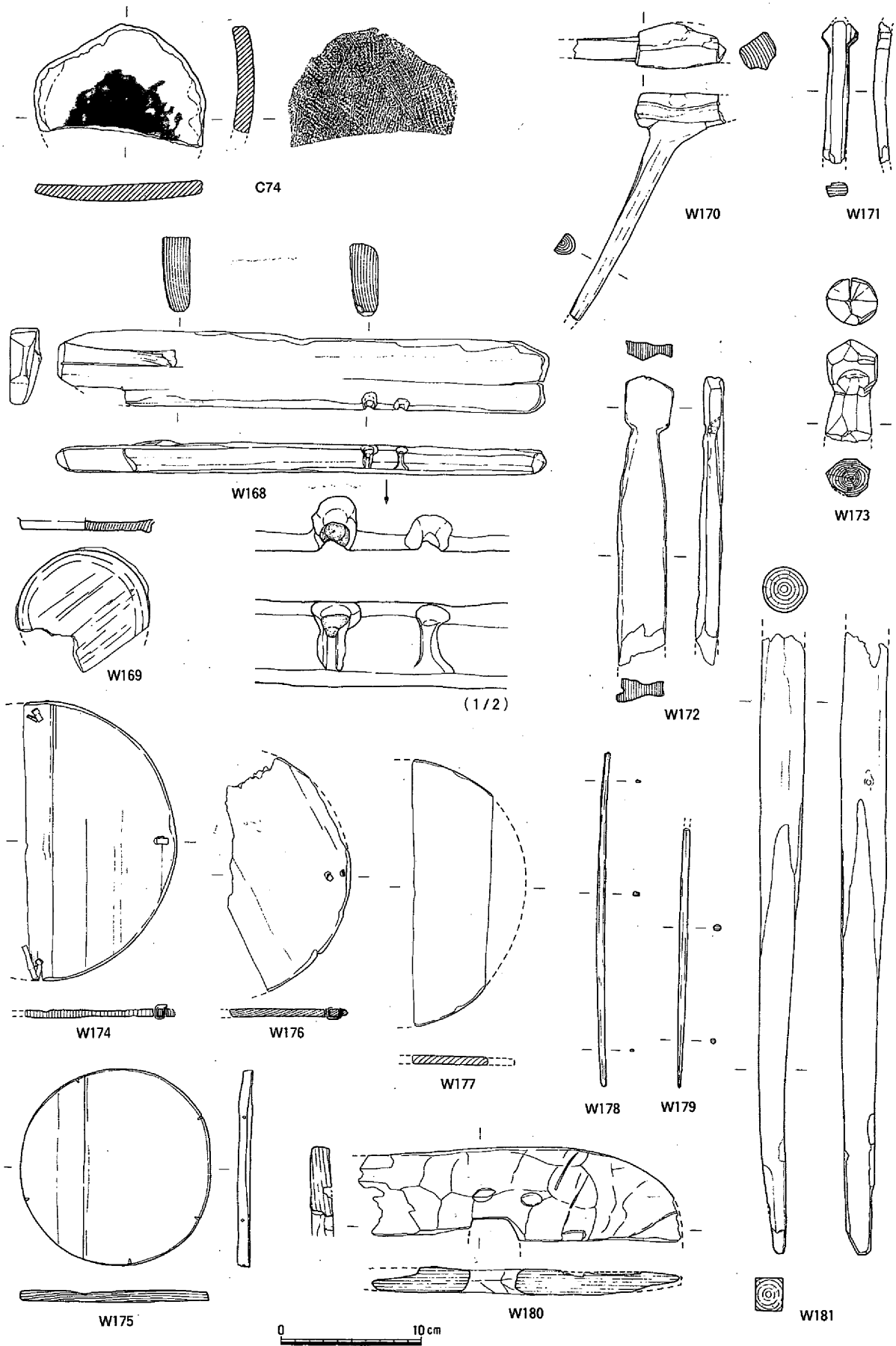
第228図 奈良時代の遺構配置 (1/800)



- | | | |
|-----------------------------|------------|----------------------------|
| 1 灰黄色砂 | 9 灰色砂 | 17 褐灰色砂 (褐色粘質土
ブロックを含む) |
| 2 黒褐色粘質土 (赤褐色砂質土粒を含む) | 10 褐灰色砂質土 | |
| 3 黒褐色砂質土 (赤褐色砂質土粒を含む) | 11 黄灰色砂質土 | |
| 4 オリーブ黒色砂質土 (赤褐色砂質土をすじ状に含む) | 12 褐灰色砂質土 | |
| 5 灰色砂質土 (赤褐色砂質土をすじ状に含む) | 13 黄色砂 | |
| 6 オリーブ黒色粘質土 | 14 淡褐灰色砂質土 | |
| 7 灰色砂質土 (赤褐色砂質土をすじ状に含む) | 15 褐灰色砂質土 | |
| 8 オリーブ黒色粘質土 | 16 灰色砂 | |



第229図 河道2 断面、同 出土遺物 <1>



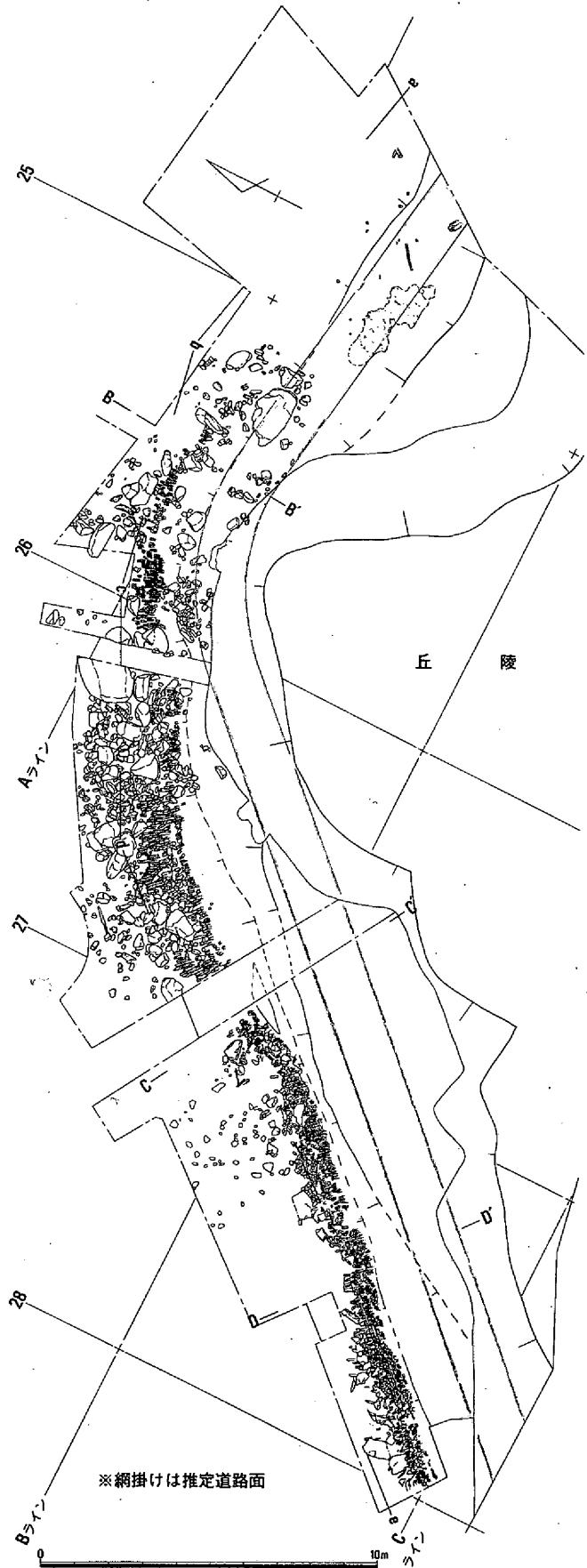
第230図 河道2 出土遺物〈2〉

第3章 発掘調査の概要

たものである。W169は、挽物の漆器で底部外縁には断面三角形の低い高台が付く。杯と考えられるが、皿の可能性もある。挽物食器の出現時期は8世紀中頃以降とされるが、ここで相伴している1313~1316須恵器の時期とも一致する。W178・179は、箸および茅葺き屋根の止めぐしとされているものであるが、ここでは箸として報告する。W178は、長さ23.4cmを測る。このような木製食器の使用は、この時期では一般集落への普及は考えられず、周辺域に公的施設などの存在が想定される。(中野)

(2) 道路 (第228・231~239図、巻頭図版4、図版43~45-1)

道路は、河道2右岸に長さ40mに渡って検出された。道路南西部は調査区外にさらに延びている。当初、護岸と考えられたが、その立地は、河道2右岸が、丘陵北西面の岩盤に接している部分であり、最も護岸の必要のない場所であることから、道路と理解された。道路の基本的な構造は、河道斜面に割り木による土留めを作り、その上部に草木類を敷き込みながら、盛土するものである。盛土の上部は河道2埋没過程で流水による削平を受けていると考えられ、少なくとも、埋立遺構の築造が始まる平安時代中期頃までにはその機能を失っていると考えられる。調査は、主に3本のトレンチにおいて解体しながら精査した。以下、築造順に従って説明したい(第238図)。1. 河道斜面に河道と並行する浅い溝を掘る。丘陵先端部では基盤層内部の岩盤が高く、この部分では掘り残している状況がみられた。次に溝の下半部に土と礫を盛る。断面図では第235図第15層、第236図の第17~22層に相当する。礫を粗く積んでいる箇所も確認された。そして、2. 溝下半部の盛土上面に



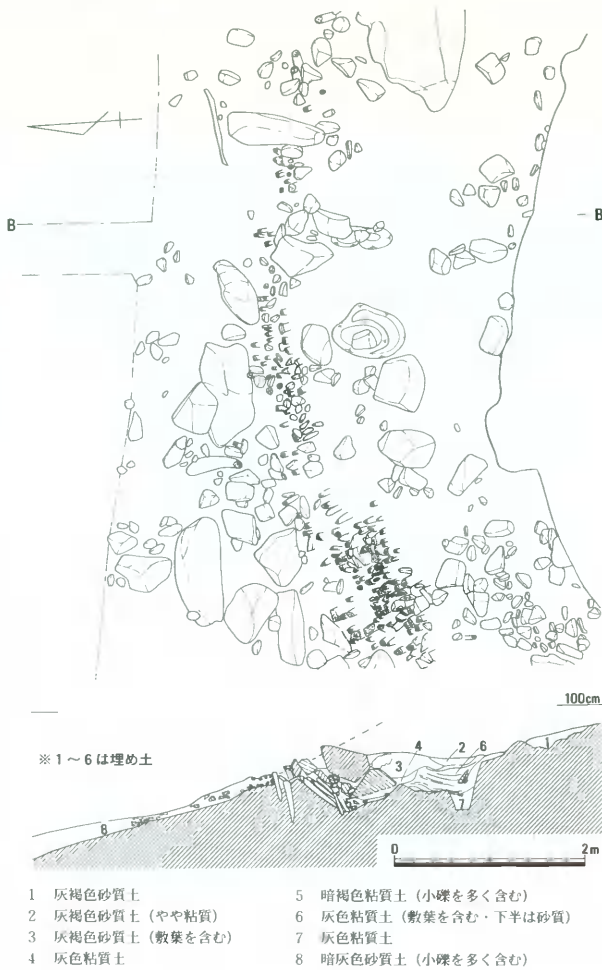
第231図 道路 全体配置 (1/200)



第232図 道路（上空から）下が北



第233図 道路（南から）



第234図 道路 北東部 (1/60)

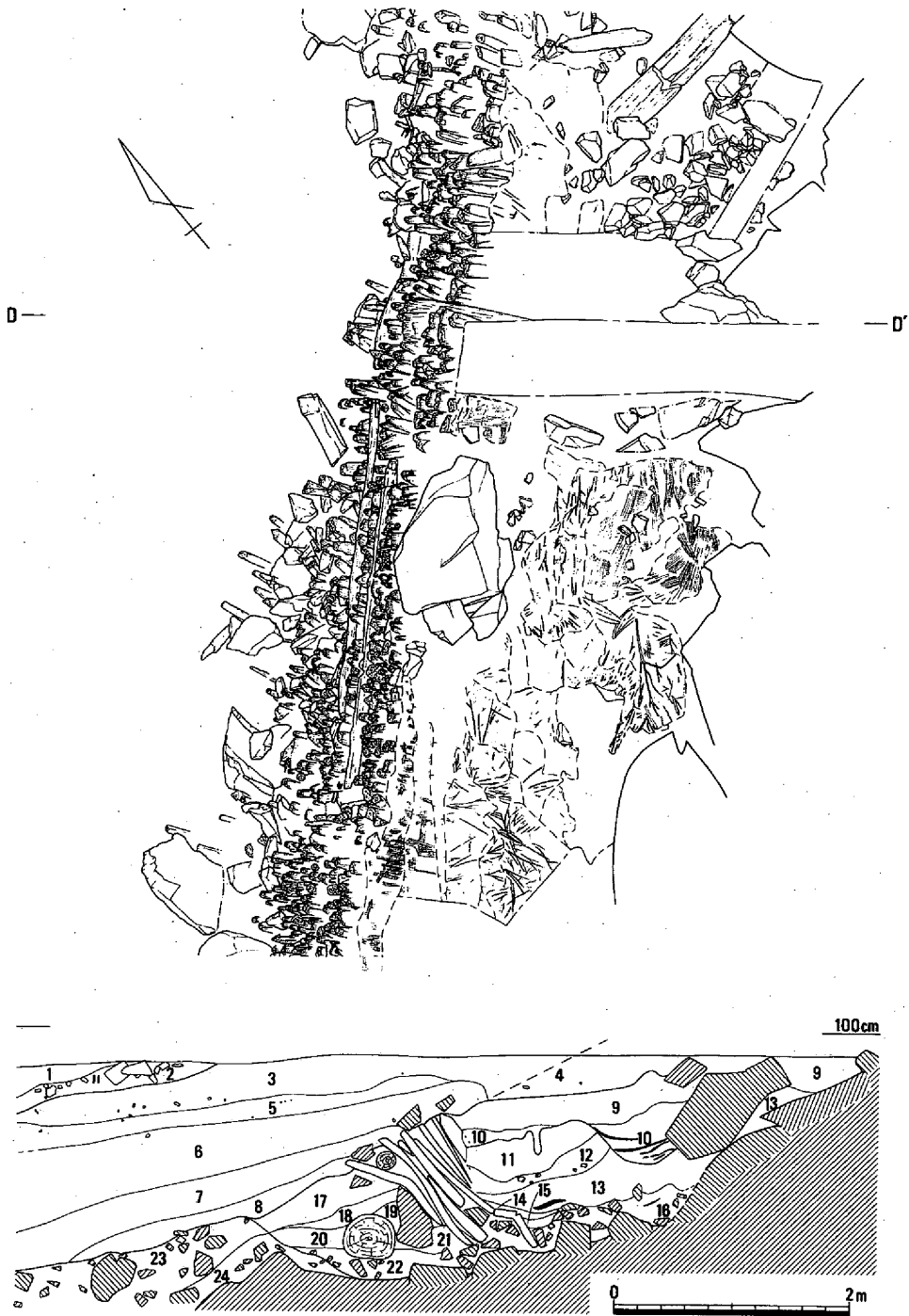
が見られるのは丘陵岩盤の北西側であり、丘陵先端部北側の道路北東部では基盤が高いため簡略化され、割り木は1列のみとなり、幅も減少する。第237図は割り木帯(頭部)を河道側から水平に見た側面図である。これを見ると、土圧による沈み込みと小規模な崩れがあるもののほぼ標高0mのラインで割り木帯が水平に延びていることがわかる。道路南西部(第236図)は基盤である河道肩部が大きくえぐれた窪み部であるが、ここでも同様であり、地形の凸凹を十分に計算に入れた構造といえる。そして、3. 割り木帯と河道斜面によって出来たV字形の空間を、まず礫を詰め、その上に枝葉や草本類を敷きながら埋めていく。草本類は2～8面が確認され、全体として枝葉は8割程度の比率で多く使用されている。草本の中には3～5cm幅で格子状に編まれているものも確認された。枝葉はサカキやヤブツバキ、草本はイネ科植物という鑑定結果を得た。4. 最後に上部を白色の細石混じりの黒色粘質土で盛り完成である。この粘質土は固く縮まり、叩き締めてある可能性がある。包含される細石は石

もたせながら割り木を隙間無く並べてゆく。割り木はツブラジイをミカン割りにして端部2面を簡単に加工し尖らせたもので、残存長は1.5～0.4mである。割り木を杭状にしながらも打ち込まず敷き並べていると判断されるのは、ほとんどの割り木が埋め土内に取まっていると考えられること、割り木上部の埋め土層、特に第236図第14層砂礫層が割り木の上面に沿って上方に上がっていること、また、トレンチ部分のみではあるが割り木先端部が潰れたものが全く無かったことを根拠とする。この割り木の帯は幅90cmあるが、その設置には次のような作業工程が観察された。盛土にもたせかけながら、割り木を密着させ、隙間を塞ぐように載せ並べる。この割り木列上面の根本に土と供に礫を詰め、上部に横木または礫を置く。これを3度繰り返して分厚い割り木帯を完成させている。ただし、この入念な構造



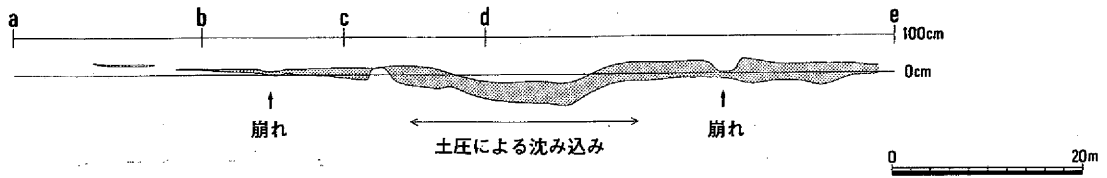
- | | |
|---|---|
| 1 暗灰黄色砂質土 (礫を含む) <河道6> | 12 黒褐色粘質土 (礫を含む) <盛土> |
| 2 オリーブ黒色粘質土 (青灰色砂層を含む) <河道6> | 13 オリーブ黒色砂質土 (杭の上面に小礫がある) <盛土> |
| 3 オリーブ黒色粘質土 (砂がブロック状に入る) <河道6> | 14 オリーブ黒色粘質土 <盛土> |
| 4 黄灰色砂質土 | 15 オリーブ黒色砂質土 (小礫を含む
杭の下側には大きめの石あり) <盛土> |
| 5 灰黄色砂 | 16 黒褐色粘質土 (拳大以下の碎石状の小礫を
多量に含む よくしまっている) <盛土> |
| 6 暗灰黄色砂質土 | 17 オリーブ黒色粘質土 (拳大以下の礫を含む
下方は少ない) |
| 7 オリーブ黒色粘質土 | 18 灰色粘質土 (小さな白い1mm大ほどの石を含む) |
| 8 黒褐色粘質土 (小礫を多く含む よくしまっている) <盛土> | 19 オリーブ黒色粘質土 (礫を非常に多く含む) |
| 9 灰色砂質土 (敷葉・小礫を少々含む
黒褐色ブロックを含む) <盛土> | 20 オリーブ黒色砂質土 (大きな礫を含む) |
| 10 灰色砂質土 (やや明るい) <盛土> | |
| 11 灰色砂質土 (やや暗い) <盛土> | |

第235図 道路 中央部 (1/60)

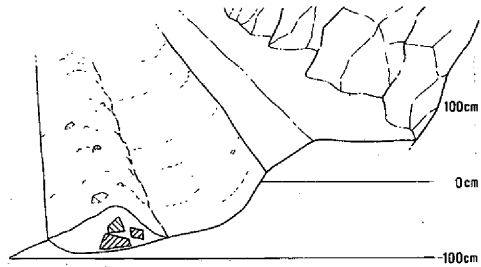


- | | |
|----------------------------------|-----------------------------------|
| 1 暗オリーブ褐色砂質土 (赤褐色砂質土を線状に含む)〈河道6〉 | 13 オリーブ黒色粘質土 (砂、敷葉、黒褐色粘質土ブロックを含む) |
| 2 黒褐色粘質土 (礫を多く含む)〈河道6〉 | 14 灰色砂礫 |
| 3 暗オリーブ褐色砂質土 (黄褐色砂質土を部分的に含む) | 15 黒褐色粘質土 (砂を含む) |
| 4 灰色粘質土 (赤褐色砂質土を線状に含む) | 16 黒褐色粘質土 (礫を多く含む、敷葉を含む) |
| 5 黒褐色粘質土 (赤褐色砂質土を線状に含む) | 17 灰色粘質土 (砂・黒褐色ブロックを含む) |
| 6 黒褐色粘土 (赤褐色粘質土を上部に線状に含む) | 18 灰色砂質土 (砂を多く含む) |
| 7 オリーブ黒色粘土 | 19 灰色粗砂 (粒のそろった1~2cm大の細石を多く含む) |
| 8 暗オリーブ灰色粘土 (オリーブ黒色砂質土を線状に含む) | 20 オリーブ黒色粘質土 (黒褐色粘質土ブロックを含む) |
| 9 オリーブ黒色粘質土 (黄色砂礫を多く含む) | 21 オリーブ黒色粘質土 |
| 10 灰色砂質土 (黄色砂礫を多く含む 敷葉5~6層みられる) | 22 灰色礫 (黒褐色粘質土ブロックを含む) |
| 11 オリーブ黒色粘質土 (黒褐色粘質土ブロックを多く含む) | 23 オリーブ黒色粘質土礫 (白く小さな細石を多く含む) |
| 12 砂礫層 | 24 灰色粘質土 (礫を含む) |
- 1~8河道6堆積 9~22盛土・埋め土

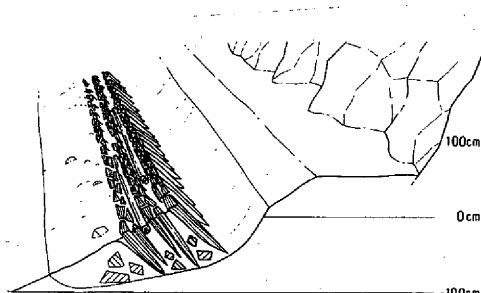
第236図 道路 南西部 (1/60)



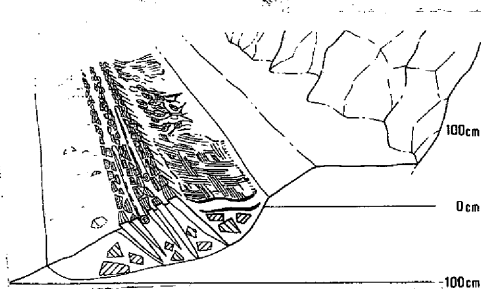
第237図 道路 割り木帯側面 (縦 1/200、横 1/400)



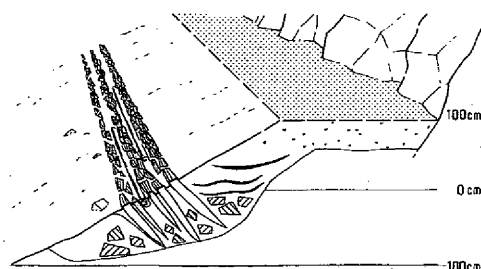
1 溝を掘り、下半に土と礫を盛る。



2 盛土にもたせながら割材を隙間無く並べる。

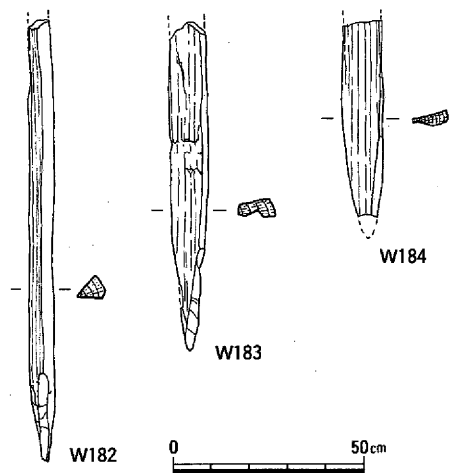


3 割材上部を枝や草本類を敷きながら埋め土する。



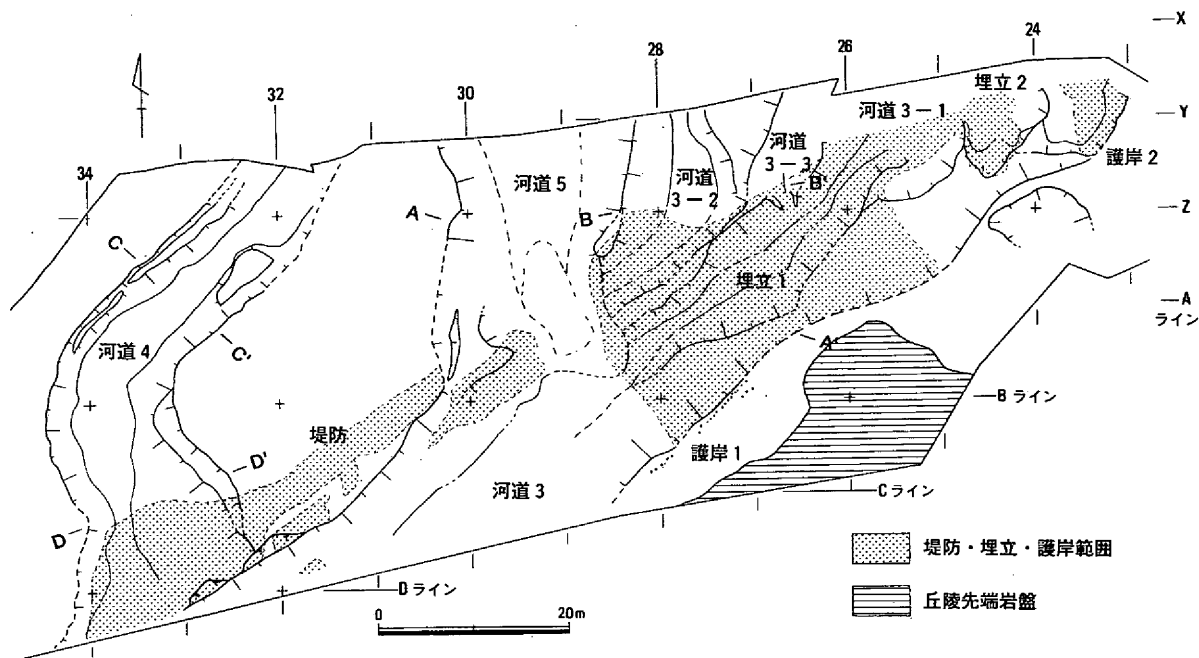
4 さらに小礫混じりの土で盛土する。

第238図 道路遺構 築造模式図 (約 1/100)



第239図 道路 使用木材 (1/20)

を砕いて混ぜている可能性も考えられる。また、中央部では割り木帯の1.5m上方の盛り土下に約70cm間隔で打ち込まれた割り木杭列が検出された。杭列の長さは約6m。第235図の断面第16層はこの杭列に伴う盛り土と考えられることから横木を絡ませた土留めのしがらみであった可能性がある。これは道路建設の初期行程というより、割り木帯を伴う道路以前の道路の基部である可能性が高い。さて道路の上面の幅員がどれほどあったかは推定とならざるを得ない。ただ、丘陵南西面の岩盤は崩状を呈し、傾斜がきついことから、盛土を厚くすれば幅員は0に近くなる。標高1m付近で幅1.5m前後、標高1.5mで幅1m前後と計算され、おおよそ前者の値程度が適当ではないかと思われる。また、河道斜面の下方には河道底に向けて徐々に厚さを増す礫を多量に含む層(第235図第17~20層、第236図第23・24層)がある。これは道路建設当初に人為的に投入されたものである可能性も十分考えられたが、確証が得られなかった。道路からの出土遺物は無い。河道2の遺物からすると道路築造は8世紀中頃以前と考えられる。(物部)



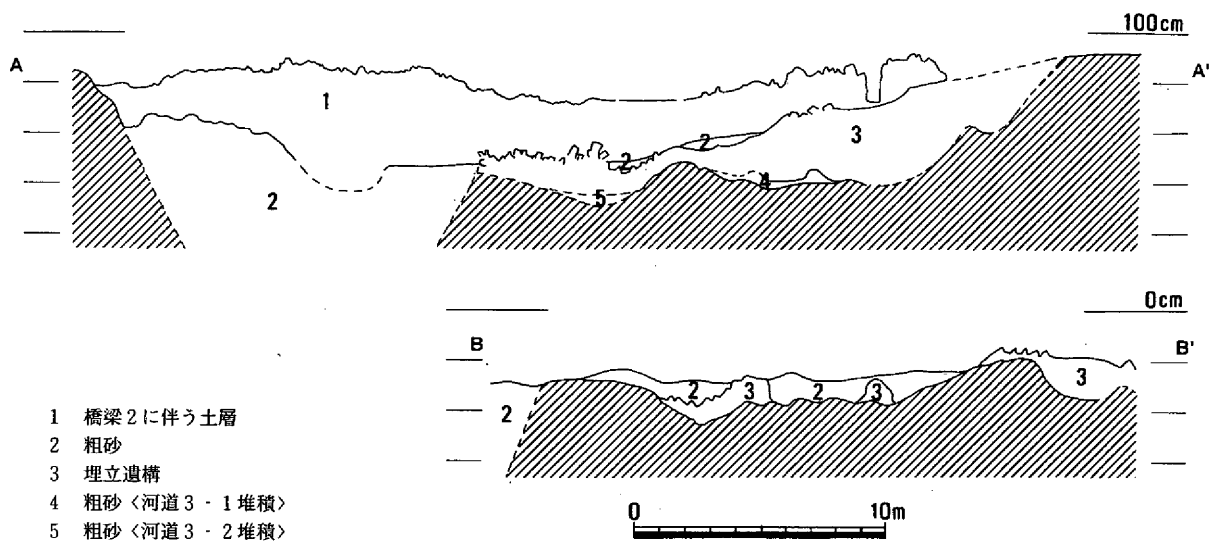
第240図 平安時代の遺構配置 (1/800)

4 平安時代の遺構と遺物

(1) 河道

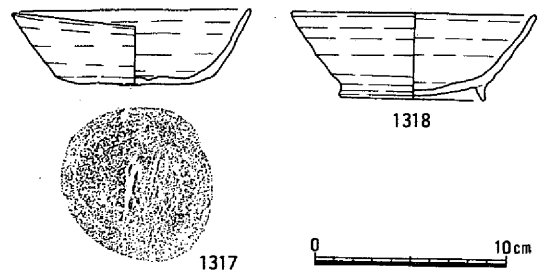
河道3 (第240~242図、図版75-1)

後述する堤防・埋立遺構が築造される以前の流路である。土層としては埋立遺構1埋め土直下に粗砂あるいは小粒の砂利を含む粗砂の堆積層として厚さにして10~20cm程度が確認される(第241図4・5層)。南西から北東方向へ流れる1条の流路が埋立遺構下でそのまま北東に延びる河道3-1と、その西隣にあり、北へと向きを変える河道3-2、そして河道3-1から派生して北へ延びる河道3-3と



第241図 河道3-1~3.5断面 (縦1/150、横1/300)

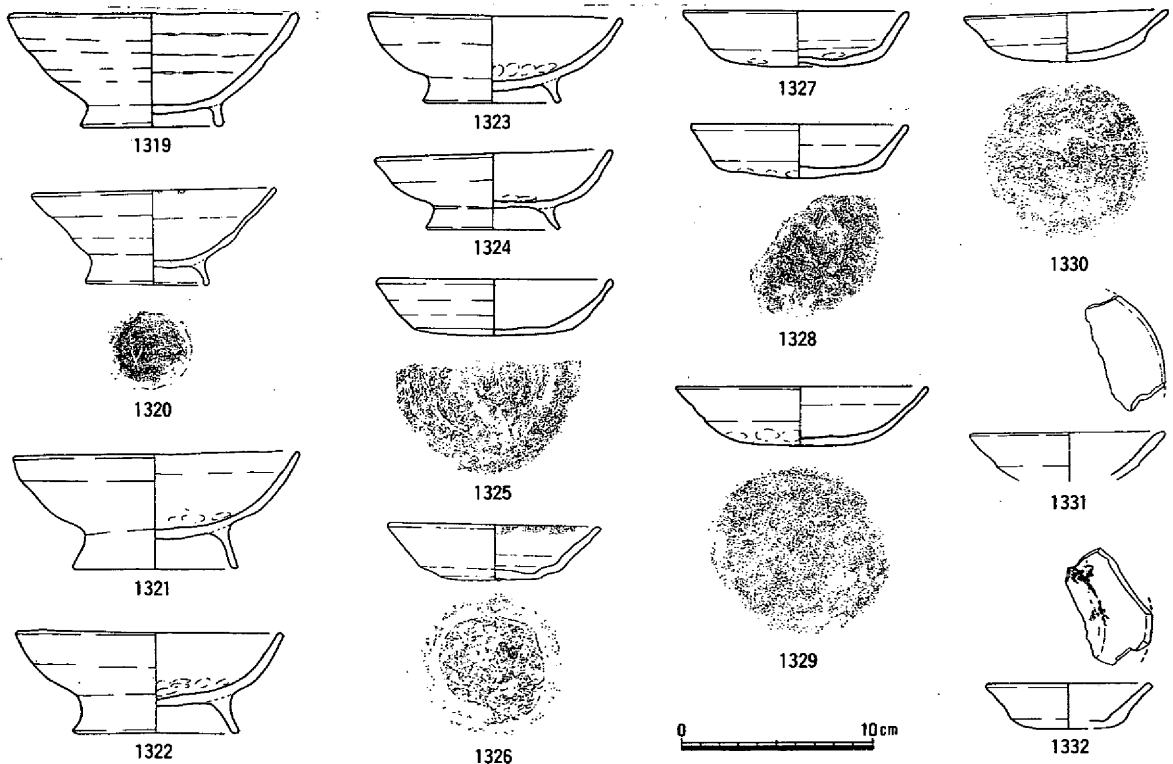
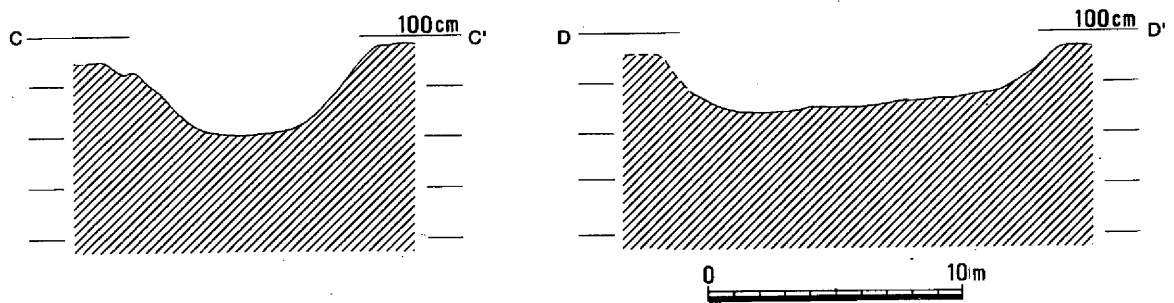
に分流する。さらに北、調査区外でこれらの流路が河道として独立してゆくのか、それとも幅の広い河道の河床に見られる幾筋かの流路にとどまるのかは不明である。各流路の底面の標高は、3-1が-2.0m、3-2が-2.4m、3-3が-1.8mで、3-2が深い。河道3肩部と3-2の西側は埋立遺構築造以後の河道5や河道6に削平され、正確には不明と言わざるを得ないが、河道5・6と基本的に大差ないものと考えられる。出土遺物は僅かである。1317は須恵器の杯で、河道3-1から出土。1318は灰黄色を呈する土師器の碗で、河道3-2から出土。時期は遺物量が少なく決めがたい。1318は10世紀後半と考えられる。



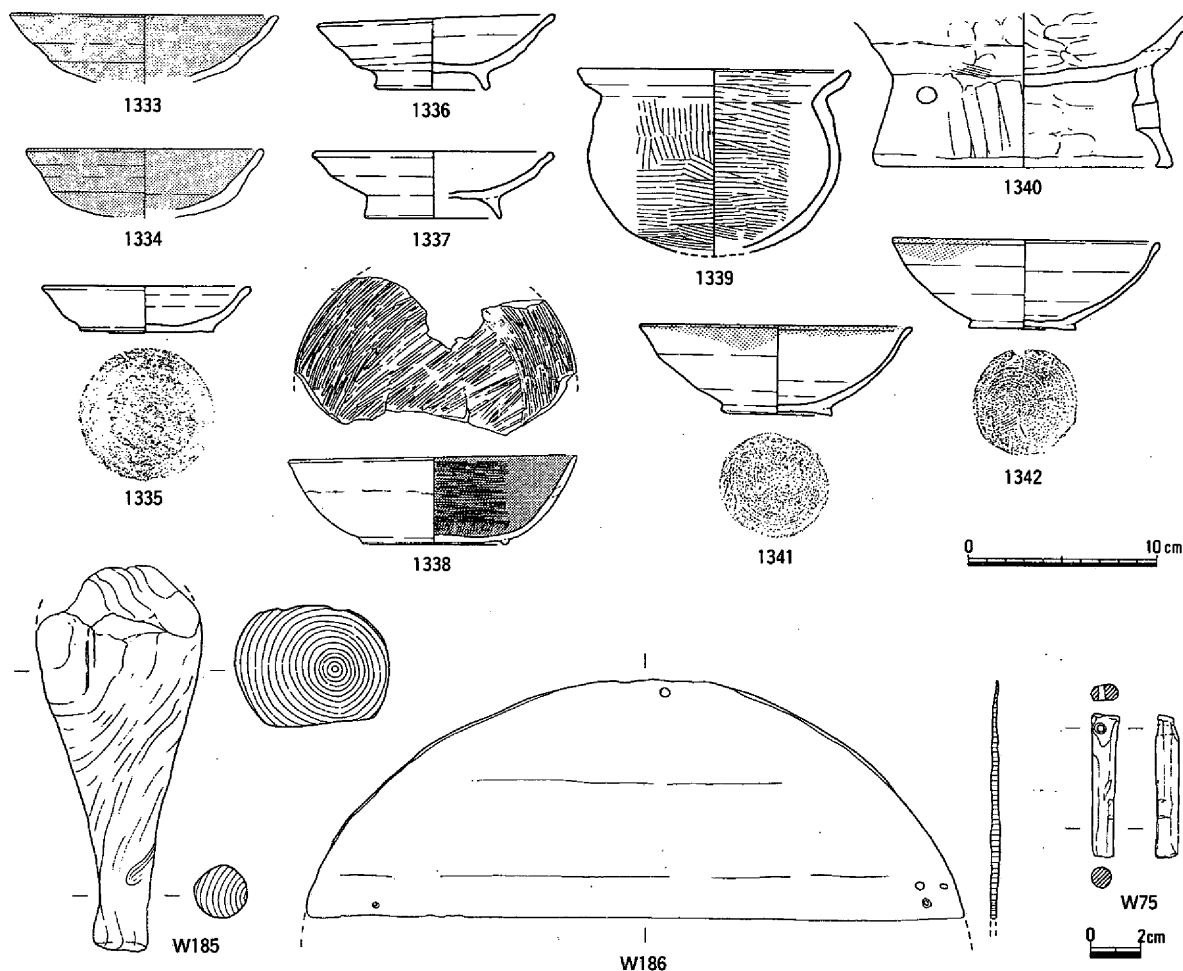
第242図 河道3-1・2 出土遺物

河道4 (第240・243・244図、図版49-1・75-1)

河道3から分岐する河道である。分岐点から一旦北へ延びるが、大きく湾曲して北東へ向きを変える。肩部は調査区北端では明瞭でなくなった。最大幅は南側で15m、北側で11mを測る。検出面からの深さは約1.2~1.7m。底面の標高は深いところで-1mで、河道3底面より1m程高い。埋土の大半



第243図 河道4 断面、同 出土遺物 <1>

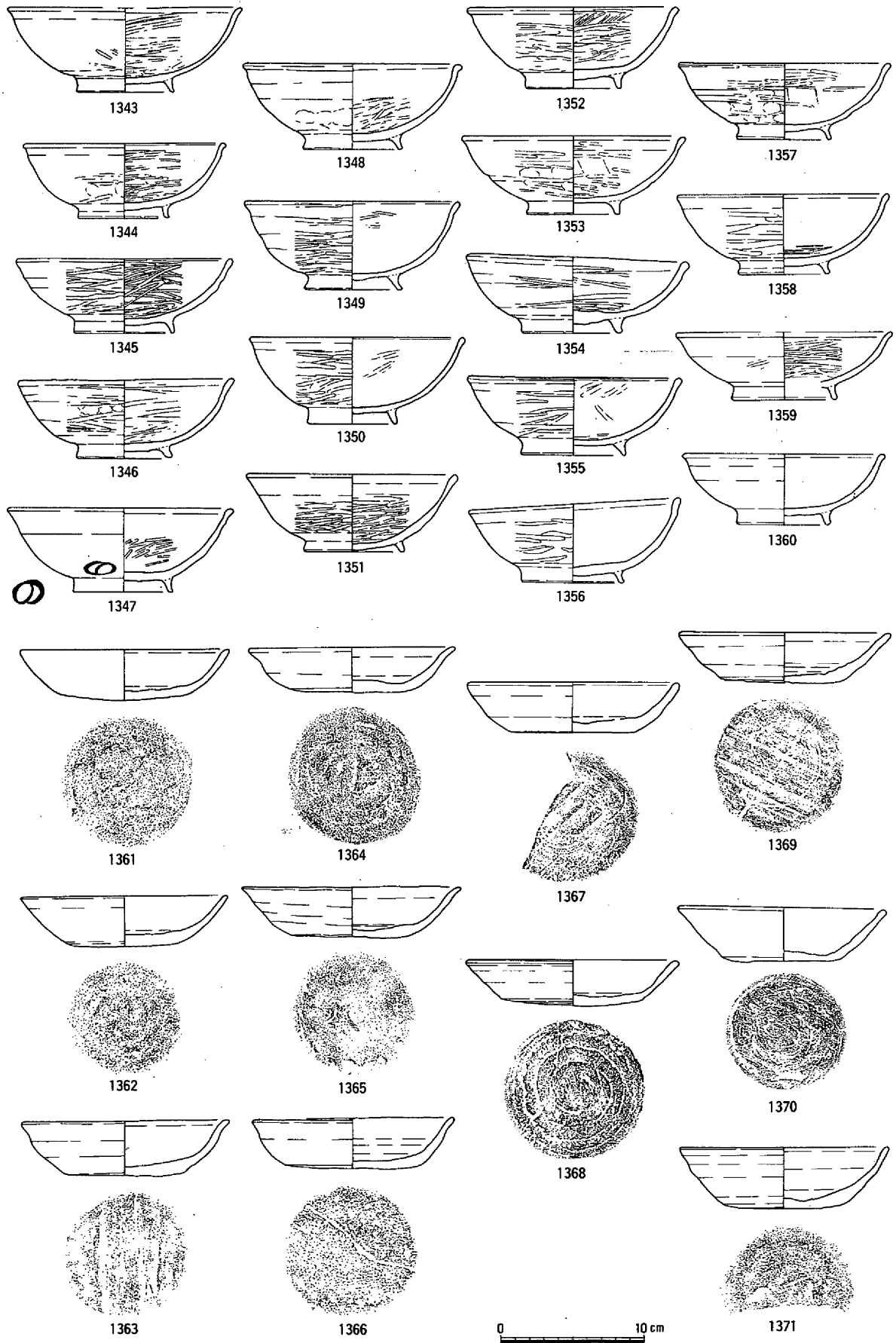


第244図 河道4 出土遺物〈2〉

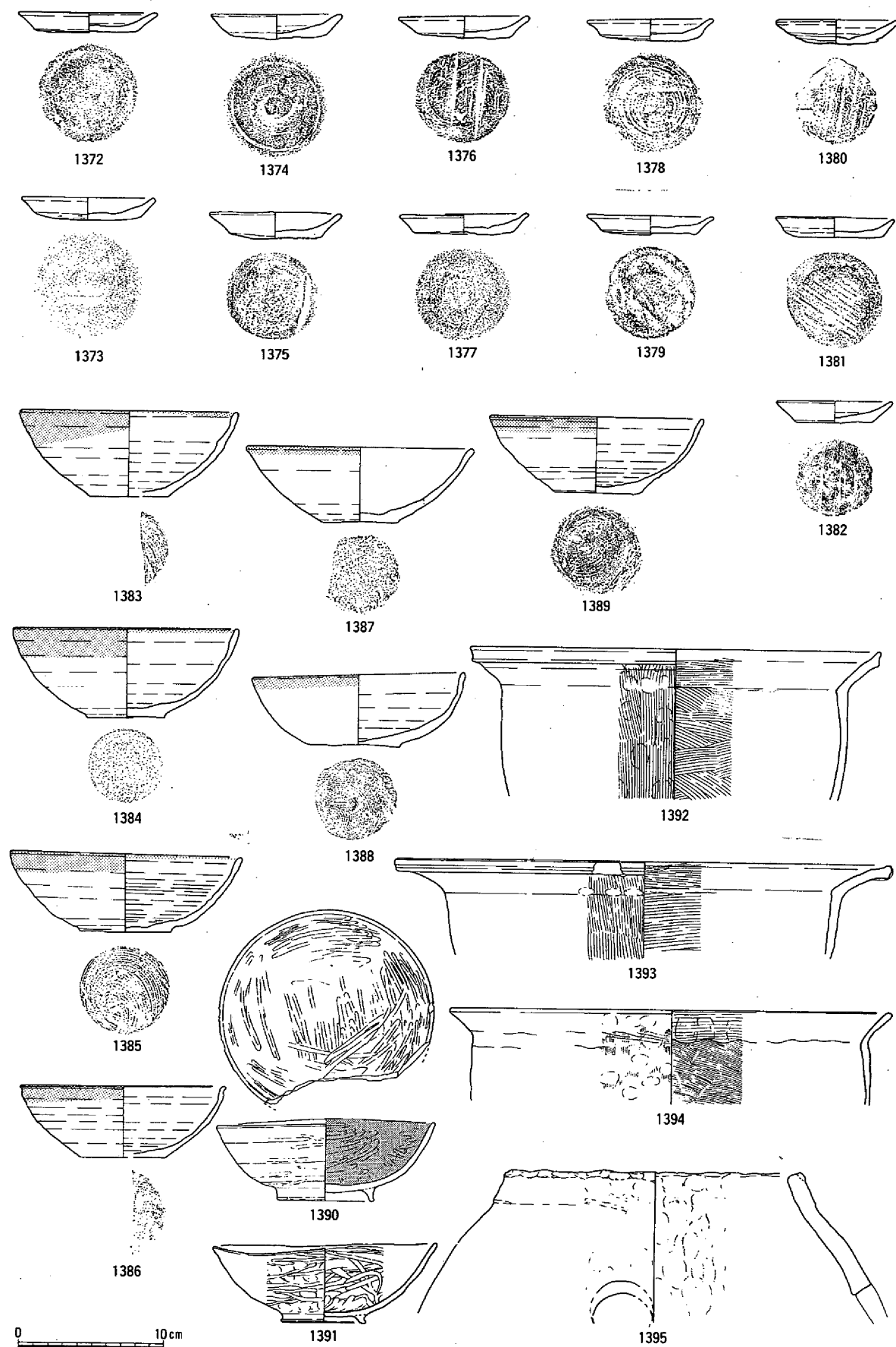
は砂であった。分岐部には堤防復旧施設群が立地する。出土遺物としては、土師器・須恵器・黒色土器などの土器類と共に、木製品や土製品が出土している。1319~1337は土師器の碗と杯である。碗の口径は12cm前後で、1321だけがおよそ20cmを測る。杯は底部を回転ヘラ切りの後にナデと押圧がなされている。1340は携帯用の土師器竈と考えられ、平城宮S K 234・238、S B 236・248や長岡宮S E 17805出土遺物に類例がある。木製品や土製品の土錘ははすべて河道の下層部分から出土している。河道の埋没時期としては、おおむね10世紀後半代と考えられる。(根木)

河道5 (第240・241・245~248図、図版75-2. 76-1)

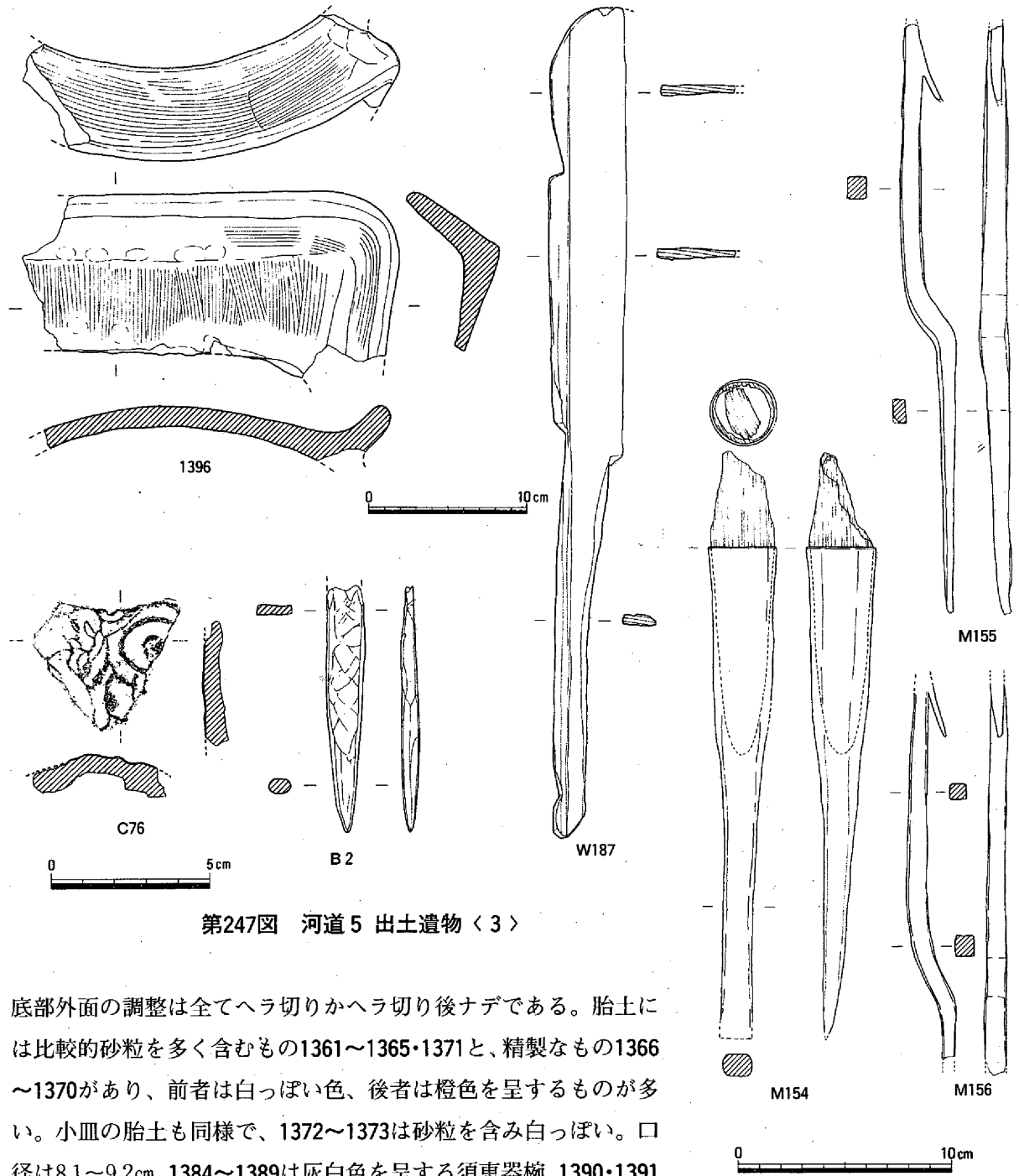
土層において河道5は埋立遺構の礫群直上に見られた砂層(第241図第2層)を指し、河道6の最下層に相当するが、埋立遺構の築造後の河道の変化を示すものとして、河道6から分離した。河道5の砂は河道底全域に堆積しており、河道南西部では薄い、埋立遺構の周囲では厚くなる。特に、埋立遺構1の西部では、河床が窪んでいることもあり、厚さ1.4m以上堆積している。埋立遺構1・2の裾周りの標高約-1m以下の礫群はこの砂によって覆われている。出土遺物は大量にあり、岩間下調査区全体の総量の約4分の1に相当する。縄文時代後期から古代までの土器が確認されるが、その中で新しいと考えられるものを抽出した。1343~1360は早島式土器碗で、口径14~15cm、器高4.8~6.3cm、高台径は6.0~7.1cmを測る。内外両面または片面にヘラミガキが施される。1360の内面もヘラミガキと考えられる。1353~1358はより白色を呈し器壁は厚いが軽いもの。1347には墨書「の」。土師器杯の



第245図 河道5 出土遺物<1>

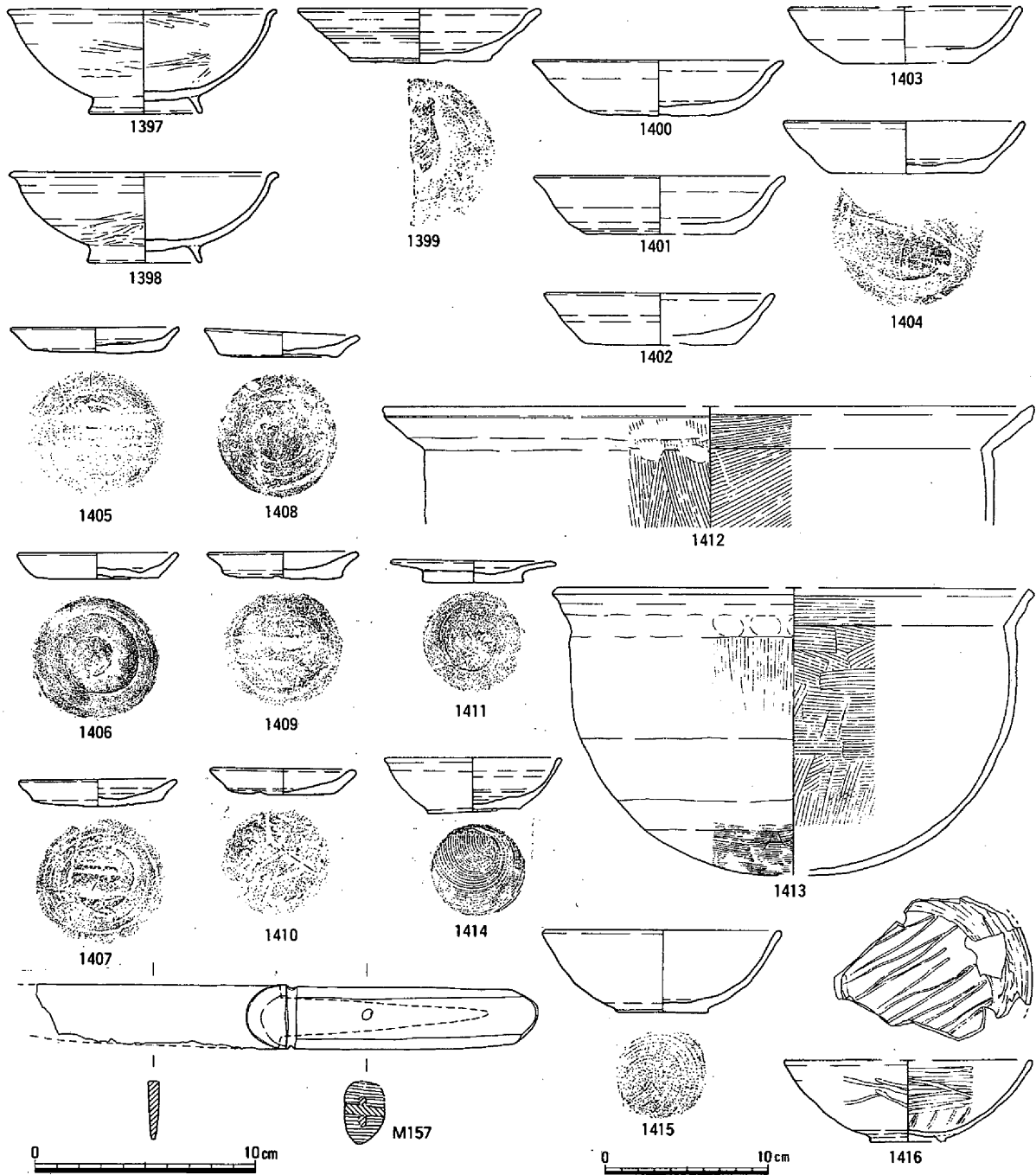


第246図 河道5 出土遺物〈2〉



第247図 河道5 出土遺物〈3〉

底部外面の調整は全てヘラ切りかヘラ切り後ナデである。胎土には比較的砂粒を多く含むもの1361~1365・1371と、精製なもの1366~1370があり、前者は白っぽい色、後者は橙色を呈するものが多い。小皿の胎土も同様で、1372~1373は砂粒を含み白っぽい。口径は8.1~9.2cm。1384~1389は灰白色を呈する須恵器碗。1390・1391は内黒の黒色土器。1391は和泉産瓦器碗。1392~1394は土師器鍋。1395は器種不明。砂粒を多く含み、にぶい黄橙色を呈する。1396は竈。C76は唐草紋が見られる不明小片で、焼成良好。W187はモミ属製人形で、全長52.5cm、厚さ7mm。M154は鉄製品で258g、木製の柄が差し込まれている。M155・156はほぼ同形。大形の鉄製ヤスで、155は119gある。これらの鉄製品は比較的近い場所から出土しており、M154が中央にM155・156が両側に組合わさって1本の二股のヤスになる可能性がある。骨製品B2は残存長7.8cm、幅1.2cm、最大厚6mm、加工痕が粗く残り、表面、特に先端部はツルツルしている。針か斧の可能性を考えている。第248図は埋立遺構1と2間の底部礫直上に堆積した砂出土の遺物である。ほぼ同様の特徴を持つ土器類であることから一連の堆積砂と考えられる。河道5の時期は、鹿田遺跡第1次調査井戸21出土土器より1段階新しいものを含み、12世紀前半と推定される。(物部)



第248図 河道5 出土遺物〈4〉

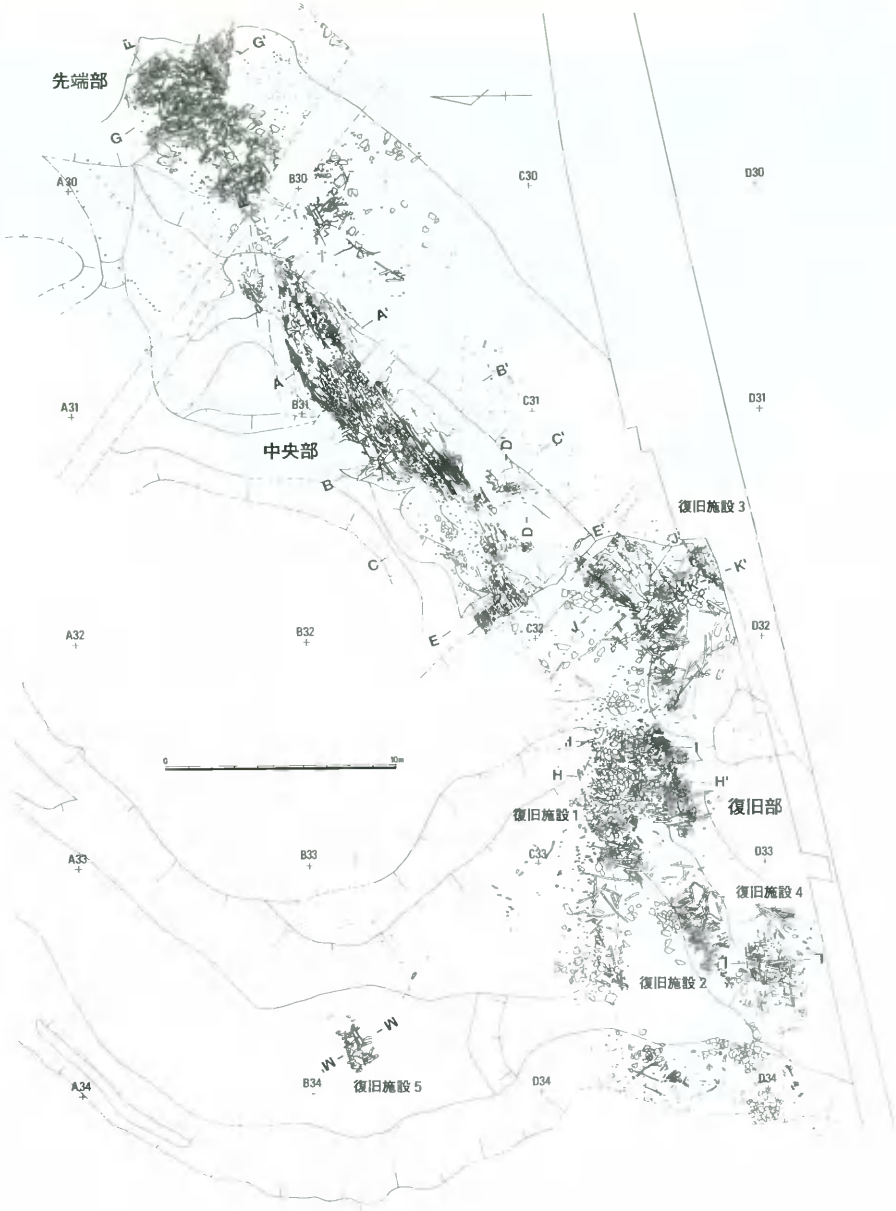
(2) 堤防 (第240・249～269図、巻頭図版5・6・1、図版45-2.46～52)

堤防は河道3の西岸に約55mに渡って検出された。構造は、木杭を多数打ち込み、柵（しがらみ）を多用し、草本類や小枝を敷き詰めながら盛土するものである。立地の違いにより便宜上、先端部、中央部、復旧部と仮称する。先端部は堤防北東端部が河道内に乗り出すように落ち込んで終わっている部分、中央部は岸辺上面に構築された部分、復旧部は堤防が決壊したと考えられる南西半分を指す。

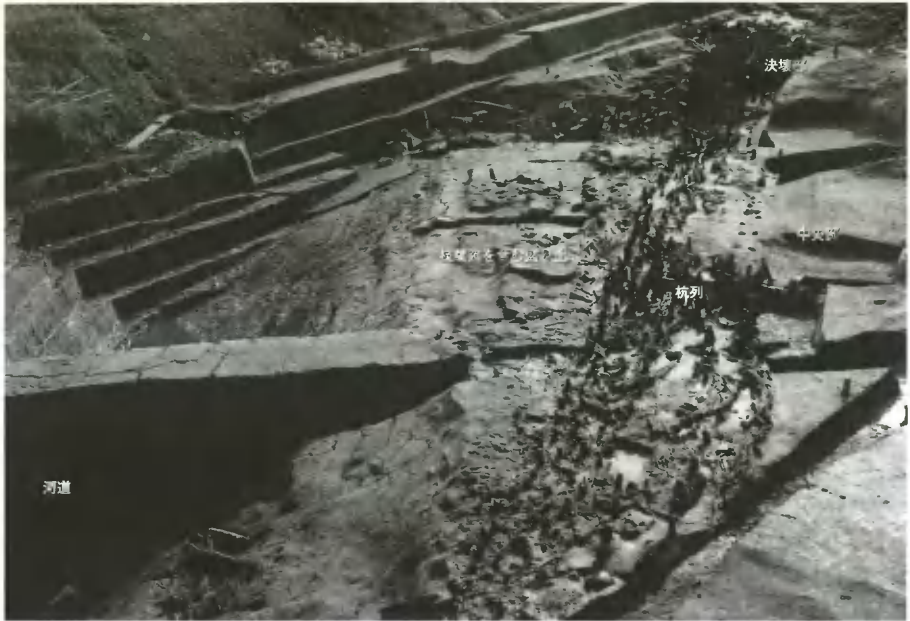
中央部 (第249～254図、図版45・2.46・47)

先端部と復旧部の間約20m (中央部) は、河道西岸上面の比較的平坦でしっかりした基盤 (粘質土)

に盛り土をして堤防が構築されている。その内部構造は全体にわたって規則的な状況を呈している。堤防盛土は厚いところで約40cm 残存し、築造当初の盛土上部は削平されている。盛土直上の砂質土からは早島式土器椀1419や灰黄色を呈する土師器杯1420が出土しており、おそらく、12世紀前半以降に



第249図 堤防遺構 全体配置 (1/250)

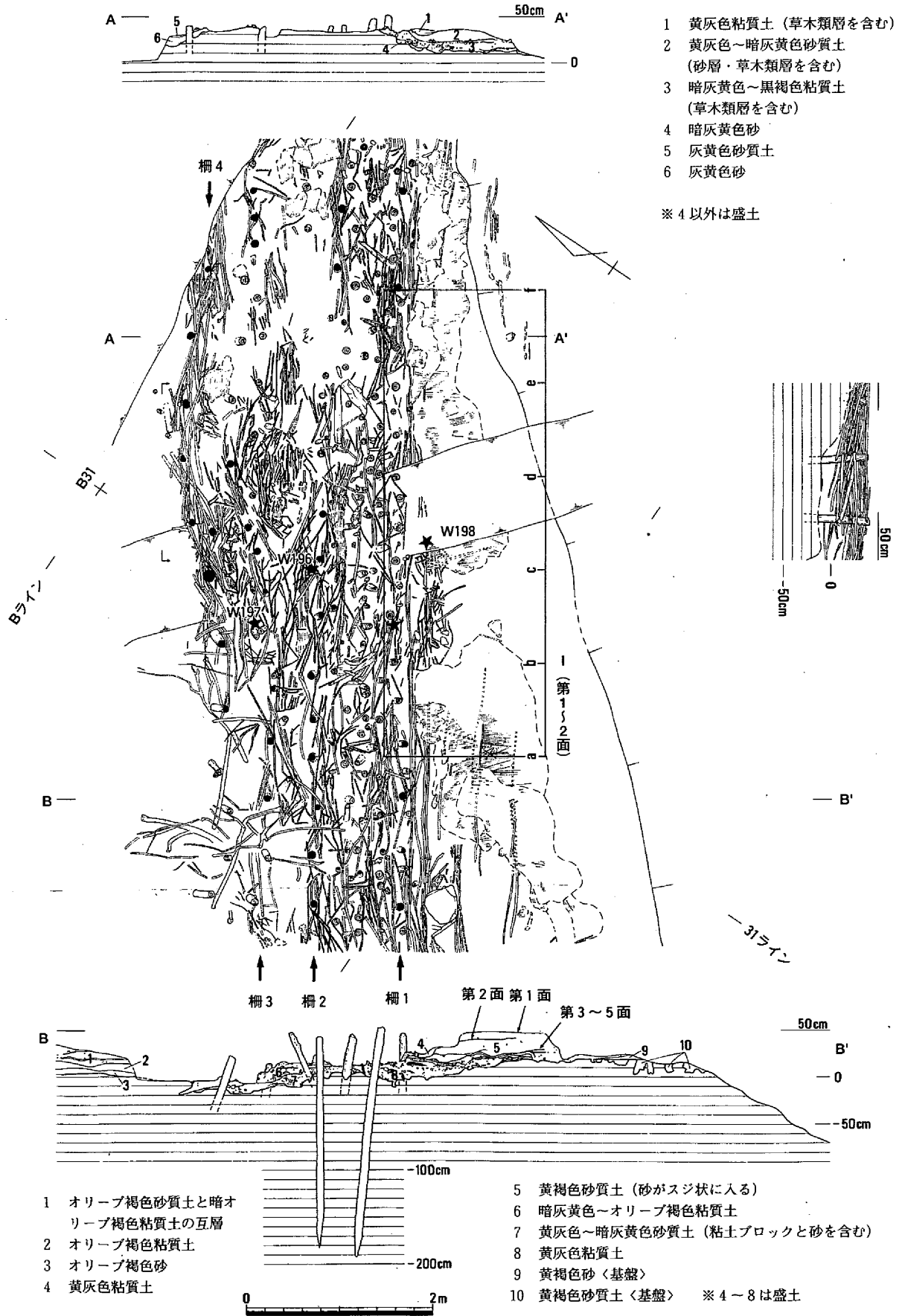


第250図 堤防（北東から）

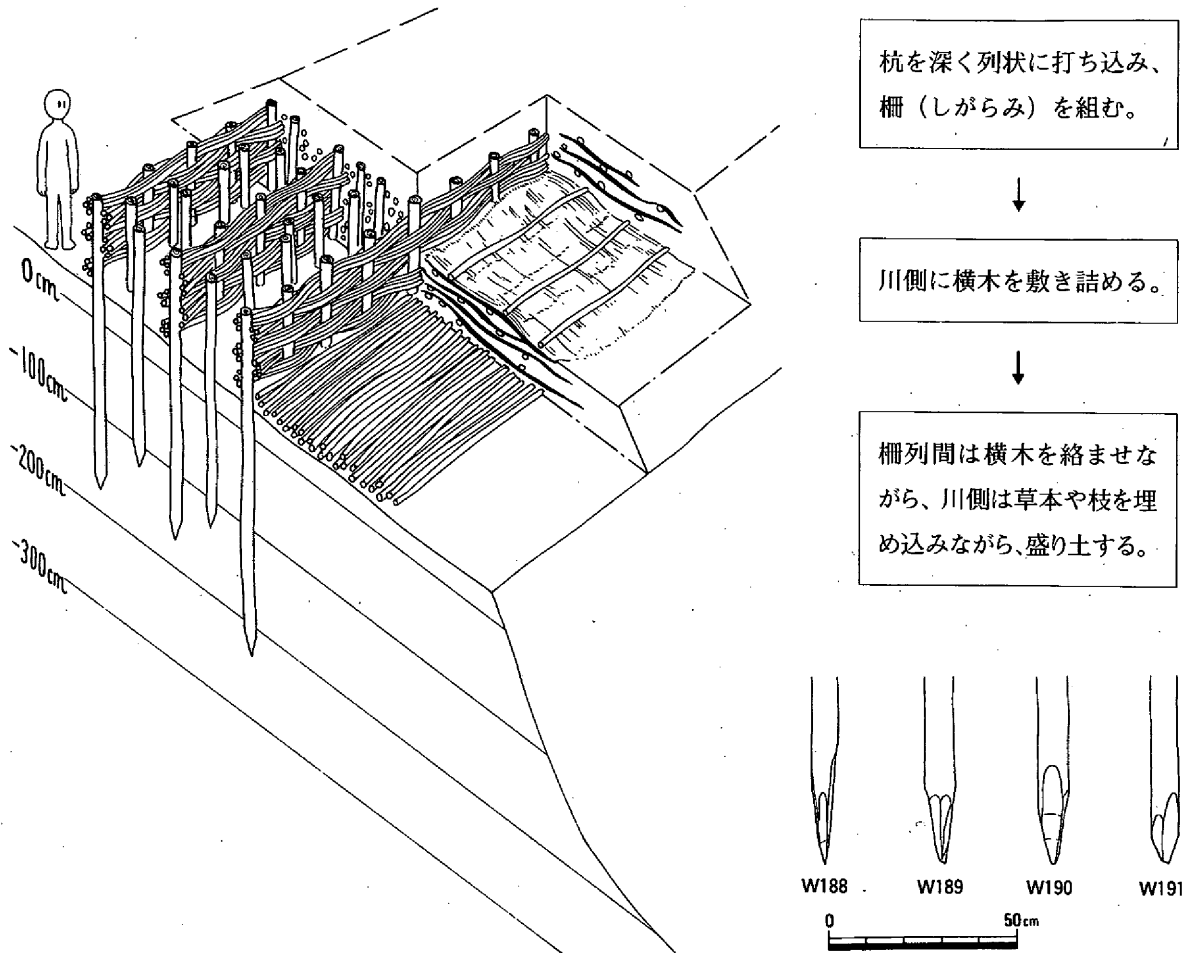


第251図 堤防イメージ図（河道側から）

河道の西岸がやや西へ広がっていく事で削平を受けたものと考えられる。中央部の構造を築造順に従って説明したい（第253図）。まず、直径8cm前後の杭を幅2mの範囲に列をなして打ち込んでいく。杭には半数以上がマツ、その他ツブラジイ・シイ属・ナツツバキ属・ユズリハ属などを使用している。

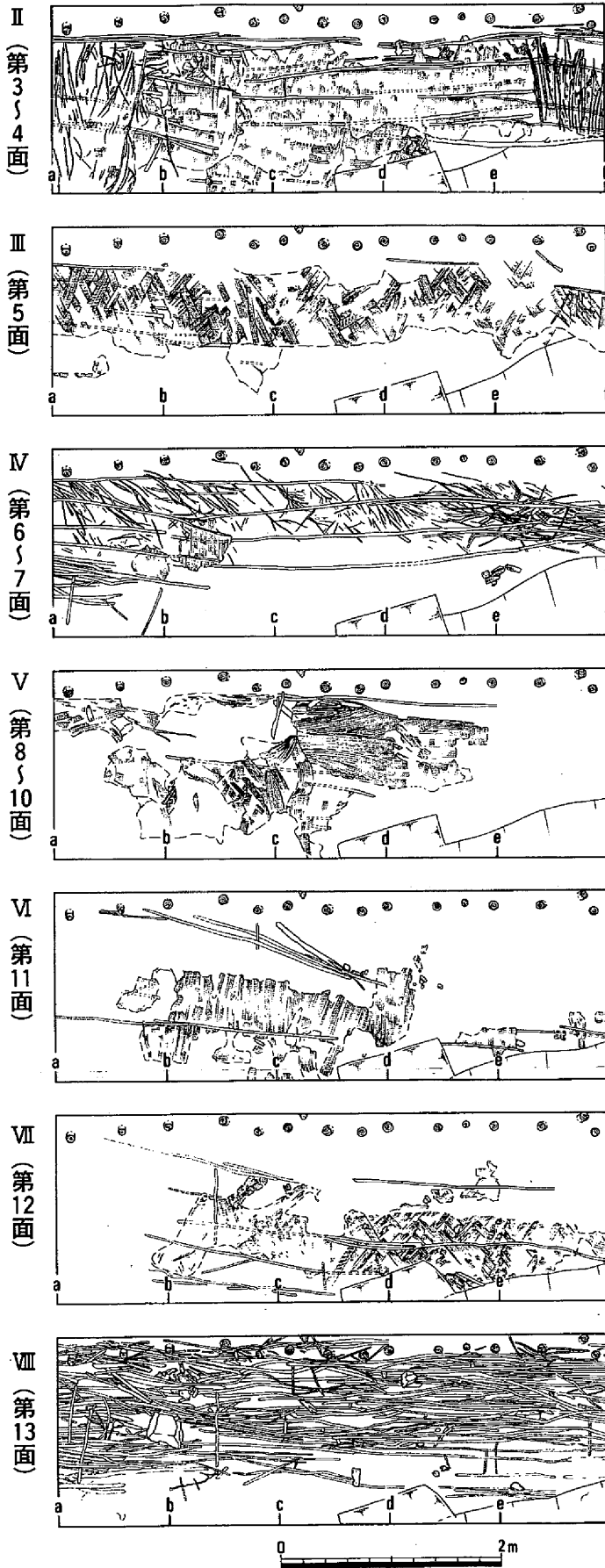


第252図 堤防中央部<1> (1/60)

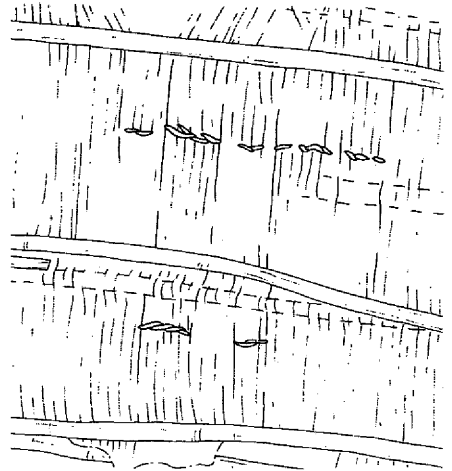


第253図 堤防中央部 構造概念模式図 (約 1/80)、同 出土杭 (1/20)

この杭列は部分的には7～8列確認されるが、先端部や復旧部まで通っているのは3列で、約1m間隔になっている。縦杭は残存長1.2～2.9mあり、地下に0.8～2.5m、平均で1.7mも深く打ち込んでいる。腐ってしまった杭の頭部の長さを考え合わせると、全長3mを越える長い杭を多用していると考えられ、おそらく、梯子を組んで足場をこしらえたか、差し上げて落とすような器具を使うか、あるいは別の方法で打ち込んだものと推測される。次に、直径2～3cm程の細い横木を杭列に絡めていく。その横木の中には杭列の杭を交互に縫っている状況が確認されるものがあり、柵(しがらみ)を作っている。第248図の黒塗りの杭が確実に柵と判別されるもので、柵1～4がある。このうち、柵1・2・4が先に述べた基本となる杭列である。しがらみの横木は8本前後が束になっており、両手でつかめる程度を絡めていったものと思われる。さらに杭列と河道肩部の間に同様な細い横木(ヤブツバキ・ヒサカキ属など)を杭列と平行に敷き詰める(第254図第13面)。杭列に直行方向の横木も少ないが見られる。それらの横木の間点々と、W195のような短い枝切れが、突き刺さっているのが確認された。横木が横に広がらないように止め釘として突き立てたものと推測される。そして、全体に盛り土していく。杭列群では横木を杭に絡ませながら、河道側では何枚もの草木類を埋め込みながら、砂質土や粘質土を盛っている。川側盛土の草木類の状況を精査したのが第254図である。残存する厚さ40cmの盛土の中に12の草木類の面が確認された。各面ごとに杭列に平行・直行・斜行と方向を違え、また、斜格子状に編んだり、より紐で簾状に編んだりしているものも確認された。この編み物の一つの単位



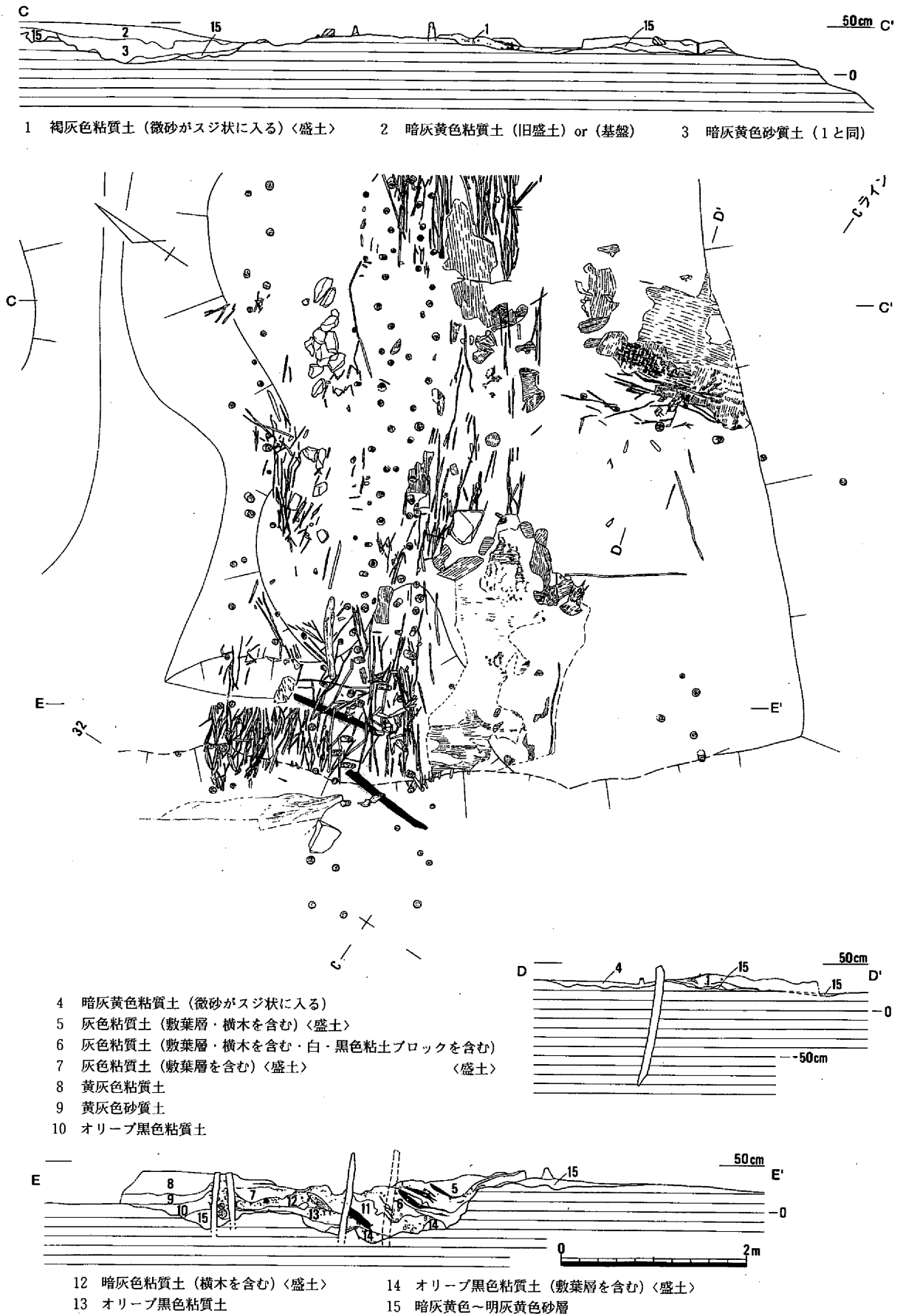
第254図 堤防中央部 築造過程〈第3~13面〉(1/60)



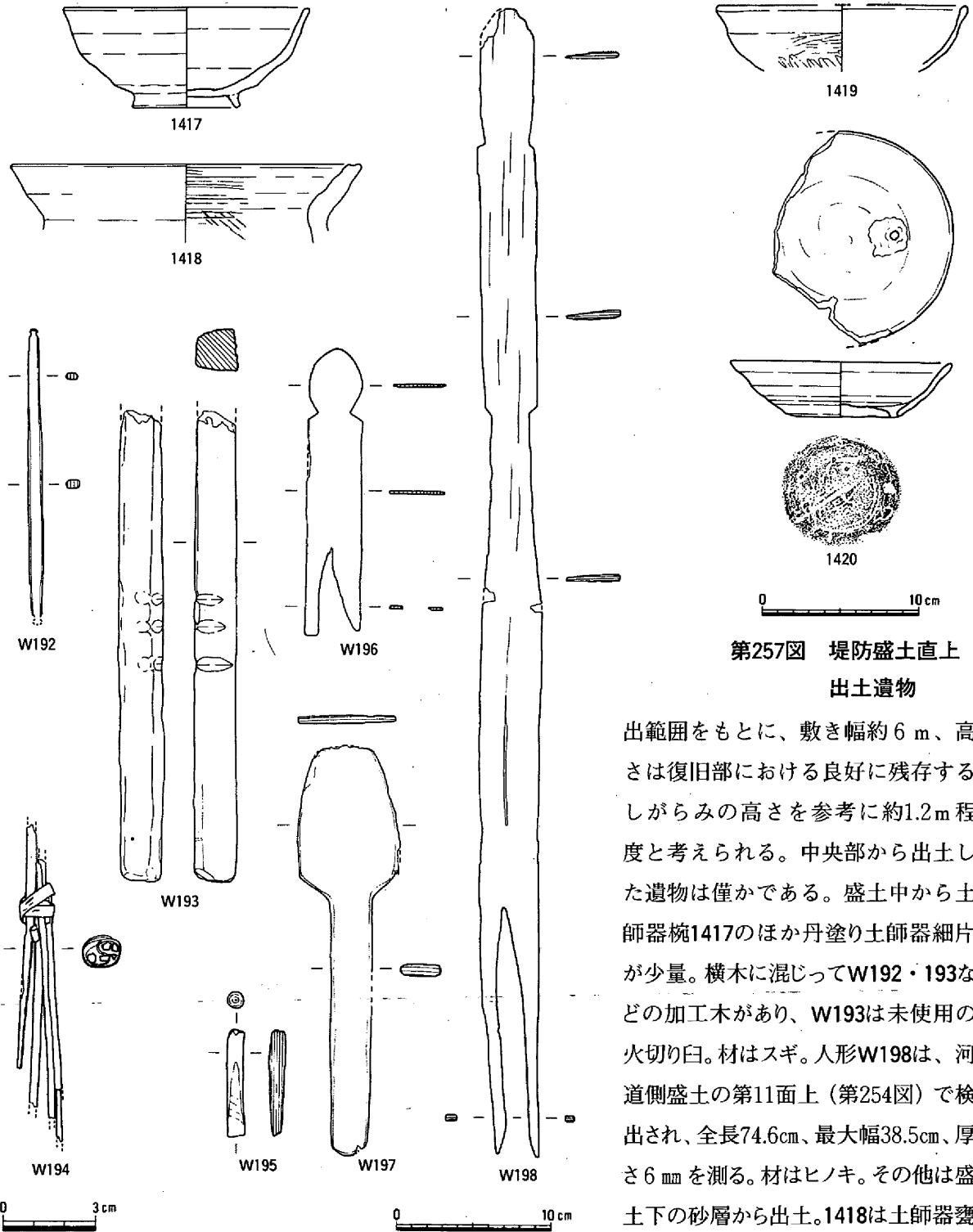
II a-b間部分拡大 (1/20)

として確認できた大きさは2.5~4×1.2mである。そして、それらを横木で押さえている。第4面の植物を鑑定した結果、稲藁である可能性が高いという報告を受けた。堤防中央部の南西側では、復旧部に堆積した砂を除去すると、盛土の断面が露出した。この部分で、堤防に使用されていたと考えられる杭(第255図、黒塗り)が2本倒れたまま、盛土内部に埋め込まれている状況が観察された。また、北東端部でも同様の状況がある。このことから、中央部の堤防は少なくとも一度、改修されていると考えられる。盛土直下、基盤の粘質土直上に部分的ではあるが、砂層が見られ、これが洪水の堆積層に相当するのかもしれない。中央部での堤防の規模は、残存盛土が少なく裏法りを解明できなかったため推定となる。杭列群のすぐ北西側に杭列と並行して走る浅い溝があり、これは堤防の裏法りを水が流れた痕跡である可能性が高く、このことと、盛土検

第3章 発掘調査の概要



第255図 堤防中央部〈2〉（1/60）



第257図 堤防盛土直上
出土遺物

出範囲をもとに、敷き幅約6m、高さは復旧部における良好に残存するしがらみの高さを参考に約1.2m程度と考えられる。中央部から出土した遺物は僅かである。盛土中から土師器碗1417のほか丹塗り土師器細片が少量。横木に混じってW192・193などの加工木があり、W193は未使用する火切り臼。材はスギ。人形W198は、河道側盛土の第11面上（第254図）で検出され、全長74.6cm、最大幅38.5cm、厚さ6mmを測る。材はヒノキ。その他は盛土下の砂層から出土。1418は土師器甕、W194はヒノキを細く割いたものを樹皮状の紐で留めている。W196はヒノキ製の

第256図 堤防中央部 出土遺物

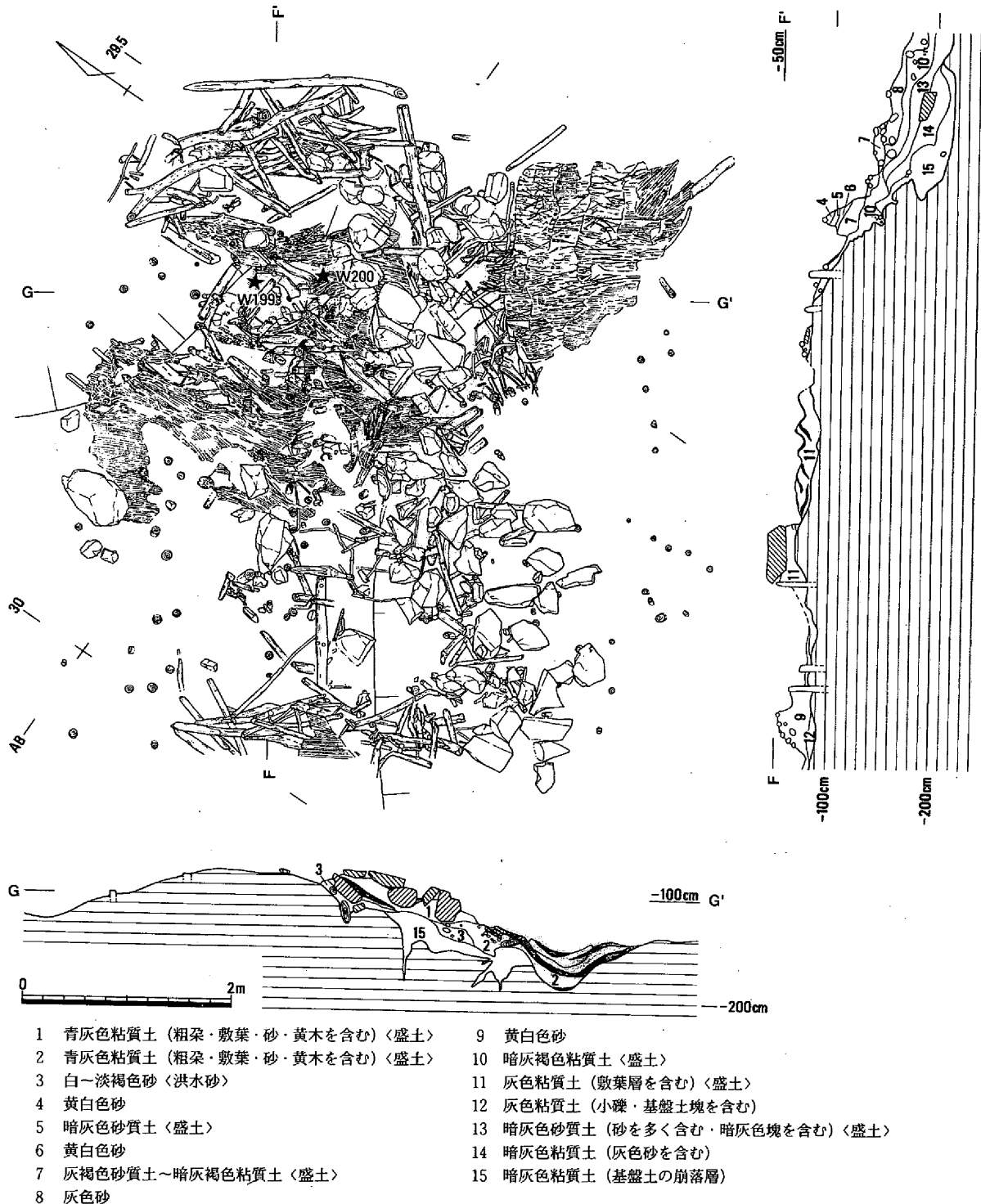
の人形で、全長18.1cm、幅3.6cm、厚さ2.5mm。W197は杓子形木製品。砂層出土の木製品は流されてきた遺物と考えられる。盛土中から出土した人形W198も堤防に改修・補修の痕跡が見られるので、堤防の築造に伴うと一概に言い難い。土器の特徴は10世紀後半示していると考える。

先端部（第249・251・258・259図、図版48）

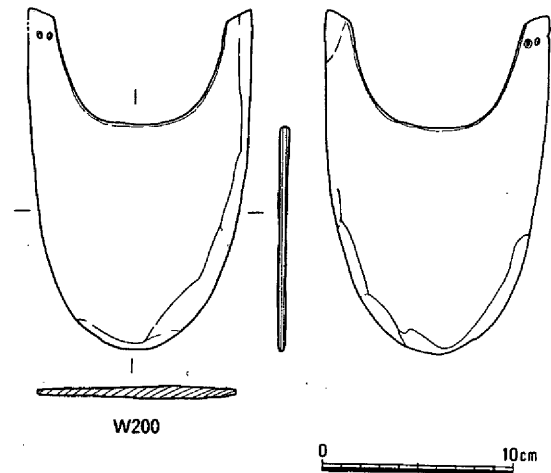
河道が北へ向きを変える部分に位置し、堤防は主軸を変えることなく、直線的に延び、河道内に乗

第3章 発掘調査の概要

り出すように短く突き出して終わっている。中央部から続く杭列は先端部末端まで確認される。河道の斜面部から河道底にかけては比較的盛土が残存し、内部には草本類が埋め込まれている。表法下半には30~50cm大の石が多数見られた。遺物は、堤防先端部の先端が下がりかける肩部付近で、木製品2点が出土した。W199は小形の卒塔婆で、「阿弥陀佛」の墨書が見られる。厚みのある立体的なものである。頭部は円錐形で2条の溝を巡らし、墨で塗りつぶしている。残存長20.5cm、最大幅2.3cm、最大厚1.2cm。材はヒノキ属。W200は鋤先形の木製品で、厚さは5mm。簡単に刃部を両面から作り、片



第258図 堤防先端部 (1/60)



第259図 堤防先端部 出土遺物

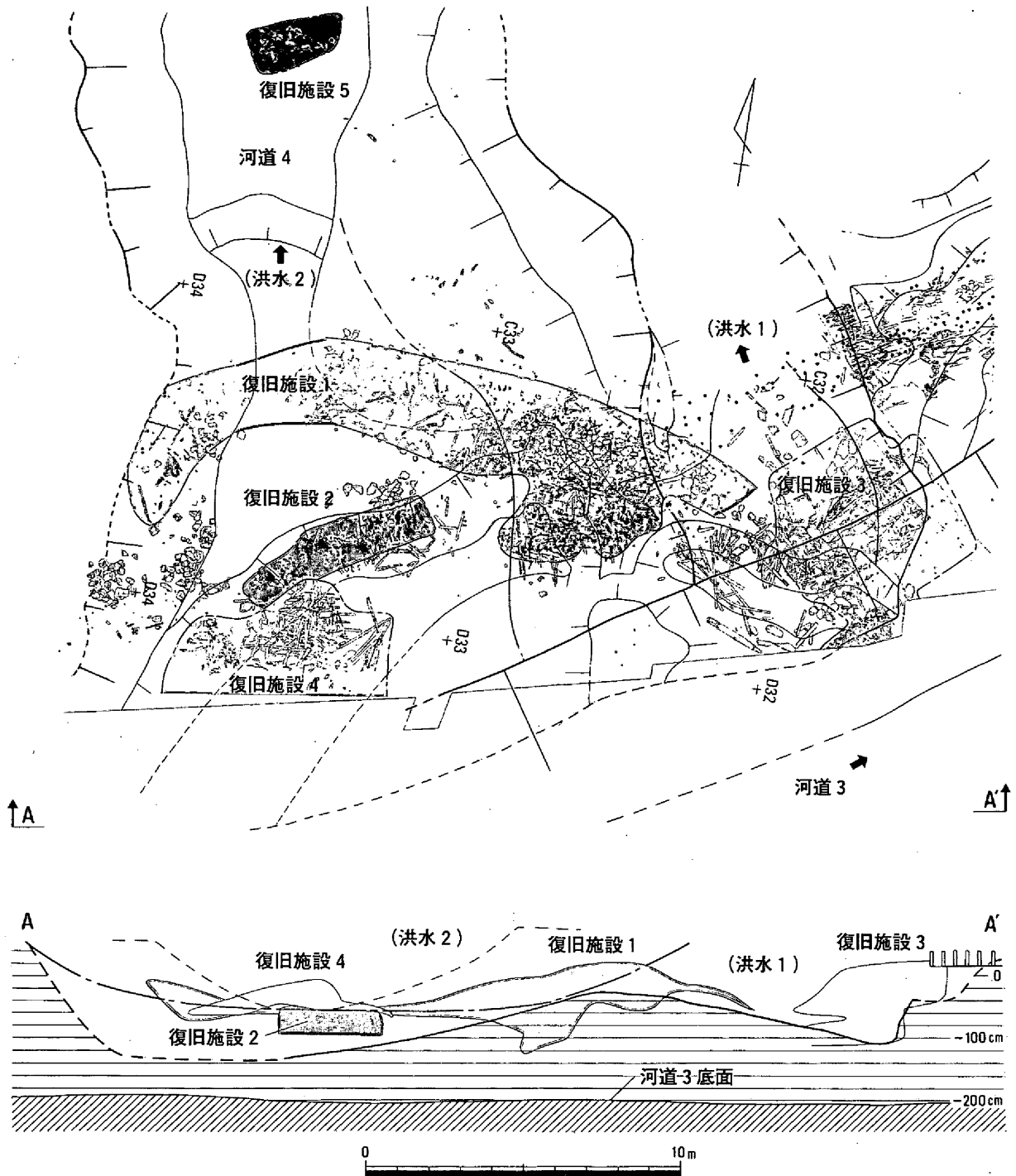
方の耳の端部には樹皮状の紐を通した穴が2つ開く。材はヒノキ。実用品ではなく、祭祀用、あるいは様（ためし）のようなものかもしれない。どちらも盛土と直下の河道の堆積層と考えられる薄い砂層との境から出土したため、流されてきた可能性もあり、堤防の築造もしくは改修に伴う遺物と断定出来ない。(物部)

復旧部 (第249～251・260図、巻頭図版5-2、図版49)

今回検出された復旧部は、河道3の左岸側に検出されたもので、先述した堤防の上流部にあたる。河道3の流路は、奈良時代の河道2以来橋梁を破壊した近世初頭に至る間、その堆積状況を見ると常に厚い砂層の堆積が認められ、度々大きな洪水に見舞われてきた状況を示している。河道3もまた、強固に構築された堤防を苦もなく破壊してしまうほどの洪水に幾度となくあっていることが明らかである。まず、堤防を破壊した洪水、復旧施設3を破壊した洪水「洪水1」、さらに復旧施設1・2・4を破壊した洪水「洪水2」と大きく3回の大洪水に見舞われている。この大洪水は、常に同一地点の河道左岸を決壊させている。この地点では、西から東方向に流走してきた河道が丘陵にさえぎられて流路を北東方向に変えており、このことが丘陵対岸の堤防を決壊させている起因となっている可能性も考えられる。

検出された復旧部は、「洪水1・2」によって大きく破壊させられた堤防の復旧施設で、復旧施設は構築時の現状を留めているものはほとんどない。しかしながら、洪水で押し倒されながらも部分的に長大な杭、横木、小枝で杭に縫った柵、さらには小枝をpushえた石などで構築された復旧施設が検出され、当時の構築技術のある程度復元できる状態であった。また、復旧部は同一地点のため、当初の堤防施設や前段階の復旧施設が部分的に残存しており、その残存部も再利用されているとも考えられ複雑な状況を呈していた。

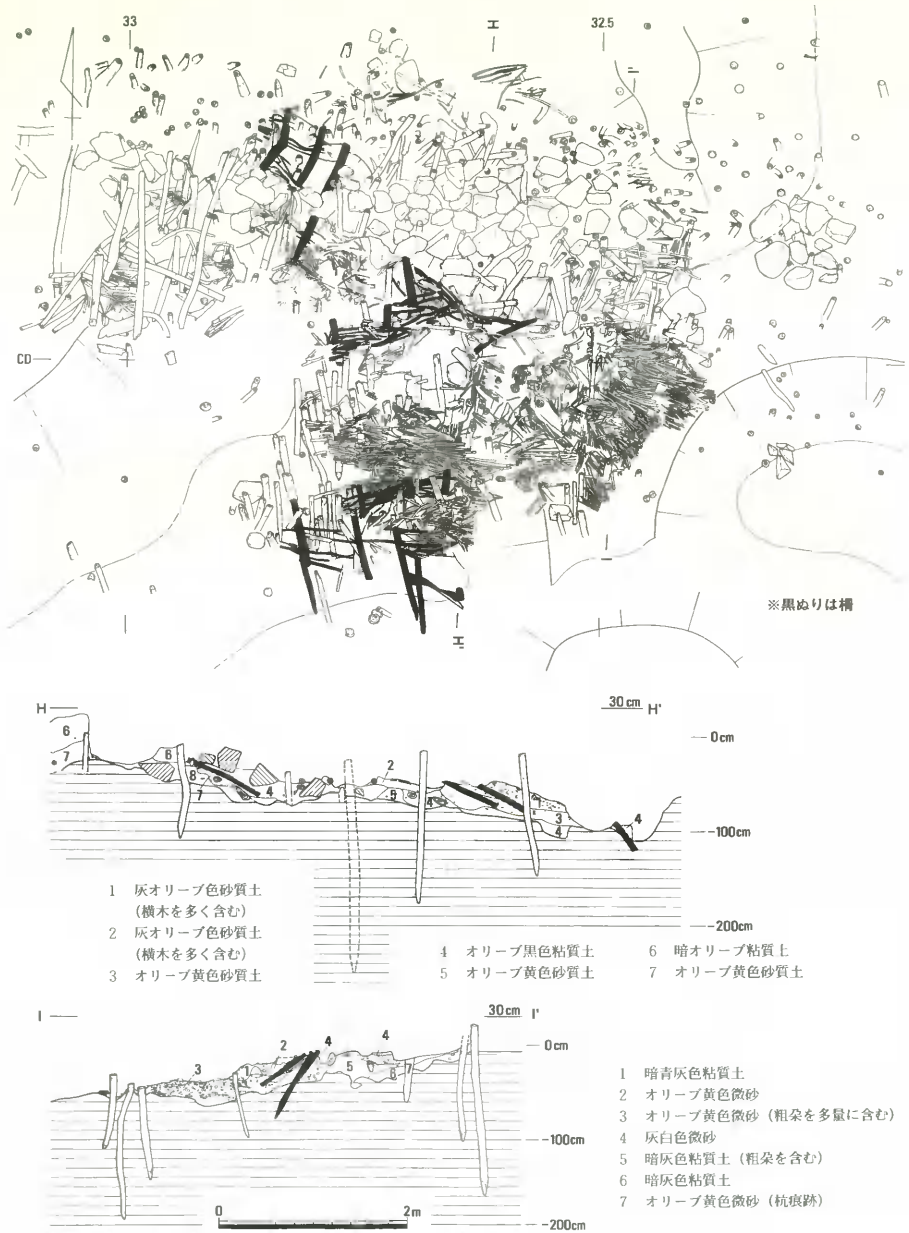
以下の報告では、おおむね「洪水1」によって破壊させられたものを復旧施設3、「洪水2」よるものを復旧施設1・2・4とした。



第260図 堤防復旧施設 配置 (1/200)、断面・見通し (縦1/100、横1/200)

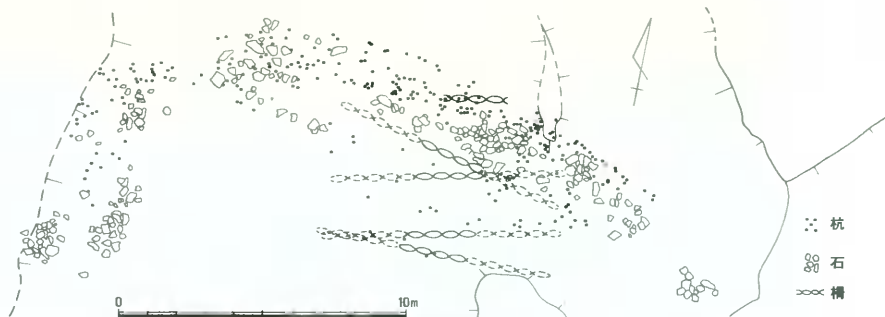
復旧施設1 (第249・251・260～262図、図版50)

この復旧施設は、復旧施設2・3の間に検出された。検出された施設は、以前の洪水で堤防が押し切られた「堤切所」を復旧した施設が、再び「洪水2」によって破壊された状態と考えられる。しかしながら、第262図のように杭列、柵列が一定方向ではなく複数方向に存在することなどから単一の復旧施設ではなく、時期差が生じる施設が複雑に絡みあっていることも考えられる。検出状況は、杭、小枝、むしろ状のもの、石などが散在し、特に杭は堤防が決壊した方向に大きく押し倒された状態であった。第261図は、「洪水2」によって生じた河道4の肩部付近の検出状態であるが、当初の堤防、復



第261図 堤防復旧施設 1 (1/60)

旧施設3などの施設の杭などが残存しており、その判別は困難であった。施設の検出された状態を見ると、河道側には杭列が数条打たれており、その杭には小枝を束ねたものを縫って柵を構築しており、柵と柵の間には小枝を大量に埋め込んでいた。これらの上部にはむしろ状の断片も認められ、むしろ



第262図 堤防復旧施設1 概念図 (1/200)

状のものを敷きながら盛り上げていたと思われる。また、柵列の北側には石が列状に集積しており、これは崩れやすい決壊部の補強に投げ込まれたものと考えられる。

復旧施設2 (第249・251・260・263図)

この復旧施設は、復旧施設1の南西に隣接するもので「洪水2」によって「堤切所」された最深部に位置する。この施設は、堤防の中心軸の延長上に約6mにわたり杭が密集して押し倒された状態で検出された。杭は、径10cm前後で、長さは2m前後を測り、マツ材が使用されていた。これらの杭群は、隙間もないほどに密に打たれており、「堤切所」の最深部を根固める目的としての施設と考えられ、復旧施設1に接続すると思われる。



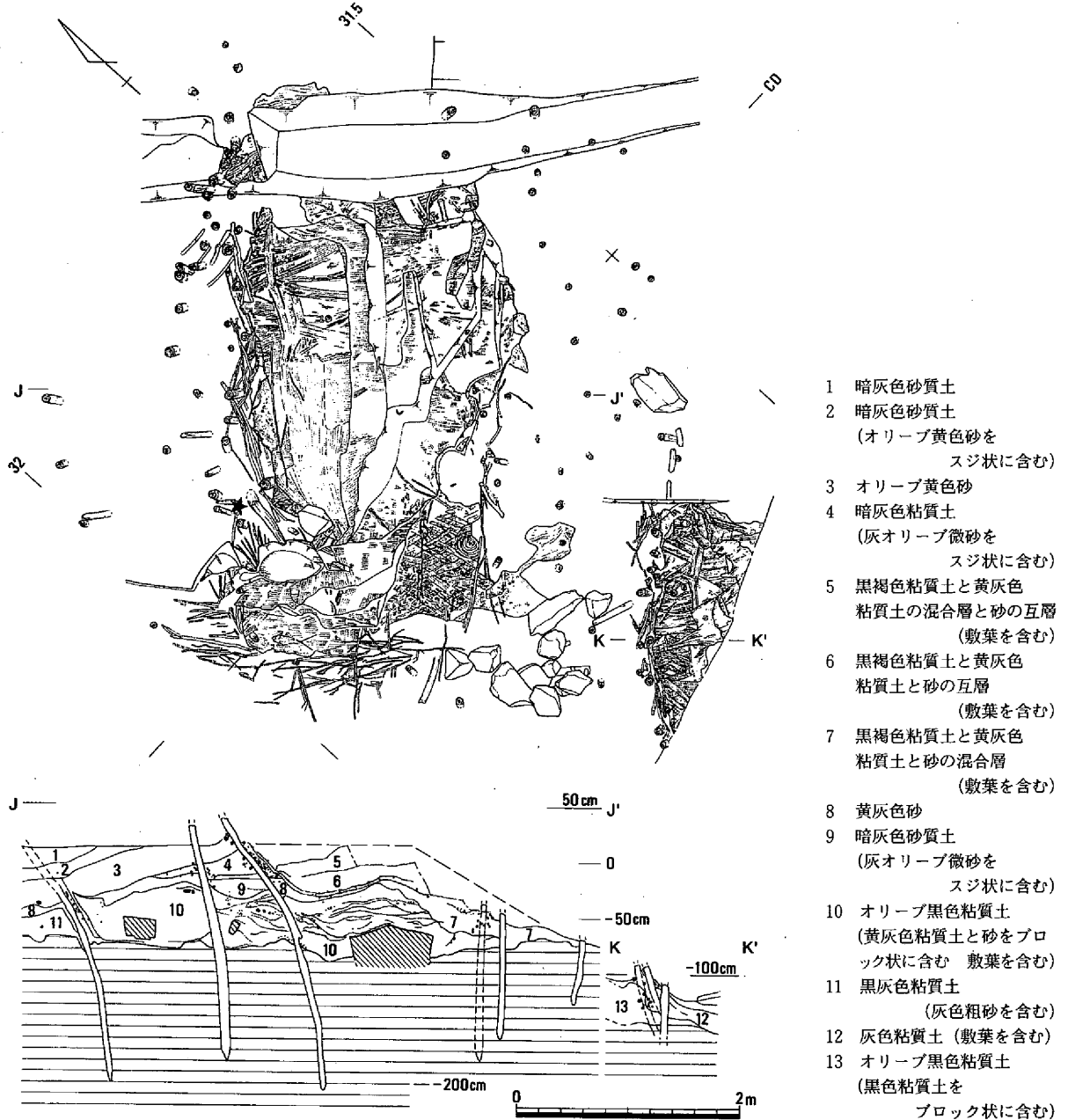
第263図 堤防復旧施設2 (東から)

復旧施設3 (第249・251・260・264図、巻頭図版6-1、図版51)

この復旧施設は、堤防残存部の上流側に隣接して検出された。施設が検出された地点は、当初の堤防が洪水によって最初に「堤切所」された部分にあたる。堤防が決壊したのちその部分が復旧され、さらに「洪水2」によって決壊は免れたものの相当の被害を受けた状況を示していた。確認された状況は、第264図のように約5mにわたり施設が検出され、上流側はのちの「洪水2」より大きく削平を受けている。残存していた施設は、堤防中央部は欠落しており、河道側の堤防端部から法面であった。堤防と平行に約2m以上の杭をほぼ等間隔に深く打ち込み、小枝を束ねて杭を縫って柵を組んでいた。この柵を組んだ杭列は5列は確認でき、杭列の間には小枝、石を埋め込んでいた。その上部には、堤防の構築段階でも認められたむしろ状に編んだものや斜格子状に編んだものが何枚も確認でき、これらのものを敷きながら土を入れることを繰り返して盛っていき復旧していったと考えられる。第264図の第1～3層は「洪水2」にあたり、第4～13層は盛土にあたる。盛土の層と層の間、および層中には、むしろ状のものが数多く認められた。

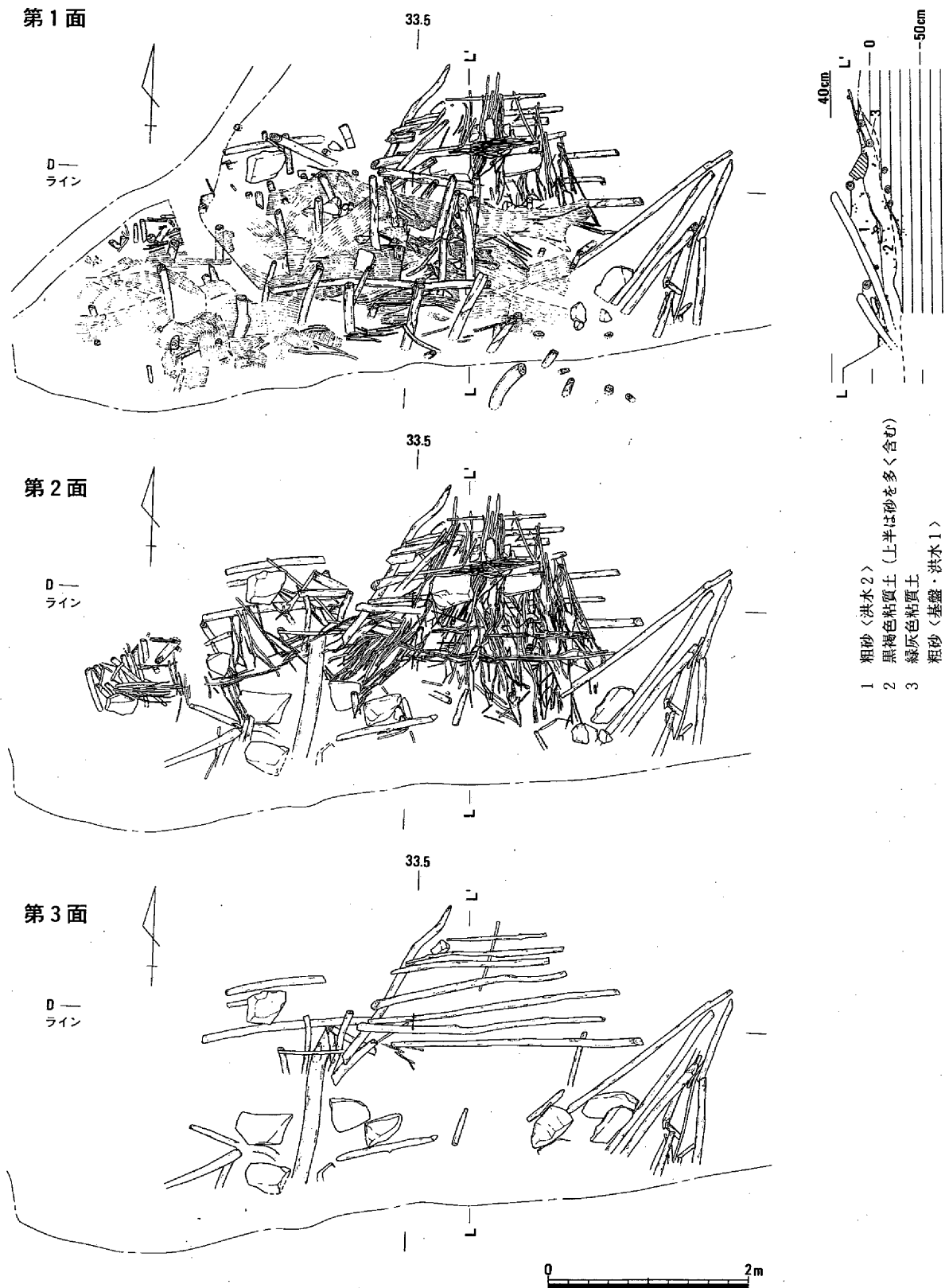
復旧施設4 (第249・251・260・265・266図、図版52・1～7)

復旧施設4は、復旧施設2の南東に隣接する位置に検出された。復旧施設2を覆っている洪水砂層



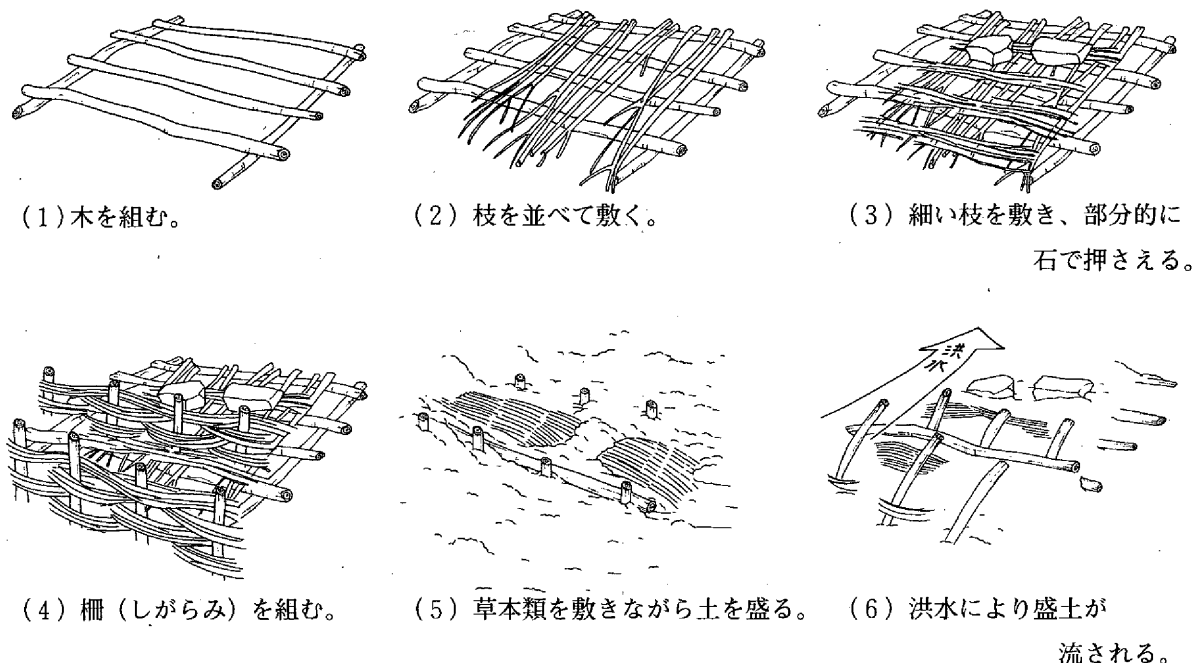
第264図 堤防復旧施設 3 (1/60)

の上部に構築されており、「洪水2」の中でも時期差のある洪水に見舞われたことが明らかである。検出状況は、他の復旧施設と同様に杭などが洪水によって押し倒された状態でありながらも、比較的良好に残存していた。この施設を復元してみると第266図のような構築工程と考えられる。まず、長さ約2m数十cm、径7、8cmの木を縦方向の両端に置き(1)、その上に横方向に数十cm間隔で方形状に組み(2)、その木組みの上部に径数cmの枝を縦方向に並べ、その上に横方向にやや細い枝を敷いている(2, 3)。上部の小枝は一面に敷くのではなく束ねたものを木組みに固定したと思われ、紐で小枝を束ねた状態も確認されている。さらに、その組み物の上に押さえとして大きめの石を乗せている(3)。この組み物は、今回の調査では他には検出されていない施設で、「堤切所」の最深部に設置された復旧部の基礎施設と考えられる。構築工程では、(1, 2, 3)と順次築くのではなく石を除く(3)の組み物を別の場所で作り堤の切口部に置いたものと思われる。このような施設は、江戸時代には「屏風返



第265図 堤防復旧施設4 築造工程 (1/60)

し」と呼ばれている工法で、堤防の欠所や切口部の深くて軟弱な部分の基礎部修復法として用いられており、今回の木の組み物は「屏風返し」の粗形となるような施設とも考えられる。次に、河道側にその組み物に絡めるようにほぼ50cm 間隔に杭を数列打ち込み、その杭に束ねた小枝を縫って柵を組ん

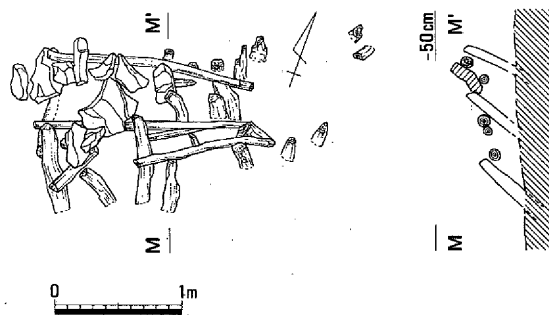


第266図 堤防復旧施設4 築造工程と洪水時の概念模式図

でいる。さらに、柵列の間にも残存しているものは少なかったが小枝を埋め込んでいるのが認められた。このような構築部の上に、むしろ状のものを敷きながら土を盛り上げ堤防を復旧したと考えられる。(中野)

復旧施設5 (第249・251・260・267図)

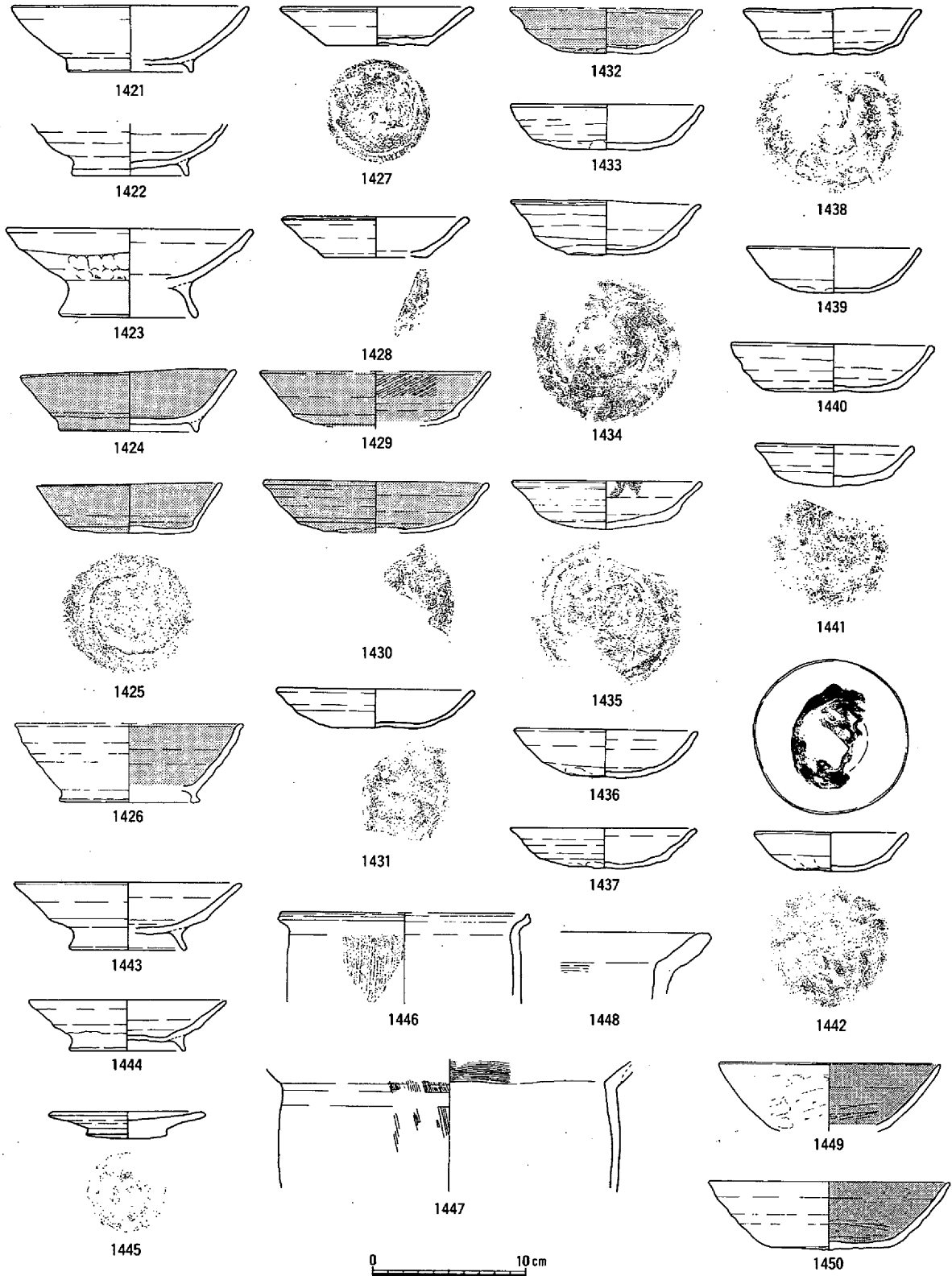
河道4の最下層部分から検出された遺構である。河道底面やや東寄りに位置し、流れに対し直交するように設置されている。縦杭を3列打ち込み、その間に横木を置く。上部には人頭大の岩石が見られる。この構造は、縦杭に細い横木を絡ませたしがらみかどうかは不明であるが、復旧施設4の後半の行程に類似していることから、堤防埋め土の土留めとして機能したと考えられる。(根木)



第267図 堤防復旧施設5

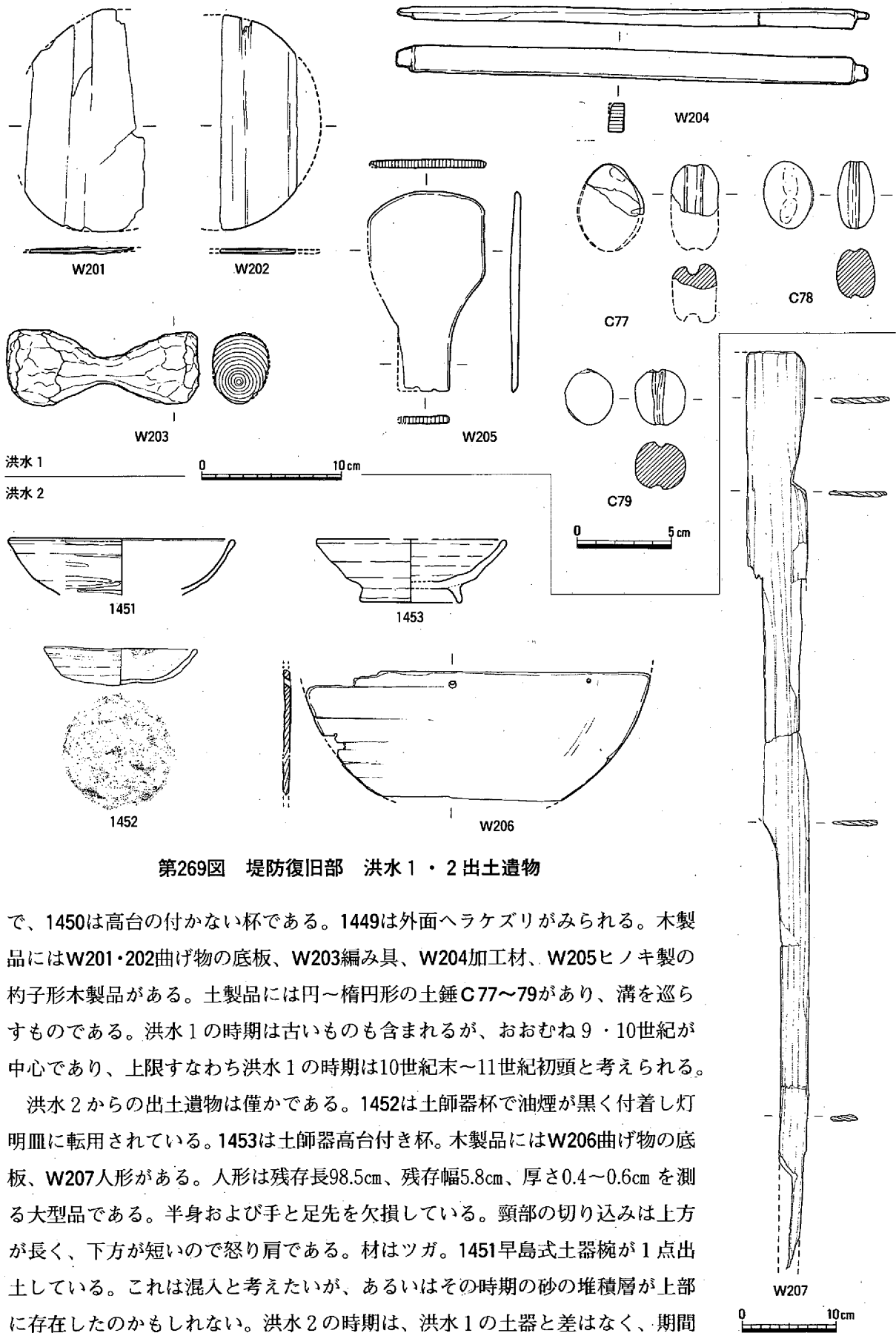
洪水1・2 (第251・260・268・269図、図版52-8、74-2)

復旧施設を覆う砂層は砂と灰色弱粘質微砂とが交互に堆積し、バームクーヘン状を呈していた。これは洪水後の再堆積層と理解されるが、切り合いが見られ、少なくとも2度の洪水があったと考えられる。古い方の砂堆積を洪水1、新しい方の砂堆積を洪水2とする。洪水1は幅約25m、深さ1.7m。洪水2は幅約20m、検出面からの深さ0.8mで河道4と接続する。洪水1からの遺物は主に砂層下部から出土し、弥生土器や古墳~奈良時代の須恵器・土師器も含まれるが細片が多く、平安時代の土器は破片が大きく、完形品も見受けられた。1421~1423はにぶい黄橙色を呈する土師器碗で、1423は底部に押圧が顕著で足高の高台が付く。1424~1426は9世紀前半の須恵器を意識した器形と考えられる丹塗り土師器杯。1425の底部外面中央には押圧が見られる。1427~1442は土師器杯で、底部外面調整は大きく、ナデ・周辺ヘラ切り中央押圧・押圧・ヘラ切りの4種類があり、数量としては底部外面に広



第268図 堤防復旧部 洪水1出土遺物

く押圧の見られるものが多い。1427・1428の2点のみヘラ切りである。1435は油煙が付着し灯明皿に転用されている。1442の底部内面には墨が付着している。1443・1444は高台付き杯。1445は平高台の皿で底部外面はヘラ切りである。1446～1448は土師器甕。1449・1450は9世紀段階の黑色土器（内黒）



第269図 堤防復旧部 洪水1・2出土遺物

で、1450は高台の付かない杯である。1449は外面ヘラケズリがみられる。木製品にはW201・202曲げ物の底板、W203編み具、W204加工材、W205ヒノキ製の杓子形木製品がある。土製品には円～楕円形の土錘C77～79があり、溝を巡らすものである。洪水1の時期は古いものも含まれるが、おおむね9・10世紀が中心であり、上限すなわち洪水1の時期は10世紀末～11世紀初頭と考えられる。

洪水2からの出土遺物は僅かである。1452は土師器杯で油煙が黒く付着し灯明皿に転用されている。1453は土師器高台付き杯。木製品にはW206曲げ物の底板、W207人形がある。人形は残存長98.5cm、残存幅5.8cm、厚さ0.4～0.6cmを測る大型品である。半身および手と足先を欠損している。頸部の切り込みは上方が長く、下方が短いので怒り肩である。材はツガ。1451早島式土器碗が1点出土している。これは混入と考えたいが、あるいはその時期の砂の堆積層が上部に存在したのかもしれない。洪水2の時期は、洪水1の土器と差はなく、期間をおかずして相次いで洪水に見舞われたものと解釈する。(物部)

(3) 埋立遺構 (第240・241・270~284図、巻頭図版6-2, 7、図版53~57-1~4)

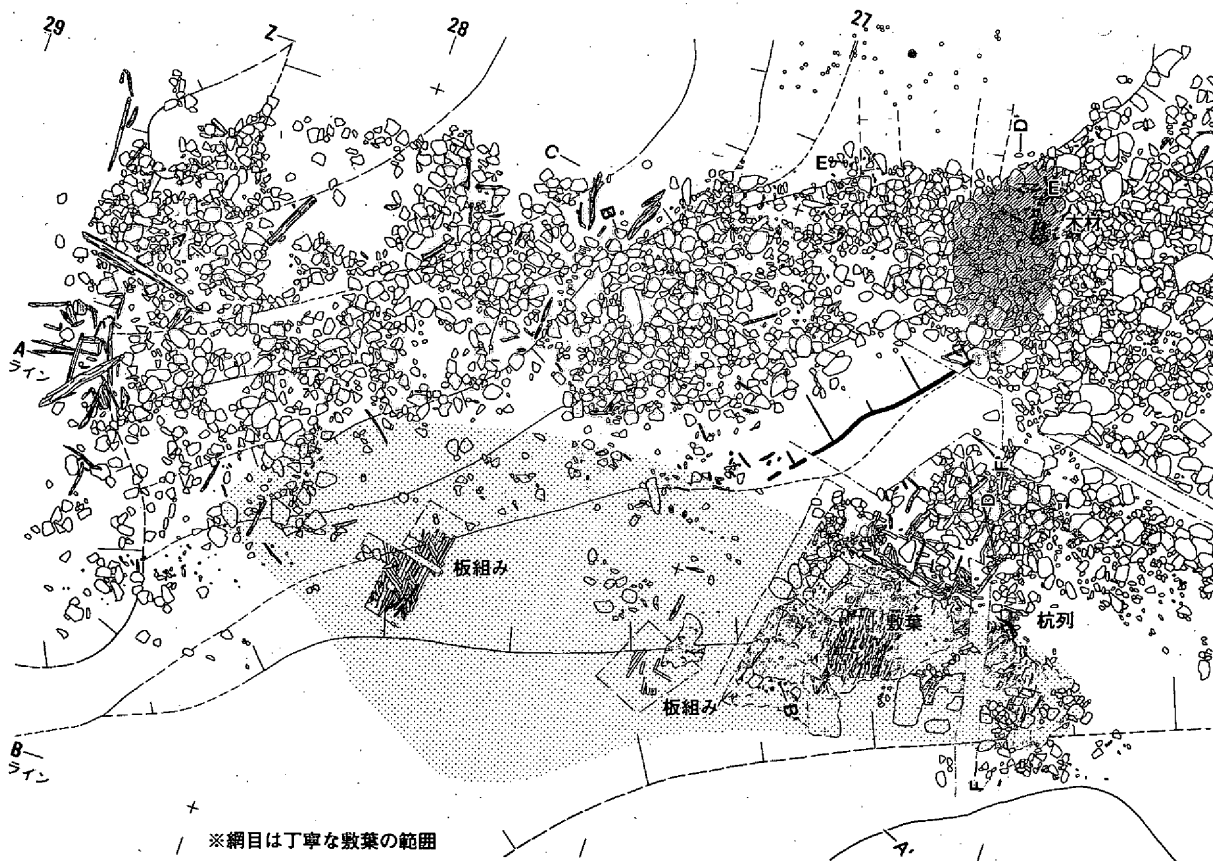
河道の下部、橋梁遺構の下層において検出した大規模な遺構である。調査区をこえて広がる巨大な遺構であるため、その機能について完全に解明できたとは言い難い。また、埋立遺構1の調査中に大規模な洪水の被害を被ったため、当初企図した断面図のいくつかを断念せざるをえなかった。

第240図に示すように河道3が丘陵から離れていくのが本調査区付近であるが、この部分で河道は北～北東方向へむかう複数の流路に分かれる。これらのうち主流であったのは流下方向を同じくする河道3-1とみられる。埋立遺構1は河道3-1を中心にその分流である河道3-2・3-3の上に築かれた遺構であり、さらにその東側には埋立遺構2が築かれる。これらは河道3北岸の堤防、埋立遺構2東側の「護岸」と一体となって河道の制御を行い、河道群を河道5のみにまとめる施設であると考えられる。

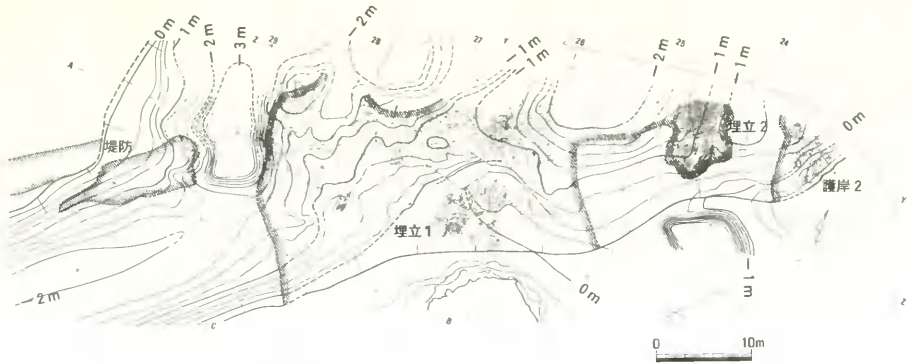
埋立遺構1 (第240・241・270~282図、巻頭図版6-2, 7、図版53~55・76-2)

検出範囲で遺構は東西35m、南北17m以上の長方形の平面形をなす。南端は丘陵先端から始まるため弧状を呈し、西端はほぼ直線をなして北へ下降し河道5底面付近に達する。北端は西隅がやや北に突出するとみられ、中央以東は既掘調査区および調査区外に遺構が広がっている。東側は確認できた範囲を示しており、北東の河道部の埋め土を介して埋立遺構2に接続する形となるが、掘り下げがすでになされていた部分を考慮に入ればもとは全体が埋立遺構2に続いていた可能性があると考えられる。

丘陵先端部に接する南端中央が最も高く(海拔0.30m)、そこから北へはやや下降しながら高まりがのびる。高まりは西側、27ラインの東4m付近に肩をもち、そこから角礫の広がりとなる北西端(-2.20m)にむかって下降する。なお、肩部の南半は橋梁2によって削られている。



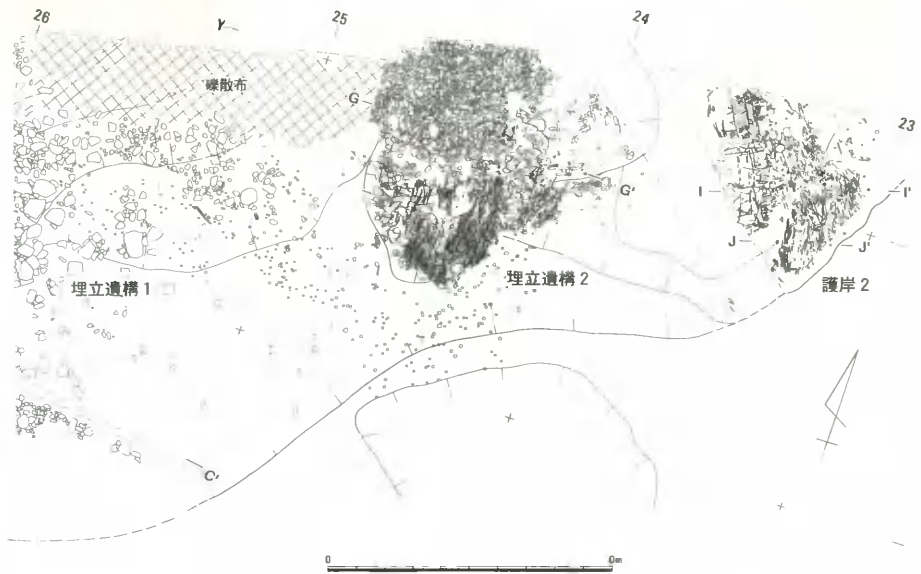
第270図 埋立遺構・護岸全体配置 (1/200) 西半



第271図 埋立遺構1・2 護岸地形 (1/600)

遺構の東西方向の断面形は、丘陵先端付近では「」字形をなす。北側はそれと同じか、あるいは東にも斜面をもち、台形になると推定される。北東-南西に軸線をもち西に長い斜面をもつ堤防ないし護岸というべき形である。最終的な外形は-0.75mより上が土で覆われ、それよりも下は石組み、端部は角礫の広がりとなる。なお、第270図の南西半・C断面以南の範囲のうち、西半の礫のない部分はこの最終埋め土の上面を示しており、東半はそれを除去した状態である。

遺構が最も厚い部分は河道3を埋める遺構中央付近で1.8m、南の丘陵に近い部分で1.25mを測る。遺構は土砂・石材・木材・稲藁などを用いて築造されている。大半の埋め土は水中への埋め土であったようで埋め土中に堆積砂層を挟むことも多く、通常の盛土にくらべ、人為的な土層かどうか判断が

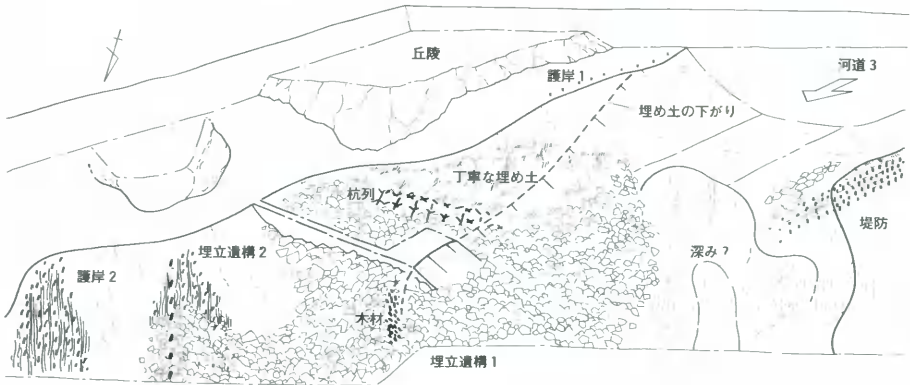


東半



第272図 平安時代の遺構配置（上空から）下が北

※埋立遺構2・護岸2は調査区の水没防止のため埋めもどしている。



第273図 平安時代の遺構イメージ図（北西から）

むずかしい場合が少なくなかった。大規模な遺構であるため築造過程は一樣ではないようで、不明な点も少なくないが、判明した構築順に記載する。

当初になされたとみられるのは1. 丘陵先端部斜面への巨岩を含む石材の投入（第275図B30層）、2. 河道3-1北東部への大量の木材の投入（第278図・279図10層）、3. 河道3-2および3-1西端の角礫

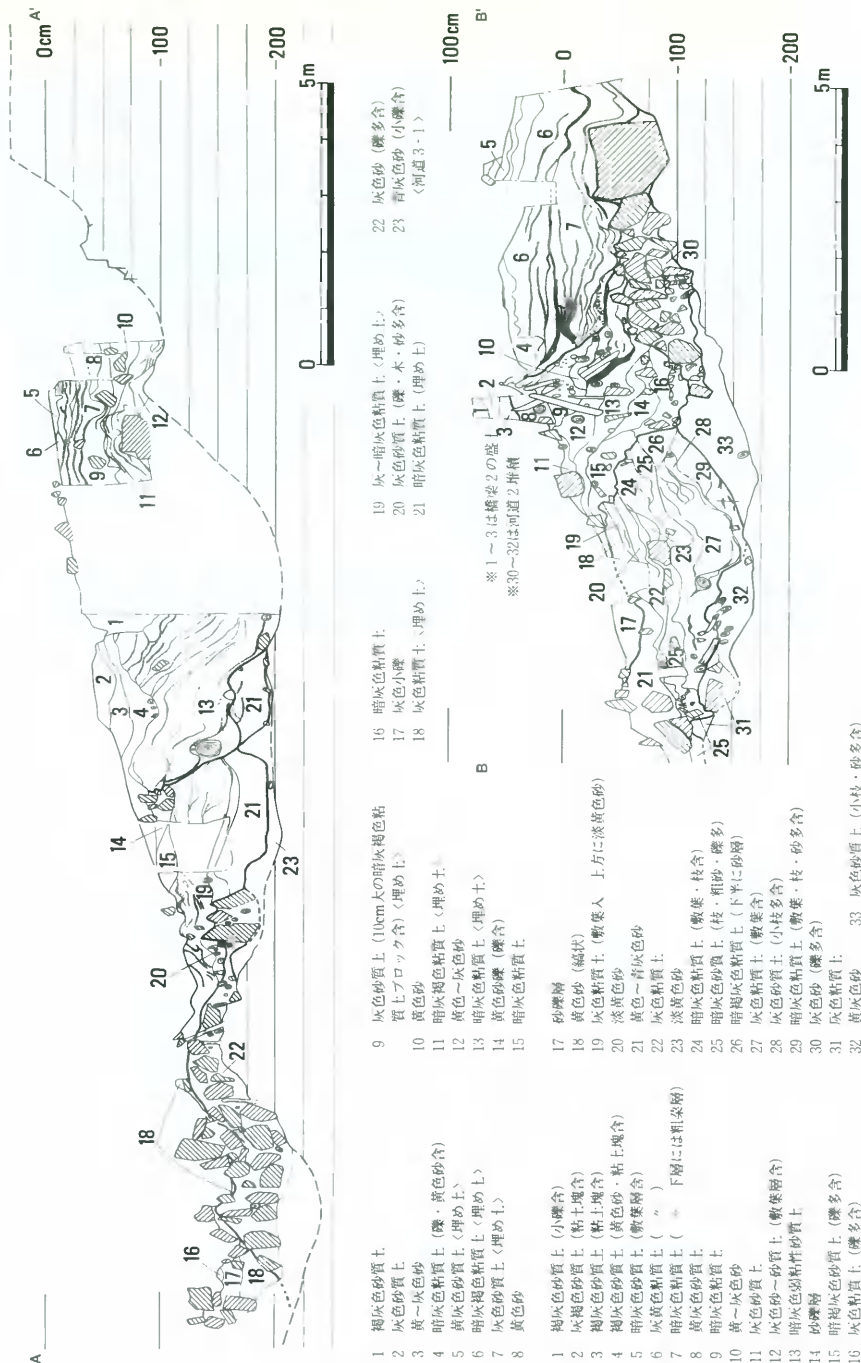


第274図 埋立遺構 1 (北西上空から)

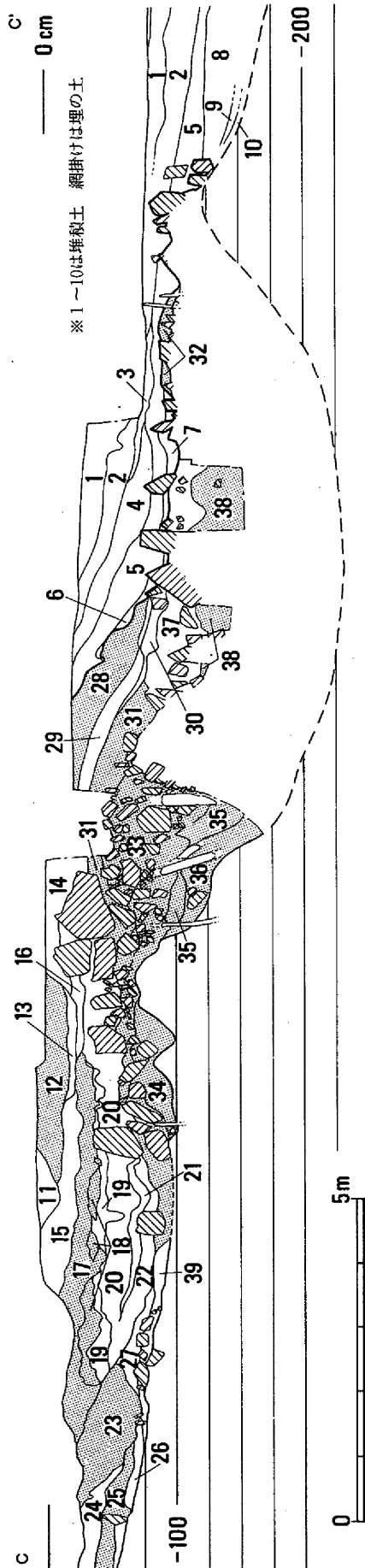
による埋め立て(第275図A22層)である。三者の先後関係は不明であるが平行してなされたとも支障ないと思われる。このうち3では同時ないし先行して多数の杭が打ち込まれており、石組みの間に太い杭が散見される状態であり、西端部では帯状の杭群とそれにかまむ丸太材が礫群の先端に設けられておりこれで礫を止めているようである。一方、2では木材層中～下に大小の杭が見られたが、基盤に達しないものもあり、杭を打って木材を投入し、上部は杭にかまませながら木材を設置したとみられる。続いて4、河道3-1東半～北西部の埋め立てがなされる。上記2の部分よりも西側では敷葉を介在させて粘質土による埋め立てがなされ、その間に粗朶や角礫を含む(第275図B18～27層)のに対し、東側では敷葉を用いず角礫・砂礫の使用が顕著であった(第279図D6・7層)。また、同時に河道3-3の埋め立てもなされたとみられる(第279図E)。

これによって河道3-1は中央部が埋められ、溝状になった河道が南の丘陵側に寄せられる。(第281図)。埋め立てられた部分のうちの東半部(27ラインよりも東側)ではさらに6、杭を打った後、巨石・角礫による埋め立てがなされる(第280図8層)(第279図D5層)が、それに先行して丘陵先端のF断面付近では5、長さ5mにわたって、交差させて打ち込んだ杭列を2条設け、6の工程でそれに斜めに架けた横木を固定するという工作が行われている(第280・281図)。そして、7、この木組み部分の南面には多数の横木を渡し、それを縦方向の粗朶で覆った後、溝状部分の全面に最大厚さ12cmの粗朶層を敷く(図版53-3)。この後、8、溝状に残った部分を敷葉を繰り返しつつ埋める(第280図3層)。敷葉にはおもに藁が使用されており、それを編んだかともみられるものも一部に見られる。

この溝状部分の西部、28Aの東4mとその東側6mの2ヶ所において、幅7cm、長さ2.3m前後、

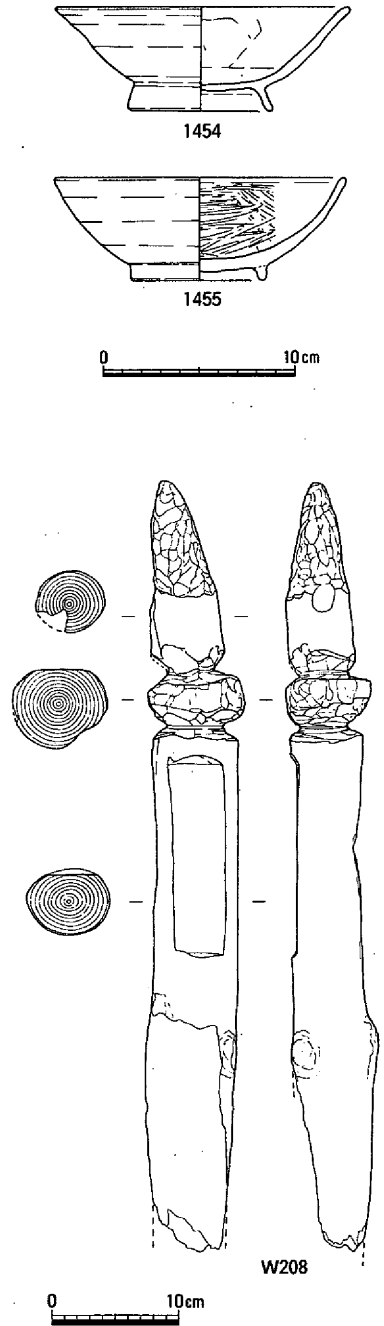


第275図 埋立遺構1断面A・B(縦1/50、横1/100)



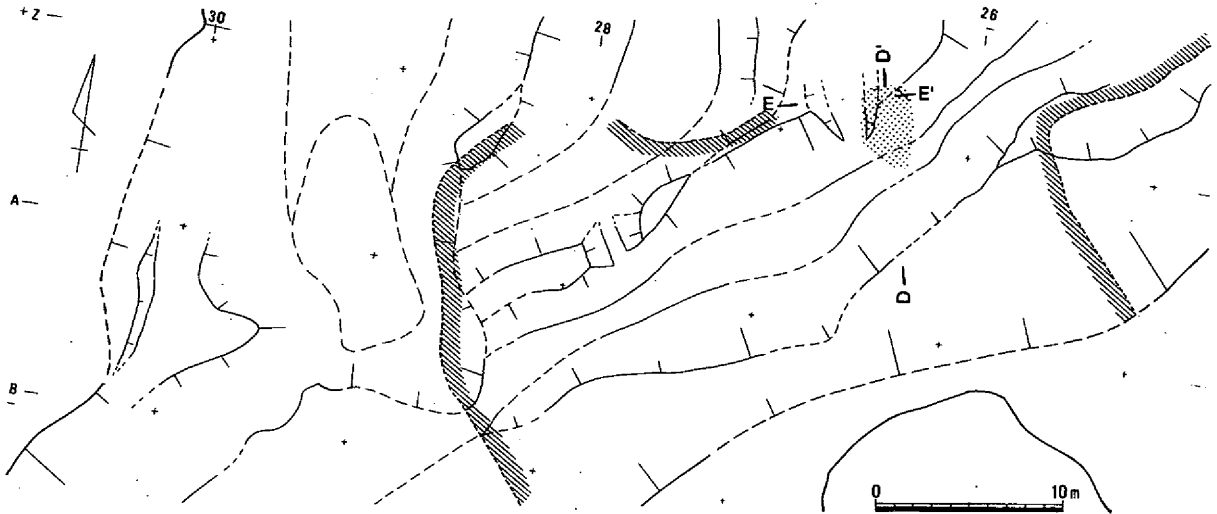
- | | | | |
|--------------------------------------|----------------------------|-----------------------------|---------------------|
| 1 灰色砂質土 | 10 砂 | 20 黒灰色粘性砂質土 | 30 黄色粗砂 |
| 2 灰色粘質土 | 11 黒灰色粘性砂質土 | 21 灰黄色砂 | 31 灰黒色粘質土 |
| 3 黄色砂 | 12 灰粘質土・褐色砂・褐色砂・暗砂質砂質土がまじる | 22 淡黄色砂質土〈水成層〉 | 32 暗褐色粘質土 (粘性が強い) |
| 4 黄灰色砂質土 (黄色砂・暗灰色微砂の薄層) | 13 黄褐色砂 (礫を含む) | 23 淡黄色微砂質土 (暗灰色微砂質土の塊を含む) | 33 黄褐色砂礫 (小礫を多く含む) |
| 5 暗灰色粘質土 (部分的に黄灰色砂質土を含む) | 14 暗灰褐色砂質土 | 24 灰砂質土〈堆積か〉 | 34 灰色粘質土 (粗砂を下部に含む) |
| 6 暗灰色粘質土 | 15 暗灰褐色砂質土 (黄色砂を含む) | 25 暗青灰色粘質土 (黒色土塊を含む) | 35 暗灰色粘質土 |
| 7 暗灰色粘質砂質土 (部分により暗灰色粘質土と白色砂の薄い互層となる) | 16 暗灰褐色粘質砂質土 | 26 暗褐色粘質土 (全体に塊状粗砂を含む) | 36 暗灰色粘質土 (黄色砂礫を含む) |
| 8 白色砂 | 17 明~暗灰褐色砂質土 (黄褐色粘質土塊を含む) | 27 明灰色砂質土〈水成層か〉 | 37 粗砂と暗灰色粘質土の互層 |
| 9 暗褐色粘質土 | 18 暗黒色~明黄色粘質土塊 | 28 暗灰色砂質土 (土質が均質でなく埋め土の可能性) | 38 灰色粘質土 (藪葉を含む) |
| | 19 明黄色砂 | 29 黄色砂 (枝・木材を多量に含む) | 39 暗褐色粘質土 (粗砂を含む) |

第276図 埋立遺構1 断面C (縦1/50、横1/100)

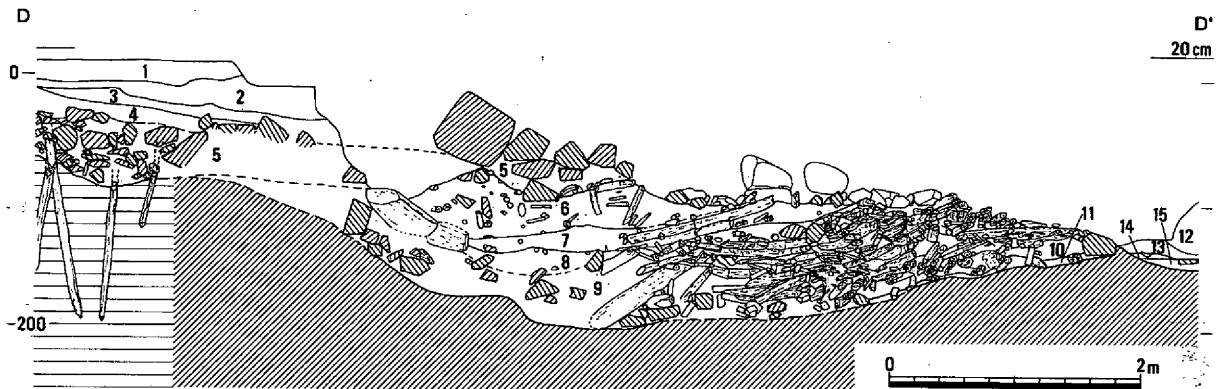


第277図 埋立遺構1 出土遺物

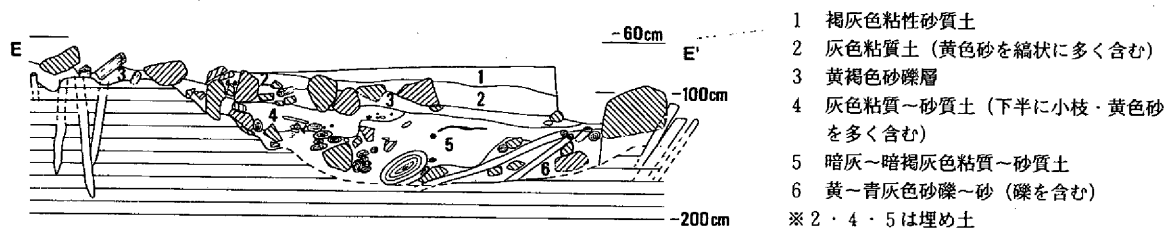
厚さ1cm弱の薄い板材を斜めに組み編んだ構造物 (図版53-5) が敷かれているのを確認した (第270図板組み)。樹種はモミ属でヒノキではないが、古典にいう「檜垣」にあたる可能性が考えられるため、ここでは以下、檜垣と呼ぶ。埋め立て遺構1ではこの2ヶ所であるが、後述の橋梁



第278図 埋立遺構1 木材による埋め立て (1/400)



- | | | |
|--------------------|----------|----------------|
| 1 褐色粗砂 | 11 褐黄色粗砂 | 6 灰色粘質土 (砂を含む) |
| 2 黒褐色砂質土 <盛土?> | 12 茶色粘質土 | 7 灰色砂質土 |
| 3 オリーブ褐色粘性砂質土 <盛土> | 13 青灰色細砂 | 8 灰色粗砂 |
| 4 オリーブ黒色粘質土 <盛土> | 14 褐黄色粗砂 | 9 灰色粘質土 |
| 5 灰色砂 (礫を含む) | 15 青灰色粘土 | 10 青灰色細砂 |



- | |
|-----------------------------|
| 1 褐灰色粘性砂質土 |
| 2 灰色粘質土 (黄色砂を縞状に多く含む) |
| 3 黄褐色砂礫層 |
| 4 灰色粘質～砂質土 (下半に小枝・黄色砂を多く含む) |
| 5 暗灰～暗褐色粘質～砂質土 |
| 6 黄～青灰色砂礫～砂 (礫を含む) |
- ※ 2・4・5は埋め土

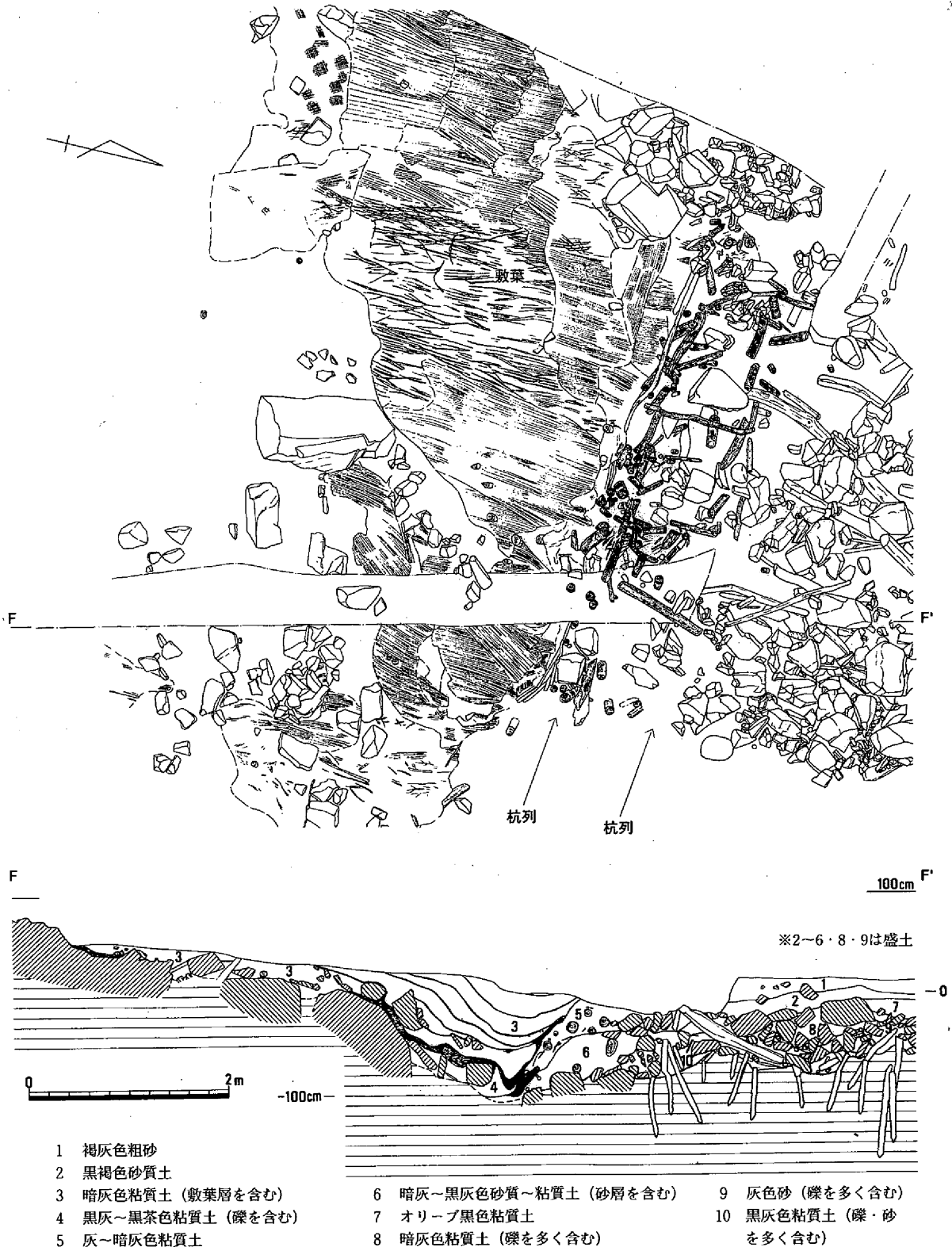
第279図 埋立遺構1 断面D・E (1/60)

2では多用され、いずれも埋め土工程の区切りに用いられていることが判明しており、同じく埋め土作業の区切りを示すと考えてよい。西側の檜垣は東に下降していることから、西側を埋めた後に檜垣を置き、さらに東の檜垣までの部分を埋め、最後に東側の残り部分を埋めるという工程をとったとみられる。この作業によって低い部分はなくなり、9. さらに若干の埋め土がなされて遺構が完成する。

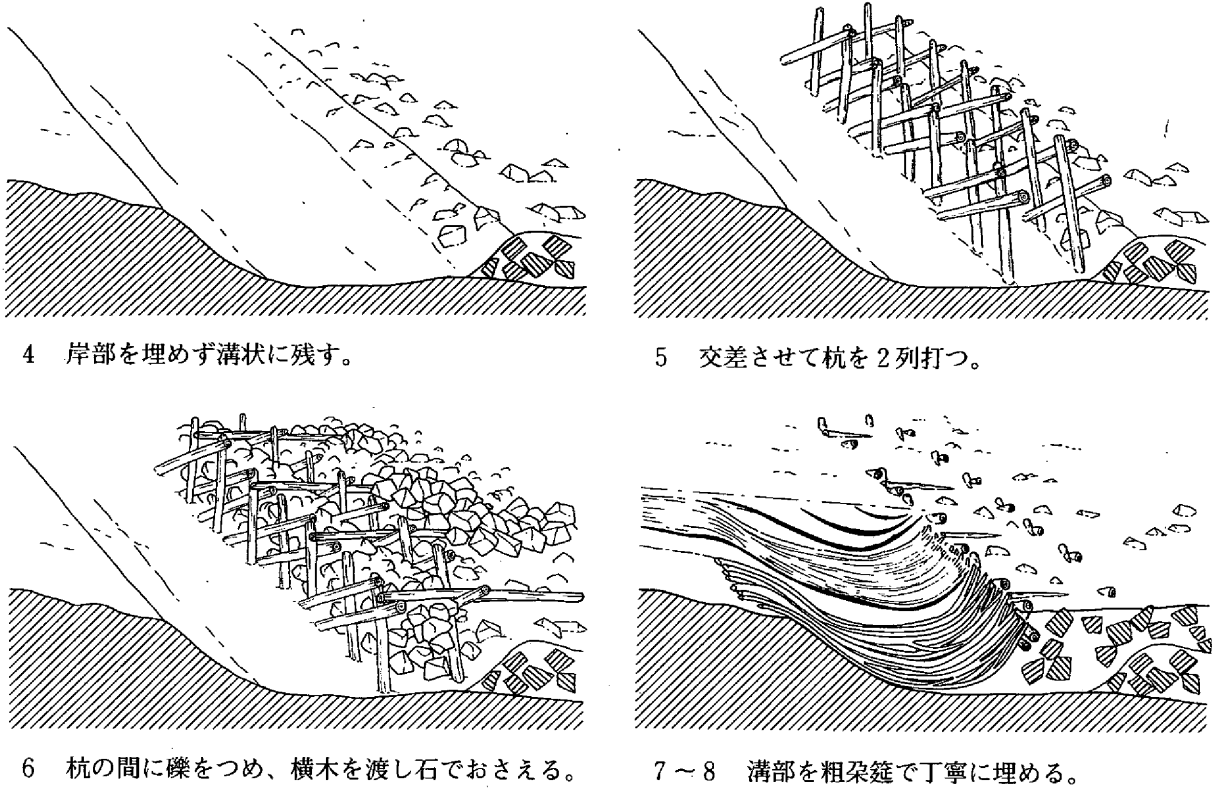
以上のように埋立遺構1は溝を作り出しながら埋めるという複雑な工程をとって河道の埋め立て・切断を行っている。この工程がなぜなされたのか推定がむずかしいが、流水を制御しながら埋め立てるために、こうした工程をとったと考えざるをえない。遺構の築造は丘陵先端にあたるD・F断面付

近が常に最も入念になされており、ここが中心線になるとみてよい。担当した調査区の埋め土の形状からみて、このラインの西側に河道5の東肩部を形成するのがこの遺構の目的であったと考える。

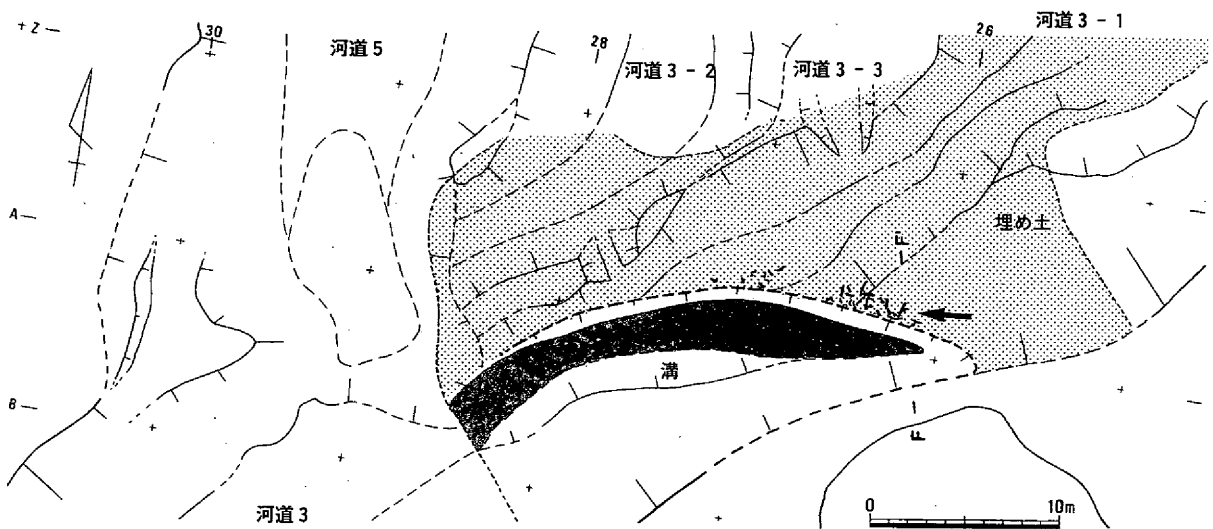
遺構西裾の石材間から出土した土師器碗1454・1455が10世紀後半に位置づけられ、埋め立てられた河道3-1堆積層の最も新しい遺物1318の年代も同時期を示している。さらに、遺構西斜面上に堆積す



第280図 埋立遺構1 中央南端部 (1/60)



第281図 埋立遺構1 築造工程概念模式図 (番号は227頁文中の番号に対応)

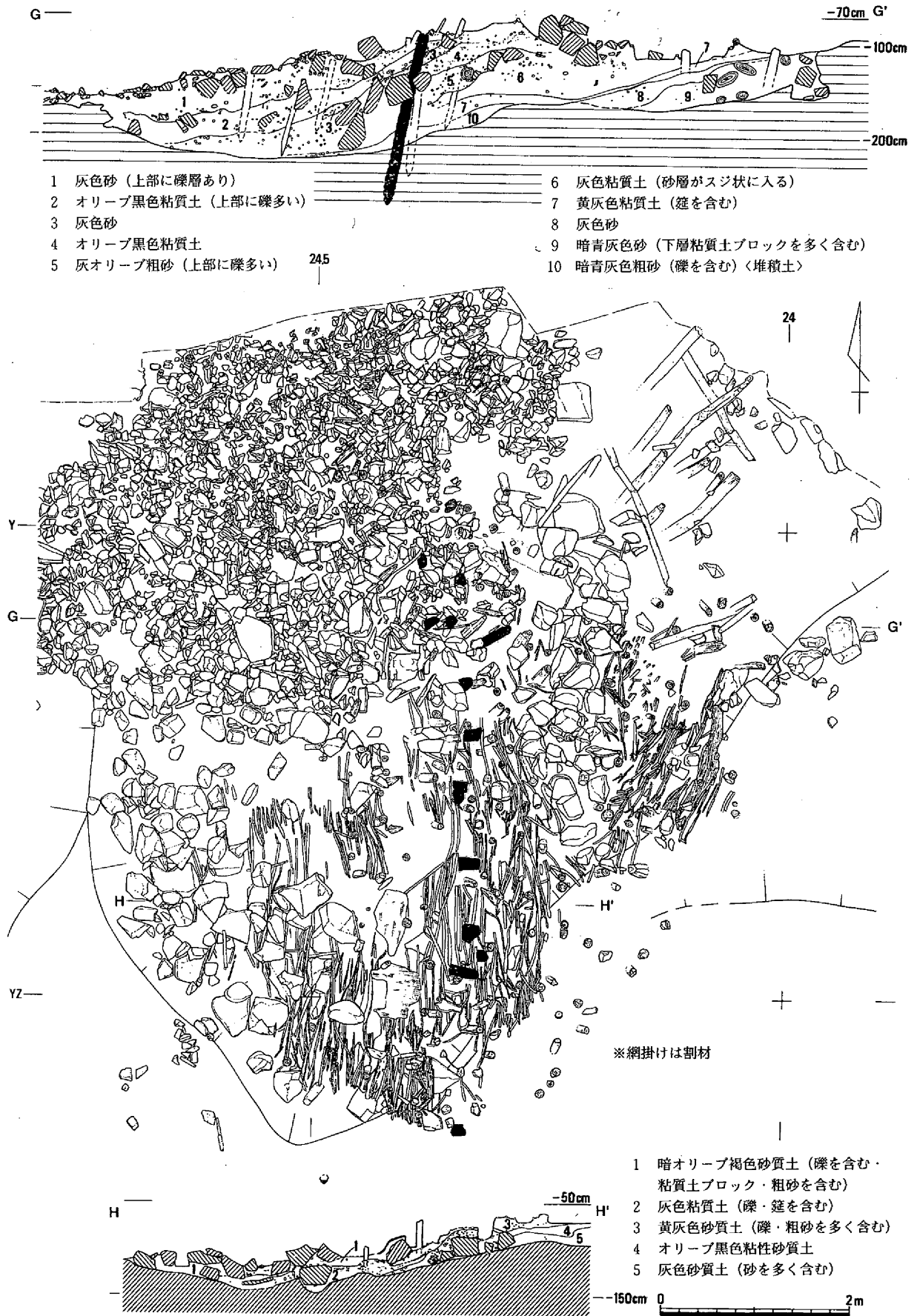


第282図 埋立遺構1 基部溝状構造 (1/400)

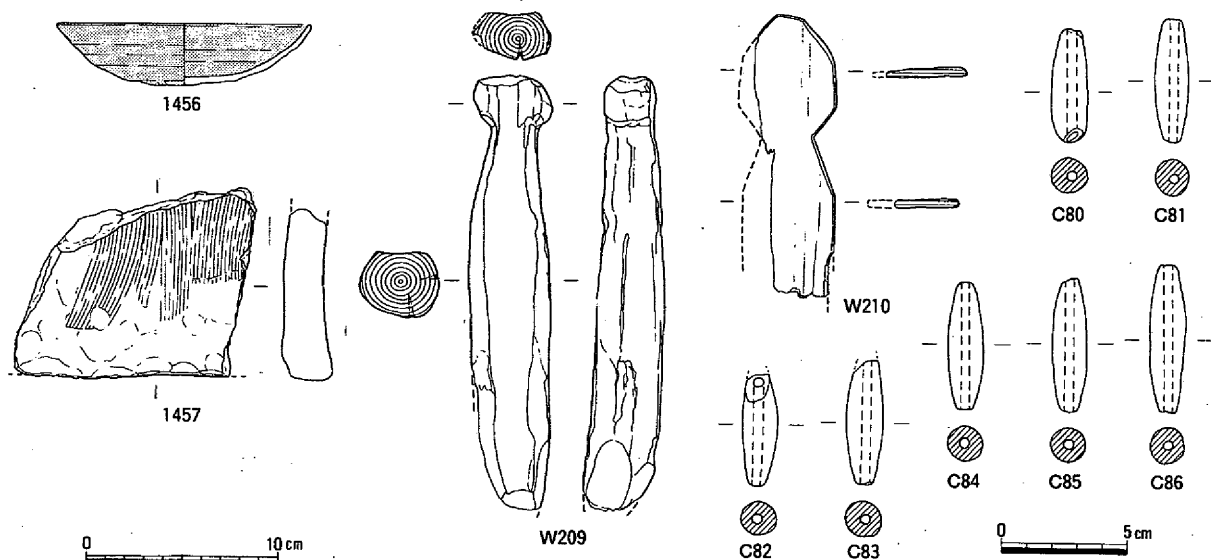
る河道5堆積層出土遺物が12世紀前半であることから、この遺構の築造は10世紀後半になされたと思われる。W208は工程6の角礫を含む埋め土の上部から出土した木製塔婆である。 (宇垣)

埋立遺構2 (第240・270～273・283～285図、図版56・57-1～4)

埋立遺構2は埋立遺構1と護岸2の間に位置し、河道3-1右岸から河道底に向けて北へ延びる。調査区外にも延びており、おそらく河道3-1をやや斜交して横断しているものと推測される。検出されたのは埋立遺構2が河道右岸に取り付く部分である。断面土層観察およびトレンチ部分での解体調査の結果、埋立遺構2の築造行程は、つぎのように考えられる。埋立遺構2直下の基盤となる河道斜面



第283図 埋立遺構 2 (1/60)



第284図 埋立遺構2 出土遺物

は10×5 m程の範囲が深さ60cm 前後の窪地状になっている。流水によって大きくえぐられたものと考えられるが、埋め立てはまずこの窪地に東岸より礫と砂を投入することから開始されている（第283図第8～10層）。その後、埋め土をある程度した段階で丸太杭を多数打ち込み、さらに杭の間に直径3 cmほどの横木を敷き詰めて、埋め土上面を覆い、その上に礫を載せる。この行程を繰り返すことによって、埋立遺構自体の厚さ（高さ）を増しながら東から西へ埋め立てていると理解された。礫層に当たって先端が潰れた杭（図版57-4）が多数みられたことから、上記の行程を繰り返していることが肯定される。埋め土は粘質土塊を多く含み、草木類を部分的に埋め込む。埋め土中に純粋な砂層もみられるが、埋め土なのか堆積層なのか判別できなかった。埋め立ての中心軸として機能したと想定される、基盤まで深くうちこまれた割り木杭の列（第283図黒塗り）が確認された。木材の樹種は丸太杭はマツが多く、割り木杭はツブラジイ、細い横木はコナラ属アカガシ亜属・サカキ・ナツツバキ属などであった。出土遺物は少ない。埋め土中から出土したのは、1456丹塗り土師器杯と1457土師器竈、W209加工木である。土師器杯の底部外面の調整は周辺ヘラ切りで中央押圧である。W210ヒノキ製人形とC80～86管状土錘は最上部の礫層の間から出土したもので、本来は河道5の砂層に伴うものかもしれない。埋立遺構2の時期は河道3-1の時期と、最上部礫層を覆う12世紀前半代の早島式土器碗を含む砂層（河道5）との間であり、より河道3-1の時期に近い10世紀後半と考えられる。（物部）

（4）護岸

護岸1（第240・273図）

河道3東岸部に約14mにわたって杭列がみられる。木杭は径約8 cmで23本確認される。若干の埋め土を伴う。埋立遺構1と一連の造作である可能性もあるが確認はつかめなかった。（物部）

護岸2（第240・270～273・286・287図、図版57-5、58）

この護岸は、河道3の右岸側にあたり、橋梁2の北西約40mの位置に検出された。河道3は、ほぼ南西から北東方向に流走するが、この護岸が検出された地点は河道肩部が東方向に抉れるように窪んでいる。このような状況は、おそらく洪水によって肩部が東側に浸食された地点に護岸が構築され、



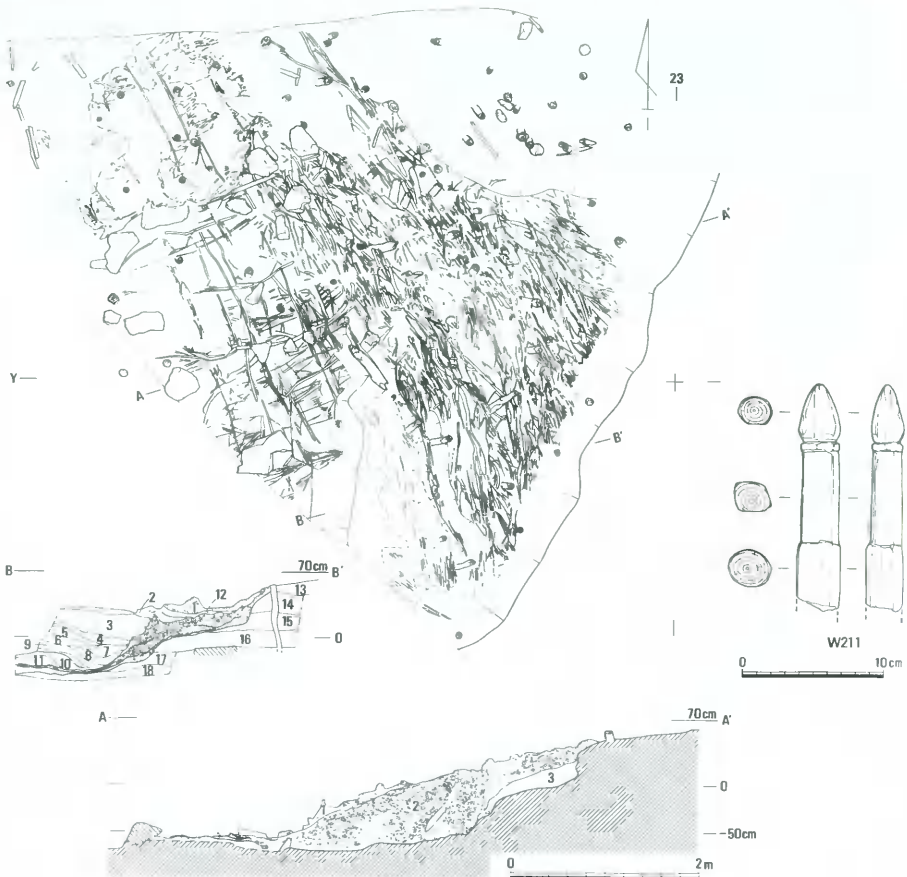
第285図 埋立遺構 2 (西から)



第286図 護岸 2 (北西から)

河道肩部を復旧した状況を示していると考えられる。護岸が検出された地点の河道6の右岸肩部は、河道2の堆積層となっているため流失しやすい状況でもある。また、河道肩部は、杭等の検出状況などからみて後世に削平を受けていると思われる。

護岸は、杭、粗朶、枝葉およびむしろ状の草本類によって構築されている。検出状態は、杭が一樣に肩部方向に傾いており、粗朶などが不定方向に乱れており、さらに構築部が部分的に欠損していた。



- | | |
|---|---|
| <p>A-A'</p> <ol style="list-style-type: none"> 1 灰色砂質土〈盛土〉 2 オリーブ黒色粘質土（敷葉・粗朶・横木を多量に含む砂層をスジ状に含む）〈盛土〉 3 灰色砂（堆積） <p>B-B'</p> <ol style="list-style-type: none"> 1 灰色砂質土（粗朶を含む）〈盛土〉 2 灰色砂（敷葉層を含む）〈盛土〉 3 暗灰黄色粘質土（砂がすじ状にうねって入る）〈盛土〉 4 黒褐色砂質土（粗砂を多く含む）〈盛土〉 5 灰色砂質土（粗砂・黒褐色土ブロックを多く含む）〈盛土〉 | <ol style="list-style-type: none"> 6 灰色砂質土（粗砂・黒褐色土ブロックを多く含む）〈盛土〉 7 灰色砂質土（砂・黒褐色土をすじ状に含む）〈盛土〉 8 灰色砂質土（粗砂を多く含む）〈盛土〉 9 灰色砂質土（粗砂・黒褐色土ブロックを多く含む）〈盛土〉 10 灰色砂質土（むしろ層を含む）〈盛土〉 11 オリーブ黒色粘質土〈盛土〉 12 黒褐色粘質土（粗朶・枝葉・敷葉層を多量に含む）〈盛土〉 13 黄灰色砂質土（粗砂を含む）〈基盤〉 14 黄灰色砂質土（基盤） 15 黄灰色砂（基盤） 16 オリーブ黒色粘質土（基盤） 17 灰色砂（基盤） 18 オリーブ黒色粘質土（基盤） |
|---|---|

第287図 護岸2 (1/60)、同 出土遺物

この状況は、一度復旧した護岸さらに洪水によって洗われて、復旧部が部分的に崩壊した状態を示している。この護岸の残存状況は、第287図のように杭を数列ほぼ直線的に打ち込み、護岸肩部側では杭列に平行に粗朶、枝葉を杭列間に埋め込んでいる。第278図の断面図のように厚さ約60cmも埋め込んでいる。また、他の地点で多用されている柵はここでは認められなかった。西側の護岸下部では、むしろ状に草本類を杭列と直交方向に敷いて、その上部を杭列と平行に小枝で押さえ込んでいた。

出土遺物は、ほとんどなくW211が中に出土したのみで、その形状から卒塔婆と考えられる。

護岸の構築時期は、河道6の出土遺物などから古代末である。また、ここでは、護岸は河道3の復旧部と報告したが、第270、271図でみるように先述した埋立遺構1、2と報告している突堤状の付け根部にあたる可能性も考えられる。(中野)

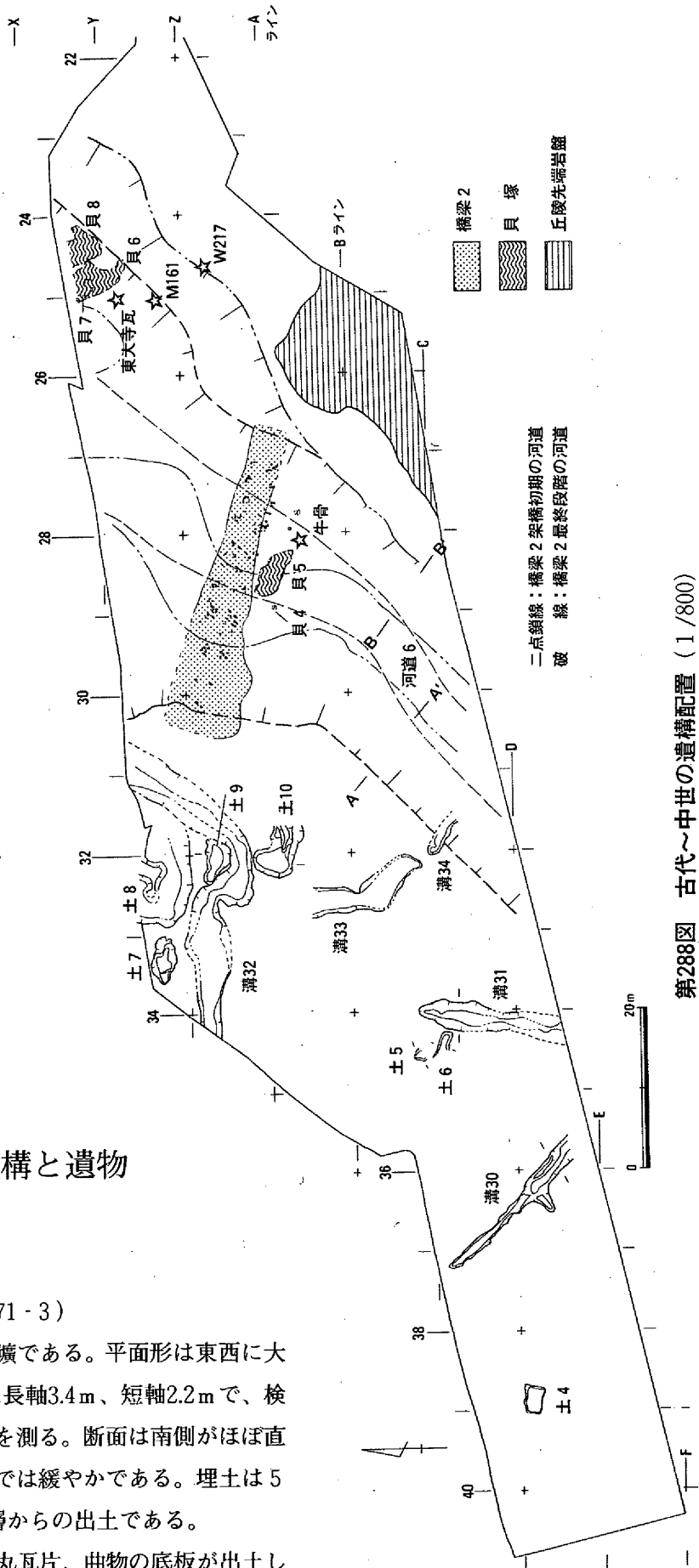
5 古代末～中世の遺構と遺物

(1) 土壇

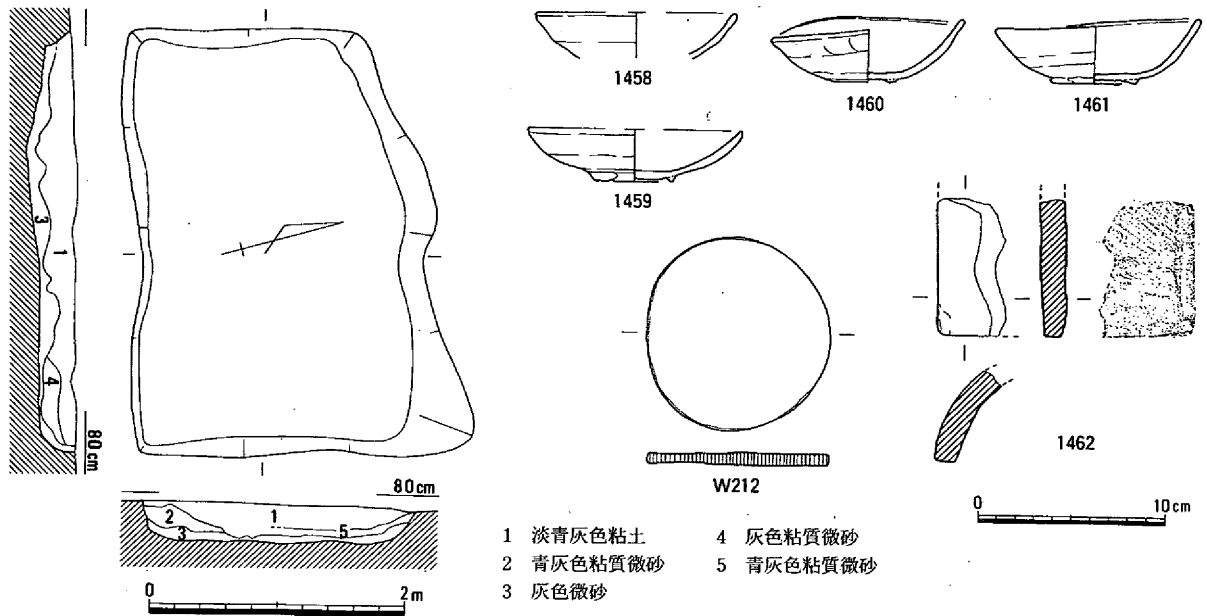
土壇4 (第288・289図、図版71-3)

調査区の西端部に位置する土壇である。平面形は東西に大きい隅丸長方形である。規模は長軸3.4m、短軸2.2mで、検出面からの深さは、およそ30cmを測る。断面は南側がほぼ直角に立ち上がっているが、北側では緩やかである。埋土は5層認められるが、遺物はほぼ1層からの出土である。

出土遺物は、土師質土器碗と丸瓦片、曲物の底板が出土し



第288図 古代～中世の遺構配置 (1/800)



第289図 土壙4、同 出土遺物

ている。土師質土器碗は、高台部分を貼り付けたものや、口縁部分が湾曲しているものが多く出土している。時期は、土師質土器碗から14世紀後半を考えられる。

土壙5 (第288・290図)

土壙4の東約40mで検出された土壙である。平面形は北側に突出したような楕円形状を呈し、南部分は検出時にトレンチで確認したが、明瞭としなかったので現状でまともっていたかもしれない。規模は東西方向1.6m、南北方向におよそ1.3mで、検出面からの深さは75cmを測る。

遺物は出土していないが、埋土の状況から平安時代末から鎌倉時代初頭と考えられる。

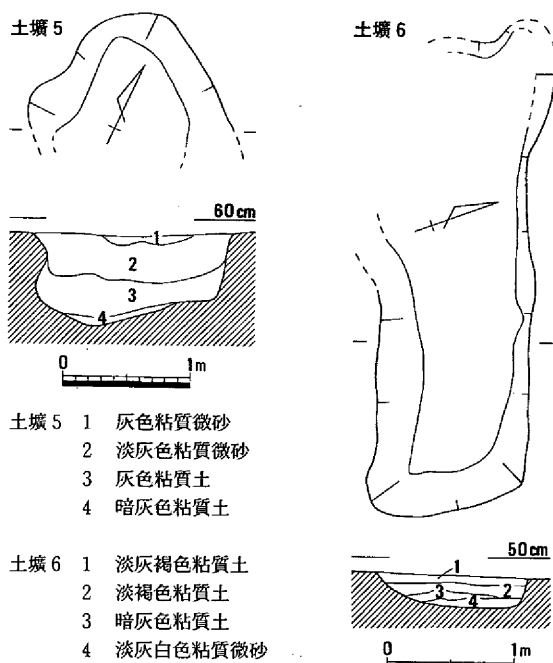
土壙6 (第288・290図)

土壙5の南側に接して検出された土壙である。平面形は東西方向に長い隅丸長形状を呈し、長軸をほぼ東-西にもつ。規模としては長径およそ3.8m、短径1.2mで、検出面からの深さは25cmを測る。

遺物も先述の土壙5同様に出土していないが、埋土の状況から平安時代末から鎌倉時代初頭と考えられる。

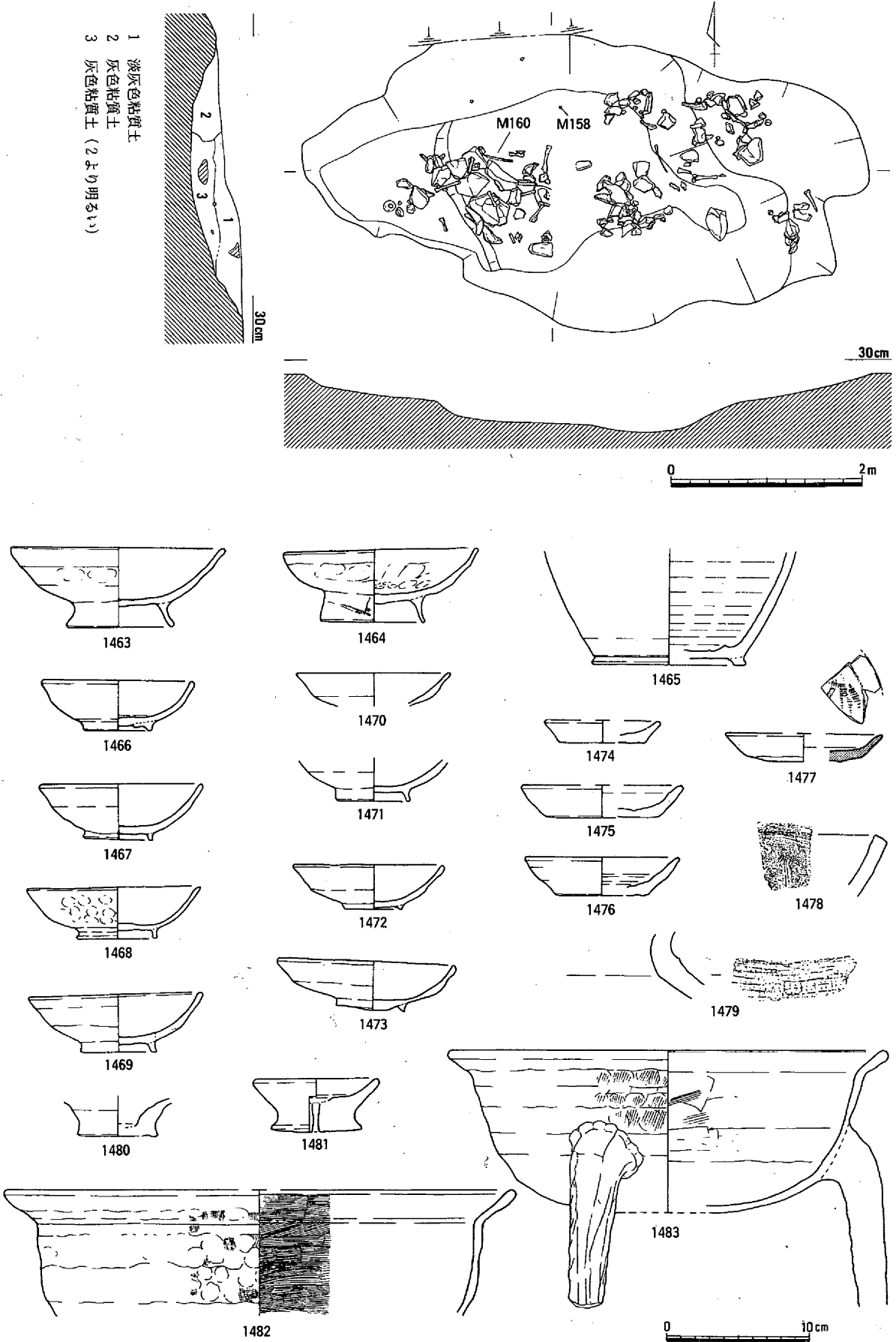
土壙7 (第288・291・292図、図版72-1. 76-3)

調査区中央部分北端の溝32と土壙8に隣接して検出された土壙である。平面形は不整形の楕円形状を呈し、東西両方向には緩やかな段を有している。規模としては長径6m、短径3.2mで検出面からの深さはおよそ50cmを測る。土壙の一番深い底面一面にはウシ・ウマ・イヌなどの骨や、一緒に

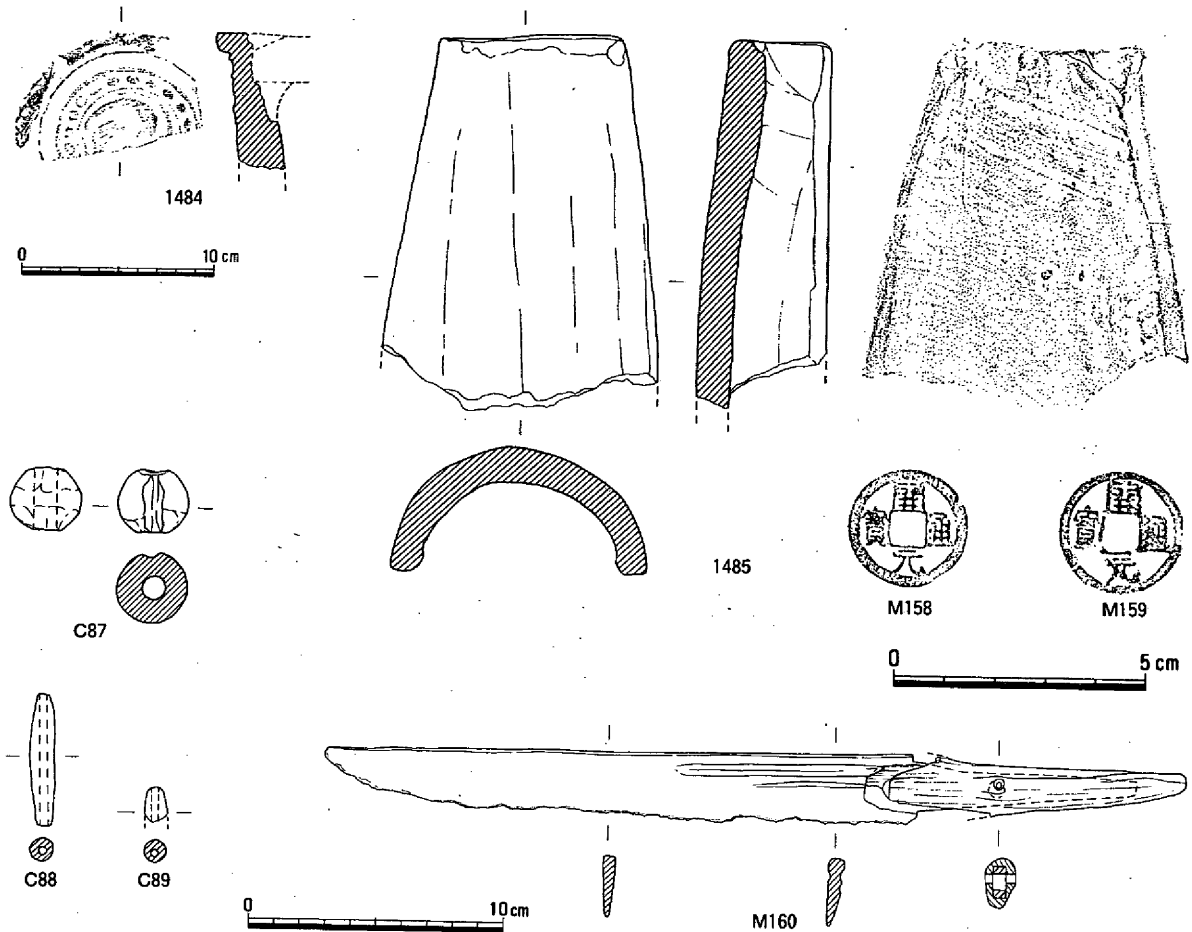


- 土壙5
- 1 灰色粘質微砂
 - 2 淡灰色粘質微砂
 - 3 灰色粘質土
 - 4 暗灰色粘質土
- 土壙6
- 1 淡灰褐色粘質土
 - 2 淡褐色粘質土
 - 3 暗灰色粘質土
 - 4 淡灰白色粘質微砂

第290図 土壙5・6



第291図 土境7、同 出土遺物〈1〉



第292図 土壌7 出土遺物〈2〉

投げ込まれたと思われる拳大から人頭大の岩石が多数散乱していた。(付載2参照)

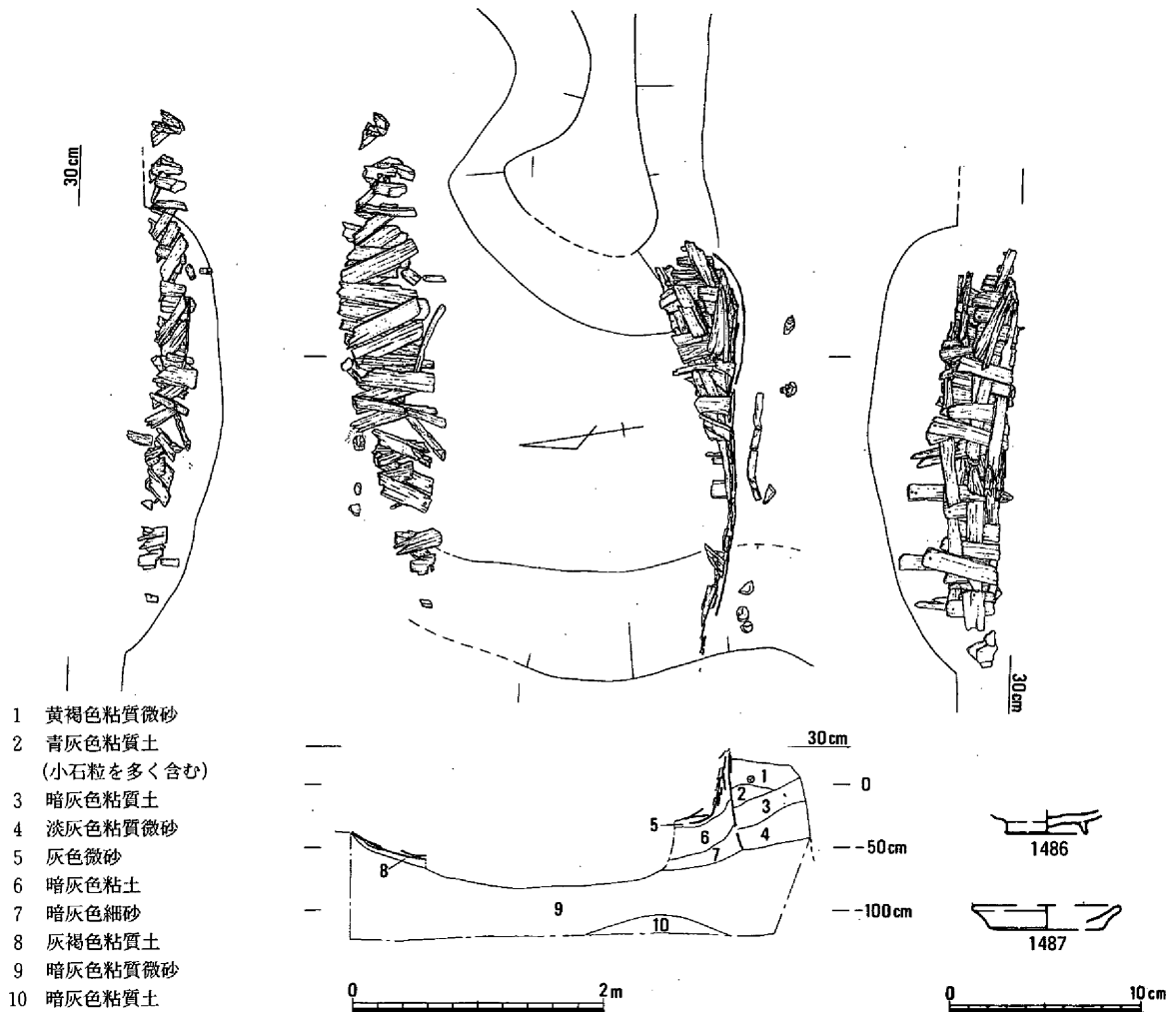
出土遺物は土師器・須恵器・土師質土器碗・白磁皿・備前焼・瓦などと共に、土製品や渡来銭・小刀が出土している。土師器は皿や碗と一緒に小杯1480・1481が出土している。1481は底部中央部分に穿孔が施されており、上部に土師質土器碗などを置く台の可能性が考えられる。1477の白磁皿は体部中程で内側に「く」字状に屈曲し、内面の見込みはほぼ平坦で口縁部を上方向に引き上げている。内底の見込みには草花文と思われる文様の一部が認められる。土壌の最下層から出土した小刀M160は全長34.1cm、平造りで柄がほぼ完存している。

遺構の時期は、若干古い時期の土器片が混在しているが、14世紀の前半が考えられる。

土壌8 (第288・293、図版71-4・5)

前述の土壌7の東側に接するように検出された土壌である。調査当初には溝32の拡張部分として認識していたが、南北に網代状に薄く割ったへぎ板を組み合わせたものが検出されたために単独の土壌として調査を継続した。平面形は90度屈曲した溝状を呈しており、遺構の東側は湧水と砂層によって不明瞭であった。土壌に直行するように配置された板組みは、東側にある不自然に残存する高位部を延長させるような形で向かい合って設置されていた。検出面からの深さはおよそ75cmを測る。

調査時点においては板組みが検出されたことで漁獵に伴うものといった認識を得ていたが、次年度に調査を行った橋梁2軸線を西側に延長した地点に当該土壌が立地しており、橋に通じる道の補修部分ではないかと推測される。板組みは埋め土の受けとして機能したものと推測される。



第293図 土壌 8、同 出土遺物

遺物は5点ほど細片が出土しており、うち2点を図化した。1486は土師質土器碗で、北側板材の下面から出土した。土壌8の時期はこれらの遺物から13世紀後半と考えられる。

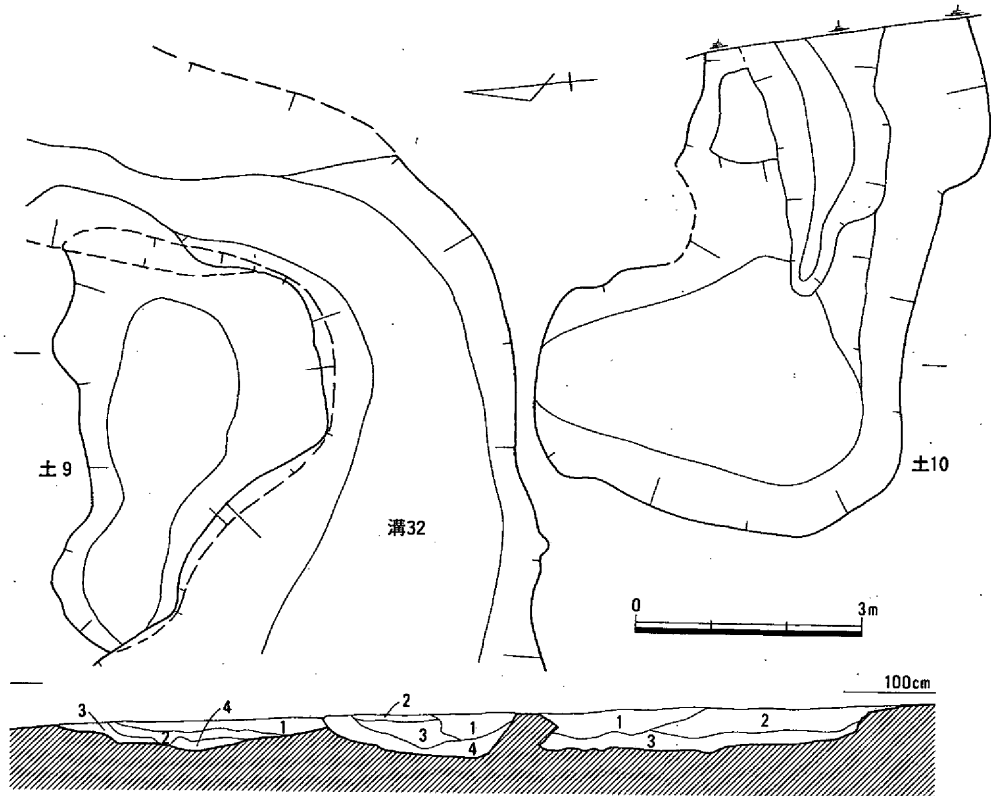
土壌9・10 (第288・294・295図)

調査区中央部分の溝32に近接した地点に位置する2基の土壌である。

土壌9は溝32によって南側と東側を切られており、平面形は東西方向を長軸とした不整形な楕円形状を呈している。規模は推定で長軸3.3m、短軸2.2mを測り、検出面からの深さは約30cmである。底面はやや段状の窪みを有し、壁は緩やかに立ち上がる。埋土は上下4層あるが、色調としては全体的に灰色で下層になるほど粗砂が混じった粘性を帯びてくる。

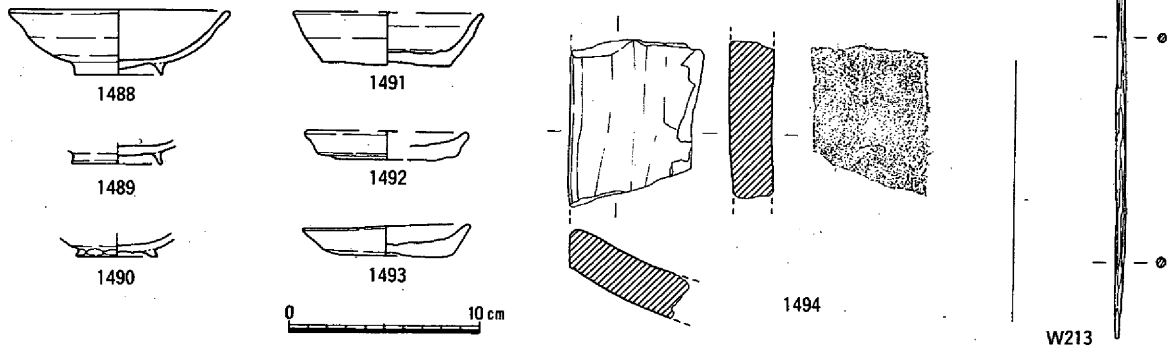
土壌10は溝32の南側に位置し、平面形は「L」字状に屈曲して東側は調査時に設定したトレンチによって検出できなかった。規模は東西方向が現状で4m、南北方向は最大3mを測る。検出面からの深さはおよそ40cmである。底面は西側に小規模な袋状を呈した比較的平坦な面から東に向かって細い溝状の窪みが確認された。埋土は3層確認できたが全体的に色調は灰色で、粘性を帯びていた。

出土遺物は双方から出土しているが、図化できたものはいずれも土壌9からのものである。図化した土師質土器碗(1488~1490)は若干の時期差が感じられるものの、高台が退化してくる時期のものである。1494の平瓦は残存長8.1cm、残存幅6.8cm、厚さ2.4cmを測る。またW213は箸で全長約24cmを測



- | | | |
|---|--|--|
| <p>土壌9</p> <p>1 明灰色微砂と黄褐色微砂</p> <p>2 暗灰色粘質土</p> <p>3 淡灰褐色弱粘質微砂</p> <p>4 灰色砂まじり粘質土</p> | <p>溝32</p> <p>1</p> <p>2 灰黄褐色粘質微砂</p> <p>3 灰色弱粘質微砂</p> <p>4 淡灰白色弱粘質微砂 (黄褐色砂)</p> | <p>土壌10</p> <p>1 暗灰色粘性砂質土</p> <p>2 淡緑灰色弱粘質微砂</p> <p>3 緑灰色弱粘質微砂</p> |
|---|--|--|

第294図 土壌9・10・溝32 (部分)



第295図 土壌9・10 出土遺物

り、両端を若干欠くものの完存していた。

遺構の時期としては、出土した遺物から13世紀末葉から14世紀初頭が考えられる。 (根木)

(2) 溝

溝30 (第288・296図)

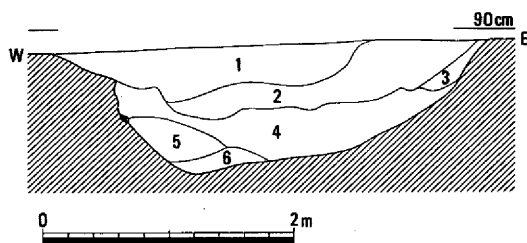
調査区の西側、35～38ライン、C～Dライン間で検出された溝である。ほぼ南西方向から南東方向に流走する。規模は幅2.5m、検出面からの深さは25cmを測る。

遺物は土師器と須恵器の杯が出土している。1495の須恵器は口径11.4cm、底径8.0cm、器高3.6cmを測

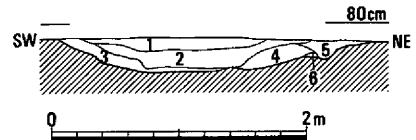
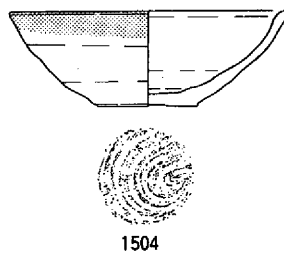
る。体部から口縁にかけては逆「ハ」字状に外傾し、そのまま立ち上がる。1496土師器杯は灰白色を呈し、胎土に細砂を含む。口径約11.8cmを測る。遺構の時期としては、出土している遺物から11世紀末葉から12世紀前半以降に埋没したものと考えられる。

溝31 (第288 - 297図)

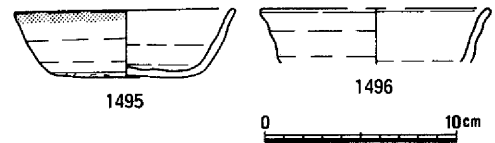
溝30の東約10mで検出された溝である。やや東方向に偏っているが南北方向に流走する。断面において、東側は緩やかに立ち上がるが、西側は部分的に段を有し、さらに深くなっている。規模は幅3.5m、検出面からの深さはもっとも深いところで90cmを測る。埋土は全体的に最上層に褐色土であるほかは灰色で、下層ほど粘性を帯びてくる。遺物土師器や須恵器が多い。しかし時期幅の長い遺物群が図化しなかったものを含めても多数混入しており、正確な時期を見出し難い。



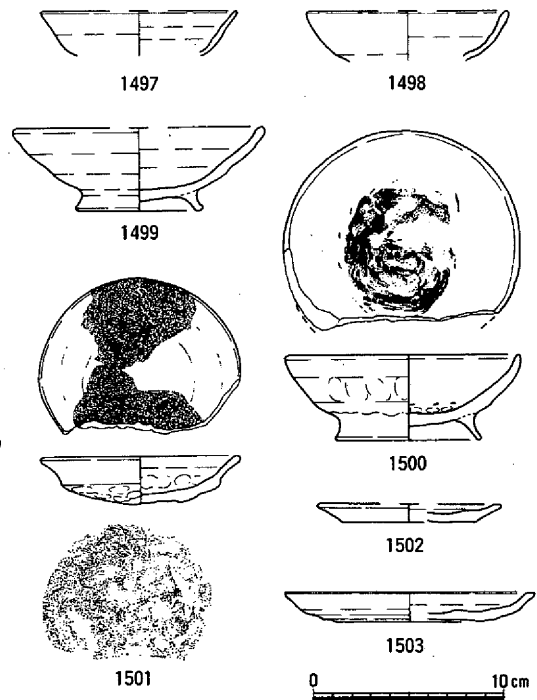
- 1 淡褐色粘質微砂 (淡黄色砂が綿状に堆積)
- 2 淡灰色粘質微砂
- 3 淡灰色粘質微砂 (黄色砂含む)
- 4 灰色粘質微砂
- 5 淡灰色粘質土
- 6 淡灰色粘質土 (5よりやや濃い)



- 1 暗灰色粘性砂質土
- 2 灰褐色微砂
- 3 茶灰色粘質土
- 4 黄茶色砂
- 5 淡灰褐色粘質土
- 6 暗灰色粘土



第296図 溝30 断面、同 出土遺物



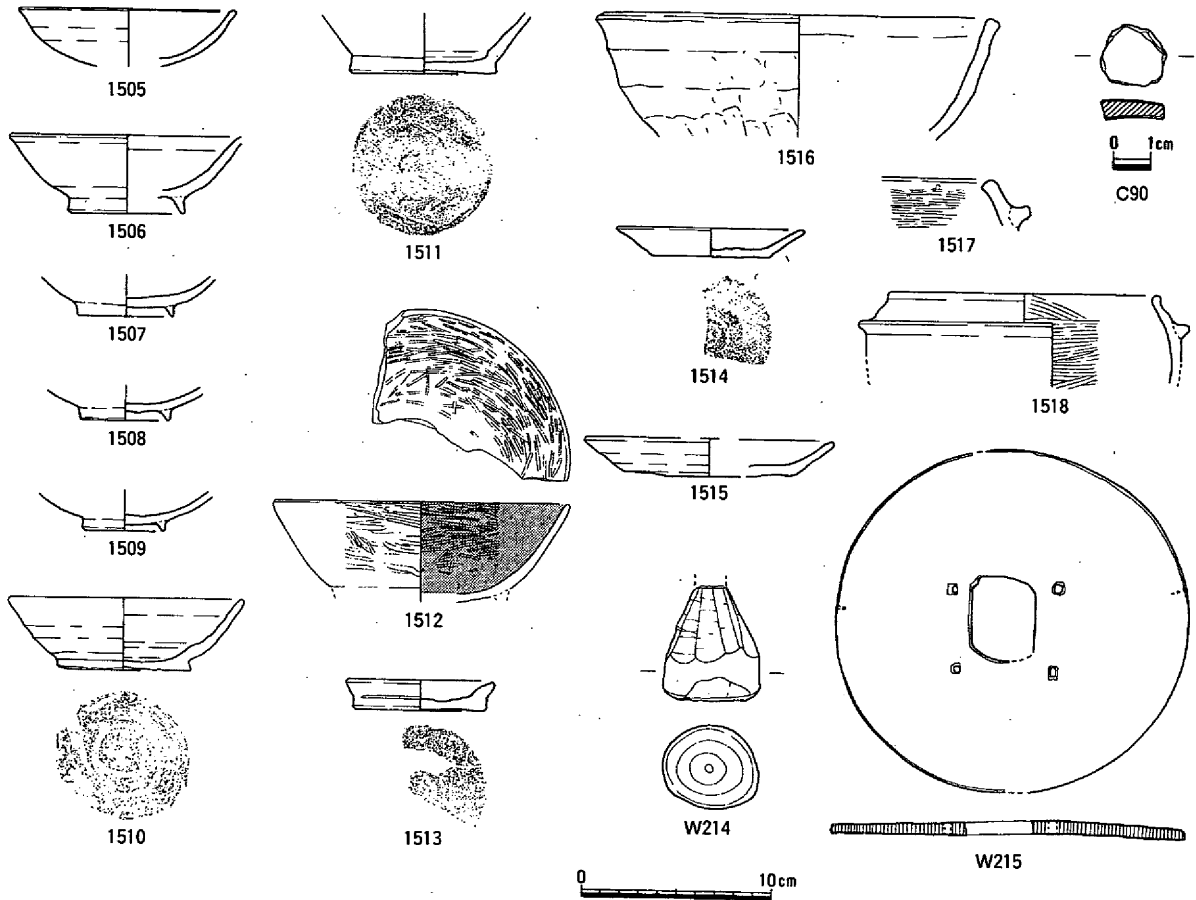
第297図 溝31 断面、同 出土遺物

埋没した時期は新しいと見られる土師器碗・皿から13世紀末から14世紀前半と考えられる。

溝32 (第288・295・298図)

調査区北端の30～34、Y～Aライン間で検出され、東西方向に流走する溝である。東端部分はトレンチによって検出することができなかった。断面において北側は緩やかに立ち上がるが、南側は鋭角になって若干深くなっている。規模は幅1.5m、検出面からの深さは最も深いところで40cmを測る。埋土は比較的明るめの灰色土で、粘性はさほど帯びてはいない。

遺物には土師器や土師質土器碗・黒色土器をはじめ、土製品や木製品がある。加えて、ウシ・ウマ・イヌ・スッポンなど多量の骨が出土した。C90土製円盤は、白磁の転用品である。W215は鼠返しと考えられる。遺構の時期としては、出土している土器から14世紀初頭頃が考えられる。

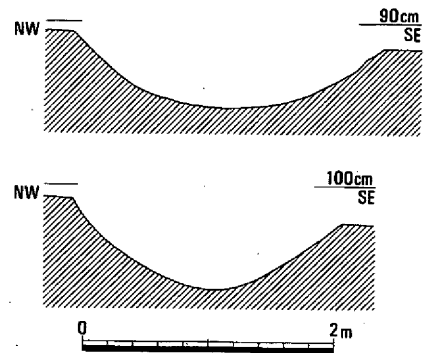


第298図 溝32 出土遺物

溝33 (第288・299図)

32～33、A～Bライン間で検出された溝33は、溝32の南側7mの地点に位置する。溝の北端は明瞭ではなく、全体的に下場など判然としなかった。規模は現状で幅2.5m、検出面からの深さは70cmを測る。埋土は検出面での明瞭な差異はあったものの、掘り下げによって周囲との違いが明確なものではなくなっていった。

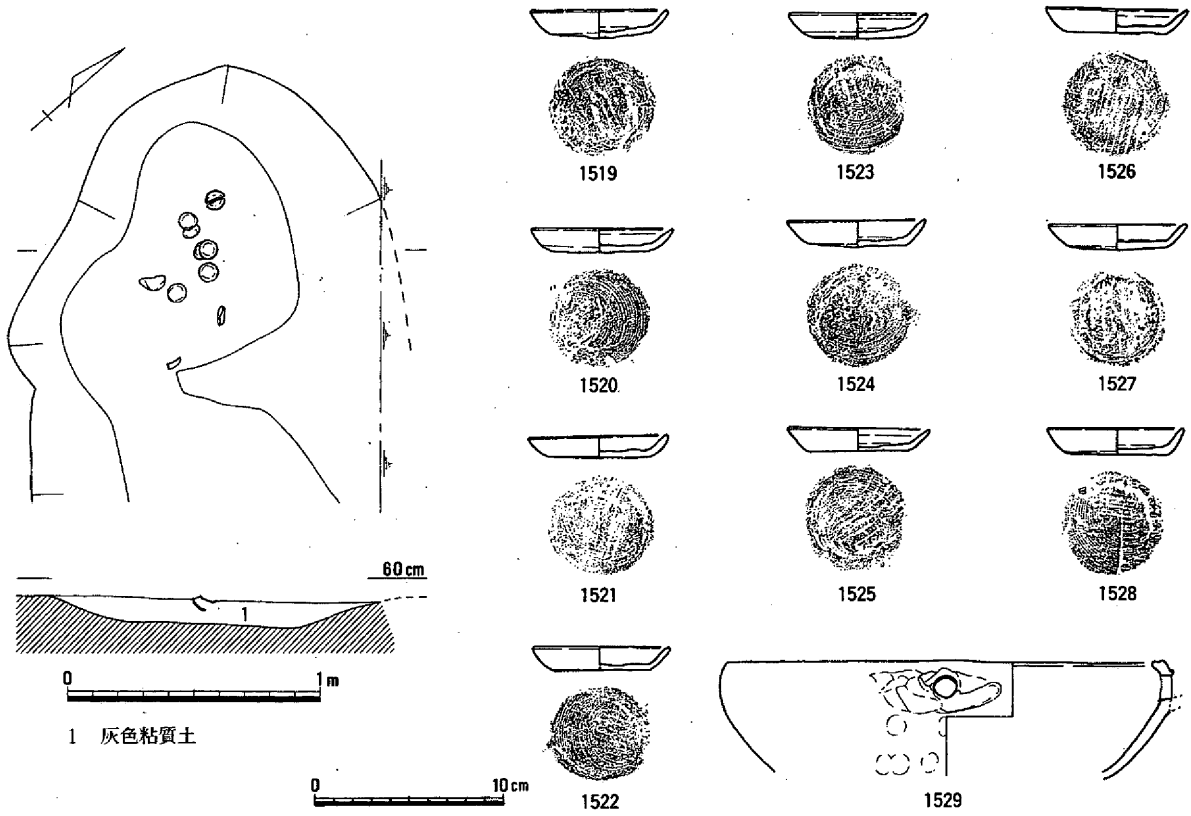
遺物は図化していないが、細片が若干出土している。時期としては13世紀初頭頃が考えられる。(根木)



第299図 溝33 断面

溝34 (第288・300図、図版76-4)

河道6西岸に位置し、溝33の南東端部付近から始まり河道6に注ぎ込んで終わる検出長5.5m、幅約1.6m、検出面からの深さ10～30cmの小規模な溝である。溝の始まる北西端部は浅い窪み状を呈しており、この中に灰白～淡黄色を呈する薄手の小皿完形品10枚W1519～1528が散乱した状況で検出された。口径7.1～7.3cm、底径5～5.4cm、器高1.2～1.4cmを測る。口縁部が小さく欠けるものが半数あるが人為的なものかどうかは不明。底部外面は糸切り。時期は15世紀頃以降と考えられる。推定となるが、河道内またはその周辺で何か作業に入る前に御神酒を飲んで容器を捨てる様な行為があったのではなかろうか。作業には漁の仕掛け、護岸、橋梁2の補修などの可能性が考えられる。(物部)

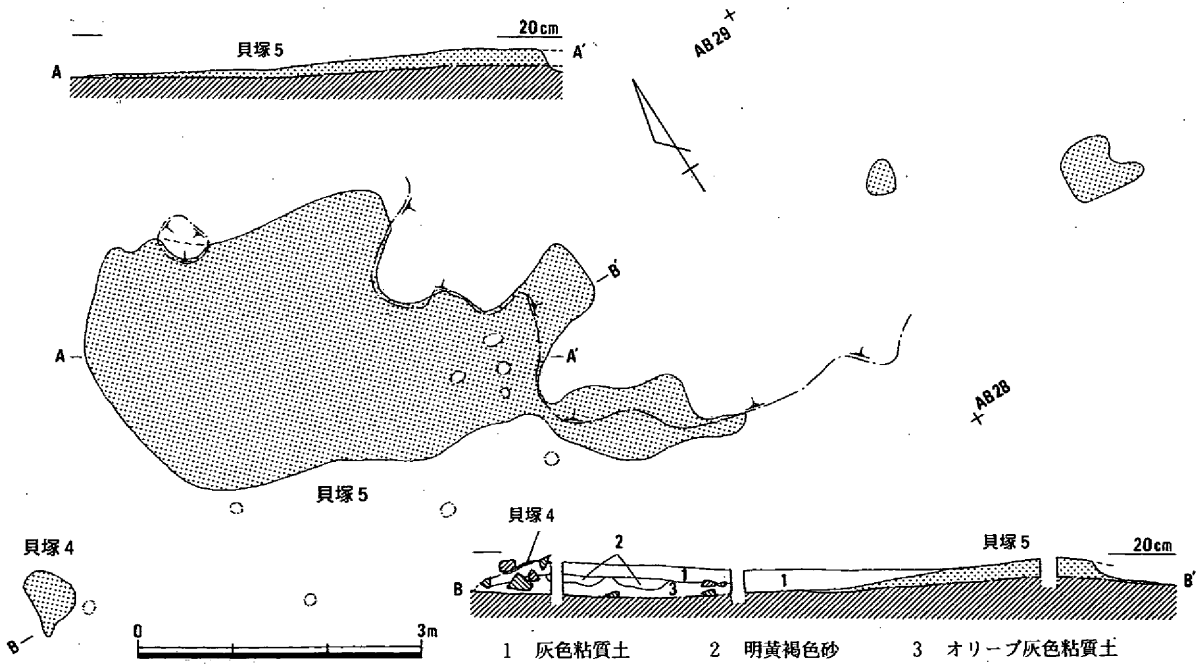


第300図 溝34 (部分)、同 出土遺物

(3) 貝塚

貝塚4・5 (第288・301・302図)

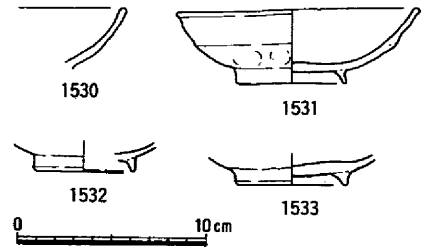
貝塚4・5は橋梁3の中央付近の上流側約1mに隣接する。河道6上層のほぼ中央付近に位置する。貝塚4は径60cm前後の僅かなものである。貝塚5は貝塚4より間層を挟みさらに下層にあり、範囲は



第301図 貝塚4・5 (1/80)

第3章 発掘調査の概要

約11×3 mと推定され、厚さは20cm程である。両者とも上部は現代用水路によって削平を受け、貝塚5はさらに北東側半分を洗掘状の窪みによって削られている。貝塚4はシジミを主体とする。貝塚5はおよそシジミ:ハイガイ:カワナナ=2:1:1の割合である。その他少量のマツカサガイやカキが見られた。貝塚5貝層中には早島式土器椀や土師器片の小片が含まれていたが時期を断定できない。ただし、貝塚5は橋梁2Ⅳ期(16世紀と推定される)の埋め土より上層であり、同じく橋梁2Ⅳ期に伴うと考えられる古銭を含む砂礫層によって切られていることから、16世紀代に形成されたものと思われる。(物部)



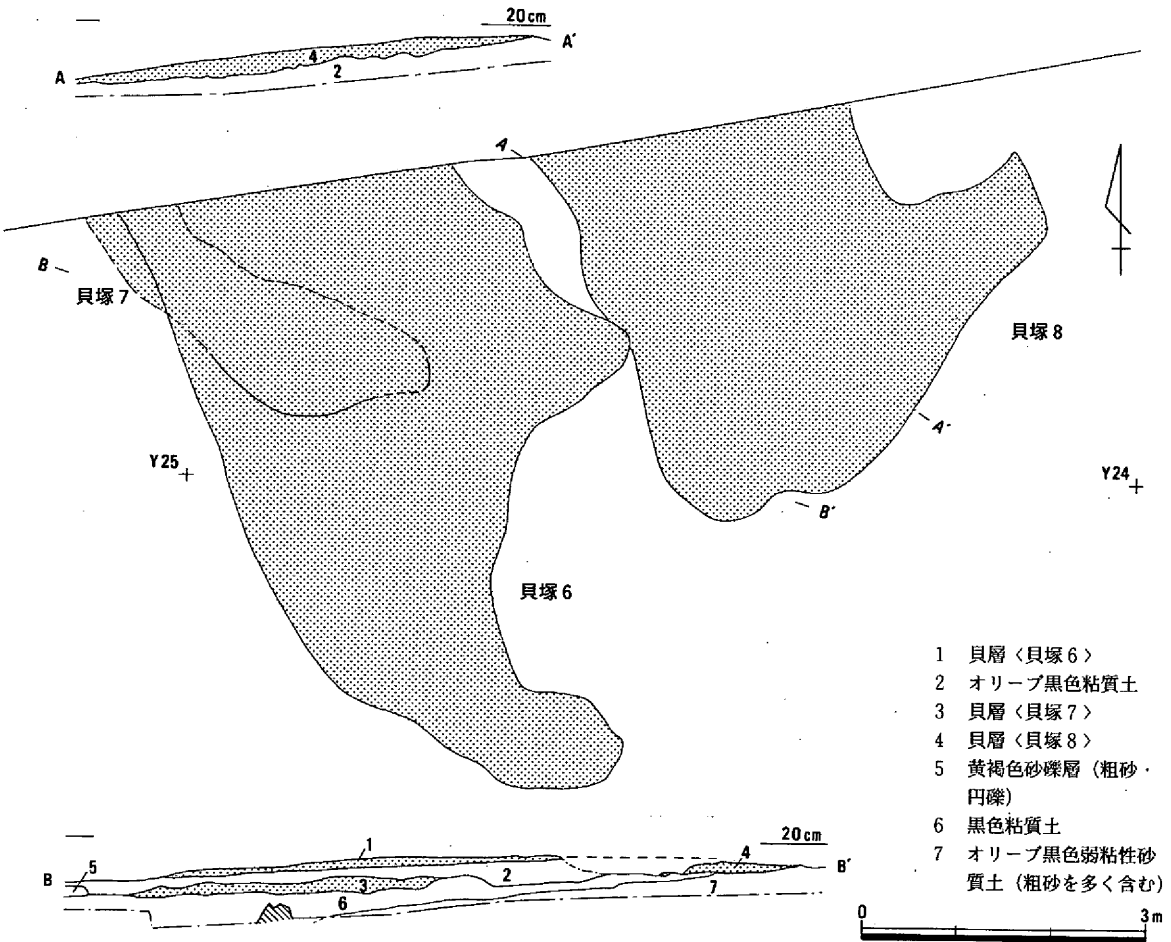
第302図 貝塚5 出土遺物

貝塚6・7・8 (第288・303・304図、図版72-2)

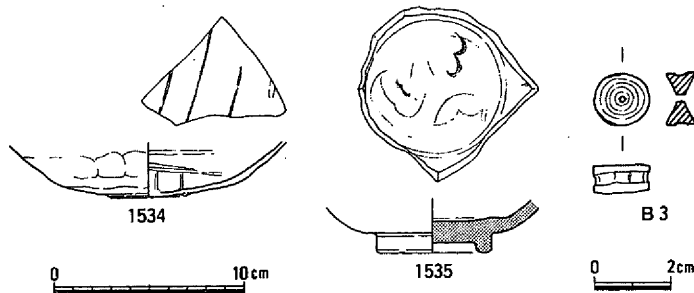
これらの貝塚は、橋梁の下流北東約25mに検出された。貝塚は、いずれも河道6の右岸側の肩部上層に形成されていた。

貝塚6は、貝塚8の西側に隣接して検出されたもので、第303図の断面図第1層にあたり、貝塚8とは同一面に存在するがブロックを異にする。検出した範囲は、南北約6.6m、東西約4.6mで、さらに北側に広がる。貝塚8は、貝塚6の西側に検出され、範囲は南北約4m、東西約5mでまだ北側に延びる。厚さは、貝塚6・8とも約10~20cmであった。

貝塚7は、貝塚6・8とは間層を挟んで、貝塚6の下部に形成されていた。範囲は、3.4×1.2mで、



第303図 貝塚6~8 (1/80)



第304図 貝塚6 出土遺物

厚さ約15cmを測るが、貝塚6・8に比べると小規模なものであった。

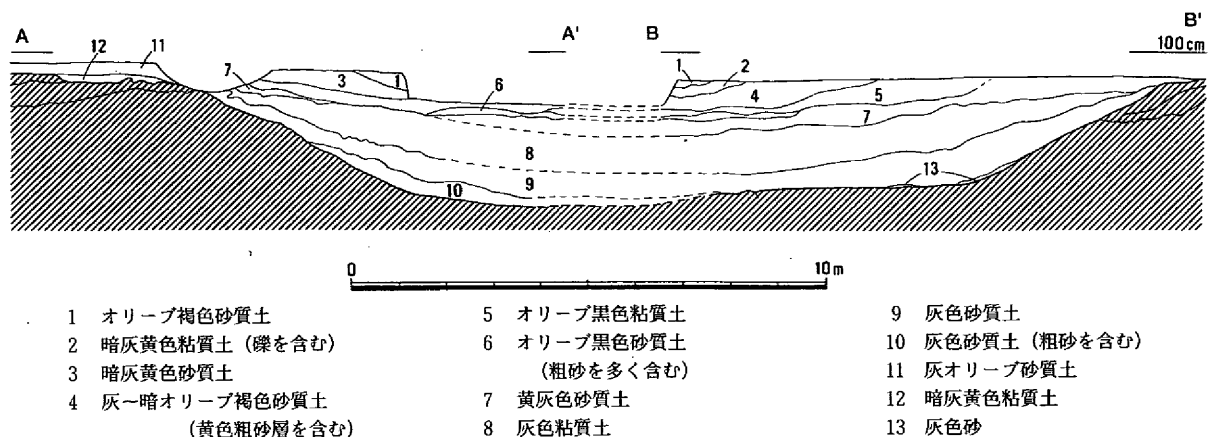
貝塚を形成している貝は、それぞれのブロックによって差異はなく、シジミがその大半を占める。その他には、ハイガイ、小形のマキガイがあり、ハマグリ、マツカサガイ、カキなどが少量含まれる。

出土遺物は、それぞれのブロックとも貝以外にはほとんどなく、図示した第304図の1534、1535など少量の土器が出土した。B3は、岡山理科大学 富岡先生から骨製品であるとの教示を受けた。貝塚6・8は、貝塚7とは層位を異にするが、出土遺物からみてさほど時期差はなく貝塚が形成されたと考えられる。出土遺物は、鎌倉時代前半期の特徴を示す。(中野)

(4) 河道

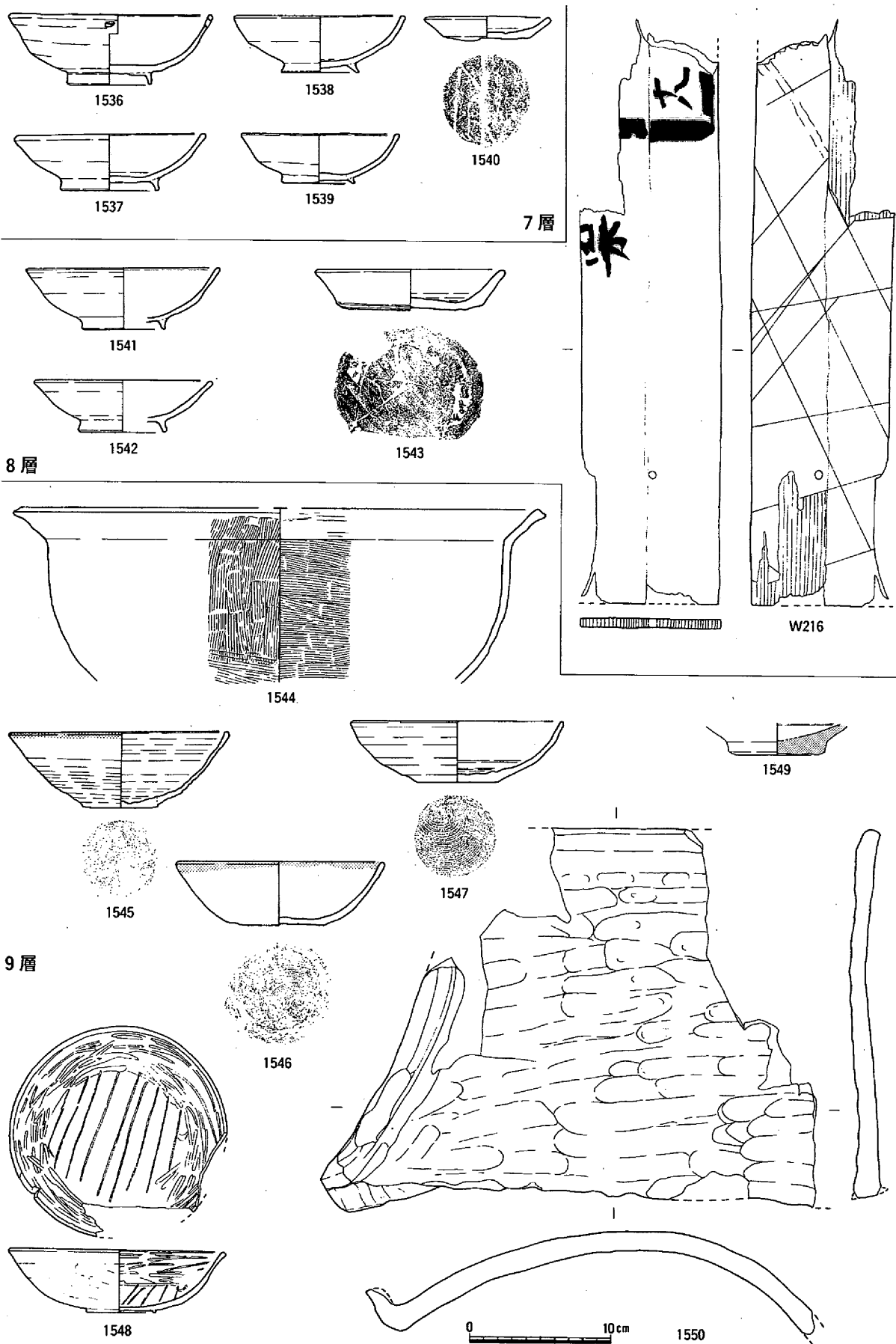
河道6 (第288・305~312図、図版73)

河道6は、埋立遺構直上に堆積した12世紀前半の砂層(河道5)より後の河道である。堆積土は灰色系の粘質あるいは砂質土に一変する。後述の橋梁2はこの時期に架橋され機能している。河道が北に向けて大きく幅を広げる直前の南西部分では堆積土の色調が比較的明瞭に変化し、遺物を層ごとに取り上げることが出来た。識別できたのは第305図の第7~9層で、河道の中層部分である。ちなみに第13層が河道5の堆積砂である。第7層からは土器片約90点が出土した。1536~1539は早島式土器碗で、1539は口径10.9cm、器高3.7cm、高台径4.8cmを測る。第8層からは約30点の土器片が出土した。早島式土器碗片が多い。1542の法量は、口径12.1cm、器高3.8cm、高台径5.8cmを測る。木製品W216は曲げ物の側板と考えられる。「果」または「巢」と、直角に曲がる直線、その内側に「十八」の墨書がある。第9層出土遺物は土器片15点である。1548は瓦器碗で和泉型と考えられ、外面は押圧のみ、高台は非常に小さい。1549青磁碗、1550竈である。これらの遺物の特徴から第7層は13世紀末頃、第8層は13世紀中頃、第9層は13世紀初め頃と考えられる。第307図は第10層の遺物である。ヘラミガキの見られない早島式土器碗1553・1554がある。B4骨製品は黒漆塗りの弰(ゆはず)で、弦をかける部分

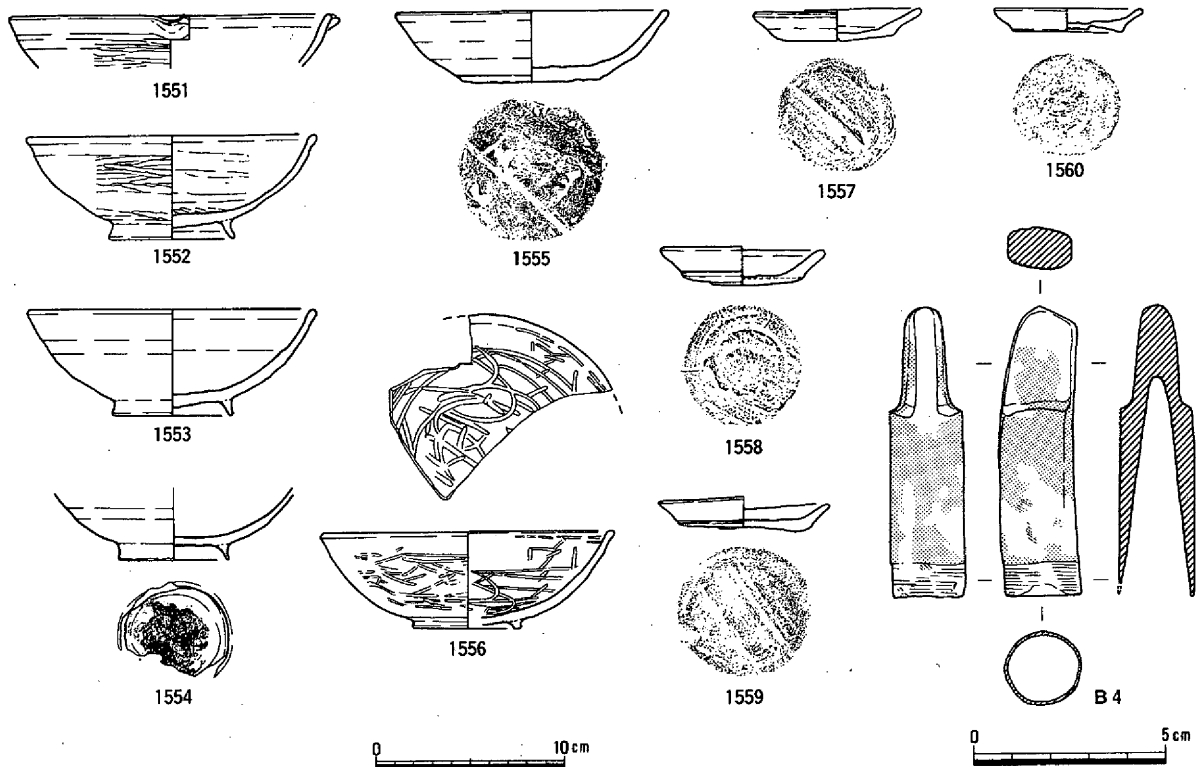


第305図 河道6 断面 (1/160)

第3章 発掘調査の概要



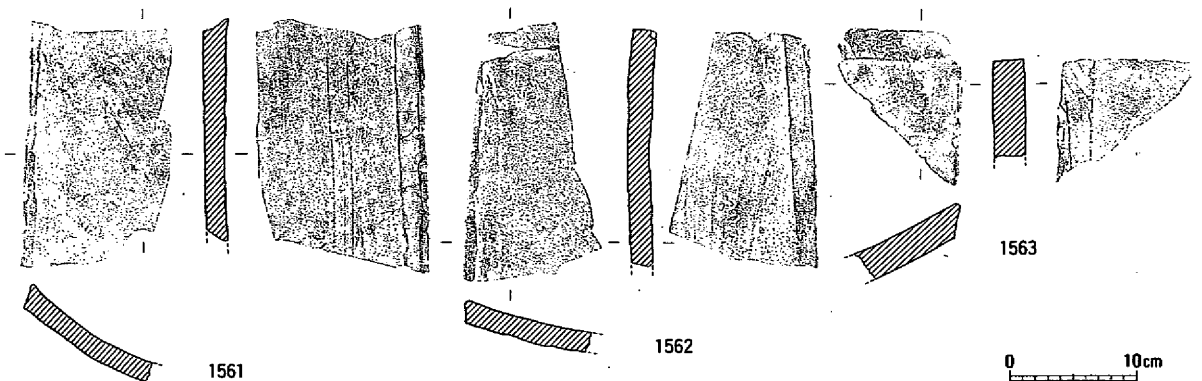
第306図 河道6 出土遺物<1>



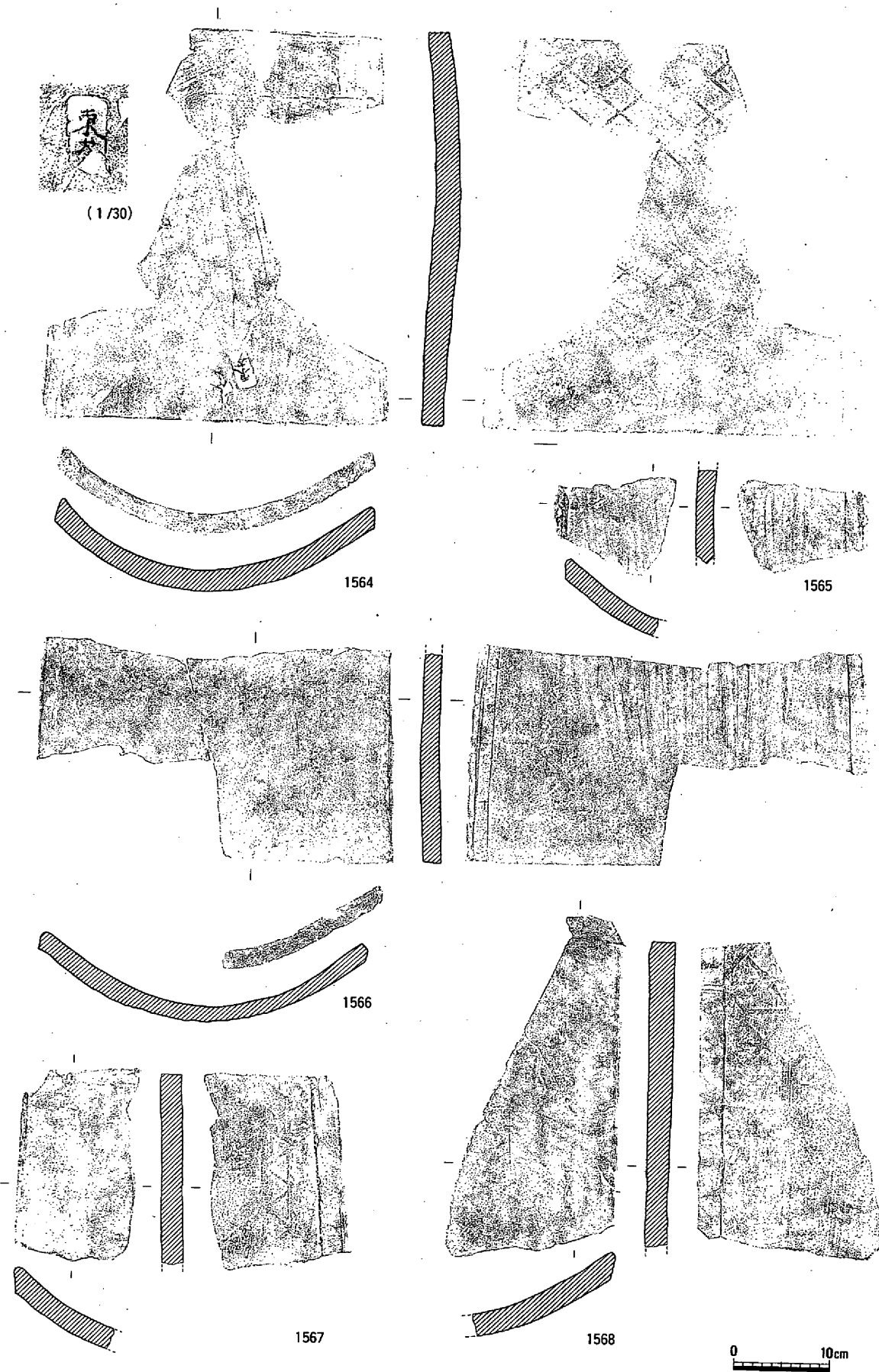
第307図 河道6 出土遺物〈2〉

に擦痕や漆の剥落も無いので、使用されなかったか、装飾品の可能性がある。土器の特徴から第10層は12世紀後半に比定できそうである。以上のように遺物数がやや少ないきらいはあるが、下層になるにしたがい、遺物も古くなる傾向が見られ、このことは、河道5の砂層堆積以後、川の流れが相対的に緩やかになり、徐々に埋没したこと示唆する。河道6平面においては第288図で示すように、第10層の段階では下部に存在する埋立遺構の影響を受け、河道底が蛇行する状況を呈す。第7層以降では堆積により埋立遺構の凸凹が解消され、浅くなった河道底は東に若干寄りながら直線状になる。河道6出土遺物の中でも特に以下のものが注目される。

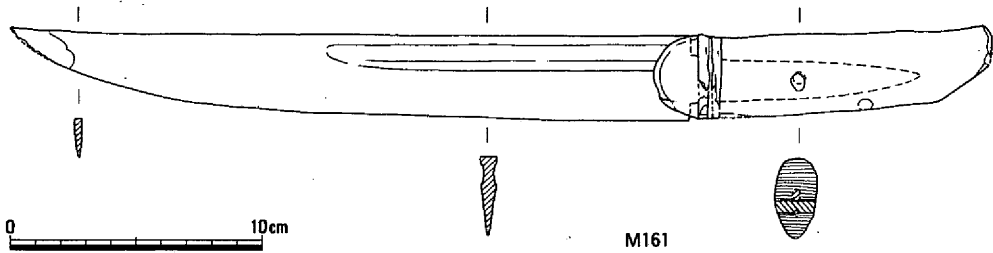
東大寺瓦 (第208~209図、巻頭図版8-4、図版84-2、85)：貝塚6~8の南西約2mの地点で、直径2m前後の範囲からまとまって出土した。層位的には貝層直下の粘質土にあたる。全部で9片あり、個体数としては8枚で、全て平瓦である。1564凹面には「東大寺」の刻印がある。長41.1cm、幅33.0、厚2.8cmを測る。1566は、幅35.8cm、厚2.0cm。焼成は良好で表面は灰色、断面は灰白色を呈する。調整



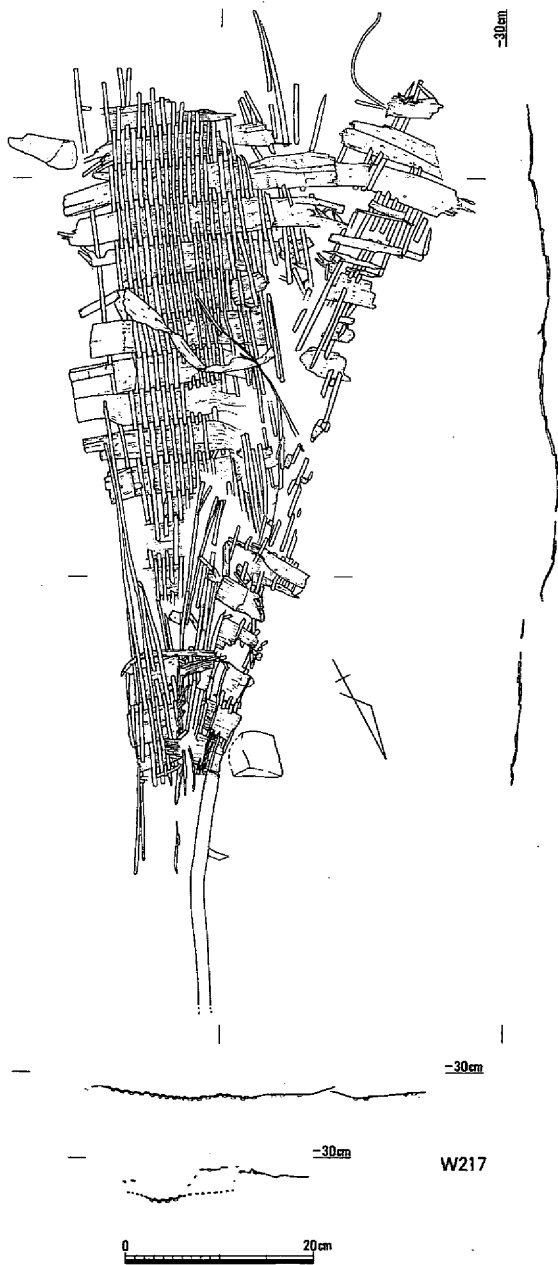
第308図 河道6 出土遺物〈3〉(1/6)



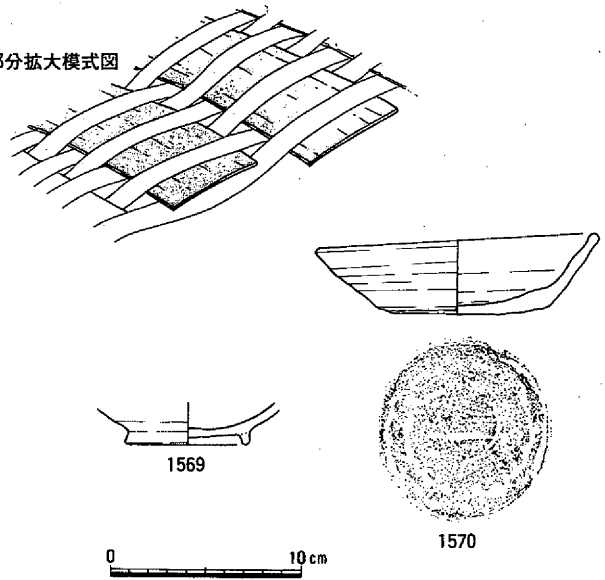
第309図 河道6 出土遺物〈4〉(1/6)



第310図 河道6 出土遺物〈5〉



部分拡大模式図



は基本的に、凹面は布目のちナデ、凸面はタタキのちナデで、ナデの前に板状工具によるケズリが部分的に入るものもある。タタキの文様は、斜格子文と、菱形文と横線を交点で交差させたものの2種類ある。また、1565・1567以外の凸面には砂が付着しており、1562・1568の凹面、1564の下側面にも付着する。ナデ調整やケズリによってタタキ痕や布目はおぼろげである。側面部は切り離した後、鋭角部分を凹面側に折り返しナデで丸くしている。

短刀（第310図M161、図版73・2）：河道下層の粘質土から出土。木製の柄まで完存する。全長38.66cm、刃部長26.9cm、幅3.4cm、茎部長約9cm、柄長13.3cmを測る大形品である。茎部は柄に打ち込まれていると考えられる。柄の元の部は半円形で2条の植物質の紐を巻いている。時期は層位から12世紀後半から13世紀前半。

第311図 河道6 出土釜(1/80)、同 部分拡大模式図、周辺 出土遺物

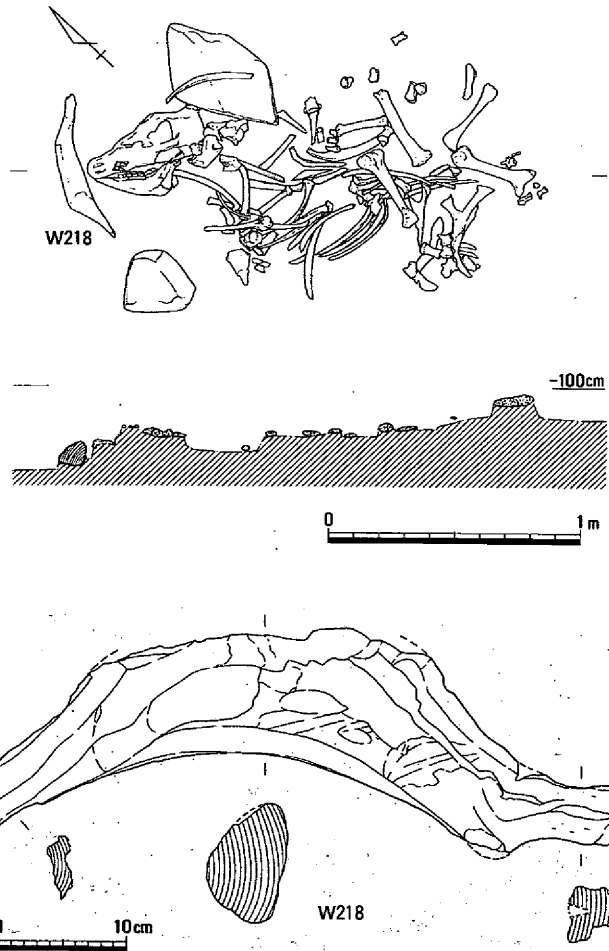
第3章 発掘調査の概要

釜（第311図W217、図版73-4）：東岸に近い河道斜面下層粘質土から出土。幅3cm前後の針葉樹の樹皮状の帯と幅5mmの草本の茎を編んだもので、時期は12世紀後半から13世紀前半。

（物部）

ウシ遺存体（第312図、図版73-5）：埋立遺構1によって形成された河道6の東岸斜面部、28ライン中央付近で牛骨を検出した。本遺跡では堆積層や遺構埋土中からかなりの量の牛・馬骨が出土しているが、それらがいずれも断片や各部分であるのに対し、本例は前肢をのぞいて完存する骨格である。その評価は付載富岡報告に詳しいが、堆積層の遺物から13世紀に年代を特定できる点も重要である。それぞれの骨はほぼ関係を保っており、背が下になった状態であった。頭骨の横からは緩やかなカーブをなす加工木218が出土した。大まかな面取り加工が行われており、その形状から牛に装着する頸木の可能性が考えられる。

（宇垣）



第312図 河道6 出土ウシ遺存体（1/30）
周辺 出土遺物（1/6）

（5）橋梁

橋梁2の概要

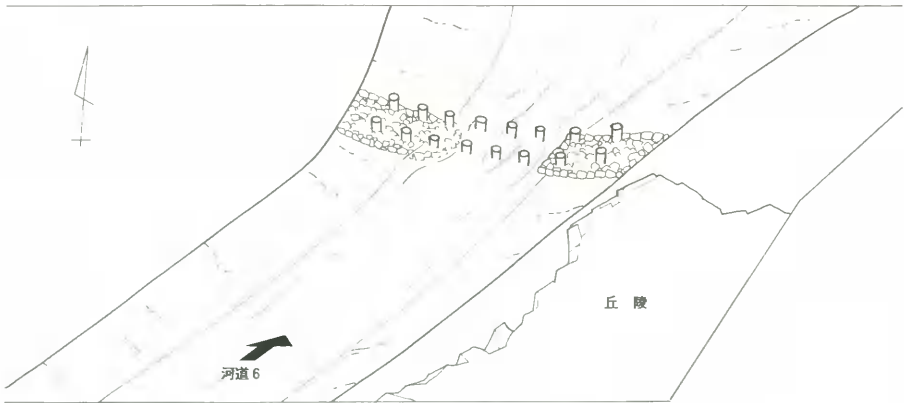
河道を東西に渡る橋梁遺構を検出した。遺構は橋の基礎施設と橋脚の下部からなり、検出時の形状はベルト状に角礫群が広がり、その間に巨岩や橋脚とみられる太い木材、杭列、板材などが見られるというものであった。このうち基礎施設は、東側が近世の用水路によって削平されているが全長39m、最大幅10m以上を測る大規模な遺構で、東西両端にのびる杭列を含めた長さは46mに達する。大小の礫・木材・埋め土によって構築されており、このうちの埋め土は、河道堆積土とは異なり暗褐色粘質土など異なる性状の土をブロック状（斑状）に多数含む土層である。

基礎施設は当初の予想以上の厚みと広がりをもつ立体的な構造物であり、その大部分が水中への埋め土によって形成されていることが判明するという大きな成果があった反面、この種の遺構の調査例がほとんどなかったこともあり、そうした理解に至るまで、またそれらから度重なる改修と複雑な築造過程を読み取るのは簡単なことではなかった。さらには遺構が低く水没しがちであったことや期間の問題もあり、調査は実に困難であったと言わざるをえない。

橋梁は東南東一西北西に軸線をとおり、以下に述べるようにきわめて長期間にわたって用いられたに



第313図 橋梁2（上空から）上が北



第314図 橋梁2イメージ図（南東から）

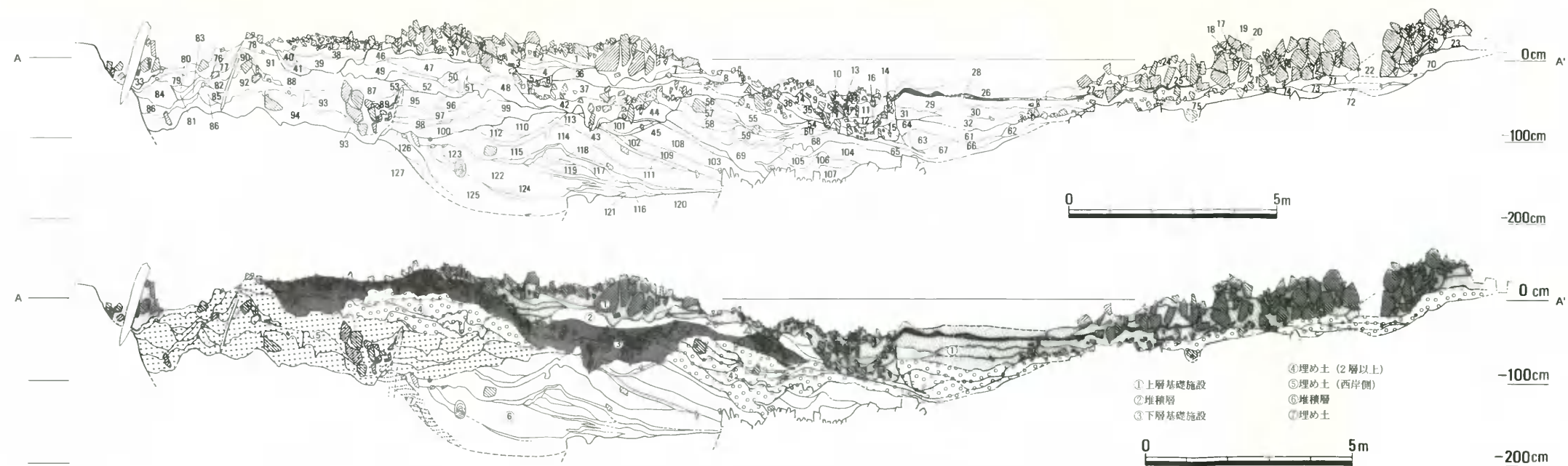
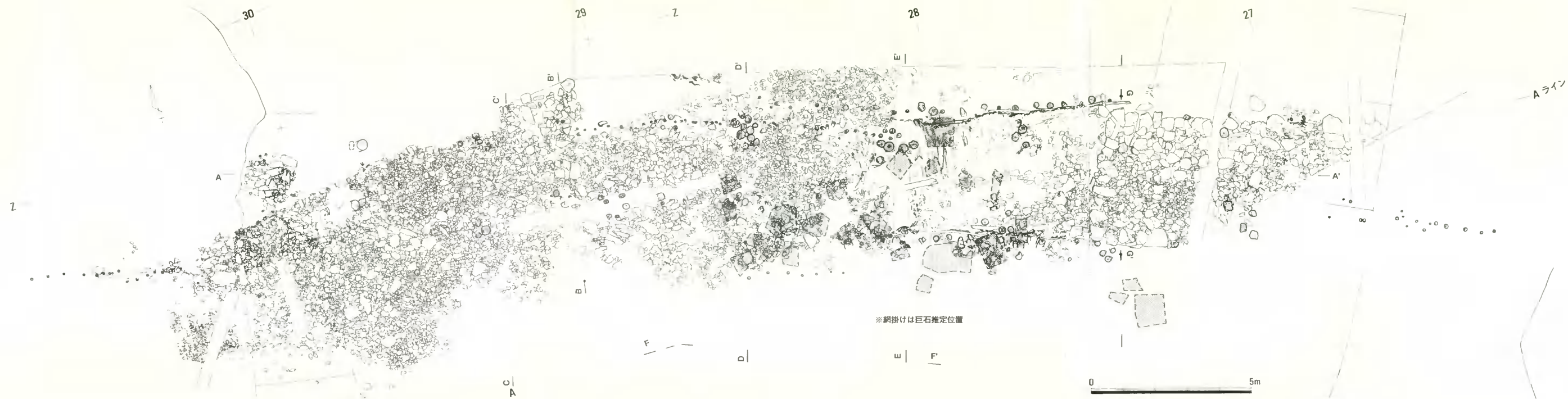
もかわらずその位置はほとんど動いていない。この位置は条里の坪境にあっており、それにそって東西にのびる道がここで川をまたぐことになるためとみられ、若干軸線が振れるのは河道に対して直交するためであろう。河道は幅35mを測る。河床は橋が構築された中世初頭でほぼ-2mであったが、埋め立て作業と堆積のため、廃絶に近い中世末には-0.75mに上昇する。

遺構の時期と変遷（第288・313～330図、巻頭図版1-2、2・3、図版59～67）

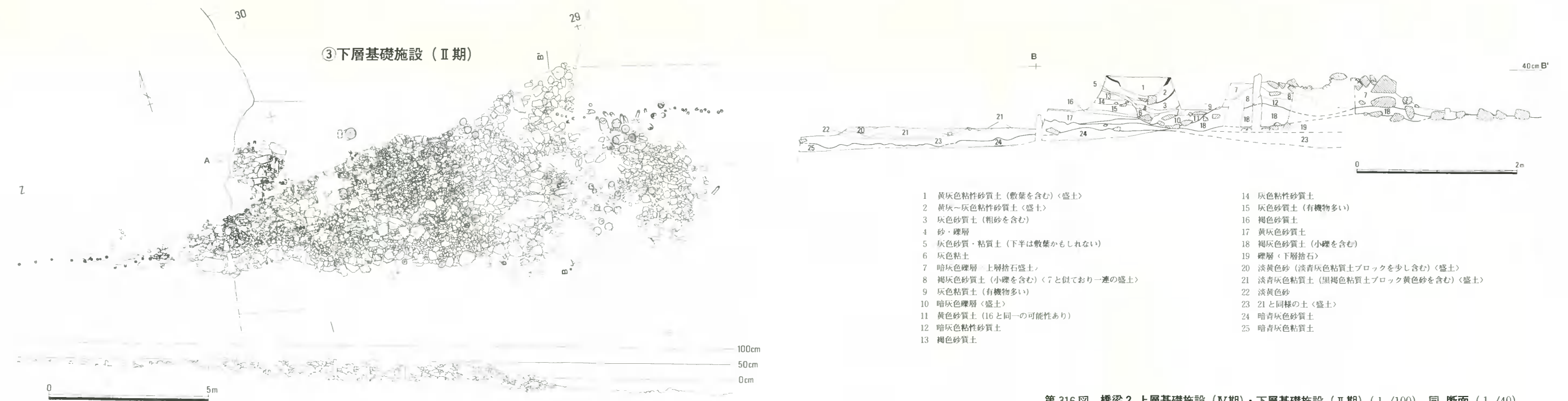
第3章 発掘調査の概要

- 1 褐灰色粘質土 (礫含む) <上層捨石>
- 2 淡青灰色粘質土 (下部に細土層がある)
- 3 青灰色砂質土 <埋め土>
- 4 青灰色粘質土 <埋め土>
- 5 青灰色砂質土 <埋め土>
- 6 褐灰色粘質土 (細石-小形の石を多く含む)
- 7 褐灰色砂質土
- 8 褐灰色砂質土 (黄色砂礫を多く含む) <上層捨石>
- 9 青灰色砂質土 <土壌16埋土>
- 10 砂礫 <土壌16埋土>
- 11 青灰色砂質土 (小枝片を少量含む) <土壌16埋土>
- 12 淡黄色砂 <土壌16埋土>
- 13 青灰色砂質土 <土壌16埋土>
- 14 淡青灰色粘質土 (小枝片を少量含む) <土壌16埋土>
- 15 青灰色粘質土 <土壌16穴埋土>
- 16 黄褐色砂礫 <土壌16埋土>
- 17 灰色砂質土 (粗砂を含む)
- 18 小礫・粗砂
- 19 灰色粘質土 (小礫を含む)
- 20 灰色砂質土 (粗砂を含む)
- 21 灰色粘質土 (小礫を含む)
- 22 青灰色砂質土 (やや褐色をおび礫を多く含む) <埋め土>
- 23 青灰色砂質土 (やや粘性あり) <埋め土>
- 24 灰色砂質土 (粗砂を含む)
- 25 褐灰色粘質土 <埋め土>
- 26 灰色粘質土 <埋め土>
- 27 暗褐灰色粘質土 (粗朶を含む)
- 28 粗朶
- 29 灰色粘性微砂質土 <埋め土>
- 30 灰黄色砂質土 (砂の薄層が入る、礫を一部含む) <堆積>
- 31 暗青灰色粘質土 <埋め土>
- 32 青灰色砂質土 (A) <埋め土>
- 33 灰色砂質土 (礫・板切れを含む)
- 34 青灰色粘質土
- 35 淡黄色砂質土 (淡黄色白灰色砂がスジ状に入る) <堆積>
- 36 暗青灰色砂質土 (黄色微砂層をスジ状に含む) <堆積>
- 37 青灰色砂質土 <下層捨石を包含>
- 38 暗青灰色砂質土 (黄色砂がスジ状に入る・A) <埋め土>
- 39 黄褐色砂と灰色粘質土の互層 <堆積?>
- 40 灰色砂質土 (黄色砂を含む)
- 41 黄色砂と灰色粘質土の互層 <堆積?>
- 42 暗青灰色粘質土 (砂礫を含む・A) <土壌21埋土>
- 43 黄褐色砂礫 <土壌21埋土>
- 44 灰色粘質土 (枝を多く含む) <土壌21埋土>
- 45 黄褐色砂礫 <土壌21埋土>
- 46 青灰色砂質土 (黄色砂を含む)
- 47 淡青灰色砂質土 (C) <埋め土>
- 48 青灰色粘質土 (黄白色粘土ブロックを含む) <埋め土>
- 49 暗青灰色粘質土
- 50 淡青灰色砂質土 (黄色砂を含む・C) <埋め土>
- 51 灰色砂質土 (黄色砂を多く含む)
- 52 青灰色粘質土 (C・D) <埋め土>
- 53 黄色砂
- 54 青灰色砂質土 (黄-淡灰色砂を多く含む)
- 55 青灰色砂質土 (黄色砂がすじ状に入る) <埋め土>
- 56 青灰色砂質土 (D) <埋め土>
- 57 青灰色砂質土 (A) <埋め土>
- 58 青灰色粘質土 (A)
- 59 灰色粘質土
- 60 灰色砂質土 (小礫・黄色砂を含む)
- 61 青灰色砂質土 (淡黄色砂を含む)
- 62 灰色粘性砂質土
- 63 灰色粘質土 (砂を含む)
- 64 淡灰色砂質土 (砂を多く含む)
- 65 青灰色砂質土 (黒灰色砂質土ブロックを含む)
- 66 灰色砂質土 (砂・小枝を含む) <埋め土>
- 67 暗灰色粘質土
- 68 淡灰色砂質土 (黄色砂を多く含む)
- 69 灰色粘質土 (小枝・砂を含む) <盛土>
- 70 青灰色砂質土 (ところどころ褐色・白色の砂層を含む・枝・木片少量含む) <堆積層>
- 71 青灰色砂質土 (70層より砂を多く含む)
- 72 灰褐色砂 (3-10cm大礫を含む) <堆積>
- 73 青灰色砂質土 (やや粘性あり・砂・粗朶を少量含む)
- 74 青灰色粘質土 (粗朶を少量含む) <埋め土>
- 75 灰黒色粘質土 (下部に粗砂を含む)
- 76 灰色砂質土 (粗朶を含みやや粘性が強い) <埋め土>
- 77 灰色粘質土 (黄色砂・粗朶を含む) <埋め土>
- 78 灰色砂質土 (C) <埋め土>
- 79 灰色粘質土 (粗朶を少量含む)
- 80 灰色砂 (やや黄味)
- 81 灰色砂質土 (多量の粗朶を含む) <埋め土>
- 82 青灰色砂質土 (やや暗い)
- 83 灰色粘質土 (粗朶を含む)
- 84 灰色粘質土 (粗朶・礫を含む) <埋め土>
- 85 灰色粘質土 (粗朶を含む・A) <埋め土>
- 86 灰色粘質土 (粗朶を多く含む)
- 87 暗-青灰色粘質土 (C) <埋め土>
- 88 青灰色砂質土 (黄色砂を含む)
- 89 青灰色砂質土
- 90 灰色粘質土 (A) (黄色砂・粗朶を含む) <埋め土>
- 91 灰色粘質土 (砂粒・細石が少量入る)
- 92 灰色粘質土 (粗朶・礫を含む・A) <埋め土>
- 93 灰色粘質土 (粗朶を含む・A) <埋め土>
- 94 灰色粘質土 (3-10cm大の黒色粘質土ブロックを多く含む)
- 95 青灰色粘質土 (C) <埋め土>
- 96 黄色砂
- 97 灰色砂質土 (黄色砂を含む)
- 98 灰色粘質土 (黄色砂を含む・A) <埋め土>
- 99 灰色砂質土 (A-D) <埋め土>
- 100 灰色粘質土 (粗朶を少量含む)
- 101 灰色砂質土 (小枝・砂をスジ状に含む・下部に黄褐色砂層あり) <堆積?>
- 102 青灰色砂質土 <堆積>
- 103 黄色・淡灰色砂・堆積
- 104 暗灰色粘質土 (砂・小枝を含む)
- 105 暗灰色粘質土 (砂・小枝を含む)
- 106 暗灰色粘質土 (砂を多く含む)
- 107 暗灰色粘質土 (砂・小枝を含む)
- 108 青灰色粘質土 (小枝を多く含む) <堆積>
- 109 青灰色砂質土 (淡灰色砂を多く含む) <堆積>
- 110 灰色粘質土 (下部に青色砂あり) <堆積>
- 111 淡灰色砂 <堆積>
- 112 灰色砂質土 (黄色砂を含む) <堆積>
- 113 青灰色砂質土 (淡灰色砂を多く含む) <堆積>
- 114 黄灰色砂 <堆積>
- 115 黄褐色砂レキ <堆積>
- 116 暗灰色粘質土 <堆積>
- 117 青灰色粘質土 (淡灰色砂を多く含む) <堆積>
- 118 淡灰色砂 <堆積>
- 119 青灰色粘質土 <堆積>
- 120 淡灰色砂 <堆積>
- 121 青灰色粘質土 <堆積>
- 122 淡青灰色砂 <堆積>
- 123 青灰色砂質土 <堆積>
- 124 暗灰色粘質土 <堆積>
- 125 淡青灰色砂 <堆積>
- 126 青灰色砂質土 (小枝を少量・黒色・白色粘質土ブロックを多く含む) <埋め土>
- 127 青灰色砂質土 (粘性がやや強い・黒色・白色粘質土ブロックを多く含む) <埋め土>

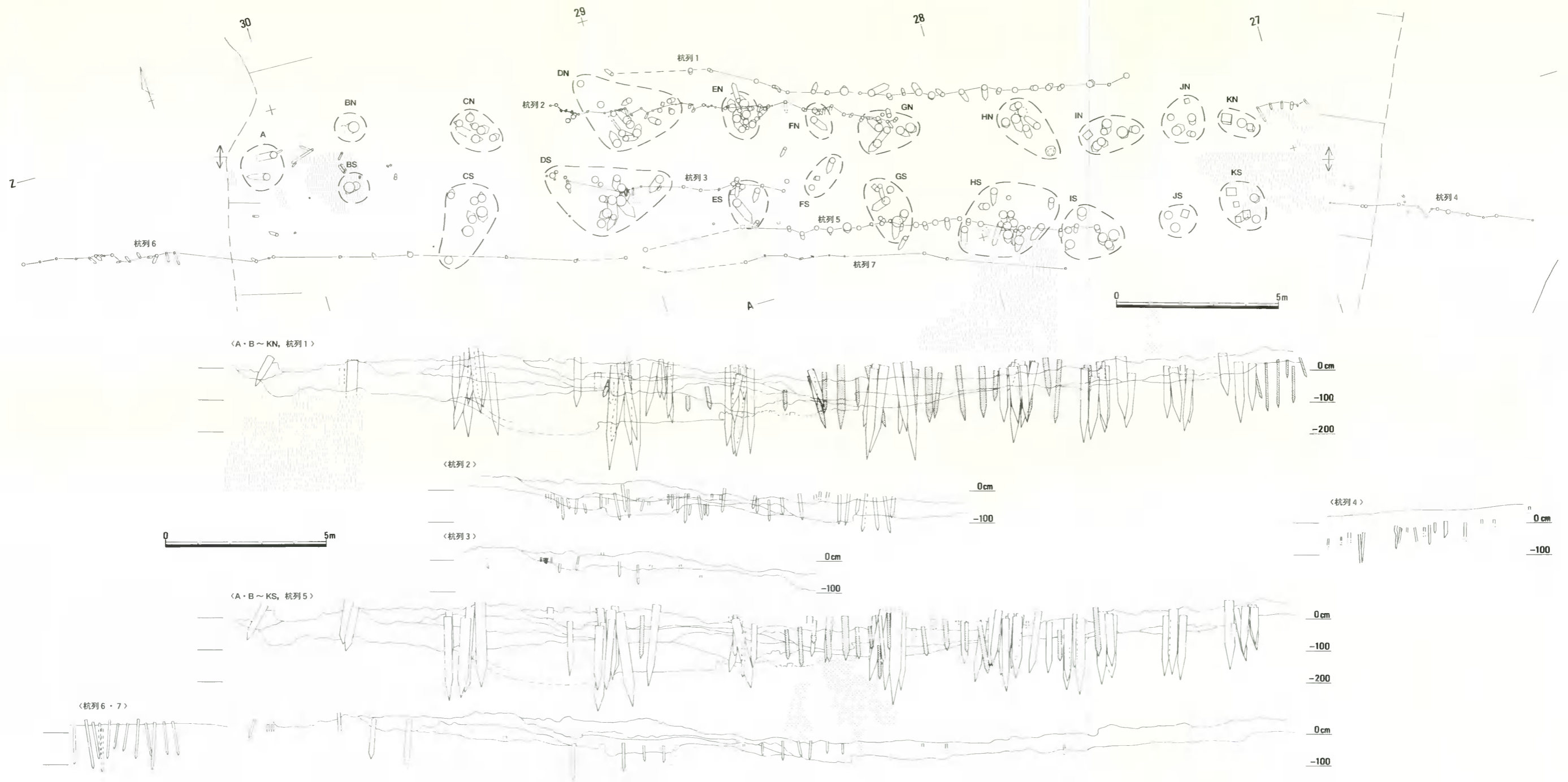
- A 黒灰色粘質土ブロックを含む
- B 褐色土ブロックを含む
- C 暗灰色粘質土ブロックを含む
- D 淡灰色粘質土ブロックを含む



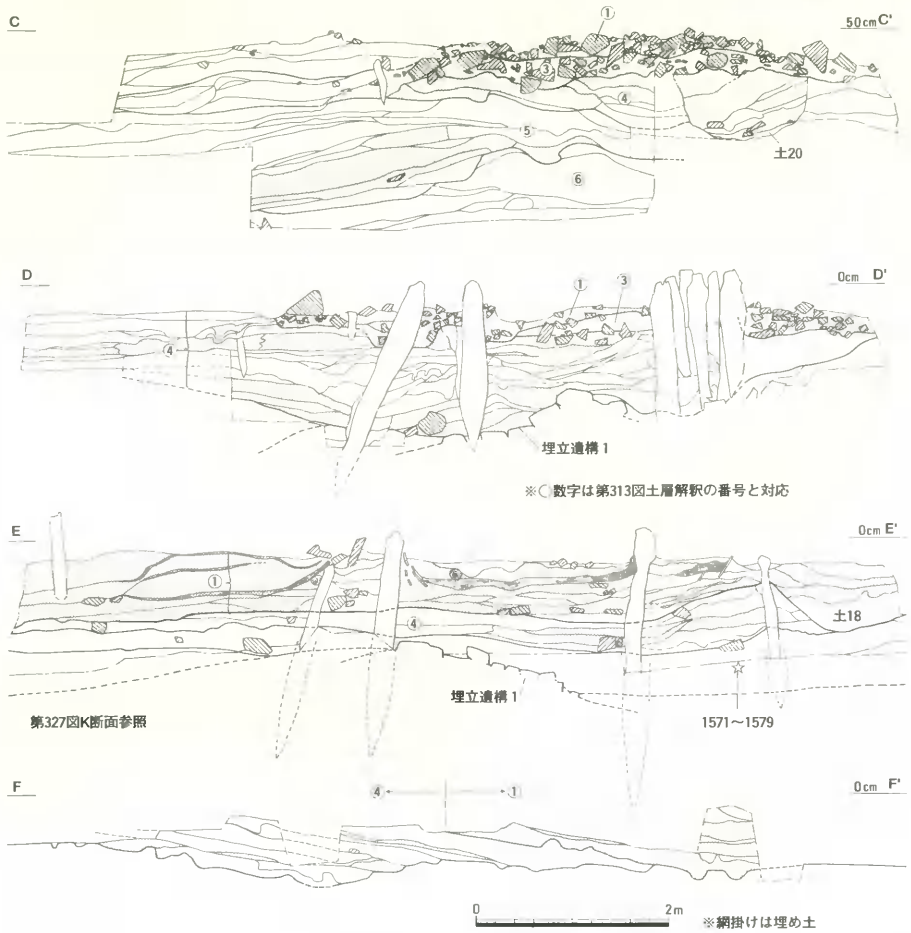
第315図 橋梁2 平面<検出時>(1/100)、同断面・土層解釈(縦1/50、横1/100)



第316図 橋梁2 上層基礎施設 (Ⅳ期)・下層基礎施設 (Ⅱ期) (1/100)、同断面 (1/40)



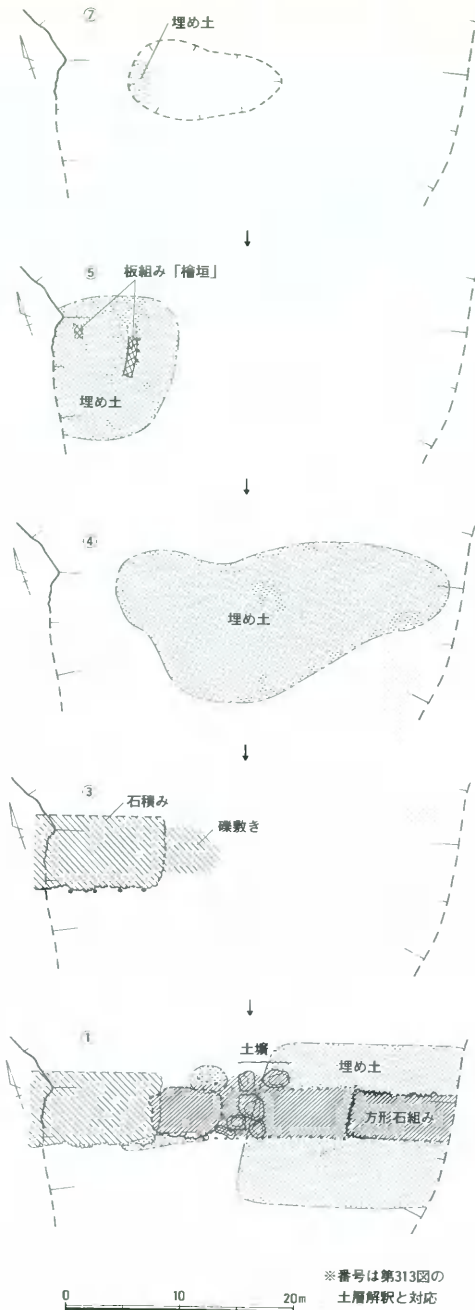
第317図 橋梁2橋脚・杭列 平面 (1/100)、同 側面見通し (縦1/50、横1/100)



第318図 橋梁2 断面 (1/60)

橋の構築は13世紀前半、廃絶は17世紀前半と推定され、約400年間にわたって使用されたとみられるこの間、改修が繰り返りなされており、最終の改修時には初期とはかなり異なる形状を呈するものになる。以下、把握できた変遷の過程にそって記載する。なお、検出時点で認められた橋脚は太さ20数cmの丸太材であるが、遺構の掘り下げに伴いその数は増加し、最終的に21ヶ所のまとまりをなし、それぞれが2～10本以上の、いわば束状の景観を呈することが明らかとなった(図版67-1)。これらはI～III期のたび重なる改修の結果、累積したものと考えるが、個別の橋脚すべての先後関係や組み合わせについては解明するに至らなかった。

I期 橋梁の最も早い段階の施工を示すのは第315図土層⑦である。西岸からなされた部分的な埋め土で、以後の埋め土施工の始まりとみることができ、橋梁の構築時ないしそれに近い時期になされたと考えられる。この層の形成時点の河道底から土師質碗他1571～1579が出土している。これらは13世紀前半に位置づけられ、またこれよりも下位の河道堆積層には12世紀後半を上限とする遺物が含まれ



第319図 橋梁2 基礎・埋め土の変遷模式図 (1/500)

ており、橋の構築は鎌倉時代前半にあったと考える。橋脚の特定はむずかしい。

Ⅱ期 続いて埋め土群⑤、④がなされ、その後西岸に長方形の石積み③が形成される。このうち⑤や④が③に先行する施設の下部であった可能性も否定はできないが、後述のように③の年代が上記⑦の年代から大きく隔たらないことや、横断面Cの④が③とよく対応することから見て、一連の構造物であった可能性が高い。埋め土群のうち⑤では河道側を埋めた後、河道西肩付近で杭を打ち、それに持たせかけるように菱形に組み編んだ板組み「檜垣」(229頁参照)を緩く弧を描くように設置し(図版66-1)、その内(西岸)側を大形の礫をまじえて埋めている(第315図89層)。これよりも西側の埋め土は粗礫が用いられることが多く、さらに上記檜垣の西5mにも檜垣が設置されており、入念に川岸の埋め立てがなされたとみられる。なお、この檜垣は後の橋脚によって打ち抜かれていた。埋め立てが河岸からではなく、河道側から河岸へむかっているのは先の埋め立て遺構1と同様である。

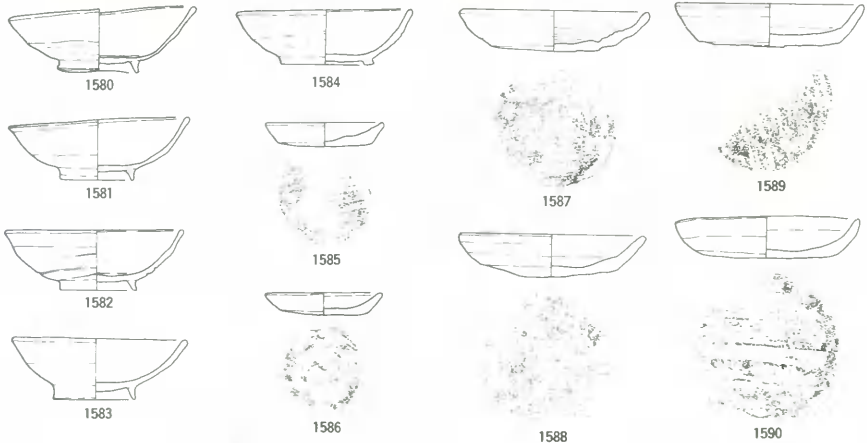
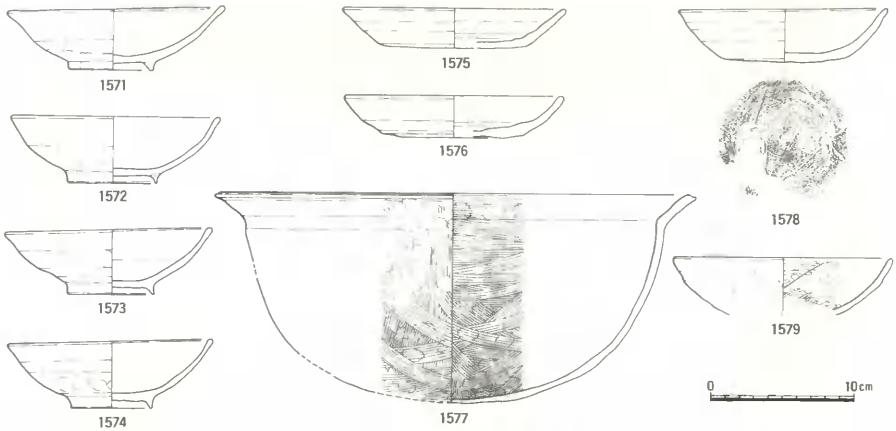
石積みは長さ12m、高さ50cmを測り(第316図)、南北幅は7m前後と推定される。南側面には2ないし3段の粗い石積みをなし、内側は角礫で充填される。石積みにそって杭列が設けられるが、石積みに先立って杭が打たれているように見受けられる。先端一河道側はなだらかに下降し、その先には長さ4mの舌状の平面形を呈する礎敷きが設けられている。礎敷き下には浅いくぼみ(第337図上壊23)があり、流水による凹部を礫で埋めて捨石面を形成している可能性がある。礎敷き上面はほぼ水平をなし、完形の土師質碗等1580~1590が出土した。これらのうちのいくつかは橋脚にひっかかっ

たかのような状態で出土しており、石組みが橋脚に伴うこと、そしてそれらの年代が13世紀中頃であることを示している。

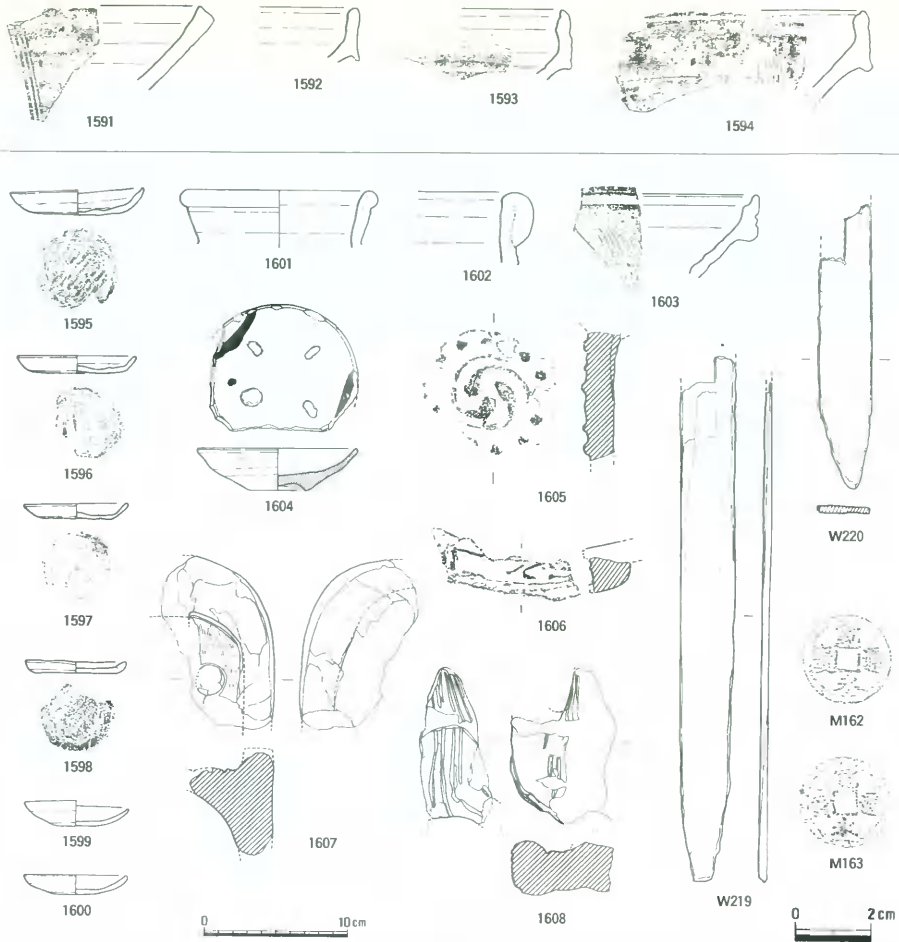
東岸側ではⅠ・Ⅱ期の施設はほとんど認められないが、Ⅳ期の方形石組み下で檜垣を検出した(第324図a b)。板材は短く、Ⅳ期の改修時に削平されたと推定されるが、この付近に人念な埋め土がなされたことを示している。この檜垣・埋め土に伴う遺物がなく、時期を限定することができないが、Ⅱ期あるいはⅢ期にある程度の施設が設け



1571~1579 出土状況



第320図 橋梁2 Ⅰ期埋め土直下・Ⅱ期礫敷き出土遺物



第321図 橋梁2 IV期基礎施設出土遺物<1>、同直上砂礫層出土遺物

られていたと考えてよい。Ⅱ期に西岸と同様の石組み施設（橋台）が設けられ、それがⅣ期に改修された可能性もありうると考える。

Ⅲ期 Ⅱ期に続く橋梁基礎施設は、16世紀（Ⅳ期）に位置づけられ、それまでの間14・15世紀の様相は明確でない。この時期の遺構の可能性があるのは西端部で検出した土城11（第329図）があるにすぎない。径1.9mの土城を掘り込み、2本の橋脚を設置している。礫を多用して埋め戻しているが、その間から14世紀前半の軒丸瓦1609が出土している。

追加された埋め土が後に流出あるいは削平された可能性もあるが、むしろ、さほど大規模な改修はなされず、Ⅱ期・13世紀の橋台を踏襲し橋脚のみの改修が継続されていったと推定する。

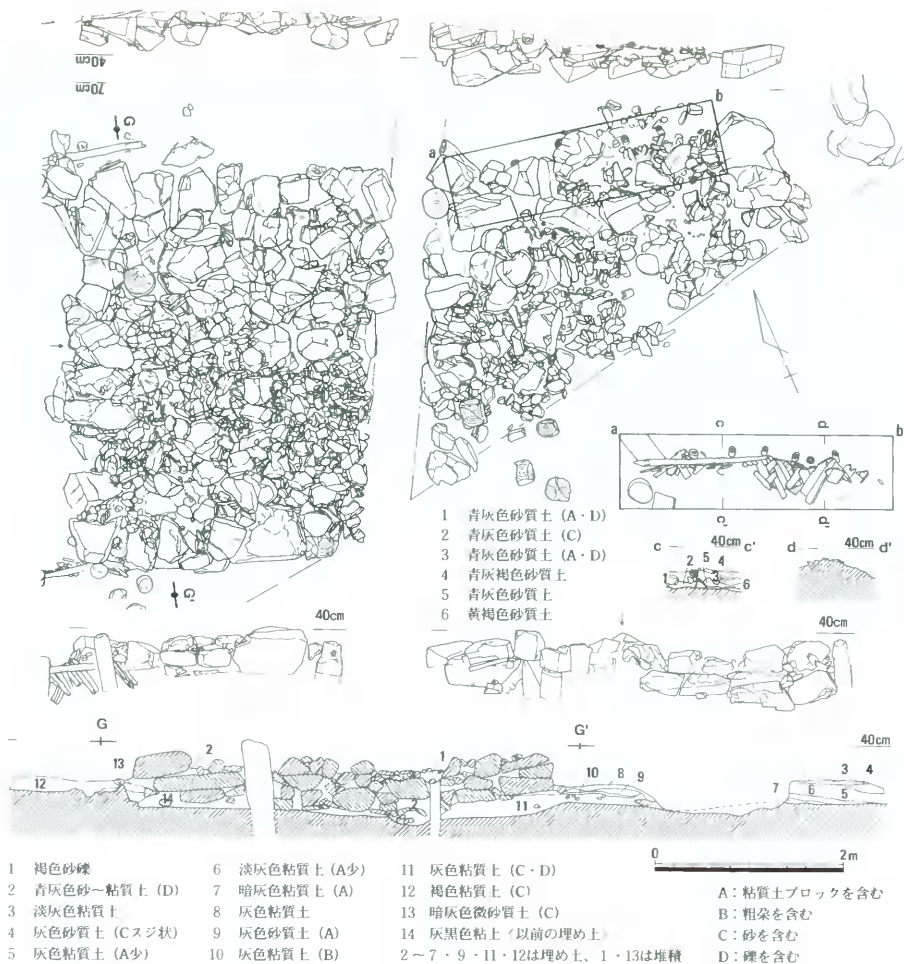
Ⅳ期（上層基礎施設） 16世紀に至り大規模な改修がなされ、上層の基礎施設が形成される。部分によって構造がかなり異なるため東岸から順に記載する。



第322図 橋梁 2 IV期基礎施設 (北北東上空から)



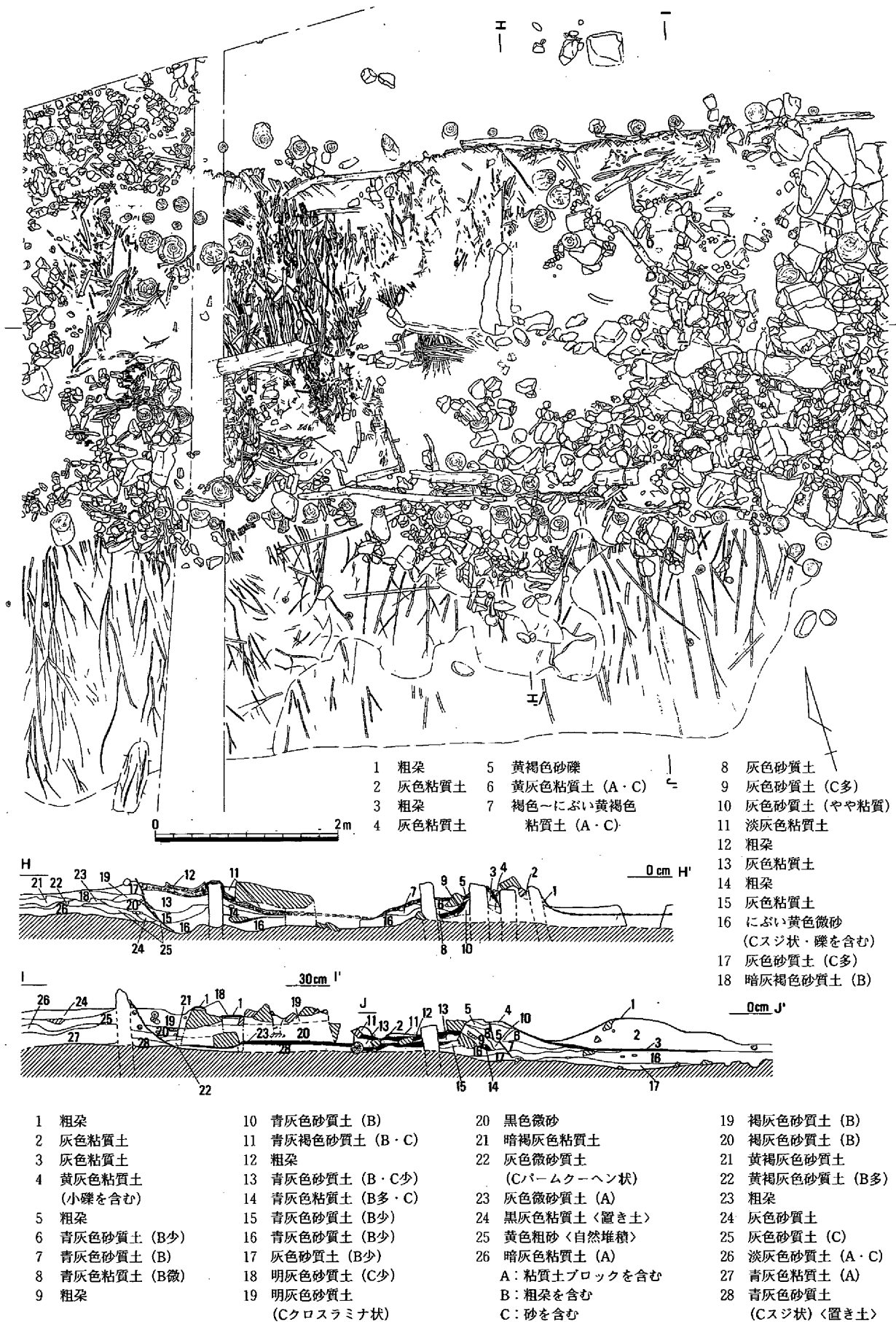
第323図 橋梁 2 IV期基礎施設断面 (西北西から)



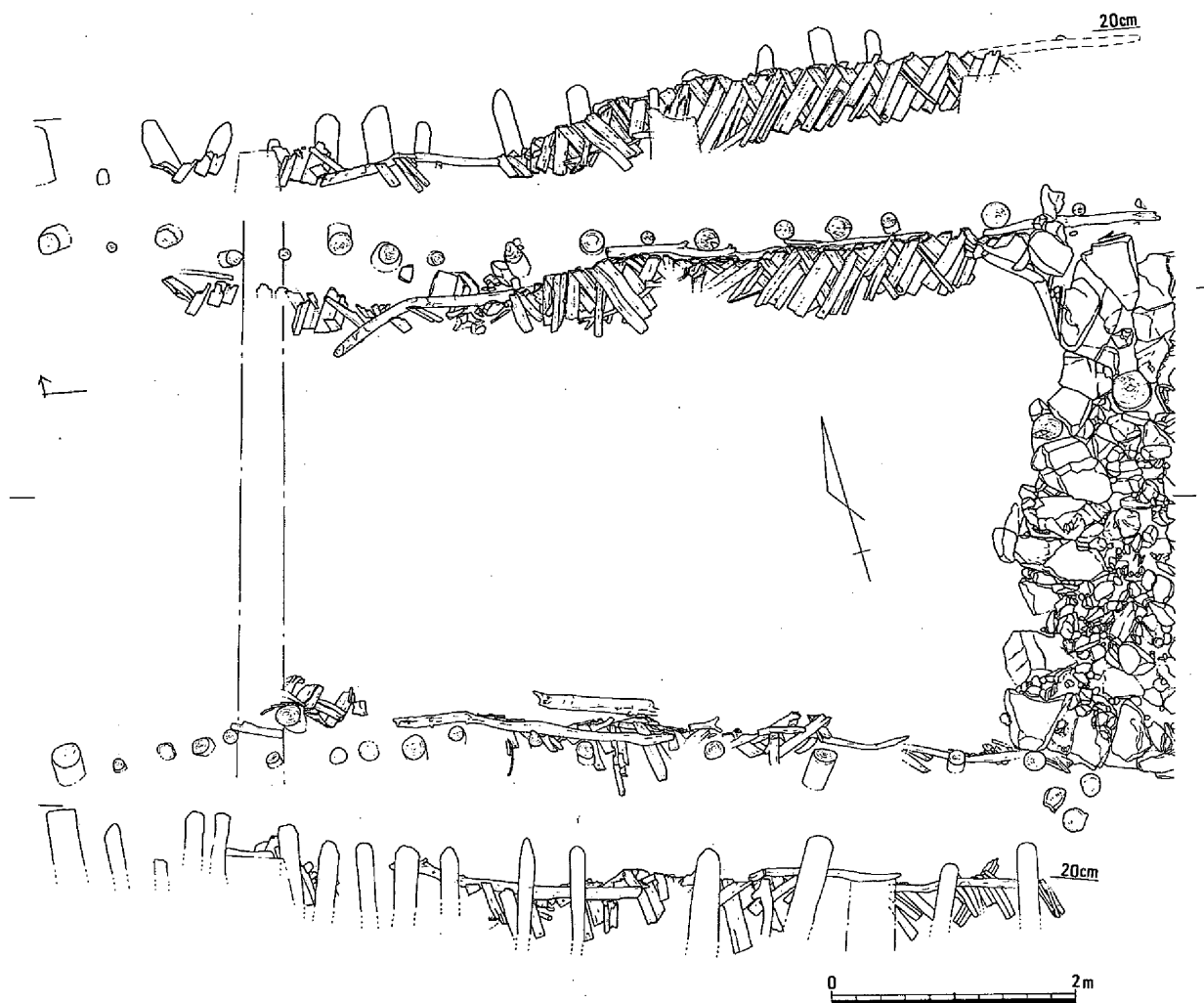
第324図 橋梁2 IV期基礎施設方形石組みと下部検出の板組み (1/60)

東岸 薄く置き土をした後に残存長さ8.9m、幅4.2mの突堤状に方形の石組みが構築される(第324図)。側面は大形の石材を用いた石垣である。

その前端から河道中央側7.5mまでの間には埋め土と敷葉・楡垣を用いた幅広い基礎施設が形成される(第325・326図)。この部分の構築は1. 橋梁軸線の下流(北)側に埋め土をおこない(第327図K③)、2. その上流(南)側に杭を打った後に横木を置き、楡垣を設置する。3. 続いてその上流側を埋める。埋め土には東半部を中心に多量の礫を入れてあり、その途中には最大厚さ10cmの粗朶層を設けている④。粗朶には葉や実がついた状態のマツ、センダンなどの枝が用いられており、厚い敷葉をなす。4. 3で形成された埋め土の上流側に楡垣を置いた後に横木、杭列を設置する。この設置順は2の逆である。また、楡垣は2ではよく編まれた状態で、板材下端の数ヶ所に小孔があり、転用してきた部材をそのまま用いたかに見えるのに対し、4では板を改めて組んだようなやや乱雑な状態である。



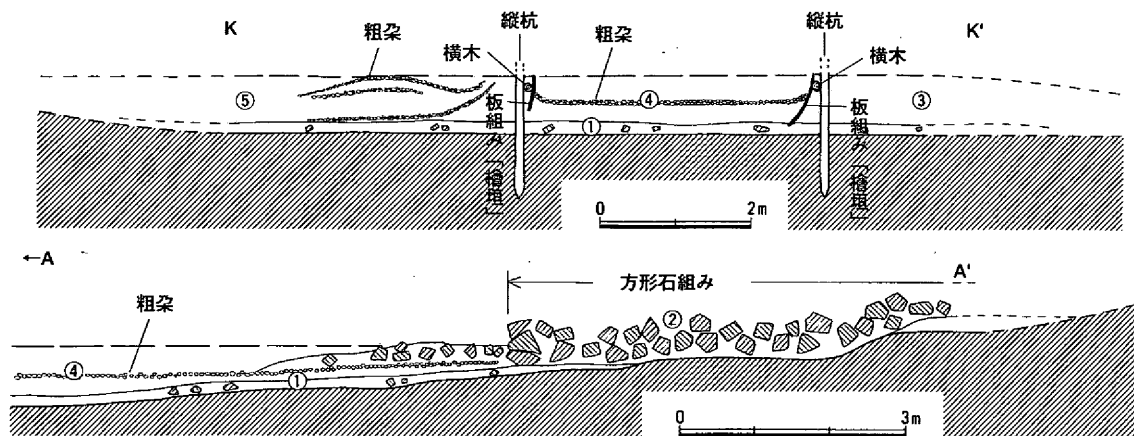
第325図 橋梁2 IV期基礎施設埋め土部 <1> (1/60)



第326図 橋梁2 IV期基礎施設埋め土部<2>板組み「檜垣」(1/60)

5. さらに上流側に敷葉をおこないつつ埋め土がなされる⑤。敷葉には竹が用いられる。

以上のようにこの部分は下流から上流にむかって、檜垣で区切りながら3段階の埋め土作業がなされている。檜垣の断面は2・4ともにノ字形で上流側に下がるが、第318図E断面中央に示すように4(南列)西端に限り逆向きになる。これはこの部分に先行して橋脚が所在したためとみられる。また、

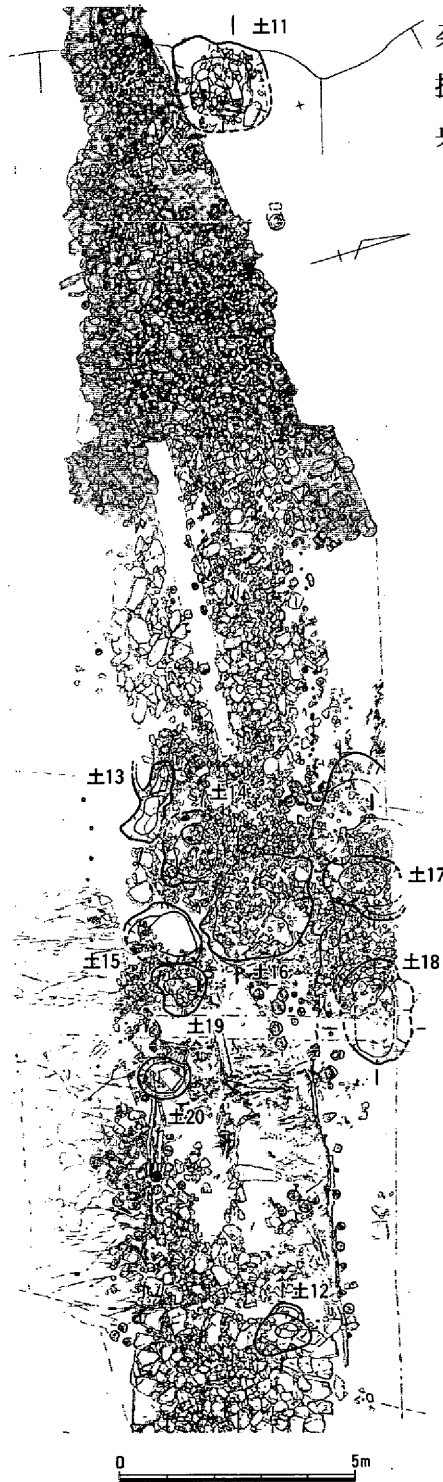


第327図 橋梁2 方形石組み・埋め土部の断面模式図(1/100)

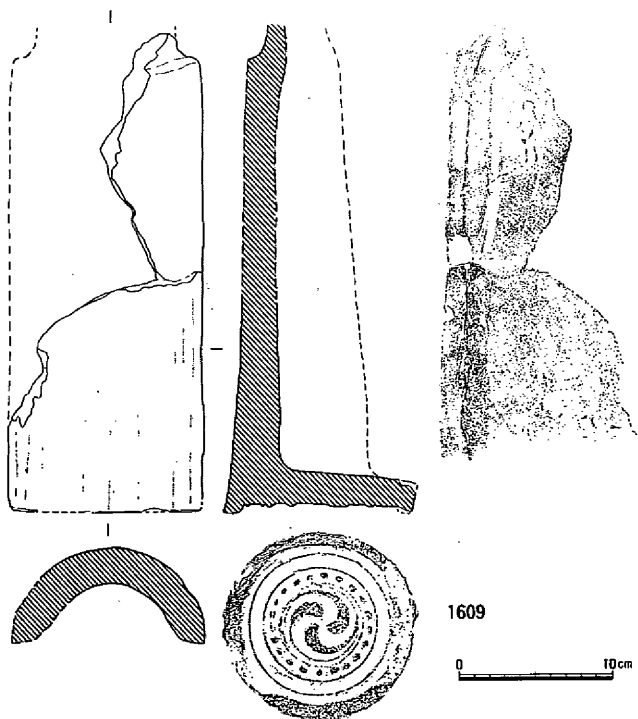
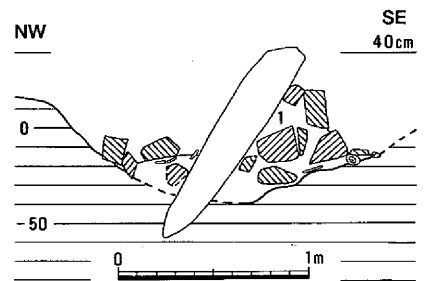
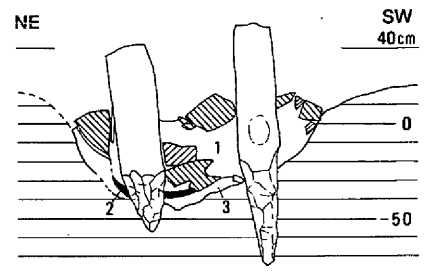
粗朶層は北側の橋脚に乗り上がっており、他では切断された橋脚の上部を覆う状況も見られた。

中央部 基礎施設が最も低くなる中央付近、約4mの間は上記とは様相が異なり、礫が広がる。

礫層の下には土壌13~20の8基の土壌が設けられている。径2~1m、深さ70~15cmで、いずれも礫によって埋められている。土壌16は東側の埋め立て工程3の下層埋め土を切り、土壌上層東部に同工程3上層の粗朶層が入り込んでいる。また、土壌15上部には工程4の檜垣の西端材が入っており、土壌20も盛り上がるように入れられた礫を工程3上部埋め土と粗朶が覆い、礫の下に工程4檜垣が入る。これらのことは、土壌の掘削と礫の投入は工程3後半~4に平行してなされたことと、中央部に近い部分では工程3と4がほぼ同時になされたことを示し



- 1 灰色砂質土
(礫、枝片を含む)
- 2 粗朶
- 3 灰色粘性砂質土

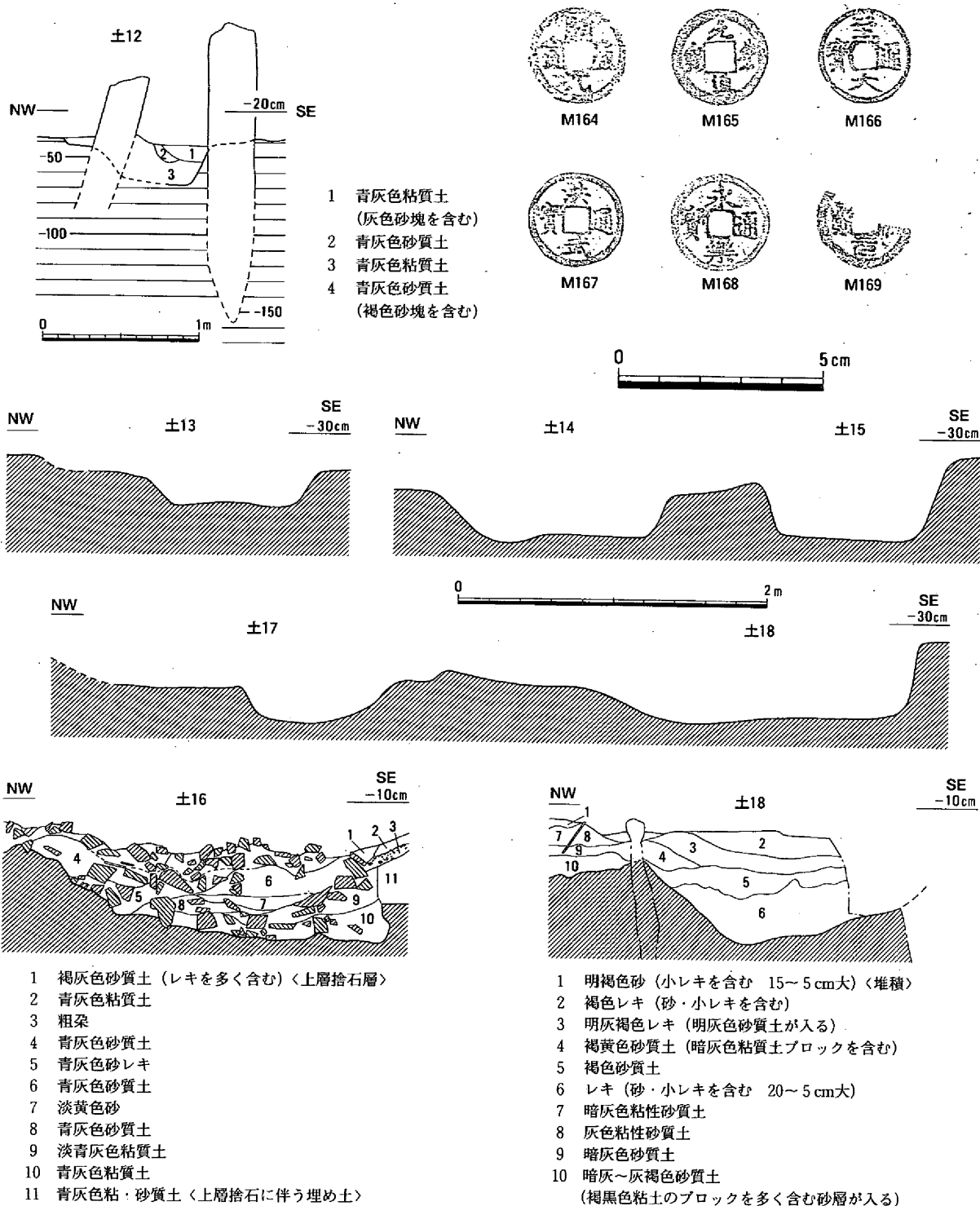


第328図 橋梁2 IV期基礎施設下の

土壌配置 (1/160)

第329図 橋梁2

土壌11 断面 (1/40)、同 出土遺物 (1/5)



第330図 橋梁2 土壌12~18断面 (1/40)、土壌20 出土遺物 (2/3)

ている。一方、北端では下面では土壌18と浅いくぼみ状の土壌17に分かれるが上部は一連の礫層であり、東西6.2mにわたって礫で埋められた状態であった。この礫層の肩部は中央の土壌14~16よりも約30cm高い位置・埋め土最上部にあり、この層はより後の工程で構築された可能性がある。なお、土壌20からのみ銅銭が6点 (M164~169) 出土した。

西岸 II期に形成された石積みを東に約3.8m拡張する (第316図)。

拡張前の西岸の堆積層は南 (上流) 側が高く、緩やかに北側に下降する状態であったようである。

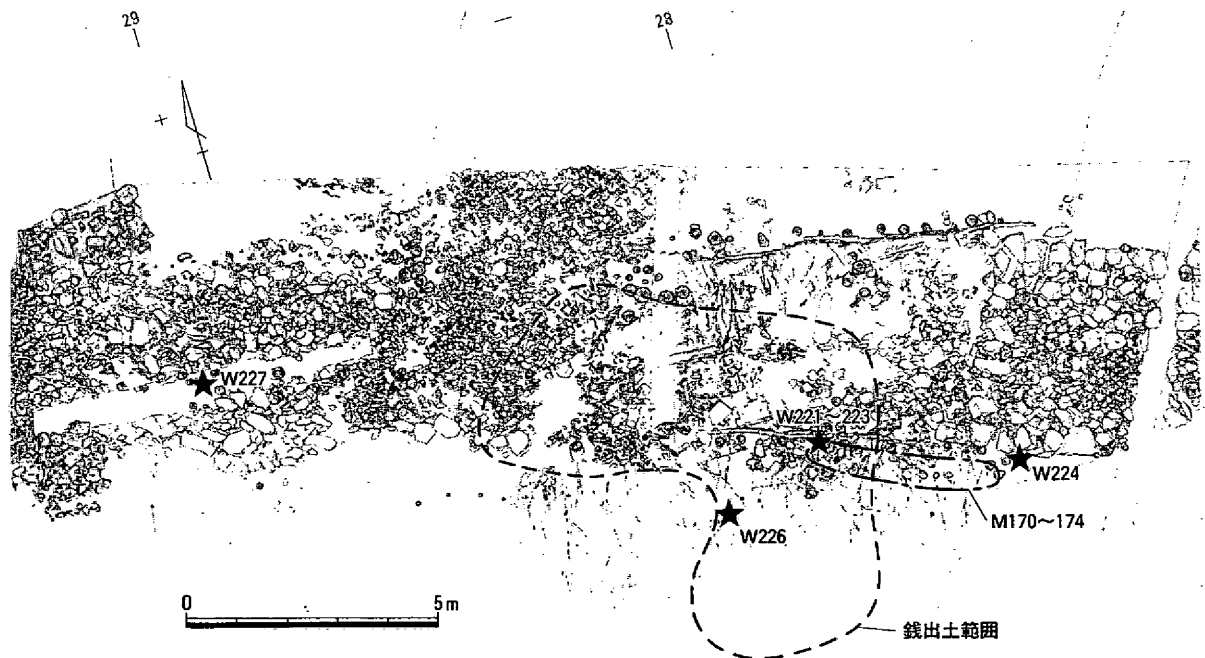
この面の南西部、Ⅱ期の石積み施設東端にあたる付近では幅1m、長さ3.7mの溝状の掘削がなされ、その北側に石積みが形成される。下部の埋め立てには砂質土ないし砂を用い、その上に石を積んでいる。前端斜面は斜めに下降して中央の礫群に接続する。石積みの南縁には長さ80~50cmと他よりも大形の石材が配されており、全長7.5mにわたる石列として中央部の礫群の南縁中央に達している。この石列の西端では長さ80cm前後の大形の石材が二段に積まれているが、その設置に先立って敷葉がなされ、さらにこれらの石材の南面まで覆うように敷葉をおこなった後に、南に接する上記の溝状掘削部分を埋め戻している（第316図B断面1~4層）。また、この時期にはⅡ期の石積みの南側面は完全に埋没しているが、その堆積土の上面にも礫が広がっており、南側へ礫敷きをおこなって広い礫敷面を西岸に形成したとみられる。

一方、中央部に近い北東端では長さ1.8mにわたって乱雑な作りの「檜垣」を検出しており、東岸と同様に下流側からの埋め土がなされたことを示している。

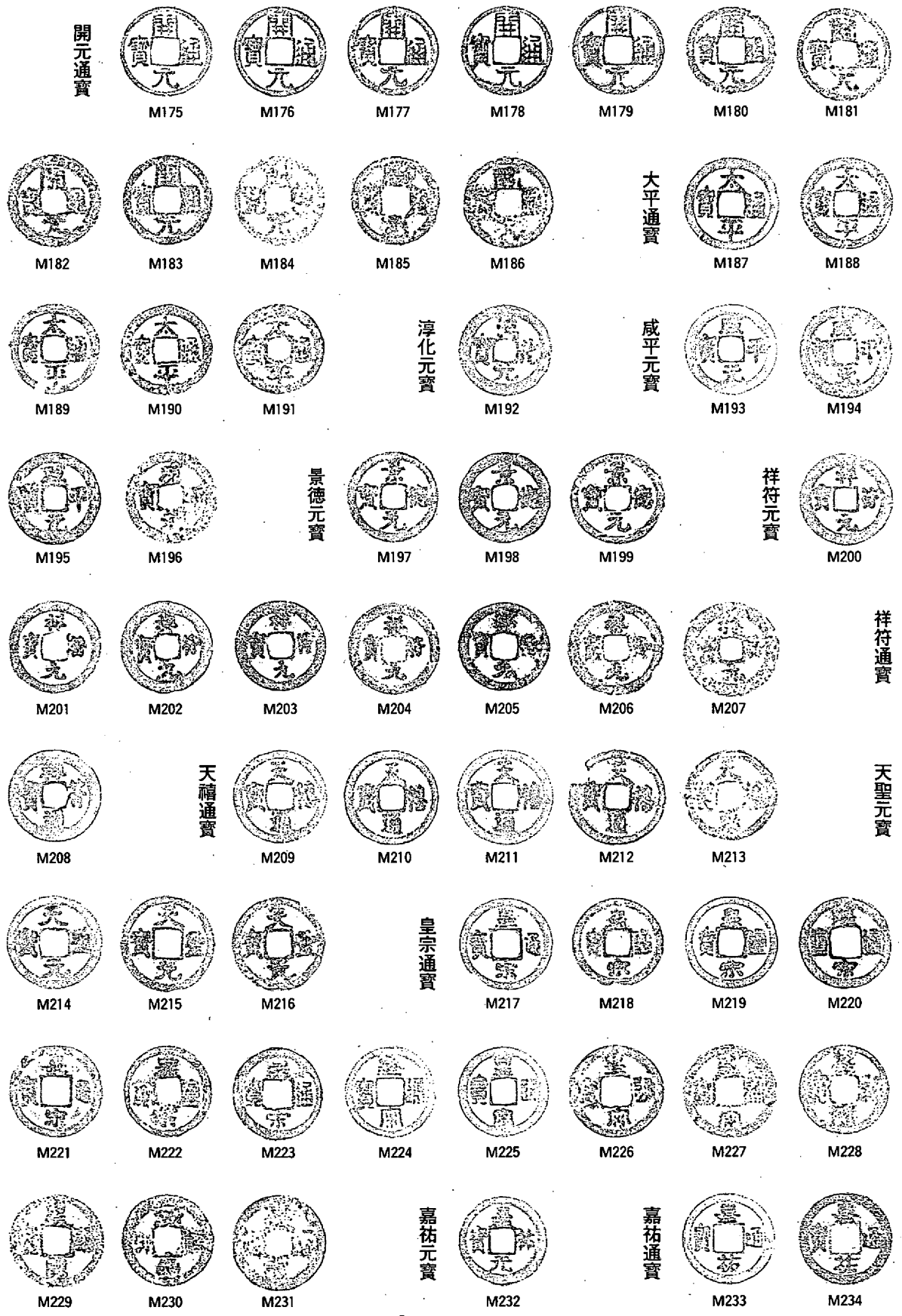
以上に述べたⅣ期の基礎施設は河道の両岸に突堤状の橋台を設け、東の河道部には入念な埋め土による基台部を、流水の影響を最も受ける中央部には土壌を用いて分厚い捨石部を形成するものである。先に示したようにこの基礎施設に先行する橋脚は所在するが、確実に関連をもつ、あるいは後に設けられたとみられる橋脚はない。したがって、この施設は杭状の橋脚に関するものではなく、前年度の調査の初期に検出された巨石群（図版59-2）を据えることを目的としたものとみられ、巨石を礎石としてそこから立ち上げられる橋に変わったと考える。この基礎施設を覆う砂礫層の遺物は17世紀前半に位置づけられ、Ⅳ期の橋は1654（承応3）年の大洪水によって廃絶した可能性が考えられる。その後、放水路・百間川の構築によって交通路も変化し、橋梁3に縮小したと推定する。（宇垣）

橋梁2Ⅳ期基礎施設に伴う遺物（第321・331~335図、第3表、図版91~93）

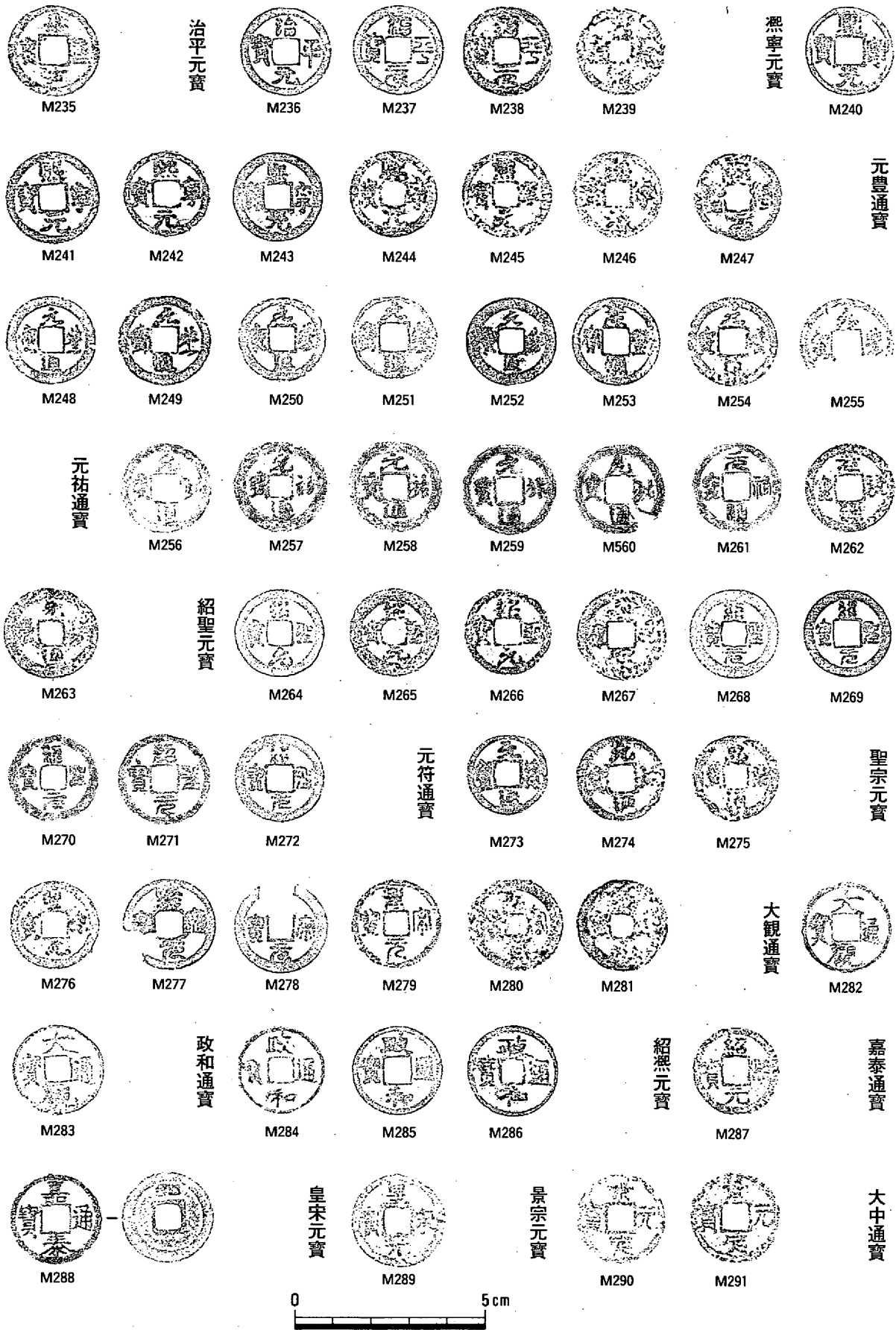
橋梁2Ⅳ期に伴う遺物には柿経、木簡、銅製品、古銭がある。それぞれの出土位置は、第331図に示す。柿経W221~223と木簡W224、そして銅製品M170~174は河道底東部の埋め土内に設置された南側檜垣や方形の石組みの上流側に引っかかったような状態で検出された。W225・226は上流側埋め土



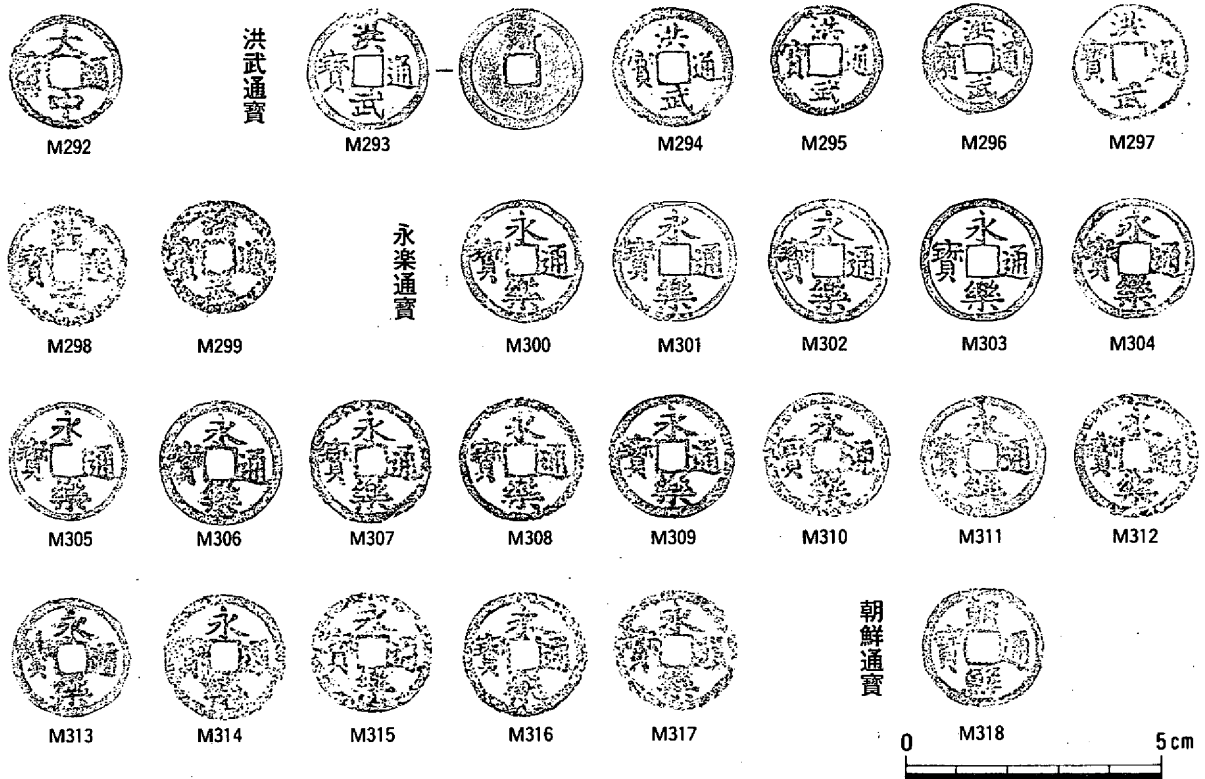
第331図 橋梁2Ⅳ期基礎施設に伴う遺物の出土位置（1/150）



第333図 橋梁2 IV期基礎施設出土遺物 < 3 >



第334図 橋梁2 IV期基礎施設出土遺物〈4〉



第335図 橋梁2 IV期基礎施設出土遺物〈5〉

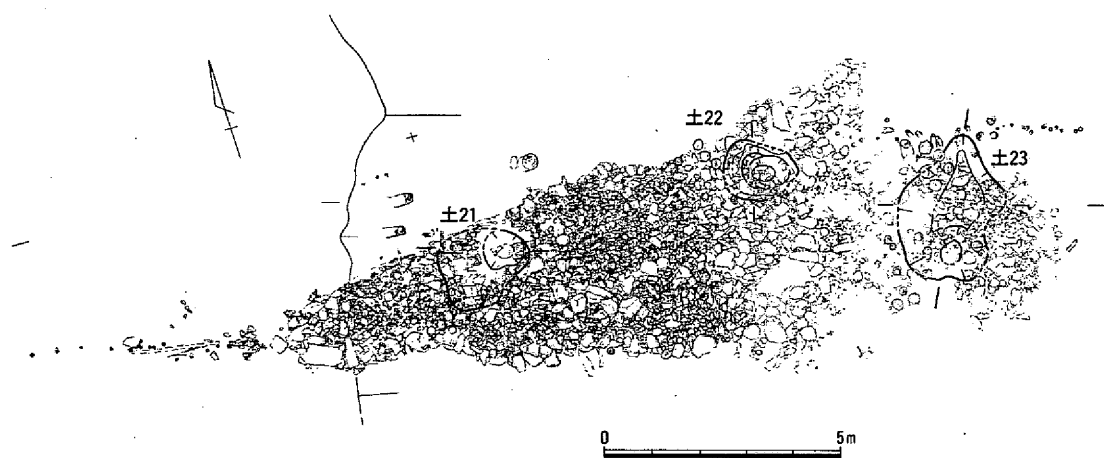
第3表 IV期基礎施設出土銭一覧表

銭貨明	国名	初鑄年	枚数
開元通寶	唐	621	12
太平通寶	北宋	976	6
淳化元寶	北宋	990	1
咸平元寶	北宋	998	4
景德元寶	北宋	1004	3
祥符通寶	北宋	1009	8
天禧通寶	北宋	1009	2
天聖通寶	北宋	1017	5
天聖元寶	北宋	1023	4
皇宋通寶	北宋	1038	15
嘉祐元寶	北宋	1056	1
嘉祐通寶	北宋	1056	3
治平元寶	北宋	1064	4
熙寧元寶	北宋	1068	10
元豐通寶	北宋	1078	9
元祐通寶	北宋	1086	9
紹聖元寶	北宋	1094	9
元符通寶	北宋	1098	3
聖宋元寶	北宋	1101	6
大觀通寶	北宋	1107	2
政和通寶	北宋	1111	3
紹熙元寶	南宋	1190	1
嘉泰通寶	南宋	1201	1
皇宋元寶	南宋	1253	1
景宗元寶	南宋	1260	2
大中通寶	明	1361	1
洪武通寶	明	1368	7
永樂通寶	明	1408	18
朝鮮通寶	李氏朝鮮	1423	1
判読不明			31
合計枚数			182

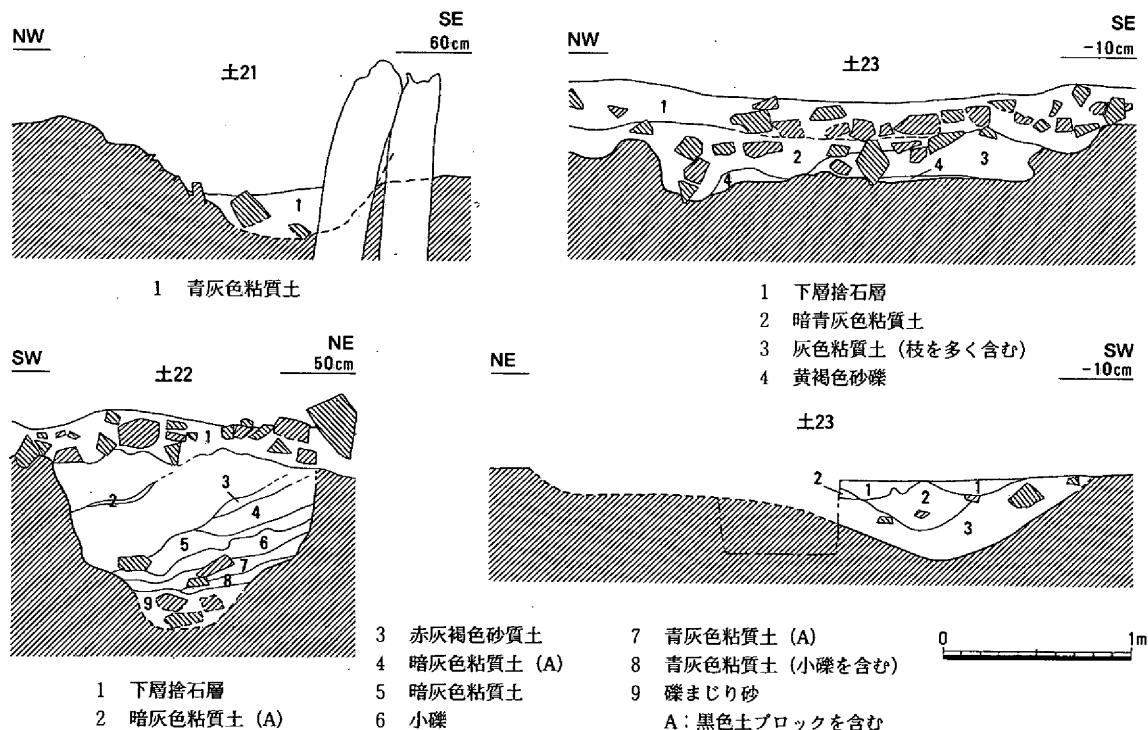
大改修工事以後に橋梁上から上流側へ投入されたか、ごく近い河道上流から流れてきた可能性が高く、特に古銭は前者と考えられる。3本の柿経はいずれも厚さ0.5mmと薄いもので、「妙法蓮華経」の片面写経である。W221・223の頭部は山形に裁断されている。材はヒノキである。W221は卷第三化城喻品第七の一節「勝如来所千道場菩提樹下坐師子坐諸天」、W222は卷第五分別功德品第十七の一節「男子善女人不須為我復起塔寺及作僧坊」、W223は卷第六随喜功德品第一八の一節「樂之具皆給与之一衆生与滿閻浮提金」の断片である。全長は28cm以上あるものと推定される。W224はスギ製の木簡で、「無」のみ読めるが、内容は不明。W225は上下両端を欠損している。厚みは1～2mm。「軌」4文字と考えられる。W226は2つの断簡で直接は接合しないが出土状況や木簡の形状から同一木簡と考えられる。上端は不均等な山形に裁断されている。「是」の連続が確認できる。W225・226は習書と考えられ、文字の線の引き方が少しずつ異なる。W227は「な□□け□いつ」で、内容は不明。銅製品は全体の形状がわかるものが少な

第3章 発掘調査の概要

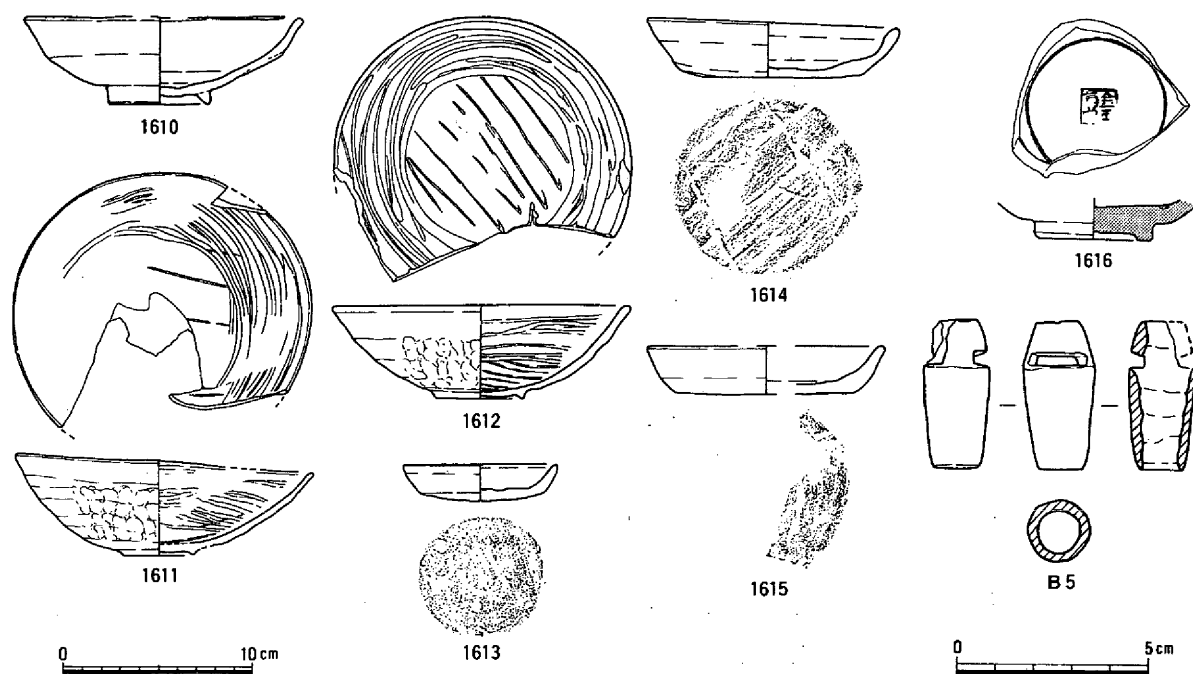
い。M170は細長く平たい針状を呈する。M171は小さな円形の蓋状を呈する。M172は球形を呈するものか。突帯が2条巡る。M173は把手。M174は板状を呈し、端部が曲がり非常に薄い。仏具の可能性を考えているが確認はつかめなかった。銅銭は合計182枚出土した。残存状態は比較的良好で8割強が判読できた。内容については第3表のとおりである。これらの銅銭は橋の上から投げ入れられたと考えられるが、Ⅰ～Ⅲ期の土層からはまったく出土を見なかったことからⅣ期の改修以後に初めて為されたものである。しかし、それが一度に投入されたものか、ある程度の期間の累積であるのかは不明である。これらの遺物の時期に関して、まず、Ⅳ期基礎施設とその直上に堆積していた砂礫層出土遺物(第321図)を見たい。基礎施設の埋め土や石積みからは土師器など小片が少量出土するのみである。1591は備前焼播鉢で粗朶の上部から出土した。また、基礎施設の基盤と考えられる河道西岸付近の堆積層から1592～1594備前焼播鉢が出土し、これらは15世紀後半から16世紀前半に比定される。こ



第336図 橋梁2 Ⅱ期基礎施設下の土壌配置 (1/160)



第337図 橋梁2 土壌21～23 断面 (1/40)



第338図 橋梁2 土壌23 出土遺物

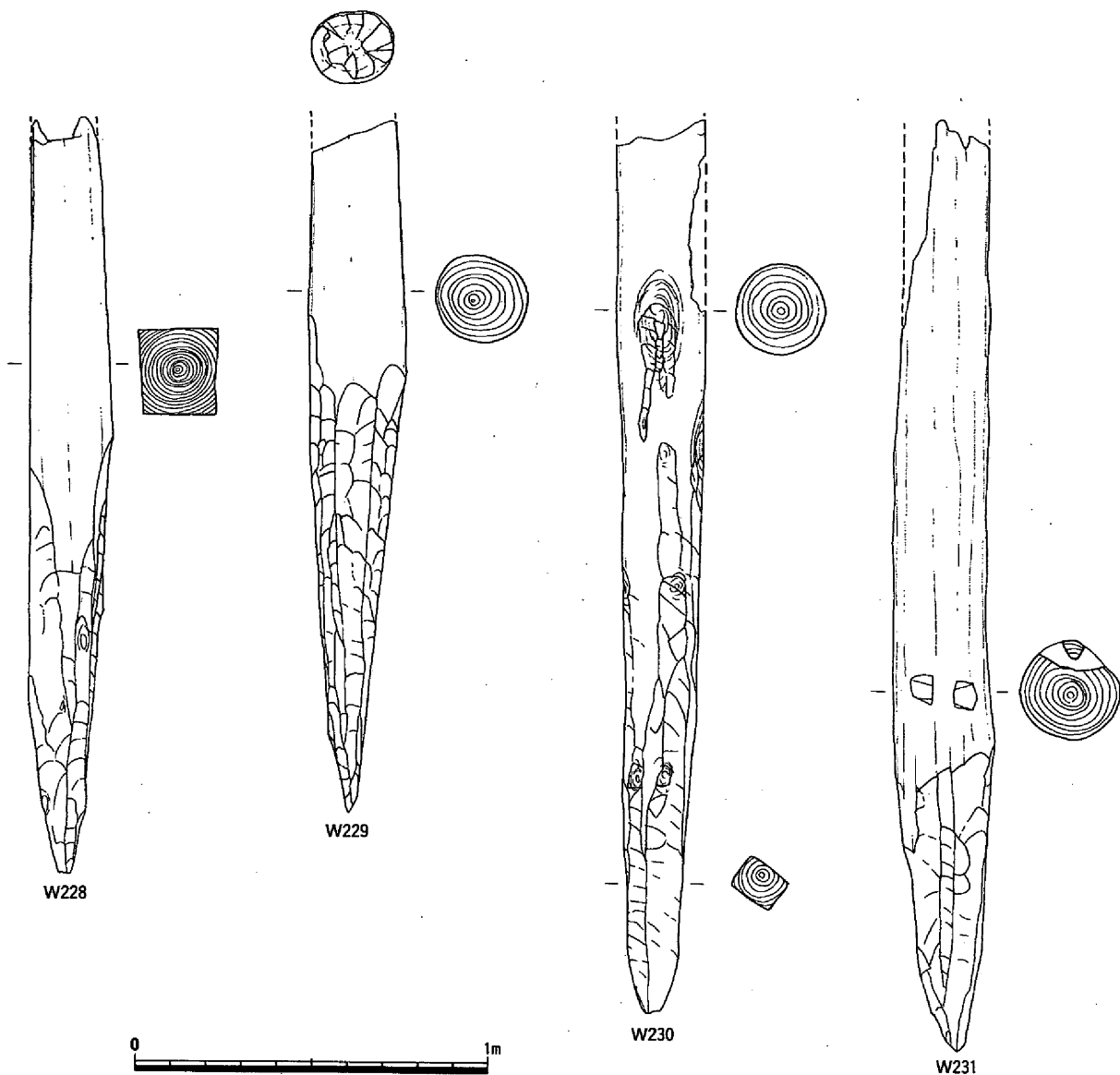
のことからⅣ期基礎施設の築造時期は16世紀前半代と推定される。基礎施設直上の砂礫層は巨石群を覆う厚い堆積層である。1595～1598は糸切りの皿、1599・1600は橙～赤色を呈する皿、1601～1603は備前焼。1604は胎土目の見られる唐津の皿、1605巴瓦、1607・1608は鬼瓦、W219・220は卒塔婆状の木製品、M162・163は「寛永通寶」である。これらの遺物は上限が17世紀前半を示していると考えられ、橋梁2の機能停止時期をそのころに当てたい。柿経の年代は平安時代末期から室町時代末期（16世紀）までとされており、今回出土した3本の柿経は16世紀代として齟齬はないように思う。銅製品や銅銭についても16世紀前半から17世紀前半のなかで考えたい。（物部）

Ⅱ期遺構下の土壌群（第336～338図）

Ⅱ期に西岸に設けられた石積み施設の下部から3基の土壌を検出した。土壌22は径1.4m、深さ90cmを測る深い土壌で下部には礫をまじえながら埋めてあり、通常はそのままとする橋脚をなんらかの理由で抜き取っている可能性がある。一方、土壌23は浅く不整形で、洗掘によって形成された可能性がある。土師質碗1610、瓦器碗1611・1612、青磁碗1616などが出土しており、上方の礫敷き（捨石）上出土遺物と同じく13世紀中頃に位置づけられる。B5は用途不明骨製品である。（宇垣）

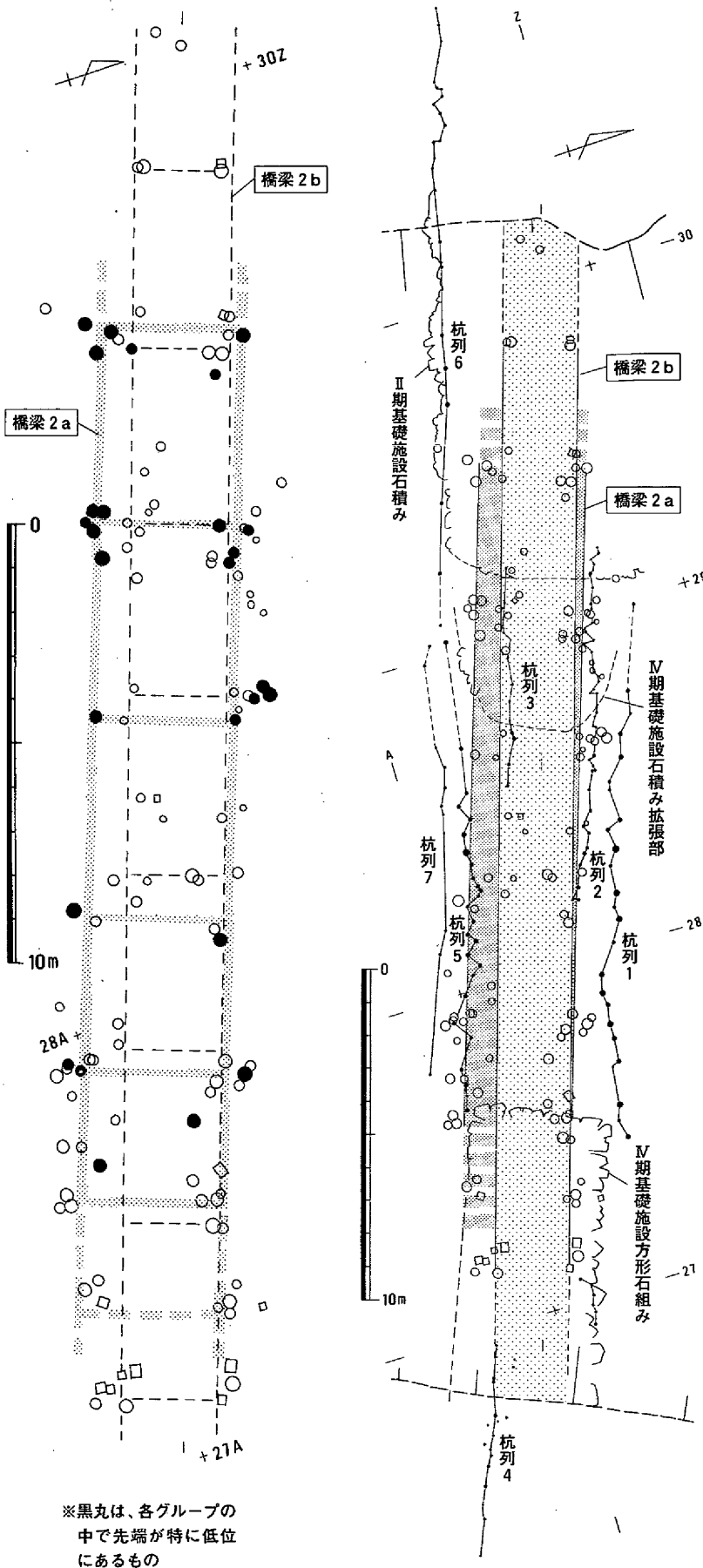
橋脚・杭列（第317・339・340図、巻頭図版3-2、図版66-2～4、67-2～4）

直径15cm以上の橋脚（橋脚の補助材も含む）と考えられる杭は122本検出された。橋脚の多くは丸太材で、残存長1～3m、直径は25cm前後が多く、最大は33cmを測る。樹皮はきれいに剥かれ、枝打ちしてある。先端部は丁寧に削って尖らせてあり、幅7～10cm、長さ5～10cm程度の工具痕跡が見られる。削り全体の長さは1m前後で、この部分の断面は円形や多角形あるいはほぼ四角形を呈するものがある。また角材が9本使用されており、大きなものでは断面30×23cmの長方形を呈するものや24×24cmの正方形を呈するものなどがある。これらにはほぞ穴などの細工は見られなかったが転用材の可能性が指摘される。また、橋脚材の輸送時に縄を掛ける「筏穴」が残存しているものが3本ほどあった。材はマツとコナラ属クヌギ節の2種類がある。橋脚の配置は第317図で示すようにA・BN～KS



第339図 橋梁2 橋脚 (1/20)

まで21箇所にまとまりが見られ、Aを除く他の20箇所は10箇所ずつ北側と南側で対になる。1箇所につき2～10本前後の橋脚が束状に打ち込まれている。これは前述したように度重なる補修や改修の結果、累積したものと考えられるが、このことは橋脚の上部に切断痕が残るもの5本、橋脚の頭部に後に述べる杭列の杭が突き刺さっているもの（図版66-3）が確認されることから肯定される。橋梁2は河床に施された埋め土や礫・木材を使用した基礎施設から、I～IV期の4つの段階に分けられる。検出された多数の杭材がどの段階に所属し、どう組合わさるのか分析を試みた。橋脚の大半は上流側や下流側へ傾いて検出された。これらを出来るだけ元位置に戻すため、橋脚先端部の位置に直したものが第340図左側の図である。黒塗りは、21箇所のそれぞれのまとまりの中で、打ち込まれた先端部の標高に高い低いの違いが見られたものの内、低い方の橋脚である。打ち込まれた深さは通常あまり参考にはならないが、橋梁2については約400年の存続期間が考えられており、その間に、河道は厚いところでは約2mの堆積が認められ、橋脚の打ち込み面に相当差があったと推定されることから、この分類は有効と考える。図で示すように、大枠ではあるが黒塗りの橋脚を主体とする長さが短く幅の広い



第340図 橋梁2 橋脚復元 (左1/150、右1/200)

橋梁と、幅の狭く長い橋梁に分離できる。前者を橋梁2 a、後者を2 bと仮称する。橋梁2 aは2本1対の橋脚が7列あり、幅3.2m、基本的なスパン4.5m、両端の橋脚から川岸までの長さを含めると全長は推定約30m。橋梁2 bは2本1対の橋脚が8列あり、幅2.2m前後、スパン4m、両岸への取り付け部の長さを加えると推定全長約36mとなるが、西端部にある2本の杭(まともA、土壌11)を2 bに伴うものとするれば40m近くになると考えられる。橋脚先端の深さから考えると2 aが古く、2 bが新しいと推定される。また、第340図の右図のように2 bはIV期橋梁の基礎施設である方形の石組みや埋め土部のちょうど中央を通っていることから新しい段階のものといえそうである。ただし、IV期の基礎構造はII期、III期の基礎構造をほぼ踏襲していると考えられるので、2 bはII~IV期のなかで考えた方がよいように思う。橋梁2 aはI期である可能性は高いと考える。

橋脚以外に直径10cm前後で橋梁の埋め土や石積みなどの基礎施設に伴う杭が約180本あり、多くは列状に打ち込まれ、8列確認される(第317・340図参照)。これらの杭は樹皮が付いたまま使用されてい

第3章 発掘調査の概要

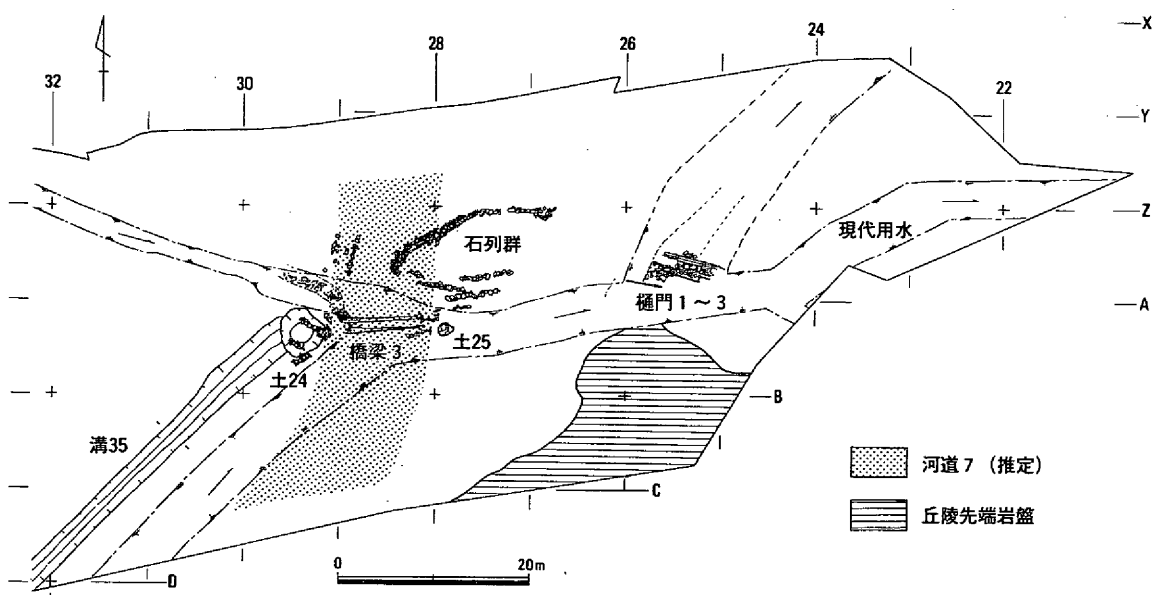
る。杭列1はⅣ期橋梁の基礎施設に伴うもので、北側檜垣・横木と組み合わせて土留めとして機能する。約16mに渡って検出され、並びは両側が僅かに下流側へと曲がり、全体として緩い弧を描く。河道の中央部にあたる部分では直径20cmのクラスの杭も使用されている。材は橋脚と同様マツとコナラ属クヌギ節。杭列2はⅣ期橋脚の東側方形石組み下で検出され、土留めとして打ち込まれたものである。「遺構の時期と変遷」の項で述べたようにⅡ期あるいはⅢ期になされた埋め土に伴うと推定される。杭列3は河道底から西岸方向に約11m直線的に延びる。杭は直径は5～10cmで比較的細く、打ち込まれた深さも浅め。材はコナラ属クヌギ節やツブラジイ。この杭列はちょうど橋梁Ⅳ期に継ぎ足された西岸の石積みと捨て石の下流側に沿っていることから、Ⅳ期の基礎施設に伴うものと推定される。杭列4は全長7mで杭列3と対をなすと考えられる。杭材は細く、下層にあるⅡ期の石積みに当たって先端が潰れているものも確認される。杭列5は河道東岸部分に約6mに渡って検出された。杭列4の延長上にあるのでⅣ期の可能性があるが確証はない。橋の東岸への取り付け部分または道の造成といったものに関連するのかもしれない。杭列6は杭列1と対をなす橋梁Ⅳ期の土留めである。状況は杭列1と同様であるが、杭列両端部は杭列1と逆に上流側へと湾曲する。杭列7は橋梁西部から河道西岸にかけて約18m延びている。Ⅱ期の西側石積みに伴うものと判断される。西岸部の杭列には横木が杭列の下流側に設置されていたことが確認されており、橋の西岸取り付け部に盛り土がなされた可能性がある。杭列8は橋梁上流側の河道中央部で検出された。杭は直径5cm前後の細いものである。この杭列は橋梁Ⅳ期の基礎施設である上流側埋め土の範囲と一致する事から、竹などを敷きながら埋め土した部分に杭を打ち込むことで河床の基盤に固定する目的があったのではなかろうか。（物部）

6 近世以降の遺構と遺物

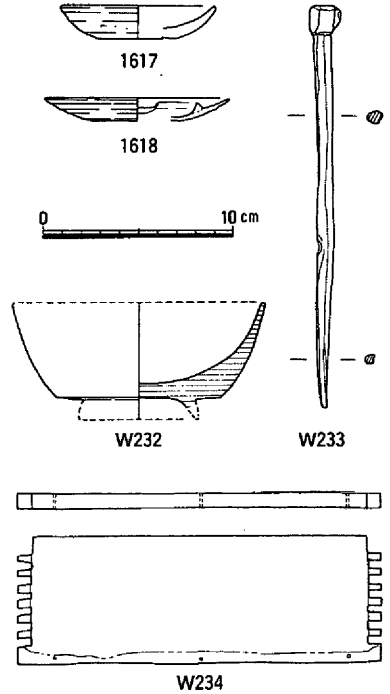
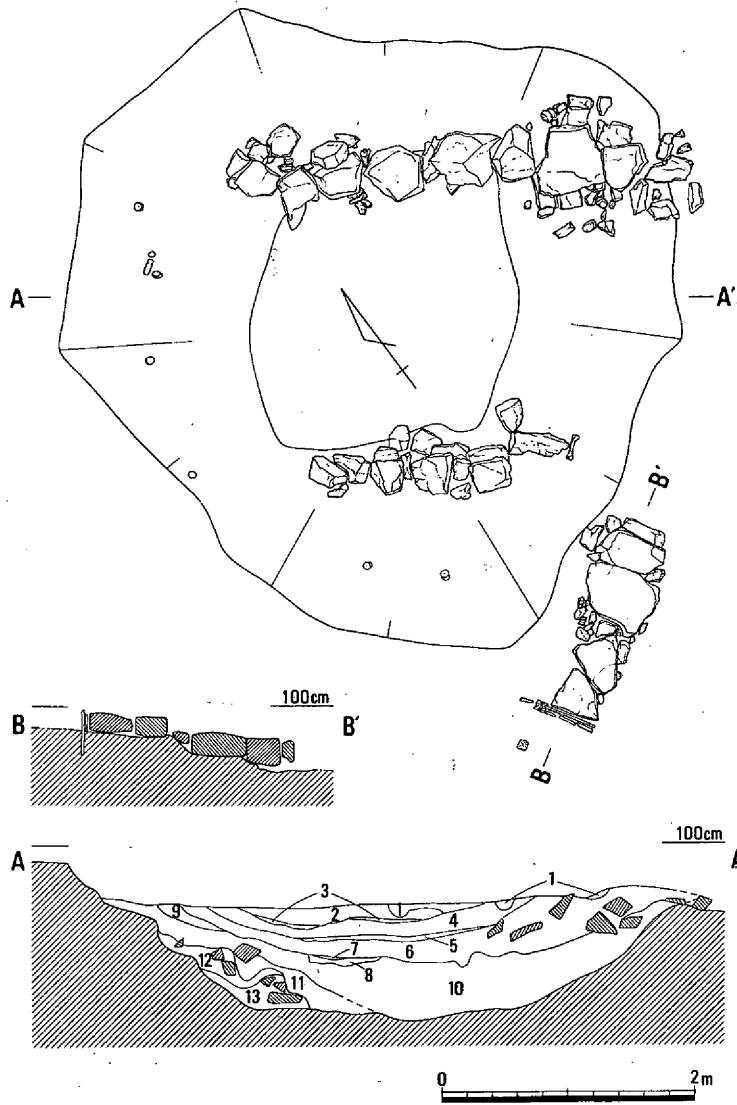
(1) 土壌

土壌24（第341～343図、図版72-3）

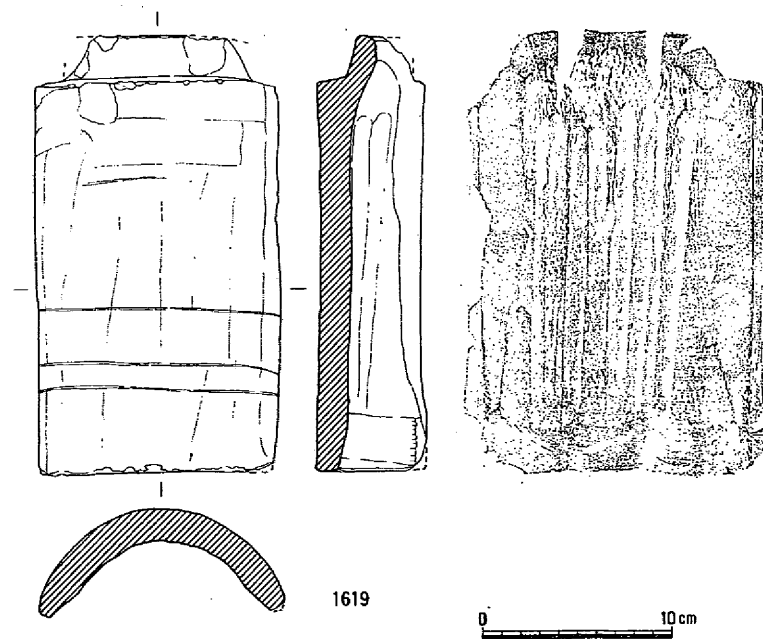
土壌24は溝35の北東端部に位置し、溝35を切っている。平面形は1辺約5mの不整形方形を呈し、検



第341図 近世以降の遺構配置 (1/800)

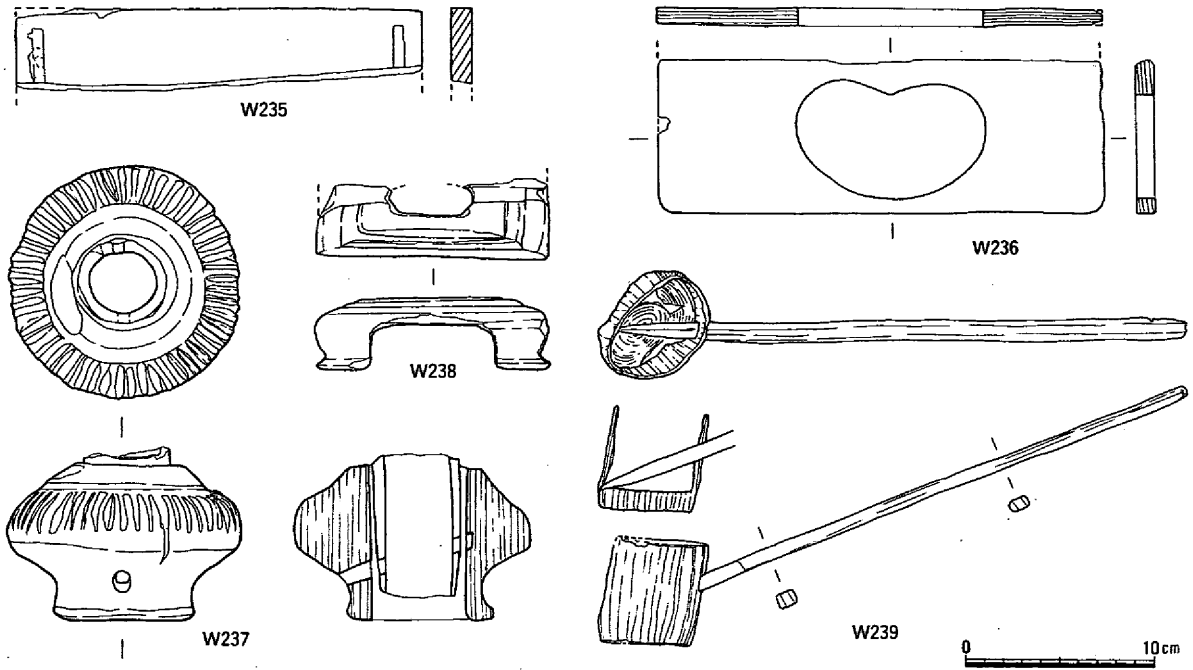


- 1 にぶい黄色微砂 (暗灰色粘質土を含む)
- 2 暗灰色粘質土 (暗褐色砂質土を含む)
- 3 暗灰色粘質土 (炭を含む)
- 4 暗灰色粘質土 (暗褐色砂質土を含む)
- 5 暗灰色粘質土 (明黄褐色砂を塊状に含む)
- 6 黒色粘質土 (暗褐色粘質土を含む)
- 7 暗灰色粘質土 (炭を含む)
- 8 黒色粘質土 (暗褐色粘質土を含む)
- 9 灰色粘質土 (明赤褐色粗砂を塊状に含む)
- 10 暗灰色粘質土 (黄褐色粗砂を含む)
- 11 灰色粘質土 (黄褐色砂を含む)
- 12 暗灰色粘質土 (黄褐色砂を含む)
- 13 黒色粘質土 (暗褐色砂を含む)



第342図 土壇24 同 出土遺物<1>

出面からの深さは約1.2mを測る。断面は逆台形を呈し、埋土は粘質土で上部は粘質土や砂質土の塊を含み、下部は砂を含む。上半部は人為的に埋められた可能性がある。土壇内部の周囲には崩れ落ちた多量の礫がドーナツ状に検出された。原位置を保っていたのは北東側と南西側のみであったが、おそらく方形の石垣が築かれていたと考えられる。また、土壇の北側肩部上面に階段状の敷石がある。この土壇と敷石は農業用水の水溜と

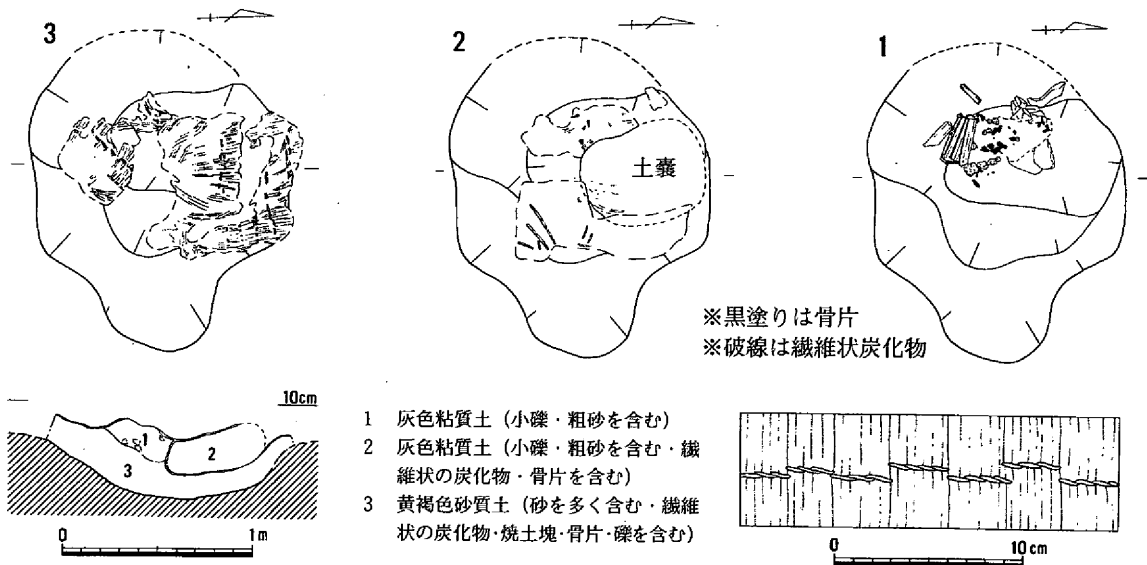


第343図 土壌24 出土遺物〈2〉

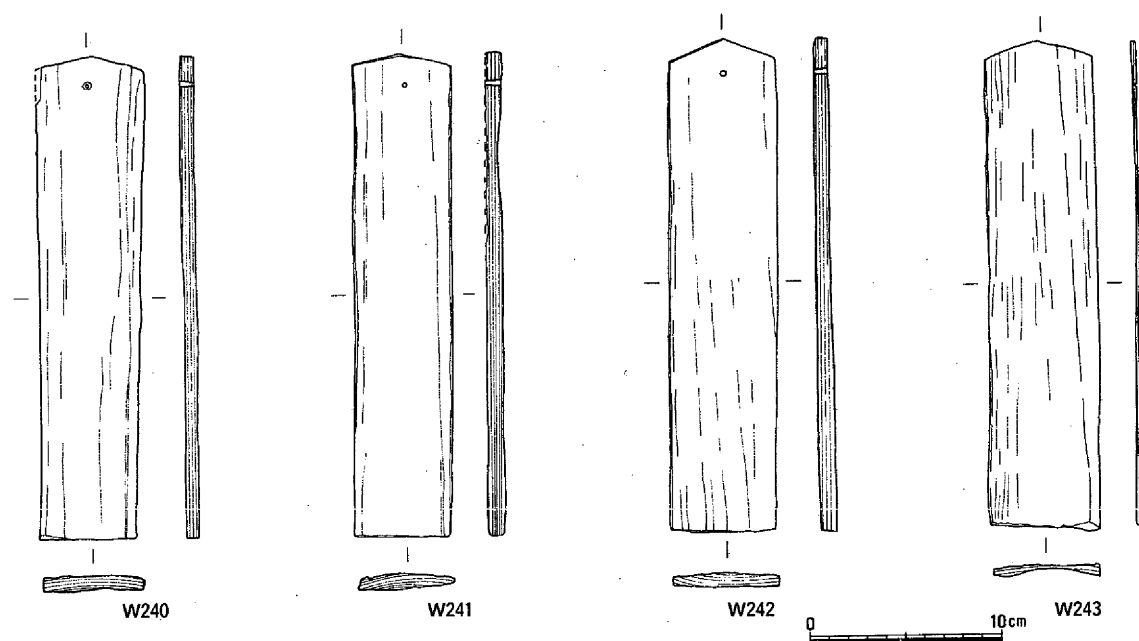
そこに降りる階段と推定される。遺物は投棄されたものと思われ、木製品が多い。W237番傘の部品、W238位牌立て、W234~236は漆塗りで重箱あるいはお膳の台の部分と考えられる。時期は1618灯明皿などから18世紀以降と推定される。

土壌25 (第341・344・345図、図版72-4)

土壌25は土壌24の東約12mに位置し、幅を減じた河道の河川敷か水際に立地すると考えられる。橋梁3東部にある礫群を切って掘り込まれている(第348図の第4層)。平面形は1.7×1.4mの不整円形を呈し、検出面からの深さは約40cmを測る。(1)底面には小礫と厚さ約1.5cmの繊維状の炭化物が直径約20cmの範囲にみられ、周囲に2~8cm大の焼土塊と骨片が散らばっている。その上に5枚の薄い板



第344図 土壌25 (1/40)、同 出土ござ状編み物拡大模式図 (1/4)



第345図 土壙25 出土遺物

を載せており、うち4枚は重なった状態で検出され、片方の端部を鈍角の山形に切断し、釘穴がみられる。墨書はない。そして、(2)土壙底面やや北寄りに65×55×20cmの土嚢を置き、(2～3)ござ状の簡易な編み物で土壙全体を覆いながら埋めている。骨片は5cm以下の小さな破片ばかり50点ほど、白色硬質で、被熱していると判断される物も数点ある。頭頂部の骨片が少量あり、人骨と考えられる。4枚の板は卒塔婆あるいはお堂や祠に供えるお札の一種と推定される。以上のことから土壙23は火葬に関連する遺構である可能性が強く、拾い上げられなかった小骨片を埋葬したのではなかろうか。時期は土壙上部を現代用水路が削平しており限定しがたいが、近世と考えられ、当時、一般的な埋葬方法が土葬であったことからすると火葬にされたのは僧侶であった可能性も大きい。土嚢を置いていることからあるいは疫病患者の可能性もある。(物部)

(2) 溝

溝35 (第341図)

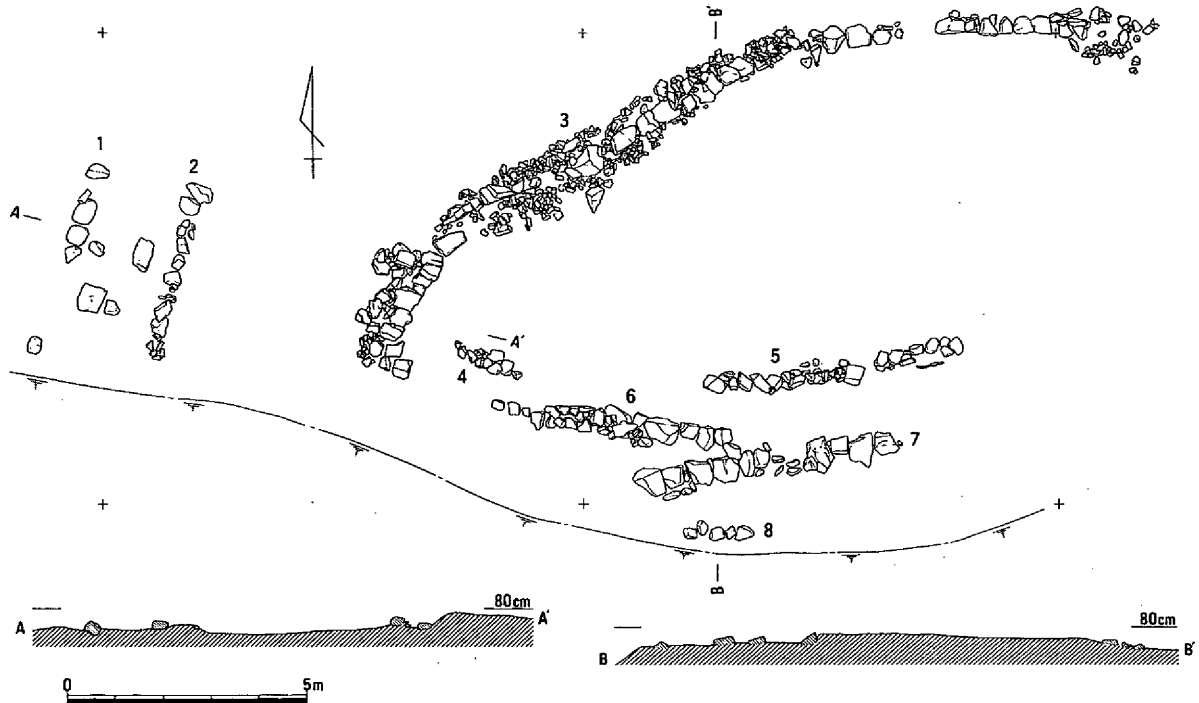
溝35は南西から北東にに向かって入ってくる現代用水路の西側に約3m離れて平行して検出された。土壙22によって北東部を切られている。幅約3.5m、深さ約0.6mを測る。埋土は礫を含む砂質土である。現代用水路に先行する用水路と考えられる。時期は近世以降。(物部)

(3) 石列群 (第341・346図、図版72・5)

石列群は河道堆積土最上部に構築されており、橋梁2の東西にある石積みの直上およびその北部に位置する。現代用水路に先行する用水路の護岸と考えられる。石列1・2は用水路の西壁、3は東～南壁、4～8は北壁で、用水路が合流・分岐するため、壁を補強したものと思われる。(物部)

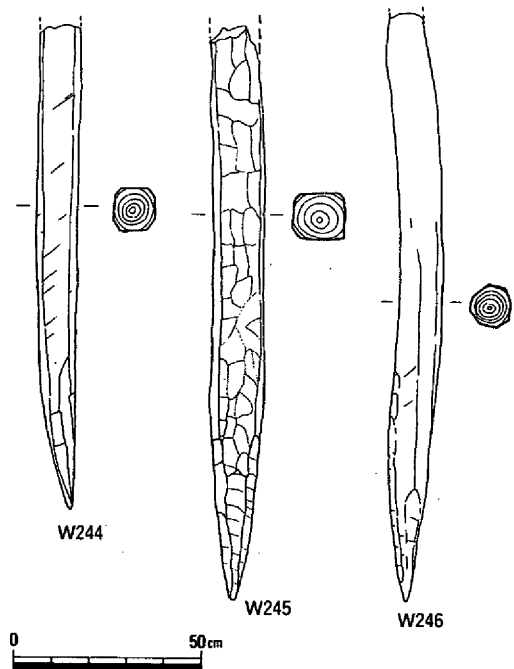
(4) 橋梁

橋梁3 (第341・347・348図、図版68)

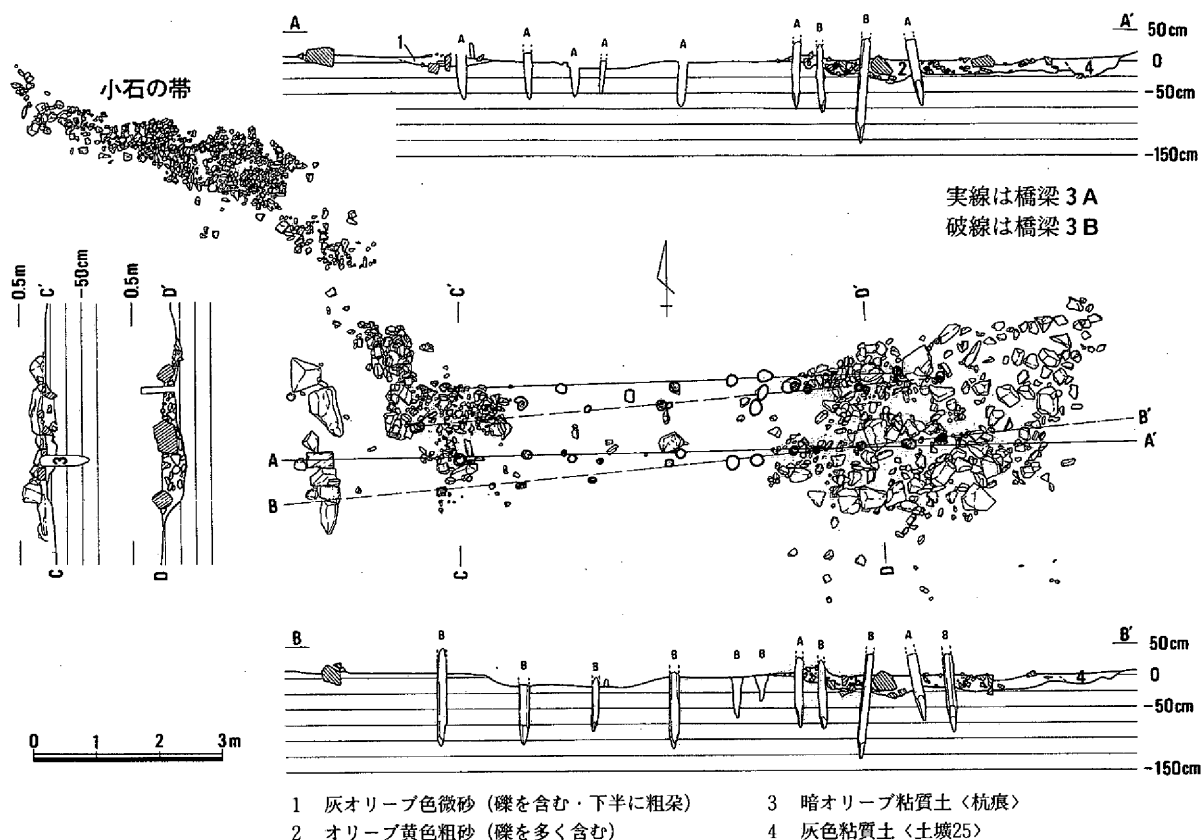


第346図 石列群 (1/160)

橋梁3は橋梁2の南約4mに位置し、主軸をほぼ東西にとる。橋脚は腐って皮だけになっているものや抜け跡を含めて37本検出された。橋脚の配置から樹皮付きのマツを使用した橋梁3Aと、クリの角材を使用した橋梁3Bとに区別され、両者は主軸を5度程違えてほとんど重なることから、改修されたものと考えられる。また、1箇所に2本の杭が検出される所があり、部分的な補修も確認される。橋梁3Aは、幅約1.7mの杭が2本1対で5対並ぶ。橋脚のスペンは1.9m前後、全長は7.2mを測る。橋梁3Bは、幅約1.0mの杭が2本1対で7対並ぶ。橋脚のスペンは1.3m前後であるが、東から2～4対目の間隔は0.75mと2.35mで変則的である。全長は8.2mを測る。橋梁3A・Bは東西両端の橋脚から岸边へと渡る長さを橋脚のスペン程度と仮定すると、両者とも橋自体の全長は約11mとなる。橋梁3の東西両端部の河床には石群がみられる。西側の石群は橋梁3A西端の橋脚を取り囲むように径約1.5mの範囲に広がる。その石の下には束ねたようなエノキの枝(粗朶)が多数検出された。また、この石群に取り付くように検出長4m、幅約1mの小石の帯が北西方向から下ってくる。これらは橋梁3Aを架橋する際の土手から降りる工事用道路と河床の足場固めと推測する。石群の約1m西には橋梁3Aの主軸と直行する面を持つ50cm大の石列が残存する。これは橋が西岸に取り付く部分の護岸と考えられる。東側の石群はその上部から橋梁2に



第347図 橋梁3 橋脚 (1/20)



第348図 橋梁3 (1/120)

伴う古銭が多数出土することから、橋梁3よりも古いものと考えられる。時期を特定する遺物は無いが、河道幅が11m前後まで狭まっていることから橋梁2廃絶後に架橋されたものと思われ、17世紀と推定する。
(物部)

(5) 樋門

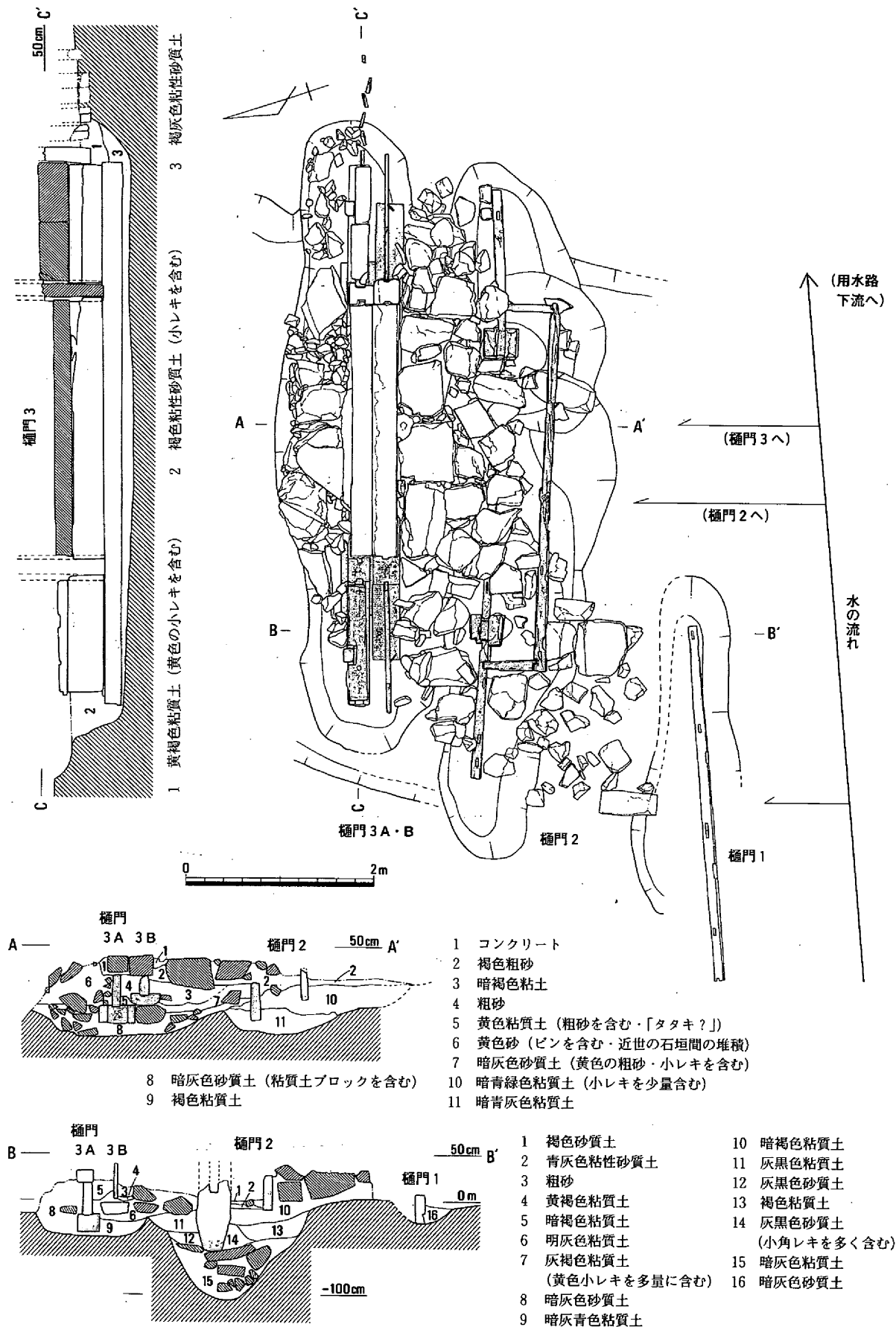
3基の樋門基礎を検出した。西から東にむかって流下する用水路「百間川一海吉用水」の水量調節のため設けられた樋門で、北東に分岐する水路への排水量の調節を目的とするものである。両山の樋、あるいは前田入り口の樋と呼ばれていたという。用水の上流・南西側から樋門1・2・3の順に近接して遺存する。用材の鑑定は一部であるが、1・2がツガ、3はマツとの結果が得られている。

樋門1 (第341・349～352図)

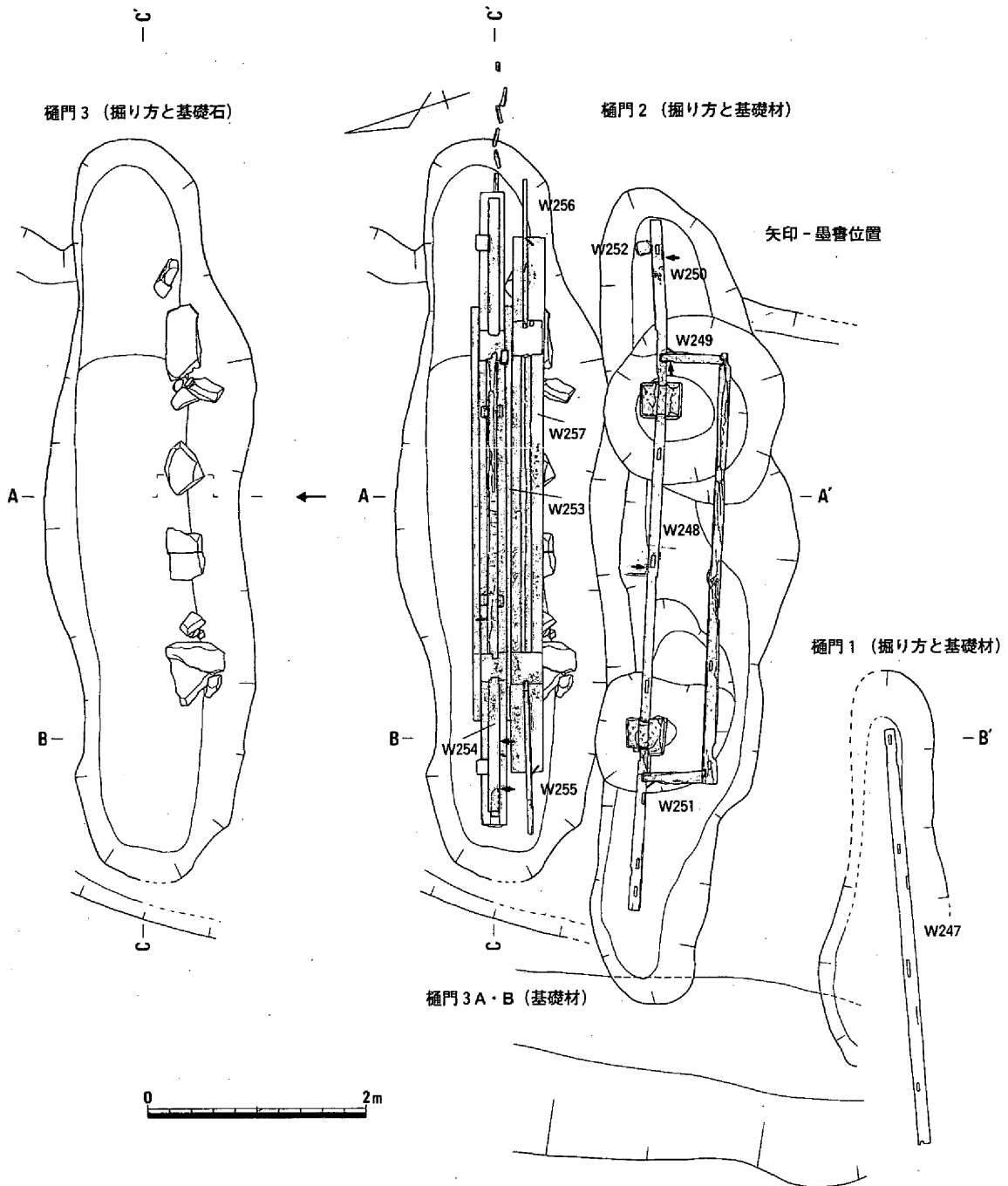
樋門2と掘り方の切り合いはないが、上流側に所在することから3基のうち最も古いものと考えた。細長い掘り方に長さ3.85mの板材W247が埋設されている。側面に浅い柄や段、上面に長方形の柄穴が穿たれており、他の材が組み合って樋門基礎を形成していたと考えられる。板材の東西両端に掘り方が見られないことからすれば、後述の樋門2のような二つの柱材が基礎を受ける構造ではなかった可能性が考えられる。板の南面には手斧とみられる痕跡、北面には鋸引きの痕が見られる。

樋門2 (第341・349～352図、図版69・70)

全幅6.32m、奥行き60cmを測り、中央に箱形に突出する部分を設ける。掘り方の東西に一段深い掘り込みを設けて石材を充填し、さらに大形扁平な石材を置き、それが2本の角柱を受ける。角柱は一边38cmを測る大形の材で、先端をやや尖らせる。角柱の東西両側面には柄を設け、そこに中央248・東



第349図 樋門1～3 (1/60) <1>

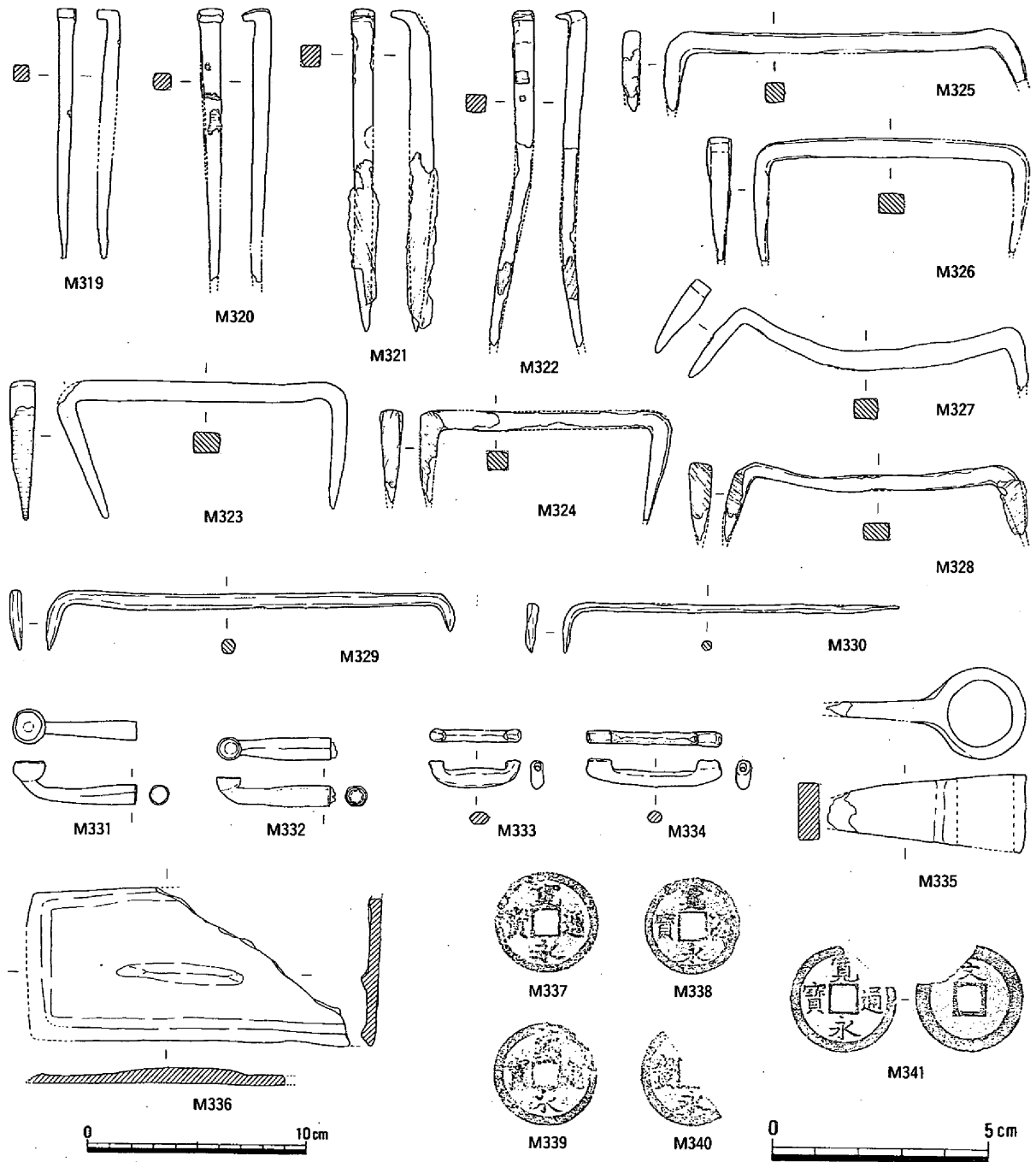


第350図 樋門1～3 (1/60) <2>

250および西と、3枚の板材をはめ込んでいる。この板材の上面にあたる部分よりも上側には角柱を貫通する方孔が設けられているが、廃絶時にこの部分で切断されているため、柄穴になるのか樋板を落とす溝が角柱を貫通する作りで、それがここまで達しているのか不明である。

東西両側の板材に接続して3枚の板材で箱形構造が設けられている(東辺-249、西辺-251)。板の上下幅は北辺の3枚よりも狭いが、南辺は北辺よりも15cm高くなる。

これらの板材の上面に柄穴が設けられており、上側に別材がくるとみられ、樋門1の場合と同様に板材側面の数ヶ所に縦方向の幅広の柄も認められる。構造は復元しかねるが、樋板を受け、また、手前の洗掘を防ぐために板張りがなされていた可能性が考えられる。角柱と板材、板材間の結合には釘も



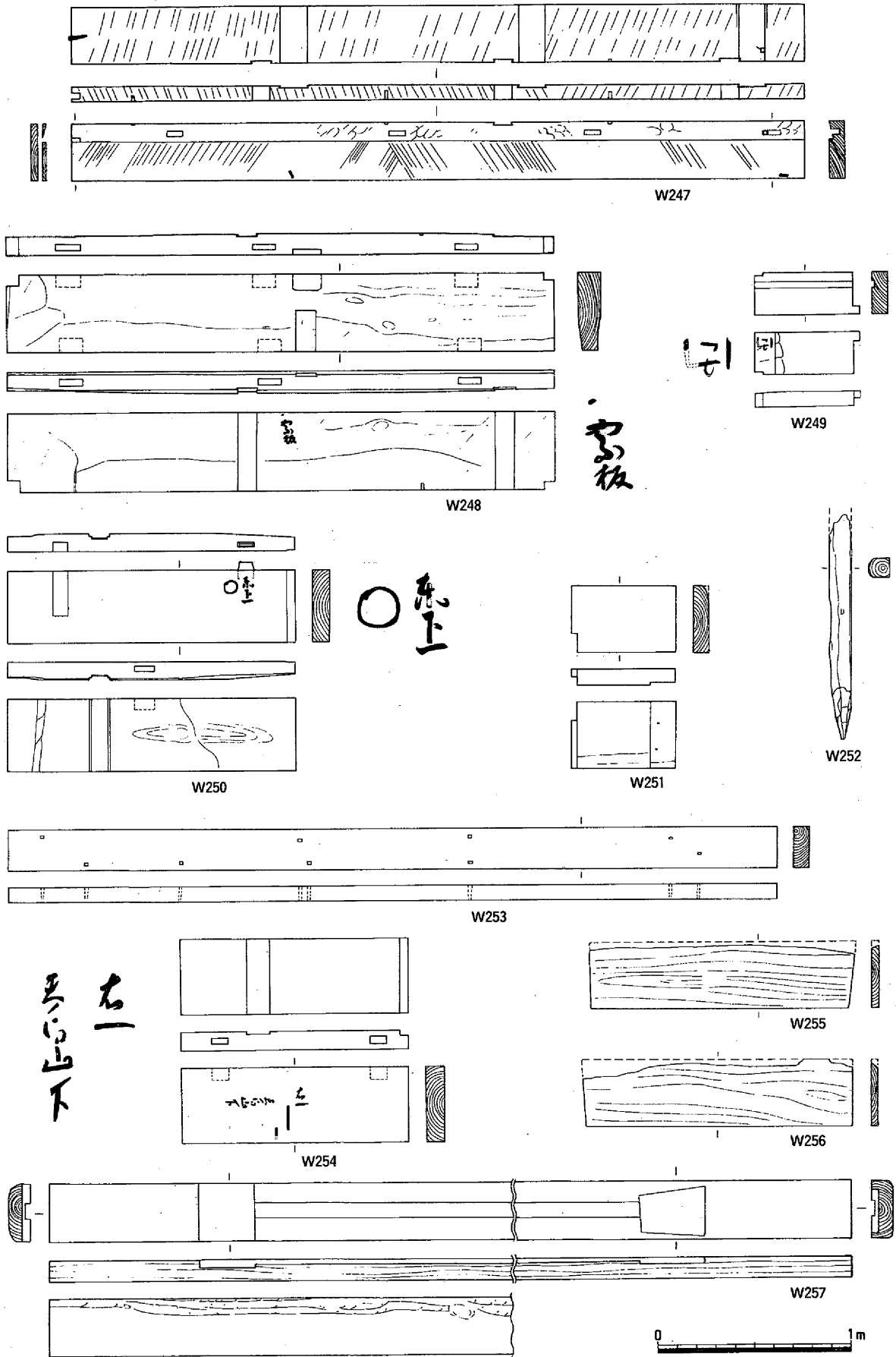
第351図 樋門1～3 出土遺物

用いられるが (M321・322)、おもに大形の鋸 (M323・324・327・328) が用いられている。

北辺中央材248の北中央には「、」と「宗板」、北辺東板250の南側に「○」「東下一」、東短辺249内側には部材の位置を示す略図とみられる門字状の記号がそれぞれ墨書されている。

樋門3 (第341・349～352図、図版69・70)

昭和51年にはじまる百間川改修工事まで使用された樋門で、石材の間にはセメントによる補修も残る。上部が撤去されており、東には折り取られた2基の石柱の下部が残るが西側のそれは失われている。よく似た構造の樋門基礎が接して遺存しており、北側の施設を3A、南側を3Bと呼ぶ。3Aは掘り方中央に長さ5.76mの木材257を置き、それを基礎にして石柱を設置し、その間および東西に板材



第352図 樋門1~3 使用部材 (1/30)、墨書拡大 (1/15)

第3章 発掘調査の概要

を立てる。中央ではその上に長さ2.72mの石材を設置するのに対し、東側では豊島石製の板石2個を置き、さらにその東外側には板材を縦に打ち込んでいる。また、西側では北に角材を添え、板材254の上に浅い割り込みをもつ枕木状の材を置く構造となっている。石柱および中央に水平に置かれた石材が樋板を受ける施設である。石柱は外側にも内側と同様の溝が彫られてはいるが、基礎はこの2本以外の石柱を受ける構造にはなっておらず、多連の樋門用に加工された石材を用いたと推定する。また、東西両外側の板材は石柱外側への漏水を防ぐために設置されたとみられ、おそらくは埋め込まれていたものであろう。西側に立てられた板材254は南面に「右一」「天□山下」の墨書がある。

3Bは3Aとほぼ同様の規模・構造であるが東西両側に他の材にくらべてかなり薄い板255・256が立てられる点が異なる。また、基礎となる木材235は3Aのそれよりも短く、上側に設置されている。ABの石材の南北両側は洗掘防止のため石畳状に角礫が敷き詰められており、それが樋門2を覆っている。したがってABが同時に存在したのは確実であるが、樋門が二重になることは考えにくく、3Aを残したまま樋門の改修がなされ、3Bが新たに設置されたと考える。

3A・Bともに部材の結合には釘(319・320)、鋸(325・326)が使用される。特に3A基礎は南北両側に長い角材を添わせるが、それらは長い釘で打ち付けてある。

M329~341は主に石敷きの間から出土した遺物で、脱落した鋸329・330、キセル331・332、網の錘333・334、鳶口335、寛永通宝337~341などがある。樋門3の年代の下限は明確であるが、1・2を含めて築造年代は明確にしがたく、江戸時代以来の築造・改修を示すと言わざるをえない。(宇垣)

(6) 河道

河道7(第341図)

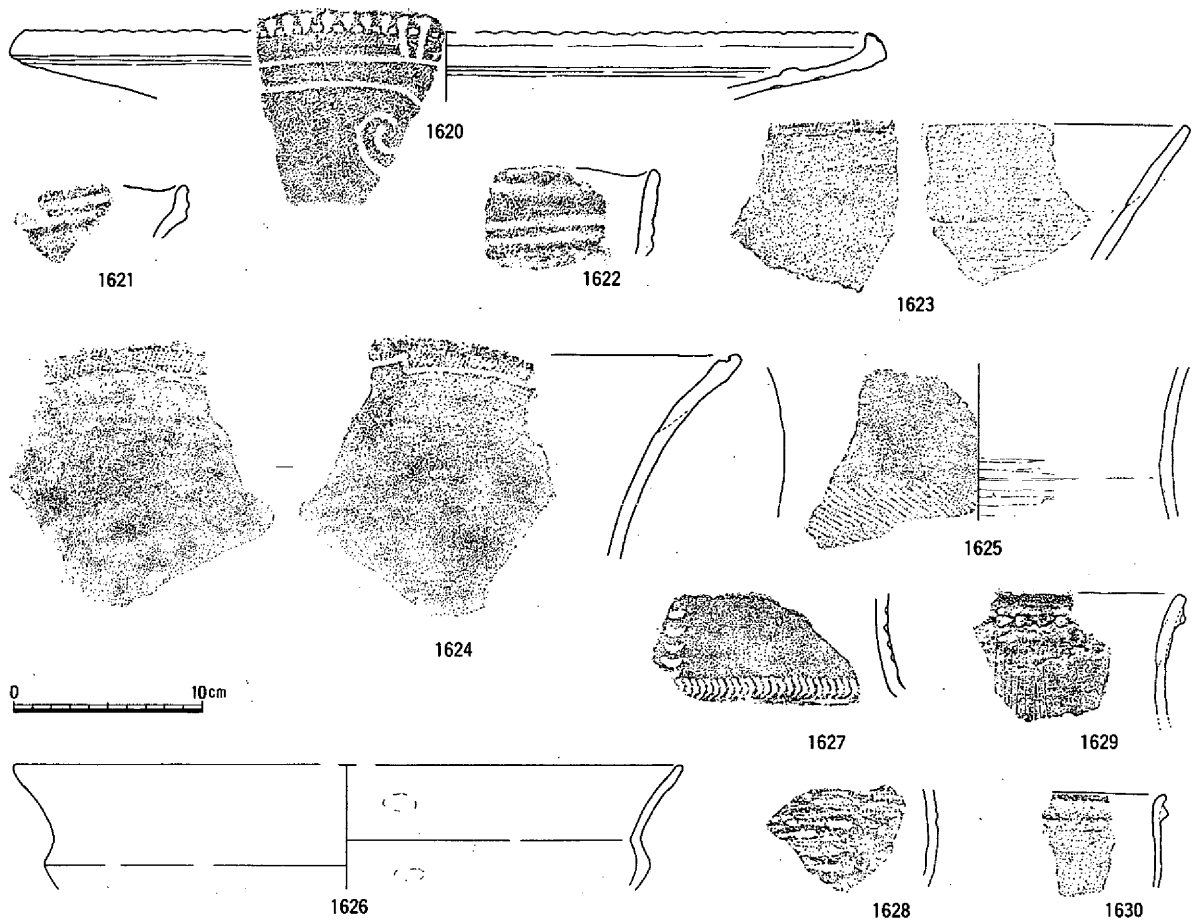
橋梁2が機能を停止したと考えられる17世紀前半以後の河道は、その直後に設置されたと推定される橋梁3の全長が示すような幅約10m前後の細く浅いもの(第341図網掛け部)になったと思われる。その後さらに堆積が進み、ほとんど埋没した頃に溝35や石列群から推定されるいわゆる用水路そして、現在まで見られた用水路へと様相を変えたものと推察される。(物部)

7 遺構に伴わない遺物(第353~383図、巻頭図版8、図版74・77~94)

この項で扱う遺物は、おもに古代末から中世の河道に流入して出土したものが大半であり、それらのうちの図示可能な、または所属時期決定が可能なあるいは特殊な、そして特徴的な形態・胎土をもつ遺物について取り上げた。

縄文土器(第353図)は調査区全体で10数片出土している。図示したものうち、1620~1625は縄文後期、1626~1630は縄文晩期である。磨消縄文系の1620は中津式、浅鉢の1612・1622と縁帯文系深鉢の1624は津雲A式併行、条痕調整を残す鉢ないし深鉢1623と胴部に縄文を留める1625は彦崎KⅡ式併行期くらいであろうか。頸部に爪形文を施す深鉢1627は典型的な谷尻式の特徴をもち、口縁部下に突帯文をもつ1629・1630はそれぞれ突帯出現後の前半・後半に比定されようか。浅鉢1626は内外面共にていねいなミガキが施され、晩期後葉と思われる。

弥生土器(第354~355図)は古代~中世の土器以外では一番多く見つかっており、中でも後期土器が大半を占める。前期土器は数点しかなく、壺1631のように口縁内面を突帯で装飾するタイプは百間川遺跡群でも希有な存在である。1632~1637は中期前半の壺、1638~1648は中期後半の壺・甕・高

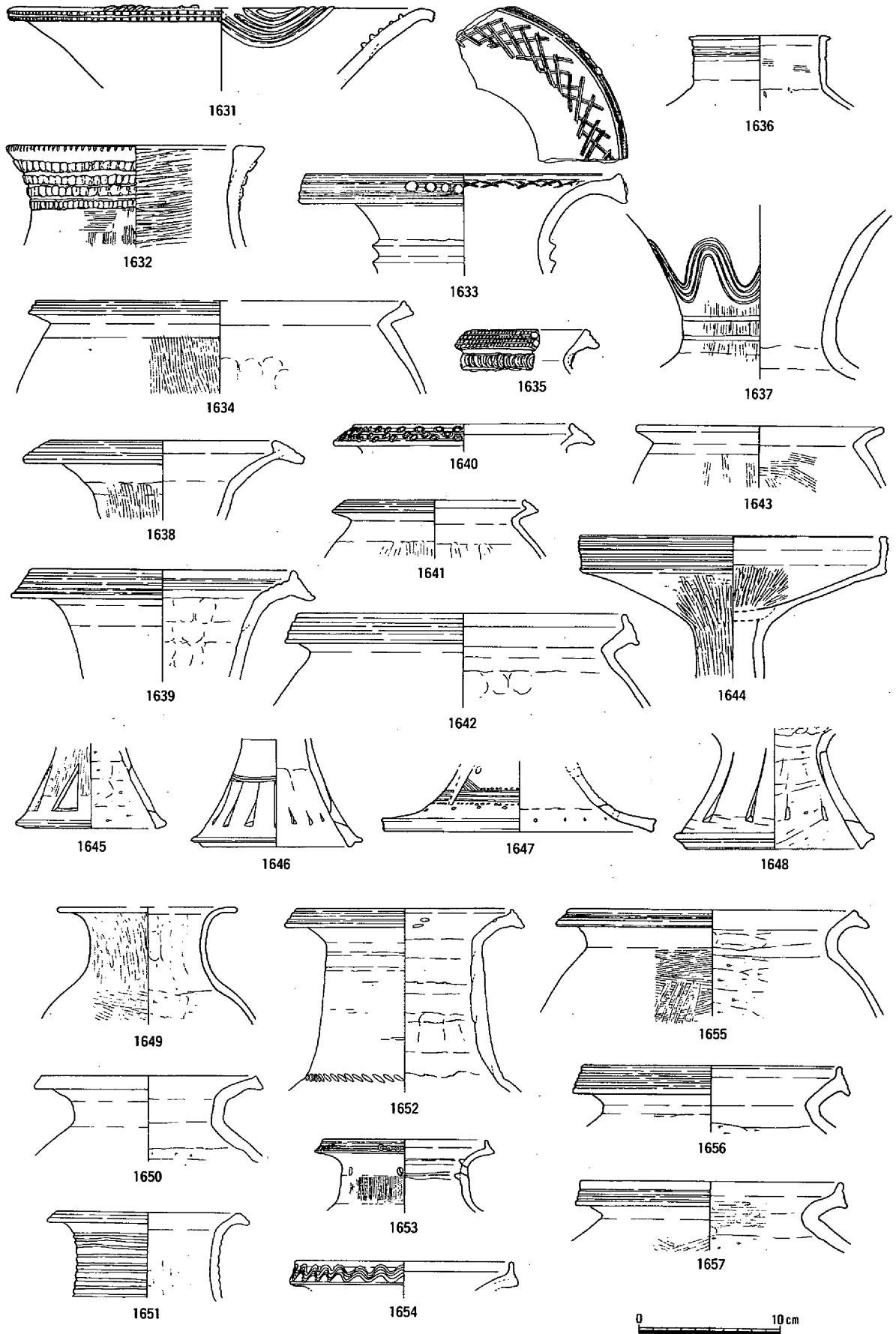


第353図 遺構に伴わない遺物〈1〉

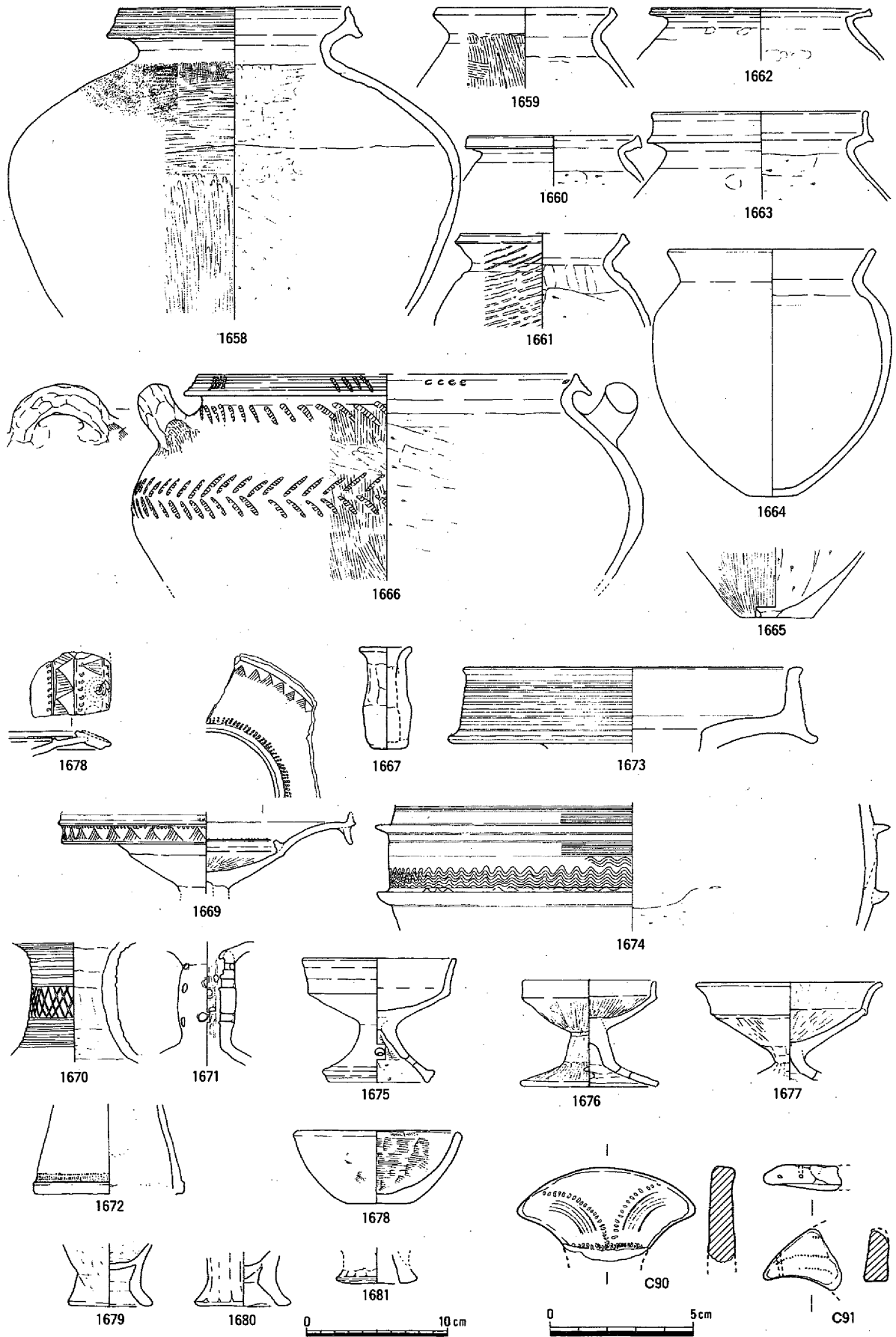
杯等、1649～1681は後期の長頸壺・壺・甕・裝飾高杯・高杯・特殊壺・製塩土器等である。後期土器のうち、1673は暗褐色を呈し角閃石を含む胎土で小形特殊器台の口縁部とみられ、1674は特殊壺の胴部破片である。後者は胴部に高く突出する突帯を2条もち、上側の突帯の上下には櫛描き沈線、その下には櫛描波状文が施される。施文・突帯形状ともに楯築遺跡出土特殊器台（A・C類）のそれに酷似しており、足守川流域からもたらされたとみてよい。近年、岡山市津寺遺跡や矢部南向遺跡などの沖積地集落から特殊器台等が出土する例が知られてきたが、そうした一例として今後検討を要する資料である。また、C90・91の分銅形土製品は、文様、形態の退化度からすれば後期前半の時期とみられる。

古墳時代の遺物（第356・357図）には、つぎのものがある。土師器1682～1700は、古墳時代前期（下田所式～川入大溝上層式）の壺・甕・高杯・埴等である。5世紀代以降の可能性がある1685・1692・1695のほかは、下田所～亀川上層式である。そのうち、搬入品かどうかの区別はつかないが、壺1683が瀬戸内西部、鼓形器台1699が山陰の影響化の土器である。古墳時代後半期は、須恵器1701～1709・円筒埴輪1710・製塩土器1711・1712がある。埴輪は5世紀代であろう。（柳瀬）

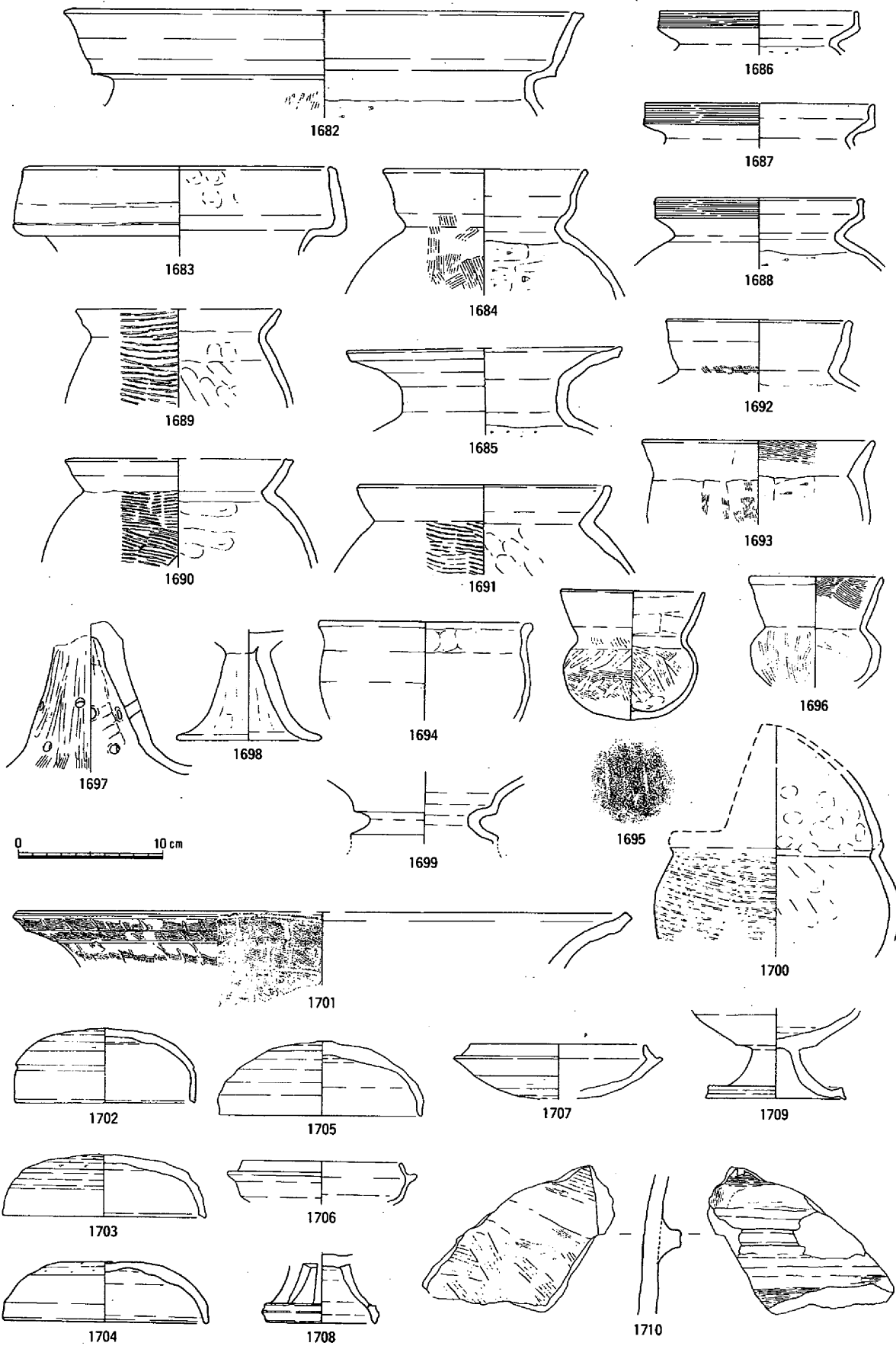
古代の須恵器（第358～361図）のほとんどは10世紀後半の河道5砂層に混入していたもので、奈良時代と考えられる河道2堆積層から出土したものは少ない。器種のわかる破片数は2300片程度あり、全出土土器量の約1割を占める。時期は一部7世紀代を含むが、8世紀から9世紀初め頃までが中心になる。1718は杯蓋の内面を利用した転用硯である。1727～1734杯の底部外面はヘラ切りで、1733・1734には中央部に押圧が見られる。1750は高杯の脚で、内面にヘラ記号がある。1751～1754皿は高台



第354図 遺構に伴わない遺物〈2〉



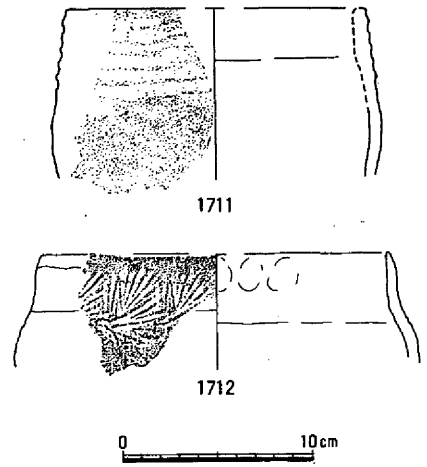
第355図 遺構に伴わない遺物〈3〉



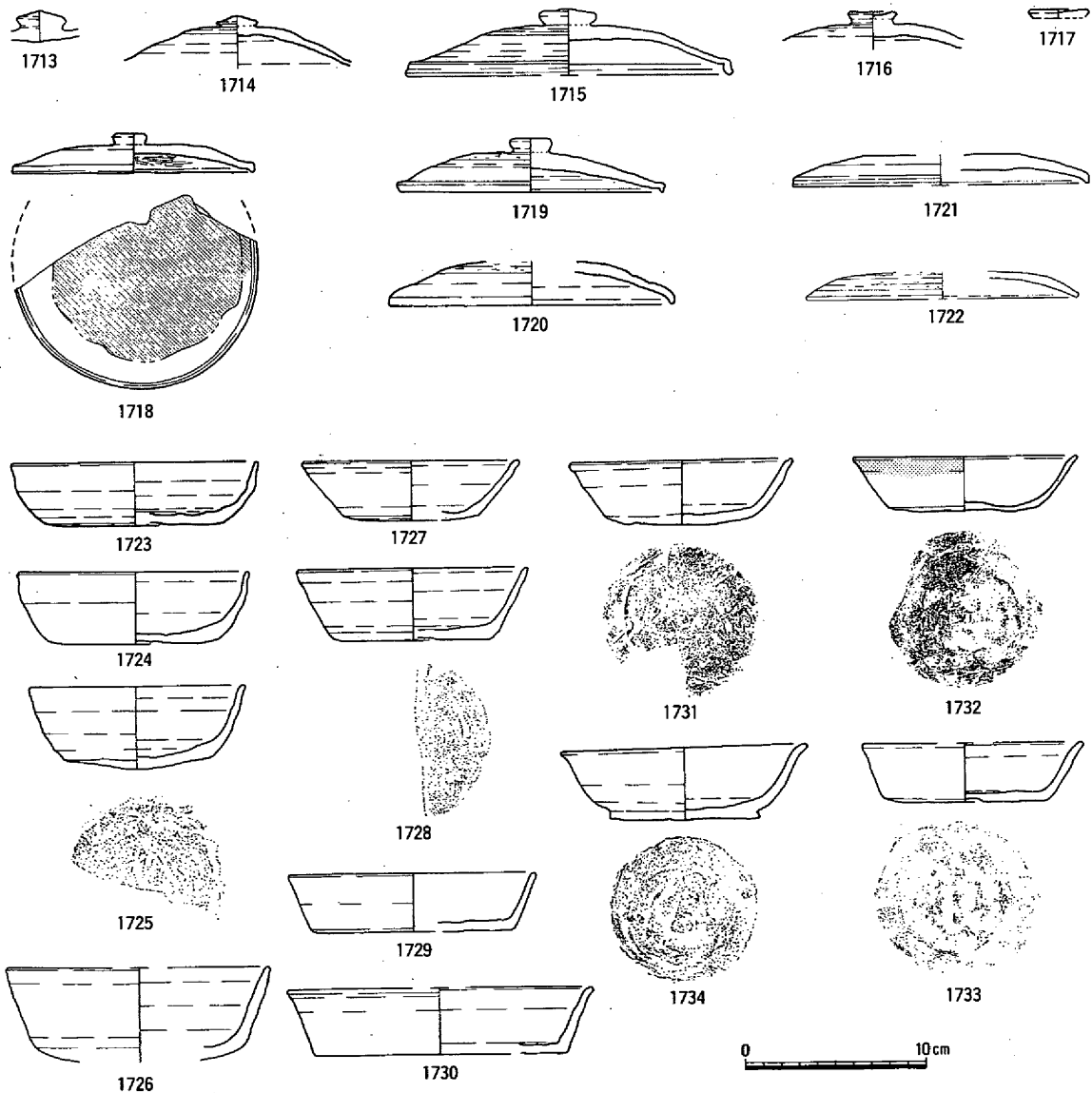
第356図 遺構に伴わない遺物〈4〉

の付くものとつかないものがある。1772~1774平瓶は体部が稜角をなす。1772はやや大形、1774は小形である。1775~1781は甕か横瓶の体部片で各種車輪文が見られる。1782・1783は稜碗と考えられる。1784は灰白色を呈する風字硯である。硯は転用硯2点1718・C74を含め、計3点確認された。1785~1789・1792は糸切りの須恵器碗と小皿で、12世紀代と考えられる。1790碗は灰白色を呈し、重ね焼きの痕跡がある。高台の付け根に水平な突帯を持つ。1792の碗はナデによる凹凸が著しい。

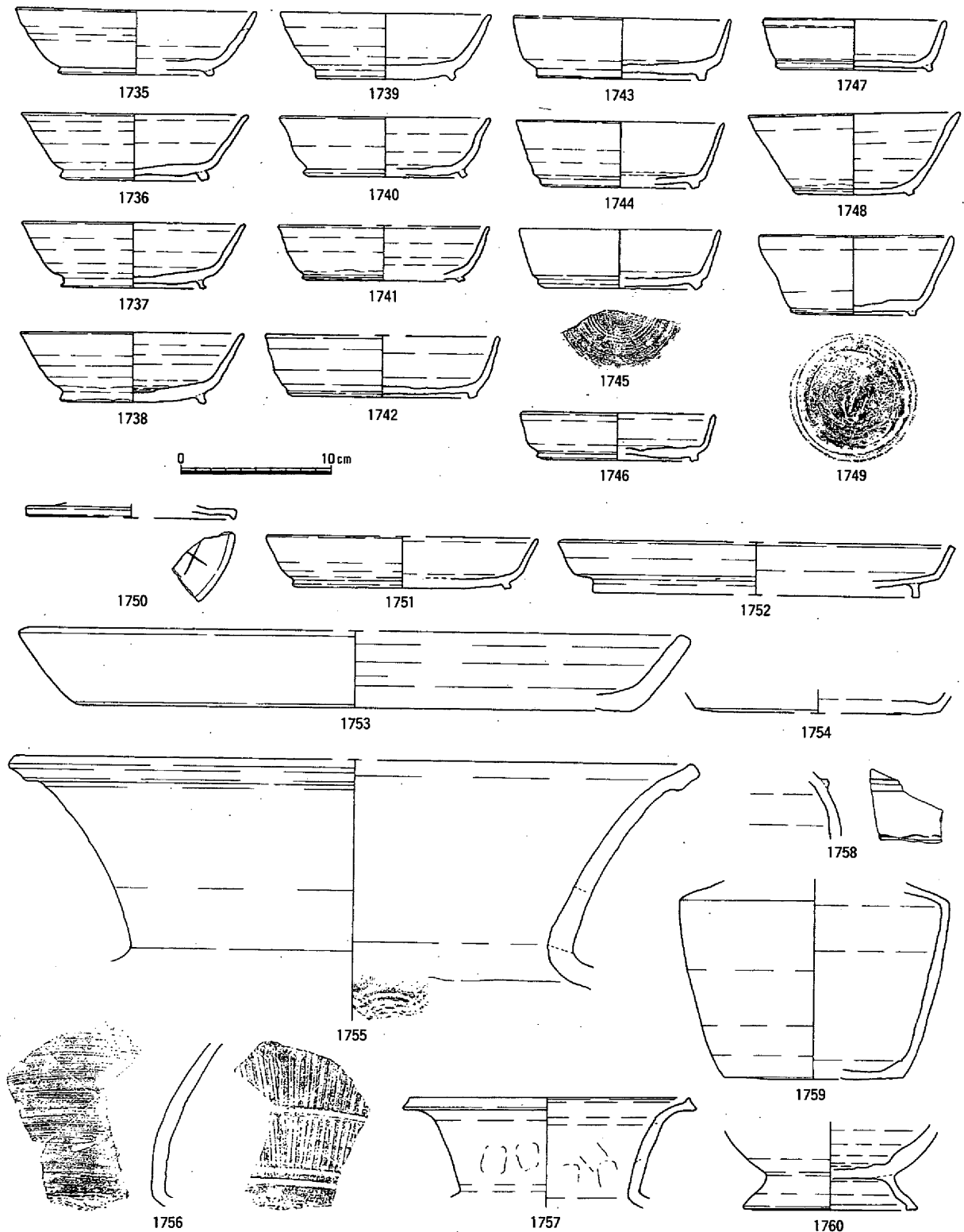
第362~367図は早島式土器碗出現までと考えられる古代土師器で、大半は河道5や河道6の堆積層中に混入したものである。量は全出土土器片の1割を少し越える。時期は8世紀



第357図 遺構に伴わない遺物〈5〉

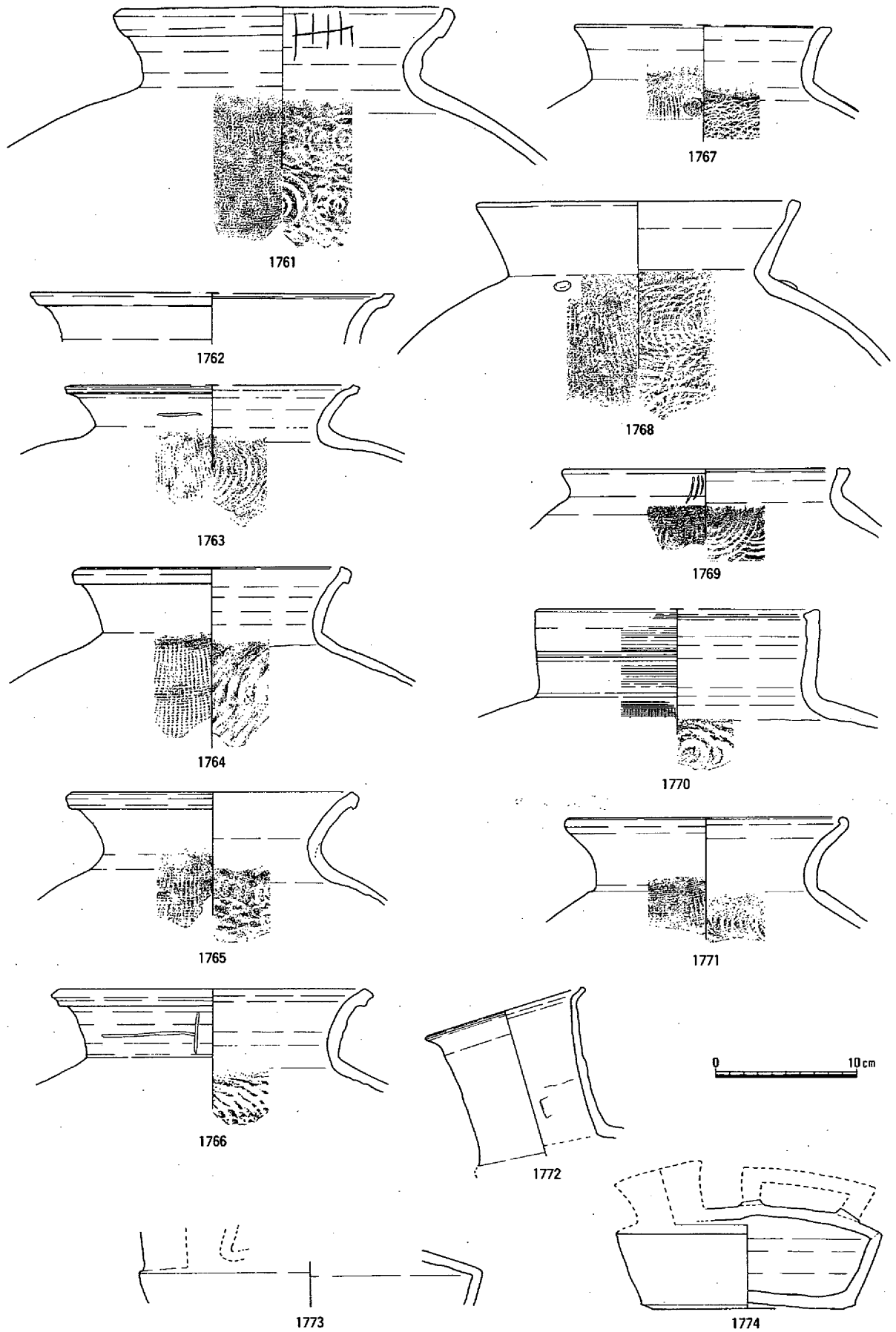


第358図 遺構に伴わない遺物〈6〉

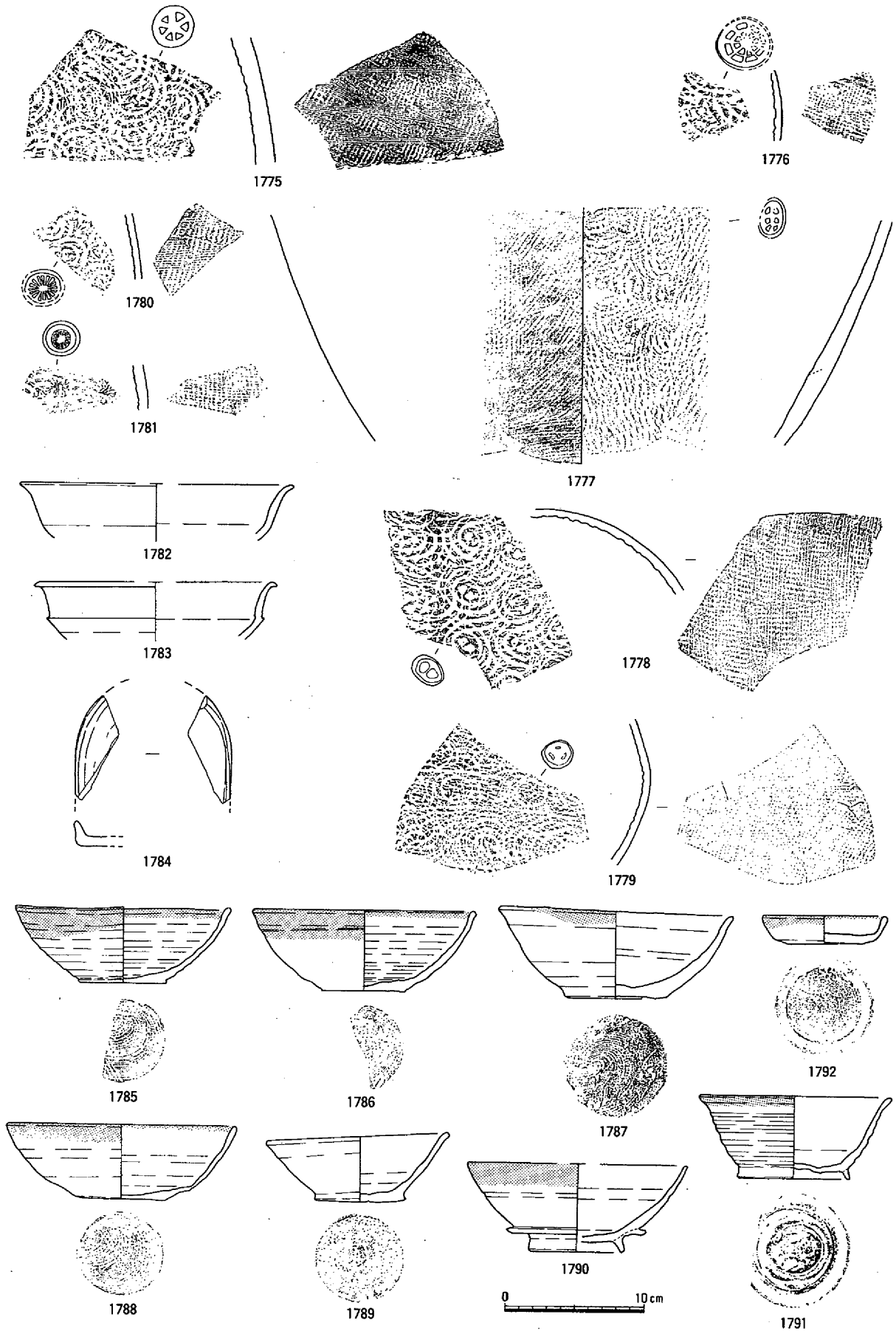


第359図 遺構に伴わない遺物〈7〉

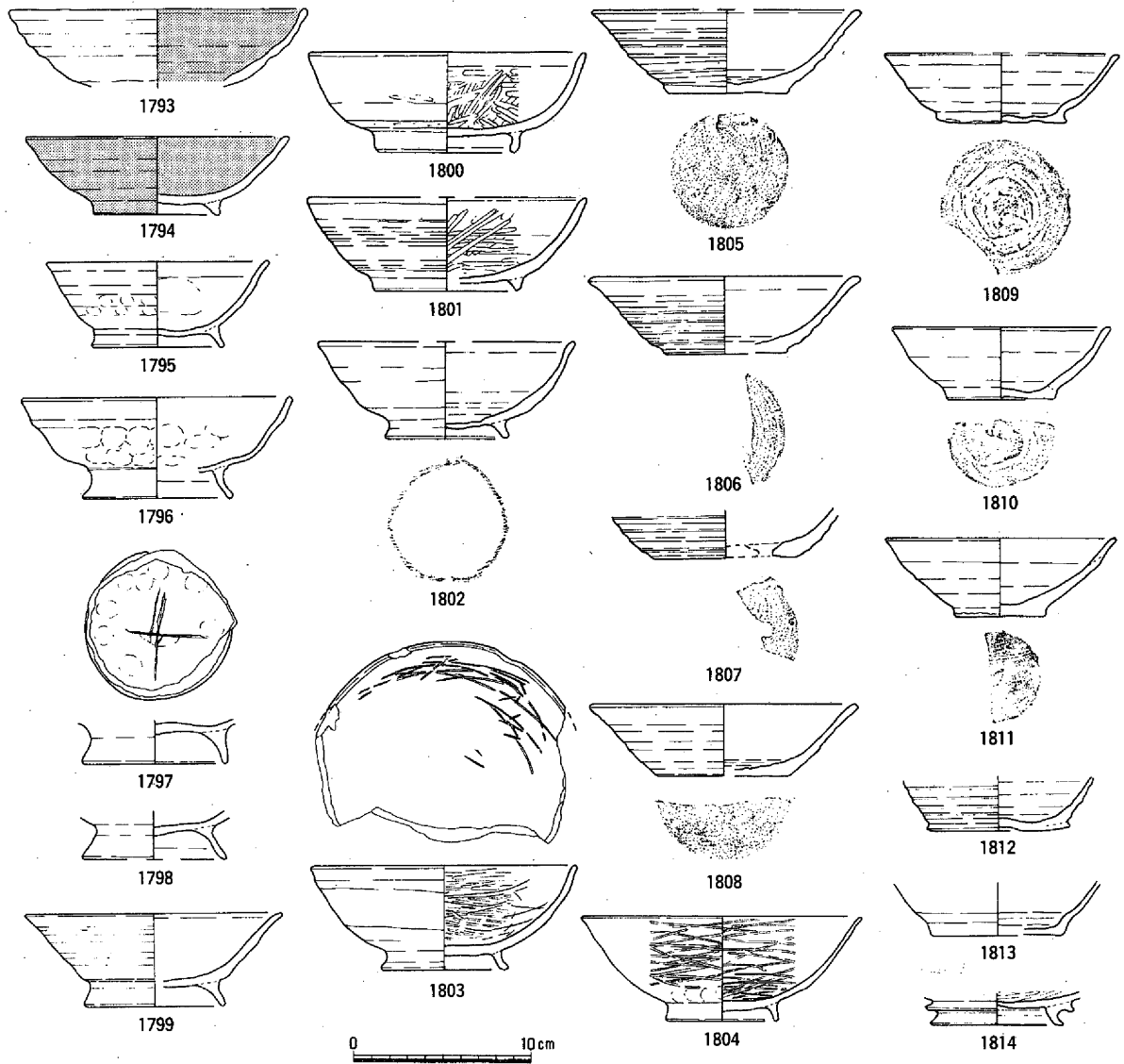
から連綿と見られ、量的には10世紀から11世紀にやや中心がみられる。第362図は土師器碗である。1793・1794は丹塗りの碗で9世紀代に属する。1796は押圧が著しく、後述する杯1845・1846と同様の形態である。1797~1799は足高の高台を持つもので、1795の内面底部にヘラ記号がみられる。1804は内外面に細く細かなヘラミガキが施され、器壁が薄く、非常に丁寧な作りである。1805~1808は底部



第360図 遺構に伴わない遺物〈8〉

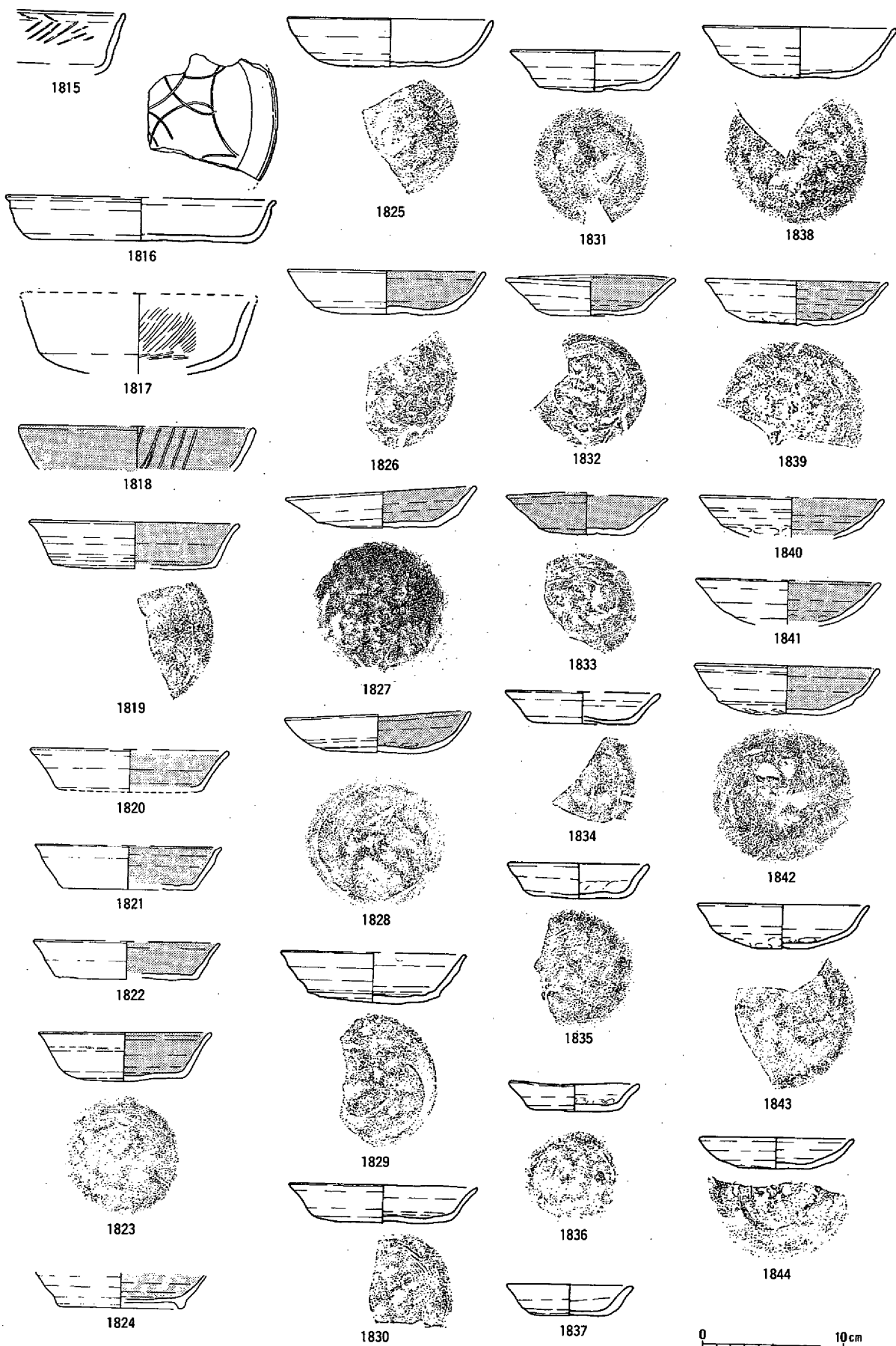


第361図 遺構に伴わない遺物〈9〉

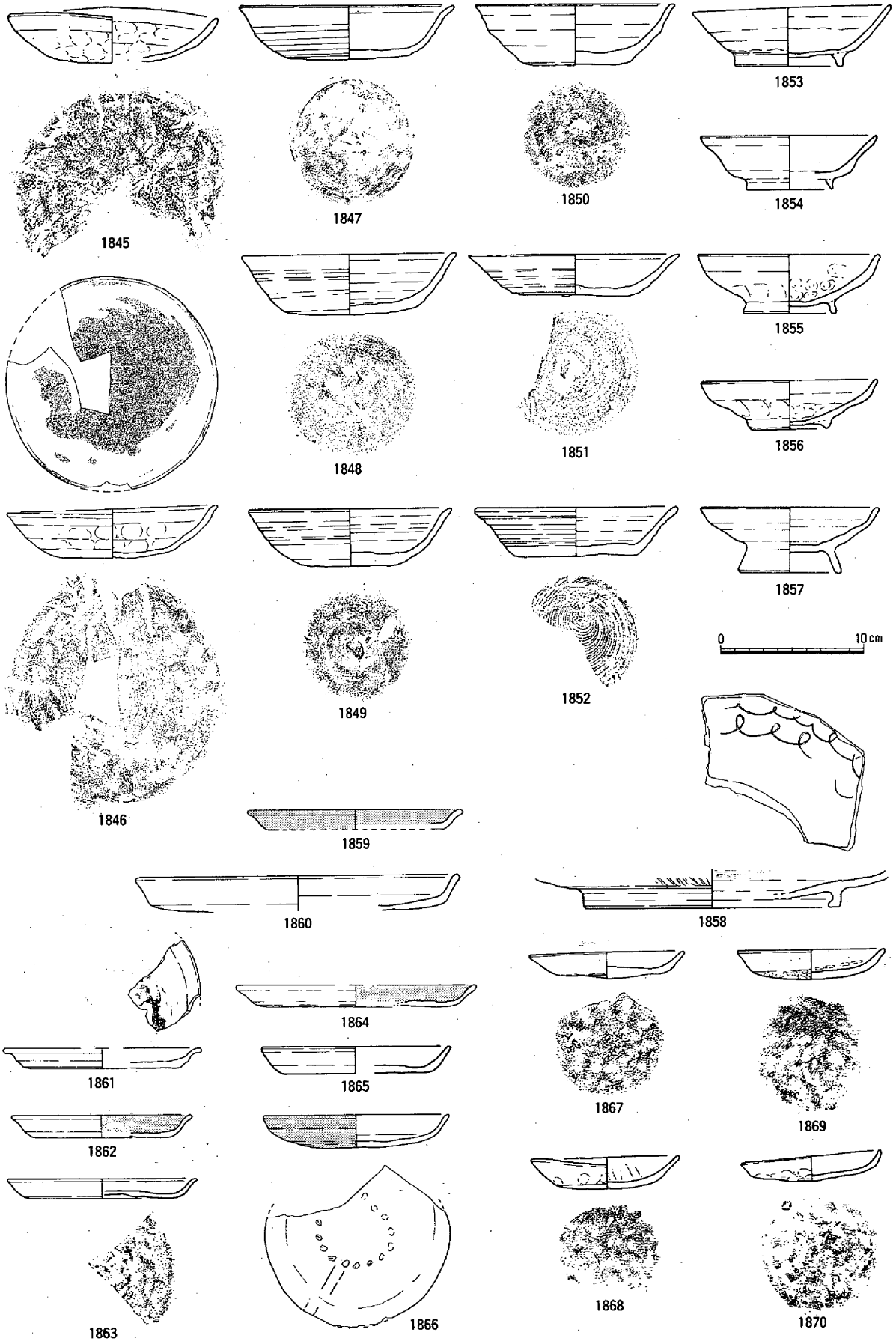


第362図 遺構に伴わない遺物〈10〉

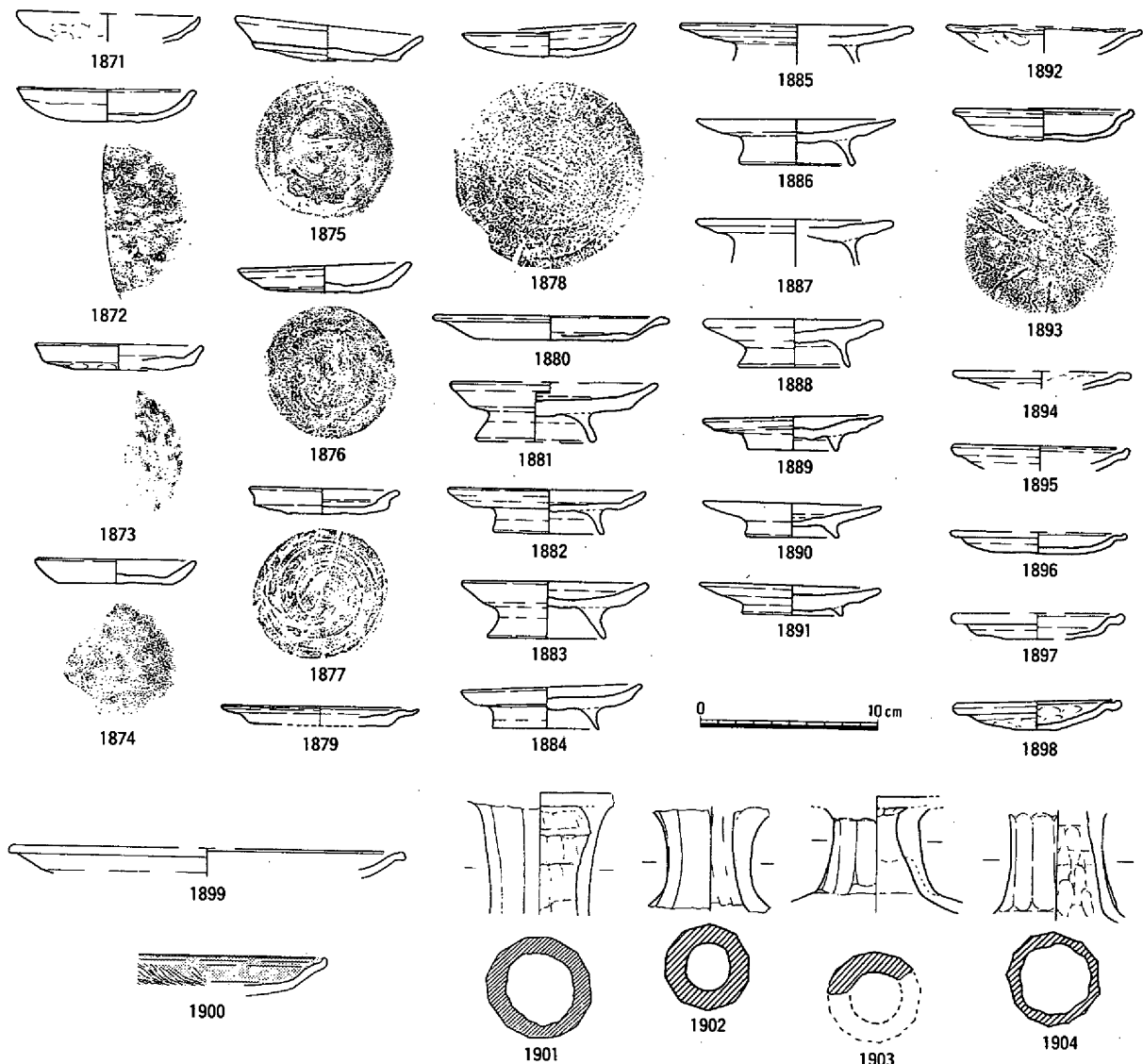
外面が糸切りで、直線的に開く凸凹が著しい体部を持つもので、色調はにぶい黄橙～灰黄色を呈する。第364図の1852杯も同様な特徴を持つが、これより深さが深いので一応碗として取り扱った。1809～1813は平底の碗で1809～1811は底部外面がヘラ切り、1812・1813はナデ。1814は白色を呈し、非常に丁寧な作りである。1815～1857は土師器杯である。1815～1818は暗文のみられるもの。1818は丹塗りである。1819～1824は底部外面がヘラ切りのもので、1824には高台が付く。1819の胎土は精良、それ以外は細かな砂粒を含む。1825～1837は底部外面が周辺にヘラ切り、中央に押圧がみられるものである。胎土は全て細かな砂粒を含む。1838～1844は、底部外面が周辺ヘラ切り中央部押圧で、底部が丸みを持つものである。胎土は細かな砂粒を含むものが大半である。1845・1846は底部の広範囲に押圧がみられるもので、胎土は精良である。1846内面には煤が付着している。1847～1851は底部外面がヘラ切りのもので、胎土に細砂を含む。1852は糸切りである。1853～1857は杯部の深さが浅く、高台付きの杯と判断されるものである。1854底部外面は周辺ヘラ切りで中央押圧である。1858～1898は土師器皿である。1858は高台付き皿で内面に暗文がみられる。1858・1859の胎土は精良。これらは8世紀代と考えられる。1863～1874は底部外面に押圧が残るものである。1863・1871・1872の胎土は精良、



第363図 遺構に伴わない遺物〈11〉

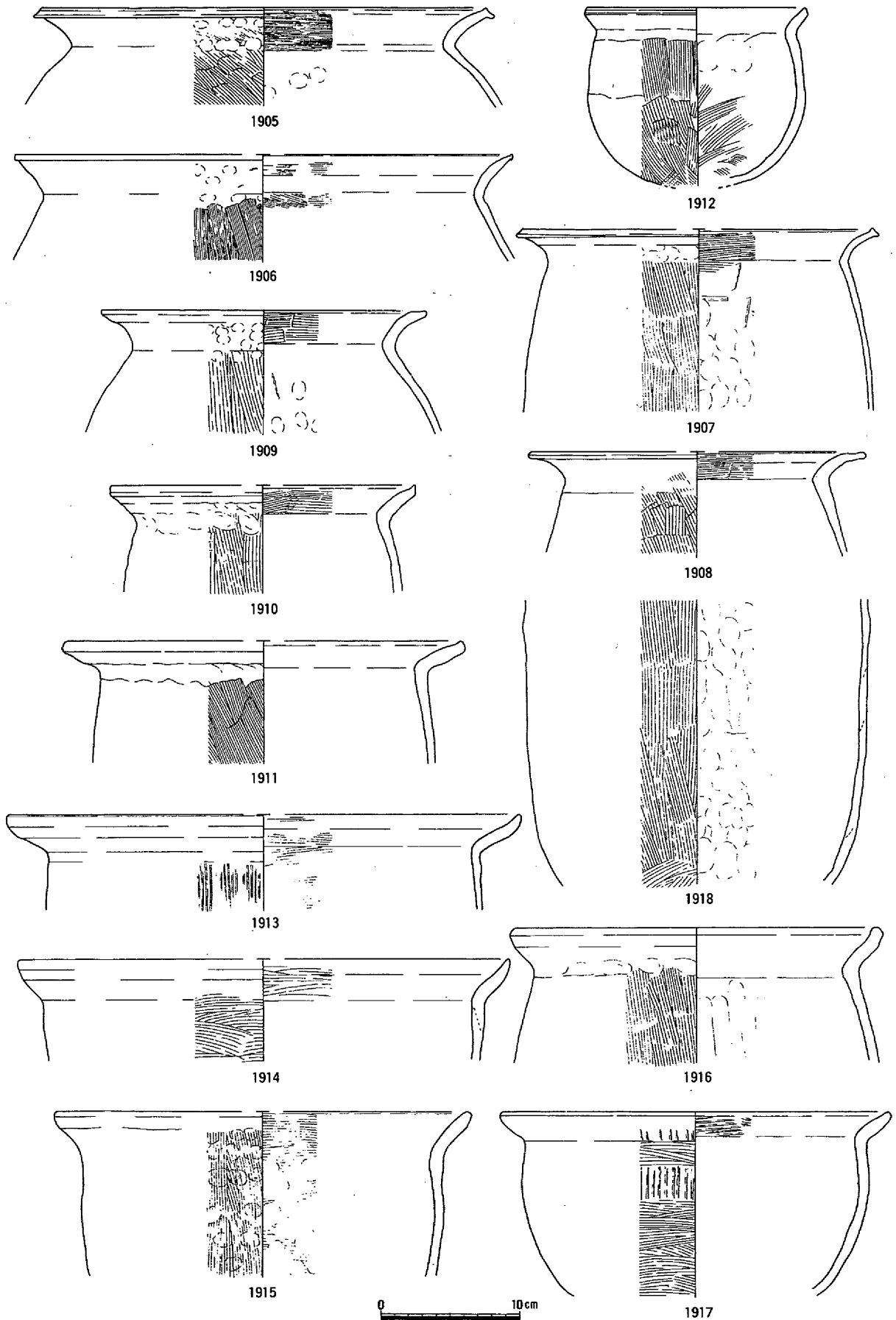


第364図 遺構に伴わない遺物〈12〉

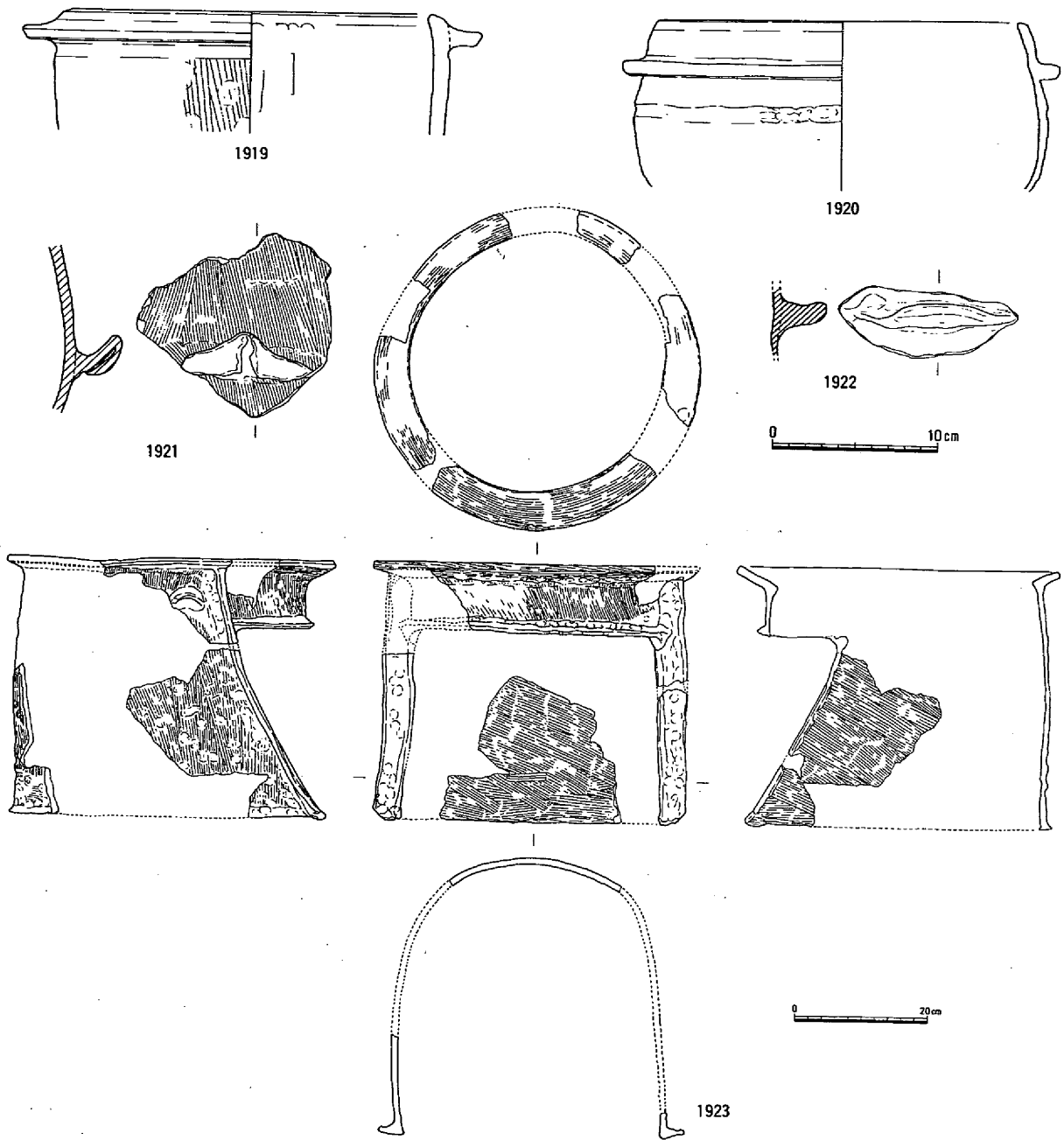


第365図 遺構に伴わない遺物<13>

これら以外は砂粒を含む。1866の底部外面には刺突痕が円形に配され、2条の沈線が上方に伸びている。1875～1878は底部外面がヘラ切りである。口径は8～10cm。1880～1891は高台付き皿である。1880は底部外面の周辺に2条の沈線がみられ、高台が剥離していると考えられる。口縁部が屈曲して外傾して立ち上がる1880～1884と、口縁部が底部からそのまま直線的に延びて終わる1885～1891との2種類みられる。1892～1898は「て」の字口縁の京都系皿と考えられる。これら以外に小片が2～3片確認された。色調は灰白色を呈し、胎土は精良である。口径は8.2～約10.7cm。1899～1904は土師器高杯である。1900には暗紋風のヘラミガキがみられる。1901は長脚と考えられ、1902～1904は短脚である。1905～1917は土師器甕あるいは鍋である。1905～1907は器壁が薄く、ゆるやかに外湾しながら外傾して延びる口縁部を持ち、端部は上下に僅かに拡張される。1908～1911は器壁がやや厚く、口縁端部上面がナデにより窪む。1913～1917は口縁端部が丸くおさまるもので、器壁は総じて厚い。肩部が無くストンと落ちるものもみられる。1913・1914・1916は口縁部が内湾気味である。1919・1920は土師器羽釜。鏝が口縁端部付近に着くものと、やや下がった位置に着くものがある。1921・1922は鍋の把手で平たく薄手のものである。1923は大形の移動式竈で、全体にハケメ調整され比較的丁寧な作りであ



第366図 遺構に伴わない遺物〈14〉

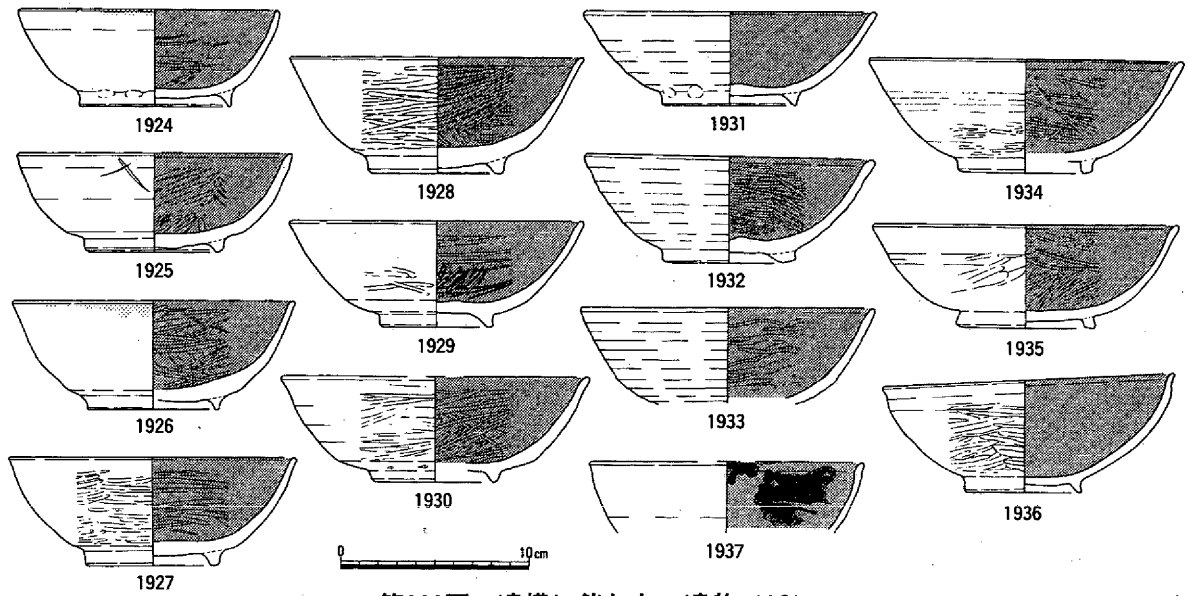


第367図 遺構に伴わない遺物〈15〉

る。にぶい黄橙色を呈し、胎土は大きめの砂粒を含む。上面の最大径は49cmを測る。器高は土器片に接点が無く39cm以上である。

黒色土器（第368図）は破片数であるが360片以上確認された。河道5砂層から大半が出土。ほとんど全て内黒で、両黒の可能性のあるものが1点あったが、小片のため断定できない。器種には碗と杯があり、確実に杯と判断されるものは前掲の1450だけである。碗の形状はいわゆる曲線的な丸い碗がほとんどで、10～11世紀に比定されると考えられる。調整はヘラミガキが主体であるが、外面ナデ調整も比較的多くみられる。外面ヘラケズリが前掲1449の1点ある。1925内面には多角形のっヘラミガキが施され、口縁部外面にヘラ記号がみられる。1937内面には漆が付着してる。

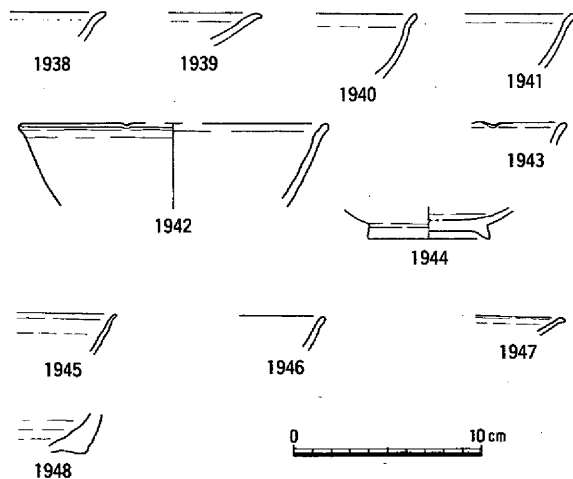
第369図1938～1944は緑釉陶器、1945～1948は灰釉陶器と考えられる。河道5砂層および河道6下半



第368図 遺構に伴わない遺物〈16〉

部から出土した。緑釉陶器は合計8点が確認された。大半は土中の水分との化学変化で器壁表面が黒色に変化している。釉の残り具合も概して悪い。1938は9世紀代の京都産、1939は9世紀代の東海産の可能性もある。1940・1941は10世紀代の東海産か近江産、1942は10世紀代の輪花椀、1943は輪花椀、1944は糸切り、有段輪高台で三角トチン痕がある。10世紀後半の近江産である。図化できなかった小片は、断面中央が黒色を呈し、10世紀代の周防産の可能性が高い。

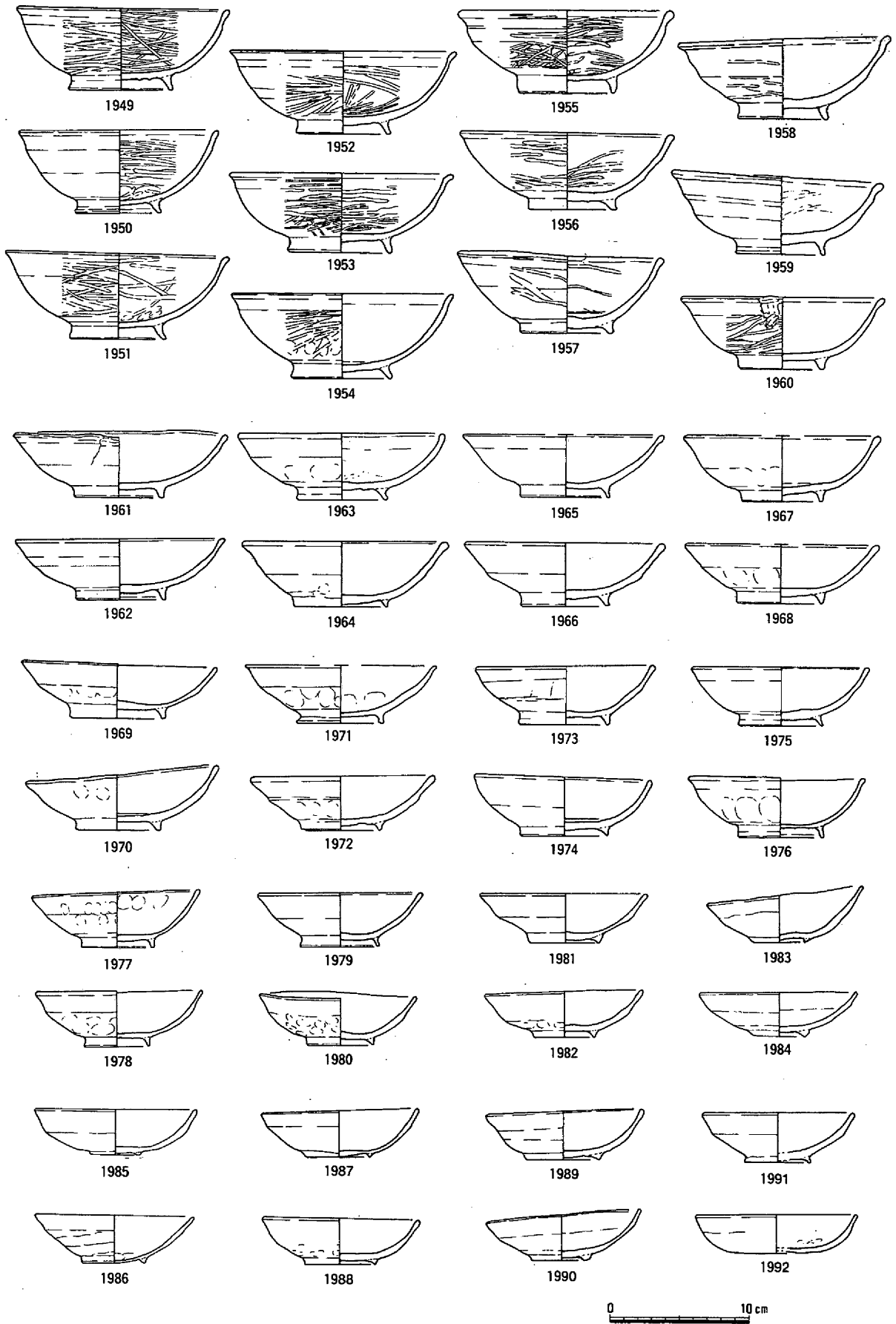
第370図は早島式土器椀である。また、第371図は早島式土器椀と並行する時期以降の土師器と考えられるもので、ここに掲載したのは河道6堆積層中に混入したものである。両者の出土量は破片数ではあるが、総出土土器片数の約5割を占める。そのうちの半数は椀で、その中でもヘラミガキのみられる古手のものが多い。1949～1960は内外両面あるいは片面にヘラミガキがあるもので、器壁が薄くヘラミガキが密なもの1949～1954と、器壁が厚くヘラミガキが粗いもの1955～1960の2種類がある。口径は14.2～15.5cm、底径は5.6～7.4cm、器高は5.2～6.2cmを測る。1961～1992はナデ調整で、口径は14.7cmから10.9cmまで、底径は6.8～3.2cm、器高は4.8～3.2cmまでのものが隙間無く確認される。1993



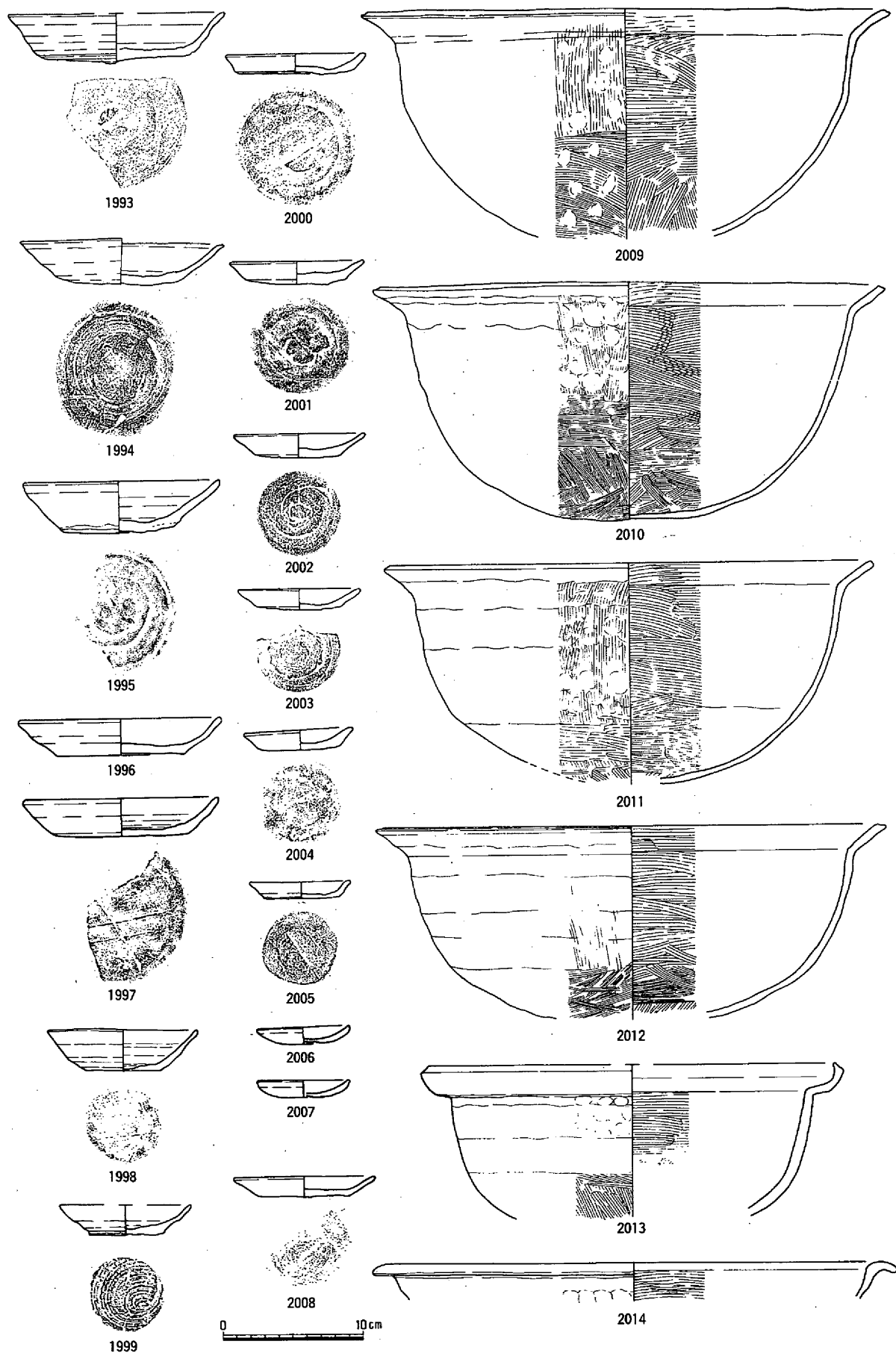
第369図 遺構に伴わない遺物〈17〉

～1999は土師器杯で、1993～1997は底部外面がヘラ切り、1998・1999は糸切りである。古代の土師器杯がやや白っぽく、砂粒を含む胎土が一般的であったのに比べ、色調は橙色を呈し、胎土は精良なものが多い。小皿は色調が橙色のものと白っぽいものがあるが胎土は大半が精良である。2006・2007はにぶい橙色を呈し、底部が丸いもの、2008は底部糸切りである。土師器鍋は深さがあり、口縁端部に面を持つものが多くみられた。

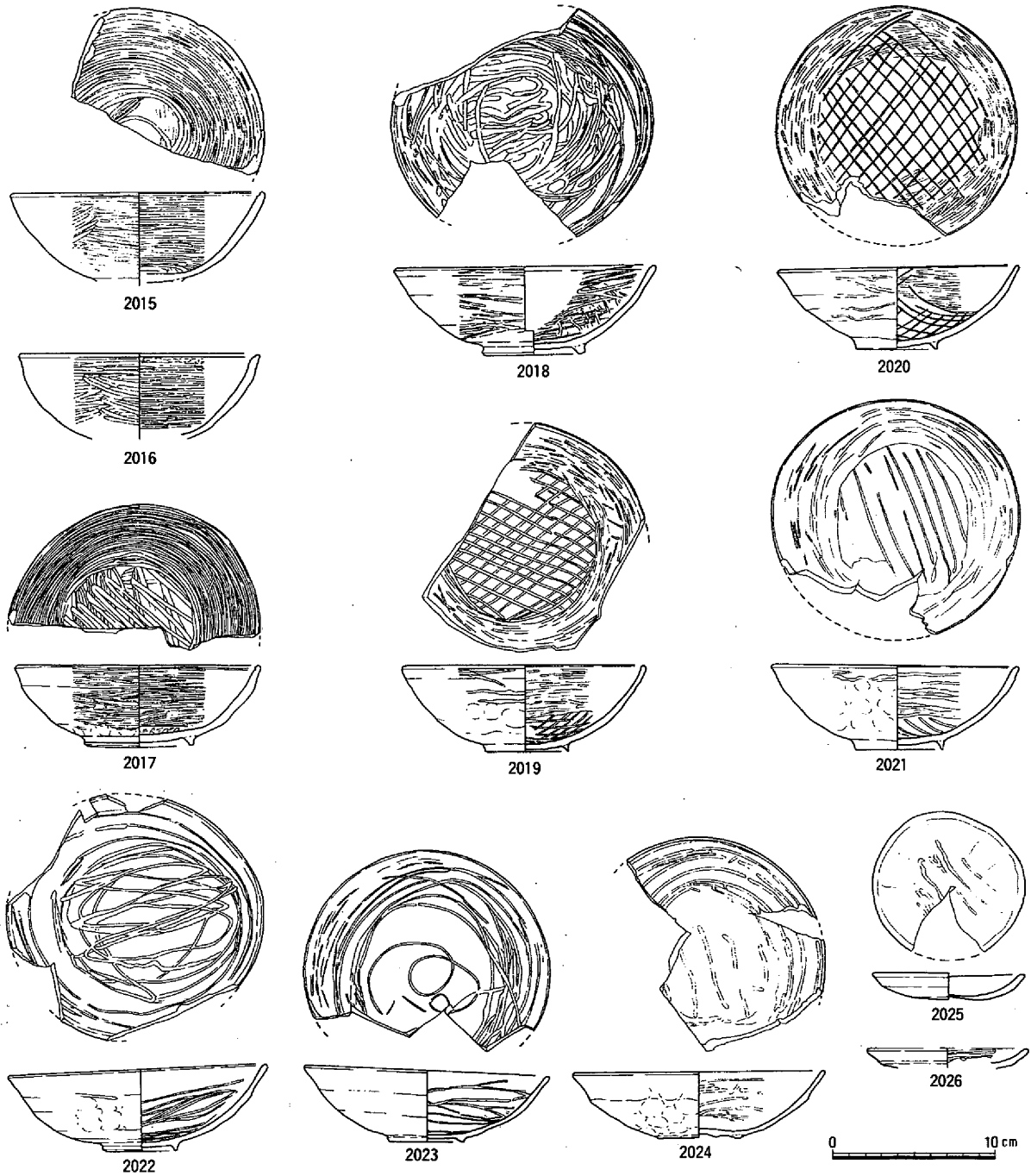
瓦器(第372図)は河道6から出土し、破片数は900点を数える。時期は12世紀前後から13世紀



第370図 遺構に伴わない遺物〈18〉



第371図 遺構に伴わない遺物〈19〉

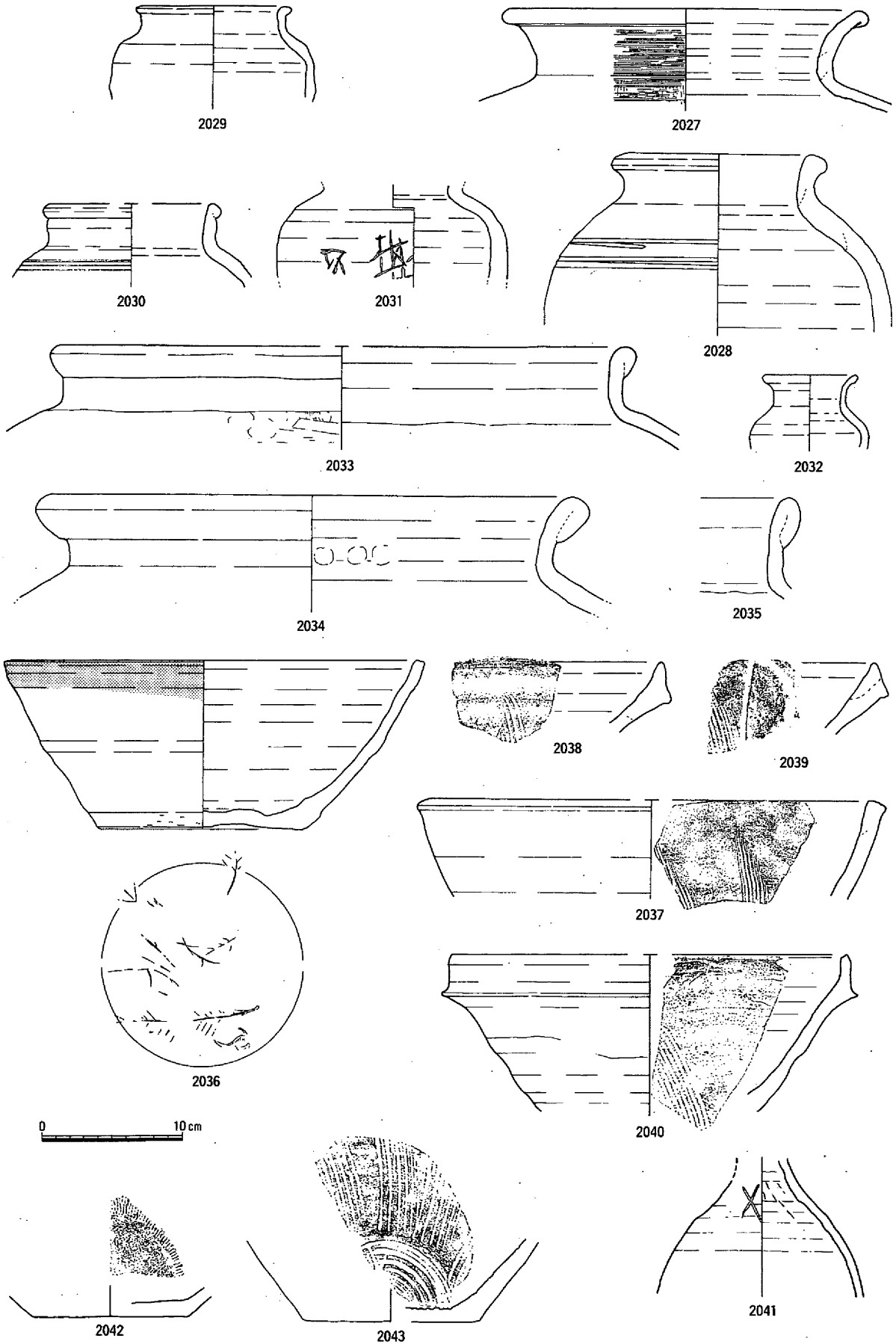


第372図 遺構に伴わない遺物〈20〉

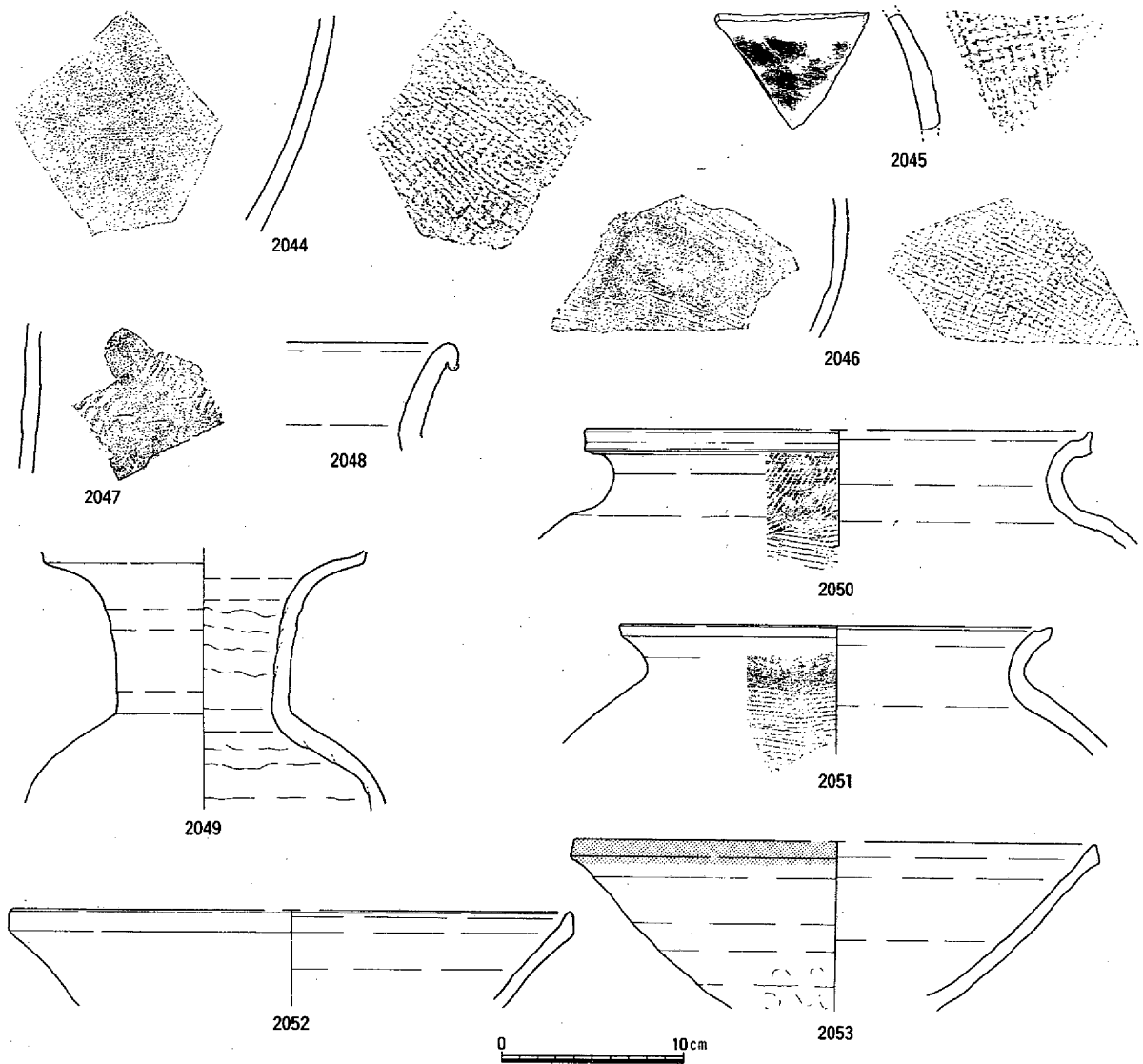
中頃までのものがみられる。2015～2017は口縁端部内面に沈線を持つ。内外面には密なヘラミガキが施され、2015・2016の外表面ヘラミガキは分割性がみられる。これらは楠葉型と考えられる。2018～2022の外表面には雑なヘラミガキがみられるが、2023・2024では省略されている。2025・2026は小皿である。

備前焼（第373図）は主に河道6上半部や現代用水路から出土し、量は少なく180片程度である。時期的には13・14世紀に遡るものは僅かで、大半は15世紀から16世紀代に属すると考えられる。2029～2032は壺、2033～2035甕、2036～2040鉢である。2036鉢は灰白色を呈し、重ね焼き痕が残る。底部外面には木葉の圧痕がみられる。2042・2043は堺・明石系の挿鉢と考えられる。

第374図2044～2047は亀山焼甕片で、2044の内面はハケメ調整、2046内面には沈線状の工具痕が残る。



第373図 遺構に伴わない遺物〈21〉



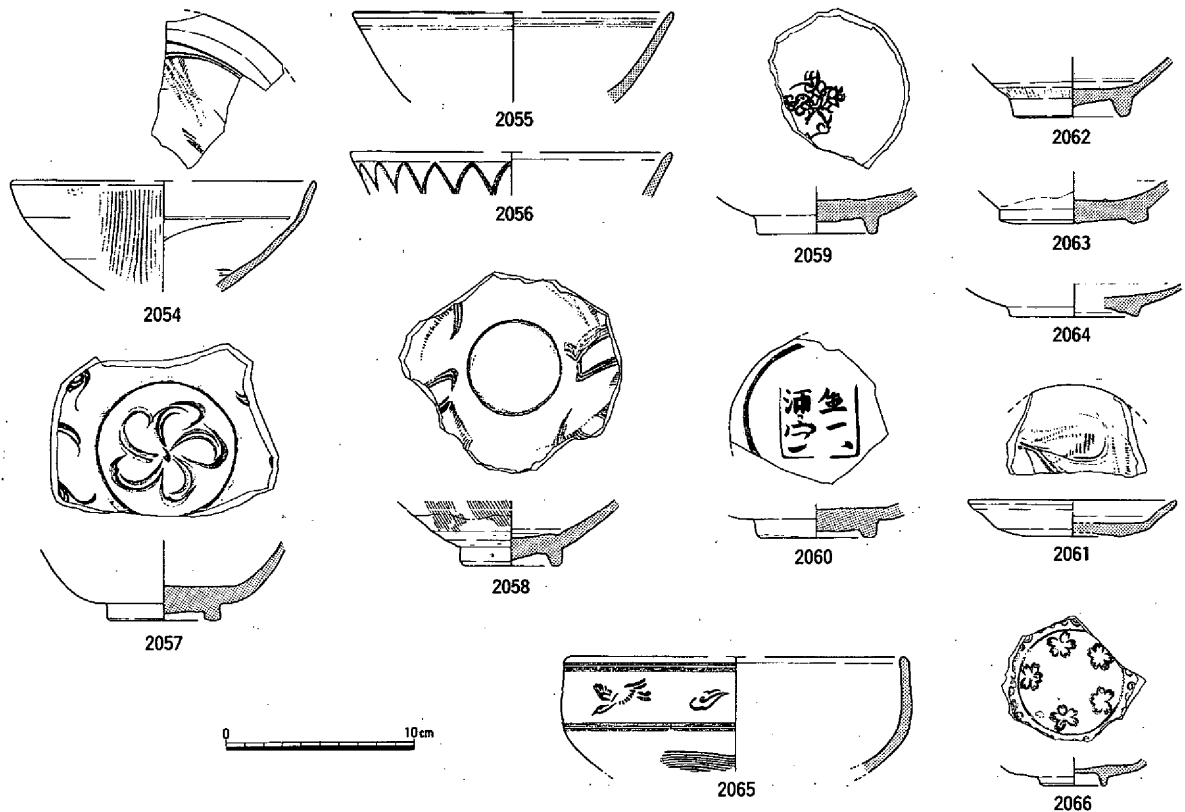
第374図 遺構に伴わない遺物〈22〉

2045には墨が付着しており、転用碗の破片の可能性はある。亀山焼は破片数であるが約100点ほど出土している。2047・2048は常滑焼と考えられるもので、この2片だけである。2049は灰白色を呈する壺で、口縁端部は上方に短くつまみ上げている。内外ともナデ調整であるが、外面に僅かにタタキの痕跡を確認できることから、タタキ痕をナデ消している。内面には粘土紐の跡が残る。この土器は香川県十瓶山窯製品の可能性がある。2050～2053は東播系の甕と捏ね鉢である。椀を除く全出土破片数は30点と少ない。

青・白磁（第375図）は主に河道6上半部から出土し、全出土破片数は約24片である。器種には碗・皿・壺がみられる。およそ12世紀から13世紀の時期が多い。2054～2060は青磁椀である。

2060の見込み部分には「金玉満堂」の印文がある。2062・2063は白磁碗、2064は白磁皿、2061は青磁皿である。2065と2066は象嵌による文様が施され、朝鮮系の青磁と考えられる。2066は底部内面に桜花の文様が5つ配置され、釉は緑褐色を呈する。14世紀中頃の李朝の皿と考えられる。2069の体部外面には鶴と雲の文様がみられ、色調は灰色を呈する。

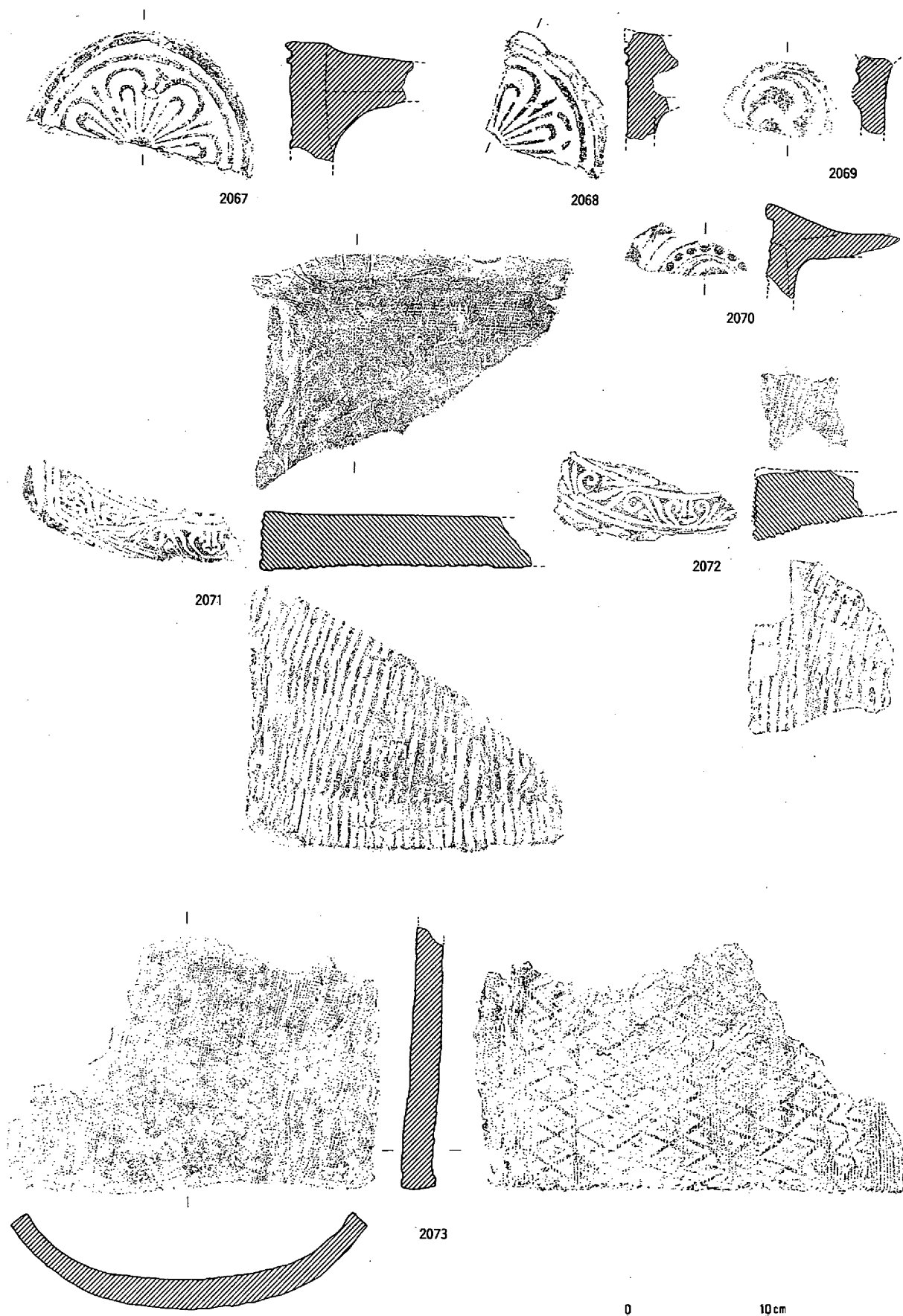
瓦（第376～377図）の大半は河道6から出土した。総破片数は約350点で、そのうち5/6程は近世、



第375図 遺構に伴わない遺物〈23〉

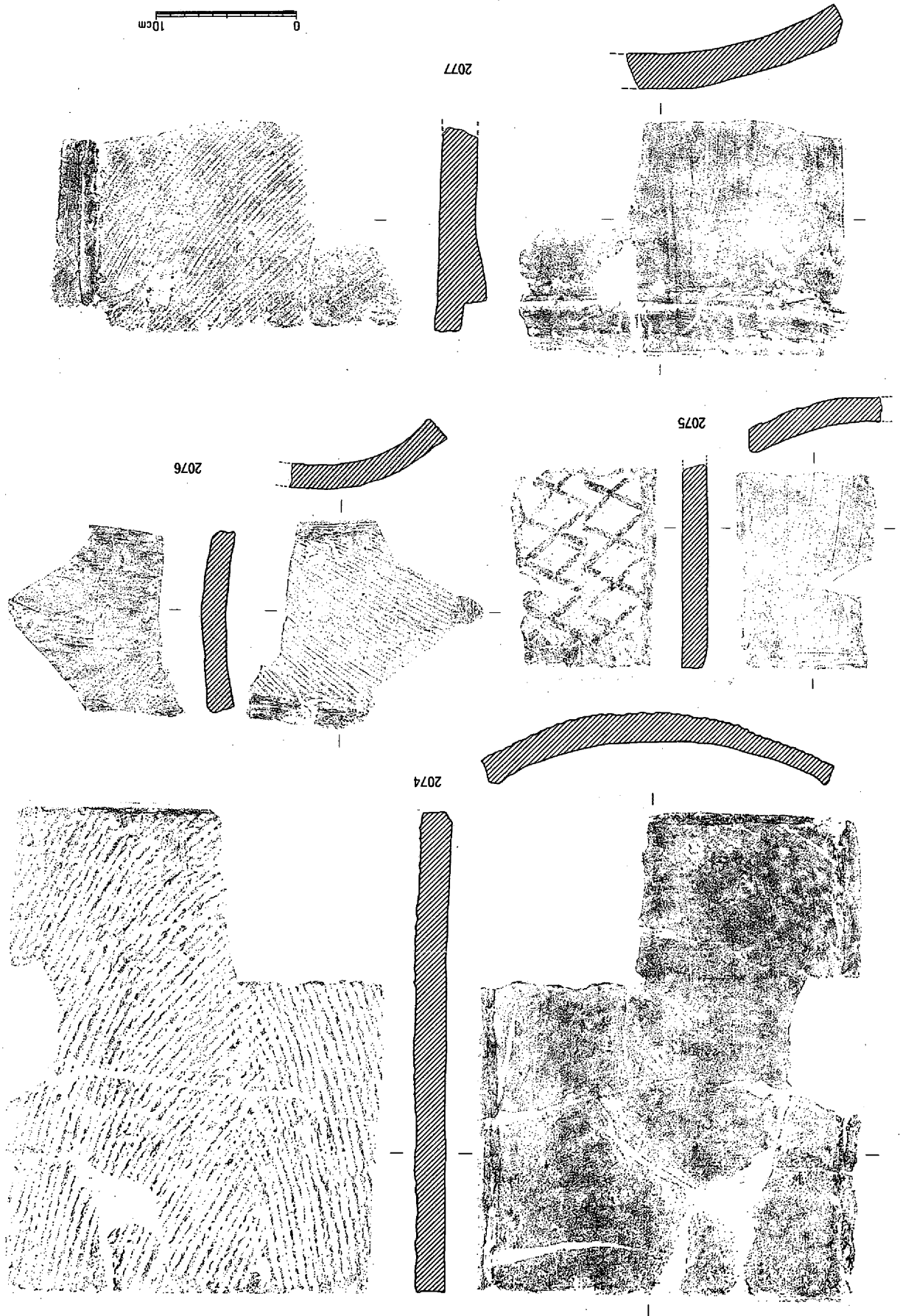
残りは古代から中世の時期が考えられる。軒丸瓦は3種類ある。2069の様な巴頭部が丸みを持ち尾の短いものが多数、2070の様なやや尖り気味の巴頭部で珠文帯の外側圏線と外縁の間にもう1条の圏線を持つ形態のものが橋梁2土壌11出土の1609、土壌7出土1484を合わせて3点、そして2067・2068の様な線で表現された重弁蓮華文をもつものが2点ある。赤磐郡熊山町圓光寺跡出土の軒丸瓦に類例がある。軒平瓦も3種類ある。簡略化された唐草紋で外縁幅が広いものと狭いもの、そして2071・2072の陰刻唐草文が2点ある。この2点とも中央から左側の1番目と2番目の葺手の間にナナメに入る範傷状の突線が確認できる。この突線の左右で文様にズレがあることからこの突線は範傷ではなく、割れた2個体の瓦当を別々にスタンプした可能性がある。備前国分寺跡出土とされる瓦に同様のものがある。平瓦は凹面に布目・ナデ、凸面に格子目・縄目・平行タタキがみられる。2076は小形で凹凸面に粗いハケメを施す。2077は幅の狭い玉縁を持ち、雁振瓦と推定する。

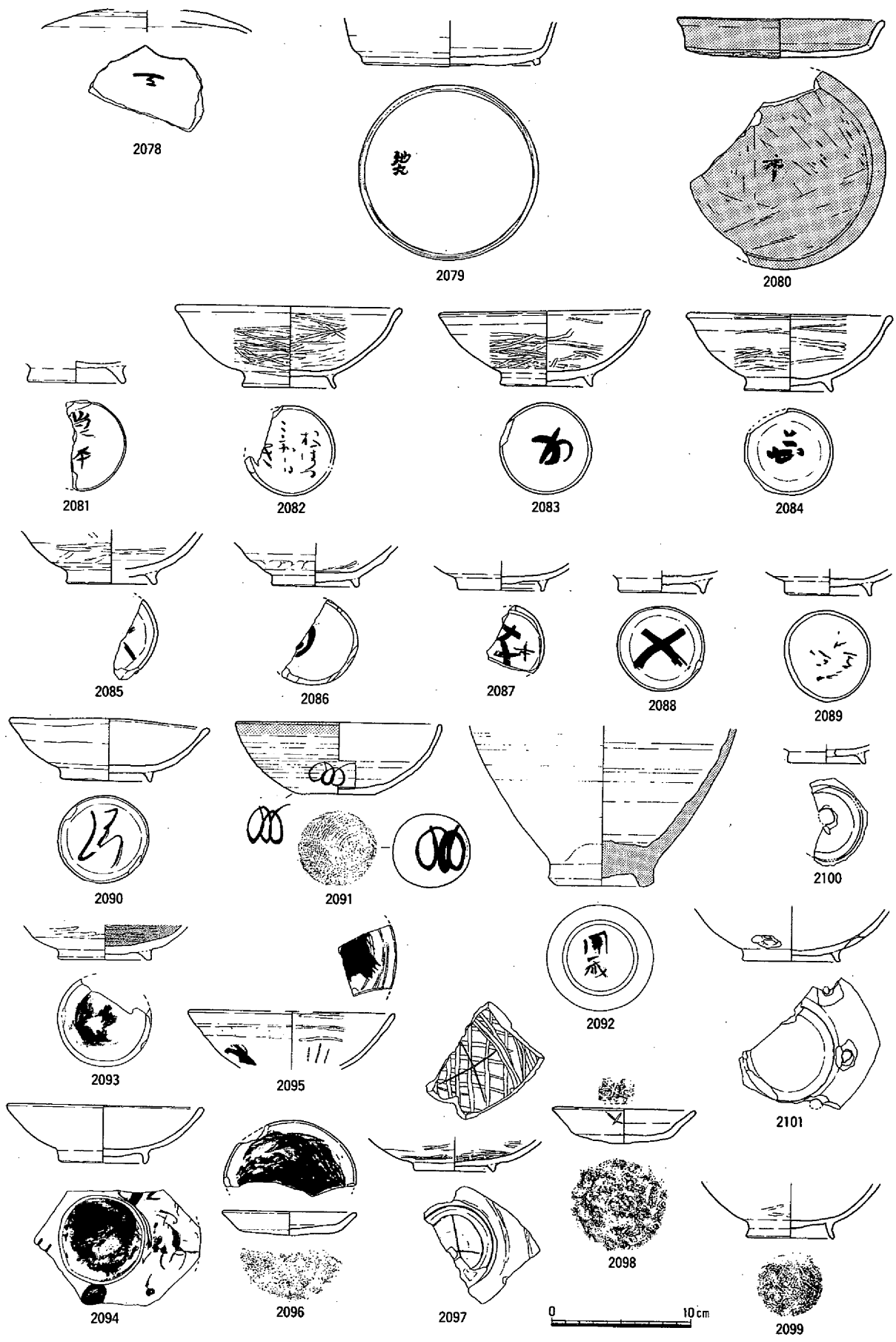
墨書土器(第378図)は河道4~6から出土し、約16点ある。2078は須恵器蓋で内面に1字あるが不明。2079は須恵器杯で底部外面に「馳丸」?とある。2080丹塗り土師器杯(巻頭図版8-1、図版83)は埋立遺構2の礫間に堆積した砂から出土した。底部外面は静止ヘラケズリで、その中央に「市」の墨書がある。「市」は「市場」を示すと考えられ、丹塗りであることから備前国国営の市場が付近に存在する可能性が強い。これら3点は8世紀後半に比定される。2081は土師器碗で底部外面に2文字ある。2082~2090は早島式土器碗で墨書位置はいずれも底部外面である。2082「於ほつミ和ヶし□さ」あるいは「於ほつこ和ヶし□さ」、2083「か」?、2084不明、2085~2088は記号、2089は残りが悪い。2090不明。2091は須恵器碗で体部外面下半と底部外面に同様の連続した輪状の記号がみられる。2092は白磁の四耳壺と考えられ、底部外面に「圓戒」あるいは「開巖」と読める。これらの墨書土器はおよそ10世紀後半から13世紀前半の時期が考えられる。僧侶の名前の可能性がある。2093~2096は墨入



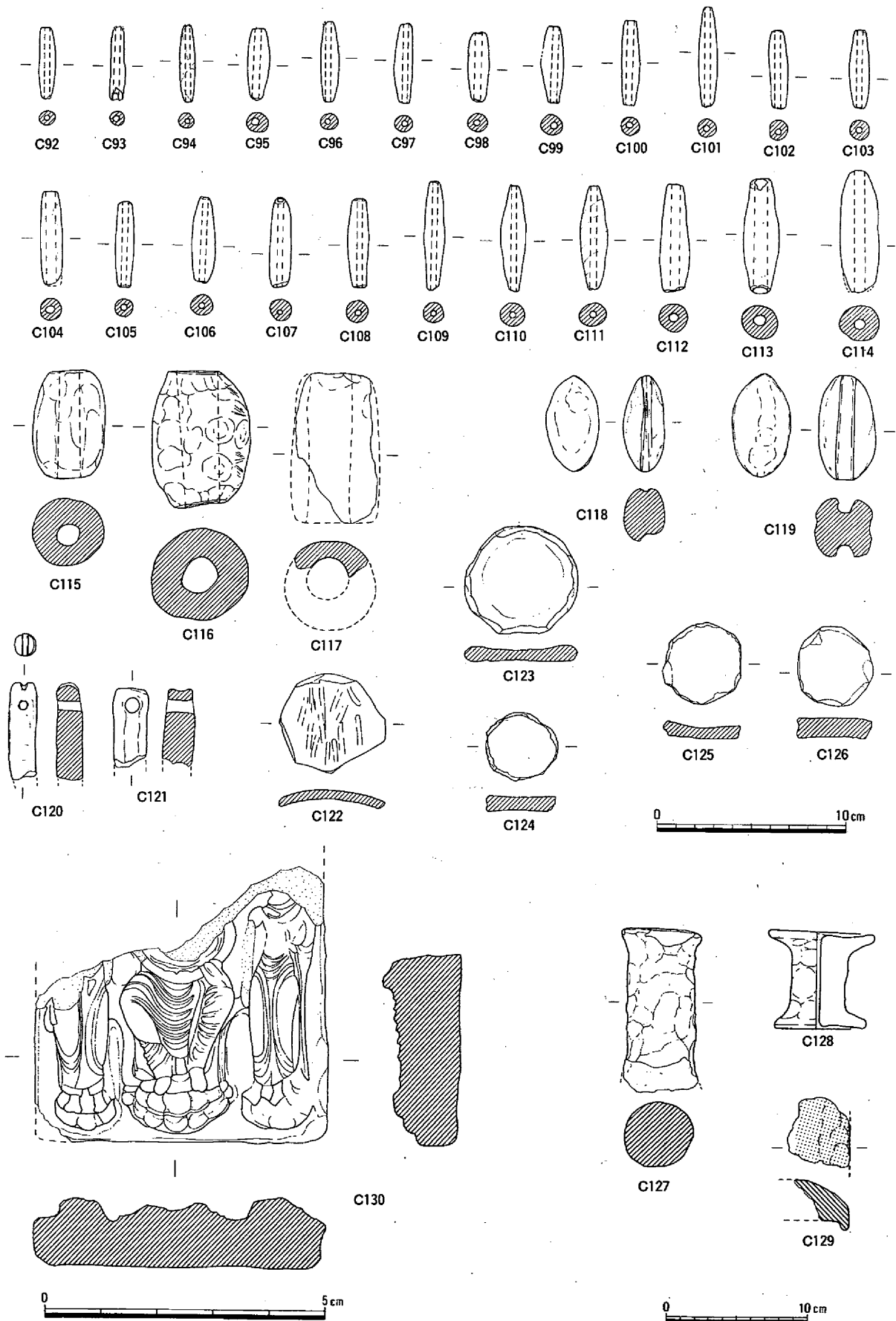
第376図 遺構に伴わない遺物〈24〉

第377図 遺構に伴わない遺物<25>

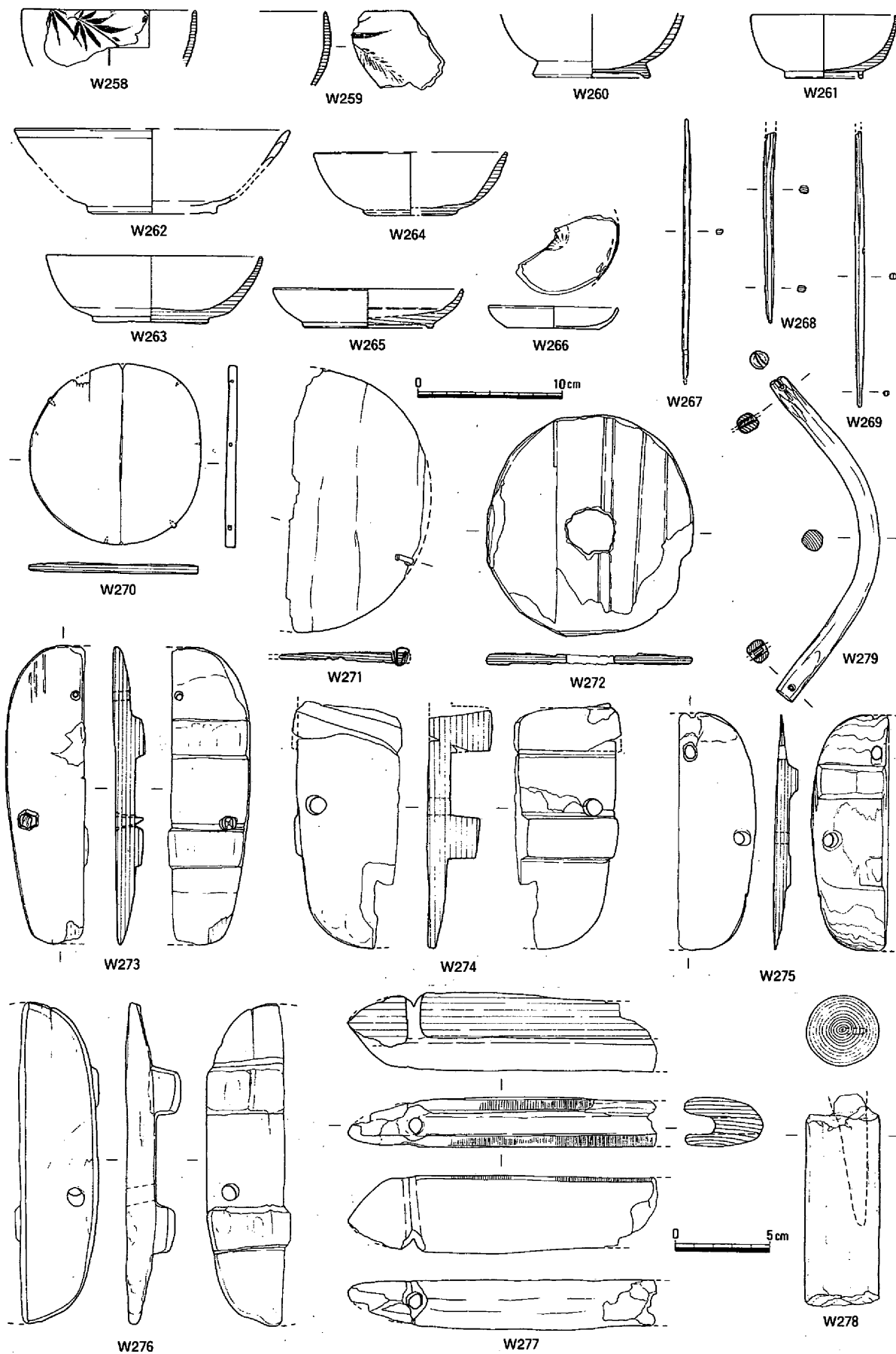




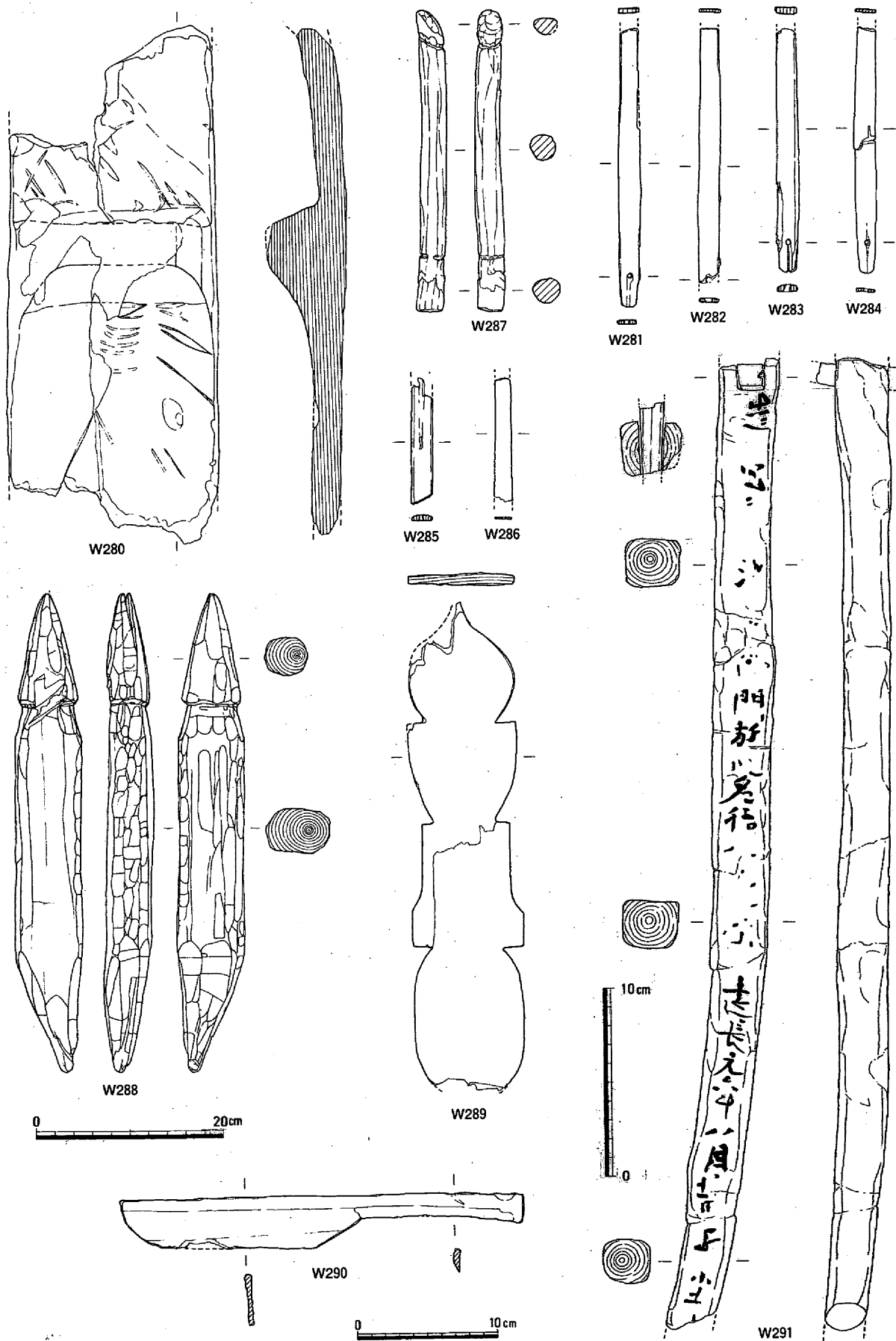
第378図 遺構に伴わない遺物〈26〉



第379図 遺構に伴わない遺物〈27〉



第380図 遺構に伴わない遺物〈28〉



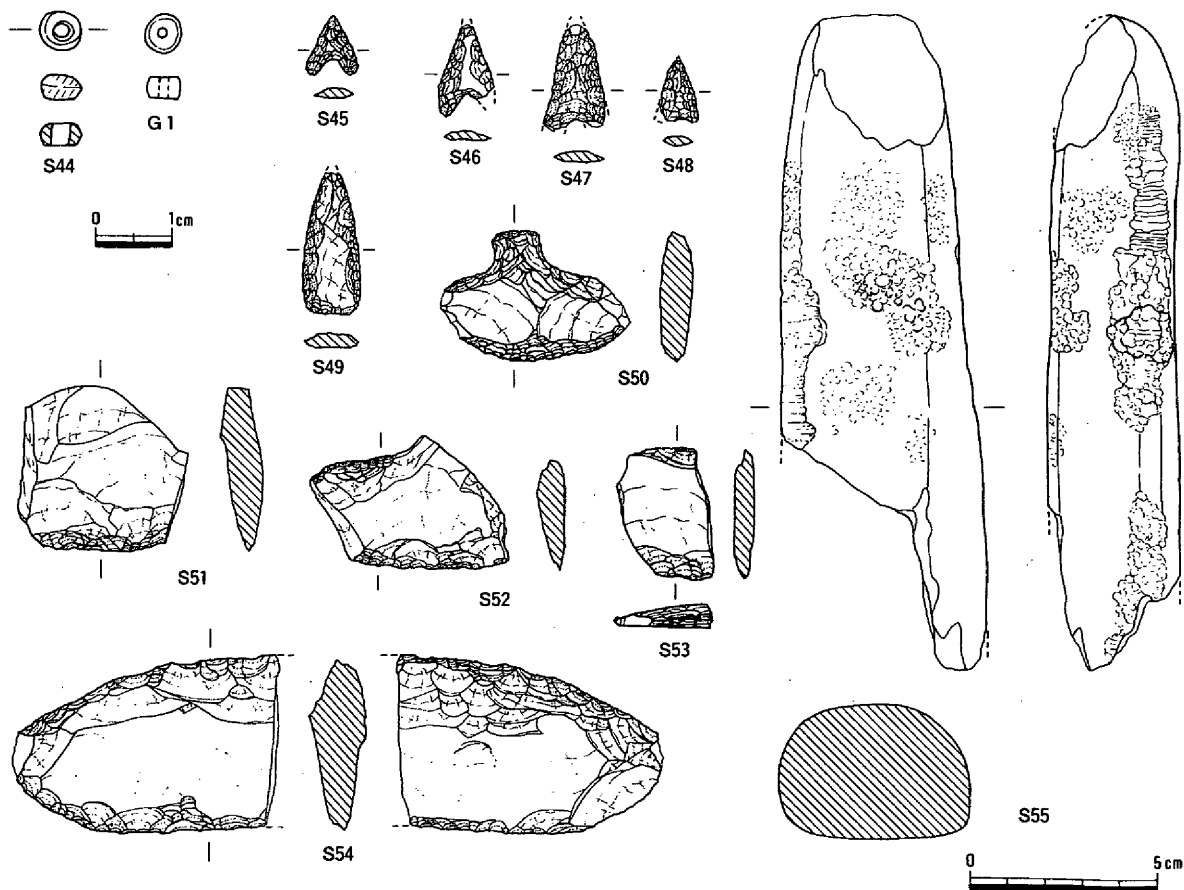
第381図 遺構に伴わない遺物〈29〉

第3章 発掘調査の概要

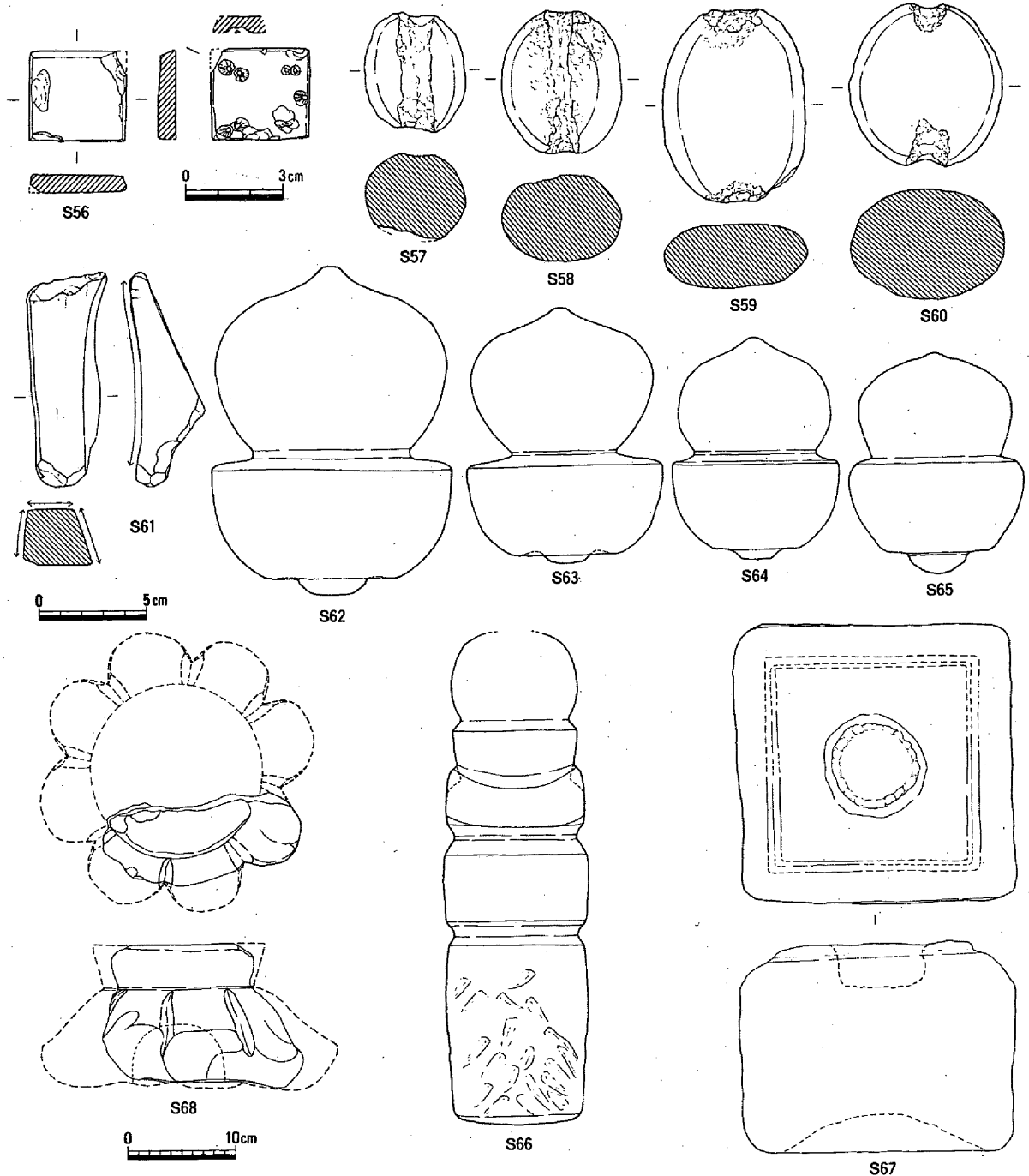
れに転用されたと考えられるもので、2093は内黒の黒色土器碗、2094は早島式土器碗、2095は瓦器碗、2096は土師器皿である。また、2097瓦器碗底部内外面、2098土師器杯口縁下外面、2099早島式土器碗底部外面には「X」の線刻がみられる。2100・2101は早島式土器碗であるが、底部や体部に焼成後の穿孔がある。

土製品（第379図）の大半は土錘で約80点ある。管状土錘には小形で細長いC92~114と大形で寸胴のC115~117がある。重量は前者は2.3~28.5g、後者は82.6~172.4gである。溝を持つ土錘には3種類ある。堤防復旧部洪水砂出土C79の様な円形のもの、両端が尖った楕円形のC118・119、そして中央に穴と片側に溝をもつ土塊7出土C87がある。C120・121の様な棒状土錘も少量みられる。C122~126は土製円板と考えられ、C122は黒色土器碗、C123は底部外面へラ切りの土師器杯、C124は底部外面糸切りの須恵器碗、C125は早島式土器碗、C126は備前焼を打ち欠いている。C127・128は窯道具と考えられ、C128は灰白色の還元色を呈し、中央に直径3mmの穴が開く。河道6中層下部から出土し、おそらく13世紀以前と推測される。C127は灰黄褐色を呈する。C129は羽口である。羽口の出土はこれ1点のみである。鍛冶滓と考えられる鉄滓小破片も出土しているがごく僅かで10点ほどである。C130は小形方形三尊塼仏（巻頭図版8-2、図版87）である。橋梁2Ⅳ期の基礎施設である石群中から出土した。残存長4.9cm、幅5.2cm、最大厚1.3cmを測る。にぶい黄橙色を呈し、焼成はやや甘い。胎土は精良で、雲母が目立つ。裏面には型押しの際の押圧痕が残る。

木製品（第380~381図）は河道6上半部を中心に約250点が出土した。W258~264は漆器の碗、W265・266は漆器の皿である。W267~269箸、W270・271は曲物の底板、W272は中央に穴をあけた円



第382図 遺構に伴わない遺物〈30〉



第383図 遺構に伴わない遺物〈31〉

板、W273～276は下駄である。W277は断面U字形に溝を通し、尖らせた端部に円孔や浅い溝を付けた加工木で、全長は欠損のため不明である。幅4.1cm、厚さ2.6cmを測る。側面に細かな筋が多数付いており、これは糸による擦痕と考えられることから織機と判断される。材はヒノキ。W279加工木はW278は刃物の柄で、打ち込み式と推定され、目釘はない。W279は断面円形の棒状の加工品で両端部に小孔と溝がみられる。直径1.4cmほどでしなった状態で検出された。はなぐりとも考えられるが用途不明である。材はイヌガヤ。W280は梯子である。材はクマシデ属イヌシデ節。W281～286は河道6中層からまとまって出土したもので、端部に小円孔あるいは長方形の穴が開く。扇子と考えられる。W287はマツを使用した陽物形木製品。W288は卒塔婆の一種と考えている。W289は五輪塔を形取った卒塔

婆で墨書はみられない。材はスギ。W290は刀形でヒノキ製。W291は河道6上層から出土した断面方形の棒状木製品である。かなりかすれているが墨書が確認できる。「□□□□□□□□門於心名□□□□ 建長元年八月廿一日□□□ 小?□□」と判読でき、本意一年月日一名前という配置が推察される。供養あるいは願掛けのような文意ではないだろうか。木製品自体は両端が欠損しており、上端部にはほぞ穴があり角材が通っている。建長元年は1249年である。

ガラス製品・石製品（第382～383図）は少ない。G1は水色を呈するガラス小玉。S44は蛇紋岩製の白玉。S45～49はサヌカイトの石鏃。S50はサヌカイト製石匙。S51～54はサヌカイト製スクレイパー。S55は変輝緑岩製磨製石斧である。S56はサヌカイト製の石帯（巡方）である。近世の土壌24埋土中に混入しており、2.8×3.0cm、厚さ5mmを測る。裏面には糸を通す穴を四隅に刻っている。実測図の右下角の穴は潰れ、代わりの穴を右側辺中央に開けている。S57～58は花崗岩製の石錘。S61は流紋岩製砥石である。S62～65は五輪塔の空・風輪で、S62・63は万成系花崗岩、S64閃緑岩、S64豊島石（凝灰角礫岩）である。S66は豊島石製の一石五輪塔。S67は豊島石製で、宝篋印塔の基礎と考えられる。S68は豊島石製で、灯籠の傘部あるいは何か石造物の台座かと考えられるが特定できなかった。

（物部）

8 小結

岩間下調査区東半の河道部分では古代から中世にかけての大規模構造物が集中する。奈良時代中頃以前には河道東岸に道路が構築されている。構造的には割り木の頭部が水平になるように設置するなど非常に高度な技術を看取できる。奈良時代の遺物には丹塗土師器や石帯（巡方）など公的性格を有するものも多い。その中でも「市場」を示すと考えられる「市」の墨書丹塗土師器は特筆される。今回検出した道路も国あるいは郡が関与した可能性が高いと考えられる。平安時代中頃には河道西岸に堤防、東岸に埋立遺構1・2、護岸2が築かれる。これらは河道制御のため一体となって機能するものと理解している。技術面では、堤防は多数の縦杭と縦杭に絡めた横木を芯とし、川側に敷葉を施す点で、岡山市津寺遺跡出土の堤防（6世紀末から7世紀前半）に類似する。埋立遺構1・2は礫を大量に使っている点に特徴がある。護岸2は縦杭に絡めた細い横木の量は異常なほどである。これら水流の攻撃面となる東岸の施設は、相当な水圧に耐えうるよう工夫されている。平安時代の遺物には、多くの土師器・須恵器のほか緑釉陶器、灰釉陶器、風字硯、人形、卒塔婆なども見られる。岩間上調査区の南約80mに位置する百間川長谷遺跡では平安時代の溝と水田が確認され、緑釉陶器3点が出土しており、当調査区出土遺物がこのあたりから流下したものである可能性がある。中世になると橋梁2が架橋される。この橋は13世紀前半から17世紀代までの長期間保持されること、13世紀中頃と16世紀前半に礫・木材・粗朶・土を使用した大規模な基礎施設を作っていること、それ以前にも河道底の洗掘部を土で埋め補修した痕跡を確認したことなど注目すべき特徴を持つ。橋梁2が補修・改修をくり返し、長期間保持されることは、橋梁2の重要性または需要の高さを示しており、一集落の生活道ではなく、港へ通じる主要道として物資の流通、人々の往来を担っていたと考えたい。

河道西岸に当たる調査区西半部で検出された遺構は中世を中心とする不整形な土壌・溝が多い。その中で溝30は直線的な溝で水田に伴う溝の可能性もある。土壌7～10、溝32は人為的なものとは考えにくく、洪水や大雨による自然の窪みや溝の可能性もある。土壌8に見られる施設は、橋梁2へと続く道の補修と考えたい。

（物部）

第4章 まとめ

第1節 遺構について

1 河道の復元について

1, 概要

岡山県の三大河川の一つである旭川の沖積作用により、岡山平野が形成されてきた。百間川遺跡群は、平野を南流する旭川の東岸に広がる沖積平野に形成された遺跡群である。旭東の平野は、北側を標高257mの竜の口山丘陵と南側を操山丘陵に挟まれた東西12km、南北6kmの地域で、岡山平野の中心部を占めている。この平野には、旭川の東分流により多くの自然堤防が形成され、縄文時代以降の多くの遺跡が知られている。

2, 分流の痕跡

旭川の東岸地域に分流した河道群は、一つは南側の操山山塊の東端に達し芥子山山塊との間を抜ける完全な東分流と、もう一つは操山山塊の西端から再度本流に合流するものが地形から考えられる。東分流については複数の旧河道痕跡が先学により指摘されており、地形図や航空写真等でも可耕地の変化等で痕跡がたどれる。また、遺跡の発掘調査や工事立会等の増加による微高地や旧河道の把握も進展している。特に百間川の改修による大規模な遺跡群の調査では、河道の詳細な情報が増加している。ただ近年では山陽本線付近から南側が市街地に進行しており、宅地造成や埋め立てにより微地形の観察に支障をきたす状況となりつつある。

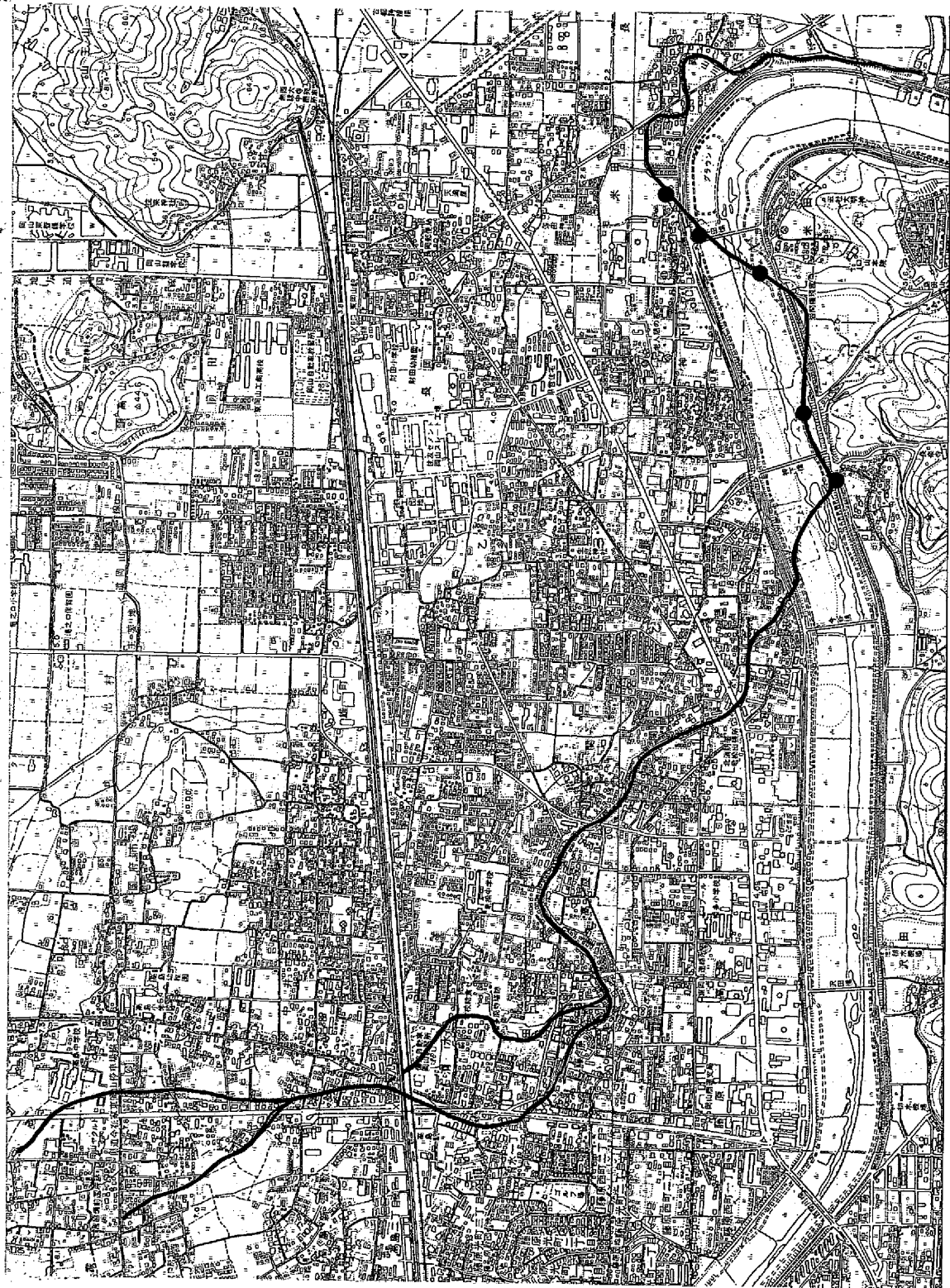
3, 旧河道の流路

岩間調査区最大の検出遺構である河道1及び3・5・6・7（以下旧河道）は、古代末（初限古代）～中世（前半期）における旭川東分流で操山東端を迂回し、旧岩間の江から児島湾に注いでいたものと考えられる。以下、米田遺跡付近より下流部と同遺跡より上流部分岐点付近までとに2分して流路を辿ってみる。

下流部 調査を行った岩間上調査区で検出の旧河道は、一端調査区外をほぼ東進し岩間の丘陵部に突き当たり、北東方向に向きを変えて下調査区の旧河道へと続いている。改修前まではこの河道位置を踏襲するように幹線水路が上面に穿たれおり旧河道位置の推定になろう。なお、右岸用水の長谷遺跡の調査では、丘陵裾部及び中央付近では古代末～中世段階の微高地水田層を確認しているが、中央やや西よりと東端では未調査の低位部で、この間を一時期河道が湾曲した可能性がある。

下調査区検出の旧河道はさらに北上し、百間川堤防外の米田遺跡排水機場調査区検出の旧河道に達する。右岸側の肩口より河道半分程度の検出で、橋脚や貝塚等を確認している。なお、新米田橋北詰付近の調査では、当該河道の左岸肩口らしき遺構を検出している。米田遺跡排水機場調査区付近をすぎてから大きく南にカーブし、長利付近の現河道と重複した位置を蛇行しながら南流して操山東南端付近で当時の海岸線に達したものと想定される。

上流部 上調査区西端部では、今谷集落東の操山丘陵の北端裾部を巡るように検出し、さらに上流へと続いている。ただ、新今谷橋付近から百間川内の上流部では百間川今谷、兼基、沢田遺跡等の調査が、低水路等の調査で切れ目なく行われており当該期の河道痕跡は確認されていない。恐らく既に改修掘削が行われている新神下橋上流付近で百間川を横断したものと考えられる。なお、今谷の右岸北前樋門の調査で当該旧河道と同時期の溝71を検出している。旧河道の右岸肩部であればこの付近からの横断が想定される。百間川を横切り、兼基弥生遺跡の微高地の北側を通り、旧2号線及び旧国道



第384図 旧河道復元図 (S=1/20000) (黒丸印調査地点)

を横切り、関及び赤田集落の南側を通る痕跡が認められる。いずれも現在では宅地化が進行しているが、幅50m程の河道痕跡の方向に住宅が並び明瞭に現在でも痕跡をたどれる。赤田付近では幡多廃寺の東側を蛇行する旧河道の分流が認められる。清水地下道の付近で新幹線、山陽本線を横切る。これより北は県道原、原尾島線とほぼ平行する流路と今在家東付近を下る流路が考えられる。

米田遺跡岩間調査区で検出した旧河道（河道1及び3・5・6・7）は、祇園上付近の旭川本流から分岐し流程約16kmの古代末から中世前半期を中心とする東分流そのもので、遅くとも中世末段階では役割を終えていたものと考えられる。（山磨）

2 百間川米田遺跡の貝類について

1. 概要

米田遺跡岩間上、下両調査区を流走する大規模な古代末～中世の河道1及び3・5・6・7では、上調査区で3カ所、下調査区で2地点（5カ所）の大小合計8カ所の貝塚を検出している。いずれも旧河道の埋没過程で形成されたもので、各種貝類や土器、木器、獣骨、魚骨等が含まれている。これらの貝塚の貝類等の採集は、上調査区の3カ所の貝塚では規模がいずれも大きかったためにサンプル採集を試み、下調査区では小規模貝塚のために全量採集を行っている。上、下調査区ともに採集量が多いものではコンテナ50箱以上の量を採集している。ただ、貝類採集の方法は、貝塚が個々に規模、堆積状況等が異なっていたために若干統一を欠いている。貝塚2・3では、堆積層位が明瞭であったために土層（貝層）別に行い、層位の不明瞭な貝塚1は地点別に数カ所の採集である。また、下調査区の小規模貝塚では全量一括採集を行っている。

貝類の水洗選別は、4mmのふるいを使用して乾燥後に分析を行った。分析は、貝類の同定を行うことと個体数の算定、重量の計測と主要貝類であるハイガイの殻長と殻高の計測を行った。個体数の算定は腹足綱（巻き貝）では主に殻頂部数、斧足綱（二枚貝）の場合は殻頂部数を1/2として個体数の計算を行った。

なお、カワニナ類では出土数の半数以上が稚貝の状態であった。付近に生息したものが自然死した可能性があるが個体数の計測には含めている。

2. 貝類の組成

貝の種類は貝塚全体で17種類以上を確認している。鹹水性の斧足綱（二枚貝綱）では、ハイガイ、オキシジミ、ハマグリ、マガキ、腹足綱でアカニシ、ウミニナ、イボニシ、イボウミニナ、ヘナタリガイ、ゴマフタマガイ、ムシロガイ、カワアイガイ、淡水性斧足綱でマツカサガイ、イシガイ、腹足綱でオオタニシ、カワニナ類、汽水性斧足綱でヤマトシジミ等である。

岩間上調査区の3箇所の貝塚の出土貝種の比率は、いずれもハイガイが主体で、次いでヤマトシジミと稚貝を多く含むカワニナ類で大半を占める。その他の貝種は1%以下の比率である。

一方、岩間下調査区ではいずれの貝塚ともにヤマトシジミが最も多く最大比率を占めている。特に貝塚7ではヤマトシジミが80%以上の比率を占めている。次いでハイガイ、カワニナ類と続いて岩間上調査区検出の貝塚群とはいずれも第1位の貝種の比率が逆転している。

上調査区2カ所（貝塚1、3）、下調査区3カ所（貝塚5、6、8）の各貝塚ごとの貝類の組成は図385の円グラフの示すとおりである。掲載した5カ所の貝塚の貝種や貝の堆積の垂直、水平方向の出土比率の変化等を各々以下に検討してみる。

貝塚1の採集では、東西方向の土層断面畦を境に南から北に4区分した各地区と、その境の土層断面畦から機械的に上下2、3層に区分しコンテナ50箱強をサンプル採集している。分析の結果、全体の出土比率ではハイガイが主貝種で61%。ヤマトシジミが27%、カワナ類が11%を占めている。採集の各地区を細かく見ると岸に近い北端の採集地区ではヤマトシジミが比率1位で58%を占めて、ハイガイは37%と逆転している。南側（河道中央）に行くに従って主体貝種であるハイガイの比率が高くなり、南端の地区では90%以上の比率でハイガイが占めている。カワナ類は5%前後の出土が多く、高い比率の地区は25%を越えて出土しているところもある。特に稚貝の比率が高く全体で半分以上占めている。ハイガイの比率の変化は、貝の廃棄が岸より徐々に河道中央に向かって行われており、これに対応するようにハイガイ種の比率が増加していることが認められる。また垂直方向の変化では、堆積層の厚い中央より北側（岸に近い方）の下層でのヤマトシジミの比率が高い傾向にある。

貝塚3では、土層断面畦からの層位別のサンプル採集でコンテナ66箱程採集している。全体の比率では54%がハイガイが占め、次いでヤマトシジミが31%、カワナ類が14%である。採集層位別においてもハイガイが主体で比率第1位が大半であるが、一部の断面では肉眼観察でもヤマトシジミの比率が高いことが認められ、ある特定の時期には集中的にヤマトシジミが多く採集された様である。算定の結果からも比率が逆転しヤマトシジミが50%以上で比率第1位を占めている層位も観察された。全体的には貝塚1と類似した出土比率を示している。

なお、未掲載の貝塚2においても主体貝種はハイガイで、次いで、ヤマトシジミが占めている。ただ、カワナ類の出土が低く、ハイガイとヤマトシジミの2種類で大半を占めている。

一方、下流の岩間下調査区では全量採集している5カ所の貝塚では主要貝種はハイガイ、ヤマトシジミが占め、次いでカワナ類であることは同様である。出現比率はヤマトシジミがいずれも第1位を占めて上流部の貝塚の出土比率とは逆転している。掲載した3貝塚のうちでは、11区のはぼ同一地点で上下層に確認された貝塚6・8は、ヤマトシジミが出土比率の70%以上を占めて安定し、次いでハイガイが20%前後である。主要な2種類で大半を占めている。

貝塚5では、他の貝塚よりカワナ類の出土比率が高く、出土比率第1位のヤマトシジミは50%程である。ハイガイとカワナ類が20%強である。

3. 貝類の大きさ

貝塚出土の貝類の中で、主要貝類の一種であるハイガイの個体の殻長と殻高の計測を行っている。そのうち殻長の比較検討を行い、5カ所の貝塚の分布データを図385に掲載している。

上調査区の貝塚1では、採集地区のうちハイガイの出土量の多い南端区のコンテナ9箱分中の2箱の合計1040点ほどについての計測データである。貝塚3では採集量の多い第11層（純貝層）中の合計1500点の計測データである。

下調査区の貝塚では、いずれも全量採集を行っており、多い貝塚ではコンテナ50箱近くの採集量である。このうちから計測には機械的に抽出している。掲載した貝塚5、貝塚6、貝塚8で各々合計1500点についての計測データである。下調査区検出の貝塚は、いずれも出現率の第1位はヤマトシジミであるが、上調査区の貝塚と比較検討のために第2位の出現率であるハイガイの計測を行っている。なお、貝の計測は、殻長、殻高ともに周縁部まで残存しているもののみで推定復元は行っていない。

その結果、貝塚全体でのハイガイは、殻長最小1,2cm～最大6,4cmまでの大きさが出土しており平均で3,7cmである。各々5カ所の貝塚では採集個体の集中する傾向が若干異なり、図385の棒グラフに殻

長度数分布表を掲載している。以下、各貝塚の傾向を検討して見る。

上調査区の貝塚1では、最小1,4cm～最大5,9cmまでの大きさの貝が出土している。ピークは2,8cm付近であるが、特に2,4cm～3,4cm間での採集が顕著でまんべんなく採集しているようである。貝塚3では最小1,4cm～最大5,7cmまでの大きさが出土している。ピークは3,4cmでピラミッド形の形状をなして、貝塚1と比較してピークがかなり右に偏っている。

下調査区の貝塚出土のハイガイの分布傾向は、貝塚5では最小1,5cm～最大6,0cmである。ピークが2,7cm付近と3,3cm付近の2カ所にあり2,5cm～3,8cm付近の個体を平均して採集している。貝塚6と貝塚8は同一地点の上下層に重複した貝塚で、さらに北に広がっているようである。上層の貝塚6の出土分布は最小1,5cm～最大6,1cmである。2,8cmがピークで2,4cm～2,8cm付近の採集が集中している。採集個体の小型化の傾向が認められ、2,9cm以上では採集量が他の貝塚と比較し減少傾向が顕著である。下層の貝塚8では、最小1,2cm～最大6,4cmまでの大きさを採集している。2,9cmをピークとし2,6cm～2,9cm付近の採集が集中している。

4. 小結

米田遺跡岩間上、下両調査区では、大小8カ所の貝塚を古代末から中世（前半期）の大規模な旧河道内より検出した。これらの貝塚からは、コンテナで300箱以上の貝層サンプルを採集し水洗選別を行い、多くの貝類等を検出することができた。以下に貝類の種別、組成等の分析を試み、検討を行った成果、問題点、今後の課題等を列記してみる。

1. 検出貝塚の主要貝種は、ヤマトシジミとハイガイの2種類であった。ヤマトシジミは一般的に海水と淡水が混じる河口の汽水域が生息場所といわれている。一方ハイガイは内湾奥部の干潟を生息域とする。これら2主要貝類の出土量から採集域は遺跡にほど近い鹹水域から汽水域にあたると考えられる。現在では当該地区から海岸線までかなりの距離があるが、操山山塊の南に広がる広大な可耕地は近世前半期の干拓地で、江戸時代初期以前には海岸線が操山に迫り、広大な内湾奥部を形成していたものと考えられる。現に丘陵南側裾部には、中世～近世のハイガイ主体貝塚が数多く形成されている。

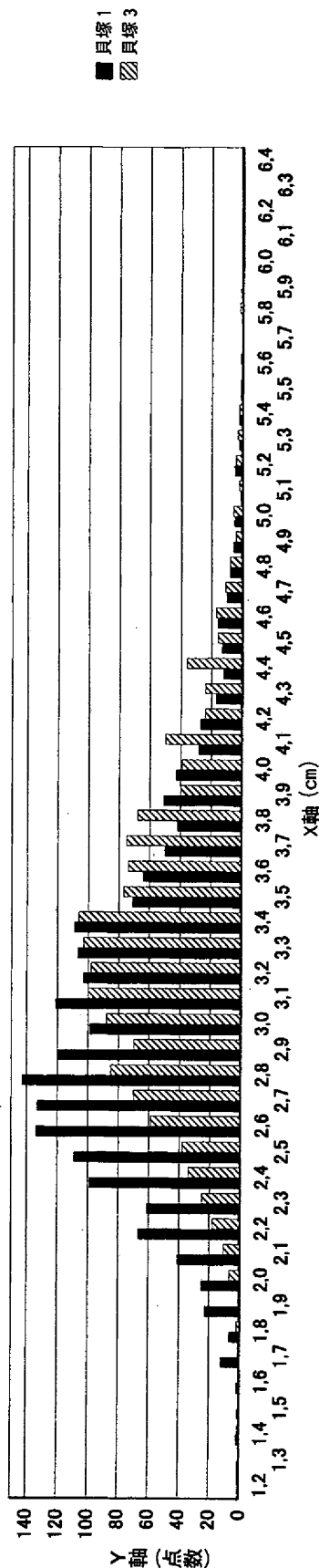
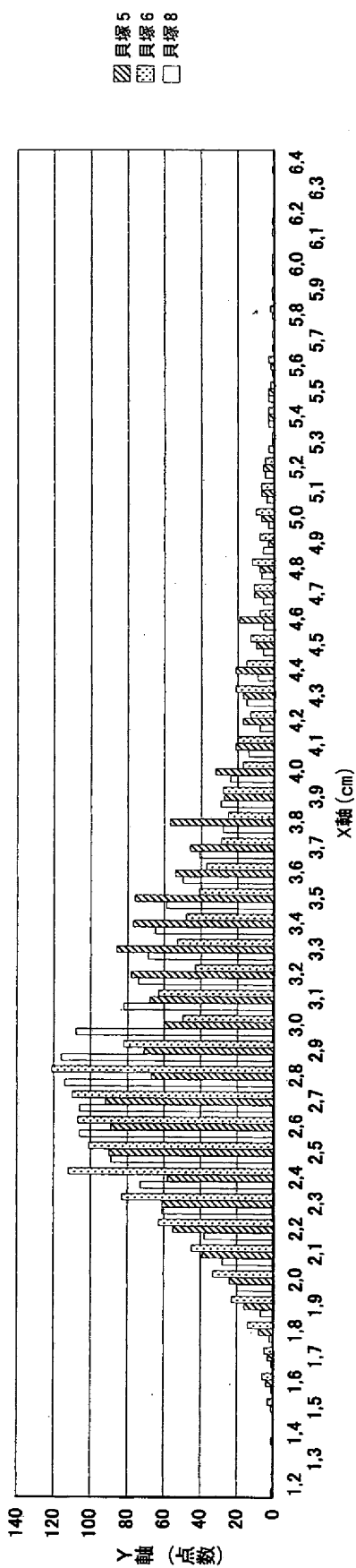
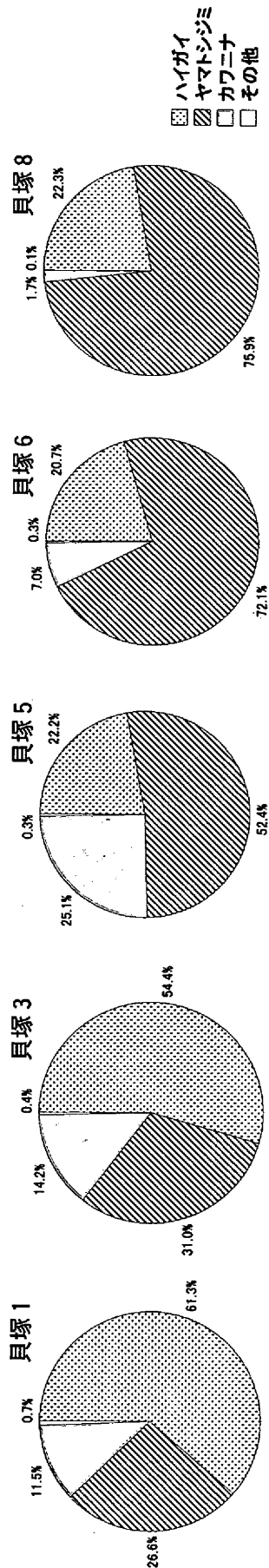
また、操山山塊の東端と芥子山塊の間は、深い入り江を呈して検出旧河道の河口域が形成されていたものと考えられる。このように付近には河口域から内湾奥部の泥湿地が広く形成されていたものと考えられ、貝の採集環境としては十分な場所であったことが言える。

2. 岩間上調査区の貝塚が下調査区と比較していずれもハイガイの比率が高いのは、採集テリトリーの違いによる潮間帯付近での採集の比重が多かったことが考えられる。地理的に見ても当麻の丘陵部を迂回するよりも長谷より操山の鞍部を横切れば前面に泥低干潟が広がり、ハイガイの採取には適した場所であったと考えられる。

一方岩間下調査区の貝塚付近では当麻の丘陵部の南東側には内湾部が深く入り検出旧河道の河口域

第4表 貝類の出土量（個数と％）

貝塚	ハイガイ	比率	ヤマトシジミ	比率	カワニナ類	比率	その他	比率
1区貝塚	78980	61	34242	27	14814	11	850	1
3区貝塚2	43023	54	24484	31	11235	14	282	—
8区貝塚5	19759	22	46650	52	22318	25	300	—
11区貝塚6	19365	21	67536	72	6531	7	247	—
11区貝塚8	17224	22	58588	76	1350	2	45	—



第385図 貝類出土比率 (上)、ハイガイ殻長分布 (中・下)

が広がっていたと考えられる。下調査区の貝塚がヤマトシジミに依存度が高いのは採集テリトリーに旧河道の河口域が大きく関わっており、ヤマトシジミの群棲地の差が表れたものと考えられる。

3. 当該調査では貝塚の採集方法や分析が貝塚個々で若干担当者により異なり、やや統一性をかける面は否めない。また、2大主体貝種の一つのヤマトシジミの分析が未整理のため十分な分析と検討のないままの報告となっている。今後の百間川米田遺跡周辺部の調査の進展にともない、貝塚等の発掘例が増加すれば当該貝塚とのデータの比較や検討により、周辺の環境や集落立地の状況等が徐々に解明されていくものと期待したい。(山磨)

3 道路

道路の構造には3点の特徴がある。1点目は杭材を基盤に深く打ち込むのではなく、割り木を大量に分厚く敷き並べることによって、上部の盛り土を支える工法をとっていること。2点目は第235図で示したように、基盤となる河道斜面や岩盤の起伏を考慮し、割り木の長さや設置位置を決め、割り木頭部の高さを標高0 m付近で水平になるようにしている点。3点目は、2点目とも関連するが、丘陵北西側を、基盤がえぐれた部分に埋め土を多く行って直線的な道路を作っている点である。これらのことから技術者のもと統制のとれた綿密な工事が行われているといえる。埋立遺構や堤防についても同様であるが道路の場合特にその印象が強い。この道路は河道2が東方向から北東方向へ進路を変える攻撃面に位置し、背後はすぐに丘陵の岩盤である。あえてこのような危険個所に道路を作ったのは川沿いに道を通す必要があったからと考えられ、この道路建設の目的が「船曳」であった可能性を指摘したい。また、道路の設置された丘陵の東側および、約250m東にあった単独小丘陵の東から南にかけては、1978・79・81年度調査時に総柱建物群や「官」逆字押印の須恵器杯、「上三宅」墨書須恵器杯などの公的性格を有する遺物が多数検出されており、公の土地や施設が所在したことを物語る。岩間下調査区で出土した「市」の墨書丹塗り土師器2080は、そうしたこの地に官営の市場が開設されていた可能性を示唆しており、物資の集散地としての性格が想定される。奈良時代に河道2は物質の輸送路として重要な位置にあり、今回検出した道路はその水上輸送の一端を担っていたのではないだろうか。(物部)

4 水中遺構調査の成果と課題

橋梁2や埋め立て遺構1に代表される岩間下地区の遺構群は、その大部分が河道内・水中に築造された遺構である。調査は試行錯誤の連続であり、多くの成果を得たとはいえ反省すべき点も多い。今後の同種遺構の調査の参考のため、それを簡単にまとめておく。

今回の調査によって流水の中にも埋め土・盛土による遺構が築造されていることが明らかになった。埋め立て遺構1西斜面、橋梁2東岸埋め土部分斜面ともに10°前後ときわめて緩やかな角度となる。これは流水中に急な斜面を形成することが困難であったためとみられるが、そのために遺構は予想以上に広い範囲をもつことになる。

調査では確実な自然堆積層には見られない粘質土等の異質な土をブロック状に含む土を埋め土と判断した。敷葉を介在させている場合の埋め土はそれを観察せずとも判別できるが、敷葉がない場合や疎らな粗朶を介する場合が問題である。陸上の盛土、たとえば古墳のようにその存在が予期できたり堅さが異なるといった手がかりをもたずに堆積土中に所在しており、流水による堆積層を間に挟む場

合も少なくない。今回の調査でも橋梁2上層基礎施設埋め土のように端部を掘ってしまったところがあるが、河道等の調査では常に細かく掘ることはできず、掘削断面に注意し認識した段階で残った断面から規模を復元していくしかないだろう。なお、筆者はこの調査の後、岡山市北方長田遺跡において同種の遺構を調査する機会を得たが、そこでは全くの砂層や礫層も埋め土に用いられており、上記の特徴のない埋め土も考慮する必要があることが明らかになった。

これらの遺構の構築に関しては、埋め立て遺構1下部のように石材が水中に露出する場合がある。これは水深が深かったり流速が速い場合の構築手法であろう。一方、浅い場合は石材も埋め土中に用いられ、必ずしも露出しない場合がある。また、粗朶や敷葉は必ず埋め土を受けており、それが露出する場合はない。発掘において石材や木材が半ばのぞいた場合はその全形を出していくのが常である。しかしながら、それが埋め土の内部構造であるなら、墳丘調査よりも先に石室構造の調査を行うに等しく、最も重要な遺構形状の把握が場合によっては不可能となることに十分留意すべきと考える。

その他、自明のことではあるが、平野部の河川において礫・石材が集中して出土した場合は、まず人為によるもの一遺構と考えるべきである。

5. 古代後半の治水遺構群

埋め立て遺構の概要においても述べたが、河道が放射状に分岐をはじめる岩間下調査区では堤防・埋め立て遺構1・同2・護岸の4基の構造物を検出した。いずれも河道にかかわる遺構である。埋め立て遺構2と護岸は遺物が少ないものの、築造年代はいずれも10世紀後半とみて支障なく、これらは一体となって機能する施設と考えられる。

埋め立て遺構1によって、本流であったと推定される河道3-1の切断、分流・河道3-2・3の埋め立てがなされることが判明しており、その東側に設けられた埋め立て遺構2も同じ軸線を取り、やはり河道3-1の埋め立てを行っていると思われる。東端の護岸は検出範囲が短く河道との関係は明確でないが、河道南岸に直交して北西にのびており、埋め立て遺構1・2に類似した施設の端部と考える。

これら3基の遺構は河道3-1の切断を主目的とする施設と推定され、埋め立て遺構1西斜面によって新たに河道5の東岸が形成されることになる。一方、堤防は河道4の切断と河道3北岸の保護を目的として築かれたと考えてよいだろう。以上の4基の遺構によって放射状に分岐し、北東への流れが主流であった河道群は丘陵先端で北へ曲げられた河道5の1本となる。

いずれも多量の資材を用いた大構築物であり、大量の労働力を要したであろうことは想像に難くない。問題はこの治水工事がなにを企図したかであるが、調査区北東外側に関する情報が皆無である。あえて推定するならば、河川を統合することによってそれぞれの分流にそって形成されていたであろう低位部や湿地の排水が可能になることが大きいのではなかろうか。本遺跡付近のような低い沖積部では水田開発にあたっては用水もさることながら排水が重要であった可能性が強い。さらには河道を離すことによって、海水の遡上・塩害が広域に及ぶことを防止した可能性もある。

可能性の指摘にとどめざるをえないが、これらの遺構群築造の目的は墾田にあったと考える。

6. 橋梁

中世の橋梁1と2は東西に500mの距離をもつ。さらに、橋梁2の北東320mに所在する米田遺跡(県報告101)においても橋梁遺構が検出されている(以下橋梁4と呼ぶ)。橋梁1は14世紀とやや年

代が下がるようであるが、他は鎌倉時代（13世紀）の築造であり、同じ河川、河道6を渡るものである。河川が貫流する沖積平野では水上交通の利便性を考えがちであるが、東西800mの範囲に3本の橋が所在することは、少なくともこの時期には、障害となる河川を越えるための橋が必要とされるまでに陸上交通が発達していたことを示している。

1地点における橋脚本数は改修期間・存続期間を示すと推定されるが、橋梁1が7～4（1地点のみ13）、2が13～3、4が2であり、橋梁4、1、2の順に廃絶していった可能性が強い。出土遺物からも橋梁2の存続期間が最も長いことが判明しているが、同じ鎌倉時代でも橋梁2は橋梁4に見られない石積み橋台が設けられており、16世紀には大規模な改修がなされるなど、他よりも重要な橋であったことをうかがわせる。江戸時代前期とみられる上道郡絵図には東の西大寺方面から操山丘陵東端に至り、橋梁2の位置を経て近世山陽道に至る道が示されており、おそらくこの経路は鎌倉時代までさかのぼるのであろう。なお、同図には操山丘陵東端で分岐し丘陵鞍部を北西に越える道も示されており、この道がかつては橋梁1を通過していたとみてよい。江戸時代の道は橋梁1の南側から少し西に行き、川の西岸を上っており、中世のいずれかの段階で川を渡る経路から変化したと考えられる。

橋脚の規模は橋梁1が幅240、桁行き320cm、4は一部が検出されたのみであるので桁行きは不明、幅295cmである。2は当初が幅320、桁行き450cmで、後に220、400cmに変わっており、橋梁2が最も大きいようである。

これらの橋梁のうち、最も多くの情報が得られたのは橋梁2であり、ここで簡単にその変遷を整理しておく。築造は13世紀前半で、橋脚と若干の埋め立て作業を伴う（Ⅰ期）。それからさほど時間をおかない13世紀中葉に、河道の広い範囲に埋め土を入れ、西岸には石積みの橋台が設けられる（Ⅱ期）。14～15世紀には大きな改修はない。橋脚の改修は継続されたとみられる（Ⅲ期）。16世紀前半ないし中葉に大規模な改修がなされ、東西に橋台を配しその間を埋め土でつなぎ、巨岩を礎石とする橋梁に変化する。これが17世紀まで用いられる（Ⅳ期）。その後、江戸時代には橋梁3が設けられる（Ⅴ期）。河道はさらに縮小しており、それにむかって突出するように設けられた石列が橋台であるとするなら小規模な橋になり（Ⅵ期）、この後河道の消滅とともに橋がなくなるという長期にわたる変遷を追うことができる。

江戸時代以前の長期にわたる橋の維持・改修の主体については手がかりがないが、言われるようにそれが寺院・僧侶によるものであるとするなら、操山北麓に所在する古刹・最明寺や長楽寺、あるいはそれらの前身となった寺院がかかわっていた可能性を考えてよいかもしれない。河道出土の東大寺瓦が象徴的ではあるが、それ以外にも百間川今谷遺跡～百間川米田遺跡では中世の瓦片の出土は多く、該期に寺院が所在したことを示している。なお、植物遺体の分析からⅣ期の改修工事が秋になされたことが明らかになっている。

出土遺物のなかで注目されるのは卒塔婆や柿経など仏教関係遺物の多さである。これらのなかには10世紀後半に位置づけられるものがあり、橋の築造以前から河道が集落領域の縁辺と観念されていたことをうかがわせる。橋の築造以後の遺物も大きくは同様に評価しうるが、橋梁4でも橋に近接して卒塔婆が出土しており、橋が村の縁辺を象徴するようになっていった可能性を考えてもよいのではないだろうか。一方、Ⅳ期の橋梁基礎施設上から出土した銅銭群は橋上からの祭祀と考えるとよい。同様の例は瀬田唐橋遺跡においても確認されているが、そこでは奈良時代から続くのに対し、本遺跡では16世紀に至ってそれが始まっており、この習俗が遅れて伝来したようである。（宇垣）

第2節 遺物について

ここでは、岩間調査区出土の遺物を中心に概観したい。その大半は河道から出土したもので、所属地点を特定しがたいものが多いが、様々な性格を有する遺物が検出されている。概して縄文・弥生・古墳時代の土器は摩滅した土器が多く、比較的遠方から流下したものを含んでいると考えられるが、古代以降の土器は摩滅が少なく、近隣にその所属が求められる。奈良時代で公的性格を有するものとして丹塗り土師器、石帯（巡方）S56、稜椀1782・1783、転用硯C74・1718がある。特に注目されるのは「市」と墨書された8世紀中頃の丹塗り土師器杯2080である。「市」は「市場」を指すと考えられ、官営の市場の存在を示唆する貴重な資料である。平安時代で留意されるものに緑釉・灰釉陶器1938～1948、風字硯1784がある。緑釉陶器は京都産・近江産が判別され、東海産・周防産の可能性が指摘された⁽¹⁾。平安時代後半頃から中近世にかけては仏教色の濃い遺物が多く出土している。10世紀後半以前の卒塔婆はW199・208とがあり、前者には「阿弥陀佛」の墨書がある。13世紀前後の白磁壺803には「日乗房」、2092には「圓戒？」と墨書があり、僧坊名あるいは僧名と推定される。中世を中心とした瓦は岩間上・下調査区通じて散見される。東大寺瓦1561～1568は俊乗房重源の『南无阿彌陀佛作善集』に「此外國中諸寺奉修造几廿二所也」とあるように、この地に諸寺約22所のうちの一つがあった可能性を示唆する。また、2071・2072は備前国分寺出土とされる軒平瓦⁽²⁾と同じ位置に同様の範傷状の突線を持つ。僅か2点の出土で何とも言い難いが、この地に想定される寺は当初、官寺的性格を有していたのかもしれない。柿経の時期は16世紀前半頃と考えられる。願主から依頼を受けた僧侶らが写経し、供養を終えた後、橋梁2上から、あるいはその上流から川に流されたものと考えられる。県内では岡山市金山寺五輪塔須弥壇下発見の柿経につき2例目の発見である。埴仏⁽³⁾ C130は奈良女子大校内遺跡⁽⁴⁾出土品に類似例がある。実見できていないので断定できないが同範あるいは踏み返しの可能性があり、8世紀頃奈良方面で製作され、いずれの時期かに米田の地にもたらされたものと考えられる。生業を示す遺物も多い。漁業では弥生時代以降の石錘・土錘の他、12世紀前半以前の鉄製ヤスM155・156（154）や鎌倉時代の梁釜W217がある。ヤスは大形魚類の捕獲に使用されたと推定される。釜は中世に属する出土例は少なく貴重である。紡織具と思われるW277は10世紀後半以前である。窯業関連では窯道具C127・128とあり、岡山市三手向原遺跡⁽⁵⁾土師器焼成窯出土の円柱状窯道具と類似し、周辺で中世土師器生産が行われていたと考えられる。鍛冶関連遺物では岩間上調査区2区中世河道1の限定された範囲からまとまった量の鉄滓と羽口C57が出土している。分析の結果、鍛錬鍛冶滓であり、ごく近い場所に鍛冶工房があったと考えて間違いない。漆の付着した黒色土器椀1937も1点ある。祭祀遺物には人形W187・196・198・207・210、舟形W29・62、刀形W27・290などがある。いずれも時期を限定しがたいが、人形については出土層位からは大半が10世紀後半以前である。遊興的遺物に14世紀前半の賽子W50がある。 (物部)

註 (1) 緑釉陶器については奈良国立博物館の高橋照彦氏に御教示を受けた。記して感謝の意を表します。

(2) 玉井伊三郎「吉備古瓦図譜」1941

(3) 埴仏についてはカリフォルニア大学の白井陽子氏の御教示を得た。また、奈良市埋蔵文化財調査センターが2001年度に調査した平城京右京からも類似品が出土しているとの情報を寄せていただいた。記して感謝の意を表します。

(4) 「奈良女子大校内遺跡」奈良女子大1984

(5) 「三手向原遺跡」岡山市教育委員会 2001

付載1 百間川米田遺跡から出土した橋梁1橋脚の樹種

森林総合研究所 木材特性研究領域 能城 修一

百間川米田遺跡は岡山県岡山市の百間川の流路中にあり、旭川河口の沖積地に位置する。ここでは中世から近世にかけての河道中に見いだされた杭列の杭5点の樹種を報告する。この杭列は流路を横断しており、14世紀以降に作られた橋脚状遺構と考えられている。樹種同定に際しては、杭から直接かみそりを用いて横断面、接線断面、放射断面を切り取り、それをガムクロラル（抱水クロラル50g、アラビアゴム粉末40g、グリセリン20ml、蒸留水50mlの混合物）で封入してプレパラートを作成した。以下には各分類群の簡単な記載を行い、代表的な標本の顕微鏡写真をしめして同定の根拠を示す。

1. ツガ属 *Tsuga* マツ科 図1：1a-1c (OKF-93)

ふつうは垂直・水平樹脂道のいずれをも欠く針葉樹材。ときに垂直方向の傷害樹脂道が年輪に平行に出現する。早材から晩材への移行はやや急で、晩材は幅広く明瞭。放射組織の上下端には放射仮道管が1、2列ある。

2. マツ属複雑管束亜属 *Quercus* subgen. *Cyclobalanopsis* ブナ科図1：2a-2c (OKF-91)

垂直・水平樹脂道をもつ針葉樹材。早材から晩材への移行はやや急で、晩材は量おおく明瞭。樹脂道のエピセリウム細胞は薄壁で大型。分野壁孔は大型の窓状、1分野に普通1個。放射仮道管の水平壁には鋸歯状の突起がある。

3. コナラ属クヌギ節 *Quercus* sect. *Aegilops* ブナ科図1：3a-3c (OKF-95)

直径30 μ mほどの大型でまろい単独管孔が年輪のはじめに1、2列ならび、晩材ではごく小型で薄壁の管孔がおもに放射状に配列する環孔材。早材から晩材への移行はやや急で管孔の直径はすぐ減少する。道管の穿孔は単一。放射組織は小型の単列同性および大型の複合状。

杭の樹種は、マツ属複雑管束亜属およびコナラ属クヌギ節がそれぞれ2点、ツガ属が1点であった。マツ属複雑管束亜属およびコナラ属クヌギ節は、現在の植生から考えてもごく普通にあったと考えられる。ツガ属は分布の中心が中間温帯にあり、遺跡周辺に普通にあるものではないと考えられるが、岡山大学津島地区の平安時代の杭としても1点見いだされており（能城、1992）、周辺の林のなかに散点的にまじる要素であったのであろう。

引用文献：能城修一、1992、岡山大学津島地区から出土した木材化石の樹種。「津島岡大遺跡3—第3次調査—」、169-187、岡山大学埋蔵文化財調査研究センター。

表.百間川米田遺跡から出土した杭の樹種

OKF-	No.	樹種名	製品名	製品備考	地区	時代
OKF-	91	マツ属複雑管束亜属	杭1	橋梁1橋脚	1区	14世紀
OKF-	92	マツ属複雑管束亜属	杭2	橋梁1橋脚	1区	14世紀
OKF-	93	ツガ属	杭3	橋梁1橋脚	1区	14世紀
OKF-	94	コナラ属クヌギ節	杭4	橋梁1橋脚	1区	14世紀
OKF-	95	コナラ属クヌギ節	杭5	橋梁1橋脚	1区	14世紀

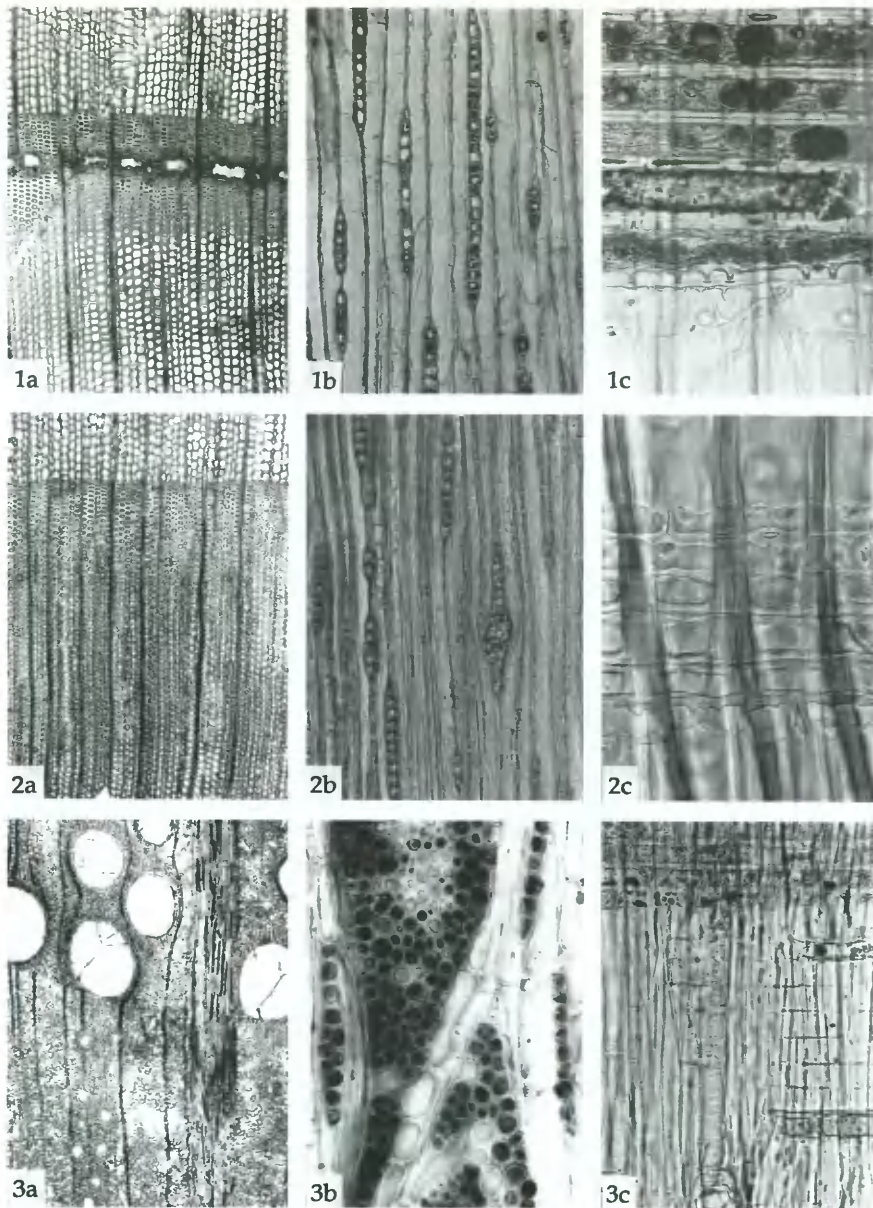


図1. 百間川米田遺跡から出土した杭の顕微鏡写真

1a - 1c: ツガ属 (OKF - 93), 2a - 2c: マツ属複維管束亜属 (OKF - 91), 3a - 3c: コナラ属クヌギ節 (OKF - 95). a: 横断面×40, b: 接線断面×100, c: 放射断面×400 (1c, 2c), ×200 (3c).

付載2 百間川米田遺跡出土動物遺存体の分析

岡山理科大学理学部 生物化学科 富岡 直人

1 分析資料

岡山県岡山市百間川米田遺跡は、旭川とその分流の形成した低平な沖積地に所在する。岡山県古代吉備文化財センターによって調査・発掘された地点から中・近世に属する河道、溝、土壌、貝層、井戸が検出され、それに伴って約450点の動物遺存体が出土した。本報告は、この資料群について実施した同定・数値分析・齢査定分析・形成過程分析などの結果を記すものである。

多くの資料は低湿地性の埋存環境に影響され茶褐色に変化し、一部はビビアナイト（藍鉄鋼（Vivianite:Fe₃P₂O₈・8H₂O））を析出し脆弱化している。

2 出土動物遺存体の特徴

米田遺跡出土動物遺存体資料を分類・同定し、個体数算定を行うとともに、常法によって計測し、実体顕微鏡で観察し、解体痕跡の分析、死亡年齢の推定を実施した。

第1表 百間川米田遺跡出土動物遺存体種名表
List of the animal remains from Hyakkengawa Yoneda site

軟体動物門	Mollusca	ニワトリ	<i>Gallus gallus domesticus</i> Brisson
腹足綱	Gastropoda	コウノトリ目	Ciconiiformes
節足動物門	Arthropoda	サギ科	Ardeidae
甲殻綱	Crustacea	アオサギ	<i>Ardea cinerea jouyi</i> Clark
短尾亜目(カニ亜目)	Brachyura	哺乳綱	Mammalia
脊椎動物門	Vertebrata	ウシ目(偶蹄目)	Artiodactyla
軟骨魚綱	Chondrichthyes	ウシ科	Bovidae
板鰓亜綱	Elasmobranchii	ウシ	<i>Bos taurus domesticus</i> Gmelin
エイ目	Rajiformes	シカ科	Cervidae
硬骨魚綱	Osteichthyes	ニホンジカ	<i>Cervus nippon</i> Temminck
ナマズ属	Siluriformes	イノシシ科	Suidae
ナマズ科	Siluridae	イノシシ類	<i>Sus scrofa</i> subsp. indet.
ナマズ	<i>Silurus asotus</i> Linnaeus	ウマ目	Perissodactyla
スズキ目	Perciformes	ウマ科	Equidae
タイ科	Sparidae	ウマ	<i>Equus caballus</i> Linnaeus
マダイ	<i>Pagrus major</i> (Temminck et Schlegel)	ネコ目(食肉目)	Carnivora
ウナギ目	Anguilliformes	イヌ科	Canidae
ウナギ	<i>Anguilla japonica</i> Temminck et Schlegel	イヌ	<i>Canis familiaris</i> Temminck
爬虫綱	Reptilia	ネコ科	Felidae
カメ目	Testudinata	イエネコ	<i>Felis catus</i> Linnaeus
スッポン科	Trionychidae	サル目(霊長目)	Primates
スッポン	<i>Trionyx sinensis japonica</i> Wiegmann	ヒト科	Hominidae
ウミガメ科	Cheloniidae gen. et sp. indet.	ヒト	<i>Homo sapiens sapiens</i>
鳥綱	Aves	ウサギ目(兎目)	Lagomorpha
キジ目	Galliformes	ウサギ科	Leporidae
キジ科	Phasianidae	ノウサギ	<i>Lepus brachyurus</i> Temminck et Schlegel
キジ属	<i>Phasianidus</i> sp. indet.		

米田遺跡からは極めて多くの動物遺存体が出土した。検出された資料は、古代吉備文化財センターにおいて選別され、岡山理科大学に搬入された。分析に供された資料は、脊椎動物門 (Vertebrata) が

主であった。これらのうち綱目科属種の分類が明らかになったものについて、標準和名と学名を第1表に掲げる。

送付された資料の番号は件数に従ってつけられており、1件中複数個体が含まれた場合は補助番を付して整理した。出土資料の属性の詳細（出土地区、帰属層位・遺構、所属時期、部分、部位、破損、風化、成長度、重量、計測値、色調）を第3～16表に示す。

破損については、第2表に掲げる属性基準を設定し分類した。

第2表 破損分類基準（アンダーラインが付された部分が分類名）

規則性の高い創傷：ヒトによる加工の可能性		
<u>Aタイプ</u> 切創（対象を完全に切断している切創:Cut mark）		a 溝面が平滑 切創・切削痕跡： cut or scrape mark
<u>Bタイプ</u> 切創（5 mm 以上の深さ）	<u>1</u> 線状に伸びた痕跡	b 溝片面が破断 打撃叩切痕跡： chop or huck mark
<u>Cタイプ</u> 切創（1～5 mm の深さ）	<u>2</u> 刺突状に止まった痕跡	c 断面に多数の平行 線状痕跡 鋸引痕跡:saw mark
<u>Dタイプ</u> 切創（1 mm 未満の深さ）	<u>3</u> 水平様に削いだ痕跡	
規則性の低い創傷：動物による損壊の可能性		
局部的かつ連続的に孔を生じる → イヌ等食肉目の噛痕 → イヌ噛痕 (米田遺跡の場合は大きさからイヌと考えられる) 二条の溝が一对になり、局所的に損壊される → ゲッコウ目の噛痕 → ネズミ噛痕 (米田遺跡の場合は大きさからネズミ類と考えられる)		

腹足綱

Gastropoda

貝塚8（鎌倉時代前半）よりスガイの可能性の高い腹足綱の石灰質の蓋（98-32-1）が検出された。火を受け黒色に変色している。海水に生息する腹足綱であり、食用等として搬入されたものと考えられる。

甲殻綱

Crustacea

短尾亜目（カニ亜目） Brachyura

貝塚6（鎌倉時代前半）より可動指（98-33-4）が検出された。科以下の分類は困難であった。

軟骨魚綱

Chondrichthyes

板鰓亜綱

Elasmobranchii

板鰓亜綱の椎骨が貝塚8（鎌倉時代前半）、貝塚6（鎌倉時代前半）、貝塚1D区より出土した（98-32-11, 98-33-12, 96-49）。

エイ目

Rajiformes

貝塚3下層（中世：96-75）からエイ目の上顎歯板が出土した。マダラトビエイに似るが、科以下の特定はできなかった。

硬骨魚綱	Osteichthyes
ナマズ属	Siluriformes
ナマズ科	Siluridae
ナマズ	<i>Silurus asotus Linnaeus</i>

貝塚1B区中世の層より左胸鰭棘(96-44)が出土した。現生標本と比較すると全長は50cm程度の個体になると推定される。

スズキ目	Perciformes
------	-------------

科以下の同定ができなかったスズキ目の可能性の高い資料が26点検出された。確実なスズキ目資料としては1区河道東半の中世に属する貝層から左前鰓蓋骨が出土した。

貝塚6・8(鎌倉時代前半)からスズキ目の可能性のあるウロコが24点検出された。

タイ科	Sparidae
マダイ	<i>Pagrus major</i> (Temminck et Schlegel)

貝塚3下層(中世)から前頭骨(96-71)が出土した。風化が進行し、加工や破損は不明であった。

ウナギ目	Anguilliformes
ウナギ	<i>Anguilla Japonica</i> Temminck Schlegel

貝塚8の鎌倉時代前半の層からウナギの腹椎(98-32-13)が検出された。加工や破損は不明であった。

爬虫綱	Reptilia
カメ目	Testudinata
スッポン科	Trionychidae
スッポン	<i>Trionyx sinensis japonica</i> Wiegmann

多くの資料が検出された。出土資料の詳細な属性は第3～14表を参考にして頂きたい。

中世に属するものとして、溝32(中世:98-3-47)、貝塚4(16世紀:98-16-10)、貝塚6(鎌倉時代前半:98-33-2)、貝塚7(鎌倉時代前半:98-34-10)、および河道(96-83, 101)、貝塚1・2・3出土資料(96-52, 65, 67)、中～近世に属する資料として土壙330資料が検出された。

切創が不明な資料の中でも特に河道等から出土した資料の中には、保存が極めて良好な資料が含まれる(96-27:第A1図版3)。この資料は、背甲骨板や腹甲骨板、頭蓋や椎骨のみならずほとんどの四肢骨と頭蓋側頭部の耳石さえ完全な形で残っており、解体処理されたものとは考えにくい状況で検出され、自然に河道の埋土に入り込んだ個体である可能性がある。

一方、それ以外の資料の一部である甲羅や烏口骨の内面側に比較的軽微な切創が見られたことから、刀子や包丁様の刃器で解体され、食用に供されたものと考えられ、中世のスッポンの解体処理方法を伝える資料として重要性が指摘できる。

ウミガメ科	Cheloniidae gen. et sp. indet.
-------	--------------------------------

貝塚3の中世の層より背甲骨板が3点(96-69, 80, 81)、縁骨板が1点(96-74)検出されている。

岡山市内では京橋に近い天瀬遺跡（近世）より本資料とほぼ同じ程度の大きさの資料が検出されているが、米田資料の方がより古い時期の資料として注目される。食用・薬用や鼈甲材料の素材としてもたらされたと考えられる。

背甲骨板（第2肋骨板）には外表面から与えられたと考えられる刺突痕跡が残されている（第A1図版1-2）。この痕跡には骨増殖が見られず、このウミガメ科の死の直前か死後に残されたものと考えられる。背甲骨板（96-69）の表面にはやや弱い加工痕跡（D1aタイプ）がみられ、さらに断面の一面には鋸等の刃器による切断痕跡を伴う丁寧な面取りの破損（Acタイプ）が見られる（第A1図版2-2）。

鳥綱	Aves
キジ目	Galliformes
キジ科	Phasianidae
キジ属	<i>Phasianidus</i> sp. indet
ニワトリ	<i>Gallus gallus domesticus</i> Brisson

貝塚1D区西下り中世の層より右脛骨（96-31）、貝塚2の中世の層より胸骨（96-61）、貝塚3中世の層より中足骨（96-68）、3区中世河道下層より胸骨（96-85①）、3区河道下層の中世の層より複合仙骨（96-86）、左脛骨（96-87）、右橈骨（96-88）、頭蓋骨（96-100）が出土した。このうち複合仙骨（96-86）には内臓切除の際に残された切創がみられ、食用に解体されたものと考えられる。

コウノトリ目	Ciconiiformes
サギ科	Ardeidae

属種が特定できなかったサギ科資料が検出された。2区中央トレンチ北の中世の層より左右尺骨（96-32）、B4C5区溝320より右上腕骨（96-10）が出土した。

アオサギ	<i>Ardea cinerea jouyi</i> Clark
------	----------------------------------

B4C5区溝320の中近世の層より、大型のサギ科であるアオサギの左右中足骨骨幹部（96-7①②）が出土した。

哺乳綱	Mammalia
-----	----------

資料のうち、目以下の同定を実施したものの内容を以下に掲げる。

ウシ目（偶蹄目）	Artiodactyla
ウシ科	Cavicornia
ウシ	<i>Bos taurus domesticus</i> Gmelin

米田遺跡からは数多くのウシが検出された。これらはいわゆる在来和牛の特徴を持つ小型のウシであった。出土量が多いので第3～14表を参考にして頂きたい。

以下に動物遺存体集中98-39として把握されたウシ遺存体の所見の詳細を記す。

【動物遺存体集中98 - 39資料】（河道 6 出土ウシ遺存体）

河道より検出された動物遺存体集中98 - 39のウシ遺存体は、頭部を含めほぼ全身を残す資料であり、時期が明確であること、保存が良好であることとあわせて日本の中世の在来ウシを研究する上で極めて貴重な資料である。

体躯は上腕骨、中手骨を除きほとんどの部位が出土し、多くが解剖学的位置に近い状態で一部は交連し検出された（P. 335：第1図）。また、頸木であった可能性のある木材も付近から検出されている。以上から、一部の骨格が交連した状態の個体が、やや傾いた河道の面に主として仰向けを呈するように埋存したことを示している。富岡と沖田絵麻が現場に立ち会って確認した時点で、上肢と左下顎骨（下顎体・枝）は失われていたことが判明し、調査員からは既に発掘された資料に混在する可能性が指摘されたが、整理の結果適合する骨格は発見できなかった。いずれにせよ、出土状況より上肢は埋存時の位置が一括して検出された他の部位よりも高い位置にあったと考えられる。この遺存体が埋存した時点で、河道が流れていたのか、あるいは干出していたのかは不明であるが、保存状況や周囲の木質遺存体の出土状況から、一部解体された個体が、ある程度体躯のまとまりを復された状態で廃棄され、比較的早い時点で埋没し、一部は原位置を移動しているものの良好な一括性を保ち埋存したものと考えられる。

頭蓋は頭蓋底を上にして出土した。この頭蓋は、堆積後の土圧によって側頭部が歪み、側頭骨・後頭骨・上顎骨が破損していた。両角突起は損壊し失われていた。特に左角突起は、北東に近接して出土した礫によって破壊された可能性が高い。礫の上面レベルはこの頭蓋とほぼ同一で、下部は土壌に沈み込むような状態であったことから、激しい勢いで投げ落とされ、頭蓋の側に着地した可能性がある。さらにこの礫上には肋骨が乗った状態で検出されており、体躯が腐乱や破壊によって動いたことが明らかである。

検出された頭蓋は、付近の土壌を台座様に残して発掘され、周囲の土壌の固まりごとアクリル樹脂バインダー B - 17で固められ、台座基部を切ることで取り上げられた。その後土壌ごと富岡研究室に運ばれ、研究室内でクリーニングを実施した。

鼻孔・頭蓋内部・眼窩には細粒の粘土が詰まっており、骨格の周囲で小礫の混入する土壌とは含有物が明らかに異なっていたものの、細粒の土壌成分は極めて類似していた。このことから、頭蓋の内部に供給された土壌は、より外側の小礫混じりの土壌に由来するものの、極めて長時間をかけて、腐朽した骨格の内部に浸透していったものであろう。本来咽喉に存在するはずの茎状舌骨は、後鼻孔に刺さるような状態で検出された。土圧に伴い頭蓋が歪むのみならず、このような骨格が本来の解剖学的位置よりずれ、移動したのであろう。

この頭蓋は歪みを補正し、形状を回復する措置を行った。ただし、完全に復旧するには現状の歪んだ骨格に過剰な圧力を加えざるを得ず、出土状況を著しく改変してしまうことから、旧状を限定的に推定できる状態まで復旧したところで、止めた。そのため、頭頂骨、側頭骨には歪みが残されている。不足部分には一部合成樹脂とグラスファイバーの補充を実施した。

左右臼歯は咬合がやや不良で、左右第3後臼歯のmetastyleは突出し、特に右側の突出が著しい。このような咬合の不良は中近世のウシ遺存体に広くみられる特徴である。

本個体の年齢は、上顎歯の萌出状況から2.5歳以上、下顎歯の萌出状況より3.5歳以上、大腿骨遠位端と脛骨近位端の化骨化状況から3.5～4歳以上と推定される。以下のように西中川（1989）を参考に体

節骨 (98 - 3 - 22)、上顎歯牙 (98 - 10 - 10, 18, 12, 13, 15, 16, 17) 下顎骨と歯牙 (98 - 10 - 3, 22, 7, 23, 6, 20, 5) 右脛骨 (98 - 10 - 49)、頸椎 (98 - 10 - 89, 90)、尺骨 (98 - 10 - 50 - 2)、肋骨 (98 - 10 - 76)、右大腿骨 (98 - 10 - 51, 80, 81, 93)、中節骨 (98 - 10 - 92)、右中足骨 (98 - 10 - 54)、左橈骨 (98 - 10 - 50 - 1)、右橈骨 (98 - 10 - 52)、2区河道より臼歯 (96 - 34)、切歯 (96 - 40)、肩甲骨 (96 - 37)、貝塚2より右中足骨 (96 - 62)、貝塚3中層より左脛骨 (96 - 72)、河道より中足骨 (96 - 107)、左下顎骨 (96 - 113)、臼歯 (96 - 120, 126)、右脛骨 (96 - 129) が出土した。これらの土壌ではウシに並んで出土量が多く、選択的に廃棄された可能性が高い。

中～近世に属する資料としては、B4C5区溝320より左中足骨 (96 - 10)、溝320や溝323より臼歯 (96 - 11, 12, 15, 17) が出土した。

これらのウマ遺存体は、解体処理の切創が残されているものもあり、食用や皮革加工用として利用された可能性や殺馬儀礼が行われた可能性が考えられる。

ネコ目 (食肉目) Carnivora

イヌ科 Canidae

イヌ *Canis familiaris* Temminck

日本全国の中・近世遺跡から多く出土する中型の典型的なイヌであった。

土壌7・溝32 (中世) より頭蓋 (96 - 3 - 1, 98 - 10 - 1, 98 - 10 - 102) が出土し、中世の溝32より右寛骨 (96 - 29)、貝塚1D区の中世の側溝より左肋骨 (96 - 43)、貝塚1C区の中世の層より第1頸椎 (96 - 47)、2区河道貝層の中世の層より左上顎骨 (96 - 51)、貝塚3下層より右上腕骨 (96 - 70)、左大腿骨 (96 - 76)、右上腕骨 (96 - 77)、B4C5区溝321の (中～近世) より仙椎 (96 - 1) と右寛骨 (96 - 9)、1区河道の中世の層より左大腿骨 (96 - 36)、3区河道下層より左橈骨 (96 - 78)、3区河道上層より左肋骨 (96 - 79)、3区河道より右脛骨 (96 - 95, 97)、左第3中足骨 (96 - 94)、左肩甲骨 (96 - 96)、左肋骨 (96 - 99)、1区河道上層より右下顎骨 (96 - 111) が出土した。

土壌7・溝32より頭蓋2点が検出されているが、それに比して遺構中からの体躯の骨格が極めて少ない。意図的に頭蓋骨を廃棄した可能性も考えられる。特に興味深い資料は、頭蓋 (98 - 10 - 1, 98 - 10 - 102: 第A1図版5 - 2a, 6 - 2b) の右上顎骨と頬骨側頭突起には骨増殖がみられる。原因は明確ではないが、陥没骨折等の原因も考えられ、丁寧に扱われなかった個体である可能性がある。

ネコ科 Felidae

イエネコ *Felis catus* Linnaeus

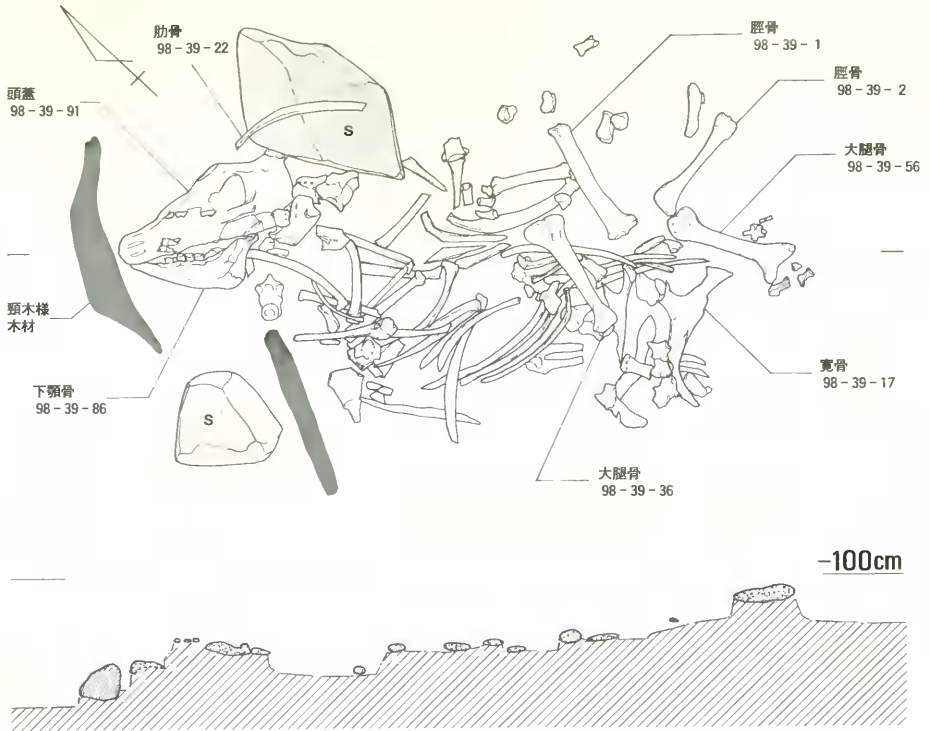
2区河道の中世の層より頭蓋骨 (96 - 39)、右脛骨 (96 - 35)、3区河道の中世に属する下層より右上腕骨 (96 - 93)、1区河道底部より全身骨格 (96 - 12, 123①⑦⑧⑩) が出土した。いずれの遺存体にも明確な加工痕跡は見られなかったが、右上腕骨 (96 - 93) にはネズミの噛痕が見られた。

ウサギ目 (兎目) Lagomorpha

ウサギ科 Leporidae

ノウサギ *Lepus brachyurus* Temminck et Schelgel

貝塚3の中世の層より右上腕骨 (96 - 58) が出土した。



第1図 動物遺存体集中98-39
平面図 (1/15)



第2図 動物遺存体集中98-39
検出状況 (南西から)



謝辞

岡山県古代吉備文化財センターの各位には資料の提供とともに様々な御教示御援助を頂いた。また、分析と資料抽出にあたっては、岡山理科大学大学院生(現株パリノサーヴェイ)沖田絵麻さん、同大学学生宮本葵さん、藤原圭子さん、塩谷勇一郎君、太田謙君に御助力頂いた。さらに、東北大学文学部考古学研究室須藤隆先生、奈良国立文化財研究所松井章先生、国立歴史民俗博物館西本豊弘先生、岡山理科大学総合情報学部川中健二先生に比較標本の提供と御助言、御教示を頂いた。記して感謝の意を表します。

参考文献

- 阿部 永他 1994 『日本の哺乳類』(東海大学出版局)
- 阿部宗明 1987 『原色魚類大図鑑』(北隆館)
- 今泉吉典、岡田弥一郎 1983 『学研生物図鑑 動物』(学研)
- 内田 亨 1979 『新編日本動物図鑑』(北隆館)
- 内田 亨他 1972 『谷津・内田 動物分類名辞典』(中山書店)
- 内田 亨 1979 『新編日本動物図鑑』(北隆館)
- 大妻司紀之 1980 「遺跡出土ニホンジカの下顎骨による性別・年齢・死亡季節査定法」『考古学と自然科学』13, pp.51-74
- 大妻司紀之 1983 「シカ」『縄文文化の研究2 生業』pp.122-135
- 大妻司紀之 1984 「ニホンジカの比較骨学および地理的時代的変異」『古文化財の自然科学的研究』pp.555-558
- 岡田 要(校閲) 今泉吉典(著) 1960 『原色日本哺乳類図鑑』(保育社)
- 岡田 要 内田清之助 内田 亨 1965 『新日本動物図鑑』下(北隆館)
- 金子浩昌 1984 『貝塚の獣骨の知識 人と動物とのかかわり』考古学シリーズ⑧(東京美術)
- 金子浩昌 1995 『津寺遺跡出土の動物遺体』『津寺遺跡2 山陽自動車道建設に伴う発掘調査』岡山県埋蔵文化財発掘調査報告98: pp.597-604
- 金子浩昌 1996 『津寺遺跡中層調査区出土のウマ遺骸』『津寺遺跡3 山陽自動車道建設に伴う発掘調査12』岡山県埋蔵文化財発掘調査報告104: pp.282-285
- 蒲原稔治 1966 『標準原色図鑑全集 第4巻 魚』(保育社)
- 小池裕子、林 良博 1984 「遺跡出土ニホンイノシシの齢査定について」『古文化財の自然科学的研究』 pp.519-524
- 後藤仁敏、大妻司紀之編 1986 『鹿の比較解剖学』(医師薬出版株式会社)
- 高野伸二 1982 『フィールドガイド日本の野鳥』(日本野鳥の会)
- 富岡直人 1998 『岡山城二の丸跡出土の動物遺存体』『中国電力内山下変電所建設に伴う調査報告 岡山城二の丸跡』pp.136-163
- 富岡直人 2000 『新蔵町3丁目遺跡出土動物遺存体』『新蔵町3丁目遺跡徳島保健所地点』徳島県埋蔵文化財センター調査報告書31: pp.427-438
- 富岡直人 2000 『原尾島・沢田遺跡出土の動物遺存体分析』『原尾島遺跡・沢田遺跡 一般国道2号線藤原交差点他改良に伴う発掘調査一』岡山県埋蔵文化財調査報告153(岡山県教育委員会): pp.55-56
- 富岡直人 2000 『井手天原遺跡出土動物遺存体』『岡谷大溝敷布地、三須今溝遺跡、三須河原遺跡、三須島田遺跡、三須見延遺跡、井手天原遺跡 一国道429号線改良に伴う発掘調査一』岡山県埋蔵文化財発掘調査報告156(岡山県教育委員会): pp.224-237 pp.139-145, 235-237
- 富岡直人 2001 『岡山県天瀬遺跡出土動物遺存体の分析』『岡山県埋蔵文化財調査報告書154、天瀬遺跡・岡山城外堀跡』(岡山県教育委員会): pp.89-121
- 富岡直人 2001 『左古谷遺跡出土動物遺存体』『瀬崎町埋蔵文化財発掘調査1 左古谷遺跡』(岡山県瀬崎町教育委員会): pp.69-74
- 西中川 駿 1989 『古代遺跡出土骨からみたわが国の牛・馬の起源、系統に関する研究一特に日本在来種との比較』(昭和63年文部省科学研究費補助金研究成果報告書)
- 西本豊弘 1993 『弥生時代のブタの形質について』『国立歴史民俗博物館研究報告』50, pp.49-70
- 林 良博 1983 「イノシシ」『縄文文化の研究2 生業』PP.136-147
- 林 壽郎 1968 『標準図鑑全集 動物Ⅰ』(保育社)
- 林 壽郎 1968 『標準図鑑全集 動物Ⅱ』(保育社)
- 林田重幸、山内忠平 1954 「日本石器時代馬について」『日本畜産会報』2(2-4): pp.122-126
- 林田重幸、山内忠平 1957 「馬における骨長より体高の推定法」『鹿児島大学農学部学術報告』6: 146-156
- 林田重幸 1957 「中世日本の馬について」『日本畜産会報』28(5): pp.301-306
- 松井 章 1995 「古代・中世の村落における動物祭祀」『国立歴史民俗博物館研究報告』61, pp.55-71
- 松井 章 1994 「草戸千軒町遺跡第36次調査出土の動物遺存体」『草戸千軒町遺跡発掘調査報告Ⅱ』(広島県): pp.343-364
- Angela von den Driesch 1976 "A Guide to the Measurement of Animal bones from Archaeological Sites." Peabody Museum Bulletin 1, Museum of Archaeology, Harvard University

第3表 出土動物遺存体属性表1

番号	年度	地区	遺構	時期	大分類	小分類	L/R	部位	部分	重量(g)	破損	風化	成長度	計測値(単位:mm)	色調	備考
96-1	94	4B5C	溝321	中~近世	哺乳綱	イヌ	M	仙椎	完形(右側縁一部欠)	5.95	なし	viv	関節f	—	茶褐色	
96-2	94	5C	溝321上層	中~近世	哺乳綱	ウシ	M	仙椎	完形(右側縁一部欠)	68.23	ca(棘突起)Dlaタイプ	viv	関節部uf	—	茶褐色	
96-3	94	5C	溝321上層	中~近世	哺乳綱	ウシ	R	腕節手根骨	完形	9.52	ca(外側)Dlaタイプ	viv	不明	GB:39.98	茶褐色	
96-4	94	5C	溝321上層	中~近世	哺乳綱	ウシ	R	寛骨	腸骨+坐骨	110.23	ca(外側)Dlaタイプ	viv	f	—	茶褐色	5と同一個体96-6と接合
96-5	94	5C	溝321上層	中~近世	哺乳綱	ウシ	R	寛骨	腸骨	49.27	にぶい?sp	viv	f	—	茶褐色	4.6と同一個体
96-6	94	5C	溝321上層	中~近世	哺乳綱	ウシ	L	坐骨	腸骨	51.00	にぶい?sp	viv	f	—	茶褐色	5と同一個体96-4と接合
96-7①	94	4B5C	溝320	中~近世	鳥綱	アオサギ	L	中足骨	骨幹部	2.48	ca(骨幹部)Dlaタイプ	viv	不明	—	茶褐色	5と同一個体96-4と接合
96-7②	94	4B5C	溝320	中~近世	鳥綱	アオサギ	R	中足骨	骨幹部	2.96	不明、イヌ噛痕	viv	不明	—	茶褐色	
96-8	94	4B5C	溝320	中~近世	哺乳綱	ウマ	L	中足骨	完形	198.41	ca(内側位)Dlaタイプ	viv	d,pf	全長240.00 全幅42.05(遠位端)	茶褐色	
96-9	94	4B5C	溝320	中~近世	哺乳綱	イヌ	R	寛骨	完形(腸骨、坐骨一部欠損)	14.05	ca(坐骨)Dlaタイプ	viv	f	—	茶褐色	
96-10	94	4B5C	溝320	中~近世	鳥綱	サギ科	R	上腕骨	近位端+骨幹部	5.34	ca(内側上位)Dlaタイプ、Dlaタイプ	viv	不明	—	茶褐色	
96-11	94	5F	溝320	中~近世	哺乳綱	ウマ	R	上顎第3前臼歯	完形	45.13	ca(歯根)Dlaタイプ	viv	2歳以上小窩独立咬合面平坦化	咬合面最大長24.35 咬合面最大幅23.70	茶褐色	
96-12	94	11Q	溝323	中~近世	哺乳綱	ウマ	L	下顎第3前臼歯	完形	19.87	不明	viv	小窩連結	—	茶褐色	
96-13	94	11Q	溝323	中~近世	哺乳綱	ウシorウマ	L	肩甲骨	骨幹部	21.06	sp	viv	不明	不能	茶褐色	
96-14	94	11Q	溝323	中~近世	哺乳綱	ウシ目	R	肩甲骨	破片	19.91	ca(内側)Dla、D3aタイプ	viv	不明	不能	茶褐色	
96-15	94	11Q	溝323	中~近世	哺乳綱	ウマ	L	下顎第2後臼歯	完形(歯根一部欠損)	28.00	なし?	viv	咬耗開始よりしばらく	残存全長62.50 咬合面最大長25.85 咬合面最大幅14.44	茶褐色	
96-16	94	5D	溝320	中~近世	哺乳綱	ウシ	R	上腕骨	骨幹部+腕節部	270.47	ca(遠位端関節部、骨幹部内側位、外側位)Dlaタイプ	viv	df	Bd:69.48	茶褐色	
96-17	94	5C	土塚330	中~近世	哺乳綱	ウマ	R	下顎第2後臼歯	破片	12.30	なし?	viv	不明	不能	茶褐色	
96-18	94	6C	土塚330	中~近世	哺乳綱	ウシorウマ	L	距骨	骨幹部	19.93	不明	viv	f	—	茶褐色	
96-19	94	6C	溝320層部	中~近世	哺乳綱	ウマ	L	脛骨	完形(近位端一部欠損)	253.46	ca(前位、外側、内側)Dlaタイプ、偽切創あり	viv	d,pf	SD:30.90 遠位端最大幅54.49	茶褐色	
96-20	94	6C	溝320層部	中~近世	哺乳綱	ウシ	L	脛骨	骨幹部+遠位端	229.60	ca(遠位端左外側)Dlbタイプ、ネズミ噛痕	viv	df	SD:39.92 Bd:60.68	茶褐色	
96-21	94	6C	溝320層部	中~近世	哺乳綱	ウシ	L	上腕骨	骨幹部+遠位端	239.27	ca(後位左外側)D3a、(遠位端関節部)B1bタイプ	viv	df	SD:35.10	茶褐色	
96-22	94	8K	井戸314下	中世	哺乳綱	中~大型?	?	椎骨	骨幹部	12.46	なし	viv	不明	—	茶褐色	
96-23	94	5H	溝320-321	中~近世	哺乳綱	ウシ	L	下顎第1後臼歯	完形(歯根一部欠損)	27.81	なし	viv	0.5歳以上咬合面平坦化未了	咬合面最大長29.80 咬合面最大幅12.35 残存長(歯根又か咬合面)45.15	茶褐色	
96-24	94	5H	溝320-321	中~近世	哺乳綱	ウシ	L	基節骨	完形	16.19	caなし(ネズミ噛痕)	viv	f	近位端最大幅30.84	茶褐色	
96-25	94	5H	溝320-321	中~近世	哺乳綱	ウシ	L	中足骨	骨幹部+近位端	89.77	加工痕 ca(骨幹部内側)C3aタイプ、ネズミ噛痕	viv	pf	SD:26.86	茶褐色	
96-26	94	5H	溝320-321	中~近世	哺乳綱	ウシ	L	肋骨	骨幹部+近位端	38.65	ca(外側位)Dlaタイプ	viv	pf	—	茶褐色	
96-27	94	5C	土塚330	中~近世	爬虫綱	スッポン	LR	全身	完形	26.87	なし	viv	幼~若?	背甲骨板長82.58 背甲骨板幅76.35	茶褐色	
96-28	95	2区	東半L字層溝付近貝層まで	中世	哺乳綱	ウシ	R	中手骨	近位	69.61	ca(骨幹部前位)Dlaタイプ、イヌ噛痕	viv	不明	SD:24.92	茶褐色	
96-29	95	2区	貝層B区西側下り貝層面まで	中世	哺乳綱	ニホンジカ	L	中手骨	骨幹部	17.00	不明	viv	d,uf 幼~若	—	茶褐色	
96-30	95	2区	貝層A区西下り	中世	哺乳綱	ウシ	L	下顎第1後臼歯	歯冠部	18.47	なし	viv	小窩独立	咬合面最大長28.37 咬合面最大幅14.42	茶褐色	
96-31	95	2区	貝層D区西下り	中世	鳥綱	ニワトリ	R	脛骨	完形	7.00	不明	viv	d,pf	La:117.00	茶褐色	シャモより小型
96-30①	95	2区	中央トレンチ北半下層	中世	鳥綱	サギ科	L	尺骨	完形	6.00	不明	viv	不明	残存全長160.02	茶褐色	ゴイスギより大型
96-30②	95	2区	中央トレンチ北半下層	中世	鳥綱	サギ科	R	尺骨	完形	6.00	不明	viv	不明	残存全長159.25	茶褐色	ゴイスギより大型
96-33	95	2区	中央南北トレンチ南半上層(砂層)	中世	哺乳綱	ウシ	M	胸椎	完形	34.71	ca(棘突起左外側)Dlaタイプ	viv	d,pf	PL:36.84 BFer:26.87	茶褐色	ゴイスギより大型
96-34	95	2区	西半河道溝口最下	中世	哺乳綱	ウマ	L	上顎第3前臼歯	完形(歯根一部欠損)	27.10	なし	viv	小窩独立	咬合面最大長29.45 咬合面最大幅21.70 最大高(咬合面~歯根又)40.00	茶褐色	
96-35	95	2区	河道中間部(中央より北の東)	中世	哺乳綱	イエネコ	R	脛骨	完形	5.02	ca(骨幹部)Dlaタイプ	viv	p,d,f	全長14.60	茶褐色	
96-36	95	2区	河道中間部(中心層付近砂層まで)	中世	哺乳綱	イヌ	L	大腿骨	完形	23.69	不明	viv	p,d,f	全長154.60 近位端最大幅34.00 遠位端最大幅25.90	茶褐色	
96-37	95	2区	河道中間部	中世	哺乳綱	ウマ	R	肩甲骨	遠位端+骨幹部	224.23	不明(風化により判別困難)	viv	df	GLp:87.54 BG:39.00 SLC:53.78	茶褐色	
96-38	95	2区	南東部砂層までの溝	中世	哺乳綱	ウシ	R	大腿骨	近位端	94.63	不明 sp	viv	df	DC:45.86	茶褐色	
96-39	95	2区	河道中間部(中央より北の東の中(貝層中多い))	中世	哺乳綱	イエネコ	LR	頭蓋骨	完形	21.99	ca(頭頂骨)Dlaタイプ	viv	若齢 pf	後頭窩最大幅12.65 後頭顆最大幅20.60	茶褐色	
96-40	95	2区	河道中間部(溝口中央)	中世	哺乳綱	ウマ	L	切歯	下顎第2切歯	4.24	なし	viv	2歳以上咬合面平坦化	咬合面最大長12.65 咬合面最大幅10.00	茶褐色	
96-41	95	2区	貝層B・C境トレンチ貝層	中世	哺乳綱	ヒト	R	上腕骨	骨幹部+遠位端	89.26	ca(骨幹部後位)Dlaタイプ	viv	df	SD:19.62	茶褐色	
96-40①	95	2区	貝層D区溝溝出土	中世	魚綱	不明	M	鱗棘	完形	0.11	なし	viv	不明	—	茶褐色	
96-40②	95	2区	貝層D区溝溝出土	中世	魚綱	不明	?	鱗棘	完形	0.10	なし	viv	不明	—	茶褐色	
96-43	95	2区	貝層D区溝溝出土	中世	哺乳綱	イヌ	L	肋骨	完形	2.27	ca(骨幹部後位)D3aタイプ	viv	pf	—	茶褐色	
96-44	95	2区	貝層B区	中世	魚綱	ナマズ	L	胸鱗棘	近位端	0.49	なし	viv	不明	全長50cm程度 幅4.23	茶褐色	

第4表 出土動物遺存体属性表2

96-45	95	2区	貝層C区	中世	哺乳綱	中～大型	?	四肢骨	骨幹部	12.09	ca(関節部)Diaタイプ	viv	df	—	茶褐色	
96-46	95	2区	貝層C区	中世	爬虫綱	スッポン	L	背甲骨板	破片	15.00	不明	viv	不明	—	茶褐色	
96-47	95	2区	貝層C区	中世	哺乳綱	イヌ	M	第1頸椎	完形	11.26	不明(風化が激しいため)	viv	f	BFcr:34.90 GB:68.82 GL:30.50 BFcd:28.30	茶褐色	
96-48	95	2区	貝層C区 貝層中	中世	哺乳綱	ウマ	R	桡骨十尺骨	骨幹部 尺骨近位一部欠損	287.00	sp(桡骨近位端)	viv	桡十尺:f	—	茶褐色	
96-49①	95	2区	貝層D区 L字溝内	中世	軟骨魚綱	板鰓亜綱	M	椎骨	椎体	4.99	なし	viv	不明	関節最大横径13.06	茶褐色	
96-49②	95	2区	貝層D区 L字溝内	中世	軟骨魚綱	板鰓亜綱	M	椎骨	椎体	—	なし	viv	不明	関節最大横径16.92	茶褐色	
96-49③	95	2区	貝層D区 L字溝内	中世	軟骨魚綱	板鰓亜綱	M	椎骨	椎体	—	なし	viv	不明	関節最大横径16.76	茶褐色	
96-50	95	2区	河道東半 の西貝層 下部残り	中世	哺乳綱	ニホンジカ	R	角	角幹部	70.21	ca(角幹にAcタイプ)	viv	落角	角冠最大前後長48.65 角冠最大 横幅47.50 角幹(頸部)前後長 39.40 角幹(頸部)最大横幅34.10	茶褐色	
96-51	95	2区	河道東半 の西貝層 下部残り	中世	哺乳綱	イヌ	L	上顎骨	完形	12.50	なし	viv	大臼歯×第1前臼歯○ 大臼歯×第2前臼歯○ 大臼歯×第3前臼歯○ 大臼歯×第4前臼歯○ 大臼歯○第1後臼歯○ 大臼歯○第2後臼歯○	P4歯冠最大長18.24 歯冠最大幅 7.66 M1歯冠最大長11.30 歯 冠最大幅14.95 M2歯冠最大長 6.00 歯冠最大幅3.80	茶褐色	比較的丸い顔面
96-52①	95	2区	河道東半 の貝層下 部残り	中世	爬虫綱	スッポン	R	肩甲骨	完形	2.62	ca(内側)Diaタイプ	viv	若～老	関節面最大幅11.00	茶褐色	
96-52②	95	2区	河道東半 の貝層下 部残り	中世	爬虫綱	スッポン	L	肩甲骨	完形	1.05	ca(内側、外側)Dia タイプ	viv	不明	関節面最大幅8.45	茶褐色	
96-52③	95	2区	河道東半 の貝層下 部残り	中世	爬虫綱	スッポン	L	下腹骨板	完形	3.12	ca(内側)Diaタイプ	viv	不明	—	茶褐色	
96-52④	95	2区	河道東半 の貝層下 部残り	中世	爬虫綱	スッポン	L	第2肋骨板	完形(一部欠損)	2.34	ca(内側)Diaタイプ	viv	不明	最大幅24.68	茶褐色	
96-52⑤	95	2区	河道東半 の貝層下 部残り	中世	爬虫綱	スッポン	R	第2肋骨板	完形	5.07	ca(内側)Diaタイプ?	viv	不明	最大全長66.49 最大幅31.73	茶褐色	
96-52⑥	95	2区	河道東半 の貝層下 部残り	中世	爬虫綱	スッポン	L	第6肋骨板	完形	1.81	ca(内側)Diaタイプ	viv	不明	—	茶褐色	
96-52⑦	95	2区	河道東半 の貝層下 部残り	中世	爬虫綱	スッポン	L	鼻口骨	後位	0.61	ca(内側)Diaタイプ	viv	不明	最大幅22.60	茶褐色	
96-52⑧	95	2区	河道東半 の貝層下 部残り	中世	硬骨魚綱	スズキ目	L	前鰓蓋骨	前位	0.73	なし?	viv	不明	—	茶褐色	
96-53	95	2区	河道東半 (北西)の 全面の粘 土の上	中世	哺乳綱	ウシ	L	下顎第3後 臼歯	完形	27.00	なし	viv	小窩独立、咬合 面未平面化	咬合面最大長37.15 咬合面最大 幅12.85	茶褐色	
96-54	95	2区	東半河道 (西)の全 面砂層北 半	中世	哺乳綱	ウシ	R	下顎第1後 臼歯	歯冠部	21.00	なし	viv	小窩独立、咬合 面未平面化	咬合面最大長27.65 咬合面最大 幅14.30	茶褐色	
96-55	96	3区	中世河道 掘下げ中	中世	哺乳綱	ウマ	R	上顎臼歯	—	47.00	なし	viv	小窩独立、咬合 面未平面化	咬合面最大長27.30 咬合面最大 幅26.55	茶褐色	
96-56	96	3区	河道上層 掘り下げ	中世	哺乳綱	ニホンジカ	L	肋骨	骨幹部	19.00	ca(骨幹部内側、外 側)Diaタイプ	viv	不明	—	茶褐色	
96-57	96	3区	貝塚3周辺	中世	哺乳綱	ウシ	R	桡骨十尺骨	尺骨近位端 一部欠損	209.75	なし	viv	P,df 桡十尺:f	—	茶褐色	
96-58	96	3区	貝塚3周辺	中世	哺乳綱	ノウサギ	R	上腕骨	骨幹部	0.93	不明(風化)	viv	不明	—	茶褐色	
96-59	96	3区	貝塚3より	中世	哺乳綱	ヒト	R	下顎骨	下顎体完形 (関節突起、 歯牙一部欠 損)	72.47	なし(内側に新しい キズあり)	viv	臼歯×第1前臼歯○ 臼歯×第2前臼歯○ 臼歯×第3前臼歯○ 臼歯×第4前臼歯○ 臼歯○第1後臼歯○ 臼歯○第2後臼歯○ 臼歯○第3後臼歯○ 臼歯○第4後臼歯○ 臼歯○第1後臼歯○ 臼歯○第2後臼歯○ 臼歯○第3後臼歯○ 臼歯○第4後臼歯○	左右第1後臼歯最大幅57.45 左 第1後臼歯咬合面最大長10.50 左第1後臼歯最大幅9.70	茶褐色	
96-60	96	3区	貝塚2より	中世	哺乳綱	ウシ	R	脛骨	遠位端+骨幹部	181.83	遠位にca D3aタ イプ(骨幹部内側) 傷あり	viv	df	SD:28.21 Bd:46.91	茶褐色	
96-61	96	3区	貝塚2より	中世	鳥綱	ニワトリ	M	胸骨	前位	2.68	ca(左外側)Diaタイ プ	viv	若～老	—	茶褐色	
96-62	96	3区	貝塚2	中世	哺乳綱	ウマ	R	中足骨	近位端+骨幹部	109.01	ca(骨幹部前位、後 位)D3aタイプ sp(骨幹部)	viv	pf	Bp:43.58	茶褐色	
96-63	96	3区	貝塚2	中世	哺乳綱	ウシ	M	第2頸椎	椎体	39.91	ca(下から上へ前位 関節面)Diaタイプ	viv	f?	関節最大幅42.60 前位外側最 大幅(復元)82.00 LCDe:82.73	茶褐色	
96-64①	96	3区	貝塚2	中世	硬骨魚綱	目不明	L	前上顎骨	骨幹部+前位端	2.35	なし	viv	不明	残存全長56.00	茶褐色	
96-64②	96	3区	貝塚2	中世	鳥綱	目不明	L	中足骨	遠位端+骨幹部	2.00	不明	viv	df	—	茶褐色	
96-65①	96	3区	貝塚2	中世	爬虫綱	スッポン	M	頭蓋骨	完形(尾骨欠損)	9.82	不明(風化)	viv	不明	頭蓋最大幅36.50	茶褐色	
96-65②	96	3区	貝塚2	中世	哺乳綱	中型	?	頭蓋骨	骨幹部破片	5.06	不明(風化)	viv	不明	—	茶褐色	
96-65③	96	3区	貝塚2	中世	鳥綱	目不明	M	複合仙骨	骨幹部	2.56	不明(風化)	viv	不明	—	茶褐色	
96-66	96	3区	貝塚2南北 セクション①	中世	哺乳綱	ウシノウマ	M	椎骨	左上部(前 関節突起、後 関節突起)	17.87	sp?	viv	f	—	茶褐色	
96-67①	96	3区	貝塚3	中世	爬虫綱	スッポン	L	上腕骨	完形	3.43	ca(近位より骨幹 部後位)Diaタイ プ	viv	f?	最大長47.50	茶褐色	
96-67②	96	3区	貝塚3	中世	爬虫綱	スッポン	L	中腹骨板	完形	1.76	ca(内側)Diaタイ プ	viv	不明	最大長52.70 関節面最大長41.58	茶褐色	
96-67③	96	3区	貝塚3	中世	爬虫綱	スッポン	L	鼻口骨	完形	1.69	ca(内側、外側)Dia タイプ	viv	不明	残存全長58.14	茶褐色	
96-67④	96	3区	貝塚3	中世	爬虫綱	スッポン	R	鼻口骨	完形	0.52	ca(内側、外側)Aa タイプ	viv	不明	残存全長35.62	茶褐色	
96-67⑤	96	3区	貝塚3	中世	爬虫綱	スッポン	R	第2肋骨板	完形(一部欠損)	4.36	ca(内側)Diaタイ プ	viv	不明	残存全長60.44	茶褐色	
96-67⑥	96	3区	貝塚3	中世	爬虫綱	スッポン	R	第3肋骨板	完形	3.35	ca(内側)Diaタイ プ	viv	不明	最大全長59.67	茶褐色	
96-67⑦	96	3区	貝塚3	中世	爬虫綱	スッポン	L	第3肋骨板	完形	2.08	ca(内側)Diaタイ プ	viv	不明	最大全長56.08	茶褐色	
96-67⑧	96	3区	貝塚3	中世	爬虫綱	スッポン	L	第2肋骨板	完形	1.53	ca(内側)Diaタイ プ	viv	不明	最大全長47.86	茶褐色	
96-67⑨	96	3区	貝塚3	中世	爬虫綱	スッポン	L	第5肋骨板	完形	3.16	ca(内側)Diaタイ プ	viv	不明	残存全長57.82	茶褐色	
96-67⑩	96	3区	貝塚3	中世	爬虫綱	スッポン	R	第3肋骨板	完形	1.77	ca(内側)Diaタイ プ	viv	不明	—	茶褐色	

第7表 出土動物遺存体属性表5 (土壌7)

番号	出土地区	出土遺構	時期	大分類	小分類	部位	LR	部分	破損	風化	成長度	重量(g)	計測値(mm)	その他計測値(mm)	色調	備考
98-10-1	6区	土壌7	中世	哺乳類	イヌ	頭蓋骨	LR	完形	なし	viv	M1 小窩連結	126.43	C歯槽最大長9.20 歯槽最大幅5.05、P1咬合面最大長5.30・咬合面最大幅3.75、P2咬合面最大長7.40・咬合面最大幅3.60、P3咬合面最大長9.20・咬合面最大幅4.15、P4咬合面最大長11.75・咬合面最大幅12.65、M1咬合面最大長9.95・咬合面最大幅12.65、M2咬合面最大長5.25・咬合面最大幅7.85	後頭顆最大幅33.20	茶褐色	
98-10-102	6区	土壌7	中世	哺乳類	イヌ	頬骨側頭突起	L	完形	なし	viv	f	2.23	—	—	茶褐色	98-10-1と接合
98-10-11	6区	土壌7	中世	哺乳類	ウシ	上顎第1切歯	R	完形(咬合面一部欠損)	なし	viv	1.5才以上咬耗開始	1.83	不能	—	茶褐色	
98-10-43	6区	土壌7	中世	哺乳類	ウシ	上顎第2後臼歯	L	完形	不明	viv	小窩連結(1.5才以上、明)	14.23	M1咬合面最大長21.70・咬合面最大幅21.25	歯冠高12.25	茶褐色	98-10-3と接合
98-10-34	6区	土壌7	中世	哺乳類	ウシ	上顎第2後臼歯	R	完形	なし	viv	小窩連結、平坦化未了(1才以上、明)	25.77	咬合面最大長28.35・咬合面最大幅24.00	—	茶褐色	同一個体98-10-42-10-44
98-10-35	6区	土壌7	中世	哺乳類	ウシ	上顎第2後臼歯	R	完形	なし	viv	小窩連結、平坦化未了(1才以上)	16.64	M2咬合面最大長28.05・咬合面最大幅24.10、M3(10-41)咬合面最大長30.30・咬合面最大幅22.85・横側歯冠高10.85・舌側歯冠高12.95	M2歯冠高11.10・M3歯冠高23.55・M2からM3咬合面長58.15	茶褐色	同一個体98-10-36-10-39-10-41
98-10-21	6区	土壌7	中世	哺乳類	ウシ	上顎第3前臼歯	R	完形	なし	viv	小窩独立、咬合面平坦化未了(2才以上、明)	8.56	咬合面最大長18.50・咬合面最大幅17.35	—	茶褐色	
98-10-41	6区	土壌7	中世	哺乳類	ウシ	上顎第3後臼歯	L	完形	なし	viv	小窩独立、平坦化未了(2才以上)	19.80	咬合面最大長30.55・咬合面最大幅22.55	舌側歯冠高19.55・横側歯冠高23.25	茶褐色	同一個体98-10-35-10-36-10-39
98-10-36	6区	土壌7	中世	哺乳類	ウシ	上顎第3後臼歯	R	完形	なし	viv	小窩独立、平坦化未了(2才以上、明)	24.77	咬合面最大長30.20・咬合面最大幅23.95 舌側歯冠高10.90・横側歯冠高11.40	歯冠高25.70	茶褐色	同一個体98-10-35-10-39-10-41
98-10-42	6区	土壌7	中世	哺乳類	ウシ	上顎第3後臼歯	R	完形	なし	viv	小窩連結、平坦化未了(2才以上、明)	24.99	M1咬合面最大長26.45・咬合面最大幅24.40、M2(10-34)咬合面最大長29.10・咬合面最大幅24.20、M3(10-42)咬合面最大長29.00・咬合面最大幅24.80	M1歯冠高16.70・M2歯冠高20.45・M3歯冠高24.10・M1からM3咬合面長85.85・P4からM3咬合面長102.00・P3からM3咬合面長119.05・M2からM3咬合面長58.40・M1からM2咬合面長57.30	茶褐色	同一個体98-10-34-10-44-10-37-10-38
98-10-37	6区	土壌7	中世	哺乳類	ウシ	上顎第3前臼歯	R	完形	なし	viv	小窩独立、平坦化未了(1.5才以上)	8.15	咬合面最大長17.35・咬合面最大幅15.70	—	茶褐色	同一個体98-10-38-10-44-10-34-10-40
98-10-24	6区	土壌7	中世	哺乳類	ウシ	上顎第4前臼歯(頰側)	R	完形(一部欠損)	なし	viv	咬耗不明(2.5才以上)	3.10	咬合面最大長19.80	—	茶褐色	
98-10-39	6区	土壌7	中世	哺乳類	ウシ	上顎第4前臼歯	L	完形	なし	viv	小窩独立、平坦化未了(2.5才以上、明)	9.16	咬合面最大長11.70・咬合面最大幅19.35	歯根叉から咬合面24.45・歯冠高12.70・P4からM1咬合面長37.90	茶褐色	同一個体98-10-35-10-36-10-41
98-10-38	6区	土壌7	中世	哺乳類	ウシ	上顎第4前臼歯	R	完形	なし	viv	小窩独立、咬合面平坦化未了(2.5才以上、明)	5.60	咬合面最大長16.30・咬合面最大幅18.50	—	茶褐色	同一個体98-10-37-10-34-10-44-10-42
98-10-4	6区	土壌7	中世	哺乳類	ウシ	下顎骨	R	筋突起	なし	viv	不明	15.73	—	—	茶褐色	
98-10-91	6区	土壌7	中世	哺乳類	ウシ	下顎骨	R	切歯部(骨幹部)	不明	viv	不明	27.79	—	—	茶褐色	
98-10-2	6区	土壌7	中世	哺乳類	ウシ	下顎骨	R	下顎骨切歯部十臼歯部 P2 O、P3 X	cm(外側下面)Dia? イア	viv	P2 小窩連結、咬合面平坦化	68.08	歯牙P2咬合面最大長18.25・咬合面最大幅12.35・歯槽最大長16.70・歯槽最大幅11.70	歯冠高14.45	茶褐色	
98-10-25	6区	土壌7	中世	哺乳類	ウシ	下顎第1後臼歯	R	完形(歯冠一部欠損)	なし	viv	小窩連結、咬合面平坦化(0.5才以上、明)	7.41	—	—	茶褐色	
98-10-27	6区	土壌7	中世	哺乳類	ウシ	下顎第1後臼歯	R	完形	なし	viv	小窩連結(0.5才以上、明)	7.68	咬合面最大長21.70・咬合面最大幅13.95	歯冠高14.20	茶褐色	
98-10-26	6区	土壌7	中世	哺乳類	ウシ	下顎第1後臼歯後位	L	後位破片	不明	viv	咬耗不明(0.5才以上)	2.61	—	—	茶褐色	
98-10-8	6区	土壌7	中世	哺乳類	ウシ	下顎第1切歯	L	完形	なし	viv	小窩連結(1.5才以上、明)	1.79	唇側歯冠高11.95 最大高31.75	—	茶褐色	
98-10-33	6区	土壌7	中世	哺乳類	ウシ	下顎第1後臼歯	R	完形	なし	viv	小窩連結、咬合面平坦化(0.5才以上、明)	6.99	M1咬合面最大長21.15・咬合面最大幅15.30	歯冠高9.05	茶褐色	同一個体98-10-31-10-47

第8表 出土動物遺存体属性表6 (土壌7)

98-10-44	6区	土壌7	中世	哺乳類	ウシ	下顎第1後臼歯	R	完形	なし	viv	小窩連結、平坦化未了(0.5才以上)	18.09	咬合面最大長27.15・咬合面最大幅24.50・頰側歯冠高14.45・舌側歯冠高15.35	—	茶褐色	同一個体98-10-34-10-42
98-10-19	6区	土壌7	中世	哺乳類	ウシ	下顎第2後臼歯	L	完形	なし	viv	小窩独立、咬合面平坦化未了(1才以上、明)	12.63	M2咬合面最大長24.35・咬合面最大幅13.55	歯冠高11.85 M2からM3咬合面長60.75	茶褐色	同一個体98-10-45
98-10-9	6区	土壌7	中世	哺乳類	ウシ	下顎第2切歯	R	完形	なし	viv	小窩独立(2.5才以上、明)	2.75	咬合面最大長9.65・咬合面最大幅12.20	最大高40.50・歯冠高18.55	茶褐色	
98-10-32	6区	土壌7	中世	哺乳類	ウシ	下顎第2後臼歯	L	完形	なし	viv	小窩独立、咬合面平坦化未了(1才以上、明)	13.86	咬合面最大長25.50・咬合面最大幅15.35	歯冠高17.80 歯根又から咬合面23.60	茶褐色	
98-10-31	6区	土壌7	中世	哺乳類	ウシ	下顎第2後臼歯	R	完形	なし	viv	小窩独立、咬合面平坦化未了(1才以上、明)	15.16	咬合面最大長25.20・咬合面最大幅14.75	至高45.00・歯根又から咬合面28.15・歯冠高21.05・M1からM3咬合面長83.60・M1からM2咬合面長45.15・M2からM3咬合面長63.3	茶褐色	同一個体98-10-33-10-47
98-10-29	6区	土壌7	中世	哺乳類	ウシ	下顎第2前臼歯	R	完形	なし	viv	小窩連結(2才以上)	1.98	P2咬合面最大長11.20・咬合面最大幅6.95・歯冠最大長12.05・歯冠最大幅9.35	歯冠高15.65	茶褐色	
98-10-45	6区	土壌7	中世	哺乳類	ウシ	下顎第3後臼歯	L	完形	なし	viv	小窩独立、平坦化未了	23.37	咬合面最大長37.20・咬合面最大幅13.00	歯冠高28.90	茶褐色	同一個体98-10-19
98-10-46	6区	土壌7	中世	哺乳類	ウシ	下顎第3後臼歯	R	完形	なし	viv	小窩独立、平坦化未了(2才以上、明)	22.89	咬合面最大長32.90・咬合面最大幅13.40	歯冠高30.50	茶褐色	
98-10-47	6区	土壌7	中世	哺乳類	ウシ	下顎第3後臼歯	R	完形	なし	viv	小窩独立、平坦化未了(2才以上、明)	23.88	M3咬合面最大長38.35・咬合面最大幅13.70	歯冠高33.20	茶褐色	同一個体98-10-31-10-33
98-10-30	6区	土壌7	中世	哺乳類	ウシ	下顎第3前臼歯	L	完形	なし	viv	小窩連結、咬合面平坦化未了(1.5才以上、明)	3.94	咬合面最大長19.85・咬合面最大幅9.75	最大高33.60・歯冠高15.65	茶褐色	
98-10-48	6区	土壌7	中世	哺乳類	ウシ	下顎第3前臼歯	L	歯冠	なし	viv	小窩独立、咬合面平坦化未了(1.5才以上、明)	2.08	P3咬合面最大長17.70	歯冠高14.50	茶褐色	
98-10-28	6区	土壌7	中世	哺乳類	ウシ	下顎第4前臼歯	L	完形	なし	viv	小窩連結、咬合面平坦化未了(2.5才以上)	5.43	咬合面最大長21.75・咬合面最大幅11.70	—	茶褐色	
98-10-14	6区	土壌7	中世	哺乳類	ウシ	上顎第1後臼歯	R	完形	なし	viv	咬耗開始(6カ月程度、明)	33.52	歯冠最大長30.15・歯冠最大幅22.55・歯冠高51.65	—	茶褐色	
98-10-40	6区	土壌7	中世	哺乳類	ウシ	上顎第4前臼歯	L	完形	なし	viv	咬合異常、小窩連結、平坦化未了(2.5才以上、明)	4.04	咬合面残存長21.50・咬合面最大幅14.50	—	茶褐色	咬耗が著しく片べりしている。
98-10-65	6区	土壌7	中世	哺乳類	ウシ	上腕骨	R	骨幹部	ca(骨幹部内側)	viv	不明	92.25	—	—	茶褐色	
98-10-84	6区	土壌7	中世	哺乳類	ウシ	上腕骨	R	骨幹部	なし	viv	puf	29.04	—	—	茶褐色	
98-10-85	6区	土壌7	中世	哺乳類	ウシ	大腿骨	L	近位端(回転子)	不明	viv	if	32.43	—	—	茶褐色	
98-10-87	6区	土壌7	中世	哺乳類	ウシ	中手or中足骨	?	遠位端	不明	viv	df	5.52	—	—	茶褐色	
98-10-55	6区	土壌7	中世	哺乳類	ウシ	中足骨	R	近位端、骨幹部	ca(C1aタイプ)	viv	pf	162.66	Bp:48.40	—	茶褐色	
98-10-59	6区	土壌7	中世	哺乳類	ウシ	中足骨	R	骨幹部	ca(骨幹部前位)D1aタイプ	viv	pf	88.25	SD:24.50	—	茶褐色	
98-10-56	6区	土壌7	中世	哺乳類	ウシ	腕骨	L	近位端、骨幹部	不明	viv	pf	113.90	SD:35.05	—	茶褐色	
98-10-66	6区	土壌7	中世	哺乳類	ウシ	腕骨	L	近位端、骨幹部	不明	viv	pf	55.54	—	—	茶褐色	
98-10-53	6区	土壌7	中世	哺乳類	ウシ	腕骨	R	近位端、骨幹部	ca(骨幹部前位)D1aタイプ	viv	pf	133.82	近位端最大幅(Bp)73.20・SD:35.75	—	茶褐色	
98-10-83	6区	土壌7	中世	哺乳類	ウシorウマ	胸椎	M	完形(棘突起+椎)	なし	viv	antuf:postuf	8.93	—	—	茶褐色	同一個体98-10-90
98-10-106	6区	土壌7	中世	哺乳類	ウシorウマ	胸椎	M	棘突起	不明	viv	不明	19.62	—	—	茶褐色	
98-10-57	6区	土壌7	中世	哺乳類	ウシorウマ	脛骨	L	骨幹部	不明	viv	不明	135.00	SD:33.50	—	茶褐色	
98-10-60	6区	土壌7	中世	哺乳類	ウシorウマ	脛骨	R	骨幹部	不明	viv	不明	31.69	—	—	茶褐色	
98-10-70	6区	土壌7	中世	哺乳類	ウシorウマ	尺骨	L	骨幹部	sp	viv	不明	18.74	—	—	茶褐色	
98-10-58	6区	土壌7	中世	哺乳類	ウシorウマ	上腕骨	L	骨幹部	不明	viv	不明	96.58	SD:36.20	—	茶褐色	
98-10-61	6区	土壌7	中世	哺乳類	ウシorウマ	上腕骨	L	骨幹部	不明	viv	不明	49.71	SD:33.00	—	茶褐色	
98-10-62	6区	土壌7	中世	哺乳類	ウシorウマ	上腕骨	L	骨幹部	不明	viv	不明	74.71	SD:34.35	—	茶褐色	
98-10-67	6区	土壌7	中世	哺乳類	ウシorウマ	上腕骨	R	骨幹部	不明	viv	不明	55.06	—	—	茶褐色	

第9表 出土動物遺存体属性表7 (土壌7)

98-10-97	6区	土壌7	中世	哺乳類	ウシorウマ	側頭骨	L	完形(岩様部)	なし	viv	不明	7.71	—	—	茶褐色	同一個体:98-10-107
98-10-107	6区	土壌7	中世	哺乳類	ウシorウマ	側頭骨	R	完形(岩様部)	なし	viv	不明	7.20	—	—	茶褐色	同一個体:98-10-97
98-10-10	6区	土壌7	中世	哺乳類	ウマ	上顎第1切歯	R	完形	なし	viv	全面窩(15才以上)	2.59	咬合面最大長11.50・咬合面最大幅11.50	歯冠高19.50	茶褐色	
98-10-18	6区	土壌7	中世	哺乳類	ウマ	上顎第4前臼歯	L	完形	なし	viv	萌出途次成長障害がみられる	48.00	歯冠最大長30.10・歯冠最大幅25.15	—	茶褐色	同一個体:98-10-17
98-10-12	6区	土壌7	中世	哺乳類	ウマ	下顎大歯	L	完形	なし	viv	全面窩(4~5年以上)	3.77	咬合面最大長8.35・咬合面最大幅4.85	残存高41.30	茶褐色	
98-10-3	6区	土壌7	中世	哺乳類	ウマ	下顎骨	R	臼歯部 P2 X,P3 X,P4 O,M1 O,M2 O,M3 O	不明	viv	全面窩	77.64	歯牙P4咬合面最大長24.20・咬合面最大幅13.70,M1咬合面最大長21.55・咬合面最大幅13.10・歯槽最大長22.80,M2咬合面最大長21.50・咬合面最大幅11.60・歯槽最大長22.90,M3咬合面最大長29.65・咬合面最大幅11.15・歯槽最大長30.25	—	茶褐色	小型の体腔、咬合異常
98-10-22	6区	土壌7	中世	哺乳類	ウマ	下顎第1後臼歯	R	完形	なし	viv	全面窩	13.66	咬合面最大長25.05・咬合面最大幅14.40・最大高49.40	M1最大高49.70・M2最大高59.30	茶褐色	同一個体:98-10-23
98-10-7	6区	土壌7	中世	哺乳類	ウマ	下顎第1切歯	R	完形	なし	viv	5ヵ月程度(咬耗萌出)	9.66	咬合面最大長15.99・咬合面最大幅7.20・歯冠最大幅10.90	歯冠最大長16.25	茶褐色	同一個体:98-10-5・10-6
98-10-23	6区	土壌7	中世	哺乳類	ウマ	下顎第2後臼歯	R	完形	なし	viv	全面窩	10.24	咬合面最大長21.50・咬合面最大幅13.15・最大高57.30	—	茶褐色	同一個体:98-10-22
98-10-6	6区	土壌7	中世	哺乳類	ウマ	下顎第2切歯	R	完形	なし	viv	5ヵ月程度(咬耗)	6.03	歯冠最大長17.20・歯冠最大幅10.95	歯冠最大長19.15	茶褐色	同一個体:98-10-5・10-7
98-10-20	6区	土壌7	中世	哺乳類	ウマ	下顎第2前臼歯	R	完形	なし	viv	小窩連結(2.5才以上、萌出)	9.21	咬合面最大長29.75・咬合面最大幅14.20	—	茶褐色	きわめて小型
98-10-5	6区	土壌7	中世	哺乳類	ウマ	下顎第1切歯	L	完形	なし(?)	viv	咬耗度開始、5ヵ月程度(咬耗)	10.67	②10・7咬合面最大長14.90・咬合面最大幅8.05、咬合面最大長15.95・咬合面最大幅	歯冠最大長18.05	茶褐色	同一個体:98-10-6・10-7、咬合面後位に挟入が見られる
98-10-49	6区	土壌7	中世	哺乳類	ウマ	脛骨	R	骨幹部、遠位端 α(右外側)Clαタイプ	なし	viv	df	221.42	Bd:58.90 Dp:34.50 SD:33.55	—	茶褐色	
98-10-89	6区	土壌7	中世	哺乳類	ウマ	頸椎	M	前位	不明	viv	anf	31.20	前位関節最大幅26.35	—	茶褐色	
98-10-90	6区	土壌7	中世	哺乳類	ウマ	頸椎	M	完形	なし	viv	anf,post:uf	49.87	棘突起残存幅80.80	—	茶褐色	同一個体:98-10-83
98-10-50-2	6区	土壌7	中世	哺乳類	ウマ	尺骨	L	骨幹部	なし	viv	橋骨と癒合	—	—	—	茶褐色	
98-10-17	6区	土壌7	中世	哺乳類	ウマ	上顎M1(第1後臼歯)	L	完形	なし	viv	萌出途次(1才未満、萌出)	37.94	—	—	茶褐色	同一個体:98-10-18
98-10-15	6区	土壌7	中世	哺乳類	ウマ	上顎第2後臼歯	L	完形	なし	viv	小窩独立?才以上、萌出、咬合面平坦化未了	56.22	咬合面最大長28.00・咬合面最大幅21.35	歯冠高30.45	茶褐色	
98-10-16	6区	土壌7	中世	哺乳類	ウマ	上顎第2後臼歯	L	完形	なし	viv	小窩連結咬合面未平坦化(2.5才以上、萌出)	55.39	咬合面最大長28.00・咬合面最大幅23.35	歯冠高74.40	茶褐色	
98-10-13	6区	土壌7	中世	哺乳類	ウマ	上顎第2前臼歯	R	完形	なし	viv	萌出途次(2.5才未満、萌出)	38.76	歯冠最大長35.35 歯冠最大幅23.55	歯冠最大高35.60 歯冠最大幅23.65	茶褐色	中型の体腔
98-10-51	6区	土壌7	中世	哺乳類	ウマ	大腿骨	R	完形(遠位端一部欠損)	不明	viv	p,d,uf	254.96	残存全長328.60	—	茶褐色	同一個体:98-10-78・10-79・10-80・10-81・10-93
98-10-80	6区	土壌7	中世	哺乳類	ウマ	大腿骨	R	完形(遠位端一部欠損)	不明	viv	p,d,uf	20.54	残存全長328.60	—	茶褐色	同一個体:98-10-51・10-78・10-79・10-81・10-93
98-10-81	6区	土壌7	中世	哺乳類	ウマ	大腿骨	R	完形(遠位端一部欠損)	不明	viv	p,d,uf	25.91	残存全長328.60	—	茶褐色	同一個体:98-10-51・10-78・10-79・10-80・10-93
98-10-93	6区	土壌7	中世	哺乳類	ウマ	大腿骨	R	完形(遠位端一部欠損)	不明	viv	p,d,uf	24.55	残存全長328.60	—	茶褐色	同一個体:98-10-51・10-78・10-79・10-80・10-81
98-10-79	6区	土壌7	中世	哺乳類	ウマ	大腿骨	R	完形(遠位端一部欠損)	不明	viv	p,d,uf	17.27	残存全長328.60	—	茶褐色	同一個体:98-10-51・10-78・10-80・10-81・10-93
98-10-78	6区	土壌7	中世	哺乳類	ウマ	大腿骨	R	完形(遠位端一部欠損)	不明	viv	p,d,uf	44.28	残存全長328.60	—	茶褐色	同一個体:98-10-51・10-79・10-80・10-81・10-93
98-10-92	6区	土壌7	中世	哺乳類	ウマ	中節骨	m	完形	不明	viv	pf	34.91	Bp:50.20 SD:27.80	—	茶褐色	
98-10-54	6区	土壌7	中世	哺乳類	ウマ	中足骨	R	完形	なし?	viv	p,d,f	97.66	最大長189.85・近位端最大幅39.10・SD:27.75・遠位端最大幅(Bd)39.15・遠位端関節最大幅38.10	—	茶褐色	
98-10-50-1	6区	土壌7	中世	哺乳類	ウマ	橈骨	L	完形	α(骨幹部後位)D1αタイプ	viv	p,f,d,f	264.35	—	—	茶褐色	
98-10-52	6区	土壌7	中世	哺乳類	ウマ	橈骨	R	骨幹部、近位端	なし	viv	pf	130.60	Bp:67.40	—	茶褐色	
98-10-76	6区	土壌7	中世	哺乳類	ウマ	肋骨	R	完形	なし	viv	pf	31.26	—	—	茶褐色	
98-10-72	6区	土壌7	中世	哺乳類	大型	不明	?	骨幹部	不明	viv	不明	15.93	—	—	茶褐色	
98-10-75	6区	土壌7	中世	哺乳類	大型	頸骨	?	骨幹部(破片)	不明	viv	不明	10.26	—	—	茶褐色	
98-10-100	6区	土壌7	中世	哺乳類	大型	頸骨	?	骨幹部(破片)	不明	viv	不明	3.96	—	—	茶褐色	
98-10-110	6区	土壌7	中世	哺乳類	大型	頸骨	?	骨幹部(破片)	不明	viv	不明	3.33	—	—	茶褐色	
98-10-74	6区	土壌7	中世	哺乳類	大型	頸骨(上下不明)	?	骨幹部(破片)	不明	viv	不明	5.89	—	—	茶褐色	
98-10-94	6区	土壌7	中世	哺乳類	大型	胸椎	M	棘突起	なし	viv	不明	6.68	—	—	茶褐色	同一個体:98-10-99
98-10-99	6区	土壌7	中世	哺乳類	大型	胸椎	M	棘突起	なし	viv	不明	5.69	—	—	茶褐色	同一個体:98-10-94

第10表 出土動物遺存体属性表 8 (土壌 7)

98-10-88	6区	土壌 7	中世	哺乳類	大型	頸椎類	?	前位胸廓類	なし	viv	Antf	3.86	—	—	茶褐色
98-10-63	6区	土壌 7	中世	哺乳類	大型	四肢骨	?	骨幹部	不明	viv	不明	56.22	—	—	茶褐色
98-10-64	6区	土壌 7	中世	哺乳類	大型	四肢骨	?	骨幹部	不明	viv	不明	36.95	—	—	茶褐色
98-10-73	6区	土壌 7	中世	哺乳類	大型	四肢骨	?	骨幹部	sp	viv	不明	8.34	—	—	茶褐色
98-10-68	6区	土壌 7	中世	哺乳類	大型	四肢骨	?	骨幹部 (破片)	sp	viv	不明	43.65	—	—	茶褐色
98-10-69	6区	土壌 7	中世	哺乳類	大型	四肢骨	?	骨幹部	sp	viv	不明	37.77	—	—	茶褐色
98-10-71	6区	土壌 7	中世	哺乳類	大型	四肢骨	?	骨幹部 (破片)	sp	viv	不明	20.91	—	—	茶褐色
98-10-103	6区	土壌 7	中世	哺乳類	大型	椎骨	M	関節突起	不明	viv	不明	2.73	—	—	茶褐色
98-10-105	6区	土壌 7	中世	哺乳類	大型	椎骨	M	椎類	なし	viv	uf	2.43	—	—	茶褐色
98-10-82	6区	土壌 7	中世	哺乳類	大型	不明	?	骨幹部	不明	viv	不明	10.81	—	—	茶褐色
98-10-95	6区	土壌 7	中世	哺乳類	大型	不明	?	骨幹部	不明	viv	不明	1.33	—	—	茶褐色
98-10-96	6区	土壌 7	中世	哺乳類	大型	不明	?	骨幹部	不明	viv	不明	2.81	—	—	茶褐色
98-10-98	6区	土壌 7	中世	哺乳類	大型	不明	?	骨幹部	不明	viv	不明	1.27	—	—	茶褐色
98-10-101	6区	土壌 7	中世	哺乳類	大型	不明	?	骨幹部	不明	viv	不明	12.77	—	—	茶褐色
98-10-104	6区	土壌 7	中世	哺乳類	大型	不明	?	骨幹部	不明	viv	不明	7.06	—	—	茶褐色
98-10-108	6区	土壌 7	中世	哺乳類	大型	不明	?	骨端部	不明	viv	不明	2.48	—	—	茶褐色
98-10-109	6区	土壌 7	中世	哺乳類	大型	不明	?	骨端部	不明	viv	不明	0.67	—	—	茶褐色
98-10-86	6区	土壌 7	中世	哺乳類	大型	不明	?	骨端部	不明	viv	f	7.92	—	—	茶褐色

第11表 出土動物遺存体属性表9 (溝32)

番号	年度	地区	遺構	時期	大分類	小分類	L/R	部位	部分	破損	風化	成長度	重量(g)	計測値	色調	備考	
98-32-1	96	6区	溝32	中世	哺乳類	イヌ	LR	頭蓋	L(I1×12×13×CX P1×P2 △P3×P4 △M1LO M2O)R(1 1×12×1 3×CX 1×P2 P3△P4△ M1 前頭骨、頭頂骨、 側頭骨、 後頭骨	cm(D1aタイプ 前頭骨左外側)	viv	成獣	142.19	C歯槽最大長11.15・ 最大幅6.15、P ₁ 歯槽 最大長18.58、M ₁ 歯 槽最大長10.94、M ₂ 歯槽最大長5.79・最大 幅3.37、M ₁ → ₂ 歯 槽長15.23、後頭蓋最 大幅36.69、後頭蓋最 大幅18.48	茶褐色		
98-32-2	96	6区	溝32	中世	哺乳類	ウマ	R	下顎第3後臼歯	完形	なし	viv	小窩連結咬合面平坦面化	29.80	—	茶褐色		
98-32-3	96	6区	溝32	中世	哺乳類	ウマ	R	上顎第2後臼歯	完形	なし	viv	小窩連結咬合面平坦面化	48.53	—	茶褐色		
98-32-4	96	6区	溝32	中世	哺乳類	ウマ	R	上顎第1後臼歯	完形(歯根一部欠損)	なし	viv	未萌出	23.85	咬合面最大長26.60 最大幅23.55	茶褐色		
98-32-5	96	6区	溝32	中世	哺乳類	ウシ	R	上顎第1後臼歯	完形	なし	viv	小窩独立咬合面平坦面化	26.78	—	茶褐色		
98-32-6	96	6区	溝32	中世	哺乳類	ウシ	R	脛骨	完形	cm(C1aタイプ右後位)	viv	d.p.f	298.41	Pb:92.40 Db:57.75 Sb:37.25	茶褐色		
98-32-7	96	6区	溝32	中世	哺乳類	ウシ	L	中足骨	近位端+骨幹部(近位端一部欠)	cm(D1aタイプ右外側)	viv	p.f	145.22	Sb:26.55	茶褐色		
98-32-8	96	6区	溝32	中世	哺乳類	ウシ	R	中足骨	骨幹部	不明(風化)	viv	不明	93.80	—	茶褐色		
98-32-9	96	6区	溝32	中世	哺乳類	ウシ	R	脛骨	骨幹部	不明	viv	不明	99.25	—	変熱のため白色、黒色に変化		
98-32-10	96	6区	溝32	中世	哺乳類	ウシ	R	橈骨	近位端+骨幹部(近位端一部欠)	cm(外側骨幹部)sp	viv	p.f	104.80	—	茶褐色		
98-32-11	96	6区	溝32	中世	哺乳類	ウシ	L	中足骨	近位端+骨幹部(一部欠損)	cm(内側位)	viv	p.f	81.09	—	茶褐色		
98-32-13	96	6区	溝32	中世	哺乳類	ウシ	L	脛骨	骨幹部	cm(左外側後位)C1aタイプsp	viv	不明	103.61	—	茶褐色		
98-32-14	96	6区	溝32	中世	哺乳類	ウシ	R	中足骨	骨幹部内側	cm(内側)D1aタイプ	チョーク化	不明	75.01	—	茶褐色		
98-32-15	96	6区	溝32	中世	哺乳類	中～大型	?	不明	骨幹部	sp	viv	不明	67.19	—	茶褐色		
98-32-16	96	6区	溝32	中世	哺乳類	ウシ	L	大腿骨	骨幹部	sp	viv	不明	70.20	—	茶褐色		
98-32-17	96	6区	溝32	中世	哺乳類	中～大型	?	不明	骨幹部	sp	viv	不明	29.59	—	茶褐色		
98-32-18	96	6区	溝32	中世	哺乳類	中～大型	?	不明	骨幹部	sp	viv	不明	34.14	—	茶褐色		
98-32-19	96	6区	溝32	中世	哺乳類	中～大型	?	不明	骨幹部	cm(D1aタイプ)	viv	不明	25.09	—	茶褐色		
98-32-20	96	6区	溝32	中世	哺乳類	ウマ	m	中節骨	完形(一部欠損)	なし?	viv	f	26.81	—	茶褐色	98-32-22と接合	
98-32-21	96	6区	溝32	中世	哺乳類	中～大型	?	不明	骨幹部	不明	viv	不明	13.07	—	茶褐色		
98-32-22	96	6区	溝32	中世	哺乳類	ウマ	m	中節骨	完形(一部欠損)	なし?	viv	f	26.81	—	茶褐色	98-32-20と接合	
98-32-23	96	6区	溝32	中世	哺乳類	中～大型	?	不明	骨幹部	cm(D1aタイプ)	viv	不明	12.75	—	茶褐色		
98-32-24	96	6区	溝32	中世	哺乳類	ウシ	L	中手骨	近位端	不明	viv	p.f	9.20	—	明白色(変熱)		
98-32-25	96	6区	溝32	中世	哺乳類	ウシ	M	頸椎	完形(左外側一部欠損)	なし	viv	f	35.28	—	茶褐色	98-32-41と接合	
98-32-26	96	6区	溝32	中世	哺乳類	ウシ	R	脛骨	位端+骨幹部	cm(D1aタイプ右内側遠位端)	viv	d.f	102.23	Db:52.25	茶褐色		
98-32-27	96	6区	溝32	中世	哺乳類	中～大型	L	寛骨	坐骨	不明(風化のため)	viv	f	31.40	—	茶褐色		
98-32-28	96	6区	溝32	中世	哺乳類	ウマ	R	下顎骨	骨幹部+下顎枝	不明	viv	不明	44.25	—	茶褐色		
98-32-29	96	6区	溝32	中世	哺乳類	イヌ	R	寛骨	腸骨+恥骨	不明	viv	不明	15.20	—	茶褐色		
98-32-30	96	6区	溝32	中世	哺乳類	小～中型	?	不明	骨幹部	不明	viv	不明	22.11	—	茶褐色		
98-32-31	96	6区	溝32	中世	哺乳類	中～大型	?	不明	骨幹部破片	不明	viv	不明	4.65	—	茶褐色		
98-32-32	96	6区	溝32	中世	哺乳類	小～中型	?	不明	頭蓋骨	骨幹部破片	不明	viv	不明	6.22	—	茶褐色	
98-32-33	96	6区	溝32	中世	哺乳類	中～大型	?	不明	下顎骨	切端部破片	不明	viv	不明	7.35	—	茶褐色	
98-32-34	96	6区	溝32	中世	哺乳類	中～大型	?	不明	骨幹部	不明	viv	不明	9.75	—	茶褐色		
98-32-35	96	6区	溝32	中世	哺乳類	中～大型	?	不明	骨幹部	不明	viv	不明	9.00	—	茶褐色		
98-32-36	96	6区	溝32	中世	哺乳類	中～大型	?	不明	骨幹部	不明	viv	不明	7.42	—	茶褐色		
98-32-37	96	6区	溝32	中世	哺乳類	中～大型	?	不明	下顎骨	骨幹部破片	不明	viv	不明	12.42	—	茶褐色	
98-32-38	96	6区	溝32	中世	哺乳類	中～大型	?	不明	骨幹部	不明	viv	不明	2.28	—	茶褐色		
98-32-39	96	6区	溝32	中世	哺乳類	中～大型	L	下顎骨	骨幹部+臼歯部破片	不明	viv	不明	3.10	—	茶褐色		
98-32-40	96	6区	溝32	中世	哺乳類	中～大型	M	頸椎	棘突起	不明	viv	不明	8.26	—	茶褐色		
98-32-41	96	6区	溝32	中世	哺乳類	ウシ	M	頸椎	完形(左外側一部欠損)	なし	viv	f	1.59	—	茶褐色	98-32-25と接合	
98-32-42	96	6区	溝32	中世	哺乳類	中～大型	?	不明	骨幹部	不明	viv	不明	1.57	—	茶褐色		
98-32-43	96	6区	溝32	中世	哺乳類	中～大型	?	不明	骨幹部	不明	viv	不明	0.46	—	茶褐色		
98-32-44	96	6区	溝32	中世	爬虫類	スッポン	?	第6背甲板	遠位端	不明	viv	不明	2.56	—	茶褐色		
98-32-45	96	6区	溝32	中世	哺乳類	中～大型	?	不明	骨幹部	不明	viv	不明	2.61	—	茶褐色		
98-32-46	96	6区	溝32	中世	哺乳類	中～大型	?	不明	骨幹部	不明	viv	不明	3.00	—	茶褐色		
98-32-47	96	6区	溝32	中世	爬虫類	スッポン	?	背甲板	骨幹部破片	cm(D3aタイプ)	viv	不明	1.35	—	茶褐色		

第12表 出土動物遺存体属性表10 (貝塚4~6・8)

番号	出土地区	出土遺構	層位	時期	大分類	小分類	部位	LR	部分	破損	風化	成長度	重量(g)	計測値(mm)	色調	備考
98-16-1	8区	貝塚4	貝塚	16世紀	爬虫綱	スポン	烏口骨	R	完形(近位端一部欠損)	ca (D2タイプ)	viv	不明	0.72	—	茶褐色	
98-16-2	8区	貝塚4	貝塚	16世紀	哺乳綱	目不明	不明	?	骨幹部	なし	viv	不明	0.25	—	茶褐色	
98-17-7	8区	貝塚5	貝塚	16世紀	哺乳綱	目不明	不明	?	骨幹部	金網器による調整が明確D3タイプ	viv	不明	0.01	—	茶褐色	骨製品破片
98-17-10	8区	貝塚5	貝塚	16世紀	硬骨魚綱	目不明	ウロコ	?	破片	不明	—	不明	0.02	—	茶褐色	
98-17-11	8区	貝塚5	貝塚	16世紀	爬虫綱	目不明	椎骨	M	完形	不明	viv	不明	0.11	—	茶褐色	比較の大型
98-17-16	8区	貝塚5	貝塚	16世紀	哺乳綱	目不明(中小型)	不明	?	骨幹部	なし	viv	不明	12.66	—	茶褐色	
98-17-18	8区	貝塚5	貝塚	16世紀	鳥綱	目不明	上腕骨	L	近位端十骨幹部	なし?	viv	f	1.26	近位端幅15.51	茶褐色	
98-17-19	8区	貝塚5	貝塚	16世紀	硬骨魚綱	目不明	ウロコ	?	完形	不明	—	不明	0.01	—	茶褐色	
98-17-20	8区	貝塚5	貝塚	16世紀	硬骨魚綱	目不明	ウロコ	?	完形	不明	—	不明	0.01	—	茶褐色	
98-18-1	8区	貝塚5	貝塚	16世紀	爬虫綱	ヘビ科	椎骨	M	完形	なし	viv	不明	0.1	—	茶褐色	
98-32-1	11区	貝塚8	貝塚	鎌倉時代前半	爬虫綱	小型(スガイ?)	蓋	—	破片	なし	viv	不明	0.16	—	黒	
98-32-2	11区	貝塚8	貝塚	鎌倉時代前半	綱不明	目不明	不明	?	骨幹部	なし?	viv	不明	0.03	—	茶褐色	
98-32-6	11区	貝塚8	貝塚	鎌倉時代前半	哺乳綱	目不明(小~中型)	歯牙	?	エナメル質破片	不明	viv	咬痕開始	0.16	—	茶褐色	
98-32-7	11区	貝塚8	貝塚	鎌倉時代前半	硬骨魚綱	目不明	腹椎	M	破片	不明	viv	不明	0.03	—	茶褐色	
98-32-8	11区	貝塚8	貝塚	鎌倉時代前半	硬骨魚綱	目不明	基後頭骨	M	完形(一部欠損)	不明	viv	不明	0.01	—	茶褐色	
98-32-9	11区	貝塚8	貝塚	鎌倉時代前半	硬骨魚綱	目不明	骨盤骨	L	完形(一部欠損)	不明	viv	不明	0.01	—	茶褐色	
98-32-10	11区	貝塚8	貝塚	鎌倉時代前半	爬虫綱	スポン	背甲板	?	骨幹部破片	不明	viv	不明	0.19	—	茶褐色	
98-32-11	11区	貝塚8	貝塚	鎌倉時代前半	軟骨魚綱	板鰓亜綱	椎骨	M	完形	なし	viv	不明	0.06	—	茶褐色	
98-32-13	11区	貝塚8	貝塚	鎌倉時代前半	硬骨魚綱	ウナギ	腹椎	M	完形(棘欠損)	なし	viv	不明	0.02	—	茶褐色	
98-32-14	11区	貝塚8	貝塚	鎌倉時代前半	硬骨魚綱	マダイ	上後頭骨	M	左外側位	ca (D3タイプ)	viv	不明	3.49	—	茶褐色	
98-32-15	11区	貝塚8	貝塚	鎌倉時代前半	硬骨魚綱	スズキ目?	ウロコ	?	破片	不明	—	不明	0.03	—	茶褐色	
98-32-16	11区	貝塚8	貝塚	鎌倉時代前半	硬骨魚綱	スズキ目?	ウロコ	?	なし?	不明	—	不明	0.04	—	茶褐色	
98-32-17	11区	貝塚8	貝塚	鎌倉時代前半	硬骨魚綱	スズキ目?	ウロコ	?	完形	不明	—	不明	0.01	—	茶褐色	
98-32-18	11区	貝塚8	貝塚	鎌倉時代前半	硬骨魚綱	スズキ目?	ウロコ	?	完形	不明	—	不明	0.01	—	茶褐色	
98-32-19	11区	貝塚8	貝塚	鎌倉時代前半	硬骨魚綱	スズキ目?	ウロコ	?	完形	不明	—	不明	0.01	—	茶褐色	
98-32-20	11区	貝塚8	貝塚	鎌倉時代前半	硬骨魚綱	スズキ目?	ウロコ	?	完形	なし	—	不明	0.03	—	茶褐色	
98-32-21	11区	貝塚8	貝塚	鎌倉時代前半	硬骨魚綱	スズキ目?	ウロコ	?	完形	不明	—	不明	0.01	—	茶褐色	
98-32-22	11区	貝塚8	貝塚	鎌倉時代前半	硬骨魚綱	スズキ目?	ウロコ	?	完形	なし	—	不明	0.01	—	茶褐色	
98-33-1	11区	貝塚6	貝塚	鎌倉時代前半	哺乳綱	ウマ	基節骨	L	完形	ca (D1aタイプ)、ネズミ唯痕	viv	f	43.95	GL:72.37, SD:27.86, BP:47.52, BFP:44.72, BFD:37.64, OP:32.64, Bd:計測不能	茶褐色	
98-33-2	11区	貝塚6	貝塚	鎌倉時代前半	爬虫綱	スポン	前腹甲板	R	完形	内側にca (D1aタイプ)	viv	—	1.88	最大長50.95	茶褐色	
98-33-3	11区	貝塚6	貝塚	鎌倉時代前半	綱不明	目不明	不明	?	骨幹部	ca (D1aタイプ)	viv	不明	0.08	—	茶褐色	
98-33-4	11区	貝塚6	貝塚	鎌倉時代前半	甲殻綱	目不明	可動指	?	骨幹部	不明	viv	不明	0.06	—	茶褐色	
98-33-6	11区	貝塚6	貝塚	鎌倉時代前半	綱不明	不明	不明	?	骨幹部	不明	viv	不明	0.20	—	茶褐色	
98-33-7	11区	貝塚6	貝塚	鎌倉時代前半	爬虫綱	スポン	背甲板	?	椎骨板	不明	viv	不明	0.33	—	茶褐色	
98-33-11	11区	貝塚6	貝塚	鎌倉時代前半	硬骨魚綱	目不明	主鰓蓋骨	R	鰓蓋部十骨幹部	不明	viv	不明	0.23	—	茶褐色	
98-33-12	11区	貝塚6	貝塚	鎌倉時代前半	軟骨魚綱	板鰓亜綱	椎骨	M	椎体破片	不明	viv	不明	0.01	—	茶褐色	
98-33-14	11区	貝塚6	貝塚	鎌倉時代前半	硬骨魚綱	目不明	椎骨	M	椎体骨幹部破片	不明	viv	不明	0.08	—	茶褐色	
98-33-15	11区	貝塚6	貝塚	鎌倉時代前半	硬骨魚綱	目不明	後側頭骨	R	突起	不明	viv	不明	0.04	—	茶褐色	
98-33-17	11区	貝塚6	貝塚	鎌倉時代前半	綱不明	目不明	不明	?	骨幹部	不明	viv	不明	0.01	—	茶褐色	
98-33-18	11区	貝塚6	貝塚	鎌倉時代前半	硬骨魚綱	目不明	不明	?	棘突起十骨幹部	不明	viv	不明	0.13	—	茶褐色	

第13表 出土動物遺存体属性表11 (貝塚6・7)

98-33-20	11区	貝塚6	貝塚	鎌倉時代前半	爬虫綱	スッポン	中腹甲骨板	L	遠位端	sp?	viv	不明	0.82	—	茶褐色	
98-33-21	11区	貝塚6	貝塚	鎌倉時代前半	爬虫綱	スッポン	腹甲骨板	R	遠位端	不明	viv	不明	0.33	—	茶褐色	
98-33-24	11区	貝塚6	貝塚	鎌倉時代前半	爬虫綱	ヘビ科	椎骨	M	完形	不明	viv	不明	0.37	—	茶褐色	
98-33-26	11区	貝塚6	貝塚	鎌倉時代前半	爬虫綱	ヘビ科	椎骨	M	完形	不明	viv	不明	0.11	—	茶褐色	
98-33-31	11区	貝塚6	貝塚	鎌倉時代前半	哺乳綱	小型	尾椎	M	完形	なし	viv	不明	0.12	—	茶褐色	
98-33-32	11区	貝塚6	貝塚	鎌倉時代前半	硬骨魚綱	目不明	背殿鰭棘	M	完形	不明	viv	不明	0.06	—	茶褐色	
98-33-36	11区	貝塚6	貝塚	鎌倉時代前半	硬骨魚綱	目不明	棘突起	?	遠位端	不明	viv	不明	0.03	—	茶褐色	
98-33-39	11区	貝塚6	貝塚	鎌倉時代前半	硬骨魚綱	スズキ目?	ウロコ	?	完形	不明	—	不明	0.01	—	茶褐色	
98-33-40	11区	貝塚6	貝塚	鎌倉時代前半	硬骨魚綱	スズキ目?	ウロコ	?	完形	不明	—	不明	0.01	—	茶褐色	
98-33-41	11区	貝塚6	貝塚	鎌倉時代前半	硬骨魚綱	スズキ目?	ウロコ	?	完形	不明	—	不明	0.01	—	茶褐色	
98-33-42	11区	貝塚6	貝塚	鎌倉時代前半	硬骨魚綱	スズキ目?	ウロコ	?	完形	不明	—	不明	0.02	—	茶褐色	
98-33-43	11区	貝塚6	貝塚	鎌倉時代前半	硬骨魚綱	スズキ目?	ウロコ	?	完形	なし	—	不明	0.01	—	茶褐色	
98-33-44	11区	貝塚6	貝塚	鎌倉時代前半	硬骨魚綱	スズキ目?	ウロコ	?	完形	なし	—	不明	0.01	—	茶褐色	
98-33-45	11区	貝塚6	貝塚	鎌倉時代前半	硬骨魚綱	スズキ目?	ウロコ	?	完形	不明	—	不明	0.01	—	茶褐色	
98-33-46	11区	貝塚6	貝塚	鎌倉時代前半	硬骨魚綱	スズキ目?	ウロコ	?	完形	なし	—	不明	0.03	—	茶褐色	
98-34-2	11区	貝塚7	貝塚	鎌倉時代前半	硬骨魚綱	目不明	棘突起	?	完形	不明	viv	不明	0.02	—	茶褐色	
98-34-3	11区	貝塚7	貝塚	鎌倉時代前半	爬虫綱	スッポン	上腕骨	L	完形	cm (前位、D1aタイプ)	viv	f?	2.65	全長:43.24	茶褐色	
98-34-7	11区	貝塚7	貝塚	鎌倉時代前半	哺乳綱	目不明	不明	?	骨幹部	不明	viv	不明	0.14	—	茶褐色	
98-34-8	11区	貝塚7	貝塚	鎌倉時代前半	硬骨魚綱	目不明	椎骨	?	椎体 骨幹部破片	不明	viv	不明	0.05	—	茶褐色	
98-34-10	11区	貝塚7	貝塚	鎌倉時代前半	爬虫綱	スッポン	前腹甲骨板	L	完形	不明	viv	不明	3.76	—	茶褐色	
98-34-11	11区	貝塚7	貝塚	鎌倉時代前半	綱不明	目不明	不明	?	骨幹部	不明	viv	不明	0.08	—	茶褐色	
98-34-13	11区	貝塚7	貝塚	鎌倉時代前半	硬骨魚綱	目不明	歯	?	エナメル質部分	不明	viv	不明	0.05	—	茶褐色	
98-34-17	11区	貝塚7	貝塚	鎌倉時代前半	綱不明	目不明	不明	?	骨幹部	不明	viv	不明	0.03	—	茶褐色	
98-34-19	11区	貝塚7	貝塚	鎌倉時代前半	哺乳綱	目不明	不明	?	骨幹部	不明	viv	不明	0.01	—	茶褐色	
98-34-20	11区	貝塚7	貝塚	鎌倉時代前半	爬虫綱	スッポン	尾椎	M	神経棘	不明	viv	uf	0.19	—	茶褐色	
98-34-21	11区	貝塚7	貝塚	鎌倉時代前半	硬骨魚綱	スズキ目?	ウロコ	?	完形	不明	—	不明	0.03	—	茶褐色	
98-34-22	11区	貝塚7	貝塚	鎌倉時代前半	硬骨魚綱	スズキ目?	ウロコ	?	完形	不明	—	不明	0.02	—	茶褐色	
98-34-23	11区	貝塚7	貝塚	鎌倉時代前半	硬骨魚綱	スズキ目?	ウロコ	?	完形	不明	—	不明	0.02	—	茶褐色	
98-34-24	11区	貝塚7	貝塚	鎌倉時代前半	硬骨魚綱	スズキ目?	ウロコ	?	完形	不明	—	不明	0.01	—	茶褐色	
98-34-25	11区	貝塚7	貝塚	鎌倉時代前半	硬骨魚綱	スズキ目?	ウロコ	?	完形	不明	—	不明	0.02	—	茶褐色	
98-34-26	11区	貝塚7	貝塚	鎌倉時代前半	硬骨魚綱	スズキ目?	ウロコ	?	完形	不明	—	不明	0.01	—	茶褐色	
98-34-27	11区	貝塚7	貝塚	鎌倉時代前半	硬骨魚綱	スズキ目?	ウロコ	?	完形	不明	—	不明	0.01	—	茶褐色	
98-34-28	11区	貝塚7	貝塚	鎌倉時代前半	硬骨魚綱	スズキ目?	ウロコ	?	完形	不明	—	不明	0.01	—	茶褐色	

第14表 出土動物遺存体属性表12 (動物遺存体集中98-39)

番号	出土地区	出土遺構	層位	時期	大分類	小分類	部位	LR	部分	破損	風化	成長度	重量(g)	色調	計測値(単位mm)	備考
98-39-1	8区	河道6	下層	13世紀	哺乳綱	ウシ	脛骨	L	完形	なし	viv	d.p.f	390.53	茶褐色	—	98-39-2と同一個体
98-39-2	8区	河道6	下層	13世紀	哺乳綱	ウシ	脛骨	R	完形	ca(前位、近位寄骨幹部)D1aタイプ	viv	d.p.f	391.66	茶褐色	—	98-39-1と同一個体
98-39-3	8区	河道6	下層	13世紀	哺乳綱	ウシ	踵骨	R	完形	なし	viv	f	74.73	茶褐色	—	
98-39-4	8区	河道6	下層	13世紀	哺乳綱	ウシ	距骨	R	完形	なし	viv	不明	53.50	茶褐色	GLJ:60.29 GLm:54.46 近位最大幅:39.44	
98-39-5	8区	河道6	下層	13世紀	哺乳綱	ウシ	中心第4足根骨	L	完形	なし	viv	f	34.69	茶褐色	—	
98-39-6	8区	河道6	下層	13世紀	哺乳綱	ウシ	基礎骨	ε	完形	なし	viv	p.f,d.f	21.77	茶褐色	—	
98-39-7	8区	河道6	下層	13世紀	哺乳綱	ウシ	距骨	L	完形	なし	viv	不明	52.34	茶褐色	GLJ:59.78 GLm:54.02 近位最大幅:39.81	
98-39-8①	8区	河道6	下層	13世紀	哺乳綱	ウシ	中心第4足根骨	R	完形	なし	viv	f	33.46	茶褐色	—	
98-39-8②	8区	河道6	下層	13世紀	哺乳綱	ウシ	中足骨	R	完形	ca(内側位骨幹部)B1aタイプ	viv	d.p.f	185.14	茶褐色	Bp:47.00 Bd:52.10	98-39-16と同一個体
98-39-9	8区	河道6	下層	13世紀	哺乳綱	ウシ	尾椎	M	完形	なし	viv	post.n.t.f	1.23	茶褐色	—	
98-39-10	8区	河道6	下層	13世紀	哺乳綱	ウシ	尾椎	M	完形(棘突起一部欠損)	なし	viv	post.n.t.f	12.29	茶褐色	—	
98-39-11	8区	河道6	下層	13世紀	哺乳綱	ウシ	尾椎	M	完形	なし	viv	f	3.76	茶褐色	—	
98-39-12	8区	河道6	下層	13世紀	哺乳綱	ウシ	尾椎	M	完形	なし	viv	f	4.72	茶褐色	—	
98-39-13	8区	河道6	下層	13世紀	哺乳綱	ウシ	尾椎	M	完形	なし	viv	f	6.31	茶褐色	—	
98-39-14	8区	河道6	下層	13世紀	哺乳綱	不明	不明	?	骨端部	なし	なし	不明	0.40	茶褐色	—	
98-39-15	8区	河道6	下層	13世紀	哺乳綱	ウシ	尾椎	M	完形	なし	viv	post.n.t.f	7.24	茶褐色	—	
98-39-16	8区	河道6	下層	13世紀	哺乳綱	ウシ	中足骨	L	完形	なし	viv	d.p.f	199.50	茶褐色	最大長199.5 近位端最大幅46.95 遠位端最大幅51.55 Bp:47.16 Bd:51.78	98-39-8②と同一個体
98-39-17	8区	河道6	下層	13世紀	哺乳綱	ウシ	寛骨	L	完形(坐骨一部欠損)	不明(内側に偽切創)	viv	f	225.10	茶褐色	—	
98-39-18	8区	河道6	下層	13世紀	哺乳綱	ウシ	腰椎	M	完形(右横突起欠損、棘突起一部欠損)	なし	viv	post.n.t.f	81.52	茶褐色	—	
98-39-19	8区	河道6	下層	13世紀	哺乳綱	ウシ	腰椎	M	完形(右横突起欠損)	なし	viv	f	73.43	茶褐色	—	
98-39-20	8区	河道6	下層	13世紀	哺乳綱	ウシ	腰椎	M	完形(右横突起欠損)	なし(横突起上面に偽切創)	viv	f	73.43	茶褐色	—	
98-39-21	8区	河道6	下層	13世紀	哺乳綱	ウシ	腰椎	M	完形	なし	viv	ant.post.n.t.f	44.84	茶褐色	—	
98-39-22	8区	河道6	下層	13世紀	哺乳綱	ウシ	肋骨	?	骨幹部	不明	viv	不明	61.38	茶褐色	—	
98-39-23	8区	河道6	下層	13世紀	哺乳綱	ウシ	膝蓋骨	R	完形	なし	viv	不明	31.89	茶褐色	—	
98-39-24	8区	河道6	下層	13世紀	哺乳綱	ウシ	腰椎	M	完形(棘突起、右横突起一部欠損)	なし	viv	f	68.13	茶褐色	—	
98-39-25	8区	河道6	下層	13世紀	哺乳綱	ウシ	末節骨	r	完形	なし	viv	f	14.25	茶褐色	DLS:64.30 Ld:49.56 MBS:19.51 関節最大幅20.78 関節最大高28.28	
98-39-26	8区	河道6	下層	13世紀	哺乳綱	ウシ	中節骨	ε	完形	なし	viv	f	11.32	茶褐色	—	
98-39-27	8区	河道6	下層	13世紀	哺乳綱	ウシ	基礎骨	ε	完形	なし	viv	f	20.79	茶褐色	TL:61.38	
98-39-28	8区	河道6	下層	13世紀	哺乳綱	ウシ	基礎骨	r	完形	なし	viv	f	23.29	茶褐色	—	
98-39-28の下より	8区	河道6	下層	13世紀	哺乳綱	ウシ	末節骨	ε	完形	なし	viv	f	12.93	茶褐色	DLS:62.78 Ld:49.80 MBS:19.51 関節最大幅20.22 関節最大高28.26	
98-39-29①	8区	河道6	下層	13世紀	哺乳綱	ウシ	肋骨	L	近位端、骨幹部(近位端一部欠損)	なし	viv	不明	61.50	茶褐色	—	
98-39-30	8区	河道6	下層	13世紀	哺乳綱	ウシ	肋骨	R	近位端、骨幹部(近位端一部欠損)	なし	viv	不明	61.50	茶褐色	—	
98-39-31	8区	河道6	下層	13世紀	哺乳綱	ウシ	胸椎	R	棘突起(右関節突起欠損)	なし	viv	f	34.44	茶褐色	—	
98-39-31の下より	8区	河道6	下層	13世紀	哺乳綱	ウシ	種子骨	?	完形	なし	viv	不明	2.01	茶褐色	—	
98-39-32	8区	河道6	下層	13世紀	哺乳綱	ウシ	尾椎	M	完形(左側突起欠損)	なし	viv	f	13.10	茶褐色	—	
98-39-33	8区	河道6	下層	13世紀	哺乳綱	ウシ	種子骨	?	完形	なし	viv	不明	2.34	茶褐色	—	
98-39-34	8区	河道6	下層	13世紀	哺乳綱	ウシ	仙椎	M	完形(棘突起右欠損)	なし	viv	ant.f	101.53	茶褐色	—	
98-39-35	8区	河道6	下層	13世紀	哺乳綱	ウシ	寛骨	R	完形(座骨、腸骨一部欠損)	なし	viv	f	161.61	茶褐色	—	
98-39-36	8区	河道6	下層	13世紀	哺乳綱	ウシ	大腿骨	R	完形	ca(前位外側骨幹部)B1aタイプ	viv	f	447.17	茶褐色	—	
98-39-37	8区	河道6	下層	13世紀	哺乳綱	ウシ	腰椎	M	完形	なし	鉄分の付着	f	53.39	茶褐色	—	
98-39-38	8区	河道6	下層	13世紀	哺乳綱	ウシ	胸椎	M	完形(棘突起一部欠損)	なし	viv	f	49.29	茶褐色	—	
98-39-39	8区	河道6	下層	13世紀	哺乳綱	ウシ	肋骨	R	骨幹部	偽切創(骨幹部内側)	viv	不明	50.59	茶褐色	—	
98-39-40	8区	河道6	下層	13世紀	哺乳綱	ウシ	肋骨	R	完形(近位端一部欠損、骨端部あり)	ca(骨幹部近位寄)D1aタイプ	viv	f	76.59	茶褐色	—	
98-39-41	8区	河道6	下層	13世紀	哺乳綱	ウシ	肋骨	R	完形	なし	viv	p.f	43.36	茶褐色	—	
98-39-42	8区	河道6	下層	13世紀	哺乳綱	ウシ	肋骨	L	完形(近位端一部欠損)	ca?(骨幹部外側近位寄)D1aタイプ	viv	f	46.24	茶褐色	—	
98-39-43	8区	河道6	下層	13世紀	哺乳綱	ウシ	肋骨	L	骨幹部	なし	viv	不明	43.58	茶褐色	—	
98-39-44	8区	河道6	下層	13世紀	哺乳綱	ウシ	頸椎	M	椎体	なし	viv	ant.post.n.t.f	44.92	茶褐色	—	
98-39-45	8区	河道6	下層	13世紀	哺乳綱	ウシ	胸椎	m	完形(左右関節突起欠損)	なし	viv	前・後.n.t.f	75.71	茶褐色	—	腹面風化激しい
98-39-46	8区	河道6	下層	13世紀	哺乳綱	ウシ	肋骨	R	完形	ca(外側、遠位寄)D1aタイプ	viv	f	69.85	茶褐色	—	
98-39-47	8区	河道6	下層	13世紀	哺乳綱	ウシ	肋骨	R	骨幹部	不明	viv	不明	56.81	茶褐色	—	
98-39-48	8区	河道6	下層	13世紀	哺乳綱	ウシ	軟骨	?	不明	なし	viv	不明	14.60	茶褐色	—	
98-39-49	8区	河道6	下層	13世紀	哺乳綱	ウシ	肋骨	L	完形	なし	viv	f	43.68	茶褐色	—	
98-39-50	8区	河道6	下層	13世紀	哺乳綱	ウシ	肋骨	L	近位端十骨幹部(近位端一部欠損)	なし	viv	不明	48.57	茶褐色	—	

第15表 出土動物遺存体属性表13 (動物遺存体集中98-39)

98-39-51	8区	河道6	下層	13世紀	哺乳綱	ウシ	肋骨	L	近位端+骨幹部(近位端一部欠損)	不明	viv	不明	58.12	茶褐色	—	
98-39-52	8区	河道6	下層	13世紀	哺乳綱	中~大型	不明	?	不明(骨幹部)	なし	viv	f	45.64	茶褐色	—	
98-39-53	8区	河道6	下層	13世紀	哺乳綱	ウシ	肋骨	L	完形	なし	viv	不明	63.21	茶褐色	—	
98-39-54	8区	河道6	下層	13世紀	哺乳綱	ウシ	肋骨	L	骨幹部	なし	viv	不明	60.88	茶褐色	—	
98-39-55	8区	河道6	下層	13世紀	哺乳綱	ウシ	膝蓋骨	L	完形	なし	viv	不明	29.13	茶褐色	—	
98-39-56	8区	河道6	下層	13世紀	哺乳綱	ウシ	大腸骨	L	完形	cm(骨幹部内側位)B1aタイプ	viv	d.p.f	480.57	茶褐色	遠位端最大幅92.10	
98-39-58①	8区	河道6	下層	13世紀	哺乳綱	ウシ	胸椎	M	棘突起	cm(神経棘左外側)B1aタイプ	viv	不明	27.50	茶褐色	—	
98-39-58②	8区	河道6	下層	13世紀	哺乳綱	ウシ	胸椎	M	椎体	不明	viv	ant.post-uf	9.39	茶褐色	—	98-39-31と接合
98-39-58③	8区	河道6	下層	13世紀	哺乳綱	ウシ	胸椎	M	椎体破片(椎窩を含む)	不明	viv	post-uf	10.05	茶褐色	—	
98-39-58④	8区	河道5	下層	13世紀	哺乳綱	ウシ	胸椎	M	完形	cm(神経棘左外側)B1aタイプ	viv	post-f	42.43	茶褐色	—	
98-39-59	8区	河道6	下層	13世紀	哺乳綱	ウシ	肋骨	R	骨幹部	なし(内側近位部に新傷あり)	viv	不明	64.96	茶褐色	—	骨折後の骨増殖がみら
98-39-60	8区	河道6	下層	13世紀	哺乳綱	ウシ	胸椎	M	棘突起	cm(神経棘左外側)B1aタイプ	viv	不明	42.75	茶褐色	—	
98-39-61	8区	河道6	下層	13世紀	哺乳綱	ウシ	胸椎	M	棘突起	不明	viv	不明	30.78	茶褐色	—	
98-39-62	8区	河道6	下層	13世紀	哺乳綱	ウシ	肋骨	R	完形(近位端一部欠損)	不明	viv	p.f	50.48	茶褐色	—	98-39-63と接合
98-39-63	8区	河道6	下層	13世紀	哺乳綱	ウシ	肋骨	R	完形(近位端一部欠損)	不明	viv	p.f	64.32	茶褐色	—	98-39-62と接合
98-39-64①	8区	河道6	下層	13世紀	哺乳綱	ウシ	胸骨	M	剣状突起	なし	viv	不明	75.69	茶褐色	—	98-39-64②と接合
98-39-64②	8区	河道6	下層	13世紀	哺乳綱	ウシ	胸骨体	M	完形	なし	viv	不明	75.69	茶褐色	—	98-39-64①と接合
98-39-65	8区	河道6	下層	13世紀	哺乳綱	ウシ	胸骨体	M	完形	なし	viv	不明	76.69	茶褐色	—	98-39-64①②と接合
98-39-66	8区	河道6	下層	13世紀	哺乳綱	ウシ	肋骨	L	近位端+骨幹部	不明	viv	p.f	40.90	茶褐色	—	
98-39-67	8区	河道6	下層	13世紀	哺乳綱	中~大型	肋骨	L	完形(近位端一部欠損)	不明	viv	p.f	29.78	茶褐色	—	
98-39-68	8区	河道6	下層	13世紀	哺乳綱	中~大型	軟骨	?	骨幹部	不明	viv	不明	8.72	茶褐色	—	
98-39-69①	8区	河道6	下層	13世紀	哺乳綱	ウシ	第1頸椎	M	左外側~上位背側欠損	なし	viv	f	75.17	茶褐色	—	98-39-89と接合関係
98-39-69②	8区	河道6	下層	13世紀	哺乳綱	中~大型	軟骨	?	骨幹部	不明	viv	不明	4.95	茶褐色	—	
98-39-69③	8区	河道6	下層	13世紀	哺乳綱	ウシ	軟骨	?	骨幹部	不明	viv	不明	2.29	茶褐色	—	
98-39-69④	8区	河道6	下層	13世紀	哺乳綱	中~大型	軟骨	?	骨幹部	不明	viv	不明	2.91	茶褐色	—	
98-39-70	8区	河道6	下層	13世紀	哺乳綱	中~大型	軟骨	?	骨幹部	不明	viv	不明	4.44	茶褐色	—	
98-39-71	8区	河道6	下層	13世紀	哺乳綱	ウシ	胸骨柄	M	完形	不明	viv	不明	23.33	茶褐色	—	
98-39-72	8区	河道6	下層	13世紀	哺乳綱	中~大型	軟骨	?	骨幹部	不明	viv	不明	26.90	茶褐色	—	
98-39-73	8区	河道6	下層	13世紀	哺乳綱	中~大型	軟骨	?	骨幹部	不明	viv	不明	6.74	茶褐色	—	
98-39-74	8区	河道6	下層	13世紀	哺乳綱	ウシ	肋骨	R	骨幹部+遠位端	なし	viv	不明	15.28	茶褐色	—	
98-39-75	8区	河道6	下層	13世紀	哺乳綱	ウシ	軟骨	?	骨幹部	不明	viv	不明	2.26	茶褐色	—	
98-39-76	8区	河道6	下層	13世紀	哺乳綱	ウシ	肋骨	L	骨幹部	なし	viv	不明	32.01	茶褐色	—	
98-39-77	8区	河道6	下層	13世紀	哺乳綱	中~大型	頭蓋骨	?	骨幹部+頭蓋骨破片	なし	viv	不明	2.05	茶褐色	—	同一層98-39-91の破片一点
98-39-78	8区	河道6	下層	13世紀	哺乳綱	ウシ	肋骨	L	完形	なし	viv	p.f	27.86	茶褐色	—	
98-39-79①	8区	河道6	下層	13世紀	哺乳綱	ウシ	肋骨	R	完形	なし	viv	p.f	27.50	茶褐色	—	
98-39-79②	8区	河道6	下層	13世紀	哺乳綱	ウシ	頸椎	M	椎体(椎窩+横突起腹結節)	不明(風化)	viv	uf	36.89	茶褐色	—	
98-39-80	8区	河道6	下層	13世紀	哺乳綱	ウシ	肋骨	R	完形	なし	viv	f	40.74	茶褐色	—	
98-39-81	8区	河道6	下層	13世紀	哺乳綱	ウシ	肋骨	R	骨幹部	なし(後切創、骨幹部内側)	viv	不明	26.55	茶褐色	—	
98-39-82	8区	河道6	下層	13世紀	哺乳綱	ウシ	胸椎	M	棘突起	なし	viv	不明	50.31	茶褐色	—	(腹側激しい風化)
98-39-83	8区	河道6	下層	13世紀	哺乳綱	ウシ	胸椎	M	棘突起	なし	viv	不明	33.59	茶褐色	—	
98-39-84	8区	河道6	下層	13世紀	哺乳綱	ウシ	頸椎	M	完形(左右横突起欠損)	なし	viv	f	67.26	茶褐色	—	
98-39-85	8区	河道6	下層	13世紀	哺乳綱	ウシ	前頭骨	?	骨幹部破片	なし	viv	不明	9.15	茶褐色	—	
98-39-86	8区	河道6	下層	13世紀	哺乳綱	ウシ	下顎骨	R	完形	不明	viv	13歳以上(推定)小窩独立未了(2才以上)	349.31	茶褐色	下顎残存全長:344.30、咬合面長P ₂ -M ₃ :129.76、M ₁ -M ₃ :80.19、M ₁ :21.78、M ₂ :23.65、M ₃ :33.94、咬合面幅M ₁ :13.84、M ₂ :14.02、M ₃ :14.28	(後位若く風化、臼歯列は乱れている)
98-39-87②	8区	河道6	下層	13世紀	哺乳綱	ウシ	茎状舌骨	L	近位端	なし	viv	不明	5.47	茶褐色	—	
98-39-88	8区	河道6	下層	13世紀	哺乳綱	ウシ	頸椎	M	完形(左右横突起一部欠損)	なし	viv	f	70.64	茶褐色	—	
98-39-89	8区	河道6	下層	13世紀	哺乳綱	ウシ	第1頸椎	M	左外側~上位背側欠損	なし	viv	f	104.87	茶褐色	—	98-39-69①と接合関係
98-39-90	8区	河道6	下層	13世紀	哺乳綱	ウシ	第2頸椎	M	完形(棘突起欠損)	なし	viv	f	95.64	茶褐色	棘突起最大幅38.95、頭蓋骨断面最大幅41.80	
98-39-91	8区	河道6	下層	13世紀	哺乳綱	ウシ	下顎第3後臼歯	L	完形	なし	viv	小窩独立平坦面化未了(2才以上)	4.83	茶褐色	咬合面長:34.56、咬合面幅:14.08、歯冠長:34.73、歯冠幅:13.98	
98-39-92①	8区	河道6	下層	13世紀	哺乳綱	ウシ	頭蓋	LR	完形(右角突起欠損)	なし	viv	2.5歳以上(萌出)	1384.14	茶褐色	P3咬合面最大幅16.20、咬合面最大長17.40、P4咬合面最大幅18.25、咬合面最大長16.85、M1咬合面最大幅21.00、咬合面最大長21.10、M2咬合面最大幅21.05、咬合面最大長26.05、M3咬合面最大幅19.70、咬合面最大長29.20	98-39-107と98-39-109と接合
98-39-92②	8区	河道6	下層	13世紀	哺乳綱	ウシ	茎状舌骨	R	近位端+骨幹部	なし	viv	不明	4.46	茶褐色	—	98-39-107と98-39-109と接合
98-39-93	8区	河道6	下層	13世紀	哺乳綱	ウシ	第4切歯	L	完形	なし	viv	小窩独立	1.40	茶褐色	咬合面幅:6.61、咬合面長:10.10、TL:27.80、歯冠長:10.67	
98-39-94	8区	河道6	下層	13世紀	哺乳綱	ウシ	下顎第3切歯	L	完形	なし	viv	小窩独立	1.72	茶褐色	咬合面幅:9.66、咬合面長:9.66、TL:29.82、歯冠長:8.04	
98-39-95	8区	河道6	下層	13世紀	哺乳綱	ウシ	下顎第2切歯	L	完形	なし	viv	小窩独立	1.47	茶褐色	咬合面幅:8.94、咬合面長:9.54、TL:28.09、歯冠長:10.03	

第16表 出土動物遺存体属性表14 (動物遺存体集中98-39)

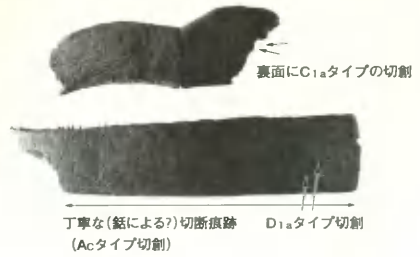
98-39-96	8区	河道6	下層	13世紀	哺乳綱	ウシ	下顎第1切歯	L	完形	なし	viv	小窩独立	1.74	茶褐色	咬合面幅:10.07 咬合面長:9.92 TL:29.35 歯冠長:7.88
98-39-97	8区	河道6	下層	13世紀	哺乳綱	ウシ	下顎第1切歯	R	完形	なし	viv	小窩独立	1.42	茶褐色	咬合面幅:9.04 咬合面長:9.45 TL:27.76 歯冠長:9.59
98-39-98	8区	河道6	下層	13世紀	哺乳綱	ウシ	踵骨	L	完形	なし	viv	f	74.41	茶褐色	—
98-39-99	8区	河道6	下層	13世紀	哺乳綱	ウシ	胸椎	M	棘突起、関節突起	不明(偽切創)	viv	不明	34.52	茶褐色	—
98-39-100	8区	河道6	下層	13世紀	哺乳綱	中～大型	頭蓋骨	?	骨幹部破片	sp	viv	?	2.17	茶褐色	—
98-39-101	8区	河道6	下層	13世紀	哺乳綱	ウシ	軟骨	?	完形	なし	viv	不明	14.57	茶褐色	—
98-39-102	8区	河道6	下層	13世紀	哺乳綱	ウシ	軟骨	?	骨幹部	不明	viv	不明	22.26	茶褐色	—
98-39-103	8区	河道6	下層	13世紀	哺乳綱	中～大型	不明	?	骨幹部	不明	viv	不明	5.46	茶褐色	—
98-39-104	8区	河道6	下層	13世紀	哺乳綱	中～大型	雄骨	M	骨幹部破片	不明	viv	不明	5.24	茶褐色	—
98-39-105	8区	河道6	下層	13世紀	哺乳綱	中～大型	不明	?	骨幹部	不明	viv	不明	8.00	茶褐色	—
98-39-106	8区	河道6	下層	13世紀	哺乳綱	中～大型	不明	?	骨幹部	不明	viv	不明	0.73	茶褐色	—
98-39-107	8区	河道6	下層	13世紀	哺乳綱	中～大型	不明	?	骨幹部	不明	viv	不明	1.14	茶褐色	98-39-92と39-109と接合
98-39-108	8区	河道6	下層	13世紀	哺乳綱	中～大型	不明	?	骨幹部	不明	viv	不明	0.75	茶褐色	—
98-39-109	8区	河道6	下層	13世紀	哺乳綱	中～大型	不明	?	骨幹部	不明	viv	不明	1.14	茶褐色	98-39-92と39-107と接合

凡例 L:左 R:右 M:中央、破損の分類は第2表を参照、cm:カットマーク(切創)、sp:スパイラル剥離、p:近位端 d:遠位端 F:化石化終了 UF:化石化未了、×:欠歯 △:歯根のみ残存 ●:歯槽閉鎖 ○:植立、計測値のアルファベットはDriesch(1976)による、成長途中の「咬耗」[萌出]は年齢推定の根拠を示す。
 風化、viv:藍鉄鉱の析出が認められるもの。



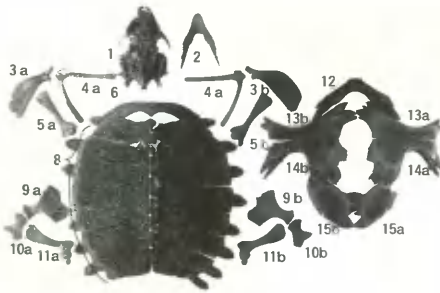
1. ウミガメ科 背甲肋骨板 [S: 20%]

1. 背甲第2肋骨板(96-80) 2. 背甲肋骨板(96-81)



2. ウミガメ科 縁骨板 背甲肋骨板 [S: 20%]

縁骨板 (96-74) 背甲肋骨板 (96-69)



3. スッポン (96-27) [S: 38%]

1. 頭蓋 2. 下顎骨 3. 烏口骨 4. 肩甲骨 5. 上腕骨 6. 頂骨板
7. 椎骨板 8. 肋骨板 9. 恥骨 10. 坐骨 11. 大腿骨
12. 内腹骨板 13. 中腹骨板 14. 下腹骨板 15. 剣腹骨板
(a: 左, b: 右を示す)

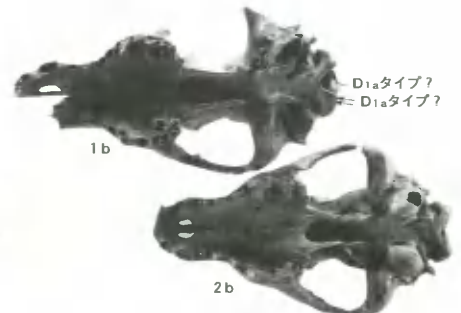


5. イヌ a. 頭蓋上面 [S: 32%]

1. (98-32-1) 2. (98-10-1,98-10-102)



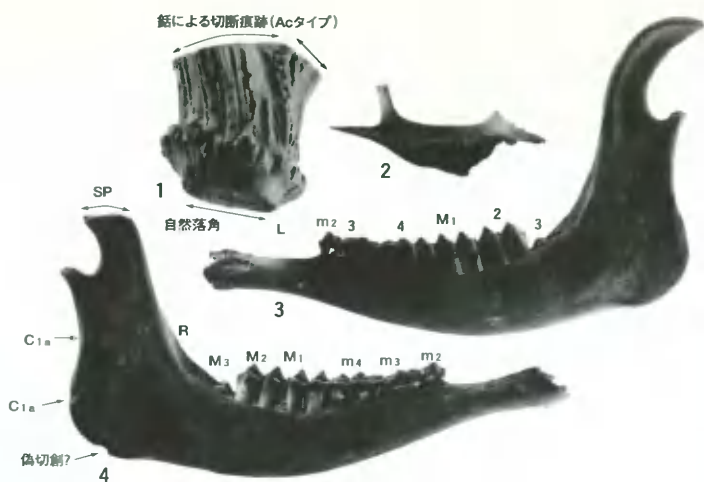
4. ウシ 右下顎骨 (96-82) [S: 24%]



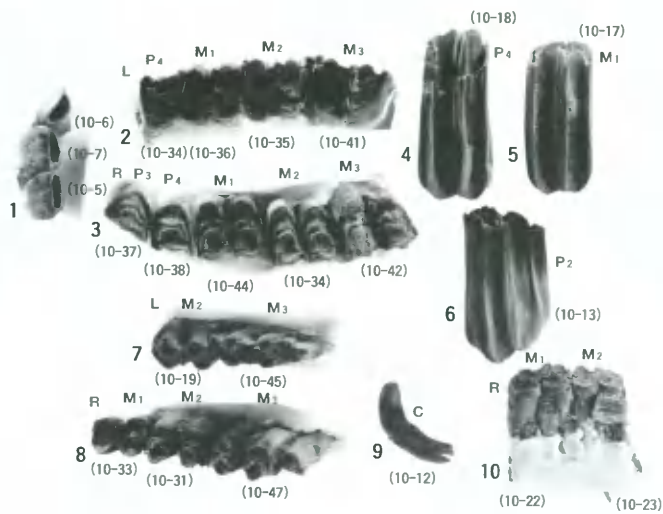
6. イヌ b. 頭蓋咬合面 [S: 32%]

1. (98-32-1) 2. (98-10-1,98-10-102)

図版A1 出土動物遺存体 (切創パターンは、P.328第2表参照)



7. ニホンジカ [S:31%] 1.角(96-50) 2.右側頭骨(96-84) 3.左下顎骨(96-84) 4.右下顎骨(96-89)
(sp:スパイタル割れ)



8. ウシ・ウマ歯牙 [S:50%] 1.ウマ切歯 2.ウシ上顎白歯 3.ウシ上顎白歯 4.ウマ左上顎第4前臼歯 5.ウマ左上顎第1後臼歯
6.ウマ右上顎第2前臼歯 7,8.ウシ下顎白歯 9.ウマ左下顎大臼歯 10.ウマト顎白歯 (内の数字は標本番号を略し10に1は省略して示す)

図版A2 出土動物遺存体

図版A3 出土動物遺存体



9. ウシ頭蓋 (98-39-91) 保存処理途中の状況 [S: 35%]

10. ヒト [S: 60%] 1. 左頭頂骨 (96-116) 2. 左後頭部 (96-116) 3. 下顎骨 (96-59)
4. 右上腕骨 (96-11)

図版A 4

動物遺存体集中
ウシ遺存体
(98-39)検出状況



1. 南東から



2. 北東から
(右側が頭部)



3. 頭蓋と下顎骨
(右側が頭木様木材)

付載3 百間川米田遺跡出土中世須恵器の胎土分析

岡山理科大学自然科学研究所 白石 純

分析目的

この胎土分析では理化学的な手法を用い、百間川米田遺跡の岩間上調査区河道1・同下調査区河道4から出土した中世須恵器を分析し、これら須恵器の生産地を推定することを目的とした。

生産地の推定方法は、中世須恵器の生産地である窯跡資料と河道内出土の須恵器を胎土分析値で比較することにより、胎土が類似しているかどうか検討した。なお、生産地窯跡の資料は、東播系が神出および魚住窯跡群、備前系が備前および邑久地域の窯跡群、亀山焼、勝間田焼の各窯跡群を比較資料とした。

分析方法は、エネルギー分散型蛍光X線分析装置（セイコーインスツルメンツ卓上型蛍光X線分析計SEA2010L）を使用し、分析資料は第1表に示した39点の須恵器である。資料の詳細は、椀28点、甕4点、鉢7点である。

分析結果

分析の結果、第1表よりCa、K、Rb、Sr、Zrの各元素に顕著な差がみられ、この元素を用いてXY散布図を作成し、生産地推定を行った。

第1図K-Ca散布図、第2図Rb-Sr散布図・第3図Rb-Zr散布図では、椀の生産地を検討した。この結果、資料番号39は東播系（神出窯跡）椀の分布域に分布し、それ以外はすべて備前系（備前、邑久地域の窯跡）の分布域に入った。第4図K-Ca散布図、第5図Rb-Sr散布図、第6図Rb-Zr散布図では、甕、鉢の生産地を推定した。その結果、第4図では、18（甕）、23（鉢）、24（鉢）、26（鉢）が東播系の分布域に、20（甕）、21（甕）、22（鉢）、28（鉢）が亀山焼の分布域に、25（鉢）、27（鉢）が亀山焼と備前系の窯跡群が重複する領域に分布した。第5図では、18、23、24、26が東播系の分布域に、20、21、28が亀山焼の分布域に、25、27は亀山焼と備前系の窯跡群が重複する領域に分布した。第6図では、18、24、26が東播系の分布域に、19、20、21、27、28が亀山焼の分布域に、23、25は東播系と備前系が重複する領域に分布した。また、19（甕）は第4・5図でどの生産地の領域にも入らなかった。

まとめ

以上の分析結果をもとにまとめると、次のような生産地推定が可能である。

河道内出土中世須恵器のうち、椀の生産地を検討すると、39の椀が東播系椀の分布領域に入り、10はどの生産地にも入らず産地が明確にならなかった。また、それ以外の椀は備前系椀（勝間田焼と重複する）の領域に入る結果となった。甕では18が東播系で、20・21が亀山焼、19は現在までに蓄積している窯跡資料との比較では、どの生産地にも入らなかった。鉢では23・24・26が東播系に、25・27が備前系と亀山焼が重複するところに分布し、28は亀山焼に推定された。22に関しては産地が明確にできなかった。

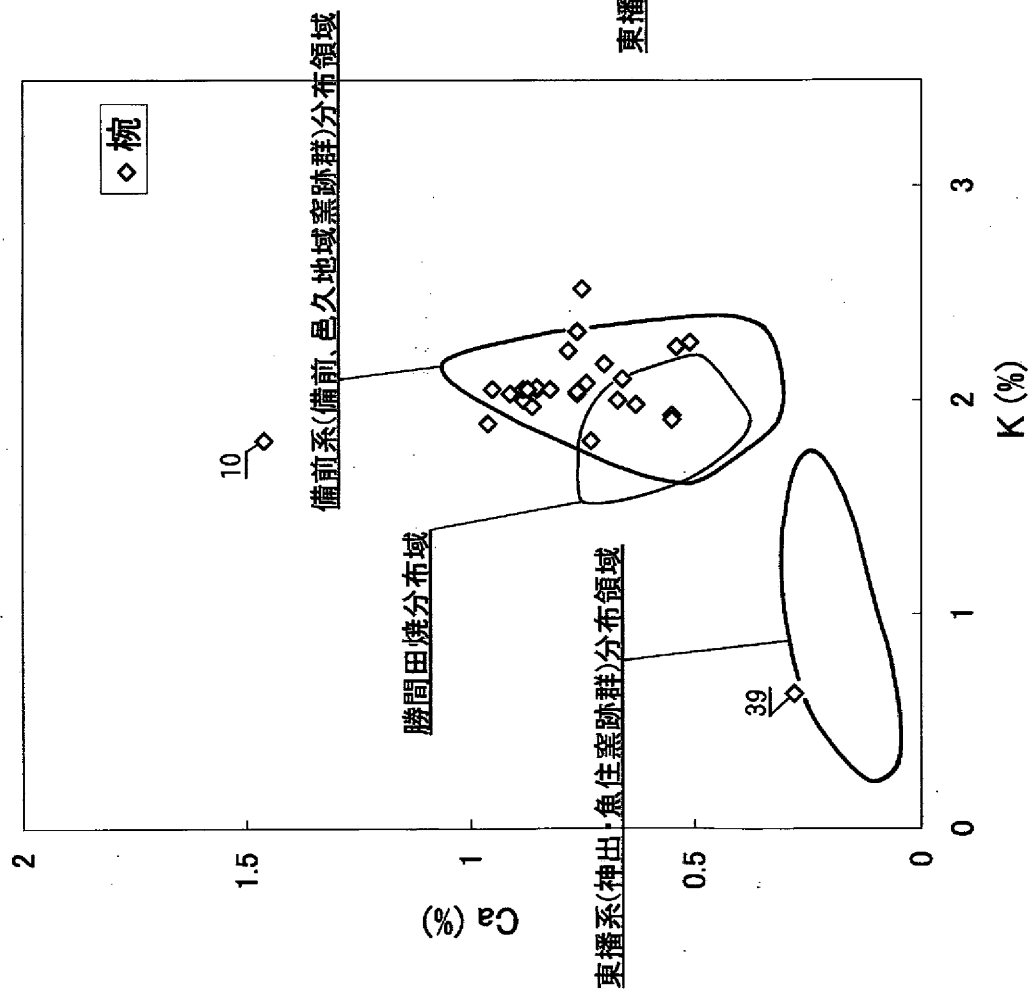
今回の分析で河道内出土の須恵器は、ほぼ生産地を推定することができたが、10（椀）と19（甕）

は産地が明確にならず、各生産地窯跡の分布領域以外のところに分布する結果となった。今後、同時期の窯跡資料を蓄積し再検討する必要がある。

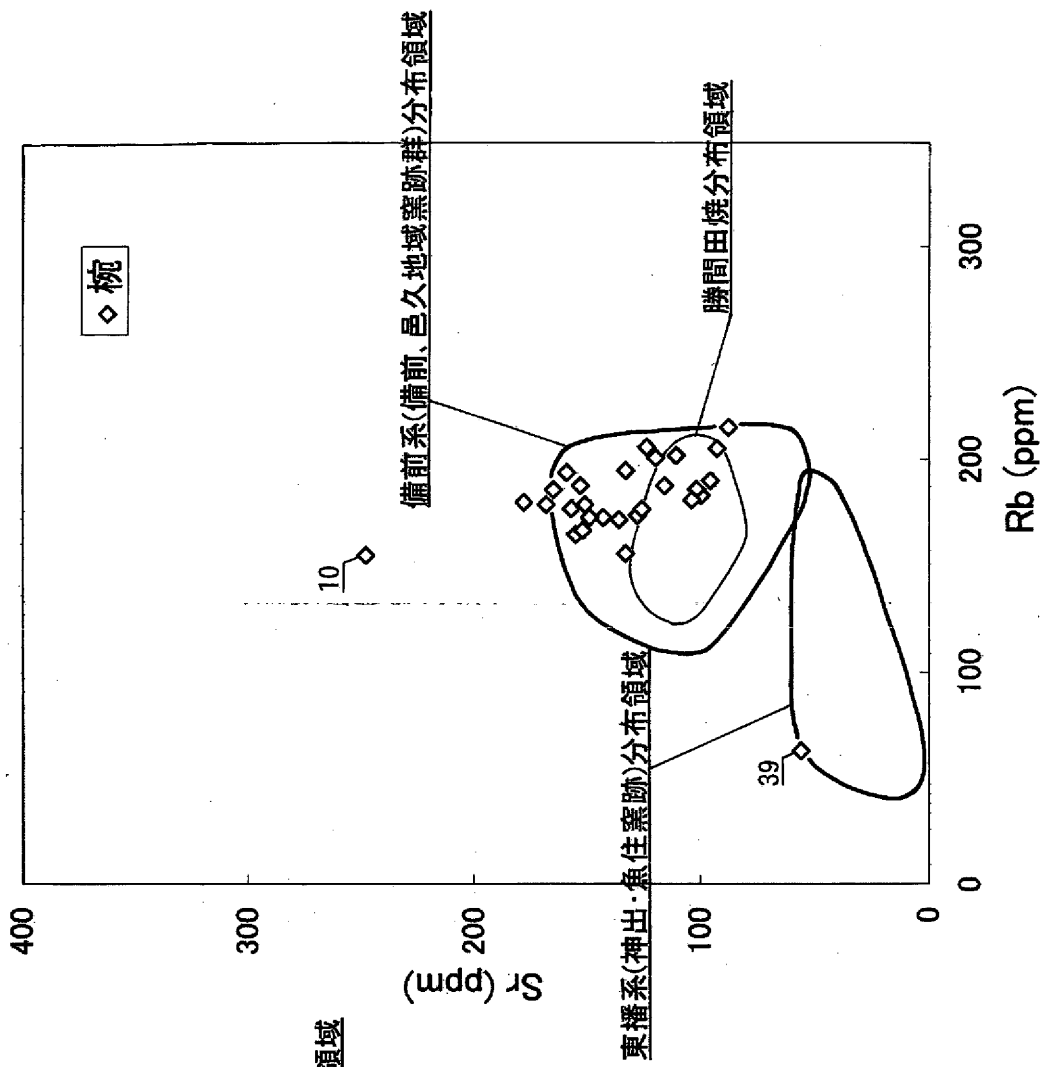
この分析の機会を与您にいただいた山磨康平氏をはじめ岡山県古代吉備文化財センターの職員の方々にはお世話になった。記して感謝いたします。

第1表 百間川米田遺跡出土中世須恵器の胎土分析一覧表(%) ただしRb、Sr、Zrはppm

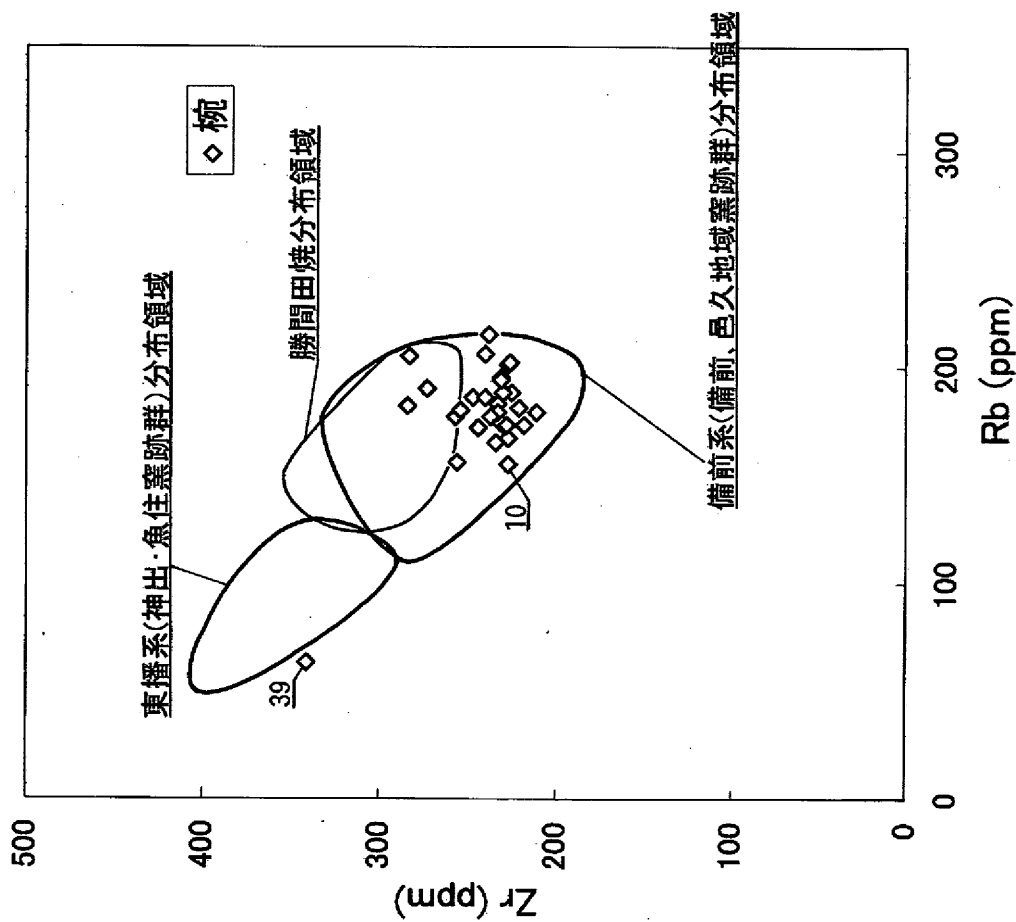
番号	遺構	器種	Si	Ti	Al	Fe	Mn	Mg	Ca	Na	K	P	Rb	Sr	Zr	形態・技法による生産地	胎土分析による生産地推定	掲載番号
1	6区河道4(相砂)	椀	70.14	0.71	18.13	3.77	0.04	1.69	0.63	2.69	1.98	0.09	183	100	233	備前系	備前系	1341
2	3区河道1下層	椀	69.78	0.80	17.97	3.41	0.03	1.68	0.88	3.22	2.02	0.07	174	128	231	備前系	備前系	
3	3区河道1下層	椀	69.19	0.73	18.45	3.78	0.03	1.73	0.76	2.74	2.32	0.08	206	124	240	備前系	備前系	
4	3区河道1底部	椀	70.84	0.76	17.44	3.42	0.04	1.70	0.96	2.69	1.89	0.11	165	155	234	備前系	備前系	
5	3区河道1下層	椀	69.83	0.81	18.28	3.99	0.03	1.69	0.85	2.19	2.05	0.11	179	168	233	備前系	備前系	
6	3区河道1下層	椀	70.40	0.75	17.93	3.74	0.03	1.68	0.76	2.43	2.03	0.07	172	136	244	備前系	備前系	
7	3区河道1下層	椀	68.65	0.84	19.82	4.03	0.03	1.68	0.55	2.26	1.93	0.06	188	116	225	備前系	備前系	
8	3区河道1	椀	69.13	0.74	19.02	3.50	0.02	1.70	0.78	2.61	2.23	0.10	195	133	231	備前系	備前系	
9	3区河道1上層	椀	69.02	0.79	18.61	4.00	0.03	1.69	0.85	2.64	2.06	0.14	167	152	227	備前系	備前系	
10	3区河道1上層	椀	67.08	0.72	19.47	4.61	0.04	1.82	1.46	2.73	1.81	0.07	155	248	227	備前系	?	
11	3区河道1底部	椀	65.04	1.12	20.84	5.47	0.06	1.97	0.55	2.81	1.91	0.05	186	102	247	備前系	備前系	
12	3区河道1下層	椀	70.57	0.73	17.72	3.66	0.03	1.62	0.74	2.52	2.08	0.13	201	120	227	備前系	備前系	
13	3区河道1下層	椀	69.11	0.81	18.83	4.00	0.03	1.60	0.88	2.42	2.00	0.14	177	157	237	備前系	備前系	1176
14	3区河道1	椀	69.96	0.81	18.00	3.42	0.03	1.68	0.91	2.88	2.03	0.11	173	143	218	備前系	備前系	1171
15	3区河道1底部	椀	68.88	0.84	19.07	3.84	0.03	1.71	0.82	2.47	2.05	0.11	188	153	230	備前系	備前系	1162
16	3区河道1底部	椀	69.04	0.82	18.78	3.84	0.03	1.68	0.86	2.69	1.97	0.12	179	151	211	備前系か東播系?	備前系	1180
17	3区河道1底部	椀	68.35	0.75	18.53	4.47	0.06	1.59	0.75	2.71	2.52	0.08	190	96	273	備前系?	備前系	1174
18	3区河道1下層	甕	68.54	0.84	17.68	5.65	0.07	1.82	0.49	3.17	1.53	0.09	98	72	234	備前系?	東播系	1186
19	3区河道1上層	甕	63.21	0.61	22.19	4.85	0.05	1.96	1.79	2.89	2.15	0.08	208	272	194	備前系	?	
20	3区河道1底部	甕	69.93	0.81	19.14	3.27	0.02	1.66	0.41	2.08	2.40	0.11	235	71	213	備前系	備前系	
21	3区具縁3周辺	甕	69.01	0.61	19.55	2.97	0.04	1.65	0.63	2.65	2.53	0.15	270	77	244	備前系	備前系	
22	3区河道1下層	鉢	74.68	0.84	15.57	2.17	0.01	1.59	0.26	2.50	2.14	0.09	149	66	390	?	?	
23	3区河道1下層	鉢	72.29	1.04	16.64	4.77	0.04	1.53	0.13	1.71	1.61	0.09	136	29	286	備前系	東播系	
24	3区河道1下層	鉢	73.78	1.06	14.95	5.13	0.06	1.56	0.23	1.99	0.94	0.17	93	34	320	東播系	東播系	
25	3区河道1下層	鉢	72.54	0.73	16.20	3.22	0.03	1.56	0.67	2.54	2.26	0.11	158	100	306	備前系	備前系or備前系	
26	3区河道1下層	鉢	74.80	1.20	14.29	4.59	0.04	1.62	0.23	1.95	0.95	0.16	102	39	335	東播系	東播系	
27	3区河道1上層	鉢	71.25	0.70	17.43	4.03	0.03	1.65	0.44	2.00	2.21	0.14	192	74	188	備前系	備前系or備前系	1079
28	3区河道1上層	鉢	68.79	0.72	19.76	3.04	0.02	1.63	0.57	2.49	2.68	0.13	295	67	284	備前系	備前系	
29	3区河道1	椀	70.40	0.77	17.63	3.97	0.03	1.67	0.67	2.62	2.00	0.08	177	126	257	備前系	備前系	
30	3区河道1下層	椀	69.49	0.79	18.84	3.48	0.04	1.67	0.66	2.71	2.10	0.07	181	104	221	備前系	備前系	
31	3区河道1下層	椀	68.75	0.81	19.04	3.69	0.04	1.63	0.70	1.94	2.17	0.09	202	111	226	備前系	備前系	
32	3区河道1底部	椀	69.79	0.66	19.37	2.69	0.03	1.67	0.54	2.75	2.25	0.10	215	88	238	備前系	備前系	
33	3区河道1下層	椀	70.78	0.80	17.77	3.58	0.03	1.58	0.76	2.35	2.04	0.08	173	149	228	備前系	備前系	
34	3区河道1下層	椀	69.13	0.79	18.52	4.08	0.02	1.69	0.88	2.55	2.05	0.12	194	159	231	備前系	備前系	
35	3区河道1下層	椀	70.12	0.79	17.40	4.51	0.03	1.59	0.73	2.73	1.81	0.13	156	133	256	備前系	備前系	
36	3区河道1底部	椀	71.57	0.69	17.27	3.36	0.03	1.58	0.51	2.44	2.27	0.12	205	93	283	備前系	備前系	
37	3区河道1	椀	69.27	0.81	18.13	4.05	0.04	1.65	0.95	2.80	2.05	0.12	180	178	254	備前系	備前系	
38	3区河道1下層	椀	69.47	0.76	18.37	4.24	0.03	1.62	0.87	2.24	2.05	0.12	186	165	240	備前系	備前系	
39	2区河道1西段下層	椀	76.78	1.10	13.85	3.85	0.04	1.51	0.28	1.69	0.63	0.15	63	56	341	東播系?	東播系	1034



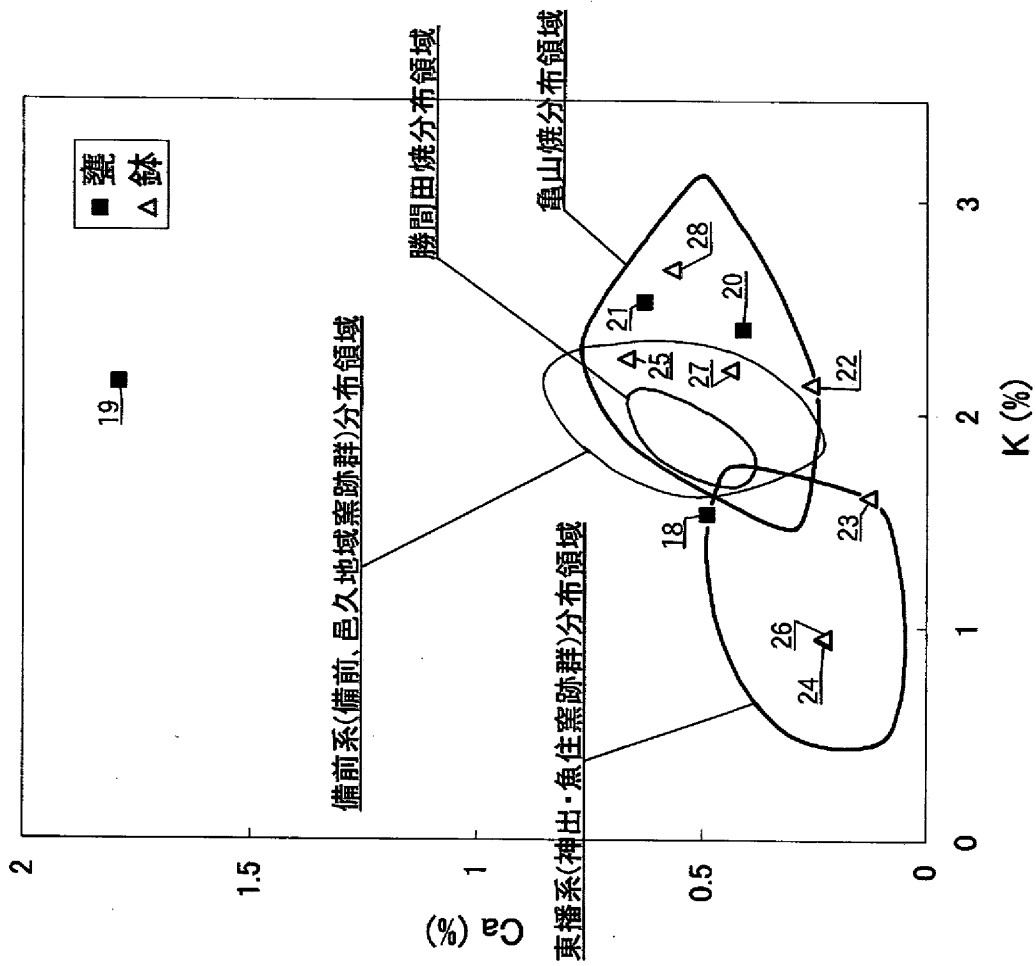
第1図 百間川米田遺跡出土中世須恵器(椀)の生産地推定



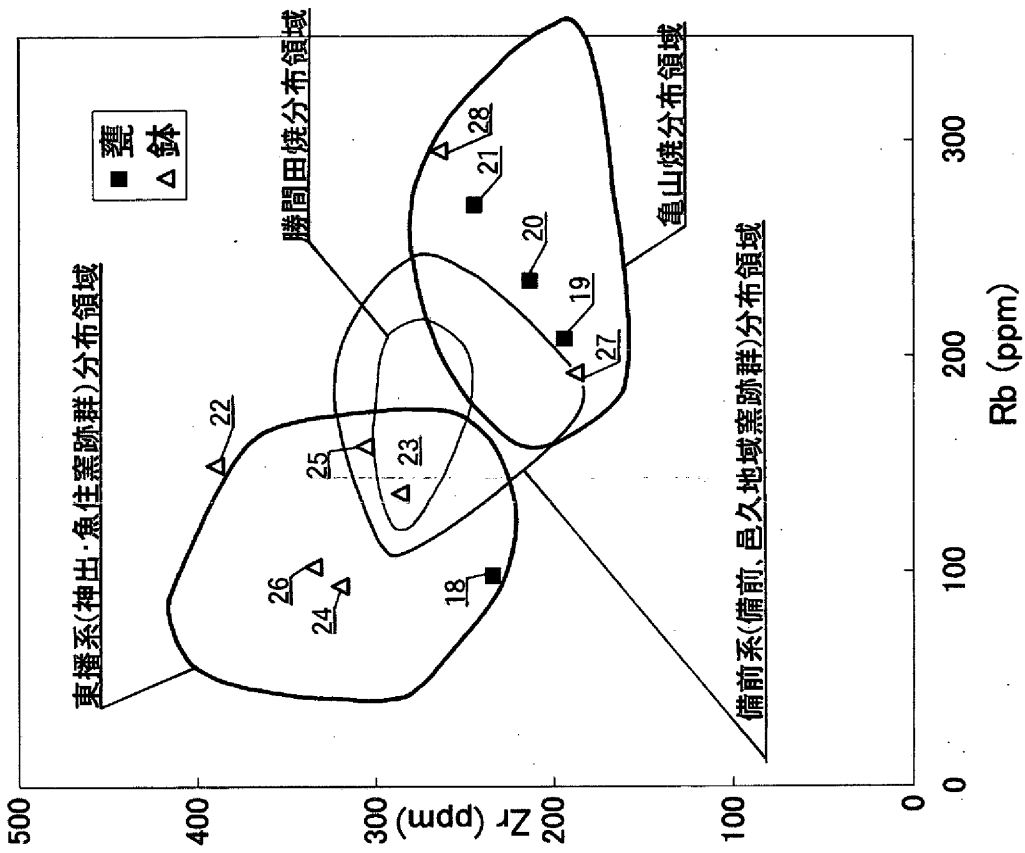
第2図 百間川米田遺跡出土中世須恵器(椀)の生産地推定



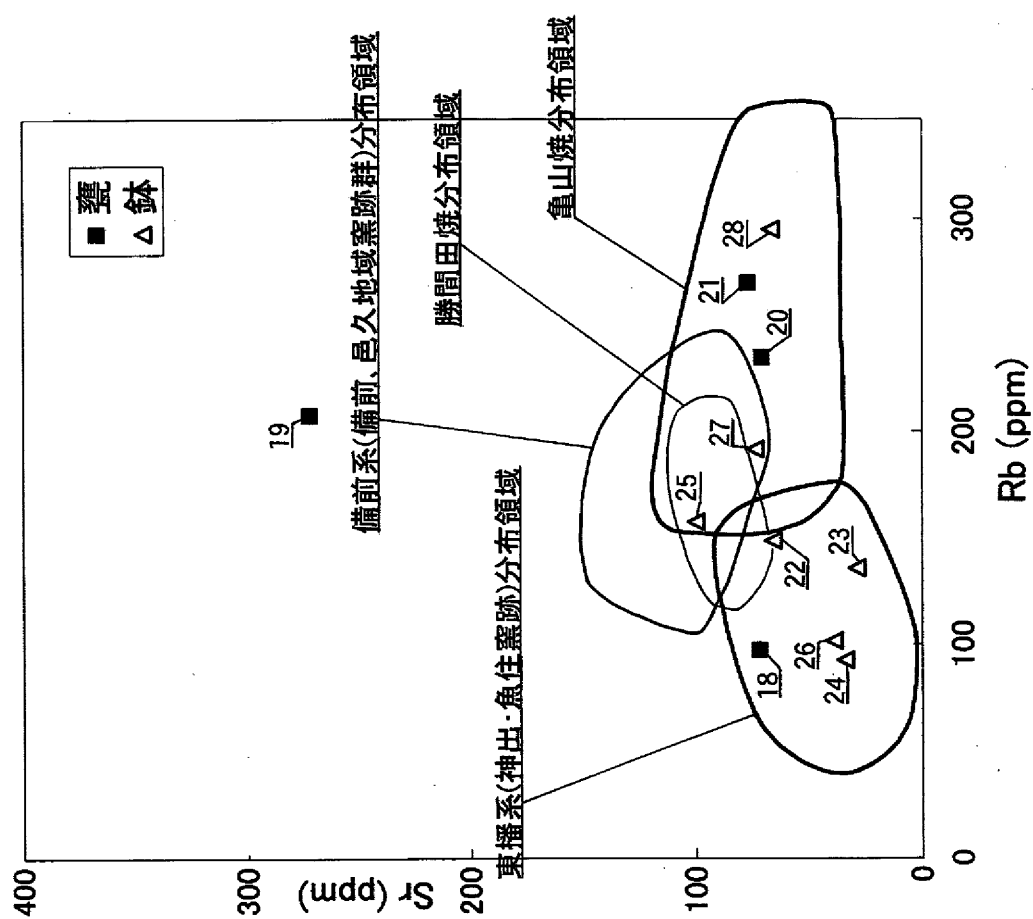
第3図 百間川米田遺跡出土中世須恵器(枕)の生産地推定



第4図 百間川米田遺跡出土中世須恵器(甕, 鉢)の生産地推定



第5図 百間川米田遺跡出土中世須恵器(甕, 鉢)の生産地推定



第6図 百間川米田遺跡出土中世須恵器(甕, 鉢)の生産地推定

付載 4 百間川米田遺跡出土

製鉄・鍛冶関連遺物の金属学的調査

大澤正己・鈴木瑞穂

1 いきさつ

94年度調査地区（当麻調査区）より、古墳時代後期～古代に比定される土坑314出土の鉄滓1点と、95・96年度調査地区（岩間上調査区）河道1から主に中世に比定される椀形鍛冶滓・ガラス質滓・羽口などの鍛冶関連遺物が出土したため、当遺跡での鉄器生産の実態を検討すべく金属学的調査を実施した。

2 調査方法

1-1 供試材

Table.1に示す。古墳時代後期～古代に比定される鉄滓1点、中世に比定される椀形鍛冶滓・鍛冶滓各1点の調査である。

1-2 調査方法

(1) 肉眼観察

遺物の肉眼観察所見。これらの所見をもとに分析試料採取位置を決定する。

(2) マクロ組織

本来は肉眼またはルーペで観察した組織であるが、本稿では顕微鏡埋込み試料の断面全体像を、投影機の10倍もしくは20倍で撮影したものを指す。当調査は、顕微鏡検査によるよりも広い範囲にわたって、組織の分布状態、形状、大きさなどの観察ができる利点がある。

(3) 顕微鏡組織

切り出した試料をベークライト樹脂に埋込み、エメリー研磨紙の#150、#240、#320、#600、#1000と順を追って研磨し、最後は被研磨面をダイヤモンド粒子の3 μ と1 μ で仕上げて光学顕微鏡観察を行った。

(4) ビッカース断面硬度

鉄滓の鉱物組成と、金属鉄の組織同定を目的として、ビッカース断面硬度計 (Vickers Hardness Tester) を用いて硬さの測定を行った。試験は鏡面研磨した試料に136°の頂角をもったダイヤモンドを押し込み、その時に生じた窪みの面積をもって、その荷重を除した商を硬度値としている。試料は顕微鏡用を併用した。

(5) 化学組成分析

供試材の分析は次の方法で実施した。

全鉄分 (Total Fe)、金属鉄 (Metallic Fe)、酸化第一鉄 (FeO)：容量法。

炭素 (C)、硫黄 (S)：：燃烧容量法、燃烧赤外吸収法

二酸化硅素 (SiO_2)、酸化アルミニウム (Al_2O_3)、酸化カルシウム (CaO)、酸化マグネシウム (MgO)、酸化カリウム (K_2O)、酸化ナトリウム (Na_2O)、酸化マンガン (MnO)、二酸化チタン (TiO_2)、酸化クロム (Cr_2O_3)、五酸化磷 (P_2O_5)、バナジウム (V)、銅 (Cu)、：ICP (Inductively Coupled Plasma Emission Spectrometer) 法：誘導結合プラズマ発光分光分析。

3 調査結果

HYK - 1 鉄滓 (製鍊滓?)

①肉眼観察：小型でほぼ完形の椀形滓様の試料である。表面は淡褐色の酸化土砂が付着する。上面は平坦気味、黒色のガラス質の質感で中小の気孔が散在する。下面には細かい木炭痕がみられる。

②顕微鏡組織：Photo.1①～③に示す。発達した淡灰色木ずれ状結晶ファイヤライト (Fayalite: $2\text{FeO} \cdot \text{SiO}_2$) が基地の暗黒色ガラス質滓中に晶出する。

③化学組成分析：Table.2に示す。鉄分低くガラス質分の多い成分系である。全鉄分 (Total Fe) 32.29% に対して、金属鉄 (Metallic Fe) 0.16%、酸化第1鉄 (FeO) 30.79%、酸化第2鉄 (Fe_2O_3) 11.72% の割合であった。ガラス質成分 ($\text{SiO}_2 + \text{Al}_2\text{O}_3 + \text{CaO} + \text{MgO} + \text{K}_2\text{O} + \text{Na}_2\text{O}$) 44.08% で、このうちに塩基性成分 ($\text{CaO} + \text{MgO}$) 5.07% を含む。砂鉄特有成分の二酸化チタン (TiO_2) 0.61%、バナジウム (V) 0.26% 低値で、脈石成分の酸化マンガン (MnO) 3.50% と高く、銅 (Cu) も 0.023% と高めであった。また、他の随伴微量元素の中では五酸化磷 (P_2O_5) が 1.61% と高値であるのが注目される。

当試料は酸化マンガン (MnO)、五酸化磷 (P_2O_5) が異常に高値で、銅 (Cu) はやや多めの傾向にある。高マンガン (Mn)、高磷 (P) の鍛冶滓はあまり類例がなく、この化学組成と鉱物組成を合わせて考えると、外観的には椀形鍛冶滓様であるが鉱石系製鍊滓である可能性が高い。鍛冶滓であるなら鉱石を始発原料とする鉄塊系遺物の不純物除去の精鍊鍛冶工程初期の派生物の可能性はあるが、鍛冶工程でこれほどの濃度に不純物が濃縮される可能性は低いと考えられる。なお、高Mn・高P鉱石は津山市所在狐塚の8号住居址から出土し、(注1) 鉱石製鍊滓は備中平遺跡から出土している。(注2) また、高Mn単独の製鍊滓は津山市の築瀬古墳からも出土していた。(注3)

HYK - 2 椀形鍛冶滓

①肉眼観察：完形の椀形鍛冶滓である。上面は気孔が多くガスの抜けきっていない質感であるが、表面は滑らかで平坦気味。1個所羽口の送風の影響か凹部があり、周囲はガラス質化が顕著である。下面は大小の木炭を多数噛み込んでいる。中小の気孔もやや密に認められる。

②顕微鏡組織：Photo.1④に示す。白色粒状結晶ヴスタイト (Wüstite: FeO)、淡灰色木ずれ状結晶ファイヤライト (Fayalite: $2\text{FeO} \cdot \text{SiO}_2$) が基地の暗黒色ガラス質滓中に晶出する。鍛鍊鍛冶滓の晶癖である。

③ピッカース断面硬度：紙面の構成上、硬度測定の際の圧痕の写真は割愛したが白色粒状結晶の硬度を測定した。硬度値は475Hvであった。ヴスタイトの文献硬度値(注4)の範囲内であり、ヴスタイト (Wüstite: FeO) に同定される。

④化学組成分析：Table.2に示す。脈石成分 (TiO_2 、V、 MnO) の低減した成分系である。全鉄分 (Total Fe) 47.92% に対して、金属鉄 (Metallic Fe) 0.06%、酸化第1鉄 (FeO) 46.96%、酸化第2鉄 (Fe_2O_3) 16.24% の割合であった。ガラス質成分 ($\text{SiO}_2 + \text{Al}_2\text{O}_3 + \text{CaO} + \text{MgO} + \text{K}_2\text{O} + \text{Na}_2\text{O}$) 32.61%

で、このうちに塩基性成分 (CaO+MgO) 3.30%を含む。砂鉄特有成分の二酸化チタン (TiO₂) 0.35%、バナジウム (V) 0.010%、酸化マンガン (MnO) 0.15%、銅 (Cu) 0.010%であった。鉱石系の鍛錬鍛冶滓の可能性はある。

HYK-3 鍛冶滓

①肉眼観察：偏平で平面不整四角形を呈する鍛冶滓である。淡褐色の酸化土砂に覆われ、破面はあまり明確でないが側面2面と上面の一部が破面である。滓の地の色調は灰色で風化が顕著である。また、銹化により茶褐色を呈する個所が下面中央を中心に広がり、金属鉄の残留は認められないものの、小さな金属鉄を含む試料であったと考えられる。上面は気孔が密にみられ、下面は細かい木炭痕による凹凸が著しい。

②顕微鏡組織：Photo.1⑤～⑦に示す。⑤は上面側表層、⑥は下面側表層、⑦は中央部の組織である。下面側はやや風化気味の鉱物相である。白色粒状結晶ヴスタイト (Wüstite: FeO)、淡灰色木ずれ状結晶ファイヤライト (Fayalite: 2 FeO · SiO₂) が基地の暗黒色ガラス質滓中に晶出する。鍛錬鍛冶滓の晶癖である。

4 まとめ

〈1〉古墳時代後期～古代に比定される土坑出土の椀形様滓 (HYK-1) の鉱物組成はファイヤライト (Fayalite: 2 FeO · SiO₂) の晶出のみが認められる。また、化学組成は酸化マンガン (MnO)、五酸化燐 (P₂O₅)、銅 (Cu) が高値であり、鉱石系製錬滓の可能性が高い。在地の鉱石を原料とする製鉄遺跡からの搬入物と考えられる。

〈2〉中世に比定される椀形鍛冶滓 (HYK-2)・鍛冶滓 (HYK-3) の鉱物組成はヴスタイト (Wüstite: FeO)、ファイヤライト (Fayalite: 2 FeO · SiO₂) で構成され、鍛錬鍛冶滓に分類される。2点のみの調査であり、ここから生産の全体像を推測することは困難であるが、鍛錬鍛冶工程が行われていたことが確認できた。

注

- (1) 大澤正己「鉄滓類の分析結果」『狐塚遺跡発掘調査報告』(津山市埋蔵文化財発掘調査報告第2集)津山市教育委員会 1974 <1.45%MnO-2.05%P₂O₅>
- (2) 大澤正己「岡山県下の古代製鉄研究」『椀山遺跡群』(久米開発事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告2)久米開発事業に伴う文化財調査報告会 1980 <4.66%MnO - 2.08% · P₂O₅ - 0.020%Cu>
- (3) 大澤正己「築瀬古墳群出土鉄滓の調査」『築瀬古墳群』(津山市埋蔵文化財発掘調査報告第13集)津山市教育委員会 1983 <2.49~4.04%MnO-0.19~0.27%P₂O₅>
- (4) 日刊工業新聞社『焼結鉱組織写真および識別法』1968 当刊行物にはヴスタイトの硬度値は450~500Hv、マグネタイト500~600Hv、ファイヤライト600~700Hvとある。

Table.1 供試材の履歴と調査項目

符号	遺跡名	遺跡名称	出土位置	遺物名称	推定年代	計測値			調査項目				備考		
						大きさ (mm)	重量 (g)	メタル度	マクロ組織	ミクロ組織	ビッカース硬度	X線回折		CMAA化学分析	断面硬度
HYK-1	右開山米田	鉄滓 (製鐵滓?)	7・J上坑314	鉄滓 (製鐵滓?)	古墳時代後期～ 古代	40×31×18	23.73	なし	○	○		○			
HYK-2	右開山米田	桶形鍛冶滓	2区東半河道1番口	桶形鍛冶滓	中世	90×76×29	248.26	なし	○	○		○			
HYK-3	右開山米田	桶形鍛冶滓	3区河道1掘のトザヤ	桶形鍛冶滓	中世	44×28×13	25.05	なし	○	○		○			

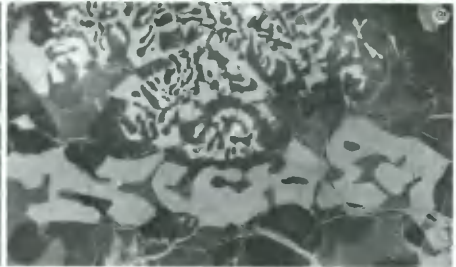
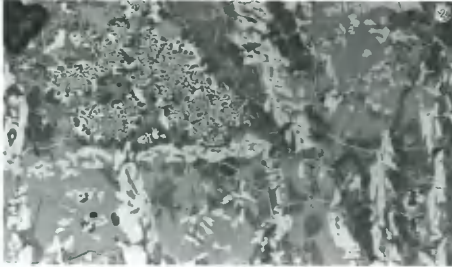
Table.2 供試材の化学組成

符号	遺跡名	遺跡名称	推定年代	全成分 (Total Fe)	全鉄 (Metallic Fe)	酸化第1鉄 (FeO)	酸化第2鉄 (Fe ₂ O ₃)	酸化アルミニウム (Al ₂ O ₃)	酸化カルシウム (CaO)	酸化マグネシウム (MgO)	酸化ナトリウム (Na ₂ O)	酸化マンガン (MnO)	二酸化チタン (TiO ₂)	酸化クロム (Cr ₂ O ₃)	硫黄 (S)	五酸化リン (P ₂ O ₅)	炭素 (C)	バナジウム (V)	銅 (Cu)	ごみ		
																				透澤成分 Total Fe	透澤成分 Total Fe	
HYK-1	右開山米田	鉄滓 (製鐵滓?)	古墳時代後期～ 古代	32.29	0.16	30.79	11.72	29.59	8.02	9.02	0.54	0.86	3.50	0.61	0.023	0.02	1.61	0.26	0.080	0.023	44.08	1.365
HYK-2	右開山米田	桶形鍛冶滓	中世	47.92	0.06	46.96	16.24	22.32	4.99	2.34	0.96	1.33	0.67	0.15	0.35	0.010	0.37	0.38	0.010	0.010	32.61	0.081

HYK - 1

鉄滓 (製錬滓)

①×100 ファイヤライト
②×100 ③×400 ファイヤ
ライト

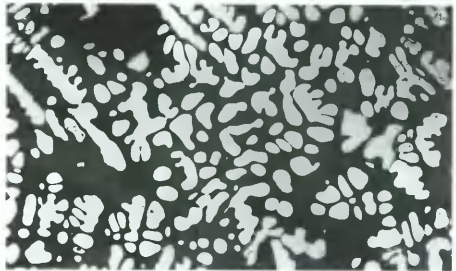


HYK - 2

椀形鍛冶滓

④×100 ヴスタイト (粒内微
小析出物あり)・ファイヤライト

(白色粒状結晶 硬度圧痕
475Hv: ヴスタイト)



HYK - 3

鍛冶滓

⑤×100 ヴスタイト・ファイ
ヤライト

⑥×100 ヴスタイト・ファイ
ヤライト (風化)

⑦×100 ヴスタイト・ファイ
ヤライト

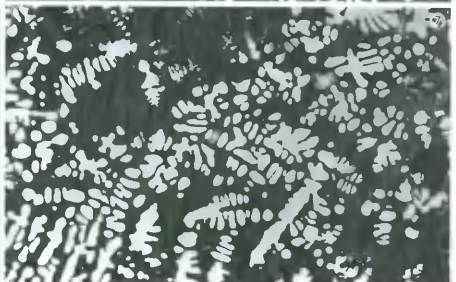
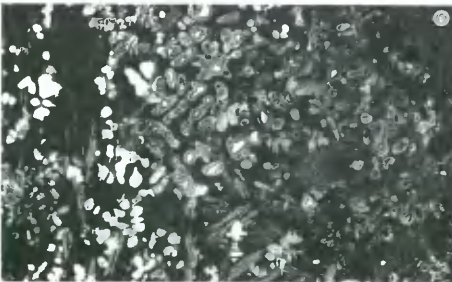
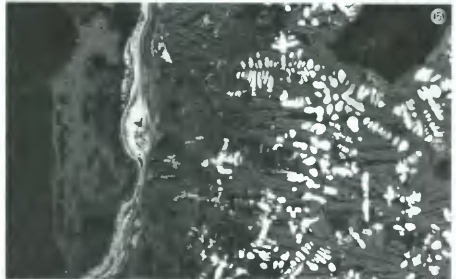


Photo.1 鉄滓の顕微鏡組織

付載5 百間川米田遺跡から出土した木製品 および種実遺体の同定

パリノ・サーヴェイ株式会社

はじめに

百間川米田遺跡では、古墳時代初頭や、中世～近世の遺構が検出されている。これらの遺構からは、井戸枠などの遺構構築材や、椀・曲物などの生活用品を中心とした木製品が出土している。また、遺跡周辺に生育していた植物や食物残渣などと考えられる種実遺体も検出されている。

本報告では、これらの木製品の樹種同定を行い、用材選択に関する資料を得る。また、種実遺体の同定を行い、周辺植生や植物食糧などに関する資料を得る。

1. 木製品の樹種同定

(1) 試料

試料は、出土した木製品62点である。このうち、試料番号岩71は完形の曲物であったため、側板と底板のそれぞれから試料を採取した。各試料の詳細は、樹種同定結果と共に表1に記した。

(2) 方法

剃刀の刃を用いて木口（横断面）・柀目（放射断面）・板目（接線断面）の3断面の徒手切片を作製し、ガム・クロラール（抱水クロラール、アラビアゴム粉末、グリセリン、蒸留水の混合液）で封入し、プレパラートを作製する。作製したプレパラートは、生物顕微鏡で観察・同定する。

(3) 結果

樹種同定結果を表1に示す。木製品は、針葉樹6種類（マツ属複雑管束亜属・モミ属・スギ・ヒノキ・サワラ・マキ属）と広葉樹11種類（ブナ属・コナラ属コナラ亜属クスギ節・コナラ属アカガシ亜属・クリ・ツブラジイ・クスノキ・ヒサカキ・モッコク・イスノキ・トチノキ・チシャノキ）に同定された。（各種類の主な解剖学的特徴は略す。）

(4) 考察

樹種同定を行った木製品の時期は、古墳時代初頭、中世、中世～近世に分けられる。各時期の用途別種類構成を表2に示す。

古墳時代初頭では、木錘状、盤状大型製品、加工丸太、用途不明がある。いずれも用途の詳細は不明であり、過去の類似との比較は困難である。これまで百間川遺跡群でこれまで行われてきた調査では、弥生時代から中世に至る各時期でアカガシ亜属の木材が様々な用途に確認されている（パリノ・サーヴェイ株式会社、1995a、1997a；能城、1995）。今回のアカガシ亜属の検出例も、その一例といえる。古墳時代の木製品については、今後用途などが明らかになった段階で改めて検討したい。

中世の木製品では、漆椀、曲物、櫛など日常の生活で利用する製品、井戸枠などの建築部材などが出土している。全体的には針葉樹のヒノキ・サワラの利用が目立ち、井戸枠や曲物など様々な用途に利用されていたことがうかがえる。このような利用の背景には、ヒノキ・サワラの木材が、加工が容易で耐水性に優れた材質を有していることなども考慮されていると考えられる。中世におけるヒノキ

表1 樹種同定結果

番号	地区	遺構	時代・時期	遺物	樹種	掲載番号
当1	5C	溝321	中世～近世	曲物底板	ヒノキ	W25
当2	4B	溝321最下層	中世～近世	加工板材	モミ属	W21
当3	4B	溝321	中世～近世	底板	ヒノキ	W27
当4	4B	溝321	中世～近世	曲物底板	ヒノキ	W23
当5	5C	溝321	中世～近世	曲物底板	ヒノキ	W24
当6	4B	溝321最下層	中世～近世	札	スギ	W28
当7	4B	溝321最下層	中世～近世	漆碗	ブナ属	W26
当8	5C	溝321上層	中世～近世	加工板材	ヒノキ	W19
当9	5C	溝321上層	中世～近世	加工板材	ヒノキ	W18
当10	4B	溝321	中世～近世	加工板材	マツ属複雑管束亜属	W22
当11	4B	溝321	中世～近世	船形	スギ	W29
当12	4B	溝321	中世～近世	加工板材	ヒノキ	W20
当13	4B	溝321埋土 (L=27.4cm)	中世～近世	曲物底板	ヒノキ	—
当14	3B	井戸312	中世～近世	曲物底板	ヒノキ	W6
当15	8H	井戸311 (中層)	古墳時代初頭	加工丸太	コナラ属アカガシ亜属	W5
当16	8H	井戸311	古墳時代初頭	木錘状	広葉樹	W1
当17	8H	井戸311	古墳時代初頭	木錘状	ヒノキ	W3
当19	8H	井戸311 (中層)	古墳時代初頭	殻状大型製品	クスノキ	W4
当33	9K	井戸315 (最下層出土木器)	中世	漆碗	トチノキ	W13
当40	9K	井戸315	中世	井戸枠 (横棧) G	ツブラジイ	—
当47	9K	井戸315	中世	井戸枠縦板N	スギ	—
当50	9K	井戸315	中世	井戸枠角柱Q	ヒノキ	—
当51	9K	井戸315	中世	井戸枠角柱R	ヒノキ	—
当52	9K	井戸315	中世	井戸枠角柱S	ヒノキ	—
当53	9K	井戸315	中世	井戸枠角柱T	ツブラジイ	—
当54	8K	井戸314	中世	曲物	ヒノキ	W9
当55	12Q	溝323	中世～近世	漆碗	トチノキ	W32
岩1	2区東半	河道1 扇口1中層	中世	曲物底板	ヒノキ	W88
岩2	2区東半	河道1 扇口1	中世	方形薄板	サワラ	W102
岩3	2区西半	河道1 中層	中世	陽物形	マツ属複雑管束亜属	W86
岩5	2区東半	貝塚1 下の河道扇口	中世	鋤先?	コナラ属アカガシ亜属	W90
岩7	2区東半	西側南北側溝の南端	中世	曲物底板	サワラ	W116
岩8	2区東半	河道1 中間部	中世	編貝	コナラ属コナラ亜属クスギ節	W107
岩10	2区西半	河道1 扇口1	中世	板状加工材	スギ	W100
岩16	2区東半	河道1 東半の貝層下部残り	中世	櫛	イスノキ	W112
岩20	2区	溝13南端アゼ除去中最下層	中世～近世	錐状	コナラ属アカガシ亜属	W35
岩24	2区	貝塚1C区貝層中	中世	櫛2片	イスノキ	W42
岩32	2区	溝14・15アゼ (東から0本目)	中世	加工角材 (穿孔)	スギ	W36
岩34	2区	河道1 扇口1	中世	曲物 (縦ケビキ)	サワラ	W94
岩35	2区	南東部掘集東半	中世	木槌?	マツ属複雑管束亜属	W118
岩40	2区	西半河道1 下り (砂層より下)	中世	陽物形?	クリ	W87
岩58	3区	河道1 掘り下げ中 (L=0.4m)	中世	擬宝珠	マキ属	W155
岩60	3区	貝塚3 南東区上層貝層	中世	舟形	マツ属複雑管束亜属	W62
岩61	3区	河道1 上層	中世	漆器	ユズリハ属	W125
岩64	3区	河道1 内より	中世	陽物形	シャシャンボ	W153
岩65	3区	中世河道1 下層	中世	櫛	チシヤノキ	W159
岩66	3区	河道1 内より	中世	刀形の柄	サワラ	W163
岩67	3区	河道1 内より	中世	台付櫛	サワラ	W160
岩68	3区	河道1 内より	中世	把手?	ヒノキ	W150
岩69	3区	貝塚3 直下	中世	箸	ヒノキ	W54
岩71	3区	河道1 上層より	中世	曲物底板	サワラ	W134
岩72	3区	河道1 内より	中世	曲物側板	スギ	—
岩73	3区	河道1 内より	中世	箸	ヒノキ	W129
岩75	3区	河道1 掘り下げ中 (下層)	中世	輪?	マツ属複雑管束亜属	W147
岩78	3区	中世河道1 下層	中世	漆碗	トチノキ	W158
岩84	3区	中世河道1 下層	中世	曲物底板	サワラ	W136
岩90	1区	中世河道1 河底	中世	卒塔婆	ヒノキ	W83
岩91	1区	河道1 内より	中世	柄?	マツ属複雑管束亜属	W80
岩94	1区	中世河道1 上層	中世	卒塔婆	ヒノキ	W84
岩95	1区	河道1 底部	中世	卒塔婆	サワラ	W85
岩96	1区	河道1 下層	中世	曲物底板	ヒノキ	W72
岩103	1区	河道1 下層	中世	漆器	トチノキ	W78
岩107	1区	河道1 下層	中世	加工材 (把手?)	サワラ	W74

表2 時代別・用途別種類構成

時代・時期	用途	榿 葉巻 器 類	モ ノ ノ キ	ヒ ノ キ	サ ウ ラ	マ キ ノ キ	ブ ナ ノ キ	ア カ ガ シ ノ キ	ク ス ノ キ	ツ ブ ラ ジ イ	ク ス ノ キ	エ ズ リ ノ キ	シ ヤ ン ボ	イ ス ノ キ	ト チ ノ キ	チ ヤ ノ キ	広 葉 樹	合 計
中世～近世	漆碗						1								1			2
	曲物底板			5														5
	底板			1														1
	札			1														1
	鋸状							1										1
	舟形																	1
	加工板材	1	1	3						2								6
	井戸枠			3														3
	鑑先							1										1
	木槌	1																1
中世	櫛	1																1
	漆器										1			1				2
	漆碗														2			2
	碗														1			1
	白付碗				1													1
	曲物			1														2
	曲物底板			2	3													5
	曲物側板				1													1
	枳	1																1
	箸			2														2
	櫛													2				2
	櫛具							1										1
	把手			1	1													2
	羊耳盛			2	1													3
	随物形	1								1			1					3
	舟形	1																1
	刀形の柄				1													1
	擬宝珠					1												1
	方形薄板				1													1
	板状加工材			1														1
加工角材			1														1	
占墳時代初期	木鏃状			1							1							1
	籠状大型製品									1		1						1
	加工丸太																	1
	用途不明																	1
合 計		2	1	21	16	2	1	3	1	2	1	1	2	4	1	1	1	63

材の大量利用は、兵庫県三田市川除・藤ノ木遺跡の井戸材を中心とした木製品や、広島県福山市草戸千軒町遺跡の下駄などにも見ることができ(島地・林, 1992; パリノ・サーヴェイ株式会社, 1997b)。これらの結果から、中世には中国地方でヒノキ材が大量に利用されていたことがうかがえる。

一方、ヒノキが多く利用される中、櫛は2点ともイスノキ、碗類はトチノキを主としており、特定の広葉樹材を選択して

いたことが推定される。櫛については、草戸千軒町遺跡で調査を行った4点全点、兵庫県龍野市小丸丸遺跡でも出土した1点がそれぞれイスノキに同定されている(山内, 1976; 島地, 1989)。全国で出土した櫛の同定結果を見ても、イスノキの出土例は多い(島地・伊東, 1988; 伊東, 1991)。また、現在イスノキが分布しない新潟県や長野県では、平安時代の遺構からイスノキの櫛が出土している(川村, 1983; 高橋・辻本, 1999)。これらの結果から、イスノキは古くから櫛の材としてよく利用され、流通により各地に運ばれていたことが推定される。今回の結果も、イスノキが櫛の材として多く利用されていたことを示す一例といえる。イスノキの櫛は、東京都内の江戸時代の遺跡からも出土例があり(松葉, 1997)、櫛の良材として近世まで利用されていたことがうかがえる。また、碗類のトチノキも各地で多くの出土例が知られており(島地・伊東, 1988; 伊東, 1991)、本遺跡周辺でも北方中溝遺跡1区で出土例がある(パリノ・サーヴェイ株式会社, 1998)。民俗事例では、乾燥が難しく狂いも大きい、加工が容易なこと、木材が大量に得られることから、碗などによく利用される(橋本, 1979)。今回同定を行った碗の中には、漆塗りを施したものも見られる。漆塗りは、その工程によって上品・下品などの分類がある。漆塗りの状態と樹種との関係を調査した結果では、漆塗りの簡単な下品にトチノキやブナ属が多いことが指摘されている(北野, 1999)。今回の碗類については、漆塗りの断面観察を行っていないため、漆塗りの工程については不明である。今後、断面観察についても行き、総合的に検討したい。

中世～近世では、漆碗、曲物底板などが出土している。基本的には中世の木製品の用材選択と一致しており、同様の用材選択が行われたことが指摘できる。とくに、曲物底板と底板は全てヒノキ、漆碗はブナ属とトチノキであり、用途によって樹種を選択していたことがわかる。

2. 種実遺体の同定

(1) 試料

試料は表3に示す19点である。同一試料名で複数袋存在するものは一括した。また、「井戸315」は上壤であるが、他は水洗試料から種実のみ分離されたものと未だ分離されていない状態のものがある。

(2) 方法

土壌試料については、約300ccに数%の水酸化ナトリウム水溶液を浸して放置し、試料の泥化を行う。0.5mmの篩を通して水洗し、残渣を集める。残渣を双眼実体顕微鏡で観察し、同定可能な種実遺体を抽出・計数する。その他の試料に関しても、双眼実体顕微鏡で観察し、同定可能な種実遺体を抽出・計数する。

(3) 結果

結果を表3に示す。(検出された種類の形態的特徴は略す。)

(4) 考察

今回検出された種実をみると、栽培のため渡来したものの、周囲の山野で採取可能な有用植物、遺跡周辺に生育していたと見られる木本・草本類に分けられる。

栽培種ならびに栽培のために渡来した種類は、モモ、ウメ、イネ、メロン類、ヒョウタン類がある。これらは当時栽培され、利用されていたものと考えられる。中世の遺跡では、遺構から多くの栽培植物の種実が得られることがあり、当時の生業を知る上で、重要な情報となる。その例として、中世広島島の草戸千軒遺跡(パリオ・サーヴェイ株式会社, 1995b, 1995c)や奈良県の箸尾遺跡(金原, 1994)、東京都の葛西城(橋本, 1993)などがあげられる。今回得られた種類は、これらの遺跡でも検出されており、いずれの種類も広く栽培が行われていたことが示唆される。このうち、イネに関しては、灰化された状態で検出されている。稲粃を焼却した残渣が残ったものと考えられる。

周囲の山野で採取可能な可食植物としては、オニグルミ、アカガシ亜属、トチノキがある。いずれの種類も周囲の山野にふつうに産することから、種実を容易に採取でき、食用として利用されていたものと思われる。

周囲植生に由来すると思われる種類には、モミ属、オニグルミ、アカガシ亜属、センダン、アカメ

ガシワ、トチノキ、タデ属、ナデシコ科、アカザ科・ヒユ科があげられる。木本の中には林縁部などに生育する種類が多いことから、後背山地との境などに生育していたと考えられる。一方草本類は、遺跡周辺に生育している「人里群落」を作っていたものとみられる。

表3 種実同定結果

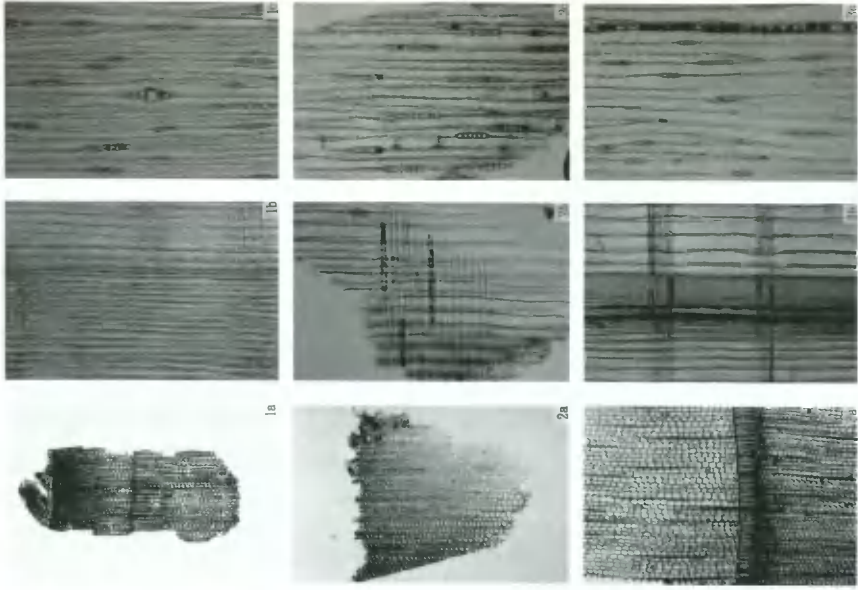
年度	地区	遺構	日付	No	オニグルミ	アカガシ亜属	モモ	ウメ	センダン	アカメガシワ	トチノキ	イネ	タデ属	アカザ科	ヒユ科	ヒョウタン類	メロン類
94	8-H	井戸309	94/10/27	57													
94	8-I	井戸305下層	94/11/04	111	1					1							
94	8-I	井戸304	94/12/08	73													
94	12-Q	轟323	94/12/15	77													
94	9-K	井戸315	95/01/20	105									1	0	1		
94	5-C	土坑330	95/01/20	92						1							
94	8-K	井戸313第4層	95/02/20	105									1				
94	8-C	土坑301	95/03/14	96		1											
94	3-A	溝321	95/03/30	108					1								
95	2区	東半河道1 崩口上部の2層目	95/09/18	63	1												
95	2区	東半河道1 崩口下層	95/10/02	60		1				1							
95	2区	河道1中層(上の砂層除去中)	95/10/29	74					2								
95	2区	貝塚1B・C境アゼ上層	95/12/05	105					1								
95	2区	貝塚1B・C境下層	95/12/06	106				1	1								
95	2区	東半河道1(貝層下砂層まで)	96/01/10	118					1								
95	2区	河道1東半の西貝層下部のこり	96/02/09	128					1								
95	2区	河道1東半の西全面砂層より1層の粘質土	95/02/23	133	1												
95	3区	貝塚3	96/06/05	38		1											
95	1区	河道1下層	96/09/06	91-1					1								

なお周辺遺跡での調査例では、百間川原尾島遺跡など(バリノ・サーヴェイ株式会社, 1995a, 1995d)などがあるが、今回の結果と類似した組成を示している。

引用文献

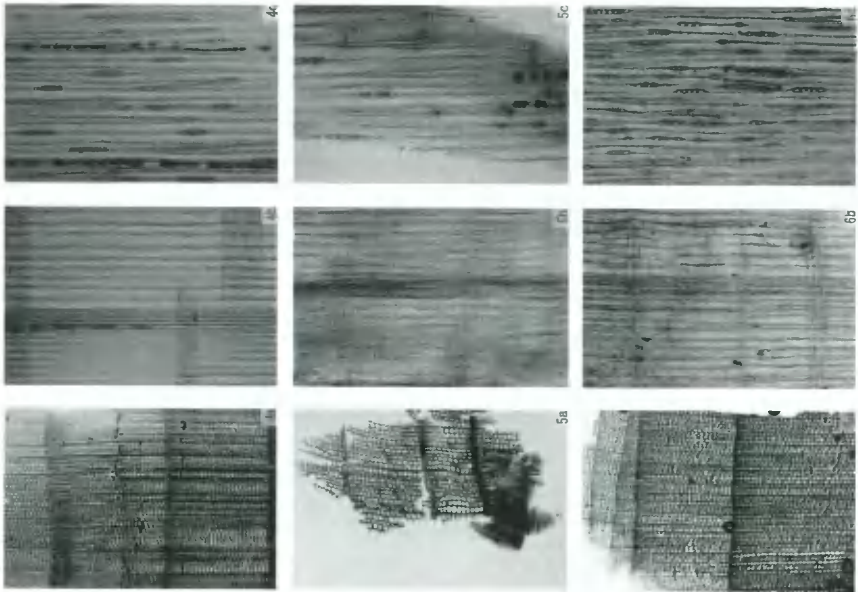
- 伊東隆夫(1991)日本の遺跡から出土した木材の樹種とその用途ⅠⅠ。木材研究・資料, 26, P. 91-189。京都大学木材研究所。
- 橋本真紀夫(1993)植物化石からみた植生変遷。「特別展 下町・中世再発見」, P.126-129, 葛飾区郷土と天文の博物館。
- 橋本鉄男(1979)ものと人間の文化史31 ろくろ。444p., 法政大学出版局。
- 金原正明(1994)植物遺体分析による農耕の復元について。日本文化財科学会第11次大会研究発表要旨集, p. 51-52。
- 川村恵洋(1983)曽根遺跡出土木材の識別。新大演報, 16, p75-82。
- 北野信彦(1999)生産技術面からみた江戸遺跡出土漆器の生産・流通・消費。江戸遺跡研究会第12回大会 江戸の物流—陶磁器・漆器・瓦から— 発表要旨, p. 5-24。
- 松葉礼子(1997)溜池遺跡出土木製品の樹種同定。「—地下鉄7号線溜池・駒込間遺跡発掘調査報告書7-2」 溜池遺跡 第ⅠⅠ分冊」, p. 1-30, 帝都高速度交通営団・地下鉄7号線溜池・駒込間遺跡調査会。
- 能城修一(1995a)百間川原尾島遺跡から出土した弥生時代前期橋脚列の柱の樹種。「岡山県埋蔵文化財発掘調査報告97 百間川原尾島遺跡4」, p. 266-274。岡山県文化財保護協会。
- バリノ・サーヴェイ株式会社(1995a)百間川原尾島遺跡出土の木器樹種同定・種子同定。「岡山県埋蔵文化財発掘調査報告97 百間川原尾島遺跡4」, p. 290-301。岡山県文化財保護協会。
- バリノ・サーヴェイ株式会社(1995b)草戸千軒町遺跡第36次調査出土の植物種実同定報告。「草戸千軒町遺跡発掘調査報告Ⅲ 南部地域北半部の調査」, p. 253-278, 広島県草戸千軒町遺跡調査研究所編。
- バリノ・サーヴェイ株式会社(1995c)草戸千軒町遺跡第37次~45次・第48次調査出土の植物種実同定報告。「草戸千軒町遺跡発掘調査報告Ⅳ 南部地域南半部の調査」, p. 201-228, 広島県草戸千軒町遺跡調査研究所編。
- バリノ・サーヴェイ株式会社(1995d)百間川原尾島遺跡出土の種実同定。「岡山県埋蔵文化財発掘調査報告 97 百間川原尾島遺跡4 p. 286-289, 岡山県文化財保護協会。
- バリノ・サーヴェイ株式会社(1997a)百間川遺跡群出土木製品の樹種。「岡山県埋蔵文化財発掘調査報告119 百間川兼基遺跡3・百間川今谷遺跡3・百間川沢田遺跡4」, p. 178。岡山県文化財保護協会。
- バリノ・サーヴェイ株式会社(1997b)草戸千軒町遺跡から出土した下駄の樹種。「草戸千軒町遺跡調査研究報告Ⅰ 草戸千軒町遺跡出土の下駄」, p. 70-86, 広島県立歴史博物館。
- バリノ・サーヴェイ株式会社(1998)北方下沼・北方中溝遺跡から出土した木製品の樹種。「岡山県埋蔵文化財発掘調査報告126 北方下沼遺跡・北方横田遺跡・北方中溝遺跡・北方地蔵遺跡」, p. 223-229, 岡山県教育委員会。
- 島地 謙(1989)小丸丸遺跡出土木器の樹種。「兵庫県文化財調査報告第66冊 龍野市 小丸丸遺跡ⅠⅠ 県道龍野相生線道路改良工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書」, p. 79-87, 兵庫県教育委員会。
- 島地 謙・林 昭三(1992)川除・藤ノ木遺跡出土木製品の樹種。「兵庫県文化財調査報告第104冊 三田市 川除・藤ノ木遺跡 —武庫川河川改修に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書—第2分冊」, p. 771-786, 兵庫県教育委員会。
- 島地 謙・伊東隆夫編(1988)日本の遺跡出土木製品総覧。296p., 山間閣。
- 高橋 敦・辻本崇夫(1999)木製品・自然木、炭化材の樹種。長野県埋蔵文化財センター発掘調査報告書42「上信越自動車道埋蔵文化財発掘調査報告書26 —更埴市内その5— 更埴条遺跡・屋代遺跡群 —古代編Ⅰ—本文」, p. 333-337, 日本道路公団・長野県教育委員会・長野県埋蔵文化財センター。
- 山内 文(1976)植物性出土品。木材。「草戸千軒町遺跡 —第11~14次発掘調査概要—」, p. 47-49, 広島県教育委員会。

図版 1 木材 (1)



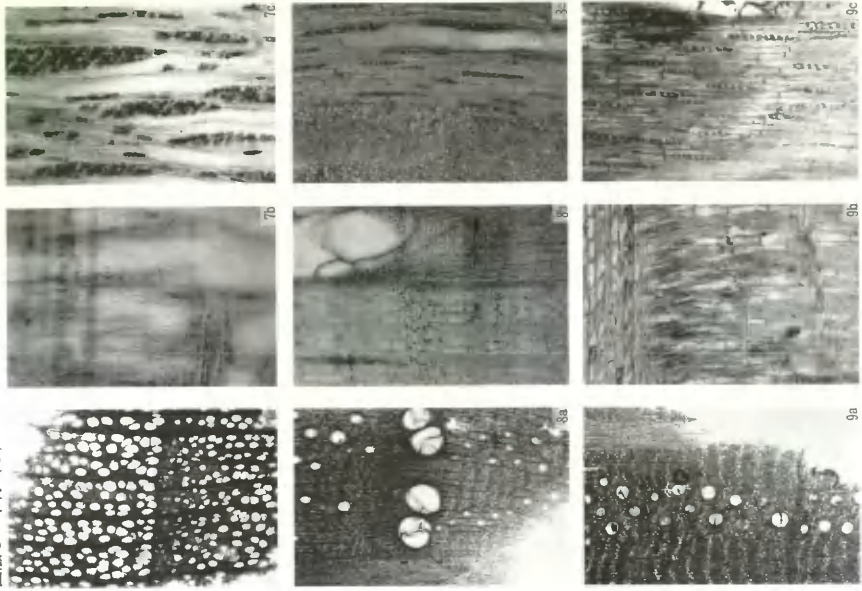
1. マツ属樹種奈良赤曲属 (試料番号 当10)
 2. モミ属 (試料番号 当2)
 3. スギ (試料番号 当47)
- a : 木口, b : 板目, c : 板目

図版 2 木材 (2)



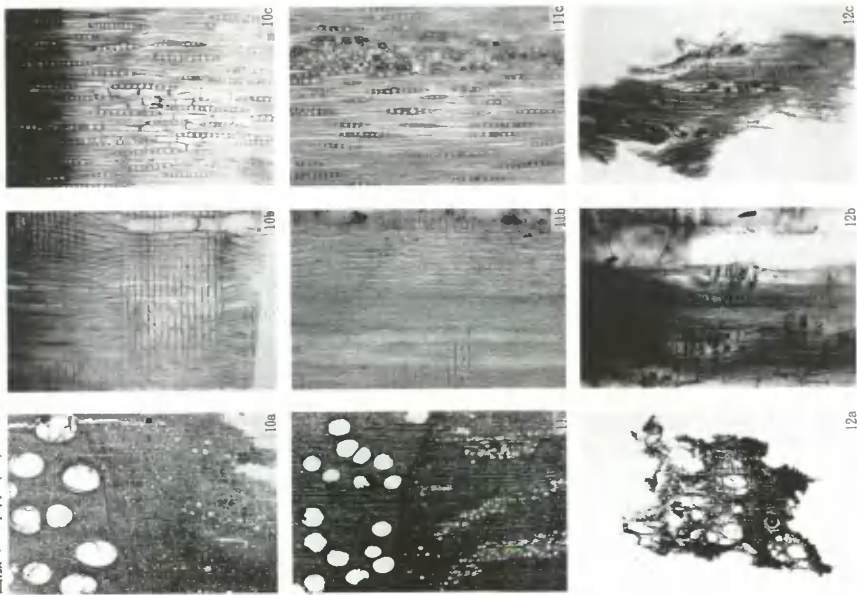
4. ヒノキ (試料番号 当51)
 5. サワラ (試料番号 当2)
 6. マキ属 (試料番号 当88)
- a : 木口, b : 板目, c : 板目

図版3 木材 (3)



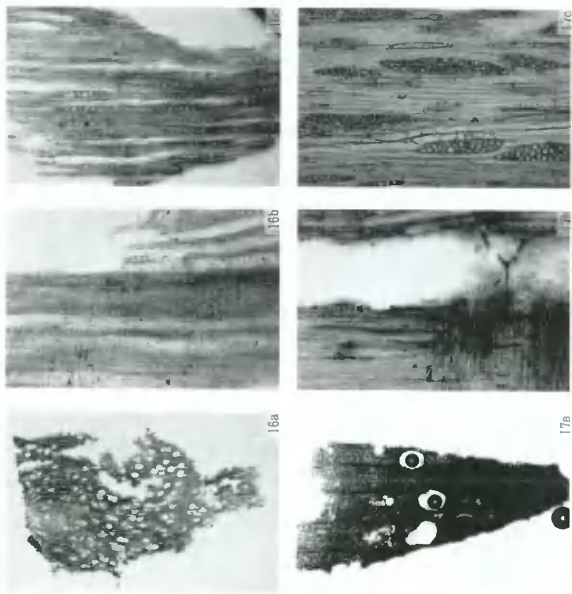
7. ブナ属 (試料番号 47)
 8. コナラ属コナラ亜属クヌギ亜属 (試料番号 岩8)
 9. コナラ属アカシ亜属 (試料番号 岩5)
 a: 木口, b: 板目, c: 板目

図版4 木材 (4)



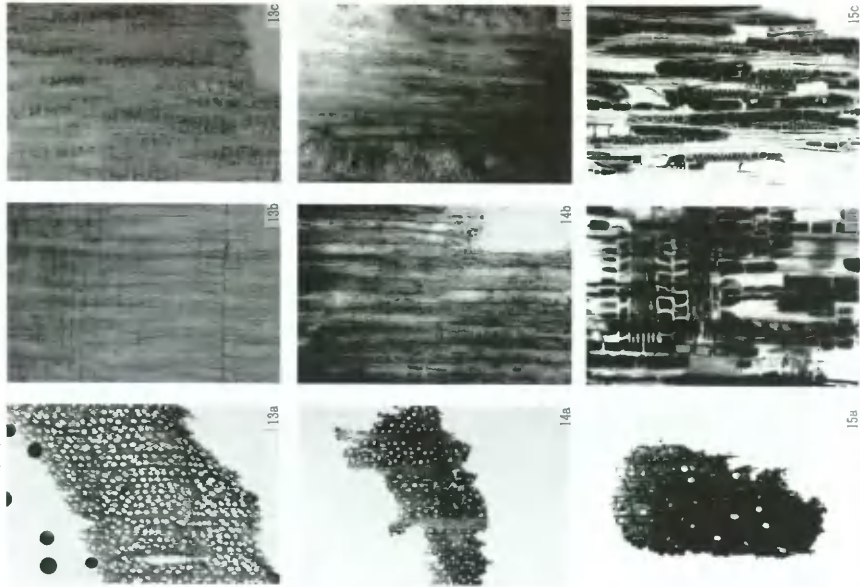
10. クリ (試料番号 岩40)
 11. ツブラジイ (試料番号 岩53)
 12. クスノキ (試料番号 岩19)
 a: 木口, b: 板目, c: 板目

図版 6 木材 (6)



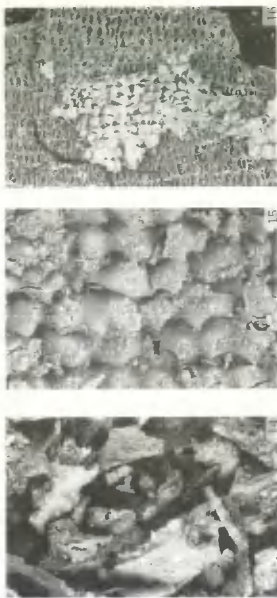
16. トチノキ (試料番号 4965)
 17. チヤノキ (試料番号 4965)
 a: 木口, b: 楕目, c: 板目

図版 5 木材 (5)



13. ユゾリハラ (試料番号 岩81)
 14. シヤンポ (試料番号 岩86)
 15. イスノキ (試料番号 岩24)
 a: 木口, b: 楕目, c: 板目

図版7 種実遺体



1 mm 1 mm 1 mm 100 μm 200 μm
 6, 11, 12, 14 4, 5, 10, 11 13, 15 16

1. モミ属 (井戸305下層)
2. オニグルミ (河通1東半の西全面 砂層より上層の積層土)
3. アカメガシワ (土城501)
4. ウメ (河通1下層)
5. アカメガシワ (井戸305下層)
6. タデ属 (井戸315)
7. モモ (貝塚1B, C境下層)
8. トチノキ (東半河通1河口下層)
9. センタン (河通1東半の西 貝塚1下部のこり)
10. メロン類 (井戸305下層)
11. ナデシコ科 (井戸315)
12. アカサ科—ヒユ科 (井戸315)
13. ヒョウタン類 (井戸305下層)
14. イネ (井戸313第4層)
15. イネ (井戸313第4層)

付載6 百間川米田遺跡の環境考古学分析

環境考古研究会

1. プラント・オパール分析

(1) 原理

植物珪酸体は、ガラスの主成分である珪酸 (SiO_2) が植物の細胞内に蓄積したものであり、その形態は植物種によってそれぞれ固有である。珪酸は化学的に安定であるため、植物が枯死した後も植物珪酸体は微化石 (プラント・オパール) となって土壤中に半永久的に残っている。プラント・オパール (植物珪酸体) 分析は、イネをはじめとするイネ科栽培植物の同定および古植生・古環境の推定などに応用されている。

(2) 試料

百間川米田遺跡岩間下調査区では、道路、堤防、護岸2さらに埋立遺構1から植物 (草本) が幾層も埋め込まれたとみられる痕跡が認められた。ここでは、その埋め土や盛り土に利用された植物を検討する目的でプラント・オパール分析を行った。試料は、平安時代後半とされる堤防 (試料A)、埋立遺構1 (試料C、D)、護岸2 (試料E) 奈良時代とされる道路 (試料B) においてそれぞれ土壌の付着した状態で採取されたものである。

(3) 分析法

- 1) 試料の数カ所から植物体を適量 (1 cm × 2 cm 程度) を切り取り、蒸発皿に入れる。
- 2) 蒸留水による水洗と超音波洗浄を交互に繰り返し、付着土壌を取り除く。
- 3) 電機炉に入れ灰化する。
- 4) 灰を壊さないようにオイキットで封入しプレパラートにし、灰像標本を作成する。

(4) 結果と考察

1) 試料A

灰像の顕微鏡観察において、一部にイネの機動細胞珪酸体が確認できた。機動細胞は植物の葉身のみ形成される細胞であることから、堤防において検出された筵にはイネが葉の付いた状態で利用されていた可能性が考えられる。なお、他にも植物種の同定はできなかったものの珪化細胞が認められたことから、これら以外にもイネ科の植物が利用されていた可能性が考えられる。

2) 試料B

一部の灰像に珪化細胞が認められたことから、道路で検出された筵にイネ科の植物 (草本) が利用されていた可能性が考えられる。ただし、同定の可能な珪酸体はいずれの灰像からも認められないことから、植物種までは判断できない。

3) 試料C

灰像に若干であるが珪化細胞が認められたことから、埋立遺構1出土の筵にイネ科の植物 (草本)

が含まれていた可能性が考えられる。なお、本試料においても特徴的な形状の珪酸体が認められないため、植物種は不明である。

4) 試料D

一部の灰像でイネの機動細胞珪酸体が認められた。したがって、埋立遺構1で検出された筵にはイネが葉の付いた状態で利用された可能性が考えられる。なお、他にも珪化細胞が確認できたが、機動細胞で同定できるものは認められなかった。よって、イネ以外にもイネ以外の植物が利用されていた可能性が考えられるが植物種までは判断できない。

5) 試料E

いくつかの灰像で整列したイネの機動細胞珪酸体が確認できた。したがって、護岸2で検出された筵にはイネが葉の付いた状態で利用されていた可能性が高いと判断される。なお、本試料でも同定はできないもののイネ以外の機動細胞酸体が認められた。よって、イネ以外の植物も筵に使用されていた可能性が考えられる。

試料	イネ機動細胞	他の未分類イネ科珪化細胞
A	+	++
B		++
C		++
D	+	++
E	++	++

+: 微量, ++: 少量

(5) まとめ

百間川米田遺跡で出土した筵についてプラント・オパール分析を行い、利用された植物について検討した。その結果、堤防、埋立遺構1および護岸2で検出された筵よりイネの機動細胞珪酸体が検出され、これらにイネが利用されていた。可能性が認められた。とくに、護岸2についてはその可能性が高いと判断された。また、同定はできなかったもののすべての試料において珪化細胞が認められたことから、イネ科の植物(草本)が筵に利用されていた可能性が推定された。なお、発掘時に予想されたヨシあるいはマコモ、ススキ等については、機動細胞珪酸体の確認ができなかったことから、これらの利用に関しては不明である。

2. 大型植物遺体同定

(1) 原理

植物の種子や果実は比較的強靱なものが多く、堆積物中に残存する。堆積物から種実を検出しその群集の構成や組成を調べ、過去の植生や群落の構成要素を明らかにし古環境の推定を行うことが可能である。また、出上した単体試料等を同定し、栽培植物や固有の植生環境を調べることができる。

(2) 試料

試料は、百間川米田遺跡岩間下調査区より検出された室町時代末頃の橋跡（橋梁ⅡⅣ期の基礎施設）より検出の試料あ、い、うの選別済み試料3点（中央埋め土部の粗朶）である。

(3) 方法

試料を肉眼及び双眼実体顕微鏡で観察し、形態的特徴および現生標本との対比によって同定を行った。結果は同定レベルによって科、属、種の階級で示した。

(4) 結果

1) 試料あ

マツ属複維管束亜属 (*Pinus* subgen. *Diploxyylon* マツ科) 毬果46とその針葉であった。毬果は黒褐色で卵形を呈する、種鱗先端の外部に露出する部分は扁平五角形であり、その中央にはへそがある。表面が腐朽している。葉は針形で長さ10cm以上、幅1.5mm程度である。マツ属複維管束亜属にはアカマツとクロマツが含まれる。

2) 試料い

イヌガヤ (*Cephalotaxus harringtonia* K. Koch イヌガヤ科) の針葉と枝であった。葉は枝から脱落している状態であるが、線形で長さ3~5cm、幅3~4cmの針葉であり、先端は尖る。

3) 試料う

センダン (*Melia azedarach* L. var. *subtripinnata* Miq. センダン科) の核89であった。核は黒褐色で楕円形を呈し、一端は円孔となる。縦に5本の発達した稜が走る。

(5) 所見

同定の結果、試料あはマツ属複維管束亜属の毬果・針葉であり、試料いはイヌガヤの葉・枝、試料うはセンダンの核であった。マツ属複維管束亜属は、二次林を形成するアカマツと海岸林を形成するクロマツとがある。イヌガヤは、暖帯や温帯林内の谷側に生ずる常緑針葉低木で、センダンは、暖地の海岸沿いに生育する落葉高木である。試料あのマツ属複維管束亜属の遺体は毬果・針葉のみで花序が認められず、センダン核の多量である。果実の形成される秋から冬の季節に形成された遺体と推定される。

参考文献

- 佐伯浩・原田浩 (1985) 針葉樹林の細胞。木材の構造。文永堂出版。p. 20 - 48。
佐伯浩・原田浩 (1985) 広葉樹林の細胞。木材の構造。文永堂出版。p. 49 - 100。
島地謙・伊藤隆夫 (1988) 日本の遺跡出土木製品総覧。雄山閣。296p。
藤原宏志 (1976) プラント・オパール分析法の基礎的研究 (1) - 数種イネ科栽培植物の珪酸体標本と定量分析法 - 考古学と自然科学。9, p. 15 - 29。
南木 (1993) 葉・果実・種子。日本第四紀学会編。第四紀試料分析法。東京大学出版会。p. 276 - 283。

1 当麻調査区
北半
(空中撮影)



2 当麻調査区
南半
(空中撮影)





1 当麻調査区
全景（北から）



2 竪穴住居
302付近全景
（西から）



3 建物303・306・307
309付近全景
（南から）

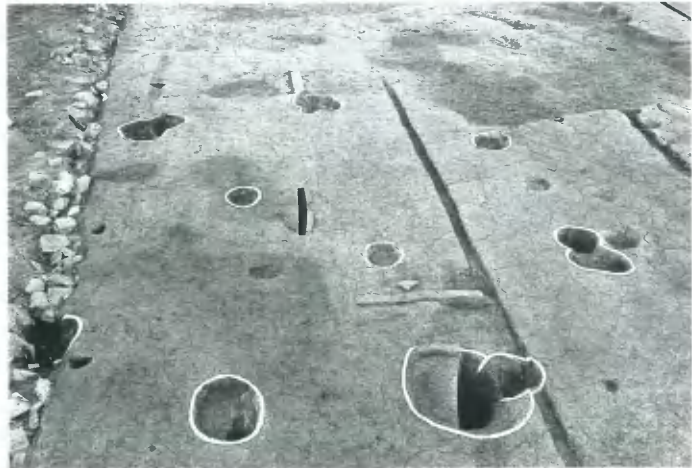
1 建物301・竪穴住居
301付近全景
(南から)



2 竪穴住居301・
井戸311
(南東から)

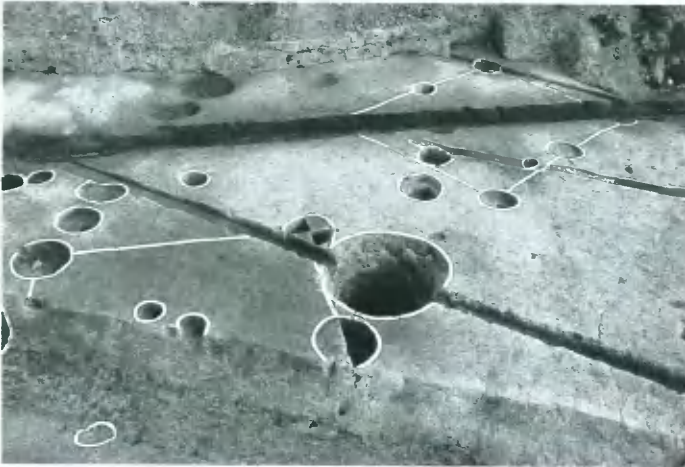


3 竪穴住居302・
井戸309 (南から)

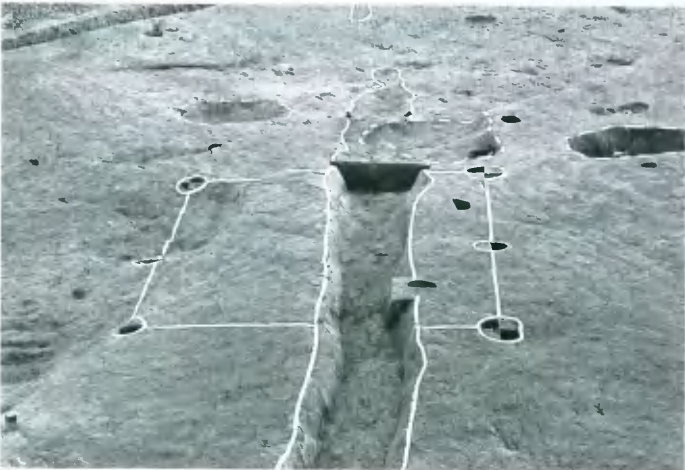




1 建物302・305付近
全景（北から）



2 建物302・305・
井戸304（西から）



3 建物304・溝311
（北西から）



1 建物307 (西から)



2 井戸308(南西から)



3 井戸311遺物出土
状況 (西から)



1 井戸311完掘
(西から)



2 井戸311断面
(北から)



3 井戸311木器出土
状況 (南から)



1 井戸304 (西から)



2 井戸305 (西から)



3 井戸306 (西から)



1 土壙301 (西から)



2 土壙312 (南から)



3 井戸310 (南から)



1 土壇306 (南から)



2 土壇306 (北から)



3 土壇304 (西から)



1 井戸303 (東から)



2 土坑303 (東から)



3 土坑314 (北から)



1 溝301 (東から)



2 溝301遺物出土状況 (東から)



3 溝302周辺 (西から)



1 溝304・321周辺
(西から)



2 溝304・321遺物
出土状況(西から)



3 溝309・310
(西から)

1 建物308 (南から)



2 建物308 (東から)



3 溝316・322周辺
(北から)





1 井戸312 (南から)



2 井戸313・314・
315 (西から)



3 井戸313 (北から)



1 井戸314 (南から)



2 井戸314出土状況
(東から)



3 井戸314 (南から)



1 井戸315 (南から)



2 井戸315石組み
除去後 (北から)



3 井戸315井戸枠
(南から)



1 土壙330 (北から)



2 土壙329断面
(北から)



3 土壙317 (南から)



1 溝311・建物304
周辺 (西から)



2 土壙328(南東から)

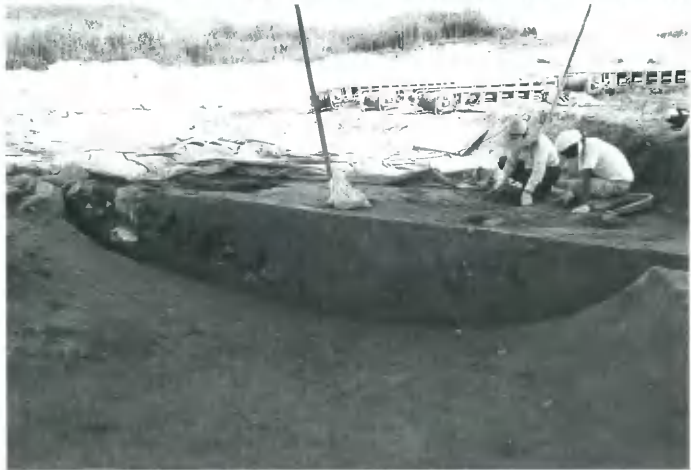


3 土壙321 (西から)

1 溝320・321北半
(南東から)



2 溝320・321断面
(北西から)



3 溝320・321南端
(南から)





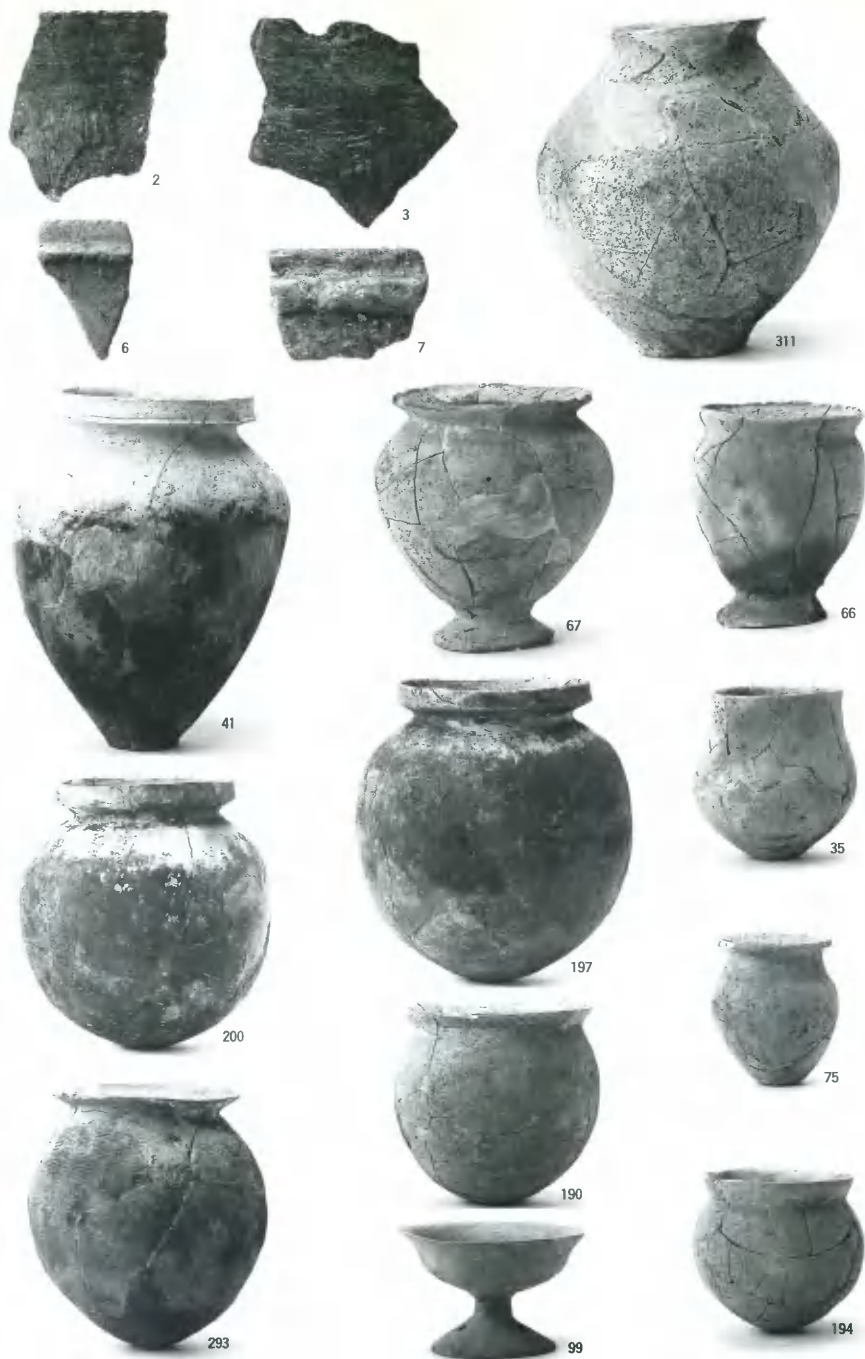
1 北半全景(北から)



2 溝322付近全景
(西から)



3 溝323 (南西から)



出土遺物 1 (1/2, 1/4)



出土遺物 2 (1/1, 1/2, 1/4, 1/6)

1 岩間上調査区
遠景 (南西から)



2 1・2区遠景
(南から)



3 2区河道調査状況
(西から)





1 溝9・10(南から)



2 溝5・6(南東から)



3 溝1・2・3
(南東から)

1 橋梁1南端
(北から)



2 橋梁1 (南から)



3 橋梁1北端
(西から)





1 1区河道1 (西から)



2 1区河道1 (西から)



3 1区河道1 (東から)

1 貝塚1 全景
(北から)



2 貝塚1 全景
(南から)



3 貝塚1 遺物出土
状況 (南西から)





1 貝塚1 検出状況
(北西から)



2 貝塚1 断面
(南東から)



3 貝塚1 断面
(南から)

1 貝塚1 調査状況
(南から)

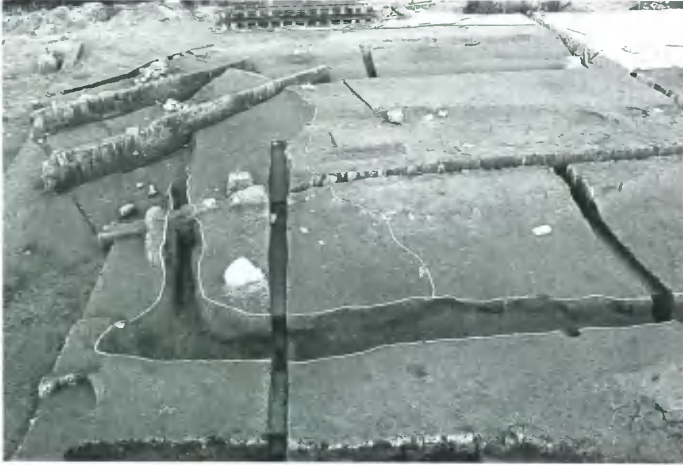


2 貝塚1 下層石組み
(南西から)



3 貝塚1 下層石敷
(北から)





1 溝16 (西から)



2 溝16 (南西から)



3 溝16断面 (南から)

1 2区河道1
(南東から)



2 2区河道1
(南西から)



3 井戸1 (南から)





1 3区全景 (東から)



2 溝16 (南東から)



3 溝17・18 (東から)



1 井戸3 (東から)



2 井戸2 (北西から)



3 3区河道調査状況
(西から)



1 3区河道1 (東から)



2 3区河道1 (東から)



3 3区河道1 (東から)



1 貝塚2 (東から)



2 貝塚2 (南から)



3 貝塚2 (西から)



1 貝塚3 (西から)



2 貝塚3 (西から)



3 貝塚3 (南から)

1 4区全景(西から)



2 4区河道1
(北から)



3 4区河道1
遺物出土状況
(南から)





1 溝19～22付近全景
(南東から)



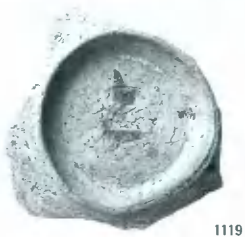
2 溝24・25付近全景
(南東から)

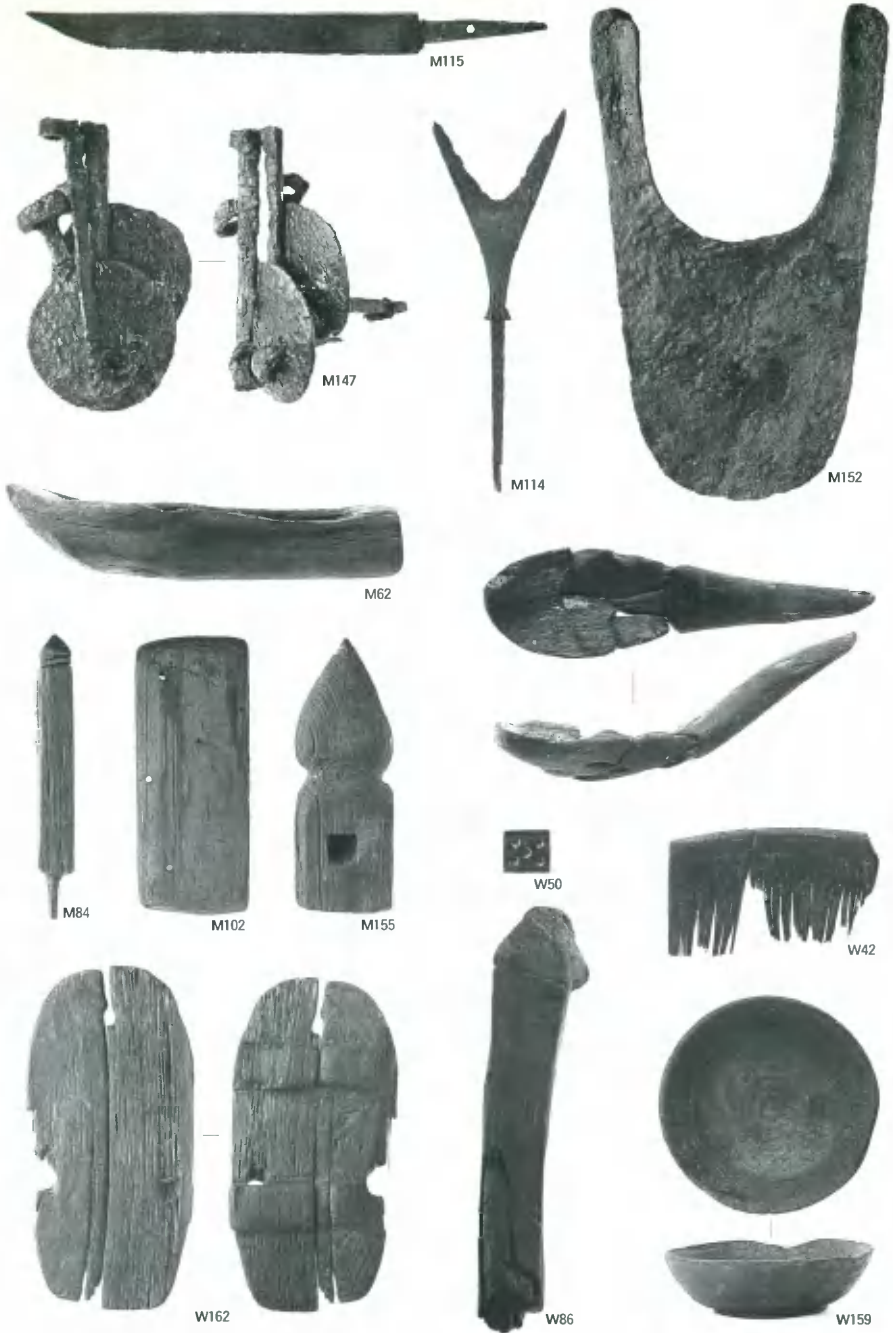


3 土壇2 (南から)



出土遺物 1 (1/2, 1/4, 1/6)





出土遺物 3 (1/2, 1/3, 1/4)



出土遺物 4 (1/1, 1/2, 2/3)



1 道路 (北西から)



2 道路 (西から)



1 道路 断面C-C'南東部 (南西から)



2 道路 断面C-C'北西部 (西から)



3 道路 断面D-D' (北東から)



4 道路 埋め土中の敷葉 (南西から)



5 道路 埋め土断面 (北東から)



6 道路 埋め土除去後の状況 (南西から)



7 道路 埋め土中の敷葉



8 道路 割り木帯 (岸側から)



1 道路 (南西から)



2 堤防中央部 (南東から)



1 堤防中央部 (河道側から)



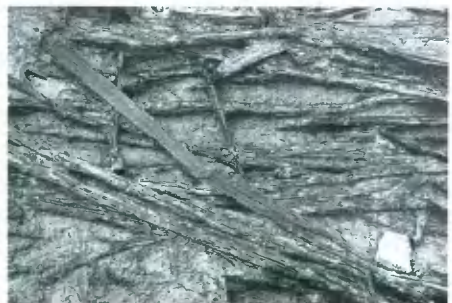
2 堤防中央部 盛土断面A-A' (南西から)



3 堤防中央部 盛土内の枝葉 (東から)



4 堤防中央部 盛土内の編み物



5 堤防中央部 人形検出状況 (南東から)



1 堤防中央部 人形検出状況



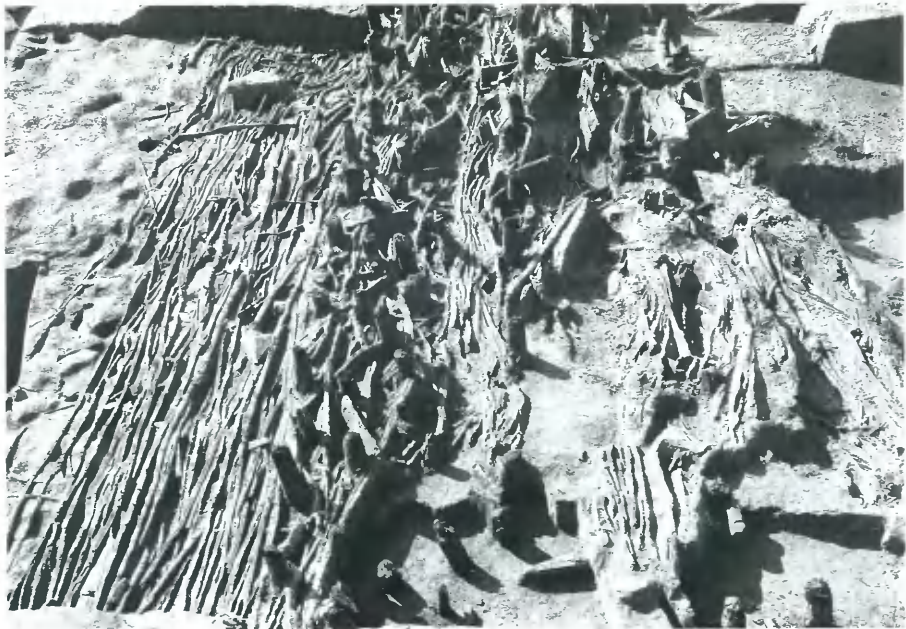
2 堤防中央部 盛土下の倒れ杭 (南西から)



3 堤防中央部 しがらみ (北西から)



4 堤防中央部 縦杭 (東から)



5 堤防中央部 盛土最下部 (北東から)



1 堤防先端部 検出状況 (北東から)



2 堤防先端部 盛土内部の状況 (北東から)



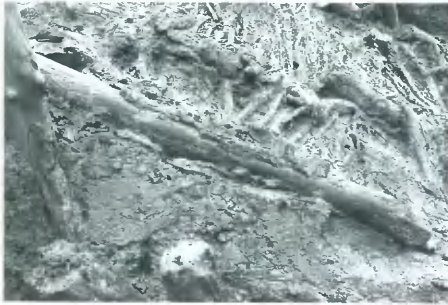
1 河道4と堤防復旧施設（南西から）



2 堤防復旧部 洪水砂（洪水2）除去後（西から）



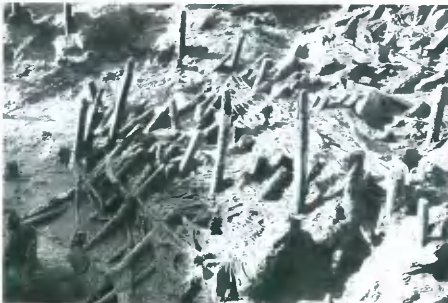
1 復旧施設2 (南西から)



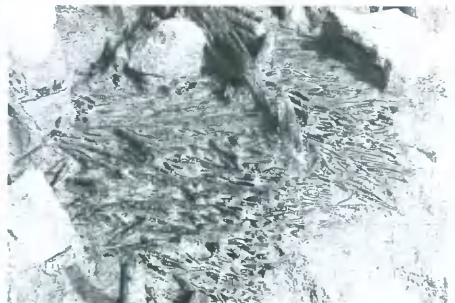
2 復旧施設2 しがらみ断面 (西から)



3 復旧施設2 しがらみ (東から)



4 復旧施設2 しがらみ (東から)



5 復旧施設2 埋め込まれた多量の枝 (南から)



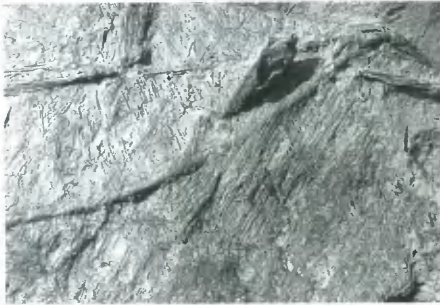
1 復旧施設3 断面J-J' (西から)



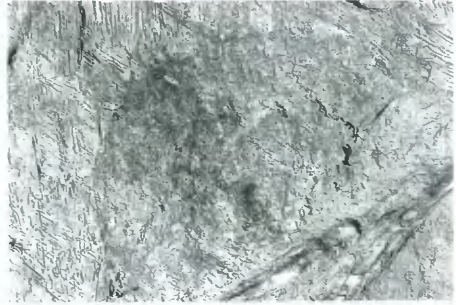
2 復旧施設3 しがらみ (上から)



3 復旧施設3 しがらみ断面 (南西から)



4 復旧施設3 盛り土内の編み物



5 復旧施設3 盛り土内の鍋敷き状編み物



1 復旧施設4 検出状況(南東から)



2 復旧施設4 草本類除去後の状況(南から)



3 復旧施設4 しがらみ(南から)



4 復旧施設4 しがらみ除去後の状況(南から)



5 復旧施設4 基底部の木組み(南から)



6 復旧施設4 基底部の木組み(東から)



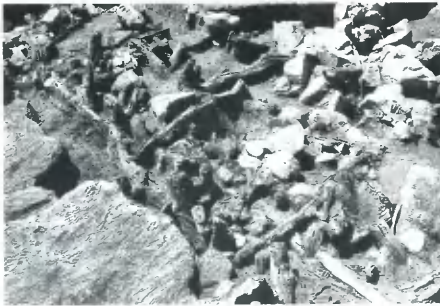
7 復旧施設4 枝を木の皮ひもで束ねている?



8 堤防復旧部洪水砂堆積状況(南東から)



1 埋立遺構1 (北西から)



2 埋立遺構1 柵列 (南東から)



3 埋立遺構1 最終埋め土断面と下部の粗朶



4 埋立遺構1 最終埋め土断面B-B'



5 埋立遺構1 最終埋め土中の板組み (南から)



1 埋立遺構1 木材群 (北から)



2 埋立遺構1 木材群断面D-D' (東から)



1 埋立遺構1 断面C-C' (北東から)



2 埋立遺構1 断面B-B' (南西から)



1 埋立遺構 2 検出状況 (北西から)



2 埋立遺構 2 上層礫除去後の状況 (北西から)



1 埋立遺構 2 縦杭と横木 (北西から)



2 埋立遺構 2 縦杭と横木 (南西から)



3 埋立遺構 2 断面H-H' (北西から)



4 埋立遺構 2 先の潰れた杭



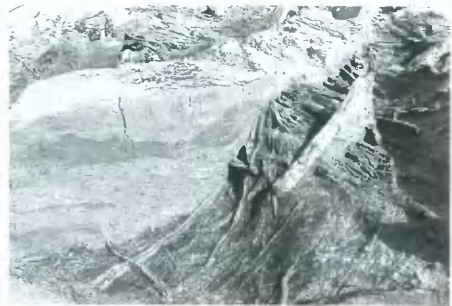
5 護岸 2 (北東から)



1 護岸2 (南西から)



2 護岸2 盛り土下部の草本 (北東から)



3 護岸2 断面B-B'土手裏 (南から)



4 護岸2 断面A-A' (北から)



3 護岸2 断面B-B' (北西から)



1 橋梁2 空中写真（北西から）



2 橋梁2 検出状況（南東から）



1 橋梁2 (東から)



2 橋梁2 (南西から)



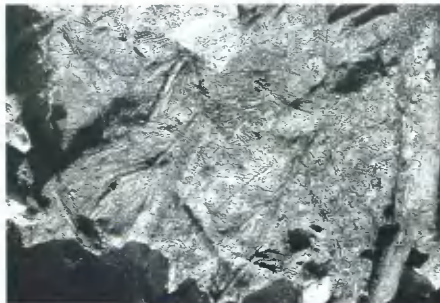
1 橋梁2 IV期基礎施設中央～東岸の埋め土部 (南東から)



2 橋梁2 縦杭・横木・板組み (南西から)



3 橋梁2 粗朶検出状況 (西から)



4 橋梁2 粗朶



3 橋梁2 上流側埋め土の粗朶 (南東から)



1 橋梁2 板組み (南から)



2 橋梁2 上流側の木組み (西から)



3 橋梁2 板材下端部の小孔



4 橋梁2 粗梁と埋め土の断面 (南東から)



5 橋梁2 中央埋め土部の埋め土除去後の状況 (南南西から)



1 橋梁2 IV期方形石組み (西から)



2 橋梁2 上層基礎施設 礫および埋め土部 (南東から)



1 橋梁2 断面A-A' IV期基礎施設とII期基礎施設 (南東から)



2 橋梁2 II期基礎施設 (北北東から)



1 橋梁2 II期東部の石積み(南東から)



2 橋梁2 断面F-F'(南南西から)



3 橋梁2 IV期方形石組み下の木組み(南西から)



4 橋梁2 土壌11(西北西から)



3 橋梁2 土壌18断面土手裏(西北西から)



1 橋梁2 II期西岸の埋め土の状況(北から)



2 橋梁2 橋脚の切断痕跡



3 橋梁2 橋脚り打ち込まれた杭



4 橋梁2 角材を使用した橋脚



5 橋梁2 埋め土と河道堆積を除去した状況(I期の姿にちかい)(西から)周辺の礫は埋立1



1 橋梁2 埋め土と河道堆積を除去した状況 (I期の姿にちかい) (北西から) 周辺の礫は埋立1



2 橋梁2 橋脚



3 橋梁2 橋脚先端部の筏穴



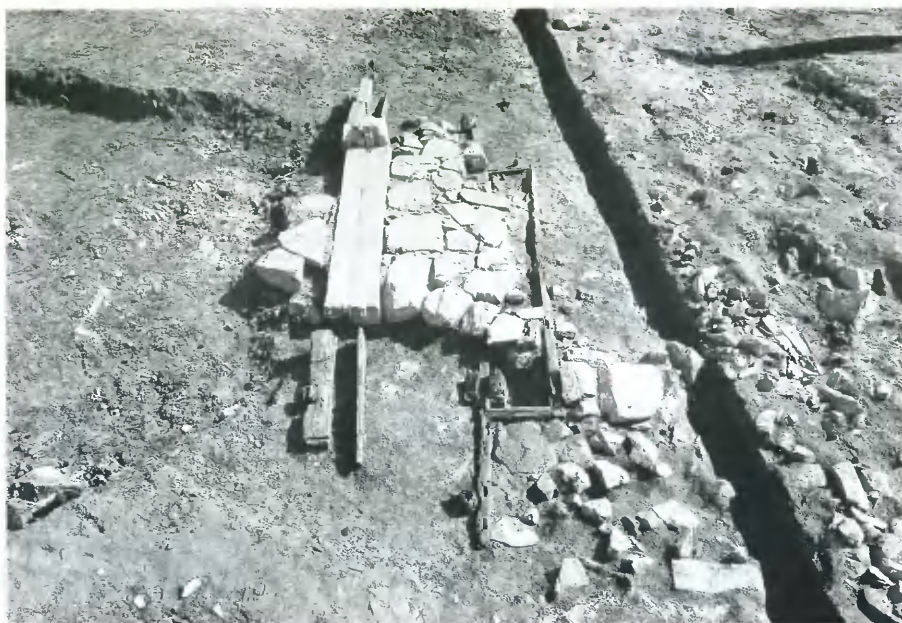
4 橋梁2 橋脚先端部の筏穴



1 橋梁3 (東から)



2 橋梁3 断面A-A' (南東から)



1 樋門検出状況（北西から）



2 樋門2・3（北西から）



1 樋門3 (南から)



2 樋門3 石材を除去した状況 (東から)



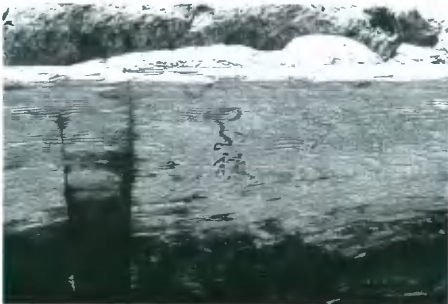
3 樋門3 基礎の木材 (南東から)



5 樋門2 墨書「○東下一」



4 樋門2 西側角柱 (北西から)



6 樋門2 墨書「宗板」



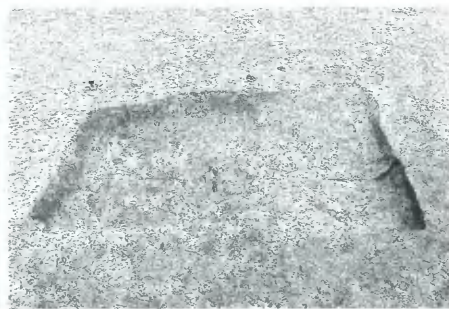
7 樋門2 墨書「右一」



1 河道2 東岸 (北西から)



2 溝28 (南東から)



3 土擴4 (南から)



4 土擴8 (南東から)



3 土擴8 南側板組み (北から)



1 土擴7 (南から)



2 貝塚6・8 (南西から)



3 土擴24 (北西から)



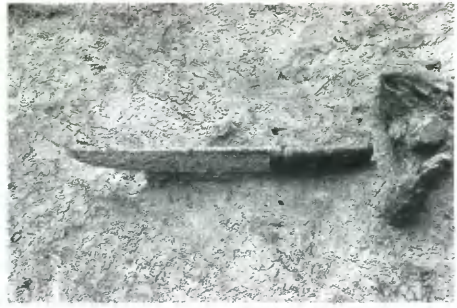
4 土擴25 (東から)



5 石列群 (東から)



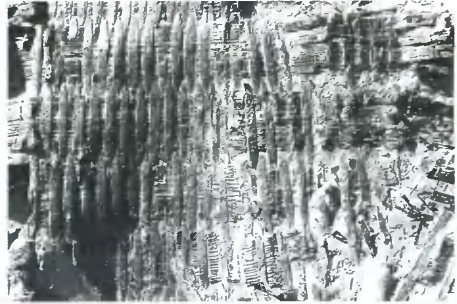
1 河道6 断面A-A' (北東から)



2 短刀M161検出状況



3 釜検出状況



4 釜部分



5 牛骨検出状況



1620



1629



1627



1679



1673



1711



1712



1674

1 縄文土器・弥生土器・土師器



1424



1425



1427



1429



1434



1438



1442



1441



1445



1452

2 洪水1・2 堆積砂出土土器



1317



1318



1319



1321



1322



1323



1324



1329



1338



1340



1341



1342

1 河道3・4 出土土器



1350



1351



1354



1356



1364



1370



1374



1379



1411



1385



1388



1389

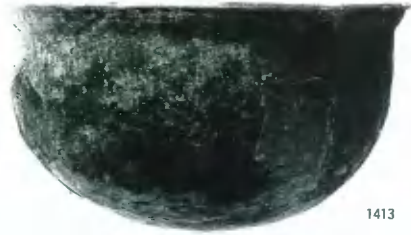
2 河道5 出土土器 (1)



1390



1391



1413

1 河道5出土土器(2)



1454



1455



C87

2 埋立遺構1出土土器



1464



1468



1472



1485



1484



C88

3 土壙7出土遺物



1519



1520



1521



1522



1523



1524



1525



1526



1527



1528

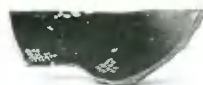
4 溝34出土土器



1571



1572



1579



1573



1575



1576



1574



1577

1 橋梁2 埋め土直下出土土器



1580



1583



1584



1585



1586



1582



1587



1588



1589



1590

2 橋梁2 下層捨て石出土土器



1715



1719

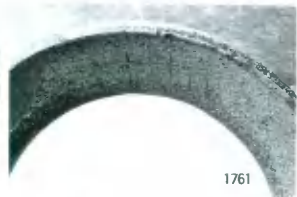


1718



1724

3 須恵器(1)





1774



1783



1784



1787



1791



1792



1788

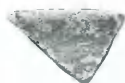


1789



1790

1 須恵器 (3)



1938



1939



1940



1941



1942



1944



1943



2 緑釉陶器



1794



1795



1800



1803

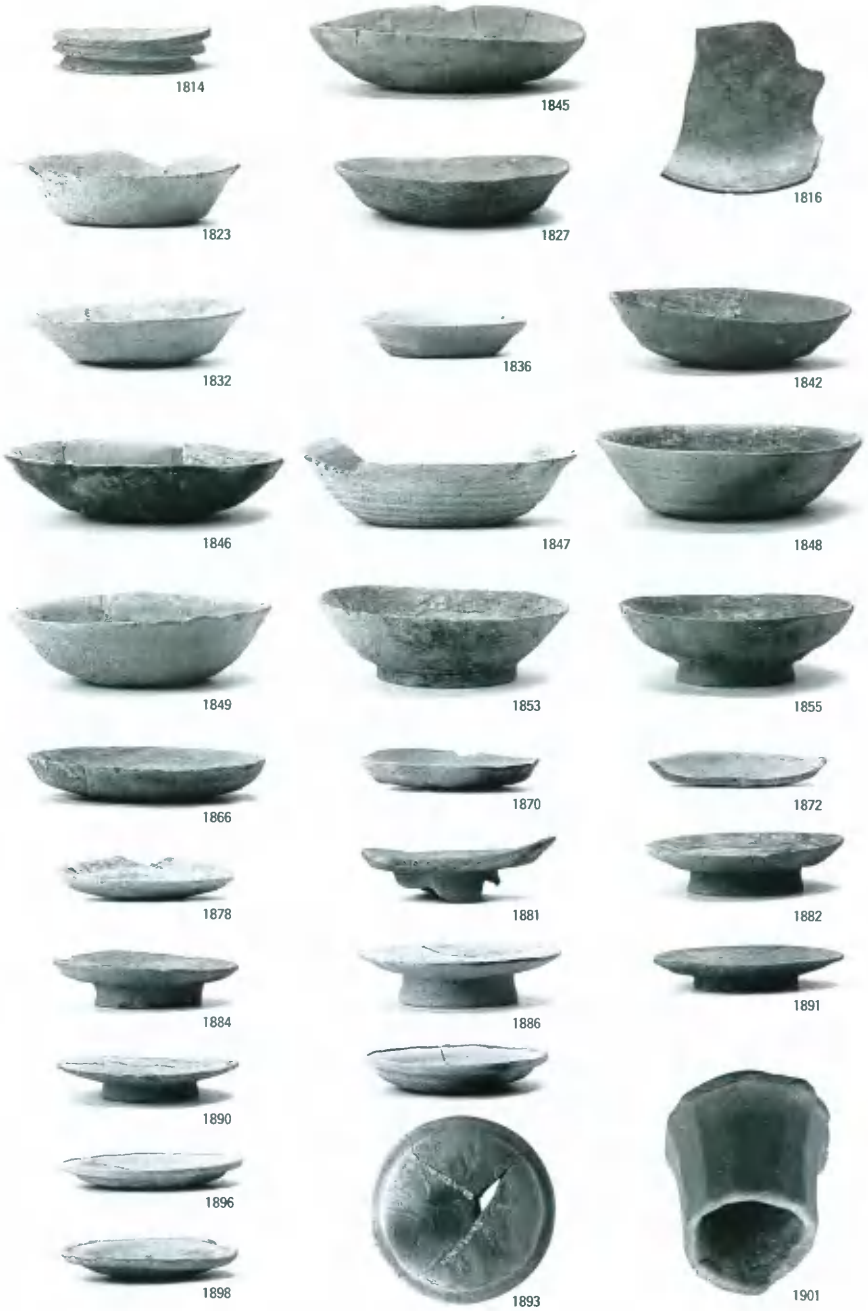


1804



1805

3 土師器 (1)



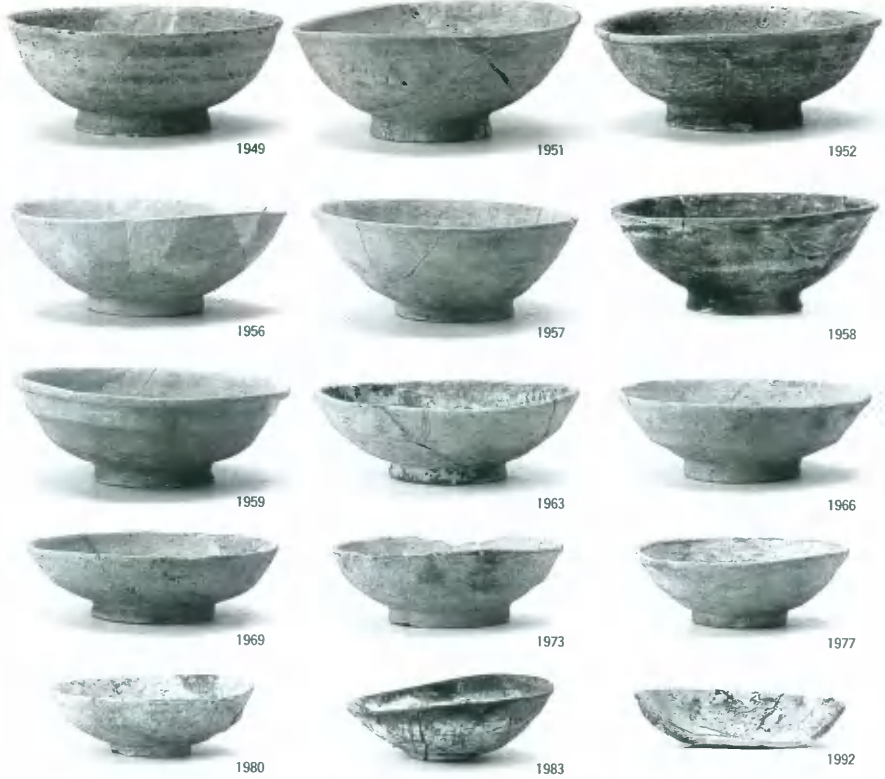
土師器 (2)



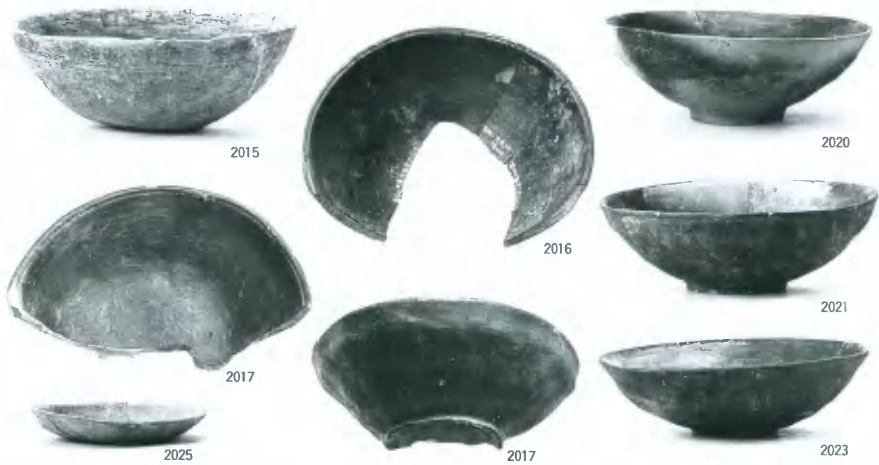
1 土師器 (3)



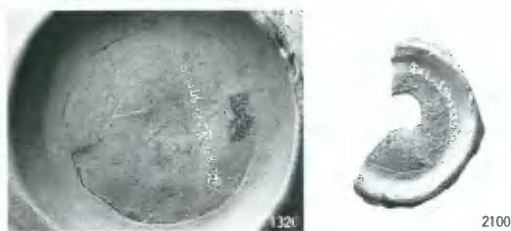
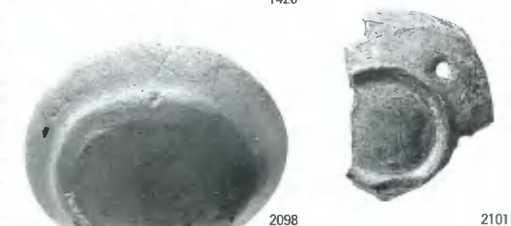
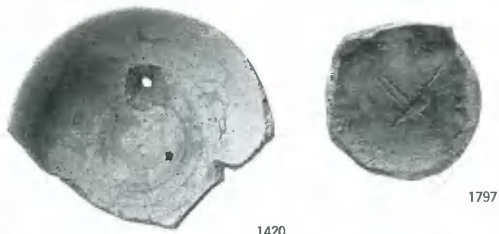
2 黒色土器



1 土師器(4) 早島式土器碗



2 瓦器



墨書・線刻・穿孔土器



2036



2050



2047



2049



2066



2042



2043



2065

1 備前焼・東播系・常滑・十瓶山ほか



1564

2 東大寺瓦(1)





2067



2068



2071



2073



2074



2072



2077



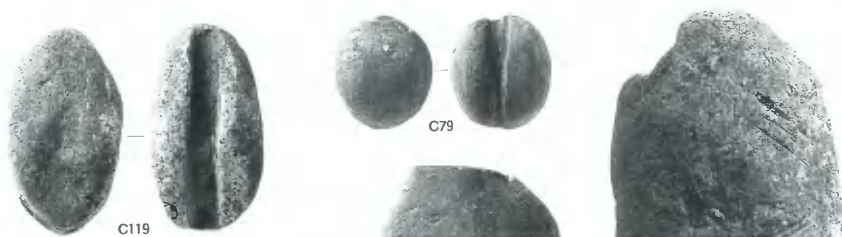
2076



1609



1608



土製品



W258



W259



W266



W261



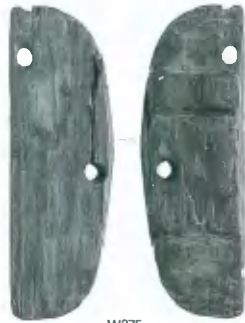
W263



W265



W273



W275



W276



W174



W215



W205



W197



W170



W171



W173



W187



W198



W207



W288



W289



W200



W211



W208



W287



W196



W210



W290



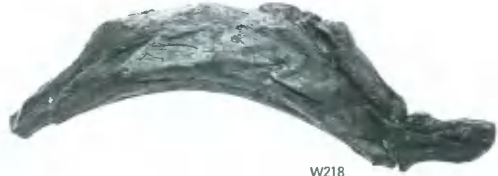
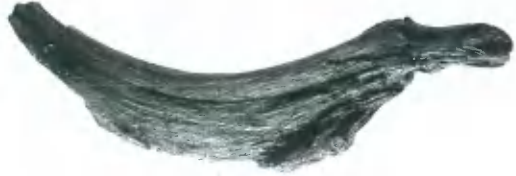
W280



W203



W168



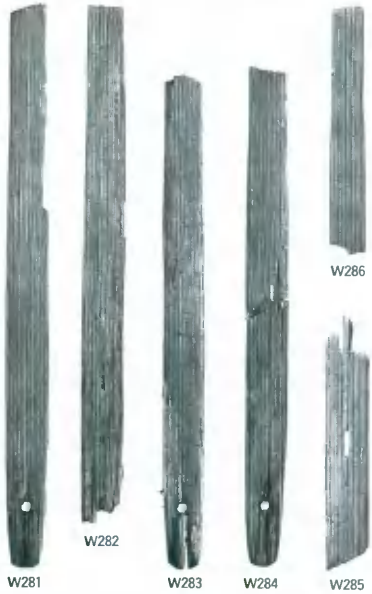
W218



W277



W279



W286

W281

W282

W283

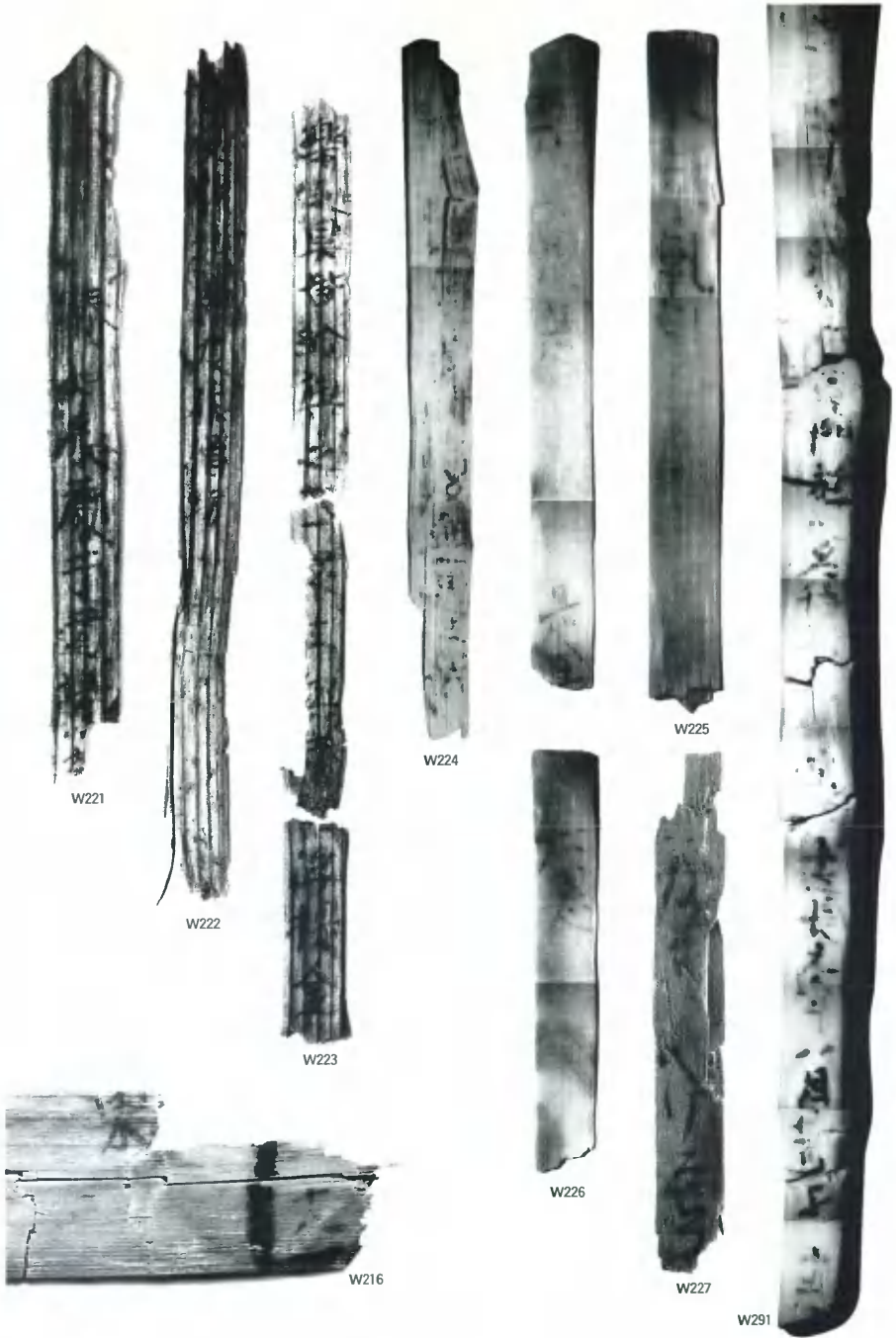
W284

W285



W238





木製品 (4) 墨書



W243

W242

W241

W240



W239



B3



B5



B4



B2



M154



M155



M156



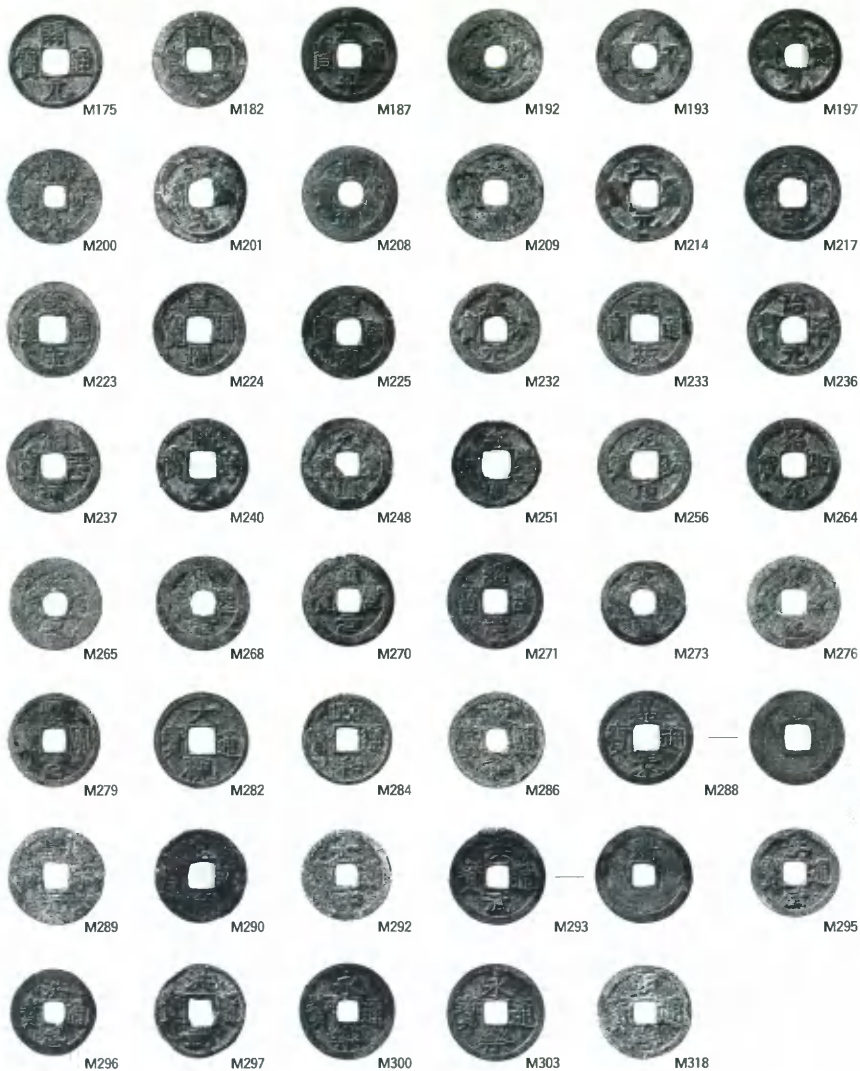
M160

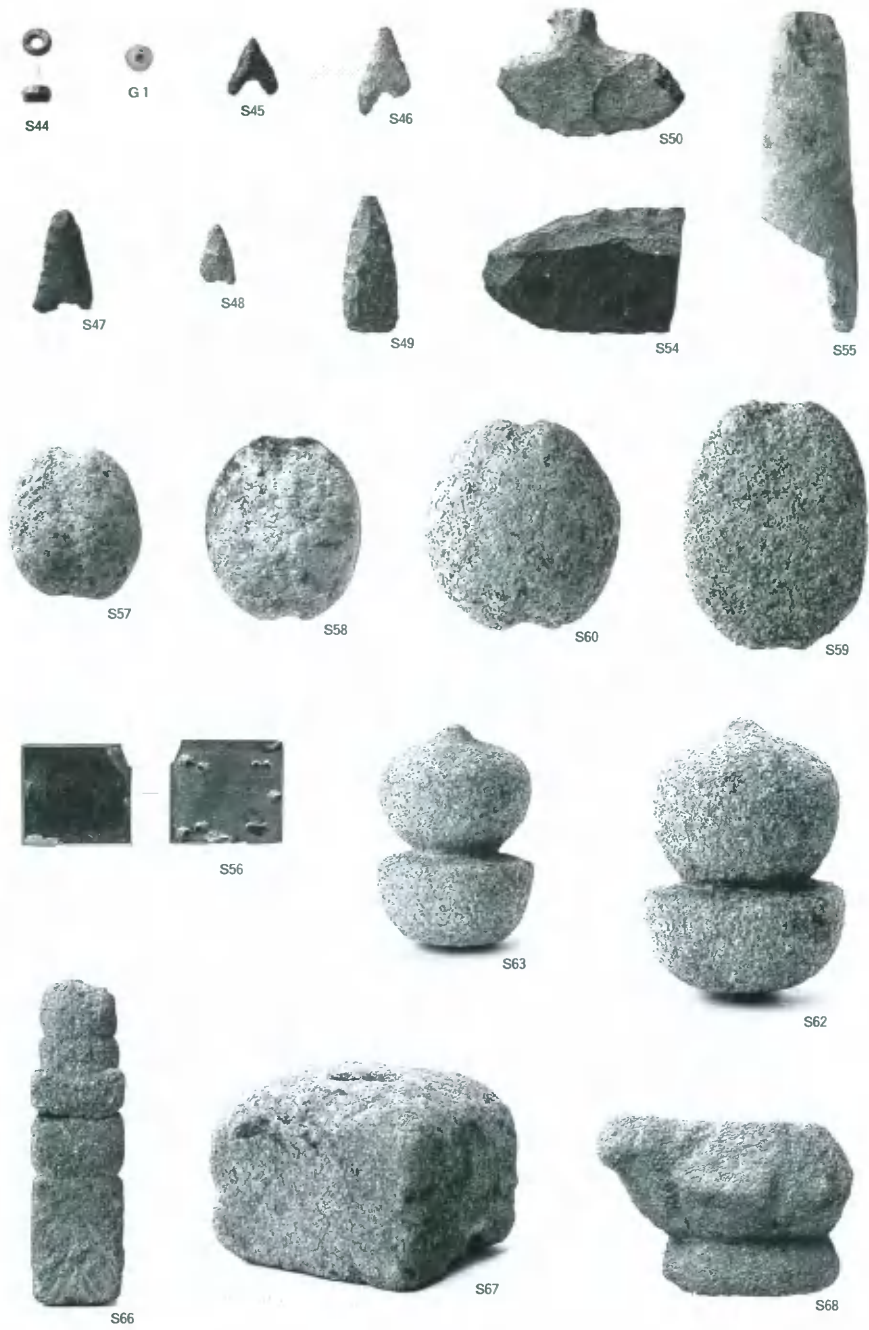


M157



M161





石器・石製品・ガラス製品

報告書抄録

ふりがな	ひやっけんがわよねだいせき							
書名	百間川米田遺跡4							
副書名	旭川放水路（百間川）改修工事に伴う発掘調査							
巻次	XIV							
シリーズ名	岡山県埋蔵文化財発掘調査報告							
シリーズ番号	164							
編著者名	物部茂樹・山磨康平・井上弘・宇垣匡雅・中野雅美・根木智宏・柳瀬昭彦・松尾佳子・大澤正己・鈴木瑞穂・能城修一・白石純・富岡直人							
編集機関	岡山県古代吉備文化財センター							
所在地	〒701-0136 岡山県岡山市西花尻1325-3					TEL 086-293-3211		
発行機関	岡山県教育委員会							
所在地	〒700-8570 岡山県岡山市内山下2-4-6					TEL 086-224-2111		
発行年月日	西暦2002年 3月31日							
ふりがな 所収遺跡	ふりがな 所在地	コード 市町村 遺跡番号		北緯 〃 〃	東経 〃 〃	調査期間	調査面積 (㎡)	調査原因
ひやっけんがわ 百間川 よねだいせき 米田遺跡	おかやまけん 岡山県 おかやまし 岡山市 よねだ 米田	33201		133°	34°	1990.9.27~10.24 11.13~11.26	21171	旭川放水路 (百間川) 改修工事
				59′	40′	1994.7.1~ 1995.3.31		
				28″	14″	1995.5.19~ 1998.11.24		
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
百間川 米田遺跡	集落 河道	縄文時代	土壌	縄文土器		全長約40mにも及ぶ中世の橋の全容が調査される。奈良時代の道路や平安時代の堤防、埋立遺構はいずれも全長40mを越える大規模構造物で、河川における土木技術を知る重要な発見である。遺物においても「市」と墨書された奈良時代の丹塗り土師器をはじめ、埴仏、平安時代の人形、卒塔婆などの木製品、中世の東大寺瓦や柿経、梁釜、そして大量の土器類と非常に豊富である。		
		弥生~ 古墳時代	竪穴住居・掘立柱建物・井戸・土壌・溝	弥生土器・土師器・須恵器・石器				
		奈良時代	道路・河道	須恵器・土師器・木製品・石製品				
		平安時代	堤防・埋立遺構・護岸・河道	須恵器・土師器・土製品・木製品・石製品・骨製品				
		中世	橋梁・建物・井戸・貝塚・土壌・溝	須恵器・土師器・土製品・木製品・石製品・金属製品・骨製品・牛骨				
近世	橋梁・樋門・土壌・溝	土師器・土製品・木製品・石製品・金属製品						

岡山県埋蔵文化財発掘調査報告164

百間川米田遺跡 4

旭川放水路(百間川)改修工事に伴う発掘調査 XIV

平成14年 3月15日 印刷

平成14年 3月31日 発行

編集 岡山県古代吉備文化財センター
岡山県岡山市西花尻1325-3

発行 岡山県教育委員会
岡山県岡山市内山下 2-4-6

印刷 株式会社 中野コロタイプ
岡山県岡山市玉柏390